

機動戦士ガンダムSEED
eventual

kia

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

少年は一度すべてを失い、地獄を見た。そして、もう失わない為に戦う事を決めた。

少年は母親を亡くし、守る為の銃を取った。そして、もう同じ事を繰り返させないと誓った。

交わる刃が互いのものを奪い合い、取り返しのつかない深い傷を刻んだ先で、彼らは互いを相容れない宿敵であると認識する。

C・E・76 燻っていた小さな火は煽られ、やがては世界を戦いの炎に包み込む。そして終わらぬ戦火は彼らを戦場で引き合わせた。

アスト・サガミとアスラン・ザラ。

イノセントガンダムとエクイテスガンダム。

続く因縁によって引き寄せられた二人が再び戦場で邂逅する時、物語は一つの決着に向けて動き出す。

※これは機動戦士ガンダムSEED effectの続編になります。

目次

機体紹介	1	第5話	宿敵、再び	214
機体紹介2 (24話以降ネタバレ注意)	42	第6話	運命の目覚め	245
機体紹介3 (36話以降ネタバレ注意)	70	第7話	始まりの星空	281
キャラクター紹介	85	第8話	降り立つ大地	305
用語集	92	第9話	懐かしき愛機の中で	
第1話	104	第10話	冷たい殺意	356
第2話	137	第11話	命懸けの離脱戦	382
第3話	165	第12話	目指す場所	410
第4話	189	第13話	握られた手	437
		第14話	拳	467
		第15話	再会	496
		第16話	錯綜する思い	526

第17話	世界の分岐点	833	第27話	想いと剣	833
第18話	埋まらぬ溝	859	第28話	ジブラルタル襲撃	859
第19話	悪夢の銃弾	892	第29話	新たな道へ	892
第20話	絶望のプレリユード	919	第30話	鏡の自分	919
622		950	第31話	戦火を駆ける	950
第21話	舞い散る蒼翼、砕ける剣	974	第32話	魔神の帰還	974
647		1006	第33話	別れの時	1006
第22話	蠢く思惑	1031	第34話	失われた光	1031
第23話	儚い落葉のごとく	1060	第35話	最後の晚餐	1060
第24話	天上の翼	1087	第36話	乾坤一擲	1087
780		1109	第37話	決戦の号砲	1109
第25話	過ぎ去った筈の暗闇	1137	第38話	託されたもの	1137
第26話	亡霊と蒼翼	1166	第39話	瀬戸際の光明	1166

第40話	ユリウス出撃	1190
第41話	友へと捧ぐ	1171
第42話	激戦	1248
第43話	怨念を断つ	1280
第44話	蘇った宿敵	1311
第45話	蠢く戦場	1335
第46話	因縁に導かれ	1361
第47話	鷹と天帝	1397
第48話	女の戦い	1425
第49話	天使に抱かれて	1451
最終話	そうして次なる種は世界に	1487
芽吹く		1530
あとがき		1530

外伝		
レティシア・ルティエンス		
かつての輝き		1540
episode Exelion C.		1560
E・79		
機体紹介(ネタバレ注意)		1590
機体紹介2(14話以降ネタバレ注意)		
第1話	世界の影	1602
第2話	影は動き出す	1619
第3話	悪意は密かに牙を研ぐ	1642

第4話	壊れたコロニーの中で	1686
第5話	轟く声	1709
第6話	執行者	1732
第7話	エレボス攻防戦	1753
第8話	いつかの閃光	1778
第9話	仇敵との出会い	1803
第10話	星を穿つ一撃	1825
第11話	星、流れ行く	1849
第12話	対面	1872
第13話	奇妙な共闘	1895
第14話	宇宙を羽ばたく	1921
第15話	決着の時へ	1945

第16話	黒と獣	1971
第17話	因縁の激突	2000
第18話	牙を剥く	2023
第19話	災禍の目覚め	2046
第20話	復讐の代価	2070
第21話	結末	2094
最終話	繋げていくこと	2125

機体紹介

「中立同盟」

形式番号 ZGMF-X22A

名称 トワイライト・フリーダムガンダム

パイロット マユ・アスカ

武装

頭部機関砲×2

高出力エネルギービームライフル×1

シユパール・ラケルタビームサーベルⅡ×2

斬艦刀『シンフォニアⅡ』×2

腕部実体剣『ノクターンⅡ』×2（ビームカッター×2）

背部『ラジュール・ビームキャノンⅡ』×2

腰部『エレヴァート・レール砲Ⅱ』×2

小型アンチビームシールド×1（内蔵ビーム砲×1）

ビームシールド×2

『アイギス・ドラグーンⅡ』×10

機体説明

ユニウス戦役時に開発された同盟軍のフラッグシップ機。最終決戦の際に大破に追い込まれた機体を修復、武装や機体の一部に細かい改修を加える事で、以前に比べて安定した性能を発揮できるようになった。

最大の特徴であるC・S・システムは今後行われる機体内部改修の際に調整を加える事で機体及びパイロットに対する負担を格段に軽減させる予定であり、改修を終えていない現在には封印されている。

それでもその性能はC・E・76現在においてもトップクラスであり、紛れも無く同盟軍最強の機体。



形式番号 A D T | X 0 1

名称 量産型フリーダム

パイロット キラ・ヤマト

武装

頭部機関砲×2

ビームライフル×1

ビームサーベル×2

腕部実体剣ブルートガンダ改×2

レールガン『タスラムII』×1

高インパルス砲『アータルII』×1

アンチビームシールド×1

〔機体説明〕

同盟の次世代機開発計画『アドヴェント計画』に沿って開発された量産型フリーダム
の先行試作機。コードネームは『ヴァルトライテ』。

特徴であった蒼い翼の数は両翼合わせて6枚となり、それでも量産機としては破格の
機動性を誇っている。さらに火力も高いが、反面量産コストの高さとその性能の高さゆ
えに扱えるパイロットが限られるなど問題もある。

装備を換装するタクティカルシステムとの相性も良くない為、量産を見送られ数機の
み製造、一部のエースパイロットのみに配備されている。



形式番号 A D T | X 0 2

名称 量産型ジャステイス

パイロット ラクス・K・ルティエンス

武装

頭部機関砲×2

ビームライフル×1

ビームサーベル×2

腕部実体剣『ブルートガング』改×2

グレネードランチャー×2

アンチビームシールド×1

各々クティカル装備

〔機体説明〕

同盟の次世代機開発計画『アドヴェント計画』に沿って開発された量産型ジャスティスの先行試作機。コードネームは『オルトリンデ』。

ヴァルトライテと同様に高性能ではあるが、こちらは比較的扱いやすく、タクティカルシステムとの相性も良い。

その為汎用性も高く次世代量産機として選ばれ、データ収集を終え次第、量産できるように準備が進められている。



形式番号 ZGMF-X42SR

名称 デステイニーガンダム・リフアイン

パイロット シン・アスカ

武装

C I W S × 2

ビームライフル×1

ビームサーベル×2

バツテリー内蔵型ビームランチャー×1

対艦刀アロنداイト改×1

小型アンチビームシールド×1

〔機体説明〕

独立部隊グラオ・イーリスがデュランダルの研究施設調査の際に発見した組み立て途中のものをプラントから提供されたデステイニーのデータを基に組み上げた機体。

元々複雑な機構を備えていたデステイニーであったが、改修の際に整備性の観点から簡略化が図られている。

それによりオリジナルよりも性能的には劣るが、それでも高い機動性は健在であり、新型機とも互角に戦う事のできる性能を確保している。

◇

「アドヴァンスアーマー」

ヤキン・ドゥーエ戦役においてオーブの研究者ローザ・クレウスが開発した追加装甲。デュエルガンダムに装着されていたアサルトシユラウドを参考に開発されており、装着する機体の特性に合わせて装備が違うが名称は一貫して同じである。

今や過去に開発されたほぼすべての機体がこの追加装甲を装着し、性能の底上げを図っている。



形式番号 STA—S5 (スカンジナビア)

MBF—M3A (オーブ)

名称 ブリユンヒルデ (スカンジナビア)

コウゲツ (オーブ)

武装

イーゲルシュテルン×2

ビームライフル×1

ビームサーベル×2

腕部ブルートガング改×2

腰部ビームガン×2

斬艦刀『リジル』×1

アンチビームシールド×1

各タクティカル

機体説明

中立同盟の主力量産機。『ユニウス戦役』終盤で実戦投入され、多大な戦果を上げた機体であるが二年経った現在でも強化、改修を施され、現役で戦場に投入されている。

その性能故に最新型の機体とも互角以上に戦う事が出来き、現場からの信頼も厚い。オーブとスカンジナビアで形式番号と名称に違いがあるのは、基本は同じ機体ではあるが各国防衛の特色に合わせ、各部に違いが存在し、厳密にまったく同じ機体とは言えないからである。(そのためオーブ製とスカンジナビア製は形状に違いがある)

◇

「タクティカルシステム」

ヤキン・ドゥーエ戦役で投入されたアイテルガンダムのデータを基に同盟が実用化した装備換装システム。ストライカーパックやコンバットシステムとは違い、ある程度の火力を保持しながらも高い機動性を得る事が出来る。

「各装備」

地上用機動戦闘装備『カラドリウス』

武装

機関砲×2

高出力ビーム砲×2

対空ミサイル×2

装備説明

地上用高機動戦量産型装備。大型スラスターによつて高い機動性と空戦能力を得る事が出来る。

宇宙戦用装備『ヨルムンガンド』

武装

レールガン×1

ビームランチャー×1

グレネード・ランチャー×2

電磁アンカー×2

装備説明

宇宙用無重力戦量産型装備。高機動スラスターと各武装に合わせ、電磁アンカーも装備している。

砲撃戦用装備『ファーヴニル』

武装

対艦ミサイル×2

レール砲『タスラムII』×1

高インパルス砲『アータルII』×1

〔装備説明〕

遠距離砲戦仕様の装備。やや重量はあるが高出力スラスターを搭載している為に高い機動性も確保している。



形式番号 M V F ー M 1 5 A

名称 スオウ

パイロット ムウ・ラ・フラガ

武装

近接防御火器×4

ビームライフル×1

ビームサーベル×2

腕部『ブルートガング』改×2

対空小型ビーム砲×2

対艦バルカン砲×2

アンチビームシールド×1

各タクティカル

〔機体説明〕

今まで実用化された可変機構モビルスーツの集大成として開発されたオーブ軍最新型主力量産機。火力こそナガミツに劣るが非常に高い機動性を持ち、練された可変機構とOSによってパイロットの負担も軽減されている。

今までの可変機と違いタクティカルシステムにも対応しており汎用性も高い。まさにオーブを守る守護者と呼ぶにふさわしい機体に仕上がっている。



形式番号 STA—S6

名称 ランドグリーズ

パイロット セリス・ブラッスール

武装

イーゲルシュテルン×2

ビームライフル×1

ビームサーベル×2

ビームガトリング砲×2

腕部『ブルートガング』改×2

アンチビームシールド×1

〔追加武装〕

バツテリー内臓ビームランチャー×1

各タクティカル

〔機体説明〕

これまでの量産機や試作されたSOA-Xシリーズのデータを基に開発されたスカンジナビアの次世代型量産機。今までの機体の特徴を受け継ぎながらも、タクティカルシステムを使用せずとも宇宙戦、空中戦、地上戦、さらに軽い調整で水中戦までこなせる万能機となっている。

◇

〔戦艦〕

スカンジナビア強襲戦艦『オーデイン』

艦長 テレサ・アルミラ

武装

対空バルカンシステム

ミサイル発射管

主砲エネルギー砲

陽電子砲ローエン格林

〔戦艦説明〕

スカンジナビア所属の戦艦。特徴的な白亜の艦で左右に長いカタパルトがせり出しており、その中央には陽電子砲を装備している。開発にはモルゲンレーテも参加していた為かアークエンジェルと共通している部分もある。

◇

オーブ軍イブズモ級戦艦『イザナギ』

艦長 セーフラス・オーデン

武装

イーゲルシュテルン×多数

高エネルギー収束火線砲『ゴットフリート』×2

ミサイル発射管×多数

スモークデイスチャージャー

陽電子砲×4

〔戦艦説明〕

第二次ヤキン・ドゥーエ攻防戦の際に沈んだクサナギに代わる旗艦として開発された戦艦。

かつては他のイズモ級と同じで変化が見られなかったが、改修を受けた事でやや大型となり、それはイズモ級というよりもアークエンジェル級に属する戦艦と酷似した外見に変化、モビルスーツ搭載数も増大した。

それに伴い速度の低下を防ぐ為に、エンジンも改良され出力が上がり、以前より速度も増している。

◇

「ザフト」

形式番号 ZGMF-X51Sβ

名称 エクリプスガンダム・リビルド

パイロット アレン・セイファート

武装

頭部機関砲×2

高エネルギービームライフル×1

高エネルギービームサーベル×2

アンチビームシールド×1

改良型ソリドウス・フルゴールビームシールド発生装置×2

『エクリプスシルエット03』

高エネルギービーム砲『サーベラスII』×1

レール砲『バロールII』×1

ハイパーバズーカ砲×1

対艦刀『エツケザックス』改×1

各シルエット

〔機体説明〕

ユニウス戦役で投入されたエクリプスガンダムを一度解体し、現在の技術を用いて再構築した機体。

整備性なども考慮された結果、幾つかの装備はオミットされたが各部のスラスターを増設、エクリプスシルエットの改修によって機動性はある程度保持されたまま、次世代機とも戦う事の出来る十分な性能を持っている。

専用装備である『エクリプスシルエット03』はフォースシルエットを改良、スラスター出力を強化した装備であり、『エクリプスシルエット』同様に武装ラックも搭載されている

◇

形式番号 ZGMF-X56Sβ

名称 インパルスガンダム・リビルド

パイロット ルナマリア・ホーク

武装

C I W S × 2

フオールディングレイザー対装甲ナイフ×2

高エネルギービームライフル×1

高エネルギービームサーベル×2

アンチビームシールド×1

改良型ソリドウス・フルゴールビームシールド発生装置×2

各シルエツト

〔機体説明〕

ユニウス戦役で投入されたインパルスガンダムを現在の技術を用いて再構築した機体。

チェストフライヤーは、ステイニーインパルスの物を改修、各部にスラスタを増設し機動性を高め、さらにレッグフライヤーにもビームサーベルを装着する事で戦闘力向上を図っている。



形式番号 ZGMF-250

名称 イフリート・アルジエント

武装

ビームライフル×1

腕部ビームマシンガン×2

高出力ビームサーベル×2

対艦刀『ベリサルダII』×2

大型アンチビームシールド×2

〔選択武装〕

ビームマシンガン

二連装ビームガトリング

各ウイザード

〔機体説明〕

ユニウス戦役でザフトが開発したモビルスーツの強化、発展型。最新型の機体が全軍に配備されるまで、ザフトの戦力強化を目的として開発されたもので、前大戦時のイフリートの戦闘データを参考に開発された。

全体的なフォルムもより洗練され、さらに同盟からの技術協力によって、機体全体の性能向上も図られており、その性能は最新鋭の機体にも劣らない仕上がりとなっている。

◇

形式番号 ZGMF-3000

名称 ギア・ソルダート

パイロット ハイネ・ヴェステンフルス

武装

ビーム突撃銃×1

ビームトマホーク×1

ハンドグレネード×4

アンチビームシールド×1

各ウイザード装備

選択武装

ビームマシンガン

二連装ビームガトリング

ミサイルランチャー

「機体説明」

ザフトが開発した次世代量産機。ザクの特徴を色濃く残しながらも、その性能はかつてのセカンドステージシリーズを上回る性能を持つ。既存のザクやイフリートなどと比べてもその性能や汎用性は非常に高く、前線兵士たちからの評価も高い。



「テタルトス軍」

形式番号 LFA-01R1

名称 ジンII・リローデット

武装

近接防御機関砲×2

実弾複合型ビームライフル×1

ビームサーベル×2

ミサイル×4

小型アンチビームシールド×1

各コンバット

機体説明

地上進出が決定したテタルトス軍がさらなる戦力強化を目的とした既存のモデル

スーツ強化計画『リローデット計画』に沿って強化されたジンII。

元はエースパイロット用の機体であったが全身にスラスタを増設し、操作性も考慮されOSもより洗練された事で誰でも操作できるようになっている。

◇

形式番号 LFA-02R1

名称 フローレスダガーII

武装

イーゲルシュテルン×2

ビームライフル×1

ビームサーベル×2

ハンドガンランチャー×2

アンチビームシールド×1

各コンバット

〔機体説明〕

テタルトス軍が既存のモバイルスーツ強化計画『リローデット計画』に沿って強化したフローレスダガー。地球上に進出する事になったテタルトス軍が地上戦力として汎用性が高いフローレスダガーを投入する事を決定。

ただ単純なフローレスダガーでは他勢力の新型機に比べ性能的に見劣りする可能性があった為、大幅な改修が施された。以前の機体よりも洗練された外見となっており、当然性能も向上している。

◇

形式番号 LFA-03R1

名称 リゲル・リローデット

武装

イーゲルシユテルン×2

腕部グレネードランチャー×2

ビームライフル×1 (ロングビームサーベル×1)

ビームサーベル×2

メガビームランチャー×1

アンチビームシールド×1

各コンバット

〔機体説明〕

テタルトス主力量産機。

この機体最大の特徴は専用コンバットを装備する事で、モバイルアーマーに変形が可能

となる事である。それによって機動性のみならず、航続距離も飛躍的に伸び、さらに当然既存のコンバットも装備可能な万能機となっている。

武装も近接戦、砲撃戦両方に対応できるバランスの良いものになっており、ビームライフルの銃口の下にはロングビームサーベルを搭載している。

この機体は既存のモビルスーツ強化計画『リローデット計画』に沿って改修されており、目立った変化は見られないが性能向上が図られている。



「コンバットシステム」

連合のストライカーパックシステムを参考にした装備換装システム。

コンバットシステムはナチュラルでもコントロール可能なように装備自体に制御AIが搭載されている事が特徴であり、ストライカーシステムより扱いやすくなっている。

「各コンバット」

「ウイングコンバット」

武装

機関砲×2

対艦ミサイル×2

エールストライカーを改良した装備。一番標準的な装備で大気圏内でも使用可能。
「バーストコンバット」

武装

ビームランチャー×1

グレネード・ランチャー×2

ミサイルポット×1

ランチャー・ストライカーを改良した装備。火力だけでなく、ある程度の機動性も考慮されている。

「ソードコンバット」

武装

対艦刀『クラレント』×2

ビーム砲×2

ソードストライカーを改良した装備。近接戦だけでなく、ビーム砲も備えているため射撃戦もこなせる。

「フォーゲルコンバット」

背部ビームキャノン×2

リゲル専用コンバット。

大型スラスタとビームキャノンが装備されている。

ビームキャノンはモビルスーツ形態でも使用可能。(フォーゲルはドイツ語で鳥の意)

◇

形式番号 LFA104R1

名称 バイアラン・イーグレット

パイロット セレネ・デイノ

武装

頭部機関砲×2

腕部高出力ビームキャノン×2

高出力ビームサーベル×2

肩部ビーム砲×2

肩部スライド式小型シールド×2

各コンバット

機体説明

テタルトス軍がユニウス戦役時に開発した機体。主に宇宙で使用されていたが、元々地球上での戦闘を考え考案されたものであった為に改修を施し地上用の機体として地

球の戦いに投入される。

両肩と改修時に増設された各部のスラスタールによって機動性がさらに高まっており、空中での戦闘能力は他の新型機にも劣らない性能を持つ。

『リローデット計画』によって改修を受けたことで各コンバットも装備可能になりはしたが相変わらずソードコンバットはマニピレーターとの関係で相性が悪い。

◇

形式番号 LFA-05R1

名称 シリウス・ラファールガ

パイロット ジョナサン・プロバート

ルーカス・レイノルズ

ヴィクトル・シアーズ 他

武装

機関砲×2

高出力ビームライフル×1

高出力ビームサーベル×2

肩部ビーム砲×2

ハンドガンランチャー×2

腹部複列位相砲『ヒュドラ』×1

アンチビームシールド×1

各コンバットシステム

〔ランゲルト機専用武装〕

ロングビームライフル×1

〔機体説明〕

エースパイロット用の機体として量産されたシリウスを『リローデット計画』に沿って改修した機体。各部スラスターを増設、武装を変更された。

シリウス自体が格別の性能を誇っていた機体であり、それを改修した為に非常に性能は高いが、その分扱える者も少なく、『テンペスターズ』などのエース級に配備されている。

◇

形式番号 LFA-01RE

名称 ジンII・アクティヴ

パイロット リベルト・ミエルス

武装

近接防御機関砲×2

実弾複合型高出力ビームライフル（ロングビームサーベル）× 1

高出力ビームサーベル× 2

高出力ビームキャノン× 1

アンチビームシールド（小型ガンランチャー）× 1

機体説明

『リローデット計画』に沿って改修されたジンIIをさらに強化した機体。関節部の強化とメインスラスタをさらに高出力化した事で、新型機以上の性能を持つが、その操作性はさらにピーキーとなっている。

コンバットシステムに対応していない代わりにウイングコンバットで得られたデータを基にした新型スラスタを搭載し、驚異的な推力を持つ。

本来は強化兵用として開発されたもので、アルタイルはこの機体のデータを基に開発されている。



形式番号 L F S A - 0 1 E

名称 アルタイル・ガイスト

パイロット ラデイス・グエラ

武装

ビームライフル×1

ビームサーベル×2

小型ミサイルポッド×2

腹部複列位相砲『ヒュドラ』×1

アンチビームシールド（内蔵三連装ビーム砲×1）

ドラグーンユニット『エレメンタルII』×6

〔機体説明〕

テタルトスの開発した強化兵用試作モビルスーツ。

関節部、スラストーなど従来の機体に比べて格段に強化されており、強化兵の力を存分に発揮できるように設計されている。

ただ特殊な機構の所為か、汎用性はなくコンバットシステムにも対応していない。



形式番号 LFA-06

名称 H・アガステイア

パイロット ヴイルフリート・クアドラード他

武装

機関砲×2

サーベル一体型高出力ビームライフル（ロングビームサーベル）×1

高出力ビームサーベル×2

腹部複列位相砲『ヒュドラ』×1

アンチビームシールド×1

各コンバットシステム

〔機体説明〕

テタルトス軍新型モビルスーツ。

汎用性に優れたオーソドックスな仕様となっており、頭部のモノアイと突き出した一本角の高性能リーダーが搭載され、指揮官機としても高水準で纏められており、操作性も良い傑作機となっている。（頭文字のHはギリシャ語で6番目を意味するヘキサから）

◇

〔戦艦〕

〔プレイアデス級〕

名称 アリスタルコス

武装

C I W S × 多数

主砲ビーム砲×4

ミサイル発射管×多数

上部レールガン×2

下部レールガン×2

陽電子砲×1

〔戦艦説明〕

テタルトス軍戦艦の一つでテンペスターズの母艦。

テタルトスで運用されている戦艦であり、ナスカ級をベースにしているが、アークエンジェル級のデータも参考にされている。ザフトのナスカ級よりも火力を向上させ、さらにモバイルスーツ搭載数を大幅に増加させている。

◇

名称 クレオストラトス

武装

C I W S×多数

主砲ビーム砲×4

ミサイル発射管×多数

上部レールガン×2

下部レーリング×2

陽電子砲×1

〔戦艦説明〕

テタルトス軍戦艦の一つでアスラン・ザラ中佐率いる部隊の母艦。

生産されたプレイアデス級の中でも初期型に相当し、何度か改修が行われ、性能の向上が図られている。



〔ヒアデス級〕

名称 エウクレイデス

C I W S×多数

主砲ビーム砲×2

ミサイル発射管×多数

両側面レーリング×2

改良型ミーティアユニット×2

〔戦艦説明〕

テタルトス軍戦艦の一つ。

テタルトスで運用されている戦艦でありエターナルを参考にされた高速艦である。

エターナルに比べモビルスーツ搭載数を増やしてあるものの、モビルスーツ運用を優先した設計になっている為に火力はさほどでもない。

ヒアデス級の中でも初期型であり、何度か改修が行われ、先端にエターナルのミーティアユニットと側面にブースターユニットを取り付ける事で通常の戦艦とは比較にならない速度を出すことができるようになっていた。

◇

「ダイオネ級」

名称 カルキデウス

機関砲×多数

対空ミサイル×多数

主砲ビーム砲×3

「戦艦説明」

テタルトス軍が地上運用の為に開発した地上戦艦。本来は宇宙用として建造が進んでいたが、地上でのモビルスーツ運用をスムーズにする為に必要とされ急遽仕様が変更された。やや大型ながらも高い巡行性能と十分すぎる程広大なモビルスーツ格納機構を持ち、火力も高い。

◇

名称 クレオメデス

機関砲×多数

対空ミサイル×多数

主砲ビーム砲×3

〔戦艦説明〕

ザラ隊に与えられた地上用戦艦。通常のデイオネ級とは違い、船体後方に大型の推進器を追加で設置しており、大幅に巡行性能が増加されている。

◇

〔地球連合軍〕

形式番号 GAT-X141

名称 イレイズガンダムMK-II

パイロット アオイ・ミナト

武装

イーゲルシュテルン×2

ビームライフル×1

ビームサーベル×2

腕部実剣『ブルートガング』×2

アンチビームシールド×1

ビームライフルショーティー×2

各ストライカーパック装備

機体説明

ヤキン・ドゥーエ戦役で投入されたゼニスガンダム開発データ収集を目的に開発された機体であり、ユニウス戦役序盤から終盤まで戦線に投入されてきた傑作機。

しかし次々に投入される新型機との性能差が広がり対応できなくなりつつあるが、所々改修を施され、未だ最前線に配備されている。

◇

『ストライカーパック』

「スカッドストライカー」

武装

ビームマシンガン×1

ビームブーメラン×2

対艦バルカン砲×2

「装備説明」

連合が高速機動戦闘用に開発した試作ストライカーパック。

エールストライカー以上の機動性を持っているが、操作性はお世辞にも良いとは言えない、明らかなエースパイロット用の装備。

武装は連射性の高いビームマシンガンに両肩に装備されたビームブーメラン、対艦バ
ルカン砲を装備している。

◇

形式番号 GAT-06

名称 イリアス

武装

トードスシユレットケン×4

ビームライフル×1

ビームサーベル×2

ステイレット投擲噴進対装甲貫入弾×4

肩部小型ショットガン×2

アンチビームシールド×1

各ストライカーパック

〔機体説明〕

連合が開発したウインダムに代わる新型主力量産機。

ウインダム以上の性能を求めて開発され、ストライカーパックを未装着の状態でもユニウス戦役で投入されたニューミレニアムシリーズの『ザク』や『グフ』、そして『イフリート』を上回る性能を持つに至った。その分操作性に影響が出ないようにコックピットにも手が加えられており、一般のパイロットでも十分に操れるように配慮されている。

◇

形式番号 GAT-07A

名称 ブリアレオス

武装

トードスシュレッケン×2

ビームライフル×1

ビームサーベル×2

複列位相砲『スキュラ』×1

アンチビームシールド×1

各ストライカーパック

〔機体説明〕

連合が開発した新型量産機。前大戦で投入されたアルゲスの後継機。アルゲスでは

装備不可能だったストライカーパックが装備可能になっており、汎用性も向上させている。

◇ 主に保守派が量産、前線に投入し多大な戦果を叩き出している。

形式番号 G A T - X 1 3 3

名称 ヴォルケイノ・カラミティガンダム

パイロット アルゼーネ・バルマ

武装

バズーカ砲トードスブロック×1

ビームライフルショーティー×2

二連装高エネルギー長射程ビーム砲『シユラーク』×2

複列位相エネルギー砲『スキュラ』×1

腰部ビーム砲×2

大型外部装着型多連装ビーム砲×2 (内蔵対艦刀ネイリングⅢ×2)

対空誘導ミサイルポッド×2

小型防盾×1

〔機体説明〕

カラミティガンダムの発展強化型の機体。元々強力であった火力をさらに増強し、フリーダム以上の圧倒的な砲撃能力を持つ。反面装備を増やした事ですらによる機動性の低下が懸念されスラスターを増設、脚部のホバー機能も強化されている。弾切れや武装の破損、敵機の接近などによる場合には装備をパージすることが出来、内蔵されている対艦刀やビームライフルシューターによって近接戦にも対応できる。

◇

形式番号 G A T - X 2 5 6

名称 ストリーム・フォビドゥンガンダム

パイロット カーラ・アルマデイオ

武装

イーゲルシュテルン×2

機関砲『アルムフォイヤー』×2

誘導プラズマ砲『フレスベルグ』×1

拡散ビーム砲×1

レールガン『エクツアーン』×2

腰部ビーム砲×2

重鎌槍『ニーズヘグ・トライデント』×1

ゲシュマイディッヒパンツァー×4

〔機体説明〕

フォビドウンガンダムの発展強化型の機体。フォビドウンガンダムの最大の特徴であったゲシュマイディッヒパンツァーを前後同時に防御可能になった事で絶対の防御能力を持つ。さらに本体の火力を強化する事でより変則的な攻撃を可能とする。そして近接戦用のニーズヘグを改良、柄の部分伸縮可能とする事で扱いやすくし、さらに先端にビーム発生器を搭載する事でPS装甲にも対応できるようになっている。

◇

形式番号 GAT-X372

名称 シュトゥルム・レイダーガンダム

パイロット ジルベール・ブラジウス

武装

機関砲×2

エネルギー砲『ツォーン』×1

破壊球『ミヨルニルII』×1

短距離プラズマ砲『アフラマズダ』×2

肩部ビーム砲×2

連装レール砲『タスラムII』×2

小型シールド内蔵二連装ビームクロー×2

〔機体説明〕

レイダーガンダムの発展強化型の機体。他の二機とは違いレール砲以外目に見えた武装の増加は無いが、反面加速性、運動性などが大幅に強化されている。

それによって一撃離脱の攻撃がより効率化し、さらに両腕に小型のシールドと内蔵されたビームクローを装備することで、防御力と近接戦能力向上が図られている。

そして破壊球ミヨルニルIIもビームスパイクを発生させる事ができるようになり、破壊力も向上している。



形式番号 GAT-X141-2

名称 イレイズガンダムMK-III

パイロット ジェラルル・フェレオル

武装

トードスシュレツケン×4

高出力ビームライフル×1

高出力ビームサーベル×2

対艦刀『ネイリングⅡ』×1

ビーム砲×2

ビームランチャー×1

アンチビームシールド×1

各ストライカーパック装備

機体説明

地球軍保守派が開発したモビルスーツ。イリアスのプロトタイプに相当する機体であり、その性能はイレイズガンダムMK-Ⅱを軽く上回る。

背中にはストライカーパックに干渉しないように設置されたスラストユニットと高出力のビーム砲、ビームランチャーが装備され、高い機動性と火力を保持している。

◇

〔戦艦〕

〔エレクトラ級〕

名称 アイザック

武装

長距離無反動砲×4

ミサイルランチャー×多数

大型ビーム砲×2

スモークディスプレイジャー 他

〔戦艦説明〕

地球連合改革派がハンニバル級を改修して開発した地上戦艦。ハンニバル級と比べ小型化され、移動速度と隠密性に重点が置かれている。

小型化された影響でモビルスーツ収容数なども減ってしまったが、クルー達が長期間の任務にも耐えられるように設備は充実している。

機体紹介2（24話以降ネタバレ注意）

「同盟軍」

形式番号 ZGMF-X27A

名称 アンセム・イノセントガンダム

パイロット アスト・サガミ

武装

頭部バルカン砲×2

高エネルギービームライフル×1

腕部実体剣『ナーゲルリングⅢ』×2

シュペール・ラケルタビームサーベルⅡ×2

対PS装甲弾頭搭載バズーカ砲×1

斬艦刀『バルムンクⅢ』×1

高エネルギー収束ライフル『アガートラムⅡ』×1（銃身下部小型ブルトガング改

×1）

背部高出力ビームソード『ワイバーンⅢ』×2

ドラグーン式ビームフィールド発生器『フリージアII』×6

アンチビームシールド×1 (グレネードランチャー×2 ビーム砲×1)

ビームシールド×2

〔機体説明〕

統合軍との決戦に備えキラ・ヤマトが自身の機体と共に発案し、開発したアスト・サガミ専用の『SEED』対応機。

基礎設計はローザ・クレウスの企画したデータを基にキラ・ヤマトが手を加えたものを使用、武装は基本的に『ユニウス戦役』時に投入された『クルイセイドイノセントガンダム』の武装を強化したものを装備。

フレームも『アドヴァンス計画』に沿って開発された新型フリーダム用のものを流用し、開発時間の短縮を図っている。

同盟特有のSEEDシステム『e. s. device (エス・デバイス)』を搭載している。これはSEEDの発動を感知するとコックピット内に仕込まれた特殊デバイスからパイロットに直接干渉、SEED能力の増幅、補助を行う事が出来る。



形式番号 ZGMF-X30A

名称 ユニバース・フリーダムガンダム

パイロット キラ・ヤマト

武装

近接防御機関砲×4

高エネルギービームライフル×2

シユペール・ラケルタビームサーベルⅡ×2

斬艦刀『ガラティーン』×1

腕部『ナーゲルリングⅢ』×2

腰部『アラドヴァル・レール砲Ⅱ』×2

背部『バラエーナ・収束ビーム砲Ⅱ』×2

ビームフィールド展開機構内臓スーパードラグーンⅡ×10

ビームシールド×2

〔機体説明〕

今までのフリーダム型すべてのデータを基にキラ・ヤマトが自らの機体として設計した『SEED』対応機。

火力以上に近接戦能力と機動性が徹底的に強化されており、ドラグーンを射出することなく、光の翼、ヴォワチュール・リュミエールの展開が可能。

ドラグーンはフリージアと同じ特性が付与されており、フィールドを展開することで

トワイライトフリーダムのC・S・システム開放状態以上の速度を出す事も可能となっている。

さらにアンセムイノセントガンダム同様SEEDシステム『e・s・device (エス・デバイス)』搭載している同盟の切り札的な機体。

◇

形式番号 ZGMF-X31A

名称 リベラシオン・デステイニーガンダム

武装

頭部機関砲×2

高出力エネルギービームライフル×1

シユペール・ラケルタビームサーベルⅡ×2

特殊ビーム兵装。パルマ・アルマ×2

スラッシュビームブーメラン×2

高出力エネルギー収束ライフル『ノートウングⅡ』×1 (銃身下部に小型ブルートガング改×1 銃口上部にロングビームサーベル×1)

斬艦刀『コールブランドⅡ』×2

背部『アラドヴァル・レール砲Ⅱ』×1

小型アンチビームシールド×1（内蔵ビーム砲×1）
ビームシールド×2

〔機体説明〕

ユニウス戦役に投入された「リヴオルトデステイニーガンダム」をザフトから提供された「デステイニーガンダム」のデータを用いて改修を施した機体。

新たに追加された装備であるパルマ・アルマ以外に武装面での大きな変更は無いが、内部には大幅な改良と強化が施されC・S・システムの反動も最小限に抑えられている。

シン・アスカ専用機として調整が加えられ、彼の力を最大限発揮できるようになっている。

パルマ・アルマはパルマ・フィオキーナの発展型で三つの使用方法がある。

パルマ・ジャヴエロットはパルマ・フィオキーナの強化版であり、威力、射程が格段に向上しアンチビームシールドすらたやすく貫通する破壊力を誇る。

パルマ・ラーマは掌に高出力のビーム刃を形成し、接近戦で無類の威力を持つ刃を形成できる。ただし短時間しかビーム刃を形成できず、隠し武器的な要素の強い装備となっている。

パルマ・スクードはビームシールドの技術を応用、掌全体にフィールドを張りサーベ

ルを掴むなど防御に転用可能。ただし使用中はビームシールドを展開できないという欠点も存在する。

◇

形式番号 GAT-X002

名称 ユニオン・エクセリオンガンダム

パイロット アオイ・ミナト

武装

マシンキャノン×2

高エネルギービームライフル×1

高エネルギービームサーベル×2

腕部実剣『ブルートガングII』×2

高エネルギー収束ビーム砲『アンヘルII』×2

ビームシールド内蔵アンチビームシールド×1

〔機体説明〕

エクセリオンガンダムの正式後継機。

背中に存在する二基の高出力ウイングスラスターがやや大型化したのが、出力は段違いに増しており機動性も向上している。

さらに鹵獲したアルカンシエルの技術も投入され、ミラージュコロイドを散布して幻惑、防御としても活用できる。

そして以前と同じくコックピットには改修された新式のW・S・システムを搭載し、パイロットの能力を最大限引き出せるようになっていいる。

◇

形式番号 ZGMF-X28A

名称 アヴローラ・ヴァナデイスガンダム

パイロット レティシア・ルティエンス

武装

頭部機関砲×2

高出力エネルギービームライフル×1

斬艦刀『アインヘリヤルII』×2

シユペール・ラケルタビームサーベルII×2

腕部、腰部高出力ビームガン×4（腕部のビームガンはサーベルとしても使用可）

脚部ビームソード×2

アイギス・スーパードラゴン×8

アンチビームシールド×1（内蔵ビーム砲×1 グレネード・ランチャー×2）

ビームシールド×2

〔機体説明〕

レティシア・ルティエンス専用機として開発されたヴァナデイスガンダムをキラ・ヤマトとローザ・クレウスの手で再設計された機体。

武装自体はユニウス戦役時の状態でも十分な戦闘力を備えているとして変更は成されていないが、その分ドラグーンの性能向上が図られている。

機体本体に装備されていたものにもアイギスドラグーンと同様にフィールドが展開できるようにし、さらに砲台としての威力と速度を高めた事でより戦闘力の向上にも成功している。

〔専用装備〕

『リンドブルム02』

〔武装〕

アイギス・スーパードラグーン×12

高出力収束ビーム砲×1

アラドヴァルレール砲×1

〔装備説明〕

リンドブルムの発展型で宇宙空間での機動性確保を重視し、武装の強化よりもスラス

ター出力の増加を重点に強化されている。



形式番号 ZGMF-X29A

名称 クスイフオス・ジャスティスガンダム

パイロット ラクス・K・ルティエンス

武装

基本装備はインフィニットジャスティスガンダムと同様

腕部『ブルートガンダ改』×2

腰部高出力ビームガン×2

フアトウム102

〔武装〕

基本装備は同じ。

ビームウイング×2

斬艦刀『グラムII』×2

〔機体説明〕

ユニウス戦役で投入されたインフィニットジャスティスガンダムをキラ・ヤマトとローザ・クレウスの手で再設計された機体。

本来であればユニバース・フリーダム同様一から設計される予定だったが世界的情勢が予断を許さぬ程に切迫してきたことから、急遽インフィニットジャスティスガンダムのデータを用いて開発される事になった。

目新しい武装は搭載されていないが、基になったインフィニットジャスティスガンダムが十分すぎる程に優秀な性能をもっていたが故にこの機体も破格の性能を持つ。

◇

形式番号 ZGMF-X01A

名称 アイテルガンダム・ヴァルキューレR

パイロット セリス・ブラッスール

武装

頭部機関砲×2

高出力エネルギービームライフル×1

シユペール・ラケルタビームサーベルⅡ×2

腕部『ブルートガング改』×2

腰部高出力ビームガン×2

アサルトブラスターキャノンⅡ×2

ビームロケットアンカー×2

大型多連装高出力ビーム発生器『ヴァルフアズルII』×1
多機能防御マント×1

ビームシールド×2

ラミネートアンチビームシールド×1

〔機体説明〕

月面紛争時に大破したアイテルガンダムを改修、同時期に投入された特殊装備『ヴァルキューレ』を固定装備として組み上げられた機体。

元々高い性能をもっていたアイテルガンダムを現在の技術をもつて改修を受けた事で月面紛争時とは比較にならない性能を持ち、現在のエース機を軽く上回る。



形式番号 ZGMF-X57S

名称 シークエル・インパルスガンダム

パイロット ルナマリア・ホーク

武装

頭部CIWS×4

高エネルギービームライフル×1

高エネルギービームサーベル×4

腕部実体剣『ブルートガング』改×2

改良型。バルマ・フィオキーナ×2

対艦刀『エツケザックス改』×2

フォールディンググレイザー対装甲ナイフ×2

ビームシールド×2

ビームシールド内蔵アンチビームシールド×1

各タクティカル及びシルエット

〔機体説明〕

受領したオルトリンデのパーツ、シークエル・エクリプスガンダム、そしてデステイニーガンダムのデータを使用しインパルスをルナマリア専用機として改修、強化した機体。

ルナマリアの特性に合わせ、近接戦用の武装が充実、さらに背中のアタッチメントを改良してタクティカルシステムにも対応できるようになっており、汎用性も増している。

〔専用シルエット〕

『デステイニーシルエット04』

〔武装〕

近接防衛小型ビームガン×2

ビームロケットアンカー×2

レール砲『アラドヴァル・レール砲Ⅱ』×1

高出力エネルギー収束ライフル『ノートウング改』×1

斬艦刀『グラムⅡ』×2

〔装備説明〕

ユニウス戦役で実戦導入された特殊装備「デステイニーシルエット02」の改良型。

「デステイニーシルエット」の問題点であるエネルギー消費を大幅に抑え込み、稼働時間の拡大を図り、さらには機動性を維持したまま武装の増設にも成功している。

近接防衛小型ビームガンは可動域を拡大する事で正面のみならず背後にも撃つ事が可能になっており、至近距離であればモビルスーツの装甲も貫通出来る。

さらにリベラシオン「デステイニー」の『ノートウングⅡ』の改良型である『ノートウング改』も装備しているが、量産を目的とした先行試作型の武装である為にロングビームサーベルなどはオミットされている。



形式番号 GAT-07M・

名称 グロム・ヴィヒター

武装

トードスシュレツケン×2

ビームライフル×1

ビームサーベル×2

ビームライフルショーテーター×2

対空ミサイル×1

アンチビームシールド×1

各ストライカーパック

機体説明

連合が開発した可変型高性能量産モビルスーツ『ヴィヒター』の後継機。火力よりも機動性に赴きを置いており、可変機構の改修とOSが改良された事でさらに扱いやすくなり、性能も向上した。

幾つか武装もオミットされているが、反面ストライカーパックの装着が可能になっており、汎用性も高められている。改革派の主力となっており、劣勢ながらも戦線を支えている。



「戦艦」

名称 フォルセティ

武装

機関砲×多数

リニアキャノン×2

高エネルギー収束火線砲×3

対モビルスーツ迎撃用ビーム砲×4（後部左右に二門づつ）

陽電子砲×2

対艦ミサイル発射管×多数

〔戦艦説明〕

同盟がプラントと共同で開発した新造戦艦。アークエンジェルやオーデイン、ミネルバと言った高性能戦艦のデータを基にグラオ・イーリスの旗艦として建造された。

モビルスーツ搭載数、火力、速度、どんな状況にも対応できる汎用性を与えられており非常に高い性能を持つ戦艦に仕上がっている。

◇

〔統合軍〕

形式番号

L F S A | X 0 0 6 b

名称 ユースティアガンダム

パイロット アスラン・ザラ

武装

頭部機関砲×2

高出力ビームライフル×1

高出力ビームサーベル×2

脚部高出力ビームサーベル×2

高出力ビーム発生装置内蔵実体剣『オートクレールII』×2

腹部複列位相砲『アドラメレクII』×1

ビームシールド発生装置内蔵アンチビームシールド×1

背部大型スラスタ『シューティングスターII』

〔武装〕

高出力ビーム砲×2

高出力ビームウイング(ビームブーメラン)×4

ビームシールド内蔵無線誘導高出力ビーム砲(ドラグーンユニット)×6

〔機体説明〕

テタルトスの最新試作モビルスーツ。本来はアスラン専用機レグルス・エクイテスガンダムとして開発された機体を、戦闘データ及びアムステルダムで回収したe・s・システムのデータを基にさらに発展させ、より高性能化させた機体。

武装も強化、より洗練されており、アスランの特性に合わせ、近接戦闘用の武器が多数搭載された。

武装も実体剣『オートクレールⅡ』や『アドラメレクⅡ』さらにはビームシールド内蔵無線誘導高出力ビーム砲（ドラグーンユニット）など高火力な特殊装備を多数搭載している。

中でも実体剣『オートクレールⅡ』はエリシユオンに搭載されたビームライフル一体型対艦刀『イシユタル』を参考にして開発されたもので、剣として近距離戦、ライフルとして遠距離に対応でき、さらにビームコーティングも施され防御にも使用できる万能装備となっている。

（ユースティアはローマ神話における正義の女神ユースティティアから）



形式番号 L F S A — X 0 0 8

名称 ユングヴィ

パイロット ヴアルター・ランゲルト

武装

機関砲×2

高出力ビームライフル×1

高出力ビームサーベル×4

高出力長射程スナイパーライフル×1

高出力ビームライフル一体型特殊対艦刀『イシユタルII』×2

ビームシールド発生装置内蔵アンチビームシールド(三連ビーム砲)×1

特殊ドラグーンユニット『エレメンタルII』×12

〔機体説明〕

エリユシオンガンダムof データを基に開発されたヴァルター・ランゲルト専用モバイルスーツ。

タキオンアーマーのデータを基に開発されたスラストユニットによる高い機動性。さらに遠距離、中距離、近距離とすべての間合いで対応でき、ドラグーンやスナイパーライフルを用いた特殊作戦すら可能にする非常に高い汎用性を持つ機体。

ヴァルターの空間認識力を生かす調整が施されており、アルタイルで得られたデータを基にドラグーンユニット『エレメンタルII』を高い精度でコントロールできる特殊性も合わせ持っている。(ユングヴィは北歐神話の神フレイの別名ユングヴィから)



形式番号 LFSA-X009

名称 デイアドコス

パイロット リベルト・ミエルス

武装

近接防御機関砲×2

実弾複合型高出力ビームライフル（ロングビームサーベル）×1

高出力ビームサーベル×2

強化型パルマ・フィオキーナ×2

対艦刀『クラレントIII』×1

実弾複合型高出力ビームキャノン×1

腰部高出力ビーム砲×2

腕部ビームシールド発生装置×2

ビームシールド発生装置内蔵アンチビームシールド（内蔵ビーム砲）×1

〔機体紹介〕

リベルト・ミエルス専用として開発された新型モビルスーツ。

この機体はユニウス戦役で投入されたデステイニー型データを独自に発展させた

もの。

外見上はデステイニーに酷似しているが、中身は統合軍の技術によって大幅な変更と強化が加えられている。

背中のウイングスラスターをさらに高出力化させ機体全体のスラスターも増設、同時に武装もリベルトの好みに合わせたものに変更されている。

◇

形式番号 LFA-07

名称 バウ・アルゴル

武装

高出力ビームライフル×1

高出力ビームサーベル×2

グレネード・ランチャー×4

シールド内蔵三連ビーム砲×1

各コンバット

〔機体説明〕

テタルトス最新型主力機。この機体はテタルトスの高性能機であるH・アガステイアやシリウス・ラファールといった機体の戦闘データを参考に開発された。その結果量産

機としては破格の性能を誇り、エースパイロットや指揮官クラスに配備され、多大な戦果を上げる事になる。

◇

形式番号 GAT-06E

名称 イリアス・アキレス

パイロット No. I

武装

トードスシュレツケン×4

ビームライフルショーティー×2

ビームサーベル×2

肩部ビーム砲×2

ステイレット投擲噴進対装甲貫入弾×4

アンチビームシールド×1

『フォルテストラII』

各ストライカーパック

〔機体説明〕

イリアスの強化型改修機。改良された『フォルテストラII』を纏い、防御力を増すと

同時に各所の小型スラスタを増設した事で機動性も強化されている。さらに間接部を強化し無茶な機動にも対応できるようにした。

これはエクステンデット用として建造され、改良したI・S・システムを搭載したことで通常の機体とは一線を画する機体となった。

I・S・システム起動時には腰と肩、そして脚部の装甲がスライドし形状が変化する。

「スカッドストライカーII」

武装

高出力ビームライフフル×1

ビームブーメラン×2

対艦バルカン砲×2

対空ミサイル×2

「装備説明」

エース用の装備であったスカッドストライカーをさらに強化した装備。武装に対空ミサイルが追加され、スラスタは比較にならないほど高出力化されている。

その為に常人では使いこなすことができない、実質エクステンデット専用ストライカーパックとなっている。



形式番号 GAT-07AE・

名称 ブリアレオス・ゴライアス

パイロット エリニス

武装

トードスシュレツケン×2

ビームライフル×1

ビームサーベル×2

複列位相砲『スキュラ』×1

グレネードランチャー×2

小型アンチビームシールド内蔵二連装ビームクロウ×1

『フォルテストラII』

各ストライカーパック

〔機体説明〕

ブリアレオスの強化型改修機。イリアス・アキレスと同じく改良された『フォルテストラII』を纏い、防御力を増すと同時に各所の小型スラスターを増設した事で機動性も強化されている。

新型のI・S・システムのデータ収集機として建造された為に、並みのパイロットでは操縦できない特殊な機体となっている。

I・S・システム起動時には腰と肩の装甲がスライドし形状が変化する。

◇

形式番号 ZGMF-X92Sb

名称 サタナエル・ナハト

パイロット カース

武装

頭部機関砲×2

高エネルギービームライフル×1

高エネルギービームサーベル×2

腹部複列位相砲『サルガタナスII』×1

アンチビームシールド×1 (内蔵ロングビームサーベル×1 グレネードランチャー

×1)

ソリドウス・フルゴールビームシールド発生装置×2

追加武装

ドラグーンシステム×6

バズーカ砲×1（散弾搭載）

〔機体説明〕

ユニウス戦役にてザフトが投入した対SEEDモバイルスーツ。僅かな形状変化が見られ、その性能は以前に比べても格段に向上しており、増設された全身のスラスターと背中に存在する二基のスラスターユニットによって非常に高い機動性を有している。

◇

形式番号 ZGMF-X90Sb

名称 ベルゼビュート・メガイラ

パイロット エリニス

武装

近接防御機関砲×2

高エネルギービームライフル×1

高エネルギー腕部、脚部内蔵ビームソード×4

高出力大型近接ビーム兵装『ネビロスII』×1

肩部大型ビームクロウ（内蔵高出力ビームキャノン）×2

腰部中型ビームクロウ×2（内蔵ビーム砲×2）

ソリドウス・フルゴールビームシールド発生装置×2

〔機体説明〕

ユニウス戦役で投入されたベルゼビュートの改修機。

背中与各部に増設されたスラスターによつて機動性を高め、装備されたビーム兵装を改修、さらにアスタロスに装備されていた『ネビロス』を持たされた事で接近戦に関してさらに高い性能を持つに至っている。

◇ 新型のI・S・システムを搭載し、パイロットの能力を最大限にまで発揮できるようになっており、その接近戦能力と合わさり凶悪な機体と化している。

〔戦艦〕

名称 サリエル

武装

イーゲルシュテルン×多数

リニアキャノン×4

高エネルギー収束火線砲『ゴットフリート』×4

陽電子砲『ローエン格林』×3

ミサイル発射管×多数

「戦艦説明」

地球連合軍（保守派）に所属する新生ファントムペインの旗艦として運用されているアークエンジェル級戦艦。

外見そのものはアークエンジェルやドミニオンに酷似しているが、その大きさは一回り大きく、性能はもはや別艦と言っても過言ではなく、高速艦であるアークエンジェルを上回る速度と強力な火力を持つ。

ガーティ・ルーのデータも使用されており、特殊な装備も無くミラーージュ・コロイドの展開も可能となっている。



「テタルトス月面連邦軍」

形式番号 L F S A — X 0 0 7

名称 デイザスター・グリュューエン

パイロット ユリウス・ヴァリス

武装

高出力ビームライフル×1

高出力ビームサーベル×2

対艦刀『クラレントⅢ』×1

腹部複列位相砲『アドラメレクⅡ』×1

ビームシールド発生装置内蔵型アンチビームシールド×1

シールド先端ビームカッター×1

ドラグーンシステム×8

〔機体説明〕

テタルトス最新型モビルスーツ。ユニウス戦役で実戦投入されたグロウ・デザスターをさらに洗練させ、強化した機体。

元々規格外の性能を誇っていた機体を強化しただけあって、他の追従を許さない圧倒的な性能を持つ。反面武装面に変更はなく、目新しい装備は搭載されていない。

機体紹介3 (36話以降ネタバレ注意)

「調和同盟軍」

形式番号 A D T - X 0 1 b 1

名称 リベルテ・ストライクガンダム

パイロット ニーナ・カリエール

武装

頭部イーゲルシユテルン×2

高出力ビームライフル×1

高出力ビームサーベル×2

腕部『ブルートガング改』×2

腰部高出力ビームガン×2

専用ストライカーパック

『リベルテ・ストライカー』

斬艦刀『アインヘリヤル』×1

アラドヴァルレール砲×1

高出力収束ビーム砲×1

各ストライカーパック及びタクティカル

〔機体説明〕

キラ・ヤマトの破壊されたヴァルトライテのパーツをストライクに移植した機体。

ストライクがベースになっているとはいえ、その外見と中身はほぼ別物になっており、性能も特殊機にも劣らない。

専用アドヴァンスアーマーを装備し、背中にも専用のストライカーパックである『リベルテ・ストライカー』を装着している。

このストライカーは『アステイニールエツト』のデータを参考に開発されており、全開加速時には光の翼が発生、幻惑機能こそないものの、若干の防御効果を持つ光を放出する。



形式番号 ZGMF-3001

名称 リガル・ギア

パイロット ハイネ・ヴェステンフルス

武装

ビームライフフル×1

ビームサーベル×2

対艦刀『ベリサルダⅡ』×2

ハンドグレネード×4

アンチビームシールド×2

各ウイザード装備

〔機体説明〕

ギア・ソルダートをより洗練し、高性能化を図った機体。外見上頭部ブレードアンテナの追加等見た目だけでなく、中身もほほ別の機体になっており、性能もまるで違う。

それに伴い武装にも違いがある（ただし通常のギアアの武装が使用できない訳ではない）。さらに個人の特色に合わせた改良機も存在しており、その機体はワンオフ機に等しい性能を持っている。

◇ 現在、主にエースパイロットや指揮官等、少数だけが配備されている。

高機動兵装『スレイプニル』

武装

大口径ビームキャノン×2

高エネルギービーム砲×2

対艦ミサイル発射管×多数

近接攻撃用ブレード×2

〔装備説明〕

ヤキン・ドゥーエ大戦及びユニウス戦役で実戦投入された同盟の高機動兵装。

モビルスーツの強化に重点が置かれた兵装で、いずれの大戦でも多大な戦果をあげた。

ザフトの開発した『ミーティア』に比べるとかなり小型化され、小回りが利くがその分、火力は劣る。

しかし加速性はこちらの方がかなり上であり、使い勝手もよくモビルスーツ戦闘にも十分対応可能。

〔地球圏統合軍〕

形式番号 G A T - X 0 0 3 b

名称 アンフェール

パイロット ベアトリーゼ・フォルケンマイヤー
武装

頭部トードスシユレットン×4

高エネルギービームライフル×1

高エネルギービームサーベル×2

ビーム発生装置内蔵ヴァリアブルアームズ×1

高エネルギー収束ビーム砲『アンヘル』×1

ビームシールド発生装置内臓アンチビームシールド（ビーム砲×1）×1

各ストライカーパック

〔機体説明〕

ユニウス戦役時に鹵獲されたアルカンシエルをベースに開発した新型モビルスーツ。新型機の開発プランのデータを混ぜ合わせ、火力、機動性、操作性、すべてが強化、さらにストライカーパックを装着する事も可能であり汎用性も高い機体に仕上がっている。

◇ 地球軍系のモビルスーツの中でもトップクラスの性能を誇る。

形式番号 G A T - X 1 4 7

名称 ヴァニタス・ゼニスガンダム

パイロット ジェラルド・フィレオル

近接防御機関砲×4

高エネルギービームライフル×1

高エネルギービームサーベル×2

高出力ビームランチャー×1

スラスター兼用小型ミサイルポッド×2

対艦刀『ネイリングⅢ』×2

複合火線兵装『スヴァローグⅢ』×2

〔機体紹介〕

ヤキン・ドゥーエ戦役で投入されたゼニスガンダムの正当後継機。

パイロットの特性に合わせて調整されたスラスターとバーニアユニットによって高機動を実現。

今まで開発された機体と鹵獲したアルカンシエルのデータを用い、各武装の高出力化に加え、最新の技術を用いた高性能機に仕上がっている。

◇

形式番号 LFA-X07b

名称 バウ・バジリスク

パイロツト ファウスト・ヴェルンシュタイン

武装

近接防衛機関砲×2

高出力ビームライフル×1

高出力ビームサーベル×2

腹部複列位相砲『アドラメレクII』×1

肩部ビームキャノン×2

グレネード・ランチャー×2

スラストユニット兼用ミサイルポッド×2

ビームシールド発生装置内蔵アンチビームシールド（内蔵三連ビーム砲×1）×1

〔機体説明〕

バウをファウスト専用強化、改修を施した機体。

全身のスラストを増設し、高機動バーニアユニットを装着した。

武装もエンジン出力向上させた事でさらなる火力を確保し、高水準の性能を持つ機体
 になっている。

◇

形式番号 ZGMF-X95SE

名称 ティアマト

パイロット ミレイア・ロスハイム

武装

高エネルギーロングビームサーベル×2

腹部複列位相砲『サルガタナス』×1

肩部装甲内蔵高エネルギービーム砲×4

隠し腕×6 (肩部装甲内と腰部装甲内×2、各腕部にビームサーベル内蔵)

ソリドウス・フルゴールビームシールド発生装置×2

ドラグーンシステム×多数

対艦ミサイルポッド×2

〔機体説明〕

ユニウス戦役で破壊されたレヴィアタンをテタルトスが回収、データを収集して再設計した機体。

レヴィアタンよりも小型化され武装も減らされているがその分機動性は向上し、安定した性能を発揮できるようになっている。



形式番号 G F A S | X 2

名称 デモリツション

パイロット エリニス

武装

対空バルカン砲『イーゲルシユテルン』×4

高エネルギービーム砲×10

高エネルギー砲『アウフプラーレ・ドライツエーン改』×2

エネルギー砲『ツォーンmk3』×1

複列位相エネルギー砲『スーパースキュラII』×3

ミサイランチャー×4

腕部大型ビームサーベル×2

陽電子リフレクター×4

〔機体説明〕

デストロイガンダムの後継機に属する機体。数多の武装と防衛手段を持った外郭とコアとなるベルゼビュートを搭載し、モビルスーツサイズを超える大きさではあるものの、今までのデストロイ級に比べて大幅に小型化されている。

脚部が排除された代わりに高出力大型スラスターを搭載、問題だった機動性も確保されている。

反面モビルアーマー形態はオミットされている。武装も強化されたが邪魔になればパージして身軽になる事も可能。

◇

形式番号 Y M A G - X 1 5 D

名称 スカージ・リユカオン

パイロット No. I

「モビルアーマー武装」

イーゲルシユテルン×多数

高エネルギー砲 『アフプラール・ドライツェーン』×2

複列位相エネルギー砲 『スーパースキュラ』×1

大型ウェポンシザーズ×2 (内蔵ビームキャノン)

大型ビームブレイド×2

中型ドラグーン×多数

小型ドラグーン×多数

対艦ミサイル×多数

「モビルスーツ武装」

頭部イーゲルシユテルン×2

高エネルギービームライフル×2

高エネルギービームサーベル×2

大型ウェポンシザーズ×2（内蔵ビームキャノン）

小型ドラグーン×多数

「機体説明」

地球軍が開発した大型モビルアーマー『スカージ』の発展型。

基本的な武装は変更されていないが、その加速力と機動力はさらに向上し、ドラグーンも高威力の中型と機動性重視の小型とに分かれ、使い勝手も良くなっている。

最大の違いは変形機構。

内部にエステンデット用の機体が搭載され、変形する事で対モビルスーツ戦闘にも特化できるようにモード変更ができるようになっていた。



形式番号 ZGMF-X97

名称 プロヴィデンス・ルキフェル

パイロット カース

武装

近接防御機関砲×2

実弾複合型高エネルギー大口徑ビームライフル×1

腕部装着型高エネルギービームソード×1

腹部複列位相砲『サルガタナスⅡ』×1

腰部高出力ビーム砲×2

ビームファイールド発生装置内蔵ドラグーンシステム×多数

ビームシールド発生装置内蔵アンチビームシールド(内蔵ビームガン×2 ロング

ビームサーベル×1 グレネードランチャー×1)×1

ソリドウス・フルゴールビームシールド発生装置×2

〔機体説明〕

ヤキン・ドゥーエ戦役で投入されたプロヴィデンスのデータを基に開発された強化パーツをサタナエルに装着した機体。

パーツ全体に配置された小型スラスタ類とバーニアユニットによって非常に高い機動性を維持したまま、防御力強化に成功している。

さらにドラグーンユニットも高出力化と同時にビームフィールドの発生が可能になっており、隙の無い機体へと仕上がっている。



「テタルトス月面連邦軍」

形式番号 LF A 1 0 9

名称 ジンⅢ

武装

高出力ビームライフル×1

高出力ビームサーベル×2

高出力ビーム発生装置内蔵攻防一体型中型対艦刀『ヴァハグン』×1

腰部高出力ビーム砲×2

グレネードランチャー×2

ビームシールド発生装置×1

〔機体説明〕

テタルトスが開発した最新型主力機。本来最新機として配備される予定だった『パウ』が統合軍に流れてしまった為に急遽極秘で開発された経緯がある。

コンバット装備には対応していないが、背中に設置されたウイングスラスターと各部に設置された姿勢制御バーニアによって高い加速性と機動性を確保。

さらに洗練されたOSと改良されたコックピットブロックによってパイロットを選
ぶ事無く操縦可能になっている。その性能故にC・E・76年代において最強の量産
機とされている。

◇

形式番号 L F S A ー 0 3 E

名称 ジンIII・レーヴェ

パイロット ヴイルフリート・クアドラード

武装

高出力ビームライフル×1

腕部小型攻防一体型ビームシールド発生装置×2

腰部高出力ビーム砲×2

高出力ビーム発生装置内蔵攻防一体型中型対艦刀『ヴァハグン』×2

背中部搭載高出力ビームマシンガン×2

腹部複列位相砲『アドラメレクII』×1

散弾搭載バズーカ砲×2

誘導ミサイルポッド×2

〔機体説明〕

ジンⅢを大幅に改修し、ヴァルフリート専用機として開発された機体。背中にはウィングスラスターの出力を限界以上に引き上げ、さらに高出力化させた大型スラスターユニットを搭載、同盟のガンダムに勝るとも劣らない機動性を得た。

火力も大幅に強化され、砲戦においても引けを取らない。

コックピットに専用OSを搭載した事で、機体性能を100%引き出せるようになってる。

キャラクター紹介

「主人公」

「アスト・サガミ（アレン・セイファート）」

中立同盟、独立部隊『グラオ・イーリス』所属のエースパイロット。

ヤキン・ドゥーエ戦役時にはイレイズガンダム、イノセントガンダムに搭乗し、多大な戦果を上げ『消滅の魔神』の異名で呼ばれた。基本的に穏やかで優しい性格だが、敵に対しては容赦が無い。

「中立同盟」

「レテイシア・ルテイエンス」

同盟軍所属のパイロットの一人で『戦女神』の異名を持つ。

高い空間認識力と優れた技術を持っており、各陣営の新米パイロット達の教官も務めている。

「マユ・アスカ」

同盟軍所属のパイロット。その技量は非常に高く、ユニウス戦役でもその技量を遺憾なく発揮し、現在は『オーブの熾天使』の名で呼ばれている。ユニウス戦役に比べて、穏やかになっっている。アストに対する好意は変わらず、今でも彼のそばに居たいと思っっている。

「テレサ・アルミラ」

中立同盟スカンジナビア軍所属の戦艦オーデインの艦長で階級は大佐。軍人らしくないが部下からの信頼も厚い有能な指揮官。

「セーフアス・オーデン」

かつてドミニオンを指揮していた元地球軍所属の軍人。実戦経験も豊富で、優秀な手腕を持っている。現在はオーブ軍に所属しており、階級は准将。

「アイラ・アルムフェルト」

スカンジナビア第二皇女であり、中立同盟軍事最高責任者を務める女性。

「ローザ・クレウス」

オーブの研究者。かなり多才な人物で医学や機械工学にも精通した優秀な人物。S EEDに関する研究も含め、同盟軍モビルスーツの設計にも携わっている。

「セリス・ブラッスール」

かつて諸事情によりザフトに所属していた同盟軍のパイロットであり、シンの恋人。

現在はパイロット復帰の為にリハビリに励んでいる。

「ニーナ・カリエール」

同盟に所属するパイロットでセリスの親友。ユニウス戦役時にはキラと共に諜報活動を行っており、上層部からの信頼も厚い。

「プラント」

「レヴァン・カーライル」

現プラント最高評議会議長。優れた手腕を持つ、政治家としても優秀な人物であり、かつては前議長であるギルバート・デユランダルの側近の一人だった。

しかしステイニープランを巡って対立、決別した過去がある。

「テタルトス」

「セレネ・デイノ」

アスランの義妹であり婚約者でもある少女。軍人としても優秀であり、パイロットとしても一流の腕を持つ。

「ユリウス・ヴァリス」

『仮面の懐刀』と言われた元ザフト最強のパイロット。その圧倒的な力は他者を寄せ付けない、名実共に最強の存在。

「ゲオルク・ヴェルンシュタイン」

テタルトス議員の一人で元軍人という異色の経歴を持ちながら、優秀な政治手腕も持ち合わせている。現在は謹慎処分のエドガーに代わり、軍の指揮を執っている。

「ヴァルター・ランゲルト」

美しい容姿を持つゲオルクの腹心の一人。非常に高い技量を持ち、同時に冷静な判断力も兼ね備えている。

「リベルト・ミエルス」

テタルトス軍所属の大尉。冷静沈着な性格であり、優れた技量を持つ。ゲオルクの腹心の一人。

「ラデイス・グエラ」

テタルトス軍のパイロット。パイロット強化に関する研究の一つである試験的な強化処置を施された強化兵。

「ファウスト・クアドラード」

テタルトス軍大佐。才覚に恵まれているがそれを鼻にかけることの無く、誰にでも礼儀正しく紳士的に接する。

「ヴィルフリート・クアドラード」

テタルトス軍少佐。ファウストの弟であり、優秀な兄の存在に異常な劣等感に苛まれており、常に虚勢を張っている。

「ジヨナサン・プロバート」

テタルトス軍に所属するベテランパイロットで階級は大尉。三機で構成されたチーム『テンペスターズ』のリーダー格。優れた判断力と操縦技術を持つ、一流の軍人。といつても堅物という訳ではなく、柔軟な対応も出来る。

「ルーカス・レイノルズ」

テタルトス軍に所属するベテランパイロットで階級は中尉。『テンペスターズ』の一人。軽い性格をした人物ではあるが、その腕前は一流。度々軽口を叩いてジヨナサンに窘められる。

「ヴィクトル・シアーズ」

テタルトス軍に所属するベテランパイロットで階級は中尉。『テンペスターズ』の一人。冷静沉着で解析等が得意な一流の軍人。非常に細かい性格で、常に計算した動きをする。

「地球連合軍」

「アオイ・ミナト」

かつては第81独立機動軍ファントムペインに所属していた地球軍のエースパイロット。改革派（マクリーン派）に属して戦っている。階級は少尉。

「ベアトリージェ・フォルケンマイヤー」

アオイと共に地球軍改革派に属するパイロット。高貴な生まれの令嬢のような印象を受けるが、口が悪く大雑把な性格。階級は少尉。

「アルゼーネ・バルマ」

地球軍所属の女性。パイロットで階級は大尉。

やや粗暴ではあるが腕の立つ軍人であり、その技量は一流。部下からの信頼も厚い。

現在は保守派に属している。

「カーラ・アルマデリオ」

地球軍所属の女性。パイロットで階級は少尉。

情報分析を得意とする人物で明るい性格をしているが戦闘に夢中になると熱くなるという欠点も抱えている。現在は保守派に属している。訓練兵時代の同期であり、アオイとは顔見知り。

「ジルベール・ブラジウス」

地球軍所属のパイロットで階級は中尉。

アルネーゼ率いる部隊の中ではまともな常識人であり苦勞が絶えないが、任務の為に冷酷な判断も下す事もできる優秀な人物。

「ジェラルド・フェレオル」

地球軍所属のパイロットであり、異常ともいえる非常に高い技量を持つ保守派最強の男。階級は大尉。

「クレメンス・イスラファイール」

現在の保守派を率いる若きリーダー。良家の出でありながら、その地位を捨て軍人となった変わり種。確固とした信念の下に地球全体を纏めようとしている。

「ニコラス・フリードマン」

地球軍強硬派少将。実戦経験も豊富で部下にも自分にも厳しい現場叩き上げの生粋の軍人。現在はパナマ方面攻略の指揮を任せられ、改革派と激しい戦いを繰り広げている。

「ガスパール・ブリーズ」

地球軍大佐でマケドニア要塞を任されている指揮官。指揮官としての能力はあるが、やや熱くなりすぎるくらいがあり、冷静さに欠けている部分がある。強硬派に所属しているものの、自分より若いクレメンスに従う事に苦々しい思いを抱いている。

用語集

〔中立同盟〕

『ヤキン・ドゥーエ』戦役時にオーブ、スカンジナビア、赤道連合の三国で締結された軍事同盟。

専守防衛を基本としているが、他国からの救援要請や三国に対する驚異を排除する為などの非常事態には派兵を行うこともある。

地球連合とは戦争状態（ユニウス戦役時に同盟と休戦を望んでいた改革派は劣勢であり、保守派は同盟に対し敵対行動を取っているため）

プラントとはユニウス戦役以降は非常に友好的で同盟加入が検討されている。

テタルトスとはプラントの件により開戦間近といわれるほど非常に険悪。

（ユニウス戦役終結後は同盟の外交により、プラントとの緊張緩和を目的とした会談が行われていたが、ゲオルク・ヴェルンシユタインが地球圏に帰還した直後から状況が一転、同盟との関係も悪くなる）

◇

〔テタルトス月面連邦国〕

ヤキン・ドゥーエ戦役終結後に月に誕生した国家。

マルキオ導師の精神の改革を唱えた『S E E D思想』が国内に広がっておりナチュラル、コーディネイターによる対立が無いため双方の居住を認め、さらに一般には嫌煙されているハーフも受け入れられている。

その為、プラントに引けをとらない高水準の技術力を持っており、精強な軍事力を誇っている。



〔地球連合〕

かつては地球に存在する大半の国々が参加をしていた一大勢力だったが、『ユニウス戦役』においてギルバート・デュランダルによりロゴスの存在が公にされたことで多くの国家が離反、分裂状態に陥った。

現在のはかつての栄光を取り戻そうとする『保守派』（かつては強硬派と呼ばれていた）と今までの体制から抜本的な改革を行おうとする『改革派』の二つに別れ、内戦が起こっている。

その戦況は『保守派』が優勢であり、『改革派』は徐々に劣勢に追い込まれている。

保守派はかつての連合と大した変化はない（コーディネイターに対する偏見が薄れた程度）

改革派は各勢力ともコンタクトを取っており、同盟、プラントとは好意的に接している（テタルトスは、こちらに対しても交戦的である為に敵対関係にあることに変わり無し）



『ベルリン条約』

ユニウス戦役後に崩壊したベルリンで締結された戦時条約。

民間機及び医療関係車両などへの攻撃禁止、捕虜の扱い、Nジヤマーキャンセラーの兵器使用に関する事など様々な取り決めがなされ、世界へ発表された。

これに参加しているのは地球連合、プラント、中立同盟、テタルトス月面連邦国。（ただしユーラシア連邦や一部の国家は参加していない）



『SEED思想』

主にテタルトスで広まっている考え方。

元になっているのは人類の可能性を示す因子とされた研究である『SEED論』であり、元々一部の者たちが信奉していただけのものだった。

しかし中立同盟の研究者であるローザ・クレウスの『過度の状況変化に対応するための適応能力』であるという研究結果が明るみに出た事で再び脚光を浴び、さらに『ヤキ

ン・ドゥーエ戦役』で驚異的な戦果をたたき出した二人のパイロットの存在がSEEDを現実感を与えた事で世界中で話題となった。

現在では軍事転用を目的にして各陣営で研究が重ねられており、特に今はSEED因子保有者を割り出すための方法を挙げて試している。(ただプラント前議長であるギルバート・デュランダルは因子を見極める方法を知っていたのではという噂もある)

◇

『強化兵』

テタルトスで考案されたパイロット能力向上プランの一環で誕生した兵士の事。名前の通り、薬物と実験型のナノマシンを投与する事で、パイロット能力を格段に向上させる事ができる。

これは地球軍のブーステッドマン、エクステンデッドとは違い被験者にかかる負担も格段に軽減されており、一度処理を行えば以降に特殊な処置は必要ない(データ収集を目的とした検診等を行われる)

ただし、未だ実験段階であり志願した一部の兵士にのみ使用されている。

◇

『リローデット計画』

テタルトス軍が戦力強化の為に立案された既存モビルスーツ強化計画の事。

地球軍、プラント、同盟との戦いに供えた新型機開発とは別に地上進出によって地球の戦場に対応した機体が必要という事でロールアウトしている機体の強化と改修が必須となった。

地上用の機体の開発も提案されたが、既存の機体を改修した方がコストも掛からず、さらに時間の短縮にもなるという事でこの計画が推進された。

◇

独立部隊『グラオ・イーリス』

混迷を極める世界の情勢に危機感を持った中立同盟、プラントの一部上層部が設立した独立部隊。

あらゆる状況にすばやく対応できる遊撃部隊として設立されたが、中立同盟とプラントの関係良好をアピールする為のプロパガンダ的な意味合いも強く、その特殊な成り立ちと所属している者たちの経歴から、快く思っていない一部から嫉妬と反感を買っている。

所属している部隊員は同盟、ザフトから選抜されており、表向きは優秀な人材をそろえた事になっているが実際は何かしら問題があったり、扱いにくい人物や特殊部隊出身者などが送られ、所謂左遷先として扱われている。

同盟からの出向者も多く配属されており規律と統率の為、この部隊に所属するものは

ザフトの出身者にも階級が与えられている。(グラオとはドイツ語で灰色、イーリスはギリシヤ神話の女神の名前)

◇

『アドヴェント計画』

中立同盟の新型機開発計画の一つ。ヤキン・ドゥーエ戦役で多大な戦果をあげたフリーダムなどの量産化計画の事。

◇

『斬艦刀』

中立同盟の機体に搭載された武装で他陣営における対艦刀の事。詳しい用途や機構などは対艦刀と大して変わらないが、いくつか種類がある。

『グラム型』

初期型の斬艦刀であり、中型でどのようなパイロットでも扱いやすいが攻撃力も追求した事や核動力機への搭載だった為にエネルギー消費については考慮されていない。

その燃費の問題を解消し量産されたものが『リジル型』となり、トワイライトフリーダムガンダムに搭載された『シンフォニア』もこの系統に分類される。

『バルムンク型』

イノセント専用として開発された斬艦刀。グラム型に比べて刀身が長く、その分扱い

は難しいが攻撃力は相当なもの。

ヴァナデイスガンダムに搭載された『アインヘリヤル』もこの系統に分類されるが、改良されている為、若干刀身が短い。

『コールブランド型』

リヴォルトデステイニーに搭載された斬艦刀。

ザフトのエクスカリバー対艦刀と研究、改良されたもので、より扱い易く、さらに攻撃力の向上も図られており、所謂斬艦刀の一つの到達点ともいえるもの。

しかし搭載される機体や扱えるパイロットが限られる事など幾つか課題がある。『ガラティーン』もこれに分類される。



『ラナシリーズ』

ユニウス戦役時に投入された量産型エクステンデット。名の通りすべての個体がラナ・ニーデルという少女を基にしたクローンであり、各個体によって差はあるがほぼ全員が優秀な力を秘めている（もちろん戦闘に耐えられない失敗作も存在する）

基になった少女が優秀であった為か、ある程度の強化を施せば好きなように素体の特性を調整できる。その影響か、オリジナルを上回る実力を持った個体が何体か存在する。

現在はプラント、地球連合改革派において保護された個体と地球連合保守派において実戦投入されている個体など境遇は様々だが、破棄された者や戦場にて使い捨てられた者は悲惨な末路を辿っている。

◇

『I. S. システム』

『Imitation seed system』の略。特殊な催眠処置と投薬を用いてSEED発現状態を擬似的に再現する事が出来るシステム。ユニウス戦役時にザフトで実戦投入され、多大な戦果を上げた。

しかしこのシステムはパイロットに大きな負荷を与え、処置と使い方次第では多大な後遺症を持つ事になる危険なもの。その危険性と戦争時に極秘裏に実戦投入された為に一部の者以外は存在すら知らされていない。

◇

『W. S. システム』

『war area pilot information synthesis system』の略で元々このシステムは同盟のローザ・クレウス博士が開発していた新型に搭載される予定だったSEEDシステムを連合が独自に発展させたもの。

これは搭載したパイロットの戦場での戦闘情報を収集、特性に合わせて機体調整や補

正、支援を行うシステムである。

現在の地球軍モビルスーツ（保守派、改革派問わず）はこのW・S・システムのデータを参考にした新型OSが搭載され、全体的な戦闘力の底上げが図られている。

さらにエクセリオンガンダムに搭載されたオリジナルW・S・システムには学習プログラムも搭載されており、戦闘経験を蓄積していくと機体のほうがパイロットの操作をより前に回避行動を取るなど予想外の機能を発揮している。



『各勢力の軍事基地』

『中立同盟』

『スカンジナビア』

「ストックホルム基地」「ヘルシンキ基地」「オスロ基地」

スカンジナビアに建設されている軍事基地。元々大陸からの侵攻に備えて建設された基地であり、昨今のヨーロッパ戦線の拡大と激化に合わせ緊張感が漂っている。

「ストウール基地」

エステルズンドにほど近いストウール湖付近の場所に建設された軍事基地。マスドライバーもこの基地付近に存在している。

『赤道連合』

「セラム基地」「マリアナ基地」

大洋州連合の侵攻に備えて建設された軍事基地。ただ最近ではプラントとの関係改善により、大洋州連合への警戒度が低下した為、これらの基地には戦力を集めず、大陸側に存在している基地に戦力を移動させる動きが活発になっている。

◇

『テタルトス月面連邦国』

軍事ステーション『イクシオン』『オルクス』『ヴァルナ』

月全土をカバーする防衛網構築の為に拠点として機能させる為に開発された軍事ステーション。

表側に存在するのが『イクシオン』、裏側に配置されているのが『オルクス』である。『ヴァルナ』はこれら二つをカバーする目的で開発が進められたが、途中から外宇宙進出の為に足がかりとして使用される事になり、かなり大型化され、移動型のステーションに変更されている。

『シルベスタークレーター工廠』

テタルトスの軍事工廠。タキオンアーマーなどの特殊な装備やエース級が搭乗する特殊機などの兵器開発が行われている。

そのさらに地下では強化兵を含めた最重要機密に関わる研究も行われている。

『バルカナバート基地』

テタルトス軍が最初に建造した軍事基地。カスピ海に面し、マスドライバーの建設も進められている。（現在は東アジア共和国と交渉し、使用料を払いカオシユン基地のマスドライバーを使用している）



『地球連合』

『マケドニア要塞』（保守派）

連合（保守派）がジブラルタルとストツクホルムに対する牽制とスエズ基地防衛の為に作られたヨーロッパ最大の軍事要塞。広大な面積を誇る要塞で北と南に分かれて建設されており、さらに迎撃の為にビーム砲台や地下にはモビルスーツ用の施設が幾重にも建造されている。

これが存在する為に連合（改革派）はヨーロッパ戦線の足がかりが作れず、スエズに対して攻勢に出れない状態になっている。

『ウラノス宇宙要塞』（保守派）

地球連合軍が『ヤキン・ドゥーエ戦役』終結後に宇宙での拠点構築を目的として建造した宇宙要塞。

ユニウス戦役時には軌道間全方位戦略砲『レクイエム』が搭載され、ログス派の拠点

として使用された。

『エンリル宇宙要塞』（改革派）

地球連合軍が『ヤキン・ドゥーエ戦役』終結後に宇宙での拠点構築を目的として建造した宇宙要塞。

ユニウス戦役時にはマクリーン派の拠点として使用され、新型モビルスーツの開発などが行われていた。

『アポロン宇宙要塞』（保守派）

地球連合軍（保守派）が『ユニウス戦役』後、新たに建造した宇宙要塞。その規模は未完成ながらもウラノス、エンリルを上回り、現時点で地球連合軍最大の要塞と言われている。

内部には幾つもの格納庫が建設され、さらに巨大な兵器工場も存在している。

第1話 赤い亡霊

C. E. 76 世界は二度の大戦経験した。

『ヤキン・ドゥーエ戦役』と『ユニウス戦役』

いずれも世界全土を巻き込み、数多の犠牲を積み上げながら、ようやくの終結を見た。しかし争いの火種は未だ燻り続け、そして戦いの気配も消える事は無い。

地球連合、プラント、中立同盟、そしてテタルトス月面連邦。

世界に存在する4つの陣営が互いに影響し合い、再び戦火が世界を覆い始めていた。



どこまでも広がる空を二つ影が駆け抜ける。

その影は現在世界で最も有名で、実戦に投入されている兵器、モビルスーツと呼ばれる人型兵器のものだった。

二機が駆けるのは中立同盟に属する赤道連合の軍事基地上空。今そこでは新型モビルスーツのテストが行われていた。

一機は白い四肢と背中に特徴的な翼と装備された砲身が垣間見え、もう一機は赤みがかったピンク色の装甲を持ち、背中はスラスタ以外には何も無いシンプルな印象を持っている。

「速度を上げる」

「了解」

二機は風を切り、雲を散らす。

その速度は常人の目で追いかけるのも困難なほどに速く、時折複雑な機動を取りつつ順調に予定通りのコースを辿っていく。

その内の一機、翼を持った機体のコックピットで挙動を確認しながら操縦していた。パイロット、キラ・ヤマトはテストの工程をすべて終えた事を確認する。

「全項目オールクリア。異常は検知されず」

端末にチェックを入れたキラはもう一機のパイロットへ声をかけた。

「機体のテスト終了。ラクス、基地に帰還しよう」

《ええ、分りました》

二機が高度を下げ、海上に出るとそのまま真っ直ぐに進んでいく。

その先にはキラ達が駐留している赤道連合のマリアナ基地が見えてきた。

海上に面したその基地はザフトのカーペンタリア基地にも似た雰囲気を持つ、赤道連合の軍事拠点である。

元々は大洋州連合の侵攻に備えて建設された最前線の基地であった。

しかしプラントとの関係が改善されつつある現在では少しずつ緊張も緩和され、基地全体にも余裕が生まれている。

とはいえ長年、敵と刷り込まれた相手をそう簡単に信用する事も難しく、しばらくはこのまま戦力維持に務めるのが赤道連合の方針だと聞いていた。

「マリアナ基地、こちらキラ・ヤマト、これから帰還します」

《了解、進路クリア、二番滑走路を使用してください》

管制官の指示に従い所定の場所へと機体を着地させると管制官からの賛辞の音が聞こえてきた。

《お見事です。流石ですね》

「大袈裟ですよ」

《貴方ほど綺麗に機体を着地させるパイロットは此処にはいません。機体への負荷も抑えられていますし》

管制官の賛辞に苦笑しながらピンク色の機体の着地を確認すると格納庫内に移動、モ

ビルスーツハンガーに固定する。

「お疲れ様でした。いかがですか？」

「なかなか良いね」

整備士の質問に答えながらコックピットから降りると手渡された端末のスイッチを入れた。

「問題は大きいみたいだし、順調かな」

キーボードを叩きながら、データを見て満足そうに頷くと近くに控えていた整備士に端末を渡す。

「よし、大丈夫です。このまま調整を続けてください」

「ハ！ オルトリンデの方ですが、ルティエンス大尉に確認を取る必要は？」

「そちらの方は僕が確認して、後でデータを送っておきますから」

「了解しました！」

「フウ、まあ、慎重になるのも当然かな」

急ぎ走り去る整備兵の後ろ姿を見送りながら、傍らに立つモビルスーツを見上げた。

キラが調整を行っているこの二機は同盟で進められている虎の子、『アドヴェント計画』の試作機である。

『アドヴェント計画』とは中立同盟の新型機開発計画の一つでヤキン・ドゥーエ戦役で

多大な戦果をあげたフリーダムなどの量産化計画の事だ。

現在同盟はこの『アドヴェント計画』で企画された機体を次期主力機として量産しようとして計画している。

その計画は着々と進行中であり、もしもテストで異常が出たら早急に調査する必要があるのだ。

しかしどうやらそれも杞憂に終わったようだ。

「お疲れ様です、キラ」

「うん、ラクスもお疲れ様」

キラはヘルメットを小脇に抱えた相棒であるラクス・K・ルティエンスに微笑みかけると手渡されたタオルを受け取った。

「どうかしましたか？」

「いや、君の名前にもようやく慣れてきたかなって」

ラクスのフルネームは本来別のもの。

事情があつてある人物の妹として名前を改名したのだが、最初の頃は姉の方と混同して戸惑ってしまった。

現在ではその違和感もようやく消え、慣れてきていた。

「機体はどうかな？」

「ええ、特にこちらも問題は見当たりませんでしたわ」

ラクスから受け取ったデータを確認すると特に異常は無く、機体に問題は確認できない。

すぐにでも実戦投入できるレベルだ。

「うん、こつちもOKみたいだね。ラクス、今日の作業は終わりだから、もう休んでいいよ」

「分かりました。ではスカンジナビア行きの準備をしておきます」

「頼むよ」

二人は近くこのマリアナ基地での任務を終え、スカンジナビアの方に向かう事になっていた。

二年も滞在し結構愛着のある店なども出来ていたので残念だが。

それも今の情勢を考えれば仕方がない。

それは『ヨーロッパ戦線』と呼ばれる戦いの激化が原因だった。

人々の声に上る地獄の地。

誰もが知る地球上で最も戦闘が激しい場所。

それがヨーロッパ。

そこには集まっているのだ。

地球軍、ザフト、同盟軍、そして地球へ進出してきたテタルトス。

現在地球圏に存在するすべての勢力がヨーロッパを舞台に睨み合い、激しい攻防を繰り広げているのだ。

「……テタルトスカ」

そこはかつての親友が所属する陣営。

嫌な話だが中立同盟とテタルトス月面連邦国は今現在非常に険悪であり、ほぼ開戦状態と言っても差し支えないほど関係が冷え込んでいる。

もしかすると再び彼と戦う事になる日も近いかもしれない。

そして——自分の対を成すあの男とも。

「キラ」

「……何でもないよ」

心配そうに見つめてくるラクスに微笑みかけ、データの精査を行おうとすると走りよってきた兵士の一人が声をかけてきた。

「失礼します、ヤマト一尉。スカンジナビアより、クレウス博士から連絡が入っています」

敬礼しながら報告してくる兵士に内心苦笑しながら、「分かった」と返事を返す。

「どうしたのです?」

「ん、いや、何時になっても階級で呼ばれる事には慣れないなあってね」

ヤキン・ドゥーエ戦役では階級で呼んでいたのはごく僅かの人間だけ、ユニウス戦役では隠密に動いていた為に階級で呼ばれた事はほとんどなかった。

にも関わらずユニウス戦役終盤ではカガリとの血縁関係によって暫定とはいえ准将の階級を与えられていたのだから、頭が痛い。

それは流石にという事で戦後にきちんとした辞令で血縁関係を無視した、階級を与えてもらったのだ。

「キラは一尉なのですから、もう慣れないといけませんよ」

ずっと軍に籍を置いているだけあってラクスはその辺が厳しい。

毎回この手の話題では勝てた試しが無かった。

「分かってるよ」

そうそうにお手上げし、端末から映像を繋ぐとそこには世界で最も有名な研究者ローザ・クレウスの姿が映し出されていた。

《久しぶりだな、ヤマト》

「ええ、お久しぶりです、クレウス博士」

一見研究者には見えない白衣をまとった女性。

彼女こそ世界に知らぬものはいないとされるオーブの研究者ローザ・クレウス博士

だった。

非常に優秀な人物で中立同盟が開発したモバイルスーツで彼女が関わっていない機体は存在しないと言われる程の研究者である。

本人はモバイルスーツには興味が無いと公言しており、現在の仕事も仕方なく受けているという事らしいが。

《ああ。そういうえばニーナがお前に会いたがっていたぞ》

「うっ」

その名を聞いた途端、背後に立っているラクスから剣呑な気配が立ち上る。

ニーナとはユニウス戦役時に共に戦った女性で、キラの部下のようなものだ。

優秀でキラも深く信頼しているし、彼女もこちらを慕ってくれているのだが——
少々スキんシツプが過激なのがたまに傷だ。

「は、はは。えっとそれはまた今度話をしますよ。それよりどうしたんですか？」

《お前が作成した機体の設計を見せて貰った。流石だな、私の方でも幾つか手は加えておいたが、基本はあれで問題ないだろう。データを送っておく。それから例のデバイスが完成した》

「本当ですか？」

《ああ。テストがまだだがな。後は搭載してからだ。機体をこっちに寄せ》

「はい。僕達ももうすぐそっちに向かいますから、一緒にスカンジナビアの方へ運びますよ。それよりもヨーロッパはどうですか？」

《ふん。世界情勢に興味は無いが、まあそっちが思っている以上に切迫しているようだ》

世情に興味がないと言いつつも、ローザは顔を歪めている。

それだけ不味い状況らしい。

「そうですか……やっぱり急いだ方がいいかもしれない」

キラは硬い表情のまま、視線を横に向ける。

そこにはフレームが剥き出しの組み立て途中の機体が二機、横たわっていた。

『機動戦士ガンダムSEED eventua!』

宇宙から見る地球は青くとても美しく、誰しも目を奪われる。

とてもあそこで今も生死を賭けた戦いが繰り広げられているとは誰も思わないだろう。

そんな地球からの宇宙に上がってきた数隻の船があった。

物資や人員を乗せたザフト所属のシャトルである。

シャトルは出迎えに来ていたザフトの輸送船と合流するとゆつくり彼らの帰るべき場所であるプラントへ向け、航行を開始する。

その周りには護衛の為に配置されたモビルスーツ『ザクウォーリア』と『グフイグナイテッド』が物々しい雰囲気を感じ任務を遂行していた。

「全く、こんな任務に就かされるなんて冗談じゃないな」

輸送船を操縦していたパイロットの青年がその光景を見て毒づくど計器をチェックしていた兵士がからかうように声を掛けた。

「何だ、ビビってんのかよ？」

「うるさい、お前だつて知つてるだろ。ここ最近の輸送船行方不明事件の事」
そう言われて兵士も合点があったのか、納得した表情に変わった。

最近プラントに向かう輸送船が行方不明になるといふ事件が数件起こっている。

彼が不安そうな顔をしているのは、自分もそんな事件に巻き込まれるのではと思つて
いる訳だ。

「何だよ、そんな事かよ」

「そんな事とはなんだよ。あれつてさ、遭難事件じゃなくて、何者かに襲撃されたんじゃないかつて噂があるんだよ」

行方不明になった輸送船は事故に遭うような航路は取っていないかった。

その上に前議長に關係する重要人物が護送されていたという黒い噂まで流れ、何者が襲撃したのではないかという話が軍全体に広がっているのだ。

この物々しいモビルスーツの護衛も、不測の事態に備えてというよりも、誰からの襲撃から守る為のものと言われた方がしっくりくる。

移動している航路も今までのものとは違い、デブリの多い少し危険なものになっているしパイロットの青年が疑念を持つのも不思議ではない。

「大丈夫だよ。何かあった時の為の護衛だろ。ま、最新型の機体じゃないけどさ」
ザクやグフは二年前に勃発した『ユニウス戦役』から実戦投入されている機体であり、現在実戦配備が進められている新型機に比べると性能が劣つてはいる。

それでも現場に立つ兵士達からの信頼は厚く、改修や強化を施され今なお前線に投入されており、その能力や性能も確かなものだ。

「それに地球に行かされるよりは遥かにマシだと思うぜ。カーペンタリアはまだしもジブラルタルなんて絶対にごめんだね」

『ヨーロッパ戦線』か。確かに」

兵士の軽口にパイロットの青年も気が紛れたのか、見るからに肩の力が抜けた。

ニヤリと笑う同僚のおかげか先ほどまで感じていた物々しさも忘れ、軽い雑談を交わ

し始める。

しかし、気を緩めたその瞬間——護衛役として同道していたザクが上方から発射されたビームによって撃ち抜かれ、大きく爆散した。

「何!?!」

「ッ、レーダーに反応あり……これはモビルスーツ!?!」

上方から急速に接近してきたのは赤い装甲とモノアイも頭部を持ち、背中に設置された二基のスラスタユニットが特徴的なモビルスーツだった。

「あの、機体は……」

通常の機体とは比較にならない速度で迎撃に向かうザクの懐に飛び込み、手に握ったビームサーベルで斬り払う。

横薙ぎに振るわれた光刃がザクの胴体を捉え、いとも容易く切断すると即座にライフルを構え次の機体を撃ち抜いた。

「速い!?!」

「くそ!!」

襲撃してきた赤い機体は背中のスラスタユニットを噴射させ、ザクから連射されるビーム突撃銃をアクロバティックな機動で軽々と回避する。

「くっ、怯むな! 迎撃しろ!?!」

グフとザクが連携を取り、赤い機体を囲むように攻撃を仕掛けた。

「落ちろー!」

ターゲットをロックし、ビーム突撃銃のトリガーを引く。

しかしその一射は敵機を捉える事無く虚空に消え、続けて別の機体が放ったビームも掠めることすらできないまま、赤い影だけを残して敵は視界から掻き消えた。

「なっ、どこに? うああああ!」

ザクは何時の間にか下側に回りこんでいた敵が放ったライフルの一撃で急所を撃ち抜かれてしまった。

「畜生、なんだこいつは!」

「後ろに目でも付いてるのかよ!!」

こちらの射線を完璧に見切っているかのような動きですべての射撃を回避する敵機に誰もが戦慄する。

「なら接近戦で!!」

痺れを切らしたザクとグフがビームトマホークとテンペストビームソードを抜き、左右から挟みこむように切りかかる。

だが上段から繰り出したビームソードの斬撃は最小限の動きで避けられ、さらにシールドから放出されたロングビームサーベルによってザクの両脚部が切断、バランスを崩

してしまった。

「ッ!?!」

「なんだと!?!」

脚部を失い無防備になったザクの中央にビームサーベルが突き刺さり、グフの方へ振り投げるとライフルで二機同時に撃破する。

「化物かよ!?!」

残りの護衛機から追撃を振り切り、発射されたビームライフルがザフト機を次々と撃ち落としていった。

その光景は悪夢の一言。

この言葉しか出ない目の前の光景に軽口を叩いていた兵士も顔を青くし、ただ体を震わせている。

そんな中、輸送船の操縦桿を握るパイロットは目の前で悪夢を振りまく赤いモビルスーツの事を思い出していた。

あれはユニウス戦役最後の戦い『メサイア攻防戦』だった。

中立同盟の象徴ともいえるモビルスーツ『ガンダム』をたった一機で完璧に押さえ込んだモビルスーツがいたのだ。

「あ、あ、まさか……あの機体は……」

赤いモビルスーツはすべての護衛機を排除すると加速しながらビームサーベルを構えて突っ込んでくる。

もはや逃げ場はなく、守ってくれる味方機もない。

確定した死までの一瞬、思い出したその機体の名をパイロットの青年はポツリと呟いた。

「……サタナ……」

赤いモビルスーツの一撃で輸送船のコックピットは斬り潰され、船体は閃光に包まれた。

その惨状を生み出したパイロットは何も語らず、背を向けるとすぐさまその場を後にする。

生き残ったものは誰もおらず、破壊されバラバラになった残骸だけが残された。

◇

結局今回もまた地球から帰還した者達を乗せた輸送船がプラントにたどり着く事無

く、消息を絶った。

この事態にプラント最高評議会は臨時の閣議を開き、対応を協議していた。

「……テタルトスでしょうか？」

開口一番、硬い表情で資料に目を通していた議員が最も疑わしい存在を指摘した。

テタルトス月面連邦国は『ヤキン・ドゥーエ戦役』終結後に建国された新生国家である。

戦後の混乱に紛れプラントから離脱した者達がその中核を成し、地球からの合流者も含めて多くの人々が月へと集い、国を作り上げた。

技術、人材の流出、敵対していた筈の地球軍離脱者の受け入れ、そして月独自の考えである『SEED思想』の拡散。

当時から続く様々な事情からテタルトス月面連邦国とプラントの関係はすこぶる悪く、昨今でも小競り合いが絶えない敵対国家の存在を疑うのは自明の理と言える。

「いや、地球軍という可能性もあるでしょう。最近では宇宙に新しい拠点の構築も進めているようですからね」

「例の保守派ですか」

「ええ。協力関係である改革派は劣勢ですし、宇宙でも保守派の連中が幅を利かせ始めているようです」

地球の存在している主要国家の大半が参加し、形成されていた地球連合は現在二つの勢力に別れ、内戦状態に陥っている。

一つは今までの体制から抜本的な改革を行おうとグラント・マクリーン中将が率い、プラントや他の陣営とも協調路線を取っていた現在では改革派と呼ばれている勢力。

もう一つがかつての地球連合の威光を取り戻すべく力を持って統一を果たそうとする強硬派、今は保守派と呼ばれている勢力である。

現在、地球では数多の国家を巻き込みながら、この二つの勢力が血で血を洗う激戦を繰り広げているのだ。

「うむ、どちらにせよ、調査の為の戦力を送る必要がありますな」

「しかしこちらにも月を警戒しなくてはなりませんし、地球での『ヨーロッパ戦線』が落ち着かない限りは簡単に戦力を動かす事はできません。状況を好転させる為に同盟に對して働きかけや改革派に對してもできるだけ支援は行っていますか」

「それに仮に襲撃者がいた場合、生半可な戦力を送って返り討ちになっても意味がない。ならばそれ相応の戦力を送るべきだ」

「だから前線に配備すべき新型機を調査部隊に回せというのか？」

意見が纏まらず紛糾する議会。

その中央で黙って話しを聞いていた男が厳しい表情で立ち上がると声を上げた。

「皆さん、落ち着いてください」

「議長」

立ち上がった人物、彼こそ現最高評議会議長レヴァン・カーライルだった。

かつては前議長であるギルバート・デュランダルの側近として働いていたが、デステイニープランを巡って対立した過去を持った人物である。

そんな経歴故か、デュランダルを彷彿させる非常に優れた政治手腕を持っており、プラント市民からの信頼も厚い。

「議長はどう思われますか？」

「私もこの事態を看過する事はできないと考えています。しかし現在、迂闊に戦力を動かせない事も事実です。ですからここは『グラオ・イリス』の派遣を提案します」
レヴァンの提案に半数が納得の、もう半分が苦虫を噛み潰したような表情を浮かべるが、それをあえて無視するように言葉を続ける。

「元々こういう不測の事態の為に設立した独立部隊ですから、彼らが適任かと」

「しかしあの部隊は色々……」

「他に代案が？」

そう言われれば代案もない以上、口を閉ざすしかない。

周りを見渡しこれ以上の意見が無いと判断したレヴァンは総括する為、あえて大きな

声で告げた。

「では輸送船行方不明の調査は独立部隊『グラオ・イーリス』を派遣するという事でしょうか？」

皆が頷いたのを確認すると議会は次の議題の話し合いに移っていった。

◇

輸送船が消息を絶って二日。

プラント最高評議会の命令を受け、輸送船が行方不明となった宙域へ一隻の艦が派遣されていた。

ユニウス戦役において大きな戦果を上げながらも数奇な運命を辿った、女神の名を冠された艦『ミネルバ』である。

このミネルバこそ独立部隊『グラオ・イーリス』第一部隊の旗艦として運用されている戦艦であった。

「目標ポイントまで、後5分です」

「分ったわ」

艦長席に座り指揮を執るタリア・グラデイス艦長は指令書の内容に改めて目を通しな

がら表情を曇らせた。

そのタリアの様子に気がついたのか副長のアーサー・トラインが訝しげに声をかける。

「艦長、どうしました？」

「……いえ、これがおしも何者かによる襲撃であれば厄介な事になると思っただけよ」

「確かに。やはりテタルトスですか」

「それを調べる為に私達が派遣されているのよ」

世界情勢は混迷を極めている。

各陣営が刃の矛先を向け合い、睨み合い、時に激突を繰り返す現状、さらに余計な事態は避けたいというのがタリアの本音だ。

だから今回の件が単なる海賊等ならまだマシな方だろう。

しかし提示された情報と彼女の豊富な実戦経験からくる推測が、それを否定していた。

「艦長、評議会から指定されたポイントに到着します」

タリアは管制官であるメイリン・ホークの報告にアーサーとの話を打ち切ると即座に頭を切り替えた。

「アレン達は？」

「ブリーフィングルームです」

「いつでも出撃できるように準備させておいて」

「了解」

輸送船が行方不明となった場所に近づき、ブリッジが戦闘態勢に移行する。

艦全体が戦闘準備に迫われ、慌ただしく動き出す中ブリーフィングルームではパイロット達が集まり、情報の共有を行っていた。

すでに全員がパイロットスーツに着替え、モニターに提示された情報に見入っている。

そんな彼らの前に立ち、説明を行っているのはモビルスーツ隊を任されたサングラスを掛けている青年アレン・セイファートである。

「以上が現在確認されている情報だ。現場に到着次第、調査に入る。何か質問は？」

「隊長、仮にですけど、輸送船襲撃者が居た場合は撃墜してもよろしいのですか？」

「そうだな。襲撃者に関してではできれば鹵獲するのが望ましいが、危険だと判断した場合は構わない、撃墜しろ」

「了解」

《もうじき目標ポイントに到着します。モビルスーツ隊各員は搭乗機にて待機してください》

「よし、全員、機体へ搭乗。後は何時も通りに」

「了解!!」

メイリンの放送がブリーフィングルームに流れ、アレンの指示に全員が敬礼すると格納庫に向かって移動を始める。

それを見送りアレンも格納庫に向かおうとすると赤い髪をしたセミロングの女性が近づいてきた。

「アレン」

「ルナマリアか。今回も頼む」

「ええ」

赤い髪の女性はルナマリア・ホーク。

ユニウス戦役から共に戦ってきた戦友であり、お互いの信頼も厚く、今はモビルスーツの副隊長も任されている。

アレンにとっては長年一緒に戦ってきた相棒といっても差し支えない存在だ。

「それより、いい加減そのサングラス外したらどうです？ 似合っていないですよ」

「ぐっ……いいんだよ。俺は目立つのは好きじゃないって知ってるだろ」

「皆、アレンの素性は知ってるんだし、気にしなくてもいいと思いますけど」

アレン・セイファートというのはユニウス戦役で使っていた偽名であり、アスト・サ

ガミというのが本名だ。

ただこの名前は色々目立つ上に、『グラオ・イーリス』の現状から考えてもあまり好ましいとも思えなかったので、この名を使用しているのである。

「それより機体の方はどうだ？」

露骨な誤魔化しにルナマリアはジト目を見つめていたが、すぐにため息をつきその話しに乗ってきた。

「ハア、まあこの話しは後で。今のところ大丈夫です」

「そうか問題があればすぐに報告してくれ」

二人は話をしながらブリーフィングルームを後にすると格納庫に向かう。

「それにしてもこっちにも新型機を回してくれれば少しは楽になるんですけどね」

「仕方ないな。新型は全軍に行き渡るまでは、こっちには回ってこないだろう」

ルナマリアが愚痴る気持ちも良く分かる。

現在ミネルバに配備されている機体はすでに戦線に投入されている既存機のみで、アレンやルナマリアもセカンドステージシリーズの改修機に搭乗していた。

これは独立部隊である『グラオ・イーリス』の成り立ちに関係している。

元々『グラオ・イーリス』は現在の状況に危機感を持った中立同盟、プラントの一部上層部があらゆる状況にすばやく対応できる遊撃部隊として設立したものである。

同時に中立同盟とプラントの関係良好をアピールする為のプロパガンダ的な意味合いも強く、部隊員は同盟やザフトから選抜された者達で構成されている。

その特殊な成り立ちと所属している者たちの経歴から、快く思っていない一部から嫉妬や反感を買っているのだ。

モビルスーツや配属される人員などはその影響を受けており、既存の基地に立ち寄った時も冷遇に近い対応をされる時もある。

故に新型モビルスーツなど議長や同盟上層部から指示でもない限りは、配備される事はまずあるまい。

「ま、泣き言いつても始まらない。俺達は与えられた手札で勝負するしかないさ」
「そうですね」

雑談を交わしながら格納庫に到着するとルナマリアと別れ、アレンは自分の機体の元へ向かう。

ZGMF-X51Sβ 『エクリプスガンダム・リビルド』

ユニウス戦役で投入されたエクリプスガンダムを一度解体し、現在の技術を用いて再構築した機体である。

「……………いつとも長い付き合いだな」

長年付き合ってきた愛機の姿を少しだけ見ため、コックピットに乗り込んで機体を立

ち上げているとオペレーターであるメイリンからの通信が入った。

《予定ポイントに到達しました。各モビルスーツは出撃してください》

「了解!!」

最終チェックを終えるとエクリプスがカタパルトに運ばれ、前方のハッチが開く。

《進路クリア、発進どうぞ》

「アレン・セイファート、エクリプス、出ます」

ミネルバから出撃したエクリプスの背中に射出された専用の『エクリプスシルエット03』を装着した。

この装備はフォースシルエットを改良、スラスタ出力を強化した装備であり、『エクリプスシルエット』同様に武装ラックも搭載されている。

目新しい装備ではないがバランスという意味では一番優れた装備故にアレンは大抵この装備を使う事になっている。

「よし、サーベラス、バロール問題なし」

エクリプスがラックに載せている武装である高エネルギービーム砲『サーベラスII』とレール砲『バロールII』の調子を確認しているとザクやムラサメといった機体が続けて出撃してくる。

そして最後に姿を見せたのはモビルスーツが普及した現在、戦場においては場違いと

もいえる小型の戦闘機だった。

《進路クリア、発進どうぞ》

「ルナマリア・ホーク、コアスプレンダー出るわよ」

飛び出したコアスプレンダーに続き、モビルスーツの上半身と下半身、さらにフォー
スシルエットが次々に射出され、ドッキングすると一機のモビルスーツへと姿を変え
た。

ZGMF-X56SB 『インパルスガンダム・リビルド』

エクリプスガンダムと同様に現在の技術を用いて再構築した機体である。

大きな外見上の変化は無いが、チェストフライヤーはデステイニーインパルスの物を
改修、各部にスラスタを増設し機動性を高め、さらにレッグフライヤーにもビーム
サーベルを装着する事で戦闘力向上を図っている。

ドッキングを果たしたインパルスが合流し、全機の出撃を確認すると二手に別れ、調
査を開始する。

「各機、事前に通達していた通り、調査予定時刻は一時間だ。何も無ければ別ポイント
に移動、再び同じように調査を行う」

「了解」

全機が散開し、デブリを避けながら輸送船の痕跡を探す。この辺りはデブリが多く、

視界も良くない。慎重に手掛かりを探索していると、アレンの視界に光るものが見えた。

「アレは？」

エクリプスをそちらの方向に移動させたその瞬間、いきなりビームによる攻撃が一斉に襲い掛かる。

「敵か!？」

スラストアーを逆噴射させ、攻撃を避けながら発射された方向へライフルの銃口を向けた。

そこにいた機体はテタルトスのモビルスーツである『フローレスダガー』であった。背中に高機動戦闘仕様の装備であるウイングコンバットを装着し、ビームライフルを構えている。

「ここにテタルトス？」

《アレ、こつちにも月のモビルスーツが!》

ルナマリアからの報告に一瞬困惑するも、即座に指示を飛ばす。

「全機、迎撃！」

「了解!!」

フローレスダガーのライフルを避けつつ前方に加速、腰からビームサーベルを抜くと

上段から叩きつける。

ライフルごと腕が容易に切り裂かれ、たたらを踏む敵機にさらに光刃を振るい、残った腕と足を瞬時に斬り裂いた。

「悪いがお前には聞きたい事がある。こちらに来てもら——」

動けないフローレスダガーを回収しようとしたアレンだったが、そこに強力なビームが撃ち込まれた。

強力なビームの一射がフローレスダガーに直撃すると木っ端微塵に破壊する。

「チツ、増援。あれは『ジンII』か」

砲戦仕様のバーストコンバット装備を背負い、ビームランチャーの砲口を向けているのはテタルトス軍のモビルスーツである『ジンII』だった。

砲口から発射されたビームの閃光と共にミサイルの雨がエクリプスに一斉に降り注ぐ。

「鬱陶しいー」

アレンは上昇してビームの砲撃を回避すると背中中のサーベラスIIを跳ね上げ、ミサイルを吹き飛ばした。

そしてそのまま一気に速度を上げると爆煙の中を突っ切りジンIIへと肉薄する。

「その手の装備に砲戦で相手をする気はないんだよー」

しかしエクリップスの行動を読んでいたのか、ビームランチャーの砲口はこちらの方に向けられていた。

それでもアレンは速度を落とさず、ビームサーベルの柄に手を伸ばす。

一瞬の攻防。

砲口から発射されたビームは一直線にエクリップスに向かってくる。

「ッ!!」

アレンは神懸りのな反応で機体をバレルロールさせビームの奔流を避けると、逆さのまますれ違う瞬間にサーベルを抜く。

その一振りがジンIIの胴体を捉え、真つ二つに断ち切った。

爆発を背に今度はルナマリア達が戦っている方向へ進路を取った。

「はあああ!!」

インパルスもまた余裕さえ感じられる動きでフロレスダガーの斬撃をかわし、至近距離から突きつけたライフルでコックピットを破壊する。

しかも味方への援護も忘れておらず、敵を寄せ付けない。

「全くしつこい。これじゃ鹵獲する隙もない」

「ルナマリア!」

インパルスの背後から対艦刀で切りかかるジンIIにアレンはビームライフルで狙撃、

腕ごと破壊する。

その隙にルナマリアがC I W Sを叩き込みながらシールドで殴りつけ、体勢を崩した所にエクリプスの一射が頭部を貫いた。

「余計なお世話だったか？」

「いえ、ありがとうございます、アレン」

周囲の状況を見渡すと残ったテタルトスの機体は他の機体によってほぼ鎮圧されている。

見れば他にも鹵獲できそうな機体が幾つかあるようだ。

「アレン、この機体、鹵獲しますか？」

テタルトスが今回の襲撃犯かはまだ分からないが、何かしらの手ががりくらいは得られるかもしれない。

「ああ。だが慎重にな」

「了解」

インパルスと共に胴体が無事であったジンIIを鹵獲しようとしたその時——生き残っていた機体が突如爆発し始めた。

「自爆!!? 全機、敵から離れろ!!」

全機が一斉に敵の機体から飛び退くと、ギリギリ爆発の影響範囲外に離脱する事に成

功した。

「ッ、無事か？」

「……こっちは何とか無事です。他の機体も多少の損傷は受けているけど、全員大丈夫みたいですね」

全機の反応がある事が分かり、アレンは安堵するように息を吐き出した。

だが、何故こんな場所にテタルトスのモビルスーツが存在したのか、疑問が残る。海賊やジャンク屋、傭兵という事も考えられるが、どれも違うような気がする。

「考えていても仕方がない。一旦戻った方がいいか。よし、ミネル——」

アレンは突如、殺意の籠った視線のようなものを感じ取ると背後に振り返りライフルを向けた。

だが銃口の先に誰も居らず、ただ暗闇の宇宙が広がっているだけだ。

「アレン、どうしたんですか!？」

「い、いや。なんでもない」

確かに誰かに見られていたような気がしたのだが。

アレンはまとりわり付く嫌な予感のようなものを振り払おうと首を振り、全員に一時帰還命令を下すともう一度だけ視線を感じた方向を見た。

「今のは……」

そこにはやはり誰もおらず、ただ虚空の闇だけが広がっている。
結局、終始嫌な予感が消えないまま、アレンはミネルバへ帰還する進路を取った。

第2話 三つの嵐

デブリと共に破壊されたモビルスーツの残骸が浮かぶ宙域。

そこで襲撃してきたテタルトスのモビルスーツとの戦闘を終えたミネルバは本来の目的である調査活動を再開していた。

「もう、デブリが鬱陶しい。これじゃどれが手掛かりかなんて分からないわよ」

「気持ちには分かるが、ぼやくなよ。このポイントもこの辺りを調査すれば終わりだ」
「分かってますけどね」

ルナマリアがレーダーに映る残骸の数に辟易し愚痴を零す気持ちも分かる。

確かにこれは広大な砂漠に埋もれる小さな宝石を捜すようなもので、気が滅入るのも無理はない。

特に探索を行える機体がインパルスとエククリプスの二機しかないという今の状況がそれに拍車を掛けているのだらう。

しかもすでに数箇所も同じような場所を調査しているとすれば、愚痴の一つも言いた

くなるのは当たり前だった。

だが前回の戦闘で損傷が無かったのはインパルスとエクリプスのみであり、大きな被害は無かったとはいえ爆発の衝撃波に巻き込まれた他の機体は修復作業中。

この広いエリアの探索を二機だけで行う事となれば、必然的に負担が大きくなってしまふのは仕方がない。

「戻ったらなにか奢ってやるから、もう少し頑張れ」

「えっ、ホントですか！ あ、じゃあ今度休暇でプラントに戻ったら、買い物に付き合ってくださいね！」

「え、あ、ああ」

機嫌が良くなったのか「新しいお店できたんですよえ」なんてルナマリアは楽しそうに笑っている。

単純に労うつもりで言ったただけだったが、思わぬ効果があったようだ。

いくらか雰囲気も和んだところで、改めて周囲を見渡すとボロボロに破壊された残骸が密集している

この辺りは本当にデブリや残骸が多い。

死角で手掛かりを見落とさないように視線を凝らしていると、目新しい弾痕がついた残骸を発見した。

「あれは……ザクか？ ルナマリア、二時方向だ」
インパルスと共にザクと思われる物体に接近するとそこには脚部を斬り裂かれ、爆発によって完全に破壊された残骸が漂っていた。

「間違いない。輸送船の護衛についていたザクだ」

「でも、これじゃ……」

「ああ。だが、何かの情報は手に入るかもしれない。回収して一度ミネルバに戻るぞ」
「了解」

メイリンに連絡を入れ、大破したザクを掴むとミネルバへと慎重に運び込んだ。
発見したザクを格納庫の床にゆっくりと横たえ、コックピットから降り立ったアレンの耳に聞こえてきたのはメカニックリーダーであるマッド・エイブスの悲鳴にも似た声だった。

「こりやヒデエな。大破もいいとかじゃねえか」

ぼやきながら端末を弄るエイブスに近づき、一番重要なことを尋ねる。

「データは取り出せそうですか？」

「ほとんどスクラップと同じですからね。やれるだけやってみますけど」

「頼みます」

何かしら情報が出てくれば良いと考えながら、その場を任せ一度着替えようと床を蹴

る。

無重力の中、壁や床を器用に蹴って更衣室に向かう。

その途中、シミュレーターで訓練に励むパイロット陣の姿が見えた。

「今日もやってるな」

アレンの指揮するモビルスーツ隊メンバーの技量は非常に高いと自負している。

元々彼らが高い資質を持つていたというのもあるが、彼らは配属されてからずっとアレんとルナマリアが鍛え上げてきたからだ。

部隊設立時、一部の者達から受けた冷遇処置と地球での戦闘激化の影響でミネルバはパイロット不足に悩まされる事になった。

議長であるレヴァンやアイラに訴える手段も無くはなかったが、それをすると不満を持つている連中とさらに軋轢が生じかねない。

そこで配属が決まっていないアカデミーを卒業したての新兵や実力はあるが（上司との関係などで）問題がある者など、所謂いわく付きの者を集めたのだ。

最初はそれこそ苦勞させられたものだが、今となってはこれで良かったと思つてい

る。「皆、ずいぶん腕上げましたよね」

いつの間にか隣にきていたルナマリアがポツリと呟いた。

彼女も一緒に苦勞させられたからこそ、感慨深いものもあるのだろう。

「これもルティエンス少佐のおかげですね」

「うっ……そうだな」

顔が引き攣らないように、できるだけ自然に振舞う。

彼らの訓練内容はスカンジナビアで教官も勤めている女性にも意見を参考に作成されたもの。

教官を勤めているだけあって、彼女の指摘は的確で彼らの訓練の際には実に役に立ったのだが――

「どうしたんですか、アレン？」

「いや、別に、何も。そんな事より少し休んだら、俺達もやるぞ」

「分かっていますよ。簡単に追いつかれるつもりありませんから」

勝気なルナマリアの物言いに苦笑しながら、しばらく二人で訓練風景を眺めていた。



ザクの残骸を回収してから数時間。

機体の解析が出来たとブリーフィングルームに呼び出されたタリアは映し出された

映像に表情を曇らせた。

ザクから取り出せた画像はごく僅かで、さらに状態は非常に悪くはつきりと見えないが、映っている物体が何かはどうにか分かる。

「……モビルスーツですね」

「ええ」

後ろに控えていたアレンが表情を硬くしながら呟いた。

映し出されているのは赤いモビルスーツ。

ビームライフルを構え、頭部から発せられている不気味な光はおそらくモノアイのものだろう。

「……この機体は」

「アレン、心当たりがあるの?」

「……ええ。もちろんこの映像で断定はできませんが」

ユニウス戦役メサイア攻防戦、自分とキラを同時に相手にしながら完全に押さえ込んだ男が乗っていたモビルスーツに酷似している。

確か機体の名前は——『サタナエル』

しかしサタナエルはシン達との戦いで撃破されたと聞いていたが。

「……生きていた、いや、断定するのは早すぎるか」

そもそもこの機体がサタナエルであると決まった訳ではないし、仮に同じ機体だとしてもパイロットも同一とは限らない。

「どちらにせよ、この機体を放置する訳にはいかないわ」

「しかし手がかりはありませんよ」

「上から提示されたポイントは後、何箇所かある。まずはそこを調べましょう」

上層部から渡されたデータは今までの輸送船の航路や通信を絶った時間などから行方不明になったと思われるポイントを予測したもの。

そのデータを元に今まで調査を行っていたのだが、タリアは今回それを使って襲撃犯を探索しようと提案したのだ。

今までの行動から考えても予測ポイントの近くで襲撃犯が活動している事は間違いない。

うまく発見できるかどうかは別として、手がかりが無い以上はやってみる価値はあるだろう。

「分かりました。ただ動かせる機体はエクリプスとインパルスだけです。他の機体は調整が間に合わないかと」

「……敵の規模も、詳細も掴めていない以上、こっちは無理するつもりはないわ」
すなわち退くべき時は退く、そういう事だろう。タリアの指示に頷いたアレンはブ

リーフィングルームを後にすると足早に格納庫に向かった。



そこは地球を取り巻く宇宙のゴミが集まっているデブリベルトと呼ばれる場所と比べても遜色ないほど多くの残骸が集まっている所だった。

戦艦や戦闘で破壊された小惑星などが集まり非常に見通しが悪く、特に理由がなければ普通の船が近づくことも無い。

そんな場所に一隻の戦艦が数機のモビルスーツに守られながら佇んでいた。

大きめの小惑星に隣接する形で停泊しているのはテタルトス軍プレイアース級戦艦『アリストアルコス』である。

その指揮官席に座り苛立たしげに指で手摺を叩き、音を立てているのはこの隊の指揮官であるヴィルフリート・クアドラード少佐であった。

「まだ終わらないのか？ たかだか施設の調査に何を手間取っている？」

「その、奥に進もうとすると隔壁に阻まれ、施設内からデータの収集しようとしてもプロテクトが堅く……」

「言い訳はいい、急がせろ！ こんな調査はさっさと終わらせて月に帰還する。地球

での作戦も迫っているんだぞ！」

「ハッ！」

ヴィルフリートは怒声にもブリッジにいる誰も特に反応することなく涼しい顔だ。

彼らにとってこれは日常茶飯事。

上官であるヴィルフリート・クアドラードの余裕の無い癩癩もいつもの事だからである。

「それで後、どのくらい掛かるんだ？」

「約90%は完了しているのですが、残りの隔壁がとても強固でして。もうしばらく掛かるかと」

「チッ」

彼らが現在行っているのは、とある破棄された施設の調査だった。

ヴィルフリートが苛つく気持ちも分からなくは無い。

ミラーージュ・コロイドによって隠匿されていたこの施設を発見する事も骨だったというのに、データ類は回収しているが今のところこちらにとって有益な成果はないのだ。

今日何度目かの怒声が飛ばうとした時、オペレーターが何かの異常に気が付いた。

「熱源、接近。この大きさ……戦艦クラス!？」

「何!？」

アリストアルコスの側面から徐々に接近してきているのは女神の名を冠する艦ミネルバ。

その姿を見たヴィルフリートはここで笑みを浮かべる。

「ミネルバとはな。ユニウス戦役の英雄とこんな場所で会えるとは、今回の任務も最後にようやくやりがいが出てきたな。調査を行っていた人員を戻せ！ ミネルスーツ隊、ミネルバを迎撃しろ!!」

「よろしいのですか？」

「ザフトの艦と戦う事に何か問題でもあるか？ しかも我々は任務中だ。この施設のすべてを調べ切った訳じゃない。任務の障害は排除するべきだろう？ さらにこのデータが奴等の手に渡るのを阻止する必要もあるんじゃないか？」

「り、了解！」

アリストアルコスのハッチが開き、モビルスーツが出撃する。

LF A-03 R1 『リゲル・リローデット』

テタルトス軍が戦力強化の為に立案された既存モビルスーツ強化計画『リローデット計画』に沿って改修を加えたもので外見上の変化は無いが通常のリゲルよりも格段に性能が向上、テタルトスの宇宙の主力を担っている機体である。

背中にフォージェルコンバットを装着した機体がモビルアーマー形態に変形するとミ

ネルバの来る方向に加速した。

「ジョンサン達はどうした？」

「調査隊と共に施設から帰還中です」

「帰還次第、奴等もミネルバ迎撃に向かわせろ！ アリスタルコス、エンジン始動！

対艦、対モビルスーツ戦闘用意!!」

「了解！」

獲物を見つけた獣の如くアリスタルコスが動き出す。

◇

当然の事ではあるが、敵艦がこちらを補足したと同じくミネルバでもアリスタルコスの存在を捉えていた。

「前方、テタルトス軍プレイアデス級とリゲルです!!」

「ここにプレイアデス級?!」

アーサーが驚くのも無理は無い。

赤いモビルスーツの探索を開始した途端であり、あまりにも都合が良すぎたからだ。まるでこちらがテタルトスと遭遇する事を意図していたかのようなタイミングで――

「いえ、考えるのは後ね。向こうが攻撃体勢をとっている以上、こちらも黙っている訳

にはいかないわ。アレンとルナマリアを出撃させて！ 対艦、対モビルスーツ戦闘用意！」

「了解!!」

事前に準備を整えていたエクリプスとインパルスの二機が出撃し、迫るリゲルを迎え撃つ為に前面に出る。

「ルナマリア、ミネルバから離れすぎるなよ」

「ええ、分かっています！」

アレンはビームライフル構え、接近してくる敵の機体を観察する。

リゲルはその高い汎用性もさる事ながら、最も脅威となるのがモビルアーマー形態の加速力と機動性である。

その速度を持つての連携はまさに脅威だ。

今回のように味方の数が少ない場合は特にである。

「なら囲まれる前に！」

背中のバロールを前に出し、散弾に切り替え一糸乱れぬ動きで突っ込んできたリゲルに向けて撃ち出した。

砲弾が途中で弾け、リゲルに直撃するが散弾では大したダメージも与えられず、僅かに体勢を崩しただけに終わってしまう。

だがそれこそがアレンの狙いであった。

「ルナマリアー！」

「了解！ 好きにはさせないわよ!!」

ブラストシルエツトを装備したインパルスが前に出るとメイン武装であるケルベロスを発射する。

野太い強力なビームがバランスを崩したりゲルを呑み込み消し飛ばすと、敵の隊列の乱れを見逃さず、エクリプスがビームライフルを撃ち込んでいく。

「そー！」

ライフルの一射がりゲルの右腕を吹き飛ばし、さらに背中ของフォーゲルコンバットを損傷させる。

その隙に肉薄し、ビームサーベルを横薙ぎに払った。

斬撃が容赦なくリゲルの腹部を抉りパイロットごと撃墜する。

それを見たりゲルが仲間の仇を討とうとロングビームサーベルを抜いて斬り込んで来る。

「迂闊だー！」

袈裟懸けに振るわれた一撃がエクリプスを捉える前にリゲルの胴体に蹴りを入れ、ビームライフルでコックピットを撃ち抜いた。

しかしそれでも彼らは揺るがない。

味方機の撃墜によって崩された連携を即座に建て直し、再び隊列を組んで襲い掛かってきた。

「錬度が高い。流星に簡単にはいかないか」

機体も改修されているのかアレンが知っているよりも性能が上、さらにパイロット達の錬度も高く侮れない。

エクリプスがライフルを構え直し再び攻勢に出ようとした時、敵艦後方から新たな機体が戦場へ現れた。

それはかつて最強の男が搭乗し、ユニウス戦役終盤においては量産され猛威を振るつたモビルスーツ。

LF A-05 R1 『シリウス・ラファールガ』

エースパイロット用の機体として量産されたシリウスを『リローデット計画』に沿って改修したもので各部スラスターを増設、操作性を考慮しながらも性能を高めた機体である。

これらの機体を任されているのが『テンペスターズ』と呼ばれる三人のエースパイロット達であり、癖はあるがいずれも優れた技量を持つ、歴戦の猛者である。

「へえ、あいつらやるじゃん」

「ええ、強敵です。計算通りに動いてくださいな」

「お前はいつも細かいんだよ、ヴィクトル」

「貴方が大雑把なだけですよ、ルーカス」

ルーカス・レイノルズは何時ものように軽口を叩き、ヴィクトル・シアーズが冷静に釘を刺す。

全く性格の違う二人は一見して仲が悪そうにも思えるがこう見えて連携も完璧である。

正反対であるからこそ、うまく噛み合ったという例だろう。

そんな癖の強い二人を纏めているのが『テンペスターズ』のリーダー格であるジョナサン・プロバートだった。

「二人ともその辺にしておけ。相手はザフトのエースだ、油断するな」

「はいよー！」

「分かっています」

ジョナサンが二人を窘めると、リゲルを屠っている二機のガンダムを鋭い視線で観察する。

「インパルスとエクリプスカ」

ユニウス戦役時、ミネルバと共に世界を転戦し、勇名をはせたザフトの機体である。

噂に違わぬといふべきか二機ともパイロットはエース級であり、一対一ではリゲルに勝ち目はあるまい。

それはリゲルの性能が劣っているという訳ではなく、それだけ相手が強敵という事であらう。

冷静に相手の力量を測り標的を定めたジョナサンはビームライフルを構えた。

「まずはエクリップスだ。奴を落とすぞ」

「了解!!」

戦場で中心になっているのは間違いなくエクリップスの方であり、奴を落とせば戦局は一気にこちら側に有利になる。

そう判断した三機のシリウスは連携を組みつつ、リゲルを容易く落としたエクリップスへと突撃する。

「シリウスの改修機か!？」

エクリップスは割り込んできたシリウスからのビーム攻撃をシールドで防御しながらビームライフルを撃ち返す。

しかし三機は外側に弾けるように飛び退きビームの射線から逃れ、別方向から攻撃を叩き込んでくる。

「チッ、速い！ しかも正確な射撃！」

しかも完璧な連携を取っているだけに厄介だった。

ここまでの連携をとった敵と戦うのは『ヤキン・ドゥーエ戦役』で交戦した『砂漠の虎』率いる部隊以来かもしれない。

「あの時も苦労させられたな」

思わず昔を思い出し苦笑しながら、エクリプスの周囲を旋回している敵機を慎重に見極める。

あれほどの連携を取るエース級のパイロット達だ。

まずはあの連携を崩すべきと判断したアレンはシリウスから放たれた槍のように鋭い三条のビームを回避しながら反撃を試みる。

しかしそれはジョナサン達にとってすでに予測済みの行動であった。

「ヴィクトル！」

「計算通りですわね！」

ビームから逃れる事を予測していたヴィクトルのハンドガンランチャーが火を噴き、エクリプスに襲い掛かった。

「ッ!？」

連射された砲弾がエクリプスの眼前に迫る。

アレンは咄嗟に機関砲を発射しながら砲弾を撃墜すると機体を捻り、残ったガンラン

チャーの砲撃を避け切った。

「何!？」

「落ちろ!」

そのままシリウスの方に向き直り、サーベラスを引き出してトリガーを引く。

だが流石というべきか、発射されたビーム砲の一撃は敵機を掠めるだけに留まり、致命傷には至らない。

「避けたか」

「このパイロットは……」

驚いていたのは攻撃を外したアレンではなく避けたはずのヴィクトルであった。

完璧なタイミングであったにも関わらず、掠める事もできず、さらに反撃まで加えてくるとは――

「どうやら計算以上のようですね」

「マジでやるじゃないかよ。ならこれでどうだ!!」

下方方向に回り込んでいたルーカスと反対側にいるヴィクトルが上下から挟み込む形でシリウスの腹部から強力な一撃を叩き込む。

シリウスの最大武装である複列位相エネルギー砲『ヒュドラ』だ。

地球軍のモビルスーツに搭載されている複列位相エネルギー砲『スキュラ』を改良し

たこの武装は核動力機専用開発されただけあって燃費の悪くバッテリー機と相性が悪いという欠点がある。

しかしその威力は折り紙付きである。

アレの直撃を受ければ戦艦の装甲だろうと、簡単に貫通する。

モビルスーツなど言わずもがなだ。

「この程度!」

エクリプスはシールドを投擲し下方から発射されたヒュドラにぶつけて射線を逸らすと、上方からの一撃を左に避けて逃れてみせる。

「避けた!」

「こいつ!」

「はああああ!!」

アレンはフットペダルを思いっきり踏み込み、ヴィクトルの方へ突進するとビームサーベルを抜き放つ。

光刃が綺麗な半円の軌跡を描き、シリウスのハンドガンランチャーを切り飛ばした。

「ぐっ」

「このまま——ッ!」

そのまますれ違い様にヴィクトル機を押し込もうとするが、回り込んでいたジョナサ

ンがサーベルを上段から振り下ろしてきた。

「()までやるとはな！」

「()！」

突き出した腕から展開したソリドウス・フルゴールビームシールドがビームサーベルを防御する。

このソリドウス・フルゴールビームシールドはバッテリー機でも使用可能な様に改良されているが、それでも長時間展開するのは厳しい。

だから極力使用を控えていたのだが、この三機の連携を前に使わされてしまった。

「ビームシールドを使わされるとは！」

「やる！　だがそれも()までだ！」

ジオナサンはもう片方の手で抜いたビームサーベルを下段から斬り上げてきた。

狙いはこちらの首。

メインカメラを潰す魂胆だろう。

「まだ！」

アレンは右足を蹴り上げ、サーベルを握る腕に直撃させ剣閃を僅かに逸らす。

光刃はそれ装甲に傷がついたものの、致命傷を避ける事に成功した。

「足掻くか！」

「舐めるな!!」

さらに連撃を加えてこようとするシリウスに切り離したエクリップスシルエットをぶつけて吹き飛ばすと通信機に向けて声を上げた。

「ミネルバ、ソードシルエット!! ルナマリア!!」

《了解!》

「了解!」

こちらの意図を理解したルナマリアは迷いなく動き出した。

長年一緒に戦ってきた信頼故に戸惑う事もない。

アレンは敵艦と激しい砲撃戦を繰り返すミネルバから射出されたシルエットグライ

ダーの方へと飛び出した。

「装備換装などさせるかよ、ヴィクトル!」

「言われなくとも」

シルエットグライダーを落とそうとヴィクトル達が動く。

だがそれを阻むように別方向からのミサイルが降り注いだ。

「これは!?!」

「インパルスか!?!」

リゲルにビームジャバリンを突き刺したインパルスがエクリップスを援護する為、ミサ

イルを発射したのだ。

「ルナマリア、ナイスだ！」

「当然です！」

アレンは運ばれてきたソードシルエットを背中に装着すると間を置かずエクスカリバーを振り下ろす。

叩きつけられた対艦刀の強烈な一撃がシリウスの構えたシールドの上から猛威を振るう。

「クッー！」

受けるには不利。

即座にそう判断したジョナサンは距離を取ろうとするが、エクリップスは逃がさないとばかりに離れない。

「調子に乗るな!!」

ジョナサンを援護すべく反対側からルーカスがビームサーベルで斬り込んでくる。

だがそれはアレンに言わせれば迂闊としか言いようがない失態だった。

「わざわざ突っ込んで来てくれるとはな」

エクリップスはビームブーメランを逆手で抜き、後ろに向けて振り払うとシリウスの右腕を斬り裂いた。

「なんだと!？」

予想外の反撃を受けたまらず後退するシリウスにそのままビームブーメランを投げつける。

「チツ！」

「ルーカス!？」

「くそ、大したことねえよ！ ていうかブーメランは初めから投げろつての!!」

投げつけられたブーメランをビーム砲で破壊したシリウスは味方の援護を受けつつ後退する。

「……………ここまでか」

ジョナサンは冷静に状況を把握する。

機体に残されたバッテリー残量から見ても、これ以上の戦闘は難しい。

そして撤退する理由がもう一つ。

戦艦同士の砲撃戦も大詰めを迎えていたからだ。

◇

ミネルバとアリスタルコス。群がるデブリを、砲撃を避け、いつの間にか正面から向

き合っていた二艦は互いに陽電子砲の発射体勢になっていた。

「撃てエエエエ!!」

「てエエエエエ!!」

奇しくも全く同じタイミングで発射された砲撃が正面からぶつかり合い、周囲に衝撃波を撒き散らした。

そのまま二艦は砲撃を撃ち合いながらすれ違う。

砲撃の振動に震えるブリッジでヴィルフリートは拳を握り締めながら、目の前の戦艦を睨みつける。

「このままで手こずるとは！ 急速反転！ 『テンペスターズ』は？」

「敵モビルスーツと交戦中です」

その報告に怒りに任せて手摺を殴りつけた。

「何をしている！ それでも我が軍のエースか!! もういい、俺の機体を——」

用意しろと続けようとしたヴィルフリートの声を遮るように、通信が入ってきた。

「少佐、本国から命令です。すぐに帰還せよと」

「何だと!? 誰からの命令だ？」

「ゲオルク・ヴェルンシュタイン閣下からの命令です」

告げられた名前にヴィルフリートは一瞬だけ目を見開くが、すぐに齒軋りしながら怒

りを堪え絞り出すような声で命令を下した。

「……退くぞ。全機に後退命令を出せ」

「り、了解」

アリストアルコスから撤退信号が発射され、それを見たりゲルとシリウスが敵を牽制しながら離脱を図る。

「この借りは必ず返すぞ、ミネルバ」

ヴィルフリートは雪辱を誓い、ミネルバの姿を目に焼き付けると屈辱を押さえ込み、正面を向いた。



テタルトス軍事ステーション 『イクシオン』

『イクシオン』と呼ばれる軍事ステーションは月防衛の為、テタルトス建国と同時に建造されたものである。

この軍事ステーションこそ、現在テタルトス防衛の中心になっていた。

本来であれば巨大戦艦『アポカリプス』がその中心であるのだが、そこには事情がある。

『アポカリプス』はユニウス戦役終盤において大きく傷つき、奪取された為に止むえず主砲を自らの手で破壊する事になった。

戦闘力が十分に発揮できず、さらには修復作業を進める必要があると、今は後方に下げられた状態になっている。

さらに色々な事情から最低限の修復のみに留められ、現在においても主砲の修復には至っていない。

それでも武の象徴としての存在感は揺らいではない。

だからこそ後方に下げられながらも、テタルトス軍の要として運用され続けているのだが、敵陣のアポカリプスに対する畏怖は確実に薄れていた。

巨体さ故に戦場へは赴けず、軍の司令部としての機能も万全ではない。

その為にここ『イクシオン』が司令部として運用されているのである。

そして今、『イクシオン』内部に設置された指令室に一人の青年が呼び出されていた。『……失礼します。お呼びでしょうか?』

司令室に入った青年の前に飛び込んだのは、淡々と作業を進める屈強な男であった。

「来たか」

部屋の中央に座る男こそ、現在テタルトスで最も力を持つ人物ゲオルク・ヴェルン

シユタインである。

政治家としては勿論、軍人としても優秀であり、彼を信奉する者達も多く存在しているほど。

その真意こそ図りかねているが、実力は呼び出された青年も認めていた。

「どのような御用件でしょうか、ヴェルンシユタイン司令」

「臨時司令の間違いだろうか？ 私はあくまでも代理にすぎんよ」

今までテタルトス軍を率いていた軍事最高司令、『宇宙の守護者』と呼ばれたエドガー・ブランドルはアポカリプスを奪取された責任を取らされ今は謹慎処分となっている。

その為に本来は政治家でありながらも、軍人経験を持っているゲオルク・ヴェルンシユタインに軍の臨時最高司令官の地位が与えられていた。

「……失礼しました」

「まあいい、本題に入ろう。まずお前は今日付けで中佐に昇進となる」

それは彼にとって予想外の言葉だったのか、驚きの表情を浮かべる。しかし次に飛び出した言葉は、彼をさらに驚愕させた。

「そしてこちらが重要だ。現在地球で激化しているヨーロッパ戦線の状況打開の為に新たな部隊を地球に降下させる。お前にはその作戦の指揮を執って貰いたい——ア

スラン・ザラ中佐

第3話 大地を焼く砲火

大きな傷が刻まれた岩、破壊された戦艦、そしてモビルスーツの残骸。漂う無残な骸はここで行われた戦いの激しさを否応にも感じさせる。

此処は『ユニウス戦役』最後の決戦、メサイア攻防戦と呼ばれた戦いが行われた宙域であった。

これほどの残骸の群れ。

普通であれば海賊やジャンク屋達が犇めいても不思議ではない。

しかしこの場所是不穏な噂が絶えず、海賊やジャンク屋ですら滅多に近づかない。

だがそこに一つの影が近づいていく。

その影こそミネルバが探していた赤いモビルスーツであった。

赤い機体は悠々と散乱する岩片を避け、その付近で一番大きい岩へ近づくと影に隠れているものが見えてくる。

それは全体的に浅黒く、地球軍のアークエンジェル級を彷彿させる形状を持っている

戦艦だった。

赤い機体が近づいてくるのを確認したのか戦艦の両舷に設置されたハッチが開放されると綺麗な姿勢を保ったまま格納庫に着艦した。

慌しく赤い機体に取り付いた整備士達を尻目にコックピットから出てきた男はパイロットスーツを着ておらず軍服のままだ。

そして最も特徴的だったのは顔を覆う黒い不気味な仮面をつけている事であろう。

「お帰りなさいませ、カーズ様」

恭しく頭を下げ、カーズと呼ばれた男を待つていたのは髪を腰まで伸ばした美しい容姿を持った少女であった。

表情は人形なのかと思えるほど、感情が感じられない。

しかしそれでも彼女なりに精一杯感情を出そうとしている事をカーズは良く知っていた。

「こちらは予定通りだ。私が出ていた間に何か動きがあったか、No. I?」

「はい。まだ確定情報ではありませんが、テタルトス軍に動きが見られるという報告が入ってきています」

No. Iと呼ばれた少女は無表情のまま、端末を差し出してくる。

その表情の無さは事情を知らない者からすれば不気味さすら覚えるだろう。

しかしこれはとある少女をモデルとして人工的に生み出された故の弊害なのだ。それを良く理解しているカースは特に気にした様子も見せず僅かに考え込むような仕草で顎に手を当てる。

「……なるほど。目的は地球か」

同盟、プラント、連合の拠点を攻め込むには戦力が少なすぎる。

今のところ宇宙の情勢はこう着状態。

迂闊な軍事行動を取るとは思えない。

となれば目標は戦闘が激化している地球しかないだろう。

「地球？ ヨーロッパ戦線ですか？」

「ああ。しかしこれは同盟も黙ってはいないだろうな」

ヨーロッパでの戦いを早期に終結させたいと思っている中立同盟は今回のテタルトスの動きを放置できない。

これ以上の戦場拡大と戦闘激化は同盟の一国であるスカンジナビア王国に被害が出る可能性が高まるからだ。

国家間の関係が冷え込んでおり、交渉による作戦の中断がさせられないとなれば武力衝突が起きる可能性が高くなる。

同盟に加入するのではと言われているプラントも出張ってくるかもしれない。

「どうなさいますか？」

「そうだな、我々も観戦させてもらおう。両軍の新型機のデータ収集もできる」
「分かりました」

しばらくして動き出した戦艦は宇宙の闇に溶け込むように姿を消した。

◇

テタルトス軍と遭遇戦を切り抜けたミネルバはこの近辺で彼らが何をしてきたのか調査する為、周囲の探索を行っていた。

そして発見したのは無骨な小惑星型の施設。

ミラーージュ・コロイドで姿を隠されていたのか、破壊された発生装置らしきものが岩壁に突き刺さっている。

その施設に先行したエクリップスとインパルスが破壊され大穴が空いた隔壁から内部に入ると、格納庫らしき場所が顔を見せた。

「ここから内部に侵入、調査を開始するぞ。何かあるか分からない、注意しろ」
「了解。まあ何か残っているとは思えませんが……」

確かに先に調査を行っていたらしいテタルトスが重要なものを残していくとは考え

づらい。だが――

「そう言うな。一応ここが何の施設かくらいは調べておかないとな。メイリン、こちらアレン。侵入経路を確保した。調査隊を寄こしてくれ。俺はルナマリアと先行する」

《了解！ 気を付けてください》

「ありがとう」

アレンは改めて格納庫周辺の安全を確認しコックピットから降りると銃のセーフティーを外して内部へ向かう。

念のため極力声は出さずルナマリアにハンドシグナルで合図を出しながら、壁伝いにゆつくりと進んでいく。

途中目に入ってくる部屋は荒れ放題。

誰かに荒らされたような形跡もあるが、破棄されて時間も経っているようで施設の中に人の気配は無い。

だが、機械部分には光は点灯しており、動力は生きているようだ。

一体どのような施設なのか？

そんな疑問を抱きながら、開放された隔壁の奥へと歩みを進め、奥の部屋までたどり着くと入り口の扉の右端に身を潜める。

反対側の位置に隠れたルナマリアと頷きあい銃を構えて全く同じタイミングで部屋

の中へと踏み込んだ。

踏み込んだ部屋は司令室のような場所だったらしく、多くのコンソールが並べられている。

だが、そこも今まで通ってきた場所と同じく人の気配も無く、荒れ放題だった。

「伏兵などは無いようだな」

「……フウ、どうやら杞憂だったみたいですね」

「杞憂で終わればそれに越したことはない。一応警戒だけはしておけ。まずは端末から調べるぞ」

「了解です」

手近な端末のスイッチを入れ、キーボードを素早く操作してデータの閲覧しようとするが、予想していた通り画面にはエラーが表示された。

「データは何も残っていない。やはりテタルトスが消していったか。ルナマリア、そつちはどうだ？」

「駄目ですね。こつちも何もありません」

「他に手がかりになりそうなものも無いし、後は調査隊に任せて——」

そこで一箇所だけ離れた位置に存在するコンソールに気がつく。

そのコンソールのキーボードを叩くと他の端末とは違う反応が返ってきた。

「ロックされている?」

ロックを解除しようとキーボードを叩くが、思った以上に強固な為になかなか外すことができない。

「チツ……キラなら簡単に外すんだろぅけどな」

「アレンはプログラムのかは苦手なんですか?」

「苦手という訳じゃないが、得意でもないな。キラの奴は戦闘中でもOSとか書き換えたりするけど、俺はあそこまで簡単にはできない」

ヤキン・ドゥー工戦役で何度か戦闘中にOSを書き換えた経験があるがやたらと時間が掛かる。

「へえ、アレンの意外な弱点ですね。そういうのも得意だと思ってました」

意外そうに笑うルナマリアにアレンも苦笑しながらしばらく時間を掛け、キーボードを叩き続けているとようやくロックを外すことができた。

「やっぱり時間が掛かったな。今度キラにプログラムの勉強でも教えてもらうか……この端末自体は施設内の隔壁制御を行うものらしい。殆どが開放されているが、一箇所だけまだ開いてない部分があるみたいだな」

「どこです?」

「さらに奥、俺達が侵入した格納庫の反対側に位置している部分だ」

表示されたデータを信用するのであれば、テタルトスもこの場所には踏み込んでいないようだ。

そこを調べればこの施設に関する何らかの手掛かりくらいは残されているかもしれない。

「トラップの類はないようだし、先に俺達で調べるぞ」

「了解！」

後続は他の場所の調査を終えていないようだし、こっちで先行して調べた方が効率がいいだろう。

ルナマリアを伴い、未調査区画へ向かう。

足を踏み入れたエリアはアレン達が初めに施設に侵入してきた所と同じく格納庫のような場所でも何かの部品のような物が散乱している。

しかしそれ以上に二人の目に付いたのが、中央に鎮座した物体だった。

「あれって、モビルスーツ？」

そこには開発途中で放棄されたのか、組み立て途中の機体がモビルスーツハンガーに設置されていた。

背中に見覚えのある翼に対艦刀らしき武装が見える。

「アレン、あれは……」

「ああ。あの機体があるって事は……」

アレンは機体の足元に設置された端末に近づき、データを呼び出すと予想通りのものが映し出される。

「まさか量産化まで進めていたとはな。周りに散乱している部品はこの機体のものか？」

「この施設って……」

「ああ。ここはかつて俺達が探していた施設——デュランダルの研究施設の一つだ」

プラント前議長ギルバート・デュランダル。

優れた政治手腕を持ち、ユニウス戦役において様々な逸話を残した人物である。

同時に黒い噂の絶えない秘密の多い人物でもあった。

その黒い噂は荒唐無稽な話からやたら真実味を持った話など幾多にわたるほど。

彼独自の研究施設や兵器工場を持ち、危険な研究も行っていたのではという疑惑が今なお残っている。

アレンたちもユニウス戦役終結後に彼の足跡を探る為、一時期はデュランダルの極秘施設探索の任務についていた時期もあった。

「どうやってテタルトスが此処を発見したのかは気になるが、とにかくミネルバに連

絡を入れるぞ」

「了解です」

ルナマリアがミネルバに連絡を入れている間、アレンは複雑な表情で開発途中で放棄されたモビルスーツを見上げる。

こんなものを用意していたとは、やはり彼は本気で自分の考えを実行するつもりでいたのだろう。

個人的に彼の主張は決して認めることはできないが、その強い思いだけは伝わってきた。

「アレン、連絡が取れました。すぐにこっちに人を寄越すそうです」

「ああ」

余計な感傷を捨て、見落しが無いか確認する為、アレンはもう一度端末に向かった。

◇

ミネルバとの戦いを終え、戦域から離れたテタルトス軍プレイヤーアデス級戦艦『アリスタルコス』。

そのブリーフィングルームに集められた『テンペスターズ』の面々はしかめっ面で

ヴィルフリートの小言に耳を傾けていた。

「聞いているのか!! 貴様らがさっさと連中を倒していれば、ミネルバを落とす事もできた筈だぞ! たった一機のモビルスーツに手こずるとはそれでも『テンペスターズ』と呼ばれたエースか!!」

よほどミネルバを落とし損ねた事が癪に障ったらしく、今日は一段とくどい。

ルーカスはうんざりしながら欠伸を噛み殺し、ヴィクトルは別の事を考えているのか密かに端末を弄っている。

ヴィルフリートの気持ちは分からなくもないが、これ以上は流石に時間の無駄だ。

話を聞き流す背後の二人に苦笑しつつ、ジョナサンはヴィルフリートの小言を遮るように口を挟んだ。

「少佐、申し訳ありませんでした。すべては私の采配ミスです。次こそは奴を仕留めて見せます」

謝罪するジョナサンにこれ以上は言えなくなってしまうのか、ヴィルフリートも思わず声を詰まらせた。

「ッ! くつ、いいだろう。次こそ奴らを仕留めてみせる!!」

「ハッ!」

苛立ちを隠さないままヴィルフリートがブリーフィングルームから出て行くとルー

カスが呆れたように肩を竦める。

「たく、毎回毎回よくも飽きないよなあ、少佐殿はさ」

「同感ですね。何時も余裕が無いというか」

二人のヴィルフリートに対する評価はすこぶる低いようで、こういつた事がある度に呆れていた。

「気持ちには分かるが、そう言つてやるな。奴は奴なりに必死なのさ。周囲から受けるプレッシャーに負けまいとしてな。優秀すぎる兄がいるという事もある意味不幸だな」
諫めるジョナサンに二人は顔を見合わせると納得したように頷いた。

「ああ。ファウスト・クアドラード大佐ですね」

ファウスト・クアドラード大佐。名の通りヴィルフリート・クアドラードの兄であり、若くして大佐の地位を与えられるほどの優れた才覚を持つ人物である。

「まあ、あの人と比べられたら、少佐があんな風になつても仕方ないかなあ」

「彼自身に才覚が無い訳ではないが。もう少し自分をコントロールできるようになれば、結果も違つてくると思うがな」

「言つても無駄でしょ。こつちの言うことなんて聞きませんよ。それよりもミネルバはどうなつた、ヴィクトル？」

端末を弄つていたヴィクトルが眼鏡を中指でクイと持ち上げる。

「予想通り、彼らは『ヴァルハラ』へ向かったようですね。補給の為か、もしくは施設にあった宝物でも発見したのか」

「へえ。あの位置からなら、ヴァルハラに到着する前に一度は接触できるチャンスもあるな」

早速受けた借りを返そうと話す二人。

ルーカスは腕をやられ、ヴィクトルの攻撃は悉く通用しなかった。

奴に借りを返したい気持ちは分かる。

ヴィルフリートを焚きつけるつもりなのだろうが、それをさせる訳にはいかなかった
「やめておけ」

「何故です?」

「次の作戦はすでに始まっているという事だ。焦る必要はない、すぐに雪辱する機会
は来るさ」

ジオナサンには次の作戦の概要がある程度読めていた。

再び女神の艦と相見える時も遠からず来る。

その時こそ借りを返すのだとジオナサンもまた静かに闘志を燃やした。

◇

スカンジナビア王国。

中立同盟に参加し北歐に存在するヨーロッパでも屈指の軍事力と外交力を持つ一国である。

有名な都市であるオスロやストックホルムは世界中から観光客で溢れ、賑わいを見せている。

だがそれは一昔前の事。

今は激化する『ヨーロッパ戦線』の影響で観光客などほぼ皆無であり、高ぶる緊張感だけが都市全体を包み込んでいた。

その『ヨーロッパ戦線』の最前線基地の一つ、警戒態勢が続くストックホルム基地の執務室。

そこでスカンジナビアの直面している事態に頭を抱えていたのはスカンジナビア第二皇女アイラ・アルムフェルトであった。

《大丈夫ですか、お姉さま？ 顔色が良くありませんよ》

「ありがとう、カガリ。私は大丈夫よ」

アイラは心配そうな顔でこちらを気遣ってくれたオーブ首長国代表であるカガリ・ユラ・アスハに微笑みかけた。

どうか『ヨーロッパ戦線』の決着を目指し、情報収集や外交など展開しているが、未だに解決の道筋は見えてこない。

軍事方面の総責任者であるアイラは連日、各国との外交や軍の高官との会議など休む暇も無く動き回っていた所為か、疲れた様子を隠しきれなかったらしい。

まあアイラとカガリの二人は昔から家族ぐるみで付き合ってきた。

いわば姉妹のような関係で、仮に隠していても見抜かれてしまうだろうが。

《無理せずにお休みになられてください》

「ありがとう。でも今は大変な時だからね。大丈夫、きちんと休んではいるから」

《……お姉さまのそういう所は信用できませんからね。今度セリスに言っておきます》

言うようになったカガリに苦笑しながら、話を逸らす事にした。

「それよりもオーブ方面はどうなの？」

《ええ。アメリカ大陸の方では連合の改革派と保守派の戦闘が続いていますが、こちらは今のところ問題は起きていません。もちろん楽観はできませんが》

「そう。やはり現状、切羽詰っているのはこちらの方ね」

ヨーロッパでの戦闘激化はスカンジナビアにも深刻な影響が出始めている。

国内の治安や経済に対する影響は勿論だが、それ以上にここ最近は隣国付近での戦闘

も珍しくなくなっていた。

何時スカンジナビアが巻き込まれてもおかしくない状況になっていたのである。

ヨーロッパでは東西南北に各勢力が別れ、軍事基地を建設して睨み合っている。

西にはザフトのジブラルタル基地、北の中立同盟ストックホルム基地。東に新たに造られたテタルトス軍のクラスノダール基地、そして地球軍保守派が建造したヨーロッパ最大の軍事要塞マケドニア要塞。

この四か所が牽制し合い、戦闘を繰り返しているのだ。

《やはり厄介なのはマケドニア要塞ですか？》

「ええ、あそこは規模も戦力も違う。あそこを落とすにしても背後にはスエズもある上、テタルトスも積極的に介入してきているから簡単にはいかないわ。地球軍保守派の動きを牽制したくても改革派はヨーロッパまでは手が回らないようだし」

《交渉は？》

「もちろん行おうとしているのだけど、中々ね。逆にこっちの手の内探ろうと、色々仕掛けてくるから。保守派のトップは油断できない人物のようね」

山積みの問題に頭が痛くなるが、悩んでいても状況は変わらない。

「現状はこのくらいね。詳しい事は後で報告を送るわ」

《はい。そういえば、あの部隊グラオ・イリスはどうです？》

「運用自体は順調だけど、問題も多いのよね」

一部の者たちからの冷遇による人員や機体の配備の不都合が現場から報告されている。

これを何とかしたくとも、色々と面倒なしがらみや立場がある為に、容易に口が出せない。

そもそもアイラは『グラオ・イーリス』という名前自体が気に入らなかった。

同盟、ザフトの混成部隊と言う事で様々な色を含む虹をイメージし、『イーリス』という名前を付けるつもりだった。

しかし部隊設立に反対する連中が新部隊に所属する者たちを見て、敵でも味方でもない、即ち黒でも白でもない灰色だという事で『グラオ・イーリス』という皮肉めいた名前を命名したのである。

「……それについても放置できないし、慎重に調整しないとね。とにかくそれも報告に上げておきます」

《分かりました。ではお姉さま、くれぐれも無理はしないでください》

「ええ」

モニターから映像が消えると、アイラは椅子の背もたれに体を預ける。

ドツと疲れが出て来た。

カガリの言う通り、気づかずに無理をしていたのかもしれない。

少し休もうかと目を閉じかけた時、端末から呼び出し音が鳴り響いた。

《失礼します、アイラ様！》

映し出された兵士の様子からただ事ではないと判断したアイラは椅子に座り直すと、冷静に問いたただす。

「何があつたの？」

《先日、戦闘で被害を受けた国家の救援活動に向かった部隊から緊急連絡が入りました！ 地球軍保守派と思われる部隊と交戦中だそうです!!》

ヨーロッパ全土で繰り広げられる戦闘によって戦う力を持たない国々は成す術なく、蹂躪される事も珍しくない。

その度に友好国であるスカンジナビアは補給物資の提供や地球軍の侵攻を阻止する為の救援要請を受けている。

先日も戦闘によって被害を受けた民間人に補給物資を届ける為、部隊を派遣していたのだが、地球軍はそれを見逃さなかつたらしい。

「……キラとラクスの二人に行つて貰いましょう。他の部隊も出撃準備が整い次第、出撃させて」

《了解！》

通信が切れると休むのはまだ先になるとため息をついたアイラは起こりうる不測の事態の対処の為、各所に連絡を取り始めた。

◇

燃え盛る大地と崩れ落ちた住居、そして振りかかる死から逃れようと走る人影。

そこはまさに死地と呼ぶに相応しい場所であった。

そんな降り注ぐ砲火から逃れる人々を守るように立ちはだかるモビルスーツは同盟軍主力機の一つであるSTA—S5『ブリュンヒルデ』。

『ブリュンヒルデ』は『ユニウス戦役』終盤で実戦投入され、多大な戦果を上げた機体であり、二年経った現在でも強化、改修を施され、現役で戦場に投入されている。

『タクティカルシステム』と呼ばれる同盟の装備換装システムを備え、高い汎用性と安定した性能故に敵の最新機とも互角以上に戦う事が出来き、現場からの信頼も厚い機体だった。

その『ブリュンヒルデ』に搭乗しているパイロットは目の前に迫る死の気配に、竦み上がりながら必死に自身を叱咤していた。

「くそ、こんなことなら昨日見た美人に声でも掛けときや良かった」

思わずそんなくだらない事を言わなければ叫び出しそうな程、彼は追い詰められていた。

救援活動に派遣された彼の所属する同盟軍の部隊は順調に任務をこなしていたのだが、地球軍の部隊から受けた奇襲によって既に味方の三分の一が撃墜されるという最悪の状況に陥っていた。

グローブの下は汗ばみ、緊張で心臓が張り裂けそうなほど脈打っている。

彼は新兵と言うには場数を踏み、古兵というには経験が足りない兵士であり、こういう不測の事態には慣れていなかった。

「ハア、ハア、ハア」

喉の渇きを覚え、飲み物の入ったボトルに手を伸ばした瞬間、前方から大きな振動と共に爆発音が鳴り響く。

「ッ!?! 来た!」

パイロットの目の前で高く舞う粉塵。

その中を突っ切るように地球軍のモビルスーツであるウインダムが顔を出した。

「こつちに来てんじやねえ!!」

背中の地上用機動戦闘装備『カドラリウス』のスラスターを噴射すると、ウインダムの放ったビームをシールドをかざして防ぎつつ、ビームライフルを撃ち返す。

放った一射が敵の腕を捉えて吹き飛ばし、好機とばかりにサーベルを構えて踏み込んだブリュンヒルデの一太刀がウインダムの腹部に食い込んだ。

「落ちやがれ！」

食い込んだ光刃を躊躇わずに振り抜くと、敵機はそのまま空中で爆散した。

幸いウインダムとブリュンヒルデでは大きな性能差がある。

この程度であれば、実戦経験の浅い彼にも何とか対処が可能だ。

それにどうやら他の味方機も奮戦しているようで、別の場所で戦っている様子が見える。

このまま味方の救援が来るまで持ちこたえる。

しかしそんな彼の考えを打ち砕くように次の敵機が迫ってきた。

「ちくしょう！」

二機のウインダムから発射されたビームを旋回して回避するが、回り込んだ敵のサーベルが背中、『カラドリウス』を掠めてしまう。

「ぐう！」

『カラドリウス』のウイングの一部が破損するが、飛行には問題ない。

「この野郎！」

機体を傷つけられた憤りを吐き出すように腰のビームガンでウインダムの頭部を撃

ち飛ばすとサーベルでコックピットを貫いた。

「ハア、ハア、何機いるんだよ！ それに新型と、『アイツら』も居ない——ッ!?
うあああああ!!」

持ち前の機動性を持ってどうにかウインダムの侵攻を防いでいたブリュンヒルデだったが、多勢に無勢。

突如乱入してきた敵機によって『カラドリウス』ごとスラスターを破壊されて地面に叩き落とされてしまった。

「ぐううー！ く、くそ……こ、ここまでか……」

目の前に押し寄せるウインダムを前に死を覚悟する。

しかし、そこに二機のモビルスーツが舞い降りた。

蒼い翼を翻し砲口から発射されたビームが正確に敵モビルスーツの急所を次々と射抜き、その隙に踏み込んだピンク色の装甲を持った機体がウインダムを切り刻む。

瞬きする一瞬の間の出来事、あれだけ居た敵があつさりと排除された。

「あ、あれは……フリー、ダム?」

A D T | X O I 『量産型フリーダム』

同盟の次世代機開発計画『アドヴェント計画』に沿って開発された量産型フリーダムの先行試作機でコードネームは『ヴァルトライテ』。

特徴であった蒼い翼の数は両翼合わせて6枚となっているが、それでも量産機としては破格の機動性を誇っている機体である。

そしてもう一機はADT-X02 『量産型ジャスティス』

同盟の次世代機開発計画『アドヴェント計画』に沿って開発された量産型ジャスティスの先行試作機でコードネームは『オルトリンデ』。

ヴァルトライテと同様に高性能ではあるが、こちらは比較的扱いやすく、タクティカルシステムとの相性も良い機体である。

「そのブリュンヒルデ、大丈夫ですか？ こちらは同盟軍、キラ・ヤマト一尉です、救援に来ました」

ようやく救援が来たのを実感したパイロットは思わず涙ぐむが、そこで伝えなければならぬ事を思い出す。

「……ヤ、ヤマト、一尉。申、し訳ありません。敵を押し、留められ、ませんでした」
「もう良い。喋らないで」

「い、いえ。それ、よりも、敵の新型と——」

「キラ！」

ブリュンヒルデのパイロットの言葉を聞き終える前に緊張感を伴ったラクスの声が響き渡る。

彼らの目の前にはエールストライカーを装備した一機のモビルスーツが佇んでいた。

GAT-06 『イリアス』

連合が開発した新型主力量産機であり、ウインダム以上の性能を求めて開発され、ストライカーパックを未装着の状態でもユニウス戦役で投入されたニューミレニアムシリーズを上回る性能を持っている。

「新型か」

イリアスを警戒しビームサーベルを構えるキラとラクス。

そんな二人に耳に気絶しかけているブリュンヒルデのパイロットの声が漏れ聞こえてきた。

「……………奴ら……………来る……………あの三……………悪、魔が……………」

その声が途切れると同時にフリーダムとジャスティスの前にかつての戦いを思い起こさせる三機のモビルスーツが姿を現した。

第4話 世界の胎動

中央アジアとヨーロッパに存在する巨大な湖。

カスピ海と呼ばれるその湖からほど近い場所に無骨ともいえる建造物が立ち並んでいた。

『バルカナバート基地』

カスピ海に面したこの基地はテタルトス軍が最初に地球に建造した軍事拠点である。滑走路には輸送機とモビルスーツが立ち並び、制服を着込んだ兵士達が緊張感を持ちながら、キビキビと動いている。

「お疲れさまです、中尉」

「ええ、お疲れさま」

ピリピリする空気を漂わす基地内で部下から声を掛けられた女性は笑顔であいさつを返した。

セレネ・デイノ中尉。

ユニウス戦役において戦果を上げたエースパイロットの一人である。

その顔立ちは美人と称しても何ら問題もないほど整っており、すれ違う兵士達も敬礼しながらどこか憧れるものを見るかのような視線を向けていた。

しかし肝心の彼女の表情は明るいとは言えず、どこか陰鬱さを漂わせていた。

「失礼します」

目的の場所であるブリーフィングルームに足を踏み入れるとそこには長い赤い髪を持つ穏やかな印象を抱かせる一人の青年が立っていた。

地球駐留軍指揮官ファウスト・クアドラード大佐。

建国以来発生し続けている紛争でも多大な戦果を上げ続け、若くして大佐の地位を与えられた天才。

そう呼ばれるにふさわしい才覚とカリスマを持ち合わせている、テタルトスでも有名な人物の一人である。

「クアドラード大佐、月から新たな命令書が届きました」

「わざわざすまないね、中尉」

「大佐、少しはお休みになられてください。東アジア共和国との会談や各部隊の指揮官との打ち合わせなどで殆どお休みになられていないでしょう?」

ファウストは連日行われた会談で休む暇もなく仕事に追われていた。

その理由がマスドライバーに関する事案だ。

テタルトス軍が地球に拠点を建設する際、幾つかの懸念事項について議論された事があった。

それが宇宙への帰還、すなわちマスドライバーに関する事だった。

「マスドライバーに関する件で手を抜く訳にはいかない。我々の生命線の一つだから」

「それはそうでしょうが」

テタルトスとマスドライバーを所有している勢力はほぼすべてが敵対関係。

降下したが最後宇宙に戻れる手段がなかった。

他勢力から奪取するという選択肢も無くは無かったが、地球での地力は相手が上であり現実的ではない。

そこで唯一交渉の余地があった東アジア共和国と協定を結び、使用料を支払いや他に幾つかの条件を飲む事でカオシユン基地のマスドライバーを利用する事になった。

それ故に東アジア共和国との外交は手の抜けない最重要事項の一つとなっているのだ。

「このくらい大した事はないさ。それよりも先程、東アジア共和国で懇意にしている人物から情報が上がってきた」

ファウストはセレネの方に端末の画面を向けた。

「地球軍の部隊の一部がユーラシア大陸に入った……改革派ですか？」

「ああ。その中には『GAT-X141』の姿も確認されている、間違いないだろう。目的はヨーロッパ戦線の情報収集といったところか」

激戦が繰り広げられているヨーロッパでは地球軍保守派が強い影響力を持っている。ユニウス戦役以降著しく弱体化した『ユーラシア連邦』もそれに呼応する形で動いている事やアメリカ大陸での戦いもある改革派はヨーロッパに対する行動を起こせないでいるのだ。

今回の件も状況打開の糸口を探る為の情報収集が目的で間違いあるまい。

「放置しておいても？」

テタルトスと協力関係にある筈の東アジア共和国を抜けて、地球軍改革派の機体がヨーロッパに向かっていている。

つまり手引きした人間がいるという事。

セレネはこちらに向かっていている部隊に関してだけでなく、協力者を指して放置しているのかと問うているのだ。

「今は構わないさ。東アジア共和国とはあくまでもマスドライバーに関する協定を結んだだけで、こちらと同盟関係になった訳ではない。それに月からの命令書の件もあ

る」

「本国は何と?」

地球生まれであり、ヤキン・ドゥーエ戦役で家族を失ったセレネにとってヨーロッパは気落ちさせるには十分すぎるものだ。

先程の表情も斥候に出た部隊からの報告を聞き、憂鬱な気分になっていたからである。

これ以上の戦場拡大は彼女の望むものではない。

しかしファウストから告げられた答えはそんな彼女の願いとは反するものであった。

「本国は『ヨーロッパ戦線』の現状を打開する為、新たに戦力を降下させると言っている」

「……降下作戦ですか?」

「ああ。我々地上部隊もそれを支援しろとの事だ。宇宙との連携が必要な共同作戦になる。セレネ、各部隊の指揮官を集めてくれ、これからブリーフィングを行う」

「了解いたしました」

敬礼しながら退室するセレネを見届けるとファウストはもう一度命令書に目を通す。

「……ヨーロッパ戦線状況打開の為の降下作戦か。物は言いようだな」

目を細めすべて見透かしているかのように呟くと、集まってくる指揮官達に説明する

作戦内容の概要をまとめ始めた。



戦闘によつて傷ついた友好国からの救助要請に応える形で出撃した同盟軍の部隊を援護する為、駆けつけた量産型フリーダムとジャステイスの二機。

地球軍のモビルスーツであるウインダムを次々と落としていく中、二機の前に地球軍の新たな機体が立ちふさがっていた。

「……フリーダムとジャステイス」

新型機である『イリアス』のコックピットに搭乗していたのは、少女と思われる小柄な人物であった。

顔は仮面のようなもので覆われ表情は見えないが、全身から溢れんばかりの憎悪はフリーダムとジャステイスに向けられている。

「……パイロットは……」

いや、それは今は関係ない事。

奴らは敵であり、憎悪の対象である。

ならばやる事は一つ。

排除するのみ。

イリアスはエールストライカーを吹かすと、援軍として現れた二機のガンダムに向かつて急降下する。

鋭い殺気を放ち、腰から抜いたビームサーベルを下段に構えジャスティスに斬り込んだ。

「速い!?!」

ラクスは咄嗟に後退しながら、半円形の軌跡を描くサーベルを回避すると至近距離からビームライフルを発射する。

この位置からでは外さないと確信する。

しかし次の瞬間、ラクスは驚愕してしまった。

「なっ、避けた!?!」

近距離にありながらイリアスは最小限の動きだけで発射されたビームを見事に回避して見せた。

驚異的な反応である。

「ならー!」

続けてトリガーを引き、ジャスティスはライフルを発射し続ける。

しかしすべて避けて避けてみせたイリアスはサーベルによる斬撃を急所に向けて繰り返し

てくる。

「くっ、このパイロットは?！」

動きが違う。

無論、イリアス自体の機体性能もあるのだろう。

だがそれ以前にこのパイロットの反応は尋常ではない。

「ラクス!」

イリアスと切り結ぶジャステイスを援護しようとキラも動くが、別方向から発射された砲撃がフリーダムに行く手を阻んだ。

「別の敵?！」

空中を動き回るフリーダムを狙う正確な射撃と回避を許さないとばかりに降り注ぐ幾重ものビーム。

「この数は?！」

普通のパイロットでは10回は撃ち落とされただろうビームすべて避けきつたキラは攻撃を仕掛けた相手の方に目を向ける。

そこにはかつて戦った覚えのある機体がこちらに狙いをつけていた。

G A T - X 1 3 3 『ヴォルケイノ・カラミティガンダム』

カラミティガンダムの発展強化型の機体であり、元々強力であった火力をさらに増強

し、フリーダム以上の圧倒的な砲撃能力を持っている。

蒼い翼を持つ機体をモニター越しに見つめながら、パイロットであるアルゼーネ・バルマは心底感心したように、笑みを浮かべた。

「今のをすべて避けるなんてやるじゃないの。流星はフリーダム、いえ、フリーダムモドキかしらね」

見るものが見れば分かる。

かつてのフリーダムに比べ外見の違いだけでなく、武装も少ない上に、機動性も低く感じられた。

おそらくは先行量産型といったところであろう。

となれば動力も核動力ではなく、バッテリーに違いない。

それでも先ほどの攻撃で撃墜されなかったのは、パイロット自身の高い技量によるもの。

相手にとって不足は無いという事だ。

「エース級って訳だね。面白い！」

アルゼーネは舌舐めずりしながら、空飛ぶ獲物を捉えるべく、素早く戦略を組み立てる。

「まずはご挨拶ってね！」

ヴォルケイノ・カラミティの胸部が光を発し、複列位相エネルギー砲『スキュラ』が火を噴いた。

「ッ!?!」

直撃すればただでは済まないビームをキラは機体を翻し紙一重で回避、即座にビームライフルを叩きこむ。

「そう来ると思ってたよ!」

それを読んでいたアルネーゼは口元を歪め、ホバーで高速移動しながらビームをやり過ぐすと、右手で握ったバズーカ砲『トーデスブロック』と肩から伸びる二連装高エネルギー長射程ビーム砲『シユラーク』を発射する。

「この程度なら!」

キラはフリーダムスの翼を広げると砲撃を潜り抜け、複雑な機動を取りながら、接近戦を仕掛けようと加速する。

だが、そこでコックピット内に甲高い警告音が鳴り響く。

攻撃を仕掛けようとしたフリーダムスの直上から別の機体が急降下してきた。

「上!?!」

上空から襲ってきた武装は鉄球。

こちらの背中に向けて正確に狙ってきている。

「まだー！」

空中で機体を捻り、無理やり仰向けになるとその勢いのままシールドを横に振るって鉄球を弾き飛ばす。

そしてすれ違う形で鳥を連想させるモビルアーマーが降下してきた。

G A T - X 3 7 2 『シュトウルム・レイダーガンダム』

レイダーガンダムの発展強化型の機体であり、レール砲以外目に見えた武装の増加は無いが、反面加速性、運動性などが大幅に強化されている。

「うわ、今のをやり過ぎすなんてどんな反応速度してるんだよ」

「馬鹿、何やってんだ！」

「す、すいません、姉御！」

怒鳴りつけるアルネーゼの声にシュトウルム・レイダーを操るジルベール・ブラジウスは乾いた笑みを浮かべて誤魔化した。

「でもあれって俺のせいじゃないでしょ。相手の方が化け物で」

「言い訳すんじゃないよ！ アンタ、アオイの坊や相手にもしてやられてただろ！」

「勘弁してくださいよ」

ふざけた言いあいしながらも、二機は攻撃の手を緩めない。

レイダーが持ち前の機動性をもってこちらを翻弄しながら、隙を見てカラミティの発

射したミサイルが降り注ぐ。

「この二機は……」

キラは絶妙なタイミングで攻撃を避けつつ、ビームライフルで牽制しながら、敵モビルスーツを観察する。

あれらの機体群がかつて『オーブ戦役』と呼ばれた戦いで投入された機動兵器の後継機であるとするならば——

その時、背後に回り込んでいた別の機体が姿を現した。

「やはりまだ!!」

キラは背中中の高インパルス砲『アータルII』を振り向きざまに発射する。

しかし、それが届く事は無く、敵に直撃する寸前で曲げられてしまった。

「ゲシュマイディッツヒパンツァー!?! やっぱりもう一機いたか!」

姿を見せた異形のモビルスーツが前面に展開した盾を横に、頭にかぶっていたバックパックを背後に移動させると機体の全貌が明らかになる。

GAT-X256 『ストリーム・フォビドウンガンダム』

フォビドウンガンダムの発展強化型の機体であり、ゲシュマイディッツヒパンツァーの増設による防御力の増加と機体自体の火力を強化された事でより変則的な攻撃を可能になっている。

「鋭い。こっちに気がついてたなんてね!!」

フォビドウンのパイロットであるカーラ・アルマディオはキラの技量に驚きつつも、楽しそうに笑みを浮かべる。

「こんな強敵と戦えるなんてね!」

接近戦武装である重鎌槍『ニーズヘグ・トライデント』を握り締めフリーダムに斬りかかった。

「はああ!!」

変則的な死神の鎌。

それを紙一重で捌きつつフリーダムは首を狙う鎌刃をビームサーベルで切り払う。

空中でぶつかり合う刃が火花を散らした。

「やるじゃん! でもまだまだだつてね!!」

カーラは器用に鎌を操り、直上に刃を持つてくるとそこからビーム刃が発生する。

「なっ!?!」

「串刺しになるといいよ!!」

「この!」

振り下ろされるビーム刃を機体を逸らして回避、フォビドウンを蹴り上げレールガン『タスラムII』を直撃させて引き離れた。

「ぐうううう!! こいつ!!」

フォビドウンを引き離したフリーダムに今度は背後からレイダーが口元のエネルギー砲『ツォーン』を発射してきた。

「隙ありつてね!」

「こいつら!」

ツォーンを防御しながら、キラは改めて三機の動きを冷静に観察する。

強い。

それは機体性能だけではなく、パイロットの技量も高水準である事も間違いない。

それ以上に今までの地球軍のモビルスーツとは明らかに動きが違っているのだ。

キラは知る由もないが、現在地球軍は（保守派、改革派問わず）ユニウス戦役で投入された『エクセリオンガンダム』に搭載されていた『W・S・システム』と呼ばれるシステムのデータを参考にした新型OSが配備され始めている。

これによって全体的な戦闘力の底上げが図られているのだ。

この三機に搭載されているOSも先行試作型として実戦配備された代物であり、他のモビルスーツとは一線を画した動きも可能とされているのである。

「キラ!? くっ!」

「……お前の相手は私だ」

ジャステイスは味方機を守りながらイリアス相手に攻防を繰り返している。

しかし強敵であるイリアスを相手にしながら、数の多い地球軍を押し留める事は難しく、残った機体も撃破されかかっていた。

「アンタ達、ジャステイスモドキはあつちに任せて、私達はこのままフリーダムモドキを仕留める！　しくじるんじゃないよ!!」

「当然!」

「分かつてますよ、姉御。俺もこれ以上叱られたくないですからね」

三機が同時にフリーダムに襲い掛かる。だがそこでキラもまた動き出した。

「なるほど、確かに強い。けど!」

背中のビーム砲をカラミティの進路上に叩き込むと、ホバーで加速していた敵機の動きが一瞬鈍る。

その瞬間を見逃さず懐に飛び込むとビームサーベルを一閃した。

「ハイ!!」

横薙ぎに振るわれた光刃がカラミティの武装を斬り裂くと、破壊されたミサイルポッドが爆発する。

「ぐっ!!?」

「ハイ!!」

「姉御!!」

ミサイルポッドの爆発の衝撃波によって体勢を崩されながらも反撃しようとする三機。

だが、陣形の乱れをキラは見逃さない。

「そう来ると思ってた!」

ビームライフルの一射によって誘導したレイダーに回り込み殴り、フォビドゥンに向けて叩きつけた。

「ぐあああ!!」

「ちよ、アンタ邪魔だっつーの!!」

「仕方ないだろうが! 全くうちのチームの女共は!」

ぶつかり合い動きを止めた敵機に向け、キラは『アータルII』で狙いをつける。

二機同時に仕留める絶好の機会。最も厄介なゲシユマイディツヒパンツァーが使えない好機。

これを見逃すほど甘くない。

「落ちろ!」

「させるか!」

そこで体勢を立て直したカラミティが放った『スキュラ』がフリーダムの攻勢を阻ん

だ。

強力なビームを宙返りしてやり過ぐすと空中で逆さまのままカラミティを狙撃する。

「もう体勢を立て直したのか!」

「そんなもの当たるか!!」

『アータルⅡ』の砲撃を地面を滑るようにして移動したカラミティを捉えず、大地を扶
る。

そこで一旦仕切り直しとばかりに体勢を立て直す三機。

「やっぱり反応が鈍いな」

キラは調整を行いながら、不満そうに呟いた。

全力で動かそうとすると、キラの反応に機体がついてこない。

この辺は量産機の限界といったところなのだろう。

それでもあの三機相手に立ち回れるのは、あの機体群との戦闘経験があるからだ。

強化、改良はされているようだが、特性そのものに変化はない。

これならばある程度昔の経験も役に立つ。

睨みあうフリーダムと三機のガンダム。

そこでカラミティのコックピットに通信が入ってきた。

「暗号通信!! 撤退しろって……チッ、カーラ、ジルベール、退くよ!」

「な、何ですか？　これからでしょ!!」

「詳しい話は後だ!」

カラミティのバズーカ砲から発射された砲弾が途中で弾けるとフリーダムと共に周囲一帯を煙幕が包み込んだ。

「煙幕!!　撤退する気か……」

油断なくシールドを構えながら、煙の中から飛び出すと三機が後退していく姿が見えた。

ジャステイスと交戦していたイリアスも同様に味方を援護しながら、下がっていく。

「………何でこのタイミングで」

戦況は物量で上回る敵の方が優勢だった。

地球軍最大の武器はやはり、その圧倒的な物量。

かつて中立同盟と地球軍の間で勃発した『オーブ戦役』で物量的に不利な筈の同盟軍が勝利する事ができたのは、洗練されたOSとパイロットの錬度の差があったからこそ。

にも関わらず何故退く必要があるのか？

「………退かざるえない事情があったって事か」

「キラ、大丈夫ですか？」

「うん。すぐに部隊を纏めて、僕達も撤退しよう。何かあるのかもしれない」
「分かりました」

キラは敵の撤退した方向を一瞥すると、ジャステイスと共に残存の味方機を纏める為に移動し始めた。

この後、ストックホルム基地に帰還したキラ達は地球軍が撤退した理由を——テタルトス軍が動くこうとしている事を知る事になる。



テタルトスが発見した施設の調査を終えたミネルバは補給と船体の補修の為、スカンジナビア軍事ステーション『ヴァルハラ』へ立ち寄っていた。

この『ヴァルハラ』は『ヤキン・ドゥーエ戦役』から稼働している軍事ステーションであり、幾度も戦火に巻き込まれながらもその役割を全うしている同盟軍の重要拠点の一つである。

「久しぶりの休暇だったわね」

「うん、最近忙しかったもんね」

独立部隊であるグラオ・イーリスは多忙である。

最近は地球と宇宙を行ったり来たりで、休暇も基地内というのが当たり前だった。

基地に居たら居たで、冷たい視線に晒される事もあつたしで、休まる時間というのは貴重なものなのだ。

満足しながらホーク姉妹が港を歩いていると接舷され、修復作業が行われているミネルバから施設で発見された機体が運び出されてゆくのが見えた。

「あれ、あの機体運び出したんだ」

「ホントだね」

「プラントの方に送るんですか？」

好きな服を買ったルナマリアとメイリンが上機嫌で両手で荷物を持ったアレンに振り返る。

「いや、あれはこのまま地球へ降ろすらしい。例の襲撃者がいる以上、プラントに運ぶのはリスクがあるし、今スカンジナビアにはクレウス博士もいるらしいから、その方が調査も早く進むという事だろう」

「なるほど」

「ローザ・クレウス博士……どんな人なんですか？ 私、会った事無いですけど」

「良くも悪くも研究者だな。マッドサイエンティストって訳じゃないが……」

ズッシリと重さが掛かる荷物を両手で抱えながら、アレンはため息をついた。

「いつも思うが、女の買い物ってのは……」

シミュレーター訓練を終え部屋に戻ろうとしていたアレンに待ち受けていたのはニコニコ笑うホーク姉妹だった。

「買い物に行きたいからついて来て欲しいと待ち構えていたらしい。」

要するに荷物持ちをして欲しいという訳だ。

正直、遠慮しなかったのだが、ニコニコ笑う二人の圧力には勝てず。

まあ荷物持ちくらいなら手伝わない事もないのだがこの量は勘弁して欲しいものだ。

ルナマリア、メイリンと三人でステーション内での買い物から戻ってくると、そこに見知った顔が格納庫に入ってくるのが見えた。

向こうもこちらに気がついたのか、そのまま歩み寄ってくる。

「久しぶりだな、イザーク」

「ああ、お前も元気そうだな」

荷物を持った右手の拳を突き出すと、向こうも手を上げて拳をコツンと軽くぶつけ合う。

イザーク・ジュール。

かつてはザフトのエリート部隊と言われたクルーゼ隊に所属していたパイロットでありアレンにとっても旧知の人物である。

出会った当初は色々と言ひもあつたが、今では仲の良い友人だ。もしかするとキラの次に仲が良いのはイザークかもしれない。

「アネットさんは元気ですか？」

ルナマリアが聞くと、イザークは少し照れくさそうにソツポを向いた。

「ふん、元氣過ぎるくらいだ。いつも小言ばかり言われている」

「仲が良いのは良い事だよ」

イザークはアークエンジェルの仲間の一人であり、共通の友人であるアネット・ブルーフィールドと半年ほど前に結婚したばかりだ。

さらにアネットは妊娠しているらしく、軍からは離れて家で養生しているらしい。

アネットは昔から面倒見のいい性格で、キラやアレンも何度も世話になった。

だから結婚すると聞いた時は自分の事のように嬉しかったのを覚えている。

生憎、丁度任務で結婚式に出席する事はできなかったが、送られてきた写真を見る限り、とても幸せそうだったのが印象的だった。

後日、時間を作りルナマリアやメイリン達を伴って会いに行つた時にはいつもと変わらず小言を言われてしまったのだが。

「で、今日はどうしたんだ？」

「ああ。グラデイス艦長に会いに来た」

イザークは今では中佐の階級を与えられ、部隊指揮も任されている。

その彼が直接会いにきたという事は重要な事態が発生したのかもしれない。

「何かあったのか？」

「そうだな。説明の手間も省けるから、お前も来い」

穏やかな雰囲気から真面目な表情に変わったイザークのただならぬ様子にアレンは頷く。

「分かった。あ、ついでにコレ一緒に持ってきてくれ」

「……ハア。お前は全く」

呆れた顔で荷物受け取ったイザークと一緒に荷物を二人の部屋に置き、制服に着替えたルナマリアを伴い艦長室まで足を運ぶとタリアとアーサーが待っていた。

「さて早速話を始めさせてもらおう。最近テタルトス軍の動きが活発になっていくという報告が入った。軍上層部ではそう遠くない内になんらかの大規模な軍事作戦を行う気ではないかと予想している」

「目的はどこか分かっているのですか？」

「現在、調査中だ。だが、近いうちに動く事は間違いない」

例の赤い機体についてもまだ調査中だというのに、ここで月が動くとは。

やはりあそこでテタルトスと遭遇したのは偶然という訳ではないらしい。

「……それで同盟はどう動かれるのですか?」

「勿論、状況によつては黙っている訳にはいかない。上層部による話し合いで決着がつかない場合は、最悪武力衝突もありうる」

最近の両国の関係を考えれば話し合いで解決するとはとても思えない。高い確率で戦闘になるだろう。

「そこで不測の事態に備え『グラオ・イリス』の方にも協力を要請させてもらった。アイラ王女にはすでに許可を貰っているし、カーライル議長の方からもすぐに連絡が入る筈だ。現在分かっている事はここに纏めてある。詳細が判明次第、再び連絡を入れさせてもらう」

イザークから差し出されたディスクを受け取るとタリアはアレン達の方へ向き直つた。

「分かりました。アレン、ルナマリア、アーサー、主要メンバーをブリーフィングルームに集めて」

「了解!!!」

全員が敬礼しながら、部屋から退室すると若干気まずそうにイザークが声を掛けてきた。

「……俺がわざわざ言う事ではないが、多分、次の戦いはアイツも出てくるぞ」

「だろっな」

——アイツとは誰か。

お互いに確認せずとも分かっている。イザークにとってのかつての仲間だ。複雑な心境にもなるのも無理はない。

「勘違いするな。正直に言えば戸惑いもあるが、それは『ヤキン・ドゥーエ戦役』でこちらに付くと決めた瞬間から覚悟していた事だ。それよりもアイツは多分お前を……どうするつもりだ？」

気遣うように視線を向けてくるイザークに感謝しながら笑みを浮かべる。

「その答えはずっと前から——いや、アイツと出会った時から決まっている」

ヘリオポリスで出会い、現在ここに至るまで互いに譲らず銃口を突き付けてきた。アイツもまた同じく、躊躇いはしないだろう。

だから——

「決着はつけるさ」

ずっと以前から決まっていた事実だけを口にする。アイザークの肩をポンと軽く叩き、笑みを浮かべて歩き出す。

再び二人が相見える瞬間が、刻一刻と近づいていた。

第5話 宿敵、再び

月の北極点近くに存在する『シルベスタークレーター』

主要都市や軍事拠点からも離れたこの場所には他勢力からその存在を隠すようにテタルトス軍の重要研究施設や兵器工廠が建設されていた。

俗に言う『シルベスター工廠』と呼ばれる場所である。

通常のモビルスーツや戦艦などは月を周回しているコロニー型の工廠でも開発されている。

だが、『シルベスター工廠』ではエース級の機体や『タキオンアーマー』といった特殊な装備の開発が行われていた。

無機質な機械音と人の声が響く中、兵器工廠に足を踏み入れたアスランは自身が依頼した開発中の機体の所へ向かっていった。

「お疲れ様です、少佐、いや、もう中佐でしたね。昇進おめでとうございます、ザラ中佐」

声を掛けてきた馴染みの技師に苦笑しながら肩を竦めた。

「ありがとうございます、技師長。そう言われてようやく実感が湧いてきましたよ。それで頼んでいた機体はどうですか？」

「現在急ピッチで作業中です。こちらへどうぞ」

案内されたモビルスーツハンガーにはメタリックグレーのモビルスーツの姿があった。

その造詣はアスランが今まで搭乗して来た機体の特徴を色濃く併せ持っている。

「機体自体の完成度は約70%程度。後は試験運用を行い、データを収集しつつ調整を行う必要があります」

「背中の大型スラスターの方は？」

「そちらは今しばらく時間が掛かるかと」

この機体の性能をフルに発揮するには背中に搭載される予定の大型スラスターユニットが必須。

一応アレなしでも機体自体は非常に高い水準を誇ってはいるが――

アスランは今なお開発が行われている機体を見上げる。

頭の中で技師の説明と現状を秤にかけると、すぐに判断を下した。

「技師長、次の作戦でこの機体を使います。大型スラスター開発を後回しにしても、

この機体を使えるように仕上げてください」

「いや、それは」

「お願いします」

アスランの無茶な要求に技師長はため息をつくど、仕方ないとばかりに頭を掻いた。
「完璧な調整は時間が無さ過ぎて無理です。それでも？」

「ええ」

自分がいかに無謀な事を頼んでいるかは百も承知。技師である彼らにとつても満足に仕上げられていない機体をパイロットに引き渡すことは屈辱であろう。

しかしそれでも次の戦いでは、必ずエース級との戦いとなる。

だからこそ、この機体が必要なのだ。

「わかりましたよ。できる限りやってみます」

「すいません。無理を言ってしまった」

「無茶だけはしないでくださいよ」

再び深いため息をついた技師長は「全員、集まってくれ！」と機体に取り付いていた技術者を集め、今後の方針を話し始める。

その場は任せ、アスランはもう一つの目的地に足を運ぶ事にした。

「……正直、あまり行きたくはないが」

工廠を出て、入り口に止めていた車に乗ると奥に存在する地下へと向かうエレベーターへ乗り込んだ。

設置してある端末に身分証を翳し、データを読み取るとエレベーターが音を立て、ゆっくり地下へと下がっていく。

そのまま一番下の区画まで降りる。

そこはさらに厳重な警備で守られている、白い建物が見えた。

此処こそが『シルベスタークレーター』最深部に存在する最重要研究施設『シルベスタークレーター』と呼ばれる場所である。

アスランは渋い表情を隠さず入り口で車を降りると、見張りをしている兵士達に身分証を見せた。

「アスラン・ザラ中佐だ。今日は作戦の概要説明に来た」

「ご苦労様です。どうぞ中へ」

ラボの中は病院のように白い壁が広がり、消毒液の臭いで満ちている。

「……相変わらず馴染めない場所だな」

この臭いはヤキン・ドゥーエ戦役で入院していた当時を思い出すのかどうも好きになれない。

極力意識しないように歩いていると、アスランを白衣を着た人物が待っていた。

「お待ちしておりました、ザラ中佐。こちらにどうぞ」

そのまま白衣を着た研究者風の男の後をついていく。

さらに奥へと向かうと病院のような白い壁から格納庫のような無骨な造りへと雰囲気が変わる。

内心、安堵しながら歩を進めっているとモビルスーツが格納できる程の大きな空間にたどり着く。

そこには新型機と思われるモビルスーツと共に研究者と何かしらの訓練を行っている若い兵士の姿が待っていた。

「……調子はどうなのです？」

『強化兵』は順調ですよ。数値も予定値を上回っていますし、いつでも実戦に投入できます」

「……分かりました。次の作戦の辞令が出ています。彼と話がしたいのですが？」

「おお、ついに実戦に！ 少々お待ちください」

連れられてきた若い兵士はアスランが初めて実戦に立った頃と同じくらいの年齢だった。

兵士から向けられる挑戦的な視線を受け止めながら、アスランは感情を見せずあくまでも事務的な口調で告げる。

「……ラデイス・グエラ少尉。ヴァルンシュタイン臨時司令からの命令だ。次の作戦ではお前にも出てもらうことになった」

「待ちくたびれましたよ。で、相手は誰ですか？」

「プライドか、それとも自分の技量に絶対の自信があるのか。」

「どこか懐かしさすら感じる物言いにかつての同僚を思い起こした。」

「中立同盟と……おそらくザフトもだ。お前の力を見せてもらう」

「ハッ！」

懐から端末を取り出し、研究者が持っていた端末へとデータを送信する。

「詳しい概要は今送ったデータに記載されている」

「……降下作戦の支援ですか」

「同盟やザフトは確実にこちらの降下作戦を妨害しようとしてくる筈だ。他の部隊も

それぞれ作戦に合わせて動いているが、我々は降下する部隊の防衛につく、準備を急げ」

「了解しました」

敬礼を返し、ラデイスは気合を漲らせ自分の機体へ歩いて行った。

「ではザラ中佐、我々も準備を進めておきますので」

「……お願ひします」

白衣の研究者達が背を向けて去って行くのを見送るとアスランは此処に来て初めて

感情を見せた。

「……『強化兵』か」

その声には明らかな嫌悪感が含まれている。

『強化兵』に関しては正直な話、納得はできていないが、それはそれ。

自分は与えられた任務をこなす為に最善を尽くすだけ。

アスランはすべての用件を済まし足早にラボを後にすると、こちらも作戦準備を進める為、港に車を走らせた。

すでにイクシオンでは地球降下を開始する為の部隊が集められている筈。

今回は地球駐留軍との連係が肝になる。

港へ入るとそこで目立つ金髪が目に入った。

腰まで伸ばされ背中を纏められた金色の髪を見た瞬間、アスランは思わず顔を顰める。

「お久しぶりですね、デイノ、いえ、ザラ中佐」

「……地球からお戻りでしたか、ランゲルト少佐」

ヴァルター・ランゲルト少佐。

アスランと互角に戦える技量と的確な指揮力、そして優れた洞察力を持った軍人である。

男の名前と女性としか思えないその容姿によって良くも悪くも目立った存在であり、アスランにとってはその容姿を含め苦手な部類に入る人物だった。

「ええ。今回の作戦の打ち合わせがあつたので。まあすぐに地球に降下する事になるのですが」

「ではこれから？」

「作戦に先駆け降下して、地上部隊の支援をする事になっています。まあ地上にはクアドラード大佐もいらつしやいますから、必要ないと思いますけどね」

確かにフアウスト・クアドラード大佐がいるのであれば、想定外の事態でもない限りは問題は起こらないだろう。

それに地上には義妹であるセレネもいる。

心配であることに変わりはないが、彼女ほどの技量があればエース級でも大丈夫な筈だ。

「義妹さんが心配ですか？」

「当たり前です」

即答したアスランが意外だったのかヴァルターは少しだけ驚いた表情を浮かべていたが、すぐに楽しそうな笑顔へと変わった。

「そうですね、それにしても、本名を名乗る事にしたのですね、ザラ中佐」

「……ええ」

アスランはヤキン・ドゥーエ戦役後からユニウス戦役終結まで事情があつてアレックス・デイノという偽名を使つていた。

そのまま偽名を使い続けても良いかとも思つていたが、事情があり再び本名を名乗ることにしたので。

「どういう心境の変化です？」

「……大した理由ではありませんよ」

「アスト・サガミですか」

凶星を突かれたアスランは思わず鋭い視線を目の前の人物に向ける。しかし

ヴァルターは涼しい顔で見つめ返してくるだけだ。

こちらを見透かしてくるヴァルターは苦手だ。

そう、何という事はない。

決着をつけるならアレックス・デイノではなく、アスラン・ザラとして。

すべては倒すべき宿敵と決着をつける為に自分を偽る事はしたくなかつただけの話。

「なるほど。貴方がそこまで拘る相手……興味が湧いてきましたよ、アスト・サガミに」

歩み去る前に見せたその笑みに一瞬だけ、彼女の顔がダブって見えた。

これがヴァルターを苦手とするもう一つの理由だ。

髪を伸ばしたその容姿はアスランの知る人物とよく似ているのである。

いや、ヴァルターの方が幼さはあるものの顔だけは瓜二つと言つて良いかもしれない。

関係のないヴァルターには悪いと思つてはいるが、昔の嫌な記憶を無理やり引きずりだされているようでどうしても気分が良くないのだ。

「……全く。昔の事とはいえ、いい加減にしないとな」

アスランは自分を戒めるように息を吐き出すと、頭を切り替え自分の乗るシャトルの方へ歩き出した。

それから数日後、中立同盟からの申し入れでテタルトスとの会談が行われた。

中立同盟はヨーロッパ戦線に関することを含めた多岐に渡る事象の話し合いと共にテタルトスの軍事作戦の自制を求めたのだが、結果は伴わず。

会談は物別れに終わり、ここから中立同盟とテタルトス月面連邦国は実質的に開戦状態へと陥る事になる。



中立同盟が擁する宇宙の拠点の一つである『アメノミハシラ』眼前では只ならぬ緊張感と共に防衛部隊の展開が始められていた。

会談が物別れに終わった事でテタルトスと同盟の緊張感は一気に高まった。

そこにテタルトスの部隊がこちらに向けて進軍しているという報告が入ってきたのである。

その為、アメノミハシラでは同盟軍の旗艦である『イザナギ』を中心に迎撃態勢を整えているという訳だ。

「艦に異常は？」

イザナギのブリッジに座る艦長セーフアス・オーデン准将は宙域図を見つめながらオペレーターに艦の状態確認を促すと、「異常なし」と返事が返ってくる。

イザナギはヤキン・ドゥーエ戦役後に建造されたイズモ級の戦艦であるが、最近改修を受けたばかりだ。

他のイズモ級とは一回り大きくなり、外見もよりアークエンジェル級に近いものと

なっているのが特徴だった。

セーフアスが艦の状況に気を配っているのも、これが新生イザナギの初陣となるからである。

「にしてもテタルトスの動きが早いな」

「それは事前に侵攻の準備を整えていたということでしょうか？」

「それはまだ分からないさ。前から大規模な作戦行動を取ることは予測されていたが、本当の目的がある可能性もある」

事前に得られた情報だけでは敵の思惑を看破することはできない。

しかし結構な数の敵部隊がこちらに向かっている以上、何かしら理由があるはず。

敵の行動が頭の隅で引っかかりながらも、これから行われる戦闘に関する戦略を練っていたセーフアスの元にオペレーターからの緊迫した声が飛び込んできた。

「哨戒機より、緊急連絡!! テタルトス軍と思われる部隊を発見、こちらに向かっているとの事です!!」

「各部隊の展開状況は？」

「約8割がた展開を完了しています。残りはザフトと合流する予定の部隊だけです！」

今回テタルトスの軍事行動に合わせ、ザフトから増援の部隊が派遣されると連絡

を受けていた。一部の部隊はザフトと合流し、側面から挟撃する事になっていたのだが、予想以上にテタルトスの動きが早かったようだ。

「……各機発進、予定通りに防衛行動を取れ。ザフトと合流する部隊は待機、作戦通りに行動せよ！ フラガ一佐、頼むぞ」

「了解！ ま、あれくらいであれば問題ないでしょう」

「油断は禁物だ。君なら大丈夫だろうがな」

モニターに映るムウ・ラ・フラガ一佐の軽い言葉に苦笑しながらも、セーフアスは彼に絶大な信頼を置いていた。

彼は『エンデュミオンの鷹』と呼ばれるほどのエースパイロットだ。その实力はこれまでの戦歴が物語っている。

戦場の指揮も彼に任せておけば、上手くやってくれる筈だ。

イザナギからムラサメ、ナガミツといったオーブの機体が出撃していく中で一際目を引く機体がカタパルトに運ばれる。

MVF-015A 『スオウ』

今まで実用化された可変機構モビルスーツの集大成として開発されたオーブ軍最新型主力量産機である。

火力こそナガミツに劣るが非常に機動性を持ち、洗練された可変機構とOSによって

パイロットの負担も軽減されている。

さらに今までの可変機と違いタクティカルシステムにも対応している汎用性も高い機体である。

「よし、ムウ・ラ・フラガ、『スオウ』出るぞ！」

スラスターを噴射しイザナギから出撃したムウは小気味よく機体を操りながら、口元を吊り上げた。

こうして戦闘機のような機体に乗っていると自分はモビルアーマー乗りだった頃の血が騒ぎ出す。

「調子がいいな」

ムウは子供のような笑顔でコンソールを軽く叩くと機体をくるりと旋回させ、思うがままに機体を振り回していく。

さらに調子を上げてフットペダルを踏み込もうとした時、他の機体からの通信が入ってくる。

「フラガ一佐、敵部隊、視認しました！」

「来たか。よし！ 全機、迎撃開始！ 遅れんなよ!!」

「了解!!」

飛行形態のスオウが先陣を切る形で、速度を上げると接敵したジンIIを翻弄しながら

ら、背後に回る。

「何!?!」

「新型機か?」

「遅いつての!」

後ろを取ったスオウは即座にモビルスーツ形態に変形する。

対艦バルカン砲で、隙を見せたジンIIを穴だらけのスクラップへと変え、さらに別の機体をビームライフルで撃ち落とした。

「よし、次だ! 全機、キチンと着いて来いよ!」

「了解!!」

スオウはまだ少数のみの配備となっているが、その機動性は現在存在する新型機の中でもトップクラスである。

そこに『エンデュミオンの鷹』と呼ばれたムウの力が加われば、旧型機ではスオウの動きを捉える事ができない。

両軍が激突し、火花を散らす。

そんな中、イザナギから新たな機体が出撃しようとしていた。

イザナギの両面のハッチが開くとアドヴァンスアーマーを纏ったブリュンヒルデと共に翼を持つ機体が姿を見せる。

「マユ、準備はいいですか?」

ブリュンヒルデのコックピットで金の長髪を纏めながら、レティシア・ルティエンスが隣の機体に入り込んだパイロットに声を掛けた。

ZGMF-X22A 『トワイライト・フリーダムガンダム』

ユニウス戦役時に開発された同盟軍のフラッグシップ機である。

メサイア攻防戦の際に大破に追い込まれた機体を修復、武装や機体の一部に細かい改修を加える事で、以前に比べて安定した性能を発揮できるようになっている。

トワイライトフリーダムの調整を行いながらマユ・アスカはモニターに映るレティシアに笑顔を返した。

「私は大丈夫。トワイライトフリーダムの調子も良好です」

二人は姉妹のように仲が良く、ユニウス戦役でも背中を預けて戦っていただけあって互いの腕前も良く知っている。

機体が問題ないのなら、余計な気遣いは必要ないだろう。

「では行きましょう」

「はいー」

カタパルトに運ばれたブリュンヒルデが射出されると、見惚れるほどの動きで戦場へと飛び出してゆく。

流石教官も務めているだけあってレティシアの動きはお手本のように美しい。

ブリュンヒルデの動きに目を見張りながらトワイライトフリーダムがカタパルトに設置されると、マユは慣れた手つきで操縦桿を握りしめた。

《アスカ二尉、もうすぐ増援部隊や『グラオ・イリス』も来る》

「……グラオ・イリス」

その名を聞いた途端、不謹慎ではあるがどこかうれしい気持ち湧き上がってくる。こちらに向かっている独立部隊にはマユにとつても大切な人が参加しているからだ。

《それまで頼むぞ！》

「了解！ マユ・アスカ、トワイライトフリーダム、行きます!!」

装甲が色付くと共にカタパルトに押し出され、蒼い翼を広げた機体が宇宙を駆ける。

「まずは！」

加速したフリーダムは一番戦闘の激しい場所へ駆けつけるとまずは正面にいる敵の排除に動く。

こちらに対して動きを見せる前に腰からビームサーベルを抜き、素早くフローレスダガーを切り捨てる。

「あの機体は!？」

「フリーダム!？」

「動きを止めるなんて迂闊です!」

斜めに裂かれたフローレスダガーを止まったりゲルにぶつけ、同時に撃破すると動き回りながらビームライフルで次々と標的を狙撃していく。

「ま、まさか『オーブの熾天使』か!？」

ユニウス戦役で猛威を振るった蒼き翼。

戦場を駆ける天使。

その姿は何時しかパイロットであるマユ・アスカの名と共に『オーブの熾天使』という異名となって各陣営に轟き渡っていた。

「迂闊に接近するな! 即座にやられるぞ!」

「くそ!」

ジンIIのパイロットは狙いをつけてトリガーを引く。

しかしフリーダムを捉えるどころか、その姿は掻き消えビームは空を切る。

「消えた!？」

完全にフリーダムを見失った次の瞬間、ジンIIのパイロットはコックピットごとライフルによって撃ち抜かれ、一瞬にして蒸発した。

「何イイ!!」

「ひ、怯むな! 連繫を——」

「させない!」

即座に敵部隊に肉薄したマユは両手に斬艦刀を握ると左右に振り抜く。

刃がテタルトス機の盾ごと切り裂き、さらに周囲の敵を背中の『ラジュール・ビーム
キヤノンII』で薙ぎ払った。

エース達の奮戦により、アメノミハシラに侵攻したテタルトス軍は一向に前に進む事
が出来ず、押し留められる。

しかし、これに慌てる者は誰もいない。

何故ならずすべてが予定通りなのだから。

◇

テタルトス軍によるアメノミハシラ侵攻の知らせはヴァルハラにも届いていた。

この事態を重く見た同盟上層部は防衛のための戦力を残しつつも、増援部隊をアメノ
ミハシラへの派遣する事を決定した。

準備を終えた部隊から出撃していく中、補給を終えたミネルバもアメノミハシラに向

けて進路を取っていた。

「未だあの赤いモビルスーツの調査も終わっていないというのに、次の任務とは」

「今回の場合は仕方がないわ。一応引き継ぎはしたし、こつちに集中しなさい、アーサー」

「分かってますよ」

前の任務を引きずるアーサーに気持ちの切り替えを促すとタリアは宙域図に映る先行部隊に目を移した。

部隊を率い先行しているのは同盟軍の象徴的な戦艦である『オーデイン』だ。

オーデインは白亜の船体を持つ、ヤキンドゥー工戦役から戦い続けてきた歴戦の戦艦である。

その姿をどこか懐かしい思いで見つめていたタリアにアーサーが声をかけた。

「艦長、全員揃いました」

「分かったわ」

ブリッジではアレンやルナマリア達が集まり戦場に到着するまでの間、現状の検証を行う事になっていた。

この前の遭遇戦も含め、全員がテタルトスの動きが気になっていたからだ。

「ここ」でテタルトスの軍事進攻ですか。会談が上手くいかなかった事は聞いています

けど」

宙域図を見ながら呟くアーサーにアレンが続くように口を挟んだ。

「侵攻自体は予想の範囲内ですけど、その割に思った程積極的に攻め込んでいないようにも見えますね」

「他に狙いがある?」

「その可能性もあります」

宙域図を見ながら黙っていたルナマリアが疑問を口にする。

「何でアメノミハシラに侵攻したんでしょうか? 今は地球の情勢の方が混乱してますよね?」

「確かに……」

現在、混乱しているのは地球であり、ヨーロッパである。

そこに戦力を降ろすと言うなら分からなくはないが——

そう考えたタリアはごく自然の回答へ辿りついた。

それはアレンも同じだったようで、その表情は明らかに険しくなっている。

「目的は地球ですか」

「間違いないわね。アメノミハシラ襲撃は陽動だわ。メイリン、オーデインに通信をつないで」

「はっ」

通信がつながりモニターに映し出されたオーディン艦長であるテレサ・アルミラ大佐にこちらで出した結論を伝えると同じことを考えていたのかすぐに頷いた。

《なるほど。それならテタルトスの不可解な動きも説明できる。しかし、アメノミハシラも放置できない上、連中の本命を特定しなければ——》

テタルトスの目的が地上に部隊を降下させる事であるならば、探索に時間を掛けている余裕はない。

さらにアメノミハシラの方の援護も必要となれば選択肢は一つだけ。

「時間がありません。我々が行きます」

《いいのか?》

「そのための独立部隊ですから」

《分かった。幾つかの部隊をミネルバに追従させよう。我々もザフトと合流した後、援護を向かわせるから無理はするな》

「了解しました」

先行していたオーディン率いる部隊から離れ、ミネルバは別方向へ進路を取った。

彼らの目的は戦力をヨーロッパに存在している基地に降下させる事。

ならば最も効率的な降下ポイントはだいたい予測出来る。

万が一、こちらの予測が外れアメノミハシラが本命だったとしても、追隨してくれた部隊と共に踵を返し襲撃している連中を背後から挟撃すれば良い。

「アレン、ルナマリア、出撃準備を。ブリッジ遮蔽、対艦、対モビルスーツ戦闘用意！」
「了解！」

エンジンを最大出力にしたミネルバはテタルトスの部隊が居るであろうポイントに向けて、進み始めた。



大気圏近くに集まる無数の戦艦。

それは地球降下の準備を整えたテタルトスの艦隊である。

彼らは当初の予定通り、地球降下作戦を開始しようとしていた。

この作戦の指揮を任されたアスランは母艦であるプレイアデス級戦艦『クレオストラトス』のブリッジで指示を飛ばしていた。

だが予期せぬトラブルに見舞われ、未だに作戦開始の合図が出せないでいた。

「地上部隊からの連絡は？」

「現在、予定外の遭遇戦が発生しており、作戦開始に支障が出ていると言ってきていま

す」

「遭遇戦？」

「はい。どうやら地球軍改革派らしいのですが」

作戦が予定通り進まない事自体は珍しくもないが、歓迎する事でもない。

あまり時間が経ちすぎれば、同盟もこちらの動きを嗅ぎつけるだろう。

「地上部隊に配置を急がせる。状況によっては、作戦を前倒しにすべきだとクアドロード大佐に——」

「待つてください！ 急速接近してくる熱源あり!! これは戦艦クラス……ミネルバです!!」

オペレーターへの報告に緊張が走るブリッジでアスランだけが冷静に状況を把握していた。

「来たか」

彼らがこの場に来ることも作戦誤差の範囲内である。

「防衛部隊、迎撃行動！ ミネルバを降下部隊に近づけるな!! クアドロード大佐に連絡、準備が整った機体から降下するように指示を出せ!!」

「り、了解」

その怒声にも似た指示によって戸惑っていたクルーたちも機敏に動き出す。

部下達に指示を出しつつアスランは格納庫に通信を繋いだ。

「状況は把握しているな？ 予定とは少し違うが出てもらう。『強化兵』の実力を見せてもらおうぞ、ラデイス・グエラ」

《了解です！》

データを信用するのであれば、彼が出れば並みのパイロットでは歯が立たないだろう。

しかし戦場に絶対は存在しないし、何が起こるかわからない実戦で実験データなど何の役にも立たない。

淀みない指の動きでさらに別の場所へ通信を繋ぐと端的に要件だけを伝える。

「エクイテスの用意を」

胸中に湧き上がるものは闘志。

迫る敵を駆逐すべく、アスランはシートから腰を浮かせた。

◇

エクリプスのビームライフルが火を噴き、ジンIIの胴体を貫通する。

出撃したアレンは何機目かの敵機を撃ち落とし眼下へと視線を向けた。 テタルト

スの艦隊が集結し、今にも地球に降下しようとしている姿が見える。

「アレン、すでに敵が降下準備を整えているようです」

装甲が黒と緑色に染まったインパルスがブラストシルエットの主武装高エネルギー長射程ビーム砲『ケルベロス』でミサイルを薙ぎ払いながら、隣に並んだ。

「でも未だに降下してはいないみたいですね」

「ああ、どんな理由かは知らないが、今のうちだ。降下しようとしている連中を搭載している戦艦の足を止めるぞ！」

「了解！」

ブラストシルエットのミサイルランチャーから発射されたミサイルの雨に紛れ、エクリプスが前に出た。

「邪魔するな！」

上方から振り下ろされたリゲルのロングビームサーベルを機体を横に逸らして回避、カウンター気味にビームサーベルを叩きつける。

サーベルの刃がリゲルの両腕ごと胴体を横薙ぎに切り裂く。

さらに近づいてくるフローレスダガーに奪ったロングビームサーベルを投げつけ、串刺しにした。

「チッ、時間を掛けている暇はないのに！」

エクリプスシルエットを吹かし敵を排除しつつ敵陣深くまで入り込むと、一番近くのプレイアデス級に向けてライフルの銃口を向けた。

「まずはエンジンを——ッ!？」

トリガーに指を置いた瞬間、嫌な感覚がアレンに駆けめぐった。

四方から刺すように発せられる殺気。

見る前に反応し、バランスなど考えずに機体を小刻みに動かすと、周囲全方位から発せられたビームを回避する。

目の端で捉えたのは小型の砲台。

自由自在に動き回る砲台から発せられたビームの雨が容赦なくエクリプスに襲い掛かる。

「ドラグーンか!？」

ドラグーンシステムとは量子通信によってコントロールされた小型砲台によってオールレンジ攻撃が可能な特殊兵装の事である。

第一世代型と呼ばれるものは特殊な空間認識力を必要とする武装であったが、ユニウス戦役以降の第二世代型は誰でも使用可能なように改良され、エネルギーの問題さえ解決すれば量産機でも搭載可能な武装である。

アレンはこちららを狙う小型砲台の動きを見極め、シールドで防御しながら距離を取る

と、ドラグーンを回収するモノアイの頭部を持つ敵機と睨みあった。

「新型か」

LFSA-01E 『アルタイル・ガイスト』

テタルトスの開発した強化兵用試作モビルスーツである。

関節部、スラストなど従来の機体に比べて格段に強化されており、強化兵の力を存分に発揮できるように設計されている。

アルタイルを操る『強化兵』ラデイス・グエラは仕留めがいのある獲物に舌舐めずりして笑みを浮かべた。

「上手く避けるじゃないか！ だがいつまでそんな偶然が続くと思うなよ！」

これまでは訓練ばかりで碌な相手が居なかったが、こいつなら相手にとって不足は無い。

アルタイルの肩から射出されたドラグーンユニット『エレメンタルII』が再びエクリプスの周囲を駆け回る。

アレンは咄嗟に回避運動を取るが幾つかのビームが僅かに装甲を掠め、浅い傷を刻んだ。

「この程度で！」

アレンはエレメンタルを振り切るように前方に加速すると空間を切り裂く何条もの

光線を置き去りにする。

「逃がしはしない！」

エレメンタルの攻撃範囲から離脱を図るエクリプスをアルマイルがビームライフルで狙撃してくる。

その射撃は一寸の狂いもなく、エクリプスのコックピットを狙ってきた。

「新型だけはあるのか。だが、舐めるな！」

ビームライフルの狙撃を宙返りして回避したエクリプスは速度を上げつつ、背後に向けてバロールの散弾を発射する。

細かい砲弾がエレメンタルの動きを阻害し、動きが鈍ったその間にビームライフルで叩き落とす。

「こいつ、調子に乗るなよ！」

ムキになって追撃してくるアルマイルをかわし、破壊された戦艦の残骸の陰に潜り込んだ。

「構っている暇など！」

アレンはコンソールを操作しモニターにプレイヤーアデス級の様子を映し出す。すると戦艦下部に設置されている降下ポッドが切り離されてゆく。

「チツ、結局降下を阻止する事ができなかったか！」

近くに浮遊する戦艦の破片を蹴り出し、その反対方向から飛び出すとアルマイルに向けてライフルを突きつける。

「何!?!」

破片に一瞬気を取られ、意表を突かれたアルマイルは反応が遅れた。

「ッのー!」

発射されたビームを通常のパイロットではあり得ない反応で後ろに下がる事で回避する、アルマイル。

しかしそれはアレンにとっては予測済みであり、敵機の体勢は十分に崩れていた。

「しまっ——」

「落ちろー!」

止めを刺そうと背中 của サーベラスをせり出した瞬間、エクリプスに向けて強力なビームが撃ち込まれた。

「なッ!?!」

咄嗟にシールドを構えながらビームを避けて後退するとアルマイルを守るように紅い装甲を持ったモビルスーツが降り立った。

それは形状は違うものの、アレンにも見覚えのある機体。

「……お前が来るとはな——アスラン・ザラ」

「その機体……アスト・サガミか」

青く輝く地球を背にここに宿敵は再会した。

第6話 運命の目覚め

宇宙を駆ける機影。

普通ではない速度で移動しているそれはテタルトス軍の戦艦であった。

テタルトス軍ヒアデス級戦艦『エウクレイデス』

テタルトスで運用されている戦艦でエターナルを参考にされた高速艦である。

この艦は量産されたヒアデス級の中でも初期型であり、何度か改修が行われ、側面にブースターユニットを取り付ける事で通常の戦艦とは比較にならない速度を出すことができるようになっていた。

「大佐、もうすぐ戦闘宙域に到着しますよ」

現在、エウクレイデスを任されているアンドリユー・バルトフェルド中佐が背後の上官に振り返る。

そこにはいつも以上に固い表情で佇む最強の男ユリウス・ヴァリス大佐が立っていた。

「了解した。バルトフェルド、エウクレイデスは援護に徹しろ。ミネルバとの砲撃戦は分が悪い」

この艦が戦場に向かっているのは、もちろん今回の降下作戦の援護に向かう為だ。

当初はアメノミハシラへ向かう予定だったのだが、降下する部隊がミネルバと交戦中だという緊急連絡を受け、急遽艦隊が集結しているポイントへ進路を変更したのである。

「分かりました。それより、どうかしました？ いつもよりも、やる気に満ちているというか、猛々しいというか、雰囲気が変わりますが？」

いつも通り飄々とした物言いでもバルトフェルドが軽口を叩く。

そう言われて初めて気が付いたのか、ユリウスは僅かに驚いた表情を浮かべると微妙に口元をつり上げた。

「大した事じゃない。ただ久々に『愚弟』に会う事になりそうだからな。それに——」

「それに？」

「いや、何でも無い。それより後は任せるぞ」

「了解です」

指示を出し終えたユリウスはブリッジを後にすると通路で待っていた金髪の青年を

連れ、格納庫に向かう。

「どうしました？」

ユリウスの様子が少しおかしい事に気が付いたのか、金髪の青年が訝しげに声を掛け
てくる。

「いや、お前は感じないか？ 何か見られているような……」

この宙域に近づいてからというもの、ユリウスはどこからか見られているような気配
がして仕方がなかった。

すると青年も覚えがあるのか表情を曇らせながら、眩いた。

「……少しだけ」

「そうか。一応、警戒だけはしておけ」

「分かりました」

格納庫に到着した二人は自分の機体に乗り込む。

「行くぞ、ついて来い——レイ」

「了解」

エウクレイデスのハッチが解放され、二機のモビルスーツが戦いの場へと足を踏み入
れた。



砲火を打ち合うミネルバとテタルトス艦隊。

そんなミネルバを守るようにムラサメやザクが敵モビルスーツを寄せ付けないように奮戦している。

敵艦から放たれた砲撃がミネルバを掠め、大きな振動が艦を揺らす中、タリアはモニターに映るテタルトス艦隊の動きに舌を巻いていた。

「流石テタルトス艦隊、上手いわね」

「ええ、タンホイザーの射線を取らせないよう配置しています」

昨今では陽電子砲を備えた戦艦というのも珍しくなくなり、艦隊戦においてもその対処は必須事項となっていた。

地球軍では陽電子砲を防御できる陽電子リフレクターを備えたモビルアーマーの配備は必須となっているし、ザフト、同盟軍でも射線を取らせないか、モビルスーツによる発射口の破壊の為の戦略が練られている。

どうやらそれはテタルトスでも同じようで、彼らはタンホイザーの射線には絶対に入ってこない。

こうなるとモビルスーツによる攻撃か、戦略でこちらの射線上に誘導するかしないか

いけない。

まずは近くのプレイヤーデス級を落とし、陣形を崩そうと策を練るタリアだったが、そこに予定を狂わせる報告が飛び込んできた。

「ツ!? 左方向より敵艦接近! これは……調査活動中に遭遇したプレイヤーデス級です!!」

「あの艦が……ミネルバ左へ回頭、インパルスとエクリプスは?」

「インパルスは敵部隊を抑えています。エクリプスは……敵新型機と交戦中!!」

「すぐに戻るように連絡を。もうすぐアメノミハシラから援軍が来る筈よ、それまで持ちこたえて!!」

「[[[了解!!]]」

艦首を戦域に突入してきた敵艦アリスタルコスの方へ向けるミネルバ。アリスタルコスのブリッジでその姿を確認したヴィルフリートはニヤリと笑みを浮かべた。

「[[[ここで以前の借りを返させてもらうぞ、ミネルバ! テンペスターズを出せ! 俺の機体も用意しろ!!」

「少佐自ら出撃なさるのですか?」

「当たり前だ! ザラも出ているというのに俺だけ黙って見てなど居られるものか!」

ヴィルフリートはいつも以上に余裕を感じられない。

アスランの名が出た事から見て、おそらく中佐に昇進した事を聞いて焦ったのだろうと推測を立てた副官はそれ以上何も言わなかった。

言っても無駄な事は重々承知していたからだ。

「後は任せただぞ」

「了解です」

呆れと哀れみが入り混じった副官の視線に気が付かないままヴィルフリートは嬉々として格納庫に向かう

そこでは自分の為に用意された新型機がヴィルフリートを待っていた。

LF A-06 『H・アガスティア』

テタルトス軍新型モビルスーツで汎用性に優れたオーソドックスな仕様となっている。

頭部のモノアイと突き出した一本角の高性能レーダーが搭載され情報収集能力に秀でており、指揮官機としても高水準で纏められた傑作機である。

ヴィルフリートはコックピットに乗り込むと素早く機体を立ち上げ、カタパルトまで運び込んだ。

「よしヴィルフリート・クアドラード出るぞ！」

ソードコンバットを装着したH・アガスティアが意気揚々とアリストアルコスを飛び出す。

先に出撃していたテンペスターズと合流すると目標の方へ視線を向けた。

「テンペスターズ、聞こえているな？ 以前の借りを返す時だ！ 今度こそしくじるなよ！」

「了解」

先行するH・アガスティアの後ろに付きながら、ルーカスとヴィクトルは思わずため息を漏らす。

「たく、ここで少佐殿のお守りとは。ブリッジでジツとしてりやあいいのにさ」

「今回ばかりは貴方に同感ですね」

「無駄口を叩くな、任務は任務だ。それよりもいつも以上に気を引き締めろ」

「了解」

ジョナサンに諫められた、二人は思考を切り替えると一糸乱れる動きで連係を組み始める。

この切り替えの早さと集中力、そして鍛え上げられた技量こそテンペスターズと呼ばれる三人の強さに繋がっていた。

それを改めて確認したジョナサンはどこか誇らしげに軽く微笑むとミネルバの方へ

向かっていたインパルスを最初の標的に定めH・アガスティアと共に攻撃を開始した。

「落ちろ、インパルス!!」

飛び出したヴィルフリートはビームライフルを連射し、インパルスの進路を塞ぐと対艦刀で斬りかかった。

「新型機?!」

ディファイアントビームジャベリンを抜き、サーベルを受け止めるインパルス。

その装備を見たヴィルフリートは鼻で笑った。

「ハッ！ 砲戦仕様の装備か！ 運がなかったな、距離を取らせはしないぜ!!」

ジャベリンの上から対艦刀を叩きつけ、さらにロングビームサーベルを下からすくい上げるように斬り上げる。

「俺は近接戦が最も得意なんだよ!!」

ロングビームサーベルの斬撃によって弾き飛ばされたインパルスに今度はテンペスタースが襲い掛かる。

「エクリプスの前にまずはこいつから仕留める!」

「了解!!」

「くっ、次から次へと全く!」

接近を許すまいとミサイルを発射して距離を取るインパルスを連係を取りながら、三

機のシリウスが刃を抜いた。

◇

奴との出会いは最悪だった。

今は無き崩壊したコロニー『ヘリオポリス』

遠くで聞こえてくる銃声と崩れ落ちる建造物、そして銃を突きつけながらもこちらを見つめる無感情な瞳。

それは人を殺す事に何の躊躇いも持たない死神の眼だった。

そんな僅かな邂逅の後に何度も戦場で殺し合ってきた、そして今また——

エクリプスは目の前に現れた紅いモビルスーツに一切のためらいを見せず、ビームライフルを撃ち込んだ。

しかしそれを紅い機体を操るアスランは鮮やかともいえる動きで避けて見せると、ライフルを撃ち返ししながら腰の実体剣を抜いて斬り込んでいく。

「はあああ！」

手加減なしで振り下ろされた一太刀がエクリプスのビームサーベルと激突すると稲

光を発しながら弾け合う。

それを一瞬呆けて見ていたラデイスは我に返ると思わず叫んだ。

「中佐！ 何故、出てこられたのですか？ ここは俺が!!」

この場を任されたのは自分だった筈だと、非難と憤慨を込める。

しかし、返ってきた言葉はラデイスの『強化兵』としてのプライドを傷つけるものだった。

「下がれ。こいつの相手はお前では無理だ。艦隊の防衛に回れ」

「なっ!?!」

無理だと？

『強化兵』である自分が？

『強化兵』とはテタルトスで考案されたパイロット能力向上プランの一環で誕生した兵士の事である。

薬物と実験型のナノマシンを投与する事で、パイロット能力を格段に向上させ、地球軍のブーステッドマン、エクステンデッドとは違い被験者にかかる負担も格段に軽減されている。

そして一度処理を行えば以降に特殊な処置は必要ない画期的なものだ。

ただし、未だ実験段階であり現在は一部の兵士にのみ処置されていた。

そしてラデイスもその一人。

元々上昇志向の強く、ナチュラルとしてコーディネイターに強い羨望を抱いていたラデイスにとって強くなるための手段、つまりは『強化兵処置』は願ったりだったのだ。

以前の脆弱な自分を捨て、強くなったはずなのに――

「俺がこんな奴に負けるか!!!」

アルタイルはライフルを構えてエクリップスに突撃する。

「ラデイス!?!」

「うおおおおお!!」

「チッ!」

アレンはスラスターを逆噴射させつつ機体を水平に寝かし、ライフルの射線から逃れ、そのままアルタイル目がけて散弾を発射する。

「な!?!」

アルタイルは咄嗟にシールドで防御するが、一瞬動きを止められてしまう。

その隙に放たれたエクリップスのビームがアルタイルのライフルを叩き落とした。

「ぐあああ!」

「下がれと言った筈だ! 実戦と訓練は違う!」

爆発の衝撃で吹き飛ばされたアルタイルを尻目に二機のガンダムが再び刃を片手に

向き合った。

「……2年ぶりだな、アスト・サガミ」

「アスラン・ザラ……か」

機体越しに睨みあう二人の視線には懐かしい者に出会った親愛の感情など欠片も込められてはいない。

あるのはただお互いに対する敵意のみ。

それも当然。

二人は決して相容れない宿敵なのだから。

「……」一応聞く。テタルトスは何を考えている？ 何故、今戦火を拡大させるような

真似を——」

「敵である貴様に答える義理はない」

「だろうな」

元々アレンとアスランの関係を考えれば問答など意味はなく、またお互いに質問に答えるとも思っていないかった。

「俺と貴様が戦場で出会った以上、やるべきことは一つだけだ」

ゆっくりと掲げられたライフルの銃口がエクリプスへと向けられる。

「……」で決着をつけてやる！」

発射された一撃を飛びのく事で回避したエクリップスだったが、それを逃がすまいと紅いガンダムが追撃する。

「逃げられるとも思っているのか!!」

「舐めるな!」

アレンはスラスターを吹かすと至近距離から銃口を構える紅いガンダムにビームサーベルで斬りつけた。

しかし流石というべきか、袈裟懸けに振るわれたサーベルは紅い機体に当たる前に実体剣で受け止められてしまう。

敵のガンダムを持つこの剣も同盟で普及しているビームコーティングが施された実体剣『ブルートガング』と同型のものなのだろう。

「くっ!?!」

アレンは力一杯押し返そうとするが、ビクともしない。

「核動力機か!」

現在、モビルスーツを動かす動力源はバッテリー動力と核動力の二種類が存在していた。

大部分の量産型機はバッテリー動力を用いている。

しかし一部エース用や特殊兵装を搭載された機体などは基本的にエネルギー切れを

起こさない核動力を使用しているのが常である。

おそらくはエクリップスと対峙しているこの紅いガンダムも核動力を使用しているのだろう。

エクリップスはユニウス戦役時に比べても性能は向上しているが、バッテリー動力を用いている事には変わりはなかった。

戦えない訳ではないが、限界があるバッテリー機とパワーダウンが起きない核動力機との差は無視できない要因の一つだ。

「今日こそは貴様をー」

「アスラン・ザラ!! お前はいつもそうやって!!」

オートクレールとビームサーベルが二機の間で火花を散らし交錯する。

力勝負では不利であると弁えていたアレンはまともに受け合わずに斬撃を受け流そうとする。

だが突如オートクレールの刀身から長々と伸びたビーム刃がエクリップスの肩部を抉り、吹き飛ばした。

「ぐっー」

「やはりその機体ではこの『レグルス・エクイテス』の相手はできないようだな」

LFSA-X006 『レグルス・エクイテスガンダム』

テタルトスの最新試作モビルスーツでノヴァエクイテスをさらに発展させ、高性能化させた機体。

武装も強化され、より洗練されており、アスランの特性に合わせ、近接戦闘用の武器が多数搭載されている。

未完成の機体ではあるが、そこらの機体とは性能からして違う為に扱うにしても相応の技量が求められる仕様となっている。

「かつては貴様に手も足も出なかつた！ あの時の無力感を決して忘れられない」

『ヤキン・ドゥーエ戦役』

あの戦いにおいて突如アスランの目の前に現れ立ちふさがった壁、それがアスト・サガミという存在だった。

奴が乗り込む『消滅の魔神』と呼ばれたGAT-X104『イレイズガンダム』の猛攻によつて無残に散つていく仲間達の姿。

それを阻止する事も出来ず、ただ見つめているしかなかつた無力な自分。だがもう昔の自分ではない。

望む未来と守るべきものの為に戦う力をすでに得ている。

「もう貴様の好きにはさせはしない！」

「相変わらず勝手な奴だ！ 前にも言った筈、それはお互い様だとな!!」

アレンの振るった何度めかの剣撃がエクイテスの目の前で止められ、凄まじい火花が飛び散った。

「はあああ!!」

「その程度で!」

エクイテスが力任せに実体剣『オートクレール』を振り抜き、鏢迫り合うビームサーベルごとエクリップスを弾き飛ばす。

「そっ!」

エクイテスは腹部に搭載された『アドラメレクⅡ』を発射した。

発射された凄まじい閃光が周囲を焼き尽くしながら、体勢を崩したエクリップスに迫る。

「チッ!!」

前方に突き出したアンチビームシールドが強力なビームを防ぐが、その威力に徐々に押し込まれてしまう。

「ぐうう!」

力一杯操縦桿を押し込み、シールドを前方に掲げ続ける。

だが、そこで不意にシールドに掛かっていた圧力が掻き消えた。

「何?」

見ればエクイテスから発射されたビームが徐々に光を失っていく。

「……出力が低下している？ 未完成機だから仕方がないが」

「機体の不具合か？ 何であれ！」

これは好機を逃す手はない。

隙を見て一気に相手の間合いに踏み込むとビームサーベルを一閃する。

「本来の性能が発揮できなくても!!」

三度、お互いの剣櫛が十字を描き交錯する。

「隙がない。腕を上げたな」

「何時までも貴様に遅れはとらない!!」

エクイテスは両手にオートクレールを握り、さらに両足からもビームサーベルを放出するとエクリップスに襲い掛かってきた。

「たく、また四本刃かよ！」

上下左右から振るわれる四刃をシールドで果敢に防いでいくが、段々と限界が近づいてくる。

特にオートクレールの一撃は重く威力がある為、後、数回斬撃を受ければシールドは破壊されてしまうだろう。

「ぐっ、シールドの限界か！」

アレンは振るわれる斬撃の衝撃に歯を食いしばりながらもモニターでテタルトス艦の様子を見る。

すでに戦艦下方に設置されていた降下ポッドの半分近くが切り離されていた。

「……………これ以上の戦闘は無意味か」

作戦を継続する意味がなくなつた以上、ここに留まつても意味はない。

即座に状況を見極めたアレンは限界寸前のシールドをエクイテスに投げつけると同時に反転、離脱を図つた。

しかしその瞬間——凄まじいまでの悪寒と久しぶりに味わう感覚が全身を駆け抜けた。

「なっ!? この状況で来るのか!」

咄嗟に振り返つたエクリップスの正面から凄まじい速度で突っ込んでくる機体があった。

青紫に輝く装甲は奴の乗る機体の特徴であり、忘れる筈も無い。

それは青紫に塗装されたシリウス・ラファールガだった。

アレンは飛び退くと同時にバロールを叩きこむが、それを難なく避けたシリウスは逆

にビームライフルを撃ち返してきた。

正確にこちらの急所を狙ってくる一撃をギリギリ避けながら反撃を狙ったエクリプスに今度は別方向から発射されたビームが襲いかかる。

「これは——まさか、レイ!？」

白く塗装されたH・アガスティアがエクリプスの背後からビームライフルを銃口を向けている。

前にはユリウスが搭乗したシリウスに背後にはH・アガスティア、さらにアスランのレグルス・エクイテスも近づいている。

「……囲まれたか」

危機的な状況の中、エクリプスのコックピットに通信が入ってきた。

「久しぶりだな、アスト」

「……ユリウス・ヴァリス」

モニターにはアレンにとって兄に等しい人物ユリウス・ヴァリスが映っていた。

まあアレンは兄などとは微塵も思っていないし、ユリウスもまたこちらにそんな感情など抱いてはいないだろうが。

「……貴方までここに。しかもレイを連れているとは」

「私がわざわざ言う事ではないが、戦場では常に予測不能な事が起るものだと言って

おけ」

「ご教授感謝するだけでも言えばいいのか？」

「思ってもいない事を口にするな。それよりもキラはどうした？」

「……ここにはいない」

「ほう、奴が来ていないのが意外だったな。今度こそ引導を渡してやろうと思つていたのだが」

その言葉にアレンは操縦桿を握りしめ、できるだけ感情的にならぬように問いただす。

「……まだキラを狙っているのか？」

「逆に聞いてやろう。お前は私がもうキラを憎んでいないと、本気で思っているのか？」

愚問。

その一言に尽きると吐き捨てた男を今度は憤りの感情をこめて睨みつける。

「貴方は！」

二人はある人物によって生み出された『カウンターコーディネイター』と呼ばれる存在。
その存在意義はユーレン・ヒビキが生み出した『最高のコーディネイター』を排除す

る事。

そういう意味で最強の男であるユリウス・ヴァリスこそ『カウンタースターコーディネーター』の体現者といっても過言ではない。

それは過去の発言でも確信している事だ。

「何を言ったところで結局、貴方もあの男と同じだ！」

憎悪の炎を燃やし消えていったあの男と——

「……お前に何を言ってもわかるまい。所詮、お前もキラと同類、私にとつては排除すべき対象である事に変わりはない！」

サーベルを抜き、踏み込んできたシリウスの一撃。

それを後退して避けたエクリプスにH・アガステイアがライフルから放出したロングビームサーベルで斬り込んでくる。

「レイ!? お前もテタルトスに!?!」

「今更貴方と話すべきことは無い、アレン、いや、アスト・サガミー！」

上段からの一撃をソリドウス・フルゴールビームシールド発生装置を展開して防いだアレンだが、続けて放たれる鋭い射撃がエクリプスの装甲を抉った。

「流石だな、レイ」

後退しながら二機から逃れようとするが、そこに追いかけてきたエクイテスが待ち構

えていた。

「逃がさん、アスト!!」

「しつこい!」

突き出されたオートクレールを防ぎながら、周辺の状況を含めて素早く確認する。

敵に上方と左右の三方向を抑えられてしまった上、味方も他の敵と交戦している姿が見える。

特にインパルスはあのシリウス三機と新型を同時に相手にしているらしく、ミネルバからも完全に引き離された状態に陥っている。

「このままでは不味いな。それに罅が明かない、仕方ないか」

ビームサーベルを構え、エクリプスの進路を塞ぐ三機を鋭く睨みながら損傷する覚悟を決め、突破を試みようとしたその時——蒼き翼を持った熾天使がそこに顕現する。

突如ミネルバに攻撃を仕掛けていた部隊が次々と撃ち抜かれ、成す術なく吹き飛ばされてゆく。

「何!?!」

火球に変えられたテタルトス機の爆発に誰もが目をそちらに向ける。

「まさか——」

「フリーダム!?!」

そう、そこに駆け付けていたのはマユの搭乗する同盟軍の象徴『トワイライトフリーダム』であった。

アスランは素早くコンソールを操作するとミネルバの周辺に他の同盟軍機やザフト機が増援として到着している姿がモニターに映し出される。

エクリプスの動きをけん制しながら、駆け付けてきた同盟の部隊に鋭い視線で睨みつける。

「あのフリーダム……マユ・アスカか」

「アスラン、援護に向かえ。ここは私とレイでやる」

「しかし——いえ、ここは頼みます」

余計な感情を押さえつけ反転したエクイテスはオートクレールを構えて斬艦刀を構えるフリーダムに向かって斬りかかった。

「君と戦うのは二度目か、マユ・アスカ！」

「あなたは……確かアスラン・ザラ、さん」

エクイテスは躊躇わずに二刀のオートクレールから発生したビーム刃をトワイライトフリーダムに叩きつけるが、敵機はクルリと背後に後転しながら回避する。

「今のをかわすか。だが！」

アスランはそのままオートクレールをフリーダムに突きつけたままトリガーを引く

と、切っ先から強力なビームが発射された。

「なっ!? アイギス!!」

迫るビームを前にフリーダムは背中から射出されたアイギスドラグーンが生み出したビームフィールドによって防御する。

その見事な動きと判断にアスランは素直に称賛の言葉を口にした。

「流石『オーブの熾天使』と呼ばれるだけはある。だが俺も君に手間取っている暇はない。俺の標的はアスト・サガミだけだ!」

「ッ!? アストさんには手は出させない!!」

激突するエクイテスとフリーダム。

その戦いを尻目に離れた場所ではエクリップスとシリウス・ラファールが切り結んでいた。

「ユリウス!!」

「私はアスランとは違って、そんなモビルスーツに乗っているお前を倒したいとは思わん。私の機体も万全なものとは言えんしな。だが、見逃す訳にもいかない、レイ!」

「了解」

「チツ」

ユリウスとは今の状態ではまともに戦えない。

かといってレイの新型も容易な相手ではないだろう。ならば――

「出し惜しみしても意味がないか」

アレンは意識を集中し、久々に『SEED』を発動した。

解放と共に視界がクリアに、そして感覚が鋭く変化する。

「いくぞー」

H・アガスティアが発射したライフルの一射。

エクリプスのコックピット目がけて正確に放たれた射撃を回避、肉薄してビームサー

ベルを叩きつける。

「何?！」

流石と言うべきかH・アガスティアはギリギリ機体を逸らし、装甲を滑るように光刃が抜ける。

しかしアレンはそこで動きを止めず敵機の体勢を崩れたところを見計らい殴りつけた。

「前にも言ったぞ、レイ。お前は慎重すぎるってな!!」

「ぐっ、動きが変わった!?!」

「『SEED』か。だが、それだけではな!」

即座に対応したシリウス・ラファールガのヒュドラがエクリプスシルエットの左翼を吹

き飛ばす。

「ぐっ、はあああ!!」

バランスを崩しながらもアレンはサーベラスを切り離し機関砲で破壊すると爆煙に紛れ、ビームサーベルを振るう。

爆煙の中から飛び出したサーベルの刃がシリウスのライフルを捉え、斬り飛ばした。

「浅い!？」

「やるな、アスト!」

「俺が居ることを忘れるな!」

H・アガスティアがロングビームサーベルともう片方の手でビームサーベルを構えて突撃してくる。

「落ちろ!」

「まだアアア!!」

二刀の刃が上方から同時に振り下ろされるが、アレンは両手のビームシールドを一瞬だけ展開、振り下ろされた光刃が一瞬だけ発生させたシールドによって外側に弾かれた。

同時にスラストスターを思いっきり噴射するとエクリプスは宙返りしながらH・アガスティアを蹴り飛ばす。

そのまま下方へ一気に加速、ミネルバと近くまできていたインパルスに対して声を上げた。

「ミネルバ、フォースシルエツト！ ルナマリア、道を開いてくれ!!」
増援が来たとはいえ、ミネルバからはずいぶん引き離されている。

しかも立ち塞がる敵は強敵であるユリウスとレイ。

この二人を突破するには時間がかかり、さらにミネルバに合流するまでに敵部隊の中を突き進まなくてはならないとなると、流石に厳しい。

となればこの状況から脱出できる可能性があるとするれば一つ。
地球だ。

これ以上、戦闘が長引くのは不味いと判断したアレンは自分の為に友軍やミネルバを危険にさらすことはできないと判断し、賭けに出たのだ。

「アレン!!」

「てめえ、待て!」

「うるさいわね、邪魔よ!」

ミネルバから射出されたシルエツトグライダーの道を開くためH・アガステイアを殴りつけたインパルスはケルペロスを放ち、強力なビーム砲によって道を開くとそのままエクリプスの方へ駆け付けてくる。

「艦長、全軍に撤退命令を出してください」

《アレン!? 貴方はどうするの?》

「この位置からでは合流できません。俺はこのまま地球に降ります。ルナマリア、お前も来い」

「了解!」

《待ちなさい、無茶だわ!》

「大丈夫、何とかします」

アレンは通信を切ると敵を振り切ったインパルスと合流し、二機のガンダムは青い地球へと吸い込まれていった。

◇

大気圏近くでテタルトスと同盟軍の戦闘が開始されていた頃、地上でもまた戦いの火ぶたが切つて落とされていた。

テタルトス軍は降下部隊を援護する為、ヨーロッパに存在する地球軍、同盟軍の軍事基地に対して攻撃を開始。

それを迎撃する為、各所で激しい戦いが繰り広げられていた。

それは『ストックホルム』基地でも同じ。

ここでも攻撃を仕掛けてきたテタルトス軍を迎撃する為、戦闘が開始されようとして

いた。

起動したモビルスーツが順番に歩き出し、格納庫から外へと出ると戦場へと向かっていく。

「こんな時に戦闘とかついて無いな」

「文句言つてもしょうがないよ」

戦闘準備に追われ、喧噪に包まれる基地内を一組の男女が走っていた。

黒髪の青年シン・アスカとその恋人であるセリス・ブラツスールの二人である。

かつてザフトに所属するパイロットであった二人だが数奇な運命を辿りながらも戦場を離れ、現在はセリスの故郷であるスカンジナビアに身を寄せていた。

そして久しぶりに知人が近くにいると聞き、ここストックホルム基地を訪れていたのだ。

「近々戦闘になるかもってキラさんからきたメールに書いてあったけど……セリス、体は大丈夫か？」

「何時までも病人扱いしないでよ、平気、平気！」

セリスはユニウス戦役で特殊な処置を施された為にしばらく入院を余儀なくされていた。

その後、経過も悪くないと判断され、後遺症治療とリハビリを行うようになった。

それでも一年前まで入退院を繰り返していたのだ。

現在も体の調子を考えながらトレーニングを積み、大分昔のように動けるようになってきてはいるが、シンにとって心配である事に変わりはない。

「ならないけど。きつくなったらすぐ言えよ」

「大丈夫だつてば。それよりキラさん達どこにいるのかな？」

「場所はこの辺の筈——あ、いた」

探し人であるキラ・ヤマトが端末を持った兵士と真剣に話し合いを行っている。

「ええ。ここはここそのままお願いします」

「了解しました」

話が終わったのを見計らい二人が近づくと、キラもシン達に気が付いたのか笑みを浮かべて駆けよつてきた。

「シン、セリス！」

「キラさん！」

「お久しぶりです！」

イザークとアネットの結婚式以来だから約半年ぶりの再会となる。

シン達との再会に嬉しそうに笑っていたキラだったが、すぐに顔を引き締め真剣な表情に変わった。

「久しぶりに会えて嬉しいけど、今はあまり時間がないんだ。すぐに出撃しないといけないからね」

「そこまで切羽詰まってるんですか？ 攻めてきているのはテタルトスですよ？

ヨーロッパの事は俺達も知っていますけど、なんで……」

「確かな事はまだ何も。ただ宇宙の方でも色々と動いている——」

「ヤマト一尉、機体の準備が整いました！」

「了解。シン、セリス、戦闘が終わった後でゆっくり話をしよう」

呼びにきた兵士と共にキラはヘルメットを被るとフリーダムに似た機体へと乗り込み出撃していった。

「……ここも戦場になる可能性がある。街も近くにあるっていうのに！」

固く握りしめるシンの拳をセリスの手が包み込んだ。

「シン、落ち着いて」

「分ってるよ。でも……」

スカンジナビアはセリスの故郷だ。

シンも短い間とはいえここで過ごしたからこそ、愛着のある場所もある。

そこが戦火に巻き込まれようとしている今——

シンは固い表情で出撃しようとしている力を持った巨人の姿を見上げた。

「ん、セリス・ブラッスールにシン・アスカか？」

「え？」

焦燥に駆られる二人に声を掛けてきたのは護衛に囲まれた白衣を着た女性ローザ・クレウス博士だった。

「クレウス博士!?!」

「どうしてここに？」

「ああ、またつまらんモビルスーツに関する研究の為にな。まあヤマトが基礎設計を行った機体は別だったが、いい加減本業に戻りたいところだ」

ローザは心底面倒そうに吐き捨てる。

彼女には気の毒かもしれないが、それはたぶん無理だ。

今まで開発された同盟の機体群やアドヴァンスアーマーの開発には彼女が深く関わっている。

その優秀さは誰もが知るところであり、仮にやめたいと言ったところでやめさせてはもらえないだろう。

特に今の世界状況であればなおの事である。

「それで、お前たちは何をしている？」

「それは……」

口ごもるシンにローザは何を察したように「なるほど。少し付き合え」とシン達を連れて別の場所へ歩き出した。

「あの、どこに行くんです?」

「いいからついて来い」

出撃準備の喧噪から離れ、格納庫のさらに奥へと進むと大きな扉が顔を出した。

「シン・アスカ、お前に聞きたい。お前は戦う気があるか?」

「え」

「先ほどは迷っていたんだろう、再び戦うかどうかを」

「それは……」

何というか、流石クレウス博士とでもいえば良いのか、こちらの葛藤はお見通しという事らしい。

「分かっているかもしれないが、この扉の先には今のお前が求める力がある。だがそれをどうするかを、いやどうしたいかを決めるのはお前自身だ。ただし一度選べば後戻りはできない」

「シン」

「……わかってる」

「私ができるのは選択肢を提示する事だけ。今ならまだ後方でセリスと二人穏やかな

生活を続けることもできる。どうする？」

確かにこの二年、腕をなまらせないようセリスのリハビリに付き合う形で訓練だけは続けていたが、戦場に立っていた頃と比べれば格段に穏やかな生活だった。

正直、未練がないと言えば嘘になる。

それでも昔に決めたのだ。

自分で選んだ道を進み続けると。

だから――

「俺は大丈夫です、ずっと前に決めてましたから。だからお願いします」

「……軍に復帰するという事でいいんだな？」

「はい」

「分かった」

ローザが隔壁を解放するとそこには見覚えのある機体が静かに自身を操る乗り手を待っていた。

「これってジェイルが乗っていた……」

「ああ。ZGMF-X42S『ステイニー』だ。正確に言えばその先行試作量産機だが、お前のリヴォルトステイニーのデータとプラントから提供されたデータから完成させた」

ZGMF-X42SR 『デステイニーガンダム・リファイン』

デュランダルの研究施設調査の際に発見した組み立て途中のものをプラントから提供されたデステイニーのデータを基に組み上げた機体である。

「これ、すぐに使えますか？」

「ああ。問題ない」

シンは心配そうに見つめるセリスの方に向くと安心させるように微笑む。

「俺、行ってくるよ。ここを、セリスの故郷を守って見せる」

「私も行きたいけど……」

「セリスはまだリハビリ中だろ。ここは俺に任せろって」

シンは用意してもらったパイロットスーツに着替えると、機体のコックピットに乗り込んだ。

『一応言っておくが、そいつはバッテリー機だ。武装もそれに合わせて変更してあるがあまり無茶はするなよ』

「はっ」

シンはローザの説明を聞きながらキーボードを素早く叩き、機体状態と武装を確認すると、格納庫の上方の隔壁が解放されていく。

そしてもう一度こちらを見つめるセリスの顔を見つめるとフットペダルを踏み込ん

だ。

「シン・アスカ、『デステイニー』行きます!!」

第7話 始まりの星空

進撃してきたテタルトス軍とストックホルム基地から出撃してきた同盟軍。

空を切り裂くビームの嵐を潜り抜け、戦場を駆けるのはフリーダムとジャステイスの二機である。

「予想より進軍が早い？」

「優秀な指揮官が居るのかもしれない。ラクスは押されている部隊の掩護を。僕が中央に行く」

「了解」

構えたビームライフルとビームサーベルを使い分け、空中を飛び回るフロレスダガーを容赦なく撃破してゆく。

量産型とはいえこの二機の性能は他の機体とは一線を画している。

それをエース級以上の技量を持つキラ達が操れば、容易くテタルトスの機体を押し留められるのも当然だった。

「舐めるなよ!!」

「月人は月に帰りやがれ!!」

ブリュンヒルデが連携、左右からフローレスダガーを挟み込み、ビームサーベルを突き刺した。

その隙を掩護する形でもう一機のブリュンヒルデがビームライフルで牽制する。

「近づけん!」

「同盟め!」

同盟軍がテタルトス軍を圧倒できる理由。

それが地球上での戦闘経験の差である。

テタルトスは月を本国としているが故に宇宙での戦闘が主となっていた。

その為、地球での戦闘経験が圧倒的に少ないのである。

「やはり重力下での戦闘は他勢力に比べてもやや劣るか、今後の課題か。それにしても大した腕前だな」

後方でH・アガスティアに搭乗し、指揮を執っていたファウストは攻勢を押しとどめる同盟のパイロット達の技量に感嘆の声を上げる。

「戦闘経験の差か。こちらの練度不足もあるのだろうか……そしてアレら別格だな」
空を舞う、二機のガンダム。

射撃戦、近接戦、どれをとっても隙は無く、アレを相手にするには部下たちでは荷が

重すぎる。

流石、同盟軍のエースとでもいふべきだろうか。

「そろそろ直接相手をさせてもらおう……ランゲルト少佐達の方の準備も良いようだ。デイノ中尉、こちらもあるぞ」

ファウストは背後に控えていたセレネの機体に目を向けた。

LFAR04R1 『バイアラン・イーグレット』

テタルトス軍がユニウス戦役時に開発した機体。

主に宇宙で使用されていたが、元々地球上での戦闘を考え提案されたものであった為に『リローデット計画』に沿って改修され地上用の機体として投入されたものである。

「大佐、マケドニア要塞の方は良いのですか？」

「構わない、その為に遭遇した地球軍改革派の機体を見逃したのだからな。彼らは今頃、マケドニア要塞からの客人の相手をしてくれていさ」

ファウストは偶然遭遇した地球軍の機体を巧みに誘導し、こちらの作戦開始に合わせて出撃したマケドニア要塞の部隊とぶつかった。

無論、予備の部隊は配置してあるが、それらを動かさずとも十分に時間は稼いでくれるだろう。

おかげでこちらは同盟の相手に集中できる。

「さて、行くぞ、中尉」

「……了解しました」

先行するH・アガスティア。

その背を見ながらセレネは戦場を駆ける蒼き翼を持った機体を見て、一瞬だけつらい表情を浮かべる。

「フリーダムに似た機体とあの動き……アレに乗っているのは……アレックスの、いえ、アスランの幼馴染」

キラ・ヤマトに間違いない。

一度だけ出会った穏やかそうな彼の顔が思い浮かぶ。

「……覚悟は、決めていたはず。私は彼を守る為に」

迷いを振り切るように最初の決意を口に乗せるとセレネは味方の脅威を排除すべく、H・アガスティアと共に二機のガンダムへと攻撃を開始した。

H・アガスティアがビームサーベルを振るうフリーダムに向けてビームライフルを連射する。

「新型!？」

フリーダムは脅威的な反応で後退しライフルの射線から逃れる。

そしてH・アガスティアに撃ち返すが、ファウストは潜り抜けるように回避して接近

戦を挑む。

「避ける!？」

「素晴らしい反応だ。射撃精度もずば抜けている。近接戦はどうかかな？」
ライフルから伸びたロングビームサーベルがフリーダム腹部を狙って切り払われるが、掲げたシールドによって受け止められてしまう。

それはファウストにとって想定通り。

左手で抜いたビームサーベルを上段から叩きつけた。

だが、それすらもフリーダムは機体を逸らしつつ、回避してみせた。

「思った以上の腕前だな。だが、そんなものではないだろう!」

再びH・アガスティアが繰り出す二刀の刃がフリーダムに襲い掛かった。

その斬撃は的確に、そして確実にフリーダムに急所を穿たと放たれる。

「このパイロットは!」

キラは振りぬかれたビームサーベルをかわしながら、相手の事を観察する。
強い。

巧みに二刀を操るその技量は間違いない本物だ。

だが、気になったのはそこではない。

この敵はどこかこちらを試しているかのような動きを見せている。

「そんなものではないだろう?」、「お前の実力すべてを見せてみる」、そんな感情が攻撃から伝わってくる。

「貴方は誰だ!」

「テタルトス地球駐留軍指揮官ファウスト・クアドラード大佐。君の敵だよ、『白い戦神』キラ・ヤマト!!」

キラは横薙ぎの一太刀を弾き、サーベルを上段から振り下ろす。

だが、サーベルの軌跡を見切っているのか機体を逸らすだけで回避してみせたH・アガスティアは至近距離からフリーダムに銃口を突きつけてきた。

「僕の事を」

「君やアスト・サガミは自分が有名人であるという事を良く認識した方が良い。特に『SEED思想』が浸透しているテタルトスでは尚更の事だ」

「ならば、先程から一体どういうつもりだ? 何を試している?」

「それに気がつくとは、流石と言っておこうか。なに、簡単な話だ。単純に君がどれほどの障害なのか確かめたかっただけだよ」

「何を言っている!?!」

「君が知る必要はない!」

ファウストが至近距離から発射した一撃をキラは神懸かり的な反応でシールドで弾

き飛ばす。

「貴方の事情に付き合っている暇なんてないんだ！」

フリーダムが発射したビーム砲がシールドによって受け止められ閃光が二機の動きが一瞬止まった。

「その隙は逃しません」

上方から回り込んだバイアランの両腕から発射されたビーム砲がフリーダムを襲う。

「新手!？」

フリーダムは空中でバク転、ビーム砲を回避すると攻撃してきた敵機にレール砲を発射し、牽制しながら後退する。

そこでキラは敵が見覚えのある機体である事に気がついた。

「あれはバイアランかー」

一度だけだが作戦中にアレの戦闘を見た事がある。

汎用性には欠けるが高い機動性と攻撃力は決して侮れない機体だった。

変化している形状と背中に背負ったウイングコンバットを見る限り、地上戦用に改修が施されているのだろう。

「いいタイミングだ、デイノ中尉」

「デイノ!?! まさか——」

機体を半回転させビーム砲を避けたキラは上を取った敵機にライフルを発射する。それをすり抜けるように回避したバイアランは両手にビームサーベルを握り、斬り込んできた。

袈裟懸け、そして逆袈裟。

繰り返された鋭い連撃をシールドで止めたキラはバイアランに向けて声を発した。

「セレネ、セレネ・デイノか!？」

「……キラ・ヤマトさん」

通信機から聞こえてきたのは、覚えのある声。

かつては一緒に戦った事もある少女の声だった。

「君まで地球に——」

キラは一瞬だけ辛そうに表情を曇めるとバイアランのサーベルごと突き放す。

二機は弾け飛び、互いに銃口を突きつける。

「……貴方と私は敵同士、話す事はない」

「セレネ！」

戦場で出会った以上は敵同士、それだけの事だとセレネは口にする。

「私も守る物がある以上、躊躇うつもりはありません！」

それは覚悟を持った兵士の言葉だった。

ならば、キラもまたそれに応えるのみ。

「それは……僕も一緒だ!! たとえ君がアレックスの大切な人だとしても!!」

トリガーを引こうとするキラだがそこに今度はH・アガスティアが割り込んでくる。

「させないよ」

「くっ」

H・アガスティアとバイアラン。

二人のエース級を相手にキラはサーベルを構え、前方へと突撃した。

三機が常人が入り込めない空中戦を繰り広げていた頃、ジャスティスで敵の侵攻を防いでいたラクスの前にも新たな敵が立ちふさがっていた。

撃ち掛けられる砲撃。

気を抜けば確実に落とされてしまうだろう精密射撃を紙一重のタイミングで回避するジャスティス。

相對していたのはロングビームライフルを携えたヴァルターのシリウス・ラファールが
だった。

「ジャスティス……私もできればフリーダムモドキの相手をしたかったです、それは
今度にしませうか」

ヴァルターは金髪の髪をかき上げ、スコープを引っ張り出すとピンク色のモビルスー

ツに狙いをつける。

その姿はまさに獲物を狙う一流のスナイパー。

ヴァルターはターゲットをスコープで捉えるとトリガーを引き、銃口からビームが発射される。

その射撃は正確無比。

接近戦を得意とするジャスティスにとつて最も相性の悪い相手である事を意味していた。

「上手い……ここまで接近を許さないとは」

ビームが装甲ギリギリの位置を掠め、その度に冷や汗がラクスの背中を伝ってゆく。

敵の動きを読み自分の得意とする攻撃範囲に誘導する技術や接近戦のタイミングを取らせない機体の捌き方。

シリウスのパイロットはスナイパーとしての戦い方と欠点もすべて熟知した上で、最大の効果が発揮できるように思考しながら動いている。

これだけの腕前、並みのパイロットではない事は分かる。

だが、それ以上に強烈な違和感がラクスを困惑させていた。

「……………これは一体……………」

ラクスの良く知る人物に似ているのだ。

機体の動きも、動く敵を捉える非常に高い空間認識力も。

「戦いの最中に考え事とは余裕ですね」

「その声!?!」

ビームをシールドで防ぎながらラクスは耳に入ってくる敵機からの声に困惑を深めていく。

「誰か、貴方の知っている人物と似ていましたか？ 生憎、別人ですよ!!」

「ツ!?!」

ビームを紙一重でやり過ごしたジャステイスはグレネードランチャーを敵機に直撃する前に炸裂させ、発生した爆煙の中に飛び込む。

そして背中中の装備『カラドリウス』を切り離し、シリウスに向けて射出した。

「奇策をー!」

煙を斬り裂く様に飛び出してきた『カラドリウス』。

ヴァルターは驚く事も無くヒュドラでカラドリウスを消し飛ばすと、予想通りに飛び出してきたジャステイスを両手で構えたビームサーベルで迎え撃つ。

ジャステイスの腕からせり出したブルートガンとシリウスの二刀のビームサーベルが交錯し、激突する。

「流石ですね」

ヴァルターは目の前の機体に素直な称賛を送った。

距離を取り常に攻撃範囲に入れないよう警戒していたにも関わらず、こうして接近戦を挑んできたジャステイスのパイロットは間違いなく一流の技量を持っている。

大戦を潜り抜けてきた英雄の力は伊達ではないという事なのだろう。

「貴方は——」

「私の事などどうでもいいでしょう。それにそんな事を気にしている暇もないと思いますが」

罅迫合う二機を尻目に伏兵として控えていたテタルトスの部隊が防衛部隊の背後を突く形で奇襲を仕掛けようとしていた。

「まだ部隊を控えさせていた？」

「行かせませんよ。貴方はここで私とモビルスーツの教練ですから！」

シリウスの両肩に設置されたビーム砲が火を噴き、ジャステイスの肩部を挟るとビームサーベルを振り抜いて突き飛ばす。

「くっ、何故ストックホルム基地に向かわずに……」

「さあ、何故でしょうかね！」

テタルトス軍による正面と背後からの挟撃。

控えていた部隊を率いていたのはジンIIに似た雰囲気を持つ機体だった。

LF A—O I R E 『ジンII・アクティヴ』

『リローデット計画』に沿って改修されたジンIIをさらに強化した機体。

関節部の強化とメインスラスターをさらに高出力化した事で、新型機以上の性能を持つが、その分操作性はさらにピーキーとなっている。

コックピットに座るリベルト・ミエルス大尉は事前に知らされていた予想通りの戦況に、呆れ半分、感心半分で呟いた。

「おおよそ予定通りとはな。同盟の不甲斐なさか、大佐がそれだけ優れているのか。まあ、どちらにせよ、私は任務を完遂するだけだ」

ジンII・アクティヴは先陣を切る形で加速すると、ビームサーベル片手にブリュンヒルデの背後から襲撃する。

反応する間も与えず接近したジンII・アクティヴはブリュンヒルデの胴体を貫く。

「な、新型?！」

「反応が遅い!！」

近くにいた敵諸共袈裟懸けに切って捨てた。

リベルト隊の強襲によって混乱した同盟軍の機体は次々と撃墜、及び戦闘不能へと追い込まれていく。

援護に向かいたくともフリーダム、ジャスティス含め余裕のある機体はいない。

キラと攻防を繰り広げるセレネを援護していたファウストは時計を眺めると口元に笑みを浮かべる。

「リベルト大尉は時間通り、すべて予定調和か。ではこのまま——ん？」

だがその時——想定外のモノが現れる。

背中から見えるは紅き翼。

開かれた翼から光を発し、一気に距離を詰めてきたソレは大剣を引き抜き、同盟軍機を襲っていたジンIIを瞬く間に撃破した。

爆煙の陰から現れたその機体にさしものファウストも驚いたように目を見開いた。

「増援」

「アレは……」

それはユニウス戦役を戦った者であればあの機体を知らぬものはいない。運命の名を冠する紅き翼を持ったその機体の事を。

「……『デステイニー』か」

ファウストの視線の先、そこには爆煙を背に油断なくアロンダイトを構えるデステイニーガンダム・リファインの姿があった。

「これ以上、好きにはさせない!!」

コックピットに座るシンは素早く状況を把握すると、危機的状況に陥っている味方機を救うため敵機に向けて斬り込んだ。

「止めろオオ!!」

速度を上げたステイニーはすれ違い様にフロレスダガーを盾ごと切り裂き、ビームライフルで味方機から敵を引き離していく。

「はああああ!!」

シンは久しぶりの実戦である事など全く感じさせない動きで、降り注ぐビームをすべて避けた。

「何?」

「捉えられない!」

ジンIIやフロレスダガーは加速するステイニーの動きをまるで捉えられず、ただビームは空中へ消えていく。

「まずはお前達から!!」

すれ違いざまに蹴りを入れ、他の機体にぶつけるとビームライフルでコックピットを貫通。

さらに爆煙に紛れバッテリー内蔵型ビームランチャーを発射し、体勢を崩した所にア

ロンダイトを振り抜いた。

耐える事も出来ず切り裂かれたモビルスーツは炎を纏って海上へと落下していった。まさに獅子奮迅。

対艦刀を振るい、ライフル、時にサーベルを使い分け敵機を次々と落としていく。デステイニーの奮戦により戦況は再び膠着状態へと押し戻された。

縦横無尽に動き回るデステイニーの姿にファウストは僅かに不愉快そうに表情を歪めると時計を確認する。

日が落ち、周囲はそろそろ夜を迎える時間へと変わろうとしていた。

「そろそろ時間だな……そう上手く事は運ばない、やはり戦場は違うな。とはいえそれでもこちらの思惑通りである事も変わらないがな、デイノ中尉、ミエルス大尉、ランゲルト少佐、作戦は終了だ、敵の援軍が駆けつけてくる前に撤退する」

「了解」

煙幕を展開し、戦域から離れようとテタルトス軍が後退を開始する。

「逃げる——ッ!?!」

後退していくテタルトス軍に戸惑いの声を上げるシンにジンII・アクティヴが速度を上げて突撃してくる。

デステイニーとジンII・アクティヴの構えるシールドが激突、空中で睨み合った。

「こいつ!!」

「……再びその機体を見る事になるとはな」

「何?!」

「……俺のこの手で破壊する。忌々しいデュランダルの亡霊め」

そう吐き捨てるとデステイニーを突き放し、ジンⅡ・アクティヴが離脱していく。

「このー!」

逃がすまいとビームライフルを発射するが、背後からの射撃にも関わらずジンⅡ・アクティヴはビームの一射を容易く避けてみせた。

「あの位置で避けた!?!」

完璧に捉えた筈の一射だった。

しかも敵は背後を向いていたのである。

それを最小限の動きだけで回避するなんて、只者ではない。

撤退するテタルトス軍の姿を見送りながら、戸惑ったように声を上げる。

「アイツ一体、何なんだよ」

シンはヘルメットを脱ぎ捨て、頭をかきながらジンⅡ・アクティヴのパイロットに思いを馳せる。

だが、考えても心当たりはまるで無い。

「ハア、とにかく戻るか」

これ以上考え込んでも仕方がないとセリスの待つストックホルム基地へと機体を反転させた。

◇

大気圏近くで開始されたテタルトス軍と同盟軍の戦闘。

戦力の降下という目的を達成したテタルトス軍はその場に留まる必要も無く、即座に部隊を纏め戦域から離脱した。

敵からの追撃を警戒し、ギリギリまで戦場に残りトワイライトフリーダムと交戦していたアスランは母艦であるクレオストラトスの格納庫に着艦すると大きく息を吐き出した。

「ふう、任務完了か」

特に大きなトラブルも無く、無事に任務を完遂できた事は喜ぶべきだろう。

だが、まさか『奴』が現れるとは思ってもいなかった。

アスト・サガミ。

アスランが心の底から倒したいと願う宿敵。

『ヤキン・ドゥーエ戦役』から今に至るまで忘れた事は一度もない。

セレネ辺りが聞けば諫められてしまうかもしれないが、それでもアスランはアストを倒さねばならないと考えていた。

何故ならば奴は越えねばならない壁のようなもの。

誰が何と言おうとも、愚かな事だと分かっている、抱えた過去の因縁も憎しみも痛みも——奴を倒して踏み越えねば前に進む事ができないのだ。

「……早く『レグルス・エクイテス』を完成させる必要がある」

とはいえ今回の戦闘で結構なダメージも負ってしまった為、完成には今しばらくの間を要するかもしれない。

目で待っている技師長が澁い表情を浮かべている光景が目には浮かび、苦笑しつつどう言い訳するか考えながらコックピットから降りた。

整備班にその場を任せ、更衣室に向かおうとしたアスランだったが、自分を待っているかのように立っている人物に気がつく足止めた。

「ラデイスか。どうした？」

「お話があります、中佐。何故、あの場に出てこられたのですか？ あの場は私だけで

「お前では無理だと判断したからだ」

不満そうな態度を崩さず、詰め寄ってきたラデイスの言葉をアスランは即座に切つて捨てた。

「なっ!?!」

絶句するラデイスにアスランは気にせず、言葉が続ける。

「ラデイス、お前は勘違いしている。確かに『強化兵』の力は優れているかもしれない。しかしそれを扱うお前自身は戦闘経験の無い新兵だ。その事をもっとよく自覚しろ」

「くっ、そんな事は！ あのまま続けていたらあんな機体くらい簡単に——」

「くどい。新型機も任されているんだ、その辺の事も良く考えろ。そして勘違いするな、お前は強化兵である前に軍人だ」

アスランは屈辱に拳を振るわせるラデイスを一瞥すると、そのままその場を後にする。

パイロットスーツから着替え、ブリッジに向かう途中で今度はユリウスとレイの二人が待っていた。

「ずいぶん無茶をしたものだな、アスラン。未完成機を使うとは」

顔を合わせるなり飛び出したユリウスの苦言にアスランは思わず身を固くする。

「……申し訳ありません、大佐」

「気持ちには分からんでもないが、あまり無茶はするなよ。不完全な機体で死んでは目

も当てられまい」

「はい」

有り難い忠告を改めて胸に刻むと、今度はアスランから質問する。

「それよりクレオストラトスに来られるとは、何かあったのですか？」

アスランの質問にユリウスは表情を曇らせる。

こんな風に表情は険しく、どこか警戒感を滲ませているユリウスは滅多に見る事はない。

「大佐？」

「いや……少し気になる事があつてな。私とレイはエウクレイデスに合流後、この宙域を調査して帰還する。臨時指令殿にはお前から報告しておいてくれ。後を頼むぞ」

「……了解しました」

「失礼します」

敬礼するレイに返礼しながら、アスランは何か嫌な空気を感じ取っていた。

「……面倒な事にならなければいいが」

半ば願望に近い言葉を口にしながら、ブリッジに入るとクレオストラトスの進路をエウクレイデスとの合流ポイントへと向けさせた。



見上げれば満天の星が煌めく美しい星空が眼前に広がっていた。

キラキラと輝く星空は建造物の明かりに照らされている都市部や軍事基地周辺では碌に見る事もできない代物だ。

そういう意味ではここへ派遣されてきた事も悪くは無い。

というかこれくらいしか、良い事などなかった。

見渡せばそこら辺に転がっているのは無残な姿になり果てたモビルスーツの残骸と破壊された建造物。

さらには人とは思えぬ姿となった兵士や戦闘の巻き添えになった民間人の死体がゴロゴロ転がっている。

まさに地獄と呼ぶにふさわしい惨状。

出来れば今すぐに忘れ去りたいくらいには凄惨な光景だった。

「ハア、全く食欲なんて失せるな、こんな場所じゃ」

仰向けに置かれた愛機の胴体に寝転がり、手に持ったチョコレートバーを口に押し込むと、無理やり水で流し込む。

碌に味もしない質素な食事を終え、改めて寝転がり夜空を見上げていると、そこに声

が掛けられる。

「ずいぶん呑気なものだな、アオイ・ミナト少尉」

名を呼ばれたアオイ・ミナト少尉は首を逸らすと地球軍の制服に身を包んだ少女が呆れた表情でこちらを見下ろしてくる。

一見、あまりにこの場に似つかわしくないとどこぞのお嬢様を彷彿させる上品な佇まいを持つこの少女は一応部下であるベアトリーゼ・フォルケンマイヤー少尉だった。

「別にいいだろ、飯くらい。というかパンツ見えるぞ」

「何処を見ているんだ、この変態め！」

「見てないっての！ 注意したただけだろ！」

「ふん、どうだか。それより一応ここは敵陣だ。それにこんな場所で良く飯など食ってられるな」

「次何時食えるか分からないんだ。時間がある時に食っておいた方がいいだろ」

「それには賛同するがな。まあ、そんな馬鹿話はどうでもいい、それより報告だ」
ベアトリーゼの表情が変わった事にアオイは飛び起きると気を引き締める。

「上空から何かが降下してくる反応があるらしい。予測降下地点はここから結構な距離が離れているらしいが」

「テタルトスか？」

「さあな。そこまでは分からないそうさ。それでどうする、ミナト少尉？」

「……調査に向かう。準備させてくれ」

「了解」

機体から飛び降りたベアトリーゼを見送りアオイは再び空を見上げると先程と変わらず満天の星空が広がっている。

「……見える訳無いか」

アオイは苦笑しながら、コックピットに乗り込むと機体を立ち上がらせた。

第8話 降り立つ大地

大地から伸びるように大きくそびえ立ついくつものビル群。

その中で一際大きくそびえ立つビルの会議室、そこでは地球軍保守派の極秘裏会合が行われていた。

「——以上が現状報告になります」

部屋の壁一面に設置されたモニターを背に立つ進行役の男が手元の報告書に記載された重要事項を読み上げる。

その内容に席に座った大半の人間が表情を曇らせた。

「やはり『ヨーロッパ戦線』は良くないな」

「ええ。同盟とプラントの連携によつて思うように戦況が好転しなかつた事も問題ですが、今回のテタルトスの部隊降下によつてさらに状況が悪くなる事も考えられます」
「今まで睨みあつていたとはいえテタルトスは積極的に攻勢には出ず、自分たちの拠点や他国との関係構築に重点を置いていた。」

しかし今回の降下作戦により、一気に攻勢に出て戦況が変わっていく可能性が高まったのだ。

「これでは何の為の『マケドニア要塞』だ！ 莫大な建設費用も掛かったというのに！！」

地球軍の制服に袖を通した禿頭の男が顔を赤くし憤りに任せて机を殴りつけた。

マケドニア要塞建設の際に掛かった費用を考えれば上手く機能していないように見える現状には憤慨したくなる気持ちも分からなくはない。

だがあの要塞があるからこそスエズ基地に対する攻撃も防げているのだから、一概に文句も言えないだろう。

「落ちついたまえ。『マケドニア要塞』があるから同盟やザフト、テタルトスを牽制する事も出来ているんだ」

隣に座る将校の1人ニコラス・フリードマン少将が窘めるように声をかけるが、それでも怒りが収まらないのか再び机を殴りつける。

「ならば、状況を好転させる為にも『GFAS—X1』でも投入すればいいだろう！アレを戦場で暴れさせれば、それなりの損害は与えられる筈だ！！」

禿頭の男はそうとう頭に血が上っているらしい。

今回テタルトスの降下作戦阻止に動かなかった事が余程納得できなかつたようだ。

そこで中央に座っていた一番若い男が初めて口を開いた。

「……言いたい事はわかった、少し落ち着いてもらいたい」

会議室に響いた背筋が凍るほどの冷たさと威圧感が籠ったその声に誰もが振り返る。その男は地球軍の制服に身を包みながら腕を組み、鋭い視線で会議室を見渡していた。

「イスラファイール!? い、いや、失礼した。少し興奮しすぎてしまったようだ」

若干怯えるように禿頭の男は矛を収める。

クレメンス・イスラファイール。

彼こそが曲者ぞろいの地球軍保守派を纏め、率いている若き首魁であった。

「分かればいい。月の降下作戦については同盟が動く事も分かっているからな。下手に動けば無駄に戦力を消耗してしまっただろう。それと先程の『GFAS—X1』投入の件だがアレは欠陥品だった筈だな」

先の大戦で猛威を振るったGFAS—X1は絶大な火力を持ち、小さな基地程度であれば一撃で殲滅も可能なほどの制圧能力を持っている。

しかしその反面、巨体であるゆえに小回りが効かず懐に飛び込まれると碌に対処ができないという欠点も持ち合わせていた。

「しかしそれは現在改良も行っていますし、直掩機に關しても新型を——」

「『ベルリン条約』があることを忘れるな」

『ベルリン条約』とはユニウス戦役終結後に締結された戦時法の事である。

ヤキン・ドゥーエ戦役やユニウス戦役では大量破壊兵器が使用され、さらに戦闘以外でも多くの被害を出す事となった。

そこで各陣営が協議の元、『G F A S — X I』の攻撃によって崩壊したベルリンにて締結したのが『ベルリン条約』である。

民間機及び医療関係車両などへの攻撃禁止、捕虜の扱い、Nジャマーキャンセラーの兵器使用に関する事など様々な取り決めがなされ、世界へ発表された。

その中には『G F A S — X I』など大型兵器の市街地使用の禁止も含まれている。

全面的に使用禁止にされなかったのは、当時の強硬派が粘った成果とも言えるだろう。

「国際的に効力を発揮するものだ。それを無視しては我々もロゴスと全く同じとなるだろう。それは避けねばならない」

「ハッ」

「しかし、『ヨーロッパ戦線』の現状に関してはどうにかせねばなるまい。その辺はこちらでも考えておこう」

「……あの、テタルトスと一時的に同盟を結ぶというのはどうでしょうか？」

思いもよらぬ提案にその場にいた全員が一斉に振り向いた。

「兵士達の間でもまずは改革派を打倒すべきとの声も強いですし、テタルトスと同盟を組めばヨーロッパ戦線の戦況も変わります」

「なるほど。イスラフィール様はどう思われますか?」

腕を組んだクレメンスは提案を口にした将校の方へ眼を向けた。

「一考の価値はある。しかし問題もあるな。我々からすればテタルトスはテロリスト達が集まって作られた国だ。同盟を組むという事は、彼らの存在を対等であると認める事と同義——地球連合として簡単に容認できまい」

「も、申し訳ありません」

「いや、どんな意見も口にしなければ伝わらない。それに先程も言ったが一考の価値はある」

「では、パナマの方はどうなされますか?」

現在、改革派が拠点としているのがパナマ基地である。

ここを落とせば事実上改革派は敗北となる訳だが、率いているネオ・ロアノーク大佐は巧みな戦術と洗練された部隊を使い分け、尽く保守派の攻勢を退けていた。

「連中の要はロアノークだ。奴さえ落とせば連中は瓦解する」

「しかしロアノーク大佐は戦術家としても、パイロットとしても一流です。そう簡単

には」

「そうだな、それが出来れば苦労はしない。それに改革派には同盟やプラントからの支援も行われているからな」

ネオ・ロアノーク大佐は普段から仮面を被り、その正体は誰も知らない人物である。しかしその実力は紛れも無い本物であり、ユニウス戦役でも活躍したエースパイロットだ。

口で言うほど容易く倒せる相手ではない。

「……ネオ・ロアノーク大佐か。惜しいな、あれほどの逸材を無為に散らせたくは無いが」

イスラフィールが心底残念そうに呟くのを意外そうに見つめながら、ニコラスが資料を手取る。

「もつとイリアスをこちらに配備して貰いたいが、ヨーロッパ戦線から回す訳にはいかんしな。しかも改革派は『GAT-07M』を上手く使って空中戦を仕掛けてくるのがネックだ。配備されているウインダムではあの機動性にはついていけない」

「ああ。オーブの機体を模倣したムラサメモドキですか。こちらも『GAT-07A』を投入しては？」

「ロールアウトしたのは少数で、全く数が足りんよ」

ニコラスの読み上げる報告に耳を傾けながら、思索していたイスラフィールは顔をそちらに向けると表情を変えないまま淡々と呟いた。

「なるほど。フリードマン少将、すまないがしばらく現状維持で頼む……ヨーロッパ戦線の状況が変わるまでな」

「どうなさるつもりで？」

「『サリエル』を降下させる」

「『サリエル』、ファントムペインを使うのですか？」

「そうだ」

イスラフィールは会議は終わったとばかりに退室すると、何の迷いも無く歩き出す。その背中からどこまでも冷たい覚悟が滲み出ていた。

◇

装甲を燃やす灼熱の空間に振動で揺れるエクリップスのコックピット。

アレンは眼下に広がる地球の姿を見つめながら、機体のコントロールに集中していた。

「たく、何時になっても大気圏ってのは！」

基本モバイルスーツ単体での大気圏降下というのを好んでやる奴はあまり居ない。

技術の進歩と共にリスクは低下したが、危険な事には変わりはないからだ。

こんな事をやりたがる奴はそうは居ないだろう。

少なくともアレンは嫌いだ。

嫌な思いもあるし、最初にキラと降下した時など二人揃って死にかけてたほどである。

「まあ昔よりはマシだけどな」

キーボードを素早く叩き、機体の排熱システムを確認して姿勢制御を行うと右手からビームシールドを展開する。

本当であればバッテリーを消費しないアンチビームシールドの方が好ましいが先ほどの戦闘で失ってしまった。

「バッテリーはギリギリ大丈夫か」

バッテリー残量を確認しながら後ろから降下しようとしている僚機に指示を飛ばした。

「ルナマリア、フォースシルエットに換装しろ」

「でも、エクリプスシルエットも傷ついていますけど」

「俺の方は大丈夫だ、何とかする。それよりそのままじゃインパルスの方が不味い」

現在、インパルスが装着しているのが砲戦仕様のブラストシルエットである。

あの装備では大気圏を突破できても地上に降りることはできず、下手をすれば地面に激突してしまう。

「時間がない急げ！」

「ッ、了解！」

インパルスはブラストシルエットを切り離し、フォーシシルエットに換装するとそのまま大気圏に突入する。

スラストターで姿勢を安定させ、二機は灼熱の空間を下ってゆく。

「問題はこつちだな」

先ほどルナマリアが指摘してきた通り、エクリップスシルエットはユリウスからの攻撃で傷を負っている。

ウイングが破壊された程度でスラストターは無事だと思いが、この目で見ていない以上は確実性がない。

「大気圏を抜けるまで持つてくれれば良いが」

しばらく振動に身を任せていると、紅く染まる視界が急に開けた。

「抜けた、後は——ッ!？」

アレンが逆制動をかけた瞬間、エクリップスシルエットが爆発し衝撃でつんのめる。

「チツ、限界だったか！」

どうやらシリウスから受けた損傷が大気圏を突破した衝撃によって爆発したらしい。咄嗟にエクリップスシルエットを切り離すと、直後に装備諸共爆散した。

「ぐツ、くそ。今の衝撃でバランスサーまでイカレたか」

この際苦手などとは言っていられない。

機体を制御しつつ器用にキーボードを叩きながらスラスターを逆噴射させるが、上手く姿勢を保つ事が出来ない。

このままでは地上に激突する事になる。

「くそ、こんな所で死んでたまるか！」

「アレン！」

「来るな！ お前はインパルスの姿勢制御に集中して——」

「できませんよ！」

インパルスは落ちるエクリップスを掴み上げ、バランスを整えながらスラスターを噴射する。

「アレン、フォースシルエットを装備してください」

「しかし、それではインパルスが」

「大丈夫です！」

速度が落ち、減速したタイムリングを見計らってインパルスがチェストフライヤー、レッグフライヤーを切り離す。

「なっ!？」

速度が落ちていたとはいえ、それでもかなりの加速がついていたコアスプレnderは弾け飛ぶように吹き飛ばされてしまった。

「ルナマリア!!」

「ぐっうう、だ、大丈夫です!!」

「なんて無茶な事を!」

吹き飛ばされたコアスプレnderがどうにか体勢を立て直す姿を見てアレンは冷や汗をかきながら、残されたフォースシルエットを装着すると一気に逆制動をかけた。

「間に合うか!!」

徐々に、そして確実に近づいてくる地上。

できる限り減速しようとしてスラスターを全開で噴射した。

だが——止まらない。

このままでは地面に激突する。

「どうにか——あれは？」

見えたのは遠くに見えた建物と下る斜面。

それは丘か、山か。

「あそこなら!!」

アレンは素早く機体をそちらに向けてスラストを噴射すると操縦桿とフットペダルを操作し、斜面にどうにか足をつけた。

「ぐおおおお!!」

エクリップスは両手から発生させたビームシールドを地面に突き刺し、滑るように斜面を下っていく。

「ぐうううう」

コックピットに響く振動と衝撃に歯を食いしばる

しばらく滑るように下っていた機体の勢いが弱まるとどうにか斜面の途中で止まった。

しかしそこで限界が訪れたエクリップスから装甲の色が消え失せ仰向けになって倒れ込んだ。

「ハア、なんとか止まったか」

アレンはヘルメットを脱ぎ捨てハッチを解放しすると上空を見上げる。

憎らしいほど晴れ渡ったいい天気だった。

視線を左右に滑らせ後ろを飛んでいたコアスプレnderの姿を探すと、他のパーツと共にこの近くに着陸しようとしているのが見えた。

エクリプスが落ちた地点よりも離れた場所から轟音が響いてくるが、爆発したような気配は無い。

「あれならおそろくルナマリアも無事だな」

安堵のため息を漏らしシートに座り直すと機体状態を確認する。

すぐにでもルナマリアの下へ向かうべきかもしれないが、こんな時こそ冷静に現在自分が置かれている状態を正確に把握しなければならぬ。

「結構酷い状態だな」

積み重ねられた戦闘と大気圏突破のダメージで各部の損傷が酷い。

特に腕の関節部は全く動かない程に致命的な状態だった。

さらにバッテリーもほぼゼロ。

これでは機体を別の場所へ移動させる事もできない。

「せめてバッテリーだけでもどうにかしないと、動かすこともできないか」

次にこの場所がどこかという事だ。

爆発の衝撃でデータが飛んでいる部分もあるが直前までの位置情報からある程度割

り出す事はできる。

「ヨーロッパのどこかか。激戦区に降りるとは、運がいいのか悪いのか。とにかく、機体をどうにかしないとな」

今のままでは機体を移動させる手段も、味方に連絡する手段もない。

まず人のいる場所に向かう必要があると判断したアレンはコックピットに常備してある非常用のサバイバルキットを取り出す。

「これを使う事になるとはな」

パイロットスーツを脱ぎ棄て予備の服を着込み、サバイバルキットの中身を確認する。

「予備の服が制服でなくて助かったな。それから数日分の食料と水か」
いくらなんでもグラオ・イリスの制服は目立ちすぎる。

グラオ・イリスではザフトと同盟との混成部隊という事で両軍とは違う制服が支給されていた。

デザイン的にはザフトに近いものだが、色に違いは殆どなく全員が統一されている。

これには将来的にプラントが同盟に加盟した場合、オーブやスカンジナビアも含め階級や制服などの違いなどを統一する必要がある為、その試験的な意味合いも含まれているらしい。

そんな制服でウロウロしていたら、地球軍保守派やテタルトスに見つかった場合、言い逃れができない。

「さてルナマリアの方は」

コアスプレンドーの降下した位置はここからさほど離れてはいなかった。

エクリプスに気休めのシートを被せて発見しにくくし、サバイバルキットを背負うとコアスプレンドーが着陸したであろう場所へと歩き出した。

不時着した可能性もある為、足場の悪い場所をできるだけ足早に進んでいくと斜面に突き刺さるように着陸しているコアスプレンドーの姿が見えた。

「ルナマリアー！」

怪我をしているかもしれないと急いでコアスプレンドーへと走り寄る。

しかし――

「え」

「あ」

そこには肌を晒し服を着替えている半裸のルナマリアが立っていた。

「アレン、無事でしたか！ 着替えたらエクリプスが落ちた地点まで探しに行こうと

思っていたんですよ!!」

ルナマリアはアレンの無事な姿に安堵の笑みを浮かべながら駆けよってくる。

しかしアレンはそれどころではない。

心配してくれた事は嬉しいのだが、肌と下着が丸見えの今の姿は刺激的過ぎる。

「ま、待て、服くらいきちんとしてくれ！」

「え、ああ、そうでした。少し待ってください」

アレンが後ろを向くと、ルナマリアは服を整えている音がゴソゴソと聞こえてくる。

前から思っていたがルナマリアはスタイルもいらしく、出るところは出て引つ込むところは引つ込んでいる。

メイリンが恨めしそうにしている気持ちも分からなくはない。

アレンも未だに背が伸びないかなあと密かに気にしているからだ。

「……羞恥心とかないのか、お前は？」

「ん〜別にアレンなら平気ですし」

どういう意味だと聞き返そうとしたが、止めた。

凄まじく面倒な事になりそうだったからだ。

「そんな後ろ向かなくても、アレンは見慣れてるでしょ」

「お前は俺を何だと思ってるんだ、人聞きの悪い事を言うな！」

「でもレティシアさんとか、マユちゃんとかいるじゃないですか」

「何でそこでその二人が出てくるのか知らないが、お前の思っているようなものじゃ

ない」

あからさまに話題を逸らすアレンに服を着替え終えたルナマリアは丁度良い機会である、今まで気になっていた事を聞く事にした。

「前から聞きたかったんですけど、アレンとあの二人つてどういう関係なんですか？」

「なんでそんな事を聞く？」

「気になるじゃないですか」

「そこで何でとは聞かない。」

女というのはこういった話が大好きな事は重々承知しているからだ。

「そうだな、大切な人である事は確かだが」

「恋人じゃないんですか？」

「……ああ」

確かにマユは自分を好きだと言ってくれるし、レティシアとは男女の関係を持った事もある。

二人はアレンにとって大切な存在である事は間違いない。

しかしだからこそ、彼女達と恋人などの特別な関係になる事には非常に強い抵抗があった。

「それはなんですか？」

「俺の生まれは知っているだろ。それに俺は——人殺しだ」
『カウンターコーディネイター』

最高のコーディネイターであるキラを殺す為に人工的に生み出された存在であり、多くの敵を情け容赦なく屠ってきた『消滅の魔神』。

それがアレン、いやアスト・サガミだ。

この世界にはアストを憎み、恨んでいる人間は山ほどいるだろう。

——あのアスラン・ザラのように。

「俺の罪は俺が背負うべきで、他の誰かを巻き込むべきじゃないと思う」

アスト・サガミという存在は間違いなくこの先も争いの渦中に居続ける事になるだろうという確信がある。

無残に死ぬまでだ。

そんな地獄に彼女達を引きこむ事はできない。

しかしこれはあくまでもアレン自身の考えに過ぎない。

だからイザークは本当にすごい。

彼は自分の罪を受け入れ、戦う事を分かった上で自分の大切に思う女性と歩む道を選
択したのだから。

「なるほど……これじゃ、あの二人が何言っても駄目でしょうね」

「ん？」

「いえ、別に」

「幻滅でもしたか？」

そうなって離れていくなら仕方がないと思っているとルナマリアから意外な言葉が飛んできた。

「全然。むしろ納得したというか、アレンの境遇ならそう考えても仕方がない面もあるというか」

あつさりと受け入れたルナマリアに面食らいながらもアレンは気を逸らすように近くにあるチェストフライヤーの方に視線を向ける。

目立った損傷はないように見えるが、それはあくまで見た目の話。

中身まではここからでは分からない。

「インパルスの方はどうだったんだ？」

「うくん、結構無理させたので詳しく調べてみないと分かりませんが、負荷が掛かってしまった部分があるみたいです。戦闘には大きな影響は無いかもしれませんが、でもドッキング部分はキチンと調査した方がいいですね」

「インパルスは構造的にも複雑だからな。楽観しない方がいい。バッテリーはどうだ？」

「そつちはギリギリですね」

ルナマリアと話し合い、やるべき事を確認し合う。

「つまり今すべき事は現在位置の把握、味方への連絡、そして機体の修復する為の部品及びバッテリーの確保ですかね」

「ああ。とにかく人のいる場所に行くぞ。後、分かっていると思うが俺達が『グラオ・イリス』所属の軍人だつて事は誰にも言うなよ、面倒な事になる可能性もある」

「了解です」

「それから機体をいつでも自爆できるようにセットしておけ。万が一に備えてな」

コアスプレレンダーにも予備のシートをかぶせると、ルナマリアを伴い斜面に足を取れないように下へと降りていく。

ここは山ではなく、少し高い丘のような場所らしく特にトラブルも無く平地に出る事が出来た。

「降りる前に建物が見えた。とりあえずそこに行つてみるか」

「ええ。ここがどこかくらいは分かるでしょうしね」

とはいえここが本当にヨーロッパであるならば、現在最も地球で危険な場所には違くない。

余計なトラブルに巻き込まれる事だけは避けたい、そう思つて歩いてきた時だった。

段々と聞こえてくる音にアレンとルナマリアは思わず身を固くする。

「アレン、この音って」

「……モビルスーツのスラスタ音だ」

咄嗟に近くの茂みにでも身を隠そうとするが、すぐ様駆けつけてきたモビルスーツの風圧に晒されてしまう。

「ぐつ、アレは地球軍のウイングダム」

「ああ。肩や腕に装甲に白線が入っていない所から見れば保守派だな」

保守派と改革派のモビルスーツは殆ど同系統の機体が用いられている為に明確な違いがない。

識別信号も勿論出ているが、味方同士で誤射がありうるという事で改革派の方には肩や腕に白い線の塗装が施されている。

嫌な予感を覚えながら、上空に留まる三機を見上げているとジェットストライカーを装備したウイングダムはスピーカーを通して声をかけてきた。

《そこの二人、動くな。聞きたい事がある》

3機のウイングダムが地上に降りてくるとコックピットからパイロット達が顔を出した。

ヘルメットの所為で顔が良く見えないが、声からすると結構若い。

「……新兵か？」

「見ろよ、そつち凄いい女だぜ」

「後にしろよ。この近くで何かが落下してきたような音とか聞いた事はないか？　どんな些細な事でもいいんだけど」

「下手に隠しだてはするなよ」

二人はその質問の意味する所を察する。

この三機のモビルスーツは降下してきたエクリプスとインパルスの事を調査しにきたのである。

「……すいません、俺達は何も知りません」

「なるほどな。一応聞かせてもらうがお前達の関係は？　こんな場所で何をしているんだ？」

いかに新兵でもそう簡単に解放してくれるとは思っていない。

だかこういう事態になる事は事前に想定済み。

事前に打ち合わせ通りに口を開こうとしたアレンの腕にルナマリアが抱きつくくと、不自然な程の笑顔を浮かべる。

「私達、最近結婚したばかりの夫婦なんです、ね、アナタ」

アレンは内心動揺しながら、できるだけ違和感のないように笑みを浮かべる。

「……ええ、そうなんですよ」

事前の打ち合わせでは、兄妹だった筈なのだが——
何を考えてるんだと問い詰めようにも、すでに言葉は発せられてしまった。
もうこれでいくしかない。

「ほう」

「うわ、ショックだわ！ 俺スゲー好みなのにさー！」

「いい加減にしとけて、で、どこに行こうとしてたんだ？」

「いや、どこという訳でもなくて。最近物騒なので各地を転々としているんですよ」
こちらの答えに納得していないのか、リーダーらしき男はコックピットの上からこちらを観察しているように見える。

アレンもルナマリアも今のやり取りで誤魔化せたとは微塵も思っていなかった。

情報が不足している以上、どうしても違和感は消し切れない。

それなら逆に考えればいい。

向こうから情報を持ってきてくれたのだと。

連中が機体から降りてくれば、そのままパイロットを倒し、機体を奪う。

山賊みたいなやり方で嫌だが、この際贅沢は言っていられない。

「信用できないな。お前達には悪いがこのまま基地まで御同行願おうか」

「そうこなくつちやな。女は俺がもらうぜ」

「お前バレたら殺されるぞ。この前も無茶してたし。それに本部の方からはその手の事は決してするなつて厳命してらつて話だしさ」

「バレなきや少しくらい大丈夫だつて。それに本部の連中に現場の事が分かる訳ないだろ」

どうやら普段からこういつた下品な事をしてるという事か。

末端の兵士とはいえ、あの軽薄そうな男もそれを容認する周りにも問題があるだろう。

ルナマリアなど笑顔を浮かべながらも、嫌悪感を滲み出しつつ怒りを堪えている。

というか腕が痛い。

連中が動いた所に合わせこちらも動くこうと銃を掴みやや前傾姿勢で動き出すタイミングを窺っていると再び別の音が聞こえてきた。

新たに聞こえて来たのは先程と同じモビルスーツのスラスタ音だ。

「待て、レーダーに反応!! この反応は?」

3人ともすぐさまコックピットに乗り込むと同時に飛び上がり迎撃体勢に入った。

しかし次の瞬間、1機が避ける間もなくコックピットを撃ち抜かれ、空中で爆発する。空中を覆う爆煙の中から勢いよく飛び出してきたのはアレンにとって見覚えのある、

いや、とても懐かしい機体だった。

「あれはイレイズガンダムか!？」

2機のウインダムの前に現れたのは背中にエールストライカーを装備したイレイズガンダムだった。

ウインダムのビームライフルを機体を捻ってやり過ごし、そのまま接近戦を挑む。

当然、ウインダムも黙ってはいない。

サーベルを構え、突っ込んでくるイレイズを迎え撃った。

交錯する一瞬、イレイズはウインダムの繰り出した斬撃を上空に飛び上がって回避する。

そのまま敵機の後ろ側へ逃れると近くの岩場に着地して反転、背後からビームサーベルを一閃。

反応が遅れ、背中からサーベルの一撃を受けたウインダムの胴体はビーム刃によって成す術無く切り裂かれ、爆散した。

「上手いな」

あのイレイズを操っているパイロットの腕前にアレンは感心したように声を出した。

最小限の動きで攻撃をかわしつつ、敵を攪乱し、仕留める。

まるでお手本のような戦い方だった。

残りは一機。

仲間がやられ、不利であると判断した残ったウインダムは離脱を図る。

しかしそれも別方向からの射撃でジェットストライカーを破壊され、続けて発射されたビームによってあっさり撃墜されてしまった。

「アレって地球軍の新型か」

「確かイリアスでしたよね」

ビームライフルを構え、同じくエールストライカーを背負ったイリアスが視界に入ってくる。

肩と腕に白い線が入っている所から見て、どうやらアレは改革派の機体らしい。

「なんでここに改革派が？」

「さあ。だが、さっきの連中よりは話ができそうだ」

アレンはこちらに降りてくるかつての愛機を昔の記憶を思い出しながら複雑な表情で見つめていた。

第9話 懐かしき愛機の中で

アレンとルナマリアが案内されたのは微妙な雰囲気の中、空気に包まれた士官室だった。いつかのラクスとは逆の立場だと昔を思い出しながらアレンは目の前に立つ人物を観察する。

アレン達と向き合っているのは部隊を指揮する立場にあるアオイ・ミナトとベアトリゼ・フォルケンマイヤーの二人である。

その後、ウインダムを撃墜したアオイ達にアレンとルナマリアは保護という形で彼らの母艦へと連れてこられた。

一昔前であればあり得ない事だったが、彼ら地球軍改革派と同盟、プラントは協力関係だった事が幸いしたと言える。

不時着という名の墜落をしたあの丘で使い物にならなくなった機体の回収も先に依頼し、その間これまでの経緯と状況を説明、情報交換を行おうと此処に集まった訳だ。

「——というのがこちらの事情だ」

「なるほど。前に遭遇したテタルトスの部隊はその降下部隊を援護する目的で動いていたって事ですか」

聞けば彼らがここに来る前にテタルトス軍と鉢合わせになり遭遇戦に陥ったという。どうやら先の戦いでテタルトス軍が降下準備が整っていたにも関わらず、降下しなかつたのはアオイ達との遭遇戦が関係していたらしい。

「それでそちらはなんでヨーロッパに居るんだ？　メキシコ戦線もやはり厳しいものだと聞いていたが？」

激戦区であるヨーロッパ戦線の陰に隠れてはいるものの、保守派と改革派の戦いはアメリカ大陸を二つに割る形で激しい攻防を繰り返している。

正直な所、ヨーロッパに戦力を送り込む程の余裕があるような状況ではないと思っていた。

「ええ。しかし俺達もヨーロッパの方をないがしろにはできないんですよ。特にマケドニア要塞はね」

「情報収集の為に派遣されたという訳か」

「貧乏くじもいところだな」

「……言葉使いには気を付けろよ、フォルケンマイヤー少尉。二人は俺達より階級が上なんだからさ」

「失礼」

一応アレンは大尉、ルナマリアは中尉の階級を与えられている為、この部隊を指揮しているアオイたちよりも上の立場になる。

と言ってもアレン自身は階級で呼ばれる事に慣れていないから気にしていない。

それにしてもフォルケンマイヤー少尉はその可憐な見た目に反してやたらと荒っぽい性格らしい。

基本的な所はルナマリアに似ているし、気が合うんじゃないだろうか。

「アレン、何か変な事考えませんでしたか？」

「い、いや別に」

鋭いルナマリアをどうか誤魔化し、話を戻す。

「それでサガミ大尉達はどうされるのですか？」

「今の俺はアレン・セイファートだよ。できるだけ早く友軍と合流したいと思ってるが、簡単にはいかないだろうな。逆に聞くが君たちはどうするつもりなんだ？」

「俺達は補給もかねて一度ヨーロッパから離脱しようかと思っていたんですけど。テタルトスの妨害に合ってしまった」

「……それでどうしたものかと思案していた所にお二人を発見したという訳です」
どうやら例の遭遇戦で完全に目を付けられてしまったらしい。

その所為で補給等も厳しい状況に置かれつつあるとの事。

テーブルに置かれた周辺の地図に目を通しながら、アレンはある場所に目を付けた。

「これはあくまでも提案だがストックホルム基地に向かうのはどうだろうか？」

「スカンジナビアの？」

「ああ。あそこに行けば補給も出来るし、君達の欲している情報も手に入る。同盟からしても改革派の情報は得たい筈だ」

「しかしそこまで物資は持つんです？」

「……この位置からだと言えど敵と遭遇しなければ、どうかと言った所です」

ベアトリーゼの試算では弾薬などはギリギリ持つかもしれないが、スラスターの燃料等は不足する可能性が高いようだ。

だがヨーロッパに居る限り完全に戦闘を回避できるとは思えない。

脱出するにしても同じ。

どちらにせよリスクはあるのだ。

「なら、この近くにある前線基地に向かうというのはどうです？」

アレンの横にいたルナマリアが地図の上を指差した。

「前線基地？」

「ええ。確かストックホルム基地の南くらいにテタルトスや保守派の敵の動きを監視

する為に建設された前線基地がある筈です」

今、自分達が居る地点がルーマニアの北西部。

そこからさらに北西にあるウィーン辺りに同盟軍の基地がある。

そこで補給を行いある程度の情報を得て、ストックホルム基地を指すというのがルナマリアの案だ。

確かに脱出の為に強行突破や無理してストックホルム基地に向かう強行軍よりは現実的だろう。

「分かりました、その案で行きましょう」

この案はアオイ達にとっても悪い話じゃない。

実際、ヨーロッパに入る前から同盟と合流する事も視野に入れてはいた。

だが保守派の間者ではと疑われても面倒な事になるとギリギリまで避けていたのだ。

その点今はアレンやルナマリアがいる。

関係者が居てくれるなら疑われることもない。

「よろしくお願いします、セイファート大尉、ホーク中尉」

「ああ。こちらこそよろしく頼む」

お互いの現状を打開できる取っ掛かりを得られた事に安堵しながらアレンとアオイは差し出された手を握り、握手を交わした。

◇ テタルトス月面連邦軍バルカナバート基地は常に喧噪に包まれている。

これはテタルトス地球最大の拠点である事も関係しているが、軍の中には地球出身者も多く所属している為、此処で働く事が嬉しいと感じている者が多いからという理由もある。

無論、月でもこうした対策は練られているが、宇宙での生活に閉塞感を覚える者も少なくないのだ。

「地球生まれがはしゃいでいるな。重力がそんなに恋しいか」

そんな基地内を一人、不機嫌さを隠す事無く歩いていたのはヴィルフリート・クアドラード少佐である。

ヴィルフリートは先の戦闘後、指令であるゲオルクにより地球への降下を命じられていた。

理由は激化するヨーロッパ戦線の支援という事らしいのだが、当然そんな理由で誤魔化されるヴィルフリートではない。

要するに厄介払い。

左遷以外の何物でもない事は明白。

そうでないなら部下であるテンペスターズも一緒に地球降下を命じられていたはずだからだ。

しかし今回辞令を受けたのはヴィルフリートのみ。

これが左遷でなければなんだというのか。

さらに苛立つのがすでに噂が広まっているのか、明らかに侮るような視線を向けてきている者もいる始末。

全く忌々しい話だった。

「しかしよりによってバルカナバートとは」

ここにはヴィルフリートが世界で一番関わりたくない人間が居るのだ。

だがどれだけ嫌であろうとも命令である以上、従うしかないのが軍人である。

「くそ」

ヴィルフリートは若干の緊張を押し殺し指令室の前に設置してある呼び出しボタンを押した。

「……ヴィルフリート・クアドラード少佐、着任の挨拶に参りました」

「入れ」

「失礼します」

指令室の中には数人の士官とそれに囲まれる形で地上方面の指揮官であり、ヴィルフ

リートの兄ファウスト・クアドラード大佐が笑顔を浮かべて待っていた。

「久しぶりだな、ヴィルフリート少佐。お前が地上に来てくれたのは頼もしい。頼りにさせてもらうぞ」

「……ハッ」

やっぱり思った通りだった。

ヴィルフリートを見つめるファウストの目。

この目だ。

笑顔を浮かべてはいるが、他の者の事など歯牙にも掛けないとばかりに無感心なファウストのこの目が昔から大嫌いだ。

だが、これも分かっていた事、今更目くじらを立てても仕方がない。

それにファウストはいつも通りだが、やはり周りの目は明らかにこちらを歓迎していない。

厄介者が来たとしても思っているのだろう。

怒りと屈辱で腸が煮えくり返りそうだった。

「お前にはランゲルト少佐と共に部隊を率いてもらう」

「よろしくお願いします、ヴィルフリート少佐」

「……こちらこそ」

金髪の女としか思えない人物ヴァルター・ランゲルトの差し出してきた手を握る。

ヴァルターはテタルトス内部でもその容姿と実力から名を知らぬ者はいない人物だ。

だがそれ以上に現最高司令官であるゲオルク・ヴェルンシュタインの腹心としても有名である。

決して信用できない。

「さて着任したばかりで申し訳ないが、早速任務に就いてもらう。内容はヨーロッパに入り込んでいる地球軍改革派の発見及び殲滅だ」

手渡された資料によれば、地球軍改革派と思われる機体や戦艦が度々確認されている。

前の降下作戦が幾分遅れたのも改革派の機体と遭遇戦に突入した所為だと記載されていた。

「これ以上引つ掻き回されると今後の作戦に支障が出る可能性もあるからな。ここらで退場してもらいたい」

「了解しました」

「言うまでもない事だが、油断はするなよ。相手はおそらくアオイ・ミナトだ」

アオイ・ミナト。

ユニウス戦役で戦果を挙げ名の知れた地球軍のエースパイロットである。

相手にとって不足はない。

こいつらを落とせば今までの汚名を返上できる。

「それからもう一つ。降下作戦の決行日時に二つの物体の降下が確認されている。ザラ中佐からの報告では同盟軍の機体が二機、地球に降下したと報告があった」

「ツ!? エクリプスとインパルスか!」

ヴィルフリートに屈辱を与えた二機のモビルスーツ。

奴らが地球に降下している事は知っていたが、まさかここヨーロッパに降りていたとは。

初めて地球に来たことを感謝したくなった。

「単独で動けるとは思えんが、一応気に留めておけ」

「ハッ! 失礼します」

部屋に入ってきた時とは一変し、気炎を上げながらヴィルフリートは退出する。

それを見たヴァルターは苦笑しながら、ファウストの方へ向き直った。

「よろしいのですか、あれで? 改革派の相手などそれこそ強硬派に任せておくべき

では?」

「あれでいい。さつきも言ったが改革派を早めに潰しておきたいのは事実だ。君には悪いがアイツの面倒を見てやってくれ」

「了解しました」

ヴァルターが退出するとファウストの端末にメールが送られてきた。

淀みない手つきでメールを開き、内容を確認する。

「……なるほど。強硬派——いや、クレメンス・イスラフィールが動く。……少し急ぐか」

誰にも聞こえないようにポツリと呟いたファウストはしばらく考え込む。

「大佐？」

「いや、……を頼む」

ファウストは端末をロックするとそばに掛けてあつたコートを掴んで部屋から出る。

その表情には薄く笑みが浮かんでいた。

◇

地球軍改革派エレクトラ級地上戦艦『アイザック』

それが今アレン達が身を寄せている戦艦の名前だ。

地球軍で運用されていたハンニバル級を改良、小型化したもので、隠密性と機動力に優れた設計になっているらしい。

その分、モビルスーツの格納数はかなり減ってしまったようで、現在アイザックに収められているのは回収されたエクリプスなどを除けばイレイズとイリアスなどごく僅かだけ。

こうして格納庫の二階から全体を見渡していても、人員の数もかなり制限されているらしい。

「改革派もこつちに余分な戦力を割いている余裕はないって事ですかね？」

「単純に隠密行動という意味合いもあるんだろう」

あまりに過剰な戦力は隠密作戦では邪魔になる事も多い。

あくまでも隠密に素早く目標を達成し動くことが求められる以上、多くの機体はただ目立つただけだからだ。

「今更ですけどいいんですかね、私たちの機体を弄らせても」

「構わないだろう。特別な技術が使用されている訳じゃないし、ユニウス戦役時に同じセカンドステージシリーズは地球軍に奪取されてるからな」

「それもそうですね。私達の機体は使えるようになるんですか？」

「エクリプスはもうすぐ動かす事もできるようだが、インパルスの方は結構難航しているらしい」

整備兵から話を聞いてもインパルスの複雑な合体機構は修復も難しいようで、時間も

かかる。

せめてもの救いはイリアスなどの機体の部品がある程度代用可能で応急修理くらいならどうにか出来ると分かった事だろう。

いかに腕が良いエンジニアでも部品がなければ修理する事ができないのだから。それでも応急修理に過ぎず、過度の戦闘には耐えられないとも言われている。

完璧な修復は友軍と合流し、基地に戻ってからでないと無理という事だ。

「それにしても……」

「何です、アレン？」

「いや、その服なんだが」

「ああ、まさか地球軍の制服に袖を通す事になるとは思ってませんでした」

「そうじゃくて、その、他にサイズは無かったのか？」

ルナマリアの言う通り今アレン達は艦内では目立つからという理由で支給された地球軍の制服に身を包んでいる。

だがルナマリアの服はサイズが合っていないようで、その、色々ときわどい事になっていた。

正直、目のやり場に迷うというか、ルナマリアはこういう所が無頓着なのが困る。

もう少し着方をどうにかしてくれと言おうとした瞬間、凄まじい振動が艦全体に襲い

かかった。

「きやああ！」

「なっ、むぐう！」

ルナマリアを受けめたまでは良かったが、振動の所為でバランスが取れず二人して折り重なるように倒れ込んでしまった。

「一体何が!？」

胸に押しつぶされて息が出来ない。

柔らかかったり、苦しかったり、良い匂いがしたり、その色々と不味いのでルナマリアの腕を軽く叩き、上体を起こしてもらった。

「は、早く退いてくれ」

「すいません」

揃って立ち上がり、階段近くに設置してあるインカムでブリッジに連絡を取る。

「ブリッジ、何があった?」

《テタルトス軍です！ 偵察に出していたこちらの哨戒機を補足した模様!》

先程の振動は近くで起きた戦闘によるものだったらしい。

このままでは艦が見つかる可能性も高いし、敵を極力引き離す必要もある。

即座に状況を判断したアレンはインカムに向かって叫ぶ。

「俺が出て時間を稼ぐ！ その間に艦を離脱させるように指示を出してくれ！ ミナト少尉、機体を借りるぞ」

《は？ ちよつと！》

「今、エクリップスとインパルスは動かせないし、俺達が合流した事はまだ伏せておいた方がいい」

越権行為かもしれないが、今はこれが最善だと思う。

下手に合流したことを知られると驚異と認識される可能性がある。

まともに戦えない現状、テタルトスを警戒させる必要はない。

少なくとも前線基地に辿りつくまでは。

「ミナト少尉は艦の指揮に集中してくれ。ルナマリア、お前はブリッジに上がって詳しい状況を確認するんだ」

「了解！」

アレンは手摺を乗り越え、格納庫に飛び降りると近くに立っているイレイズに走り寄った。

「あの！」

「機体を借りる。許可は取った」

整備兵に文句を言われる前にコックピットに乗り込むと、素早く機体を立ち上げる。

コックピットは少し変わっているようだが、基本は昔に乗っていた奴と同じだ。懐かしい感覚に自然と笑みが零れる。

「改革派のOSも随分洗練されているんだな。これなら弄る必要はないか」

OSのチェックを終え、VPS装甲を展開すると背中にエールストライカーを装着する。

「ブリッジ、ハッチを開けてくれ」

《撤退完了が完了したら、合図を送ります。後でフォルケンマイヤー少尉も援護に向かいますから、俺の機体を壊さないでくださいよ！》

「努力する。アレン・セイファート、出るぞー」

アオイの悲鳴めいた文句を聞き流し、格納庫から飛び出すと狙撃されない様に地面を滑るように滑空する。

変わってはいても、身体に染みついたこの感触は忘れようがない。

「随分使いやすくなってる。良い感触だ」

機体の挙動を確かめるような機動を取りながら、モニターに周辺データを表示した。

この辺りは積みあがったような高い岩場も多く、死角なる箇所も多い。

その分、大型の戦艦などは移動しづらいがアイザックであればそんなに時間がかかる事無く戦域からの離脱も可能だろう。

手足のように機体を操り縫うように岩場を抜けた先では片腕を損傷したウィンダムがH・アガスティアに追い詰められている姿が見えた。

「やらせるか！」

ビームライフルで牽制し、ウィンダムを守るべくH・アガスティアの前に割り込んだ。

「下がれ！」

「え、りよ、了解」

損傷したウィンダムを後方に下げるとラH・アガスティアがイレイズに銃口を向けてくる。

さらに後ろには高い岩場を避けるように空中に浮く戦艦の姿が見えた。

「テタルトスの地上艦か」

以前にテータを見たことがあった。

確か名前は――

『『ディオネ級』だったな』

地球軍やザフトの地上艦とは違い空中を移動し、高い火力と巡航速度を持つのが特徴だった。

「せめて『アイザック』が離脱するまで足を止めないと」

その前に邪魔なH・アガスティアを落とす。

「まずはお前からだ！」

ライフルの先から発生させたロングビームサーベルを片手に斬り込んでくるH・アガスティアを迎え撃つ、イレイズ。

アレンは光刃の軌跡を見極め、ロングビームサーベルを回避すると横腹に蹴りを入れて突き放す。

その隙にライフルで狙撃するが、H・アガスティアは体勢を崩しながらもそれをシールドで受け止めた。

「チツ、簡単にはやらせてくれないか」

新型を任されているだけあって、中々の腕前らしい。

しかし致命的な弱点がある。

「明らかに地上慣れしてないだろ！」

地上戦と宇宙戦では戦い方が全く違う。

地上では重力、気候、地形などモビルスーツで戦う上で様々な干渉が存在する。

アレンも最初に地上に降りた時は上手く戦えなくて焦ったものだ。

こればかりはいくらシミュレーターで訓練を積んだところで実際に戦って経験しなければ分からない。

特に宇宙での戦い方しか知らない奴は重力に慣れるまでは異常にスラストーを使う

のですぐに分かる。

目の前の敵はその典型だった。

見れば戦艦から出撃してくるジンIIやフローレスダガーのパイロット達も不慣れな連中が多いらしい。

「フォルケンマイヤー少尉、敵は不慣れだぞ！」

「了解！ スラストターを使い過ぎだ！」

出撃してきたベアトリーズが動きの鈍い敵を狙い撃ちにして撃破していく。

「地上に慣れていないところ悪いが、手を抜く気は無い」

空気抵抗を考えず連射してくるH・アガステアのビームライフルを避けながら接近する。

「切り替えが遅いんだよー」

シールドで殴りつけ、同時にビームサーベルで一閃する。

ビームサーベルが左脚部を切り飛ばすと、H・アガステアを蹴り落とした。

落下途中で体勢を立て直そうとしているが、もう遅い。

「もらった！」

ビームサーベルをコックピットを突き立てようと接近する。

しかし、そこで思いがけない一撃がイレイズの側面から襲い掛かった。

「ッ!?!」

別方向から発射されたビームだ。

しかも遠距離からの。

回避は間に合わない。

「ならー!」

持っていたライフルをビームの射線上に囫として投棄。

機体を上昇させてやり過ぎすとライフルが破壊された爆煙に紛れ、一気に敵に向けて

加速する。

通常距離を取って攻撃するスナイパーが位置を知られては終わりだ。

「いっ!?!」

しかしこの相手は並みのパイロットではなかった。

次々と針の穴を通すような精度で、イレイズを狙ってビームの閃光が押し寄せてくる。

遠距離からにも関わらずこの精度、只者じゃない。

シールドでビームを防ぎながら、目標の姿を捉えるとビームライフルショーテーターを
発射する。

「敵はシリウスか!」

イレイズが発射したビームライフルショーティーの一射を紙一重のタイミングで避けたシリウス。

後退しながらロングビームライフルを発射、同時に腹部のヒュドラを撃ち込んでくる。

ロングビームライフルはこちらの動きを誘導する為の囮。

敵の本命は体勢を崩したところに叩き込んだヒュドラだ。

確実にこつちを仕留める為にコックピットを狙ってきている。

「舐めるな！」

神懸かり的な反応で機体を捻り、横腹の装甲を掠らせながらもヒュドラを回避するとビームサーベルで斬りかかった。

それを見越していたのか、シリウスもまたビームサーベルを抜いて応戦、互いの斬撃が火花を散らした。

「この動き、この機体のパイロットは……」
似ている。

アレンにとっても非常に身近で、大切な人の動きに。

《……その動き、もしかしてイレイズのパイロットはアスト・サガミ？》

動きだけでこちらの素性を見破った？

それにこの声は――

一体何者なのか問い詰めたがここで返事を返しては、わざわざ違う機体で出撃した意味がないとあえて黙り込む。

しかし、こちらの思惑など見透かしているかのように話を続けてくる。

《なるほど、降下してきた貴方達はすでに改革派と合流していた訳ですか。それは我々にとっても好都合です》

「ッ!? その声は……お前は一体?」

もはや隠しても意味がない。

疑問に思っていた事を呟くと、敵機から楽しそうな声が聞こえてきた。

《貴方もラクスと同じ反応ですね。そんなに似てますか、彼女に?》

「ッ!」

力任せに弾き飛ばし、持ち替えたビームライフルシューターを発射する。

しかし相手も脅威的ともいえる反応で回避すると、肩のビーム砲でけん制してきた。

「お前は誰だ! 何故、彼女と!」

《……私はテタルトス地球駐留軍少佐ヴァルター・ランゲルトです》

「ヴァルター、その名前、男?」

《さあ、どうでしょうね!》

至近距離から発射したビームが互いの装甲を削り、二機の距離を離そうとする。距離を取った戦いは相手の土俵だ。

案の定、ロングビームライフルの銃口はこちらを向いている。

「まだだ！」

咄嗟に右足でロングビームライフルの銃身を蹴りつけ、銃口を逸らす。

その瞬間、発射されたビームが肩部を抉り、掠めていく。

《今のを避けますか！》

「これで！」

同時にシールドを投棄、左手で抜いたビームサーベルを振り上げるとライフルの銃身を叩き切った。

《流石にやりますね！》

「簡単にはやられない。それに俺の標的はお前じゃないんでね」

《ッ!?!》

シリウスを無視し、横に向けてビームライフルショーティーのトリガーを引いた。

狙いはテタルトスの戦艦——ではなく、その横にある岩場だ。

ビームの直撃を受けた岩は吹き飛ばされ、戦艦の側面部に激突する。

《艦に損傷を!?!》

大した損傷ではないにしろ、あれではしばらく動けまい。

その時、上空に撤退を示す信号弾が打ち上げられた。

アイザック所属のワインダムが信号弾を打ち上げたらしい。

どうやらアイザックは上手く戦闘宙域から離れられたようだ。

「悪いが今日はここまでだ！　ファルケンマイヤー少尉！」

「分っている！」

《逃がすとても!》

「邪魔だ！」

サーベルを投げつけ、両手に握ったビームライフルショットイーでシリウスをけん制しながら後退する。

それに合わせ信号弾を打ち上げたワインダムが周辺にスモークと閃光弾を戦艦に向けて発射した。

《追わせないつもりですか!?!》

「お前の事は気になるけどな！」

アレンはシリウスを振り切り、味方と合流すると戦域からの離脱を図った。

「……追ってこない？」

しばらく進んでも敵機が追ってくる気配はなかった。

「大尉、このままアイザックに合流します」

「了解。それにしてもミナト少尉に謝らないといけないな。結構手酷くやられてしまった」

「必要ないですよ。いつも無茶ばかりするミナト少尉にはいい薬だ。その惨状を見て、いつも自分の為に皆が肝を冷やしている事を自覚すればいい。それに貴方だからこそその程度の損傷で済んだんです。それだけあのパイロットは手強い相手だった」

確かに手強い敵だった。

名前はヴァルター・ランゲルト。

あの声といい、動きといい、あまりに似すぎていた。

もしかすると彼女の関係者だったのだろうか？

「……ハア、なんにせよ。アレが追ってくるとなると頭が痛いな」

今後の道のりの険しさに頭を抱えながら、アレンはベアトリーゼ達と共に母艦への帰路についた。

第10話 冷たい殺意

同盟軍とテタルトス軍による大規模な戦闘は一時的に鎮静化し、現在は散発的な小競り合いを繰り返していた。

そんな幾度のなく繰り返された戦闘により、破壊されたモビルスーツの残骸が浮遊する大気圏に一隻のプレイヤーアデス級が待機している。

その艦底部には幾人かを乗せたシャトルが設置され、地球降下する為の準備が進められていた。

「ザラ中佐、聞いておられるとは思いますがこのままバルカナバート基地に降下後、そのままヴェルンシュタイン司令からの特務について頂きますので」

「ああ、了解している」

シャトルの席に座っていたアスランは管制官からの通信に返事する。

それを見計らって反対側の席に座っていたラデイスが不機嫌さを隠しもしない様子で声を掛けてきた。

「中佐、何故俺まで地球になんて行かなくてはならないのですか？」

「ヴェルンシュタイン司令からの命令だ。地球での強化兵のデータを取っておく必要があると判断されたんだ。それにお前はもつと戦闘経験を積む必要がある。そういう意味では地球に行くのは悪い事じゃない」

「それは理解していますが……」

ラデイスは不満そうに肘をついて窓の外に視線を向けた。

彼からすれば宇宙で同盟に雪辱したいとでも考えているんだろう。

「それにヴェルンシュタイン司令からの特務もある。気を引き締めておけ。お前が戦果を上げれば、すぐにでも宇宙に帰れる」

「了解」

アスランはそれ以上は何も言わず、手元の端末に視線を落とした。

実はアスランとしても今回の特務に関しては別に人間に任せなかったかというのが偽りのない本音だった。

『レグルス』の完成度は未だ80%前後、これでは全力で戦えない。できればこつちを先に完成させたかったが、仕方がないか」

レグルス・エクイテスはアスラン専用開発させたモビルスーツだ。

機体各部のスラスターから武装、OSまでアスランの意見と戦闘データが反映されて

いる。

完成すれば、それこそ手足のように操る事が出来るようになる。

それ故に細かい調整はアスランが居なければ進まない。

特務さえ入らなければレグルス完成に集中できたというのに。

「仕方がないか。技師長に任せよう……それに奴も機体性能では不利だと悟った筈。ならあんな機体ではなく、相応の機体を用意してくる」

その時までには絶対の間に合わせなくてはならない。

今度こそアスランの求める決着を付ける為に。

《大気圏に突入いたします。搭乗員は立ち上がりながらぬようお願いします》

搭乗席に響くシヤトル艦長の声に耳を傾けながら、アスランは端末を操作し続けた。



抉られた地面に空へと舞う煙。戦闘の後だと嫌が応にも気づかされるその場所に一隻の傷ついた戦艦が鎮座している。

『ダイオネ級『カルキデウス』』

テタルトス軍が地上運用の為に開発した戦艦でやや大型ながらも高い巡行性能と十

分すぎる程広大なモビルスーツ格納機構を持つ。

さらに砲撃能力も高く、艦隊戦においても十分な火力を与えられた戦艦である。

「突き刺さった瓦礫は全部外だ！　それが終わらないと装甲の取り換えができないぞ！」

「了解」

整備班によつて修復作業を受けているカルキデイウス。

損傷自体はビームによつて吹き飛ばされた岩場が衝突した程度であり、エンジンには影響がなかった。

動けるようになるのも時間の問題だろう。

そんな中、ヴィルフリート・クアドラードは耐え難い屈辱に耐えながら訓練に明け暮れていた。

「クソ、クソオ、クソオオオ!!!」

地球軍改革派の追撃の為にカルキデイウスを任せられ、幸先の良い事に敵のモビルスーツを発見する事に成功した。

ヴィルフリートはこれまでの汚名を返上する為、意気揚々と出撃したまでは良かったのだが、結果は惨敗。

負けた。

完膚なきまでの敗北。

言い訳もできないほど、あつさりど。

「何だあの無様な姿は！」

相手がいくら音に聞こえたイレイズガンダムとはいえ、こうもあつさりどあしらわれてしまうとは。

しかも任されたばかりの新造艦を損傷させ、補足した敵を逃がしてしまうという失態。

これでは汚名を雪ぐどころか、逆にヴィルフリート立場は悪くなる一方だ。

「次こそ、次こそは！」

必死に操縦桿を動かしているとシミュレーターの中を覗き込むようにしてヴァルターが顔を見せた。

「少佐、少し根を詰め過ぎではありませんか？」

「……何の用だ。艦の指揮は貴方にお任せした筈だ」

ヴィルフリートが自分が指揮を執らない方が艦の兵士達の不満も出ないだろうと、ヴァルターに艦の指揮権を移譲したのだ。

それもまた屈辱ではあるものの、自分の置かれている立場や抱かれている印象くらいは理解していた。

ならば信頼されているヴァルターに任せられた方が効率よく動く事もでき、ヴィルフリートはパイロットの方に集中できる。

「単なる報告ですよ。艦の修復は間もなく完了します。我々はこのまま敵の追撃に移行しますので」

「了解した。しかし敵の位置は分かるのか？」

「予測はできません。彼らは間違いなくストックホルムかウィーン近くにある前線基地に向かうでしょう」

「何故、そう思う？」

「簡単な事です。ここヨーロッパで彼ら改革派が補給線を維持する事は難しい筈。隠密に動いていたとなればなおの事。ならば今までの補給はヨーロッパの外で行っていたと考えるのが妥当です。しかし彼らはすでに補足され、ヨーロッパの外へ逃れる事もままならない。ならば協力関係である同盟に頼ろうとするのは自然な事です」

確かにここヨーロッパで他の改革派が動いているという情報は無かった。

こちらが補足しきれていない可能性は否定しきれないが、それならば今補足している連中の援護にも現れそうなものだ。

それもないとなれば彼らは少数と考えて、問題ないだろう。

しかし――

「なら何故、今まで同盟に接触しなかった？ 隠密行動であつたにせよ同盟なら手を貸しそうなものだが」

「その辺の詳しい事情は完全に推測でしか言えません、今になって同盟側と接触しようとしている理由はわかりますよ。アスト・サガミが改革派と合流したからです」

「アスト・サガミだと!？」

ヴィルフリートは驚愕したように、シミュレーターから身を乗り出す。

アスト・サガミ。

キラ・ヤマト。

最初のSEEDと言われる二人の名を知らぬ者などテタルトス軍には一人も居ない。

当然、ヴィルフリートも叩きだした戦果と共にその名前は知っていた。

「ええ。先ほどの戦闘でイレイズガンダムに搭乗していたのは彼です。例の地球に降

下してきた機体のパイロットの一人は彼だったようですね」

「どうしてアスト・サガミだと分かった？」

「前から興味があつたんですよ、彼に。だから動きを見ただけで分かりました」

ヴィルフリートは拳を強く握りしめる。

先日戦った相手が同盟軍のエースだったとなればあれほどの実力者であつた事も頷

ける。

これはチャンスと捉えるべきだ。

誰も倒せなかった奴を倒せば、今までの失態もすべて帳消しになる。

「分かった。引き続き艦の指揮はランゲルト少佐に任せる。俺はこのまま地上戦の訓練を続ける」

「了解しました。クアドラード少佐、無理はなさらないように」

敬礼して艦橋へ戻っていくヴァルターの背中にヴィルフリートは憤りを込めて吐き捨てた。

「……貴様らなどに分かってたまるものかよ。俺は——」

思い起こされる苦い記憶。

常に兄と比較され、冷遇されてきた。

いや、それだけならまだしも自分の存在そのものを無かった事にされた事すらある。

ヴィルフリートにとって勝利こそが、自分の存在を守ることであり、生きるという事なのだ。

「俺は勝つ、必ず」

怨嗟にも似た声で呟くとヴィルフリートは再びシミュレーターのスイッチを入れた。

◇

アレンは揺れる振動で目を覚ますと見慣れない天井に僅かに目を細める。

寝起きで鈍った思考の中、すぐさま現状を思い起こすと士官室に固いベットから身体を起こした。

「部外者だから贅沢は言えないが、あまりいい寝心地とは言えないな」

アイザックは隠密性の高い任務を主眼に開発されたものらしく、長期間任務にも耐えられるように設備は驚くほど充実していた。

だが同時に欠点もある。

その一つがこのベットの固さである。

これでは休めるものも休めまい。

とはいえ最前線に配置された部隊などはベットはおろか、常に野宿が当たり前というものも珍しくない。

それに比べればベットがあるだけ贅沢というものだ。

「着替えるか」

余計な考えを止め、凝った肩を解しながら起き上がると、隣のベットで眠っていた人物の艶めかしい姿が目に入った。

「ううん」

「……ハア。制服で眠る訳にはいかないのは分かるけどな」

隣で眠っているルナマリアを見ながら思わずため息が出た。

現在アイザックには余分な部屋の空きはなく、アレンは強制的にルナマリアと同室という事にされてしまったのだ。

無論、アレンはエクリプスのコックピットで良いと突っぱねようとしたのだが、ルナマリアと整備班によって却下されてしまった。

「戦場で男女の区別なんてしてる暇がないのは当然だけど……」

シーツがはだけ下着姿が丸見えだった。

下着に包まれた豊満な胸や綺麗で細い足もシーツの外にさらけ出されている。

「……いつは」

もしも襲われたらどうするつもりなのだろうか？

「やめ、やめ。考えても碌な結論にならない」

その時は、その時考えればいい。

近くにあった制服を引っ掴み、急いで袖を通すと、一応ルナマリアにも声を掛ける。

「そろそろ起きろ、ルナマリア。朝飯を食いつぱぐれるぞ」

物資が不足し始めているアイザックでは食事量や時間もキツチリ決められており、遅れたら食事は無しとなる。

そうなるとう昼食まで我慢出来なくはないが、それは出来るだけ避けたいところだ。

「……もう、朝ですか？」

「ああ。先に行くぞ」

「えつ、ち、ちよつと待っててくださいよー！」

「部屋の外に出てる」

返事の前に外へ出るとルナマリアの着替えが終わるまで、壁に寄りかかって待つ事にした。

テタルトスの攻勢から逃げ延び、すでに数日が経過していた。

アイザックは敵を警戒しつつゆくりとだが確実に進み続けている。

物資も心もとない以上、出来る限り急ぐべきなのだろうが、焦って敵に見つかってしまつては意味がない。

「それも後、少しか」

建設された前線基地までそう距離は無い筈、おそらく日が沈む前には到着できるだろう。

無論、敵に遭遇しなければの話だが。

「お待たせしました」

「じゃあ行くか」

着替え終えたルナマリアを伴い食堂に向かう。

「後、少して基地に到着ですね。ようやくインパルスの応急修理も出来るかもしれないですよ。これまでパーツが無くて、手が付けられませんでしたから」

「インパルスは複雑な機構をしている分、デリケートだからな。仕方ない」
雑談を交わしながら兵士たちで賑わう食堂に入り、食事の乗ったトレイを受け取る。

「今日も固いパンとミルク、そしてスープですか」

「スープが付いているだけいいだろう。俺はミルクだけでも十分だけだな」

「アレ、まだ背の事を気にしてるんですか？ 流石にもう伸びないと思いますよ」
「くっ、いいんだよ……俺が好きなんだから」

ルナマリアの小言を聞き流しながら空いている場所を探していると、知っている人物を見つけた。

「おはよう、ミナト少尉、フォルケンマイヤー少尉」

「おはようございます、大尉、中尉」

「おはようございます」

先に食事を取っていたアオイとベアトリーゼに挨拶をしながら前に座ると、こちらも食事始める。

固めのパンはお世辞にも美味しいとは言えないが、スープと一緒に食べれば十分に

ける。

この辺は調理師の腕なのだろう。

質素な食事を味わいながら、ミルクを飲んでみるとベアトリーゼがジツとこちらを見ている事に気が付いた。

「どうした少尉？」

「いえ、大したことではありません。それにしても朝食も一緒とは大尉と中尉は仲が良いのですね」

「パートナーですから。それを言うなら少尉達も仲が良いでしょう」

「我々のは単なる腐れ縁です。私と彼が同期だったというだけの関係ですよ」

アオイとベアトリーゼの二人は任官する前、つまり訓練兵時代からの顔馴染だという。

どうやらその頃から二人はこういう関係らしい。

「それに同期ではありませんが、ミナト少尉は訓練途中で部隊に配属されて戦果を挙げられましたので、再会したのはユニウス戦役後ですが」

「へえ、いつも一緒でしたから恋人かと思っていました」

「冗談はやめて欲しいですね。私にも男を選ぶ権利くらいあります」

「そこまで言うかよ」

「何か不満でも？ それにお前にはあの子、ステラが居るだろう？ それとも前に一緒にいた金髪の女の方か？」

「ぐっ」

そこでアオイは見るからに動揺した。

事情はよく分からないが彼にも色々あるらしい。

「そもそもお前は昔から無茶が過ぎる。傍から見ているだけでも心臓に悪い。ポロポロになった機体を修理している整備班は実に気の毒だ」

「ミナト少尉はそんなに無茶をしているんですか？ アレンといい勝負ですね」

「ほう、セイフアート大尉もか」

胡散臭い敬語から素の言葉遣いに代わったベアトリーゼの説教からルナマリアと意気投合し、女性陣は和気あいあいと話を続けている。

反面男性陣は実に肩身が狭い。

「……少尉も色々大変だな」

「……はは、大尉も心中お察しします」

女性陣の小言をどうにか聞き流しながら、アレンとアオイは黙々と食事を進めていった。



ゆっくりではあるが慎重に慎重を重ねたアイザックの航行は結局敵に捕捉される事無く、前線基地目前までたどり着く事ができた。

後は通信を入れ、受け入れてもらうだけなのだが――

「アレン、アレって」

「ああ」

アイザックのブリッジに集められたアレンとルナマリアは哨戒機からの報告を見て、思わず眉を顰めた。

モニターに映し出された映像にはブリュンヒルデなどの機体と破壊され煙が上がる前線基地の姿が映し出されている。

「地球軍か」

「ですね。ウイングダムやイリアス。そしてアレだし」
ルナマリアの視線の先。

一番目立つ形で基地の敷地内に立っていたのは三機のガンダムだ。

「ヴォルケイノ、ストリーム、シュトゥルム。よりによってアイツらか」

どうやら到着するのが一步遅かったようで、前線基地は保守派によって占拠されてし

まっているようだ。

「それだけじゃない。アレに見ろ。あの機体は……」

並び立つ保守派のウィンダムと共に見覚えのない機体が鎮座していた。

イリアスに比べるとややごつく大きめの印象を受けるが、そのフォルムは洗練されている。

GAT-07A 『ブリアレオス』

連合が開発した新型量産機であり前大戦で投入されたアルゲスの後継機。

アルゲスでは装備不可能だったストライカーパックが装備可能になっており、汎用性も向上させている。

「保守派の新型か」

「ええ。アレもイリアス同様かなりの性能を持っています。見た目に反して機動性も高いです」

「どうするんです、アレン。今なら捕捉されていませんけど」

「……フォルケンマイヤー少尉、物資の方は？」

「戦闘は無かったから弾薬の方は少し余裕があります。しかし食料などはそろそろ限界に近いですね」

確かに敵に補足される事は無かったが、移動速度が制限されてしまった。

それによつて想定よりも多くの時間がかかってしまった為、食料や水は切迫した状況になつてゐるようだ。

離脱するにしてもストックホルムに辿りつくまではおそらく持たない。

弾薬についてもこの先敵に捕捉されないという保証がない以上、余裕があるとも言えない。

食料と水は他の街で補給する事もできるが、弾薬と推進剤はすぐにでも必要になる筈だ。

「煙が上がっている所からみても占拠されてさほど時間も経っていないようだし、基地自体もそう大きな損傷は確認できない。どうにかして保守派を追い払いたいが……」

「この戦力では難しいですよ。しかもあの三機もいるし」

「有名なのか？」

「メキシコ戦線でも派手に暴れまわってましたからね、アイツら。腕も一流です」

「保守派のエアースか」

「これで『彼』までいたら状況としては絶望的でした。それでどうされますか？」

ベアトリーゼの呟いた『彼』というのが誰か気になったが、今はそれよりもこの状況をどうするかの方が重要だ。

「情報が足りない。せめて友軍の状態や敵の規模くらいは調べたい……潜入するか」
「潜入ですか？」

「ああ、もうすぐ夜だ。夜の闇に紛れて基地内に潜入する。問題は誰が行くかだが……俺が行こう。アイザックはもう少し距離を取って敵に発見されないように注意してくれ」

敵の襲撃を警戒はしているだろうが、連中も占拠したばかりの基地内すべてを把握している訳じゃない。

それにこの手の任務は慣れている者が行く方が効率的だ。

「私も行きますよ、アレン」

「ルナマリア、何を?!」

「私はインパルスが修復されないと動けませんし」

「危険すぎる。お前はエクリプスで待機しろ、俺が行く」

「アレンこそ一人で行くのは無茶です。今、この艦では私が一番身軽です」

ルナマリアが言いたい事は分かるが——やはり賛成はできない。

危険すぎる。

アレンが再び反対しようとする、意外な所から助け船が出た。

「なら私も行きましょう」

「フォルケンマイヤー少尉まで!」

「これでもそういつた諜報活動は得意分野ですから。戦闘に出る訳ではありませんからアイザックの守りもミナト少尉がいれば事足りるでしょう」

「しかし!?!」

「大尉、こうなつたら説得は無理ですよ。こいつの性格は俺が一番よく知っていますから。少尉、俺の事を注意するくらいなんだから、無茶はすんなよ」

「お前に言われる日が来るとは思わなかった。しかし忠告はありがたく受け取っておく」

アオイとベアトリーゼは乗り気で基地内へと潜入に関して打ち合わせを始めてしまった。

出来れば止めたいが、アレンは所詮部外者。

ルナマリアは止められても、ベアトリーゼは止められない。

仮に上官命令で無理やり止めたとしても、今後の関係に遺恨を残す事になるだろう。
ならば――

「仕方がない。ミナト少尉も言っていたが、無茶だけはするなよ、ルナマリア。作戦を詰めよう。地球軍の援軍もすぐに来る筈だし、テタルトスも追撃してきている筈だ。のんびりとはしていられない。急ぐぞ」

「了解」

アレン達は周辺の地図と哨戒機からのデータを基に詳細を詰め始めた。

◇

ウィーン近くに建設された前線基地はマケドニア要塞や他の基地に比べてやや簡素な作りになっている。

これは激化していくヨーロッパ戦線の重く見た同盟が国家の許可を取り急遽、建造したものだからである。

とはいえ規模こそ大きくはないが基地としての機能を果たすには十分だった。その基地にアレン達潜入隊が茂みに隠れながら静かに近づいていく。

「……やはり敵からの襲撃を警戒しているな」

見張りの兵士の数が予想よりも多い。

別段、ここは重要拠点という訳ではない。

しかし保守派からすれば、ここを占拠しておけばストックホルムやジブラルタルも攻めやすくなる。

だからこそ基地を破壊せず最低限の損傷で止めたのだ。

「兵士の数は多いが、まだ慣れてない所為で隙が多いな。増援が来る前の今が好機か」あの兵士の数は労力を割いた以上、そう簡単にここは渡せないという意味表示に違いない。

「ここからは作戦通りで行く。各自無茶はするなよ」

「了解」

アレンはあらかじめ目星をつけておいた最も人数が少ない位置に慎重に近づいていく。

そして哨戒している兵士を茂みの中に引っ張り込んだ。

「何だ!? 何——」

動揺する兵士の首に腕を回して力を籠め、そのまま始末した。

さらに近くにいたもう一人を押し倒し、手で口を覆うとナイフで素早く喉を裂く。

返り血に気を付けながら、装備を奪うとルナマリアとベアトリーゼに手渡す。

《おい、どうした? 何かあったのか?》

「異常なし。哨戒を続ける」

胸ポケットに常備してあった無線に返事を返すとスイッチを切り、死体を見つからないように茂みの中に隠した。

こんな事をしても見えされるのは時間の問題だろう。

急がなくてはならない。

アレンは二人にハンドシグナルで指示を出しながら、基地内へと潜入した。潜入した基地内は思った以上に静かだった。

部屋の前や廊下には殆ど見張りもおらず、外に比べて明らかに敵兵士たちの数が少ない。

どうやら内部を警戒するよりも、外からの襲撃に備えているらしい。

誰も居ない近くの部屋に忍び込み、設置してある端末から基地内の情報を素早く引き出す。

「流石に今の状況で端末に情報を入力するような間抜けな事はしていないか。しかし

キーボードを叩き、メイン端末に介入すると監視カメラの映像を呼び出す。

するといくつかの部屋に人質らしき者が閉じ込められている姿が映し出されていた。

「無事だったようだな」

映像を見る限り、閉じ込められているだけで暴行などの行為はされていないようだ。

「保守派がベルリン条約を守るなんて意外ですね」

「ベルリン条約は世界に向けて発表され、国際的にも効力を持つ戦時条約だ。蔑ろにはできない、特に昔の連合を再建しようと考えている保守派はな」

「よし。では事前の打ち合わせ通り、俺が人質解放の方へ行く。ルナマリアは仕掛けの準備、フォルケンマイヤー少尉は格納庫で物資とモビルスーツの確保を」

「了解」

出来るだけこちらの発見を遅らせる為、カメラに細工を施すと三人はそれぞれの役目をこなす為、走り出した。

◇

基地内における作戦行動は順調そのものだった。

ルナマリアは敵に見つからないように部屋やダクトを使って移動しながら、背負ったリュックから取り出した四角い物体を部屋へ設置する。

慎重にダクトを移動していると流石に基地内が騒がしくなってきた。

「もう限界ね。そろそろミナト少尉達も動く頃か。私も格納庫の方に」
時間を確認しながらダクトから廊下へ降りると格納庫に向かって走り出した。
だがその時、人の気配と共に銃声が響き渡る。

「くっ」

銃声と共に前方に飛んだのが良かったのか、銃弾を回避に成功する。

同時に銃を構えて銃声が聞こえた方向へ突きつけた。

そこには口元以外は髪の毛すら見えない程顔全体を覆うヘルメットのような仮面を被っている人物が銃を構えて立っていた。

「貴方、誰？」

かろうじて分かるのは体つきから見て女性という事くらいだ。

ルナマリアは思わず息を飲んだ。

顔が見えない事もそうだが、仮面女からにじみ出ている強烈な殺意がルナマリアの肌をチクチク刺すように伝わってくるからだ。

「……死ね」

マイクでも使っているのか機械音のような声で呟くと仮面女は信じがたい速度で一気にルナマリアの懐に飛び込んできた。

「なっ!？」

速い!？」

咄嗟に体を伏せ、至近距離から突きつけられた銃を回避する。

しかしそれを読んでいたように仮面女はルナマリアに蹴りを入れてきた。

「ぐう」

腕で防いだものの、仮面女はさらに追撃を仕掛けてくる。

「しつこいわね！」

ルナマリアは撃ち込まれた銃弾を避けるので精一杯で立ち上がる暇もない。たまたらず廊下を転がり、仮面女の猛攻から逃れようと必死に逃げる。

無様な姿に見えるかもしれないが、どうにか反撃の糸口を見つければ、やられてしまう。

「この！ 何時までも調子に乗るなあ!!」

持っていたリユックを投げつけ、仮面女の動きを鈍らせると体勢を立て直し銃のトリガーを引く。

しかし次の瞬間、ルナマリアは信じがたいものを見た。

仮面女は最低限の動きだけで銃弾を回避すると壁を蹴って駆け上がり、飛び蹴りを放ってきたのである。

完全に虚を突かれたルナマリアは蹴りをもろに受け、廊下に倒されてしまう。

「ぐっはあ」

廊下に叩きつけられ、痛みで息ができなくなった。

思わず蹲ろうとしてしまいが仮面女がそれをさせない。

ルナマリアの肩を力任せに足で踏みつけ、押さえつけると銃口を向けた。

冷たい銃口がルナマリアの額を狙って突きつけられる。

「ア、アンタは……誰？」

「死ね」

ルナマリアの質問には答えず仮面女は殺意だけを叩きつけ、トリガーを引こうと指を掛けた。

第11話 命懸けの離脱戦

地球連合軍最大の拠点であるマケドニア要塞。

既存の軍事基地とは根本的に規模が違うこの要塞では現在ヨーロッパ戦線打開に向け、更なる戦力増強に舵を切ろうとしていた。

その方針を打ち出し、半ば強硬した男こそマケドニア要塞の指令官ガスパール・ブレース大佐であつた。

彼こそ前回保守派の極秘裏会合で激怒していた人物である。

「いつまでもあんな若造に好きにさせられるものか」

保守派の中には若いクレメンス・イスラフィールに対して反感を持つ者達も少なくな
い。

ガスパールもその一人である。

彼の手腕を認めていない訳ではない。

むしろイスラフィールの才覚とカリスマ性は本物である。

その強烈なまでの覚悟には恐怖すら覚える程だ。

しかし長年戦場で戦い抜いてきたガスパール達にとって自分よりも経験も浅く、若いイスラフィールに従う事には強い抵抗感があるのだ。

それでも付き従っているのは保守派の現状を考え、自陣営を纏め上げる旗頭が必要だと弁えているからだった。

「だが、それも改革派を討ち倒すまで。それが済めばあんな小僧に用は無い」
今回のマケドニア要塞の戦力強化も、来るべき時に備えた布石である。

ガスパールとしては新型であるブリアレオスの生産を進めたいところなのだが、高性能な分コストが高い。

反面イリアスは扱いやすく、量産コストもブリアレオスに比べ安価だ。

「やはりイリアスの強化プランを優先させるべきか」

イリアスの強化型はすでにロールアウトし、エクステンデット専用機としてテストに入っている。

だが、それも量産するには些か問題も残っていた。

あちらを立てればこちらが立たず。

ガスパールが頭を抱えながら、データを精査していると端末に通信が入る。

《お久しぶりですね、ブレイズ大佐》

「貴様か。何の用だ？」

《いえ、御承知とは思いますが久々にマケドニア要塞近くまで来ていましたね。私の部下も預けていますから、今度ご挨拶に伺おうかと》

「好きにしろ。どうせ補給もさせろというのだろうが。その分はこちらに手を貸してもらうぞで」

《承知していません。そういえば小耳に挟んだのですが、ウィーン近くにある同盟の前線基地に制圧作戦を仕掛けたとか》

ガスパールは僅かに顔を顰めた。

確かに現在、ウィーン前線基地に対して作戦行動を取っている。

だが、何故こいつがそれを知っているのか？

「貴様、それをどこから？」

《フフ、言ったでしょう。小耳に挟んだだけだと。ではひと先ずはこれで。僭越ながら作戦成功を祈っていますよ》

通信を切り、窓辺へと近づくと作戦が行われている方向へ視線を向ける。

「フン、余計なお世話だ。『彼』が増援に向かった以上、失敗はない。それにしても――」

横目で机の上に置いてある書類の方を見る。

その表情は実に苦々しいものであった。

「……テタルトスめ。この時期に『会谈』などと、何を考えている?」

それとも同盟の外交戦略か、もしくはプラントの働きかけによるものか。

どちらにせよ、厄介ごとである事には変わりはない。

ガスパールは嘆息しつつ、作戦が行われている方向へ視線を戻した。

◇

誰も居ない廊下を僅かに音を立てながら、アレンは友軍が閉じ込められている場所へと走っていた。

「外に兵士を配置してくれていたのが幸いしたな」

基地内に残っている兵士達の数はごく僅かで、残りはモビルスーツによる警戒と外の哨戒に駆り出されている。

これはアレン達にとって思わぬ幸運だった。だ

がそれもマケドニア要塞からの増援がたどり着くまでの間の話である。

増援がたどり着いた瞬間に自分たちは逃げ場を失う。

つまりいかに早く目的を達成するかという時間との勝負になる。

「確かこの辺りだった筈」

基地端末から落としたデータを確認しながら、曲がり角から目的の場所を覗き込んだ。
だ。

流石にここには人手を割いているようで、数人見張りとして立っていた。

「時間がない。……フォルケンマイヤー少尉、そっちはどうか？」

《予定通り、格納庫に到着しました。物資と地球軍のモビルスーツを確認——ただ、同盟の機体は確認できず》

すでに連中に運び出されてしまったのか、それともすべて破壊されてしまったのか。嫌な想像が頭を過る。

脱出の要はベアトリーゼが格納庫でモビルスーツを確保できるか、否かにかかっている。
る。

自分達だけならともかく、人質を連れて脱出するには必須事項なのだ。

「地球軍の機体は確保できるか？」

《ホーク中尉の合図に合わせて、やってみます》

「……頼む。慎重に進むのはここまでだ」

《了解》

アレンは右手に構えた銃のセーフティを解除、そして左手にナイフを握る。

そしてタイミングを見計らい曲がり角から勢い良く飛び出した。

「何!?!」

突如飛び出してきたアレンに完全に虚を突かれた形となった保守派の兵士は反応が遅れた。

アレンはその隙を見逃さない。

容赦なく銃弾を叩き込み兵士の眉間を撃ち抜くとナイフをもう一人の兵士に投げつける。

ナイフが兵士の腕に突き刺さり、持っていたライフルを廊下に落とした所に銃弾を数発叩き込んだ。

「くそー!」

動揺から立ち直った残りの兵士がライフルを構えるが、それはあまりに遅すぎる対応だった。

アレンは床に倒れた死体を蹴りつけて敵の視界を塞ぎ、死角から飛び出した。

「何!?!」

兵士の腕を掴み上げ、眼前に銃を突きつける。

躊躇いなく撃ち込んだ銃弾が兵士の顔を撃ち抜き射殺した。

見張りの兵士を始末したアレンは周辺に他の兵士達がないことを確認すると、死体

の懐から鍵を奪い部屋の扉を開けた。

「だ、誰だ!？」

少し広い薄暗い部屋に怯えるように蹲る人影とそれをかばうように数人の軍服を着た男達が立ちふさがっている。

軍服を着た者達は友軍のようだが、後ろに蹲っているのは服装から見て民間人のようだ。

年端もいかない少女や子供の姿も見える。

「落ち着いてください。自分は同盟軍独立部隊『グラオ・イーリス』所属、アレン・セイフアート大尉です」

「グ、グラオ・イーリス……味方」

全員がホッと安心したように息を吐いた。

しかしこちらとしてはここで弛緩されては困る。

ある意味此処からが本番なのだ。

「申し訳ありませんが、時間がありません。まずは状況確認を行いたい。現状を報告してください」

「は、はい」

仕官と思われる男が掻い摘んでこれまでの事を報告してくれた。

今から約一日くらい前、ここ前線基地にとある一報が入ってきた。

内容は地球軍による戦闘に巻き込まれた為、救援に来てもらいたいという要請だった。

それは同盟軍にとって何時も通りの案件。

指揮官もそう判断し斥候部隊を派遣、救援活動を行う事を決定した。

しかしそれは同盟軍を誘い出す罠だった。

被害にあつた民間人を救助し、無事基地に帰還した所に地球軍保守派からの奇襲を受けた。

普通の戦力であればストックホルムからの救援が来るまで持ちこたえることが出来たかもしれない。

しかし襲ってきたのは三機のガンダム。

その猛攻に晒されたモビルスーツ隊はほぼ壊滅。

僅かに逃げ延びる事が出来た者も居るが、司令官も含め戦死か捕虜の身になってしまったらしい。

「なるほど。それで民間人がここに居る訳ですか」

「ええ。落ち着いたらアムステルダムの方へ送る予定になっていたのですが……」

アムステルダムはベルリン条約で規定された戦闘禁止区域に属する都市の一つだ。

一昔前のコペルニクスと同じ立場のような都市になる。

確かにあそこなら戦闘に巻き込まれる心配はほぼ無いだろう。

「モビルスーツが残っていないなかった訳も理解できませんでした。基地内にあったデータは？」

「司令が戦死される前にロツクを掛けられました。まだ連中は解除できていない筈です」

「了解しました。……只今をもつてこの基地は放棄、データを含めた重要なものはすべて破壊します。地球軍改革派所属の仲間が格納庫で脱出の準備を整えていますので、そちらに向かつてください。俺は他の部屋に閉じ込められた人達の解放に向かいます」

「ハー！」

廊下に倒れ込む兵士の死体から装備を剥ぎ取り、味方に手渡すと残りの人質の下へ走り出した。

◇

額にポイントされた冷たい銃口。

肩を踏みつけ、殺意を込めて見下ろす仮面の女。

ルナマリアの命を奪おうと、仮面女は銃口に指を掛ける。

「死ね」

「……悪いけど、時間切れ!」

ルナマリアは手に握っていたスイッチを押す。

すると事前の仕掛けておいた爆弾が爆発、ダクトを伝い凄まじい衝撃波が通路に噴きだした。

「なっ?!」

爆発の衝撃でルナマリアを踏みつけていた仮面女の力が僅かに緩んだ。その隙に仮面女を引き剥がし、痛む体に鞭打って走り出した。

「貴様!」

「そう簡単に死ねないのよ! 私はまだまだアレンの背中を守らないといけないからね」

「……アレン?」

追ってこない仮面女を振り切るように走り抜け、ルナマリアは持っていたもう一つのスイッチを押した。

仕掛けてきた爆弾が作動し、基地内を再び大きな振動が襲った。

「よし、これでデータベースも破壊できた筈。後は格納庫に……ぐっ、痛っ! あの

女、思いつきり、蹴つてきて……ハア、ハア」
体の節々が痛む。

だが、こんな所で倒れてなんていられない。
またあの仮面女に襲われたら、今度こそ殺されてしまうだろう。

「その前に合流しないと」

ルナマリアは壁に預けていた身体を起こし痛みに耐えながら、どうにか格納庫に辿りつく。

そこでは激しい銃撃戦が行われていた。

「うわ、派手にやってるし」

格納庫はコンテナを盾に派手な撃ち合いが繰り広げられていた。

素早く状況を確認し味方と合流しようとするが、こちらを発見した保守派の兵士に狙い撃ちにされてしまう。

「くっ」

どうにかコンテナの陰に飛び込み難を逃れた。

しかし痛みで体が上手く動かない。

迫ってきた兵士に成す術なく、せめて一矢報いてやろうと銃を握った。

「昔に比べたら私だって上手くなってるのよ！」

覚悟を決めたその時、横から発砲された銃弾に保守派の兵士は撃ち倒された。

「ルナマリア、無事か!？」

「あ、アレン!!」

ルナマリアは安堵しながら駆け寄ってきたアレンの胸に飛び込んだ。

「おい。大丈夫なのか!？」

「う、ちよつと、き、きついかも。かなり手強い奴にやられちゃいまして」

「ジツとしてろ。トレーラーに運ぶ」

アレンはルナマリアを背負い、助けた民間人たちと共にコンテナの陰を利用して奥に止めてあったトレーラーに走り寄った。

「大尉、全員の乗車確認」

《こちらもウィンダムを確保しました》

「よし、脱出する。フォルケンマイヤー少尉!」

《了解》

ルナマリアを助手席に乗せ、アレンがトレーラーに乗り込む。

それを合図にベアトリーゼの奪ったウィンダムのトードスシュレツケンが歩兵をすべて排除、ビームライフルが格納庫の隔壁を吹き飛ばした。

《先に行きます》

「頼む、予定通りアイザックと合流後、この地域より離脱する」
格納庫を飛び出したウインダムに続くようにトレーラーも外に向かって走り出した。



アレン達の作戦が開始される少し前、アイザックに待機していたアオイも出撃準備に追われていた。

調整を行いながら、機体状態の確認を行っていると、兵士の1人がコックピットを覗きこんでくる。

「少尉、哨戒機より報告がありました。連中を捕捉したと」

「分かった。じゃ、こっちも作戦通りに行くから、アイザックは所定通りの場所に移動してくれ」

「了解しました。スカッドストライカーの調整も終わりましたので、今回から使用可能です」

「ありがとう」

アオイは兵士に礼を言いながらコックピットのハッチを閉じる。

そして背中にスカッドストライカーを装着すると眼前にある隔壁が解放された。

「スカッドストライカー、異常なし」

スカッドストライカーは連合が高速機動戦闘用に開発した試作ストライカーパックである。

エールストライカー以上の機動性を持っているが、操作性はお世辞にも良いとは言えない玄人向きの装備になる。

まあアオイはユニウス戦役から使い慣れている分、普通のパイロットよりは使いこなせているから問題はない。

「アオイ・ミナト、イレイズガンダムMk-II、出ます！」

スカッドストライカーのスラスターが噴射され、イレイズが前方に押し出されるように外へ飛び出す。

アオイは久しぶりに味わう強烈なGに歯を食いしばり、操縦桿を強く握りしめた。

「スカッドストライカーは久しぶりだけど！」

とてもブランクがあるとは思えない動きで機体を操る。

上手い具合にGにも慣れてくると、アオイはイレイズを前線基地の方へ加速させた。こちらの事をすでに捕捉しているらしく、ウインダムやイリアスが空中に飛び上がってくるのが見えた。

「結構数があるな。だからこそ、こっちで引き付けないな！」

アオイの任された役目は潜入したアレン達が出脱しやすくする為、基地周辺で警戒していたモビルスーツを引き付ける事。

危険な役目だが、これを仲間にさせる訳にはいかないとアオイ自らこの役目を志願した。

「大尉達の邪魔はさせない！」

速度を上げ、ウインダムとすれ違う瞬間にビームマシンガンを発射した。

マシンガンの銃口から数発のビームがウインダムの胴体に風穴を開け、撃破する。

「まだまだアア!!」

相手のビームライフルの弾幕をその速度で振り切り、対艦バルカン砲とマシンガンを使い分けながら敵をイレイズの方へ引き付けていく。

「そうだ、そのままこっちに來い」

側面から迫ってきたウインダムがステイレット投擲噴進対装甲貫入弾を投げつけてきた。

「あれはヤバイな」

アレをは所謂盾殺しだ。

真正面から受け止めればアンチビームシールドが確実に破壊されてしまう。

多くの敵機を相手に立ちまわる以上、今盾を失うような失態はできない。

飛んでくるステイレットをイーゲルシュテルンで破壊する。

捌ききれなかった貫通弾を突き出したブルートガングで弾き、近づいてきたウィンダムのコックピットを串刺しにした。

「悪いな」

ぼつりと眩きウィンダムから刃を抜く。

そしてすぐ様次の敵に向かおうとしたその時、コックピット内に警戒音が鳴り響いた。

「ッ!? 後ろ!」

飛んできた鉄球を機体を水平に寝かせて回避すると、上空から降下しながら攻撃してきた敵機にビームマシンガンを撃ち込む。

「やっぱり最初に戻ってきたのはお前かよ、シュトウルム!」

攻撃してきたのはシュトウルム・レイダーガンダムだった。

「たく、嫌な予感がしたんで早めに戻ってきて正解だったみたいだな!」

「ジルベールか! てことは囷はバレたな。相変わらず察しが良すぎるんだよ!」

アオイ達が基地にたどり着いた時、三機のガンダムは基地内に駐留していた。

一対一ならともかく、まともに戦ってはあっさり追い込まれるのは目に見えている。

だから基地近くでアイザック所属のウィンダムを囷に三機のガンダムをおびき出し

ていたのだ。

「こんな所でお前の面を見るなんてな、アオイ・ミナト！ メキシコ戦線での借りを返させてもらうぜ！ ていうかここで仕留めないと姉御にまたどやされるんでね！」

「ジルベール・ブラジウス!!」

マシンガンの射撃を旋回して避けたレイダーは再び突っ込んでくる。

圧倒的な空戦能力を持つレイダー相手に空中での戦闘は不利だ。

スカッドストライカーも直線的な加速なら負けていないが、その分操作性が悪いという欠点がある。

「やっぱり真つ向勝負はリスクが高いよな。ならばー」

至近距離からのツォーンを防御しながら、バルカン砲でレイダーをけん制するとビームマシンガンを連射する。

しかしレイダーはバレルロールしてビームマシンガンの射線から逃れると、叩きつけるようにミヨルニルIIを振るってきた。

鉄球から伸びている棘から発生したビームスパイクがイレイズの正面から襲い掛かる。

「当たるかアア!! 落ちろ!!」

「ぐっつううう!!」

アオイは目一杯操縦桿を引き、さらに下方へと逃れると鉄球の棘が僅かに装甲を掠めていった。

「どうした、防戦一方だな！」

「うるさい、こつちにはこつちの事情があるんだよ」

「ああ、そうかい。でもいいのか？ グズグズしてると姉御達まで戻ってくるぜ！」

「余計なお世話だよ！」

攻撃を加えては離脱していくレイダーの攻撃を地面スレスレの位置で捌く。

そして迫ってきたウインダムを撃ち落としながらレイダーの動きを観察した。

あの機体の特性はその火力と加速力を利用した一撃離脱、ならば――

「それならそれで、やりようはある！」

マシンガンとバルカン砲でレイダーを誘導し、肩に装備したビームブーメランを投擲すると同時に前方へ突撃する。

「そんなものに当たるか！」

「そう来ると思ってたよ！」

ブーメランをビーム砲で迎撃するレイダー。

その迎撃する一瞬の間を狙い、アオイはレイダーの背中に組み付いた。

「ぐっ、な、離れろっての！」

「このまま押しつぶす！」

「できると思うな！」

イレイズに組み付かれたレイダーは降り落とそうと速度を上げ、無茶苦茶な軌道を取り始める。

思わず酔いそうな程にコックピットが激しく揺れるが、アオイは歯を食いしばりビームマシンガンを構えた。

「お、ちろオオオオ!!!」

レイダーの背中に向けて発射されたビームがウイングを吹き飛ばし、スラスターを損傷させる。

「ぐおお!! この野郎がアア!!」

レイダーは速度を落としながらも、逆制動を掛けモビルスーツ形態に変形するとイレイズを吹き飛ばした。

「アオイ！」

「ジルベール！」

イレイズが落下しながら発射したビームマシンガンとバランスを崩しつつも放ったレイダーのツォーンが空中で交錯する。

ビームマシンガンの一射がレイダーの頭部の半分を吹き飛ばし、ツォーンがイレイズ

のマシガンごと肩部装甲を抉り飛ばした。

「ぐううう!! まだ!」

アオイはどうか体勢を立て直し、スラスターを噴射し地面に着地する。

レイダーもまた墜落だけは避けられたようで、少し離れた地点に着地したのが見えた。

その腕前は流石と言うべきだろう。

しかし倒し切る事はできなかったが、あの損傷は結構な深手。

「肩の損傷はひどいけど、戦闘には問題ない。今の内に——」

手負いのレイダーに追撃をかけようとするが、それを阻むように幾重ものビームが降りかかった。

アオイは盾を構えて後退、撃ち込まれた強力なビームをシールドで防御する。

これは『スキュラ』だ。

モビルスーツに搭載される火器の中でも最強クラスの武装。

食らえばそれだけで致命傷になる。

「ぐつ、くそオオ」

踏ん張るようにスラスターを吹かす。

だが、無数の閃光と共に盾に圧力を掛ける強力なビームの一撃を抑えきれずシールド

が弾き飛ばされてしまった。

アオイは後方に飛びながら両手でビームライフルショーテーターを構え、敵機の方へ突きつける。

「アレは……戻ってきたのか、ヴォルケイノ、ストリーム！」

モニターには急速に接近してくる二機のガンダムが映し出されていた。

「大尉、イレイズですよ！」

「ハア、ジルベールの馬鹿め、またアオイの坊やに派手にやられてんじやないか！」
傷ついたレイダーを守るように二機のガンダムがイレイズの前に立ち塞がる。

「久しぶりだねえ、アオイの坊や」

「お久しぶりです、バルマ大尉。メキシコ戦線でやり合つて以来ですか」

「まさかアオイがヨーロッパに居るとは思つてなかった。同期のよしみで私があなたの止めを刺してあげる」

「カーラ・アルマディオ少尉か。悪いけど、そう簡単に倒されるつもりはないさ」

「そんなおもちゃみたいな旧型機で私たちの相手ができるとでも？ ジルベールの阿保は油断したみたいだけどさ」

それはある意味事実だ。

イレイズMK-IIの性能は決して低くはない。

しかし新型機を複数相手に出来るほど余裕がある訳でもないのだ。

先ほどのレイダーとの戦闘はあくまでもこちらが取った手が上手く嵌っただけに過ぎない。

次、同じ条件で戦えばこうも容易くはいかないだろう。

「簡単にいくとは思ってないさ。でも、今日はここまでだけだな」

「何？」

そこでその場にいた全員が何かが接近してくる事に気が付いた。

「この反応、戦艦？」

「アレは……まさか、テタルトス!?!」

ウイーン前線基地の正面に位置する場所から現れたのはテタルトスの地上戦艦、オネ級『カルキディウス』だった。

「まさか、改革派と手を組んだのか!?!」

「さあね!」

ここまでがアレン達と立てた作戦だった。

潜入したアレン達を逃がす為、アオイは基地の外で派手に暴れて敵を引きつける。

しかしそれだけで確実に逃げられるという保証はない。

だからこちらを追ってきているテタルトスを利用させてもらったのだ。追ってきて

ているテタルトスを地球軍とぶつければ、離脱できる隙も出来やすくなる。

ガンダムを引きつける為に囷となったウインダムは同時に追ってきたテタルトスを引きつけるといふ役目も担っていたという訳だ。

アオイは二丁のビームライフルショーティーを連射、地面にビームを叩き込む。

ビームによって土煙が舞い上がり二機のガンダムの視界を塞ぐと即座に反転、加速した。

「あ、待てー！」

「悪いけど、決着はまた今度だ！ アイザック、砲撃開始！」

アオイの指示に従いカルキデウスが現れた方向とは逆。

すなわちウイン前線基地を挟んだ反対に身を隠していたアイザックから無数のミサイルが発射され、周辺に降り注いだ。

ミサイルが基地や地面に着弾し、爆発と共に粉塵が舞う。

「急速離脱!!」

スカッドストライカーのスラスターを全開。

爆煙に包まれる基地内を突っ切り離脱を図るアイザックに向かって突き進む。

しかし燃え盛る基地をどうにか抜けた先で、イレイズの進路を阻むように別方向からの砲撃が撃ちかけられた。

「何!?!」

機体を逸らし旋回する形で攻撃を回避すると、そこに二機のモビルスーツの姿が見えた。

一機はブリアレオスだが、もう一機は――

「まさか……イレイズ!?!」

装甲の色は青みを帯び、機体の形状もずいぶん違いがあるがアレは間違いなくアオイが搭乗しているイレイズガンダム系の系譜に違いない。

GAT-X141-2 『イレイズガンダムMK-III』

地球軍保守派が開発したモビルスーツ。

イリアスのプロトタイプに相当する機体であり、その性能はイレイズガンダムMK-IIを軽く上回っている。

「データ照合、イレイズMK-IIIだつて!?!」

イレイズMK-IIIは背中に設置されたビーム砲を発射、腰にマウントしていた対艦刀『ネイリングII』を抜くとこちらに向かって突撃してきた。

「速い!?!」

ジグザグに捉えにくく動き、ビーム砲を回避しながら、こちらもビームライフルショーティーを発射する。

しかしそれをいとも容易く避けてみせたMK-IIIは対艦刀を振り下ろしてきた。

「こいつー！」

アオイは右のブルートガングで受け止めようと、腕を振り上げるがそこで異変に気がついた。

「右腕の反応が鈍い!? さっきの損傷の所為か!」

多分ビームライフルショーテーターを連射し続けた反動で、元々悪かった状態がさらに悪化したのだ。

この状態では受けきる事ができないと判断したアオイは無理に機体を半回転させ、左側を敵の刃の正面に持つてくる。

「間に合え!」

左腕のブルートガングを振り上げ、ギリギリネイリングを受け止めた。弾ける稲光と共に刃を交わり、二機の兄弟機を光が照らす。

「ぐっ、踏ん張りがきかない!」

無理な体勢での鏢迫り合い。

しかも相手のほうが勢いもある。

このままでは押し切られてしまう。

そこに側面に回り込んだブリアレオスのスキュラがイレイズMK-IIに襲いかかる。

「くそー！」

足を振り上げMK―IIIを引き離す。

その反動で難を逃れるとイーゲルシユテルンで二機を牽制しながら、地面ストレスの位置を滑るように離脱を試みる。

だが、逃がさないとばかりに二機のモビルスーツは攻撃の手を休めない。

「……………」のままじゃアイザックも逃げ切れない。仕方ないか」

アイザックを逃がす為、この場に残る覚悟をアオイが決めた。

その時、イレイズMK―IIを援護するように閃光が敵機に向かって放たれた。

「少尉、今の内に離脱しろ！」

「大尉!？」

振り返れば解放されたアイザックの格納庫からアレンのエクリップスがビームライフルを構えて援護射撃を行ってくれていた。

「急げ！」

「了解！」

エクリップスの援護を受けながら、反転したイレイズMK―IIは脇目も振らず、アイザックの格納庫目掛けて突撃する。

もうバッテリーの残量もギリギリ、スラスターのガスにも余裕はない。つまりはこ

れが離脱する為に最後のチャンス。

「届けよ、イレイズ!!」

スカッドストライカーのスラスタを全開にしてアイザックにギリギリ追い付いたイレイズは手を伸ばす。

それをアレンのエクリプスがガツチリと掴むと力任せに格納庫に引き入れた。

「エンジン全開、振り切れ!!」

アイザックのエンジンが最大出力で噴射され、戦闘宙域から一気に離脱を図る。

その間、格納庫から発射される各モビルスーツによる砲撃で敵は追い付く事も出来ずに振り切られた。



速度を上げ姿が見えなくなっていくアイザック。

イレイズMK―Ⅲのコックピットでそれを見届けたパイロット、ジェラルド・フェオルは肩を竦めながら、近くのブリアレオスに指示を出した。

「退くぞ。任務は完了した」

「良いのですか、このまま逃がしても? 奴らはここで始末しておくべきだと思います

すが？ ミネルバが地球に降下したという情報も入っています」

ブリアレオスが搭乗していたのは仮面の女だった。

表情は見えないが、このまま敵を逃がす事に不満そうな雰囲気は十分に感じ取れた。

「ああ。奴らの行先は見当がついている。部隊を先回りさせてあるから問題はない。それに今回の命令は十分に果たしたさ」

保守派がここを襲撃した本当に理由は基地の制圧ではなく、基地の無力化だった。

もちろんウィーン前線基地を占拠、そのままこちらで利用できるのならばそれに越した事はない。

しかしそれは戦力を無駄に消耗させてまで行う必要はない事だった。

「奴らの追撃に関しては命令が下ってからだ。それよりも今はテタルトスの連中をどうにかする事が先だ。いいな、エリニス」

「……了解しました」

テタルトスと戦闘を行っている味方の援護に向かうイレイズMK-III。

エリニスと呼ばれた少女はアイザックが逃れた方向を一度だけ振り返ると、イレイズMK-IIIの後を追って味方の援護に加わった。

第12話 目指す場所

中立同盟とテタルトス月面連邦国が開戦状態に陥って早、二か月以上。

アメノミハシラ及びストックホルム基地周辺で起こった大規模戦闘以降、両軍は散発的な戦闘を繰り返していた。

そんな緊張感が漂う宇宙で戦闘の残骸を避けるように二つの艦が合流しようとしていた。

一隻は『ヤキン・ドゥーエ戦役』よりザフトで現在まで使用され続けている艦ナスカ級。

もう一隻は黒い装甲を持ちアークエンジェルとほぼ同一の形状を持った戦艦『ドミニオン』である。

ドミニオンはユニウス戦役では同盟の特殊部隊に所属し様々な極秘任務に就いてきた特務艦とも言える戦艦である。

現在は独立部隊『グラオ・イーリス』二番艦として運用されていた

「オーデン大佐、予定通りナスカ級と合流しました」

「分かった」

ドミニオンの指揮を任されているナタル・オーデン大佐はオペレーターからの報告を受け、手元のキーを操作する。

モニターに映し出されたナスカ級の姿を確認するとキビキビと指示を飛ばした。

「よし、格納庫にランチ受け入れの準備をさせろ！ モビルスーツ隊にも警戒を怠るな！」

「了解」

ナスカ級がドミニオンの横に着くと、ハッチが解放されモビルスーツと共にランチがこちらに向かってくる。

「何事もなかったようですね」

「ああ。だが油断するなよ。例の赤いモビルスーツの事もあるんだ」

「了解」

昨今輸送艦を襲撃し、軍部を騒がせていた赤いモビルスーツはその姿を見せなくなっていた。

誰か他の者に討たれたのか。

もしくはすでに目的を達成したからなのか。

理由は判然としないがナタルとしては簡単に警戒を緩めるつもりはなかった。「しばらく此処を頼むぞ」

「ハッ」

副官にブリッジを任せ、格納庫に向かった。

ナタルが格納庫に足を踏み入れ、収容されたランチの側へ近づく。

ランチのハッチが開き、そこから身なりを整えた人物が姿を見せた。

プラント最高評議会議長レヴァン・カーライル議長である。

「道中お疲れさまでした、カーライル議長」

「いや、大佐こそ任務があるにも関わらず無理を言って済まなかった。しかし今回急に会談が決まってね、私が出ない訳にはいかないんだ」

今回ドミニオンに課せられた任務は二つ。

一つはレヴァンを地球に送り届ける事。

もう一つが滞在中からプラントへ帰還するまでの間、護衛する事である。

「予定通り今回、地球滞在中の間は我々が護衛に就かせていただきます」

「頼む」

この時期にプラント最高評議会議長であるレヴァン自らが地球に降りるのには無論、訳がある。

数日前、突如テタルトス側から同盟に対して会談の申し入れがあったのである。

名目は今回勃発した大規模紛争を早期終結させる為の協議会というものであるが——

「……信用できるのですか？ 以前の会談は碌に話し合いにもならなかったと聞いています。にも関わらず今になって会談とは」

前回同盟が主催する形で行われたテタルトスとの会談は話し合いどころか、互いの溝を浮き彫りにしただけ。

話し合いにすらならず、結果的に開戦という最悪の形で終了してしまった。

あれからそれほど長い時間が経過した訳でもなく、戦況に大きな変化があった訳でもない。

それなのにテタルトス側から会談の申し入れとは、ナタルが不可解に思うのも当然であつた。

「大佐が気にするのは当然だ。かくいう私も初めて話を聞いた時は畏かと疑ってしまつたからね。しかし相手にどんな思惑があるうと対話を望むならば、無視する事はない」

「それは分かりますが……地球軍保守派のクレメンス・イスラフィールも動く聞いていますし——」

「畏ならそれなりの対応をするだけですよ、大佐殿」
ナタル達の上方から割り込むように声が聞こえてくる。

見るとモビルスーツハンガーに設置されたオレンジの装甲を持つザフト新型機の
コックピットからオレンジ色の髪をした男が降りてきた。

「割り込むようで申し訳ない。ザフト特務隊長を任されていますハイネ・ヴェステ
ンフルスです。今回カーライル議長の護衛役としてお供させていただきますので、よろ
しくお願ひします」

「こちらこそ。ナタル・オーデン大佐だ。よろしく頼む」

ハイネとナタルがしっかりと握手を交わした所でレヴァンは笑みを浮かべながら、話の
続きを切り出した。

「先ほどハイネが言った通りです。畏だった場合に備えてこうして特務隊も連れてき
ています。それにその辺はアイラ女王やアスハ代表も承知の上の筈です。無論ドミニ
オンも当てにさせてもらいますが」

「分かりました。力の限り全力で任務を遂行します」

ナタルはこの先確実に起こるだろう騒動を想像しながら、深くため息をつきなくなっ
た。

しかし弱音を吐いている暇はない。

レヴァンにもしもの事があれば、世界のバランスが大きく崩れることになるだろう。そうなれば今以上の泥沼が待っている。

任された任務の重要さを再認識したナタルは身を引き締めるように二人に対し敬礼をもつて応えた。

◇

無事何事もなくバルカナバート基地に降り立ったアスランは、地球駐留軍を指揮しているファウスト・クアドラード大佐の出迎えを受けていた。

格納庫に足を踏み入れると数人の士官や兵士達と共にファウストが笑顔を浮かべてこちらを出迎えてくれた。

「ようこそ、地球に。アスラン・ザラ中佐」

「出迎え申し訳ありません。クアドラード大佐」

差し出された手を握り返しながら、悟られぬようにファウストを観察する。

ファウスト・クアドラードといえはその技量、指揮力など一流の能力を兼ね備えた人物である。

バルカナバート基地建設の際に発生した地球軍侵攻を防ぐための防衛戦。

東アジア共和国とのマスドライバー使用権に関する交渉。

次々に功績を上げ、現在月では最も注目されている人物の一人だった。だが、アスランはファウストに信を置くことができないでいる。

特に根拠がある訳ではないが、彼からはどこか野心のようなものを感じる時があるのだ。

「本当はデイノ中尉も出迎えられればよかったのだが、彼女は今任務中でね。例の会談の準備に追われているんだよ」

「……お気になさらず。それよりも会談の方はどうなのです？　確か場所はミュンヘンでしたか？」

「ああ。今のところは問題ない。ユーラシア連邦の方で動きがあるとの情報も入ってきているが不確定情報だね。今は調査中だよ。ヴェルンシュタイン指令が地球にこられるまでには、調査も終わっているだろう。もしも場合は君も力を貸してくれ」

「了解しました。しかし私は指令からの特務を受けておりますので、今はそちらを優先させていただきます」

「もちろん、それは理解している。さて、君がラデイス・グエラ少尉かな？」

ファウストはアスランの後ろに付き従っているラデイスに声を掛ける。

「ハッ！」

「そうか。君にも期待している。ザラ中佐と共に特務をがんばりたまえ」

「ありがとうございます！ 期待に応えてみせます!!」

ラデイスの力の籠った返答に笑顔を浮かべて頷くとファウストは部下と共に格納庫を後にしていく。

それを見届けたアスランは内心ため息をつきながら振り返った。

「すぐに任務に入る。準備しろ、ラデイス」

「……了解」

先ほどとは一転し、不機嫌極まりないラデイスの反応にアスランは肩を竦めた。

「それで、いい加減目的の地くらい教えてもらってもかまいませんか?」

「いいだろう。俺達の目的地は——アムステルダムだ」

◇

一難去つてまた一難とは良く言ったものであるとアレンは頭を抱えたくなくなった。

この中で最も階級が上であるアレンが皆の前でそんな事ができない事は重々理解している。

だが、今の状況を考えればため息の一つも付きたくなるのも無理はなかった。

「アレン、二時方向からウインダムが来ます！」

「次から次に！」

ウイーン前線基地から離脱する事に成功したアイザック。

人質も解放し、補給物資も手に入った以上、後はこのまま目的地であるストックホルムに向かうだけだった。

しかしそれを読んでいた保守派はストックホルムに向かう進路上で待ち伏せを行い、幾度となく攻撃を仕掛けてきた。

所謂波状攻撃である。

その所為でアイザックは本来向かうべき進路から強制的に外され、足止めを食らっていった。

「ミサイル、三！」

「やらせるか！」

甲板に立つエクリプスの機関砲がミサイルに風穴を開けると空中で爆発する。

「ルナマリアア！」

「了解！」

爆発の衝撃から艦を守る為、前に出たインパルスのビームシールドが爆風を防いだ。しかしその隙を狙ってウインダムが肉薄してくる。

「アレンの邪魔はさせないわよ！」

ルナマリアの素早い迎撃。

ビームライフルが肉薄してきたウインダム腕に直撃し吹き飛ばした。

「止め！」

同時に背中のジェットストライカーにビームライフルが直撃する。

背中の爆発に押されたウインダムは地面に叩きつけられ爆散した。

「全く昼食くらいゆっくり取らせてほしいわよ」

今日はすでに二度目の襲撃。

狙ったように昼食中に攻撃を仕掛けてきたのが気に入らないらしいルナマリアは不

機嫌そうに吐き捨てた。

「ぼやくな。こうして動ける分だけマシだろう」

「それはまあそうですけどね」

前線基地から運び出した物資のおかげでエクリップスとインパルスは応急修理を終え

ていた。

しかし万全とは言いがたい状態である事に変わりはない。

動けないよりはマシという状態だった。

「埒が明かない。俺が前に出ます。大尉達はアイザックの守りを！」

スカッドストライカーを装着したイレイズMk-IIが前面に飛び出す。　　ビームマシンガンを連射して攻撃を仕掛けてきたウィンダムの隊列を乱した。

「ミナト少尉！　全くいつもいつも、無茶ばかりを」

ベアトリーゼが苛立たし気に吐き捨てる声を通信機越しに聞きながらアレンは苦笑する。

なんだかんだ文句を言いつつ息の合った連携ができている所を見てると二人は結構いいコンビだと思う。

アレンは少しでもアオイの負担を減らすべくスコープを引き出した。

「フォルケンマイヤー少尉、心配なのは分かるが今はミナト少尉に任せろ」

「……別に心配などしていませんが、了解しました」

ベアトリーゼの言いたい事も分らないが、この場に置いてはアオイの判断が間違っていないだろう。

現在、アイザック内で五体満足に戦える機体はアオイのイレズMk-IIとベアトリーゼのイリアスのみ。

他の機体はすべて損傷しているか、不十分な修復しか行われていない。

ならばここは自由に動けるイレイズに任せただ方が上手くいく筈である。　　そんなアレンの予測通り、先陣を切ったアオイは次々とウィンダムを撃破していく。

「はあああ!!」

一気に攻撃を仕掛けてきたウイングダムをハチの巣にしたイレイズはブルートガングでもう一機の腹部を串刺しにする。

「あれは?」

アオイは接近してきた敵機の姿に目を見開いた。

「アレは……ウイーンに居たイレイズか!」

イレイズMk-IIIはスカッドストライカーを背負い、凄まじい速度で近付いてきた。

「速い!」

アオイは横薙ぎに繰り出された対艦刀の一撃をブルートガングで受け流す。

そして至近距離からビームマシンガン突きつけ、Mk-IIIの頭部を狙ってトリガーを引いた。

しかしMk-IIIは機体を僅かに逸らしてビームを回避すると、再び対艦刀で斬りつけてくる。

「まだまだ!!」

対艦刀をシールドで逸らし、アオイもビームサーベルを抜いて斬りかかった。

上空で二機のガンダムが激突する。

その下方では逃れようと駆けるアイザックの周辺を囲むように展開された保守派のモビルスーツが飛び回っている。

「次じゃら次へと！」

空中を舞う数機のウインダムから発射されたミサイルが着弾。

地面を抉る度に地面を最大戦速で駆け抜けるアイザックが大きく揺れる。

「三時方向からミサイル！」

「チッ」

アレンは隣に立つインパルスを庇うように前に出ると飛んできたミサイルを機関砲で叩き落とす。

「ジリ貧だな。ならまずアイツを！」

状況打開の為に一番厄介な敵を落とす。

アレンはMK-IIIに銃口を向け、激しい空中戦を繰り広げているアオイを援護するよ
うにビームライフルを発射した。

しかしイレイズMk-IIIはこちらの射線を見切っていたかのように相対していたア
オイのイレイズに蹴りを入れて突き放し、その反動を利用してビームを避けて見せた。

そして体勢を崩したままアイザックの機関部を狙ってビームランチャーを撃ち込ん
できた。

「ッ、アイザックをやらせる訳には！」

アレンはビームランチャーの射線上に割り込み、アイザックを守るようにビームシールドで受け止めた。

その隙に体勢を立て直したイレイズMk-IIIはアオイの方にビームライフルを発射していく。

上手い。

アオイの動きを阻害しつつ、こちらの攻撃を捌き、同時に母艦を狙う事でこちらの追撃まで封じてきた判断力は驚嘆に値する。

だがそれよりも気になった事があった。

「今の動きは……」

相手を利用した回避運動、対艦刀の扱い、そして体勢を崩しているにも関わらずブレる事のない正確な射撃。

「アレン？」

「……いや、何でもない」

アレンは続けてビームライフルを発射してMk-IIの傍に行かせないようにするが、それを最小限の動きでイレイズMk-IIIは回避する。

「流石に新型だけあって手強いか。ミナト少尉！」

「分かってる！ そっちはウインダムをアイザックに近づけるな！」

ベアトリーゼの声に答えつつスラストーを使って体勢を立て直したイレイズ Mk II は再び対艦刀を振りかぶる Mk III と激突する。

「俺がミナト少尉の支援に行く！ ルナマリア、お前はアイザックを守れ！ インパルスは応急修理しただけで、背中の装備もないんだ。無理はするな！」

「応急修理なのはエクリプスだって同じですよ」

「そっちに比べればマシだ。フォルケンマイヤー少尉、援護を頼む！」

「了解」

アイザックの進路を阻むよう発射されるミサイルの迎撃をベアトリーゼに任せ、アオイの援護に向かう。

しかしその前にビームサーベルを抜きウインダムが立ちはだかつてきた。

「度胸は買うが、迂闊だ！」

突きを放ってきたウインダムのタイミングは僅かに遅い。

そこに生じた隙を見逃さず横腹に思い切り蹴りを入れアイザックのビーム砲の射程範囲に突き落とした。

発射された閃光が敵のミサイル諸共ウインダムを巻き込んでいく。

そのまま斬り合っているイレイズの下に行こうとするが、邪魔するように今度はブリ

アレオスが立ちふさがった。

「そこをどけ!!」

連射されるビームライフルを抜け、ブリアレオスにビームサーベルを袈裟懸けに振るう。

だが敵機は見事な反応をみせサーベルを防いでみせる。

すかさずブリアレオスから発射されたスキュラがエクリップスを掠めていった。

「くっ、機体の反応が鈍すぎる!」

スキュラを紙一重で捌いたアレンは思わず毒づいた。

完璧な修復がされていない為か、機体の反応がいつも以上に鈍い。

「チツ、不甲斐ない! これでは新型相手に接近戦は不利か!」

アレンはキーボードを取り出し、微調整を行いながら攻勢に出た。

だがブリアレオスはその悉くをギリギリのタイミングで避け、エクリップスに対して攻撃を仕掛けてくる。

どれもが相手が凄腕であると察する事ができる攻撃。

だがそこでアレンは妙な印象を受けた。

「何だ、この敵は……戸惑っている?」

最新型だけあってイリアスやブリアレオス機体性能は決して侮れるものではない。

旧式の機体では相手にすらならないだろう。ましてやこちらは万全とは程遠い状態である。

それにも関わらず目の前の敵機は明らかにこちらに対する攻勢が緩い。機体の所為か。

パイロットの事情か。

どちらにせよ、好機だった。

アレンはブリアレオスの動きが鈍ったところに飛び込むとビームサーベルを一閃する。

「そー！」

刃がブリアレオスの肩部を捉え腕ごと切り落とし、さらに返す刀で頭部を切り飛ばした。

「やるな!!」 仕留めたつもりだったが、そう簡単にやらせてはくれないか」

ブリアレオスのパイロットは咄嗟に機体を傾け、刃の軌道から僅かに仰け反る事でコックピットへの致命傷を回避したのだ。

現状を不利だと判断したのか損傷したブリアレオスはスキュラでけん制しながら後退していく。

その時、通信機から機械で加工したような声が聞こえてきた。

《……お前は……誰……》

「何?」

《お前は……》

うわ言のように繰り返し聞こえてくる声に思わず背筋が凍るような不気味さを感じてしまう。

「……嫌な予感する。お前は無理してでも此処で落としておくべきだ——ツ!」

ブリアレオスへの追撃を行おうとしたエクリプスの背後からイレイズMk-IIIの放ったブーメランが飛んでくる。

「追わせない気か!」

ブーメランを上昇して回避するエクリプスを狙ってイレイズMk-IIIが対艦刀片手に突っ込んできた。

袈裟懸けの一撃をビームシールドで防御したアレンはこちらもサーベルを叩きつける。

シールドで阻まれた光刃の稲光が二機のガンダムを明るく照らし出した。

《エリニスをやらせる訳にはいかないな、『魔神』!》

「……誰だ?」

《地球軍ジェラルド・フェレオル大尉。貴様と『戦神』、そして『熾天使』は必ずこの

手で討ち果たす》

「キラとマユまで……お前は……いや二人に手を出させる訳にはいかない！」

何か恨みがあるのかとは聞かなかつた。

今まで数多の戦場を駆け抜けてきた自分達だ。

恨みを抱いているものは一人や二人ではあるまい。

ジェラルル・フェレオルが自分達を恨んでいたとしても、アレンは何一つ言い訳するつもりはない。

だからといって命を差し出すつもりはなかつた。

《ここで貴様を仕留めたいところだが、決着は次だ》

イレイズMk-IIIはエクリップスを突き放すと反転して戦闘宙域から離脱を図る。

見れば他のウインダムも撤退行動に移っていた。

「退いて行く? どうして……」

「理由はどうあれ退いてくれるなら追う必要はない。ミナト少尉、帰還するぞ」
「了解」

アレンはアイザックへと帰還するアオイの後を追いながら、後退するイレイズMk-IIIやブリアレオスにもう一度だけ視線を向ける。

湧き上がってきた感情のまま思わず操縦桿を殴りつけていた。

「くそ……何だ今の戦いぶりは。情けない」

湧き上がってきたもの、それは不甲斐ない自分への怒りだった。

機体の不調など単なる言い訳でしかない。

少なくとも自分は『欠陥機』での戦いには慣れていた筈ではないか。

にも関わらずあの体たらく。

相手がもしもユリウスやアスランであつたなら、きっと自分は生きてはいなかつただろう。

「……くそ」

アレンは湧き上がる怒りをどうにか噛み殺し、アイザックへの帰路に着いた。

◇

戦闘を終えたアイザック。

無事に切り抜けた事を喜びたいところだが、事態は何も解決していない。

ブリッジに集まった主要メンバーはこれからの事について話し合いを行っていた。

確かにウィーン前線基地から物資を確保し弾薬やモビルスーツの修復に必要なパーツは手に入った。

しかし肝心のストックホルムに向かって歩みを進める事が難しくなってしまった。

理由はもはや言うまでもない。保守派の妨害である。

現在は何とか撃退できているが、このまま断続的に襲撃が続けばいくら補給を行ったとはいえ、いずれは底をついてしまう。

戦力もエクリプスやインパルスを含めても四機とも限界に近く、他は動かすことすら難しい状態。

そして一番肝心なのがアイザックのクルーと保護した民間人達の疲弊である。

こう何度も襲撃を受ければ体力的だけでなく精神的にも疲弊する。

このままでは撃沈される前に先に内部から崩れていくだろう。

「さて、どうします、アレン?」

「どうするも何も、選択肢などないだろう。ストックホルムへ向かうのは保守派が許さない。かといってジブラルタルの方へ向かおうにも距離があるし、下手をすれば今度はマケドニア要塞の本隊と戦う事になりかねない。ならば――」

「……アムステルダムですか」

「ああ」

進む先には確実に保守派が待ち構えており、進路を変更してジブラルタルに向かって
も同じこと。

このまま策も無く進めば確実にアイザックは沈められてしまう。となれば残された選択肢は一つ。

戦闘禁止区域に指定されているアムステルダムへ向かう以外にない。

「アムステルダムへ向かいジブラルタルかストックホルムと連絡を取るしかないな」

「そうですね。大尉のおっしゃる通り、物資も有限。特に食料と水は保護した民間人の分で今までの余裕がなくなりましたから」

「民間人か……アイザック艦内の空気も悪いし、早いうちに何とかしたいよな」

「ホントにね」

アオイがため息を漏らすとそれにつられてカルナマリアも憂鬱そうに表情を曇らせる。

「彼らの気持ちは分からなくもないけど……でも、このままじゃ不味くないですか？」

「ああ。アムステルダムへ向かうもう一つの理由がそれだ。あまり長く連れまわすと、それこそ暴動でも起きかねない」

保護された民間人は戦闘から逃れ、助けを求めてきた人々だ。

そこから保守派には人質にされ、助かったと思つたら気が休まる事のない連日の戦闘。

疲労やストレスもピークに達している筈だ。

「よし。では、アイザックはアムステルダムへ向かおう」

アオイの決断にブリッジメンバーが「了解！」と返答する。

アイザックは慎重に進路を変え、アムステルダムへと歩を進ませ始めた。

◇

ブリッジでの話し合いを終えたアレンは先の反省を生かす為、訓練を行おうと格納庫に向かつて歩いていく。

「ミナト少尉、休んでいた方がいいんじゃないか？」

アレンの横では訓練に付き合うと志願してきたアオイが歩いていった。

「それは大尉だつて同じじゃないですか。訓練は一人でするより、誰か相手になった方が効率がいいです。それに俺は一度手合わせしたいと思つてましたから」

「確かに」

コンピュータのデータよりは、誰かを相手に訓練した方が効率がいいのは間違いない。

それは『ヤキン・ドゥーエ戦役』の時に実感している。

しかもアオイのようなエース級の腕前を持つパイロットとの訓練は一から鍛えなお

すには丁度いい。

「それにしても……ピリピリしてるな」

「ええ。彼らからすればこんな目にあわされた訳ですからね」

先ほどから歩いているアオイとアレンに対し、幾つもの視線が突き刺さっている。

保護した民間人から発せられているその視線はお世辞にも好意的とは言えなかった。

「結構堪えますね、これ」

「仕方ないさ。巻き込まれた側からすれば、俺達も敵側も変わらないだろうからな」

そんな針の筵の中、足早に歩いていると小さな影がアオイの足元にぶつかった。

「ご、ごめんな。大丈夫か？」

「う、うん」

見れば五歳くらいの小さな少年が尻もちをついて座り込んでいた。

「ケイ、どうしたの？」

「あ、お姉ちゃん。えっと走ってたらぶつかっちゃった」

「すいません。弟がご迷惑をかけてしまって」

淡い青みがかった髪の毛を左右で纏めた姉らしい少女が頭を下げてくる。

年齢的には十五、六歳くらいだろうか。

「いや、俺の方こそ悪かった。今はこんなものしかないけど、許してほしい」

アオイはポケットから二粒飴玉を取り出すと、ケイと呼ばれた少年に差し出した。

「いいの？」

「皆には内緒だぞ」

「ありがと、お兄ちゃん」

花が咲いたような笑顔とはこんな表情なのだろう。

ご機嫌になったケイはすぐに飴玉を口に含み、嬉しそうに笑っている。

「慣れてるんだな」

「俺にも弟と……妹がたくさんいますから」

そういえばアオイもまた戦争で家族を亡くし、同じような境遇の子供たちと共に暮らしていると聞いた事があった。

軍に入った理由も家族を養う為らしいし、こういった事に関しては日常茶飯事だったのかもしれない。

「すいません、弟が」

「いや、こちらが悪かったからな。えっと」

「あ、私の名前はミレイア・ロスハイムと言います」

「俺はアオイ・ミナト。こちらが」

「アレン・セイファートだ」

「よろしく願います」と頭を下げるミレイアを見て何となく昔のマユを思い出した。

昔のマユもこんな大人しそうな感じだった。

今ではレテイシア達に感化されたのか、やたらとキツイ事も言われるようになってしまった。

遠慮がないのは良い事なんだが。

「どうしたんです、顔色が悪いですけど?」

「い、いや、大したことじゃない。気にしないでくれ。それより君達は普通に接してくれるんだな」

「ええ。皆さんを責めた所でどうしようもありませんし。勿論思う所はありますけど、助けてもらいましたから」

そう言ってもらえるところらとしても少しは気も楽になる。

しかしミレイアはすぐに表情を曇らせる。

「でも、また戦闘になるんですよね?」

「……大丈夫だ。今、アムステルダムに向かっている。そこまで辿りつければ安心していい」

そうは言っても根拠はない。

いや、むしろ戦闘になる可能性が高いとも言える。

だができるだけ、不安にはさせたくなかった。

「そうですか……良かった」

「ああ、もしも戦闘になったとしても俺達が守ってみせる」

「はい」

アオイの励ましに笑顔を浮かべるミレイア。

その笑顔を見ていたアレンの脳裏にかつて守れなかった少女達の姿が思い浮かんだ。

「少尉、そろそろ行くぞ」

「了解です」

弟の手を握り手を振るミレイアへ手を振り返す。

「必ず守り抜くぞ」

「もちろんです」

あの子達のようににはさせないと決意を新たにしていたアレンは格納庫へと足早に歩き出した。

第13話 握られた手

そこはいかにも何かの実験室と思えるような部屋だった。

機材が散乱し、資料ともいえる紙束が積み上げられ、端末の画面には幾つものデータが表示されている。

そこでひたすらキーボードを叩いているのは白衣を着こんだいかにも研究者風の人だった。

手元にあるコーヒーの入ったカップに口を付け、ご機嫌な様子で作業を進めている。

そこにポケットに入れてあった携帯端末が鳴り響いた。

「誰だ？ 今忙しい後にしろ」

《申し訳ありません、博士》

「ああ、お前か。何の用だ？」

《博士に耳寄りな情報を提供しようかと思ひまして。……実はテタルトスが博士の身柄を拘束しようとしております》

博士と呼ばれた男は途端に興味を無くしたように、声を落とす。

「それだけか？　なら切るぞ」

《いえ、こちらが本題です。そちらに向かっているのはテタルトスだけではなく、カウスターの一人もです》

「何？　誰が来る？」

《アスト・サガミですよ》

「そうかカグラの息子か……くつ、くくく、アハハハハハ!!　そうか、こちら来るのかア！　いいぞ、いいぞ！　丁度いいタイミングだぞ！」

博士は先ほどの様子から一転し、小躍りしそうなほどに歓喜しながら立ち上がると、狂ったように笑い始めた。

「そうか、そうか！　んで、そっちの要求はなんだ？」

《そんなものは……博士は私の命の恩人。私が今も生きていられるのは博士のおかげですから、当然のことをしただけですよ》

「つまらぬご機嫌取りはやめろ。私はそういうのが一番嫌いだ」

博士の言葉に会話をしていた人物から笑みのような声が漏れ聞こえてくる。

《本心だったのですが……失礼しました。では一つだけ——》

相手の要求に博士は心底どうでもよさそうに吐き捨てる。

「なんだ、そんな事でいいのか？」

《ええ。博士には申し訳ないのですが》

「実に下らんし、興味もないな、あんなもの。まあそれで情報の対価になるといいうなら、望み通りにしてやるさ」

《ありがとうございます》

端末を切り会話を終えた博士は今まで以上に機嫌よくキーボードを叩き始める。

「世界のことなどどうでもいい。……いやいや、楽しみだねえ。早く来いよ、私のサンブルくん」

◇

手に伝わる固い感触を確かめながらアレンはシミュレーターの画面に映る敵の姿を注視する。

「よく出来てはいるけど……」

アレンが今使用しているシミュレーターはモビルスーツのコックピットに直接投影されるタイプのマシンである。

自分の機体を使用する為に訓練には最適な代物ではあるが、一つ欠点がある。

それは所詮シミュレーターでしかなく、敵機のデータがどこかプログラムじみているということだった。

無論、動きはランダムで実機に近い動きをするのだがエース級の実力を持つ者達には

不満な出来栄えとなっている。

これが対戦ならばまた事情が違ってくるのだが、最近の相手であるアオイやルナマリア、ベアトリーゼは仕事でブリッジに呼ばれている為、生憎相手がいなかった。

「まあ肩慣らしにはちょうどいいけどな」

やや不満を感じつつも、アレンはシミュレーターに映る敵を順調にさばき始めた。

「やっぱりぬるいな」

難易度には不満を持ちながら丁度一時間ほど、日課となった訓練をこなす。

特に問題もなくシミュレーターを終えると仕事を片付けたルナマリアがエクリプスのコックピットを覗き込んできた。

「お疲れ様です。なんだか気合が入ってますね？ 何かあったんですか？」

「ん、そんなことはない」

差し出された飲み物を口にしながら、言葉を濁すとルナマリアはあからさまに不満そうな表情を浮かべた。

「あのですね、私ってそんなに頼りになりませんか？」

「いや本当にたいしたことじゃないんだ。ただ……」

「ただ？」

「……最近は何げない事ばかりだったからな、自分に呆れているだけさ」

「前の戦闘の事ですか？ そんなことないと思いますけど。機体も万全じゃないんだし」

「それは言い訳にもならないよ。『ヤキン・ドゥーエ戦役』ではもつと酷い状態で戦うことも当たり前だったんだ。それに比べて今の俺は甘えている……情けない」

アレンはシートに沈み込むようにして体を預けると目を閉じる。

「これじゃユリウスやアスランには勝てないわけだよ」

「ユリウスとアスランって……あの有名な？」

ユリウス・ヴァリス、アスラン・ザラの勇名はプラントにおいても健在である。

評議会はさつきと厄介者の名前は消し去ってしまったというのが本音のようだが彼らが打ち立てた戦果は消しようがなく、軍部では未だユリウスを慕うものすらいるらしい。

「奴らは今でも俺と決着をつけることを望んでいる。特にアスランはな。新しい機体まで用意して、その時を待っているんだよ。引き換え俺は……」

正直劣化しているのではと思う時がある。

昔ならばもつと上手くやれた筈だと。

そんな自分を追い詰めるような物言いに不安を覚えたルナマリアはコックピットの中に踏む込むとそのままアレンの体を抱きしめた。

「大丈夫ですよ、アレンはきちんとやれてます」

「……すまない、あの子たちを見て少し昔を思い出した。イレイズで戦っていた頃の事を」

あの頃はただ何も考えず、昔のような後悔だけはしたくないと我武者羅に戦った。それでも守りきれないものがあつて。

今はどうだろうと考えても、少しも進歩したような気がしない。

「俺は前に進んでいるんだろうか？」

「大丈夫、大丈夫です」

抱きしめてくれたルナマリアに身を預け、アレンは少しの間だけコックピットの中で目を閉じていた。

◇

ヴィルフリート・クアドラードの機嫌はすこぶる悪かった。

地球の初戦闘で無様な敗北を喫したり、ようやく標的に追いついたと思えば保守派に邪魔されたりと理由は様々ある。

だが今日はそれとは別の要因から苛立ちが収まらなかつた。

急遽別件により任務を中断せざる得ない状況になってしまったのである。

「クアドラード少佐、もうすぐ指定された合流ポイントです」

「……そうか」

指定された場所にたどり着いたカルキデイウスを待っていたのは色違いの同型艦だった。

『ディオネ級 クレオメデス』

特務を任されたアスラン・ザラに与えられたカルキデイウスの同型艦である。

ただし通常のディオネ級とは違い、船体後方に大型の推進器を追加で設置しており、大幅に巡行性能が増加されている。

そう、ヴィルフリート達に急遽与えられた任務とは特務をこなすアスラン・ザラ中佐の支援であつた。

「何故、我々が……」

正直な話、「知るか!」と一喝して蹴りたいくらいの話だが、正式な任務として下された以上、無視することはできない。

さらに言えば追撃していた連中もまたこれから向かうアムステルダムへと歩を進めているという情報もある。

ならば今回のコレは業腹ではあるが、好機でもあつた。

戦闘禁止区域ではあるが、やり方次第で奴らに一矢報いることはできるだろう。

《お久しぶりですね、クアドラード少佐》

「……そうですね、ザラ中佐殿。それで今回特務ということですが我々は何をすればよいので？」

《仔細は申し上げられませんが、アムステルダムにいますと思われるとある人物の捕縛が今回の任務です。最悪でもその人物が持っているであろうデータの回収だけでも行うようにと命令を受けています。そこで我々が都市内で作戦行動を取っている間、カルキデウスにはアムステルダムから標的が逃れないよう監視をお願いしたい》
それはつまりアスラン達の尻拭いをしろという事だ。

これが自分達も直接関わる任務であれば納得できたかもしれない。
しかし任務の仔細も話さず、参加させず、ただ外から見ていると。

これではそれこそアスランの小間使いと同じではないか。
ヴィルフリートにとってこの任務は屈辱以外の何物でもない。

叫びたくなるような衝動を抑えるように拳を握りしめ、どうにか「了解」とだけ答えると横に立っていたヴァルターが口を挟んだ。

「ザラ中佐、こちらからもよろしいでしょうか？」

《……何でしょうか、ランゲルト少佐？》

「そちらとの任務の仔細が語られない以上、我々には標的の詳しい情報も得られない

事になります。特務である故に仕方がない事だとは思いますが、いざという時の為にせめて連絡だけでも円滑に行いたいです。そこで我々の艦からも数人、アムステルダムの方へ待機させたい」

《なるほど、分かりました。人選はお任せしますが、正確な人数と配置をこちらに知らせてください》

「了解しました。それからもう一つ、我々に排除命令が下っていた地球軍改革派の艦もまたアムステルダムに向かっているという情報が入っています」

ヴァルターからもたらされた情報にアスランはモニターの中で僅かに顔を顰める。

その表情を見たヴァルターは若干楽しそうに彼を掻き乱すもう一つの事実を告げた。

「その中にはエクリプスの姿も確認されています」

《ッ!?!……なるほど。地球に降りて改革派と合流していたのか。了解しました、情報提供感謝します。では後ほど》

今のやり取りを横で聞いていたヴィルフリートは怪訝そうな表情を浮かべる。

「何だ? ザラはエクリプスと因縁でもあるのか?」

確かに前の戦闘ではエクリプスに逃げられたようだから、ある程度の執着は持つてもおかしくない。

しかし先程のアスランの表情からにじみ出ていた感情は執着などという生易しいも

のではなかった。

「まあ色々あるのでしようね。それより配置はどうされますか、クアドラード少佐？」

「……貴方に任せる。どうか言いだした以上、何か考えでもあるのでは？」

「いえ、ただ運が良ければ会えるかと思っただけですよ」

それ以上は語らず、ヴァルターはただ笑みを浮かべていた。

◇

訓練を終えたアレンはルナマリアと共に時間ギリギリで間に合った昼食にあり付いていた。

アイザック艦内の雰囲気は相変わらず悪く、民間人が集まりやすい食堂も重い空気が流れている。

しかし目的地であるアムステルダムに到着する時刻が近づくと従ってそれも徐々にだが緩和されつつあった。

「もうすぐアムステルダムですね」

「ああ、これでようやく連絡が取れる」

「……連絡ですか？」

前の席で同じく食事を取っていたミレイアがケイの口元を拭きながら首をかしげた。この前の一件以来、彼女たちとはこうして食事を取ったり、話をしたりするくらいには打ち解けていた。

特に幼いケイはアオイに非常に懐いており、姿を見るたびに駆け寄っていく様子をよく見ている。

「保護するときに言ったと思うが、俺たちは元々地球軍改革派所属じゃないんだよ」「ああ、そうだったんですか」

さほど興味のある話題では無かったのか、ミレイアはケイの口を吹き終わると手元に置いていた本を開いた。

「その本は……『SEED思想』に関する本か」
SEED思想が明るみになって数年。

この手の書籍はネットや書店などでいくらでも見かけられるようになっていた。内容は否定的なものから、単純な考察ものなど様々であり、ミレイアが読んでいるものは解説本に類するものようだ。

「興味があるのか？」

「はい。人の可能性。肉体ではなく精神の改革。これが本当ならば、私もそうなりた
いと思うほどには興味があります」

「何故？」

「そうですね。これは私なりの考えですけど、精神の改革を謳う『SEED思想』やローザ博士の『過度な状況変化に対応する為の適応能力』という研究結果。これによって要するに人は変わっていく事が出来るって事じゃないですか。ならこの先、世界だって変われる。極端な話、戦争だっていつかは無くなるかもしれないって事でしょ」

アレンは思わず言葉を詰まらせた。

彼女の考えをただの妄想と切って捨てる事は簡単だ。

でもそれは可能性という希望を切って捨てるのと同じ気がした。

「……………そうだな。そうなると良い。しかしそれはSEED思想が無くても変わらないと思う。人はSEEDなんて無くても変わっていきけると、歩いていけると俺は信じている。……………それにSEEDなんて戦争の役にしか立たないさ」

「そんな事ありません。いつかSEEDの可能性が——変革した人類が未来を示す時が来ます。その時、私も未来の為に何かできればいいと思ってるんです」

現実はその甘くはないだろう。

現に各陣営はSEEDをあくまで軍事転用を前提とした研究が盛んに行われている。最初

にSEEDの存在を明るみにしたローザ・クレウス博士が所属する同盟ですら、

そういう側面を持つているのだから。

「……未来の為にか。それこそSEEDは関係なく、自分の意思で決める事だと思
が——」

《セイフアート大尉、ホーク中尉、もうすぐ目的地へ到着いたします。ブリッジへお越
しく下さい》

「アレン、もうすぐ到着みたいですよ」

「……ああ。ミレイア、ケイ、色々迷惑をかけてしまつて済まなかつた。アムステルダ
ムに着けば今までよりは安全な筈だ。まだ会う機会はあると思うが、別れを言っている
暇があるか分からないから今の内に言っておくよ」

「色々あつたけど元気でね」

「はい。お世話になりました、どうかお元気で」

手を振るミレイアとケイに別れを告げ、アレンとルナマリアはブリッジへと向かう。
本来であればもう彼女達と関わる事はなかつただろう。
しかし運命は彼らを別の場所で引き合わせる事になる。

◇

光が強いほど生まれる影も濃くなるもの。

光に照らされたアムステルダムを中心部から外れたそこはまさに影。裏路地とも言える場所をアスランは歩いていた。

ここはお世辞にも治安が良いとは言えずガラの悪い連中や避難民からあぶれた連中が溜まり場としていような所だ。

まともな人間であれば好き好んで近づいたりはしないだろう。

だからこそ標的が身を隠すには絶好の場所とも言える。

だが、それはこちらにとつても好都合。

極秘の作戦故に目立つのは上手くない。

「ここか。A班、配置につけ」

「了解」

《ザラ中佐、B班配置に着きました》

《C班、周辺のクリーニング完了しました》

「よし、作戦を開始する」

路地の陰から目標となるビルを覗き込む。

二階建ての小さなビルで壁や窓には手入れが行き届いておらず、もはや廃ビルといつても過言ではないほど荒廃している。

警戒しながら反対側の路地に回り込んだラデイスにハンドシグナルで指示を飛ばす

と慎重にビルに近づいていく。

畏がない事を確認し、ラデイスと他の部下達に頷きかけ、銃のセーフティを外すと慎重にビルの中に踏み込んだ。

踏み込んだ廃ビルは埃塗れの荒れ放題。

数人を二階に向かわせ、アスランは一階の搜索を開始する。

「中佐、これを」

部下の1人が見つけたのは床に倒れた机だった。

一見、不審な点も無いように見えるが、そこには確かにおかしな部分があった。

「ここだけ埃を被っていない？」

「ラデイス、少し下がれ」

机を横へずらすと小さな扉が設置されており、地下へ続く階段が隠されていた。

「ずいぶんとレトロな事で」

「確かに。少し気に入らないな」

あからさま過ぎる。

それに埃の件も気にかかる。

探している標的の事を考えるとこんな初歩的なミスを犯すとは思えないのだが。

「爆発物の反応はあるか？」

「ありません」

「よし。ここに居ても仕方ない、行くぞ、油断するな」

さほど長くない階段を下って行くと荒廃した廃ビルには似つかわしくない最新の研究機材がいくつも置いてあった。

銃を構え、死角に注意しながら部屋を隅々まで調べていく。

「誰もいませんね」

「どうやら遅かったようだな。一応端末を調べる。データが残っていれば回収する」
アスランは手近な端末を立ち上げ、中身を確認するが案の定何の痕跡も確認できなかった。

他の端末も同じだろうとここでの探索よりも標的の行方に思考を巡らせ始めたその時、別の端末を調べていた部下の1人から声がかかる。

「中佐、こちらに来てください！」

「どうした？」

部下が調べていた端末の画面を覗き込むとそこには見た事がないデータ群が映し出されていた。

『e. s. system』

「これは……」

「収穫ですかね」

「そうだな。だが、なんでこんなデータが残っている？」

先程見た端末には痕跡すら残っていないかったというのに。まるでわざと残している
としか思えない。

「……ラデイス、B班と一緒にデータを持って帰還しろ。A班はこのままビル内の探
索を続行、C班は俺と周辺の探索を」

「了解」

一応は最低限の任務を完了し、安堵すべき所なのだろう。

しかしアスランにはどこか釈然としない。

このビル内にも罠はなく、あっさりと地下への階段が見つかった所も気に入らなかつ
た。

「誰かがわざとデータを回収させた？ 一体何のために？」

疑問は消えない。

アスランは考えを纏めながらC班と合流する為、ビルの外へと歩き始めた。

◇

アムステルダムという都市はベルリン条約において戦闘禁止区域に指定された初め
ての貿易都市である。

この戦闘禁止区域設定の背景にはユニウス戦役における国家間の疲弊や頻発する武力衝突による世界経済の影響の考慮など様々な理由が存在する。

その中で戦闘禁止区域設定された大きな要因の一つになっているのがかつての中立都市コペルニクスから移住してきた旧市長や経営者達の手腕があつたからだと言われている。

コペルニクスで得た人脈やノウハウを生かし、各国家、各陣営に働き掛けを行い、アムステルダムを戦闘禁止区域に指定させる事に成功したのである。

もちろんそれには相応の条件が存在していた。

その一つが各陣営の部隊を治安維持の為に駐留させるといふものだ。

観光客や貿易商、戦闘区域から逃れてきた避難民達など不特定多数が溢れるこの都市で起こりうる混乱を軍を駐留させる事で未然に防ぐというものだ。

しかしそれは建前に過ぎず、本当の所は他の陣営が手を出さないか、不正な事をしていないかなどをいわば監視する為のもの。

その中の一つである同盟軍のベース。

ウィーン前線基地の兵士達と訪れたアレンは現場を任されている司令官に今までの経緯の説明を行っていた。

「——以上が事の経緯であります。つきましては本隊の方へ連絡を取って貰いたい

のです」

「なるほど。まずは御苦労だった、セイフアート大尉。君達のおかげで生き延びた兵士達や民間人が救われた、私の方から礼を言わせてもらおう。それからストックホルムの方へ連絡を入れておく」

「ジブラルタルではなく？」

「そうか。君達は知らないのも無理は無いな。実はもうすぐミュンヘンの方で我が同盟とプラント、地球軍、テタルトスの四陣営で会談が行われる事になった」

「会談？ この間、決裂したばかりですか？」

「ああ。詳しい経緯は知らんが、上の方で上手く話し合いが行われたのだろう。連中の降下作戦はこれを見越していたのかもしれないな」

「……その後のヨーロッパ戦線の情勢に変化は？」

「特には。保守派が活発に動いてはいるようだが相変わらずの膠着状態だ。テタルトスに関しては以前とそう変化は見られない。不気味なほどにな」

あれだけ派手に降下作戦を行っておきながら、動きがないとは。

司令が訝しむのも当然だ。

あの時、降下する戦力のすべてを確認した訳ではないが、結構な数が降下した筈。あの数を他の陣営に対する牽制だけで地球に下ろしたとも思えない。

「大尉、今は考えていても解らんよ。我々はもしもの場合に備える事しかできん。とにかくその関係でプラントのカーライル議長がジブラルタルを訪れているんだよ。その所為で向こうは警戒嚴重なのさ。噂では特務隊も連れてきているらしいからな」

「了解しました」

司令官の話を聞いて納得する。

確かに考えていても答えは得られない。

それに議長が地球に来ていとなると、こつちに迎えを寄こしている余裕も無いだろう。

「迎えが来るまで少し時間もかかる。到着するまで少し休むと良い。ここまで激戦続きで疲れているだろうからな」

「ハッ！　ありがとうございます！」

前線基地から一緒だった将校達にも別れを告げ、ベースを後にする。

ルナマリアはアオイやミレイア達と一緒に先にアムステルダムへ入っている筈だ。

「さて、思わぬ休暇か。ルナマリアとの待ち合わせ時間にも少しあるし、街中を歩くか」

アムステルダムのは街は多くの人で賑わっていた。

煌びやかな高級店から路上に開かれている露天まで。

多くの店が立ち並び、そこに多くの人が詰め寄っている。

戦闘禁止区域に指定されているだけあって観光客も多いようだ。

「しかし凄い人ごみだな。迷いそうだ」

のんびり観光とは行かなそうだと少し辟易し出した所で、背中から近づいてくる気配を感じた。

咄嗟に振り替えるとそこには予想外の人物が立っていた。

「本当に会えるとは思いませんでしたよ」

「レティシアさん!? いや、違う、のか」

「ふふ、また会えましたね。アスト・サガミ君」

「ツ……その声、ヴァルター・ランゲルトか」

ヴァルターは長い金髪を背中でもまとめ、目立たない為かジャケットを羽織っていた。

彼女に良く似ている。

いや、似すぎている。

レティシアより年下のようなのだが、顔立ちはそっくりで声まで同じだった。

何故こんな場所にいるのかと聞くのは愚問だろう。

彼らは自分達を追ってここに来たと考えるのが自然だ。

アレンは動揺しながらも警戒し、懐にある銃に手を伸ばす。

「そう警戒しないでください。それにここで騒ぎを起こすのはお互い不味いでしょう？」

「……ハア、それを見越して近づいてきた癖に食えない奴だな。それで俺に何の用だ？」

「いえ、よろしければ一緒に街を回りませんか？」

「は？」

一瞬、何を言われているのか解らなかつた。

「先程から見ていると単に街を見ていただけのようですし、暇なのでしよう？ 一人で見て回っても退屈なだけですし、一緒に回らないかと誘っているんですが？」

「……どういうつもりだ？」

「いえ、私の方も時間が出来ましたし、後は単純な好奇心というか、貴方に興味があるんですよ、アスト君」

笑顔を浮かべるヴァルターを胡散臭げに見つめるアレン。

何を考えているのか全く読めない。

何かの作戦なのか。

どちらにせよ目的が分かるまでは、放置するのは得策ではないかもしれない。

「……どこに行くんだ？」

「あら、一緒に回ってくれるんですね」

「そういう風に誘導した癖に、本当に食えない奴だな。お前の好きな所でいい、ヴァルター・ランゲルト」

そう言うのとヴァルターは考え込むように顎に手を当てる。

「……ふむ、フルネームで呼ばれるのは些か堅苦しいですね。……よし、いいでしょう、ここで私の事はヴィクトリアと呼んでください。私もアスト君と呼ばせてもらいましょう」

「ヴィクトリア？ それがお前の本名なのか？ いや、それよりもアスト君はやめてくれ」

この顔、この声で、しかもその呼び方をされるとどうも調子が狂う。

「なるほど、誰かさんとダブるという事ですね。ふむ、普通の呼び方ではつまらないですし……」

「いや、待て。変な呼び方されたらたまらない。普通に呼び捨てで良いだろう」

「そうですか、ちよつとつまらないですけど、とりあえずはアストで」

呼び捨てというのもどうかと思つたが、変な呼び方をされるよりはマシであると無理やり自分を納得させる。

「それでどこに行くんだ、ヴァ——いや、ヴィクトリア」

ヴァルターと呼ぼうとしたら、妙に迫力のある笑顔を向けられたので渋々先程告げられた名前を呼ぶ事にした。

どうにもやりにくい。

「では行きましようか、アスト」

こちらの手を掴み、逃がさないとばかりに腕を組んで歩き出すヴァルターにアレンは黙って着いて行くしかなかった。

溢れる人ごみをかき分けるようにアレンはそこら中の店という店を見て回る羽目になった。

「……お前、やっぱり女か」

ヴァルターなんて男の名前を使っているがやはりこいつの性別は女性のようだ。

「あら、どこで気がついたんですか？」

「ぐっ」

腕に当たる柔らかい感触で気がついたとは言い難く、言葉詰まらせてしまう。

「冗談ですよ。そもそも私は男なんて言った事は一度もありませんよ」

「じゃ、なんでヴァルターなんて偽名を使ってるんだよ」

「さあ。でも偽名を名乗っているのは貴方もじゃありません？ アレン・セイファー

トなんて何時まで名乗っているつもりですか？ 貴方はアスト・サガミでしょ」

「ハア、そうだな。お互い様か、くだらない事を聞いて悪かった」
こちらをからかうようにクスクスと笑うヴァルター、いやヴィクトリアはやつぱり彼女によく似ている。

「……君は何者なんだ？ レティシアとどういう関係だ？」

「気になりますか？」

「当たり前だろう」

「ふふふ、内緒です。今はね」

ヴィクトリアはそれ以上何も言う気がないのか、楽しそうに笑いながら近くの店を覗き込んでいる。

結局、答えは聞けないまましばらく歩いてみると、少し疲れた。

この人ごみは思った以上に堪える。

休憩を兼ねて露天のアイスを買ひ、街の外れにある殆ど人が居ない公園のベンチに座る事にした。

「流石アムステルダムですね。ここまで賑わっているとは」

「ああ。俺もここまで多いとは思っていなかったよ」

アレンが買ったのは普通のバニラ味だ。

アイスを舐めると喉の渴きを潤すような冷たさと甘みが口に広がる。

美味しい。

喉が渴いていたからか余計にそう感じる。

横を見ればヴィクトリアがストロベリー味のアイスに口をつけずジツと見つめているのに気がついた。

「……食べないのか？ 溶けるぞ？」

「え、ええ。分かっています」

ヴィクトリアは緊張気味にアイスに口を付けると、驚いたようにこちらを見てきた。

「アスト、アスト！ すごくおいしいですよ、これ！」

「そうか。気に入ったなら良かったよ」

「はい！ 初めて食べましたけど、とてもおいしいですね！」

「初めてなのか？」

「ええ。ずっと戦場に立っていましたからね、こんな風に任務以外で誰かと出歩くのも初めてですよ」

どうやらヴィクトリアもまともな生き方をしてきた訳じゃないらしい。その事を聞こうと思ったのだが、誤魔化されるだけだろう。

アレンはそのまま何も聞かず、溶け始めたアイスを食べる事に集中する事にした。

「さて、アイスも食べ終わりましたし、行きましようか」

もう諦めの境地に達していたアレンは何も言わずに立ち上がると、ヴィクトリアの後に続いて歩き出す。

その先であり得ない人物と鉢合わせする事になる。

ルナマリアやアオイ、ミレイアとケイ。

その四人と共に立っていたのは――

「貴様、アスト・サガミ」

「……アスラン・ザラ」

相容れない宿敵同士。

再び邂逅する事になった。

◇

中立同盟にとって『ヨーロッパ戦線』の要の一つであるストックホルム基地は警戒体勢のまま、各部隊が出撃と帰還を繰り返していた。

それはテタルトス軍や保守派との戦闘が散発的に繰り返され、ヨーロッパの緊張感が高まっている事も関係している。

だが最大の理由は違うものだ。

そう、近々行われるミュンヘン会談が近づいてきた事が最大の理由である。

「こちらデステイニー、偵察から帰還します」

《了解、一番滑走路を使用してください》

偵察任務から戻ったシンはデステイニーを一番滑走路に着地させると、格納庫のハンガーへと移動させた。

「お疲れ様、シン」

「ありがとう、セリス」

差し出された飲み物を口に含み、水分を補給していると少し慌てた様子のキラが端末を片手に近づいてきた。

「どうしたんですか、キラさん。例のデバイス——えつとe. s. デバイスでし
たっけ？ 調整してたんじゃ」

「ああ、そっちはまだ進めている最中なんだけど。シン、実は君に頼みがあるんだ。偵

察から戻ったばかりで申し訳ないけど、アムステルダムへ向かってもらえないかな？」

「アムステルダムですか？」

「うん。実はアストから連絡があったんだ」

「アレンから!？」 ということはルナも一緒だよな」

「無事だったんだね、良かった」

アレンとルナマリアが大気圏の戦闘で地球に降下したという話は聞かされていた。

しかしそこから行方が全く掴めず、大気圏突破に失敗したのではという無責任な噂まで流れていたのだが――

「良かったあ、やっぱり無事だった」

「だから言っただろ？ あの二人がそう簡単にやられたりしないさ」

まあアレンやルナマリアの技量ならば、よほどの相手でない限り、遅れを取る事もない。

大丈夫だとは思っていたが、こうして無事を聞かされるとホッとする。

「色々あつてどうにかアムステルダムに辿りついたらしいんだけど、そこから身動きが取れないらしくてね。迎えに来て欲しいらしい」

「分かりました。でも俺だけじゃないですよね？」

「もちろん。まずはオスロ基地に停泊している戦艦と合流してくれ。君もよく知っている戦艦だから」

手渡された端末を見ると記載されていた戦艦の名前を見て、シンは思わず目を見開いた。

「……ミネルバ」

懐かしさすら覚えるその名前にシンは自然と笑みが浮かべていた。

第14話 拳

物々しい護衛と共に宇宙を進む戦艦。見覚えのないその戦艦の名は『アリストテレ』。

『アンドロメダ級』とカテゴライズされたテタルトス軍の新たな旗艦である。大型化した船体と突き出された幾つもの砲門。

搭載されているモビルスーツに、その巨体を進ませるに十分な推力を持った大型エンジン。

すべてが通常の戦艦とは一線を画する戦艦となっている。

その戦艦を先導するのはユリウスヴァリスのシリウス・ラファールガとレイ・ザ・バルのH・アガステイア。

それに続く形でテタルトス軍の精鋭たちが艦周辺を警戒していた。

《大佐、そろそろ大気圏降下ポイントまで到達します》

「了解した。敵影も今のところ確認できない。補給の為、私とレイは一時帰還する。

聞こえていたな、レイ？」

《はい》

レイと共にアリストテレスの格納庫に着艦したユリウスはシリウスをハンガーに固定する。

そしてコックピットから降り、近づいてきた整備兵に無事な事を知らせる為に手を挙げた。

「お疲れ様です、大佐。補給の準備はできています。それよりいい加減にパイロットスーツくらい着てくださいよ。コックピットで空気漏れでもあったら」

「戦闘での損傷であれば、私のミスだ、気にする必要はない。それ以外の要因については、君たちを信頼しているさ」

プレッシャーをかけられ顔を顰める整備兵の肩を軽く叩き、レイの方へ足を運ぶ。

「レイ、体の調子はどうか？」

「特に問題はありません」

レイはその特殊な生まれ故に体にある問題を抱えている。

現在ではある科学者の功績と月での治療によって体の問題もたいぶクリアされた。しかし環境の変化によつては状況が変わる可能性もある。

留意しておくに越したことはない。

「そうか。地球に下りれば環境も変わる。指揮を預かる者として体調管理は十分に気をつける」

「ハッ！」

本来であればユリウス自らが赴くべきなのだろうが、宇宙の方を疎かにはできない。あの降下作戦時に感じた見られているような感覚は未だにユリウスの中でしこりを残していた。

「先導ご苦労だった。ユリウス・ヴァリス大佐」

「……ヴェルンシユタイン指令」

護衛を伴い声をかけてきたのはテタルトスで現在最も力を持つ男ゲオルク・ヴェルンシユタイン。

鍛え上げられた巖のような体故か。

元軍人という経歴からか。

軍の制服を身に纏った姿がよく似合っている。

今回、新造戦艦であり慣熟訓練を行っていたアリストテレスが前線に引つ張られてきたのも、すべては地球に向かうゲオルクを護衛する為であった。

「地球では何があるか解りません。十分にご注意ください」

「氣遣い感謝しよう。しかし心配はいるまいよ。地上ではクアドラード大佐を含めた地球駐留軍がいる。それに今回護衛部隊を率いるバレル中尉もいるのだから」

「全力で任務を遂行します」

「期待している。では大佐、後は頼むぞ」

「了解いたしました」

ゲオルクは整備兵たちに声をかけながら、大気圏突入用シャトルの方へ歩いていく。その後にくよくよに現れたのはゲオルクに比べて若く、きつちりとスーツを着込んだ人物だった。

「大佐、今回は申し訳なかった」

「お気になさらず、アルノルト・ヴェルンシュタイン議員」

アルノルト・ヴェルンシュタイン議員。

名の通り、ゲオルク・ヴェルンシュタインの息子にあたる人物である。

若く経験も浅いが父親譲りのカリスマと勤勉さを持つている期待の若手議員としても名を馳せている。

その後ろには彼と志を同じくする数名の議員たちの姿もあった。

「地球ではこちらのバレル中尉が護衛に付きます」

「済まない。バレル中尉、当てにさせてもらおう」

「ハッ」

ユリウスはアルノルトに期待している部分がある。

やや感情でものを考える部分もあるが、公私混同はせず、冷静な判断で物事を的確にとらえている。

あとは経験さえ積めば、よい政治家になるだろう。

何よりも彼に肩入れしている理由があつた。

その理由が彼が所属している派閥だ。

現在テタルトス議会は戦争継続派と停戦派真つ二つに分かれ、日夜激論を戦わせている。

アルノルトが属しているのは停戦派。

今は外に目を向けるべきであり地球の紛争に介入して戦力を悪戯に消費すべきではないと訴え続けているのだ。

「ようやく漕ぎ着けた会談だ。今回は何があつても成功させなくてはならない。前回のような結果だけは何としても阻止しなくては」

「だから自ら地球へ？」

「ああ。ゲオルク指令だけでは泥沼になるのは目に見えているからな」

今回の会談が行われる事になった経緯。

それはアルノルトら停戦派ともいわれる議員達の働き掛けによるものだろう。

この機会に停戦の合意が成されれば、停戦派が議を抑え、戦争終結の道も開けるだろう。

少なくともヨーロッパ戦線の状況は変わる。

だからこそ彼らの身に危険が及ぶような事だけは避けねばならない。

「レイ、何があつてもアルノルト議員を守れ。それからクアドラードには注意しておけ。ゲオルクにもな」

もしも地球で彼らの身に何かあれば、戦争は終わるどころか泥沼化する可能性が高くなる。

それだけは絶対に避けねばならない。

「……了解」

議員たちの後に続き護衛任務に就いたレイを見送る。

ユリウスは険しい表情のまま、補給を終えたシリウスのコックピットへ乗り込んだ。



その場面に居合わせる事になったのは偶然か必然か。

アレンとしては偶然であると信じた。

険しい表情のルナマリアとアオイ、そして怯えたようにミレイアにしがみ付いているケイ。

そんな四人に向けて銃を突き付けているのは、アレンにとっても予想外の人物だった。

後から思えば不自然なほど人気のない公園でその姿を見た時、アレンは横にいたヴィクトリアの事も忘れ、駆け出していた。

「アスラン・ザラー！」

何故この場に奴が居るのか？

ルナマリア達と何があつたのか？

そんな疑問が湧き上がるが、銃口を向けている以上はまともな事態ではあるまい。

そう確信してアスランに向かつていく。

「アスト・サガミ！」

アスランもまた驚きつつも咄嗟の反応で走り寄るアレンの方へ銃口を向ける。

「アスラン！」

その時、アレンの後ろから銃を向けるアスランを制止するようにヴィクトリアの声が届いた。

「チツ」

一瞬の思考の後、銃口を下げる。

そこに銃を奪おうとアレックが腕を掴み、アスランもまた銃を奪わせまいと抵抗しながら睨み合った。

「何でお前が此処に居るんだ?! ルナマリア達に何をしていた!!」

「それはこちらのセリフだ!! いつも貴様が邪魔を!」

アスランは怒り任せにアレックの顔を殴りつける。

「ぐっ、この!」

アレックもまたアスランの顔面に拳を振るい、同時に銃を弾いて胸倉を掴み上げた。

「今回の会談といい、前回の降下作戦といい、テタルトスは何を考えて、いや、何をしようとしている!」

「何度も言わせるな! 貴様に応える義理は無いと言っている!! それに呑気にパイロットだけをやっている貴様には何を言っても分からないだろう!」

アレックの足を掛け、転ばすと馬乗りになって再び拳を振るう。

「状況も弁えず、何も考えず、ただ持ちうる力を振るっているだけの貴様にはな!」

「ぐう、なんだと! 自分は違っても言いたいのか! 自分の思い込みだけで勝手

に決め付けているそういう所がお前の独りよがりなんだよ！」

アスランも両腕を掴み、アレンは思いつきり勢いを付け上体を起こして頭突きを喰らわせる。

そしてすかさず体勢を入れ替えるとアスランの顔を殴りつけた。

「ぐああー！」

「自分の事は棚に上げて、何時も被害者面で、起こった出来事の不利益はすべて他人の所為！ 反吐が出るんだよ!!」

「こちらのセリフだ！ 勝手に決めつけるな！ 俺は自分の望んだ道を！ この先の、変革した未来を求めているだけだ！ それに貴様に関する事だけはその通りだろうが！ 貴様の所為で何人の仲間が死んだと思ってる!!」

「お互い様だろうー！」

何度も体勢を入れ替えながら殴り合う二人。

「……ハア、やれやれ。男というのは仕方がないですね」

そろそろ止めに入ろうとしたヴィクトリアの耳に、聞き覚えのある音が響いてくる。

「モビルスーツ!?!」

アムステルダムでのモビルスーツの運用は作業用を除いて完全に禁止されている。

違反すれば莫大な罰金とアムステルダムでの交易の禁止などのペナルティが課せら

れる事になる。

だが、降りて来たのはテタルトスで作業用として使用されている非武装のフローレスダガーであった。

スラストターの巻き起こす風が殴り合っていたアレンとアスランの動きを止める。

「いいタイミングです、クアドラード少佐」

「全く人使いの荒い。ザラ中佐、ランゲルト少佐、さっさと乗れ！」

アスランはアレンに蹴りを入れて引き離しフローレスダガーに走り寄ると、何故かミレイアの方に向けて手を差し伸べた。

「来い！」

「ミレイア、待つんだ！」

アオイの制止を振り切り、ミレイアがアスランに走り寄ると一緒にフローレスダガーの掌の上に乗った。

「アスラン！」

「決着は必ず付けてやる！ それまでにもう少しマシな機体を用意しておけ！」

スラストターからの逆風を受けながらアスランを睨むアレンにヴィクトリアが近づいてくる。

「ではアスト、また」

憤るアレンに軽く微笑むとヴィクトリアは素早くフローレスダガーの手に乗り笑顔で手を振る。

「ツ、ヴィクトリア！」

「とても楽しかったですよ」

空中に逃れたフローレスダガーを追う手段などなく、アレンは黙って見ているしかなかった。

「アレン！」

「ルナマリア、ミナト少尉、何があった？」

「それはこつちが聞きたいんですが……ゴホン、まあいいです。実は——」
ややジト目でこつちを睨んでくるルナマリアだったが、切りかえるように咳払いすると状況を説明してくれた。

ルナマリアはアオイ達に付き合う形でミレイア達のアムステルダムで難民受け入れ手続きを行った後で、街を見て回っていた。

そして少し休憩しようと街外れにある公園に足を踏み入れた所で奴に遭遇したらしい。

しかも銃で武装していた所をだ。

そこで拘束されかけた所にアレンが現れたという事のようにうだ。

「なるほど、やっぱり何かをしていたって事か」

「ええ、誰かを探していたみたいでしたけど、詳細は分かりません」

「ミレイアの事は？」

「尋問された時、テタルトスの人だつて聞いてやたらミレイアが食いついたんですよ。SEED思想の事とか聞きたいって」

アオイが辛そうに俯く。確かに食堂で話をした時もやたら興味をもっていたように見えた。

だからといって――

「まさか自らテタルトスに行くとは誰が思う。弟を置いてまで……」

ケイは何が起こったのか分かっていないようで、アオイの手を握りながら首を傾げている。

「とにかく一度――」

戻ろうと声を掛けようとした時、ポケットに仕舞っていた携帯端末から音が鳴る。訝しみながら端末を耳に当てると、聞きなれない声が聞こえてきた。

《やあ、お前がアスト・サガミか？》

「誰だ？」

《お前が『カウンター』だと知っている者だよ》

その言葉にアレンは端末を持つ手に強く力を込めながら、相手の声に耳を傾けた。

◇

フロ雷斯ダガーがカルキデイウスの格納庫に到着するとアスランはミレイアの手を取った。

「降りるときには気をつけた方がいい」

「ありがとうございます」

無事ミレイアは地面に足を付けると、物珍しいのか周囲を見渡す。

「それでさっきは話の途中だったが聞いてもいいかな、ミレイア・ロスハイム。何故、俺達に着いてきた？」

「興味があつたので。テタルトスやSEED思想に。いつか月にも行きたいと思っていました」

「それで彼らを裏切つたのか？ 弟の事も放り出して」

アスランが咎めるように問うとミレイアは心外そうに反論してくる。

「恩はありますけど、私は別に彼らの仲間になつたつもりは無いです。それに弟にも……会つて二か月も経つてないので、情とかありませんから」

「どういう事だ？」

「あの子は……父が愛人に産ませていた子で。戦争が始まってあの子の母親が死んだから、面倒見ろって押しつけられて。……あの子が悪いって訳じゃないけど、そんな、無理です」

「君の親は？」

「母はとつくに出て行って……父は、どこかで愛人でも作ってるんじゃないですか？」
ミレイアは父親に対しての軽蔑の感情を隠す事無く吐き捨てる。

なるほど、つまり彼女にとって弟は軽蔑している父親を思い出す象徴という事なのだろう。

理解はできるが、何も知らない弟を放り出す事に共感はできなかった。

しかしそれを迂闊に口に出す事は無い。

彼女を上手くこちら側に取り込めば、アスト達の情報も得られるからだ。

そんな打算を隠し、出来るだけ好意的に聞こえるように話を続ける。

「事情は分かった。君の身の安全は保障する。だが君が乗り込むのは軍艦だ。ついてくるつもりならばらく大人しくしている方が良い。それから聞きたい事もある」

「はい」

「お話はもう終わったようですね。特務の方はどうでしたか、ザラ中佐？」

話しかけてきたヴァルターはいつも通りの笑顔で問いかけてくる。

しかしアスランにはその質問に答える前に聞きたい事があった。

「……ランゲルト少佐、何故奴と一緒に居たんですか？」

「偶然、街中で出会っただけですよ。そちらの作業終了の連絡が来た後でね。まあまだ周辺の探索を行うと聞いていましたから、余計な事をさせないように監視していたつもりだったんですけど、失敗でしたね」

楽しそうに笑うヴァルターの横顔が一瞬、彼女の笑顔にダブって見える。

それがアスランの胸中に僅かな苛立ちを覚えさせた。

「……貴方は奴をどう思っているんです？」

「気になりますか？」

「……質問を変えます。貴方は奴を——討てますか？」

「もちろん」

躊躇いなき頷くヴァルターに意外な思いを抱きつつ、その眼をジッと見つめる。

「分かりました。後でその件に関して話も聞かせてもらえますか？」

「了解しました」

ミレイアを伴い歩き出したアスランはこれからの行動指針を決める為、未だ情報収集を行っているC班へ連絡を取る事にした。

◇

アレンとルナマリアは街の中心部から少し外れた場所、所謂歓楽街にあるバーを訪れていた。

「ホントに此処で良いんですか？」

「指定された場所はな。場所が場所だ、無理についてくる必要は無いぞ」

「一人にしたら、また別の女をナンパしそうですからね」

「だから、アレはたまたまというか。色々事情があつてだな」

言い訳しながらバーの扉を潜ると店の中は小奇麗で上流階級の人間と思われる客がゴロゴロいた。

「ここつてかなり高級なんじゃ」

「みたいだな」

高級感漂う店に臆したように入り口で立ち止まっているアレン達を見つけた店員が笑顔でこちらに近づいてくる。

「お客様、お席の方へどうぞ」

「いや、俺達は待ち合わせというか、呼び出されたというか」

「お名前を窺ってもよろしいでしょうか？」

「……アスト・サガミだ」

名前を聞くと「こちらへどうぞ」と店の一番奥にある席へと案内される。そこで待っていたのは、明らかに場違いな男だった。

「よく来たなあ、カウンターくん」

来ている服は折れ目がつき、髪はボサボサ。

口元の無精髭は整えられた様子もない。

何とも冴えない男がソファアでグラス片手に酒を煽っている。

「ほらほら座れよ。時間が勿体ない」

警戒しながらソファアに腰掛けると、単刀直入に聞く。

「貴方は誰だ？ 何故、俺の事を」

「つまらん質問だなあ。まあいいか。私の名前はヴェクト・グロンルド、ただの研究
者だよ」

研究者で、『カウンターコーディネイター』の事を知っているとすれば――

「メンデルの関係者か」

「まあそんな所だなあ」

「それで、何の用だ？」

「単にカグラの作品がどの程度なのか見たかったのと、私の実験に協力してもらいた

くてね」

ヴェクトの作品という言葉に反応してルナマリアがピクリと反応するが、アレンが手で制す。

「実験だど？」

「ああ。なあに簡単な実験だよ。大丈夫、大丈夫。大したもんじゃないからね」

「……胡散くさ」

ルナマリアに全力で同意だ。

絶対碌な目に合わないような気がする。

「じゃあ、実験に協力してくれたら、君らにもそれなりに対価をやろうじゃないか。たとえば情報とかね」

「情報ってなんの情報なのよ」

「そうだな。じゃあ地球にあるテタルトスの実験施設の情報とかは？」

「テタルトスの!？」

「他にも色々あるけど？　そうだなあ、今君達を追っているテタルトスの部隊の事とか」

その真偽はどうあれ、話を聞く価値はあるかもしれない。

しかしアレンの警戒度は最大にまで引き上がっていた。

実験の事や情報の出所など気になる事は山ほどある。

だが、それ以上にこの男の目が気に入らなかつた。

その目はかつてデュランダールと対面した時とよく似ている。

まるでこちらを実験動物か何かと思つているような、そんな無機質な目だ。

こいつはきつと命なんて何とも思つていない。

必要なら子供ですら、容易く弄ぶに違いなかつた。

「……断つたら？」

「分かつてる癖に人が悪いねえ、カウンターくん。……君以外にもカウンターはいるでしょ、そっちに協力してもらうだけさ」

該当者は二人だけ。

だが一人はこんな男に好きにできる程、容易い奴ではない。

となると――

「ティアに手を出す気か」

「さあね」

アレンは奥歯をギリツと食いしぼる。

手を出さなかつた事を褒めてやりたかつたくらいだ。

できれば今すぐこいつを始末したい。

しかし、先のアスランとの遭遇とは違い、この場所で騒ぎを起こすのは不味い。それにこいつが握っている情報は確認しておく必要がある。

「それで実験というのは？」

「さつきも言ったけど大したことじゃないよ。そっちのお嬢さんにもできれば協力してもらえると助かるけどねえ」

「私も？」

「おい、ルナマリアは関係ないだろう！」

「まあまあ、とりあえず話を聞いてからでもいいだろう？」

ニヤニヤとこちらを小馬鹿にしたような笑みを浮かべるヴェクトにさらなる苛立ちが募る。

「協力してもらいたい実験はね——」

ヴェクトの語った実験内容にアレンは冷たい視線を向けたまま、動かない。

「どうか？」

「……なるほど、概要は理解した。だが本当に協力するかどうかは、そちらの対価を示してもらってからだ。それ次第ではルナマリアを巻き込むもの以外なら協力してもいい」

「まあそれも当然だよな。実験もそのお嬢さんじゃないといけないって訳でもない

し、そっちの返事は話の後でいいよ。じゃあ対価としてまずは——これかな」

差し出された端末にはアムステルダム周辺で待機している追撃部隊の規模が示されていた。

ベースに駐留している部隊を除き、現在アムステルダム近郊で待機しているのはテタルトスの新型艦カルキデイウスとクレオメデスのみ。

突破しようと思えば出来なくはない。

「彼らの狙いの一つは私でね。君達をこんな場所に呼んだのも、彼らの目を誤魔化す為なんだよ」

「アスラン達がこんな場所にいたのはお前を捕える為か」

「私が他の陣営に肩入れする前に始末するか、捕縛しようって事だろうね。後は私の研究データの回収とかかな。昔助けた被検——おっと患者か、教えてくれなきやこうして上手い酒も飲め無かったよ。いやあ、人助けはしとくもんだねえ」

「……いちいち胡散臭いわね」

同感だ。

どうせ碌な話じゃないだろう。

助けたというのもどこまで本当の事なのやら。

「ははは、どうせなら君達に囚になつてもらえれば、その間に私も逃げられるんだけど

ねえ」

あくまでも軽薄に、しかし冷たい無機質な目をしたまま笑うヴェクト。

それを全く笑う事も出来ず、アレンはただこの男を睨みつける事しかできなかった。

◇

いくつかの話を終え、店を出ると外はすでに日が暮れ夜の闇に包まれていた。

アレンとルナリアはドツと疲れが押し寄せてきたような気がして深々とため息をついた。

「たく何なのアイツ！ アレン、まさかあんな奴の言う事を聞くつもりじゃないですよね？ 絶対信用できませんよ、アレ」

「俺だつて鵜呑みにするつもりはないさ。しかし放置もできない」

あの男が語った情報の出所も気になるがそれ以上に気になるのが行おうとしている実験とやらの規模だ。

詳しくは語らなかつたが、どう考えても一個人で賄えるようなものではない。最新の機材を揃えるだけでも相当な額が必要だ。

つまり後ろには相応のバックが存在している事になる。

「考えるのは後だな。とにかく一度戻るぞ。アムステルダムから離脱する準備だ」

「ハア、結局そうなるんですね」

先程も言ったがヴェクトの言う事を鵜呑みにするつもりは無い。

しかしアスラン達が本当に特務を受けたテタルトスの部隊だというなら、不味い。これ以上アムステルダムに留まっていると包囲されてしまう可能性もある。

「そうだったら少なくとも例の会談の間、アムステルダムから動けなくなる。……何が起こったとしてもな」

「そうですね。今、外に二隻しかいない。なら突破さえできれば、逃げ切れる」

「ああ。もちろん油断はできない。何かしらの策が必要になる。間に合うといいけどな」

もしもそれが上手くいけば、無事に離脱できるだろう。

もちろん相応のリスクは伴うが。

アレンは端末のスイッチを押しアイザックに離脱準備をさせる為に連絡を入れる。

そして周囲を警戒しながら人通りの多い場所を選びつつ、艦が駐留している場所へと走り出した。



アムステルダム戦闘禁止区域の外側でカルキデイウスとクレオメデスの二隻の戦艦

が落とすべき標的を今か今かと待ち受けていた。

モビルスーツは展開を済ませ、いつでも攻撃を開始出来る。

何を待ち受けているか、そんなものは一つのみ。

アイザックだ。

自分達が追ってきた獲物がもうすぐアムステルダムから出立すると情報収集を行っていたC班から連絡が入ってきたのである。

《クアドラード少佐、一応成果があつたとはいえ完全に任務が終了した訳ではありません。クレオメデスはあくまでも支援に徹しますので》

「了解した」

愛機であるH・アガスティアのコックピットでアスランからの通信を切ったヴィルフリートは鼻を鳴らして意気込んだ。

「ふん、望む所だ。貴様の手など借りるものか！ これまでの汚名を今度こそ返上させてもらう！」

その為に此処まで来た。

その為に訓練を積んできたのだ。

今度こそ不覚は取らない。

気合いの入れ操縦桿を握るヴィルフリオートの視界に覚えのある形状の戦艦が見えた。

あれこそ待ちわびた標的、アイザックに間違いない。

「来たな、カメモドキめ！ 全軍、攻撃開始！ 落とすぞ！」

「了解！！」

アイザックが戦闘禁止区域から離脱した瞬間を狙い、左右に展開していたカルキディウス、クレオメデスからミサイルが発射される。

ミサイルの嵐が次々とアイザックへと着弾した。

「よし、このまま押し込む！」

絶え間なく発射され続けるミサイルを先に甲板へ出撃していたイレイズ、イリアス、エクリプスとインパルスが迎撃する。

だが数の差はどうにもならない。

幾つかのミサイルがアイザックの至近距離で爆発し、その進路を鈍らせた。

その隙についてフローレスダガー部隊が接近、ビームライフルを撃ち掛けた。

「第二部隊は背後に回り込め！」

「ハッ！」

事前に待機していたジンIIの部隊がウイングコンバットの推力を持って一気に背後へ回り込む。

四方を囲まれたアイザックにもはや逃げ場はない。

ただ撃沈されていくのを待つのみだ。
しかし、そこで全くの別方向。

アイザックを囲む形で攻撃を仕掛けていたカルキデイウスとクレオメデスの反対側から襲撃を受ける。

攻撃を仕掛けてきたのはアイザック所属と思われる数機のウインダムだった。

「やっぱりそう来たかよー」

敵の予測通りの動きにヴィルフリートは思わず喝采したいほどに哄笑する。

アイザックとして自分達が待ち受けていた事は承知済みだった。

ならば取るべき手段は限られてくる。

数で劣る以上、正面突破は愚策。

奇襲をもって当たる他ない。

「だが、所詮多勢に無勢だ！　ランゲルト少佐！」

「了解」

その作戦をヴィルフリートは読んでいた。

戦力を伏せていたのはこちらと同じ事。

ヴァルターのシリウス・ラファールと共に側面に伏せさせていたバーストコンバット

装備のフローレスダガーが仕掛けてきたウインダムに攻撃を開始する。

発射されたビーム砲、ミサイルが戦艦に取りつこうとしている敵機を薙ぎ払う。

「これで終わりだ！」

ヴィルフリートは勝利を確信し、アイザックに止めを刺すべく突撃する。

「流石だな、ヴィルフリート少佐は」

クレオメデスのブリッジで観戦を決め込んでいたアスランは作戦立案から実行まできつちり行つたヴィルフリートの手腕を素直に称賛する。

「決まりですか」

「本気で言っているのか？」

「は？」

「この程度の劣勢で落とせるならば、『ヤキン・ドゥーエ戦役』でとつくに決着はついているさ」

このアスランの呟きを正しく理解出来る者がこの戦場に何人いるだろうか？

もはや勝敗は決したとクレオメデスの副官だけではなく、少なくともヴィルフリートを含めた大半がそう確信していた。

しかし、それが甘かった事を次の瞬間、誰もが思い知る事になる。

「ん、これは……」

「どうした？」

「レーダーに反応!? 上空から何か来ます!!」

オペレーターの叫び声にアスランはやはりという思いを抱くと同時に即座に判断を下した。

「クレオメデス、後退だ！ モビルスーツも下げろ！ 全機に通達！」

「えっ？」

「急げ！」

アスランの命令により後退するクレオメデス。

それを尻目にアイザックに突撃するヴィルフリートの部隊は降りてくるソレに気づかない。

上空から発射されたビームの砲撃がアイザックに迫っていた部隊を撃破すると、凄まじい加速で下降してきたソレが刃を振り下ろしてきた。

「何!?!」

鮮やかにフロースダガーを袈裟懸けに切り裂き、H・アガスティアの前に一機のモビルスーツが現れた。

背中には赤い翼。

構えるは身の丈にも迫る大剣。

「あれは!?!」

振り返りツインアイに光を灯す。

アイザックを守るように降り立ったのは、デステイニーリフアイン。

予想外の援軍に動きを止めたテタルトス軍を尻目に、デステイニーは動き出した。

第15話 再会

アイザックがアムステルダム近郊で戦闘に入る少し前に時間は遡る。

スカンジナビアが所有するマスドライバー『ユグドラシル』

ここは軍事基地であるストウール基地と隣接し、常に賑わいを見せている施設だった。

現在この施設ではモビルスーツ、デステイニリーファインの発進準備が進められていた。

マスドライバーに設置されたデステイニリーファインは外部装甲を身にまとい、腰から下には大型のブースターが取り付けられている。

「各部正常、予備バッテリー接続、アドヴァンスアーマー、外部スラスター、排熱システム、ブースターユニット、すべて異常なし」

コックピットで機体の調整を行っていたシンの元に管制官からの通信が入ってくる。

《アスカ中尉、機体の準備はどうか？》

「最終チェック完了」

《了解。発進許可が下りるまで待機してください》

「了解」

準備を整えたシンはシートにもたれかかると、盛大な溜息をついた。

ここまでの急な行程変更で疲れていたというのもある。

本来であればオスロでミネルバと合流し、アムステルダムへ向かう予定だった。

だが、アレンからの緊急連絡によって予定を変更する事になってしまった。

しかしシンが本当に溜息をつきたい理由はその件ではない。

デステイニリーファインの次にマストライバーから射出される機体とパイロットこ

そ、シンが溜息をつきたい最大の理由だった。

STAIRS6 『ランドグリーズ』

これまでの量産機や試作されたSOAXシリーズのデータを基に開発されたスカジナビアの次世代新型量産機である。

ブリュンヒルデを含めた今までの量産機のデータを基に開発され、タクティカルシステムを使用せずとも宇宙戦、空中戦、地上戦、さらに軽い調整で水中戦までこなせる万能機となっている。

「なあ、やっぱりセリスはここで待ってた方がいい」

「私は大丈夫だよ。先生からも許可は取ったし」

ランドグリースのコックピットにいたのはパイロットスーツを着込んだセリスだった。

リハビリを終え、今回の戦闘からセリスは正式にパイロットに復帰する事になったのだ。

「でもな」

「もう結論は出たでしょ」

実はこの話、ここに来るまでに何度も行っている。

シンの心情としてはセリスには二度と戦場に出てほしくはなかった。

しかしセリスと一緒に戦うと主張して譲らなかつたのだ。

何度も何度も話し合い、結局シンが折れる形でセリスのパイロット復帰を認めることになってしまった。

「アレンやルナたちが危ないんだし、ミネルバも先行したんだから、時間もない。シン、私を信じて」

「……解ったよ。セリス、無理はするなよ」

「それ私のセリフなんだけどね。絶対無茶しちゃ駄目だよ」

《アスカ中尉、ブラッスール中尉、許可が下りた。準備はいいか？》

「大丈夫です」

「こつちもです」

準備が整ったデステイニリーファインが固定され、シンは操縦桿を強く握る。

《進路クリア、発進どうぞ！》

「シン・アスカ、デステイニー、行きます!!」

デステイニリーファインに接続されたブースターユニットが点火。

マストライバーのレールを伝って空へと飛びだすと一気に天上へと登っていく。

そして幾ばくか遅れデステイニーを追うようにランドグリーズが射出された。

「ぐっ」

「くうう」

身体に掛かるGに耐えつつ揺れるコックピットの中で操縦桿を握りしめ、機体の挙動を確認していると急に体が軽くなった。

「大気圏を抜けた。セリスは……付いてきてるな」

レーダーで現在位置を確認すると二機はきちんと予定通りのコースを辿っていた。

「よし。脚部ブースターユニット、切り離し。突入角度計算、アドヴァンスアーマー排

熱システム起動、姿勢制御、セリス！」

「こつちのアドヴァンスアーマーも異常なし。大丈夫！」

ブースターを切り離し、予定ポイントへたどり着いた二機は再び大気圏へ突入する。機体の姿勢制御を行いながら振動が続く灼熱の空間を駆け抜ける。

「このまま！」

大気圏を抜け蒼い空と大地が視界に広がる。

シンはすかさず計器を操作し、現在位置の確認に入った。

「予定ポイントより、若干のズレがある。セリス、少し移動を」

「シン、レーダーに反応。これは……戦闘、アレンたちがいる戦艦の反応がある!」

「もう始まつてるか。俺が先行する、セリスは援護を頼む!」

「ちよつ、シン!」

セリスの返事を待つ事無くシンはデステイニーを戦場へ向けて加速させる。

「外部スラスターパージ! 予備バッテリー作動! いくぞ!!」

余分な装備は外し、光の翼を展開する。

そしてアロンダイトを背中から抜き放つと最大戦速で戦場へ飛び込んでいく。

「全く、出撃前に無茶するなってあれほど言ったのに! 後でお説教だね!」

体勢を立て直しつつセリスが後方から放ったビームランチャーがアイザックに迫る

敵部隊に直撃。

ビーム砲の一撃に晒された敵部隊がフォーメーションを崩す。

シンはそこに割り込むと容赦なくアロンダイトを振り下ろした。

「やらせるかアアア!!」

振り下ろした対艦刀がフローレスダガーをバターのようにたやすく両断する。

そしてアイザックへ攻撃を仕掛けていた部隊を率いる隊長機に向き合った。

「こちら同盟軍所属シン・アスカ中尉！ アイザック、聞こえているか！」

「シン!? 何とか間に合ったか」

甲板に立つエクリップスと通信が繋がり、シンの見ているモニターにアレンの顔が映し出された。

「アレン、無事ですか？ 全く急な作戦変更で焦りましたよ！」

今回の件。

これは敵に囲まれる可能性を危惧したアレンがマストライバーを用いた降下作戦に切り替えるように打診したのだ。

「悪かったな。こつちも時間がなかったんだ」

「それはわかりますけどね。とにかく話は後で！ セリスもすぐに来ますから！」

突然の乱入者にたじろいでいたフローレスダガーも正気を取り戻したのか、ビームライフルで攻撃を加えてくる。

だがその攻撃にひるむことなく翼を広げ、デステイニーは敵陣へと斬りこんでゆく。

「そんなものに当たるか！」

機体を時に翻し、時に旋回させながら数多のビームを回避する。

「遅い！」

すれ違い様に大剣を一閃する。

アロンダイトの強烈な一撃を捌くこともできず、フローレスダガーは成す術なく切り裂かれ、空中で爆散した。

「まだまだ！」

高速で動き回るデステイニーが斬撃を繰り出す度にフローレスダガーが次々撃墜されていく。

「チツ、増援か！　しかしたかが一機、増えたところで!!」

あと一步でアイザックを落とす事が出来た筈だと憤るヴィルフリート。

二刀のビームサーベルでデステイニーリファインに突撃した。

その斬撃を盾で受け止めたシンは握る操縦桿に力を込めて睨み返した。

「アンタが隊長機か!!」

「邪魔だ！　そこをどけエエ!!」

「誰が退くかよ!!」

弾け飛ぶと同時に再び激突、すれ違い様に火花が散る。

「隊長機だけはある！ けど!!」

シンは今の攻防でヴィルフリートの技量を見抜いた。

確かに優れた技量を持ち合わせている。

射撃も正確で、機体制御も上手い。

でも、それだけだ。

このパイロットには何かが足りない。

それが何かまでは知ったことじゃないが、今のこいつは恐るるに足りない。

「このまま押し切る!!」

デステイニーの赤い翼から発せられる光から生み出された光学残像。

ヴィルフリートを幻惑しながら間合いを詰める。

「速い!?!」

「はあああ!!」

予想外のスピードに虚を突かれる形でヴィルフリートは反応が鈍った。

その隙を見逃さず、さらに速度を上げるデステイニー。

一瞬、二機がすれ違う。

デステイニーがアロンダイトを振り抜いた瞬間、H・アガステイアの右腕が宙を舞っていた。

「なっ!？」

「おおおお!」

「くっ!」

残像を伴う立て続けの連撃にたまらず後退するH・アガステイア。

だが、逃がさないとばかりに放たれたデステイニーの斬撃が今度は左足を斬り飛ばした。

「ぐう!」

「落ち——ッ!？」

さらにH・アガステイアに畳みかけようとしたシンだったが、それを阻むようにビーム砲の一射が割り込んできた。

しかもその精度は他の機体の比ではない。

先読みしたかのような正確な一撃がデステイニーを穿たんと狙い撃ってくる。

巧みな射撃に動きを止められ、H・アガステイアから引き離されてしまう。

「何だ!?! 他とはレベルが違う!!」

シンはこの射撃を行っている厄介な敵の方へ視線を向ける。

そこには長い砲身を持つライフルの銃口を寸分違わずデステイニーに向けるヴァルターのシリウス・ラファールガの姿があった。

「あいつか!」

「アレを避けるとは大した反応です。しかしいつまで避けられますかね」

「こいつ!」

デステイニーの装甲を掠めていくビームの閃光。

そのたびにシンの背中に冷や汗が滴る。

「近づけない!」

シンもビームライフルを構え、シリウス・ラファールを狙う。

しかしその時にはシリウスはポジションを変え、別方向からの狙撃に切り替えていた。

「くそ!」

先ほどのH・アガステイアと比べても遥かに手強い敵だ。

デステイニーリファインとの相性の悪さもある。

デステイニーリファインには長距離射程の武装は存在しない。

オリジナルデステイニーには高エネルギー長射程ビーム砲が装備されていたが、リファインでは動力の問題からオミットされていた。

さらに言うのであれば技術の差がある。

非常に認めたくない話なのだが、長距離からの狙撃に関しては相手はシンよりも一枚

も二枚も上手であった。

「くっ、接近さえできれば！」

「それをさせないのが腕というものですよ」

「シン！」

シリウスのビームからステイニーを守るように盾を掲げたセリスのランドグリーズが割り込んでくる。

「大丈夫？」

「セリス、助かった」

「アレの相手は私がするから、シンはアイザックの援護に回って！」

「けど、アイツ只者じゃない。セリスは危ないから」

「シンこそ、危ないでしょ。それからさっきの突撃も！ 無茶しないって約束したでしよ！」

「うっ、い、今はそれどころじゃないだろ」

「また誤魔化して！」

その会話を聞いていたのか、若干イラついたような表情を浮かべたルナマリアが割り込んでくる。

「アンタ達、今は戦闘中だったの！ いちやつくなら後にしなさいよ！！ たく、何年

たつてもアンタ達は！」

「ルナ！ 元氣だった!!」

「状況考えて、状況！ そんな挨拶は後にしなさいよ！ 援護！」

「了解！」

シンが攻撃してくる部隊をズタズタにしたため、アイザックに対する攻撃は少し緩んでいる。

流れを変えるにはここが踏ん張り所だ。

「俺が前が出る！ セリスはアイツの相手をしてくれ！」

「ええ！」

シリウスの相手をセリスに任せ、シンはアロンダイトを片手に再び敵陣へと突っ込んでいった。

◇

戦場から少し後方へ下ががり、援護に徹していたクレオメデスのブリッジでアスランは僅かに眉を擡める。

「……デステイニーと同盟の新型か」

「デステイニーについては前大戦で交戦した経験がある。パイロットを含め厄介な機体だった。」

傍で援護を行っている同盟の新型についても高い性能を持っているようだ。

だが、データの収集ができるこの状況は好都合ともいえる。

特務は一応片付いているし、今回の作戦も特務に付き合わせた形となったヴィルフリート達の顔を立てる為のもので無理する必要は全くない。

「さて、どうするか……」

「中佐、ご命令通り後方へ哨戒機を向かわせたのですが、予測された通り近づいてくる艦影を発見したと報告が上がってきました」

「何が来る？」

「……ミネルバです」

「やはり伏兵」

そもそも寡兵であるアイザックがアムステルダムから出てきた時点で何かあるとは考えていた。

戦力差は歴然で、しかも待ち伏せまでされている。

それを突破しようというのだ。

何もないと考える方がどうかしている。

「……このままでは逆に挟撃される。戦略家としても侮れない訳か」

「中佐?」

「いや、哨戒に向かった部隊にミネルバを足止めさせろ。ただし無理する必要はない。時間を稼ぐだけでいい。それから……ガーネットの用意とラデイスを出撃させろ」

「よろしいのですか?」

「強化兵の戦闘データ収集も任務の内だ。正し命令には従えと伝えておけ」

「了解」

アスランはその場を艦長に任せ、格納庫の方へと向かう。

そこではある種、懐かしさを覚える機体が待ちうけていた。

「ガーネットか。レグルスが使えないから地上用として持ってきたが、使う事になるとは思わなかったな」

LFSA-X001 『ガーネット』

ユニウス戦役でアスランが搭乗していたモビルスーツ。

当然ユニウス戦役時に比べても強化されており、性能も信頼に足る機体だった。

「中佐、ガーネットの整備は完了しています」

「ありがとうございます?」

「はい。すでにグエラ少尉に合わせた調整も終わっていますから、何時でも出撃可能

ですよ」

「了解。ラデイス、聞こえているな。デステイニーの相手は俺がする。お前はクアド
ロード少佐を回収しろ」

「俺が？　しかし、俺はエクリップスの方に」

「命令だ。深追いはするな」

「チツ、了解」

ラデイスの返答を聞きながら機体を立ち上げるとジンⅡ・アクティヴと共に戦場へと
踏み出した。

「……後はいかに損害を抑えるか、だな」

アスランは未だ攻防を繰り返す戦場を見ながら、誰にも聞こえない小さな声でポツリ
と呟いた。

◇

迫りくるミサイルを迎撃したアレンは出撃してきたジンⅡと赤い機体に目を見開い
た。

「あれはジンⅡの改修型に……確かアスランの、ガーネットとかいう機体だったな」

宇宙で戦ったあのレグルスとかいう機体よりは戦闘経験もある分マシンなのだろうが、エクリプス自体が万全とは言い難い状態のままだ。

予定外にアムステルダムからの離脱を強いられ、修復作業は中途半端な状態であった。

「この状況で出てくる！ ミネルバに気が付いたか！」

アレンの策は二つ。

アイザックを囷にして上空から降りてくるシン達による奇襲を行う事。そしてもう一つがミネルバだ。

オスロから発進したミネルバがカルキデイウスとクレオメデスの背後を突き、混乱した隙に離脱を図る予定だった。

アスランが直接出てきたという事はミネルバが駆けつけてくる前に蹴りを付けるつもりなのかもしれない。

「シン、気をつけろ！」

「ッ、新型!？」

腕から発生させたビームサーベルでステイニーに切りかかるガーネット。

斬撃をギリギリのタイミングで潜り抜けたシンは回り込みながらアロンダイトを叩きつける。

ガーネットのシールドが対艦刀を止め、さらに叩きつけられたビームサーベルをデステイニーの盾が防ぐと互いの眼前を稲光が照らし上げた。

「それ以上、好きにはさせない、デステイニー」

「このオオ!!」

シンが力任せに弾き飛ばそうとするが、ガーネットがそれをさせない。シールドに角度を付け、刃を滑らせる事で対艦刀を受け流したのだ。

「っいつ!?!」

たたらを踏むデステイニーに脚部ビームサーベルの追撃が襲い掛かる。

「この程度!」

機体を僅かに後退させ、斬撃を回避したシンは反撃に移ろうと再びアロンダイトを構える。

しかしガーネットの攻勢はまだ終わらず、上下左右から次々と斬撃が飛んできた。

「ただけ器用なんだよ、アンタは!!」

「その大剣を手足のように扱う君ほどじゃない! ラゲイス!!」

「了解」

デステイニーをかわしたジンII・アクティヴが損傷しながらもまだアイザックに対する攻撃を加えようとしているH・アガスティアを抱え上げる。

「な、何を！ 放せ、グエラ少尉！」

「そうしたいのはやまやまですが、命令ですので」

暴れるヴィルフリートをラデイスはクレオメデスの方へ無理やりに引っ張っていく。

「撤退するつもりなのか？」

「アレン。今がチャンスですよ」

アイザックに対する攻撃の要を担っていたのはあの損傷したH・アガステイアだった。

それがどんな形であれ後退し、艦に対する直接攻撃の勢いも緩んだとなれば、確かに絶好の機会。

「……アスランに乗せられたような気がして癪だが、四の五の言ってられないか。アイザック、離脱準備！ ミナト少尉、シンとセリスの援護を！ フォルケンマイヤー少尉は予定通りに頼む！」

「了解！」

アイザックが動くと同時にイレイズとイリアスも予定通りの行動に出た。

「逃がして堪えるものか！」

「お、おい！」

アイザックの狙いに気が付いたのか、後退していたH・アガスティアが無理やりジン・アクティヴを振り払い、イレイズの方へと向かっていく。

「ミナト少尉!？」

「こっちは大丈夫だ! そっちは自分の役目を果たせよ!」

「言われるまでもない!」

H・アガスティアは片手、片足を失いそれでもサーベル片手に斬り込んでくる。

「ガンダム!」

迎え撃つイレイズMk-IIは構えたシールドでサーベルを受け止めた。

「退けよ! そんな状態で向かってくるなんて!」

「黙れ! 俺に、俺には撤退という選択肢は無い! 貴様らをこの手で討ち果たすま

では!」

「無駄死にしたいのか!」

「黙れと言った筈だ! 敵に情けを掛けられる覚えなどない!!」

力任せにビームサーベルを押し込んでくるH・アガスティア。

しかし損傷の影響か。

パイロットであるヴィルフリートに焦りか。

あまりに攻撃が荒い。

これならいくらでも捌くことができる。

アオイは一瞬だけ歯を食いしばり、そして反撃に転じた。

「なら、俺も容赦しない!」

H・アガスティアのサーベルをすくい上げるように上方へ弾き飛ばす。

「ッ!?!」

「ハアアア!!」

同時にシールドを捨てたイレイズは腰のビームサーベルを抜き打ちで斬り払う。

居合いのように放たれた斬撃がH・アガスティアの残った腕を切り落とし、さらにもう片方の手で抜いたサーベルで突きを放つ。

「くそー!」

コックピットを狙った一撃はヴィルフリートの前回の回避運動でかわされてしまう。

しかしそれでもサーベルはH・アガスティアの左胸部へ深々と突き刺さった。

「ぐあああ!」

「あのタイミングで避けたのは流石か! でも!」

「やらせるか!」

割り込んできたのはジンII・アクティヴ。

複合型ビームライフルから伸びるロングビームサーベルをアオイは咄嗟にせり出し

たブルートガングで受け止めた。

「Mk-IIかよ！」

「くっ、このパワー!?! 新型か！」

「いくら伝説の機体だろうと、もはや旧型！ そんなのでこのアクティヴの相手ができるんでも思ってるのか！」

ジンII・アクティヴのビームサーベルがブルートガングを力任せに押し返してくる。

「旧型だからって、俺の愛機を舐めるなよ！ モビルスーツの性能だけで勝てると思うな！」

パワー勝負ではジリ貧になるだけだと判断したアオイは咄嗟に剣を引く。

ジンII・アクティヴの斬撃を受け流し、バルカン砲でけん制しながら一旦距離を取った。

「接近戦で勝てないなら距離を取ったら勝てるでも！」

ジンII・アクティヴが構えるのは肩に設置された高出力ビームキャノン。

直撃を受ければ、モビルスーツだろうと戦艦だろうとひとたまりもないだろう。

しかしアオイはあえて正面から突撃する。

「馬鹿が！ 落ちろ！」

砲口から発射されるビームの光。

それは寸分違わず一直線にイレイズ目がけて突き進んでくる。

その正確さは強化兵の面目躍如というところか。

「うおおおお!!」

ビームが直撃しかけたその時、アオイのSEEDが発動する。

紙一重のタイミング。

装甲に閃光が掠めながらも避けたイレイズはバレルロールしながら、ジンII・アク

ティヴとの距離を一気に詰める。

「あの位置で避けただ?!」

その動きはラデイスにとってあまりに予想外だったのか、ビームを避けながら突撃してくるイレイズに対して一瞬だけ、反応が遅れた。

「そこだアア!」

煌めく光刃の一太刀がビームランチャーの銃身に傷を負わせた。

「チツ、損傷は軽微だが、これでは使い物にならない……貴様アア!!」

激高しながらビームランチャーをパージするジンII・アクティヴ。

「よくも俺に傷を!!」

「避けられたのは驚きだな!」

アオイとしては必殺ともいえる、撃墜した筈の一撃だった。少なくとも戦闘不能になってもおかしくない。

しかしジンⅡ・アクティヴは常人とはかけ離れた反応で致命傷を避けて見せたのだ。「エクリプスに借りを返す前にお前から!!」

「お前の相手なんてしてられない。それより、後ろに注意した方がいいぞ」
「何?!」

イレイズにビームライフルを向けようとしたジンⅡ・アクティヴの背後からいつの間にか投擲されたビームブーメランが迫っていた。

「ビームランチャーを避けた時か?! 小賢しい!」

ラティスはシールドのガンランチャーでビームブーメランを吹き飛ばす。

その時アオイはすでにジンⅡ・アクティヴとの間に距離を取っていた。

「逃がすと——」

イレイズを迫おうとするジンⅡ・アクティヴ。

しかしアイザックの方から発射された強力なビーム砲。

甲板に立つイリアスの背中に装備されたランチャーストラライカーの主武装超高インパルス砲アグニの一撃が道を阻んだ。

「……チツ。ハア、任務でしょ、分かっていますよ、中佐」

部隊を分断するアグニの砲撃を忌々し気に見つめながらジンII・アクティヴは撃墜されかかったH・アガスティアを回収しクレオメデスへ踵を返す。

それを尻目に戦場を切り裂く砲撃はアイザックを側面から攻撃する戦艦、即ちカルキデウスへ直撃する。

エンジンのすぐそばから爆発が起き、煙を上げて船体が横へ傾いた。

「よし、信号弾！ アイザック、エンジン点火！ 急速離脱！！ ルナマリア、フォルケンマイヤー少尉、味方機の離脱を支援！」

「了解！！」

アレンの指示で信号弾が上がると敵と交戦していた味方がアイザックへと帰還する為、動き出す。

その中でシンとアスランだけは一進一退の攻防を続けていた。

「ハアアア！！」

すれ違い、互いに刃がシールドで阻まれ火花が散る。

「くそー！」

シンはアスランによって完全に足止めされていた。

脇を抜こうとしても道を阻まれ、撃墜するにも技量の高さでそれをさせない。

「どうした？ その程度か！」

アスランからの見え透いた挑発に思わず頭に血が昇りそうになる。

だが、ゆっくりと息を吐き落ちつきを取り戻すと、アロンダイトを構え直した。

冷静さを欠いて倒せる相手ではない。

すべてを目の前に居る敵に集中する。

動きを乱さないデステイニーにアスランは意外そうな声を出した。

「……意外だな。もつと熱くなるタイプだと思ったんだが」

「……アంతこそ、アレンの事になると冷静を無くす癖によく言うよな」

両手、両足からビームサーベルを構えるガーネット。

そしてデステイニーはアロンダイトを正眼に構える。

互いの隙を窺い、そして同時に踏み込んだ。

左からの蹴撃をシンはあえて左腕を差し出し、損傷しながら受け止めるとガーネット

の右腕にアロンダイトを突き刺した。

「これで！」

シンはそのまま腰から抜いたビームサーベルでコックピットを狙う。

だが――

「甘い！」

ガーネットに腕を掴まれながら頭突きを受けたデステイニーに右足の光刃が奔る。

「ぐっ」

デステイニーの胸部を袈裟懸けに傷がつき、咄嗟に繰り出した蹴りがガーネットの腹に直撃した。

「仕切り直しか」

「やっぱり強い」

シンは距離を取りつつ、相手と自分の状態を比較する。

機体の損傷度はほぼ同等。

いや、アドヴァンスアーマーを装備していた分、こちらの方が傷は浅い。

機体性能はこちらが上のようなだが、武装の消耗度では不利。

特に近接戦闘での手数は向こうの方が有利だろう。

どうすべきか迷うシン。

だがそこに予想外の援軍が現れた。

「シンー！」

「その声、アオイか!?!」

近づいてきたイレイズから聞こえてきたのは懐かしさすら感じる声だった。

アオイ・ミナト。

運命のように出合い、戦場で幾度も殺し合い、そして共に戦った不思議な間柄の人物。

ある意味では戦場のシンをよく知り、そしてシンが最も理解している人物だった。

「退くぞー！」

「ッ、了解!!」

イレイズがスカッドストライカーを切り離し、ビームマシンガンで破壊して煙幕を生み出した。

その隙にヴァルターと相対していたランドグリーズと合流し、戦場から離脱を図る。アスランはあえてそれを追わず、見逃した。

「……思ったよりもやられたな」

ガーネットの損傷だけでなく、味方も想像以上の損害を被っていた。

いや、あの『消滅の魔神』相手にこの程度で済んだ事を褒めるべきなのかもしれない。ヤキン・ドゥーエ戦役でザフトの部隊は奴とキラの二人によって次々と壊滅させられていったのだ。

あの戦果、今見ても背筋が凍る。

「大丈夫ですか、ザラ中佐？」

「ランゲルト少佐、お見事な手並みでした。流石ですね」

奴らを相手に味方の損耗を抑えられたのはヴァルターのおかげだ。

敵のエースを抑えながらも遠距離からの狙撃で味方のポジションを確保していたの

である。

「こちらの相手もかなり手強かったですよ。こちらの癖を知っているかのような感じでしたしね。……もしかすると彼女の関係者だったのかもしれない」

「何か？」

「いえ。それよりも残念でしたね、彼と決着をつけられなくて」

彼というのはデステイニーのパイロットではあるまい。

「……俺と奴の決着はこんな不本意な機体で行うものではありませんよ」

決着をつける時は、互いに全力で。

その時こそ全力で奴を叩きつぶすのだと内心意気込みながらアスランは去っていく
アイザックの姿を見つめていた。

◇

離れていくアイザックの姿を見ていたのはアスランだけでは無かった。

クレオメデスの士官室を宛がわれていたミレイアもまたその姿を冷めた目で見つめていた。

「……落ちなかった」

その声色には安堵よりも確かに落胆の色が濃く混じっていた。

彼女にとってアイザックもすでに過去の存在になりつつある。

忌まわしい過去すべてを払拭し新しい道を、変革を望む彼女にとってアイザックに対して恩よりも、煩わしさの感情の方が強くなっていた。

「でも、もう会う事もないし、どうでもいいかな。それより何時月に行けるのかな？」

アスランさんに聞いてみようかな」

今までの戦闘の事などどうでもいいと言わんばかりに、どこか楽しそうにミレイアは空の彼方に存在する理想郷の姿を思い浮かべた。



そこは数百人が集まるには十分すぎる会場。

閑散としながらも立派な内装としっかりとした建造物はそれなりの歴史を感じさせる。

集まるのは地球軍の制服を身にまとう将校達と政治家と思われるスーツを着込んだ男達だった。

全員が追い詰められたような危うさを感じられる表情を浮かべているのが特徴的である。

重苦しい空気の中、この場を取り仕切る初老の男が重い口を開いた。

「さて、では会議を始めよう。我らユーラシアの未来の為に」

第16話 錯綜する思い

ユーラシア連邦。

それはロシア、EU諸国を中心とした連邦国家であり、巨大な地球連合という組織の中でも大西洋連邦と並ぶ発言力を持った一大勢力であった。

しかしそれも今は昔の話。

ヤキン・ドゥーエ戦役終盤からユニウス戦役に掛けて起こった様々な出来事の煽りを受けて勢力は分裂、大きく弱体化してしまったのである。

現在では風前の灯とまではいかないものの、かなり追い詰められた状況へと陥っていた。

「さて、では会議を始めよう。我らユーラシアの未来の為に」

議会場に集まったユーラシアの主要人物を取り仕切るように初老の男が声を発した。

「今回の議題は言わずもがな、ミュンヘン会談に対する我が勢力の対応と対策を協議

したい」

「対応と対策と言つても、我々が取れる手立ては多くありませんよ」

「ですな。今まで通りの静観か、どこぞの勢力に尻尾を振るか。もしくは……」

「静観はあり得ないでしょう。ユニウス戦役やベルリン条約と同じ轍を踏むことにもなりかねない」

ユーラシア弱体化の要因の一つとして語られているのが、ユニウス戦役時における対応だった。

ユニウス戦役中盤、世界を裏側から牛耳っていた組織『ロゴス』の存在がギルバート・デュランダルによつて世界にさらけ出された。

当然ではあるが世界は混乱の只中へ突入する事になり、最終的に二つの立場へ自ずと分けられていった。

ロゴスに従うか。

それとも抗うか。

従うもの達はロゴスの下へ。

抗うものはデュランダルの下へ走つた。

中には中立同盟のように反ロゴスを掲げながらも、デュランダルと協調しなかつた勢力もあつたわけだが。

そんな状況でユーラシアが選んだ選択は静観。

ロゴスからの離脱を掲げるわけでもなく、特に協力も表明しないというものだ。

これはユーラシア西部地域の対連合感情が悪化傾向にあり、連合からの分離独立運動が活性化していた為、鎮圧に力を注がなければならなかったという理由もある。

だがそれ以上に大きな理由もあった。

確かに混乱したものの戦力的に勝っていたのはロゴス側だった事。（少なくともユーラシアはそう判断していた）

幾らデュランダルが騒ごうとプラント側の不利は否めないと判断したからだ。

しかし、結果はその予想を覆し、反ロゴス側の勝利に終わった。

ユーラシアは最後まで自分達の立場を明確にする事をしなかった。

世界からはロゴス派であると認識され、国際的にも孤立した状態に陥ってしまったのである。

「では、どうする？ 仮に他勢力と組むとしてもイスラフィールやロアノークとの同盟など不可能だろう。アラスカの件もあるしな」

「ええ。新型機開発でも遅れを取っていますし、戦力的に役に立たないと見なされれば上手く組めたとしても立場は以前と同じかそれ以下。下手すれば捨て駒扱いでしょう」

「となれば一番可能性がありそうなのは、中立同盟ですが」

「それも我々と組むメリットを示さねば、アルムフェルトやアスハは首を縦には振るまいよ。奴らとて火中の栗を進んで拾うような真似はすまい」

静観も他勢力との協調も難しい。

そうなるかと必然的に残った手立てを取るしかない。

「となると最後の手段しかないかと……」

「あの男からも再三にわたって返答の要求がきています」

「あんな男の事が信用できるのか？ 我々を都合よく利用しようとしているようにしか思えん。あの機体やそれを操るエクステンデットの提供など都合が良すぎる」

「それは同感ですが……アルテミスの件もありますから」

全員が一様に顔を顰めて押し黙った。

「……受け入れたのは間違いだったのでは？」

「それこそ言っても始まらんよ」

再び黙る一同に再び初老の男が口を開いた。

「そろそろ結論を出したいのだが？」

「……私は反対です。リスクが高すぎる。少しでも可能性があるなら、同盟との協調を模索した方がまだいい」

「賛成だ。手をこまねいていても埒が明かんよ。無論、相応の対策も必要だが」
賛成と反対の手が次々に上がり、それを初老の男が確認すると軽く頷いた。

「……結論は出たな。異議はあるまい」

不満そうにしている者はあれど、その場で反論する者は誰もいなかった。

◇

テタルトスからの追撃を逃れたアイザックは援軍として駆けつけていたミネルバと合流を果たしストックホルムへと向かっていた。

久々にミネルバの格納庫に足を踏み入れたアレンとルナマリアに笑顔で近づいてきたヨウランやヴェイーノ、それに部下であるパイロットたちが駆け寄ってくる。

皆と無事を喜び合いながら、二人は安堵したように肩の力を抜いた。

「何というか、帰ってきたって感じですね」

「そうだな。何だかんだと一か月以上は離れていたからな」

アイザックの生活も悪くはなかったが、やはり長年過ごした艦の方が気分的にも落ち着く。

それにアレンにしてみればこれでようやく艦の指揮から解放されることもありがたかった。

正直、艦の指揮を執ることは性に合わない。

モビルスーツに乗って戦っていた方が遥かに気楽だった。

艦の指揮を執っているマリユールやタリアの苦労が身に染みた。

今度、労いの贈り物でも渡そうと思う。

「アレン、お姉ちゃん!!」

「メイリン、元気だった?」

「もう、元気だったじゃないよ、すごく心配したんだからね!」

「ごめん、ごめん」

よほど心配していたのかブリッジから降りてきたメイリンが不満そうに抗議してくる。

本気で怒っている訳ではなく、それだけ心配していたということだろう。

「二人とも相変わらず、仲いいよね」

「ホントだよな」

「え、シンに……セリス!?!」

「おいおい、久しぶりだなあ! セリスは体はもう大丈夫なのか?」

「元気、元気。前より調子いいくらい」

ミネルバに運び込まれたデステイニーリファインとランドグリーズから降りてきた

二人の姿に先ほど以上に歓声が上がった。

中には二人を知らない者もいるが、大半がユニウス戦役からミネルバに乗船しているメンバーである。

事情があつて艦を降りた形となつた二人を心配していた者も多かつたのだ。

「ヨウラン、ヴィーノ、そつちこそ元気だったか？　まだアイドルの追っかけやつてるのかよ？」

「うるさいよ。過酷な軍勤務の中の癒しなんだからいいだろ。やっぱいいよ、ミーア・キャンベルは」

「前はティア・クラインがいいとか言つてた癖に」

「アレはアレだつての！」

シンやルナマリア、そしてセリスは同期であるヨウランやヴィーノ達と懐かしみながら楽しそうに笑みを浮かべている。

ユニウス戦役での別れ方からして、再会の喜びもひとしおなのだろう。

「ルナマリア、後でシンとセリスを連れてきてくれ。俺は先に艦長のところへ行く。班長、機体の修復をお願いします」

「了解！　おし、お前ら仕事だ仕事！」

アレンはエイブスにその場を任せ、タリアの待つ艦長室へ足を向ける。

艦長室では安堵した表情を浮かべながらタリアとアーサーが待っていた。

「アレン、無事でよかったわ」

「はい。ご心配おかけして申し訳ありませんでした」

「ええ。積もる話もあるのだけど、それは後で。現状を話しましょう」

「アムステルダム駐留の部隊から聞いているとは思いますが、近日中にミュンヘンにて地球連合、中立同盟、プラント、そしてテタルトスの四つの陣営で会談が行われる事になっている」

アーサーが詳細を記した端末を手渡してくれる。

「同盟からはアスハ代表とアイラ様が出席される……護衛につくのはアークエンジェル、カーライル議長の護衛にドミニオンと特務隊か」

「ええ。我々ももしもの場合に備えてミュンヘンにて待機しろと命令が下っているわ。アイザックと一緒にね」

「アイザックも?」

「改革派は今回の会談には出席できないと打診があったの。その代わり戦力だけでもつてことなのかもしれないわね」

メキシコ戦線はそれだけ気が抜けない状況なのか、せめてアイザックの戦力だけでもこちらに回し体裁だけでもという思惑なのだろう。

「艦長は今回の件をどう思われますか？」

「……そうですね。当然この会談に何らかの思惑があるのは間違いないでしょう。情報が足りないから断言はできないけど。それから今回の会談、もしかすると何かの契機になるかもしれないわね」

「はい」

タリアの言葉に賛同しながらアレンは再度手元の端末に視線を落としました。

◇

アイザックとの戦闘を終えたアスランはヴァルターからの状況報告にため息をついた。

ほぼ計算通りにアイザックをかわし、味方の損害を最小限に抑える事には成功した。それでも被害は決して軽視できるものではなく、すぐさま立て直すという訳にはいかない状況であった。

「……なるほど。カルキデイウスはアムステルダムで修復作業を行うしかないな」

「それが懸命ですわね」

アグニの一撃をエンジン付近で受けたカルキデイウスのダメージは思った以上に酷

く、遠距離航行に支障が出るレベルだと報告が上がってきていた。

この状態ではバルカナバート基地まで帰還できるものではない。

「最低限のモビルスーツを護衛に残して、他は全機クレオメデスに移動するように命令を」

「了解しました」

「クアドラード少佐の容体は？」

先の戦闘における誤算、それがヴィルフリート・クアドラードの撃墜だった。

幸いコックピットへの直撃は避けられていたが、ヴィルフリートは相応の怪我を負っていた。

「命に別状はありません。まあ重傷には違いありませんが」

「そうですか」

両手、片足を失い、胸部に穴が開いて完全に大破したH・アガスティアをため息をつきながら見つめる。

この件についてはヴィルフリート自身にも責任がある。

あの時、素直に撤退していれば彼が負傷する事もなかっただろうに。

「……今更それを言っても仕方ないか。ランゲルト少佐、貴方もクレオメデスに移動してください」

「カルキディウスの方は良いのですか？」

「そちらの指揮はアムステルダム駐留軍に任せます。我々には一度バルカナバート基地へ帰還するように命令が下っていますから」

「帰還命令ですか？」

「ええ、会談もあります。万が一に備えて待機せよという事でしょう」

もちろんそんな事態に陥らないに越したことは無い。

だが、アスランには確信があつた。

戦争はまだ終わらないという確信が。

ヴァルターとの打ち合わせを終え、ブリッジにも戻ろうとしていると格納庫の端で数人が集まっているのが見えた。

「何かの騒ぎですか？」

「さあ？」

どうやら数人のパイロットと整備士たちがシミュレーターを囲って何かをしているらしい。

深刻な事ではないようだが、些か緊張感に欠けてみえる。

別に騒ぐなどと言わないが、適度な緊張感というものは必要だろう。

「何の騒ぎだ？」

「ち、中佐!? いや、いや、これはその……」

狼狽えるパイロットたちの間からシミュレーターを覗き込むと意外な人物が座っていた。

「ミレイア・ロスハイム!? どういう事だ、ラデイス?」

「別に。ただ単に士官室に閉じこもってばかりじゃ、気が滅入るかと気を使っただけですけど」

パイロットたちに混じっていたラデイスが悪びれる事もなく、肩を竦める。

「ここは民間人を入れる場所じゃない。すぐに——」

「少し待ってください、ザラ中佐、あれを」

ヴァルターが指し示したのはシミュレーターに映し出されたミレイアの数值だった。

民間人にしてはかなり高い数值が記録されている。

「彼女は素人だった筈だな?」

「は、はい。最初は本当に大した事なかったんですけど繰り返してるうちにコツを掴んだのか、数值が上がっていった」

「……才能があるという事か」

それが良い事なのか、悪い事なのかアスランには判断できない。

ただ才能があるのが、無かろうがこの場で言うべき事は決まっているが。

「とにかく彼女を格納庫に入れるな。軍事機密の事もあるが、それ以前にモビルスーツの出入りもあつて危険だ」

「り、了解しました」

パイロットたちを解散させたアスランはシミュレーターを終えたミレイアを気分転換も兼ねて食堂へ連れていくことにした。

ラデイスの言い分にも一理あると思つたからだ。

民間人をずつと士官室に閉じ込めておくのは、流石に配慮が足りなかつた。

「ミレイア・ロスハイム、不便な思いをさせているがバルカナバート基地に戻れば少しはマシになる筈だ。それまでは我慢してほしい。しかし配慮が足りなかつた事については謝罪する。済まなかつた」

「い、いえ、そんな事ありません。私こそ勝手な事をしてしまつて」

まさか謝られるとは思わなかつたのか、頭を下げたアスランにミレイアは驚いたように手を前で振つた。

ミレイアの知っている男、つまりは父親が主になるが決して頭を下げるような人間ではなかつた。

だからこそ男性であるアスランが自分に頭を下げた事が驚きだつたのだ。

「とにかく格納庫にはもう近付かないでくれ。君が危険な目に遭う可能性もある」

「わかりました」

「ラデイス、お前が彼女をエスコートしてやれ」

「なっ、俺が!？」

後ろから付いて来ていたラデイスがあらさまに嫌そうな表情を浮かべる。

「彼女に気を使って格納庫でシミュレーターをやらせるくらいに気にかけているんだらう?」 なら最後まで面倒を見るんだな」

ラデイスはミレイアを勝手に連れただけに反論もできず、バツの悪そうな表情を浮かべながら食堂まで歩いていった。

「さて、ランゲルト少佐。貴方に聞きたい事があります。……アムステルダムの中で」
「分かりました」

鋭い視線に全く怯む事無く笑顔を浮かべるヴァルターに内心ため息をつきながら、部屋へと向かった。

◇

夜の帳が下りた頃、ミネルバとアイザックはどうかストックホルム入りする事ができた。

整備士達が二隻の艦に取りつき修復作業を開始するのを尻目にアレンは急ぎとある場所へ向かっていた。

本当ならアイザックのメンバーとも打ち合わせを行いたかったのだが、時間が時間なので今日は遠慮する事にした。

基地内を進んで、目的の部屋へたどり着くと扉の前にあるボタンを押して、声を掛けた。

「失礼します」

《どうぞ》

先日にも聞いたヴィクトリアの声とダブる。

複雑な気分になりながら、扉を潜るとベットに金髪の女性が座っていた。

「気分はどうなのですか、レティシアさん？」

「ええ、大した事はありません」

ベットに座るレティシアが柔和な笑みを浮かべながら、手を振っている。

その姿に安堵しながら、アレンは常備されている椅子に座った。

「驚きましたよ、貴方が倒れたと聞いた時には」

聞きたい事があつてレティシアを探していたアレンは彼女が職務中に倒れたという話を聞いて、急いで医務室に駆け付けてきたのだ。

「倒れた訳じゃなくて、少し疲れていただけですよ。でも心配してくれてありがとうございます、アスト君」

確かに最近の目まぐるしい情勢の変化と対応でアレン達もクタクタになるほど疲れ
ている。

しかも彼女はこの上、教官まで務めているのだからその疲労はアレン達の比ではない
だろう。

「体には気を付けてください。……それから少し聞きたい事があるのですが？」

「なんででしょうか？」

「……ヴィクトリアという女性を知っていますか？」

アレンの口から出たのが女性の名前だった事が氣にくわないのか、先ほどまでの穏や
かな表情から一転。

冷たい能面のような顔でこちらを睨みつけてくる。

「……また貴方の悪い癖が出たみたいですね。そういえばグラオ・イーリス所属のパ
イロット達とも仲が良いとか。ルナマリアさんとの事もありますし」

底冷えするような声にアレンは思わず椅子からずり落ちそうになってしまう。

「……というか怖すぎて、震えが止まらない。」

「……そもそもどこからそんな話を聞きつけてくるのだろうか？」

「い、いや、違いますから！……というか真面目な話なので！」

命の危機を感じ、必死に弁明する。

聞いてくれた事はあまりないけど、無実である事は訴えておきたい。

「ふん、こつちも真面目な話なのですが……まあ聞きましょう」

「マユにも言っておかないといけませんね」とかいう声が聞こえてきた気がするけど、聞かなかった事にする。

「実はアムステルダムで貴方そつくりの人物に会いました。名前はヴィクトリア、普段はヴァルター・ランゲルトと名乗ってテタルトスでパイロットをしているようなのですが、貴方に心当たりは？ 例えば妹さんとか」

「私に妹はいません。いませんけど……ランゲルト、ですか」

レティシアには心当たりがあるのか、考え込むように顎に手を当てている。

「知っているんですか？」

「いえ、私自身の知り合いではありませんが、両親の職場の同僚に同じ名前の人物がいました」

「両親の？」

レティシアの両親はヤキン・ドゥーエ戦役で戦闘に巻き込まれ死亡したと昔に聞いた事がある。

確かその前は月のコペルニクスに住んでいたらしいとも言っていた。

「両親は何の仕事をされていたんですか？」

アレンの意図に気が付いたのか、レティシアは苦笑しながら否定する。

「アスト君の危惧している事は分かりませんが違いますよ、研究者じやありません。両親は薬剤関係の仕事についていました。研究職とも違う、事務関係の仕事です」

「ではそのランゲルトさんも？」

「確かその筈ですけど……」

では何故、ヴィクトリアがあれほどレティシアに似ているのだろうか？

最初は両親が研究者でレティシアのクローンか。

ティアのような特殊な事情で妹を誕生させていたのか。

どちらかだと思っていた。

しかし彼女の両親がコペルニクスにいた事。

そしてランゲルトの名前を持つ同僚がいた事。

そしてヴィクトリアが月に誕生したテタルトス月面連邦のパイロットをしている事。

すべてが偶然とは思えない。

そこで何故かあの研究者、ヴェクトの顔が思い浮かんだ。

何故かは分からない。

しかし奴はメンデルの研究者であり、テタルトスの関係者である事も間違いないの

だ。

もしかすると――

「アスト君、大丈夫ですか？ 顔色が悪いですよ？」

「え？ あ、ああ、何でもありません」

それは最悪の想像だった。

自分やキラ、ラクスだけでなくレティシアまでメンデルの忌まわしい運命に巻き込まれているなど、想像もしたくない。

仮に巻き込まれていたとしても、彼女に知らせるべきではない。

絶対に。

アレンはヴィクトリアがレティシアの関係者である事を今の話でほぼ確信していた。

根拠はないが、ヴィクトリアと対面したからこそその結論。

だから、これ以上レティシアをこの件に触れさせるつもりはなかった。

それはメンデルに翻弄され、心に大きな傷を負った事があるからこそその決意だった。

「……ありがとうございました、レティシアさん。偶然だとは思いますが念のために、

この件は俺の方で調査します。だから他の人にはできるだけ伏せておいてください」

「アスト君、また自分だけで何かを抱え込んでいませんか？」

「いえ、そんな事はありません。今はミュンヘン会談の事もありますからそつちに集

中します。何かあれば報告しますから」

アレンは椅子から立ち上がり、一度だけレティシアの髪を撫でるとそのまま医務室を退出した。

「……嘘つき」

痛ましいものを見るかのような悲しい表情でレティシアはアレンの背中を見送っていた。

◇

医務室を後にしたアレンは別の部屋を訪れていた。

そこは戦友であり、最も親しい友人であるキラ・ヤマトの部屋だった。

「キラ、入るぞ」

扉を開けたアレンの視界に入ってきたのは、キーボードを叩きながらカップに口を当てるキラの姿だった。

その背後には長い黒髪を靡かせた色っぽい女性が控えている。

「アスト、こつちに来ていたんだね。到着は遅くなるって聞いていたから、今日は来ないかと思っていたよ」

「ああ。少し確かめたい事があったからな。それからニーナ、元気そうだな」

「ええ。お久しぶりです、サガミ大尉」

「今の俺はアレン・セイフアードだよ」

キラの後ろに控え恭しく頭を下げる黒髪の女性に思わず苦笑する。

彼女はニーナ・カリエール。

ユニウス戦役以前からキラの部下として仕えている女性である。

セリスの親友でありどんな人物と接する時も礼節を忘れない美しい女性であるが、その能力は優秀でキラも重宝していると聞いている。

アレンは用意された席に座りると、ニーナが用意してくれた紅茶に口を付ける。

「美味しいな。何時もこんな至れり尽くせりなのか？ 良くラクスが怒らないな？」

「……もう、十分怒られてるよ」

「ふふふ、キラさんの面倒を見る事は私の楽しみの一つですから」

ニーナの言葉にキラはどこか諦めたように遠くを見た。

彼女は昔からキラに対する好意を隠しておらず、隙あらば迫っていると前に愚痴られた事があった。

今、ラクスはマユと共にミュンヘンの方へ警備に向かっている為、ここにはいない。だから今日もニーナからアプローチを受けているのだろう。

「……刺されないようにしろよ」

「……それ、僕のセリフなんだけどね」

二人は苦笑し合い、それ以上踏む込む事無く別の話題を振った。

「それより色々大変だったみたいだね」

「ああ。慣れない艦の指揮まで執らされて、もう本当に大変だったよ。戦場では奴ら、ユリウスとアスランにも会ったしな」

その名前を聞いた途端キラは一瞬だけ苦しそうな表情を浮かべる。

キラとしても彼らに関しては複雑な思いがぬぐえないのだろう。

「キラ、ユリウスは未だにお前を狙っているぞ。今度こそ決着をつけるつもりなんだろうな」

「やっぱりそうか。アスランの新しい機体の話を聞いた時から、分かっていたけどね」
「……開発を依頼した機体の方はどうなってる?」

キラは疲れた様子でため息をつくと言状を説明し始めた。

「フリーダムの方は組み立ては順調だよ。宇宙に運んで今はe・s・デバイスの調整を行ってる。でもこれが難航しててね、もう少し時間が掛かりそうなんだ。それより問題はイノセントの方でさ」

「どうしたんだ?」

「例のグラオ・イーリスに対する嫌がらせだよ。あの部隊に戦力を集めたくないって

圧力があって、フレームごとお蔵入りだよ」

キラの報告にアレンは思わず「またか」と呟いてしまった。

いつもの事ではある。

今回は邪魔をされないよう念入りに手を回していたつもりだったのだが、どうやら準備不足だったようだ。

しかし頼んでいた機体が用意できないとなるとエクリップスで戦い続ける事になる。

「嫌がらせばかりに力を注いで、全く暇な連中だ。しかし新たな機体が用意できないのは痛いな」

「それについてはこっちにも考えがあるから」

「どういう事だ？」

悪戯を思いついた子供のような無邪気な笑みを浮かべキラが端末をこちらに向けてくる。

「実はフリーダムの子供の予備フレームを流用しようかと思ってるんだ。アレは元々僕がデータ収集の為に作ったものだから、連中も口出ししにくい。その分急造ではあるけど、時間もなさそうだし。グラオ・イリスに配備するには手回しが必要だけど、それはこっちでやるよ。今アストが動くとき余計に連中を刺激するだけだからね」

「済まない、頼む」

「うん。まあ結構ギリギリになるかもしれないから、テストも満足にできないかもしれない」

「無いよりはマシだよ」

機体の件はキラに任せておけば大丈夫だろう。

だが話はそれだけではない。

いや、こちらが本題である。

「キラ、ヴェクト・グロンルンドという男を知っているか？」

「ヴェクト・グロンルンド？ いや。その男がどうしたの？」

アレンはキラに話すべきかどうかを少し迷った。

だがキラの場合はレティシアの件とは事情がさらに違う。

警告の意味でも伝えておくべきだ。

「実は——」

アムステルダムで会った研究者の事。

そして情報と引き換えに実験に協力するように要請された件を伝えるとキラは憤りを堪えるように拳を握った。

「メンデルの研究者……」

「ああ、ユニウス戦役時の調査で、それらしい名前は無かったか？」

キラとニーナはユニウス戦役時、プラント側の情報を集める為に諜報活動を行っていた時期がある。

だからキラ達ならヴェクトの事を知っているかも知れないと思ったのだが――

「メンデルのデータはデュランダル元議長の指示だったのか、私達が調査に入った時にはすべてのデータが消去されていました。しかもかなり念入りに」

「うん。それに僕達が調査に入った他の施設にも、そんな名前はなかった」

「そうか」

ヴェクトがメンデルの研究者であった事は間違いない。

という事はメンデルの事故以降はずっと月にいたという事だろうか？

そこで研究を続けていた？

「アスト、その研究者について単独で内偵するつもりかい？」

「……お前に隠していても仕方ないな。俺は奴の条件に乗ろうかと思っっている。流石にルナマリアを巻き込む気はないが……」

「そう。分かった。僕も協力するよ」

「キラ、お前」

「メンデルなら僕も無関係じゃない。気になるのは僕も同じだからね」

どうやらキラもアレンと同じ結論に至ったようだ。

ヴェクト・グロンランドは放置できないと。

なら、止めても無駄だろう。

メンデルの件で傷を負ったのはアレンだけではないのだから。

「……分かったよ」

領くキラと共にアレンは出来る限りの情報交換を行う事にした。

世界に巣食っているかもしれない暗闇と戦っていく為に。

第17話 世界の分岐点

アイザックとミネルバがドック入りしてすでに二日が経過していた。

ミュンヘン会谈の警護に参加する事になったアイザックは搭載機を含め、修復と補給を急ピッチで進めている。

そんなアイザックの格納庫でイレイズのコックピットに座るアオイは前回の戦闘データの検証を行っていた。

「やっぱり速い」

モニターに映し出されている機体はテタルトス軍の新型機ジンII・アクティヴであった。

ジンII自体はユニウス戦役以前から戦線に投入されている機体だ。

その性能は改良によって新型機にも劣らず、パイロット達から信頼も高い傑作機の一つに数えられている。

だが、ジンII・アクティヴはそれとは一線を画している。

「……性能差だけで勝負は決まらないとは言ったけど、やっぱりもうイレイズじゃ限界だよな」

イレイズMk-IIは本当に良い機体だ。

それはずっとこの機体に乗り続けているアオイが一番よく分かっている。

しかしジンII・アクティヴのような新型機を相手にするにはもう力不足である事も事実だった。

しかもその新型機を操るパイロットもまた並みではないとなれば、こちらも相応の対応が必要になってくる。

「この反応、明らかに普通じゃない。あの紅い機体も含めて要注意だな。俺も大尉みたいにもっと訓練を積まない」と

ただでさえアオイには才能というものが欠如している。

切り札的な存在であるSEEDも発動させている時間がごく僅かという欠点がある。だから自身の技量を鍛え上げておくに越したことは無いのだ。

「さて続きだ。また強敵と戦う事になった場合に備えないとな」

起こり得る有事に備える為にアオイはキーボードを叩き、再びデータを精査を開始する。

そこにコックピットを覗きこむ影が手元に映り込んだ。

「此処に居たのか、ミナト少尉」

コックピットに上半身だけを乗り込ませてきたのはベアトリーゼだった。こうして外見だけ見ていると、兵士たちから人気があるというのも良く分かる。

制服に身を包んでいても、育ちの良さは隠せず、気品が漂ってきていた。体つきも女性らしく、仕草や姿勢も綺麗で実に様になっている。

「……何をいやらしい目でジロジロ見ているんだ、気持ち悪い」

中身がこれでなければ、それこそ引く手数多だろうに。

こいつほど残念美人という名が相応しい女も居ないだろう。

「そんなつもりで見えていた訳じゃない。それでどうしたんだ？」

「お前に客だ。多分、ケイの事だろう」

ケイはアムステルダムに置いていくこともできず、現在もアイザックで面倒を見ていた。

しかしアイザックも軍艦である以上はいつまでもケイを乗せてはおけない。

そこでアオイも暮らしていた孤児院で引き取る事にしたのだが、そこまでケイを連れて行くための手段がなかった。

そこでアレンに頼み込み込み被災孤児保護の担当者への繋ぎをしてもらったのだ。

「分かった」

不機嫌そうに鼻を鳴らしながらベアトリーゼはコックピットから出ていく。

「もつと愛想を良くしろよな」

確かにジロジロ見たのはこちらが悪かったが。

「ハア、ステラや大佐に会いたいなあ」

無性にステラの笑顔やネオの優しさに癒されたくなつた。

最近は殺伐とした生活が続いている所為か、たまに彼女達に会いたくなる時があつた。

ステラは病院で薬は苦いから嫌だと我儘を言っているのだろうか。

思い出すと微笑ましい気持ちになる。

「ふふ。……そう言えば大佐はきちんとして食事してるかな」

アオイが一番気がかりな事はネオの事だ。

ネオは未だに続くメキシコ戦線で指揮を執り戦線を支えている。

スウエンがいるからそう簡単に押し込まれるとは思えないが、ネオの性格からしてかなり無理をしている筈だ。

「早く戻りたいけど、ヨーロッパも差し迫ってるしな。つて現実逃避してる場合じゃないだろ。急ごう」

アオイはキーボードを片付けると、急いで待っている人の下へ向かった。



「全く失礼な奴だ」

ベアトリーゼは不機嫌さを隠すことなく、美人が台無しなしかめつ面でストックホルム基地内を歩いていった。

それでも人の目、特に男性の視線を引きつけてしまうのは彼女の容姿がそれだけ整っている証だろう。

そんな彼女が不機嫌な理由は先程のアオイの視線だった。

無論、ベアトリーゼとてアオイが本気でやらしい視線でこっちを見ていたとは思っていない。

だが長い付き合い故に何を考えていたかくらいは察しがつく。

あの顔は碌な事を考えていなかった顔だ。

訓練兵時代からの付き合い故にそれくらいの事は分かる。

「あれ、アンタ、確かフォルケンマイヤー少尉だっけ？」

ベアトリーゼが振り返ると金髪の女性と連れ立った黒髪と紅い瞳を持った青年が立っていた。

「……アスカ中尉、ブラッスール中尉」

敬礼しつつ、悟られないよう慎重に二人に視線を滑らせる。

シン・アスカ、そしてセリス・ブラッスール。

アオイから話を聞いて驚いた。

このシン・アスカ中尉はかつてザフトに所属し、アオイと何度も命のやり取りを行ったという。

さらに驚いたのが二人は別段憎み合うでもなく、昔から気の合う友人のように気安く接している事だった。

お互い仲間を殺し、殺され、さらには自分の命を奪われそうになった事すらあった筈。だからこそ仲良く話しをしているのがベアトリーゼからすれば信じ難かった。

ベアトリーゼとて仲間をザフトに殺された事は何度もある。

改革派がプラントや中立同盟と友好的な関係を維持しているとはいえ、その頃の事をベアトリーゼ自身がすべて消化できている訳ではなかった。

ベアトリーゼは複雑な心境を押し込め、努めて事務的に応答する。

「……どうされましたか？」

「あ、いや、アオイは一緒じゃないのか？」

「ああ、ミナト少尉であればケイ少年の件で担当者の方とお話されていると思います」
ケイの名前を出す二人の表情が曇った。

二人もアオイから事情を聴いているのだろう。

「フォルケンマイヤー少尉はケイ君はどうなるか聞いてる？」

「詳しい話までは。ミナト少尉が昔いた孤児院で引き取るという話も出ていたが、距離がありますので。一時的にストックホルムの施設に預ける事になるのではないかと」

その話をする為にアオイはわざわざアレンに頼む込み、会談準備に忙しい中で担当者と面会している。

「そっか。じゃあ、フォルケンマイヤー少尉はアオイの代わりに雑用を済ませている訳か」

「は？」

「だって用があつたからこんな場所にいるんだろ？」

「え、ええ。そうですね」

ベアトリーゼは一瞬、何故この場所に来たのか思い出せなかつた事に焦りながら頭を手を置く。

少し疲れているのか、頭が痛い。

これからまた戦いが始まるかもしれないというのに。

体調管理はきちんとしなくてはならない。

「補給の件で手続きを行っていただけです……すいません。少し体調が悪いようですので、失礼します」

「大丈夫？」

「お気遣い感謝します。でも大丈夫です。ミナト少尉に伝言でもあれば伝えますが？」

「また今度顔を出すと伝えてくれ」

ベアトリーゼは再び敬礼すると、ズキズキと痛む頭を押さえながら足早にその場を立ち去る。

「ハア、私ももつと気を引き締めないとな」

でなければお節介なアオイに何を言われるかわかったものじゃない。

容易に想像がつくその光景に若干顔を顰めつつ、ベアトリーゼはアイザックへ向けて歩を進めた。

◇

アムステルダムでの任務を終えたアスランは母艦であるクレオメデスと共にバルカナバート基地へ帰還を果たしていた。

予期せぬハプニングもあつたが、無事任務を果たすことができたのは良かったと言つていい。

心残りがあるとすれば、捕縛すべき対象を発見できなかった事だろう。

だがそれはアムステルダムに残してきた探索班に任せておけば、何らかの報告が入ってくる筈である。

報告も兼ねて指令室まで顔を出すとそこにはファウストではなく、ゲオルクがアスランを待っていた。

「報告は以上になります」

「なるほど。ザラ中佐、良くやってくれた」

「ハッ、ありがとうございます。しかし捕縛対象であるヴェクト・グロンルンドの発見には至りませんでした」

「それに関しては部隊も残してきているのだろうか？ ならば構わん。データを回収できただけでも十分だ。データの方はどうなっているか？」

「そちらは現在解析中です」

アスランもすべてに目を通した訳ではないが確か『e. s. system』とか言う名前のデータ群だ。

確かにざっと目を通した感じはモバイルスーツ関連のデータのようなだが、このシステム

についてアスランは少し懐疑的だった。

他のデータは念入りに消去されていたにも関わらず、このデータだけが消さずに残されていたというのは明らかに不自然である。

一応罫である可能性も考え独立端末にて解析をさせているのだが、それも結果待ちだ。

「もしもモビルスーツの強化に使えるならば、君の機体に搭載してみてもどうかかな？」

「……そうですね。それも調査報告が上がってきてからという事になります」

「分かった。後で詳しいレポートを提出するように」

「了解しました。それで今後は？」

「クアドラード大佐の指示に従って、ミュンヘン会談に備えてくれ」

「ハッ！」

アスランは踵を返し部屋から退出しようとした直前で足を止め振り返ると一言だけ問いを投げた。

「ゲオルク司令、これで今回の戦争は終わりですか？」

「不服か？」

「まさか、冗談じゃありません。戦争が早期終結するに越したことはありませんよ。でも、貴方はどうなのですか？」

ゲオルクはアスランの間には答えず、ただ笑みを浮かべているだけだ。答えるつもりはないと判断したアスランはそのまま部屋を後にした。

「流石に直球で聞いても答えないか。しかしやっぱり戦争を継続させるつもりか」先ほどの発言。

手に入れたデータが使えらるならばアスランの機体を強化すればいいと言っていた。つまりこの先も強力な機体が必要になってくるという意味で間違いない。

本国では最新型の開発が順調に進んでいるという話も聞こえてくるくらいだ。

「……まさか、あのデータの件も知っているのか」

データを回収する際、幾つかあった不自然な点。

それもゲオルク・ヴェルンシュタインが絡んでいるのか。

「幾らなんでもそれは……考えていても埒が明かないか」

益体のない考えを振り払い、母艦へ戻ろうと歩き始めると途中で見知った姿が見えた。

「アスラン！」

「セレネか」

セレネの笑顔を見た瞬間、胸中に溜まっていた色々なものがスツと軽くなった。

キョロキョロと周りを見て誰も居ない事を確認したセレネはアスランの胸に飛び込

んでくる。

「コラ、勤務中だぞ」

「ごめんなさい。でも久しぶりだから」

アスランは苦笑しながらセレネの頭を愛おしそうに撫でると、久しぶりの会話を楽しみながら母艦へと歩き出した。

◇

ラデイス・グエラは自分が注文したコーヒーを口に運びながら、テーブルを挟んだ反対側に座っている少女を呆れつつ眺めていた。

反対に座っているのはアムステルダムで保護した少女ミレイア・ロスハイムである。

彼女はテーブルの紅茶に手もつけずアスランから手渡された端末を食い入るように見つめている。

「それ、そんなに面白いか？」

「ええ、とても」

彼女が今読んでるのは本国で一般公開されているSEEDに関する文献だ。

月ではポピュラーな類の考察文で珍しさはまるで無いものだが、地球に住んでいたミ

レイアには興味深いものらしい。

「貴方は月に住んでいるのにSEEDに興味無いの？」

「俺？ 俺はお前ほどじゃねえよ……ま、気持ちは分からなくもないけどな」

ミレイアのSEEDに関する考えは聞いている。

というか聞かされたが、共感できる部分は多くあった。

要するに彼女は過去を捨て、今の自分から変わりたいのだ。

その気持ちはよく分かる。

ラデイスは月の出身であり幼い頃から、多くのコーディネイターに囲まれて生きてきた。

負けず嫌いな性格なラデイスはコーディネイター相手に張り合う事も多かったが、一度も勝てた事はない。

いつも力の差を見せつけられて終わった。

そんな中でラデイスに芽生えた感情はナチュラルとしての自分自身に対する失望と強力な力を持つコーディネイターに対する羨望だった。

不甲斐ない今を捨て、自分もあんな風になりたいと心の底から願った。

だからこそラデイスは強化兵処理の施術に志願したのである。

昔の自分から変わる為に。

「今のままじゃ我慢ならないうてのはよく分かる。だからこそ俺は強化処理を受けたんだからな」

「へえ、そういう所凄いな」

「は？」

「普通はそういうの口にする人は多くても、実行できる人は意外と少ないし。だから貴方は凄いなと思う」

「う、そ、そうかよ」

面と向かって凄いなと言われた事は無かったのでラデイスは思わず照れてしまった。

「そ、それより、そろそろ戻るぞ。俺も休憩時間が終わりだからな。後は部屋で読めよ。夕食の時にまた呼びに行くからよ」

「うん」

ミレイアがテーブルの上に置いてあった紅茶をすべて飲み干したのを確認するとラデイスは食堂を後にする。

「それにしてもミレイアは凄いな。初めてのシミュレーターであんな成績出すなんて。パイロットとしての才能があるのかもな」

「私か？」

「ああ。中佐もそれは認めてたしな」

「……アスランさんが」

考え込むように俯くミレイアを伴いながら士官室へ歩いていると、アスランが一人の女性が歩いている姿が見えた。

「え、あれって……アスランさんの隣にいる人は誰？」

「ん、ああ、セレネ・デイノ中尉だよ。中佐の婚約者さ」

「……婚約者」

「どうした？」

「……別に」

明らかに不機嫌そうなミレイアを見てラデイスも少しだけ苛立ちを感じていた。

◇

ドイツ、南方に位置する都市ミュンヘン。

そこに四つの勢力が世界の今後を左右するであろう会談を行う為に一斉に集まろうとしている。

アークエンジェルに搭乗しミュンヘンに先行していたマユとラクスはブリッジから眺める景色から殺伐とした雰囲気を感じ取っていた。

「随分殺気だってますね」

「そうですね」

会場を守るように展開されたモビルスーツと戦艦はそれだけで周囲を威圧しているようにも見える。

だがそれはこれから始まる事を考えれば物々しいのはある種当然でもある。

「この会談には各陣営のトップが集まる事になるので、仕方ない面もあります。カガリさんやアイラ様だけでなくプラントからもカーライル議長自ら主席されるようですし」

「確かドミニオンが護衛についているんですかね？ 私達もそちらの護衛に参加するんですか？」

「いえ。基本的にグラオ・イーリスが護衛につくわ。それに加えて特務隊も護衛に参加するようだし、私達は私達の任務に集中しましょう」

マリユールが差し出してくれた飲み物を受け取りながら、マユが再び外へ視線を向けると黒い船体が近づいてくるのが見えた。

「噂をすればね」

ドミニオンだ。

その周囲にはグラオ・イーリス所属のモビルスーツとザフト所属の機体が護衛についている。

全機が新型機なのか知っている機体の面影を持つものもあるが、その中の一機である

オレンジ色に塗装された機体は見た事がない。

「あれって新型ですか？ 見た事ない機体ですけど」

「多分そうね。名前は確か『ギア』だったかしら」

ZGMF-3000 『ギア・ソルダート』

ザフトが開発した次世代量産機でありザクの特徴を色濃く残しながらも、その性能はかつてのセカンドステージシリーズを上回る性能を持つ。

既存のザクやイフリートなどと比べてもその性能や汎用性は非常に高く、前線兵士たちからの評価も高い。

「周りの数機はイフリートの発展型のようにすわね」

ZGMF-250 『イフリート・アルジェント』

ユニウス戦役でザフトが開発したモビルスーツの強化、発展型。

最新型の機体が全軍に配備されるまで、ザフトの戦力強化を目的として開発されたもので、前大戦時のイフリートの戦闘データを参考に開発された。

全体的なフォルムもより洗練され、さらに同盟からの技術協力によって、機体全体の性能向上も図られており、その性能は最新鋭の機体にも劣らない仕上がりとなっている。

「あの機体は確か同盟から技術提供も行ったんですよね？」

「ええ。軍の統合化計画の一環でね。それにしても特務隊が来るとは聞いていたけど、全機が新型とは大盤振る舞いね。まあ、あちらは任せておけばいいわ。もうすぐミネルバの方もこちらに来るし、ラクスさんは会場の警護、マユちゃんは二人の護衛を頼むわよ」

「了解!!」

◇

アークエンジェルがドミノオンの姿を確認した頃、ストックホルムから発進したミネルバもまたアイザックと共にミュンヘン付近まで辿りついていた。

「アレン、もうすぐミュンヘンに到着します」

格納庫で機体の調整を行っていたアレンの下にルナマリアと他のパイロット達が集まってきた。

「分かった。俺たちは全員、会談が終わるまでモビルスーツで待機する」

「隊長、我々は警備に参加しなくていいんですか？」

「それはハイネ達に任せるさ。俺達は不測の事態に備えておけばいい」

エイブス達には負担を掛けてしまったが、ようやく機体も万全の状態まで修復できた。

万が一の場合でも、すぐに動く事ができる。

「ま、何も起きないに越した事は無いがな。全員、パイロットスーツに着替えて機体で待機！」

「ハッ！」

パイロット達が準備を整える為にロッカールームへ向かったのを見届けるとルナマリアが何か言いたげにこの場に残っている。

「どうした？」

「一応聞くんですけど、あの研究者、ヴェクト・グロンルンドの件はどうなりました？」

「……あ、うん。報告は上げたし、キラと対処する事になったからお前は気にするな」
ポーカーフェイスで淡々と答えるアレンにルナマリアはジト目で詰め寄る。

「本当ですか？」

「もちろんだ。俺を信じろ」

「……信じられないですね」

「どうやらアレンに対する信用はゼロらしい。」

「お前な……とにかくその話は後だ。今は警備に集中するぞ」

ルナマリアは明らかに不満そうな態度を隠す事無くムスツとした表情を浮かべている。

「そんな顔するな」

「後で絶対教えてもらいますからね！」

着替える為にロツカールームに向かうルナマリアを苦笑しながら見送る。

「……アレは確実に追及されるな」

ヴィクトリアの件もあるし、問題は山積みだった。

アレンは盛大なため息をつきながら、自分もまた準備を整える為にエクリップスのコックピットへ向かった。

◇

ミュンヘンに用意された会場。

此処はヨーロッパ戦線激化の影響を受け非常事態に備えてシエルターとしても使えるよう建造された特別な場所。

ドームのように天井が覆われ、周囲には各陣営のモビルスーツが睨み合う形で防衛に着いている。

それは会場の中も同じだ。

万が一の場合に備え脱出用の非常通路も用意され、地下には数百人が数週間くらいな生き延びられる水と食料が備蓄されている。

そんな万全とも思える会場にすべての勢力の首脳陣が集まり、運命とも言える会談が始まろうとしていた。

「各国首脳の方々。今回我々の要請を受け、このような機会を設けて頂けた事にまずは感謝したい。昨今世界で起きている武力衝突の件も含め、多くの事がこの場で話されるだろう。皆さんにとつてこの場が有意義な時間となるように願っている。私はテタルトス月面連邦国軍事司令ゲオルク・ヴェルンシュタインという。以後お見知りおきを」

主催国の代表として中央に座るゲオルクが立ち上がり、挨拶と共に一礼する。

同盟の代表者の一人として席に座るアイラの後ろに立ちながら、マユはゲオルクから感じられる威圧感に圧倒されかけていた。

「……アレがテタルトスの現軍事司令」

名前と顔くらいはもちろん知っている。

しかし実際こうして対面するところも違うものか。

マユはかつてギルバート・デュランダルと対面した経験がある。

その彼ともゲオルクは違うタイプだ。

油断すれば即座に喉元に食らいつかれているような、化け物が目の前にいるかなのような錯覚を覚える。

しかも厄介なのはゲオルク・ヴェルンシュタインだけではない。

彼の反対側に座っているのは地球軍保守派の代表クレメンス・イスラフィールである。

軍服を纏い、腕を組みながら鋭い視線でゲオルクを見つめるその姿からは一切隙が見当たらない。

「保守派を纏めているだけはあるって事かな」

だがマユが気になったのはその後ろに控えていた男だった。

「アレは……」

見覚えはない筈だ。

でも、どこかで会ったような気もする。

そしてその男もこちらを観察するように見つめている。

その視線はお世辞にも好意的な感情は込められておらず、明らかな敵意が伝わってきた。

名前は確かジェラルド・フレイルオルと言っただろうか。

「マユ、どうしたの？」

「……いえ、何でもありません」

「そう、もうすぐ始まるわ」

「はい」

小声でアイラに諫められたマユは軽く頭を振ると護衛任務に集中し始める。

各陣営の代表者の紹介を終えたのを確認したゲオルクが再び立ち上がると力強く宣言した。

「ここにミュンヘン会談の開催を宣言いたします!!」

ゲオルクの宣言と共に拍手が起こり、世界の行く末を決める会談が始まった。

第18話 埋まらぬ溝

ミュンヘン会談が開催される二日ほど前。

明かりもついていない暗がりの部屋で男が一人、手元の端末に目を落としていた。

部屋にいたのは不気味な黒い仮面を纏い素顔を隠した男、カーズだった。

彼は慎重に、そして素早く端末を操作し画面に表示されたものをチェックしていく。

端末に映し出されているのはモバイルスーツを含めた兵器の数と、とある場所の見取り図だった。

「……ほぼ予定通りか」

男は微かに口元をつり上げる。

その時、扉を軽くノックする音が聞こえてきた。

同じ間隔で音は三回。

事前に取り決めていた通りの合図に男は手を止めず、淡々と告げた。

「入れ」

「失礼します」

入ってきたのは軍服を纏った長髪の少女、No. I だった。

隙のない流れるような動きで部屋へ素早く立ち入ると、カースに向かつて一礼する。

「……すべて予定通りに手配が完了いたしました」

「ご苦勞だった、No. I」

一言旁うと差し出された報告書を手にする。

こちらにもまた予定通り。

No. I が良い仕事をしてくれたようだ。

「良くやってくれた、これでパーティは十分に盛り上がるだろう」

「しかし、あのような者たちが本当に使えるのでしょうか？」

「問題ないさ。彼らだからこそだ、No. I。その手の『経験』はこの世界の誰よりも豊富。

だからこそ、結果も自ずとついてくる。仮に失敗したとしてもソレはソレで構わない」

「え？」

思つてもみなかつた意外な発言にNo. I は呆けた表情を浮かべた。

普段から感情の起伏が少ない彼女にしては非常に珍しい光景である。

それを見つめながらカースはさらに笑みを深くした。

「重要なのは歯車が回る事。動かす事ができればそれでいい」

そこで生まれた波紋は世界に反響し、多大な影響を与えていくだろう。どんな形であろうとも、確実にだ。

「No.1、お前の相手は分かっているな？」

「はい」

「お前の相手はこの世に生み出された最高のコーデイネイターだ。油断するな」

「万事抜きなく。私が必ず。……カース様は、静観なさいますか？」

カースは端末を閉じるとNo.1が差し出したコートを羽織る。

「私は私で動くさ。そうだな、彼の——アオイ・ミナト君の相手でもさせてもらおうか」

「了解いたしました」

そのまま部屋を後にする。

そして二人が消えて10分も経たぬ内にその部屋は跡形もなく消し飛んだ。

それこそ何も残らぬように、念入りに。

◇

ゲオルク・ヴェルンシュタインの開会宣言と共に開始されたミュンヘン会談。

時折休憩を挟みつつも、早数時間が経過していた。

幾つかの議題が話し合われ、一時はこのまま会談が終わるのではと見ていただけのメンバーでさえ錯覚するほど穏やかな空気が流れている。

しかし、それもここまでだった。

議題となるのはこの戦争に関する事。

最大の激戦地、ヨーロッパ戦線に関する話だったからだ。

「そもそもこの戦争の口火を切ったのは、テタルトスだろう。ヨーロッパ戦線激化の原因はそちらにあると思うのだが？」

イスラフィールの言う通りこの戦争が起こるきっかけ、それはテタルトスの地球進出が原因の一つだと言われている。

強引な地球進出によって刺激された地球軍は警戒を強め、マケドニア要塞を建造し、それに引きずられる形で同盟もまた戦力強化に舵を切らざる得なかったのだ。

「良く言う。近隣諸国の事など考えず、内戦に明け暮れている連中の言う事か。そんなお前たちに見切りをつけた国々からの要請で我々は地上に降りたのだ」

ゲオルクの言う事も間違いではなかった。

ユニウス戦役から続く地球連合の内紛、ロゴス崩壊の余波による各国の混乱により、連合からの離脱を望む国は多かった。

そしてテタルトスもまた地上への足掛かりを求めていた事もあり、そういった国々との利害が一致し、バルカナバート基地建設に至ったのである。

「そんな我らの言い分も聞かずに無理やりマケドニア要塞を建設した挙句、ヨーロッパで猛威を振るっている。元凶はそちらの方だろう」

「曲解はやめていただきたいものだ。アレこそテタルトスや同盟の脅威から各国を守る為に必要なものだ」

「私たちが脅威ですか？」

アイラが険しい視線でイスラフィールを見つめる。

だがソレにも全く意を返さないとイスラフィールは涼しい顔で発言を続ける。

「現にテタルトスと同盟は戦闘禁止区域に指定されているアムステルダム付近でも平気で戦闘を行っている。さらにアムステルダム市街でも騒ぎがあったとか。しかもテタルトスの方は特殊部隊を動かしているという噂もある」

「戦闘禁止区域内で戦闘は行っていないし、何の問題もあるまい。市街の騒ぎについても口論程度の大したものではなかったと報告を受けている。特殊部隊については、呆れてものも言えない。噂は噂に過ぎん。それを鵜呑みにするなど、地球連合代表の程度が知れるというものだ」

話し合いは完全に平行線をたどっていた。

このままでは再び物別れという展開も十分にあり得ると誰しもが思っていた時、今まで黙っていたカガリが横から口を挟んだ。

「このまま話し合っていないでも埒が明かないだろう。とりあえず今まではなく、これからの事を話し合った方が建設的だと思うが」

「私もアスハ代表の言う通りだと思います」

カガリに同調したレヴアンに続く形でアルノルト達停戦派の議員達も声を上げ始める。

「我々はお互いの腹の探り合いをしに来た訳ではない筈だ」

「うむ、まずは停戦。そこから各陣営同士の溝を埋めていけばよいだろう」

テタルトス停戦派の議員達の声が大きくなるにつれて、他陣営からも停戦に関する話し合いが行われ始める。

「妙ね」

「ええ、あの二人が何の反論もせず黙って聞いているだけなんて」

あれほどの舌戦を繰り広げていた筈のゲオルクとイスラフィールは先ほどまでとは正反対に黙って成り行きを見守っているだけで一言も話さない。

まるで事前に打ち合わせでもしていたのではないかと勘ぐってしまうくらいだ。

結局、二人は停戦については口を挟まず協議は順調に進んでいく。

そして話が纏まろうとしたその時、黙っていたイスラフィールがようやく口を開いた。

「なるほど。停戦については良いだろう。しかし、その後についてはどうするつもりだ？ ユニウス条約のような休戦条約を結び、再び戦端が開かれるまで互いを牽制し合うのか？」

「何をおっしゃりたいのですか、イスラフィール代表？」

「単純な話だ。このまま停戦したとしても結局何も変わらない。ならばそれ相応に世界も変わらねばならないという事だ」

イスラフィールの発言で議会は再び緊迫感に包まれる。

その中でマユは何となくゲオルクの方を見た。

するとゲオルクは楽しげな笑みを浮かべてはいるものの、特に反応もせず静観しているだけだ。

「……何を考えているの？」

底知れない何かを感じ取り困惑する。

そんな中でもイスラフィールの発言は止まらない。

「つまりイスラフィール、貴方は彼のギルバート・デュランダルのように世界を変革しようというのか？」

「あんな夢想家と一緒にしないでもらいたいものだ。私は変革などと大それた事を言うつもりはない」

「では、一体何が言いたいのですか？」

レヴァンの質問に鋭い視線を周囲に向けたイスラファイルは淡々と、そして確かな覚悟を感じさせる声色ではつきりと口にした。

「統一だ」

「ッ!？」

「世界を統一する。そうすれば戦いも……いや、些細な争いは消えずとも、今のような大規模な戦闘は起こらないだろう」

「貴方がそれを成すと？」

「そうだ。この際、はつきり言っておこう。俺は此度の停戦に反対はせん。しかし統一を諦めるつもりは毛頭ない。必ず実現する」

イスラファイルに迷いはない。

傍から見ていただけのマユでさえ、彼が本気であるという事はハッキリと理解できた。

「それは武力を行使してもという事ですか？」

レヴァンの再度の問いかけ。

それにも全く躊躇う事無くイスラフィールは頷いた。

「そうだ。話し合いで解決できればそれに越したことはあるまい。しかし世界にはどれだけ言葉を尽くそうと理解し合えない者たちも居る。各々相応の事情を抱えているのだから、それも当然の事。そのような者たちとの話し合いなど時間の無駄だ」

「だから力尽くで支配するというのか。そんな事をすれば今以上の犠牲が出る！」

「だろうな。しかしそれはこのままの状況が続いても変わるまい。だからこそ俺がやるのだ。例え夥しい数の犠牲が出るとしても、どれだけの屍が積み上がろうと、必ずやり遂げる。それこそが今までの犠牲に報いる唯一の道。これ以上の犠牲を出したくないと言うならば、各々この場で我らが軍門に下れ。それで戦争は終わる」

重苦しい空気と共に場を沈黙が支配する。

誰も口を開かない。いや、開けないのだ。

今回の会談の趣旨が停戦協議にあるというもの理由だが、イスラフィールが統一という目的の為にどんなカードを切ってくるか誰も予想できなかったからである。

そんな会場で最初に口を開いたのはカガリだった。

「クレメンス・イスラフィール。貴方の言っている事も分からない訳じゃない。仮に統一が為されれば、確かに大きな戦争は無くなるだろう。しかしそれは武力によって無理やり為されるものではないと思う」

「先ほども言った筈だ。話し合いなどそんな事をしていては何時になるかわかったものではない。それともその間に積み上げられる犠牲を容認するのか、カガリ・ユラ・アスハ代表？」

「買いかぶつてもらつては困る。私は正義の味方などではなく、単なる政治家だ。優先すべきは国益であり、国民。平和は勿論、歓迎するが、侵略は御免だ」

カガリの言葉にイスラファイルは黙つたまま聞き入っている。

「イスラファイル、私達がやるべき事はまさに積み上げていく事だ。無論、屍などではなく、私たちができる事をな」

「詭弁だな。今やるべき事をやらずして何が政治家か」

「そのやるべき事が私と貴方では違うという事なのだろう、クレメンス・イスラファイル。少なくとも私は貴方の侵略行為を是とする事はない。もちろん対話あれば何時でも応じる準備がある事だけは先に伝えておこう」

意見の隔たりは埋まらない。

イスラファイルが言葉では通じないと対話を切つて捨て、カガリは最後まで言葉を尽くすという。

概ね議会もこの二つの意見に分かれる形となる。

露呈したこの明確な溝こそ、ミュンヘン会談における最大の収穫だったのかもしれない

い。

重い空気が漂う会場。

それを打ち破ったのは立っている事も出来ないほどに強烈な振動だった。

◇

当然、その強烈な振動は会場の外で待機していたミネルバにも当然伝わっていた。

予期せぬ振動で整備班の方で少し怪我をした者もいたがコックピット内で待機していたのが幸いしパイロット陣に怪我は無かった。

「今のは……ブリッジ、何があった？」

エクリプスのコックピットからブリッジに通信を繋いだアレンの耳に慌てたメイリンの声が聞こえてきた。

《攻撃です！ 遠距離からの強力なビームによる砲撃だと思われまます！》

《ビームによる攻撃って、一体誰が？》

「落ち着け、ルナマリア」

確かにそれも気になるが、それ以上に気がかりなのは――

「メイリン、会談の方はどうなったんだ？ 各国要人達は？」

《砲撃は会場付近に直撃した模様。それにより周辺の建物にも大きな影響が出ている

ようです。要人達の安否については現在不明》

会場はシエルターにもなっているから、簡単に潰される事はないだろう。

しかし何度も攻撃を受ければ話は別。

中にいるマユ達の安否を気にしていると新たな情報が飛び込んでくる。

《所属不明のモビルスーツが多数接近中。モビルスーツ隊は直ちに攻撃してください》

カタパルトまで運ばれたエクリプスの背中にエクリプスシルエットが装着され、ハッチが開かれる。

《要人たちの救援にはアイザックに行ってもらいます。モビルスーツ隊は他の部隊と共に敵モビルスーツの排除を。頼むわよ、アレン》

「了解。アレン・セイファート、出ます！」

ミネルバから出撃したアレンが見たのは大きく抉られた地面と崩れ落ちた建物の残骸だった。

ミュンヘン会談開催に際して万が一に備え周辺には立ち入り規制が為され、住民には会談開催までの間だけ別の場所へ移っている。

警備についていた人間以外、人的被害はほぼ無いだろうが――

「この威力、通常のビーム砲ではない。どこかに固定砲台でも設置しているのか

? しかし……」

ミュンヘン周辺の警戒は数日前からかなり嚴重だった。たとえ遠距離でも砲台を設置すれば気が付かない筈はない。

「ミラージユ・コロイドですかね?」

「それは……可能性としてなくはないが」

ルナマリアの言葉にアレンは思わず否定の言葉を口にしようになるが、すぐに考えを改める。

非常に高いステルス機能を発揮するミラージユ・コロイドだが本領を発揮するのは宇宙空間での使用であり、地上では使い難い。

しかし使い難い装備であろうとも、使えなくはないのだ。

脳裏に過る嫌な考えを振り切る間もなく、正面から次々と敵と思われるモビルスーツが近づいてきていた。

「ウインダムにムラサメ!」

それだけではなくザクなどのザフト系の機体の姿まである。

迫ってくる敵は混成部隊とも言うほど機体群に統一性はなく、どここの軍隊が使用しているのかは特定できない。

「テロリストか。それにしてもずいぶん装備がいいが」

「だとするとどこから手に入れたんですかね？」

「蛇の道は蛇。金さえあれば手に入れようと思えば入手できなくはない」

現在、ベルリン条約によって規制されモビルスーツを普通の一般人が手に入れる事は難しくなっている。

これは『ブレイク・ザ・ワールド』やユニウス戦役で起きたモビルスーツテロの影響があつた為だ。

しかしモビルスーツの入手と使用には規制がかなり厳しくなつたとはいえ、まだまだ抜け道は存在しているのが現状だった。

言いたくはないがジャンク屋などの伝手を使えば軍の最新鋭機でもない限り、モビルスーツの入手は可能ではあるのだ。

「まさか」

攻撃を仕掛けてくるウインダムやムラサメを見つめながら嫌な予感が膨らんでくる。

敵が乗っている様々な種類の機体は主犯を特定させない為のものなのだろう。逆を言えば今回の件をどの勢力の所為にもできるといふ事だ。

「誰の仕業か知らないが、嫌なやり方を——ッ」

そこでアレンの脳裏に何かが掠めた。

それが何かは分からない。

昔の記憶か、それとも――

しかし、前に宇宙で感じていた嫌な予感が益々膨らんでいく。

「ああ、くそー！」

袈裟懸けに振るわれたウインダムのビームサーベルを逆に持ち手ごと斬り飛ばす。

同時にコックピットをサーベルで焼き潰した。

そしてすかさず飛行形態で翻弄してくるムラサメをビームライフルで狙撃する。

「ルナマリア、出来るだけ市街地から敵を引き離す。それから街に被害を出さないように派手な攻撃は控えろ」

「そんな無茶ですよ」

「分ってる。だが、後で難癖付けられても嫌だろ」

『お前達が派手に暴れたせいで街は滅茶苦茶になってしまった』とか言われてカガリ達が不利になるような事は避けたい。

だからこそ今回の武装は火力の控えたものを選んでいる。

エクリプスシルエットの装備ラックにセットされた武装は改良された対艦刀『エツケザックス』改とハイパーバズーカ砲の二種類。

強力な火器であるサーベラスなどは敵ごと建造物を薙ぎ払ってしまう可能性があったから今回は控えたのだ。

「勿論出来る限りでいい。だがお前なら出来る、ルナマリア」

「うっ……こういう時だけそんな事言うんだから、たち悪いよね、ホント。分かりました！」

赤面したルナマリアの返事にアレンも笑みを浮かべる。

「よし。さっさと片付けて俺達もアイザックの支援に向かうぞ！」

「了解！」

フオースシルエツト装備で突き進むインパルスの姿を頼もしい気持ちで見守りながらバスーカ砲で援護する。

続け様に発射された砲弾が敵を攪乱し、そこを突いて斬り込んだルナマリアが敵モビルスーツを引き離しながら排除していく。

二機のガンダム洗練された動きと精密な連携に敵はただ翻弄され、撃破された。まるで戦闘のイロハなど何も知らない素人のように。

「手応えがないですね」

「ああ。それなりに訓練は受けているようだが、実戦経験のない新兵みたいだな」
それだけ敵の攻勢は脆い。

連携すら碌に取れていない有様だ。

「これなら！」

敵をけん制しながらウインダム腕を斬り飛ばすインパルス。

そのまま止めを刺そうとしたその時、腕に敵のウインダムが組み付いてきた。

「なっ」

「死ね！ 宇宙の化け物！」

「まさか、ブルーコスモス!?!」

「自爆する気か！ ルナマリア、離れろ！」

聞こえてきた声に一瞬、驚愕する。

だがすぐに正気に戻ったルナマリアがウインダムに蹴りを入れて突き放す。

そして援護に入ったエクリプスのビームサーベルがウインダムの胴体諸共パイロツ

トを焼き殺した。

「大丈夫か？」

「ええ。少し驚きましたけど」

「ああ。ある意味予想通りだがな」

『ブルーコスモス』

反コーディネイター思想を掲げる主義者達の総称。

この世界でこの名前を知らない者などそうはいないだろう。

母体とされたロゴスの存在がユニウス戦役で露見されるまで、この世界で猛威を振

るっていたテロリスト達なのだから。

「距離を取れ。自爆でもされたら面倒だ」

「了解」

アレンの脳裏に浮かぶ過去の光景。

それを振り払うように首を振る。

敵の攻撃を捌きながら先ほど以上の鋭さと容赦のなさで光刃を振るいウインダムを屠っていく。

「……お前らは何時まで経っても！」

テロに対する明確な怒りを込めながら攻撃を繰り返しつつ、感情を抑え込むように深呼吸する。

「落ち着け。他の部隊も動いているんだ、敵はもうすぐ排除できるはずだ」

先に迎撃を行っていたアークエンジェルとラクスが搭乗しているジャステイスも敵を順調に排除しているのが見える。

そこに特務隊も加われば、鬼に金棒だろう。

今確認できている敵のモビルスーツは自爆にさえ気を付ければ脅威にならない事は誰の目にも明らかだった。

なら、後は――

「じゃあ後は会場に攻撃を仕掛けたビーム砲だけか。ミネルバ、敵ビーム砲の位置は？」

《もう少し待ってくだ——えっ？ これって……》

「どうした、メイリン？」

そこでアレンも気が付いた。

通常のモバイルスーツを優に超える大きさを持った物体が近づきつつある事に。

「アレン……あれは」

「チツ、なるほどな。固定砲台などではなく、よりによってアレとはな」
近づいてきた物体に舌打ちしながらアレンは操縦桿を強く握りしめた。



ミネルバと別れ、会場で要人の救出作業を開始する為、アオイたちもまたモバイルスーツで出撃準備を行っていた。

「まずは俺達が周辺の敵を排除、そして安全が確認されたら陸戦隊が要人救出の為に内部に突入する。いいな？」

「了解！」

アオイのイレイズMK-IIとベアトリーゼのイリアスが出撃すると後に続くように
デステイニリーファインとランドグリーズも飛び出してくる。

「シン、それにセリスさん、二人の方が階級が上なんだし、指揮権はやっぱり」

「いいんだよ。アイザックについて俺達は何も知らないんだしさ」

「うん。私達、お客さんだしね」

シンとセリスは今回、アイザックの乗船する形について来ていた。

これはアイザックの戦力不足を懸念したアイラの配慮だったのだが、シンにとっても
ありがたい話だった。

何故なら妹のマユが要人の護衛任務についていると聞いていたからだ。

スカンジナビアでセリスのリハビリに付きっ切りだったため、最近のマユともメール
でやりとりするくらいで殆ど会っていないかった。

やや不謹慎ではあったが、この機会に久しぶりに顔を見ておきたかったのである。
なのにこんな事になるとは。

「……マユ」

会場は一種のシェルターになっていると聞いている。

だからマユは多分大丈夫だとは思う。

それでも正直な話、すぐにでも会場内部に駆け込んでマユの安否を確認し、助け出し

たかった。

でも――

「シン、マユちゃんなら大丈夫。あんなに強いんだからね」

「……ああ」

「急いで周辺の敵を片付けて俺達も救出活動の支援に行こう」

「アオイ、セリス、ありがとう」

事情を知る二人の気遣いに焦燥で重苦しくなった胸中が少しだけ軽くなった。

シンは自分を落ち着かせるために大きく息を吐き出し、操縦桿を握りなおす。

「ミナト少尉、アスカ中尉、ブラッスール中尉、敵が来るぞ」

ベアトリーゼの声に意識を戻すところらに向かつてくる敵が見えた。

近づいてきたのはムラサメ。

全機、飛行形態でこちらに突撃してくる。

「シン！」

「ああ、行くぞ！」

デステイニーが翼を広げ、アロンダイトを構えると敵陣に向かつて一気に踏み込ん

だ。

「はあああ!!」

大剣でムラサメを斬り落とし、ランドグリーズがガトリング砲でハチの巣にして撃破する。

「敵の技量は大したことなさそうだな。それにしても流石だな、シン。俺も負けてられない」

アオイもまた二機の奮戦に負けじと前に出ようとしたその瞬間、ソレが来た。

かなり距離は離れているがこの位置からでも十分に見える。

それにアオイの意識もまた引き付けられた。

「アレは……」

その巨体に嫌な記憶が蘇ってくる。

そしてもう一つ。

巨大な影とは反対方向。

そちらからイレイズMK-IIに向かってくる機影に気が付いた。

「敵?!」

凄まじい速度。

デステイニー達と戦っている連中とは明らかに違う動き。

一足飛びでイレイズに近づいてきたのは――

「…………赤いモビルスーツ!？」

アオイの目は一直線に向かってくるビームライフルを構えた赤い機体を捉えていた。

第19話 悪夢の銃弾

仮面で素顔を覆い隠した女性エリニスは静かに、そして足早に格納庫を目指して閑散とした通路を歩いていた。

小柄でありながらも、隙の無い佇まい。

すれ違う者が居ても皆、階級に関わらず彼女から視線を逸らし、出来るだけ関わらないように道を開けていく。

それは明らかな恐怖からくる行動だった。

顔が分からないから——そうではない。

所属している部隊がいわく付きだから——それも違う。

理由は至極簡単。

彼女自身から発せられる殺意と憎悪の感情。

滲み出る不吉な気配、それが皆を遠ざけている。

傍から見れば異常な光景であるが、エリニスからすれば気にすべき事でもない。

彼女にとって周りの人間などどうでもいい存在だったからだ。

騒がしい格納庫に入っても流石に手を止める者はいない。

しかし逆に近づいてくる者もいなかった。

エリニスはそれも気に留めず目的の人物がいる機体のコックピットの前に来ると許可もなく覗き込んだ。

「やはりここに居ましたか、フェレオル大尉」

呑気にイヤホンで音楽を聴きながら、コックピットで座り込んでいるのは現地球軍最強と名高いジェラル・フェレオル大尉だった。

やや呆れ気味にため息をついたエリニスは咎めるように口を開いた。

「いい加減に余暇をコックピットで過ごすのはやめてもらいたいですね。整備班にも迷惑でしょうに」

「エリニスカ」

ジェラルは非常時でなくともモビルスーツのコックピット内に常駐している事が多かった。

エリニスには全く理解できない事だが、彼曰くここが一番落ち着くかららしい。

「俺の勝手だ。それに整備中には流石に遠慮して他所へ行くさ」

「何故こんな狭苦しい場所で落ち着けるのか理解に苦しみますね。こんなもの鉄で出

来た棺桶でしょう」

何の感情も込めずエリニスはただ鋼鉄で出来た人形を見上げる。

これはただの兵器。

戦う為の道具にすぎない。

だがジェラールは違うようで、肩を竦めながら反論する。

「分かってないな。此処こそが俺達の居場所なんだよ。お前だって戦闘じゃ此処に命預けてるんだ。もう少し愛着くらい持ったらどうだ？」

何処か楽しいげに操縦桿を握るジェラールを理解できないとばかりにエリニスは首を横に振る。

「くだらない。そんな事よりも、命令が下りました。行きますよ、月も動くようですか
ら」

「ああ。分かった」

ジェラールはイヤホンを外すと待つてましたとばかりに哄笑する。
彼の愛機もまた獲物を狙う獣のようにツインアイに火を灯らせた。

◇

美しい街並みにそぐわない大きな爆発跡。

その上空を飛びまわる無数のモビルスーツ。

戦場と化したミュンヘンの街から離れた位置に一際目立つ巨人が立っていた。

それを見て好意的な感情を抱ける者はいないだろう。

通常のモビルスーツサイズを明らかに上回る巨体。

全身を覆う黒い装甲。

突き出た長い砲身に胸部に光る砲口。

その姿はすべてを壊す為に生まれた破壊神を彷彿させる。

それは間違っていない。

『デストロイ』の名を冠されたこの機体こそ、ベルリンを廃墟へ変えた忌むべき存在なのだから。

「アレン、あれってデストロイですよね？」

「ああ。俺達の見間違いじゃないならな」

アレンがモニターに呼び出したデータは目の前にいる機体とデストロイとの類似点を色濃く示している。

「だが油断するなよ。どうやら改良型のような」

目の前にいるのは確かにデストロイの系譜に連なる機体である事は間違いない。

しかし明らかに違う点も幾つかあった。その一つがその大きさだ。

以前の機体に比べて一回り以上小さくなり、さらに機体全体もスマートになっている。

G F A S—X I B 『デストロイガンダムMk—II』

ユニウス戦役に投入されたデストロイガンダムの強化した機体でデストロイに比べて一回り以上小型化されている。

それでも通常のモビルスーツサイズを優に上回る巨体と強大な火力は健在であり、圧倒的な制圧能力を持っている。

「あの大きさはベルリン条約に抵触しないようにって事か」

本来デストロイのような大量破壊兵器の市街地使用はベルリン条約で禁止されている。

あの機体はそれに抵触しないようにギリギリまでサイズを絞ったのだろう。

「何でテロリストがあんな機体を？」

アレばかりはジャンク屋などの伝手を使おうが、手に入るものではない。

しかも改良されているとなれば、それなりの資金力と技術力が必要になる。

となると――

「……さあ、裏で誰かが糸を引いているのか。それよりも、来るぞー！」
背中の砲身がこちらに向き、光を集めていく。

高エネルギー砲『アウププラー・ドライツェーン改』

市街地を一撃で更地に変える強力な閃光が砲口から迸り、エクリプスとインパルスはタイミングを合わせ一気上昇した。

「ぐっ!？」

「チー!」

今まで居た空間を薙ぎ払う強烈なビームが通り過ぎていく。

「小さくなくても相変わらず、滅茶苦茶な威力ね」

出力が元々違う故にビーム砲の威力は桁違いで、直撃を食らえばモビルスーツなどあつさりとし飛び飛ばされてしまう。

「でも弱点は知ってるのよ!」

ビームサーベルを抜いたインパルスがモビルスーツ形態に変形したデストロイに近接戦闘に挑む。

「……確かに接近戦は対デストロイ戦のセオリーだが」

アレンが気になっていたのは、デストロイの形状の変化だった。

ユニウス戦役ではあれだけ近接戦で痛い目を見てきたデストロイだ。

何らかの対策が取られていても不思議ではない。

「考えていても埒が明かないか」

気になりながらも突っ込むインパルスを少しでも援護すべく、スラストターを吹かす。デストロイを引き付けるように動きつつ、バズーカ砲を撃ち出した。

迫る砲弾を迎撃するためにデストロイがビーム砲を発射した。

「そう簡単には当たらない、だがー」

しかしそれこそこちらの狙い。

バズーカ砲への対処を優先し、他への注意が散漫になった。

「もらったー」

隙が出来たデストロイの懐ヘルナマリアが突撃する。

狙い通りビームはエクリプスの方に集中しデストロイの懐はがら空きになっていた。

もはやビームサーベルの一撃は防ぎようがない。

しかしそこで思いもかけなかったものが現れた。

「何？」

伸びてきたのは腕だ。

腰部に隠されていた腕から伸びるビームサーベルが横薙ぎに振るわれ、インパルスに

襲い掛かった。

「隠し腕!？」

野太い光の刃は通常のモビルスーツが使うものとは明らかに出力が違う。

「不味い!! 避ける、ルナマリア!!」

アンチビームシールドで受け止められる出力ではない。

「間に合わない!」

ルナマリアは巨大ビームサーベルにアンチビームシールドを構えて受け止める。

しかしアンチビームシールドは容易くビームサーベルによって半ばまで食い破られてしまう。

「!」の—」

盾の角度を変え隠し腕に蹴りを放ち、サーベルを逸らし、その間に離脱を図った。

だが、デストロイが大人しく逃がすはずもなく両手を切り離し、指先に搭載されたスプリットビームガンで追い打ちをかけてきた。

「くっ、そう簡単にやられないわよ」

飴のようにドロリと溶けたシールドを投げ捨て、ビームシールドを展開しながら攻撃を捌いていく、インパルス。

「ルナマリア——ッ!？」

援護に出ようとしたエククリプスの前にエールストライカーを装着したブリアレオス

が立ちほだかった。

その数は10機。

しかもどれも改修機なのか、通常機に比べ微妙な違いがある。

「保守軍の新型」

先ほども思ったがやはりおかしい。

業腹な話だがムラサメなどに関しては手に入れる手段がある故にテロリストの仕業だとしてもある程度納得はできる。

しかしデストロイや最新鋭機であるブリアレオスの改修型など普通のテロリストが手に入れられる筈がない。

「お前達はどうやってその機体を手に入れた？」

ビームライフルの射撃をかわしながらエツケザックスをブリアレオスに叩き付ける。

シールドで止められた対艦刀が火花を散らす中、何処かで聞いた事のある声かスピーカーから漏れてきた。

《……敵機確認》

「この声は……」

あれはユニウス戦役終盤。

ザフトがとある特殊モビルスーツを大量に投入してきた事があった。

その時に接触した事のある声によく似ている。

そのパイロット達は地球軍のエクステンデットの技術をもちいた強化人間で、確か名称は――

「ラナシリーズだったな」

《……エクリップス……アスト・サガミ……優先排除目標……》

「俺の事を知っている？」

《……システム、起動します》

「まさか」

それはギルバート・デュランダルが生み出したある種の災厄のようなものだった。

特殊な力を持つ者に対抗する為、誰でもその力を使うように疑似的に再現したもの。

力を与える代わりにパイロットの負荷を無視し、最悪廃人に変えてしまう悪魔のシステム。

テム。

『I. S. system starting』

機械的な声が響くとブリアレオスの肩と腰の装甲がスライドし、形状が変化した。

握ったビームサーベルを正眼に構え、全機が糸乱れぬ動きでエクリプスの方へと突っ込んでくる。

「I・S・システムだと、チツ！」

アレンは反射的に機体を引きブリアレオスから距離を取りつつ、バスターカ砲でけん制する。

しかしそれらをすべてを紙一重で回避したブリアレオスは連携し、四方から攻撃を加えてきた。

その精度は先ほどまでとは明らかに違う。

ライフルの射撃。

サーベルの斬撃。

スキュラの使い方や反応速度まですべてが格段に向上していた。

これこそI・S・システムの力。

特殊な催眠処置と投薬を用いてSEED発現状態を擬似的に再現する事が出来る。

しかも処置時の副産物で使用者の人格や精神をある程度コントロールも可能というオマケ付きだ。

「厄介な！」

流石にI・S・システムを起動させたこいつらを相手にしながらデストロイの方ま

で手が回らない。

「くそー！ ルナマリア、もう少し持たせろ！ ラクス、ルナマリアの援護を頼む！」

このままでは不味いと判断したアレンは比較的近くにいるジャステイスにインパルの援護を頼むと躊躇わずにSEEDを発動させる。

弾けるような感覚と共に全身が研ぎ澄まされ、視界が急激にクリアになる。

「行くぞー！」

研ぎ澄まされた感覚に従い指先に力を籠めながら、アレンは四方を囲む敵機を突破する為、攻勢を開始した。

◇

ミュンヘンから順調に敵を引き離し奮戦するミネルバとアークエンジェル。

同じ頃、アイザックとドミニオン、そしてザフト特務隊は未だミュンヘン市街地で要人救出の為に動いていた。

その戦場でテロリストの排除に動いていたアオイのイレイズMK-IIの前に一機の赤いモビルスーツが現れた。

「赤いモビルスーツ!? シグルドか？」

その機体は装甲が赤く塗装され、改修されたシグルドだ。ヤキン・ドゥーエ戦役で投入された機体ではあるが、その力は未だ侮れない高性能機である。

「また珍しい機体を」

ユニウス戦役でテロリストに使用されて以降、シグルドはテロリストの象徴的な機体として世界中に記憶された。

その為シグルドを扱う勢力はほぼ皆無となり、戦地を転々とする傭兵ですら見たことがないという幻の機体とも呼ばれるようになっていた。

背中に装着された高機動スラスターユニットを噴射させ、ビームライフルで狙撃しながらこちらに迫ってくる。

「あの速度でこの正確な射撃、只者じゃない！」

こちらの動きを読んでいるかのような動きと確実に急所を狙ってくる攻撃。気を抜けば即座に落とされてしまう。

アオイはシールドを掲げコックピットを狙う射撃を防ぐとこちらもビームライフルで応戦する。

しかしシグルドはさらに速度を上げ、そのままビームを振り切って見せた。

「速い！ スラスターも強化されているのか！」

イレイズのビームライフルを潜り抜けたシグルドはサーベルの柄を掴むと抜き打ちで斬り払ってくる。

速度の乗った斬撃がイレイズの装甲を掠め、浅い傷を作り出した。

「くっ、この動きは……どこかで?」

一度距離を取り、再び速度を上げて迫ってくるシグルド。

それを見たアオイも前方に加速し、敵機を迎え撃った。

イレイズの右手から迫り出したブルートガンとシグルドのビームサーベルが真正面から激突、火花を散らして鏝迫り合う。

「……誰だ!? 誰がその機体に乗っている!?!」

アオイは目の前の敵から奇妙なデジャヴを感じ取っていた。

何処かで戦った事があるような——

いや、全く初見の敵と交戦しているような——

奇妙な感覚だった。

《流石に簡単には仕留められないようだな、アオイ・ミナト君》

加工されているのか、非常に聞き取りにくい機械的な声。

だが、その声を聞いた途端ゾクリと悪寒のようなものが走る。

アオイは悪寒を堪えるように歯を食いしばると、自分を叱咤するように声を張り上げ

る。

「……誰だ！」

《フフ……私の名はカース。世界に呪いの種を撒く者さ》

「カース!?!」

思っても居なかった名前思わず驚愕してしまった。

カース。

そう名乗った男をアオイも知っている。

時にテロリストに扮し、時には地球軍のパイロットを務めた男。

その正体はデュランダルの先兵であり、己が内なる感情に従って生きた人物である。

しかしその男はすでにこの世には居ない。

以前の戦いの中で倒された筈だからだ。

生きていたのか、それとも別人が名乗っているだけなのか。

「どつちにせよ倒すべき敵である事には変わりはないよな！」

《同意させてもらおうか。君達は厄介な敵だよ。故にこの機会に仕留めさせてもら

う》

「ふぎげろー！」

力任せにシグルドを弾き飛ばし、こちらにもビームサーベルを斬り払う。

半円の軌跡を描く光刃。

それに反応して飛び退くシグルドにすかさずビームマシンガンを突きつけた。

「もらった」

銃口から連続で発射されたビームがシグルドのコックピット目掛けて突き進む。

しかしシグルドは最小限の回避運動ですべてかわして見せた。

「なっ、今の位置で避けた!?!」

《それでは当たらんぬ》

側面に回り込んだシグルドが放った蹴りがイレイズの腹に直撃し、アオイは地上に落とされてしまった。

「ぐああああ!!」

《どうした? デュランダルが恐れた君の力、その程度ではないだろう》

「ミナト少尉!」

「アオイ!?! 今、援護に——」

「シン、前から新手!」

シグルドの襲撃を受けたアオイに気がついたシン達が援護に向かおうとするが、敵の増援が進路を阻む。

《君達は彼らの相手をしているといい》

増援に駆けつけた者達にその場を任せ、シグルドはシールドから展開したビームクロウを構える。

「ハのー」

追撃してきたシグルドから逃れるように地面を滑るイレイズ。

そこにヒュドラの光が襲いかかる。

《悪いが逃しはしない。借りもあるのでね》

「借りだと、ぐっ!?!」

ヒュドラをシールドで受け止め、圧力に耐えるイレイズ。

そこにシグルドの腰に装備されたミサイルポッドから発射されたミサイルが降り注いだ。

VPS装甲の上から伝わる激しい振動に歯を食いしばり、アオイは建物の間を縫うように回避運動を取る。

ミサイルとビーム砲の波状攻撃。

それが地面を滑空するイレイズの周囲の建造物に次々となぎ倒していく。

「くそ、被害が！ 不味いな、シン達から引き離されてる。他の連中は何をやって……えっ」

そこでアオイは気がついた。

テロリスト相手に交戦しているのは自分達と同盟軍、ザフトだけで、地球軍保守派とテタルトスの機体の姿は確認できない。

「……これって、くっ」

爆発の煙幕に紛れて突っ込んできたシグルドのビームクロウをシールドでギリギリのタイミングで受け止める。

「このままじゃジリ貧だ。何とか体勢を立て直して」

《させはしない》

反撃に転じようとしたイレイズだが先手を取られた。

下から搦り上げられる形で振るわれたシグルドの光爪が右足を食い千切られてしまった。

「ぐう、まだアア!!」

バランスを崩しながらも放ったマシンガンの一撃がシグルドのライフルを吹き飛ばす。

《チツ、流石と言っておこうか、アオイ・ミナト君。しかし!》

シグルドは損傷の影響も気にする事なく、再びヒュドラを放つ。

腹部から発射された閃光がイレイズのシールドを弾き飛ばすと、一足飛びに距離を詰めた。

「チツ」

盾の代わりにブルートガングを引き出し、上段から振り下ろされた光爪を受け止める。

《その機体では君の本領は発揮できまい!》

地面に倒れ込んだレイズにもはや光爪から逃れる術は無い。

死の爪を振りかぶるシグルド。

その危機を前にアオイは最後のカードを切った。

「……どいつもこいつも! 俺の愛機を馬鹿にするな!」

弾ける感覚。

SEEDの発動だった。

アオイも体勢を崩しながらもビームサーベルを引き抜く。

「うおおおおお!!」

《ツ!?!》

サーベルをシグルドの眼前に突き出す。

それでもカースは速度を緩めず、アオイもまた手を止めない。

交差する機体と刃。

一方の刃が肩部を貫き、一方の刃が腹部を切り裂く。

二つの刃が激突したと同時に切り離されたミサイルポッドが、二機を巻き込む形で爆散した。

◇

痛む体に鞭打って起き上がったマユが見たのは暗がりに満ちた会場の姿だった。会場全体を明るく照らしていたライトは落ち、非常用の照明に切り替わっている。

天井も崩れ瓦礫が幾つか積み上がっていた。

あの衝撃で会場全体が崩れなかったのはこの場所がシエルターとして作られているからだろう。

「二人とも大丈夫ですか？」

マユの体の下にはカガリとアイラの二人がいた。

あの衝撃が起きた瞬間、マユは咄嗟に二人を押し倒し、庇うように覆いかぶさったのだ。

「あ、ああ。私は大丈夫だ」

「ありがとう、マユ。貴方は怪我は無いかしら？」

「はい。問題ありません。それよりも」

問題はこれからどうするかだ。

幸いレヴァンには怪我はないようで特務隊の面々がガードについているのが見えた。怪我もないようだし、あちらは気にしなくてもよいだろう。

ゲオルクやイスラフィールも無事だったようで、部下に指示を出している。

しかし何人か怪我人がいるようで、所々からうめき声が聞こえてきた。

「できればさっさと脱出したいんですけど」

「外の状況も分からない以上、迂闊に動くのは危険。怪我人もいるし外からの救援を待つのが得策か」

「ええ。でもこの場所に留まるものは変わらないですけど」

確かにこの場所はシェルターになっているが、いつまでもつかは不明である。

もしかすると次の攻撃でこの場所が崩れ落ちてきてもおかしくはない。

仮に崩落が起きれば逃れる術はなく、そのまま潰れて死ぬ事になる。

マユが脱出するべきか、判断に迷っているとゲオルク・ヴェルンシュタインが壇上上がったていくのが見えた。

「会場におられるすべての方に申し上げる。このままこの場所に留まり続ける事は非常に危険だ。無論、外の状況が分からない以上迂闊に動けないという事も重々承知している。だが、今のこの状況はまぎれもなく非常事態である。だからこそ我々が動かなく

てはならない」

「どうするといふのです?」

「非常通路から外へ向かう。その途中には通信設備を備えた端末室もある。そこで状況も確認できるだろう」

「しかし怪我人は?」

「重傷者はいないようだが、もし怪我で動けない者は誰かが手を貸し後からついて来てもらいたい。他に怪我の無かった者は先行する」

ゲオルクの意見に反対する者は誰もいなかった。

危険なのは承知の上。

今の状況を打開するには確かにそれしかない。

情報不足の中では十分な対応だった。

混乱する各陣営の代表を纏め、的確な指示を出したゲオルクの手腕は確かなもの。

だが、マユはどこか奇妙な違和感のようなものを感じ取っていた。

対応があまりにスムーズ過ぎる。

それは昔、デュランダルが『ブレイク・ザ・ワールド』が発生した時の対応に感じたものと同じだった。

「まさか……」

胸中に湧き上がる疑問をカガリ達にも伝えようとしたその時、いきなり会場に扉が乱暴に開け放たれた。

その場に現れたのは味方の部隊ではなく、銃で武装したテロリスト達だった。

数人の男が銃をいきなり乱射、そして――

壇上に立っていたゲオルク・ヴェルンシュタインの体を撃ち抜いた。

乱射された銃弾によって無数の銃創を作り出されたゲオルクの体は何の抵抗もなく床に倒れ込み、真っ赤な血の海を作り出す。

その光景に誰もが思わず言葉を失う。

だが、テロリスト達は違った。

「死ね！」

ゲオルクを射殺した者とは別の男が構えた拳銃がカガリ達を狙って構えられる。

「ッ、危ない！」

マユは咄嗟にカガリとアイラを引き倒し銃を構える。

だが、マユがトリガーを引くより先に、発射された銃弾が容赦なく彼女の体を撃ち抜いた。

第20話 絶望のプレリユード

哨戒任務についていたクレオメデスの艦長室。

アスランは渋い表情を隠さず、ヴァルターから手渡された報告書に目を通していた。

「……ハア」

「不満ですか？」

「……俺が口を出す事ではないのは理解しています。本人が望んでいるならなおの事です」

報告書に書かれているのは、新しく軍に志願した者のリスト。

その中に先日テタルトスへ亡命してきた少女ミレイア・ロスハイムの名前が記載されている。

アスランが渋い表情を浮かべているのは、これが理由だった。

「その割に不満そうですね。そんなに彼女を巻き込むのが嫌なら、連れてこなければよかったです。保護を選択したのは貴方です、ザラ中佐」

「ですから俺が口を出す事ではないと言っているんです。妙な勘ぐりが止めていただ

きたいですね、ランゲルト少佐」

確かにミレイアをテタルトスに連れてきたのはアスランだ。

そういう意味ではヴァルターの言う事は正しい。

しかし軍に志願したこと自体は彼女の意思であり自己責任である。

それ等を踏まえてアスランは何も言わないのだ。

彼女が軍人となって戦う際には気にも掛けよう。

望むなら出来る限り力にもなろう。

危機的状況に陥ったなら助けましょう。

だが、それだけ。

無論、アスランなりに責任は果たすつもりではある。

だがそれ以上干渉するつもりは毛頭なかった。

「失礼しました。では、こちらの命令書の方はどうされるのです?」

そう、アスランが洗い表情を浮かべていたもう一つの理由。

それがバルカナバート基地から通達があった緊急の命令書だった。

「ミュンヘンの襲撃。それに伴う作戦行動」

「ええ。緊急ですし、すぐにでも動く必要があると思いますか?」

「……分かっています」

しかし渡された命令書を何度読んでもアスランは納得ができなかった。それは感情論による話ではない。

単純に腑に落ちなかったからだ。

ミュンヘン会谈における防衛計画についてはアスランも何度も目を通した。

見る限り防衛計画に落ち度はなかった。

流石にあり得ないとまでは言わない。

それでも単純に襲撃するには難しい状況だった筈だ。

「……誰かが防衛計画を漏らしていた。いや」

この命令書を読む限り、考えられるのは――

「ザラ中佐？」

「いえ、クレオメデスの進路を変更。各パイロットに出撃準備をさせてください」

「了解しました」

ヴァルターに指示を出し終えたアスランはもう一度だけ表情を曇らせながら手元の命令書に視線を落とす。

「……セレネ」

防衛部隊に参加している筈の大切な女性を思いながら、アスランは席を立った。

◇

幾つもの煙が立ち上がる街並み。

それら蹂躪しようとする巨人と対峙する同盟のモビルスーツ。

モニター越しでその光景を眺めていたファウスト・クアドラード大佐は僅かに口元を歪めた。

《大佐、我々もそろそろ駆け付けるべきでは？》

「そうだな。そろそろ頃合いか……他の部隊にも命令を出せ」

独白にも似た呟きに通信をしていた副官が息を飲んだ。

事前にすべてを知らされていた彼は、ファウストの言葉の意味を知っていたからだ。

「こちらクアドラード大佐だ。全軍に告げる。我々はこれからミュンヘンに存在するすべて敵対勢力を排除する」

《……すべての敵対勢力をですか？》

それはつまり現在迎撃行動を取っている同盟、ザフトも同様に排除するという事だった。

「そうだ。この騒ぎ、単なるテロとは限らない。どこぞの勢力の策略という可能性も十分にある。無論、こちらの武装解除の要請に従うならばその限りではないが」

《要人の救出は？》

「今は事態の終息が最優先だ。それが必然的に要人救出にも繋がる」
《……り、了解！》

ファウストはコンソールを操作し、街全体の様子を確認しながら、頭の中で構図を描く。

「さあ、ここから始めよう。……新たな時代の幕開けだ」

どこか不吉な笑みを浮かべたファウストはすぐに表情を引き締めると、戦場に突入する部隊へ号令をかける。

その命令に従い、控えていたテタルトスのモビルスーツが次々と戦場へと飛び出していった。

◇

イレイズとシグルドの激突。

同時に繰り出された一撃が交差し、周囲に粉塵が舞い上がる。

爆発と共に上る爆煙。

相討ちかと思われたその時、煙の中から飛び出してくる機体があった。

悠々と飛び出してきたのは不気味に光るモノアイが印象的な機体シグルドだった。

「フフ、流石と言っておこうかな、アオイ君」

カースは肩に受けた損傷に目を向けながら、楽しそうに笑みを浮かべる。

損傷しながらもあのタイミングで斬り返してくるとは予想外。

地球軍改革派のエースは伊達ではないという事だろう。

「しかし、それでも私の勝ちだがね」

カースの眼下にはVPS装甲が落ち、メタリックグレーの装甲を曝け出したイレイズの姿が見える。

ビームクローを腹に受け、ミサイルポッドの爆発を真近で受けたイレイズは大破した状態で鎮座していた。

あれではパイロットが無事であろうとも動く事はできないだろう。

「さて名残惜しいが、君ばかりにかまけてはいられない。これで勝負を決めさせてもらおう」

ヒュドラを動かないイレイズに向け発射しようとトリガーに指を掛けた。

しかしその瞬間、カースの直感が警報を鳴らす。

「ッ!?!」

その直感に従い、機体を引くとすぐにビームの一射が通り過ぎた。

「デステイニー!?!」

「やらせるかアアア!!」

背中から光を放ち、アロンダイトを構えながら凄まじい加速でシグルドに肉薄してくる。

「やはりあの程度の連中では足止めも難しかったか」

所詮、彼らは最低限の訓練と僅かな実戦のみを積ませた言わば素人。

カース自身もエース級のパイロット相手に敵うとは微塵も思っていない。

「君もまた厄介な敵だ。故にここで消えてもらおうか、シン・アスカ君」

「セリス、アオイを頼む！ ベアトリゼはセリスの援護を！ こいつは俺が!!」

グステイニーの鋭い剣撃を紙一重でかわしたカースは至近距離からヒュドラを叩き込んだ。

機体を呑み込むほど強烈な閃光がグステイニーに迫る。

ヒュドラの威力は折り紙つき。

いかにグステイニーでも直撃すれば撃墜、手足を掠めただけでも損傷は免れないだけの威力があった。

にも拘わらずグステイニーの動きは全く鈍らない。

「そんなもの！」

閃光が迫る直前で機体をバレルロール。

ビーム砲を回避したグステイニーはシグルドに向けてアロンダイトを振り抜いた。

強烈な対艦刀の一太刀。

それをカースはシールドを巧みに使い真正面から受け止めた。

「なっ、止めた!？」

「ッ、凄まじい斬撃だな。まともに受ければそれだけで真つ二つだ。しかし真つすぐすぎる」

押し込むデステイニーの剣を受け止めるシグルドのシールドから火花が飛ぶ。

完全に拮抗した状態。

先に動いたのはカースの方だった。

意図的にシールドを傾け、アロンダイトの軌道を逸らすとビームサーベルを逆手で引き抜く。

狙いはデステイニーの左腕。

「こいつ!？」

シンはこちららの攻撃を流しながら絶妙のタイミング。

並外れた技量だ。

シンは驚愕しつつ、回避運動を取った。

デステイニーはバランスを崩しながらもアロンダイトから左手を放し、サーベルの軌跡を回避する。

「このオオ!!」

そのまま右手でアロンダイトを無造作に振り上げシグルド目掛けて下段から振り上げた。

「良い反応だ。だが、先ほども言った通り、素直すぎるのだよ!」

シグルドは刃が届く前にデステイニーに蹴りを入れ、同時にヒュドラを発射する。

強烈なビームがデステイニーの右足を捉え、膝から下を消し飛ばした。

「ぐっ、まだまだアア!!」

シンが咄嗟に左手で引き抜いたビームサーベルをブーメランのように投げつけ、シグルドの頭部に傷をつける。

「チツ、メインカメラが! 今の状態で君と戦うのは流石に不利か」
損傷を見て徐々に後退し始めるシグルド。

「逃げるつもりか!」

「フフ、君の戦うべき相手は私ではないよ」

「何!?!」

その時、こちらに近づいてくる機影を確認する。

それは月に所属するモビルスーツであり、そしてストックホルム基地防衛戦において

シンが対峙した機体——ジンII・アクティヴだった。

援護に来たのか？

いや、違う。

ジンⅡ・アクティヴは銃口を向け明らかにこちらを狙っている。

その隙にシグルドは距離を取っていくがシンにはそちらに構っている暇はなかった。

「テタルトスの!?! 何で!?!」

「こちらテタルトス軍リベルト・ミエルス大尉だ。直ちに武装を解除し、投降しろ。そうすれば命までは取らない」

聞こえてきたのは以前に接触したパイロットと同じ声、すなわちリベルト・ミエルスのものだった。

シンは以前の件での憤りを堪えながら、ライフルを突きつけてくるリベルトを咎めるように問いたました。

「どういうつもりだ？ お前らは今の今まで何をやってた！ しかも投降しろだつて?」

「言葉通りの意味だ、シン・アスカ。今回の件、貴様らが仕組んだことでは無いかと疑われているという事だ」

「ふざけるな!!」

シンはアロンダイトを突きつけたまま、ジンⅡ・アクティヴを睨みつける。

周囲にはテタルトスのモビルスーツが次々と戦場へ介入してきているのが見えた。しかも武器を向けているのはテロリストだけでなく、同盟やザフトの機体にもだ。明らかに初めからこちらを殲滅する意図が感じ取れる。

「当然の反応だな。ならば問答は不要。この場で決着をつけよう」

「初めからその気だった癖に勝手な事を言うな！」

ビームサーベルを構え突っ込んでくるジンⅡ・アクティヴにシンのSEEDが弾ける。

「うおおお!!!」

「それでいい。全力で来い。それを俺は叩き潰し、運命と決別する」

空中で二機が刃を振るって激突する。

その間にも次々とテタルトスのモビルスーツが押し寄せ、徐々に同盟軍は後退せざる得ない状況に追い込まれていった。

◇

敵味方入り乱れる戦場。

テタルトス軍の強制的な介入により同盟軍とザフトはそれぞれバラバラに分断され

ながらそれぞれが離脱しようと動いていた。

すなわち撤退戦である。

そんな中、最も激しい攻撃に晒されていたのが、ミネルバとアークエンジェルである。市街地から離れ遠慮なく攻撃を加えながら決して逃がさないとばかりに執拗にモビルスーツが追い掛けてくる。

「次から次へと。アレン達は?」

「未だ敵モビルスーツと交戦中です」

指示を飛ばすタリアの耳にテタルトス機からの降伏勧告が聞こえてくる。

「艦長、何度もこちらから戦闘停止の勧告をしていますが、テタルトス側の返答は武装解除して降伏しろの一辺倒です」

「くっ、どうしても私達を襲撃犯の仲間にしたい訳ね。メイリン、呼びかけを続けなさい。……無駄でしょうけどね」

今回の件の真偽がどうあれここで武装解除、もしくは降伏に応じてしまえば自分達がやったと認める事になる。

それだけは駄目だ。

何としてでもこのまま此処を切り抜けなければならぬ。

「会話の記録だけは取っておきなさい。アークエンジェルにも打電!」

気休めであろうとも、自分達が出来る事はしておくべきだ。

「了解！」

ミュンヘンから離れ、ストックホルムへ撤退を図る二艦に矢継ぎ早にミサイルが降り注ぐ。

ミサイルが直撃する度に爆発が艦を揺らし、さらに進路を阻むべく敵のモビルスーツが立ちふさがる。

「消耗している所を狙ってくるなんて」

「仕組まれていたってことかしらね？」

防衛の為の機体が迎撃に動くが、不利な状況である事に変わりはなかった。

これはこちらのエースがそれぞれ抑え込まれていたことが大きな要因として挙げられる。

ルナマリアとラクスはデストロイを押しとどめ、アレンは改修されたブリアレオスとの激戦に身を投じていた。

「そっかー」

ブリアレオスから発射されたビームライフルの一射を絶妙なタイミングで避け、距離を詰める。

接近戦の間合いに入ったエクリプスはサーベルでコックピットを貫通させた。

サーベルのビームに焼かれたパイロットは断末魔すら上げる事ができず、機体諸共跡形も残らずこの世から消え失せる。

「後、8機！」

仲間の仇とばかりに撃ちかけられるスキュラの砲撃。

「当たらない！」

エクリプスは前方に加速してスキュラを回避する。

当然、ブレアレオスは逃がすまいと追撃してきた。

そこでエクリプスは脚部をわざと地面につけ、無理やり、かつ急激に速度を落とす。

「ぐっ」

無論、そんな無茶な事をすれば機体脚部に凄まじい負荷をかける事になる。

しかしアレンはそれでも敵の虚を突くため無茶な機動を強行、弾けるようにブレアレオスの背後に回り込むとバズーカ砲を撃ち込んだ。

砲弾が敵機の右腕を吹き飛ばし、さらに発射した砲撃が片足を奪い取る。

バランスを崩したその隙を逃さずビームライフルで撃ち抜いた。

「これで残り7！ チツ、流石にI.S.システムが発動していると厄介だな」

そもそもラナシリーズ自体のパイロット能力は非常に高い。

高性能な機体とI.S.システムが加われば、その反応速度は通常とはまるで違うも

のになる。

先ほどの攻撃が良い例だ。

完全に虚を突いた筈にも関わらず、一撃で仕留める事ができなかった。

「ハア、ハア、反応が鈍すぎる！」

ここに来てエクリップス自体がアレンの全力に徐々についてこれなくなってきた。

その所為で反応が僅かに遅れ、機体が無傷とはいかず、装甲の所々に無数の傷が刻まれていた。

「しかも新型の性能も高いから余計に面倒だ」

ブリアレオスの機械のように正確かつ精密な連携と機動。

これは厄介であり、数まで揃っていると脅威としか言いようがない。

しかし、

「それでも、所詮イミテーションはイミテーションなんだよ！」

機械のように正確。

それはつまり特有の癖なども無く、正確ゆえに読みやすいということを意味する。

要するにパターンさえ読めれば恐れるに足りない。

アレンはライフルから背中のエツケザックスに持ち替えると再び敵陣へと突っ込ん

でいく。

「ハアアア!!」

振るった剣がブリアレオスの腕を裂き、返す刀で放った一太刀が深々と胴体を袈裟懸けに斬り裂いた。

さらにビームサーベルを投げつけ背後に回ったブリアレオスの頭部を破壊すると至近距離からバズーカ砲を撃ち込んで撃破した。

「残り5! このまま——ッ!」

コックピットに甲高い音が響き渡り、レーダーに光が映し出される。

「新手!」

振り返ったその先。

山間を抜けながらどこか見覚えのある形状を持った戦艦がウインダムやイリアスといったモビルスーツと共に姿を見せていた。

全体を包む浅黒い装甲に突き出された砲門。

両舷に設置されたモビルスーツハッチ。

その姿はアークエンジェルを彷彿させる。

しかしドミニオンのような同型艦ではなく、一回り大きい上に形状も違う部分が多い。

「アークエンジェル級の新造戦艦?」

地球軍保守派のものと思われるモビルスーツと共に姿を見せた戦艦のハッチが解放される。

そこから現れた機体にアレンは思わず目を見開いた。

「あれは………よりによってあの三機か」

アレン達の前に飛び出してきたのはウィーン前線基地でも遭遇したヴォルケイノ、シウトウルウム、ストリームの三機のガンダムだった。

「この状況で保守派まで……いや、デストロイや新型もいる以上は不思議じゃないか」問題はこの状況をどう切り抜けるか、それだけだ。

デストロイの相手をしているルナマリア達はこちらに援護に来ている余裕はない。

「ハア、俺だけでどうにかするしかないな」

武器を構え臨戦態勢に入った三機のガンダムと依然として周囲を飛び回るブリアレオスを睨みつけながら覚悟を決める。

「行くか」

アレンはゆっくりと息を吐き操縦桿を握りなおした。



発せられた無慈悲な銃声。

銃弾がマユの体を貫くと彼女の体はそのまま仰向けに倒れこんだ。

「マユ!!」

血を流すマユにアイラが駆け寄ろうとするが、再び始まった銃撃がそれを阻む。

「お姉さま、伏せてください!」

会場に設置してある机の陰にアイラを引つ張り込み、銃弾から難を逃れた。

その隙に体勢を立て直した護衛役が銃で侵入者を牽制し、激しい銃撃戦が開始される。

「くっ」

カガリは銃撃をさける匍匐姿勢でゆっくりマユに近づく。

時折、頭上を通り過ぎ、近くで銃弾が弾けるたびに背中に冷や汗が流れた。

カガリもこういった修羅場を潜った経験はヤキン・ドゥーエ戦役で何度もある。

だが、あの頃とは違い最近では政治家としての活動を主としてきた。

なまならない程度で体を動かしてはいるものの、昔のようには軽々とは動けない。

「くそ、運動不足だな」

自分の運動不足に毒つきながら慎重に、机を盾にしながらマユをこつちに引つ張り込んだ。

「マユ、しつかりしろ！」

「うっ、くっ」

マユは脇腹を撃たれていた。

どうやら急所は外れているようだが、出血が多い。

放置しておけば命に関わる。

「応急処置だけでも」

マユの応急措置をしようとした時、侵入者の一人が銃を乱射しながら駆け寄ってきた。

「死ね！」

「くそ！」

「カガリ!？」

カガリの手には武器はなく、成す術はない。

せめてマユとアイラだけでも守ろうと覆い被さった時、飛び込んできた影が見えた。

金色の髪を靡かせながら、カガリ達の前に立ったのはテタルトスの制服に袖を通した

レイ・ザ・バレルだ。

正確な射撃でカガリたちを狙っていた男を撃ち倒し、さらにもう一人を射殺する。

「よう！ 調子はどうだ、レイ！」

「ハイネか」

横から飛び込んできたハイネがもう一人を素早く倒し、入り口付近にいた残りの敵も撃ち倒してゆく。

二人はかつては共に戦った仲間であり、お互いの癖も良く知っている。

息の合ったコンビネーションで会場に侵入してきた連中の大半が射殺する。

すると流石に不利と悟ったのか残った連中の動きが明らかに怯んだ。

「このまま畳み掛けるぞ！」

「了解」

ハイネとレイは机を盾に銃撃してくる連中も苦もなく撃ち倒し、残りは一人。

「クソオオ!! ならお前達だけでも!!」

残った男は銃を捨て、何かのスイッチを取り出すと指を掛ける。

「爆弾!?!」

「させるか」

レイの一射が男の眉間を撃ち抜いた。

しかし、一歩遅い。

「伏せろ！」

男が倒れた時にはスイッチは押され、閃光と共に衝撃と爆風が会場全体を包み込ん

だ。

「うっ、お姉さま、大丈夫ですか？」

「ええ。何とかね」

爆発の影響で降りかかった細かい破片を振り払い、起き上がると会場は見るも無残な姿に変わっていた。

爆弾で破壊された壁や天井が会場を二分する形で崩れ落ちている。

どうやら保守派、イスラフィール達とは完全に分断されてしまったようだ。

「ご無事ですか？」

銃を持ったレイとハイネが近づいてくる。

怪我らしい怪我は見当たらない所を見ると無事にやり過ごしたらしい。

「私達はさっきの爆発で少し怪我をした程度で問題はないが、マユが……」

カガリの傍らには血を流したマユが倒れている。

撃たれた場所を布で抑えて止血しているが、早く治療を受けさせなければ不味い。

「カーライル議長は？」

「ご心配なく私は無事です」

話が聞こえていたのか特務隊の護衛を連れたレヴァンが歩み寄ってきた。

着込んだ服は汚れているが、大きな怪我はしていないようだ。

「レイ、そっちは？」

ハイネの問いにレイは難しい表情を浮かべて首を横に振った。

「ヴェルンシュタイン司令官は……駄目だな。死体も瓦礫で潰されているようだ」
あの様子では潰されなかったとしても、命は無かつただろう。

「幸いアルノルト議員はどうにか無事だが、他の何人かは命にかかわる程の重傷だ」
少し離れた場所でアルノルト達が横たわっていた。

その中には服が血で黒ずんでいる者もいるようで、素人目にも危険な状態である事が分かる。

「怪我人も多い。ここは危険ですから脱出しましょう。襲撃される危険もあります
が、それはここに居ても同じことです」

「そうですね」

「……向こうとも分断されてしまったようだし、それしかないな」

レヴァンの提案に全員が頷く。

怪我人を迂闊に動かす事は危険。

しかしこの場に留まる方がもつと危険だ。

襲撃してきた連中がきたら今度こそ逃げ場がない。

「マユ、少しだけ我慢してくれ」

「アスハ代表、ここは私が背負いましょう」

「カーライル議長、しかし」

「私は怪我もしていませんし、怪我をした女性に背負わせる訳にはいかないでしょう」
カガリとアイラは互いの姿を見る。

大した怪我では無いにしろ、人を背負うとなると確かに厳しい。

「申し訳ありません、議長」

「お気になさらず。さあ、急いで」

マユの銃創部分に布を巻き付け、出来るだけ慎重にレヴァンの背に乗せる。

他の怪我人も応急処置を済ませると無事だった者が背に負い、非常用の通路の方へと歩き出した。

「では行きましょう」

ハイネとレイが先導し、背後には特務隊がつく。

これでもしも敵と遭遇した場合でも対応は可能になる。

非常用の通路は思った以上に幅が広く、天井も高い。

大人2人分くらいの高さはあるのではないだろうか。

カガリは歩きながら頭に叩き込んでおいた会場の地図を思い描く。

このミュンヘンに用意された会場には幾つかの非常用通路はすべて外へと繋がって

いる。

途中には避難シェルターとしても機能する部屋や外部と連絡を取る為の通信室、長い通路を移動する為の車などが設置されていた。

カガリ達が今歩いている通路はミュンヘンの街からかなり離れた場所へ繋がっていた。

流石に怪我人を抱えたまま街の外まで歩くのは現実的ではない。

途中に置いてある車を使うのが最善であろう。

出来る限り急ぎながら車が止めてある場所へ歩いていると、先頭にいたハイネが止まるように手で制した。

「何か来る。全員、一旦下がってくれ」

銃を構え全員が警戒態勢に入る。

すると聞こえてきたのは、何かの駆動音だった。

「車の音?」

「敵か?」

「さあな、とにかく警戒を怠るなよ」

何時でも発砲できるよう、敵であった場合に即座に射殺できるよう正面に銃口を向ける。

徐々に近づいてくる駆動音。

全員の高まる緊張感と共に車が姿を見せた時、驚いた声を上げたのは意外にも先頭で銃を構えたレイだった。

「……まさか!?! どうしてこの場所に……」

近づいてきた車に乗っていたのは、カガリとも面識のあるセレネ・デイノ中尉だった。

第21話 舞い散る蒼翼、碎ける剣

パナマ基地。

かつて地球連合軍に所属し、改革派の拠点として使用されている軍事基地である。ヤキン・ドゥーエ戦役ではマストライバーごと無残にも破壊されてしまった。

しかしユニウス戦役時には再建を果たし、現在では激化しているメキシコ戦線を支える一大拠点となっていた。

「準備、急げ！」

「滑走路のモビルスーツを退ける、出撃の邪魔になる！」

活気のある格納庫。

絶えない声が鳴り響くこの場所ではいつ侵攻の知らせを受けても発進できるようにモビルスーツとパイロット達が順次待機していた。

手が空いている者は休息や訓練に費やすことで非常事態に備えている。

その表情は緊張感と使命感に満ち、兵士たちの士気が高さが伺える。

そんな彼らを率いているのが、腰まで伸びた金髪の髪に深々とかぶる仮面が特徴的な

人物ネオ・ロアノーク大佐である。

ネオの素顔を知る者は殆どおらず、名前すら本名かどうかも窺い知れない。

しかし、パナマ基地、ひいては改革派の中でネオに疑いを持つ者は誰一人としていなかった。

これまでの戦績と劣勢ながら保守派を抑え込んでいるその手腕は確かなもの。

ネオがいなければ、改革派がこうも持ちこたえることはできなかったに違いないと誰も思っているからである。

そんなネオの元に緊急の知らせが届いたのはいつも通りの哨戒任務から帰還した直後の事だった。

「ミュンヘンで武力衝突？」

《はい。詳細は未だ不明ですが》

「……保守派の動きはどうなっている？ スウエンから何か報告は？」

《今のところ何の報告も上がってきておりません》

オペレーターからの報告にネオは違和感を覚えずにはいられなかった。

世界が注目する会談で起きた武力衝突。

この機に乗じて何かを仕掛けてくるものと思ったからだ。

しかもネオたちと対峙しているのは猛将ニコラス・フリードマンである。

むしろ動かない筈がない。

それとも動けない理由があるということだろうか。

もしもそうだとすれば――

「……防衛線の戦力を倍に増やせ。それから偵察部隊を出し、敵を探らせろ。特に敵部隊の配置をな」

《了解》

これが連中の仕込み、もしくははこの状況を利用しているならば必ず何かある。

「……少尉もついている。皆なら大丈夫。それよりも」

ネオは渦中にいるだろうアオイの身を案じつつ、今回の件を思索し始めた。

◇

非常通路を走ってきた車の運転席から降りてきたセレネ・ディノ中尉に全員が安堵したように肩の力を抜いた。

敵の襲撃に備え緊張感を抱えていただけに見知った人間であった事に全員がホッとしてしまったのだ。

「バレル中尉、無事でしたか？」

「デイノ中尉、防衛部隊の貴方がどうして此処に？　いえ、それよりも外はどうなっているんです？」

レイの質問にセレネは一瞬、言葉を詰まらせた。

その表情は明らかにこの状況が良くないと暗に示していた。

「デイノ中尉？」

「……いえ、正直、私も正確にすべてを掴んでいる訳ではありません。しかし外では同盟とテタルトス、地球軍保守派との戦闘が始まっています」

「は？」

「どういう事です？」

「先ほどクアドラード大佐から全軍に命令が下りました。『ミュンヘンに存在するすべての敵対勢力を排除せよ』と」

セレネの話に皆が息を飲んだ。

「それでヴェルンシュタイン指令は？」

「それが……」

ゲオルクが襲撃者による銃撃で死亡した事を伝えるとセレネの表情は険しさを増す。現状を悪化させかねない話なのだから当然だ。

「これは……とにかく今はこの場所からすぐにも脱出する事ですね。皆さん、車に乗ってください」

「ちよつと待つてくれ、アンタはそれでいいのか？　　とうか信用できるのか？」
警戒心を隠そうともしないハイネの制止にセレネは表情を硬くする。

「今回の件、正確な所はまだ判断できない。だが、話を聞く限りクアドラードがそれなりに絡んでるのは間違いない。目的もまだわからん。しかしデイノ中尉、アンタがクアドラード側の人間である可能性もある」

「当然の反応ですね」

「悪いな。でもこつちも守らなくちゃいけない者がある以上は、慎重にならざる得なくてな」

「いえ、気にしないでください。ハッキリ言いますが証明はできません。口では何とも誤魔化せますから。ただ、私はクアドラード大佐ではなく、ヴァリス大佐の命令で動いている事は伝えておきます」

「ヴァリス……ユリウス・ヴァリス大佐か」

セレネの言葉にレイは納得したように軽く頷いた。

彼女の目的がレイと同じものであると理解したからだ。

セレネの目的もまたレイと同じく停戦派議員たちを守る事。

つまり彼女は万が一の場合に備えたユリウスの保険だったという事だ。

「ハイネ、俺の口から言っても信用できないかもしれないが、彼女はクアドラード大佐側の人間ではない。怪我人もいるし、時間もないぞ」

「……確かに。ハア、時間も、情報もないし仕方ないか。レイ、お前を信じさせてもらう。代わりと言っちゃなんだが出来るかぎり情報を提供してもらうけど、それでどうだ？」

「分かりました」

話は纏まり優先的に怪我人を車に乗せ、その後にカガリ達と護衛役が乗り込んだ。

そして怪我の少なかった他の者はこの先に停めてあるもう一台の車で出口を目指す。

運転席に座り車を走らせるセレネに早速ハイネが声を掛けた。

「それで最初に何があったんだ？ 詳しい情勢を教えてください」

「そうですね。まずは状況を整理しましょう。最初に起こったのは遠距離からの奇襲でした。強力なビーム砲が会場に直撃したんです」

「……ビーム砲。おかしいですね、特務隊が調査した時にはそんな物この近辺には砲台等は配置されて居なかった筈ですが」

周辺の情報も頭に入れていたレヴアンが訝しむように顎に手を当てる。

「いえ、砲台ではありません。ビームを撃ち込んだのはデストロイです」

「デストロイ!？」

「ええ、改良されそれなりに小型化していたようですがですけど間違いありません」

「それはそれで妙だけだな。いくら小型化したからって通常のモビルスーツサイズを軽く超えてる筈だろ? それが近くにあってたら気がつかない筈ないけどな。何かの仕掛けで隠してたって事か?」

「もしくはこちらの警備の穴を巧妙についてきたか」

「それについては現在不明です。そのデストロイと共に襲撃者が操っていると思われるモビルスーツが市街地を強襲。同盟と地球軍改革派がこれに応戦しました」

「アークエンジェルとミネルバはデストロイを含めた敵モビルスーツを市街地から引き離し、ミュンヘンから離脱。」

「アイザックとドミニオン、そして特務隊は市街地に侵入した敵の排除と要人救出の為にその場に留まり迎撃行動。」

そこにテタルトス軍が介入した。

聞けば聞くほど不味い状況に思わずカガリの顔が強ばる。

「ドミニオンかアイザックに連絡が取りたいが、この状況では難しいか」

「ええ。この件の裏で何が動いているのか確かめるまでは、迂闊な通信も危険です」

「ではどうする?」

味方にも通信できず、敵が何時現れるか分からない。

さらに怪我人までいるとなると――

「アムステルダムへ向かいましょう。あそこは完全な非戦闘区域ですからここよりはマシです」

「だが、特殊部隊も入っているとカゲオルク・ヴェルンシュタインが言ってたけど、大丈夫なのか？」

「あの部隊ならすでに撤収していますよ。そもそも目的はある人物を探し出す事だったみたいですし、それなりの成果は得たみたいですから。それでよろしいですか？」

「ああ」

異論があらう筈もなく、カガリ達が頷く。

車は徐々に速度を上げ通路を走る。

それはカガリ達の今後を示しているかのようには暗く先の見えない道。

それでも止まる事は出来ない。車は加速しながら、暗がりの中を突き進んで行った。

◇

戦場に現れた黒い戦艦。

アークエンジェル級と似通った造形を持ちながら、全く異質な艦。

その名は『サリエル』

死を司る大天使の名を冠した戦艦。

地球連合軍保守派の影であるフアントムペインが運用する新造戦艦である。

サリエルの艦長席に座り戦況を眺めながら指揮を執っていたのは保守派のNo.2メキシコ戦線の司令官ニコラス・フリードマン少将であった。

「いきなり呼び戻されたと思えばサリエルの指揮を執れとは。しかも相手があこのアークエンジェルとミネルバ、全く」

「貴方以外に適任者がいなかったのです。仕方がありません」

ニコラスは恨めしそうに傍に控える女性No.1を見やる。

長い髪を束ね、パイロットスーツを着込んだNo.1は何時でも出撃できるように臨戦態勢を取っていた。

気合いが入っているのか、感情を表に出さない彼女らしからぬ鋭い殺気の籠った雰囲気伝わってくる。

だが、ニコラスはそれも気に掛けぬとばかりに嘆息した。

「メキシコ戦線の指揮もあるのだがな。ロアノークは馬鹿じゃない。私の不在を感づ

かれたら、一気に攻勢に出てくるぞ」

「それをさせない為に部隊は配置済みの筈でしょう？」

「貴様は知らんだろうが、それを見抜いてくるのがロアノークなのだ。油断していると、即座に喉元に食いつかれる。だからこそ隙を見せるべきではない」

「……知っていますよ。十分にね」

No.1の囁くような呟きに気が付かないままニコラスは格納庫に通信を繋ぐ。

「準備は出来ているか、バルマ大尉」

「こっちは何時でも。どうか待ちくたびれたよ」

モニターに映るアルネーゼ・バルマが不敵に笑った。

上官に対する言葉遣いとは思えないアルネーゼの物言いにブリッジメンバーはビクビクしながらニコラスの様子を伺う。

だが、予想に反しニコラスはただ苦笑するだけで、叱責が飛ぶことは無かった。

「相変わらずか。まあ貴様なら問題なكارウ。だが相手はガンダムだ、油断するな」

「重々承知しているよ。それに私は油断した事なんて一度もないよ、昔からね」

「だったな。では頼む」

「了解！ アンタ達、しくじるんじゃないよ！ 特にジルベール！」

「勘弁してくださいよ、姉御」

「ジルベールが悪いよ。二度もアオイに煮え湯を飲まされるなんてさ」

「悪かったよ」

軽口を叩きながら発進準備を進めるパイロット達。

そんな会話を聞いていたNo.1は不思議そうに首を傾げた。

「お知り合いなのですか？」

「ああ。昔の部下さ」

ニコラスとアルネーゼはヤキン・ドウエ戦役より前から上官と部下という形で面識があった。

パイロットとして優れてはいたがアルネーゼは我が強く、隊の方針でニコラスと対立した事もある。

もちろん意見の隔たりはあったが、険悪な関係だった訳ではない。

むしろ面倒見の良さで隊員にも慕われていたアルネーゼをニコラスも信頼していた。

「あの頃は手を焼いたものだが、今では立派な隊長という訳だ」

「感傷も結構ですが、指揮もきちんとお願ひします」

「分かっているさ」

「では、私達も出撃準備に入ります」

「ああ、頼むぞ。『サリエル』戦闘体勢に移行！ イーゲルシュテルン、バリアント起

動、ミサイル発射管全開装填！」

ニコラスの号令に合わせブリッジがキビキビと動き出した。

相対するは名のある英雄達を退けてきた歴戦の勇士であるアークエンジェルとミネルバ。

相手にとって不足はない。

ニコラスは不敵な笑みを浮かべつつ、歯ごたえのある難敵をどう沈めようかと思考を巡らせ始めた。



地球軍の新造戦艦と三機のガンダム。

追隨する形で展開されている敵モビルスーツ部隊。

それはここまでの戦闘で消耗しているアレン達にとって最悪の状況であった。

「あの数は少し厳しいか……：……どうにかバルト海を抜ければ」

ミュンヘンを離脱して随分距離は稼げた。

このままバルト海まで行けたら、そこまで敵も追っては来れ無い。

「それまで何とか持ちこたえないと！」

しつこく追ってくるブリアレオスを容易く屠ると三機のガンダムを迎え撃つ。

最初にエクリプスに向かってきたのはヴォルケイノカラミティだった。

素早く滑るように地面を駆け、背中の砲口をエクリプスに向けてくる。

「さて、相手はエクリプス。ザフトの、いや、今は『グラオ・イーリス』のエースだったね。その実力、見せてもらうよ!!」

背中から発射されたビーム砲がエクリプスに襲い掛かる。

一撃、二撃とエクリプスを左右に振って誘導し、さらにスキュラを叩き込む。

強烈な閃光が飛びのいたエクリプスの肩を僅かに掠め、機体のバランスを僅かに崩された。

「くっ、たく、馬鹿みたいな火力だな。フリーダムといい勝負だよー」

アレンの視界を覆うほど幾重ものビームとミサイルの嵐。

制圧能力だけならそれこそフリーダムにも並ぶ。

「当たらなきゃ意味がない!」

躊躇わずフットペダルを踏み込み、思い切り加速。

装甲を掠めながらも砲撃の雨をかわしてみせた。

「このくらいは軽く避けるか! でもねえ、それで逃げられると思っただら大間違いだよー」

高速で上空から迫ってくるのはシュトウルム・レイダーである。

十八番ともいえる、速度を生かした一撃離脱。

獲物を狙う隼のようにエクリップスを狙い撃つ。

「これ以上、失態を重ねたら姉御に殺されかねないんでね！ 今日我真面目にやらせてもらうさ！」

「上空から!?!」

口元から発せられるツォーン。

同時に鉄球が放たれる。

絶妙のタイミングでの連撃をどうにか捌いて後退する、エクリップス。

しかし今度は異形の怪物を思わせるモビルスーツ、ストリーム・フォビドウンが鎌を構えて待ちうけていた。

「いらっしやい！」

「チツ、こいつら！」

振り向き様にニーズヘグトライデントをビームサーベルで弾き飛ばし、三機の攻撃範囲から逃れようと距離を取った。

完璧な連携。

カラミティ、フォビドウン、レイダーがそれぞれの機体特性をフルに生かす形で攻撃

を仕掛けてくる。

「昔、戦った連中とは雲泥の差だな」

かつて戦った三機の同型に乗っていたパイロットたちは個々の力は抜きんでていたが、連携はまるで話にならないレベルのものであった。

しかし、今戦っている相手は違う。

日頃の訓練の賜物か。

指揮官の優秀さか。

どちらにせよかつて戦った奴らとは比べ物にならない。

「だからって!」

カラミティの砲撃を潜り抜け、鎌を振るうフォビドウンにビームライフルを叩き込む。

「簡単には倒させないか!」

「カーラ!」

「大丈夫だって!」

ゲシュマイディヒパンツァーによりビームを歪曲して逸らし、フレスベルグでエクリプスを狙撃する。

「ビームが曲がる……相変わらず厄介な!」

フォビドウンの最大の特徴であるゲシュマイディヒパンツァーにビーム兵器は通用しない。

アレンは舌打ちしながらライフルからバズーカ砲に持ち替え懐に飛び込んだ。レールガンがエクリプスの装甲を掠めるが気にしない。

至近距離からバズーカ砲を直撃させてフォビドウンを吹き飛ばした。

「きゃあああ！」

「流石と言った所だね。でもいつまでも持つと思うな！ ジルベール、カーラー！」

「了解!!」

三機の猛攻にエクリプスは押されアンチビームシールドによる防御に回らされてしまった。

「機体の反応が鈍い！ 一旦体勢を——あれは!?!」

ブリアレオスとの戦闘で無茶をしすぎた所為か。

又はアレンの反応に機体が付いて来れなくなっただのか。

エクリプスの挙動が鈍く感じ始めていた。

反応の鈍さにイラつきながらもアレンは何とか体勢を立て直そうとする。

そこでモニターに映った友軍の状態に目を見開いた。

他の敵モビルスーツがサリエルと攻防を繰り返しているミネルバ、アークエンジェル

の方へ向かっていく。

「あのままじゃ数で押しつぶされる」

かといって援護に向かおうにもアレンにその余裕がない。

絶え間なく降り注ぐ砲撃とミサイルの雨に二隻の対応が追い付かなくなる。

「不味い！」

「悪いけど、行かせる訳にはいかないんでね！」

「ぐっ」

援護に向かおうとしたエクリップスだが、レイダーのミョルニルによって母艦とは反対方向へと弾き飛ばされてしまった。

他の機体も手一杯でとても母艦まで手が回らない。

撃沈の二文字が誰しもの脳裏に過ったその時、強力なビーム砲の一撃がミサイルを薙ぎ払い、近づくモビルスーツを次々と射貫いていく。

凄まじい射撃精度。

射貫かれた敵機は成す術なく撃墜され、運よく狙われなかつた者たちも二艦から距離を取らざる得ないよう誘導される。

こんな事が出来る者はアレンの知る限り、一人だけ。

そして想像通りの機体が戦場へ舞い降りた。

広がる蒼い翼と白い四肢を持つ機体。

窮地に陥った二隻を救ったのはキラの駆る量産型フリーダムであった。

その後方からアドヴァンスアーマーを纏ったブリュンヒルデ、ランドグリーズが近づいてくる。

「キラに、レティシアとニーナか」

二隻の護衛をブリュンヒルデに任せ、フリーダムが両手で抜いたビームサーベルを使いながら敵を切り裂き、エクリプスの傍へ寄ってきた。

「アスト、大丈夫!？」

「助かったよ、キラ」

「間に合って良かった。このまま蹴散らそう!」

「了解!」

アレンは素早く機体の挙動を確かめながら、三機のガンダムに向かうフリーダムの後追って武装を構えた。

◇

「ゴットフリート、撃て! ミネルバの進路を予測、ミサイルで進路を塞ぎ、動きを止

めろ！」

「了解！」

二隻の戦艦との戦闘は概ねニコラスの予測通りに事が運んでいたといっている。

英雄と言われているだけあって二隻とも圧倒的に不利な状況でありながらよく戦っている。

これも艦長やクルーたちが優秀であるが故だろう。

「流石か……特にアークエンジェル」

ニコラスは複雑な感情を籠めて白亜の戦艦に目を向ける。

ザフトの名立たる名将たちを打倒し、不沈艦と呼ばれたかつて地球連合の所属していた戦艦。

あれだけ優れた技能を持つ彼らが自軍にいれば、今のような状況も少しはマシであつただろうに。

「全く、かつての上層部に文句の一つも言いたくなるな。だが、その見事な奮戦もここまでだ。すでに君達は話んでいる」

スイッチを押し、格納庫へ通信を入れる。

「準備はどうか？」

《こっちは問題ない。俺はいつでもいけるぜ》

《……こちらもです》

《準備完了》

モニターの中にはジェラルド、エリニス、そしてNo. Iが映っていた。

「そうか。頼む」

サリエルのハッチが解放され、三機のモビルスーツが姿を見せた。

一機はイレイズガンダムMk-III。

もう一機は改修されたブリアレオスの強化型。

GAT-07AE 『ブリアレオス・ゴライアス』

ブリアレオスの強化型改修機。

改良された『フォルテストラII』を纏い、防御力を増すと同時に各所の小型スラスターを増設した事で機動性も強化されている機体である。

そして最後の機体はイリアス。

しかもただのイリアスではなく、ブリアレオス同様改良を施された新型機だった。

GAT-06E 『イリアス・アキレス』

イリアスの強化型改修機。

ブリアレオス・ゴライアス同様改良された『フォルテストラII』を纏い、防御力を増すと同時に各所の小型スラスターを増設した事で機動性も強化、さらに間接部を強化し

無茶な機動にも対応できるような特殊機である。

出撃した三機のモビルスーツはそれぞれの目標に向かって分散、それぞれの戦場へと向かっていく。

「では予定通り、私がフリーダムの手をします」

『戦神』は俺がやりたかったが、命令じゃしようがない。俺が『魔神』をやる。で、エリニスは他の雑魚の掃除か。一番の貧乏くじだな」

「……関係ないです。命令であれば誰だろうと排除するだけですから」

淡々と答えるエリニスの肩を竦めるジエラル。

そんな二人を尻目にNo. Iは静かに闘志を燃やし、フットペダルを踏み込んだ。

「行きますよ」

「了解」

No. Iとジエラルと別れ、エリニスはアークエンジェルとミネルバの方へ向かう。

二隻は絶え間ない砲撃とモビルスーツからの攻撃に持ちこたえながら、徐々に後退しながら移動していた。

援護に現れたブリュンヒルデやランドグリーズがk駆けつけたのも大きいのだろう。攻勢が押しとどめられていた。

その姿を見たエリニスは今までに感じた事のない感情に支配されていた。

「何、これ」

アレらの戦艦を見ているだけで、激しい感情が浮かび上がってくる。

それは燃え上がるような何か。

エリニスの起点ともいうべきもの。

「私は、もしかすると……怒っている？」

いや、怒りではない。

そんな生易しいものでは、断じてない。

これは――

「……憎悪している？」

そう、憎悪だ。

憎しみだ。

あの戦艦に何かあるのか？

そんな戸惑いと共に燃え盛る憎悪の炎を感じながら反面氷のように冷たく暗く沈む

心を意識する。

エリニスは出来るだけ感情を押さえつけビームライフルのトリガーを引いた。

一直線に進んだ閃光は正確にミネルバの防衛にいたグフの腕を吹き飛ばす。

「死ぬ」

そのまま構えたビームサーベルが抵抗しようとしたグフより前に胴体を真つ二つに切り裂いた。

「やっぱり雑魚しかいないか、楽でいいけど」

ミネルバからの砲撃を回避しながら、さっさと仕事を済ます為にビームライフルを構えるとそこにレティシアのブリュンヒルデが飛び込んできた。

「やらせない」

「っ！っ！」

割り込んできたブリュンヒルデに何故か苛立ちを感じながら、ビームサーベルを叩きつける。

しかしその一撃をアンチビームシールドで捌いたブリュンヒルデは逆にブリアレオスに斬り返してきた。

「なんだ……お前は」

激しい稲光が散る中でエリニスの苛立ちは膨れ上がっていく。

「私は……知っている……お前を……」

不愉快さ、一向に消えない怒り。

それがこいつを見ていると増幅されていくのだ。

「何だ、何だ、何だ、何だアアア!!! お前はアアアアアアア!!!」

ブリュンヒルデを蹴り飛ばし、左手でビームクロウを放出すると一気果敢に突撃する。

「何、この敵!」

相対しているレイシアもまた猛攻を加えてくる敵の姿に戸惑いを覚えていた。

装甲越しでも伝わってくる圧倒的な殺気。

まるで血に飢えた獣のような、捨て身ともいえる猛攻。

「これは……ッ!? この感覚は——」

獣と相対していたレイシアに何か悪寒のようなものが走った。

これは今、目の前にいる相手ではない。

しかしレイシアにとって無視できない相手が確実に近づいてくるのが分かった。

「これは何?」

初めての感覚に戸惑いながらレイシアが視線を向けた先。

まだ視界には捉える事ができない程に離れた場所。

そこから近づいてくる一隻の戦艦。

テタルトス所属の戦艦クレオメデスが徐々に戦域へと近づいていた。

◇

三機のガンダムとの戦闘はフリーダムが加わった事により、互角の戦いに移行していた。

アレンとキラのコンビネーションが優れていた事もその要因に挙げられるだろう。

二人はヤキンドゥーエ戦役からずっと一緒の戦場を駆け抜けてきた。

互いの癖も動きも良く分かっている。

「フリーダムモドキ！」

「やらせない！」

エクリプスの一撃がフリーダムに攻撃を仕掛けようとしていたフォビドゥンと鏑迫り合い火花を散らす。

「邪魔を！ どきなさいよ！」

「じゃ、遠慮なく」

飛びのいたエクリプス。

その陰ではレールガンを迫り出したフリーダムが待ち構えていた。

「なっ」

虚を突かれたカーラは反応が遅れ、レールガンを避けられない。

直撃を受けたフォビドゥンは吹き飛ばされ地面へと叩きつけられてしまった。

「カーラ!? くそ、こいつらいきなり動きがよくなつて——ヤバッ!」

レイダーは急旋回から無理やり回避運動を取る。

エクリプスをけん制するつもりが逆に巧みな射撃によつてフリーダム攻撃範囲に誘導されていた事に気がついたからだ。

「それを待ってた!」

動きを読んでいたアレンはバズーカ砲を発射。

砲撃がレイダーに直撃し、カラミティに激突する。

「ぐあああ」

「ジルベール、何やってんだ!」

「すいません、姉御。……つて来る!」

「遅い!」

二機がバランスを崩した所に飛び込んだフリーダムが斬撃を放った。

体勢を崩したカラミティは避ける事もできず、手に持ったバズーカ砲諸共肩を深々と

斬り裂かれた。

「姉御!？」

「大尉!？」

「くっ、大した損傷じゃないんだから騒ぐな！　けど、どうやら時間切れみたいだね」

「えっ」

アルネーゼの言葉に二人も近づいてくる反応に気が付いた。

「ま、これも予定通りだ。フリーダムモドキの相手はあっちに任せて、私達は戦艦狩りに加わるよ！」

「くっ」

カーラは悔しそうにフリーダムの姿を見つめる。

「カーラ、これも任務だ。個人的感情は捨てな」

「……はい。分かっています」

カラミティの砲撃が地面を抉り、舞い上がった爆煙は三機を簡単に包み込んだ。

「なっ、退いていく?」

「このタイミングで——ッ、キラ！　新手だ!!」

退いていく三機のガンダムと入れ替わる形で今度は二機のモビルスーツが近づいてくる。

一機はウィーン前線基地で戦ったイレイズMk—III。

そしてもう一機はイリアスを改修したと思われる機体だった。

高速で近づいてくるイレイズMK―III。

寸分変わらず発射されたビームランチャーがエクリプスとフリーダムへと襲いかかる。

「来るー！」

「あの距離でこうまで正確に狙ってくるとは」

その正確な射撃に二人は舌を巻き、左右に飛び退いて、ビーム砲を回避する。

その隙にイレイズとイリアスは左右へ分散、体当たりで二機をそれぞれ反対方向へと吹き飛ばした。

「ぐううう!! このまま引き離す気か！」

「悪いが付き合ってもらうぞ、『魔神』！」

アレンは蹴りを入れてイレイズMK―IIIから距離を取ると、そこで近づいてくる戦艦の姿に気が付いた。

「まさか……テタルトスの『ディオネ級』!？」

戦場に現れたのはアムステルダムでも相対したアスラン達の母艦であるクレオメデスであった。

すでにアスランの指揮の下でモビルスーツが展開され、クレオメデスもアークエンジェルとミネルバへ攻撃を開始している。

「よりによってこのタイミングで現れるとは」

「おいおい、よそ見してて良いのかよ!」

アレンは振り下ろされた対艦刀を直前で受け止めると思わずスピーカーに怒鳴りつけた。

「邪魔だ!」

「仲間を助けたいなら、俺を倒して行け! 倒せればの話だがな!」

「なら押し通るだけだ!」

互いがビームサーベルを構え、高速で動き回りながら激突を繰り返す。

「やはり強い。でも、この動きは……」

「懐かしいと思わないか? 貴様とは何度もこうして戦った事があったな」

「何だと……」

ビームランチャーをシールドで受け止め、バズーカ砲を撃ち返しながらアレンの脳裏に一機のモビルスーツの姿が浮かび上がってきた。

そいつは紛れもなく強敵だった。

自分もキラも何度も追い詰められた。

だが——そいつは確実に打ち倒された筈なのだ。

「お前は……誰だ?」

「答えはもう知っているだろうが！」

イレイズの放った凄まじい突きがアンチビームシールドを貫通してエクリプスの脇腹を抉り、そのまま盾ごと斬り伏せてくる。

「チツ」

シールドを投棄し、ライフルを構え直す。

だが素早く発射体勢に入ったイレイズのビーム砲が右足を吹き飛ばした。

「ぐっ、このくらい！」

発射したライフルの一射がビームランチャーを破壊し、バズーカ砲がイレイズのビーム砲に直撃する。

「流石、『消滅の魔神』だ！　だが——」

「ッ!?!」

イレイズは破壊された武装を破棄。

重量を落として速度を上げ、盾を刺すようにエクリプスに叩きつけると地面に突き落とされた。

速度が乗っていた為、地面に激突した衝撃はアレンの体の芯まで伝わってくる。

「グハッ!?!」

「機体の反応が鈍いぞ！　そんな状態で俺と戦えると思っていたか！」

ジェラールはエクリップスの状態を正確に把握している。

もはや無闇にビームシールドを張る余裕すらエクリップスには残されていない。

「この好機は逃さん！」

ジェラールはビームサーベルを逆手にエクリップスのコックピットを狙って振り下ろす。

「舐めるな！」

アレンは思いっきりペダルを踏み込む。

スラスターの噴射で舞い上がった砂煙でジェラルルの視界を遮り、破壊されるのを覚悟で左腕を突き出した。

腕に突き刺さった光の刃。

ビームの刃が左腕を挟み耳を劈く警戒音が鳴り響く。

もはやエクリップスの左腕は使い物にはならないだろう。

それらすべてを無視し、右手でカウンター気味に振るったエツケザックスがイレイズの頭部を切り潰した。

「メインカメラが!？」

頭部が半分近く挟まれ、イレイズの視界が遮られる。

アレンはこの好機を見逃さない。

残った右手のビームシールドを刃上に変化させ、イレイズのコックピットへ向けて叩き込んだ。

「ハアア！」

それはイレイズにとっては致命的な一撃。

避けるにしても暇がなく、防御に回るには近づきすぎている。

だが、ここでジェラルドは第三の選択肢を取った。

すなわち回避でも、防御でもない、迎撃を選択したのである。

「まだだ!!」

脅威的な反応で左脚を振り上げ、ビームの刃に向けて蹴りを入れたのだ。

当然、脚部は見るも無残に破壊されるが、エクリップスの腕は外側へと弾き飛ばされた。勢いを殺さずに宙返りすると背中中のエールストライカーを切り離し、エクリップスにぶ

つけ、ビームライフルを構える。

「終わりだ、『魔神』!!」

「ッ!?!」

ライフルの銃口から発射されたビームがエールストライカーを砕く。

爆発と同時に立ち上る爆煙。

炎が周囲を薙ぎ、エクリップスもその中に包まれていった。



キラの眼前には改良されたと思われるイリアスがその推力を生かして動き回っていた。

縦横無尽に駆ける機体。

正確な射撃。

過剰ともいえる速度の中での機体制御。

明らかに隔絶された技量であり、並みのパイロットではなかった。

「速いー」

イリアスのサーベルが的確にフリーダム of 急所を狙って振るわれる。

斬撃をシールドで弾き飛ばし、こちらもまた斬り返した。

刃が空中で弾け、剣撃がシールドに滑らす度に稲光が発生する。

「このパイロット、尋常な腕じゃない」

背を向けた状態でありながらビームライフルも紙一重で回避。

即座に体勢を立て直しビームライフルショーティーで撃ち返してくる。

「ならー」

キラはレールガンで敵機を誘導。

投擲されたブーメランをビーム砲で吹き飛ばすと接近戦を挑む。

「やはり強い。データとは比べ物にならぬ程、遙かに手強い。なるほど、これが最高のコーディネイター。カース様の言う通りです」

サーベルの斬撃を捌きながらNo. Iは焦る事無く機体を操り冷静に戦況を分析する。

形勢はほぼ五分の状態。

いや、フリーダムがやや有利であろうか。

機体性能はイリアスの方が上であるにも関わらず、攻めきれないのはパイロットであるキラ・ヤマトの優れた技量故であろう。

「テタルトスも来た以上、時間を掛けては居られない。さっさと勝負を決めさせてもらう」

No. Iがコンソールを素早く操作すると、システムが起動する。

『I. S. system starting』

システム起動と同時に腰と肩、そして脚部の装甲がスライドしイリアスの形状が僅かに変化した。

先ほど以上に加速を上げ、フリーダムに肉薄する。

「さらに速度を上げる!？」

軌跡を描いたサーベルがフリーダムの装甲を抉り、針の穴を通すような正確な射撃が防御したシールドの上で弾けた。

「これは、この動きはまさか」

キラにも覚えは当然あった。

この動きの変化はSEEDによるもの。

いや、もしかするとI・S・システムかもしれないが。

どちらにせよこの相手が強敵である事実に変わりはない。

狙った射撃も見透かしたような反応で容易くかわされ、高速で入れ替わるように交錯する。

「なら僕もー」

このままではジリ貧だとキラはSEEDを発動させる決断を下す。

しかし――

「なっ!？」

戦闘に割り込む形で予想外の方向から撃ちかけられたビームをギリギリ回避。イリアスを警戒しながらライフルの銃口を向けた。

「あの機体は……」

フリーダムに銃口を向けていたのはアスランの搭乗するガーネットだった。

「フリーダム……キラか」

「アスラン」

かつての親友。

幼い頃の思い出が二人の脳裏に蘇る。

だが、それで揺らぐ二人ではない。

すでに彼らの道は違えている。

そんな事はすでに分かっているのだから。

「何処を見ているんです！」

「くっ」

キラはSEEDを発動し、イリアスを牽制しながら反撃に移る。

先ほどまでとは比べ物にならない動きで肉薄。

至近距離からのレールガンでイリアスのシールドを破壊、同時に蹴りを入れて吹き飛ばす。

その姿を鋭い視線で見つめながら、アスランは誰に聞かせるでもなくポツリと呟いた。

「強い……キラ、お前もまたアスト・サガミと同じ、決着を付けなくてはならない存在だ」

キラとアストによって何人の仲間が討たれたか。

無論、戦争だ。

お互い様である事は分かっている。

だから、これもアストと戦う事と同じ。

自分が抱えた暗い感情や過去にけじめをつける為に、前に進むために決着をつける。

「だから手加減はしない。行くぞ、キラ！」

アスランの決意と共にSEEDが弾けた。

イリアスを退けたフリーダムにガーネットの三連ビーム砲が迫る。

「くっ!?!」

驚異的な反応で回避したフリーダムにビームサーベルを振り下ろした。

「アスラン!!」

「俺は……お前を討つ!」

シールドで上段からの光刃を止めた、フリーダム。

しかしガーネットは手を緩めない。

同時にビームサーベルを蹴り上げる。

「当たらない！」

「まだまだ！」

光刃を宙返りで回避したフリーダム。

その回避先を読んでいたアスランはさらに追撃を掛ける。

「アスラン!!」

「キラア!!」

ガーネットの四本の刃がシールドで弾かれ、同時に振るわれるフリーダムのサーベルが空を切る。

常人では捉えられない速度で振るわれる光刃の軌跡。

激突する刃が発する光の中、キラは目の端で何かが飛んでくるのを捉えた。

「ブーメラン!?!」

それは蹴り落としたイリアスが放ったビームブーメランだった。

「のー！」

咄嗟に反応し、シールドで弾き飛ばす。

しかしその間に回り込んだイリアスから発射されたビーム砲がフリーダムの左翼を破壊した。

「ぐあああー！」

直撃を受けバランスを崩したフリーダム。

それはアスランにとって絶好の隙。

「ハアア!!」

袈裟懸けの刃がフリーダムの腹部を裂き、立て続けに放った蹴りが脚部を斬り捨てる。

その一撃によってフリーダムは下方へと落下していく。

「くうう」

歯を食いしぼり落下するキラの視界にはいつの間にかたどり着いていたバルト海が広がっていた。

「このオオオ!!」

残った右翼とスラストスターを使い、強制的に体勢を立て直す。

「おおおおお！」

キラのサーベルが突っ込んできたガーネットの右腕を斬り裂いた。

「ツ、流石だな、キラ! だが、俺も昔のようにお前達に遅れは取らない!!」

「僕だって負けられない!」

その時、キラはバルト海にたどり着いたアークエンジェルとミネルバの姿に目を見開

いた。

二隻はミュンヘンからの戦闘に加えサリエルの猛攻。

そこに加わったクレオメデスの攻撃によって満身創痍の状態に陥っている。

DESTROIと交戦しているラクスやルナマリアは離れた位置に。

レティシアやニーナもエースと思われる敵と交戦中でも援護に回れる状態では

ない。

そしてエクリプスはイレイズMk-IIIによって追い詰められていた。

「アストー！」

「だから余所見している余裕があるんですか？」

「ッ!?!」

周りに気を取られた隙にイリアスが投擲したステイレット投擲噴進対装甲貫入弾が

シールドに突き刺さり、ライフルと盾を粉碎する。

「ぐっ、まだ!!」

キラは咄嗟に残っているビーム砲でイリアスの右腕を消し飛ばす。

「ぐう」

「落ちろ！」

そして落下していくイリアスをビームサーベルで切り伏せ、海上へ突き落とす。

「そこだー！」

隙を伺っていたアスランはオートクレールを残った左腕で抜き、加速した。

キラはアスランの突進に気がつくが、もう遅い。

すでにオートクレールの攻撃圏内まで接近しているのだから。

「キラアアアアアアアア!!」

オートクレールの切っ先から伸びた光刃がフリーダム目掛けて直進する。

「アスラアアアアアア!!」

キラも二刀のサーベルをガーネットに向けて叩きつけた。

交錯する光刃がお互いの機体を裂く。

ガーネットは残った左腕と頭部を斬られ——

そしてフリーダムは下腹部に突き刺さったオートクレールと共に海中へと沈んでいった。

◇

ミュンヘンでの戦闘が終息して数時間。

市街から離れた場所には幾つかの残骸が転がっていた。

一際大きなソレは地球軍地上戦艦の面影を色濃く残している。

甲板らしきものは大きく抉られ、艦橋と思われる場所は無残に潰されていた。

佇むのは損傷しながらも健在な姿を保つ一つ目の機体。

その傍にはモビルスーツの破片が無数に転がり、まるで墓標のように地面には半ばから折られた対艦刀が突き刺さっていた。

第22話 蠢く思惑

ミュンヘンで起きた武力衝突、通称『ミュンヘン事変』は世界に大きな衝撃を与えた。だが、それ以上に衝撃を与えたのはテタルトス地球駐留軍から発表された内容の方だった。

それは今回の事件には中立同盟及びプラントが何らかの形で深く関わっていたのではないかというもの。

ある程度オブラートに包まれた言い方ではあったが、要するに『お前達がやったんだろう?』という疑いの声である。

無論、同盟側はそれに反論した。

戦闘中に得た情報を公開し、濡れ衣である事を主張。

双方の言い分は完全に食い違い、会談前よりも険悪な関係へと陥ってしまった。

これには同盟、プラント側、テタルトス側のリーダー的な存在が行方不明である事も理由として挙げられる。

このため、世間ではどちらの言い分が正しいのか論争が起き、根も葉もない噂が独り歩きしている状態にまで悪化していた。

◇

もはや連日、見慣れたニュースとして流れているミュンヘン事変の放送。

コメンテーターの論点のズレた的外れな指摘をシグルドのコックピットでカースは笑みを浮かべて眺めていた。

「カース様、申し訳ありません。新型機を破損してしまっただけでなく、目標を私の手で討ち果たす事もできず……さらにデストロイも結局は破壊され、回収できずじまいでした」

モニターの向こうでNo.1が鎮痛な面持ちで頭を下げた。

デストロイはインパルスとジャステイスによって大破に追い込まれてしまった。

序盤こそ弱点であつた近接戦に対応が加えられ、持ち前の圧倒的な火力によって二機を寄せ付けなかった。

しかしインパルスとジャステイスの高度な連携と同時に繰り出されたトリッキーな戦法によって撃墜寸前。

結局、鹵獲されぬように自爆装置が働き、インパルスとジャステイスを含め周囲にいたモビルスーツを薙ぎ払う事に成功した。

しかしそれでもNo. Iが任務、即ちフリーダム撃破を成す事ができなかつた事は事実だった。

「どんな処分でも受け入れる所存です」

「気にする必要はない、No. I。キラ・ヤマト相手に互角に戦っただけでも十分すぎるというものだ」

「……カース様」

送られてきた戦闘映像。

そこにはガーネットの一撃がフリーダムに突き刺さり、そのまま海中へと沈んでいく様子が映し出されている。

カースはその姿にニヤリと口元を歪めると、気落ちしているNo. Iを宥めるように優しく声色で囁いた。

「想定した以上の成果だった。むしろよくやってくれた」

そう、これはカースにとつて予想外の朗報と言つても良かった。

最初に言つておろが、キラ・ヤマトは死んでいない。

これはカースの勘。

それでも、生きているという確かな確信がある。

ならば何が朗報なのか？

それはキラ・ヤマトを落とした相手が彼、アスラン・ザラであった事だった。

「……これは君が思っている以上に重大な事だよ、アスラン。君はもう逃げられないのだから」

背筋が凍るような冷たい笑みを浮かべるカース。

そんな彼の様子を見つめながらNo. Iは次の報告を行う為にデータを転送する。

「カース様、他にもお耳に入れたい情報がございます。今回の件でブレイズ大佐周辺が慌ただしく、動いていると報告が上がってきています。それから未確認情報ですが、ミュンヘンから離脱した一団がアムステルダム方面へ向かったという報告が上がってきました」

「……ふむ。もう少しブレイズ大佐には大人しくしてもらいたい所だが、それよりも問題はミュンヘンから離脱した一団についてだな」

この一団にもしも各陣営のトップたちが混じっているとしたら、早急に手を打つ必要がある。

「……No. I、至急調査させろ」

「了解いたしました」

一礼したNo. Iの映像が消え、カースはニュースから聞こえてくる無責任なコメントーターの意見を聞き流しながら、送られてきたデータに目を通していく。

「こちらはNo.1に任せておけばいい。後は——」

カースは待機していた森からシグルドを飛び立たせると目的の場所へ向かった。できるだけ目立たず木々の僅か上を滑空しながら進んでいく。

そこには傷ついたモビルスーツが何機か鎮座しているのが見えた。

「フフ、休むのはまだ早い。君達には最後の役目が残っているのだから」

◇

ミュンヘンから帰還してきたモビルスーツが整列、戦艦の補修が行われているバルカナバート基地では奇妙な雰囲気に含まれていた。

何故なら修復を受けているディオネ級の隣に地球軍地上戦艦ハンニバル級が待機しているからだ。

今まで敵だった戦艦が基地内で堂々と補給を受けていれば誰だって違和感くらいもつだろう。

「何か変な感じですね。地球軍の戦艦が基地内にいるだなんて」

「ヘブンスベースを落とす時のザフトもそう思っただろうな」

若い整備兵の困惑したような声にリベルトは苦笑しながら肩を竦めた。

「しかし、大尉のアクティヴをここまで破壊するなんて、一体どんな相手だったんです？」

見上げた先には損傷したりベルトのジンII・アクティヴが立っていた。

片腕は半ばから断ち切られ、背中のスラスタウイングも破損、装甲もボロボロになっっている。

「強敵だよ」

リベルトは思い出すように自身の愛機をここまで破壊した相手の姿を思い起こす。



紅い翼を広げたデステイニーが弾丸のようにミュンヘンの空を駆ける。それに相対していたジンII・アクティヴは盾を斜めに構えて迎え撃った。

「ハアアアア!!」

リベルトはデステイニーの放つ斬撃の軌跡を見極めながら、シールドを使って受け流す。

「ッ!？」

衝撃が操縦桿越しにリベルトの手にしっかりと伝わり、しびれが走った。

凄まじい威力の一撃。

驚異としか言いようがなかった。

幾度となく振るわれる対艦刀の斬撃はシールドの上から強烈な衝撃が伝わってくる。

シールドとの戦いを振り返つてもデステイニーの斬撃は凄まじい。速度の

乗った強力な斬撃は、シールドごと叩き切つてしまうだろう。

「予想以上に重い。この一撃ならどんな重装甲なモビルスーツだろうと関係なく撃破されてしまうだろうな」

そこにシンの高い技量が加われば、攻撃を防ぐ事すら難しいだろう。

「アンタは何者なんだ！ 何でこの機体に拘る!？」

剣櫛を繰り出しながら以前の戦いで洩らした言葉の意味を問い詰めるシンにリベルトは皮肉めいた笑みだけを浮かべる。

「簡単な話、私はお前の同類だというだけの事だ。そして私自身がそれを疎ましく思っているだけさ」

「何だよ、それは！」

「自分で考えろ。それにそんな事よりもお前には私を討つ理由があるだろう」

「何だ?!？」

「セリス・ブラッスール、彼女を攫いプラントへ連れていったのは私だ」

「ッ!？」

リベルトの口から語られた意外な真実にシンは思わず絶句する。

「昔、月で大きな戦いがあったな。その騒ぎを利用して彼女を攫ったんだよ。銃で背後から彼女を撃つてな」

「なっ!?! お前がセリスを?!？」

「感謝してもらいたいな。私が『モルモット』になった彼女と君が出会うきっかけを作ったんだから」

その言葉にシンの怒りが爆発した。

「…………ふざけるなアアアアアア!!！」

瞬時にジンII・アクティヴの間に踏む込むと対艦刀を一閃する。

「ッ!?!」

ギリギリのタイミングで対艦刀の刃から避ける事に成功したが、スラストーウイングが斬り飛ばされてしまう。

「(こうもあつさり挑発に乗ってくれるとはな。……確かに凄まじい斬撃。反応速度もずば抜けている。デュランダルが選んだだけはあるな。だがこちらもすでに対策は用意してある。お前の戦闘データは以前の分からも合わせて十分すぎる程揃っていたんでな。まずは——」

上下から振るわれたアロンダイトを巧みに捌き、距離を取ったりベルトは実弾複合型高出力ビームライフルを構えるとビームから実弾へ切り替える。

「足を止めさせてもらおう」

発射された実弾がデステイニーに当たる直前で弾け飛び、細かい粒子上になって空中に広がった。

「散弾?!」

加速していたデステイニーは避ける暇すらなく、直撃を受けてしまった。

「ぐっとう」

デステイニーの全身に細かい爆発が行き渡り、目に見えて動きが鈍る。

そこを狙ったジンII・アクティヴのビームサーベルがデステイニーの胸部に傷を刻んだ。

「チツ、あの一瞬で機体を逸らすとはな。流星の反応速度だと言っておく。だがその反応が命取りだ!」

SEEDを発動させたシンの反応速度は並みではない。

たとえ奇襲であろうとも、軽々と捌いてみせるだろう。

リベルトはその反応を逆に利用した。

再びライフルを撃つと見せかけて、ビームキャノンを発射、同時にデステイニーとは

反対方向に切り離れた。

「ッ!？」

反応が良すぎるが故にシンの意識が切り離されたビームキャノンの方へと向かう。その間は一瞬。

だが、リベルトにはそれだけで十分だった。

「そっ!？」

実弾からビームに変更され、発射したビームライフルがデステイニーの左肩を撃ち抜いた。

「ぐああああ!？」

肩を抜かれた左腕は損傷の所為か全く動かなくなり、対艦刀から手が離れた。

「コックピットを狙ったんだがな。簡単には仕留められないか。だが、その腕でもう今までのように対艦刀は振れまい!？」

「舐めるなアアアア!!」

続けて発射されたビームライフル。

機体を絶妙なバランスを保ったまま水平に寝かせて避けたシンはビームランチャーを撃ち出した。

ビームの閃光がジンII・アクティヴを掠め、装甲を削り取っていく。

「くつ、やるな。システムの一部に異常が出ているか」

「うおおおお!!」

水平の姿勢から機体を回転させ体勢を無理やり立て直す。

デステイニーはそのまま正面へ加速。

右手だけでアロنداイトを叩きつける。

「そんなものでやれると思うのか!」

ジンII・アクティヴのビームサーベルの上段からの一撃がアロنداイトを半ばから叩き折り、そのままコックピットを狙って突きを放った。

「これ待ってた!」

シンはビーム刃がコックピットを貫く直前で機体を僅かに逸らし脇腹を掠めながらも腕を抱え込む。

「捕まえた。これでその面倒なライフルは使えないだろう! このまま!」

「調子に乗るな、この程度で!」

腰のあるビームサーベルをマウントしたまま前方に振り上げジンII・アクティヴの右腕を切断。

全く同じタイミングでリベルトが逆手で抜いたサーベルがデステイニーの左腕を背中の翼ごと切り捨てる。

相討ち。

傍から見ている分にはそう思ってもおかしくない結末。

少なくとも仕切り直しは必須であり、距離を取るものだと思っただけだ。

しかし――

「私の勝ちだ!」

リベルトはすぐさま動いていた。

損傷した事すら計算の内だと言わんばかりに。

「ッ!?!」

「遅い!」

翼を失いバランスを崩したデステイニーに蹴りを入れ、シールドの中に内蔵されたガンランチャーを至近距離から発射した。

数発ほど発射されたガンランチャーの直撃を受けたデステイニーは装甲の色を失い、そのまま地上へと落下していく。

入手していたデータと重ねたシミュレーション、頭で練り続けていた戦略。

それがリベルトを淀み無く動かし、シンの反応を上回る一瞬の間を手に入れさせたのだ。

「止めだ」

「シンー！」

リベルトの攻撃を阻むように地面に落下しかけたデステイニーを受けとめたのはセリスのランドグリーズだった。

大破したイレイズとデステイニーを守るように庇いつつ、ジンⅡ・アクティヴに銃口を向ける。

「リベルト大尉」

「久しぶりだな、セリス・ブラッスール中尉」

「貴方には言いたい事が山ほどありますけど、今は——」

ランドグリーズはビームライフルでけん制しながら、後退していく。

「懸命な判断だな。しかしどこへ逃げる？ 二つも荷物を抱えて、君達の母艦はすでに撃沈寸前だぞ」

振り返ればアイザックはテタルトスのモビルスーツに囲まれ、風前の灯だった。

甲板は挟られ、所々で爆発が起きている。

「アイザックが！」

「クアドラード大佐自ら指揮を執っている以上、万に一つはない。あの艦と護衛についていたモビルスーツは終わりだ」

「アイザック、フォルケンマイヤー少尉?!」

ファウストの操るH・アガスティアと相対していたベアトリーゼのイリアスはアイザック同様ボロボロの状態になっている。

たった一機で並み居る敵から母艦を守り、まして敵のエースとも戦っているのだから、それも無理のない事だった。

「離脱してー！」

「それは無理だ、大佐はそれを許しはしない」

降り注ぐミサイルがアイザックを包み込み、守るように立ちふさがったベアトリーゼのイリアスも巻き込まれるようにして爆発に晒される。

その隙に踏み込んだファウストが横薙ぎにビームサーベルを一閃。

イリアスを真つ二つに切り裂いた。

「フォルケンマイヤー少尉!! くっ」

もはやセリスにアイザックを助ける術はない。

悔しさを堪え唇を噛みながら、爆風から逃れるように距離を取る。しかし逃すまいとテタルトスのモビルスーツが攻撃を仕掛けてきた。

「くっ、このままじゃ逃げきれない」

どうにかシンンだけでも助けようとセリスが思考を巡らせ始めたその時、ランドグリーズを助ける一条の閃光が飛び込んできた。

「ドミニオン!？」

振り返った先にはドミニオンとザフト特務隊の機体であるイフリートとギアの姿があった。

イフリートが両手にベリサルダを構え、ギアがガトリング砲で突入を援護する。

「聞こえているか、ブラッスール中尉」

「オーデン大佐!」

「援護する、離脱しろ!　すでにアイザックにはすでに退艦命令を出した!」

「了解!」

二つのモビルスーツを抱え、ドミニオンへと駆けるランドグリーズ。

その様子を空中で見つめながらリベルトは状況を確認する。

「戦況は確定的だな。流石、ファウスト・クアドラード大佐と言うべきか、見事な手腕だ」

ジンII・アクティヴの損傷は戦闘継続不能なほどの損傷ではない。

しかし、目標であるデステイニーの破壊は完了した。

ならばこれ以上すべき仕事はない。

次の戦いを見据えながらリベルトは踵を返した。

.....



「大尉？」

以前の戦いを思い起こしていたリベルトは整備兵の声で我に返る。

「いや、済まない。前の戦いの事を思い出していた」

「この機体をこんな風にした敵の事ですか？」

「ああ」

デステイニーは確かに強敵だった。

この程度の損傷で済んだのも、事前の準備のお陰である。

「機体の修復を頼む。私はシミュレータールームにいるから、何かあれば呼んでくれ」

シンが生きているなら、再び戦場へ現れる。

次も同じように倒せるとは限らない。

だからこそリベルトは研鑽を怠るつもりは全くなかった。

「少しは休んでくださいよ、大尉」

整備兵の苦言に手を振って答えると基地に備え付けてあるシミュレータールームへ

足を向けた。



バルカナバート基地内が困惑した雰囲気にも包まれている中、当然注目の的であるハンニバル級にも微妙な空気が流れていた。

「姉御、なんで俺らこんな場所に居るんですかね」

格納庫で機体のチェックをしていたジルベールは針が刺すような視線に耐えかね、ため息をついた。

「馬鹿、命令だからに決まってるだろ」

「そういう事じゃなくて何するつもりなんですかねって事ですよ」

「そんな事はイスラフィールに直接聞くんだね」

不機嫌そうに鼻を鳴らすアルネーゼに思わずジルベールは身を竦ませる。

彼らがここバルカナバート基地に足を踏み入れたのは、会場から救出されたクレメンヌ・イスラフィールの要請によるものだった。

その理由までは聞かされていなかったが、どうせ碌な事ではあるまい。

「馬鹿な理由で部下を失うのは御免だけど」

部下の身を案じるようにアルネーゼがポツリとつぶやく。

そもそもヤキン・ドゥーエ戦役からユニウス戦役まで上層部があまりに身勝手かつ無能すぎた。

特にユニウス戦役は酷いもので、できれば思い出したくもない苦い思い出である。

「イスラフィールはそこまで無能じゃないから、大丈夫だとは思うけどね」

「そういえば、カーラの奴はどうしたんです？」

「あの子なら気分転換に基地内を見学してくるって行っちゃったよ」

「アイツはどんだけ強心臓なんだよ」

よくもまあ今まで敵対していた軍の基地を気分転換で見学しようなどと思に至れるのか、ジルベールには理解できなかった。

いきなり拘束、下手をすれば射殺される恐れすらあるというのに。

「まあ一応許可は取ったみたいだし、いきなり殺される事は無いだろうさ。興味があ
るならアンタも行って来たらどうだい？」

「遠慮しておきます」

「このヘタレが」

「俺は慎重なだけですよ、姉御」

これ以上、下手な事を言わないように口を閉じるとジルベールは作業の方に集中する事にした。



ヴィルフリートが目を覚ますとそこは覚えのない医務室のような場所だった。

鼻につく消毒液の臭いに僅かに眉を蹙めながら、ゆつくりと上体を起こすと、傍に控えていた医師が声をかけてきた。

「目が覚めましたか、クアドラード少佐」

「……」

「此処はバルカナバート基地の医務室ですよ。戦闘で負傷されたのですが……覚えていらつしやいますか？」

ヴィルフリートはベットの所で拳を固く握りしめながら、できるだけ感情を出さずに頷いた。

「……あれからどの程度の時間が経った？」

「約十日ですね。少佐が治療に当たられていた間に、実は結構な事件が起きまして――」

医師の口から語られたミュンヘン事変の話にヴィルフリートは特に驚いた様子もなく、「そうか」と呟く。

彼の胸中にはまるで大きな穴でも開いたかのような、虚無感が漂っていた。負けた。

完膚なきまでの敗北。

それだけならまだしも自分の機体を破壊され任された新造戦艦を中破させた。

挙句、改革派の追撃とアスラン達の任務の支援も碌にこなせず仕舞い。

しかもリスクのあるアムステルダム周辺で半ば強行した作戦も失敗したときている。

今頃、ファウストの側近どもはヴィルフリートをいい笑いでしているだろう。

医師の話によればファウストがミュンヘン事変を収めた英雄として見られているらしい。

しい。

ヴィルフリートへの風当たりはより強くなっているに違いない。

むしろ死んでくれていけば厄介ことも減っていたのにと吐き捨てているだろう。

「くっ」

さらに拳を強く握り、歯を食いしばる。

どれだけ悔しがろうとここまでの失態。

もはや汚名返上の機会は与えてもらえない。

怪我が治れば本国に強制送還か、戦場とは程遠いオルクス辺りに飛ばされるのはオチ

だ。

「……フフ、滑稽だな」

「少佐？」

「いや、何でもない。少し歩いてくる」

「ちよつと、無茶しないでくださいよ。怪我はまだ治ってないですよ！」

医師の制止を無視し、制服を引つ掴むと医務室を出てバルナカバート基地内を静かに歩きだした。

目的地などありはしない。

ただ徘徊するように彷徨うだけ。

「おい、見ろよ。クアドラード大佐の弟だ。怪我してたつて聞いたけど」

「ん、ああ。劣化品の弟の方ね。預けられた新造戦艦も損傷させた挙句に派手に返り討ちにあつたんだろ、情けないよあ」

「ホント。大佐の顔に泥を塗ったようなもんだぜ。よくおめおめと基地に帰還できたもんだよ」

「何で兄弟でああも出来が違うかねえ」

「全くな。大佐のような優秀さの欠片でも引き継いでたら、あんな風にはならなかったのになあ。大佐と比べて話にならないよな」

廊下ですれ違った口さがない兵士達の噂話がヴィルフリートの耳に入ってくる。

でも気にしない。

いつもの事だからだ。

拳をさらにきつく握り、外へと歩いていくと兵士達の訓練風景と立ち並ぶモビルスーツと戦艦の姿が見えた。

「あれは地球軍の……いや、俺には関係ないか」

ヴィルフリートに気が付いた兵士達の嘲笑にも憐みにも似た視線から逃れるように基地の端にあるベンチに座った。

空を見上げるとはいい天気で、空も綺麗に晴れ渡っている。

そんな綺麗な空を眺めていてもヴィルフリオの気は晴れなかった。

「……俺は……」

考えも纏まらずただ呆然と空を見上げている。

そこに意外にも声を掛けてきた人物がいた。

「ちよつと大丈夫？」

ゆつくり声が掛かった方へ首を動かすと、そこには地球軍の制服を纏った女が立っていた。

茶髪の髪を後ろで括ったポニーテールで年はヴィルフリートと同じか年下くらいだろうか。

何故、地球軍の制服を着た女が此処にいるのか気になったが、すぐにもどうでも良くなった。

「……俺に何か用か？」

「何か用かって、そんな死にそうな顔して何言ってるの？ 気分悪いなら誰か呼んでくるけど」

心配そうな顔で女がこちら覗き込んできた。

どうやら死にそうなほど酷い顔になっているらしい。

「……気にしなくていい。大したことじゃない。それに死んだようなじゃなく、俺は死人のようなものだ」

「え」

こうしてすべてを無くしてようやくやくわかる。

自分には何もなかったと。

いや、そもそも自分は何も持ってなどいなかった。

何もない空っぽ。

それがヴィルフリート・クアドラードであると今更ながらに気が付いた。

本当に滑稽な話だった。

「ん、何があったのか分からないけど、良かったら話してみない？ ここで一人悩ん

でいてもしようがないでしょ」

「は？ 何で赤の他人どころか初対面のお前に……」

「赤の他人だから話しやすい事もあるでしょ」

悪意もなくにこやかに笑う女にヴィルフリートも思わず苦笑してしまった。

その雰囲気は充てられたのか、気が付くとヴィルフリートは口を開いていた。

その生い立ち。

優秀すぎる兄。

比べられる日々。

無かった事にされた自分の存在。

だからこそ生きる為に努力し、勝利を求めてきた。

それこそ自分を守る術だと信じて。

しかし、それも――

「すべてが無駄だった。敗北した俺にはな……まあ、こんな所だ。ここに居たのも少し、考えを纏めたかったというか、どうしようかと思っただけだ」

話したお陰か少しすつきりとした気分になった。

無理をして出てきた手前、そろそろ医務室に戻った方がいいだろう。

礼を言つて立ち去ろうと思つたその時、話を聞いていた女が憤慨したように立ち上

がった。

「無駄じゃないから、それ！ ていうかアンタの周りつて碌な奴が居ないね！ まあアンタ自身にも問題はあつたんだろうけどさ、それにしてもだよ！」

ヴィルフリートは突如怒り出した女に思わず呆然としてしまった。

「何故、お前が怒る？」

「腹が立つんだからしょうがないでしょ！ とにかく無駄なんかじゃないから！」

「いや、だから、何でお前が怒るんだ？ 別に俺の事など何も知らないだろう」

「確かに何も知らないけど、アンタが死ぬ気で努力してきたことだけは分かる！」

話を聞いていただけの自分がヴィルフリオートの苦しみが分かるなどと、思い上がった事を言うつもりはない。

しかし、彼が努力を続けてきた事だけは痛々しいほど伝わってきた。

自分もまた人に自慢できるほど才能を有している訳ではなく、常に皆の足を引っ張るまいと努力を重ねてきた。

だからこそ、それが無駄だったなどというのは認められない。

「私だつて勝ちたいと思つた相手はある。アオイだつてそうだし、フリーダムモドキだつてそう。その為に努力もしてきたけど……結局は上手くいかなくて他の奴に掻つ攫われるし」

よほど悔しいのか女は何度も地面を踏みしめ、不服そうにそっぽを向く。女はよほど感情が豊かなのか、コロコロ表情が変わる。

ヴィルフリートにとって見ているだけで退屈しない。

「でもさ、だからってその努力全部が無駄なんて思いたくないし、思えない。だから私はこれからも諦めない。アンタだってこのまま諦める気なんてないんでしょ？」

「俺は……」

「じゃあ聞くけど、何でアンタそんなになるまで拳握りしめてるの？」

言われて初めて気が付いた。

いつの間にかヴィルフリートは血が滲むほど、強く拳を握っていた。

「悔しいんでしょ？ ならばは立ち上がるだけ、悩んでるだけ時間の無駄」

「いや、だが……」

「それにアンタはさつき自分で何もないとか言ってたけど、なら新しく一から始めればいいだけじゃない。昔のこだわりは捨ててね。それに気が付けただけでも『今までの事は無駄じゃなかった』、そうじゃない？」

「それは……」

そうなのだろうか。

言われてみればそうかもしれないが、体よく言いくるめられただけのような気もす

る。

「何というか、前向きだな」

「後ろ向きに考えたってしょうがないでしょ。後は覚悟を決めて前に進むのみ！」

「覚悟か……元から何もないんだ。失うものも無いならお前の言う通り、後はただ進むだけか」

なんだか悩んでいるのも馬鹿らしくなってきた。

確かに悩んでいても仕方がない。

「礼を言う。お前のお陰で少しは冷静になれた……その、ありがとう」

「少しでも悩みの解消になったなら、良かった」

そこでお互いに名前すら知らない事に初めて気が付いた。

「そう言えばまだ名前を名乗っていなかったな。俺はテタルトス地球駐留軍ヴィルフリート・クアドラード少佐だ」

「私は地球連合軍カーラ・アルマディオ少尉……つてしよ、少佐、殿でありましたか……申し訳ありません！」

顔を青くしながら敬礼するカーラにヴィルフリートは何も言わずに手で制した。

「気にしなくていい。むしろどつちが階級が上か分からないくらいだ。少尉、改めて君に感謝する、ありがとう」

「い、いえ」

「では」

ヴイルフリートはそのまま踵を返すとしっかりした足取りで基地に向かって歩き出す。

すべてはここから。

もう昔の自分を捨て、新たに前へと進む。

覚悟と決意をヴイルフリートは胸に刻みつけた。

それは戦場で相対する者達にとっての脅威が誕生した事を意味する。

後に『銀獅子』の異名で呼ばれる事になるエースパイロットはこの日に初めて自分の意思で歩き出した。



バルカナバート基地の指令室は一種の緊張感に包まれていた。

机を挟みソファアに座って対面しているのはテタルトス地球駐留軍指揮官ファウス・クアドラードと地球軍保守派の首魁クレメンズ・イスラフィールだった。

二人は重苦しい緊張感を伴いながらも、忌憚なく言葉を交わし合っている。

周囲から見たらハラハラするような場面ではあるが、二人の間に険悪な空気はなかった。

「というのが詳しい概要となる。どうかな、イスラフィール代表？ 貴方の目的とも合致していると思うが」

「異論はない。このまま進めよう」

話に区切りが見ついたのを見計らい傍に控えていた側近がファウストに耳打ちをする。「分かった。イスラフィール代表、準備が整ったようだ。これから世界に宣言を行い、同時に動く事になる」

「了解した。……だが一つだけ、クアドラード、お前に言っておくことがある」

「何か？」

「お前がただの道化にならないように願っている」

意味を図りかねたのか、ファウストは僅かに眉を顰めただけで何も答えない。

「どういう意味だ？」

「ただの忠告だ。それよりまずはどう動くのかだけでも教えておいてもらいたい。どこを狙うつもりだ？」

「こちらへ向けてくるイスラフィールの力強い視線を逸らす事無く受け止めたファウストは口元を僅かに歪める。」

「すでに知っているだろう。まず我々が狙うのは——ユーラシアだ」

第23話 儂い落葉のごとく

心地よいまどろみの中、馴染み深い声が聞こえてくる。

「では申し訳ありませんが此処は頼みますね、アスト」

「ああ、二人とも気をつけてな」

「はい。本当ならヤマト一尉の傍についていたのですが……」

「ニーナさん、貴方は任務に集中しても大丈夫ですよ。キラには私がついていますので」

「それは私のセリフです、ルティエンス大尉。ヤマト一尉の面倒を見るのは私の役目」
「……二人とも頼むから喧嘩は勘弁してくれ。正直、怖い。それより時間が無くなるぞ」

「分かりました。アスト、後でレティシアの所に顔を出してくださいね」

「ああ」

扉が閉まる音を聞きながら、僅かに感じる痛みと共に目を覚ます。

視線を横に向けると傍で険しい表情を浮かべながら何かを見ている友人の姿が見えた。

「……アスト、此処は？」

「目が覚めたか、キラ。此処はオスロ基地の医務室だよ。怪我は軽症らしいが、無理せず寝ていたほうがいい」

「大丈夫だよ、これくらい」

ベットから身を起こすと僅かに痛みが走るが、我慢できない程ではない。手に力を込めて、異常がない事を確認すると改めてアレンに向き合った。

「それであれから何日経った？ 戦闘は、皆はどうなったの？」

「あれから三日くらいだ。皆、一応無事だよ。……そうでないものもあるけどな」

キラの乗っていたフリーダムやエクリプスなどは完璧に大破。

母艦であるミネルバ、アークエンジェルも動けない程の損傷を負ってしまったという。

技師たちによれば沈まなかったのが奇跡的だとか。

軍も混乱状態で未だ警戒態勢のままらしい。

「レティシアは体調不良で今は休んでいるし、ラクスやニーナもさつきまで居たんだが交代で哨戒任務についたよ」

「そうか。テタルトスの動きは……」

「丁度いいな。テレビを見る。」(丁寧に教えてくれるらしい)

アレンは部屋に備え付けてあるテレビの方を向いた。

そこにはニュースと共にテタルトスの軍服を纏った人物が演説を行っていた。

《全世界の皆さん、私はテタルトス月面連邦国地球駐留軍指揮官ファウスト・クアドラード大佐であります。本日は皆さんにお知らせしたい事があり、この場を設けさせていただきました》

「彼は……」

間違いない。

以前に戦ったテタルトスの指揮官だ。

《先日起きたミュンヘン事変と呼ばれる武力衝突。戦いを止める為の会談があのような惨事へと変わり、無残な街の姿に開催に関わった国の人間として慚愧の念に堪えません》

《しかし世界は未だ混沌の只中にあり、ここで膝を屈してはそれこそあの惨状を生み出した者達の思うつぼです。そこで我々はこれらの状況を打開すべく一つの結論に達しました》

「結論？」

「大体予想できるけどな」

かつてギルバート・デュランダルが行った演説と同じように世界中の人間がテレビの画面に釘付けとなる。

《我々テタルトス地球駐留軍と地球連合軍は一度その枠組みを解体し一つに統合、新たに『地球圏統合軍』として生まれ変わる事を宣言いたします》

《その名の通り我々はこの地球のみならず、宇宙を含めたすべてを統合、統一を目指します。これは一つとなる事で世界から無用な争いを一層、平和な世界の実現に向けて邁進していく事を目的としたものです》

《皆さまの中にはかつての地球連合を思い浮かべる方もいらっしゃるでしょう。しかし我々は今かつての連合とは違う。ナチュラル、コーディネイターといった生まれで差別はしません。人類を一つとし新たなステージへと上がらせる事こそが我々の役割であると考えています》

《無論、異を唱える国々もある事でしょう。対話で解決できない場合残念ながら武力行使せざる得ない場合もあるかもしれない。しかしよく考えていただきたい。このまま争い続けていても、世界は疲弊していくだけで平和が来る事などあり得ないと。だからこそ我々はこの道を選択しました。そしてこれは亡き我が父の最後の願いでもあります》

「父親?」

何故、ここでファウストの父親の話が出てくるのか理解できなかった。

ここで父親の事を口にする以上は何らかの意図がある筈。

だが、クアドラードの名を持つ有名な人物に心当たりはない。

訝しむアレン達の疑問にファウストがすかさず答えを提示する。

その答えはアレン達のみならず、味方であるテタルトス陣営にも衝撃を与えた。

《私の本当の名はファウスト・ヴェルンシュタイン。ミュンヘン事変において平和の為に命を散らしたゲオルク・ヴェルンシュタインの息子であります》

「なっ!?!」

「ゲオルク・ヴェルンシュタインの息子!?!」

《私の父は心より平和を望み、誰より人類の行くべき道を案じておりました。ミュンヘンの会談に自ら応じたのもその志故です。私はその志を継ぎたい。皆さんが志を共に同じ道を歩まれる事を強く望みます》

演説が終わり、沈黙だけが世界を支配する。

だが、ニュースを流していたアナウンサーもいつもの外れな事を言うコメンテーターも、街頭で立ち尽くす人々もこれから世界を暗雲が包み込む事になるということだけは理解していた。

演説を聞き終えたアレンがテレビを消すとキラはポツリと呟く。

「地球圏統合軍か。彼らは初めからこうするつもりだったって事かな？」

「そうだな。連中の不可解な動きもそれである程度説明できる」

例の降下作戦で下した部隊を戦線に投入してこなかったのも、殆ど動きを見せなかったのも、今回の件に備えて戦力を温存したかったからだろう。

「くそ！ 結局後手に回るだけか！」

「あのデストロイも彼らが譲渡したと見るべきだね。上層部はどう動くつもりかな？」

「カガリ達の行方も掴めていないからな。今は残った議員達がまとめているが、統合軍の出方によっては不味い事になるかもしれない」

ファウスト・ヴェルンシュタインは世界を統合、統一すると言った。

ならば同盟に対しても強硬な姿勢を崩さないだろう。

「アスト、僕は宇宙に上がるよ」

「宇宙に？」

「うん。状況がこうも切迫している以上、例の機体がすぐにも必要だ。それに嫌な予感もするし」

「確かにな」

彼らが今回、周到に準備していた事はほぼ間違いない。

しかも念入りにだ。

となるとテタルトスと保守派の仲立ちをするような形で裏で動いていた奴がいると考えるのが自然だ。

さらに現状、戦力不足は否めない。

アレンやキラだけでなく、シンやアオイと言ったエースパイロットたちも機体を失っている。

新たな機体がすぐにも必要だ。

その時、アレンの懐にある端末から着信を知らせる音が鳴る。

端末を取り出した瞬間、思わぬ相手からの連絡に声を上げてしまった。

「なっ!! まさか——」

「アスト?」

「マユからだ」

アレンはキラにも聞こえるように通話のボタンを押す。

しかしそこから聞こえてきたのはマユの声ではなく、アレンが最も声を聴きたくない男のものだった。

《やあ、聞こえているか、カウンターくん》

「ヴェクト・グロンルンドか……何故、お前がマユの端末をもっている?」

《そう怖い声を出すなよ。こつちにも色々あるんだからさ。それより例の話、そろそろ答えが欲しいんだけどね》

「ニユースを見てないのか? 今はそれどころじゃない」

《そう言わずにさ。マユちゃんや確かカガリちゃんだよな、ヒビキの作ったコーデイネイターの片割れは。あ、あつちは手が加えられてないんだっけ。まあ、どうでもいいか。とにかく彼女達の行方が知りたいんだろ?》

「貴様……」

《取引だよ、前と同じさ》

アレンは端末を握り潰すのではないかと思うほど力を籠める。

「アスト」

「分かつてる」

無理やり感情を押しさえつけ、出来るだけ冷静に声を出す。

「……マユ達はアムステルダムに居るのか?」

《それは了承という事でいいのかな?》

「前に言った通りだ。ルナマリアを巻き込むもの以外なら——」

そう言いかけた所でいきなり医務室の扉が開く。

そこには不服そうな顔したルナマリアが立っていた。

何も言わずアレンに歩み寄り端末を素早く奪い取る。

「実験でも何でも付き合ってやるからさっさと場所を教えなさい！」

「お、おい」

「アレンは黙っててください」

《やあ、お嬢さん、君も居たのかい？ ま、了承してくれて良かったよ》

「いいからさっさと教えなさい」

《せつかちだねえ。じゃあデータ送っておくから確認してよ》

通話が切れると同時に端末にデータが送られてきた。

表示されている地図はアムステルダム市街地のものに間違いない。

「アレン、あの胡散臭い研究者の事、やっぱり自分だけで対処するつもりでしたね」

ジト目でこちらを睨んでくるルナマリアにアレンは思わず一步後ずさってしまった。

「うっ、そんな事はない。ここに居るキラやニーナにも協力してもらおうつもりだった」

「で、何で私に声かけないんですかね？ 私だって当事者ですし」

「いや、その、奴には出来るだけお前を関わらせたくなかった」

「……気持ち嬉しいですけど、少しは頼ってください！ アレンは前から一人で抱

え込みすぎなんですよ」

レティシア並みの説教が始まってしまった。

その様子を見たキラが苦笑しながらアレンの肩を叩く。

「まあまあ。でもアスト、彼女も言う事も間違つてないよ。そういう気遣いは君らしいけど」

「キラ、しかし奴の素性も含めてこの件は本当にヤバイ。しかも提示された内容は――」

「それも分かっている。どうなのかな、ルナマリアさん？ アストの言う事も間違つてない。この件は根が深い。成果が得られるまでにかかなりの時間が掛かると思う。危険が伴うし深入りすると君の人生自体台無しになる可能性も十分にある。それでも？」

「……勿論です」

真剣な顔で頷くルナマリアにアレンはどうしても確認しなければならぬ事を問いかけた。

「何故、そこまでするんだ、ルナマリア？ これは上からの任務じゃない。お前がそこまでする必要はないんだぞ」

「それはアレン達だって同じでしょ」

「俺には理由があるさ」

「私にだってあります」

「それは一体」

真剣な表情を浮かべていたルナマリアが一転した悪戯した子供のような無邪気な笑顔に浮かべる。

「私はアレンのパートナーですから」

◇

ファウスト・ヴェルンシュタインの演説から十日あまり。

ユーラシア連邦はかつてない程の緊張感に包まれていた。

軍は統合軍の侵攻に備える為、中心都市であるモスクワを守るように各基地が臨戦態勢に移行。

会議場へ集まったユーラシアの重鎮達は連日の協議を行っている。

今日もまた緊急召集によって会議場に駆けつけていた。

一様に表情が固く、真剣な目で中央に設置されたスクリーンを見つめている。

「以上がテタル、あ、いえ、地球圏統合軍から送られてきたメッセージとなります」

統合軍より送られてきたデータを読み上げた進行役の男性が若干の怯えを滲ませながら会場を見渡す。

すると正面に座っていた男が力任せに机を殴りつけた。

「ふざけるな！」

机を殴った男の近くにいた議員もそれにつられるように立ち上がった。

「何が統合軍だ！ かつての連合とは違うだ！ 奴らは結局何も変わっていない！」

「ええ。要するにこれは無条件降伏せよと言っているようなものですよ」

送られてきたメッセージに会場全体が怒号に包まれ、進行役の男性もあたふたと戸惑っている。

そんな一触即発の会場に水を差すように隅に座っていた議員の一人が口を開いた。

「しかし降伏する以外にはどうしようもないと思われませんが……」

「何だと！」

「統合軍の戦力は明らかにこちらを上回っています。最新鋭のモビルスーツも揃っていますし……質でも量でも我々に勝ち目はありません」

凶星を突かれ興奮しきりだった会場が一転して静まり返る。

事実、ユーラシアの戦力は統合軍に遠く及ばない。

主力として戦線に配備されているのは改良されているとはいえずで二年前の機体

であるウインダム。

最新鋭機の開発も行っているとはいえ、それも形になっていない状態である。

「あの男から提供された機体群の研究はどうなっているのだ？」

「解析、研究させていますが時間が足りません。それにその件もあるからこそ降伏すべきです。交渉する余地が残されている今のうちに」

「……やはりあの男は統合軍側の人間だったか」

「どうでしょうね。そう単純な話とも思えません……何にせよ我々は悪魔と取引をしてしまった。後戻りはできません」

その時、会場内にスーツ姿の秘書らしき男が会場内に駆け込んでくると軍人らしき怡幅の良い男に耳打ちする。

「な、何?！」

「どうされたのです?」

「ミュンヘン会談を襲撃した連中がこちらの勢力圏に逃げ込んできたらしい。それを追って統合軍の部隊が侵攻を開始したと」

◇

ユーラシア連邦の国境線に張り付く形で展開されていた統合軍の部隊。命令を受けた彼らは次々とモスクワ目がけて進軍を開始する。

名目上は逃げ込んだ襲撃者たちの追撃という風になつてはいるが、あくまで名目上の話。

統合軍がこれを機に一気にユーラシアを併合してしまおうという思惑は誰の目にも明らかであった。

しかしいかに戦力で上回つていようと、簡単に制圧して終わりとはならない。

ユーラシアを降伏させるためには途中に守りの為に建設されていた幾つかの軍事基地を落とさねばならないからだ。

そこで統合軍は軍を出来るだけ広域に展開させ、スモレンスク、サンクトペテルブルクなど複数の軍事基地を同時に攻略する作戦に出た。

その一番槍。

大きな障害として立ちふさがるクルスク前線基地に圧倒的な戦闘力で突撃するのは三機のガンダム。

ヴォルケイノ、ストリーム、シユトウルウムだった。

「ウインダムとかダガー1とか旧型ばかりだけど、結構数があるな」

「本当。でも私達の敵じゃないけどね」

「毎回言ってるだろう。油断するんじゃないよ、アンタ達！」

「了解！」

胸部のスキュラがダガーLを消し飛ばし、発射されたミサイルが敵陣形を崩す。

「ふん、今日は久しぶりに私も前線で暴れさせてもらおうかね」

アルネーゼが不敵に笑いコンソールを操作する。

ヴォルケイノに装備されていた武装がパージされ、腰から二刀の対艦刀が顔を出した。

「ジルベール、カーラ、援護しな！」

「了解、姉御！」

「分りました！」

レイダーの鉄球が敵機の胴を打ち砕き、フォビドウンが発射したフレスベルグの曲線を描いた火線がウインダムを破壊。

その隙を突いたカラミティが対艦刀を構えて突撃した。

「無駄死にしたくなければ退きな！」

器用に振るわれる二刀が容易く敵を斬り払い、激しい剣舞が敵モビルスーツを撃破する。

それを阻もうとした機体の攻撃はすべてフォビドウンによって防御され、レイダーの

鉄球の餌食となつて空中に消えた。

ユーラシアの部隊を圧倒していたのは三機のガンダムだけではない。

三機のガンダムとは別に基地へと進軍したディオネ級から出撃したのは銀色塗装されたジンⅡ・アクティヴ。

一早く戦場にたどり着いたジンⅡ・アクティヴは躊躇いなく激戦区へと斬り込んでいく。

その機体に搭乗していたのは再起したヴィルフリート・クアドラード少佐であった。

新たな機体であるジンⅡ・アクティヴを手足のように扱い、敵機にビームライフルを叩き込んでいく。

「祖国を守る為に命を賭けるか。見事な覚悟だ」

ヴィルフリートは旧式のモビルスーツでありながら一歩も引かない敵に対して称賛の言葉を贈る。

「俺には無かつたものを持つお前達を俺は心から尊敬する」

かつてのヴィルフリートは自分の為だけに戦っていた。

そこには覚悟もなく、守るものもない。

故にあつけなく敵に敗れ、地に落ちた。

しかしそれは前の話。

今はもう違う。

兄も血筋も関係ない。

愚かな自分の所為で命を散らした者たちの為。

自分を再起させてくれた少女の言葉に報いる為に。

「俺も全力でお前達を倒す！ それこそが俺が出来る唯一の返礼だ！」

発射されたビームの雨の中を全く臆することなく速度を上げつつビームサーベルを振り抜いた。

成す術なく切り裂かれたストライクダガーは空中で爆散する。

「全力で向かって来い！」

ヴィルフリートは両手で構えた刃を振るいながら、果敢に敵陣の中に突撃していった。

統合軍のエースパイロットたちが戦場を駆け、戦況を有利に運ぶ。

それでも粘り強く持ちこたえるのはユーラシア最後の意地か。

しかし物量の差はいかんともし難く、戦況は確実に統合軍側へと傾いていった。

そしてモスクワに最も近い、即ちユーラシアにとって最後の防衛線とも言えるクリモフスク軍事基地に一隻の戦艦が近づいていた。

アスラン率いるクレオメデスである。

「中佐、敵基地を確認しました」

「あれがユーラシア最後拠点、クリモフスク防衛基地か」
クリモフスク防衛基地。

ユーラシア連邦の中核であるモスクワを防衛する為に建設された軍事基地だ。
その規模は決して侮れるものではない。

「クレオメデス戦闘態勢に移行、主砲による牽制射撃の後、モビルスーツ発進！ 各所に通達！」

「了解！」

「後の指揮は任せます」

「ハッ！」

アスランはその場を副官に任せ格納庫へ降りるとそこでラディスともう一名の新人が待っていた。

「聞いていると思うが今回の作戦目的はクリモフスク基地の無力化だ。ユーラシアも後がない以上、死にもの狂いで来る。常に警戒を怠るな。それから君は初陣となる。無茶はしないようにな、ミレイア・ロスハイム」

「はい」

准尉の階級を与えられ新人のパイロットとして配属されたミレイアに声を掛けると

意外にも緊張していない様子で答えた。

パイロットスーツを着込み敬礼を返してくるミレイアの姿に苦々しい感情が僅かにせり上がってくる。

彼女はパイロットとして訓練を受け始めて一か月程度しか経っていない。

にも関わらず前線に配属されてきた事もアスランの気持ちに苛立させていたが、一番気にかかったのは彼女が自らの意思で強化処置を受けた事だった。

ラデイスと違い軽度のものらしい。

だが、アスランにとって強化処置というのは受け入れがたい嫌悪感があった。

だがそれは過ぎた感傷に過ぎないと、自分の中に飲み込む。

「戦場の空気を感じ取るだけでいいんだ。ラデイス、面倒を見てやれ」

「了解です」

やけに素直なラデイスに拍子抜けしながら自分の機体の下へ歩いていくと整備兵が走り寄ってきた。

「中佐、ガーネットの応急修理は出来てますけど……」

「何か問題でもあるのか？」

「いえ、ここ何度か大きな戦闘を繰り返し返した所為か、機体全体にガタがきてるんですよ。本格的なオーバーホールか、いつそ全面改修でもした方がいくらいです」

「そうか」

それも無理ない話だった。

戦闘した回数こそ少ないもののガーネットが相対してきた相手は紛れもない強敵ばかりだったのだから。

「できればあつちの新型機の方に搭乗する事をお勧めしますけど」

整備兵の視線の先には見たこともない新型機がモビルスーツハンガーに収められていた。

LF A-07 『バウ・アルゴル』

テタルトス最新型主力機。

テタルトスの高性能機であるH・アガスティアやシリウス・ラファールといった機体の戦闘データを参考に開発された機体。

量産機としては破格の性能を誇り、エースパイロットや指揮官クラスに配備され始めた新型モビルスーツである。

「アレの性能は折り紙付きですよ。量産機とは思えないくらいに高性能ですしね」

「いや、あれはランゲルト少佐に任せた方がいいだろう。俺はガーネットの方が性に合っている」

整備兵の肩をポンと叩き、ガーネットのコックピットへ乗り込むと先陣を切る形で戦

場へと飛び出した。

クリモフスク防衛基地ではすでにモビルスーツの展開は済んでいたらしく、迎撃体勢に入っていた。

「流石に黙って見ている筈もないか。全機、油断するな」

「了解!!」

先行するガーネットの後を追うようにラデイスのジンII・アクティヴとミレイアのローレスダガーIIが戦場を駆ける。

「中佐、速い。追いつけない」

「無理して追う必要はない。腹立たしいけど、中佐の腕は本物だからな。ミレイアは中佐の言う通り戦場に慣れるだけでいい。そのまま俺についてこい」

「り、了解」

ミレイアのローレスダガーを守りつつ、ラデイスのジンII・アクティヴが前に出る。

「邪魔だ、雑魚ども!!」

ビームサーベルを上段から振り下ろし、ウインダム頭部からコックピットまでを斬り潰し、側面から迫ってきた敵機をビームライフルで撃破した。

「凄い」

瞬時に二機の敵を落としたラデイスの腕に驚嘆しながら、ミレイアもまた負けじとラ

イフルを構えた。

「私だつて訓練を積んできたんだから、臆してどうするの!」

ウイングゴンバットのスラストターを吹かし、ビームを避けながらトリガーを引く。

「そっ!」

正確に敵モビルスーツのコックピット射貫き撃墜、さらにミサイルでダガーIを吹き飛ばした。

「やった! このまま!」

攻撃をかわしながら敵部隊に攻撃を加えていくミレイア。

しかし初陣故の油断か、背後に回ったウインダムが存在に気が付かない。

「ッ、ミレイア、後ろだ!」

「えっ、キヤアアア!」

気が緩んだ一瞬の隙を突き、回り込んだウインダムの一撃がフローレスダガーの片腕を吹き飛ばした。

「ミレイア!?! こいつ!!」

ミレイアを傷つけた敵に怒りの籠った視線を向けたラデイスは感情のまま突撃する。

「よくもミレイアを——ッ!?!」

しかしその前にウインダムは別方向からのビームによって撃破されてしまった。

ウインダムだけではない。

周りにいた敵機が次々と射貫かれていく。

「これはランゲルト少佐か」

ヴァルターの駆るバウ・アルゴルがビームライフルを構えつつ、周りの敵機を一掃すると二機に近づいてきた。

「二人共大丈夫ですか？」

「俺の方は問題ありません。ミレイアの方も……：損傷自体は軽微です。機体も爆発はしません」

「そうですね。ミレイア・ロスハイム准尉、もつと周りをよく見なさい。敵は常にこちらを狙っているのだと、意識して訓練通りにやれば大丈夫です」

「は、はい」

「グエラ少尉、彼女のサポートをしながら一度後退してください。大事なとはいえ、命取りになる可能性もあります」

「了解」

後退していく二機を守るように立ちはだかるヴァルターにウインダムの編隊が襲い掛かる。

「機体の慣らし運転には丁度いいかもしれませんがね」

操縦桿の握りなおし、フットペダルを踏み込むとバウをウィンダム部隊目がけて突撃させた。

「加速性問題なし。操作性も——」

撃ちかけられたビームを軽々とかわし、すれ違い様のビームサーベルで敵機をあつさりと斬り捨てる。

「うん、問題ありませんね。良い機体のようですね、バウは」

ヴァルターは機体の挙動に満足したように頷くと踊るような軽やかな動きで敵部隊を翻弄していく。

「ランゲルト少佐が上手くやってくれたようだな。あちらは任せておけばいいか」

敵を撃破しながらアスランが一直線に向かっていた場所はクリモフスク防衛基地の指令室だった。

そこを落とせばこの戦闘も終わりとなる。

「可能性は低いが同盟が出てくる事も考えられるからな。さつさと蹴りを付けさせてもらおう！」

ライフルでビーム砲台と道を阻むウィンダムを次々と撃墜。

指令室が目の前に迫った所に見慣れないモビルスーツが立ちはだかった。

「……ガンダムか」

特徴的な頭部は見間違えようもない。

アスランの前にいるのは『ハイペリオン』という名で呼ばれた機体である。

かつてユーラシア連邦が自国製モビルスーツ開発計画に基づき開発したものだ。

だが当時の大西洋連邦のダガー系主力とする事を決定した為にこの機体は僅かな数しか制作されなかった。

量産試作機も開発されたものの、それもあくまで少数に留まっている。

「ユーラシアがこんな機体を開発していたとはな」

ハイペリオンから発射されたビームキャノンがガーネットの肩を掠める。

アスランは後退しながらやり過ぎし、ライフルでけん制しながらシールドに内蔵された三連ビーム砲を発射する。

モビルスーツの装甲をいとも容易く貫通し得る威力の一撃。

しかし、ハイペリオンは腕から展開した光の膜で三連ビーム砲をあつさりと弾いて見せた。

「ビームシールド!? 光波防御体か……」

これがハイペリオン最大の特徴だった。

現在各陣営に普及しているビームシールドはこの機体に装備されたアルミューレ・リユミエールと呼ばれる防御シールドが原型となっている。

アスランもビームシールドの防御力の高さは十分に知っていた。

しかもこのパイロットは結構な腕前をもっているらしく、中々隙を見せないのも厄介だ。

「この動き……只者じゃない。ユーラシアのエースか」

アスランの放った射撃を紙一重で回避するハイペリオンのパイロットの動きは普通のパイロットのものとはかけ離れている。

「厄介なお前を先に倒させてもらおうぞ！」

ハイペリオンが落ちれば敵の士気を挫く事にもつながると判断したアスランは腰に装着された実剣オートクレールで斬りかかった。

一足飛びで懐に飛び込んだガーネットの一撃を再びビームシールドで受け止めるハイペリオン。

「この手応え、やるな」

何合かの打ち合いによって激しい稲光が二機を包む。

アスランはビームシールドにオートクレールの先端を押し付けたままビーム刃を発生させハイペリオンに向けて放出する。

至近距離から発生したビーム刃が突きのようにハイペリオンを吹き飛ばし、完全に体を崩した所にビームライフルと三連ビーム砲を発射した。

しかし機体全体を光波防御帯で覆ったハイペリオンには通じない。

「厄介な防御能力だな。しかしその機体はバッテリー機、長くは続かないだろう！」
その証拠にハイペリオンはすぐ様、シールドを展開していたギミックを格納した。

「悪いがやりようはいくらでもあるんだ！」

再びオートクレールで斬りかかったガーネットを迎え撃つハイペリオン。

「そこだー！」

斬撃をシールドで止めた瞬間を狙い脚部から放出したサーベルを蹴り上げる。

ハイペリオンを捉えた一撃は容易く右脚部を砕く。

それでもビームマシンガンで反撃してくる辺りやはり油断ならない。

「ハアアア!!」

マシンガンの射撃を投棄したシールドを囷にして避け、別方向から回り込むともう一本のオートクレールを振り抜いた。

二刀のオートクレールによる連続攻撃。

伸びた光刃がハイペリオンの腹部を裂き、もう一方の袈裟懸けの斬撃が左腕を斬り落とす。

「(っ)のまま——ツ!?!」

しかし敵もさるもの。

そう簡単にはやられないとばかりに背中から展開されたギミックが光波防御体をビームランスへと変えてガーネットへ突き出してくる。

ガーネットに対するカウンターとなった一撃。

それがアスランの眼前へと迫る。

「うおおおおお！」

同時にアスランのSEEDが弾けた。

スラストを絶妙に操作し、機体を沈みこませるとコックピットから外れ、ランスが頭部の半分を抉り取る。

瞬間、二機の距離はほぼゼロ。

すれ違う一瞬で突き出したオートクレールがハイペリオンの腹部へ深々と突き刺さる。

さらに振り返り様に放った斬撃が背中を深々と斬り裂いた。

「仕留めたか？」

モニターの映像が乱れ目視では上手く確認できない。

背中のスラストを破壊した事で地面に落下していったが、あれで倒せたかは不明だ。

しかし機体に致命傷を与えた事は間違いない、パイロットが生きていたとしても戦線

復帰は不可能だろう。

「よし、基地内に潜入して司令部を制圧しろ！」

残った敵を薙ぎ払いながら、突入部隊を援護する。

この数分後、突入部隊が司令部を制圧しクリモフスク防衛基地は陥落。

他の軍事基地も時同じくして次々と降伏し完全に戦う力を失ったユーラシア連邦は統合軍に降伏した。

第24話 天上の翼

統合軍によるユーラシア連邦侵攻。

この戦いの結果ユーラシアが陥落した事により世界のパワーバランスは大きく変化した。

全盛期よりも減退したとはいえ未だ強力な軍隊を率いる地球連合。

宇宙の大勢力の一翼を担うテタルトス月面連邦国が派遣した地球駐留軍。

それが一つになり誕生した地球圏統合軍。

そこにユーラシアの勢力を併合した事により、他の国からも無視できない強大な勢力になっていた。

未だに一兵卒間での地球軍、テタルトスとの確執は残ってはいるものの、それは時間が解決する問題であり、統合軍は概ね順調な滑り出しと言えた。

ユーラシアの戦力も取り込み（旧型ばかりで役に立たないという意見もある）、より精強となった統合軍は沸きに沸いていた。

そんな中、バルカナバート基地では作戦の功績称えた叙勲式が行われていた。

「先の戦闘ではご苦労だった。その功績を称え、勲章を授与する」

講堂の壇上に立つファウストの言葉に従い秘書官が戦闘で活躍したパイロットたちの胸元へ勲章を付けていく。

「そしてアスラン・ザラ。君を本日付けで大佐に任ずる。これからも頼むよ」

「……私は中佐を任じられて日が浅い。にも関わらず大佐に昇格ですか？」

「君の功績を考えれば当然だろう。降下作戦の成功、ゲオルク元指令の下した特務の達成、先の戦闘でのフリーダム撃破、さらにクリモフスク防衛基地の攻略。評価されるのは当たり前だよ。それとも不満かな？」

煽てるように告げるファウストに内心嫌悪感が湧き上がる。

それを表情には出さずアスランは頭を下げた。

「身に余る大役ですが、謹んで」

「期待しているよ、アスラン・ザラ大佐」

「ハッ！」

敬礼するアスランに満足そうな笑みを浮かべ、ファウストは講堂全体を見渡す。

「今後も諸君の奮起に期待する！」

「敬礼！」

司会の男の言葉に合わせ、全員が一斉に敬礼するとそこで叙勲式は終わり、そのまま立食パーティーへと移る。

政治家や官僚たちが参加するパーティーほど豪華とは言わないが軍人にしてみれば十分豪華な料理が幾つもテーブルに並べられている。

先ほどまでの厳粛な雰囲気とは違い和やかに士官達が料理を口にしながら雑談をかわす。

そんな中、アスランは所謂お偉方の挨拶回りに辟易していた。

立場上こうした政治向きの仕事からも逃れる事ができないのは分かっている。

だが、どうも性に合わない。

しかし今回は元地球軍側の面子と初顔合わせも含まれているのだから、逃げられる筈も無かった。

「浮かない顔ですね、ザラ大佐」

髪の毛を背中で束ねたヴァルターが飲み物を片手に近づいてきた。

「そういう貴方は場慣れしているようにも見えます、ランゲルト中佐」

ヴァルターもまた今回階級を一つ上げ、中佐へ昇進を果たしていた。

とはいえそれはヴァルターの実力があれば当然の事であり、むしろ昇進が遅かったとすら思えるほどだ。

「何か悩み事ですか？」

「いえ、あまりこういう場に慣れていないだけです、お気になさらず」

「義妹さんの事ですか？ 確かに心配するのは無理ない事ですが……それともフリーダム的事ですか」

相変わらず抜け目のないというか、人を見透かしてくる。

こういう彼女とよく似たところは本当に苦手だ。

確かにお偉方との挨拶で辟易していた事も事実だが、考えていたのは今ヴァルターが指摘してきた通り。

セレネはミュンヘンでの戦いで行方不明、つまりMIAとなっていた。

「……セレネの事であれば心配していませんよ。彼女は生きていますから。そしてキラも同じです」

「フリーダムは貴方が倒したのでしょう？」

「生きていますよ、キラは」

これは確信している事だ。

あの程度でキラが倒せるならば、とつくの昔に誰かが倒してしまっている。

「敵を信じているのですか？」

「信じているんじゃないなくて、知っているんです。それより貴方の方こそゲオルク・ヴェ

ルンシュタイン元指令の事はどうなのですか？」

ヴァルターがゲオルク・ヴェルンシュタインの腹心である事は周知の事実だ。

その彼が死んだにも関わらず彼女に動揺した様子はまるでなく、ある種の不気味さを醸し出していた。

「驚いてはいません。しかしだからといって何かが変わる訳じゃありません。私は今まで通りに職務を全うするだけです」

「何も感じていないと？」

「人は何時か死にます。早いか遅いか、それだけです。こんな時代ですから尚の事。まあそこに何を残せたか、やり遂げられたかというのもあります……そういう意味ではヴェルンシュタイン元指令は十分に残せたのでは？ 立派なご子息も居る事ですしね」

言っている事は理解できる。

彼女らしい意見であると納得もできた。

しかし同時にそれが全く信用できないとも思った。

彼女の言動が空々しく感じるのには穿った見方ともいえるが、信用もできなかつたのだ。

それでもどこか儚く見えたのはアスランが感傷的になつていたからかもしれない。

「お話し中失礼します、ザラ大佐」

「ん、ラデイスにミレイア・ロスハイム准尉か」

声を掛けてきたのは無事初陣を終えたミレイアと中尉に昇進したラデイスだった。

「大佐、昇進おめでとうございます」

「ああ、お前もなラデイス・グエラ中尉。責任も一段と重くなる覚悟はしておけ」

「ハッ！」

そして隣に立つミレイアに声を掛けた。

「ミレイア准尉、初陣ご苦労だった。体調はどうかかな？」

「はい、私は大丈夫です！ ラデイス中尉も居ましたし、ランゲルト中佐も助けてくれましたから！」

「そうか」

「それにしても大佐は凄いですね！ あそこまでの戦果を出しただけでなく、あのフリーダムを倒すだなんて！」

「フリーダムを、知っているのか？」

「勿論ですよ。アスト・サガミと並ぶ最初の変革者。『SEED因子』を持つ白い戦神と呼ばれたパイロットキラ・ヤマトでしょ！」

興奮気味に語るミレイア。

そういえば彼女は熱心なSEED思想の信奉者だった。

結構な資料も読み漁っていたようだし、キラ達の事を知っていてもおかしくない。

「凄くはない。確かにフリーダムは落としたが、パイロットはまだ生きているだろう。それに俺以上に戦果を挙げている人もいる」

アスランは会場の端にいる男を見た。

壁にもたれ掛かり傍で一人の少女と一緒にグラスを傾けていたのはヴィルフリートだった。

彼こそ今回の戦場でアスラン以上に戦果を挙げた人物である。

話によれば獅子奮迅の活躍で敵を圧倒していたらしい。

「そういえば彼、ずいぶん余裕が出てきましたね」

「ええ。前はそれこそ抜き身のナイフみたいに近寄りがたかったですが、今はそれもない」

何があつたのかは分からないが、彼に心境の変化があつたのだろう。

それが彼を変化させたなら、良い事だと思う。

「そんな事ありません。大佐は凄いですから自信をもってください！」

「ありがとう、ミレイア。これからの任務も危険が伴うだろうが、無茶はしないように」

な。ラデイス、彼女を守ってやれ」

「了解です……アンタに言われるまでもないさ」

ラデイスの呟きに内心ため息をつきながら、聞こえないふりをするとアスランはパーティーの中心にいるファウストの方へ視線を向けた。

一見、士官や高官たちと和やかな雰囲気では話をしていない。

しかしその目は和やかな雰囲気からは程遠い、冷たい目をしていて。

「……どう動く気が、ファウスト・ヴェルンシュタイン。いや、考えるまでもないか」

「大佐、次の任務は決まっていますか？」

「……詳しくはまだ聞いていない。だがどこで戦う事になるかは予想出来る」

「それは、何処ですか？」

「これらからの主戦場は宇宙になる。すでにヴェルンシュタイン司令官は宇宙で部隊を動かしているという話だからな」

その中でアスランは決着を付ける事になるだろう。

かつての友と。

想いを寄せた女性と。

そして倒すべき宿敵と。

「……レグルスの完成を急がせる必要があるな」

回収した例のデータの解析も終わっている頃だ。
決着をつける時はそう遠くないとアスランは拳を握りしめた。

◇

立食パーティーは時間が進むにつれて緊張感は薄れ、時折笑い声さえ講堂外に漏れ聞こえてくる。

そんなパーティー会場を少し離れた位置で仮面の男カーズが眺めていた。

「……内心未だに敵意と疑念を抱えながら良くやるものだな。それともあれがファウスト・ヴェルンシュタイン殿のカリスマか」

手に持ったグラスを傾け飲み物を呷っているとNo. Iが足早に歩み寄ってきた。

「カーズ様、例の件ですが確認が取れました。やはり無事でした」

「場所は？」

「アムステルダムです」

「戦闘禁止区域か。No. I、連中の位置は確認できるか？」

「調査中ですが……以前テタルトスが行った特務の所為か、同盟、ザフトの目が厳しくなっていますので調査は難航するかと」

「ふむ。仕方ないか。一応調査は続行しろ。こちらでも情報収集くらいは行っておこう」

カースが端末を取り出すとNo.1は珍しく僅かに嫌な表情を浮かべた。

「そんなに嫌いか？」

「……あの男を好きになれるような人物など、それこそ稀かと」

「フ、確かに」

カースは口元に笑みを浮かべながら、目的の男を端末に呼び出した。

◇

オスロ基地にある医務室のベッドで眠っていたレティシアは酷い倦怠感を感じながらゆっくりと身を起こした。

「ハア、最近本当に調子が悪い。……まるで何かに生气でも吸い取られたみたい」

あのシリウスのパイロットに活力でも奪い取られたのだろうか。

馬鹿馬鹿しいオカルトチックな事を考えていると医務室にラクスとセリスが入ってきた。

「教官、起きて大丈夫なんですか？」

「ありがとう、セリス。疲れがたまっているんでしょうね、少し休めば良くなります」
「無理してはいけませんよ、レティシア。最近はずっとそうですし、精密検査を受けた方が良いのでは？」

「心配しすぎです、ラクス。この情勢ではそんな事言ってもらえません。いつ統合軍が動き出すとも限らないのですから」

氣遣ってくれる義妹に自然と笑みが浮かぶ。

ラクスとは昔からの付き合いだから無理しても丸わかりだろう。

だが今はそんな事は言っていられない。

丁度聞きたかった事があったレティシアは話題を逸らすために別の話を振った。

「そういえばアスト君は何処に行つたのです？ 任務だとか言っていましたけど」
昨夜様子を見に来たアストがそんな事を言っていた。

しかしその雰囲気妙にピリピリしていたというか、イライラしていたので気になったのだ。

「アストはドミニオンと共にアムステルダムへ向かいました。詳しい概要は私も聞いていませんけど」

「アムステルダム……」

そういえばそこでヴィクトリアという名前の女性と会ったとか言っていた。

レテイシアと非常に似通っていたとも。

「まさか……あのシリウスのパイロットが」

「レテイシア、私もあのシリウスとは交戦した事がありますが……」

「私も交戦しました。教官の戦い方に、その」

セリスもラクスも言葉を濁したが、あのシリウスの戦い方はレテイシアと非常に似通っていた。

機体制御。

ポジシヨニング。

高い精度を誇る狙撃を可能にした高度な空間認識力。

仮にレテイシアがあのだのシリウスに乗っていたら、ああやって戦うだろうと簡単に想像できるくらいには似ていたのだ。

そしてもう一つ。

全身を駆け巡った感覚。

まるで鏡の中の自分が目の前にいるかのような――

「どうやら私と無関係とはとても言い切れないみたいですね」

「教官、あのパイロットは一体……」

「それは私にもわからない。……それよりセリス、シン君たちの方は大丈夫なんです

か？」

「ええ、怪我也軽症です。ミナト少尉も怪我は大した事ありませんでした。でもアイザックやフォルケンマイヤー少尉の事では気を落ちしていましたけど」

アイザックは沈んだとはいえナタルの機転のお陰か、乗員の大半は脱出に成功した。しかしベアトリーゼを含めた何人かは帰らぬ人となった。

苦楽を共にした仲間が逝つたのだ。

しかも自分が戦闘中にやられている間に。

アオイでなくともシヨックだろう。

「でもシンがついてますから大丈夫ですよ。あの二人、変に仲が良いんですよ。ちよつと嫉妬しちゃうくらいです」

「そう」

「レテイシア、私達も一度宇宙へ上がろうと思つています。キラは新しい機体の調整する為、すでに宇宙へ向かいましたし」

「キラ君が」

そこまで事態は切迫しているのだと改めて痛感させられる。

やはりのんびりベットで横になっている訳にはいかない。

レテイシアは未だに残る倦怠感を押し殺しベットから起き上がった。



統合軍の誕生は戦闘禁止区域に指定されている都市アムステルダムでも少なくない影響をもたらしていた。

治安維持の為に派遣されていたテタルトス軍と統合軍が合流し、それを警戒した同盟とザフトも連携を密にする。

それがさらなる緊張をもたらし、都市全体が否応なくピリピリした雰囲気に含まれていた。

そんな中、アレン達『グラオ・イーリス』はドミニオンを母艦としアムステルダムに到着していた。

「……前来た時より、明らかに空気悪いですよね」

「ああ。流石に戦闘にはならないだろうが、余計なもめ事は絶対に起こすなよ」

「分つてますよ」

「それでセイファート。アスカ達の居場所は分かっているのか？」

ナタルが胡散臭げに聞いてくる。

彼女にはある程度の事情は話してあるが、そんな男からの情報を鵜呑みにはできない

ようだ。

慎重な彼女らしいと言える。

「ええ。ご丁寧な場所までデータで送ってきてますからね」

「だが罠である可能性もあるんだろう。お前達だけで行くのは危険すぎる」

「でも、今、部隊単位で踏む込む訳には行かないでしょう？」

ただでさえアムステルダム緊張が高まっている以上、迂闊な事はできないのが現状だ。

統合軍側もこちらの動向は気にしている筈だからだ。

「統合軍側には出来るだけこちらの目的を察せられないようにしたいですし」

「分かった。何か起こった場合はすぐに連絡をよこせ。こちらでも何かしら対応を取る」

「お願いします。行くぞ、ルナマリア」

「了解」

ヴェクトの下へ向かうのはアレンとルナマリアのみ。

一応、かつらなどで変装し軍人であるとはバレないようにしていく。

何時でも援護可能なように数人は一般観光客に混じる形ですでに市街へと出ていた。

アレンは帽子、ルナマリアは長髪のかつらで変装。

服装は目立たないよう観光客風を装った格好に着替えると市街へ足を向けた。

「相変わらず人ごみ凄いですね」

「ああ。もしかすると前より人は多いかもしれないな」

これもあの宣言の影響があるのだろう。

戦闘に巻き込まれる可能性のある国にいるより、戦闘禁止区域であるアムステルダムに居た方が安全だと判断したのだ。

溢れる人も観光光というより荷物を抱えた避難民の方が多く見える。

「それよりルナマリア、何で腕を組む必要があるんだ？」

「この人ごみではぐれる訳には行かないじゃないですか」

「ぐっ」

確かにそうだが、その、くつつきすぎて胸が腕に当たっているというか。

柔らかい感触が伝わって色々困る。

「どうしたんです？」

「……いや、何でもない」

余計な事は考えず、出来るだけ無心になりながら端末に記載された場所へとたどり着いた。

「此処って前に来たバーですよね？」

「ああ。とにかく入るぞ」

アレン達が入ると前に案内してくれた店員が寄ってきて、店の奥へ案内された。「こちらです」

案内された部屋を開けると個室のような形になっており、中央に地下へ続く階段が見えていた。

「階段を降りて真つすぐ進んだ先でグロンルド様がお持ちです。それからこれを」
店員に渡されたのは何かしらの暗証番号が記入された紙とカードキーだった。

「……ありがとう」

どうやら此処もただのバーなどではないようだ。

ルナマリアと顔を見合わせ、頷き返す。

地下に降りると薄暗い明かりで照らされた空間にたどり着いた。

大人が数人集まっても余裕で歩けるくらいの広さで、真つすぐに続く道が見える。

全体像は、はつきり分らないが通路自体はしっかりと作りになっており、簡単に崩落しないようになっていようだ。

「こんなものどうやって用意したのかしら」

「さあな。だが益々この件が厄介なものだつて改めて分かったよ」

警戒を怠らずゆっくり通路を進んでいくと大きな扉が見えてくる。

その時、アレンは覚えのある感覚を感じ取った。

「この感覚は」

「どうしたんです?」

「……いや、なんでもない。それよりもここのようなだ」

「カードと暗証番号を入力しないと開かないみたいですね」

「さっきのか」

扉の左側に設置された端末に暗証番号を入力。

カードキーを通すとピーという音と共に扉がゆつくりと開いた。

中は何かの研究施設を思わせる特殊な機材が散乱しており、まるでメンデルを思わせる光景が広がっていた。

「ようこそ、カウンターくん。ちょっと遅かったなあ」

白衣を着たヴェクトが奥の方から歩いてくる。

相変わらず身だしなみには頓着がないのか、白衣を着ている他は以前と同じようにだらしない姿。

しかしその目は変わらず無機質なものを見るかのように冷たい。やはりこいつにレティシアやルナマリア達を関わらせたくない。

「ヴェクト・グロンルンド。マユ達はどこだ?」

「そう焦るなよ。まあいいや、こっち」

隣の部屋に案内されると何基かのポッドが並んでおりその中の一つにマユの姿があつた。

「マユ!?!」

「安心しなよ。今は治療ポッドに入っているだけだ。ただ銃撃されて時間が立ちすぎたのか、中々危険な状態から脱せないけどね」

「助かるのか?」

「それも君次第だよ、カウンターくん」

マユの事すら交渉材料に使う気らしい。

アレンは本気でヴェクトに対する殺意を抱きながら、怒鳴り声を上げた。

「実験なら協力してやると言った筈だろうが!」

「冗談だよ、冗談。安心しなよ、君からの返事をもらった後にちゃんと処置しておいたから」

「本当だろうか?」

「ああ勿論だよ。ちゃんと処置は済ませておいたさ。を私が信じられないかな?」
当たり前だという言葉を必死に飲み込む。

「それで、どうしてマユがここに居る? 何があつた?」

「それはお仲間に聞いたらどうだい」

さらに別の部屋に案内される。

そこではいくつかのベットが並び、包帯を巻かれた怪我人が寝かされている。

そこに見知った顔が幾つか見えた。

「アスト!?!」

「アレンにルナマリアか!」

「ハイネ、カガリ達。それにやっぱりレイか」

怪我人の側にはカガリやハイネ、レイ達がいた。

「何でレイがいるの?」

確かに正直、訳の分からない組み合わせである。

「無事で良かった。しかし一体何があったんだ?」

「私たちも色々聞きたい」

アレン達はお互いの無事を確認し合うと早速情報交換を行う事にした。

「という訳で俺達はアムステルダムに逃れてきたって訳だ」

「なるほどな」

会場で襲撃を受けたハイネ達は怪我人を連れ、救出に来たテタルトスの士官であるセ

レネ・デイノ中尉と合流。

ミュンヘンから脱出を図った。

どうにか見つからずにアムステルダムまでたどり着いたまでは良かったが、怪我人の中には一刻を争う人間もいた。

しかし駐留している軍と合流すれば、テタルトス軍や連合軍にも自分達の存在が露見してしまう。

今は何処に敵がいるか分からない状態。

ハインネ達はテタルトス停戦派の議員達を確実に守る為にはギリギリまでその存在を隠匿すべきであると判断した。

まずはレヴァン議長やカガリの伝手を使ってアムステルダム市長と連絡を取った。

そして怪我人の為に秘密裏に医者を紹介してもらい、同時に今まで匿ってもらっていたという事らしい。

何故、ヴェクトなのかという疑問はあるが、奴はこの都市では医者としてそれなりに有名らしい。

勿論知られている名は偽名のようなが。

「で、外はどうなんだ？ こっちはニュースで入ってくる情報くらいしか知らなく
な」

「状況は緊迫している。ユーラシアが落ちて以来、大規模戦闘は起きていないが、何時

統合軍がスカンジナビアやジブラルタルに攻めてきてもおかしくない」

「……いえ、それはないでしょう」

ハイネとの会話に割り込む形で入ってきたのはベットから起き上がったアルノルト・ヴェルンシュタイン議員だった。

「アルノルト議員、無茶をしては」

「私は大丈夫です。今の現状を聞いたらのんびり寝て居る暇はありませんよ」

傍で水を代えていたアイラをやりわりと手で制すとゆつくりと立ち上がりこちらに歩いてくる。

彼はテタルトスの議員でもあり、ファウスト・ヴェルンシュタインとも血のつながりを持っている兄弟だ。

アレン達とは別の視点で意見があるのかもしれない。

「アルノルト議員、先ほどのはどういう意味ですか？」

「言葉通りです。今すぐに統合軍が地上の同盟やザフトに攻撃を仕掛ける事は無いと思います」

「その根拠は？」

「足場固めが出来ていないからですよ。正確に言うなら月のですが。ファウスト・ヴェルンシュタインは地上では周到に準備を進めていたのでしょう。しかし月は違う。

ヴァリス大佐がそれを許さない。だから彼はまず宇宙での足場を固めようとする筈です。月本国と交渉を進める為に」

アルノルトの話ではファウストは出来るだけ月本国とは敵対関係にはなりたくないという。

本国であるというのもそうだが、奴らの目的である統一には月本国の戦力が必須だかららしい。

「おそらくその為の交渉役としてアスラン・ザラを抱き込もうとしているのでしょうか。彼は本国の兵士たちからの信頼も厚く、ヴァリス大佐達とも交友関係がある。彼が傍に控えているだけでも月の印象はまるで違うでしょうからね」

「なるほど。では先に地上を攻めるといふ可能性はないのですか？」

「可能性が全くないとは言いませんが、同盟、ザフト、改革派の戦力は侮れない。例え勝つたとしても相当の損害を統合軍は被る。そうなった時、今度は月本国が絶対に黙っていません」

ユリウスなら確かにそんな絶好の隙を見逃したりはしない。

ファウスト・ヴェルンシユタインもそれを理解しているからこそ、ユリウスに隙を見せないように動いている。

月本国と抗する戦力を手に入れてから交渉しようとしているのも、ユリウスを警戒し

ている為だろう。

「だけどな、ユリウス・ヴァリス自体というかテタルトスの本国が統合軍に同調するって事はないのか？」

「それは無い。少なくとも大佐はファウスト・ヴェルンシユタインに同調はしない」
レイの言う通り、アレンも同意見だった。

昔、ユリウスは未来を求めていると語っていた。

だが統合軍のやり方はかつての連合のような強引さとファウスト自身のエゴが垣間見える。

そんなやり方には従わないだろう。

「あの、私達を月本国へ連れて行っていただけませんか？」

「月へ？」

「はい。おそらく今回の事態を受けて議会は戦争継続派が主権を握って居る筈。今は統合軍が誕生した事でその対処に迫られているでしょう。ですが時間が経てば月本国でも統合軍との協調路線を推進する者たちが現れる可能性もあります。そうなればユリウス大佐がいくら軍を抑えていても……」

「そうなれば同盟は完全に追い詰められる。」

「その前に我々が戻り今回の件を詳細を話せば少なくとも月本国との戦争も終わり、統合軍を牽制する事にもつながります」

「上手くいけば統合軍を瓦解させる事もできるか」

「そこまで上手くいくかは分からないが正面からぶつかり合うよりは犠牲も少なく、戦争も早期終結させられる可能性は高い。」

「しかし問題もあるのではないのでしょうか？」

問題を指摘したのは黙って話を聞いていたセレネ・デイノ中尉だった。

彼女のアレシスを見る目が厳しめなのは気のせいではないだろう。

だがそれには触れずに聞き返した。

「問題とは？」

「月本国までどうやってたどり着くかという事です。ユリウス大佐はどんな理由があらうとも月本国へ誰も近づけない」

「統合軍も動いているのだから当然か」

「はい。その統合軍も私達が月に近づくと知れば阻止しようとする筈です」

「ユリウス達に感づかれないように月に近づくのは無理か？」

『イクシオン』や『オルクス』の防衛圏内に入れば確実に気が付かれます」

月の表に存在する軍事ステーション『イクシオン』と裏側にある『オルクス』によつ

て構築された防衛網に隙はない。

ミラーージュ・コロイド対策に近辺には機雷も設置されているようで、簡単には行かないようだ。

「行けるよ、月。テタルトスの防衛網には意図的に作った穴があるからね」

何時から話を聞いていたのかヴェクトがいつの間にか部屋の隅に立っていた。

「どういう事です！ そんな話聞いた事も」

「当然でしょ。そもそも月の防衛網構築には私も関わってたし。アレを利用して私は地上に降りたんだ。知られてたら此処には居ないさ」

「ッ!? 色々言いたい事はありますが、それが本当なら気が付かれないように月まで行けるかも」

「そのデータを持っているのか？」

「手元にはないよあんなもの」

「ならどこにあるんだ？」

ニヤつと笑みを浮かべたヴェクトはこちらをからかうように告げた。

「アラスカだよ」



軍事ステーション『ヴァルハラ』のモビルスーツハンガー。

そこでは一機のモビルスーツが最終チェックを終えロールアウトしようとしていた。

「ようやく最終チェック完了。これで一段落かな」

企画、設計、開発と結構時間が掛かってしまったが、その分出来は良い。

後は実戦でデータを取りながら細かい調整を加えていけばいい。

「キラ、機体はどうだ？」

「イザーク、わざわざこっちに来たの？」

「気になっていたからな。で、どうなんだ？」

「何とか形になったかな。でもデータ収集と調整は続けていく必要があるけどね。

そっちの戦艦はどうなの？」

「完熟訓練は今のところは順調だ。それより地上から連絡が来た、ドミニオンがアラ

スカに向かったらしい」

「アラスカ？ 何でそんな所に？」

アラスカは『ヤキン・ドゥーエ戦役』の際に起こった戦いによって廃墟と化している。

今では何も無い筈だ。

「そこまでは分からん。だが、何かあったんだろう」

キラは何故か不吉な予感を覚えた。

何故かはわからない。

でも嫌な予感が止まらなかった。

「……僕が援護に行くよ。機体の慣らしには丁度良い」

「どうかしたのか？」

「嫌な予感がするんだ」

素早くパイロットスーツに着替え、ロールアウトしたばかりの機体へ乗り込む。

「各パラメータ、機体設定完了、イオン濃度正常、『e. s. device』正常稼働、
『ユニバース・フリーダム』システム起動」

ZGMF-X30A 『ユニバース・フリーダムガンダム』

今までのフリーダム型すべてのデータを基にキラ・ヤマトが自らの機体として設計した『SEED』対応機。

火力以上に近接戦能力と機動性が徹底的に強化されており、ドラグーンを射出することなく、光の翼、ヴォワチュール・リュミエールの展開が可能になっている。

ドラグーンはフリージアと同じ特性が付与されており、フィールドを展開することでトワイライトフリーダムのC・S・システム開放状態以上の速度を出す事も可能となっている。

出撃準備が整ったフリーダムの上にあるハッチが次々と解放され、宇宙の暗闇が顔を覗かせる。

《ヤマト、戦闘データは逐一こちらに転送しろ》

「はい。クレウス博士もイノセントの方をよろしくお願いします」

《ああ》

フリーダムのスラストアーに火が点り、装甲が色付く。

「キラ・ヤマト、フリーダム、行きますー！」

フットペダルを踏み、キラは新たな愛機と共に宇宙へと飛び出した。

蒼い翼が開き、同時に光の翼が現れる。

凄まじい加速。

追従を許さない程のスピードを出しながらフリーダムは地球の方へと向かっていく。

その先でキラは道を阻むように展開されている部隊に気が付いた。

「あれは……統合軍か！」

数は多くない所を見ると偵察の部隊か何かだろうか？

「何であれ、アラスカに向かうには突破するしかない！」

キラは躊躇う事無くさらに機体を加速させる。

すると敵もこちらに気が付いたのか戦闘態勢を取った。

「あれは……フリーダム!？」

「何でこんな場所に!？」

「迂闊だ!」

キラは腰から引き抜いたビームサーベルですれ違い様、瞬時に二機のリゲルを撃破する。

「なっ、か、各機、迎撃しろ!」

フリーダムの足を止めようと他のリゲルが追撃してくる。

モビルアーマーへと変形し、フリーダムを追従しようと速度を上げた。

しかし――

「何!？」

「リゲルが追いつけないだ!？」

モビルアーマー形態のリゲルすらあっさりと引き離されてしまった。

そして次の瞬間統合軍のパイロット達の前からフリーダムは姿を消す。

「なっ、消えた!？」

「どこに……うわあああ!!」

フリーダムを見失い動きを止めたりリゲルは上方より発射されたビームライフルによつてあっさりと撃破されてしまった。

「くそー！」

「速すぎて捉えられない！」

「そこをどけ!!」

ライフル、サーベルを使い分け次々と敵機を撃破し、隊長機と思われるH・アガステイアすら一蹴した。

キラはその勢いのまま母艦であるプレイアデス級へ向かっていく。

「全砲門開け！ フリーダムを落とせエエエ!!」

プレイアデス級から発射されたビーム砲の雨がフリーダムに襲い掛かる。

「そんなものー！」

さらに機体の速度を上げ襲い掛かるビーム砲をかわす。

射線から容易く逃れたフリーダムは背中からドラグーンを射出させた。

「いけエエエー！」

キラによって巧みに操られたドラグーンが砲台を、スラスターを、エンジンを正確に破壊する。

その隙に距離を詰めたキラは斬艦刀を振りかぶり、そのままブリッジを斬り潰した。戦艦全体が炎に包まれ、プレイアデス級は宇宙の塵の一つに変わっていく。

「うん。いい調子だ」

斬艦刀を収納し、敵艦が撃沈したのを確認したキラは再び蒼い翼を広げて地球へ向かう。

だが、キラは知らない。

その先で思いもよらない再会が待ちうけている事など。

この時、想像すらしていなかった。

第25話 過ぎ去った筈の暗闇

カオシユン基地から宇宙に向けて飛び立とうとしていたシャトルの中。シートに座るアスランは送られてきたデータの閲覧を行っていた。

手元の端末に映っているのは今回の任務の詳細。

内容は宇宙での統合軍の活動を見越した足場作りの先駆けだった。

「大佐、宇宙に上がってまずはどうするんです？」

緊張気味なミレイアと共に反対側の席に座っていたラデイスが聞いてきた。

「まずは宇宙からの迎えと合流して『ヴァルナ』に向かう」

『ヴァルナ』とはテタルトス軍が『イクシオン』『オルクス』と共に作り上げた軍事ステーションの一つである。

元々は『イクシオン』『オルクス』の二つをカバーする目的で開発が進められていた。しかし途中から外宇宙進出の為の足がかりとして使用される事になり、大型化され移動型のステーションとして運用されている。

ユニウス戦役以前に地球圏より離れていたのだが、当時『ヴァルナ』の指揮を任されていたゲオルク・ヴェルンシュタインと共に地球圏へと帰還を果たしていた。

現在は統合軍の拠点の一つとして運用され、根回しが良い事にアスランが開発させていたレグルス・エクイテスガンダムも運び込まれているらしい。

「そこで新型の最終調整を行いながら、宇宙で動く事になる。本国との折衝なども行う事になるだろうな」

「そう言った政治的な話は勘弁ですね」

「心配するな。矢面に立つのはファウスト司令とイスラフィール代表だろう」

現在統合軍をファウストが取り仕切り、政治面を司る統合政府はイスラフィールが代表を務めていた。

月本国と話し合いを行うのは間違いないその二人であり、アスラン達はよくて護衛役と言ったところだろう。

とはいえアスランにもラジェイスの気持ちはよく分かる。

今回の件は厳密には違うが要するにクーデターのようなものだ。

アスランも予厄介事に関してある程度の心構えをしていたとはいえ、半ば強制的に巻き込まれたようなもの。

先に大佐に任命したのもアスランを逃がさないというメッセージ的な意味がある事は明白だった。

「……不本意だが、部下達を見捨てる訳にもいかないからな。そういえばミレイア、宇宙は初めてだろう？」

「は、はい。そうなんです」

「そこまで緊張しなくても君ならすぐに慣れる。ただ宇宙での戦いは地球とはまた一味違う。心構えだけはしておいた方がいい」

「大佐……はい、頑張ります！」

ミレイアはアスランに気遣いに感動したように目を潤ませ、それが面白くないようにラデイスが鼻を鳴らしてソツポを向く。

内心嘆息しながら端末に視線を戻すと丁度時間になったのか、シャトル内に放送が流れた。

《間もなく当機は発進いたします。シートベルトを締め、席から動かないようお願いいたします》

搭乗員が全員席についているのを確認するとエンジンに火が入り、シャトルは宇宙に

向けて飛び立った。

体にかかるGを感じながら天に昇っていく感覚に身を委ねていると、しばらくしてフツと体が軽くなる。

《無事に大気圏を抜けました。当機はこのまま合流ポイントに向かいます》

「ハア、緊張したあ」

「な、戦闘に比べて大した事なかったろ？」

「ラデイス達は慣れてるからでしょ」

二人の和やかな会話を聞きながらアスランは窓の方へ視線を向けた。

暗がりに煌めく星々を見て宇宙に戻ってきた事を実感する。

その時、キラリと何かが光ったように見えた。

「何だ？」

星ではない。

アスランが目を凝らしていると前方から直進してくる物体に気がついた。

「速い!？」

それは凄まじい速度で宇宙を駆け抜け、一瞬だけシャトルとすれ違う。

僅かな邂逅。

常人では捉えられないそれもアスランの目にははつきり見えた。

あまりにも見覚えのある頭部。

伸びる白い四肢。

そして何よりも最も特徴的な背中にある蒼き翼。

間違いない。

「……フリーダム」

青い星へと吸い込まれていくモバイルスーツの姿を目に焼き付けながらアスランは知らず知らずの内に拳を強く握り締めた。

予感は確信に変わる。

アレは――

「……キラ」

決着をつけるべきかつての友の名を呼び、アスランは鋭い視線を青い星へと向けていた。

◇

「ハア」

気落ちしたようにオスロ基地の休憩室でアオイは盛大なため息をついた。

病室を抜け出し、こうして気分転換に来たもののどうも気分が沈んだままだ。

こんな所をセリスにでも見られた日には「病室に戻りなさい！」と説教を受けてしま
う。

断つておくがアオイの怪我は軽症だ。

頭や腕には包帯が巻かれてはいるものの、アオイ自身痛みは全く感じない。

できれば消毒臭いあの病室とはさっさとオサラバしたいくらいだ。

「こんな所にいたのかよ、アオイ」

「シン」

いつの間にか後ろにシンが立っていた。

彼の怪我也大したものではなく、頭に巻かれた包帯以外は目立った外傷は見られな
い。

「セリスが怒ってたぞ。後で謝った方がいい。本気で怒るとめちやくちや怖いから
さ」

それはこれまでの入院生活で嫌という程思い知らされていた。

実はこうして病室を抜けだすのは初めてではなく、何度か気分転換と称して外へ出た

事があつた。

無論、シンも一緒にだ。

しかし、運悪くセリスに見つかつてしまい、二人して滅茶苦茶怒られてしまったのだ。可愛い顔に似合わないあの迫力は出来るだけ味わいたくは無い。

「わ、分かつたよ」

「で、また考えてたのか？ その、アイザックやフォルケンマイヤー少尉の事」
シンから差し出された飲み物を受け取るとアオイは首を振る。

「いや」

全く考えていなかったと言えば嘘になるがこれ以上気を使わせるのも悪い。

それにそろそろ落ち込むのも終わりにしなくては。

それこそ犠牲になつた仲間たちに怒られてしまうだろう。

ベアトリーゼなど「何時まで落ち込んでいるつもりだ？ 呑気なものだな。そんな無

駄な事をしている暇にさっさと仕事を片付けろ」なんて言われそうだ。

「俺が考えてたのはさ、これから戦う時どうしたもんかと思つてさ」

「え？」

「統合軍だよ。今度はアレと戦う事になるんだらうけどイレイズは完全にスクラツプ。敵が来て戦おうにも機体がないんだ。パナマにも余裕はないだらうし」

すでにパナマ基地の方へ現状報告は行っている。

しかし向こうも統合軍誕生の影響で厳戒態勢のままらしく、返事はまだ来ていないのだ。

「アレン達も任務で今は居ないし、俺の機体もあのジンIIにやられたからな。くそ、アイツ！ 次こそ！」

シンはリベルトとの再戦をすでに考えているようだ。

勝ち気な彼らしい。

無論、アオイとてこのまま終わるつもりは毛頭ない。

怪我が治り次第、また一から鍛え直すつもりだ。

「こんな所にいた！ この問題兎共！」

「げ」

「あ、セリス」

二人の後ろにはいつの間にか腰に手を当て仁王立ちしているセリスの姿があった。

「全く怪我がまだ治ってないのに、こんな所で何やってんの！」

「す、すいません」

「い、いや、俺はアオイを連れ戻そうとして」

「言い訳無用！ さっさと戻ると言いたいとこだけど……ミナト少尉、パナマのロア

ノーク大佐から連絡が入ったから通信室に行つて」

それは待ちに待つた連絡だった。これでパナマの状況を知る事もできる。

「それからシンも宇宙に行く準備」

「宇宙に？」

「うん。機体の調整にパイロットが必要なんだつて」

セリスの言葉にシンは目を見開いた。

「機体つて、俺の新しい!?!」

「多分ね。少尉も急いで」

「了解」

アオイは軽く頷くと通信室へと走り出した。



アラスカの大地に刻まれた深い傷跡。

大地を大きく抉る形で残されたクレーターには水が流れ込んでいる。

その大きさは尋常ではなく、この場で起こった惨劇の大きさを物語っていた。

「まさか、こんな形でアラスカを再び訪れる事になるとは思わなかったな」

「確かに」

この場所にはかつて地球連合本部『J O C H — A』が存在していた。

しかし『ヤキン・ドゥーエ戦役』でザフトが行った『オペレーション・スピットブレイク』の最中に地下に設置されていた『サイクロプス』が起動し跡形も残らず消し飛んでしまった。

アレンやキラ、アークエンジェルもあの戦いには参加していたから、その光景は目に焼き付いている。

あの時は肝を冷やした。

サイクロプスに加えザフトの新型と圧倒的な物量相手にしなければならぬ危機的状況。

レティシアやラクスが援護に来てくれなければ、生き延びる事はできなかつただろう。

「ヴェクトの指定した場所は『J O C H — A』のさらに地下という事だが」

「結局、あの胡散臭い学者にいいように使われているだけのようだな」

「俺だって癪だよ。それより指定されたポイントへ向かうぞ、ルナマリア。オーデン艦長、後はよろしくお願いします。ニーナ、モビルスーツ隊の指揮は君に任せる」

「了解しました」

ドミニオンに移乗し此処までついて来ていたニーナが軽く頷いた。
本来ニーナはキラと共に宇宙に上がる予定だった。

だが、今回は事が事だけにアレンとルナマリアの二人だけでは心もとないと付いて来てもらったのだ。

元々彼女はドミニオンにも搭乗したエースパイロット。

ニーナが居ればアレンやルナマリアも後顧の憂い無く動く事が出来る。

「そちらも気をつけろ」

「分かっています」

ブリッジから格納庫まで降りると別の意味で懐かしい機体がモビルスーツハンガーでアレンを待っていた。

「用意してある機体がストライクとはね」

『ヤキン・ドゥーエ戦役』でキラが搭乗していた愛機。

GAT-X105 『ストライクガンダム』

今回はデータの回収が目的とはいえ、何があるか分からない。

そこで大破したエクリプスに代わるモビルスーツを用意してもらったのだ。

用意されたストライクは外見上の大きな変化は見られない。

しかし中身は色々改良されているらしい。

「私の機体はオルトリンデですね」

ルナマリアに用意されたのは量産型ジャステイス、即ちオルトリンデだった。

インパルスは大破したとはいえ、パーツはまだ残っている。

しかしミネルバが動けないのでは性能を十分に発揮できないと判断し別の機体を用意していた。

「初めての機体だ。無茶はするなよ」

「大丈夫ですよ。此処に来るまでニーナとシミュレータをやり込みましたからね」

「そうか。では頼りにさせてもらうぞ」

「もちろんです」

パイロットスーツに着替えたアレンはストライクのコックピットに乗り込むとヴェエクトから手渡されたデータを確認する。

「……入口はクレーターから少し離れた位置にあるみたいだな」

背中にエールストライカーを装着させ、ドミニオンから発進するとオルトリンデを伴い、目的の場所に向かって飛び立った。

「この感じ久しぶりだな」

アレンにとっても初めて搭乗したモビルスーツはストライクである。

その為、イレイズ程ではないにしろ、ストライクにもそれなりに愛着というものが

あった。

小気味よく操縦桿を操り地面を滑るように機体を操作。

目的地を見落とさないよう視線を左右に向けるとやや隆起した丘のような場所を発見する。

サイクロプスの爆心地からは離れ、周りも木々に隠れて見えにくい。

これは事前に情報を得ていないと確実に見逃してしまうだろう。

「あそこだ。降りるぞ」

「了解」

ストライクが地面に着地した衝撃を感じつつ、念のためにリーダーを見るが敵影らしきものは何もない。

それでも警戒を怠る事なく拳銃のセーフティーを外すとコックピットハッチを開く。

思った以上に涼やかな風を受けながら地面に降りた。

「確か、岩壁沿いに扉があるんでしたよね」

「ああ。調べてみよう」

丘の中腹部分にある岩壁を手で慎重に調べる。

すると端の方で僅かな突起を発見する。

一見岩が突き出しているだけのようにも見えるが、どうやら人工的に作られたものの

ようだ。

蓋を開けるように突起を引っ張ると、案の定タッチパネルが顔を出した。

「これだな」

事前にヴェクトから聞き出していたパスワードを入力。

ピーという機械音が鳴ると岩壁の一部が僅かに隙間を作った。

そこを掴み力任せに扉を開くと人工物の通路が見えた。

「流石に電源が落ちてますか」

通路を覗き込んでも明かりもなく、真つ暗な空間が続いている。

暗くて何も見えない。

まるでこちらを呑み込もうとしているかのような不気味さを感じる。

「どうしたんです?」

アレンの胸中に言い知れぬ、何か嫌な予感のようなものが湧きあがってきた。

これはかつて宇宙で感じたものと同じだった。

「アレン?」

「いや、なんでもない」

心配そうなルナマリアに笑顔を向けると、嫌な予感を振り払うように軽く首を振った。

「電源については仕方ないな。『J O C H — A』が吹き飛んだ時に主電源も一緒に駄目になったんだろう」

「目的のデータは大丈夫なんですか？」

「そつちは問題ないだろう。予備電源が動いているらしいからな」

「了解」

二人はライトを片手に通路の中に入るとあらかじめ教えられていた方向へ歩き始めた。

◇

内部へと侵入したアレン達を守るように周囲を警戒するドミニオン。

その姿を偵察機として派遣されたイリアスが探知されないギリギリの距離から捉えていた。

「距離がある分、映像は悪いが……間違いなくドミニオンだな。それでどうするつもりだ、カース？」

偵察機から送られてきた映像をサリエルのブリッジから見ていたニコラスは隣に立つ男を見た。

仮面をつけているから表情は読み取れない。

だが、どこか楽しそうに見えるのは気のせいだろうか？

「彼らの目的が停戦派議員達を月へ送り届ける事ならば我々にとっても面白くない」

「こちらが陽動の可能性もあるが？」

「そちらについてはすでに手を打ってあります」

「アルネーゼ達か。用意の良い事だな」

ある種皮肉ともとれるその発言にカースの傍に控えるNo. Iが鋭い視線を向けるが、ニコラスは涼しい顔で受け流す。

「エリニス、私と一緒に来い。No. Iとジェラルドはフリードマン少将の指揮下でドミ

ニオンを攻撃しろ」

「了解」

「……カース様、やはり私も共に。もしもカース様の身に何かがあれば……」

「私なら大丈夫だ。それよりこちらを任せる」

カースはNo. Iを宥めブリッジを後にするとジェラルドが呆れたように肩をすくめた。

「カースなら問題ないだろう。エリニスもいるならお前が心配する必要はないと思うがな」

「カース様の身をお守りするのが私の役目だ。エリニスに任せられるものではない」

「……それは単にお前がついて行きたかっただけ——ああ、いや、何でも無い。何でも無いから殺気を込めて睨むな」

二人のやり取りにニコラスは溜息をつきながら号令を発した。

「エンジン始動！ イーゲルシュテルン、バリアント起動！ ミサイル発射管コリントス装填、目標敵アークエンジン級戦艦『ドミニオン』！」

「私達はモビルスーツで待機します」

「頼む」

No.1とジェラルルが格納庫へ向かうと同時にサリエルのエンジンが点火され、ドミニオンの索敵範囲を踏み込んだ。

「まずは挨拶だ。ウオンバット、撃てえ！」

サリエルから発射されたミサイルがドミニオンへと襲い掛かる。

「敵艦の回避方向を予測。バリアントを叩き込め！」

「了解！」

逃げ場を塞ぐべくレール砲による砲撃がドミニオンの側面に叩き込まれた。

迎撃すら追いつかないある種奇襲となった攻撃。

「これをどう捌く？」

ニコラスが注視する中、ドミニオンが取った対応は前に出る事だった。

エンジンを吹かし、前方へ一気に加速するとミサイルの直撃を避けて見せた。

さらにその隙に主砲の狙いをつけていたのか、サリエルにビーム砲の一撃がラミネート装甲を掠めていく。

「やるな！」

掠めたビーム砲の振動に歯を食いしばりながらニコラスは敵艦への称賛を口にする。

不沈艦と名高いアークエンジェル活躍に隠れているが、ドミニオンもまた英雄と呼ばれるにふさわしい戦果を挙げている。

現にミュンヘン事変においても唯一、大きな損傷を受けることなく離脱に成功している。

艦長を含めたクルーたちの技量の高さは疑いの余地もない。

「全く、アークエンジェルといい、ドミニオンといい、本当に惜しいな」
的確に反撃してくるドミニオンに舌を巻く。

ニヤリと笑みを浮かべたニコラスは、モビルスーツ部隊の出撃を命じる為に格納庫へと通信を入れた。

◇

真つ暗な空間を歩き続けるといふのは思った以上に精神的な疲労が溜まる。

さらに罨がないか確かめつつ、慎重に進まざる得ないこの状況。

それがよりアレンとルナマリアの神経をすり減らした。

「……もしもライトが無かつたらと考えるとゾツとするな」

「変な事言わないでくださいよ」

壁伝いに手を這わせ歩き始めて10分くらい経過した頃だろうか。

ようやく通路が終わり扉のようなものが見えてきた。

その横にはパネルのようなものが設置されており、ボタンを押すと画面に明かりが灯る。

「開けるにはまた暗証番号が必要ですか？」

「ああ。それだけ万全を期しているという事だろうな」

この先にあるのは昔、ヴェクト・グロンランドが使っていた研究施設で、テタルトスともそれなりに関わりのある場所だと聞かされた。

「なのになんで施設を破棄しなかつたんですかね？」

「もしかするとテタルトスはこの施設の存在を知らないのかもな。知っていたら何かしらの対策は打っているだろう」

「じゃあ此処、アイツが個人の施設ってことですか？ それは流石に……」

「考えすぎならいいんだがな」

パネルに暗証番号を入力し扉が解放される。

見るからに怪しげな研究施設が姿があった。

近くの壁にあるスイッチを入れ、明かりを灯す。

暗闇に慣れていた所為か明かりに眩しさを覚えながら目を細めると荒れた部屋の惨状が目に見えび込んできた。

「荒れてますね」

「ああ。しかし誰かが荒らしたって訳でもなさそうだな」

床に転がるフラスコを手にとると、薄く埃が付いている。

その他、途中で放棄された資料や端末も同じく埃を被っていた。

しばらく誰もこの此処に足を踏み入れていない証拠だ。

とはいえ長居したい場所でもない。

さっさと用事を済ませてしまおう。

「データを回収してドミニオンに戻るぞ」

「了解」

持ってきた小型端末と生きている大型端末をコードで繋ぎ必要なデータを呼び出す。

「他のデータも一応確認しておくか」

重要そうなデータを選択しダウンロードを開始する。

その間にアレンはもう一つ端末を取り出し、大型端末の前に置いた。

「アレン、何やってるんです?」

「念のためにな」

後はデータがダウンロードされるまで待つだけなのだが、そこで大きな振動が研究室を襲った。

部屋全体が揺れ、バランスを崩した器具が机から転げ落ちる。

「アレン、これって!」

「統合軍か——ッ!」

その時、アレンの体に悪寒が走る。

「アレン?」

ルナマリアが訝しげにアレンの顔を覗き込むと信じられないと驚愕の表情を浮かべていた。

「そ、そんな、ま、まさか」

「どうしたんです!」

ルナマリアの声が聞こえていないのか顔を顰め、アレン達が入ってきた場所とは反対方向に視線を向けた。

するとコツコツと誰かが歩いてくる音が聞こえてきた。

「統合軍?」

即座に拳銃を構えたアレンに習いルナマリアも銃を向ける。

反対側の扉が開き、姿を見せたのはルナマリアにとって忘れようがない存在だった。

「アンタは!?!」

そこに現れたのは顔が全く見えない仮面を被り全身からにじみ出る殺意を纏った敵
エリニスだった。

それだけではない。

「ほう、此処で君と再会するとは思わなかったな——アスト・サガミ君」

エリニスの後ろから姿を見せたのは軍服の上から黒いコートを羽織り、不気味な仮面
で顔を隠した男だった。

その姿を見た瞬間、アレンの驚愕のあまり口を震わせ目を見開いた。

「お、お前は……」

あり得ないと。

信じられないと。

そんな精神的な動揺を隠せない。

動揺するアレンが言葉を発する前にルナマリアが呆れたように軽口を叩いた。

「何？　統合軍では仮装大会でも流行ってる訳？」

ルナマリアの軽口に反応したのか、エリニスが銃口を向けてきた。

しかしルナマリアの隣に立つアレンはそれすら目に入っていないとばかりに仮面の男の方を注視している。

「アレン、さっきからどうしたんです？」

その質問に反応したのかアレンは歯を食いしばり仮面の男の方へ口を開いた。

「貴様……」

今までこの男を忘れた事など一度もない。

ある意味でこの男こそがアレンを激しい戦いの渦中へと巻き込んだのだから。

しかしその戦いの中で男は宇宙に散った。

決着はついたので。

だからアレンはこの瞬間までこの男が生きていたなどとはまるで思っていないかった。

この男に関わった人物なら誰であろうとそうだろう。

しかし現実に奴は此処に居る。

それは再び悪意を振りまくこの男との対決が避けられない事を意味していた。

「生きていたのか……」

アレンは掠れた声で忘れる筈のない男の名を呼んだ。

「
—
ラウ・
ル・
クルー
ゼ」

第26話 亡霊と蒼翼

発射されたミサイルが地面に着弾する度に爆風と衝撃がドミニオンを大きく揺らす。

「迎撃！ ゴットフリート照準！」

撃ち掛けられたミサイルをイーゲルシュテルンが撃ち落とし、主砲のビーム砲がサリエルを狙い付ける。

しかしビーム砲が発射される前にサリエルはポジションを変え、こちらに射線を取らせない。

「敵艦、回避運動！ ゴットフリートの射線が取れません！」

「……………こちらの手を読んでいる」

ナタルは敵指揮官の手腕に思わず齒噛みした。

サリエルがミサイルやレーン砲もただ撃っている訳ではなく明確な狙いがある。

ドミニオンを狙い通りに誘導し、よりこちらの対応を読みやすくしているのだ。

性質が悪い事にそこからドミニオンが逃れようと動く事も想定している為に、ナタル

達は必然的に防戦を迫られていた。

「直上からミサイル！」

「くっ」

さらにドミニオンを追い詰めていたのが、この手数が多さだった。

サリエルは外見上アークエンジェル級に酷似している。

しかし搭載された武装の数はドミニオンとは明らかに違う。

指揮官の技量の高さとはまって、サリエルの猛攻は途切れることなくドミニオンを危機に追い込んでいた。

「左舷よりイリアスが来ます！」

「迎撃！ ニーナは?!」

「現在、敵のエースと思われる機体と交戦中！」

ニーナの駆るランドグリーズはイレイズMK-IIIとイリアス・アキレスを相手に戦っていた。

エース級の二人を相手に立ち回れるニーナの腕前は流石と言える。

しかし、それも長くは持たないだろう。

「セイフアート達は？」

「反応は未だ……」

予想以上に時間が掛かっている。

何か予想外の出来事でも起きたのか。

それとも――

「……連中がセイファート達の方にも仕掛けたかだな」

もしもそうだとしたら彼らが戻ってくるにも時間が掛かると思っていた方がいい。

「それまでは手持ちの戦力で持たせるしかないか」

敵艦からの降り注ぐ攻撃を捌きながら、ナタルは戦略を練り始めた。

◇

ラウ・ル・クルーゼ。

『ヤキン・ドゥーエ戦役』を経験した者であれば知らぬ者はいないザフトに所属していたエースパイロットである。

その破格ともいえる操縦技能、指揮能力、卓越した戦略眼。

どれを取っても一流。

それだけに嫉妬の対象にもなっていたようだが、実力は誰しも認めていた。

彼の率いたクルーゼ隊が特務隊とは別に特務を任されていた事からも、どう評価され

ていたかは推して知るべしであろう。

そこにはザフト最強と謳われた男ユリウス・ヴァリスもいたのだから、手が付けられない。

よくも生き延びられたものだと、今更ながら自分達に感心してしまう程だ。

そんな男も第二次ヤキン・ドゥーエ攻防戦においてキラの手で倒された筈だったのだが――

「生きていたのか……ラウ・ル・クルーゼ」

仮面によつて素顔は相変わらず見えない。

しかし分かる。

滲み出る憎悪と殺意。

全身に走るこの感覚。

そのすべてが目の中の人物がラウ・ル・クルーゼだと語っている。

「久しぶりかな、アスト・サガミ君。君と最後に話したのは『L4会戦』の時だったかな？　という事は約5年ぶりか」

「……貴方は相変わらずか。裏で動き回っていたのは貴方だろうか？　宇宙で感じたあの視線も」

プラントに向かっていた輸送船を襲撃した事件や今回のミュンヘン事変も裏で彼が

関わっていたとするなら不可解な部分も納得できる。

「何をするつもりなんだ？ 性懲りもなくまだ人類の破滅を望んでいるのか？」

「フフ、確かにそれもあるが……今回は少し違う。今は下準備をしているだけだよ。私も以前は事を急ぎすぎていたかと反省してね」

「下準備だと！」

相変わらず人を食ったような口調に苛立ちながら、カース——ラウに銃口を突きつける。

するとラウを庇うように同じく仮面をつけた女が立ち塞がった。

この女もラウと同じ。

全身から滲みだす憎悪の感情が肌にチクチク突き刺さる。

「そういえば彼女の事を紹介していなかったね。彼女の名はエリニス。君達にも縁の

深い人物だよ」

「エリニス？」

聞き覚えのない名前だ。

少なくとも心当たりはない。

だが、ラウが縁のある人物と言ったからにはアレン達とも関係のある人物なのか。

「エリニス、顔を見せてやると良い」

「分かりました」

エリニスとはカチリと金具を外して、仮面を外す。

「アンタは——」

そこから現れた素顔にアレンのみならずルナマリアすら驚きを隠せなかった。

「リース・シベリウス」

かつてアレン達と共にユニウス戦役を戦った戦友の一人。

髪は短くショートヘアになっているが顔立ちは間違いなくアレン達の知っているリース・シベリウスに間違いなかった。

「どうして……」

ルナマリアが驚くのも無理はない。

彼女はユニウス戦役時における戦闘の後遺症によって心神喪失状態に陥った。

医師の診断によれば生涯意識が戻る事はないと言われるほど重度の障害。

仮に意識が戻ったとしても、まともな思考能力は持ちえないだろうとも言われていた。

なのに——

「リース、何で統合軍に？」

「違う、私はエリニスだ。リースなどという女は知らない。私が知っている事は貴様らが排除すべき敵だと言う事だけだ！」

発砲音が狭い室内に響き渡り、発射された銃弾がアレン達の前で弾け飛んだ。

二人は機の陰に飛び込み、即座に銃を撃ち返す。

「リース！」

「うるさい！　口を開くな！　貴様の声を聴いていると何故か苛立つ!!」

声を掛けたアレンにエリニスは果敢に銃弾を叩き込んでくる。

苛立つと言われて僅かに首を傾げる。

そこまでリースに嫌われていただろうか？

まあ好かれても居なかったし、良い上官という訳でもなかったから嫌われていたとしても不思議はないが。

「クルーゼ、リースに何をした!?!」

「私は何もしていないさ。それよりも外にいる仲間を気にした方が良いのではないかな?」

「くっ」

「それに我々ものんびりとしているつもりもないのでね。先に用を済まさせてもらおう

う

ラウの銃撃が正確に端末のモニターに直撃する。

「なっ、この!!」

ルナマリアの反撃を避ける為に身を隠したラウは未だしつこく銃撃を続けるエリニスを制止した。

「エリニス、今はその辺にしておけ。退くぞ」

「しかし、こいつらをこのままには——」

「必要ない。目的は達成した」

ラウの指示にエリニスは素直に銃を下ろすと、そのまま通路の方へ身を躍らせた。

「クルーゼ!!」

「悪いがここで失礼させてもらうよ」

「待て!」

こちらの銃撃から逃れるようにラウはエリニスを伴い姿を消した。

「アレン、端末が!」

見れば持ち込んでいた端末は銃撃によって無残な姿に成果てていた。

あれでは取り込んでいたデータもすべてオシャカになっているだろう。

「流石、クルーゼ。こっちの動きを読んでいたって事か」

「そんな相手を褒めてる場合ですか？」

ルナマリアの咎めるような声に苦笑しながら、アレンは大型端末の裏側に手を伸ばす。

「それって……」

「一応保険を掛けておいて正解だったな」

アレンが取り出したのは念のために設置していたもう一つの端末だった。

「全部のデータは移動できなかったが、月の移動経路情報だけは念のためにこっちにも移しておいた」

「流石！ 用意が良いですね、アレン」

「万が一の場合を想定してただけだよ。それより俺達もドミニオンに急いで戻るぞ！」

「分かりました！」

急いで無事だった端末を回収すると入口に向かって走り出した。

地面にミサイルが着弾し振動で通路が大きく揺れる。

パラパラと上から細かい破片が落ちてくる度に天井が崩れてくるのではとハラハラさせられるが、構ってはいられない。

ここで天井が崩れて閉じ込められればアウトだ。

恐怖を押し殺し足早に通路を駆け抜け、どうにか外に飛び出す。

「ドミニオンは?」

ドミニオンは敵のアークエンジェル級と死闘を繰り広げていた。

大きな巨体が空中で器用に交錯し、砲撃を交わし合う。

だが火力の違いと群がるモビルスーツによってドミニオンは劣勢に立たされていた。

「不味いな。アレじゃ離脱もままならない」

急いでストライクのコックピットへ飛び込むと即座に機体を起動させる。

「よし、行くぞ!」

VPS装甲が展開され装甲が色づくと同時に空中へ飛び上がる。

「そー!」

ドミニオンを狙うイリアスの腕をビームライフルで吹き飛ばし、すれ違い様にもう一

撃撃ち込んで撃破する。

《セイファート!》

「遅くなりました、艦長。援護に入ります!」

《頼む!》

「ルナマリア!」

「了解!」

降り注ぐミサイルを割って入ったオルトリンデが機関砲で薙ぎ払い、その隙にストライクがドミニオンに寄ってくるイリアスを迎撃する。

「チツ、流石に最新型のイリアスだ。動きが速い！」

ドミニオンの主砲をその速度で振り切りながらイリアスがストライクに接近戦を挑んでくる。

その動きに淀みは無く、装備しているエールストライカーの性能をフルに生かしている証拠だ。

「性能はそちらが上。だがそれだけで勝敗は決まらないんだよ！」

横薙ぎに斬り払われたビームサーベルを機体を逸らし紙一重でかわし、イリアスを掬い上げるようにシールドを叩きつける。

下方から殴られ、仰け反るように体勢を崩したイリアスに容赦なくビームサーベルを突き立てた。

「ルナマリア、此処は任せる。俺はニーナの援護に——ツ！」

アレンに電気が走るような悪寒が走ると同時に撃ち込まれたミサイルを迎撃する。

イーゲルシュテルンでハチの巣にされたミサイルは空中で爆散した。

しかし舞い上がる爆煙は一時的だろうとアレンの視界を塞いだ。

その隙を突いて突っ込んでくるモビルスーツが一機。

モノアイの頭部を持ち血のように赤い装甲を持つ機体——『サタナエル』だった。

ZGMF-X92Sb 『サタナエル・ナハト』

ユニウス戦役にてザフトが投入した対SEEDモビルスーツである。

形状に僅かな変化が見られ、その性能は以前に比べても格段に向上しており、増設された全身のスラスタールと背中に存在する二基のスラスタールユニットによって非常に高い機動性を有している。

「サタナエル……これはクルーゼか!」

凄まじい速度で突っ込んできたサタナエルのビームサーベルをどうかシールドで受け止めると通信機から楽し気な声が聞こえてきた。

「こうして君と戦うのも久しぶりか。あの時の決着をつけるかね!」

サタナエルのパワーにストライクは押し込まれていく。

「やはりお前がその機体を……いやそもそも何故、お前がその機体を!」

「答える必要はあるかな? アオイ君もそうだったがその旧式の機体では本領は発揮できません」

「舐めるなアア!!」

力一杯操縦桿を押し込むが、ビクともしない。

幾らストライクが改良を施されていたところでサタナエルとは性能が違いすぎる。

「フ、やはりそんな機体ではな！」

サタナエルの強烈な一撃がストライクを吹き飛ばし、同時に入れられた蹴りがコックピットを激しく揺らす。

「くそー！」

「アレン!？」

「君はイリアスの相手でもしていたまえ」

サタナエルは援護に駆け付けようとしたオルトリンデをビームライフルで引き離すと、背中のウイングスラスターを噴射させストライクヘビームサーベルで斬りかかった。



ニーナ・カリエールは元ザフト特務隊を支援する為に結成された部隊出身の赤服パイロットである。

そんなニーナが自分の長所を上げるとしたらどんな状況でも失わない冷静さと分析能力であろう。

相手の動きを見ただけでだいたいの癖や特徴も理解できる。

現在、相対している二機——イレイズMk-IIIとイリアス・アキレス。

この敵に關してもすでにある程度の特徴はつかめていた。

「このパイロット達は……」

こちらの放つビームライフルを事もなげに回避する反応速度。

確実に急所を狙ってくる射撃精度にアクロバティックな機動をもつものでもない機体制御能力。

どれをとつても常人とは比べ物にならない。

「特にイレイズのパイロットは尋常な腕前じゃない」

こちらを狙い発射されたビームキャノンの砲撃を避ける為に後退する。

ランドグリーズの装甲の一部が空中を焼き払う強力な熱量によつて剥げ落ち、モニターの一部にも影響が出る。

こんな強力な一撃を食らえばたとえシールドで防御してもただでは済まない。

しかもその隙に背後からサーベルを構えたイリアス・アキレスが迫ってくる。

「……落ちろ！」

「そう簡単には」

スラストを噴射し空中で宙返りする事でサーベルの斬撃を回避、背後からビームライフルを叩きこむ。

背を向けているイリアスに避ける術はない。

しかし予想に反し、イリアスは背後からの射撃を見切っていたとばかりに避けて見せた。

「今のを避ける……異常な反応……エクステンデット——ラナ・シリーズか」

もちろんキラ達のようなスーパーエースである可能性もあるが、それはイレイズの方でイリアスは違う。

今までの経験からニーナは正確に相手の正体を把握していた。

「なかなかやるな。防戦に徹してるとはいえ俺達二人を相手にしながら、足止めするなんて」

ジェラルドが相手を賞賛にNo.1も同意する。

「確かに戦い方は上手い。敵の動きを読むことに関しては大したものだと認めよう。しかしカース様が戦われている今、こんなところで足止めを食う訳にはいかない！」

No.1は躊躇わずに切り札を切る。

それは相手の実力を認めたが故。

何よりも守るべき存在であるカースの元へ駆けつける為に——

「終わりにする！」

「動きが変わった？」

斬撃はより鋭く。

射撃はより正確に。

嵐のような激しい攻撃がランドグリーズに襲い掛かる。

「これは……あのシステムの」

イリアス・アキレスからの苛烈とも言えるほどの攻撃に歯を食いしばって耐える、ニーナ。

しかし追い詰められたニーナを狙い撃つようにイレイズMk-IIIがビームランチャーを構えて待ち受けていた。

「そんな量産機でよく頑張った。だが、ここまでだ！」

「くっ」

発射されたビームがランドグリーズの右脚部を奪い、イリアスの斬撃が限界の来ているシールドを斬り裂いた。

「これで防御はできないだろう。先に戦艦の方を落とさせてもらおう！」

イレイズMk-IIIの砲口がドミニオンのブリッジを捉えた。

「ドミニオン!？」

「行かせはしない!」

「そこをどけ!」

止めようとしたランドグリーズに再び猛攻を仕掛けるイリアス・アキレス。サタナエルと戦っているストライクは間に合わない。

イリアスを相手にしていたオルトリンデも同様。

誰しもの時間が凍りつく。

その瞬間——蒼き翼が舞い降りる。

上方から発射された閃光がイレイズのビームランチャーを破壊、凄まじい速度で下降してきたモビルスーツがイリアス・アキレスの右腕を即座に斬り飛ばした。

「何!？」

「アイツは!？」

白い四肢と背負う砲身。

見紛う事のない蒼き翼。

あれは——

「フリーダム」

ニーナのランドグリーズを守るように降り立ったのはユニバースフリーダムであった。

「ニーナ、無事?」

「ヤマト一尉!?!」

モニターに映ったキラに冷静なニーナの表情が柔らかく緩む。

それを見たキラも微笑むと、すぐに表情を引き締めて正面に向き直った。

「ニーナ、君は一度下がってくれ。後は僕がやる」

「……気を付けてください。あの二機只者ではありません」

「了解!」

翼を広げビームサーベルを構えるとイリアス・アキレスとイレイズMK-IIIと向かい合った。

「フリーダム……新型機か」

片手を失ったNo.1は冷静に機体状態を把握すると残った左腕でサーベルを構えた。

「たとえ新型であろうとも! ジェラルール、援護を!」

「了解だ」

破壊されたビームランチャーをパージしたジェラルールは残ったビーム砲とライフル

でフリーダムを狙撃する。

その間に回り込んだイリアスが別方向から斬り込んでいく。

「新型の力を試させてもらおう！」

キラのSEEDが弾けるとコックピットの内に仕込まれたデバイスが動き出す。

同時にキラの感覚がいつも以上に研ぎ澄まされ、さらに深度が増していく。

これがユニバースフリーダムに搭載された『e. s. device』の力だった。

『e. s. device』

正式には『energy seed device system』と呼ばれるもので、SEEDの発動を感知するとコックピット内に仕込まれた特殊デバイスからパイロットに直接干渉、SEED能力の増幅、補助を行う事が出来るシステムである。

C. S. システムに比べ機体やパイロットに掛かる負担も少なく、長時間の展開も可能になっているのが特徴だった。

「行くぞー！」

研ぎ澄まされた感覚を全身で感じ取りながらユニバースフリーダムが動き出した。

そのフリーダムの上段からサーベルを振り下ろすイリアス。

しかしその一撃がフリーダムへ届くことは無く、サーベルを持った腕が宙を舞った。

「なっ!？」

全く反応できなかったNo. Iは驚愕で一瞬、動きを止めてしまった。

「何やってる、動け！」

「しまっ——」

ジェラルルの声に反応し咄嗟に機体を退くNo. I。

だがそれも無意味とばかりに繰り返されたユニバースフリーダムの斬撃によつて胴体から真つ二つに斬り裂かれてしまった。

「No. I!? チツ、コックピットは外れていたから無事だろうが、まさかNo. Iを一瞬で倒すとはな！」

No. Iの能力は他の個体に比べても遥かに高いもの。

オリジナルであるラナ・ニードルを上回る力をもつて生み出された個体なのだ。

それをこうも容易く倒すとは。

「それでこそ『白い戦神』！俺が倒すべき相手だ！」

ジェラルルは使い物にならなくなったビームランチャーを切り離し、対艦刀を構えて前が出る。

それに応じるようにキラも斬艦刀『ガラティーン』を抜き放ち、真正面から斬り結んだ。

「待ちわびていたぞ、お前と相對するこの時を！」

「この動きは？」

「今日こそ貴様を討つ！」

「くつ、気にはなるけど、今はそんな個人の感情は後だ！」

空中で交錯する對艦刀と斬艦刀。

繰り出される對艦刀の斬撃を軽々と捌いたキラは斬艦刀を振り下ろした。

その一撃がイレイズの右肩部に深々と食い込み、抵抗もなく腕が胴体から斬り離される。

「ぐっ、反応が桁違いに速い」

「このまま落とす」

「そうはいかない」

コックピットを狙った逆袈裟からの刃をジェラルルは脚部で食い止め、残った左腕でサーベルをフリーダムへと突き立てる。

「これでどうだ！」

虚を突いた一撃。

並みの腕前であればこの一撃で勝負が付く。

しかしキラの反応はジェラルルの予想を上回っていた。

光る線が走った瞬間、サーベルを握っていたイレイズの手首が斬り裂かれてしまった。

「なんだと!？」

ユニバースフリーダムの左腕から伸びたナーゲルリングⅢから放出されたビーム刃がイレイズの左腕を切り落としたのだ。

「化け物め!」

腕を裂かれ仰け反りながらも残った武装で反撃に転ずるイレイズ。

キラはビーム砲の一撃をかわし脚部に食い込んだ斬艦刀に力を入れそのまま振り抜いた。

裂かれた脚部。

そして逆袈裟へ振われた刃がイレイズを深々と斬り裂いた。

「ぐおおお!」

破壊された装甲から色が抜けたイレイズはそのまま地面へと落下していった。

エース級の二機を排除したキラは即座に踵を返すと一斉にターゲットをロックする。

「いけえええ!!」

何時も以上の射撃精度を持って発射されたフルバースト。

連射されたフリーダムの砲撃がドミニオンに群がっていたイリアスやブリアレオス

に次々と突き刺さり薙ぎ払われていく。

「全機、回避！」

「間に合いま——うわあああああ！」

フルバーストの砲撃でコックピットを貫通されたイリアスは空中で爆散、避けようとしたブリアレオスも同じだ。

キラの正確な射撃を前に避けるどころか、防衛もままならない。

成す術なく残骸へと変わった敵を確認するとドミニオンの方へ向き直る。

「後は——ッ!？」

残りの敵を排除する為、動き出そうとしたキラに妙な感覚が襲い掛かった。

「これは……まさか……」

この感覚には覚えがある。

いや、忘れるはずがない。

全身を刺すような殺気の塊。

その時、レーダーが反応すると同時に通常のプロビルスーツとは比較にならない速度で接近してくる機体が見えた。

「アレは『サタナエル』!？」

ストライクをイリアスに任せてユニバースフリーダムの方へ接近してきたのはサタ

ナエルであった。

ビームライフルで牽制しながら、ビームサーベルで構えて突っ込んでくる。

「なんでこの感覚がああな機体から」

戸惑いながらキラはビームライフルで迎撃する。

それを速度を上げて振り切ったサタナエルはビームサーベルを振りぬいてきた。

「ッー」

見るより前に身体が動く。

フリーダムの中核のナゲルリングとサタナエルのビームサーベルが激突する。

稲光が辺りを包む中、キラの耳に聞き覚えのある声が届いた。

「No.1とジェラールを一蹴するとは……流石、キラ・ヤマト君と言ったところか」

「あ、貴方は……」

通信機から聞こえてきた声にキラは思わず硬直した。

「ラウ・ル・クルーゼ!？」

「久しぶりだね、キラ君」

あの日の光景が脳裏に蘇る。

第二次ヤキン・ドゥーエ攻防戦。

キラとアスラン、そしてムウ。

三機のモビルスーツを相手しながら圧倒するその力はある意味で最強と言われたユリウス・ヴァリスを上回っていたかもしれない。

それだけ彼は強敵だった。

その彼は確かにあの時、沈みゆく戦艦と共に消えた筈。

「……生きていた、のか」

「君まで現れるとはね。ヤキンでの借りを返したい所だが、今サリエルをやらせる訳にはいかない。決着は今度着けるとしよう」

サタナエルはビームサーベルの刀身をわざと消し、すれ違うようにユニバースフリーダムを斬撃を潜り抜けると回し蹴りの要領で背後から蹴りつけた。

「この程度で！」

蹴りを宙返りして回避したキラはレール砲でサタナエルを狙い撃つ。

「本当に厄介な奴だよ、君は！ だが！」

だがそれを先に感知していたのかサタナエルはすぐさま距離を取り、レール砲を回避しつつシールドに装着していたバズーカ砲を撃ち出した。

撃ち出された数発の砲弾は空中で弾け、散弾となってフリーダムに襲い掛かった。

「ッ!？」

キラが後退しながら機関砲で散弾を迎撃したその隙にサタナエルはドミニオンと激しい砲撃戦を繰り広げていたサリエルと合流する。

そしてサリエルの艦首部分にある砲塔が解放され、光を発し始めた。

「陽電子砲!!? ドミニオン!!」

「右舷スラスター全開!!」

ナタルの声と共にドミニオンのスラスターが噴射され、サリエルから発射された陽電子砲をギリギリのタイミングで回避した。

しかしドミニオンは無理な回避がたたり、艦首の一部を地面に擦り付けバランスを崩してしまった。

その隙を突かせる訳にはいかないと警戒するキラだったが、サリエルはそのまま直進し、戦闘宙域から撤退していく。

「敵は退いたか。それにしても……」

「キラ!」

「あ、アスト。その」

「分ってる。奴の事だろう? とりあえずドミニオンに戻ろう。こちらの話やその機体の事も聞きたい」

「そうだね」

キラは近づいてきたストライクと合流する。

そして一度だけ離脱したサリエルの方へ視線を向けた。

すでに敵艦の姿は遠く離れており、目視では小さい物体が見えるだけだ。

しかし何故かカース——いや、ラウ・ル・クルーゼはこちらを見ているような錯覚を覚えた。

「ハア、考え過ぎても仕方ないな」

新たな姿を現した強敵の存在にキラはため息をつくど、ドミニオンの方へ近づいていった。

第27話 想いと剣

ドミニオンからの追撃がない事を確認したサリエルは第二戦闘配置へ移行する。

格納庫に着艦したサタナエルからカースが床に足を付けると、損傷した機体からNo. Iが駆け寄ってきた。

「カース様！ ご無事ですか!？」

「ああ。それに気にかけるべきはそちらの方だろう、No. I? 怪我はないのか?」

そこで自分が撃墜されてしまった事を思い出したのか、No. Iが申し訳なさそうに肩を落とした。

「申し訳ありません、カース様。前回の事と言い、すべて私の責任です。如何なる処分も」

「気にするな。相手が新型のフリーダム、キラ・ヤマトだったのだから」

今回も概ねカースの予測通りに事が運んだ。

連中の回収すべきデータは潰し、戦力も削った上でドミニオンはアラスカに足止め

だ。

あれだけの攻撃を受ければしばらくは動けまい。

仮に連中がデータを回収できていたとしても、それはそれでやりようはあるのだから。

その中で誤算があつたとすればそれはキラのフリーダム存在である。

あれが現れた事でドミニオンを落とす事ができなかった。

「まあ、それも些末な事。問題はやはり、キラ・ヤマトのフリーダムか」

キラの乗っていた新型機は破格の性能をもっていた。

統合軍側の方に保険もかけているとはいえ、あの性能は脅威だ。

「こちらのそれなりの機体は用意しておかなければならないか」

「カース様、お身体の方は大丈夫でしょうか？」

「ああ。問題は無い」

カース——ラウはその生まれからある種の欠陥を抱えていた。

かつてはそれで命すら危うい状態だったが、それも今は解決済みだ。

少なくとも今すぐに命の危機に瀕する事は無くなっていた。

「これも友に感謝しておくべきかな」



第二次ヤキン・ドゥーエ攻防戦。

キラ達に破れ戦艦の大爆発に巻き込まれたラウは搭乗機がボロボロになりながらも
どうにか生き延びていた。

損傷していたとはいえ搭乗機であるプロヴィデンスがPS装甲を搭載していた事が
九死に一生を得る結果になっていた。

だが、それも長くは続かないことも分かっていた。

その証拠に体全身を激しい痛みが襲っていた。

PS装甲であろうとも衝撃までは殺せない。

戦艦の大爆発に巻き込まれた衝撃がラウの体を痛めつけていたのだ。

「……フ、フフ、ここまでか」

所詮この身は偽り。

こうして人知れず、朽ちていくのもいいだろう。

気がかりがあるとすれば――

「……ユリウス。お前はお前の道を行けばいい。そしてレイもな」

消えゆく命を感じながら目を閉じる。

「命に執着しないのは君らしいといえは君らしいが、しかしまだ早いのではないかな、
ラウ」

聞こえてきたのはラウと同じように縛られながらも、自らの道を歩もうとしている友
の声だった。

「君か……クロード」

半壊したプロヴィデンスのコックピットに入り込んできたのは友人であるクロード・
デュランダルであった。

「お互い派手にやられたようだな、ラウ。それはともかく君にとっては残念かもしれないが死なせる訳にはいかない。世界はこれから動く。そこに君が居なくてはつまらないだろう？」

傷ついたラウの体を抱え上げ、モビルアーマーの方へ運んでいく。

「体の事も心配ないさ。対応は考えてある。上手くいくかは未知数だが今よりはマシだ。まあ上手くいったとしても数年は様子見をする必要があるだろうが、働きすぎの君にはいい機会だよ。ゆっくり体を休めるといい」

「……ではお言葉に甘えさせてもらおうかな」

ラウの意識はそこで途絶えた。

次に目を覚ました時、ラウはとある施設に運び込まれていた。

『アケロン』と呼ばれたその施設はクロードが作り上げた研究施設である。

アケロン自体は小惑星を改良したもので、テタルトスの軍事ステーションである『ヴァルナ』とも似通っている。

普段からデブリ帯の中に身を置き、ミラージュ・コロイドで姿を隠している為に誰にも発見する事が出来ない。

さらに迎撃用に設置されたビーム砲台にブースターユニットを備えている為に万一の場合でも移動も可能という、要塞顔負けの装備が施されている。

ラウはこのアケロン治療を受け、傷を癒した。

主治医であったヴェクト・グロンルンドの試作実験型ナノマシンの実験などにも協力しながら、動き出す時を待っていたのだ。



「カース様？」

「いや、お前と初めて出会った頃の事を思い返していただけだよ」

No.1とラウが出会ったのはユニウス戦役中盤。

戦況は激化の一途を辿り、ラナ・シリーズが実戦投入され、ギルバート・デュランダ

ルが世界に向けロゴス打倒の演説を行った頃だった。

当時にラウは陰でクロードの支援を行いながら地球軍ファントムペインの一員として動いていた。

当然、ネオ・ロアノーク達に感づかれまいようにだ。

その過程でとある一団が連合の研究成果——ラナ・シリーズを私物化しようとしているという情報が入り、ラウが調査に向かった。

そいつらは所謂企業関係の人間だった。

残されていた資料によれば、コストのかからない強化人間の開発が目的だったらしい。

つまり連中が行っていたのは、口にするにも憚られる人体実験の数々。

それはラウにとつても忌々しい幼い頃の記憶とダブるものだった。

だから——排除した。

一人残らず、この世から消し去った。

保護した実験体の大半は死亡していたが、数少ない生き残りの中にいたのがラナ・シリーズ初期型のNo. I だったのだ。

「そうですか。あの日から私の命はカース様のもの。好きに使われてください」
カースは恭しく頭を下げるNo. I に苦笑しながら肩を竦める。

「気負いすぎだ、No. I。今は休め。これは命令だ」

「……了解いたしました」

素直に頷き格納庫を出ていくNo. Iを見届けたカースはサタナエルの調整に向かおうと踵を返すとエリニスが近づいてきた。

「カース様、ブリッジより連絡です。予定通り、ジブラルタルの方に向かったそうです」

「そうか。ならば後はアルネーゼ達に任せておけばいい」

「我々は向かわないのですか？」

「この位置からでは間に合わんよ。マケドニア要塞の方はどうだ？」

「そちらも予定通りでした。ブレーズ大佐達がクーデターを目的に動いていたようですが、こちらの仕込みで彼らの動きを察知したイスラフィール代表によって抑えられたようです。それでも多少の戦闘と被害により、要塞内の混乱は未だに続いているようですが」

目を付けていた通りに動いてくれる。

思惑通りの展開にカースは思わず口元を歪めた。

ガスパール・ブレーズ大佐達がイスラフィールを快く思っていないことは知っていた。

当然、統合軍の話が出ればイスラファイールに取って代わろうとする事も予想済みだった。

だから以前からマケドニア要塞に出入りしこちら側の人間を内部に潜入させていたのだ。

「ブレーズ大佐達は捕縛されたのか？」

「いえ。事前に脱出経路を用意していたらしく、賛同者を率いスエズからビクトリアに逃れ、宇宙に上がったようです」

「何処までも分かりやすい」

彼らが宇宙に上がって行く場所など限られている。

探し出す事は容易だろう。

「我々も宇宙へ上がる。準備しろ、エリニス」

「ハ……カース様、一つよろしいでしょうか？」

「何だ？」

「……リースとは何者なのです？ 私と関係があるのですか？ それにあの男や何よりもあの機体ブリュンヒルデ……よく分かりませんが、あれらを思い出すと苛立ちが募ってくる」

エリニスは感情を抑えるように拳を握る。

最近、常に苛立ちを感じていた。

そのきっかけは——あのモビルスーツ『ブリュンヒルデ』

正確にはブリュンヒルデを操っていたパイロット。

奴の事を考えるだけで、腸が煮えくりかえるような怒りが沸き起こってくる。

それだけならまだしも、その感情がまるで抑えられない。

これは今までにない、初めての出来事だった。

「気になるかな、エリニス」

「勿論です」

その返事にカースは酷く楽しそうな笑みを浮かべた。

「……リースとは——」

続く言葉にエリニスは今までにない程の衝撃を受ける。

同時に納得もしたし、何よりも——

倒すべき怨敵の名前が知れた。

「……レティシア・ルティエンス」

エリニスのその声には今までにない憎悪という名の熱を帯びていた。



木々が並び立つ林の中。一台の大型トラックが碌に舗装もされていない道を走っていた。

荷台にはモビルスーツと思われるものが積まれ、シートで覆い被されている。

そのトラックの助手席にアオイは座っていた。

「なあ、本当にこの道で大丈夫なのか？」

今、トラックが通っている道はマケドニア要塞から来る部隊の哨戒ルートに程近い。

アイザックでヨーロッパを動き回っていた頃に得た情報なので正確とは言えないが、この近辺が危険な事は間違いない。

何故ならこのルートのずっと進んでいった先には、ザフトの拠点であるジブラルタルが存在するのだから。

しかし心配気味に聞くアオイの事など気にしないとばかりに運転しているフードの男は淡々と答えた。

「……大丈夫だと言った」

一見胡散臭いフードの男と何故アオイが一緒に行動しているかと言えば、成り行きとしか言いようがない。

オスロ基地でネオと連絡を取ったアオイは自身の報告とパナマの状況確認を行った。

《久しぶりだな、少尉》

「大佐もお元気そうで。すでに報告は読まれたとは思いますが、アイザックが沈められてしまいました。フォルケンマイヤー少尉を含めた優秀な人員も何名も失い、これはすべて俺の責任です」

《いや、責任を問われるべきは私だろう。むしろ少尉は限られた人員しか配備されなかった中で良くやってくれた》

ネオの氣遣いに再び罪悪感が湧き上がってくるが、気持ちはずでに切り換えた筈だと密かに自分の膝を叩いた。

「……大佐、ステラは元気ですか？」

《ああ。元気だよ、少尉に会いたがっていた》

「そうですね。俺の方も元気だと伝えてください。パナマの方はどうなっていますか？」

《現状は前と変わらずメキシコ付近で睨み合いだ。だが、どうやらフリードマン少将は不在らしいからな。そういう意味では楽な方だよ》

ネオが口元で微かに笑みを浮かべる。

「そうですね……でも大佐、無理はしないでください。食事とか睡眠とかきちんとなら取ってます？」

画面に映るネオは仮面を被っており、他人が見てもその表情を読み取る事はできないだろう。

しかし付き合いの長いアオイにはネオが疲れているという事がすぐに分かった。咎めるようなアオイの声にネオは嬉しそうに笑みを深めた。

《私は大丈夫だよ。それよりも少尉に渡したいものがある》

「渡したいもの？」

《君の新たな力だ。輸送機に運ばせているから、送ったポイントへ向かってほしい》
ネオが指定してきた場所はジブラルタル近郊。

近郊とはいえその距離はずいぶん離れており、同盟と統合軍の活動領域が重ならない空白地帯のような地点だが。

「何でジブラルタル近郊なんです？ オスロ基地じゃ駄目なんですか？」

《できればそうしたいが統合軍が動いていて近づくことができない。かといってパナマに戻ってくるような余裕はないだろう。それに情報によれば統合軍の一部隊がジブラルタルの方へ動いているという話もある》

「ジブラルタルに……どうして今ジブラルタルを、いや、その話同盟には？」

《勿論、すでに送っているよ。少尉は荷物を受け取ったらジブラルタルに向かい、もしもの場合は援護に入れ》

「了解！」

そうして指定された場所へ向かった訳なのだが、問題があった。どうやってそこに向かうかである。

同盟は統合軍を警戒して動く事ができない。

もう少し早ければドミニオンに同乗させてもらうという手もあったが、それももう無理だった。

だからアオイは難民に扮し、各種交通機関を使って目的地近くまで向かう事にした。オスロからアムステルダムに向かいそこから別の街までたどり着いた所までは順調だったのだが、そこで問題が起きた。

偶発的な同盟軍と統合軍との小競り合いが起きたのである。

それにより鉄道は止まり、バスも通れず、結果立往生する羽目になってしまった。

もう普通的手段では目的地までたどり着けない。

だからアオイは同盟の伝手を頼り傭兵を雇い護衛と目標ポイントまでの運搬を依頼する事にしたのだ。

そうして今に至る訳なのだが――

「やっぱり不安だな。この辺りはマケドニアの哨戒の部隊が来る筈だけど」
不安な表情を隠さずにフードの男の方を見る。

傭兵なんてやっている以上は訳アリなのは分かるけど、ここまで胡散臭い奴が来るとは思っていなかった。

まあ素性を隠しているアオイの事も相手は同じように思っているだろうが。

そんなアオイの様子も気にせず、フードの男は相変わらず感情を籠めないまま口を開いた。

「連中は動かない。いや、動けないだろうな」

「どういう事だ？」

「……要塞内でゴタゴタがあった。クーデターでも起こったのかもな」

「何でそんな事を知っているんだ？」

「噂話だ。要塞から逃げ出した兵士でもいたんじゃないか？」

確かに統合軍誕生に関して全員が納得していたとは思えない。

不満を持つ者たちが反旗を翻したとしてもおかしくはないのだが、あそこまで用意周到に準備する連中がそんな不穏分子に対して対策を練ってなかったというのには不自然さを覚えた。

「……それよりお前も傭兵なのか？ それとも同盟軍の兵士か？」

「何でそう思う？」

「その訓練された動きを見れば馬鹿でもわかるだろ」

男は目ざとくこちらの素性を看破してくる。

伊達に傭兵なんて危険な職業を生業としている訳じゃないという事だろう。

「……聞いてどうするんだ？」

警戒しながら腰に忍ばせた銃を掴んだ。

だが、それでも男はただ前を見てトラックの運転を続けながら問うてくる。

「ただ聞きたいだけだ。何でお前は戦う？ 復讐か？ それとも生きる為か？」

何故、そんな事を聞いてくるのか分からなかったが、茶化す気にもならなかった。

それはフードの男の声が真剣なものであると気が付いたからだ。

「……そりや色々あるさ。守りたい人達もいるし、何よりも託されたものもある」

「……託された？」

「ああ。先に逝った仲間や義父からさ。彼らの為にも無責任な事だけはしたくない」

義父はアオイの在り方を示してくれた。

アウルは戦場の無常さを教えてくれた。

ステイングは守るものを——ステラを託してくれた。

他にも多くの人の言葉や行動がアオイを形作っている。

その人達に背を向ける事はできない。

「綺麗ごとを言う気はない。俺のやっている事は人殺しだ。でも、だからこそ逃げる

訳にはいかないんだ」

これからも誰かの死を——仲間を失い続け、誰かの仲間を奪っていく。それでも逃げる事だけはできない。

「誰かの為という事か……」

「そういうお前はどうかんだ？ 何で戦う？」

「……俺はただ倒したい奴がいた。そいつを倒しそして——」

フードの男はそこで初めて笑みのようなものを漏らした。といつても苦笑したようなものだったが。

どうやら勝ちたかった相手が居たらしい。そいつを倒す事だけを考えて来たのだと、本物になるとフードの男は語った。

詳しい事情までは分からないが、話の概要から察すると彼はステラ達と同じような境遇なのかもしれない。

勝ちたいという気持ちは分からないでもない。

アオイもかつては憎しみに飲まれかけた事がある。

その時は何が何でも相手を殺したいと思ったものだ。

でもその時にアオイにはステラがいた。

彼女が自分を憎しみから救ってくれたのだ。

「アンタの詳しい事情は知らないから偉そうな事は言えないけど。多分勝ったって何も変わらないと思う」

「何？」

「勝つても負けても、アンタはアンタじゃないか。アンタが変わる事は出来ても、他の誰かになる事はできないと思う」

フードの男が初めてこちらを見た。

その眼は真つ直ぐアオイを見据えている。

一歩間違えばそのまま殺意に変わるのではと思えるほどに鋭い。

それでもアオイは言葉を止めなかった。

「俺の守りたい子もそうだよ。兵器としてずっと扱われ続けて心身共にボロボロになった子がいてさ。でもどんなになってもその子はその子だ。他の誰でもないよ」

「……俺もそうだと言うのか？」

「ああ」

男は少し考えるようなそぶりを見せると、初めて微かな笑みを浮かべた。

「ふん、一応忠告として聞いておいてやる」

「素直じゃない奴」

アオイも男に向けて笑みを向ける。

トラックの中の張りつめた空気が弛緩する。

その時、大きなスラスター音と共にスピーカーから声が聞こえてきた。

《そのトラック！ ここは戦闘宙域である！ 直ちに退去せよ!!》

木々の隙間から見えたのは統合軍のイリアスだった。

「……おい、ここに統合軍は来ないんじゃないのか？」

「……噂話って言っただろうが。絶対にとは言っていない」

《トラック、停止しろ!》

威嚇のつもりかイリアスはトラックの進路を塞ぐようにトーデスシュレツケンを撃ちこんでくる。

「何が止まれだよ！　トラックごと破壊する気か！」

「チツ、仕方ない。おい、ここまでだ！　トラックを降りろ！」

「ハア!？」

「目的地はすぐそこだ！　あのイリアスは俺がやるから、お前は走れ！」

反論する間もなくトラックが急停車するとフードの男が外に飛び出し、それに続くようにアオイもトラックから飛び降りる。

フードの男は荷台に上り、シートを剥がすと載せてあったモビルスーツが姿を見せた。

「これって『ハイペリオン』か？」

この機体はユーラシアで開発されていた機体でデータ上では知ってはいたが実物は初めて見る。

「何やってる！ さっさと行け！」

「分かったよ。ここまでありがとう！ 俺はアオイ・ミナトだ！ お前の名前は？」

コックピットに入ろうとする男は振り返るとフードを取った。

長い黒髪に思った以上に整った顔。

同年代の青年の姿にアオイは少し驚いた。

「俺の名前は——」

イリアスの放ったトーデスシユレツケンの爆音と男の声が重なるが、アオイにはきちんと名前が聞こえていた。

「死ぬなよ！」

「お前もな！」

その場は任せアオイは全速力で木々の間を走り抜ける。

しばらく走り続けていると後方から凄まじい轟音が響き渡った。

振り返ればハイペリオンが徐々にイリアスを引き付け、この場所から引き離していくのが見える。

こつちに気を使ってくれたという事だろう。

アオイは感謝しながら必死に走っているとやや開けた場所に鎮座しているコンテナの姿が見えてきた。

コンテナの上には木の葉のついたネットが被せられ、上空から発見できないように細工されている。

運んできた輸送隊が敵から発見し難いようしていたのだろう。

「あれか！」

そのまま走ってコンテナの方に近づき設置されたパネルに暗証番号を入力する。

「コンテナに設置された自爆システム解除」

この番号を入力しないままコンテナを運ぼうとしたり、中身を奪おうとすると設置された自爆装置が働く事になっている。

慎重に番号を入力し、パネルに手をかざす。

「アオイ・ミナト」

アオイの声に反応しコンテナの扉が開き、中に足を踏み入れるとそこには鋼鉄の巨人が自分を動かす主を待っていた。

「エクセリオンか」

G A T - X 0 0 2 『ユニオン・エクセリオンガンダム』

エクセリオンガンダムの正式後継機。

背中に存在する二基の高出力ウイングスラスターがやや大型化したのが、出力は段違いに増しており機動性も向上している。

さらに鹵獲したアルカンシエルの技術も投入され、ミラージュコロイドを散布して幻惑、防衛としても活用できるようになっていた。

アオイはパイロットスーツに着替え、エクセリオンのコックピットに乗り込むとシステムを立ち上げる。

「VPS装甲展開、武装チェック完了、機体状態オールグリーン、W・S・システム正常稼働、エクセリオンガンダム起動！」

コンテナの天井が左右に開閉され、空が正面に見える。そこでリーダーに敵の反応が映し出された。

「3機のイリアス——統合軍。別動隊か？」

もしくは先に遭遇した連中が呼んだ援軍なのかもしれない。

ハイペリオンの反応はすでになく、かなり離れてしまったようだ。もしかするとすでに敵を片付けた後で離脱したのかもしれない。

「さっさと片付けてジブラルタルに向かう！」

アオイはコンテナの天井が開き切るのを待たずにエクセリオンの最強武装であるア

ンヘルIIを構えると躊躇う事無くトリガーを引く。

銃口から発射される強烈なビームがコンテナの天井を破壊し、空を飛ぶイリアスを消し飛ばした。

「何!?!」

「敵か!?!」

舞い上がる爆煙の中から飛び出してきたモビルスーツにイリアスのパイロットたちも目を見開いた。

「まさか」

「エクセリオンだど!?!」

背中の大型ウイングスラスタを噴射させ、加速したエクセリオンは瞬く間にイリアスの懐に飛び込んで来る。

「速い!」

イリアスのパイロットが盾を構える暇も与えず、エクセリオンのビームサーベルが左手を奪った。

「ぐっ、まだ!」

残った右手で構えるビームライフル。

しかしそれもエクセリオンを捉えられずに空を薙ぐのみ。

次の瞬間、背後に回ったエクセリオンの一撃で腹を抉られ、撃墜された。

「な、何だ、今の動きは？」

イリアスのパイロットが驚くのも無理はない。

今のエクセリオンの動きは明らかにおかしかった。

まるでパイロットが反応する前に機体が先に動いていたのではないかと錯覚するような、そんな反応だった。

その時、イリアスのパイロットの脳裏にある種の噂話が思い出された。

それはW・S・システムに関する妙な噂だった。

曰くエクセリオンに搭載されていた初期型のW・S・システムはパイロットの操作より前に機体を動かすというものだ。

初めて話を聞いた時はそんな馬鹿な気にも留めなかった。

しかし実物を見るとそうとしか思えない反応で動いている。

「そ、そんな馬鹿な事が！」

恐怖に駆られ、ビームライフルを連射するイリアス。

しかしエクセリオンには届かない。

ウイングスラスターの推力でビームを振り切り、空中でバレルロールしながら的確に攻撃をかわしていく。

「くそ、くそ！」

焦りが射撃の精度を落とし、判断力を鈍らせる。

それを見越したエクセリオンが発射したビームライフルがイリアスの足を直撃した。

「ぐあああああ！」

バランスを崩し、地表へ落ちていくイリアス。

どうにか体勢を立て直そうとしたその時、エクセリオンのアンヘルがイリアスに向けている事に気が付いた。

「あ」

避けられない。

無慈悲な銃口から発射された強烈な閃光がイリアスを包み、パイロットの視界を焼いていく。

死の恐怖を抱く間もなく蒸発したパイロット諸共、イリアスは爆散した。

「フウ、良い調子だな。前よりも機体が馴染んでる気がする」

これもW・S・システムのお陰だろう。

「でもこいつまた勝手に動いたんだよな」

アオイが動かす前にエクセリオンはイリアスの攻撃を避けていた。

背後に回り込む時もシステムのお陰か流れるようにできた。

動きを補助してくれる程度なら文句はないのだが、アオイが動かすよりも機体が先に動くというのは少し不気味なものを感じさせられてしまう。

「まあ気にする必要もないんだけどさ……とにかくこのままジブラルタルへ向かう」

アオイは一度だけ別れたハイペリオンが居た方角を振り返る。

「……無事だな」

アオイはそう呟くと今度こそ振り返る事無く、ジブラルタルの方へと機体を向かわせた。



その部屋は上流階級の人間が住んでいるような場所だった。

高級感が漂ってはいるが、決して派手ではなくある種の上品さもある。

そんな部屋のベットに一人の少女が眠っていた。

少女の眉が僅かに動き目を覚まそうとした時、一人の男が部屋へ入ってきた。

慣れた様子でベットの方へ近づいていくと丁度少女が目を覚ます。

「おはようと言おうべきか、ベアトリーゼ・フォルケンマイヤー少尉」

いつもと変わらない冷徹な覚悟を滲ませた男——クレメンス・イスラフィールはベアトリーゼに声を掛けた。

第28話 ジブラルタル襲撃

ゆっくりと目を覚ましたベアトリーゼの耳に飛び込んできた声は予想すらしていない人物のものだった。

「おはようと言うべきか——ベアトリーゼ・フォルケンマイヤー少尉」
目覚めたばかりだと言うのに肌で感じる程の威圧感。

冷徹な覚悟を滲ませた男クレメンス・イスラフィール。

敵対していた保守派の首魁が目覚めた時に目の前に居るなど誰が想像できようか。

「……此処は」

ベットの上で両手を縛られ、視線だけを動かし部屋の様子を観察する。

見たこともない部屋に目の前に居る敵の首魁。

考えるまでもなく、自分は敵に捕まったのだと理解する。

「捕まった」

徐々に記憶が蘇ってくる。

ミュンヘン会谈で起きた襲撃。

アイザックに襲い掛かるテタルトス軍。

自分はテタルトスの指揮官機によって撃墜されてしまったのだ。

「私をどうするつもりだ？　どんな拷問を受けようが、仲間の情報は渡さない」

ベアトリーゼが威嚇するように睨みつけると、イスラフィールは肩を竦める。

その眼差しはどこか憐れむようにも見えた。

「拷問などの外的外れもいいところだ。もう少し聡明かと思っていたがな」

「………何？」

「情報が欲しいならもつと効率のいい方法を使う。……何より情報なら以前からずつと手に入っている。そうだろう、ベアトリーゼ？」

何を言っているのだ、この男は？

なんでこちらに同意を求めるような口調で話しかけてくる？

いや、まさか——

ベアトリーゼの中に湧き上がった疑惑に困惑や拒絶といった感情が入り混じり、頭の中がパニック状態になる。

それでも表面上平静を保てたのは、日頃から培ってきた訓練の賜物だったのかもしれない

ない。

だが、今回はそれが余計にベアトリーゼを苦しめる結果となった。

冷静であるが故にイスラフィールの言葉の意味が正確に理解できてしまったのだから。

表面上冷静さを保っているようでベアトリーゼの動揺は収まる事無く、胸中をかき乱していく。

「理解が早い。お前の考えは正解だよ、ベアトリーゼ」

イスラフィールは何の感情も込める事無く淡々と事実をベアトリーゼに突きつける。

「——情報を流していたのはお前だ」

理解していた事だが改めて突きつけられると、想像以上のショックだった。

叫び出しそうな屈辱と憤りを押さえつけ出来るだけ冷静にイスラフィールに聞いた
だす。

「……何時、私に？」

少なくともベアトリーゼ自身にそんな自覚は無かった。

そうなる则自分の知らないうちに何か細工をされたと考えるのが自然。

しかし事實はベアトリーゼの考へている以上に残酷だった。

「何かしたというなら初めから言つておこつて」

「初め、から？」

「そうだ。初めから、お前が生まれた瞬間からだ、ベアトリーゼ」

「っ!？」

「ベアトリーゼ・フォルケンマイヤー、ドイツ在住の資産家夫婦の長女として誕生。幼少の頃に両親の仕事上の都合でアメリカに移住。荒れる世界情勢と元々空軍パイロットだった父親の影響を受け、軍に志願。ユニウス戦役で初陣を経験、その後改革派へ参加。お前の経歴だがどこか間違つてゐるか？」

間違つてゐない。

ベアトリーゼ自身の経歴である。

だが、それもイスラフィールの言葉を信じるならば——

「すべて我々が作つた偽りの経歴だよ」

ベアトリーゼは自身の中に罅が入る音を聞いた。

今まで信じていたすべてが嘘？

父も母も、一緒に学んできた友人達も全部が嘘だった？

「そんなこと、信じられる訳がない！」

「なら父親と母親の顔が思い出せるか？ 友の顔は？ お前が住んでいた場所は？」
イスラファイルの問いにベアトリーゼは答えられない。

家族の顔が、友人の顔が、思い出の場所が全く思い出せなかったからだ。

まるで初めからそんなものは無かったのだと言わんばかりに。

「な、何故……いや、私が眠っている間に細工を……」

「往生際の悪い。そう思いたいなら思っておけ。先の経歴で真実なのはお前が地球軍に志願し訓練を受けたという部分だけ、後はこちらの創作だ」

「あ、あ、ああ」

今まで自分を支えてきたベアトリーゼのすべてが壊れていく。

「お前はこちらが作った人形だ」

「あ、ああああああああああ!!」

ベアトリーゼの絶叫が部屋に木霊する。

それすら意を返さないとばかりにイスラファイルは無表情のままベットへ歩み寄った。

「予定よりも少し早いに戻ってきてもらおうぞ」

ベットで暴れるベアトリーゼの腕を無理やり掴むと手に持った薬を注入する。

「眠るがいい。目覚めたときには余計な事は忘れている」

「あ、ああ、あ、悪、魔め」

「そうだ。俺は悪魔で外道だ。そんな事は重々承知しているとも。それでもやらねばならない。それが必要なら俺は躊躇う事無く手を汚そう。恨みたければ恨むが良い」

ベアトリーゼの意識が遠のき、体から力が失われていくのを感じる。

自分でいられる最後瞬間、脳裏に浮かんだのは共に戦ってきた戦友の顔だった。

「す、まない、ア、オイ」

完全に意識を失ったのを確認すると外で待機していた研究者達が抱えた機材と共に部屋の中に入り、ベアトリーゼを医療カプセルのようなものに運び入れる。

「イスラフィール代表、予定通りでよろしいのですか？」

「構わない。使える駒は多いほうがいい。それとも不満でもあるのか？」

「いえ、しかし、その、彼女は……妹君でしょうか？」

「違うな。血縁上は確かに異母兄妹だが、『コレ』はあの女の妄執が生んだ人形。断じて兄妹などではない」

冷たいながらも確かな怒気を含ませながら、吐き捨てる。

それに当てられたように固まった研究者達を尻目にイスラフィールは外に向かって

歩き出した。

◇

統合軍が宇宙での動きを活発化させようとしている——そんな情報が同盟を駆け巡った。

当然のことだが同盟としても黙っている訳にはいかず、各部隊が警戒の為に哨戒任務についている。

そんな中、ヴァルハラ付近を航行していたオーデインだけは別行動を取っていた。

「アルミラ艦長、地球から緊急通信です。ジブラルタルが統合軍の部隊に襲撃を受けていると」

「それで宇宙から増援を回せと？」

オペレーターからの報告に艦長席に座るテレサは渋い表情を隠さない。

緊張感漂う今の宇宙から戦力を回せというのは無茶が過ぎる。

主戦場が宇宙へ移行する事は誰もが予想し得ているだろうに。

しかしだからと言って無視もできない。

ジブラルタルはザフトの拠点であり、同盟にとっても重要な場所。

仮にジブラルタルが落ちれば、次はそのままスカンジナビアに矛先が向いてもおかしくない。

「仕方ないな。準備が出来ているのはあの機体のみ……格納庫よりアスカ中尉を呼んでくれ」

「ハ！」

彼ならばジブラルタルの事も詳しいし、適任だろう。

「アスカ中尉、出撃後に我々は任務に就く。機体調整に出ているルティエンス達を呼び戻せ」

「了解」

テレサは戦いが起きている地球から全く別の方向へと視線を向ける。

何も見えない宇宙の先。

戦いの火蓋が切って落とされようとしているその場所にオーデインも足を踏み入れようとしていた。

◇

ジブラルタル基地はヤキン・ドゥーエ戦役以降も地球上に存在するザフト拠点の一つ

である。

ユニウス戦役時は地球連合のスエズ基地攻略の拠点として使用され、戦争終盤には口ゴス幹部達が逃げ込んだヘブンスベース攻略作戦『オペレーション・ラグナロク』に参加する勢力の集結地点にもなった。

現在でもスカンジナビアと連携を取りながら、マケドニア要塞を抑える要として重要な役割を担っている。

だがジブラルタル基地は今、統合軍の部隊による襲撃を受けていた。

全面に展開されるザフトの部隊。

その中にはアムステルダムから無事に帰還を果たしたハイネ達特務隊も混じっていた。

「チツ、ここうも簡単に攻め込まれるとはな」

ギアを操るハイネは斬りかかってきたイリアスをビームトマホークで容易く振り返り討ちにすると、戦況を確認する。

統合軍の数はそう多くはないが海上と陸地の両面から攻撃を加えて来ていた。

ジブラルタルを攻め落とそうとするには数が少ない。

だが、本気で攻めてきていない訳ではなかった。

水中からの襲撃はフォビドゥン系のモビルスーツのようだが、アッシュ部隊に任せて

おけばいい。

問題は陸地からの攻撃だった。

奇襲に近いレイダーの上空からの襲撃により混乱した戦線を残りの2機のガンダムが斬り崩す。

まるで自分達だけで基地を破壊すると言わんばかりに猛威を振るっていた。

防衛の為に撃つたザクやグフが苛烈な砲撃の前に成す術なく撃墜されていく。

「狙いは……何だ？　たく、お偉方もいるってのに……もしかしてそれが狙いか？

いや、何にしろ、連中を止めないと被害が増える一方だな！」

ハイネは暴れまわる三機のガンダムの方へ機体を向かわせる。

「ザフトの新型機のお出ましか！」

ジブラルタル基地で暴れていた三機の前に現れたオレンジ色のギア。

それを見たアルネーゼは笑みを浮かべる。

「その性能を見せてもらおうかね！」

「お手並み拝見ってね。俺が行きますよ、姉御！」

「アンタは下がって！　私が行くよ！」

「ハア!？」

前に出ようとしたジルバールを押しつける形でフォビドゥンが前に出る。

ゲシユマイデイヒパンツァーでビームを弾いたカーラがニーズヘグを構えて突撃した。

「落ちろ！」

「こいつに遠距離戦は不利か！」

射撃の効果が薄いと判断したハイネもビームトマホークを抜きフォビドウンを迎え撃つ。

空中でトマホークと鎌が交錯、火花を散らして激突する。

「カーラの奴、気合いが入ってるな」

「フフ、気になる男に格好つけたいってところだろうね」

「ああ、クアドラード少佐ですか」

カーラは最近、統合軍の上官であるヴィルフリート・クアドラード少佐と仲がいい。

というよりもカーラが一方的にヴィルフリートに懐いてる感じだろうか。

ジルベールも作戦前に何度か話をしたが、カーラが懐くのもよく解る良い上官だった。

噂ではかなり悪く言われてたので、どんな奴なのかとも思ったが完全に肩透かしだった覚えがある。

人の噂など鵜呑みにできないという事だろう。

「嫉妬するかい、ジルベール？」

「勘弁してくださいよ、姉御。俺はもつとお淑やかな子が好みなんですよ。じゃじゃ馬は無理っす」

ただでさえ日頃から気苦労が絶えないというのにカーラみたいな跳ね返りは御免である。

「ジルベール、聞こえてるから！ 帰ったら覚えときなさいよ！」

「うげ」

「ハハハ、とんだ藪蛇だったね！」

軽口を叩きつつも手は止めない。

カラミティの強烈な砲撃がザクを消し去り、レイダーの鉄球がグフを蹴散らす。猛攻を前にザフトの部隊は二機を押しとどめる事も難しくなっていた。

「落ちろー！」

レイダーを狙うバビの攻撃をモビルアーマー形態で回避し、そのまま背後に回って組み付くとビームクローで胴を裂く。

半壊した状態でなおも往生際悪く暴れるバビに口元からツォーンを叩きこんだ。

「悪いが、空中戦でこのレイダーに勝てると思うなよ！」

爆散した敵機の煙を払うように鉄球ミユルニルIIを頭上で回転させながら、ジルベールはバビを寄せ付けない。

レール砲と鉄球のコンビネーションに援護に駆け付けたグフも動きを止めざる得ない。

そこを狙ったカラミティの砲撃が空を焼き払った。

「戦場で動きを止めるなんて馬鹿なのかい！」

胸部のスキュラ、背中のシユラークから発射された砲撃は正確にグフを貫き、バビのフォーメーションを崩す。

その隙を見逃さず、突撃したレイダーによつて空中のバビは次々と屠られていった。

「くそー！」

「アンタの相手は私でしようが！」

フォビドウンの相手をしながら二機のガンダムの猛攻に押される防衛部隊の姿にハインは思わず歯噛みする。

そして同時に連中の目的にも確信が持てていた。

二機のガンダムが目指している場所は管制塔などがある施設群だ。

あそこにはアムステルダムから避難してきた同盟の首脳が集まっている。

当然、テタルトス議員達も一緒である。

「やっぱり狙いはお偉方か！ 行かせるかよ、そこどけ！」
ハインの放ったビームはすべてゲシュマイディヒパンツァーによって歪曲されてしまふ。

かといって接近戦に切り替えても、巨大な鎌が待ち受けている。

「性能じゃ負けちゃいけないが、相性悪すぎだろー！」

ギアはザフトの最新機だけあつてその性能はかなり高い。

統合軍のイリアスやH・アガスティア、最近投入されたバウなどと比べても遜色ない性能を持っている。

目の前のガンダムとも十分互角に戦えている。

だが、それとは別に今の武装でビームを歪曲させるゲシュマイディヒパンツァーを攻略するのは困難だった。

「こんな事ならブレイズウイザードじゃなく、スラッシュウイザードでも持つてくりや良かったぜ。ま、それでも負ける気はないけどな！」

上段から振り下ろされた鎌を力一杯トマホークで弾き、フォビドウンの懐が無防備になる一瞬を狙ってハンドグレネードを切り離した。

「なっ!?」

グレネードが炸裂し、カーラの眼前を閃光が焼く。

爆発の衝撃と共に吹き飛ばされたフォビドゥンにミサイルを叩きこんだ。

「きゃああああ!!」

「よし、このまま引き離して——ッ!?!」

フォビドゥンを引き離し、カラミティとレイダーの後を追うとしたハイネの背後から別の機体が急速に接近してきた。

「ま、まさか、ヴィルフリート少佐!?!」

「銀色のモビルスーツ!? ジンII・アクティブって奴か!」

凄まじい速度で突撃してきたジンII・アクティブの放った斬撃がギアに襲い掛かる。

「速い!」

ハイネは迫るビームサーベルを持ち前の反応でギリギリシールドで受け止める。

シールドで阻まれたサーベルの閃光がモニターのチリチリと弾け、視界を若干塞いだ。

「少尉はやらせん!」

「少佐、どうしてここに?」

ヴィルフリアートの部隊はあくまで控えとして戦闘区域から離れた位置で待機していた筈。

「余計なお世話だとは思ったが、援護にきた。怪我はしていないか?」

「え、はい。ありがとうございます、少佐」

「……一度補給に下がれ。ここは俺がやる」

下がるフォビドウンを援護するようにヴィルフリートが振るった一撃がギアを弾き飛ばし、続けて放ったビームキャノンが構えたシールド諸共機体を吹き飛ばした。

「ぐう、やるな！ 統合軍のエースかよ！」

「そんな大層なものじゃない。俺はただの一兵士だ」

「そうかよ！」

ブレイズウィザードからミサイルを発射し、ジンII・アクティヴに叩き込む。

近接防御機関砲で迎撃する敵機にハイネはそのまま近接戦を挑んだ。

「さっさと蹴りをつけさせてもらおう！」

「全力で来い！」

構えたビームサーベルがビームトマホークと激突する。

空中で立ち位置を入れ替えながら、二機のモビルスーツが何度も斬り結んだ。

「手強い！ こいつに手こずってる暇はないってのに！」

「勝負の途中で考えごとか！ そんな事で俺は倒せん！」

カラミティとレイダーに気を取られたハイネはヴィルフリートを攻めきれない。

それどころかハイネの動きを見切ったジンII・アクティヴが空いた左手で引き抜いた

ビームサーベルがギアの肩を斬り裂く。

「ぐっ」

「全力で来いといった筈だ！」

「こいつ、強い！」

幸い傷は浅く、動きに支障が出るものではない。

しかしヴィルフリートは手を緩める事無く、続けて攻撃を加えてきた。

繰り返された斬撃はすべてが必殺であり、隙は全く見当たらない。

ハイネはシールドを使つての防戦を強いられていた。

「ッのー」

地面ギリギリを滑るように移動しながら無数に放たれる斬撃をシールドで受け流す。

できればすぐにでも援護に駆けつけたい焦燥に駆られるが、ヴィルフリオの攻撃を

捌くので精一杯だ。

しかしその間にもレイダーがバビの包囲網を抜けようとしているのが見えた。

「そこ、ハアア！」

レイダーの鉄球をもろに受けたバビを地面に叩き落とし、作られた隙間を狙ってイリ

アスが次々と押し寄せていた。

浮足立った防衛隊は統合軍の思惑通りに戦線を崩されてしまった。

数では圧倒的に勝っているとはいえここを突破されればザフトはかなり不利な状況に追い込まれてしまう。

「ジルベール、ザフトが体勢を立て直す前にさっさとやりな！」

「了解！」

そのままジルベールがバビ部隊を突破しようとした時、その機体は降りてきた。

高度から放ったビームライフルの射撃がイリアスに次々と突き刺さり、撃破していく。

その精度は非常に高く、ザフトをかき乱していたイリアスの半分が撃墜され、同時にハイネと相対していたジンⅡ・アクティヴを引き離した。

「このタイミングで増援かよ！」

狙われたジルベールは必死に回避運動を取りながら上空に存在する敵機に視線を送る。

そこにいたのは特徴的な赤い翼と背中に背負う二本の大剣を携えた機体だった。

「デステイニーインパルス？ いや、同盟のデステイニーか？」

降り立った機体はかつて自分が搭乗した事もあるモビルスーツと酷似していた。

イリアスを撃墜した以上敵ではないだろうと判断し通信を繋ごうとしたハイネの耳に聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「こちらシン・アスカ中尉！」

「シン!?!」

通信機から聞こえてきたかつての仲間の声にハイネは思わず目を見開いた。

「ハイネか!?!」

「お前なんで此処に?」

「ジブラルタルが襲撃されてるって連絡が入って増援を送るようになつち命令が来たんだよ。とにかく話は後だ、援護に入る！」

「……頼む！」

新型のコックピットに座るシンは改めてスペックを確認する。

ZGMF-X31A 『リベラシオン・デステイニーガンダム』

ユニウス戦役に投入された「リヴォルトデステイニーガンダム」をザフトから提供された「デステイニーガンダム」のデータを用いて改修を施した機体。

新たに追加された装備であるパルマ・アルマ以外に武装面での大きな変更は無いが、内部には大幅な改良と強化が施されC・S・システムの反動も最小限に抑えられた。

シン・アスカ専用機として調整が加えられ、彼の力を最大限発揮できるようになっている。

「よし、これ以上好きにさせるか!」

背中からコールブランドを抜くと光の翼を解放する。

「行くぞ!」

動き出したデステイニーはザクを狙っていたイリアスの間合いに踏む込むと斬艦刀を一閃する。

想像もしていなかったデステイニーの動きに反応しきれないイリアス。

棒立ちになったまま斬艦刀で袈裟懸けに斬り捨てられた。

「は、速い!」

「動きが捉えられない!?!」

イリアスの放つビームライフルはすべて空を切り、デステイニーを掠める事もできない。

「それどころか姿を捉える事すら困難だった。

「何だ、残像なのか!?!」

「落ちろ、この野郎!!」

我武者羅にライフルを発射するがどれもデステイニーの残像を撃ち抜くだけで本体を捉えられない。

「遅いんだよ!」

逆袈裟からの斬撃が敵を斬り捨て、さらに投擲したスラッシュブローメランがイリアスの腹部に直撃した。

「これ以上やらせるか!」

さらに速度を上げ斬艦刀を振るい続けるデステイニーによつて基地内に進入していた敵モビルスーツの大半が斬り裂かれていった。

「くそ、このタイミングで新型か!」

デステイニーを脅威と見たジルベールは正面からの対峙を避け、その空戦能力を生かした攪乱戦法に出た。

速度を上げながら旋回し、デステイニーにレールガンで牽制しながら、ツォーンで背後から狙撃する。

しかしそれも見切ったとばかりにデステイニーは全てを避けきり、逆に反撃に転じてきた。

「避けた上に反撃かよ。掠り傷一つ付けられないとか、こいつも化け物だな!」

「こいつは統合軍の隊長機か!？」

レイダーは先ほど以上に旋回速度を上げる。

しかしデステイニーもまた翼を広げ、光を放出しながらレイダーに追隨する。

その速度はジルベールの予測を遥かに上回っていた。

「レイダーが振り切れないどころか、追いついてくる!？」パイロットだけでなく機体

も化け物かよ!」

「逃がすかよ!」

「けど、それで勝てると思うな!」

デステイニーに攻撃を加え、動きをこちらの思惑通りに誘導しながら背後へと回り込む。

「そこだ!」

計算通りのタイミングでジルベールは渾身の一撃を叩き込んだ。

「落ちろ!」

絶好のタイミング。

いかにパイロットが化け物であろうとも、流星に防御に回らざる得ない。

それがジルベールの狙いだった。

動きを止めたその時に至近距離からツォーンを撃ち込めば新型だろうと損傷は免れ

ないと判断したのだ。

振り抜いたミユルニルの鉄球がデステイニーに襲い掛かる。

しかし、デステイニーは振り返り左手を突き出すだけで、防御する素振りも見せない。次の瞬間——デステイニーの掌から閃光が走り、視界を焼く。

同時に鉄球が破壊され、閃光の延長線上にいたレイダーの左肩が吹き飛んだ。

「ぐあああ！　くそ、掌に武装……誘われたっていつのか!？」

「外したか!？」

シンが使った武装はパルマ・アルマと呼ばれるもので、デステイニーに装備されていたパルマ・ファイオキーナの発展型である。

状況に応じて三つの使用方法が存在し、今使用したのはパルマ・ファイオキーナの強化版である。パルマ・ジャヴェロット。

これはパルマ・フォキーナに比べ威力も射程も向上しており、アンチビームシールドによる防御すら貫通する破壊力を持つ武装である。

「……何とか致命傷だけは避けたが」

ジルベールは敵の誘導に嵌められた事に毒づきながら損傷を確認する。

ギリギリのタイミングで機体を捻った事が幸いしたのか、肩の装甲が奪われただけで戦闘に支障はない。

それでも左腕の動きは大分鈍くなってしまった。

「くっ」

「ジルベール、下がりがな。その損傷じゃ新型相手は無理だよ」

「……了解。俺いつもこんなのばかりだな」

損傷した機体状態を把握しながら、ジルベールは後退を図る。

「逃がすかよ!」

「追わせると思っかい!」

レイダーを追うデステイニーにカラミティーのスキュラが動きを阻み、援護に駆け付けたイリアスが攻撃を仕掛けてきた。

「次から次へと!」

邪魔な敵を斬り捨て、カラミティーの砲撃を回避すると地面に向けてビームライフルを発射する。

ホバーで滑るように地面を走り、撃ち込まれた数発のビームライフルを回避したアルネーゼはシンの射撃精度に舌を巻いた。

「やる。新型を任せられるだけあるって事か。潮時かね」

もはや流れは完全にザフト側へと傾いている。

この作戦の要は奇襲から敵が持ち直すまでの短い時間で目的を達せられるかにか

かっていた。

途中までは順調だったが、ザフトの新型の粘りと乱入してきた新型モビルスーツの驚異的な戦闘能力により戦力はズタズタにされてしまった。

さらに今いる自分達の位置も悪い。

ジブラルタルへ深く入り過ぎており、このままでは体勢を立て直したザフトの部隊に包囲殲滅されてしまう。

ただでさえ戦力的に不利な状況。

これ以上の時間経過は味方の犠牲を増やすだけでメリットはない。

「全軍撤退しな！ イリアス部隊、私達が殿を務めるよ。味方の脱出を援護——何!？」

アルネーゼが命令を下そうとした瞬間、イリアス部隊が別方向から発射されたビーム砲によって撃破されてしまった。

いや、撃破ではない。

消滅したと言った方が的確であろう。

イリアス部隊は発射された強烈な閃光に飲み込まれ、残骸すら残さず消えてしまった。

「並の威力じゃないね」

モビルスーツの持つビーム兵器にしては過剰ともいえる威力である。

攻撃力だけなら目の前の新型機を上回るかもしれない。

アルネーゼがモニターを拡大させ、目標を確認する。

「アレは……エクセリオン、アオイの坊やか」

後継機なのかデータで閲覧した事のある機体とは違いがあるが間違いなくエクセリオンだった。

アンヘルを構えてこちらに狙いをつけている。

「何とか間に合ったか!」

「その機体、アオイか!?!」

「下がれ、シン!」

連結させたアンヘルを切り離し、二丁を両手で構えるとトリガーを引いた。

発射された強烈なビーム砲が僚機として控えていたイリアスを吹き飛ばし、続けて発射された一撃がカラミティのミサイルポッドを破壊する。

「チツ、ここまでだね。全機、急速離脱!」

「逃がすかよ!」

「バルマ大尉!」

反転したカラミティを追うデステイニーとエクセリオン。

凄まじい速度で追ってくる二機のガンダムにアルネーゼは覚悟を決めたように笑みを浮かべた。

「流石にこいつら相手に逃げ切れない。ここが私の死に場所か」

戦場に立つ以上、こうなる事は常に覚悟していた。

ただせめて死ぬなら仲間の為に。

そういう意味では此処は悪くない死に場所だ。

なによりも――

「ザフト相手つてのが良いね。ま、約一名別勢力の奴もいるけど。そこまで言うのは贅沢つてもんだよ」

何だかんだでずっとザフト相手に戦ってきた。

戦いの度に仲間を奪われ、逆にやられた分だけ奪ってきた。

それは因縁というには十分すぎる。

地球軍保守派だ、統合軍だと色々世界は様変わりしているが、そんな事は二の次。

今までの借りを返すには絶好の相手に相違ない。

「それじゃ行きますかね！」

アルネーゼは重い装備をパージし、対艦刀を構えようとしたその時、上空からデステイニーとエクセリオンに向けて攻撃を仕掛けた機体があった。

「レイダー!? ジルベール、何やってんだ!？」

「姉御、今の内に後退して!」

「余計な事してんじやない!」

「少しは格好つけさせてくださいよ! 此処まで良いとこ無しなんですから!」

ビームサーベル片手に突っ込んでくるエクセリオンの一太刀をシールドで受け止めながら、ジルベールが叫ぶ。

「指揮官に簡単に死なれたら、部下の恥でしょ! 姉御にはまだまだ頑張つて貰わないとね! さっさと行つて下さい! 長くは持ちませんよ!」

「アンタ……」

血が滲む程操縦桿を握りしめると、絞り出すようにジルベールとの最後の言葉を交わした。

「……私もそう遠くない内にそつちに行くから、恨み事はその時に聞くとよ。派手にやりな!」

「了解!! ま、恨みごとなんてありませんけどね!」

ジルベールもまた軍人。

覚悟はとうに出来ている。

「カーラをよろしく!」

「任せな」

エクセリオンの斬撃を止めながら行かせまいとデステイニーにレールガンを叩き込んだ。

「こいつまだ!？」

「ジルベール、お前!」

「決着をつけようぜ、アオイ!」

弾け飛ぶエクセリオンとレイダー。

レイダーの片腕からは火花が散り、損傷の深さを物語っていた。

「降伏しろ! そんな機体状態じゃ戦えないだろう!」

「大きなお世話だよ! 敵に心配されるいわれは無いね!」

動く腕でビームクロウを構えるとツォーンを発射しながら突撃する。

「アオイ!」

「こいつは俺がやる。シン、他の敵の排除を!」

背中中のウイングスラスターを噴射させ、正面からレイダーと激突した。

「ハアアアアア!!」

「今日こそお前を!!」

空中で交差する光刃と光爪。

爪がエクセリオンの頭部を狙って突き出され、刃がレイダーの目掛けて振るわれる。だが爪がエクセリオンを捉える事はなく、空を斬った。

「くっ、速い！」

「お前が遅いんだ！」

下方から斬り上げられた斬撃がレイダーの右脚部を斬り捨て、さらに振るった一太刀が背中^がの翼を斬り払う。

「ぐうう、まだまだアアアア!!」

「ジルベエエエエル!!!」

最後の攻防。

アオイは盾を捨てて左手で抜いたビームサーベルでビームクローごと右腕を斬り払う。宙を舞うレイダーの腕。

もはやレイダーに戦闘継続能力は殆どなかった。

「終わりだ！」

「まだだ！」

そう——レイダーの武装が無くなった訳ではなかった。

「ウオオオ!!」

最後に残った武装、頭部のツォーンが光を発し、宙を舞う右腕を撃ち抜いた。

「ッ!?!」

エクセリオンを包む爆煙。

そこに紛れ背後からもう一撃、ツオーンを発射する、レイダー。

「殺った!」

反応しきれない。

勝つたと思う判断するジルボールだったが次の瞬間、信じられないものを見た。

不意を突いた筈にも関わらず、エクセリオンはスラスターを噴射させ宙返りする事で

ツオーンを避けてみせた。

「なっ!?!」

あり得ない。

完璧な奇襲だった筈。

それをエクセリオンは神懸かり的な反応でツオーンの閃光を避けてみせた。

まるで見えていたのかと思える反応で。

「俺の、勝ちだアアア!!」

そのままエクセリオンは右手のビームサーベルを振り抜いた。

光刃がレイダーの腹部を深々と斬り裂き、コックピットに損傷を受けたジルボールも

また致命傷を受けた。

「グハアア!! く、くそ……」

破損した部品が容赦なくジルベールに突き刺さり、ひしやげたコックピットが容赦なく体を押しつぶした。

「ジルベール」

「け、結局、お前には、一度も、勝て、なかった……か」

吐血しながらも、どこか満足したように笑みを浮かべるとジルベールは目を閉じる。損傷したレイダーの腹部が火を噴き、そのまま爆散した。

「アオイ、大丈夫か？」

「ああ、大丈夫だ」

バラバラに爆散したレイダーの残骸を見ながらアオイは複雑な感情に支配されていた。た。

今までずっと戦ってきた相手だ。

手強かったし、何度も煮え湯を飲まされた。

そんな相手を倒したというのに素直に喜ぶ事ができなかった。

「……ハア、友達だったって訳でもないのに。こういうの一生慣れないんだろうな」
でも、それでいいのかもしれない。

これを忘れてしまったら大事なものも一緒に捨ててしまう事を同じ気がしたから。

「アオイ、ジブラルタル基地から通信だ。指定された格納庫に機体を降ろさせてさ」
「了解」

胸中に浮かぶ複雑な感情を誤魔化すように息を吐くと、アオイはシンと共にザフトから指定された場所に機体を向かわせた。

第29話 新たな道へ

満身創痍といえる様相で帰還を果たしたヴォルケイノ・カラミティ。

母艦であるディオネ級のモビルスーツハンガーに収まり装甲から色が消えると大慌てで整備班が機体に取りつく。

「消火剤！ 危なそうな所には徹底的に掛けとけ!!」

「医療班呼んだ方がいいですかね？」

「んなもんは必要ないよ。それより機体の方を頼むよ」

コックピットを下りたアルネーゼは大騒ぎの整備班に声を掛け、控室に向かうと途中落ち込んだ様子のカーラが目に入った。

「……カーラ」

「大尉、申し、訳ありま、せん。わた、しが、迂闊なばかりに」

カーラは涙を堪え、悔しさを滲ませた声で頭を下げる。

補給で一人先に撤退していた事を悔やんでいるのだろう。

気持ちには痛いほど理解できた。

アルネーゼとて幾重の戦場を駆けて来たのだ。

仲間を失う度にこういつた葛藤が責め苛む事も知っている。

あの時、こうしていれば――

自分をもつとうまく戦っていればと――

何度考えた事か。

だがその考えに意味はない。

結局は自分の中で決着をつけねばならない事。

だからアルネーゼは出来るだけ明るく声を掛けた。

「アンタの所為じゃない。すべては連中の力を見誤っていた指揮官である私の責任だ

よ」

「大尉」

「そんな顔してたらジルベールに笑われるよ。『鬼の目にも涙』だってね。この借りは

十倍にして返してやろうじゃないか」

「はい」

柄にもない励まされたが、カーラには上手く伝わったようで強張っていた表情が幾分和らいだ。

「ご無事で何よりです、バルマ大尉」

近づいてきたヴィルフリートが気遣うようにカーラを見ると軽く頭を下げた。

「クアドラード少佐、援護を感謝します。貴方が来てくれなければもつと味方に被害が出ていました」

「いえ、私など何の役にも立たず申し訳ない。味方の損害が最小限で済んだのはバルマ大尉の奮戦故です」

ジブラルタルから離脱する際、敵からの追撃を最後まで阻み、殿を務めていたのがカラミティだ。

レイダーが二機の新型ガンダムを抑え込んでいた間にカラミティが他の機体の追撃を阻止していた。

その為に武装は大半を消耗し、機体自体もボロボロの状態だった。

「そう言ってもらえると少しは気が楽になるね。それで？」

世間話をしに来た訳でもないだろうと続きを促すとヴィルフリートはカーラを一瞥する。

どうやら彼もカーラを気に掛けていたようだ。

カーラもヴィルフリートの視線に気が付いたのか、顔を少し赤くしながら制服の袖で目を擦る。

それを見たヴェルフリートは僅かに口元を緩めるが、すぐに険しい表情に戻ると次なる目的地を告げた。

「……命令が来ました。我々も宇宙に上がる事になります」

「宇宙に」

「そうか。待つてな。今回の借りは必ず返すよ」

燃え上がる気炎を瞳に宿らせながらアルネーゼは次の戦場に思いを馳せ、拳を握った。

◇

アラスカでの戦いを切り抜けたドミニオンはオスロ基地へ急ぎ帰還を果たした。

目的であるデータは回収できた。

任務は無事成功である。

これで月へ向かう為の道筋は開けた事になる。

しかしアレン達に喜びはない。

何故なら予想外の再会が待っていたからだ

あの男——ラウ・ル・クルーゼとの。

「生きていたとはな」

「うん」

格納庫でフリーダム調整を行っていたキラの表情は暗い。

もしかするとヤキン・ドゥーエ戦役の頃を思い出しているのかもしれない。

「ラウ・ル・クルーゼって、昔ザフトに所属していたパイロットですよね?」

「ああ。奴は各陣営を煽り、『ヤキン・ドゥーエ戦役』を激化させた一因だった。俺もキラも奴とはそれなりに因縁がある」

「ニーナは知ってる?」

「話した事はないけれど、見た事はあるわ。何度か作戦で一緒になった事があるし。何ていうか近づきたいという印象があつたかな。でも統合軍に所属しているとは、厄介ね」

キラと並んで作業をしていたニーナもラウの名を聞いて表情を固くする。

クルーゼ隊を当事者としてではなく、外側から見ていたニーナは彼の男の本質がある程度見えていた。

彼は仲間ことなど何とも思っていないと。

使い捨ての駒として扱っているだけ。

部隊を率いる将にはそうした視点も重要なのだろうが、彼の場合を行き過ぎていると

感じていたのだ。

「奴の事は考えても仕方ない。その動向には注目しておかなければならないけどな。それよりキラ、俺の機体はどうなっている？」

「ヴァルハラで調整中。でも実戦で使うにはまだ時間が掛かると思う」

「クルーゼも動いている以上、悠長な事は言つてられない。俺はすぐにでも宇宙に上がる」

「宇宙はキナ臭いからね。じゃ、僕も準備するよ。ニーナ、手伝って」

「はい」

「回収したデータの解析も忘れるな」

「分ってるよ」

回収したデータの解析をキラに任せ、アレンはルナマリアと共に格納庫を後にする。

「何処に行くんです？」

「グラディス艦長達の所だ。状況の説明をしておいた方がいいだろうしな」

先の戦闘で撃沈寸前にまで追い込まれたミネルバ。

当然だがクルー達にも大きな被害が出た。

艦長であるタリアは元より、副長のアーサー達も負傷し、今も入院中である者も少ない。

「メイリンが軽傷だったのは不幸中の幸いだったけど」

「副長が庇ってくれたおかげだな」

「そういえばマユちゃん、目を覚ましたんですね？」

「ああ。戻ってきた時に顔を見せたら、普通に動いていたよ」

「アムステルダムで治療を受けたマユはすでに傷を完治させ、リハビリの訓練まで再開している。」

医者曰く信じられない回復力であるとの事。

ヴェクトが何かしたのではと勘ぐったが、マユの体に異常は発見できなかった。

「やっぱりあの研究者の所為ですかね？」

「だろうな。傷の完治は喜ばしいが、複雑な気分だ」

「マユちゃん、アレンに会えて喜んでたでしょう？」

「……普通だったよ。変な勘ぐりは止せ」

マユと会った時に色々あった事は言わず嘆息する事で誤魔化すと丁度タリア達の病室にたどり着いた。

「アレンです。入っても大丈夫でしょうか？」

「どうぞ」という声が聞こえ扉を開けると、ベッドの上で何かの雑誌を見ていたタリアが笑顔で出迎えてくれた。

「傷の具合はどうですか、艦長？」

「大分良いわ。まだしばらくは安静にと言われているけど、思ったより早く復帰できそうよ」

「それは良かった」

ルナマリアがお見舞いにもって来た花を看護師に手渡すと早速現在の情勢について報告を行う。

タリアの表情が険しくなり、握ったシートに力が籠った。

「統合軍の事は聞いていたけど、状況はかなり切迫しているようね」

「ええ。そこで俺とルナマリアは先に宇宙へ上がりたいと思います」

持ってきた端末を手渡しデータを表示する。

「例の新造戦艦と共に動くか。ミネルバがいつ動けるか分からない以上はそれしかないわね」

「ええ。統合軍ものんびり構えてはいないでしょうから」

「分かりました。アレン、ルナマリア両名はこのまま宇宙へ上がりなさい。私達も出来るだけ早く戦線に復帰できるようにします」

「了解!!」

◇

ジブラルタル基地が統合軍の襲撃を受けて数日。

調査の結果、被害は思った以上に軽微だった事が判明した。

モビルスーツハンガーの一部が破壊されるなど無視できない被害はあったが、司令部や重要施設はすべて無事。

基地内に保護されていた要人達にも怪我はなかった。

これもザフト防衛部隊の奮戦があればこそ。

それが無ければ援軍が駆け付けてくる前に要人たちはこの世には居なかったかもしれない。

「ハイネ・ヴィステンフルス隊長、貴方に感謝を。よくやってくれました」

「止めてください、議長。むしろここまで簡単に攻め込まれたなんて、逆に謝罪しなくてはならないくらいですよ」

ブリーフィングループムへ呼び出しを受けたハイネは、要人たちが集まる前でレヴァンから感謝の言葉を受けていた。

その背後には戦場へ駆けつけてきたシンとアオイの姿もある。

「そんな事はありません。貴方が居なければジブラルタルの被害は甚大なものになっていた。そしてアスカ中尉、ミナト少尉。二人にも同じく感謝を。貴方達の奮戦によつ

て被害が最小限に抑えられました。兵士たちに代わって礼を言います」

「いえ」

「俺達は別に」

お偉方の前での賛辞にシンもアオイも面映ゆい気分させられる。

そんな二人の様子を微笑ましく見ていたレヴァンだったが、すぐに表情を引き締める
と今後の事を話し始めた。

「さて、もう話を聞いているかもしれないかもしれませんが統合軍の動きが宇宙で活発になってきていると報告が入ってきました。主戦場もこれから宇宙へ移る事でしょう」

「では宇宙に？」

「ええ。しかしその前に我々もまた一つの決断をしなくてはなりません」

「決断？」

レヴァンの言葉に三人が顔を見合わせていると、背後の扉が開かれた。

「え、た、大佐!? 何で此処に!？」

ブリーフィングルームへ入ってきたのはパナマにいる筈のネオ・ロアノークだった。

「少尉、話は後で。申し訳ない、遅れてしまいましたか？」

「いえ、丁度良い時間ですよ、ロアノーク大佐。こちらへどうぞ」

ネオが促された奥の席に着くアオイは思わず息を飲んだ。

何て言っても中立同盟、プラント、連合改革派のトップが勢ぞろいなのだ。

一兵卒でしかない自分がこんな所にいるのはあまりに場違いな気がする。

「あの、俺達此処に居て良いんですか？」

「……退室しろとは言われていないからな」

アオイが囁くとハイネも若干怖い気味に呟いた。

「話の続きを。我々は今回の事で今まで先送りになっていた件について決着を付けようと思っっています」

「先送りしていた件……同盟への参加ですね？」

「ええ」

ユニウス戦役時は敵対関係にあったプラントと同盟だが、昨今関係は改善され同盟参加も目前であると言われていた。

それが先送りになっていたのはユニウス戦役からの遺恨が残っていたからだ。

関係は改善されても、未だ双方に刻まれた恨みは消えず。

それを懸念してレヴアン達は慎重に事を進めてきた。

だが、今の情勢ではそんな猶予は残されていない。

仮に統合軍が月を手中に収めたなら、次は確実に同盟やプラントを潰しに来るだろう。

そうなる前にこちら側の結束を固め、月側の要人を確実に送り届ければ統合軍の拡大を防ぐ事が出来る。

「ですが、ただ参加するだけではありません」

「えっ？」

困惑するハイネ達にレヴアンは笑みを浮かべながら、今後にとって重要な事実を告げた。

「中立同盟、プラント、地球軍改革派は条約を結び、『調和条約同盟』として新たな道を歩み始めたいと思います」



統合軍が動き出した宇宙では、日に日に緊張感が高まっていた。

大規模な武力衝突こそ起こっていないが、それも時間の問題と考えられている。

そして今、それを証明するかのように宇宙における統合軍最初の武力衝突が起きようとしていた。

「アルミラ艦長、統合軍艦隊を捕捉したと聞きましたが？」

戦いが起きようとしている宙域を目指すように進む戦艦オーデインのブリッジにレ

テイシア、ラクス、セリス達が入ってくる。

それを横目で確認した艦長であるテレサはため息をついた。

「二応な。先行してくれているイザナギとガーティ・ルーが情報をくれたおかげだ」

今回オーディンに与えられた任務は軍事ステーション『ヴァルナ』から出撃した統合軍艦隊の戦力分析と目的の調査だった。

イザナギとガーティ・ルーが先行しすでに情報収集を開始している。

オーディンも一緒に任務に就く予定だったのだが、ロールアウトした新型機のテストを行っていた為に出撃が遅れてしまったのだ。

「艦隊が目指す場所はやはりアルテミスですか？」

「そうだ」

レテイシアの後ろに控えていたセリスの質問に答えるように画面に宙域図が表示される。

そこにはアルテミス目がけて進む統合軍艦隊の姿があった。

「どうして今、アルテミスなのでしょうか？ あそこは戦略的な価値など殆どない拠点だった筈」

アルテミスはユーラシア連合に属する宇宙要塞である。

ヤキン・ドゥーエ戦役では『アルテミスの傘』と呼ばれた防御装置により、ザフトを

寄せ付けない強固な要塞として知られていた。

だがアークエンジェル隊との諍いの隙をついたクルーゼ隊に攻め落とされ、その後も碌な目に遭わなかったらしい。

それでも敵に占拠されなかったのは、単に戦略的な価値が無いからである。

今は場所をL3方面からL4方面に場所を移し、時に連合保守派やユーラシアの補給拠点として運用されていた。

「未確認情報だが、アルテミスには今イスラファイルに従わなかった保守派の幹部たちが逃げ込んでいるらしい」

「それを捕縛する為に……でも『アポロン』に逃げ込まなかったのは何故です？ あそこはアルテミスとは規模も違います」

『アポロン』とは地球連合保守派が新たに建造していた宇宙要塞の事である。

ユニウス戦役で大打撃を受けた『ウラノス要塞』の代わりらしいのだが、その規模は今までの宇宙要塞とは比較にならない。

故に宇宙における懸念材料の一つだと言われていた。

「セリスの言う事も最もだけど、アポロン要塞は未完成状態だからかもしれない」

「そうだな。連中の事情は不明だが、アポロンから離脱しアルテミスに向かった部隊の話もある」

「宇宙での足場作りが出来てないって事ですか」

「しかし反面、此処でアルテミスが落ちてしまえば、宇宙で統合軍はより動き易くなってしまうという事ですわね」

つまり今回統合軍の狙いは自分達の敵対勢力の一つを潰す事。

これが出来れば彼らは月との交渉を進め易くなる。

「……戦闘に介入するんですか？」

「我々に与えられた任務は情報収集だ。出来るだけ介入は避けたい」

「でも黙って見ているも……アルテミスが持ちこたえられる筈は」

「言いたいことは分かる、ブラッスール中尉。しかしイザナギ、ガーティール、そしてオーディンだけでは戦闘に介入するには戦力不足だ」

テレサとてこれが最善手でない事は承知している。

アルテミスが陥落すれば、こちらにも確実に影響があるのだから。

しかし打開案もなく誰しも押し黙ったその時、沈黙を破るように突如オペレーターが声を上げた。

「イザナギより緊急入電！ 敵からの襲撃を受けているとの事です！」

「艦長、私達が先行します！」

「頼む！ ……ルテイエンス！」

「何です?」

「身体は大丈夫なのか?」

テレサも最近レティシアの体調が思わしくない事は知っていた。

そんな心配を吹き飛ばすようにレティシアは笑みを浮かべる。

「私は大丈夫ですよ」

「無理はするな」

「了解」

ブリッジを後にしたレティシア達を見送ったテレサは改めてポツリと呟いた。

「あの笑顔、男共がコロツとやられても無理ないな」

しかも本人にはまるで自覚なしと来ては性質が悪いにも程がある。

そんなだから男に言い寄られてしまうのだ。

現にオペレーターの何人かはレティシアの笑顔に見とれるように入口の方を向いている。

「貴様ら、何時まで呆けているか! オーディン、第一戦闘配備!」

「了解!」

テレサの凄みのある視線に晒され動き出すオペレーター達。

それに改めてため息をつくときテレサも気持ちを切り替え、指示を飛ばし始めた。



ヴァルナから出撃したクレオストラトスを中心とした統合軍艦隊はアルテミスに向けて進路を取っていた。

その目的はアルテミスへと逃げ込んだ保守派の幹部の捕縛。

無論、戦場であるが故に目標の生死は問わないと命令を受けている。

クレオストラトスのブリッジにパイロット陣を集めたアスランは宙域図を見つめながら、作戦概要の確認を行っていた。

「以上が現状確認できているアルテミスに関する情報だ」

「しかし俺達が保守派の尻ぬぐいをさせられるとは」

「今は同じ統合軍。不穏な発言は慎め、ラデイス」

「すいません、大佐」

アスランの忠告に謝罪を口にしながらもラデイスは不服そうにソツポを向いた。そんなラデイスを無視するように隣に立つミレイアが不思議そうに首を捻った。

「アルテミスに逃げ込んだ戦力って艦隊を率いて攻略に乗り出す程のものなんですか？」

「いや、アルテミスに事前配備されていた戦力を考えてもこれほどの艦隊を組む必要

はない。だが我々の力を宇宙に示すという意味では絶好の機会という事だ」

圧倒的な力でアルテミスを陥落させ、力を示せば月との交渉も進めやすくなるという
た思惑があるのだろう。

「……ユリウス大佐にそんな小細工が通用しないだろうが」

「大佐？」

「いや、とにかく情報通りなら敵の規模は大したものではない。しかし油断はするな」
丁度ブリーフィングが終わったタイミングでアルテミスの姿が見えてくる。

連中もこちらが仕掛けてくる事を察知していたのかモビルスーツ部隊の展開が済ま
されていた。

「何機か最新鋭の機体もあるな。第一戦闘配備、主砲発射と同時にモビルスーツ部隊
出撃、各艦に通達！」

「了解！」

「此処は任せる」

「大佐、自ら出撃されるのですか？」

「当然だ。完成したレグルス——いや、ユースティアの試験運用にも丁度良い。出る
ぞ」

「ハ！」

その場を艦長に任せアスランが格納庫に足を運ぶとそこには以前とは違う姿となったレグルス・エクティスガンダムが立っていた。

LFSA—X006b 『ユースティアガンダム』

アスラン専用機レグルス・エクィテスガンダムとして開発された機体を、戦闘データ及びアムステルダムで回収したe・s・システムの詳細データを基にさらに発展させ、より高性能化させた機体。

背中には大型のスラスタが背負わされ、以前の戦闘データを参考に手を加えられた結果、細部がかなり変化している。

さらにはコックピット内にもアムステルダムにて回収したe・s・システムも搭載され、企画当初から大きく違った仕様となっている。

「少しよろしいですか、大佐?」

パイロットスーツに身を包み長い髪を纏めたヴァルターがいつも通りに笑みを称えて近づいてくる。

「何でしょうか、ランゲルト中佐?」

「大佐、私は別行動を取っても構わないでしょうか?」

「どういふ事です?」

「いえ、どうやら五月蠅い蠅が飛んでいるようですので。もちろん作戦が重要なのは

理解していますから、最終的な判断は大佐に任せますが」

蠅というのは敵の事。

「どうやって発見したのかという疑問は沸くが、聞いた所で答えるつもりはないだろう。」

「作戦自体もよほどの隠し玉でもない限りは覆る事はあるまい。」

「任せます」

「了解しました」

ヴァルターが自分の機体の方へ歩いていくのを見届けるとアスランも自分の機体へ乗り込んだ。

「各部スラスター異常なし、武装、OS及び『e. s. system』正常稼働」

「キーボードを叩き機体状態の最終チェックを行う。」

「流石、技師長。いい仕事をしてくれた」

「予想以上の出来にアスランは思わず笑みが零れた。」

「ユースティアの急な仕様変更にもきちんに対応してくれた技師長に感謝しながら操縦桿を握る。」

「機体がカタパルトまで運ばれ、ハッチが開いた。」

「では後を頼む」

《お気をつけて、大佐》

「了解。アスラン・ザラ、『ユースティア』出る！」

ユースティアが押し出され、宇宙に飛び出すと機体が紅く色付いた。

スラストアの点火と同時に加速した機体はそのまま先陣を切るように直進していく。

「まずは試させてもらおう！」

アスランは両手で腰にマウントしてあった『オートクレールⅡ』を抜き放つと展開済みの敵部隊へと突撃していった。



アルテミスでの戦闘が始まろうとしていた時、戦闘宙域から僅かに外れた場所ですでに戦いが始まっていた。

相対していたのは隠密で統合軍の動きを探っていたイザナギ、ガーティ・ルーとファントムペインの母艦、サリエルであった。

「ミサイル迎撃！ ガーティ・ルーを援護しろ！」

セーフアスの命令に合わせ発射された主砲がガーティ・ルーに降り注ぐミサイルを叩き落とす。

「ヴィヒター隊、母艦に敵を近づけるなよ！」

G A T ー 0 7 M 『グロム・ヴィヒター』

連合が開発した可変型高性能量産モビルスーツ『ヴィヒター』の後継機。火力よりも機動性に赴きを置いており、可変機構の改修とOSが改良された事でさらに扱いやすくなり、性能も向上している。

「俺について来い！」

「了解！」

飛行形態で戦場を掛けるムウのストウが放った一撃がイリアスを撃ち抜き、そのままモビルスーツ形態に変形、振るったビームサーベルが敵機の胴体を斬り裂いた。

降り注ぐビームの砲撃を飛行形態の加速で振り切るように回避すると、ガトリング砲でミサイルを迎撃、それに続く形でグロム・ヴィヒターが敵陣に突撃する。

その機動性に翻弄され、フォーメーションを乱した所に攻撃を撃ちこんだ。

「チツ、結構な数だな！ 囲まれる前にどうにか突破口を——何ッ!？」

ムウに電気のようなあの感覚が走る。

それは長らく感じていなかったあの感覚。

しかも、これはもう感じる筈のない相手のものだ。

「まさか！」

同時に別方向からのビームが僚機のスオウを落とし、続けて発射された一撃がさらに味方機を叩き落とした。

針の穴を通すような正確な射撃が次々と撃墜していく。

「これは……この感覚は!?!」

ムウがビームの放たれた方向に振り返ると赤い機体サタナエル・ナハトが二基のスラストユニットを吹かし凄まじい速度で突撃してくる様子が見えた。

「速い!?!」

即座に間合いに入ってきた赤い機体は横薙ぎにビームサーベルを振るってくる。

持ち前の反応と体全身を駆け巡る感覚に身を任せ、シールドで光刃を防ぐとムウの耳にあり得ない声が聞こえてきた。

「ほう、これを止めるとは。流石はエンデュミオンの鷹と言ったところかな、ムウ」

「……この感覚、その声、貴様……ラウ・ル・クルーゼ!?!」

「久しぶりだな、ムウ。しぶとく生き延びているようじゃないか」
懐かしさすら感じるやり取りにカースは楽しげに笑みを浮かべる。

しかしムウからすれば悪夢のようなものだ。

「何故生きている!?!」

「さあ、何故かな!」

力任せにスオウを弾き飛ばしたサタナエルは反転するとガーティ・ルーとイザナギの方へと向かって行く。

「ぐっ、貴様！」

「お前の相手は後でしてやる。No.1、エリニス、他の機体を排除しろ」

「了解」

カースは母艦を守る為、迎撃に動いたコウゲツをすれ違い様にロングサーベルで瞬時に斬り捨て、護衛のスオウをライフフルで叩き落とす。

その隙に僚機として現れたイリアス・アキレスとブリアレオス・ゴライアスがグロム・ヴィヒターを吹き飛ばし、ガーティ・ルーへの道を開いた。

「行かせると思っか！」

「カース様の後は追わせない」

サタナエルの後を追わせまいとイリアス・アキレスが道を阻む。

「くそ、こいつもエース級か！」

「邪魔はさせない、ムウ・ラ・フラガ」

ビームライフルシューティーの連撃を機体を仰け反らせて回避する、ムウ。しかしその間にサタナエルはイザナギとガーティ・ルーを射程内に入れていた。

「作戦の邪魔をさせる訳にはいかなくてね。先に仕留めさせてもらおう」

コウゲツの腕を斬り落とし、右足でコックピットを押しつぶす。

そしてグロム・ヴィヒターの側面に回り込みシールドで串刺しにすると戦艦から発射されたミサイルに叩きつけて撃破した。

「流石、同盟軍。錬度が高いな」

敵を称賛しながら敵の迎撃を掻い潜りビームライフルでガーティ・ルーを狙い撃つ。

ビームがガーティ・ルーの砲台を吹き飛ばし、エンジンにダメージを与えた。

「イアン艦長、ガーティ・ルーの損害は？」

「エンジン出力低下、航行に支障があります」

「くっ、何て奴だ。迎撃のモビルスーツを相手にしながら、戦艦に攻撃を仕掛けるなんて」

ガーティ・ルーの損害を聞きながらセーフアスは敵パイロットの技量に驚嘆する。

迎撃のモビルスーツとただ闇雲に攻撃している訳ではない。

敵が攻撃出来ないようにフォーメーションを組んでいる。

それなのにサタナエルは攻撃を仕掛けつつ、一瞬の隙を突いて急所を正確に攻撃してくるのだ。

並みのパイロットではあるまい。

「ガーティ・ルーを守れ！ 敵を近づけるな！」

イザナギから発射されたミサイルが途中で弾け、サタナエルを引き離すように炸裂する。

さらに煙幕も混じっていたのか、周辺の視界を覆い隠した。

「ほう、優れた指揮官の様だな。しかし、それで逃げられるとでも?」

サタナエルは煙幕で視界が塞がれているにも関わらず、サーベルを逆手に持つて背後に突き刺す。

背後に向けた一撃が奇襲を仕掛けようとしたムラサメの胴体を貫き、そのままビームライフルを構えるとトリガーを引く。

発射されたビームがガーティ・ルーの側面に直撃し、爆発を引き起こした。

「なっ、視界を塞がれている筈、奴は一体?」

「そろそろ決めさせてもらおう」

煙幕から飛び出してきたサタナエルはサーベルに突き刺したムラサメを放り投げ、グレネードランチャーで爆発させた。

視界を塞ぐほどの爆発と衝撃波がイザナギを襲う。

距離を詰めたサタナエルはブリッジにライフルの銃口を向けた。

「ッ!」

「これで」

カースがトリガーを引き、銃口から発射されたビームがイザナギのブリッジを射抜かんと直進していく。

同盟軍の時間が凍りついた。

セーフアス達の視界が閃光に染まり、そのまま包まれようとしたその瞬間、直前でビームが弾かれた。

「何!?!」

見ればブリッジを守るように防衛フィールドが張り巡らされている。

「これは……なるほど、君が来たか。『戦女神』レティシア・ルティエンス」
増援として駆けつけてくるモビルスーツ。

同盟軍の新型機に違いない。

もうじきこの場に現れる者に気がついた時、彼女がどう反応するのか。

「不幸な宿縁だな」

楽しむようにカースはさらに笑みを深くした。

第30話 鏡の自分

アルテミスの司令——いや元司令であるジェラード・ガルシアは冷や汗を流しながらモニターに映る大軍の姿を凝視していた。

モニターに映るは統合軍の艦隊。

その戦力はアルテミスの駐留させている兵力ではとても勝ち目が見えない程の差があった。

「あれだけの戦力を前に勝ち目などある筈が……降伏すべきではないでしょうか、ブレース大佐殿？」

ガルシアが指揮官席に座るガスパール・ブレース大佐の顔色を窺うように話しかけた。

話しかけたガルシアをギロリと睨みつけるようガスパールが視線を向ける。

彼こそが現在ガルシアから指揮権を奪い、アルテミスを統括している司令官である。

統合軍誕生に不満を持ちマケドニア要塞でのクーデターを企てたガスパール達だが

フアントムペインにより阻止され、ビクトリアからアルテミスへと逃れてきていた。

「では貴様は此処で奴らに屈しろとでも？」

「い、いえ、しかし」

「もう少し時間があれば奴らを一網打尽に出来たが。しかしそれでも準備さえ整えば……今は時間を稼げ！ そうすれば勝てる！」

ガルシアの声など聞こえていないとばかりに、ガスパールは指示を飛ばし始めた。

「……司令」

「う、うむ」

傍に控えていた部下に頷き返す。

ガスパールの言い分も分からない訳ではない。

彼らが持ち込んできた『アレ』が使えるならば万に一つの勝機も確かにある。

だがそれでも分が悪いと考えていた。

そもそも勝つたとしてどうしようというのか。

ガスパールは此処で連中を退ければ自分達に従う者も現れると言っではいるが、忘れてはいまいか。

すでに自分達の属していた地球連合など存在しないという事を。

「つ、付き合ってはおられん」

もはや話しても意味はないとガルシアは部下と共に誰にも気づかれぬよう、その場を後にした。

それにも気が付かないままガスパールは展開された統合軍に挑戦的な目を向ける。

「イスラフィールめ！ 貴様の好きにはさせせん！」

そもそもあんな若造の力を利用していたのが誤りだった。

だが、考えようによっては丁度いい。

此処で邪魔な膿を吐き出し、すべて最初からやり直せばよいのだ。

「地球連合の栄光は私が必ず取り戻す！ モビルスーツ隊、出撃せよ！ 敵をアルテミスに近づけるな!!」

ガスパールの怒声が響き渡ると同時に出撃したモビルスーツ隊が統合軍を迎え撃つべく展開を開始する。

それは号令は連合にとって瀬戸際の、統合軍にとって初の宇宙での大規模戦闘が開始された事を意味していた



アスランはアルテミスを囲む形で展開された部隊の指揮を執りながら、戦闘を開始していた。

ようやく完成した専用機を小気味よく機体を操りながら、感触を確かめるとアスランの顔に満足気な笑みが浮かぶ。

「良い反応だ。前とは比べ物にならない」

以前使った時は未完成だったから仕方ないとも言えるが。

「これならば！」

思いっきりペダルを踏み、スラスタを噴射させると機体が加速した。

背中の大型スラスタによる推進力で一気に速度を上げたユースティアはそのまま敵陣へと突撃する。

「統合軍の新型か!？」

「新型だろうとたつた一機で！」

迫るユースティアにビームライフルを構えたイリアスが迎撃行動に入った。

「イリアスやブリアレオス……最新機もそろっているようだな。各機、油断するな！」

ビームライフルの射撃を回避しながら、オートクレールの間合いに入ると小細工抜きで一閃。

剣から発生した強力なビーム刃がイリアスを挟み、シールドごと軽々と両断する。

「なっ!？」

「きよ、距離を取れ！ 接近戦は不利だ！」

「甘い」

ユースティアから距離を取り、銃口を向けるイリアス。

そんな敵に腹部の『アドラメレクⅡ』を発射する。

強力な閃光がイリアスに防御の姿勢すら取らせず消し炭に変えると、今度はスラスターからドラグーンを射出した。

「いけ！」

素早く動き回る砲台に敵は翻弄され、認識する間もなく四方から発射されたビームによりハチの巣にされた。

「なら接近戦で！」

ドラグーンの作り出したビームの網の中を損傷覚悟で突撃する、イリアス。

肩や腕を穿たれても気にせずユースティアに斬りかかる。

「落ちろ！」

「その勇気は買うが、迂闊だ！」

次の瞬間、イリアスの腕が飛び、同時に頭部が裂かれた。

「なっ!？」

ユースティアが両手で握る二刀が煌めき、同時に両足のサーベルも解放され、上下左右と振るわれる。

バラバラにされたイリアスは成す術なく爆散、それに紛れて発射されたビーム砲により遼機も全機薙ぎ払われた。

「大佐に続け！ ミレイア、初めての機体での宇宙戦だ。俺の後ろから離れるなよ」
「了解！」

ユースティアに続き戦場へ姿を見せたのは二機のアルタイルだった。

一機はタキオンアーマーを身にまとい、細かい改修を受けたラデイス専用機。

もう一機は赤く塗装されたミレイア専用の機体である。

「どけよ、雑魚ども！」

ラデイスはライフルで敵機を粉砕しながら、ビームサーベルを叩き込む。

ビームで致命傷を受けた敵機にサーベルの刃が容赦なく突き刺さる。

敵からの反撃をあつさり潜り抜けエレメンタルドラグーンを放出、周りの敵機をすべて撃墜した。

「アハ、ハハ、ハハハハ!! こんなものか！ こんなものなのか!!」

面白いように落ちていく敵機の姿にラデイスは万感にも似た快感が駆け抜けた。

敵はまるで群がるアリのようにアルタイルへと攻撃を仕掛けてくる。

だが、遅い。

敵の攻撃の射線を見切り、アルタイルを自由自在に操り、敵機を翻弄していく。

「遅い、遅い、遅い!!」

アルタイルはまるで水を得た魚のように生き生きとした動きで敵を屠る。

重力に縛られた地球での戦闘を経験したからか、ラデイスは機体を前以上に軽く感じている。

これはタキオンアーマーによる強化と今まで戦闘データの反映、そして今までの戦闘経験が大きく影響している。

以前、アルタイルが実戦に投入された時、ラデイスは初陣。

強化を施されたとはいえ経験もない新兵だった。

しかし今は違う。

数多の戦場を越え、格段に成長している。

強化兵としての力と合わさってラデイスの力は並みの兵士では相手にならぬ程の技量を身につけていた。

「ラデイス、凄い」

圧倒的な力で敵をねじ伏せるその様は戦闘経験の浅いミレイアにも尋常なものでは無い事は分かった。

「私だつて負けない。大佐の役に立つ為にも！」

呼吸を整え、周りに意識を向けていく。

強化され、研ぎ澄まされた感覚が肌で感じ取るように敵の殺意を感知する。

「そっ……！」

敵の攻撃を回避しつつ動きを把握した一射が正確にコックピットを貫き、撃破する。

さらに放出したエレメンタルドラグーンによる牽制で敵の動きを阻害し、ライフルをもつて撃墜していく。

ラデイスの荒れ狂うような戦闘とは対照的。

冷静かつ冷徹な一撃が正確に敵を穿つ。

アルテミスを守る者にとつて、悪夢とも言える光景がそこには広がっていた。

「な、何だ……あの三機は!？」

「あんな化け物に勝てる訳がない！」

「ひ、怯むな！ ハイペリオン隊、前に出ろ！」

部隊を守るように前面に出て来たのはユーラシアで開発された機体ハイペリオンGと呼ばれた機体、所謂ハイペリオンの量産機である。

ウイングバインダー先端から発生させた光波防御シールド『アルミューレ・リュミ

エール』で防御の構えを取る。

しかしそれは勢いに乗る三機には何の意味もないものだった。

「そんなもので！」

素早く回り込んだユースティアの斬撃がウイングバインダーごと斬り捨て、アルタイルのビームライフルが胴体を穿ち撃墜する。

三機の猛攻。

それに感化され勢いづいた統合軍が守備隊を押しつぶそうと一気に攻勢に出る。

アルテミスの指令室でそれを忌々し気に見ていたガスパールは拳を握る。

「思った以上に厄介な相手のようだな！ 仕方がない、エクステンデット部隊を出せ！」

アルテミスの隔壁が解放され数機のモビルスーツと複数の巨大な影が戦場へと姿を見せる。

それはイリアス・アキレス、ブリアレオス・ゴライアス、そしてデストロイMK-2であった。

「デストロイ級に、あの動きはエクステンデットか！」

ウインダムを斬り捨てたアスランは敵の乱れのない動きで、その正体を看破する。

エクステンデットが相手では如何に精鋭であろうとも、損害は免れない。

「全機、下がれ。アレはこちらでやる。ラデイス、ミレイア！」

「了解！」

「分かりました！」

二機がモビルスーツの迎撃に向かい、アスランはデストロイの方へ突撃する。それを見越したデストロイも砲口をユースティアに向け、発射体勢に入った。

「その火力は分かっている。けど当たりさえしなければ!!」

アスランのSEEDが弾ける。

するとコックピットに仕込まれたe・s・システムが起動する。

感覚がいつも以上に鋭く、深くアスランの全身を駆け巡っていく。

「これがe・s・システムの力か！」

何時も感じている感覚以上の力を確かめるように操縦桿を握り締めた。

発射された強烈な熱線がユースティアに襲いかかる。

しかし、射線の軌跡がアスランにははつきりと見えていた。

「ウオオオ!!」

機体に急制動を掛け、射線から逃れデストロイの懐に飛び込むとオートクレールを一閃する。

迎撃の為に展開された隠し腕は破壊され、脚部のビームサーベルを展開して蹴り上げ

ると胸部の砲口を斬り潰した。

「懐に飛び込めばその機体は本領を發揮できまい！」

そのまま上昇したユースティアはデストロイへ剣を振り下ろす。

オートクレールの一太刀が深々と頭部から腹部に掛けて大きく斬り裂き、真つ二つになった巨体はそのまま大きく爆散した。

「残り三！」

ドラグーンを放出し、デストロイが防御できない速度でコントロールしながら急所を突く。

ビームによって抉られた箇所から火を噴き、動きを鈍らせた所で胴体を横薙ぎに剣を斬り払った。

アスランは無数のビーム砲の回避しながら横目で戦場の様子を見る。

エクステンデットが乗り込んだ機体群はラディスを中心にミレイア達が援護に入る事で順調に数を減らしていた。

「ランゲルト中佐がいればもつと楽だったかもしれないが……いや、それよりも敵の動きが気になるな」

敵は明らかに時間稼ぎを狙った動きをしている。

「何か隠し玉でもあるのか？」

そのアスランの懸念が当たる形でアルテミス内が動き始める。

「ガスパール大佐、充填率75%」

「よし、発射準備！」

「しかし、まだ十分な——」

「構わん、撃てれば良い！ 隔壁解放、目標敵艦隊！ 急げ!!」

「り、了解！」

アルテミスの中央が解放され、巨大な砲塔が姿を見せる。

それはかつてウラノス要塞に搭載されていたロゴス派の切り札と同じものだった。

「まさか——『レクイエム』か?！」

アスランの推測通り、アルテミスに搭載されたものは『レクイエム』の改良版『レクイエムII』である。

レクイエムとは軌道間全方位戦略砲と呼ばれる連合の戦略兵器の事で、巨大ビーム砲と周辺に配置された複数の廃棄コロニーから成る。

廃棄コロニーの内側にはビーム偏向装置『ゲシユマイディツヒ・パンツァー』が設置され、砲塔から発射されたビームはこの廃棄コロニーの内部を通過するとその軌道を変え、目標の対象物を破壊する事ができる兵器である。

コロニーの配置を変更する事で自由自在に敵を狙い撃つ事ができるこの兵器はユニ

ウス戦役で猛威を振るい、相對した者達の記憶に刻み込まれている。

「あんなものを用意していたとは——狙いは艦隊か！ 全艦、回避運動!!」

アスランの声に各艦がレクイエムから逃れるように左右に分かれて回避する。

しかし逃さないとばかりにレクイエムの砲口が光を発し、発射された。

宇宙を斬り裂く閃光。

それは幾つかの艦艇を巻き込み、月の方向へと消えていった。

「クレオストラトス、無事か!? 被害状況報告!」

《こちらクレオストラトス。本艦に被害はありませんが、幾つかの艦艇に損害あり!》
戦艦故に機敏に回避する事はできず、何隻かの戦艦が沈んだようだ。

レクイエムによる被害で浮足立つ統合軍。

その姿にガスパールはニヤリと笑みを浮かべた。

「よし、敵は浮足立っている! 全軍、このまま押し込め! レクイエムII再チャージ
急げ!」

レクイエムの砲撃により息を吹き返した保守派は統合軍を押し返そうと責め立てる。

そして統合軍に突きつけられたレクイエムの砲塔は再び発射しようと稼働し始めた。

「くっ、これ以上、撃たせる訳にはいかない!」

オートクレールの一振りをデストロイのコックピットに投げつけ沈黙させると、スラ

スターを吹かしレクイエムの方へ突撃する。

「邪魔だ！」

ビーム砲とドラグーンでユースティアの邪魔をするハイペリオンGを排除することでアルテミスが光の膜で覆われた。

「敵を近付けるな!!」

「光波防御帯か！ だからと言って！」

次から次へと立ちちはだかる護衛機の攻撃を避けながらアスランは機体を加速させ、アルテミスへ突っ込んでいく。

「ッのー！」

「行かせるな!!」

上方から突っ込んできたハイペリオンGのビームナイフがユースティアに突きつけられる。

それが機体に当たる直前で掴んで防いだアスランは力任せに腕ごと引き千切り、そのままコックピットを押しつぶした。

「使わせてもらおう！」

ハイペリオンGを掴んだままビームシールドを展開し、光波防御帯に接触する。

最後の抵抗とばかりにユースティアを拒む光波防御帯を力任せに突破すると砲塔に

向かってハイペリオンを投げつけた。

「諸共、落ちろー!」

発射されたビーム砲がハイペリオンを撃ち抜き、発生した爆発がレクイエムの砲塔に損害を与える。

予想外の自体にアルテミス指令室は混乱状態に陥ってしまった。

「敵からの攻撃により、レクイエムⅡ発射不能!」

「敵モビルスーツ、防御帯内部に侵入!」

「何だ?!」 内部の防衛戦力で迎撃、予備部隊にレクイエムの砲塔を修復させろ!」

「敵モビルスーツ、要塞内部に侵入しました!」

「ッ!?!」

モニターに映ったのは片手に実体剣を持つ赤い装甲が特徴的なモビルスーツの姿。

護衛のモビルスーツを一蹴し、光るツインアイが司令室の方へ向く。

その姿はガスパール達にとって間違いなく死神そのもの。

「ば、馬鹿な。こんな、こんな場所で私達は——」

悲痛な叫びが届く筈もなく敵機はビーム刃を伸ばした実体剣で指令室に突きを放つ。

何の抵抗もなく突き刺さった刃に巻き込まれ、ガスパール・ブレース大佐以下地球軍

保守派のメンバー達は全員塵も残さず消え去った。

「フウ……指令室を落とした。全機、要塞を制圧しろ」

指令室を破壊したアスランは光波防御帯の発生器を破壊しながら外へと出る。

もはや大勢は決した。

万が一にも保守派の逆転はあり得まい。

「……要塞を制圧すれば作戦完了だな。後は——」

アスランは尚も戦闘が行われている方へ視線を向けると、そちらの方へ機体に向かわせた。

◇

イザナギを狙うサタナエルの攻撃から守ったアイギス・ドラグーンが放出した本体へと帰還する。

戦場に現れた機体は三つ。

それらはすべてヤキン・ドゥーエ戦役やユニウス戦役を戦った者であれば知らぬものはいない機体群だった。

「こちらレティシア・ルティエンス少佐です。イザナギ、応答してください」

「ルティエンス少佐か!？」

「オーデン准将、援護に来ました。オーデンもすぐに到着する筈です」
「助かる」

「では援護に入ります。ラクス、セリス、行きますよ」

レティシアは機体のスペックを再確認するように頭に思い浮かべる。

ZGMF-X28A 『アヴローラ・ヴァナデイスガンダム』

レティシア・ルティエンス専用機として開発されたヴァナデイスガンダムをキラ・ヤマトとローザ・クレウスの手で再設計された機体。

武装自体はユニウス戦役時の状態でも十分な戦闘力を備えているとして変更は成されていないが、その分ドラグーンの性能向上が図られている。

「基本は前と変わらないけど、性能は格段に上昇している。使いこなさないと」

「無茶しないでくださいね、レティシア。私が前に出ます」

「そうです。教官は下がっててくださいよ」

アヴローラ・ヴァナデイスガンダムの傍に二機のモビルスーツが控えていた。

ZGMF-X29A 『クスイフォス・ジャステイスガンダム』

ユニウス戦役で投入されたインフィニットジャステイスガンダムをキラ・ヤマトとローザ・クレウスの手で再設計された機体。

目新しい武装は搭載されていないが、基になったインフィニットジャステイスガンダ

ムが十分すぎる程に優秀な性能をもっていたが故にこの機体も破格の性能を持つ。

ZGMF-X01A 『アイテルガンダム・ヴァルキューレR』

月面紛争時に大破したアイテルガンダムを改修、同時期に投入された特殊装備『ヴァルキューレ』を固定装備として組み上げられた機体。

元々高い性能をもっていたアイテルガンダムを現在の技術をもつて改修を受けた事で月面紛争時とは比較にならない性能を持ち、現在のエース機を軽く上回る。

「二人共、氣遣つてくれるのは嬉しいですけど、過剰な氣遣いは必要ありません！」

イザナギと損傷したガーティ・ルーを守るようにドラグーンを展開すると、撃ち込まれたミサイルをすべて叩き落とす。

その爆煙の中をジャスティスとアイテルの二機が武器を構えて突っ切ると敵陣へと突入した。

「セリスさん！」

「はい！」

ジャスティスのビームブレイドがイリアスを蹴り、アイテルの大剣『ヴァルフアズルII』がブリアレオスを斬り捨てる。

戦艦の周りに群がっていた敵機を二機が排除した隙にレティシアはビームサーベルでサタナエルに斬りかかった。

振り下ろされたサーベルを余裕で受け止めるサタナエルにレティシアは歯噛みする。

「やりますね。その機体、見覚えがあります。確かザフトの……」

「フ、久しぶりかな、戦女神」

「な、まさか、貴方は!？」

「私の事などどうでもいいだろう。それよりも君がこの場に現れるとは、これも引かれ合う運命とでも言うべきなのかな」

「どういう意味です」

「私が答えずとも君自身が気がついているだろう?」

ラウの言葉に困惑するも、その意味はすぐに理解できた。

レティシアの体に再び電気が走ったようなあの感覚が駆け抜ける。

「これはあのシリウスのパイロット!？」

「君の運命の相手さ。存分に堪能するといい」

サタナエルはヴァナデイスを突き放し距離を取ると入れ替わるようにして、別の機体が現れた。

「統合軍の新型?」

新型機は背後から来る増援と共にヴァナデイスの方へと近づいてくる。

L F S A — X 0 0 8 『ユングヴィ』

エリクションガンダムデータの基に開発された新型モビルスーツ。

タキオンアーマーのデータを基に開発されたスラストユニットによる高い機動性。さらに遠距離、中距離、近距離とすべての間合いで対応でき、ドラグーンやスナイパーライフルを用いた特殊作戦すら可能にする非常に高い汎用性を持つ。

「また会いましたね、レティシア・ルティエンス」

新型のコックピットで座っていたのはヴァルター・ランゲルトだった。

来る前からレティシアが居た事を知っていたかのように笑みを浮かべる。

「貴方は……」

間違いなくあの機体に乗っているのは撤退戦で戦ったシリウスのパイロットだ。

レティシアは警戒しながら敵モビルスーツを観察する。

しかし次の瞬間、機体から砲塔が切り離され、ヴァナデイスへと襲い掛かった。

「ドラグーン!?!」

駆け巡る直感。

それに従い機体を左右に動かしドラグーンの砲撃を回避すると、ヴァナデイスもドラグーンを放出する。

「競い合いですか……望む所ですね」

「くっ、戦い方まで似てるなんて」

動き回るドラグーン同士の撃ち合い。

お互いがお互いの動きを先読みし、損傷も撃墜もできない。

まるで自身を鏡で見ているかのよう同じ動きで砲塔を操作している。

「……この気配、妙ですね。まるでその機体にもう一人——レティシア、貴方は」

「何をブツブツと！」

先に動いたのはレティシアだった。

斬艦刀『アインヘリヤルⅡ』を抜いて斬りかかるとユングヴィもまた対艦刀『イシユタルⅡ』を構えて応戦、激突した刃とシールドが激しい火花を散らす。

「貴方は何者ですか？ 何故、私に——」

「似ているかですか……それを聞いてどうするのです？ アストにでも報告しますか？」

「ッ!!」

レティシアはユングヴィをシールドで下から突き上げ、斬艦刀を再び叩きつける。

体勢を崩した状態で振るわれた斬撃。

しかし隙を突いたにも関わらずあつさり盾で流したユングヴィは持っていた対艦刀をライフフルモードへ変化させ、至近距離からヴァナデイス目掛けて発射する。

「あの体勢から!!」

ギリギリ機体を逸らしビームを回避するとお返しに高出力収束ビーム砲を撃ち出す。だが、それも見切っていたとばかりにドラグーンで張り巡らせた防御フィールドで受け止めた。

「反応は良いようですね」

「貴方は——誰？」

互いに動きを感じ取っているのか致命的な隙が見当たらず、埒が明かない。敵はあまりにレティシアに似すぎていた。

戦いぶりだけではない。

聞こえてくる声も、アストの話から推測して顔もであろう。

「戦いに集中しないと命取りになりますよ、レティシア。でも一つだけ答えましょう。貴方の予想とは違います」

「え？」

「私は貴方の『クローン』ではないと言っているのです」

「こうも簡単に自分の考えを見透かされた事にレティシアは戦慄する。

「洞察力も優れている訳ですか」

「おしゃべりはもう良いでしょうか?……ドラグーンの撃ち合いだけではどうにもなりませんね。なら、私の得意分野で攻めましょうか」

ユングヴィはスナイパーライフルを構えると、ヴァナデイスを狙って撃ち出した。その射撃は正確無比。

確実にヴァナデイスの急所を狙っていく。

「くっ、これでは！」

シールドで防御しながらライフルで反撃を狙うがユングヴィがそれをさせない。

「さあ、どこまで足掻けますか！」

「舐めないでもらいましょうか！」

コックピットを狙った一撃を紙一重ですり抜け、さらに放たれた一射を破損覚悟でアインヘリヤルで防御するとユングヴィへと突撃する。

破損したアインヘリヤルを投げ捨てさらに放ってきたビームをシールドで受け流し腕部のビームガンから放出したサーベルで斬りかかる。

「距離を詰められるとは、流石『戦女神』ですね」

サーベルをシールドで止めたヴァルターとレティシアはコックピット越しに睨みあう。

戦況は膠着状態へと陥っていた。

ガーティ・ルーに群がる敵はラクスが、ヴァルターの連れてきた増援部隊はセリスにより迎撃されている。

フィールドを展開する。

「なっ、こんなもので動きを封じたつもりかアア!!」

ブリアレオスはフィールドの起点になっているドラグーンを破壊する為にライフルを構える。

「僅かに動きを止められただけで十分ですよ」

エリニスの行動を読んでいたレティシアは虚を突く形でフィールドを解除する。

同時に収束ビーム砲を叩き込み、ブリアレオスの片腕を破壊した。

「ぐううう、貴様アアア!!」

「付き合っではいられませんよ」

距離を詰めたヴァナデイスはビームサーベルを横薙ぎに払い、ブリアレオスの下半身を斬り捨てた。

「レティシアアアアアア!! 殺してやる、貴様は必ずこの手で殺してやるぞ!!」

「二度と来ないでください」

撃墜されたブリアレオスを尻目に再びユングヴィと激しく斬り合う、ヴァナデイス。

「フフ、本当に流石です。ケダモノとはいえ、ああもあっさり倒すとは」

「余計な世辞は結構です!」

「でも、そろそろ時間切れですよ」

ヴァナデイスのレーダーに急速に近づいてくる機影が写し出されている。

「アルテミスを落とすとしたザラ大佐が向かって来ているのですよ。その後ろからは本隊も来ます」

「ッ!?!」

不味い。

本隊と共にアスランが来たら、他の敵を抑えきれなくなる。

ラクスはガーティ・ルーやイザナギの援護で精一杯。

セリスはイリアス・アキレス、ムウを含めた護衛部隊はサタナエルの相手に防戦一方だ。

「何とか活路を——」

「させるだけでも?」

ヴァナデイスを逃がさないとユングヴィイが斬りかかってきた。

このまま囲まれば全滅する。

そんな考えが全員の脳裏を過る。

その時、動いたものがあった。

損傷していた筈のガーティ・ルーである。

戦場のど真ん中を突っ切り、サリエルと激しい撃ちあいを行っていたイザナギとの間

に割って入った。

「なっ、イアン艦長、何を!？」

乱れた映像に笑みを浮かべたイアンの姿が映し出される。

《オーデン艦長、敵は我々が引きつけます。今の内に撤退を》

「……イアン艦長」

確かにそれが最善策かもしれない。

損傷したガーティ・ルーでは敵からの追撃から逃れられない。

かといって防衛しようにも戦力が明らかに不足しており、囲まれてしまえばそこで殲滅されてしまうだろう。

なら、動けないガーティ・ルーを囿に離脱を図る。

これが一番現実的だろう。

「なら早く脱出を」

《全員が逃げては艦を操作する者が居なくなってしまう。残ってくれた者も志願者だけですからお気遣いなく》

覚悟を決めたイアンの表情にセーフアスはそれ以上、何も言えなくなってしまう。た。

《お早く。長くは持ちません》

「……御武運を」

唇を噛みながらセーフアスは絞り出したように呟く。

《ありがとうございます。オーデン艦長》

「全軍、撤退！ オーデイン、各モビルスーツにも打電!! 急げ、時間がないぞ!!」

「了解」

イザナギからの通信に戦場にいた誰もが歯噛みする。

サタナエルと撃ちあっていたムウもまた思わずコンソールを殴りつけた。

「ガーティ・ルーを……くそー!」

嫌な記憶がよみがえる。

かつて『ヤキン・ドゥーエ戦役』で起こった出来事。

救援に訪れた先遣隊を見捨てざる得なかった時があった。

あの時も自身の無力さを痛感させられたが、今回も同じだ。

「どうした? 嫌な事でも思い出したかな、ムウ」

「黙れ!」

カースの挑発とも取れる声に苛立ちながら、ビームライフルで狙撃する。

しかしサタナエルはビームを余裕で回避すると、シールドに接続されているバズーカ

砲を発射してきた。

砲弾が弾け、飛行形態のスオウを捉える。

「ぐっ、散弾か」

「お前もガーティ・ルーと運命を共にするといい」

サタナエルのビームサーベルの一撃がスオウに迫る。

「舐めるな！」

機体のスラストターを噴射させ、無理やり体勢を変えるとサーベルの斬撃の直撃を避ける事に成功する。

しかしかわしきる事が出来ず、片方のウイングが斬り飛ばされてしまった。

「チッ」

「ほう、避けたか。腐ってもエンデュミオンの鷹。しかし——ッ!？」

カースの直感が危機を感じ取った。

何かが近づいてくる。

被弾し体勢を崩すスオウを追撃するサタナエルの背後から迫る物体。

クスイフオス・ジャステイスのファトウムー02である。

左右の端から伸びる二対のビームウイングがサタナエルに襲いかかる。

「ラクス・クラインか」

宙返りでビームウイングを回避したサタナエルにジャステイスがハルバード状態に

らを嘲笑うカースの哄笑が響いていた。

第31話 戦火を駆ける

ヴァルハラ の格納庫に立つメタリックグレイの機体。

この機体こそアレン——いやアスト・サガミ専用に開発された新型機である。

組み上がりはしているが起動テストも殆どしておらず、現在は急ピッチで実戦配備への準備が進められている。

そんな中、コックピットの e. s デバイス調整を行っていたアレンの下にルナマリアが駆け込んできた。

「アレン、緊急連絡です。統合軍の動向を探っていたオーディンやイザナギが敵と接敵したそうです！」

ルナマリアから手渡された端末に目を通す。

「……統合軍本隊はアルテミス方面へ集中しているようだが」

「万が一囲まれたら脱出できなくなります。その前に——」

「就航したばかりの新造戦艦を増援に向かわせ脱出経路を確保する、か。俺達も合流

せよと」

「でも機体調整まだ終わってないんでしょ」

「どうにかする。キラはトワイライトの調整で手が離せないだろうからな」

スイッチを入れ、機体を起動させるとメタリックグレーの装甲が白く色づく。

「行くぞ、準備しろ」

「ハア、了解です」

ルナマリアがコックピットから出て行くとアレンは表示されたデータに目を落とし
た。

先ほどはああ言ったものの、この機体の実戦投入は早すぎる。

しかし時間もない。

多少無茶だろうとやるしかないのだ。

此処は一先ず整備班に任せ、アレンは別の機体の調整を行っているキラの下へ足を運
ぶ事にした。

◇

テタルトスが建造した移動用軍事ステーション『ヴァルナ』。

外宇宙への進出を目的として建造されたこのステーションは現在、統合軍の拠点として宇宙で欠かせない存在になっていた。

その為、何時敵が来ても良いようにヴァルナの周りにはモビルスーツが展開され、過剰ともいえる警戒態勢を敷いている。

そんなヴァルナの司令官室ではファウスト・ヴェルンシュタイン司令官が最近赴任してきた秘書官の報告を受けていた。

「――以上がザラ大佐からの報告になります。アルテミスをどうするべきか、指示を求められているようですが？」

「例のレクイエムの件か」

以前のアルテミスであれば戦術的な価値はほぼ無い。

そのまま放置しても良いし、邪魔ならば破壊してもいい。

だがレクイエムを要した今のアルテミスであれば、占拠する価値は十分にある。

「はい。戦闘でレクイエムの砲塔が破損、コントロールルームも破壊されています」

「修復は？」

「調べさせた所では可能だそうです。ただし問題もあると」

「問題？」

「エネルギー供給に関してです。砲塔を修復し使用しても、戦闘で発射できるのは二

発まで。これは戦闘でアルテミスのエネルギープラントが破壊されてしまった事が原因のようです。光波防御帯と併用使用する場合は一発撃てればいい方だと」

このまま修復しても、いざという時に使えなければ意味がない。

他の陣営に威嚇の意味では役に立つかもしれないが、それは弱点を知らなければの話。ならば――

「こちらから部隊を派遣し、レクイエムを使用可能にできるようにアルテミスの改修を行うように指示を出してくれ」

「そう仰られると思い、すでに準備は整えてあります」

秘書官が提示した資料に目を通すとファウストは満足気に頷く。

「いい仕事をしてくれた。ありがとう。他に何か報告はあるかな?」

「はい。後、二件ほど。まず先の作戦においてアルテミスから脱出した者がいたと報告がありました」

「脱走兵か?」

「いえ。元アルテミス司令官ジェラード・ガルシアが部下を連れて脱出を図ったようです。捕縛する為にザラ大佐が追撃部隊を派遣したそうです」

「もう一つは?」

「中立同盟——いえ、今は調和条約同盟でしたか。彼らは着々と戦力を宇宙に集結さ

せ始めています」

中立同盟が新たに連合改革派とプラントを加えて『調和条約同盟』と名を改めた事はすでに世界中で知られていた。

基本的な事は以前と変わらないらしいが各国間とより関係を深め、共に危機的状況にも対処していくと声明を発表している。

「主戦場が宇宙に移る事を知っているからこそその行動か。何か変わった動きは？」

「……まだ確定情報ではありませんが、同盟は月に何らかのアプローチを試みようとしていているようです」

「なるほど」

それも当然の行動だった。

同盟にとってテタルトスの動向は最も注目するべき事柄。

仮にテタルトスが統合軍と歩調を合わせる事になれば、彼らは一気に不利になる。

その前に月とコンタクトを取っておきたいのだろう。

「月に関してはこちらも急がなくてはな」

「その準備も間もなく」

秘書官の言葉にファウストは再び満足そうに頷いた。

「君のような優秀な人間に来てもらって大助かりだな。イスラフィール代表に感謝し

なくては」

「そのような事は……」

「謙遜は止め。君は十分に優秀だよ。これからも期待している——ベアトリーゼ」
統合軍の軍服に袖を通した秘書官ベアトリーゼ・ファルケンマイヤーはまるで人形のように無表情のままファウストに頭を下げた。

◇

破壊された戦艦やモビルスーツの残骸が轟めく、所謂暗礁宙域に一隻の小型船が身を潜めている。

一見すると一般の輸送船団などが使用している船と同型なのだが、些か様子が違った。

コックピットに座っているのは地球軍の制服を身に纏った兵士達。

彼らは戦闘のドサクサに紛れアルテミスを脱出してきた者達だった。

「敵影は？」

「今のところは確認できない。何とか撒いたようだな」

コックピットに座る二人の兵士は安堵のため息をつく。

脱出してからしばらく統合軍のしつこい追撃によって緊張状態が続いていた。

「たく統合軍はしつこいんだよ。俺らみたいな敗残兵くらい見逃してくれてもいいのにや」

「ガルシア司令がいるからじゃないか？」

「私がどうしたと？」

噂をすれば影がさすとは良く言ったもの。

気が緩み雑談を交わしていた兵士達の下にガルシアが姿を現した。

「い、いえ。司令の体調を心配していたのであります！」

明らかかな誤魔化しだったが、ガルシアは鼻を鳴らすだけで追及はしてこなかった。

「ふん。それで敵はどうだ？」

「今のところは敵影は確認できません」

「そうか」

「しかし司令。我々はどこに向かうのです？」

すでに地球連合という組織は存在しない。

宇宙に存在している拠点もすべて統合軍によって占拠されている。

つまり自分達には行き場など何処にもないのである。

「そ、それは……とにかく、此処を脱出してからだ！」

足音荒くコックピットから出ていくガルシアに兵士達は呆れたような視線を向ける。

「何にも考えてないって事か……」

「まあこんな状況じゃ仕方ないけど——ッ、何だ!？」

ブリッジに響く警戒音に兵士たちがコンソールへ飛びつく。

「敵か!？」

「そうだろうよ。統合軍だろうと、同盟だろうと変わらないさ」

「どうせなら同盟の方がまだ救いがあるけどな」

無駄口を叩きつつ船を安全な場所へ逃がす為、兵士が操縦桿を握りしめた。

手は汗でビッシヨリと濡れ、喉は緊張でカラカラに乾いている。

初陣の時と同じような気分になりながら、やるしかないと自分を叱咤する。

「よし行くぞ」

「了解」

隣に立つ同僚の声に僅かな安堵感を抱きながら頷くと、船の操縦桿を動かした。



暗証宙域に進む統合軍所属のプレイヤーデス級。

アルテミスから脱出したガルシア達を追撃してきたその部隊を指揮していたのは地球から上がってきたばかりのリベルト・ミエルス大尉。

その傍にはテンペスターズの三人が控えていた。

「たく、何でヴェルンシュタインの腰巾着が指揮を執るんですかね？」

「ハア、貴方は何時も一言多いですよ」

「……ルーカス、口が過ぎるぞ」

ルーカスのボヤキにヴィクトルはため息をつき、ジョナサンが窘める。

そんなテンペスターズを気にも留めずリベルトはブリッジ中央のモニターを注視していた。

「大尉、目標を捕捉しました」

「よし、ようやくだな。散々逃げ回られたがここまでだ。降伏勧告を出せ。応じない場合は出撃したモビルスーツが敵艦を捕縛、もしくは撃沈せよ。それからテンペスターズにも出てもらおうか」

「俺達がですか？ あんなネズミ相手に？」

「上官の陰口を叩いているよりは、よほど建設的だと思うがな」

「ぐっ」

どうやら先ほどルーカスが言った事は聞こえていたようだ。

「了解しました。テンペスターズ、出撃します」

三人は敬礼し、格納庫に向かう。

その道すがら不満を爆発させるようにルーカスが壁を殴りつけた。

「腰巾着が偉そうに！　そもそも階級が同じプロバート大尉が指揮をすりやいいのに、なんでアイツなんだよ!!」

ルーカスからすれば同じ階級であるジョナサンが部隊指揮をしてくれれば良かったと考えていた。

ずっとこの部隊を、すなわちテンペスターズを率いてきたのはジョナサンなのだ。

それをいきなり地球から上がってきた、しかもヴェルンシュタインの腰巾着と噂されるリベルトが指揮権を掻っ攫っていかれば腹も立つ。

「そういきり立たないでください、ルーカス。無暗に突つかかる貴方も悪いです。それにあのリベルト・ミエルスの実力は本物ですよ」

「そりやそうだけどき」

「それにヴィルフリート・クアドラードの時よりマシでしょう」

クイと中指でメガネを押し上げるヴィクトルの指摘にルーカスも納得したように溜飲を下げる。

確かにそうだ。

もしもこれがヴィルフリートによる指揮で行われていたなら、もつと面倒な事になっていた筈だ。

「ま、確かに。今は地球だろ。どうしてんのかねえ、少佐殿は」
明らかに侮蔑を含んだ口調にジョナサンが止めに入った。

「二人共、上官相手にいい加減にしておけ。それにクアドラード少佐なら宇宙に戻ってきているそうだ」

「げー」

「そんな顔をするな。ユーラシア制圧戦における英雄の一人だぞ」

「それも疑わしいんですよ。あの少佐殿がねえ」

ヴィルフリートが地球で大きな功績を上げた事はジョナサン達の耳にも入ってきていた。

宇宙での醜態を知る彼らからすれば信じがたいものだったが。

「とにかく任務は任務だ。行くぞ」

「了解」

三人は何時も通りの調子で自分達の愛機であるシリウス・ラファールガに乗り込むとそのままズミ狩りへと向かった。

と言つても戦闘になる可能性はほぼ無いとジョナサンは考えていた。

アルテミスから脱した船はそう大きくはなく、モビルスーツを搭載できても精々二、三機が良いところ。

とても戦闘に耐えうる戦力ではない。

だが、任された以上は全力を尽くす。

それがジョナサン・プロバートの兵士としての矜持だった。

「あれか……」

出撃したテンペスターズの前に一隻の輸送船らしき船が姿を見せる。

反転し全速で離脱を図ろうとしているようだ。

「ハア、マジであれだけかよ。護衛にウインダムが三機だけつてシヨボすぎだろ」

「油断するな。伏兵が潜んでいるかもしれない」

部隊を囲むように展開し船を包囲すると、命令通りに警告を発する。

「その船、こちらは地球圏統合軍である。指示に従い直ちに停船せよ。従わない場合敵対勢力と見なし撃沈する」

しかし船は止まる気配もなく警告を無視し、さらに速度を上げて逃げようと加速した。

「当然か。全機、攻撃を開始せよ！」

船を囲むように展開していたモビルスーツが一斉に攻撃を開始する。

「さっさと片付けるぞ！ 援護しろ、ヴィクトル！」

「ハア、熱くなりすぎて計算外の動きをしないでください」

先行するルーカスに釘を刺すヴィクトル。

その様子を後方で見っていたジョナサンはどうも嫌な予感がしていた。

別に根拠があつた訳ではなく、長年戦場で生きてきた者の勘のようなもの。

それがジョナサンに油断するなど警鐘を鳴らしていた。

「気のせいであればいいがな」

戦況は有利どころか、本格的な戦いにすらなっていないかつた。

護衛のウインダムも粘ってはいるが、ルーカス、ヴィクトルの敵ではない。

二機は早々と撃墜され、残り一機もすでに風前の灯である。

「……これで終わりか」

最後に残つたウインダムの腕が吹き飛ばされ、武装も破壊された。

もはや成す術は無い。

「止め!!」

ルーカスはビームサーベルをウインダムへ振りかぶる。

だが、そこに予想外の介入者が現れる。

別方向から発射されたビームがシリウスの片腕を奪い、さらに連射された閃光がウィングダムからルーカスを引き離す。

「くそつたれ！ 腕をやられちまった！」

「何!?! 援軍!?!」

高速で近づいてきたものは白い装甲を持ったモビルスーツ。輸送用のシャトルに運ばれ、ビームライフルを構えている。

背中にも目立つ武装を装備しておらず、シンプルな印象を持った機体だった。

「まさかこんな所で統合軍と遭遇するなんてな」

「近道したつもりが、とんだ災難じゃないですか」

白い機体のコックピットにはアレンと備え付けた非常用の座席に座るルナマリアの二人が居た。

「どうするつもりです？ この機体、最低限の武装以外はまだ装備してないですよ」

「何とか追い払うしかないだろう」

アレンは素早く機体の状態を確認する。

ZGMF-X27A 『アンセム・イノセントガンダム』

統合軍との決戦に備えキラ・ヤマトが自身の機体と共に発案し、開発したアスト・サ

ガミ専用の『SEED』対応機。

基礎設計はローザ・クレウスの企画したデータを基にキラ・ヤマトが手を加えたものを使用、フレームも『アドヴァンス計画』に沿って開発された新型フリーダム用のものを流用し、開発時間の短縮を図っている。

「すでに作戦は開始されてる筈です。このままじゃ間に合わないですよ」

「仕方ないだろう。だが、のんびりもしてられないな」

アレンはシャトルから離脱するとライフルでリゲルの包围を散らし、素早く近接戦の間合いに飛び込む。

「何!?!」

「どけー!」

腰のビームサーベルを振り抜く。

光刃がりゲルの脚部を斬り裂き、至近距離から発射したシールドに装備されたビーム砲の一撃がコックピットを貫通する。

「チツ、新型ガンダムだと! 同盟か!! 調子に乗るなよ!!」

「ルーカス!」

「二人とも待て! 迂闊に近づくな!!」

憤りに任せ前に出たルーカスとヴィクトルをジョナサンも追う。

「このシリウスは……」

「前に戦った連中です、アレン」

デュランダルの研究施設を発見した時に交戦したシリウスだとすればエース級。かなり手強い。

だが、反面こいつらさえ突破できればこの局面を打開できる。

「なら、さっさと突破させてもらおうぞ！」

「新型だろうと！」

「我々の連携の前では！」

ヴィクトルが肩のビーム砲とハンドガンランチャーでイノセントの動きを阻害しながら、その隙に回り込んだルーカスが背後からビームサーベルで斬りかかる。

だがイノセントは射線を見切りビームをすり抜けるように回避する。

「避けた!？」

「そこ!!」

斬りかかったシリウスの腕をイノセントの背中から放出されたビーム刃『ワイバーン』が斬り裂いた。

「背中にビームソードだと!？」

咄嗟に飛び退くヴィクトル。

だが、そのまま追撃としてシールドから発射されたグレネードランチャーが頭部に直撃する。

「ぐああああ!!」

「ヴィクトル!! こいつ!!」

残った左手で構えたサーベルで接近戦を挑む。

それは明らかに無謀な突撃。

しかし頭に血が上ったルーカスはそれに気がつかない。

「落ちやがれ!」

上段から振り下ろされたサーベルがイノセントの一撃によって腕ごと斬り飛ばされ、そのまま構えたライフルをコックピットに突き付けられる。

「なっ、え?」

「お前が落ちろ」

トリガーを引くと発射されたビームがシリウスのコックピットごとルーカスを焼き尽くした。

「ル、ルーカス!!」

「くっ……よくもやってくれた。ヴィクトル、下がれ」

「まだ来るか!」

両手にサーベルを握るジョナサンのシリウスがイノセントへ突撃する。

「アレンー！」

「分かってる」

仲間をやられたからか、尋常な気迫ではない。

油断すればこちらが倒される。

イノセントもサーベルを構えてシリウスに応戦する。

「ガンダムー！」

「どけエエ!!」

すれ違う二機。

煌めく光刃の軌跡が交差した瞬間、シリウスの下半身が斬り裂かれた。

「ぐっ」

さらに展開されたワイバーンの斬撃がシリウスの背中に直撃しスラスタを両断する。

「ぐあああー！」

スラスタの爆発で吹き飛ばされるシリウス。

「よし、離脱するぞ」

「了解」

損傷したウィンダムを掴むとイノセントは輸送用のシャトルと合流し戦域から離脱して行つた。

「た、大尉！」

残されたヴィクトルは所々破損した自機をどうにか操り、ジョナサンのシリウスへ近づく。

背中を深々と裂かれ、大破したシリウスからの返事はない。

生きているのか、それとも死んでいるのか。

少なくともヴィクトルには判断できない。

ただ一刻を争う事だけは間違いなかった。

「くそ、くそオオ、ガンダムめ!!」

ヴィクトルは頭に浮かぶ最悪の想像になりかける自分を叱咤しながら、母艦へと連絡を入れた。

◇

新造戦艦が行つた陽動作戦とガーティ・ルーが囿になつてくれた事で、オーデインとイザナギはアルテミス周辺宙域からの離脱に成功していた。

イザナギへと着艦したレティシアは盛大なため息をつきながら、コックピットハッチを解放すると汗まみれのヘルメットを脱ぎ捨てる。

「フウ」

戦闘後の全身を襲う疲労感に負けないよう叱咤しながらコックピットから降りると格納庫は大騒ぎになっていた。

損傷した味方機の修復。

怪我人の搬送。

ガーティ・ルーから脱出してきたクルーの受け入れ。

この喧噪も仕方がない状況だ。

さらに統合軍もこちらをそう簡単に見逃すはずはなく、追撃の可能性を考慮しておく必要がある以上は、警戒を緩める事もできない。

「お疲れ様です、ルティエンス少佐。補給を行っておきますので、少し休んでいてください」

「お願いしますね」

「は、はい！ 新品同様に仕上げて見せます!!」

話掛けてきた若い整備士に笑顔で答えると、顔を赤くして意気込むように拳を握る。

やたら気合いの入っている整備士に首を傾げながら、休憩室に足を向けると呆れた様

子でセリスが近づいてきた。

「……教官つて、魔性の女とか言われそうですよね」

「いきなり何です？ そんな事、言われた事なんてありません。それよりもアイテルはどうですか？」

「良いですよ。前よりも扱いやすくなってます」

休憩室に入ると先に戻っていた飲み物を用意したラクスが待っていた。

「お疲れさまです。二人共」

「ありがとう、ラクス」

「ありがとうございます」

飲み物を口にするのと乾ききった喉が潤され生き返ったような気分になる。

「ハア、ラクス、フラガ一佐は？」

「はい。今はブリッジに上がっていますよ」

「そう」

サタナエルの事を聞きたかったのだが。

彼ならあのパイロットにも気が付いた筈だ。

あの機体を操っていたのが——ラウ・ル・クルーゼであった事に。

アレがもしもラウ・ル・クルーゼであるならば、出来るだけアストやキラには知らせ

たくない。

彼が生きていると知れば二人は今度こそ確実にクルーゼを倒そうと考えるだろう。それこそ命を懸けてでも。

出来ればそんな無茶な事はさせたくない。

その前に彼を倒せれば――

「レティシア？ どうされたのです？」

「また気分が悪いんですか？」

「え、いえ、それは……」

相変わらずの倦怠感があるが、今はさほど体調は悪くない。

「教官、前にも言いましたけどきちんと検査を受けた方が良いです。もしもの場合つてありますし」

「私もそう思います、レティシア」

「二人共」

純粹に心配してくれる二人の言葉が嬉しかった。

とはいえ現状、簡単に頷く事もできない。

これから統合軍との戦いは激しさを増し、決戦へと向かっていくだろう。

アストの事や待ちうける強敵、自分と似たあのパイロットの事もある。

戦力が一機でも多い方が良い現状、肝心な時に戦線に居ないというのは不味いのではないだろうか。

どうすべきなのか――

考え込んだ末にレティシアは結論を出した。

「いえ、大丈夫です。戦線を離れる訳にはいきません。今のところ身体の方はさほど問題はありせんしね。もしもこれ以上酷くなるようなら二人の言う通りにしますよ」

これはレティシアにとって運命の選択だった。

彼女はその事を知らない。

だがどのような形であれ、この道を選んできました。
この先に訪れる運命を知らないままに。

第32話 魔神の帰還

ヴァルハラへと帰還を果たしたオーデインとイザナギは急ぎドックに收容され、同時に整備班が取りつき、修復作業が開始された。

「どんな感じだ？」

《オーデインは補給が終わればすぐにも出られますが、イザナギの方は結構酷いですね》

オーデインは損傷も殆どなくすぐにも動ける状態だが、ガーティ・ルーを守つていたイザナギは幾つか深刻な損傷を受けていた。

「では済まないが、すぐにでも出れるようにしてくれ。報告しておいたミラーージュ・コロイド装備も忘れないように」

《了解》

整備班からの報告を聞いたテレサは深刻な表情で手元の資料に目を落とす。

「帰還早々に次の任務とは。しかもこれは……」

テレサが益々表情を曇らせていると、そこに丁度呼び寄せようとしていたレティシア達。パイロット組がブリッジへ入ってきた。

「アルミラ艦長、次の任務が入ったと聞いたのですが？」

「耳ざといな、ルティエンス。その通りだ」

手元の資料をレティシアに手渡すと、後ろからセリスとラクスも一緒に覗き込む。

「これは」

「かなり危険な任務ですわね」

「ああ。イザナギが出れないのは痛い。援軍の要請はしてあるが」

「時間がないですか？」

「次の行動が同盟の行く末を決めると言っても良い。時間が経てばその分リスクも上がる。お前達にも無理をさせてしまうがよろしく頼む」

テレサの険しい顔に三人もまた気を引き締めるように敬礼する。

休息も取れないまま、再び次の戦場へ向う三人へ申し訳なきを感じながらもテレサは敬礼を返した。



男は夢を見ていた。

変わり映えのしない、いつも通りの夢。

ただ見ている側からすればそれは悪夢という以外何者でもなく、吐き気すら催して
る。

しかしそれに抗う術はない。

そしていつも通りの光景が飛び込んできた。

最初に姿を見せたのは二機のモビルスーツ。

一機は背中 of 装備を自在に変え、もう一機は持ちうる火力と機動性をもってこちらを
圧倒していく。

二機の脅威をどうにか退けて、次に現れたのは蒼き翼を持つ機体。

何度攻撃を加えようと規格外ともいえる機動性で全てを回避され、強力な火器ですべ
てを薙ぎ払ってしまう。

それから逃れた先でそこでも再び敵が現れる。

何度挑んでも、何度戦っても勝てない相手が。

それは――

「うあああああああ!!」

いつも通りの結末を迎えた悪夢から飛び起きる。

そこはモビルスーツのコックピット。

いつの間にか眠ってしまったのだと気が付いたジェラルルは息荒く、額の汗を袖で拭く。

「ハア、ハア、ハア、くそー！」

苛立ちに任せ、コンソールを殴りつけると嫌悪と恐怖に抗うように歯ぎしりする。

「また夢か。……最近、毎日だな」

徐々に自分が蝕まれていくような感覚に目眩を覚える。

魔神と戦った時もそうだった。

《懐かしいと思わないか？ 貴様とは何度もこうして戦った事があつたな》

《お前は……誰だ？》

《答えはもう知っているだろうが！》

あんな事をジェラルルは口にするつもりは無かった。

気が付けば自然と言葉が出ていたのだ。

まるで自分ではない別の誰かが話をするかのように。

そしてアラスカでのフリーダムとの戦闘も同じ。

かつての仇敵にでも出会ったかのように――

「違う、違う、違う！ 俺は……ジェラルル・ファイルオルだ。断じてお前じゃない！ 自分を確かめるように拳を握る。」

そして手元の端末から伸びるイヤホンを耳につけると陽気な音楽が流れてきた。落ち着く。

コックピットに座り音楽を聴いているこの時間こそ、ジェラルルが自分が自分である事を確かめられる最も安らぐ瞬間だった。

しばらく音楽のメロディーに聞き入っているとコンコンとハッチを叩く音が聞こえてきた。

「ファイルオル大尉、少しよろしいですか？」

ハッチを解放するとそこには金髪を束ねたどこからどう見ても女にしか見えない人物、ヴァルター・ランゲルト中佐が立っていた。

ジェラルルは地球から宇宙へ上がり、命令によりアルテミス攻略戦の増援部隊として派遣されていた。

結局、戦闘自体に加わる事は無かったが、余力が残っていると判断されこうして連合の残党狩りへと駆り出されたという訳だ。

「何の御用でしょうか、ランゲルト中佐？」

正直、名前を聞いた時はどんな英傑なのかと思っただけに、まさかこんな可憐な人物とは思っても見なかった。

名前からして男性なのだろうが——いや、性別は関係ない。

重要なのはヴァルターが優秀かどうかだけなのだ。

「追撃部隊の先駆けとして派遣されたりベルト・ミエルス大尉の部隊が損害を受けたと報告を受けました」

「損害？」

逃れた残党に追撃部隊に打撃を与える事が出来る戦力など残って居なかった筈。

しかもテンペスターズと呼ばれたエース達も参加していたと聞いている。

そんな状況で反撃が出来るとは思えない。つまり——

「何か予期せぬ事が起きたという事でしょうか？」

「ええ。同盟の新型ガンダムと遭遇したらしいのです」

「新型ガンダム!？」

「ガンダムとの遭遇戦によりテンペスターズの内一名が撃墜、もう一名が意識不明の重傷、残った一名の機体もほぼ大破した状態」

差し出された端末に映し出されているのは、白い装甲を持ったモビルスーツ。

間違いなくガンダムだった。

「傷ついた隊を一旦ヴァルナへ下げ、我々がミエルス隊の支援に入ります。その過程で可能なら新型ガンダムの追撃も行うようにとの事です」

「了解しました」

去つていくヴァルターを敬礼しながら見送ると、ジェラールは修復された愛機イレイズMk-IIIを見上げる。

「ガンダムか……今度こそ、俺は俺のまままで貴様に勝つぞ——シリル！」

◇

統合軍の戦闘から離脱したアンセムイノセントガンダムはどうか母艦となる戦艦へとたどり着いていた。

ミネルバを彷彿させる形状を持ちつつ、アークエンジェル級やイズモ級の技術が使用されている事が見て取れた。

戦艦の名は『フォルセティ』

独立部隊『グラオ・イーリス』の新たな旗艦となるべく開発された同盟の新造戦艦である。

本来は部隊設立と共に就航予定となっていたのだが、グラオ・イーリスに反発する勢

力の妨害によって開発が遅れに遅れ、最近になってようやく日の目を見る事ができた。

「フォルセティがこうして宇宙で活動している所を見ると何か感慨深いですね」

「ああ。ずっと開発が遅れていたからな」

「遅れていたんじゃないかって、遅らされてたでしょ」

「言いたい事は分かるが、迂闊な発言は控えろよ」

開いたハッチからフォルセティの格納庫へ入り、イノセントをハンガーへ設置すると整備班が一齐に取りついた。

「大尉、中尉、ご苦労様です」

「ああ、機体の調整を頼む。それからあのウインダムの方もな」

「ハツ」

「あ、ねえ。私のモビルスーツは届いてる？」

「はい。中尉の機体も現在最終調整中です。それから艦長がブリッジでお待ちになっていますので」

「了解」

床に転がしたウインダムを整備班に任せてルナマリアと一緒にエレベーターに乗る込む。

「そういえば艦長って誰が任されたか聞いてますか？」

「いや。急ぎだったからな。宇宙に上がってきてからはイノセントに付きっ切りだったし」

まあ誰であれグラオ・イーリスの旗艦であるこの艦を任された以上、相当優秀な人物には違いない。

一体誰なのか興味を持ちつつ、ブリッジに入ると意外な人物が艦長席に座っていた。

「遅いぞ。作戦はとつくに終わってしまった」

「えっ?」

「イザーク!」

艦長席に座っていたのはアレン達にとつても旧知の仲であるイザーク・ジュールだった。

「お前がフォルセテイの艦長だったのか。道理でヴァルハラに居ない訳だな」

「まあ急遽決まったからな。アルミラ艦長や他のベテランを押し声もあつたんだが、今はどこも手一杯だ」

「むしろお前の方が気兼ねしなくていいさ。とにかくよろしく頼む、ジュール艦長」

「こちらこそ頼りにさせてもらおうぞ」

イザークと握手をかわし、ブリッジメンバーをと顔合わせを済ませる。

何人か新人が混じっているようだが、他はすべて経験豊富な士官が配置されているよ

うだ。

ルナマリアが新人の女性士官と挨拶をしている間にイザークに此処に来るまでに遭遇した敵の事を説明する。

「なるほど。そんな場所にウインダムがな」

「単純に連合の残党を追っていただけかもしれないが、それにしても部隊の規模も大きかった。パイロットに直接話を聞ければ良かったが、すでに死亡していたからな。ウインダムから何か分かればいいが……」

エース級も何人か含まれていたようだし、少し気にかかる。

「ん、どうやらその件で連絡が入ったようだぞ」

イザークが手元のスイッチを入れると格納庫と繋がり、整備班長の厳つい顔が映し出された。

《ウインダムのレコーダーの解析が終了しました》

「早かったな」

《コックピット周りの損傷は見た目ほど酷くありませんでしたからね。レコーダーが無事だったのが幸いでしたよ》

「それで？」

《とりあえずこいつを聞いてください》

班長が端末を操作するとスピーカーからレコーダーに記録された音声が届いてきた。聞き取れないものもある。

「何としても……時間を稼ぐ……ガルシア司令を……コロニーへ」

《この後すぐに撃墜されたのか音声は此処までです。他は周辺のマップデータくらいで目ぼしいものは何も》

「ご苦労だった。何かあれば報告を上げてくれ」

《了解》

イザークと班長のやり取りを聞きながら、アレンは音声記録の件を考えていた。

「どうしたんです、アレン？」

「……ガルシア司令、まさかジェラード・ガルシアか」

「知っているのか？」

「二応な。正直、思い出したいくない類の人間だ」

アレンはヤキン・ドゥーエ戦役時の話だ。

崩壊したヘリオポリスから脱出したアークエンジェルは補給を受ける為にアルテミスへ寄港した事があった。

その時に司令官としてアレン達の前に現れたのがジェラード・ガルシア司令だった。

「詳細は省くが昔、酷い目に遭わされてな。でもまだアルテミスで司令官をやっている

たとは思わなかった」

「なるほど。司令官が脱出していたとなれば、奴らが執拗に動くのも」

「艦長、俺達もガルシア捕獲に動くべきだと思いが？ 奴なら有益な情報を持つてい

る可能性もある」

「統合軍の情報は出来るだけ欲しい所だな。連中がまだ捕まっていないなら——」

ウィンダムに残されていたデータからガルシアの行方を予測する。

周辺宙域には統合軍がうろついているから、そう遠くには行けない筈。

「奴が向かうとしたら此処しかない」

モニターに表示された場所にアレン、ルナマリア共に顔を顰めた。

「よりによってそこですか」

「開発中のコロニー群があるポイントだな」

イザークが指し示したのはアムステルダム主導で開発が進められているコロニー群がある場所だった。

此処もアムステルダム同様戦闘禁止区域に指定され、各陣営の軍隊が駐留する事も地球と同様だが宇宙における経済の中心として機能する予定になっていた。

「しかし此処にも統合軍が網を張っている筈ですよね？」

「船を輸送船か何かに偽装するか……もしくはコロニー群に入る前の商船でも捕まえ

と一緒に入港するか。やり方は色々あるだろうが、おそらくガルシア達はコロナー付近に隠れていると考えて間違いない」

「できればコロナー内に入られる前に捕縛したい。でないとな面倒な事になる。フォルセティをコロナー群に向ける。それからお前には話がある」

アレンはイザークに連れられブリッジの外に出る。

神妙な表情のイザークにアレンは自然と気を引き締めた。

「で、話というのは？」

「……お前、いつまでアレン・セイファートを名乗っているつもりだ？」

「いきなり何だ？」

「アムステルダムでアイツと会ったと聞いた。今はアスラン・ザラを名乗っている事もな。アイツにとって再びアスラン・ザラを名乗る事は相当の覚悟が必要だった筈だ」

アスランはかつてアレックス・デイノという偽名を使っていた。

これは奴の父親であるパトリック・ザラの件を考慮した結果、必要と判断したからと考えるのが自然だ。

にも関わらず元の名を名乗る。

これがどれだけリスクな事かはアレンにも十分に理解できた。

「それでもまたアスランを名乗ったのはお前と本気で決着を付けるつもりだからだろ

うな。お前も覚悟を決めないと前のようにはいかんぞ」

アムステルダムで会ったアスランの目にはアレンへと敵意とは別に気炎のようなものが宿っていた。

そこに滲ませていたものは覚悟。

これまでの因縁に決着をつけるというアスラン自身の決意の現れだ。

次に戦う時はそれこそすべてをぶつけてくるに違いない。

「そうだな。イザーク、忠告感謝する。ありがとう」

「なっ、礼を言う前に覚悟を決めろ！ 本気になったアイツは手強いぞ。何だかんだで負けず嫌いだからな、アイツは」

「フフ、ああ」

アレンはこの先で訪れる戦いを想像しながら、決意を新たに歩き出した。

◇

フォルセティの航行は順調そのものであり敵に遭遇する事もなく、コロニー群がある宙域にまでたどり着いていた。

ガルシアが乗る船の探索はブリッジの方に任せ、格納庫でイノセントの調整を続けてアレンは隣に立つルナマリアの機体を見上げた。

ZGMF-X57Sb 『シークエル・インパルスガンダム』

受領したオルトリンデのパーツやシークエル・エクリプスガンダムのデータ用インパルスをルナマリア専用機として改修、強化した機体。

ルナマリアの特性に合わせ、近接戦用の武装が充実、さらに背中のアタッチメントを改良してタクティカルシステムにも対応できるようになっており、汎用性も増している。

「じゃ、アレン先に出ますね」

「頼む。無茶だけはするなよ」

「了解！」

コックピットから顔を出していたルナマリアはアレンに笑顔で手を振るとシートに座ってハッチを閉じる。

そして乗機の操縦桿を馴染ませるようにゆっくりと手を這わした。

「テストイニシリエット04、装着完了。各部正常、接続部に異常なし」

《ルナマリア、あくまでも標的の確保が最優先だ。出来るだけ交戦は避ける。それからコロニー周辺には絶対に近づくなよ》

「了解です。ルナマリア・ホーク、シークエル・インパルスガンダム、行くわよ！」

カタパルトから押し出された機体が宇宙へと飛び出すと背中が翼が開き、光が放出さ

れる。

「ぐつ、かなりの速度！ それでも使いこなさないと！」

デステイニーに比べれば放出される光の量は少ないがその速度は通常のモビルスーツの比ではない。

「目標は……」

コンソールを操作し宙域図を呼び出す。

地図上に幾つかのマーカーが幾つか表示されている。

一つはコロニー群。

もう一つが統合軍だ。

「アレが目標の部隊か」

ルナマリアに与えられた任務は陽動。

ガルシア達を狙う統合軍の斥候の妨害、排除し引き離すのが目的である。

その間に別部隊がこの付近にいるガルシアを確保するのだ。

居場所はまだ判明していないが、戦闘が始まればガルシア達はここぞとばかりに動き出すだろうというのがアレンの見解だった。

「ま、何らかの動きはあるでしょ」

機体を敵部隊が動いている方向へ向かわせた。

慎重に散乱している岩を回避しながら進んでいると何かを探す統合軍の部隊を発見する。

「居たー！」

予期せぬ形で現れた敵に動揺を隠せない統合軍。

そこを見逃さず、ビームライフルよりやや大きな銃身を持つ高出力エネルギー収束ライフルを前面にせり上げトリガーを引いた。

強烈な閃光が狙い通りに直進するも、敵は左右に飛んで攻撃を避ける。

しかしそれがルナマリアの狙いだった。

ビームはそのまま背後にあった大岩を砕くと岩片をまき散らし、敵のフォーメーションを大きく崩す。

「行くわよー！」

腰からエツケザックスを抜くと隊列を崩した連中に突撃した。

◇

ルナマリアの戦闘が始まった頃合いを見計らいガルシア達を捕縛すべく別動隊が動き出す。

フォルセテイから出撃していくスオウ、ムラサメと言った機体の後にカタパルトに姿

を見せたのはアンセム・イノセントガンダムであった。

背中には今まで背負っていなかったバスターカ砲やライフル、腰には斬艦刀など今までになかった武装を装着している。

「おおよそ八割程度か。後は機体の微調整とフリージアの準備が終われば、万全な状態で動けるな」

素早くキーボードを叩き、機体の状態を確認しているとブリッジから通信が入った。

《ルナマリアが予定通りに接敵した。機体の調子はどうだ？》

「何とかいける」

《では作戦通りに頼む》

「了解」

カタパルトに光が灯り、発進準備完了の合図が出る。

そこで先ほどの会話が頭を過った。

「覚悟か……そうだな」

操縦桿を握りしめると大きく息を吐き、そして――

「――アスト・サガミ、ガンダム行きます！」

長らく使っていないなかった本名を口にする、機体を発進させた。スラストが点火され、イノセントが宇宙を駆ける。

「ん、相手側も考えている事は同じだったようだな」

戦闘しているルナマリア側とは別に動いている連中がいる。

連中もこの戦闘に紛れて対象を確保しようとしているのだ。

「目ざとい奴がいるようだな。……指揮しているのはヴィクトリアか？」

いつかの食えない女性の事が脳裏に浮かび、思わず顔を顰めてしまう。

「さっさと探し出さないと面倒な事になりそうだ」

あの秀頭の男を追う事になるなんて、アルテミスに初めて入った時は思いもしなかった。

微妙な気持ちになりながら岩石を避けていくと、早速敵と遭遇する。

「リゲルか。その機動性もこの場所では上手く発揮できないだろうー」

ビームライフルがリゲルの動きを鈍らせ、シールドのビーム砲を発射した。

「そっ！ー」

ビームが敵を撃破すると遼機として控えていた別のリゲルがライフルを連射しながら突っ込んでくる。

アストは岩壁を盾に攻撃をやり過ごし、敵の虚を突くように飛び出すと敵機にビーム

サーベルを突き立てた。

容赦なくコックピットに突き立てた光刃が敵パイロットを焼き殺す。

「次」

表情を変えぬまま撃破したりゲルからサーベルを引き抜き、さらに向かってくる敵の方をビームライフルで狙撃する。

岩場を縫うように移動するイノセントはまるで水を得た魚のように戦場を動き回る。

アストの反応をダイレクトに反映しているのではと思う程の、機敏な動作に敵パイロットは動揺したように声を上げた。

「何なんだ、あの反応は!?!」

「攻撃が当たらない!?!」

ビームは掠める様子もなく宇宙の暗闇の中へ吸い込まれてしまう。

それどころか悠遊と飛び回るイノセントによってリゲルは大半が撃ち落とされてしまった。

「くっ、此処は一旦退いて、体勢を立て直すべきだ」

「しかし探索は——」

反論しようとした兵士はビームに焼かれ、乗機は宇宙の藻屑と変えられてしまう。

味方は全滅。

もはや探索など行っている場合ではない。

「くそつたれ！」

「逃がしはしない」

イノセントは反転しようとするリゲルの足を斬り飛ばし、ワイバーンでウイングを破壊する。

「落ちろ」

ビームサーベルを振り上げたその時、強力な閃光がイノセントへと降り注いだ。

「増援か」

リゲルを蹴りつけ反動でビームから逃れたアストは攻撃してきた相手に向けてライフルを発射する。

イノセントの攻撃を防ぎながら近づいてきたのはイレイズMk-IIIだった。

「Mk-III!? クルーゼの部隊か? いや、奴の気配はない」

単純にMk-IIIだけがこの場に現れただけなのか?

余計な疑問を棚上げし、敵機を迎え撃つべく剣を握った。

「こんな所まで追ってくるとは、しつこい奴だ」

「ガンダム、俺は、貴様達を倒す! 俺が俺である為に!」

「ん、このパイロット、いつもの冷静さが無い」

確かジェラールとかいう名前だった。

卓越した技能と正確な射撃、機体制御、どれをとっても一流。

アストにはかつて戦ったパイロットとダブる事も多々あった為に警戒していた敵の一人だ。

しかし今はそれが無い。

正確に言えば焦りによって冷静さを欠いているような感じがする。

「ならばこの隙は見逃さない。このまま押し込むまで!」

イレイズの斬撃を捌き、盾で突き放すとサーベルを一閃、敵機の装甲を斬り裂いた。

「ぐっ、俺が……」

ジェラールはイノセントの圧倒的な動きについていくことができない。

至近距離から突きつけたビームライフルも斬り裂かれ、ビーム砲の一撃も紙一重の動きでかわされてしまった。

「動きについていけない?」

呆然と呟くジェラールにアストは構う事無く攻撃を仕掛け、腕を落とした。

「なら!」

「ッ!」

苦肉の策としてトーデスシュレッケンで切り落とされた腕を破壊すると爆発に紛れ

て岩片の影に姿を隠した。

「逃げられたか。……まあ、今はガルシアの確保が先だ。ようやく動いたみたいだしな」

イノセントはそのまま戦域から逃れようと動き始めたガルシア確保に動く。

それを岩片から確認したジェラールは思いっきり操縦桿を殴りつけた。

「クソ!! ハア、ハア、ハア」

ジェラールは歯噛みしながら荒い呼吸を整えようと努めて深呼吸を繰り返す。

「落ち着け、いつも通りに——いや、それじゃ駄目だ」

脳裏に昔の事が思い起こされる。

ジェラールは元々一般的なナチュラルの家庭に生まれだ。

その出自に特殊性はない。

普通に育ち、世界を見て、地球軍へと志願する。

理由は実に陳腐なものだが、家族を、仲間を守る為、そして英雄になる為。

才能があつたのかモビルスーツに乗っても死ぬ事無く戦い、世界は少しづつ変化して

も、ジェラールはいつも通りに任務をこなし確実に戦果を挙げ続けた。

そんな時に転機が訪れた。

ジェラールはユニウス戦役終盤、ロード・ジブリールの目に留まったのである。

呼び出された彼はパイロット能力強化の実験に使われた。

大した事のない実験だと眠らされ、ジェラルが目を覚ました時にはすでに戦争は終わっていた。

何の為の実験だったのかと当初は落胆したものだ。

しかしジェラルには変化が起こっていた。

モビルスーツに乗った際の感動は今でも忘れられない。

明らかに広がった感覚と向上した技能によって、ジェラルは今まで以上の戦闘力を発揮できるようになっていた。

——まるで別の自分になったかのように。

それからは調子よく、順当に戦果を挙げ続け地球軍保守派最強と呼ばれるようになった。

しかし旨い話には裏がある。

そう、当然問題が発生した。

戦いを重ねる度に記憶の齟齬と夢という形で見たこともない光景と感じた事のない感情が湧き上がってきたのだ。

生々しいそれは確実にジェラールを侵食し、精神的な限界に追い込まれた。その時、彼が現れた。

カース。

不気味な仮面を付けたその男はジェラールに真実を聞かせた。

「君はもうすぐ消えてなくなるかもしれない」と。

すべてはジェラールに力を与えた実験の影響だと。

その実験——それは全く関係ない赤の他人に別人の記憶を植え付けるといふもの。

ジェラールは別の人物の技量や記憶を知らずに移植されていたのである。

植え付けられたものの名前はシリル・アルフォード。

かつてザフトに存在したエースパイロットだった。

何故、ザフトのパイロットの記憶だったのか？

そんな事はどうでも良い。

顔も知らない男の記憶と感情。

それがジェラールを少しずつ蝕み、乗っ取るうとしている。

要するにそれは内側から食われていくのと同じ事だった。

「俺は……お前などに負けない。負けてたまるか！」

ジェラールはどうにもできない過去を振り捨てるかのように首を振るとイノセントを追うように岩片から飛び出した。

◇

邪魔な岩を排除し、しばらく進んだ先でアストはようやくやく目標を発見していた。

戦火から逃れるように小型の輸送船がコロニー群へ逃げ込もうと歩を進めている。

「悪いが行かせる訳にはいかないんだよ、ジェラード・ガルシア司令」

バルカン砲で船の足を止めて、正面へと回り込むと投降を呼びかける。

「こちらは同盟軍独立部隊『グラオ・イーリス』所属、アスト・サガミ大尉だ。直ちに投降しろ」

《ぐ、き、貴様は、あの時の小僧!?!》

「久しぶりですかね、ガルシア司令殿。降伏してくださいれば、命の保証はしますよ。貴方もアルテミスで俺達の身を案じてくれたようですし、その恩に報いる事もできるかと」

ライフルを突きつけ、投降を促すアストにガルシアは悔しそうに俯く。

《本当に命を保障してくれるのか？》

「もちろん」

《何が目的なんだ？》

「統合軍及びアルテミスに関するデータと情報です。持つてるでしょう、アルテミスの司令だった貴方なら」

《ぐっううう……分かった》

「船はそのまま俺の後をつけてきてください。ガルシア司令はこちらに移ってもらいましょう」

もう抵抗する気もないのか、宇宙服を着たガルシアが外へ出てくる。

そのまま手に乗せようとした瞬間、ビームによる攻撃が迫る。

「Mk-IIIか！」

輸送船を貫通しようとしたビームを盾で防ぐと、攻撃してきたイレイズMk-IIIを迎撃しようとしてライフルを発射する。

「そんなものはアア!!」

ビームはイレイズを掠め、ビームキャノンを吹き飛ばす。

しかしそれでもイレイズは止まらない。

残った腕でビームサーベルを構えて突っ込んできた。

「自棄にでもなったのかー！」

「うおおおおお!!」

アストは腰からバルムンクを抜きイレイズを迎え撃つ。

上段から振り下ろされた一撃。

それに合わせてカウンター気味に斬艦刀を振るうとサーベルごとイレイズの腕を斬り裂いた。

両腕を失い、イレイズの戦闘力はない。

もはや勝敗は決した。

しかしまだジェラルルは最後の足掻きを見せる。

「まだだー！」

イノセントの刃がコックピットに届く前に足を振り上げ斬撃を逸らし、距離を取った。

「これでどうだー！」

残った武装である背中のビーム砲のトリガーを引く。

これはジェラルルの最後の攻撃。

だがそれでも――

「俺には届かない」

ビームを回避し止めを刺そうとバルムンクを構えた瞬間、アストに悪寒が走る。「何!?!」

上方から発射されたビームが輸送船をあつかりと破壊した。

「レーダーの範囲外から!?!」

イノセントのレーダーの外側からの狙撃。

正確無比の脅威の射撃精度。

スナイパーライフルを構え戦場に姿を現したのはアストの予想通りにヴァルターの駆るユングヴィイだった。

「お久しぶりですね、アスト」

「ヴィクトリアか」

「フフ、なるほど新しいガンダムは貴方もの物でしたか」

「どこまでも目ざとい奴だな。イレイズを囷に使い、俺の注意を逸らしたという訳か」

「お相手したい所ですが、どうやらのんびりとはしていられないようですので、今日はここで失礼します」

ユングヴィイは装甲から色を失ったイレイズを掴むと、そのまま戦場から離脱していく。

「ヴィクトリア!」

「ザラ大佐は貴方と決着をつけたがつています、アスト。貴方も相応に覚悟を決めた方がいい」

「覚悟なら決まったさ」

「そうですね。ではまた」

ユングヴィが戦域から離れると付近にいた統合軍は撤退を開始する。

「してやられたか」

アストがため息をつきながら振り返ると完全に破壊された輸送船の姿が見えている。

あの惨状では乗員に生存者は見込めない。

「仕方ない、帰還を——ん？」

そこで船の残骸の近くに浮く宇宙服を着きている死体がある事に気がついた。

「まさかガルシアの……」

アストはその死体を掴むとフォルセティへと向かって飛び去っていった。

◇

月周辺はかつてない程の緊張感に包まれていた。

軍の指揮を執るユリウス・ヴァリス大佐の命令により、交易船などを除きあらゆる勢

力を勢力圏内に入れるなという命令が下されているからである。

当然、軍の動きも活発になり繰り返し哨戒部隊が出撃するほど、厳重な警戒を敷いていた。

その宇宙を一隻の戦艦が悠然と哨戒任務についている。

テタルトス軍の旗艦であるアンドロメダ級戦艦『アリストテレス』

指揮していたのは現在軍を統括しているユリウス・ヴァリス大佐だった。

いつも通りに任務をこなしていたアリストテレスだが、オペレーターからの報告が重苦しい緊張感をもたらした。

「大佐、偵察に出していた哨戒機からの通信が途絶えました」

「どうしますか、大佐？」

「……まずは敵の規模を確認する。部隊を——ッ!? これは……まさか？」

「大佐？」

常に冷静なユリウスの表情が驚愕に染まっている。

まるであり得ないものを見たかのような——

「ディザスターを用意しろ」

「は？ 大佐、自ら出撃されるのですか？」

「そうだ。急げ！」

「ハ、ハッ！」

ユリウスはすぐ様格納庫に降り、制服のまま愛機のコックピットに乗り込む。

「大佐、パイロットスーツを」

「必要ない。それより機体の出来を見せてもらおうぞ」

「い、いや、しかし——」

整備兵の言葉を最後まで聞かずにコックピットハッチを閉じるとカタパルトに機体が運ばれる。

アリストテレスのハッチが開き、青紫色の装甲が色付いた。

「この感覚は……」

ずっと引つ掛かっていた事の答えがすぐそこにある。

それを直感で感じ取ったユリウスは自然と笑みをこぼした。

「確かめさせてもらう。ユリウス・ヴァリス、ディザスター、出るぞ!!」

第33話 別れの時

青紫の装甲を纏ったモビルスーツ。

その機体はヤキン・ドゥーエ戦役からこれまで最強の名で呼ばれてきた男の象徴たるモビルスーツだった。

LFSA—X007 『ディザスター・グリューエン』

テタルトス最新型モビルスーツ。ユニウス戦役で実戦投入されたグロウ・ディザスターをさらに洗練させ、強化した機体。

元々規格外の性能を誇っていた機体を強化しただけあって、他の追隨を許さない圧倒的な性能を持つ。

「文句のない仕上がりだな」

機体を操り感触を確かめたユリウスは微かに笑みを浮かべ、さらに速度を上げる。

浮かぶデブリを物ともせず突き進む。

常人の感覚からすればはつきり言って異常。

普通ならぶつかるとは考え、速度を落とすもの。

さらに異常さを際立たせていたのが、ディザスターの軌道。

デブリの位置をあらかじめ把握しているかのように紙一重でかわしていく。

一糸乱れぬ動きでだ。

これを異常と言わずに何と言う。

「さて哨戒機は……アレか」

最速で哨戒機の反応が途絶えたポイントへたどり着いたユリウスは、その光景に思わず賛辞を送った。

「流石と言った所か」

駆け付けた現場には破壊されたモバイルスーツが、そこらに浮かべられていた。

武装とメインカメラ、両手足は破壊され、コックピットへの攻撃は外すというオマケ付き。

——相変わらずの腕前という訳だ。

「……来る!!」

ユリウスの体に走る感覚が察知すると同時に直上から迫る一条のビーム。あいさつ代わりという事だろう。

デイズターが機体を捻り、ビームを避けるとすぐに反撃へと転じた。ライフルを構えての狙撃。

敵機の姿を確認した訳ではないにも関わらず、位置を完璧に把握しているかのような迷いのない一射だった。

同時にスラスターの光が軌跡を描き、ビームの一撃を回避していた。

赤く染められた装甲に宇宙で光を放つモノアイ。

二基のスラスターユニットが噴射され、デブリの中をあり得ない機動で動くモビルスーツ。

「その機体に乗っているとはな」

かつて相対したモビルスーツに乗る相手に苦笑しながら、ユリウスはフットペダルを踏み込んだ。

赤と青紫。

デブリを挟む形で二つの閃光が宇宙を走る。

障害物を縫うように動き、衝突する気配すらない。

普通のパイロットが見たら卒倒しかねない機動を二機のパイロットは平然と行って

いた。

この二人がどれだけ隔絶した技量なのかは言わずもがなだろう。デブリの間を動き回る二機は互いの隙を伺いながら同時にビームライフルを発射した。

交差するビームは標的を射貫く事無く虚空へ消え去る。

その瞬間、二機は同時に前に出ていた。

抜いたサーベルが高速でぶつかり合うと弾けた稲光が周囲を照らした。

「フッフ、腕は鈍っているどころかささらに向上している。流石だなユリウス。それでこそだ」

「腕を上げたのはそちらこそでしょう——クルーゼ隊長」

サタナエルに乗る兄弟とも呼べる男にユリウスは苦笑しながら剣を引いた。

ラウとユリウス。

二人はその血筋と生まれから兄弟と呼んで差し支えない関係だった。

互いに相容れない目的を持ちながらも長い期間を共に過ごし、強い繋がりで結ばれている。

その奇妙な信頼は別れていた間も僅かも揺らぐことは無い。

「もう隊長ではないさ。それに今の私はカースだよ」

「なるほど……その機体を見れば何があつたのかは大体想像がつく。これまでの行動についても。それよりもこんな茶番を仕掛けた理由は何です？」

哨戒機を撃墜せず、パイロットを生かしたまま放置。

さらに母艦に奇襲を仕掛けるチャンスもありながらも襲撃地点に潜伏していた事。すべてはユリウスを誘う為のものだろう。

「何、一つ頼みがあるだけさ。……統合政府イスラフィール代表とファウスト・ヴェルンシュタイン軍事司令、この二人との会談を行ってもらいたい」

ユリウスは現在、どの勢力だろうが月の勢力圏に入れないよう厳重に規制を敷いていた。

その理由の一つが議会の混乱である。

アルノルト・ヴェルンシュタインを初めとした停戦派議員達の欠員によって、議会は戦争継続派が主導権を握っている。

しかし息つく間もなく予期せぬ事態がおきた。

統合軍の誕生である。

これには議会も慌てた。

地球駐留軍が丸ごと抜けてしまったのだから。

もはや戦争継続などとは言つていられず、この先どうするのかと日夜議論している状

況だった。

そこに他勢力の介入が起きれば、テタルトスは瓦解してしまう可能性もある。

だから余計な政治工作や諜報活動をさせないようにどんな勢力だろうと月へと入れなかつたのである。

「場所はそうだな……懐の月では言わんき。古巢の『ヴァルナ』か月境界線に存在する『アポロン』辺りで、会談を行うのは議員ではなくお前かエドガー・ブランドルで良い」

伊達に付き合いは長くない。

こちらの思考は読んでいるという事だろう。

「……私がそれを受けるとでも？」

「フツ、簡単には領かないだろうさ。だがお前にとっても悪くない話だ。特にイスラフィール辺りと話すのはな」

「どういう意味だ？」

「奴はお前と同類なのさ。お前とは別の方法で人類の先を目指している。方法論が違う故に相容れないだろうが、敵の姿を見ておく事も悪くはあるまい。そして見返りも用意しよう。情報の提供と——キラ・ヤマトとの対決を」

「……これも貴方の目的に近づく為に必要な事なのか？」

「そうだとも言えるしそうでないとも言える。今は準備期間だよ、ユリウス。私は種を蒔いているだけさ」

「なるほど……」

ユリウスはしばらく考え込むようにジッとサタナエルを見据えると答えを出した。

「その話を受けよう」

「……では詳細は後日、連絡を入れさせてもらおう」

用事は済んだとばかりに踵を返すサタナエル。

そこでカースは再びユリウスへ声を掛けた。

「そういえばユリウス、一つ言い忘れていた。レイの事だ。彼を助けてくれた事、感謝する」

「……私はただ選択の機会を与えただけ、何もしていない」

「そうか、お前らしいな。……ユリウス、そのままお前はお前の道を進むがいい。相容れなくとも、私はお前の行く道の邪魔をするつもりはない。お前の幸福を願っている……我が兄弟」

「私もだ」

矛盾した事を言っている事は二人共重々承知していた。

二人の願いは相容れない。

真逆の事を願っている。

何を言おうと最後は結局ぶつかり合う事になるのかもしれない。

それでも、どんな結末だろうと二人はそれを受け入れるだけ。

憎しみも、悲しみも、後悔もないのだ。

それ以上、言葉を交わす事無く各々の方向へと飛び去った。

別の道を行く二人の軌跡を暗示しているかのよう。

◇

相変わらず警戒態勢を敷いたままのヴァルナは重苦しい空気に包まれていた。

アルテミスが陥落し、連合保守派は壊滅させたものの、宇宙に敵はまだ多く存在しているのだから。

そんな中傷ついた機体と共に帰還を果たしたヴィクトルは集中治療室で眠り続けているジョナサンの姿を肩を落として眺めていた。

「大尉」

戦闘に介入してきた白いガンダムに撃墜されたジョナサンはどうか一命を取り留めていた。

だが、その傷は深く二度とモビルスーツに乗る事は出来ないという。ルーカスが生きていければ「仇を討ちにいくぞ！」とでも言つて即座に動き出すに違いなかった。

しかしなまじ冷静すぎるヴィクトルにはそれが出来ない。

あの時に否応なく悟つてしまったからだ。

——何をしてもあの白いガンダムにはかなわないと。

悔しさはある。

このまま終わりたくないという気持ちも。

だがそれでも動けなかった。

ヴィクトルの心は完全に叩き折られてしまっていた。

「こんな所で何をしている?」

俯いたまま病室を眺めていたヴィクトルは聞こえてきた声の方へ視線を向けるとそこには意外な人物が立っていた。

「……ヴィルフリート・クアドラード少佐」

ヴィルフリートは黙つてヴィクトルの隣に立つと病室の中を覗き込む。

しばらく目を伏せ、一礼すると再びヴィクトルへと向かい合った。

以前とは何かが違う。

ヴィルフリートから感じていた焦燥感が消え、その表情には力強さと覚悟があった。感じ取れるその強さ思わずヴィクトルは目を逸らしてしまう。

「……どうやら相当手酷くやられたようだな」

「くっ」

反論しようとヴィルフリートを睨みつけるが、すぐに言葉を失ってしまう。

「それでお前は此処で終わるのか？」

すべてを見透かしたようなヴィルフリートの物言いに流石のヴィクトルも苛立ちが増してくる。

「……貴方に何が分かる。あのガンダムの強さも知らない貴方に！ いや、功名心と戦果だけを求め、仲間を犬死させてきた貴方に分かるものか!!」

吐き出すヴィクトルの苛立ちにもヴィルフリートは黙って聞いているだけ。

それがまた苛立ちを増幅させていく。

「だから——」

「……返す言葉もない。お前の言う通りだ。無残に部下の命を散らしてきた俺がこんな事を言う事自体恥知らずである事は重々承知している」

ヴィルフリートは反論する事もなくこちらの言い分を認めた。

そのあまりにも意外な対応にヴィクトルの怒りも削がれてしまう。

「しかしだからこそこんな所で燻つていても仕方ないのではないかと。俺とは違うと
いうならば尚の事『テンペスターズ』として立つべきだ」

「ッ!? ……『テンペスターズ』は終わりですよ」

どの道一人ではどうしようもないとヴィクトルは思わず自嘲する。

「……終わりなどではない。まだお前がいる。お前達の強さを知る俺がいる。断じて
終わりなどではない」

「クアドラード少佐」

「立て、ヴィクトル・シアーズ。お前は俺のような者とは違うのだろうか？ だったら立
てる筈だ。そして戦う意思があるならばもう一度俺の所へ来い」

そう言つてヴィルフリートは立ち去つた。

ヴィクトルを信じていると振り返る事もなく。

「……何というか、まるで別人ですね」

それほどの体験をしたという事なのか。

あのヴィルフリートでさえ変わり、前を向いている。

にも関わらず自分は此処で何をしているのか。

いつの間にかヴィクトルは固く拳を握り、体に熱でも入れられたかのように内側が
滾っていた。

「こういうのはルーカスの役だったんですけどね。……大尉、情けない所を見せて申し訳ありませんでした。借りは返してきます」

ヴィクトルは眠るジョンナサンに一礼するとヴィルフリートの後を追うように歩き出す。

その背には先ほどまでとは違う強さが宿っていた。

◇

戦闘を終えヴァルハラへの道を進んでいるフォルセテイ。

ガルシアを捕縛するするという目的は達成できなかつたが、回収した彼の死体を持っていたディスクを得る事には成功した。

ヴァルハラへの道すがらブリッジではガルシアから手に入れたデータの確認が行われていた。

「しかし何でジェラード・ガルシアはデータの入ったディスクを持っていたんだ？ アルテミスの司令ならそんなもの必要ないだろう」

イザークの指摘にアストは何となくガルシアの考えを何となくだが悟った。

「おそらく自分の身の安全を図る為の保険と後はどこかの勢力に恩でも売るつもり

だったんじゃないか？ 自分の証言だけでは疑われる可能性が高い。でもディスクに入った物的証拠があれば信憑性は増すしな」

「しかしならディスクさえ手に入れば、それこそガルシアの命の保証はないという事になると思うがな」

「多分、ディスクにはすべてのデータが入っている訳じゃない。まずはディスクを渡し信用させてから自分の持っている情報を小出しに渡すつもりだったんだろ。身の安全が保障されるまで」

「なるほど」

そんな雑談をしているとディスクの解析が終わったのか、モニターにデータが表示される。

「これは……『レクイエム』か？」

エネルギープラントに繋がれたケーブル類とアルテミスからせり出す形で突き出た砲塔。

間違いない。

ユニウス戦役で投入された『レクイエム』に間違いない。

「報告で上がってきた統合軍艦隊を薙ぎ払った閃光というのはこいつか」

「要塞が占拠された際にレクイエムも接收されている筈……不味いな、位置が悪い。

もしもレクイエムが統合軍に使用されると月に向かおうとする艦隊はすべて狙い撃ちされてしまう」

「月へ向かう連中を支援する意味でもレクイエム破壊は必須事項という訳か」

「ああ。データを見る限り数発しか撃てないようだが、統合軍がそのまましておく理由はない。使う以上は改修するだろう。その前に動きたいところだが……無理か」

「送ったルナマリアを支援も間に合うかどうかだからな」

今、フォルセティにはルナマリアは居ない。

彼女は重要任務に就くオーデインを支援する為の援軍として先ほど出撃したばかりだ。

先にぶつかったヴィクトリア達の部隊がオーデインの向かう方向へ移動していると哨戒機から報告を受け援軍を送る事にしたのである。

「どうした？」

「いや、フリージアの調整が終われば俺も援護に行けるんだが」

「今はいざという時に備えておけ。無理をして肝心な時に動けないのでは意味がないぞ」

「そうだな」

イザークの言う通りだ。

今はルナマリアを信じて、任せるしかない。

そう思いながらもアストは不吉な予感が拭えず、耐えるように拳を握る事しかできなかった。

「そういえばアネットはどうなんだ？ もうすぐ生まれるのだろうか？」

「ああ。できれば付いていてやりたいんだが、この状況ではな。それに本人も今は仕事に集中しろと言っていた」

「彼女らしいな」

アネットも今の情勢の中で皆の事を案じているのだ。

イザークの事も心配だろうに。

「お前もたまには顔くらい見せろ。でないといイツは不機嫌になる。お前とキラの事を色々な意味で心配しているからな」

「……済まない。昔から彼女には心配かけてばかりだ」

「そう思うなら今度家に寄れ。俺だけじゃ宥めきれんからな」
「分かった」



ヴァルハラから出撃したオーデインは敵からの襲撃を警戒しながら慎重に航行していた。

追加装備によるミラーージュ・コロイドを展開しており、簡単には見つからないとはいえ、万能ではない。

最近ではミラーージュ・コロイド対策はどの陣営でも必須事項となっており、それ専門の部隊まで居るくらいだ。

「アルミラ艦長、前方に機雷源」

「またか。流石に月周辺は抜かりがない」

「アポロン要塞も近いですから仕方ないでしょうけどね」

「ルートの確認の方はどうなっている？」

「おおよそ七割と言った所です。カゲロウが上手くやっていてくれるおかげです」

MBFM3E『カゲロウ』は中立同盟が開発した隠密性に優れたモビルスーツである。

ユニウス戦役でも同盟の諜報活動はこの機体を中心となり、今も改修が施され現場で使用され続けている傑作機だった。

「このまま順調にいけば良いんですけどね」

「順調だからこそ、なんか不気味な感じがします」

そうであつて欲しいと願いながらもテレサの軍人として培つてきた経験が樂觀でできるような状態ではないと警鐘を鳴らす。

パイロットスーツを着込み傍に控えているレティシア、ラクス、セリスの三人も同様にその表情からは余裕がない。

彼らが行つている任務の重要性から言えばそれも当たり前なのだが。

現在、オーデインが行つているのは月に向かう為のルートが本当に使えるのかどうかの検証だった。

勿論、テタルトスや統合軍に悟られないように慎重に慎重を重ねた上での調査である。

もしもアラスカで回収したデータが使えない場合、同盟は自ら罫に飛び込む事になる。

今回のデータを提供してくれたのは何者なのか経歴自体が曖昧な不審者ヴェクト・グロムランド。

そんな胡散臭い人物のデータを鵜呑みにするほど迂闊な者は同盟には存在しなかった。

「此処まではデータ通り。信憑性は高いと判断すべきか」

「調査を続行しますか？」

レテイシアの問いにテレサは少しだけ考え込む。

アラスカのデータに信憑性がある事は確認できた。

これ以上、この場に留まり敵に発見される方が致命的だろう。

「……深入りして見つかったら元も子もない。ミラージュ・コロイド生成装置で誤魔化すのもそろそろ限界だ。引き上げ時かだな」

モビルスーツを帰還させ、最小限度のスラストで反転したオーデインは一瞬だけエンジン音を吹かし再び来た道を戻るように慎重にその場から離れていく。

此処までは同盟の思惑通り。

油断もなくトラブルもない。

順調だったと言っている。

しかし彼らの想定外があったとするなら、それは同盟の動きを予め読んでいた者がいたという事だった。

宙域からずいぶん離れ、このまま危険区域を脱しようとした瞬間、甲高い音がブリツジへと響き渡った。

「レーダーに反応!! 直上より急速に近づいてくる熱源あり!! これは……『サタナエル』です!!」

「ッ!? エンジン始動、最大加速!!」

オーデインがなりふり構わず加速すると同時にサタナエルから発射されたバズーカ砲が炸裂し、周囲に散弾が撒き散らされる。

それが直撃したオーデインは強い衝撃と振動によって動きを鈍らされてしまう。

「同盟の戦艦——オーデインだったかな？　此処に居るといふ事は……やはりアラスカでデータは回収されていたという事か。それはそれで構わないのだがね、見逃す訳にもいかない」

ビームライフルがオーデインの側面部を撃ち抜き、ミラーージュ・コロイド生成装置を吹き飛ばした。

「さて、この場から生き延びられるかな？」

続けて発射されるビームライフルが次々と直撃し、確実にオーデインを削っていく。

「ぐつ、残ったミラーージュ・コロイド生成装置を緊急パーズ！　ルティエンス！」

「了解！　ラクス、セリス！」

頷く二人と駆けだしたレティシアは格納庫に立つヴァナデイスのコックピットに飛び込むと相変わらずの体調に辟易しながら機体を起動させる。

「……ハア」

「レティシア、大丈夫ですか？」

「大丈夫ですよ、ラクス」

心配そうにこちらを見ているラクスを安心させようとレティシアはあえて微笑んだ。

「では行きましょう」

「了解！」

三機のモビルスーツが飛び出すと、サタナエルが迎え撃った。

「来たか」

「ラウ・ル・クルーゼ!!」

レティシアがドラグーンを射出すると正確な操作による全方位攻撃がサタナエルに襲いかかる。

しかしカースとて特殊な空間認識力を持つパイロット。

この程度を捌くは造作もない事だった。

「甘いな」

カースは平面飛びのような機動でドラグーンの攻撃を回避すると無造作に構えたビームライフルが容易く動く砲台を捉えた。

「ッ!?!」

「流石、戦女神。このドラグーン操作は私以上かもしれないな。しかし正確すぎる。故に読みやすいのだよ！」

ビームの射撃やドラグーンの配置、すべてを把握しているかのようにサタナエルは攻

撃を回避していく。

「貴方に通用しない事は百も承知！ 二人は気にせず、突っ込みなさい！」

ドラグーンから発射されたビームの隙間を潜るようにラクスとセリスがビームサーベルを構えて突撃する。

ジャステイスの斬撃をシールドで弾き飛ばし、アイテルの攻撃を宙返りでやり過ぎす。

そこを見計らったようにサタナエルの行く先へビームライフルが発射される。

「ふむ。同盟のエースは伊達ではないな」

「此処で貴方を倒します！」

「残念ながら君の相手は私ではないよ」

「えっ」

その時、突き刺さる殺意がレティシアに向いている事に気がついた。

「これは——ッ!？」

レティシアは自機を守るようにドラグーンを配置、ビームフィールドを展開する。

次の瞬間、ヴァナデイスに向けて発射された強力なビームがフィールドによつて弾き飛ばされた。

「……あの機体は」

この機体こそレティシアを地獄へ引き込もうとする過去の亡者そのものだった。

「存分にやるがいい、エリニス。それこそがお前の本懐だ」

「ウオオオオオオオオオオオオ!!!」

スラスター全開でヴァナデイスへ突撃したベルゼビュート・メガイラがビームソードを叩きつけた。

「くっ」

ギリギリのタイミングで斬撃を受け止めたレティシアだったが、勢いがついたベルゼビュートを止める事ができない。

受け止めたシールドごとヴァナデイスを押し込んでいく。

「味方から引き離すつもりですか!？」

「落ちろオオオ!!」

「レティシア!？」

「教官!？」

「行かせんよ、君らの相手は私達だ」

サタナエルと援軍として駆けつけた数機のモビルスーツがジャステイスとアイテルを押し留め、ヴァナデイスはベルゼビュートに押される形で引き離される。

「ぐつ、このままじゃ、い、意識が!!」

体にかかるGは今のレティシアにはきついものがある。

たまらず蹴りを入れて引き放すが、ベルゼビュートはそのまま食らいついてきた。

「レティシアアアアア!!」

大鎌『ネビロスII』が上段から振り下ろされる。

「そんな大振りで……い、いちいち、叫ばないと攻撃出来ないんですか、鬱陶しい」

体調の悪さを押し殺しビームサーベルでネビロスIIを斬り払うと至近距離からグレ

ネードランチャーを叩き込む。

「そんなものがアアア!!」

機関砲で叩き落としたグレネードランチャーの爆煙の中を突っ切り、再びヴァナデイ

スへ斬撃を叩きつけた。

「今日こそ、今日こそ、私は貴様を殺す!!」

「貴方はやはり……リース・シベリウス」

「そんな負け犬と一緒にするな!! 私はエリニス!! エリニスだ!! カース様の目的

をかなえる為の先兵だ!!」

シールドの上から強烈な斬撃を叩き込み、ヴァナデイスを吹き飛ばした。

「くううううう!! ハア、ハア、こんな時に……」

肩から射出された二つの大型ビームクロウが強烈なビームを発射しながら突っ込んでくる。

「この程度！」

掠れる意識を繋ぎとめ、ビーム砲を回避しながらアインヘリヤルで迎撃した。

だが待ち受けていたのはベルゼビユートの腰から射出されたもう一对のビームクロウ。

普段のレイシアであれば対処できた筈の攻撃。

しかし今は普段とは違い明らかな不調。

反応が僅かに遅れ、シールドと斬艦刀を吹き飛ばされてしまった。

「うっ、くっ」

懐に飛び込んだベルゼビユートはヴァナデイスにビームソードで突きを放つ。

「死ねエエエエエエ!!」

目も眩む閃光がレイシアの視界を埋め尽くしていく。

刃の速度は緩む事無く正確にヴァナデイスへと突き出された。

第34話 失われた光

サタナエルとオーデインが戦闘を開始した直後。

戦場へ向かうプレイアデス級のブリッジでヴァルター・ランゲルトは一瞬だけ眉を顰めた。

電気のようなものが体を駆けたからだ。

「ランゲルト中佐？」

傍に控えた艦長の声にも反応せずに考え込む。

この感覚があるという事はこの先に彼女がいるという事だった。

単独で動く訳ではあるまい。

となると部隊単位で、何かの作戦行動を取っていると考えるべき。

「……あの男の情報だけに半信半疑でしたが、本当でしたか」

仮面の男の顔を思い浮かべて小さく呟くと再び艦長が声を掛けてきた。

「中佐、前方に戦闘らしき光を確認しました」

「ユングヴィにブースターユニットを装備させなさい、すぐに出ます。艦はこの場で待機」

「モビルスーツ隊の出撃は？」

「必要ありません。アポロン要塞から出撃してくる部隊の支援に徹していればいい」

「ミエルス大尉から出撃要請も来ていますが？ 新型機のテストをしたいと」

ヴァルターは自分達の母艦に並ぶもう一隻のプレイアデス級に鋭い視線を向けた。

「無理やりついて来て勝手な事を……」

リベルト・ミエルスとヴァルター・ランゲルトはそれなりに長い付き合いである。

ゲオルク・ヴェルンシュタインに見出され任務も一緒にこなしてきたが、決して仲が良い訳ではない。

彼の境遇や立場には共感できるし、理解も出来る。

しかし根本的な所で相容れない。

彼は運命からの解放を口にしながら、自らそれに縛られている。

シン・アスカやデステイニーに拘っているのがその良い証拠だ。

だがヴァルターは違う。

「……私は思い通りになるものか」

決意と共に拳を握ると淡々と命令を下した。

「増援に備えて待機しろと伝えなさい」

「了解」

「後は任せます」

ヴァルターは格納庫に降りると準備を終えたユングヴィに乗り込む。

解放されたハッチの先に広がる宇宙。

そこから感じ取れる気配の方へヴァルターは迷いなく機体を出撃させた。



オーデインに降り注ぐミサイル。

それらをすべて艦に届く前に撃墜され、宇宙に大きな炎の花を咲かせていく。

「左舷からさらにミサイル四！ その後方よりイリアスが三！」

「迎撃！ 主砲、撃てえー！」

主砲の一撃でミサイルはすべて薙ぎ払われ、後方にいたイリアスも散らす事に成功する。

「ヴァナデイス、アイテル、ジャステイスは？」

「ヴァナデイスは捕捉できず、アイテル、ジャステイスは敵モビルスーツと交戦中!!」
奮戦するオーデインのすぐ傍ではベルゼビュートによってヴァナデイスと引き離されたセリス達はカース率いる部隊と激闘を繰り広げていた。

「レティシア!!」

「君達の相手は私達だよ!!」

デブリの中を突っ切りスピードを上げたサタナエルはその勢いのままジャステイスに斬りかかってくる。

「速い!」

キラやアストにも劣らない速度の斬撃に舌を巻きながら、確実にジャステイスの急所を狙ってくる攻撃を防御する。

ビームシールドによって阻まれたビームサーベルを突き放すと、ラクスもまたサーベルを両腰から抜き連結させた。

「行きます!」

ハルバード状態となったサーベルを上段から叩きつけ、さらに下段から斬り上げる。

ジャステイスの連撃をシールドで捌くサタナエル。

「そー!」

盾で捌くという事は攻撃を止めた一瞬でも動きが鈍る事を意味する。

ラクスはそこを狙い、脚部のビームブレイドが振り抜いた。

「チツ、戦上手になったものだ、ラクス・クライン！」

「今の私はルティエンスです！ クラインではありません!!」

「フ、何にせよ、歌姫と呼ばれていた頃からは想像もできん実力者になった」

「ビームブレイドを宙返りして回避したカースはビームライフルで狙撃する。

「くつ、今のもかわしますか。やはり強い」

「戦歴なら君にも負けてはいないのでね。この程度ならいくらでも捌けるさ」

ヤキン・ドゥーエ戦役でキラやアスラン、ムウの三人を同時に相手にしながら圧倒したという実力は健在という事だろう。

背中のリフターを分離させ、ビームをやり過ぎたラクスは再びサタナエルと距離を詰めた。

「接近戦ではやや不利だな。では——」

サタナエルの背中から数機の砲台が射出され、ジャステイスを囲むように展開された。

「ドラグーンユニット!？」

「かわし切れるかな？」

三百六十度からのオールレンジ攻撃。

無数のビームが四方八方からジャステイスに降り注いだ。

「ドラグーンの動きも速い!」

「この程度は序の口だよ。かつてはこれとは比較にならない数进行操作した事もある」各部の装甲は削られ、ジャステイスに傷を刻んでいく。

「まだです!」

リフターとドッキングし、ドラグーンの動きを阻害するようにビーム砲を発射した。しかしそれでもドラグーンにはかすりもしない。

「これで十分です!」

砲台の動きが鈍った隙に構えたブーメランと斬艦刀を投擲、サタナエルを挟み込むように攻撃する。

それもサタナエルに届く前にドラグーンの砲撃が消し飛ばす。

「ここです!!」

「ッ!」

砲台の攻撃はブーメランと斬艦刀に向かいジャステイスから外れていた。

その間に前にでたジャステイスのビームサーベルがサタナエルのバズーカ砲を斬り裂いていた。

「全く、慣れとは恐ろしいな! 君も厄介なパイロットに育った!」

認識を改めたカースはジャステイスを撃破すべく、再び攻撃を開始する。

ジャステイスとサタナエルの激闘。

二機の激突と離れた場所ではセリスがオーデインの所属の機体と共に奮戦していた。すっかり愛機となったアイテルガンダムヴァルキューレを巧みに操りながら戦うセリスは現在の状況に焦りの色を隠せない。

「不味い……このままじゃ」

距離を稼いだとはいえ此処はまだアポロン要塞の警戒範囲内だ。

時間を掛けすぎればアポロンからの増援が駆け付けてくる。

しかし早く片づけたくともレティシアは引き離され、ラクスはサタナエルとの戦闘で手一杯。

「教官の援護に行きたいけど」

レティシアが戻れば状況も変わる筈だ。

しかし道を阻むように立ちふさがる他の機体が邪魔をしてくる。

「そこを退いて！」

大剣『ヴァルファズルⅡ』をイリアスに叩きつけると刀身に仕込まれたビーム発生装置から光の刃が飛び出してくる。

刀身を囲むように飛び出たそれは剣を覆う強力なビーム刃となり、イリアスを盾ごと

真つ二つに斬り裂いた。

『ヴァルフアズルⅡ』は刀身自体に無数のビーム発生装置が配置され、通常の斬艦刀に比べても遥かに強力な刃を形成する事が可能になっている武装だ。

それこそアンチビームシールドで受け止める事は出来ない程の威力を持っている。

「迂闊に受け止めるから!」

大剣を横薙ぎに振るい敵モビルスーツを薙ぎ払うと、今度は見覚えのある機体が近づいてきた。

No.Ⅰのイリアス・アキレスである。

「行かせはしない!」

「ッ!?!」

邪魔な敵を斬り捨てレティシアの下へ向かおうとするセリスにイリアス・アキレスのビームサーベルが襲い掛かる。

「邪魔!」

「行かせんと言っている!」

イリアスの攻撃をかわし、強烈な斬撃を繰り出してくるアイテルの大剣をNo.Ⅰは凝視する。

真近で見ると良く分かる。

確かにアレは強力で凶悪である。

速度を乗せた大剣の斬撃は容易く盾ごと両断してくるに違いない。

音に聞こえたデステイニーの斬撃にも勝るとも劣らない。

故に選択肢が一つしかないといリアス・アキレスはあえて果敢に前へ出た。

「前に出る!?!」

「やりようはあるという事だ!」

タイミングを見極めたNo. Iは盾を垂直に構え、刃ではなく刀身の腹を弾いた。

大剣はイリアスを捉えられず、脇へと逸れていく。

「その大剣、私には通用しない」

あの斬撃は受け止める事ができない。

止めようとすれば逆に斬り裂かれることは火を見るより明らか。

だからNo. Iは盾で受け止めるのではなく、逸らす選択をした。

その方が受け止めるリスクよりは危険が少ないと判断したのである。

「このパイロット、腕を上げている!?!」

「私はカース様を守る者! フリーダムだろうと、デステイニーだろうともう負ける

事など許されない!!」

No. Iはラナシリーズの中でも特に変わった個体と言える。

その最たるものが成長性である。

エクステンデットはある装置によって経験の蓄積というものがほぼされない。

量産型エクステンデットあるラナシリーズも成長の段階で強化され、用途に合わせた特性が付与され成長などとは無縁と言える。

しかしNo. Iを含む何人かのオリジナルを超える能力を持って生まれた特殊な個体は違った。

彼女達は最低限の強化のみで高い能力値を示す為にそれ以上無理な処置は施されない。

つまり経験を積み、成長する事が出来るということである。

「ハアアアア!!」

「さらに速い!?!」

イリアス・アキレスの斬撃がアイテルのビームライフルを叩き切り、返す刀で装甲を傷つけた。

その斬撃の鋭さはそこらのエース級を軽く上回る。

「大剣じゃ小回りが利かない!」

腰のビームガンと機関砲で牽制しながら、武装をビームサーベルに持ち変える。

「武器を替えた程度で!」

「ハハハ…」

イリアスが再び踏み込んできたタイミングを見計らい身につけていた多機能マントを脱ぎ捨てるとその隙に死角へ回り込んだ。

——最大の火力で薙ぎ払う！

「アサルト!!」

一対の砲身が跳ね上がり、イリアスにアサルトブラスターキャノンが発射された。空間を焼き尽くす強烈な一撃。

マントに気を取られ、虚を突かれたNo.1は反応が遅れている。

「落とした!」

「舐めるな!」

イリアスはビームが直撃する前に装着された外部装甲をパーズ。

外した装甲を機体の壁にする事でアサルトブラスターキャノンの砲撃から逃れて見せた。

「嘘でしょ!?! あの状態から逃れてみせた?!」

「もしも反応がもう少し遅れていたら……撃墜されていなかったとしても戦闘不能にはなっていたかもしれない。同盟のエースはやはり皆、侮れないな。だからこそ此処で一機でも多くの機体を仕留める!!」

爆煙の中からアイテルの懐へ飛び込むと二丁のビームライフルショットで牽制しながら対空ミサイルを叩き込んだ。

「ぐっ!!」

迎撃の機関砲を潜り抜けたミサイルがアイテルに降り注ぎ、アンチビームシールドを破壊する。

さらに連続で降り注いだミサイルの衝撃がセリスの意識を大きく揺さぶった。

大きく体勢を崩したアイテルにイリアスが止めの攻勢に移った。

「止めだ！ ガンダム!!」

至近距離からコックピットを狙う二丁の銃口。

それを前にセリスのSEEDが弾けた。

「見える！」

発射された閃光をギリギリのタイミングで機体を寝かせて回避すると、そのまま足を振り上げる。

蹴りが片方のライフルショットを弾き、同時にスラスタを噴射。

無理やりに体勢を変え、回し蹴りを叩き込んだ。

蹴りが直撃した頭部はへしやげ、カメラを守るレンズが碎け散った。

「メインカメラが!?!」

頭部が損傷しモニターの映像が大きく乱れる。

これは大きな痛手だった。

敵の姿すら捉える事が難しい。

それでもNo.1は退くことをしない。

何故なら先ほど宣言した通り、負ける事は許されぬのだから。

「……私は!!」

No.1もI.S.システムを発動させる。

もはや馴染んだ感覚。

拡張した感覚に身を浸し崩れた体勢のまま敵機に反撃を試みる。

無理な体勢故か肩部のビーム砲はアイテルの装甲を掠めるだけに留まるが、そのまま右手で殴りつけた。

当然、PS装甲に対しそんなものは通用しない。

現にイリアスの右腕は使い物にならない程に半ばからへし折れた。

「それでも十分!」

残った左手のビームライフルシューティーがアイテルに迫る。

「ッ、ッこの敵は!」

SEEDを発動させていたセリスは直撃を受けない様に神懸かり的な反応で機体を

捻ると、ビームが腰部のビームガンを挟りさらに一発が脚部を貫通した。

「この程度!! 大した事はない!」

この場における攻防でセリスはこのパイロットを脅威であると認識した。無論、以前からの戦闘で強敵であることは十分に分かっていた。

しかし成長し、おそらくSEEDに関する何かを使う事での爆発的な力の向上。

これは自分が考えている以上の脅威となる。だから――

「負けない!!」

二機は相手を仕留めるべく、再度懐へと飛び込んだ。

アイテルはサーベルを構え、イリアスはステイレット投擲噴進対装甲貫入弾を抜く。

交錯する一瞬の間。

踏み込んだアイテルのビームサーベルが相手の右腕を奪い、イリアスが投擲したステイレット投擲噴進対装甲貫入弾が敵機の左手に突き刺さる。

ステイレット投擲噴進対装甲貫入弾が炸裂し、その爆発によって二機は大きく吹き飛ばされた。

「ううう!! 止まれ!!」

セリスはアンカーを発射しデブリに突き刺して体勢を立て直す。

「相手も吹き飛ばされた? 機体の方は……」

PS装甲故に爆発で破壊される事は無く腕自体は無事だ。

しかし装備していたブルートガングは完全に破壊され、腕の動き自体も鈍い。

おそらく伝達系に異常が出ているのだろう。

「仕留められなかったのは悔しいけど、今の内に教官の方へ」

セリスはそのままデブリに紛れ、レテイシアの援護に向かった。

◇

流星のように動く一つの光がオーディンの居る戦場へと到着しようとしていた。

それはイノセントを運んできたシャトルと同型のもの。

今はルナマリアのインパルスを格納して戦場へと向かっているのである。

「もうすぐ救援信号の出ている宙域か。えくと、シャトルの方にもデータを入力しておかないとね」

このシャトルにはインパルスの装備を運ぶシルエットグライダーの技術が応用されており自動で母艦へ帰還させたり、コントロールして戦場の外で待機させたりできる優れものだ。

その分、非常にコストがかかっている為に簡単に使い捨てる事が出来ないのが難点と言えば難点なのだが。

「さて一応この辺で待機させておきますか」

ルナマリアが入力を終え、シャトルをデブリの陰へ待機させる。

「いつでも動かせるようにはしたから、これでオツケーかな」

シャトルの背部を解放しインパルスを出撃させると戦場へ向けて一気に駆け抜ける。

このまま戦場へ突入する。

そう思っていたルナマリアの前に一機のモビルスーツが姿を見せた。

「あの機体……」

浅黒い装甲に背中に見える大きな翼、頭部の特徴的なアンテナ。

それはルナマリアの搭乗するシークエルインパルスに酷似した——いや、そうではない。

アレはかつてザフトの象徴的な意味合いで建造された機体デステイニーに酷似した機体であった。

漆黒の機体のコックピットに座るリベルト・ミエルスは近づいてくるインパルスの姿に戦意を漲らせた。

上官であるヴァルターに増援に対処しろと言われたリベルトはこうして敵がくるのを待ち構えていたのだ。

「インパルスか。機体の肩慣らしには丁度良い。この『ディアドコス』の性能を確かめるにはな」

LFSA—X009 『ディアドコス』

リベルト・ミエルス専用として開発された新型モビルスーツ。

この機体はユニウス戦役で投入されたステイニー型のデータを独自に発展させたもの。

外見上はステイニーに酷似しているが、中身は統合軍の技術によって大幅な変更と強化が加えられている。

背中のウイングスラスタをさらに高出力化させ機体全体のスラスタも増設、同時に武装もリベルトの好みに合わせたものに変更されている。

「では行くぞ！」

背中のウイングスラスターを解放し、対艦刀を握るとインパルスに向けて斬りかかった。

放出される光と共に圧倒的な速度でインパルスに接近する。

「黒いデステイニー!?」

ルナマリアはスラスターを全開にして機体を上昇させる。

その数瞬後、今までいた空間をデアアドコスからの砲撃が通過していった。

「良い反応だ！」

「くっ！」

今の砲撃の合間にインパルスに接近したりベルトは抜き放った対艦刀を袈裟懸けに振り下ろした。

その一撃を盾を使って受け止めるインパルスだが、速度の乗った一撃に耐える事が出来ず吹き飛ばされてしまった。

「痛ッ！ こいつ!!」

「この程度か！」

「舐めないで！」

追撃してきたデアアドコスの斬撃を無理やり機体の体勢を変える事で回避したルナ

マリアはビームライフルで迎撃する。

「無理やり攻撃を避けた代償だな。体勢が悪い。それでは当たらん」
インパルスの射撃体勢は攻撃回避を試みた反動からかあまりに悪い。

その証拠にディアドコスには掠める事すら出来ずに空を切る。

「そんな事は言われなくても！」

インパルスはデブリにアンカーを射出し、後方に機体を引っ張りながら再びビームライフルを発射する。

今度は先程までとは違い完璧にディアドコスを捉えていた。

「やるな」

光学残像を発生させたディアドコスの動きを正確に捉えてくる敵パイロットにリベルトは素直な称賛を述べた。

「しかし砲撃戦なら私も遅れはとらん」

背中のビームキャノンを跳ね上げ、後退するインパルスに向けて撃ち出した。

インパルスを狙った凄まじい閃光がデブリ諸共薙ぎ払わんと真っ直ぐに突き進んでくる。

「避けられない?!」

アンカーを切り離し、出来るだけデブリの中へ紛れるように入り込むと両手のビーム

シールドを展開して防衛体勢に入る。

「ぐううう!!」

シールドにビームキャノンが直撃すると、衝撃と共に強烈な圧力が機体ごと背後へ押し込んでいく。

その隙に再び距離を詰めたディアドコスがクラレントを振り下ろした。

「ッ!？」

その斬撃がインパルスの右足を裂き、ライフルを斬り飛ばした。

「止めだー!」

「まだよー!」

宙返りして背中中のグラムを切り離しディアドコスへ叩きつけるとビームガンで破壊する。

「チッ」

爆発の影響を受けこの戦闘で初めてディアドコスは動きを鈍らせた。

その瞬間を見逃さずに高エネルギー収束ライフル『ノートウング』を叩き込む。

「いけー!」

インパルスの最大武装の一撃に流石にディアドコスも防御に回る。

「目くらましのつもりか」

「その通りよ」

掌に装備されたパルマ・フィオキーナの光がインパルスの傍で浮かんでいたデブリを貫通すると破裂するように周囲に飛び散った。

「まだまだ!」

さらに二つ、三つと砕かれた残骸が二機の姿を覆い隠していく。

「小賢しいな」

ディアドコスの周りを漂うデブリを持ちうる火力で一掃する。

その光景は身を隠したルナマリアにも丸見えだった。

「そー!」

攻撃を隙を突くようにインパルスは両手にエツケザックスを構え上方から斬りかかる。

「想像以上に出来るようだな。だが!」

ルナマリアの攻撃を予測していたリベルトは先程の攻撃で予め構えておいたライフルを上方へ向ける。

ビームならかわされてしまうだろう。

ならかわせないようにすればよい。

銃口から発射された実弾が弾けインパルスの行く手を阻んだ。

「なっ、散弾!？」

機体を襲う衝撃にルナマリアは驚愕した。

散弾など大した事はない。

少なくともP S装甲には何の影響もあるまい。

だが、それはあくまで損傷の話。

P S装甲は実弾を防御できても、衝撃までは防御できないのである。

散弾によってインパルスの速度は明らかに鈍っていた。

「動きの鈍いモビルスーツなどただの的だ」

ディアドコスもまた掌に光を集め、上方へと飛び上がった。

「不味い!？」

「落ちろ!？」

すれ違う瞬間に放たれる光。

パルマ・フィオキーナの一撃がインパルスを撃ち砕くべく発射される。

「ぐううああああああ!!！」

ルナマリアはもう一方のアンカーを射出し、無理やり軌道から逃れようと試みる。

しかし間に合わない。

ならばと咄嗟にエツケザックスを交差させパルマ・フィオキーナの攻撃を受け止め

た。

二刀の斬艦刀は砕かれ、そのままインパルスの肩部を貫いた。

「何!？」

射線から逃れたインパルスはそのままアンカーに引つ張られ、別方向へ逃れていく。「本当にやるな。仕留めたと思っただが」

パルマ・フィオキーナは確実にインパルスのコックピットに直撃した筈だった。にも関わらずあのパイロットはその狙いを外して見せたのである。

「このまま追撃を——ん? 駆動系に異常が出ている。まあ初陣としてはこんな物だな」

無理する必要もないとリベルトは反転し、母艦へと帰還して行つた。

デブりに隠れそれを確認したルナマリアは大きく息を吐きだした。

「カハア! ハア、ハア、アレもスーパーエース級じゃない。シン並みじゃないの」
少なくとも真つ向勝負では明らかにルナマリアよりも確実の上。

アレを落とすには綿密な戦と対策を立てなくては駄目だ。

「ハア、訓練し直さないと。それより機体は……」

幾つか武装を損失、右足を斬り裂かれているがこちらは大した事はない。

問題はパルマ・フィオキーナに貫かれた左肩だ。

「……破損した左肩から下は全く動かない。でもそれ以外の部分は問題なし。長時間の戦闘は厳しいかな。とにかくオーデインに合流する方が先決よね」

残った武装と機体状態を把握すると、敵機を警戒しながらオーデインの方へ機体をおかわせる。

その時、打ち上げられた光がこの辺り一帯を照らし出した。

「……撤退信号?」

オーデインのものではあるまい。

「という事は、敵が退いた?」

状況が良く分からない。

ルナマリアはデブリを避けつつ、急いでオーデインが居る場所へと機体をおかわせた。

◇

デブリの中を進むアイテルの背中に信号弾の光が降り注ぐ。

それが敵の撤退を意味する事を悟ったセリスは胸中に湧き上がる不安を押し殺すようにヴァナデイスの姿を必死に探す。

「デブリが多すぎる。教官はどこに？」

まさか鹵獲されたという事はないと思う。

レティシアと戦っていたあの敵は異常なまでの殺気を発していた。

アレで鹵獲する気があったとは思えない。

「どこに——えっ」

周囲を見渡していたセリスの目に宇宙に浮かぶモビルスーツの姿が飛び込んでくる。

装備から見て間違いなくヴァナデイスだ。

しかし、装甲からは色が抜け落ち、出撃前のメタリックグレーに戻っている。

「あ、ああ……教官、官」

信じられなかった。

信じたくなかった。

目の前に浮かぶヴァナデイスガンダムのコックピットは『跡形もなく抉られていた』から。

その意味する事は一つだけ。

セリスの目から涙が零れ、頬を伝う。

「う、ううう、うああああああ!!!」

アイテルのコックピットにセリスの慟哭が響き渡る。

それから数分後、ヴァナデイスを回収したセリスの口からレイシア・ルテイエンスの戦死がオーデインに伝えられた。

◇

機体の調整を終えたマユ・アスカはヴァルハラの際下を走っていた。向かっている場所は軍用の港。

そこには帰還してきたフォルセティが接舷されている。

マユはそこに向かって走っていた。

「ごめんなさい。通してください」

クルーらしい人達に謝りながら、艦内に駆けこむと目的の人物を探して通路を走る。

そしてようやく見つけたその人物の背中に声を掛けた。

「アストさん！」

「……マユか。どうした？」

部屋に入ろうとしていたアストの顔を見た瞬間、今まで耐えていたマユの目に涙が浮

かぶ。

ずっとアストを見ていたマユには分かる。

一見冷静なその表情は彼が辛い思いを耐えている時の顔だから。

感情が抑えられず、マユはアストの胸に飛び込んだ。

「マユ」

「アストさん、レティシアさんがあー！」

「そうか。マユも、聞いたのか」

泣きじゃくるマユの頭をアストはゆっくりと撫でる。

彼女にとってレティシアはヤキン・ドゥーエ戦役からずっと一緒に戦ってきた仲間で

あり、姉のような存在。

マユには相当ショックだっただろう。

「ご、ごめん、なさい。私が、アス、トさんを慰め、ないといけ、ないのに」

「ありがとう、マユ。……俺は、大丈夫だ」

「アストさん」

マユを少しでも安心させたくてアストは笑みを浮かべた。

でもそれが余計に悲しく見えるのは何故だろうか？

そう考えてすぐに思い至る。

マユはアストとはヤキン・ドゥーエ戦役からの付き合いだ。

あの激しい戦いの中でも、そして今までもマユはアストの涙を見た事が一度もない。レティシアの死を聞かされて尚、アストは悲しそうにはしていても涙は流していなかった。

もしかすると彼は泣けないのかもしれない。

彼の過去は聞いた。

大切な者を目の前で失い、そして家族からも『生まれてこなければ良かったのだ』と突き放された。

幼い頃から大切な者を失い過ぎたアストの心はもう――

「ううう、アストさん、レティシアさん」

そのあまりの悲しさにマユの涙は止まらず、何時までも流れ出てきた。

「マユ、ありがとう」

アストはマユの頭を撫で続ける。

涙を流す彼女の声にアストはようやくやく実感湧いてきた。

――レティシアは死んでしまったのだと。

その胸中には塞ぎようもない穴が空いたような、そんな空虚な想いに満ちていた。

この感覚には覚えがある。

友を失った時。

家族が家族で無くなった時。

何か大切な物を失った時に感じた感覚だ。

きつと死ぬまでこの穴が塞がる事は無い。

それでも――

「……俺は戦うよ」

アストは窓から見える星に目を向けた。

手の届かないその輝きこそ失ってしまった光だ。

それに誓うように改めて覚悟を決める。

アストはもう一度だけその光に手を伸ばすと、力強く拳を握った。

第35話 最後の晩餐

アスランはヴァルナの格納庫にてこれから訪れる客人の出迎えに出ていた。

彼の前にはファウストとイスラフィール、秘書官であるベアトリーゼが立ち、その後ろには数多の兵士達が並んでいる。

そんな彼らの前に着艦する一隻の小型船。

そこから二人の人物が降りてきた。

一人は『宇宙の守護者』と呼ばれたエドガー・ブランデル。

謹慎処分を受けていた筈だが、現在の状況を鑑みて職務に復帰していた。

そしてもう一人はテタルトス軍の指揮を執っているユリウス・ヴァリス大佐。

鋭い眼光は相変わらずで、アスランの傍に控えているミレイアを含めた新人達はその迫力を前に竦み上がっている。

気持ちは良く分かる。

かつてザフトに所属していた頃、アスランも何度となく同じ思いをしたからだ。特に訓練は鬼のように厳しかった。

懐かしい過去の情景に浸りそうになりながらも、同時に浮かんできた女性の件でアスランの胸中は一気に冷え込んだ。

「ッー！」

気を落ち着かせる為に密かに息を吐き出しながら呼吸を整える。

「ようこそ。今回、極秘とはいえ会談にに応じてくださった事を感謝しますよ、エドガー・ブランドル司令、そしてユリウス・ヴァリス大佐」

「いや。できればもっと早くにこうした場を設けたかったのだが、こちらも少々立て込んでいてね」

ブランドルがファウストの差し出した手を握る。

一見して穏やかな構図に見えるが、明らかに両者の間には温度差があった。

友好的とは程遠い。

ファウストはテタルトスを取り込もうと躍起になり、反対にエドガーは統合軍を激しく警戒している。

今回の会談も荒れそうだと考えながらアスランはファウストに連れられた二人の後に付いて歩き出した。

エドガー達を案内した場所はあまり使われない会議室。

室内は普段使われていない所為か、質素に机と椅子、それから壁に設置されたモニター以外、何も置かれていない。

それでも二人は気にした様子もなく椅子に座ると口を開いた。

「時間も惜しい。早速、話を聞かせてもらおうかな」

「そうですね。腹の探り合いをしても仕方ないですから。——テタルトス月面連邦国に地球圏統合軍への参加を要請します」

予想通りの提案だったのかエドガーもユリウスも表情を変える事は無い。

統合軍はテタルトス地球駐留軍と東アジア共和国、地球軍保守派が合流し誕生した一大勢力である。

地球の半分近くを自勢力に抱える彼らが何故、地球圏統一に乗り出さないのか？

その理由がテタルトスの存在があるからだだった。

もう一つの勢力である同盟と戦っている間に背後から攻撃されれば統合軍は多大な損害を受ける事になる。

それだけは避けたい。

だからこうして統合軍へ参加を要請しているのである。

「テタルトスが統合軍に加われば、世界は統一を果たしたも同然です。仮に調和同盟

が抵抗してきたとしてもどうとでもなる。いや、彼らもそこまで抵抗しようとは思わない。それで世界は平和になる」

「従わなければ我々も同盟諸共消し去ると?」

「まさか」

「その割に宇宙でも派手に動いているようだ。未完成とはいえ精強な軍事力を持つアポロン要塞に、占拠したアルテミス要塞に搭載されたレクイエム。どう楽観して考えても、友好的な関係が築けるとは思えないのだが?」

「それは誤解だ。我々の考えは演説で語った通りですよ。あくまでも望むのは平和です。しかしその為には武力の行使もまた必要というだけの事」

エドガーの鋭い問いにもファウストは涼しい顔を崩さない。

そこで二人のやり取りを聞いていたユリウスが初めて口を開いた。

「……分からないな。私にはそこまでお前が平和を渴望しているようには見えない」

「私が平和を望む事がそんなにおかしいですか、ユリウス・ヴァリス大佐?」

「ああ」

断言するユリウスにファウストは初めて表情を僅かに曇らせた。

ユリウスはこれまでそれなりに人間というものを見て来た。

人に希望を与える事が出来る尊い者から、それこそ自分の事しか考えない心底腐った

人間まで。

だから確信がある。

言い方は悪いがファウスト・ヴェルンシュタインは決して平和を望む聖者などではない。
い。

争いを望む悪鬼の類であると。

「逆に聞いてやる。何故、お前はそこまで平和を望む？ 何がお前を駆りたてる？」

「それは今、語らねばならない事ですかね」

「今だからこそだ。それとも何かやましい事でもあるのか？」

いつの間にかファウストの和やかとも言える表情は徐々に冷たい無表情に変わって
いた。

ピリピリした雰囲気部屋全体に満ちる中、ファウストの隣に座っていたイスラ
フィールが初めて口を開いた。

「そこまでにしてもらいたい。個人の心情など論じる為の場ではない筈だ。論じるベ
きは我々の提案を受けるか否か。その返事をいただきたい」

「確かに。ではまず月から流失した技術とモビルスーツを使用している対価の支払
い、そして我々の兵士達を返してもらおう。話はそれからだ」

「ファウスト・ヴェルンシュタイン司令。君は確かに事前に根回しを行いテタルトス

地球駐留軍の大半をその傘下においた。その手腕は見事だ。色々『疑問』は残るがね」
確かにファウストは優れた手腕を持っている。

それは今までの戦果や実績からも明らかだ。

しかしそれでも彼だけの力で統合軍誕生のすべてを取り仕切ったとは考えづらかった。

テタルトス誕生にかかわったエドガーだからこそ、その疑問が強く残っている。

——つまりは『他の誰かが裏で動いていたのではないか?』と思っているのだ。

「まあそれはともかくだ。地球駐留軍の大半をその傘下に置きはしたが、全員が君に賛同した訳ではないだろう? そこに居るアスランを含めて」

エドガーの視線がファウスト達の背後に立つアスランへ向けられる。

「私達が無理やり言う事を聞かせていると?」

「違うとでも? 証拠を提示でもした方がいいか?」

エドガーの指摘は間違っていないかった。

確かにファウストは地球駐留軍をまとめて統合軍に参加させる事に成功した。

無論、交渉や対価の支払いなどで最終的にこちら側についたものもいたが、反発する者も少なくなかった。

そこで反対する者達を各地に分割して隔離、一種の人質として使う事で最後まで拒ん

だアスラン達、有能な士官を引き込んだのだ。

密かに歯噛みするファウストに引き換え、イスラファイルは全く表情を崩さない。鋭い視線でファウストを見据えている。

「……なるほど、承知した。そちらの要望に応える用意をしよう」

「ッ、イスラファイル!?!」

「黙っている。この件に関して報告も上げず、付け入る隙を与えたお前が悪い。……普段から慎重で綿密に動くが、時折遊びを入れるのはお前の悪い癖だ」

イスラファイルの指摘にファウストも黙って口を噤む。

「ただし、今すぐにとはいかない。そちらの協力が得られるならば、考慮する」

「結局、人質という訳か?」

「卑怯と罵るか? 好きにするがいい。だが手にしたカードは有効に使わせてもらう」

「……お前にも聞いておきたい、クレメンス・イスラファイル代表。お前の目的は何だ?」

この問いを目の前に座る男にぶつける事がユリウスにとっての本題だった。

ラウ——いや、カースは言った。

「この男は自分と同じである」と。

そして相容れないとも。

だからこそ確かめねばならない。

「愚問。私の目的はただ一つ。世界の統一、平和だ。どんな犠牲を払おうともそれを
実現した先に人類の未来がある」

「……何がお前をそこまで駆り立てる？」

ユリウスの真剣な問いにイスラフィールは自分の中にある覚悟の根源に目を向けた。

◇

クレメンス・イスラフィール。

彼は権力者であるイスラフィール家に生まれながら、彼自身が生まれ育ったのは一般
の家庭だった。

それは彼が当時のイスラフィール家の当主が使用人に生ませた子供だったからだ。

だから言つて不幸だった訳ではない。

普通の家に、普通の家族、普通の友人。

決して裕福ではなかったものの、暖かい人々に囲まれたその生活にクレメンスは心か

ら満足し、感謝し、周囲の人達を愛するまともな感性をもった人物として成長した。

。転機が訪れたのは彼が物心をついたの頃。

それはよくある話だった。

当主を継ぐはずの嫡男が事故死、次期当主候補の一人としてイスラフィール家へ招かれる事になったのである。

最初こそ戸惑ったが自分が当主になれば母や友人たちの生活を楽にしてやることも出来るかもしれないと話を受ける事に決めた。

そこで待っていたのは今までとは真逆の生活。

ある種の地獄だった。

当主候補者同士による、殺し合い。

他者を蹴り落とし、貶め、排除する。

勝者は生を、敗者には死を。

ある種分かりやすい構図。

しかし、そこにはクレメンスが尊んできた愛情も友情もない。

肉親であろうが、友人であろうが、邪魔するならば始末する。

歪んでいる。

狂っている。

だがそんな異常な生活の中でも不幸中の幸いかクレメンスは変わらず成長し、自らの優秀さを証明していった。

隙を見せず、努力を重ね、成果を上げる。

その度にこの場の歪みを——そして世界の歪みをまざまざと見せつけられる。
ナチュラル。

コーディネイター。

その歪みは広がり世界全体がその炎に焼かれ、人が死ぬ。

そんなものを見せつけられるといつも考えるのだ。

何故、当たり前のように人を貶める？

何故、簡単に人を殺せる？

平穩こそが、平和こそが人の求めるものの筈だと、そんな事ばかり考えるようになっていく。

無論、その頃には子供ではなくなっている。

世界は決して甘いものではないと、理想論を振りかざすだけではどうにもならないとすでに十分すぎるほど理解していた。

だが、それでも思ってしまうのだ。

このままでは駄目だと。

変わらねばならない。
変えねばならないと。

そんな考えを抱き、何時しか心の奥で自分が実現すべき理想だと定めるようになった。

そうして時は過ぎ、徐々に頭角を現してくるクレメンスを他の候補者も邪魔だと判断したのである。

直接的な排除行動に出て、そして——母を失った。

手に掛けた相手は当主の愛人の一人。

当主の座を奪う為、クレメンスと争う為に生んだ娘を使い母を毒殺、昔の友人たちやクレメンスの命すら狙われた。

それは阻止されたものの、クレメンスはすべてを無くしてしまった。

普通であれば此処で憎しみなり、恨みなりを抱き復讐に走るか。

それとも失った痛みで耐えきれず、折れてしまうか。

しかしクレメンスは違った。

彼はそれでも尚、諦めなかった。

折れなかったのだ。

ある種、此処から彼の真価が発揮され始めたと言っている。

『此処で諦めたら、今までの犠牲がすべて無駄になる。たとえ何があろうとも諦める訳にはいかない』

まさに鋼鉄の精神。

胸に焼き付けた想いは未だ変わらず。

信頼してくれた仲間が死体に変わり、敵の屍が積み上げられる度にその思いが強くなる。

変えねばならぬ。

終わらせなければならぬと。

その為ならば喜んで手を血で染めよう。

悪鬼の所業だろうとやりぬいてみせよう。

結果、犠牲が無駄にならぬのならば——

平和という名の報酬が皆の手に渡るのならば——

喜んで悪魔になる。

自分もまた歪んでいると自覚している。

それでもやり抜く。

それがクレメンス・イスラフィールという男だった。



己が内面を見つめ直すように閉じていた目を開いたイスラフィールは何の迷いもなく、自分の考えを口にする。

「今までの犠牲を無駄にしない為にだ。たとえどれだけの親しい人間が倒れようと、屍が積み上がろうとも、俺は成し遂げる」

「犠牲を無駄にしない為に、新たな犠牲者を生むというのか？」

「そうだ。俺が選んだ道を最後まで貫く事。唯一俺が死者に対して出来る餞はソレだけだ。他のやり方を俺は知らんのでな」

ユリウスはそれだけで理解した。

カースの『ユリウスとイスラフィールは同じでありながらも、相容れない』という言葉の意味を。

二人の違い、それはたった一つだ。

人を信じているか、否か。

それだけだ。

イスラフィールの信念は正しい。

ユリウスでさえも共感できる部分のある実に綺麗で聞こえの良い、覚悟の言葉だ。だが、そこには致命的な欠陥が隠れている。

それは『彼は他人を全く信用していない』という事だった。

この男は誰も信じていない。

味方になると言えば受け入れるし、敵になるならそれまでと切り捨てる。

誰が死に、裏切ろうとも頓着せず、同時に誰が隣に立つても気に留める事すらないだろう。

求めるものは自分の理想とする結果のみ。

それを自分の力だけで全てを成そうとする。

それがこの男の本質であるとユリウスは見抜いたのだ。

「なるほど。お前の言い分も分からない訳じゃない。だが、認める事はできんな」

「ではどうする?」

「いずれ雌雄を決しざる得ないという事だ」

「返事は否という事か?」

会議室が一触即発の空気を纏った。

アスランと隣に立つベアトリーゼが緊張気味に身構えるが、エドガーは涼しい顔で受

け流す。

「それは私達の一存で決める事ではない。だが話は議会の方へ持つていく事は約束しよう。君達が先ほどの条件を守ってくれるならね」

「なるほど。ではこちらからも要望が一つ。結論が議会で出るまでの間、我々の行動に関知しないでいただきたい。それを約束してもらえらるならば、希望者をテタルトスへ帰還させましょう。無論、すべてという訳ではありませんが」

「落とし所としてはそんな所か……いいだろう。結論が出るまでテタルトスは統合側に関知しない。我々の領域に侵入しない限りはだが」

「了解した」

ユリウスの言葉にファウストは内心ほくそ笑む。

今回の件に結論が出るまでは月は動かない。

つまりその間、統合軍は背後を気にせず残った敵である同盟の相手に集中できるのだ。

これだけでもこの会談が行った価値がある。

「では話を詰めるとしよう」

お互いの腹を探りながら、両陣営の代表達は話を続けていく。

ヨーロッパ戦線から続くこの戦争も最終局面に移行しようとしていた。

◇

ヴァルナで行われている会談は誰にも知られないように厳重な警備が敷かれている。だがその警備の穴を突き、カースは別の場所で様子を見ていた。

「予想通りの展開だな。No. 1、そちらはどうだ？」

「申し訳ありません。未だヴァルター、いえヴィクトリア・ランゲルトの所在は確認できません。哨戒任務に就いているという事で定時連絡は入っているようですが。探索させていたモバイルスーツもすべて撃退されています」

「フム、相変わらず隙を見せないか、食えない女だ。ただのゲオルクの狗かと思いきや、やってくれる。戦女神を確保が出来なかった以上、彼女しかいないのだが。エリニスはどうか？」

「変わらず。レティシア・ルティエンスに対する憎しみの言のみ口にしています。やはりエリニスに彼女の相手をさせたのは、不味かったのでは？」

No. 1は常にエリニスの暴走を懸念していた。

普段はあのヘルメット状のデバイスで精神安定を図っているらしいのだが、彼女はあ

まりに不安定すぎる。

だがカースはさほど気にした様子もなく、エリニスを登用し続けている。

No. Iとしてはカースの身に降りかかるかもしれない火の粉は早めに振り払いたいのだが。

「それでもないさ。万が一に備えてのI. S. システムだったからな。……機体の方はどうなっている？」

「はい。すでにパーツの大半は完成しています。現在は調整作業中です」

カースの持つ端末にデータが表示された。

そこには開発中と思われる円形状バックパックパーツが映し出され、無数の砲塔が突き出ている。

「どうやら間に合いそうだな。No. I、引き続きヴィクトリア・ランゲルトの動きを調査しろ。それからこのデータを彼らへ」

「了解しました」

指示に従いNo. Iは恭しく頭を下げると部屋から退出する。

「さて、いよいよこの戦争の最終局面だ。君達の奮戦に期待しているよ、キラ君、そしてアスト君。精々足掻いてくれ、後に残る戦禍を刻むために」

カースは楽しそうに笑みを浮かべると、再び端末に目を落とした。



デブリの間を素早く動くユングヴィ。

何かから逃れるように姿を隠しながら目的地に向けて移動していた。

「……ハア、しつこいですね」

ため息をつきながら、しつこく追ってくる連中に辟易したように視線を向ける。

ヴァルターは即座にビームライフルのトリガーを引くとデブリの陰に隠れていたウインダムを撃ち抜いた。

それを合図に数機のモビルスーツがデブリから飛び出してきた。

「海賊にしては装備が良い。……しびれを切らしたか」

ビームサーベルを抜き、斬りかかってきたイリアスをあつさり斬り捨てた。

「さて機体に統一感がない。尻尾を掴ませたくないと言った所ですか」

動きを見ればある程度の訓練を積んでいる事は分かる。

射撃精度も接近戦に切り替えるタイミングも悪くは無い。

そう悪くは無いが――

「経験不足ですね」

向かってくる敵機を一蹴するヴァルターは言葉の通りに敵を次々と返り討ちにする。「これで全部ですか。舐められたものですね」

周囲の敵を一掃し、他に監視している者も居ない事を確認すると目的地に向かう。

しばらく進んだ先にあったのはデブリに囲まれ隠されたテタルトスの小型輸送船だった。

着艦し、コックピットから降りると奥にある部屋へと向かう。

此処は所謂ヴァルターが自分の為に用意した隠れ家のようなもので前に破棄されたテタルトスの輸送船をそのまま使用しているのだ。

艦内に人間はおらず、普段はミラージュ・コロイドを使って隠匿されている為に誰も気がつかない。

ヴァルターが入った部屋は端末と医療ポッドが置いてあるだけで他には何も無い質素な場所だった。

「時間もありませんから、さっさと済ませますか」

端末を操作し、差し込んだメモリーにデータを落とす。

「これで良い。後は、万が一の場合に備えてデイノ中尉にメールを送っておきましょうか」

素早くキーボードをタイプし、セレネの個人端末にメールを送信する。

彼女ならば上手くやってくれるだろう。

ヴァルターは傍に置いてあるポッドを一瞥するとそれ以上は何も語らず部屋を後にした。

◇

統合軍とテタルトスが動き始めようとしていた頃、同盟もまた足並みを揃えつつ、行動に移ろうとしていた。

機体のコックピットでキーボードを叩いていたアストはようやく終わった装備の調整に一息つくるとマユが顔を出した。

「アストさん、少し休みませんか？」

「マユ、ありがとう」

差し出された飲み物を口にするるとマユの心配そうな顔が目に入った。

最近のマユは四六時中アストの傍に侍っている。

心配してくれているのは分かるのだが、何とか周囲の視線が痛い。

正直、アストの部屋で寝泊まりしようとするのだけは勘弁してもらいたい。

「フリージア、ようやく使えるんですね」

「ああ。e. s. デバイスとの連動に手間取ってしまった。フリーダムとの戦闘データがなかったらもつと手間取ってしまったかもしれないな」

アンセム・イノセントガンダムの中には機体よりもやや大型な板のような武装が装着されていた。

これはユニウス戦役でも投入された『フリージアII』と呼ばれるドラグーン式ビームファイールド発生器である。

フリージアの完成をもってようやくアンセム・イノセントは万全の状態で戦闘に臨む事が出来る。

「……アスランやクルーゼも今度こそ決着をつける為に動く筈だ。何とか間に合ったな」

「アストさん、無茶しないでください」

「大丈夫だ」

アストの覚悟を聞いて心配そうなマユの頭を撫でると丁度ルナマリアがコックピットを覗き込んだ。

「アレン、ジュール艦長が呼んでますよ」

そんな所にもう一つの悩みのあるルナマリアが近寄ってきた。

帰還したルナマリアもアストを心配してすぐに駆けつけてくれた。

それは非常にありがたい話なのだが、少々行動が過剰すぎるような気もする。

マユと張り合っているようにも見えて、困惑しているというのが正直な所である。

「分かった」

後ろを出来るだけ振り返らない様にブリッジへ向かうと仏頂面のイザークが待つていた。

「来たか。今日は暇だな？」

「は？」

「前の約束通り家に来い」

「こんな時にか？」

「こんな時だからだ。近々出撃する事になるのは間違いない。その前にお前を絶対につれて来いって言われていてな。此処で連れていかないと俺が文句を言われる」

アネットもアストの事を心配している。

面倒見の良い彼女らしい。

イザークも散々言われたというのもあるんだろうが、彼もアストを気にかけてくれているのだろう。

「分かったよ。じゃあ、お邪魔しよう」

イザークの家はヴァルハラ of 居住地の一面にある。

静かで良い場所なのだが、都市部から離れている為に買い物などが不便利らしい。港から車でイザークの家に到着すると、一人の女性が出迎えるように待っていた。

「おかえりなさい」

長い髪を肩の所で纏め、穏やかな笑みを浮かべた女性はアネット・ブルーフィールド。アスト達と共にアークエンジェルで戦った戦友だった。

もうすぐ出産という事でお腹が大きくなっているが、顔色などは悪くないよう笑顔を浮かべていた。

その影響なのかいつも以上に優しげな表情を浮かべ、理想の母親のような雰囲気伝わってくる。

「ただいま」

二人は仲睦まじく、キスをかわす。

そういう事は誰も居ない時にやって貰いたい。見ているだけのアストは気まずいだけだ。

「アスタもおかえりなさい、アスト」

「え、あ、ああ、た、ただいま」

いきなり「おかえり」と言われて面食らってしまった。

そんな事を言われたのはいつ以来だろう。

「何、ボーと突っ立てんの？ さっさと中に入りなさい。皆、待ってるわよ」
「皆？」

リビングに通されるとそこには先程別れたマユやルナマリア、キラ、ラクス、宇宙に上がってきたシンやアオイと言った顔見知りの面々が待っていた。

「遅いですよ、アレン！」

「もう、シンってば」

「相変わらず尻に敷かれてるなあ、シンは」

「アスト、早く座りなよ」

「アレン、私の隣に」

「いえ、アストさんは私の隣ですよ」

予想外の事に呆然としてしていると背後から近づいてきた誰かがアストの首に腕を回してきた。

「何を呆然としてんだよ、アスト!!」

「トール!? それにサイにカズイも！」

久しぶりに会う友人達の姿にさらに驚いてしまう。

トールやサイは確か地球に居る筈だし、カズイに居たってはオーブで仕事に就いている筈だ。

「トールとサイは赤道連合に行つてた筈だろ？ それにカズイ、仕事はどうしたんだ？」

「アスト達を驚かそうと思つてトール達と一緒に休みをもらったんだ」

カズイは昔のような弱気の面影はなく、大人の落ちつきが出ていた。

もしかすると同期の中で一番大人なのはカズイなのかもしれない。

「それより聞いてくれよ、アスト。トールつてばまたミリイと喧嘩してさ」

「サイ、それを言うなつて！」

「アンタ達、何してんの？ 早く座りなさい！ 皆、待つてるでしょうが!!」

「は、はい」

やっぱりアネットはアネットだった。

凄く怖い。

「イザーク、アイツと良く結婚する気になったよな」

「……聞こえるぞ」

トールが余計な事を言う前に口を塞ぐとこれ以上、アネットの怒りを買わない様さつさとマユとルナマリアの間に腰掛ける。

「で、これは何なんだ？」

「別に。ただ皆で揃う機会なんて殆どないからね。トールやサイ達まで居るんだし、

たまには皆で集まっても良いでしょ。じゃあ食べましょうか？」

「「いただきます」」

皆の声が揃うと一斉に料理に手を伸ばす。

「美味しいですわね。アネットさん、これどうやって作ってるんです？」

「あ、それはね——」

「で、ツールは何をしたのさ」

「それは流せよ、キラ！ 突っ込むなって!!」

女性陣が料理に関する話で盛り上がり、男性陣もこれまでの苦労話を肴に談笑を始める。

騒がしくも穏やかな雰囲気。

優しさすら漂うその空気がアストの胸に染みわたるように広がっていく。

「アストさん、どうしたんです？」

「これ凄く美味しいですよ？」

「ああ……いや」

彼女が居なくなつて空虚になった胸中に広がる暖かさにアストは笑みを浮かべた。

「少し勘違いをしていたと思つてな。前もそうだったが」

「？」

再びの喪失がアストに消えない傷を刻み込んだ。
それは事実だ。

でもすべてを失くした訳じゃない。

いや、そもそも——俺は何も失くしてなんていない。

守るもの、そして戦う理由も此処にあるのだ。

テーブルを囲む仲間達。

今は離れているが大切な妹もいる。

だから——

「……アスラン、クルーゼ。俺はお前達には負けない」

大切な者達の顔を脳裏に焼き付けると、アストは料理に手を伸ばした。

第36話 乾坤一擲

同盟の宇宙ステーション『アメノミハシラ』の会議場は息の詰まる緊張感に満ちていた。

調和同盟のトップがそれぞれ半円形の机に座り、中央のモニターを注視している。映し出されているのはこれから実行される作戦の概要。

今、提示されている作戦こそ戦争の結末を、いや同盟の行く末を決めると言っても過言ではない。

「——以上が今回の作戦となります」

テレサ・アルミラ大佐の説明を聞き終えたトップ達の顔は一様に暗い。

示された敵軍の脅威と自軍の置かれている立場の危うさ。

何よりもこの作戦のリスクの高さが高官達の表情を暗くさせていた。

同盟の目的はあくまでも保護した停戦派議員を月本国へと送り届ける事。

そしてテタルトスと停戦を行い、統合軍の動きを封じ込める。

統合軍と停戦に至れるかは交渉次第だが、今のように一触即発という状況からは脱する事ができるだろう。

そんな今後を左右する重要な作戦の概要。

それは――

「アポロン、アルテミス、二つの要塞を同時に攻撃とは……」

二つの要塞に対し同時に攻撃を仕掛けるといふものだった。

数で劣る同盟が戦力を分散させざる得ない作戦を立案したのには当然理由がある。

まず最終的な目的である議員達を月へ送り届けるにはテタルトス防衛網の隙を突いて侵入しなくてはいけない。

だが、その侵入経路のすぐ傍、月の境界線付近に存在しているのがアポロン要塞だ。

普通にテタルトス防衛網に突入しようとしても、その前にアポロンにより捕捉されてしまう。

だからまずはアポロンの注意を引き付ける必要があった。

そしてもう一つの理由、それがアルテミス要塞に設置されたレクイエムの排除である。

統合軍が接收し、改修しているこの砲台の射程はアポロン要塞にも届く。

同盟が全戦力をアポロンに振り向けようにも、背後からはレクイエムの砲塔が狙いを

定めているのだ。

「アポロンの方へ集中すれば、レクイエムの砲塔が狙っている。だが先にレクイエムを落とそうにも、今度はアポロンの兵力が黙っていないか」

「匿名で届いた情報によればテタルトスと統合軍が極秘に会談を行い、月は統合の動きに関知しないという約定を交わしたそうです」

「そんな情報が当てになるのか？」

「勿論、鵜呑みにせずに情報の裏付けを進めています。しかし提供された情報と敵の動きや部隊の配置は一致しています」

「……そんな高度な情報を一体誰が？」

湧き上がった疑問にざわつく中、周囲を落ち着かせるようにアイラが声を発した。

「確かにそれも重要ですが、それは後で。それよりも問題があります。戦力不足です」
中立同盟は調和同盟と名を改め改革派及びプラントとも協力関係になっている。

一見して戦力が増強されたようにも見えるが、そう簡単な話ではない。

地上の防衛戦力に加え、宇宙の拠点であるヴァルハラ、アメノミハシラをガラ空きにする訳にもいかないのだ。

「それについては少し提案があります。レクイエム攻略戦を独立部隊『グラオ・イーリス』に任せたい」

アイラの対面に座っていたレヴアンの提案に誰しも顔を見合わせた。

「『グラオ・イーリス』は確かに優秀な人材もそろっていますが、流石に彼らだけでは……」

「勿論、彼らだけに任せるつもりはありません。我々も特務隊を派遣します」
するとレヴアンの背後に立っていたハイネが一步前に入る。

「割り込む形で失礼します。ザフト特務隊長を任されています、ハイネ・ヴェステンフルスです。まずアルテミスに対する攻撃についてですが、あくまでもレクイエムの破壊が目的であり、要塞攻略をする訳ではありません」

モニターが点灯し、現在のアルテミス要塞の情報が提示された。

「データによれば統合軍はレクイエムの構造的欠陥を補うためにアルテミスの後部に岩片を使って新たに施設を増設しています。おそらくここがエネルギープラントであると考えられます。なら此処を破壊してしまえば、レクイエムは撃てなくなる」

「当然、それも統合軍は把握しているでしょう？」

「はい。統合軍はそこに守備を厚くしてくる。だから我々は砲塔を狙います」

画面に映し出されたアルテミスの前方にグラオ・イーリスの部隊、そして後方からザフトが仕掛ける構図が表示された。

「両面からの砲撃で敵を牽制しながらモビルスーツ戦に持ち込み、注意を引き付けた

所で伏せていた別動隊をアルテミス内部に突入させ、砲塔を破壊する。破壊してしまえば長居する必要はありませんから、そのまま離脱します」

「これならアポロン方面に戦力を振り分けられる。離脱した部隊も余力が残っているなら、そのままアポロン攻略の援護に回ってもいいか」

「はい。勿論、これは作戦が上手くいった際の手順ですし、統合軍もそこまで甘くはないでしょう。しかし現在の戦力を均等に振り分けた作戦となると――」

「よりリスクが高まる」

「ええ。特にアポロン要塞では。幸い『グラオ・イーリス』の実力は本物です。ザフトから出向した者も多く、彼らとならば現場での急な連携も取りやすい」

「なるほど」

確かにこれならば本命であるアポロン要塞の方へ戦力を集中できる。

その分『グラオ・イーリス』の方はかなり負担を掛けてしまう事にはなるが、此ればかりは仕方がない。

アイラは隣に座るカガリの顔を見ると険しい表情のまま頷いた。

「分かりました。それで行きましょう」

一同に反論はない。

全員の一致を確認し、作戦会議は終了する。

同盟の決死の作戦が始まろうとしていた。

◇

上層部の方針が決定した同盟の動きは素早かった。

あらかじめ用意していた艦隊にモビルスーツを搭載し、すぐさま出撃準備を整えていく。

そんな喧噪の中でシンは渋い顔でセリスとマユを見つめていた。

「そんな顔しないでよ、シン。私もマユちゃんも大丈夫」

「そうですよ。兄さんは自分の任務に集中してください」

「でもなあ。やつぱり心配だし」

今回、マユとセリスはレクイエム破壊へ向かい、シンはアポロン要塞の方に参加する事になっていた。

向かう場所は二つとも非常に危険な戦場である。

命令とはいえ大切な恋人と妹と別行動を取る事がシンには心配で気ではない。

「アポロン要塞の方は激戦区になります。兄さんの力が必要なんですから」

「そうだよ。心配なのはこっちだから。キラさんとかミナト少尉達と一緒に、無茶しないようにね！」

「ぐっ、わ、分かってるって」

逆に心配されてしまったシンは罰が悪そうに頭を掻くと真剣な顔で二人に告げた。

「とにかく二人共、絶対に死ぬなよ」

「もちろん。シンの方こそ」

「他の人達をお願いします」

「ああ」

シン達が話をしている近くでは、キラがモビルスーツの調整を行っていた。

「外部装甲アドヴァンスアーマー異常なし、各パラメータ正常。『リベルテ・ストライカー』、調整完了」

「ありがとうございます、キラさん。本来、機体調整は私がやるべきなのに」

「構わないよ。この機体については僕が一番詳しいからね」

キラはかつての愛機の面影を持つ機体に笑みを浮かべる。

A D T X O 1 b 1 『リベルテ・ストライクガンダム』

キラ・ヤマトの破壊されたヴァルトライテのパーツをストライクに移植した機体。

ストライクがベースになっているとはいえ、その外見と中身はほぼ別物になっており、性能も特殊機にも劣らない。

専用アドヴァンスアーマーを装備し、背中にも専用のストライカーパックである『リ

ベルテ・ストライカー』を装着している。

このストライカーは『デステイニーシルエット』のデータを参考に開発されており、全開加速時には光の翼が発生、幻惑機能こそないものの、若干の防御効果を持つ光を放出する。

「こりゃ、ストライクも化けたな。俺が乗ってた奴とは別物だ」
頭を掻きながらムウがリベルテ・ストライクを見上げていた。

「ムウさん。アカツキは良いんですか？」

「ああ。何時でも使えるように調整だけはしてたらしいからな。チエックももう済んでる」

ムウは今回、フォルセティと共にアルテミス方面へ向かう事になっている。

アポロン要塞攻撃の指揮を執るように要請されていたのだが、ある理由からアルテミス方面へ回してもらっていた。

「ムウさん、レクイエム攻略に志願したのは……」

「ああ。今度こそクルーゼと決着をつけないとな」

ムウには分かっていた。

決戦前に都合よく届いた精度の高い情報。

アレを送りつけてきたのは間違いなくクルーゼだと。

「野郎、あんな情報を送ってきたのも戦闘をより激しくする為だろうさ。好きにさせるかよ」

「気をつけてください。何を狙っているか分かりません」

「ああ。でも気をつけるのはお前さんもだぜ、キラ」

「分かっています」

自分を殺す為に生まれた男——ユリウス・ヴァリス。

アストでも相討ちに持つていくのがやつとだった最強の敵であり、乗り越えるべき壁。

もう覚悟は決めている。

「無茶するなよ」

ポンと肩を叩き、ムウはアカツキの方へ歩いていく。

「ムウさんも。ニーナ、君も無理だけはしないようにね」

「お気遣いありがとうございます。無理するつもりはありません。この後にも差し支えますから」

ニーナのこの後という言葉にキラは表情を固くする。

そう、この戦いを終えた後にもやるべき事があるのだ。

負ける訳にはいかない。

そんなキラの顔を見ながら、ニーナは少し意地悪そうに笑みを浮かべた。

「キラさんのお世話をするのが私の楽しみであり、役目ですから。私は今後も貴方に
ついて行きます」

「あ、ありがとう、ニーナ」

ニーナの献身ぶりにややたじろぎながらも、キラはどうか笑顔で返した。

「随分、楽しそうなお話ですわね」

背後から聞こえた声にキラは思わず竦み上がった。

先ほどの意地悪な笑みの理由を察しキラは内心ため息をつく。

伝わる怒気をどう静めようかと頭を抱えながら、引きつった表情のままキラはゆっくりと振り返った。



各艦の準備が進む中、アストは何故ついてきたルナマリアとオーデインの艦長室に呼び出されていた。

理由はテレサの顔を見れば何となく想像できる。

こう見えて家族だ。

暮らした期間は短くても、互いがどういう人間かは理解している。

「ルティエンスの件は済まなかった。すべては私の采配ミス。責任は私にある」

「それは違いますよ。戦場なのだから仕方ありません」

テレサはアストの顔を見つめる。

「ハア、お前には罵倒する権利くらいはあるんだぞ」

「昔、貴方が教えくれた事ですよ。『どんな理不尽な事だろうと現実には現実だ。泣こうが喚こうが何も変わらん。なら今何ができるか、何をすべきかその頭で考えて動け』ってね」

「懐かしい事を」

頬を緩めるテレサにルナマリアは何か聞きたそうに首を傾げた。

「アレンとアルミラ艦長は確か」

「ああ。私がこいつの保護者だ」

「母——い、いや、あ、姉代わり見たいなものかな、アハハ」

母親と言いかけた途端にテレサから発せられた殺気に冷や汗を掻きながら、慌てて訂正する。

テレサは孤児同然になったアストを引き取ってくれた恩人である。

しかし昔から年齢に関する話題をすると酷い目にあわされた。

「少しデリカシーが足りないです、アレン」

「分かるか？」

「ええ。大体何時もこんなものですから」

ルナマリア、幾らなんでもそれは酷くないだろうか？

アストはそんな事を思いながら二人からのジト目をかわすように「ゴホン！」とせき込む。

するとテレサが呆れた様子で頭に手を置いた。

「全く、思ったよりは元気そうで安心した」

どうやら彼女もアストの事を気にしていたらしい。

ましてや現場の指揮を執っていたのがテレサであるなら、誰より責任を感じていたに違いない。

「だが、女の扱いはまだまだだな。そんなんじや私も安心して死ねんぞ」

「アルミラ大佐、それは冗談にしても」

アストの非難の籠った視線にテレサは苦笑しながら手を振る。

「勘違いするな。私とて死ぬ気はないさ。しかし戦場である限り絶対はない。それは身に染みて分かっているだろう？」

「それは……」

テレサはアポロンに向かい、アストはアルテミスに行く事になる。もしもの場合、これが今生の別れになる可能性もあるのだ。

レティシアのように。

「だからこそ、まあ、何だ。お前の顔を見ておこうかと思つてな」
それがアストを呼び出した理由らしい。

確かにそういう事もあるのかもしれない。

だが――

「死ぬつもりなんてないんでしよう？ 指揮官である貴方が死ぬつて事は部隊の全滅を意味する。貴方はそれをさせない」

「買い被りだよ。今回も多くの兵を死なせてしまった。無論、全力は尽くすがな。とにかく呼びつけたのはお前に釘を刺す為だよ」

「俺つてそこまで信用がないですかね」

「無いな」

にべもなく断言されてしまった。

「良いな？ 無茶だけはするなよ」

「分かつてますよ」

「なら、フォルセティに戻れ」

アストはテレサの気遣いに感謝しながら、敬礼すると部屋を出た。ルナマリアもそれに続こうとするが、その前に呼び止められた。

「ルナマリア、だったな？」

「あ、はい」

「……アストを頼む。見ての通りの鉄砲玉だからな」

頭を下げるテレサ。

伝わるのは家族を案じる想い。

それを感じ取ったルナマリアはそれを受け止めるように敬礼する。

「了解です！ 私にお任せください！」

「頼む」

多くは語らない。

ただ男の身を案じる想いは共通。

その祈りを託し、そして託され、テレサとルナマリアは敬礼をかわし合った。

◇

統合軍によって陥落したアルテミス要塞は以前とは違う外見へと変化させていた。

防御力強化の為に接合された岩片により外見が一回り大きくなり、後方部にはエネルギープラントが追加。

レクイエム発射に必要なエネルギー供給の問題も解決している。

ユースティアに乗り、外からアルテミスを眺めていたアスランはふと昔の事を思い出した。

アレはヘリオポリスから脱出したアークエンジェルを追撃した時の事。

アークエンジェルはアルテミスに向かう進路を取り、それを阻むためにアスランは奪取したばかりの機体で出撃したのだ。

「……まさか『足つき』が向かおうとした要塞を自軍の拠点にする日が来るとはな」

不思議な気分になりながら笑みを浮かべていると、同時に脳裏に浮かんできた機体の姿に一気に頭が冷えていく。

「そういうえば奴と——イレイズと本格的に戦闘したのもその時だったな」

せめてあの時に奴を落としておけば、仲間もそして彼女も失う事はなかったのかもしれない。

「……アスト・サガミ」

思い浮かべる宿敵の姿にアスランの拳に力が入っていく。

どこか感情的になっている事は自覚しているし、原因も分かっていた。

それはヴァルターから『レティシア・ルティエンスの戦死』を聞かされたからだ。アスラン自身、レティシアの事は吹っ切れている。

これは戦争だ。

誰かの手で倒される事もあるだろうし、邪魔ならばこの手で倒そうとも思っていた。

それでも――

「……くそ！」

守り切れなかった宿敵に対してどうにもならない怒りの感情が湧き上がってくるのだ。

「報告にあった白いガンダムは奴に間違いない。ならようやく対等の条件で戦える。今度こそ決着をつけてやるぞ、アスト・サガミ」

《大佐、アポロン要塞から連絡が入っています》

「分かった。すぐに戻る」

アスランは気分を落ち着けるように息を吐き出すと交代の部隊と入れ替わるようにして要塞へと帰還した。

◇

アルテミス要塞は先の戦闘で破壊された内部を含め、復旧が急ピッチで行われた。そのおかげか以前よりもより堅牢な要塞として生まれ変わったと言っても過言ではないだろう。

問題があるとするればアルテミスの傘が部分的にしか展開できなくなった点が挙げられる。

これは時間が無かった為にレクイエムの方へ優先的にエネルギーを回すように修復が施された為だ。

無論、重要部分には展開できるように配慮されているし、増設された岩片はそれを補う防御力強化の意味も含まれている。

そんな生まれ変わったアルテミス要塞を母艦から眺めていたラデイスはテーブルを挟んで対面に座るミレイアに声を掛けた。

「どうしたんだ、ミレイア?」

「何か、大佐が凄く不機嫌っていうか、イライラしてる感じなのよ。ラデイス、何か知らない?」

「……俺が知るわけがないだろう」

ラデイスは面白くなさそうに鼻を鳴らす。

此処最近常にミレイアの話題はアスランの事ばかりだ。

無自覚とはいえミレイアに好意を抱いているラデイスが面白くないと思うのも当然だった。

「ふん、どうせ女の事でも考えてたんだろ」

良くないとは思いつつ、ラデイスはついつい余計な事を言ってしまう。

案の定、ミレイアの機嫌は急降下、明らかに悪くなった。

「何それ。大佐はそんな人じゃない」

「……ミレイアは何も知らないんだ。これプラントに居た連中には有名な話なんだけどさ、大佐には昔、婚約者がいたんだよ。ラクス・クラインっていう」

「クラインって、ティア・クラインと同じ」

「そうだ。希望の歌姫ティア・クラインの姉だよ。ま、その人は事故で死んだらしいんだけどさ、実は大佐はそのラクス・クラインの護衛役の女とも付き合ってたっていう話があるんだよ」

「何を根拠に……」

「言つたら、有名な話だって。ヤキン・ドゥーエ戦役中とかその女の名前を叫んでるのを聞いている奴がいるんだよ。デイノ中尉の事だつてどこまで本気だったんだか」

「やめてー!」

ミレイアの叫びに近くにいた兵士達も何事かと振り返る。

だが渦中の二人はそれに気がつかない。

「俺が言いたいのはさ、大佐はミレイアの思っているような人じゃないって事なんだよ。だから」

「ふざけないで！ そんなのは大佐に嫉妬した連中が流したただの噂でしょ!! そんなものに振り回されて！」

足音荒くその場から立ち去るミレイアの背中を見ながらラデイスは拳を握りしめた。

ミレイアが見てきたアスランの働きはまさに英雄。

ラデイスが何を言おうとも届かないのかもしれない。

「……戦果だ。大佐を上回る戦果を上げれば、ミレイアの目を覚める筈だ」

湧き上がる自分の感情に未だ気が付く事無く、ラデイスは戦意を高めていく。

その時、見計らったように警報が鳴り響いた。

「これは!？」

《哨戒機が接近中の艦隊を補足。調和同盟軍と思われる。各員はすぐに戦闘態勢に移行せよ》

響く艦内放送に呆然としていたラデイスの口元が歪んでいく。

「ハ、ハハハ！ このタイミングで来てくれるなんてな!!」

此処で戦果を上げれば、ミレイアの目も覚める筈だ。

「同盟如き、俺が全機叩き落としてやる！」
ラデイスは笑みを張り付けたまま、格納庫に向かって走り出した。
今までにない闘志を燃やしながら。

◇

テタルトスの軍事ステーション『イクシオン』に接舷されているのはテンペスターズの母艦であるアリストアルコスだった。

「調子はいいようだな」

外で行われているテンペスターズの演習を見ているのはテタルトスの制服に袖を通したヴィルフリートだ。

モニターでは三機のモビルスーツが見事な連携で配置してあったデブリを破壊する様子が映し出されていた。

「誤差もほぼ無し。大したものだな」

一度は統合軍に所属していた筈のこの戦艦が何故テタルトスに居るのか？

それはこの艦の指揮を預かるヴィルフリート・クアドラードと共に統合軍からテタルトスに帰還したからである。

元々ヴィルフリートは統合軍に志願して参加していた訳ではない。

怪我を癒している間に勝手に所属させられていただけ。

兄であるファウスト・ヴェルンシュタインのやり方にも賛同できなかった。

元々兄弟仲も良くはないし、付き合っただけやる義理も無い。

「クアドラード少佐、ヴァリス大佐が格納庫にお越しになられたようです」

「分かった」

格納庫に降りたヴィルフリートを待っていたのは、ユリウスとモビルスーツハンガーに立つ新型機だった。

「ヴァリス大佐、これが」

「ああ。これが最新鋭モビルスーツ『ジンIII』だ」

LF A-09 『ジンIII』

『ジンIII』は紛れも無くテタルトスの最新型モビルスーツである。

コンバット装備には対応していないが、背中に設置されたウイングスラスターと各部に設置された姿勢制御バーニアによって高い加速性と機動性を確保。

さらに洗練されたOSと改良されたコックピットブロックによってパイロットを選ぶ事無く操縦可能になっている。

本来最新機として配備される予定だった『パウ』が統合軍に流れてしまった為に急遽、

極秘で開発された経緯があり、徹底した情報規制をしていた為に統合軍ですらその存在を知らない。

カタログスペックを確認したが、性能は最新機である『バウ』すら上回っているだろう。

「これが此処にあるという事は——」

「お前の予想通りだ、ヴィルフリート。同盟が動いたと連絡が入った」

その知らせに知らず知らずの内にヴィルフリートは拳を握りしめる。

「……方が一に備え、我々も出撃する。アリスタルコスにも発進準備をさせろ」

「了解!!」

格納庫を去るユリウスの背中を見つめながら、ヴィルフリートは改めて決意を固める。

「……相手が誰であろうとも俺はただ全力で戦うだけだ。堂々と真正面からな」

それこそが愚かだった過去の自分に打ち勝ち、失った同胞に報いる術だと信じて。

ヴィルフリートは自分の機体へと歩き出した。

第37話 決戦の号砲

アルテミス要塞における戦闘開始の合図となったのは同盟軍から発射されたミサイル攻撃だった。

フォルセティを中心とした艦隊のミサイルが一斉にアルテミスに向けて撃ち込まれる。

しかしそれは統合軍側からしても予想範囲内の事だ。

事前に展開された戦艦とモビルスーツの砲撃が並みいるミサイルをすべてを薙ぎ払い、要塞手前で破壊されたミサイルは閃光となって宇宙を照らした。

だが、それで終わるはずもなく眩い光に紛れ、新たな攻撃が迫ってきた。

「敵艦隊から第二波ミサイル！」

「迎撃！」

アルテミスに新たに設置された砲台も迎撃に加わり、再び同盟のミサイルは尽く撃破されてしまう。

「ミサイルの目標はエネルギープラントか」

アルテミスのコントロールルームで攻撃の様子を見ていたアスランはすぐに同盟の目的を看破する。

「レクイエムの破壊……本命はアポロン要塞だな」

「敵艦からモビルスーツの発進を確認しました」

「正面から力押ししてくるつもりか？ 前面の部隊に迎撃させろ」

「大佐、サリエル所属のモビルスーツ隊から出撃要請が来ていますが？」

サリエルの名にアスランは僅かに表情を固くする。

あの戦艦についてはアスランも詳しく把握していない。

イスラフィールに情報の開示を求めた際にも見事に拒否されてしまった。

だが艦を指揮する艦長とは顔を合わせたことがある。

ニコラス・フリードマン。

メキシコ戦線においても改革派を手玉に取った傑物。

彼がサリエルの指揮を執っているならば多少の信頼も置けると、そう判断しようとしたのだが、部隊自体を指揮している人物は別にいるらしいという噂が耳に飛び込んだ。

しかもその真偽は未だに不明。

地球軍の特殊部隊フロントムペインの母艦らしい秘密主義とでも言えば良いのか、どうも信用しきれない。

「大佐？」

黙っているアスランを訝し気に見つめてくる部下の姿に我に返るとすぐさま指示を出した。

「いや、出撃させていい」

「了解」

不信感は募るものの、イスラフィールから聞くなど言われた以上は詮索はすまい。

「……信用はしないが」

モビルスーツ戦に移行した戦場に向かう黒い戦艦をアスランは鋭い視線で見つめ続けた。

◇

艦隊からの砲撃は一旦止み、戦闘は次のステージへと移行した。

すなわちモビルスーツによる戦い。

二つの陣営の機体がぶつかり合い激しい混戦へともつれ込む。

それこそ強化兵ラデイス・グエラの待ち望んだ戦場だった。

「雑魚どもが！ どけエエ!!」

鬼気迫るアルタイルの猛攻。

ラデイスはスオウのビームライフルをあっさりと躲し、瞬時に懐へ入り込むとビームサーベルを突き立て、力を込めて振り下ろす。

真つ二つになったスオウが爆散すると続けてライフルでヴィヒターを撃ち抜いた。

「ノロマが！」

ラデイスは手応えのない敵を嘲るように吐き捨てる。

動きが、反応があまりに遅すぎるのだ。

「その程度、目を閉じてても躲せるんだよ!!」

上方からサーベル片手に突っ込んできたブリュンヒルデの初動を見極め、紙一重で回避する。

そしてすれ違う一瞬。

シールドをコックピットへと押し付け、三連ビーム砲で吹き飛ばした。

「まとめて消してやる!」

アルタイルの肩からエレメンタルドラグーンが射出され、素早く同盟の機体を囲むと一斉に砲撃を開始する。

三百六十度からのオールレンジ攻撃。

同盟のパイロット達に回避できるはずもなく、逃れる事すらできないままドラグーン
の餌食となった。

「……ラデイス」

少し離れた場所でラデイスの戦いを見ていたミレイアは、その猛攻に思わず身震いしてしまった。

射撃も斬撃も完ぺきに相手を捉え、さらにドラグーン操作も完ぺき。

砲台はすべてコックピットを一撃で射貫いているのだから凶悪とすら言える。

「私だつて負けるものか」

ミレイアのアルマイルがラデイスに続くように敵陣へ突っ込んでいく。

「ミレイア、迂闊だぞ！」

「うるさい！ アンタなんかに！」

ミレイアもドラグーン操作であれば自身がある。

ラデイスにも負けはしない。

切り離された砲台を巧みに操り、敵機の死角を突く形で攻撃を放つ。

背後、下方、上方と撃ち抜かれたブリュンヒルデは火を噴き、爆散した。

「やった！ 私にだつて！」

一流パイロットと遜色ない動きで次々と敵機を打ち落としていくミレイア。

しかし――

「この勢いのまま――ツ!？」

ミレイアは思わずその場から飛びのいた。

アルマイルに撃墜されそうになっていた同盟機を守るように別の機体が割り込んで

きたからだ。

しかもドラグーンを正確に撃ち落として。

興奮していた頭に氷水でもぶっかけられたような気分だった。

「アレって」

知らない筈はない。

世界でも有名なモビルスーツの一つ。

蒼い翼と白い四肢を持つ機体。

「フリーダム!?!」

ミレイアの前に現れたのは同盟最強の一機『トワイライトフリーダム』だった。

腰から抜いたサーベルをすれ違い様にフロアレスダガーを切り捨て、さらに追いすがりゲルを次々と狙い撃ちにしながら接近してくる。

見ているだけでも分かる。

一線を画する圧倒的な技量を持った強敵であると。

「アレが強化兵用モビルスーツ」

先発隊の一員として出撃したマユは猛威を振るうアルタイルに目を向ける。

あの機体に関する情報はすでに頭に叩きこんであった。

テタルトスの技術を用い、地球軍のエクステンデットやブーステッドマンと同じように強化を施された強化兵と呼ばれる兵士達専用の機体。

当然、その性能は普通の機体とは一線を画している。

その性能に加え実力は並みのエース級を上回るだろう。

「放っておけば味方の被害が広がる。なら此処で落とせば！」
アルマイルに目標を定めたマユは蒼い翼を広げて突撃する。

「例えフリーダムが相手でも！」

ミレイアは弾丸のように速度を上げて向かってきたフリーダムに残ったドラグーンを差し向けた。

確かに速いが、強化された自分であれば捉えられる。

しかしその判断は誤りだったとすぐに気がついた。

フリーダムはドラグーンの動きを完璧に見極め、すべての射線を避けると逆に反撃に転じてきたのである。

「嘘!？」

バレルロールしながら逆さになり、フルバースト。

フリーダムの強烈な火線をギリギリ飛び退いて回避する、アルマイル。

しかしそれすら見越していたマユは即座に距離を詰めビームサーベルを一閃、アルマイルの右腕を斬り捨てた。

「なっ!?! は、速すぎる」

慢心していたと言われればその通り。

だが、断じて油断はしていなかった。

ミレイアは常にフリーダムの動きを注視していたのだから。

「反応できなかつた」

それが示すのはフリーダムのパイロットの実力は強化されたミレイアを上回っているという事。

「だからって、負けない!」

振り向きざまにヒュドラを放ち、同時に残ったドラグーンをすべて展開した。

「いくらフリーダムでも、これならば!」

ドラグーンでフリーダムを誘導し、ヒュドラで仕留める。

背を向けた敵にこれを捌く事はできないだろう。

しかしマユはそんなミレイアの上に行く。

「甘いです!」

ライフルでドラグーンを撃ち落とし、宙返りでヒュドラを紙一重で回避する。

そのまま加速、近接戦の間合いに飛び込むとミレイアに避ける暇すら与えない速度で

脚部を両断した。

「きゃああああ!!」

ミレイアはコックピットを襲う衝撃を堪えながら敵の姿を目に焼き付ける。

翼を広げる姿と圧倒的な強さ。

無慈悲なまでの攻撃といい、まさに天上を舞う熾天使だった。

「ミレイア!? 貴様アアア!!」

「同型機?」

ラデイスの咆哮に応えるような強力な砲撃。

空間を焼き払うヒュドラの一撃をシールドで受け止める。

「この敵は……さっきの機体より動きがいい」

猛獣のような殺気を放ちながらも、その攻撃には無駄がない。

「手強いけど、もしかしてこの機体のパイロットが強化兵?」

アルタイルのライフルを回避しながら、再びフルバーストを叩き込む。

「当たるかよ!」

フルバーストを上昇して回避したラデイスに向けて距離を詰めようと前に出るフリーダムだが、それを阻むように別の機体が割り込んできた。

「何!?!」

アルタイルを追い越し、怒声と共にビームソードを展開して斬りかかる。

「ハアアアアアア!!」

フリーダムに届く前に展開したシールドがビームソードを受け止め、鏖迫り合いのように二機のモビルスーツは睨みあつた。

「ッ!? この機体は!？」

マユの脳裏に浮かぶのは、ユニウス戦役で相対した不気味さと不吉さを滲みださせた機体。

「ベルゼビユート」

自然と操縦桿を握る手に力が籠る。

忘れる筈があろうか。

この機体とそのパイロットの事を。

「死ねエエエ!!」

飢えた獣のごとく牙を剥くベルゼビユート。

ビームソードを下段から切り上げ、フリーダムを弾き飛ばし、さらにビームキャノンで追撃を掛けてくる。

「ぐう、アイギス!!」

吹き飛ばされながらも背中中のアイギスドラグーンを射出する。

トワイライトフリーダムを守るように張られたフィールドが砲撃を弾き、同時にビームキャノンを撃ち出した。

突っ込んでくるだけの相手には十分な一撃。

だが、エリニスはただの獣ではない。

「そんなものにイイ!!」

ベルゼビュートはスラスターを使い無理やり機体の軌道を変えた。

それでもビームがベルゼビュートの装甲を僅かに掠めるが、エリニスは意を返さないとばかりに両手を振り上げる。

「フリーダム!!」

ソードからクロウへ武装を変更し、強力なビーム刃を形成した爪がシールドの上からフリーダムを脅かす。

上段からの強烈な一撃を止めたマユの耳にエリニスの声が聞こえてくる。

「お前もだ! お前もレティシアと同じで私を不快にする!!」

エリニスがその名を口にした瞬間、マユの中から抑えきれない感情が湧きあがってきた。

「変わらない、貴方は。昔のままです」

無暗に殺意を撒き散らし、自分勝手な理屈を振りかざす。

巻き込まれるこちらはたまったものではない。

だが――

「……本当ならば貴方なんかとは関わりたくありませんが、今回は別です」

マユは自分でも驚くほどに冷たい声で呟くと鋭い視線でベルゼビュートを睨みつけ

た。

「貴方は此処で——私が殺す」

マユのSEEDが弾けると同時にトワイライトフリーダムシステムが機動する。

『C. S. system activation』

装甲の一部が拡張し、スラスタが迫り出される。

そして光の翼が解放された。

これこそトワイライトフリーダム切り札『C. S. システム』である。

SEED発現を感知すると機体の一部装甲が拡張、格納されていたスラスタを解放。
放。

両翼から光の翼が放出され、通常とは比較にならない速度での高速戦闘を可能としている。

さらに収集した戦闘データから機体制御や補助を行い、パイロットの力を100%発揮できるようにシステムがサポートするようになっている。

ユニウス戦役時に投入されたC. S. システムはパイロットや機体への負担が大きすぎる為に、幾つか制限が設けられていた。

しかし改修を受け機体への負担が減らされ、使用回数、制限時間共に緩和されている。光を纏うその姿はまさに天使。

眼前に佇む熾天使の姿にエリニスの中の何かを刺激する。

「あ、ああ、そうだ。その姿だ、貴様に——」

それは何時の事なのか。

どこかの戦場。

姿を現した熾天使によって一蹴されてしまった。

「そうだ、お前だ……お前だ、お前だ、お前だアアアア!!」

今まで以上の殺意を漲らせ、エリニスもまたベルゼビュートの切り札を発動させた。

『I. S. system starting』

それは殺意を刃へ変える悪魔の力。

全身を包む感覚に身を浸し、エリニスは哄笑しながら動き出す。

「フリーダム!!!」

「ハアアアア!!!」

尾を引く光が軌跡を描き、己が力を解放した二機のガンダムが宇宙を駆ける。

追尾することすらかなわぬ速度の中で、マユとエリニスは互いに刃をぶつけ合った。



戦況はほぼ五分。

いや、統合側が押していると云っても良い。

そもそもの物量が違うのだから当然と言えば当然。

しかしアスランの表情は険しさを増す一方だった。

「大佐、どうなさいました？」

「……この状況が少し不可解なだけだ」

「何がでしょうか？」

「同盟は何故積極的に前に出ない？」

「出れないのでしょうか。そもそも我々とは物量も違います」

「そんな事は同盟も承知の筈」

だからこそ今の戦況が不可解なのだ。

同盟にとってこの戦いの重要さは言わずもがな。

にも関わらず正面からの力押しだけでアルテミスを落とそうとするなど、そんな無謀

な策を選択するとは思えなかった。

「……戦場で指揮を執っているのは中央にいる黄金のモビルスーツか。傍にはインパルスとアイテル、『熾天使』の相手はサリエル所属の機体がしているが——」
気になっているもう一点。

それがアスト・サガミが未だに出撃していないという事。

「機体の不備……いや、何かあると考えるべき」

戦域図を見つめ、考え込んでいたアスランはふとアルテミスから戦力が同盟側へ引つ張られている事に気が付いた。

「そういう事か」

「大佐？」

「防衛隊の一部を後方に回せ、敵が来る」

「え？」

「レクイエムのチャージ開始、出力調整、目標は敵艦隊だ。チャージ完了までの時間を稼ぐ。此処は任せただぞ」

同盟はレクイエムを警戒し、射線に入らないように布陣を敷いている。

だが、それはこちらも想定済み。

やりようはあるという事だ。

「誰が来るかは知らないが、負ける訳にはいかない」

その場を部下に任せアスランは足早にコントロールルームを後にした。

◇

物量の差によって押され始めた同盟軍。

だが、焦る事無く彼らは次なる一手を打とうとしていた。

「艦長、こっちの出撃準備は整ったぞ」

第二陣として待機していたアストはフォルセティのブリッジへ顔を出す。

するといつも以上に不機嫌そうな顔をしたイザークがモニターを眺めている姿が目に入った。

「どうした？」

「アスランの事が気になってな。おそらくアイツはこちらの目的に気がついている」

「そういえば奴とはアカデミー時代からの付き合いだったな？ 確か相当優秀だったか」

その話題はイザークにとって面白くない事だったのか、益々顔を顰めていく。

「色々あったがな。昔からアイツは——いや、それは今は良い。とにかくアイツならこの程度、気がついてもおかしくない」

「なるほど。だが、それも想定内だろ」

「勿論だ。昔のように負ける訳にはいかん。しかし何か切り札のようなものがある気がしてな」

「今の『グラオ・イーリス』の指揮官はお前だ。いざつて時も信じてるさ。……熱くなつて出撃するなよ」

「そんな事するか。今の俺はフォルセティを任された艦長だぞ」

アストの軽口にイザークも幾分表情を和らげると拳を突き出した。

「頼むぞ」

「了解」

コツンと軽く拳を突き合わせるとアストはそのまま格納庫へと移動する。降りた格納庫では万全な状態となったイノセントと整備兵が待っていた。

「大尉、イノセントの整備完了です」

「ありがとう、助かった」

整備兵の肩を軽く叩き、イノセントのコックピットへ乗り込むと素早く機体を立ち上げる。

《アスト、ハイネ達が動くそうだ》

「分かった。もしもアスランがこつちに來たら俺が足止めする」

《頼む》

「アスト・サガミ、ガンダム、行きます！」

カタパルトから射出されたイノセントが戦場へ飛び出した。



アルテミスに気づかれぬよう慎重に近づく機影があった。

ザフト艦ナスカ級。

特務隊の指揮するその艦から数機のモビルスーツが出撃する。

イフリート・アルジエントと最新鋭機であるギアが先陣を切り、さらに後ろからオレンジ色に塗装された新型機が飛び出してくる。

ギアと同じ特色を持ちながら、明らかに違う。

ZGMF-3001 『リガル・ギア』

ギア・ソルダートをより洗練し、高性能化を図った機体。

外見上頭部ブレードアンテナの追加等見た目だけでなく中身もほぼ別の機体になっており、性能もまるで違う。

それに伴い武装にも違いがある（ただし通常のギアの武装が使用できない訳ではな

い)

さらに個人の特徴に合わせた改良機も存在しており、その機体はワンオフ機に等しい性能を持っている。

「上手くやってるな。良い感じに敵も引きつけられてる。俺達も行くぞ、アレン達ばかりに無理はさせられないからな！」

「了解!!」

補足されるより前にアルテミスに取り付ければこちらの勝ち。

「ま、そんなに甘くはないだろうけどな」

案の定、こちらの接近に気がついた迎撃部隊が姿を現した。

しかも陣形を整えているというオマケ付きで。

「チツ、やつぱり簡単にはいかないか。動きを読んでいた事と言いどうやら敵指揮官

は相当優秀らしいな」

しかしあくまでハイネ達も囷。

本命がアルテミスへ辿りつけなければいいのだ。

「じゃ、派手に行きますか」

ハイネは両手に対艦刀を構え、敵陣の中に斬り込んでいく。

「敵はリゲルか。機動性は高いが！」

変形したりゲルの加速に怯む事無くこちらもスラストターを噴射。

先回りした先で対艦刀を叩きつけた。

刃はリゲルを容易く斬り裂き、さらに背後から攻撃してきた敵機を斬り捨てた。

「こいつは普通のギアとは違うんだよ！」

イフリートのガトリング砲の援護を受けながら進むハイネ。

ライフルに一撃に貫かれ、爆散した敵機の閃光に紛れ、見慣れない機体が見せた。

「アレは!？」

ハイネの前に姿を見せたのはアスランのユースティアだった。

「ザフトか」

アスランは攻撃を仕掛けてきた部隊を見て、僅かに顔を顰める。

「新型機もいる。ザフトの機体は侮れない」

かつて所属していただけにザフトの技術力は侮れない。

アスランは気を引き締めながら、一際目立つ色を持った機体の方へユースティアを向

かわせた。

「お前が指揮官機だな」

腰から抜いたビームサーベルを連結させたユースティアがギアに向かって斬りかかる。

「速い!?!」

袈裟懸けの一撃を肩のアンチビームシールドで防ぐハイネだが、斬撃の威力と速度に思わず目を見開いた。

「落ちろ、オレンジ色!!」

「チツ」

たまらずユースティアに蹴りを入れて引き離す。

しかし強力なビーム砲がハイネに襲いかかった。

「接近戦だけでなく、射撃も上手いなー」

上昇してビームをやり過ぎすハイネだが、安堵する間もなく次の攻撃に晒される。

ユースティアの放っていたビームブーメランが左右から迫ってきた。

「この程度!!」

ハイネは素早くブーメランを迎撃し、斬りかかってきたユースティアと激しい攻防戦を繰り広げる。

「やるな」

「舐めるな!」

サーベルの斬撃が盾に阻まれ、対艦刀の一撃が空を切る。

形勢はほぼ互角に見える戦い。

しかしハイネは焦りを隠しきれない。

「こいつ、とんでもないな」

凄まじいまでの斬撃。

一撃、一撃がとてつもなく重い。

シールドで防いでいるにも関わらず、衝撃が殺しきれずコックピットまで響いてくる。

「新型じゃなけりや、持たなかつたかもな！」

対艦刀からビームライフルに持ち替え、牽制しながら距離を取る。

接近戦を避け始めたリガル・ギアにアスランはすぐに目的を看破する。

「時間稼ぎをするつもりか」

「悪いが、まだまだ付き合ってもらおうぜ！」

距離を取りながらも食い下がってくるハイネにアスランは受けてたつとばかりにあえて前に出た。

◇

前後から挟まれる形で攻められるアルテミス。

その戦闘を掻い潜るように数機のモビルスーツが要塞へと近づいていた。

「要塞を視認した。各機、作戦行動に移る」

「了解」

ステルス機能を持った外装を破棄、同盟のカゲロウが姿を見せる。

「第一目標、レクイエム砲塔。第二目標、アルテミスコントロールルーム。第三目標、エネルギープラント！」

全機がX字スラスターを吹かし、アルテミスに取り付く為に一気に加速する。統合軍側はこちらの動きに対応できていない。

このまま取り付けると全員が判断する。

しかし――

「えっ」

一番後ろを飛んでいたカゲロウのパイロットはいきなりの事に呆然とした。

どこからともなく発射されたビームによって先行していたカゲロウが撃墜されてしまったのだ。

「な、何が？」

「馬鹿、ドラグーンだ！ 訓練やったる！」

僚機からの怒声に我に返る。

そして砲台に囲まれない内に離脱を図ると、数発ほど散弾バスーカ砲を叩き込んだ。ドラグーンの対処法の一つが高速で範囲外へ離脱と同時に散弾などの広範囲の攻撃で一気に砲台を殲滅してしまう事だ。

コントロール元である機体への攻撃というのもアリだが、今は姿が見えない。

「敵本体は何処に?」

「……ッ、上だ!!」

声と共にリーダーにも反応する。

甲高い音と共に見上げた先にいたのは——異形だった。

「アレは……何だ?」

大口を開けたように開閉された先端部から見えたのは、巨大な砲口。

光が圧縮されたように砲口に集まり、一瞬の間もなく発射された。

「なっ!?!」

カゲロウのパイロット達は通信する暇もなく、強烈なビームの閃光に包まれた。

咄嗟に盾を構えるも意味がない。

アンチビームシールドはドロリと溶け、ビームを諸に浴びた機体は跡形も残さず消え

去った。

眩い閃光が晴れ、視界が戻った頃にはその場に残るものはなく、物言わぬ異形だけが

その場に佇んでいた。



戦場に行く白い機体アンセム・イノセントガンダムは行く手を阻む敵を打ち倒しながら、アルテミスを目指して歩みを進めていた。

「ムウさんの指揮とハイネの挟撃のお陰か、戦線は安定しているみたいだな」
遭遇したりゲルから発射されたミサイルを機関砲で叩き落としながら、ライフルで敵機を狙撃。

コックピットを貫通されたりゲルはモビルアーマー形態のまま後方に流され爆散した。

さらに接近戦を挑んできたH・アガスティアのライフルをナーゲルリングで斬り裂き、至近距離からのビーム砲で撃破する。

「ん？ 伏せてあつた部隊の反応が消えた……チツ、そう甘くないか」

アルテミスに張り付く予定だった伏兵が消されたとなれば、正攻法で行くしかない。
アストがアルテミスに侵入する為のルートを計算しながら進んでいると、それを阻むように立ち塞がった敵機がいた。

「これ以上は進ませません、アスト」

「……ヴィクトリアか」

目の前に立つユンググヴィから聞こえてきた声にレイシアと話しているような錯覚を覚えながら、アストはビームサーベルを抜いた。

「悪いが行かせてもらう」

「行かせないと言いましたよ」

まるで朝の挨拶でもしているような気軽さでヴィクトリアもまたビームサーベルを構えた。

周囲で起きた爆発を合図に同時に動く。

イノセントとユンググヴィ。

同時に繰り出した斬撃が激突する。

「流石、アストですね」

最初の攻防は相手を傷つける事無くただ弾け合い、二機のモビルスーツはその立ち位置を入れ替える。

「どうしました？ 本気で来ないと私は倒せませんよ」

「ヴィクトリア、お前は一体何者なんだ？」

こうして手合わせすると良く分かる。

ヴィクトリアとレティシアの戦い方は本当によく似ているのだ。

まるで本人と戦っているのではと錯覚しそうになるほどに。

「フフ、気になりますか？　でもそんな事を気にしている暇はないのでは？」

「何？」

そこでアストも気が付いた。

アルテミス前面の隔壁が解放され、無骨な砲塔が顔を見せた事に。

「レクイエムだと!?　狙いはアポロンか？」

だとしても攻撃部隊は事前にそれを計算して射線上には極力近づかないようにしている。

今、撃った所で何の意味がある？

「あれは……」

アストが見たのは戦場の端に居るプレイアデス級。

丁度、レクイエムの射線上に陣取っている。

だが普通の戦艦とは違い、見慣れないものを装備しているのが見える。

艦上部にある円形の物体、それがレクイエムの砲口と呼応するように発光し出す。

「まさか、ゲシユマイデイヒパンツァー!?　不味い、逃げる!!!」

アストの叫びと同時にレクイエムから死の閃光が発射された。

第38話 託されたもの

激突する天使と悪魔。

トライライトフリーダムとベルゼビウトメガイラは高速で動きながら、激突を繰り返していた。

「死ねエエ!!」

エリニスの怒声と共に繰り出された一撃がシールドの上からフリーダムを脅かし、振ったサーベルがベルゼビウトの装甲に傷を刻み込む。

刃を振るう二機はほぼ互角の勝負を演じていた。

マユがフリーダムの機動性で翻弄すれば、エリニスはI・S・システムで強化された反射能力で応戦する。

数合を打ち合いベルゼビウトの異常ともいえる反応にマユは即座にカラクリを理解した。

「これは……あのシステムですか」

かつて同じシステムを使い、マユの猛攻を捌いた男がいた。

そのシオンという男は防戦に回りつつも、C・S・システムを発動させたトワイライトと互角に戦ってみせたのだ。

「あの時は敵が守勢に徹した事で押し切れなかった。でもこの人は——」

エリニスとはシオンとは対極。

防御を完全に無視。

攻撃だけに集中し、結果としてそれが防御の役割を果たしていた。

だが、それは正気の沙汰ではない。

命を捨てる蛮行であり、I・S・システムの恩恵があるからこそ可能な獣の所業に他ならない。

「どうした、熾天使!! そんなものかアアア!!」

搭載された火力をフルに使い、動き回るフリーダムを狙い撃つ。

「ッ、見かけによらず、ビームキャノンは厄介ですね!」

翼を翻し、ビームの火線を回避したマユは負けじとビーム砲を発射する。

ベルゼビュートは砲戦仕様の機体ではないとはいえ、その火力は非常に強力。

直撃でも受けようものなら、それだけで致命傷だ。

距離を取り、相手の攻撃をかわしながらの砲撃戦。

この火線の撃ちあいに痺れを切らしたのはエリニスだった。

「チョロチョロと逃げ回ってエエ!!」

二つのビームクローウを分離させ、左右から挟むようにフリーダムを追い詰める。

「この、カニモドキ!」

マユは思わず毒づきながら光爪をブルートガンで弾き飛ばし追撃のビーム砲を大きく距離を取って回避した。

その隙に距離を詰めたベルゼビュートの大鎌が襲いかかる。

「無様に逃げ回るだけか! いつ天使からネズミに鞍替えした?」

「距離を詰められては不利!」

ベルゼビュートを蹴りつけ、フルバーストを叩き込む。

「そんなもの!!」

多重の砲撃を潜り抜け、再び距離を詰めたエリニスは大鎌の一撃を上段から振り下ろした。

「無様だな、ネズミ!」

「いちいち煩い!!」

嘲りと挑発の混じったエリニスの声にマユは怒鳴り返ししながら大鎌を受け止めた。

ビーム刃を弾き飛ばしたフリーダムは今まで以上にスピードを上げ、ビームサーベルを上段から振り下ろした。

「ハッ！ 安い挑発に乗って、馬鹿な奴!!」

速度の乗った斬撃をエリニスは鼻で笑いながら肩のシールドで受け止めると、腰からビームクローを発射する。

至近距離からの一撃がシールドをフリーダムの腕から吹き飛ばし、体勢を大きく崩す事に成功した。

「これで止めだアアア!!」

エリニスはニヤリと笑みを浮かべながら体勢を崩したフリーダムに大鎌を振り上げた。

しかし――

「何だ?!」

大鎌はフリーダムを捉える事ができず、さらには柄の部分が切り飛ばされてしまった。

「ば、馬鹿な」

捉えたと思ったフリーダムの機影は幻惑だった。

「挑発に乗ったのは貴方の方です!」

あえて懐に飛び込ませ、隙を作る。

そんなフリーダムの策に嵌められた事に気がついたエリニスはあまりの屈辱に激昂する。

「貴様アアア!!」

「先程の言葉をお返しします。安い挑発に乗って!!」

マユは持ち替えた斬艦刀を振るいベルゼビウトの装甲を切り裂くと、そのまま肩へと突き立てた。

「ぐうう、おのれ! おのれエエエ!!」

肩に突き刺さった斬艦刀を忌々しげに睨みながら、エリニスは衝撃を噛み殺す。

一旦距離を取ったマユは油断なく再びビームサーベルを抜いた。

仕切り直しと睨み合う二機。

そこで予期せぬ警報が鳴り響いた。

「ッ!?!」

それはレクイエム発射の警報だった。

しかも二機が居たのは丁度、レクイエムの射線上。

「不味い、間に合って!」

「逃げるか、熾天使!!」

「構ってなご！」

マユは目の前にいる敵に蹴りを入れ、全力で離脱を試みる。

全開にしたスラスタ。

C・S・システムの出力も加えて今までとは比較にならない速度で上昇した。

次の瞬間、眩い死の閃光がマユの視界を埋め尽くす。

「ぐうううつつう」

激しい光がフリーダム of 装甲を焼いていく。

まるで皮膚が剥がされるように。

両手をクロスさせビームシールドを展開し、レクイエムの余波から逃れるべく距離を

稼ぐ。

閃光が消え、残されたものは無惨な破壊跡。

そこにはレクイエムの余波を受けたベルゼビュートの姿もあつた。

装甲は剥がれ落ち、幾つかの武装を失っている。

遠目に見れば大破したようにも見えるだろう。

だが、ベルゼビュートは未だ健在。

戦闘も可能だった。

しかしその影響は確実に機体を蝕み、コックピット内にも達していた。

「ぐあああ!! あ、頭がアア!!」

エリニスの脳裏に見たくも無い光景が浮かびあがってくる。

それはリース・シベリウスのもの。

忌々しいレティシア・ルティエンスに破れ、地を這う事になった惨めな負け犬。

「くそ、くそ、くそ!! わ、私はお前とはアアア!!」

《エリニス、聞こえているか?》

痛みから逃れようとコックピット内で暴れるエリニス。

彼女の耳には近くまで来ていた味方の声すら聞こえていない。

その時、反応したモニターに映し出された機影に目を奪われる。

白いガンダムと相対する機体。

「あ、ああ、アイツは……」

間違いない。

アイツこそ自分が自分をこんな目に合わせた元凶。
奴がリース・シベリウスを倒さなければ――
そもそもこの世に誕生しなければ――

私がこんな目に遭わされる事はなかったのだ!!

「そうだ。お前の所為だ！ レテイシアアア!!」

エリニスの咆哮にシステムが再起動したベルゼビュートは動く腕でビームソードを抜き放つ。

《エリニス!? どこに行くつもりだ、一旦帰還しろ!》

雑音は聞き流す。

その眼には映るのは見つけた獲物のみ。

故に気がつかない。

ベルゼビュートに仕掛けられた暴走を抑えるプログラムが破損している事に。

そして攻撃しようとしている相手が、味方の識別信号を出している事も。

何よりも、彼女が憎むべき相手ですらない事にも。

エリニスは終ぞ気がつかないまま、二機の戦場へと乱入を果たした。

◇

宇宙を裂く眩い閃光。

プレイアデス級に反射された光はまるでナイフのように鋭利な切っ先を同盟軍艦隊の方へ向けていく。

「スラスター全開、回避!!」

イザークの叫びにフォルセティは精一杯の動きで閃光を躲す軌道を取った。

「ぐっ」

無茶な機動を取ったせいでフォルセティのブリッジに大きな振動とGが襲いかかる。

そのお陰か、死の閃光は戦艦に被害を与える事無く、通り過ぎて行く。

「状況知らせ!」

「システム障害発生! 右舷主砲、ミサイル発射管、発射不能!」

「復旧作業、急がせろ! 陣形を立て直す、各艦に通達!!」

「了解」

指示を飛ばしながらイザークは戦域図を見つめた。

すでに伏兵として伏せていた部隊は全滅している。

このまま力押しではアルテミスを落とせる可能性は低い。

「……体勢を立て直すべきか」

そう判断せざる得ない状況に歯噛みしながらイザークは通信機へ手を伸ばす。

そうして発せられたフォルセティからの撤退命令。

最前線にいたムウ達の耳にも届いていた。

「フウ、フォルセティは無事だったみたいだな」

器用にアカツキのドラグーンを操り、敵部隊を迎撃していたムウは安堵したように息を吐く。

「でもまだ油断できませんよ」

「ええ。結局、伏せていた部隊はやられたみたいだし。フラガ一佐、退きましよう」

「だな。俺達が殿を務める。頼むぞ、お譲ちゃん達！」

「了解」

左右についていたアイテルとインパルスが敵先方を斬り伏せると、すかさずアカツキの的確な射撃が敵陣形を崩す。

「仕切り直しか」

黒いアークエンジェル級の姿は確認されたものの、未だクルーゼが出てくる気配はな

い。

何か嫌な予感がする。

今尚奴は牙を研ぎ、虎視淡々とこちらを狙っているような感じがするのだ。

「いや、今は戦闘に集中するか」

ムウは釈然としないものを感じながら、アルテミスを一瞥すると撤退する味方を援護する為、戦闘に集中する事にした。

◇

レクイエムの砲撃は射線上に配置されたプレイヤーアデス級のゲシユマイデイヒパンツアーによつて歪曲され、同盟軍艦隊の方へ一直線に進んでいく。

その光を見送ったアストはすぐさま艦隊の安否を確認する為、検索を掛けた。

「フォルセティは……無事だな。だが艦隊の陣形が崩されてしまっている」
すぐにも援護に向かうべきとイノセントは踵を返す。

しかし周囲から撃ち込まれた無数のビーム砲が行く手を阻んだ。

「私を忘れてもらつては困ります、アスト。それに話の途中だったでしょう？」

「ツ、ヴィクトリア！ わざわざ追ってくるか！」

撃ちかけられたドラグーンを器用に躲し、ビームライフルで狙撃する。

数発のビームが飛び回る砲台を叩き落とし、そこに出来た穴から離脱を図った。

「ドラグーンを落とすだけでも厄介ですね。しかし逃がしません」
「ッ!？」

狙い撃つスナイパーライフルの一撃。

正確に狙いを定めた攻撃にアストは即座に機体を下降させた。

頭上を通り過ぎるビームに冷や汗を掻きつつ、連射されたスナイパーライフルを捌いていく。

「チッ!」

今まで戦った誰よりも正確な射撃に舌打ちしながら、こちらもビームライフルを発射した。

「それでは当たりませんよ」

アストの反撃を余裕で捌いたユングヴィは的確な射撃でイノセントをドラグーンの包囲網へ誘導しようとしてくる。

さらに発射された三連装ビーム砲が機体を掠め、アストから余裕を奪っていく。

「囲むつもりか」

レティシアのドラグーン操作と同様にヴィクトリアのソレもまた一級だ。

包囲されれば動きが鈍り、穴を作って離脱を図ればスナイパーライフルの的になる。

「つまりヴィクトリアを何とかしないとイケない訳だ」

アストはユングヴィを牽制しながらさらに速度を上げ、ドラグーンの包囲網から抜け出そうと試みる。

「逃げられません」

先ほどと同じだ。

意図的に作った穴から離脱を図るイノセントにスナイパーライフルの一撃が襲い掛かる。

だが、それはアストの狙い通り。

「そう簡単にやれると思うなよ!!」

イノセントが宙返りすると板状の装備であるフリージアが横にスライド、瞬時に光の膜を生みだしビームを弾いた。

それだけに留まらず、背中から伸びたビームソード『ワイバーン』がユングヴィに伸びていく。

「なっ!?!」

意表を突かれたヴィクトリアは反応が遅れ、スナイパーライフルを斬り裂かれてしまった。

「くっ、私からスナイパーライフルを奪うとは……流石」

「まだまだだ!」

スナイパーライフルを失ったユングヴィの隙を突き、距離を取りながらバズーカ砲を発射する。

弾けた砲弾が展開されていたドラグーンを吹き飛ばし、同時に構えた高エネルギー束ライフル『アガートラム』がすべての砲台すべてを薙ぎ払った。

「ドラグーンを!?!」

「これでそちらは丸裸だ!」

しかしユングヴィは両手に対艦刀を構え、イノセントを逃がすまいと前に出た。

「本当に流石ですね、アスト。私に剣を抜かせるとは。でも接近戦も苦手じゃないんですよ」

「だろうな」

二刀の対艦刀をシールドで防御、こちらもビームサーベルで斬りつける。

「ヴィクトリア、お前は一体?」

「そればかりですね。……まあ、いいですか」

「何?」

予想外の言葉にアストは少し驚いたように声を上げるとヴィクトリアの楽しげな声が聞こえてきた。

「フフ、昔々月に住まう二つの夫婦が居ました。片方がルティエンス、もう片方をラン

ゲルトと言います」

「ッ!?!」

月に住まう彼らは別段特別でもない、普通の家族。

お互い出会ってすぐ職場や家も近い事もあり、彼らは交流を深め、悩んでいた事も打ち明ける程に意気投合するまで時間は掛からなかった。

彼らの悩み、それは子供の事だった。

生まれる子供に遺伝子操作を施すかどうか、つまりはコーディネイターにするか否かである。

当時はすでにコーディネイターに対する差別は横行し、根深い対立の構図は出来上がっていた。

しかし子供の将来を考えるならば――

幸いというか彼らの住んでいたコペルニクスはコーディネイターに対しても寛容だった事もあり、悩んでいた。

そんな時だ。

彼らの前にソイツが現れたのは。

「それがヴェクト・グロンルンドという名前の研究者です」

「ヴェクト・グロンルンド!?!」

「ええ。彼が私達を生み出した」

ヴェクトは彼らが務める研究所の関係者で同じ職場に勤務する同僚であるという事が彼らの警戒心を薄めていた。

言葉巧みに誘導され、二つの夫婦は自身の子供をコーデイネイターとする事を決めた。

それがヴェクトの目的だったとも知らずに。

「何の為に……目的は何なんだ？」

アストの予想が悪い形で当たった事に歯噛みしながら、憤りを押し殺して続きを促す。

「彼自身の目的は知りませんが、私達が生み出された理由は簡単です。『能力移植』の実験ですよ」

「能力移植？」

「ええ。優れた人物の能力を他者へと移植する研究。それが私達が生まれてきた理由です」

アストは自分の中に浮かび上がってきた考えに戦慄する。

他者の能力を移植する。

言うのは簡単だが、現実には口にする程容易い話ではない筈。

だが、もしもそれが可能なら——

兵士に掛かるコストや時間も削減でき、戦果も得られるなら、軍にとってこれほど美味しい話はない。

そこでアストの脳裏にもう一つ浮かび上がってきたものがあつた。

それはイレイズMk—IIIのパイロットの事。

あのパイロットは確かにかつて倒した男と瓜二つの技量を持ち合わせていた。

彼もまた——

そして目の前にいるヴィクトリアもまた同様に、レテイシアと瓜二つ。

「あのパイロットは……そしてお前もレテイシアの能力を移植された——」

「その通りです。レテイシア・ルテイエンスは『能力移植』の雛型であり、そして私はその試作品の一つです」

確かに彼女達はあまりに似すぎていた。

容姿だけではなく、持ちうる力や戦い方も含めて類似点が多すぎた。

だが、それもレテイシアの能力を移植されていたというなら納得できる。

「容姿まで似ているのは？」

「単純な話です。私は能力だけでなく、容姿もまた似せて作られただけの事」

淡々と語るヴィクトリアにアストは碎けるのではと思える程に強く歯を噛みしめる。

「……ヴェクト・グロンルド！ やはり奴は」

生かしておけないと冷たい殺気を放つアストと正反対にヴィクトリアは穏やかな笑みを浮かべていた。

「貴方を——」

ヴィクトリアの言葉の続きが紡がれようとしたその時、警告音が響き渡る。

「レティシアアアア!!」

「あれは……」

「ッ、リースか!？」

傷ついたベルゼビュートが二機の間割り込んできた。

狙うは味方である筈のユングヴィ。

二機は飛び退くように距離を取り武装を構えた。

「何時からリースはお前の敵になったんだ?」

「リースではなくエリニスです……ずっと前からですかね。彼らはずっと私やレティシアを狙ってましたからね」

「どういう事だ?」

「さっき話した通りですよ。私達は言わば『能力移植の成功体』、貴重な資料ですからね」

「死ねエエ!!」

ベルゼビュートは握ったサーベルを正眼に構えて突撃する。

「その割に死ねとか言ってるが?」

「ハア、知りませんね」

「そうかい」

アストが冷たい瞳で向かってくるベルゼビュートを睨みつける。

「……リリース、もう何も語る事はない。此処で消えてもらおう」

しかしアストが動き出す前に、悪寒のような者が体を走り抜けた。

考える前に動いたアストはイノセントを下がらせる。

すると強力なビーム砲がイノセントの居た空間を焼き尽くしていった。

飛び退くイノセントへ無数のドラグーンが囲むように配置され、ビームの雨を降ら

す。

その数はユングヴィの比ではない。

「次から次へと!!」

シールドでビームを防御しながら、周囲に向けた視線の先にいたのは伏せていた同盟

の部隊を瞬殺した『異形』だった。

そのコックピットに座るはNo.1。

何時も通りの冷静な表情のままイノセントとユングヴィを睨みつける。

「アスト・サガミか。丁度良い、カース様の障害はすべて排除する。エリニス、お前は下がっている、ヴィクトリア・ランゲルトの捕獲はこちらでやる」

「うるさい、黙れ！ 私は殺すんだ、レティシアを!! 今度こそ、殺す!!」

「やはり……暴走したか、愚か者。お前にその機体を預けた事は間違いだった」
イノセントの方に視線を戻すと彼の機体は未だに健在。

無数のドラグーンから放たれたビームの雨の中を巧みに動いていた。

まるで砲台の動きを把握しているのではと錯覚するような、そんな軌道を取りながら。

「エリニス、貴様の処遇は後だ。今はアスト・サガミの始末を優先する」

No.1がイノセントの相手をし始めたその直ぐ傍でユングヴィとベルゼビュートが睨み合っていた。

「錯乱しましたか、エリニス。しかもそんな満身創痍で！」

「私を舐めるなアアアア!!」

作動したI. S. システム。

破損しリミッターが外れた状態となったベルゼビュートはいつも以上の精度と力をエリニスに与えた。

残ったビームクロウが切り離され、四方からユングヴィを狙い撃った。

「確かに速い。しかし飛び回るだけの爪など!」

「舐めるなど言った筈だ!!」

使えない片腕を引き千切り、ユングヴィに向けて投げつける。

投擲された腕がビームキャノンによって狙撃され、爆発と共にユングヴィを吹き飛ばした。

「ぐううう!」

「ハアアアア!!」

そのまま突撃したベルゼビュートはユングヴィを抱き込むように胴体に腕を回した。

「これで逃げられないだろう!」

「くっ」

振り払おうにもベルゼビュートは損傷しているとは思えない力でユングヴィを拘束し、脱出できない。

その様子を見たNo.1は千載一遇の機会に再びエリニスに呼びかけた。

「エリニス、良くやった、そのまま動くな。ヴィクトリア・ランゲルトを捕獲したまま撤退する」

「私はこいつを!」

「黙れ！ カース様を失望させたいのか!!」

No. Iはイノセントからユングヴィに優先を変えると、鹵獲する為のワイヤーを射出する。

ベルゼビユートごと押さえ込まれたユングヴィは片腕を除き、完全に動けなくなってしまう。

「これで動けまい。カース様の下に来てもらう、ヴィクトリア・ランゲルト。お前にはレティシア・ルティエンスの代わりになってもらわねば。そうでなくてはあの男が煩い」

No. Iの言葉にヴィクトリアはやはりという思いを抱く。

「……冗談でしょう。そんな事になるくらいなら死んだ方がマシですね」

ヴィクトリアは動く腕で対艦刀を逆手に構え、そのままユングヴィの胴体目掛けて振り下ろした。

刃はそのまま胴体を貫通し、ベルゼビユートごとユングヴィに致命傷を与えた。当然、ヴィクトリアの座るコックピットにも。

「貴様、何を!？」

「ぐっうう、い、言った、でしょう、死んだ、方が、マシだと」

「おのれエエ、れ、レティ、シアアアア」

組みついていたベルゼビュートも損傷は負っているようだが、コックピットは外れているようでエリニスの恨みごとが聞こえてくる。

「……ヴィクトリア、自ら命を断つか。なら死体だけでも回収させてもらう」

「ヴィクトリア!!」

「アスト・サガミ!?!」

ドラグーンの檻を抜けたイノセントが高エネルギー収束ビームライフルで攻撃してくる。

「なんて強力な砲撃だ」

「まだまだ!」

高エネルギー収束ビームライフルの一撃にたまらず距離を取るNo.1。

そこを狙い背中から放出されたフリージアがワイヤーを引き千切り、同時に異形目掛けて攻撃を開始する。

「ドラグーンだ?! ツ、ベルゼビュートを失う訳にはいかない」

No.1は無防備なベルゼビュートをワイヤーで回収すると、すぐさま戦闘宙域から離脱していった。

「ヴィクトリア!」

アストは対艦刀の突き刺さったユングヴィにイノセントを近付ける。

ユングヴィの装甲からは色が消え、その腹部には深々と刃が突き刺さっていた。

「爆発の心配はないようだが……これでは」

アストはユングヴィのコックピットへ取りつくくとハッチを開けようとスイッチを押す。

だが、ハッチは歪み僅かに隙間が開く。

出来た隙間から見えたのは半身を押しつぶされたヴィクトリアの姿だった。

「……あ、ア、アスト、ですか？」

致命傷だと瞬時にアストの理性が結論を下す。

しかし、ヴィクトリアの姿がレティシアとダブリ、自分でも驚くほど憤りが湧き上がってくる。

「フ、フフ、貴、方が、そこまで、怒ってくれるとは、思いません、でしたよ」

「何で自分から命を捨てるような真似を」

「……あんな、男の、モル、モットなど、ごめんだった、だけです」

血に濡れたヘルメットの下で笑みを浮かべたヴィクトリアは手に持ったディスクを差し出してきた。

「ぶ、無、事だった、のは、運命、なんで、すかね」

「これは……」

「私、は貴方のようになりた、かった。決めら、れた運命に、抗う、貴方の、ように。男の名前を、名乗っていた、のも」

アストは伸ばされたヴィクトリアの手を握る。

「……貴方に、会えて……看取ら、れるなら……」

「ヴィクトリア！」

「もう……私のような……生まれ、ない……世、界に……」

そこで握っていたヴィクトリアの手から力が抜けた。

自分でも想像以上のショックにアストは拳を握りしめ、ユングヴィの装甲を殴りつけた。

「くそー！」

相変わらず涙は出ない。

しかし脳裏にレティシアの面影が脳裏をよぎる度に拳に力が籠る。

彼女の姉妹とも言える存在を失った事にアストの胸中には言いようのない憤りが燻っていた。

◇

アルテミス攻撃隊である同盟艦隊が一時撤退し再攻撃の機会を窺っていた頃、アポロン要塞でも戦闘が開始されていた。

前面に出ているのは高機動兵装『スレイプニル』を装着したユニバースフリーダム、ジャステイス、デステイニーである。

持ちうる高火力を用いてアポロンの戦力を薙ぎ払い、戦局を有利に進めようという判断だった。

しかし、状況はそう簡単ではなかった。

「くそ、アイツらー！」

「落ちついてください、シンさん。ここで火力を減らせば向こうが一気に攻勢に出てきます」

「くっ」

同盟軍はアポロンに攻め入る事が出来ず、スレイプニルの砲撃で敵部隊を押し留めている状態であった。

その理由が横一列に並ぶように配置されたモバイルアーマー『ザムザザー』の存在である。

こちらの遠距離砲撃をザムザザーの陽電子リフレクターによって防御されてしまっていた。

「接近すればあんな連中どうにでもなるのに！」

「それはニーナとアオイに任せるんだ。僕達は此処で敵を釘付けにする！」

「はい！」

スレイプニルの砲撃が戦場を埋め尽くし、ザムザザーの陽電子リフレクターがそれを防ぐ。

その火線に紛れ敵陣へ二機のモビルスーツが斬り込んでいた。

ユニオン・エクセリオンとリベルテ・ストライクである。

「ハアア！」

接近したニーナが迎撃のモビルスーツを斬艦刀で斬り伏せ、ビームライフルで敵陣形を崩す。

「ミナト少尉！」

「了解！」

ウイングスラスターを吹かし、敵の攻撃を潜り抜けると高エネルギー収束ビーム砲『アンヘル』を両手に構えて発射した。

「どけ！」

アンヘルの射線上にいた敵機は抵抗する事も出来ず、ビームに呑み込まれ消滅する。その間にビームサーベルを構えたエクセリオンはザムザザーの懐へ飛び込んでいく。

地球軍に所属していただいただけあってアオイはザムザザーを良く知っている。当然、その弱点もだ。

「ここまで接近すれば!!」

ビーム砲をバレルロールで回避、そのままビームサーベルを一閃。

陽電子リフレクター発生装置が破壊され、バランスを崩したザムザザーに至近距離からアンヘルを叩き込み、撃破した。

「これで四機!」

「まだまだ居ますよ」

「分かっています。俺達がザムザザーを排除しなきゃ、敵にダメージが与えられないんだ」

「そうですね、行きましょう!」

アオイは落ちつけるように呼吸を整えると次のザムザザーに向けてニーナと共に攻撃を仕掛ける。

しかしそれでも状況は膠着状態。

いや、このままではいずれ同盟側が劣勢に立たされる事は誰の目にも明白。

それは停戦派議員を連れて突入の機会をうかがっていたセレネの眼から見ても同じだった。

「このままでは不味いな」

「しかし、我々に出来る事は無い。彼らを信じる他は……」

シャトルのコックピットでレイとアルノルトの会話を聞きながら、セレネは自身の端末を見た。

そこにはある人物から送られてきたデータが表示されている。

何故、これが自分に送られてきたか不可解ではあるが――

いや、それは後だ。

まずは此処をどうにかする方が先。

セレネは注意深く戦場の状況を確認する。

「行きましょう」

「中尉!？」

「同盟の戦闘目的は私達が月に辿りつくまで、統合軍を引きつける事です。時間が経てば経つほど同盟が不利になる」

「しかし、無理やりに進めばルートから外れる事も」

「私に考えがあります……賭けですが」

セレネはシャトルの後部に目を向けた。

この状況を打開する為に。

第39話 瀬戸際の光明

同盟と統合軍がしのぎを削るアポロンの戦局。

状況は一進一退の膠着状態へと陥っている。

その様子を指揮官であるファウストは鋭い目付きのまま、司令室のモニターで眺めていた。

「あの装備……同盟め、まだあんな手札を残していたとはな」

スレイプニルの思った以上の火力に、思わず歯噛みした。

コロニーすら破壊するあの火力は明らかな驚異だ。

しかし対策は出来ている。

あのザムザザーの部隊はスレイプニルの存在を抑える為に配備したもののだから。

「しかし思ったよりも使えるじゃないか、ザムザザーは」

巨大モビルアーマーなどモビルスーツを相手にするには前時代的な兵器だと思っ
いたが。

どんなものでも使いようだという事か。

「だが、アレでは何時までも持つまい」

「イスラファイール」

いつの間にか隣に来ていたイスラファイールの視線の先。

戦況を映し出す巨大モニターに映っているのは同盟のモビルスーツであるユニオン・

エクセリオンとリベルテ・ストライクがザムザザーを次々と撃破していた。

アレではいつかスレイプニルの砲撃を防ぎきれなくなるだろう。

「手は打ってあるさ。それよりそちらの準備はどうなんだ？」

「もうすぐ完了する。準備ができ次第、出撃させるつもりだ」

ファウストが手元のキーを操作すると椅子に設置されたモニターに映像が映し出された。

格納庫に立つ三機のモビルスーツ。

内一機はファウスト専用のもの。

そして隣に立つ二機は色を持たず灰色の装甲を晒している新型機だった。

「お前も戦場に出るつもりか？」

「そうなった場合は躊躇うつもりはない。戦場で怯む指揮官に部下はついて来ないものだ」

「勇ましいいな」

「そう言うお前はどうかんだ？」

「軍の指揮を執っているのはファウスト・ヴェルンシュタインだ。出番を奪うつもりはない。期待してもいいんだろう？」

去つていくイスラフィールの後ろ姿を見つめていたファウストは自信に満ちた声で応じた。

「無論だ。俺は勝つ、必ずな」

ファウストの決意に呼応するように戦況もまた変化しようとしていた。

◇

アポロンを攻める同盟軍の要はスレイプニルの強力な火力を用いた砲撃と数機の本ビルスーツによる奇襲攻撃だった。

現状、それが功を奏し、同盟軍は統合軍と一進一退の攻防を繰り返していた。しかし状況は変化する。

スレイプニルによる砲撃を阻むように一機の本ビルスーツが乱入してきたのだ。

「あれはデステイニー!？」

シンの直上から突っ込んできたディアドコスがすれ違い様にスレイプニルの砲塔を

切り捨てた。

さらにビームライフルの追撃がスラスタ部分に直撃する。

「ぐっ、くそ！ アレがルナの言ってた奴かよ!!」

下方に逃れた敵にビーム砲を撃ち込むが速度を上げたディアドコスに振り切られてしまう。

「速い!」

逃がさないと発射した対艦ミサイルも機関砲によつてすべて迎撃され、さらに速度を上げて突っ込んでくる。

「スレイブニルを装着したままじゃ、あの速度に対応できない!」

シンはスレイブニルを。パージすると斬艦刀を抜き、ディアドコスを迎え撃つ。

「ハアアアア!!」

激突する斬艦刀と対艦刀。

互いの刃は盾に阻まれ、すれ違う度に火花を散らす。

「ここでお前と決着をつける、シン・アスカ!」

「リベルト・ミエルス!!」

シンの闘志に応えるようにリベラシオンデステイニーが光の翼を展開、そしてディアドコスもまた翼を解放する。

黒き翼と紅き翼が鏝迫り合いながら、戦場の真っ只中へ突入していく。

「シン!？」

「ッ、キラ、前を!!」

アポロン要塞から出撃してくるのは黒い巨体デストロイMk-IIだ。

数機の巨体が戦場へ躍り出てくる。

「アレが出てくると不味い」

デストロイは機動性こそモビルスーツの劣るが、その火力は折り紙付きだ。

砲撃戦になれば勝ち目がなくなる。

「私が行きます。キラはミナト少尉達の援護を!」

「了解!」

デストロイはジャステイスに任せ、キラはザムザザの排除に向かったアオイと二ノの援護に向かう。

敵をロックしフリーダムとスレイプニルの火力を解放する。

「いけ!!」

通常のフルバーストとは比較にならない圧倒的な砲撃が敵陣を薙ぎ払っていく。

「二ノナ達のお陰で壁が薄くなってる。これなら!!」

後から続く味方の援護には十分だろう。

戦場はすでに敵味方入り乱れた、乱戦になっていた。

「味方も巻き込みかねないな。スレイプニルの砲撃もここまでか」

そのまま砲撃を継続していたキラだったが、戦場の状況を把握しスレイプニルをパージした。

「行くぞ!」

翼を広げたユニバースフリーダムが戦場へと飛び込んでいく。

「まずは!」

キラが最初に目を付けたのは中央からこちらに攻め入ろうとしている進撃部隊だ。

「数が多い。あれを進ませる訳にはいかない!」

速度を上げたフリーダムは敵部隊の先頭にいたリゲルをビームサーベルで切り捨てた。

「フリーダムか!」

「奴を行かせるな! ここまで落とせ!!」

リゲルやジンIIは即座に連携を取りビームライフルを発射する。

見事な連携。

しかしそれすらも避け続けたフリーダムは直進しながら、サーベルを構えた。

「ハアアア!!」

すれ違い様に振るわれる斬撃。

左右に煌めいた光の軌跡がリゲル、ジンIIの急所を抉り、瞬時に撃破して見せた。さらにビームライフル、レールガン、斬艦刀。

武装を器用に使い分け、敵モビルスーツを次々と落とすしていく。

「後はモビルアーマーだ！」

フリーダムの背中からドラグーンが射出され、部隊背後に控えていたザムザザーを囲むように砲撃が開始される。

「ドラグーンは陽電子リフレクターでは防げない！」

ザムザザーに装備された陽電子リフレクターは一方だけ。

死角から攻撃できるドラグーンを防ぐ事はできない。

砲台から発射されたビームがザムザザーの撃ち抜き、大きく爆発を起こす。

その隙に懐に飛び込んだキラは斬艦刀を敵機の中央に突き差した。

「落ちろ！」

突き刺さった斬艦刀を振り抜き、ザムザザーを叩き斬る。

そして全砲門を構え、敵部隊をロック、一斉に解放した。

「いけえええ!!」

フルバーストが突き刺さり、敵部隊を成す術無く吹き飛ばす。

砲撃が敵を撃破していく中で正面から姿を見せた機体にキラは思わず顔を顰めた。

「アレは」

見覚えがある。

背に特徴的な二対の羽に二つの砲塔、さらに腕に装着された二本の対艦刀。

ヤキン・ドゥーエ戦役で猛威を振るった機体に酷似していた。

GAT-X147 『ヴァニタス・ゼニスガンダム』

ヤキン・ドゥーエ戦役で投入されたゼニスガンダムの正当後継機。

今まで開発された機体と鹵獲したアルカンシエルのデータを買い、各武装の高出力化に加え、最新の技術を用いた高性能機に仕上がっている。

「……ゼニスガンダム」

悠然とした動きではあるが隙がない。

キラはスレイプニルを切り離し、ビームサーベルを抜くと即座に斬りかかった。

先手必勝。

しかしゼニスも同じ事を考えていたのか、全く同時に斬り込んでくる。

「ッー」

ゼニスの斬撃を紙一重で避け、ビームサーベルを袈裟懸けに振るう。

だがそれすらも避けて見せたゼニスは対艦刀で反撃してくる。

横薙ぎの一撃を宙返りで躲したキラは逆さのままレールガンを叩き込んだ。砲弾の直撃を受け、ゼニスは体勢を崩す。

「ズン！」

出来た隙を突きキラはビームサーベルを振り抜いた。

だが、驚くべき反応でゼニスは自らのスラストターを噴射し、寝そべるようにサーベルの軌跡を回避する。

「ッ!？」

さらにそのまま縦に一回転し、ユニバースフリーダム懐に蹴りを入れた。

「ぐっ、この動き！」

蹴りを腕で止め、衝撃を最小限に抑えようと飛びのくように二機が距離を取った。

「……どうした戦神。動きを止めるとはお前らしくもない」

「……君がアストが言っていたジェラルル・ファイルオル大尉か？」

「何を言い出すかと思えば……俺は『シリル・アルフォード』だ！」

ゼニスは加速しながら肩に装備したビームランチャーを構えて突っ込んでくる。

「君こそ何を言っている!？」

砲撃を上昇して回避したフリーダムはビームライフルを発射しながらゼニスを牽制する。

「シリル・アルフォードはもうとつくに死んでいる!!」

「戯れ事を!」

フリーダムを物ともせず距離を詰めたゼニス再び対艦刀を振るう。

強烈な斬撃をシールドで止めたキラは困惑と理解できない不気味さを覚えていた。

確かにジェラールはアストの言っていた通りシリル・アルフォードによく似てはいる。

しかし別人だ。

シリル・アルフォードの力量は良く知っている。

ヤキン・ドゥーエ戦役で最も多く鎬を削った相手だから。

故に断言できるのだ。

アレは違うと。

「……もう一度だけ言う。君は何を言っている?」

「信じられないというなら、貴様を倒す事で証明してやる! 俺が『シリル』であると

な!!」

力任せの一撃がフリーダムを弾き飛ばし、再び距離を詰めたゼニスは対艦刀を振り下ろした。

「そうか。なら僕も!」

対艦刀を迫り出した腕部ナーゲルリングで受け止めたフリーダムは反撃とばかりに斬り返した。

「死人に付き合っている暇はないんだ!!」

「ウオオオ!!」

狂気すら滲ませる咆哮を発しながら突撃してくるゼニスキラは真正面から迎え撃った。

◇

アポロンの戦場は戦艦や特殊兵装による砲撃戦からモビルスーツ戦へと移行した。

各エース達もそれぞれの敵を相手にし、先行して敵を叩いていたアオイたちの前にも新たな敵が姿を見せていた。

「アレは……」

ザムザザー狩りを進めていたアオイの前に姿を見せたその機体に思わず操縦桿を握る手に力が籠る。

「ニーナさん、此処は俺に任せてザムザザーをお願いします」

「少尉？」

「アレは俺がやります」

アオイの固い声に何かを感じ取ったニーナはそれ以上は何も言わず、ザムザザーの方へ向かっていく。

意外にも敵はリベルテストライクへの追撃は行わず、エクセリオンの方だけを警戒している。

「よりによって、またその姿を見るなんて」

GAT-X004b 『アンフェール』

ユニウス戦役時に鹵獲されたアルカンシエルをベースに開発した新型モバイルスーツ。

新型機の開発プランのデータを混ぜ合わせ、火力、機動性、操作性、すべてを強化、さらにストライカーパックを装着する事も可能であり汎用性も高い機体に仕上がっている。

「アルカンシエルの後継機」

外部装甲が排除された所為か依然と比べて全体的にスマートでシンプルな印象を受けた。

幾つか武装は変更されているようだが、かつてアオイが搭乗した事もある機体だけにその性能は折り紙付きだ。

「保守派が開発したのか。それとも統合軍か……どちらにしても厄介だな」

性能を知っているが故にアオイは警戒感を滲ませる。

だが、そんな事はお構いなしでアンフェールはビームサーベル片手に突っ込んでくる。

「ッ!？」

いきなりスラスター全開で間合いに踏み込んできたアンフェールの一撃に驚きながらも眼前で受け止めたアオイは負けじとビームサーベルを抜く。

「俺だって負けられないんだよ!!」

背中中のウイングスラスターを吹かし、アンフェールの斬撃を押し返すと、そのままシールドで突き飛ばした。

アオイはその勢いに任せて攻勢に出る。

肩のマシンキャノンで牽制しながら収束ビーム砲を発射する。

空間を焼き払う強力なビーム砲を流星にアンフェールも警戒していたのか、即座に距離を取った。

「そっ!？」

それを予測済みだったアオイはもう一丁の収束ビーム砲でアンフェールを狙撃する。

しかしアンフェールは装甲の隙間から放出されたミラージュ・コロイドでアオイの照準を僅かに乱し、さらに想像以上の機動性をもってビーム砲を躲してみせた。

「何?! この動き……いや、まさか。何にしろ、命知らずかよー!」

ビームの周りを回転しながら迫ってくる黒いガンダムにアオイは戦慄しながらも、敵機の攻撃を上昇して回避する。

そこに狙いを付けたアンフェールはビームライフルとは別の武装に持ち替え、こちらに照準を向けた。

「まさか……『アンヘル』!?!」

アンフェールもまた収束ビーム砲を構えてエクセリオンを狙い撃ちにしてきた。

「くそー!」

横つ跳びでビーム砲をやり過ぎす、エクセリオン。

その隙に距離を詰めてきたアンフェールが左腕を振り上げるとシールドの裏側に内蔵されていたパーツが射出され、巨大な爪と化しエクセリオンに襲いかかる。

「チツ、新装備か!」

ドラグーンシステムの応用だろう。

射出されたパーツがビームを発生、大きな爪を形成しているのだ。

振りかぶられた爪をビームライフルで迎撃するも、すべて弾かれてしまう。

「ビームシールドと同じ特性を持っているのか!」

ならばとビームサーベルで巨大な爪を受け止めると激しい稲光が発生する。

その光に照らされながらアオイは自分の中に疑念が生じ初めていた。

先ほども思った事だがアンフェールのパイロットはエクセリオンの動きを予測したような攻撃を見せていた。

W・S・システムに連なるシステムを搭載してこちらの動きを読んできたのかもしれないが、それにしても読みが的確で癖すら見抜いていたように思う。

「このパイロットは俺を知っている？」

光爪を弾き飛ばし、確かめるようにビームライフルを発射した。

それを『予想通りの動き』で避けたアンフェールは『思った通り』に接近戦を挑んでくる。

「お前はやつぱり……」

思い描く動きと敵の動きが一致する。

やはりという思い。

これまで一緒に戦ってきたのだ。

だから――

「俺が分からない訳ないだろ！ 何でお前がそこに居るんだ、ベアトリーゼ!!」

黒いガンダム——アンフェールのコックピットに座るベアトリーゼ・フォルケンマイヤーは何も語らず、エクセリオンに刃を向けた。

◇

激しい戦闘を繰り広げるアポロンの戦場。

統合軍に数で劣る味方を援護する為、オーデインを含めた戦艦もまた戦場にて砲撃を行っていた。

「主砲、撃てえー!!」

オーデインの一撃が近づくモビルスーツを撃墜し、発射されたミサイルが敵機を吹き飛ばす。

艦全体を揺らす振動に耐えながらテレサはセーフアスと共にセレネからの思わぬ提案に耳を傾けていた。

《以上が私達からの提案です》

「しかし、それは……」

《はい。これは賭けになります》

「リスクが大きいな」

《だが今のままでもジリ貧には変わり無いぞ、アルミラ艦長》

「ええ」

元々不利な状況。

出来れば不確定要素は避けたい所ではあるが、こちら側が有利になる要素も無くはない。
い。

つまりは賭け。

「呑気に考えている暇は無いな」

オーデインに直撃する砲弾の衝撃に歯を食いしばりながら、テレサは決断を下した。

「オーデン准将、やりましょう。今の状況でどの道——」

《……そうだな。賭けになってしまうが、このまま敗走を待つよりはマシか。了解した。デイノ中尉、そちらの提案を乗らせてもらおう》

《了解しました。では私達は準備ができ次第、すぐに動きますので》

「分かった」

通信が切れると同時にテレサは前を向く。

「オーデイン、敵を引きつける！ 全砲門開け！ 一斉射撃！ 各モビルスーツにも作戦を打電！」

「了解」

激しさを増すオーデインの砲撃に合わせイザナギを含めた戦艦もまた援護射撃を開始する。

それを潜んでいたポイントで確認したセレネ達もまた動き出す。

「準備はいいですか？」

貨物室に積んでいたモビルスーツのコックピットに座ったセレネは機体を立ち上げながら、シャトルの方へ通信を繋げる。

「こちらは問題ない。何時でも行ける」

シャトルの操舵を担当するのはレイだ。

彼の操縦技術であれば余程の事が無い限り、デブリの中であろうと問題あるまい。

「操舵は頼みます、バレル中尉。ヴェルンシユタイン議員、そちらはどうです？」

「大丈夫だ。全員、シートに体を固定している。君こそ気をつけてな」

「はい。最後までお供が出来ない事が心苦しいですが」

「それは気にしなくていい。こっちはこっちでどうにかするさ」

覚悟は決まった。

後に行くのみ。

「では行きましょう」

「了解！」

戦場から少し離れた岩陰からシャトルが発進すると一直線にアポロン方面へと加速する。

「何だ？」

「シャトルだと？」

戦場に現れたシャトルに統合軍の兵士達は困惑したように首を傾げる。

「何をしている！ 同盟のシャトルだぞ、撃ち落とせ!!」

「しかし確認もせずに」

「馬鹿者！ こんな戦場のど真ん中で民間のシャトルがいる訳ないだろうが！ つま

り敵だ！ 貴様は後で懲罰だからな、覚悟しておけ！」

「そ、そんなぁ」

戦場を突っ切るシャトルをバウ率いる数機のモビルスーツが追撃してくる。

「レイ！」

「任せておけ！」

レイの巧みな操縦で撃ち掛けてくる無数の砲撃を絶妙のタイミングで回避する。

「くっ、流石に少しきつい」

「私達の、事は、気にしなくていい」

「了解です。もう少し耐えてください、アルノルト議員」

シャトルとは思えない無茶苦茶な動きに追撃してきた統合軍のパイロット達は目を見開いた。

「何だ、あのシャトルは!？」

「何としても撃墜しろ!!」

幾らパイロットの腕が卓越していようが、所詮は輸送用のシャトル。

モビルスーツの機動性とは比べるまでも無い。

ライフルの照準をシャトルに合わせ、今度こそ撃墜しようとしてトリガーに指を掛ける。

その時、部下の悲鳴にも似た声が聞こえてきた。

「隊長、上方から敵機、急速接近!」

「何!？」

彼らの直上、そこから来たのはリベルテストライクガンダムだった。

「邪魔はさせない!」

正確な射撃で数機がシャトルから引き離されてしまう。

「くそ、逃がすな! 追撃しろ!!」

立ちふさがるリベルテストライクを無視し、何機かがシャトルの方へ向かって行く。

ニーナはそれをあえて無視した。

それも作戦の内だからだ。

「行かせるのは彼らだけ。貴方達は此処より先には行かせません」

「フン、貴様らが幾ら立ちふさがろうが必ずあのシャトルは撃墜する！」

「状況が見えていないようですね。少し冷静に周囲を見てみる事をお勧めしますよ」

「何!？」

リベルテストライクの斬艦刀を受け止めたバウのパイロットは宙域図を見てようやく状況を把握する。

その顔は真つ青になっていた。

「……い、いつの間にかテタルトスの防衛圏内ギリギリの位置に——」

追撃に意識を取られていたが故に今の現状に気がつかなかった。

あまりの不覚に隊長は愕然とした。

「不味い! 追撃中止!! 戻れ!!」

「もう遅いですよ」

バウのコックピットにビームサーベルを叩き込む。

叫ぶ間もなく焼け死んだパイロットと共にバウを撃墜するとりベルテストライクは残りの敵機を行かせまいとビームサーベルを構えた。

その間にもシャトルは追撃から逃れようと加速し続け——そしてようやく目的地まで辿りつく。

「このままテタルトス防衛圏内に突入する！ デイノ中尉！」

「了解！ ハッチ解放！」

シャトルの後部ハッチが解放され、モビルスーツが姿を見せた。

「アレは……バイアランだ!!」

「何でアレが！」

「すでに貴方達はこっちの策に嵌ったんです！」

バイアランの砲撃を敵モビルスーツは散開して回避する。

「動きが鈍い。やっぱり地上用では上手く動けないか」

セレネの乗るバイアランは地上用に改修されたもので宇宙用に換装する事が出来な
かった。

後付けのブースターユニットである程度は改善されているが、それでも宇宙用に比べ
て明らかに動きが鈍い。

「このままシャトルごと撃墜してやる！」

「やらせません！」

シャトルから飛び出し、盾代わりになるように前へ出た。

「そんな動きで！」

「くっ」

追撃を仕掛けてきたモビルスーツが動きが鈍いバイアランを僅かに損傷させ、そのままテタルトスの防衛圏内に侵入する。

——これこそ同盟側の狙い。

月は確かに協定を結んだ。

統合側との会談での協力要請。

それが出るまで統合軍が何をしてしても関知しないと。

ただし、それは『テタルトスの防衛圏内へ侵入しない限り』はという条件付きでの話。だがそれは破られた。

つまり——

「大佐、統合軍側の防衛圏内への侵入を確認しました。戦闘も行っているようです」
彼らテタルトス、いや、ユリウス・ヴァリスの介入を意味していた。

「アリストテレス、推力最大！ モビルスーツ隊、出撃準備！」

アポロン要塞戦を離れた位置でみていたユリウスは即座に指示を飛ばす。

「ヴィルフリート、そちらはどうか？」

「俺の機体の調整ももうすぐ終わります。他は問題なく」

「よし、テンペスターズ、出撃。我々も行くぞ」

「了解」

月の精鋭達も動き出し、戦いは益々激しさを増そうとしていた。

第40話 ユリウス出撃

アポロンの戦場は大きな転換点を迎えていた。

ほぼ拮抗した状態で戦っていた統合軍と同盟軍に対するテタルトスの介入。

彼らの参戦によって戦場はさらなる混戦へと突入した。

それに一番衝撃を受けたのはファウストであった。

「テタルトスの介入だ?!」

「はい！ プレイアデス級数隻の接近を確認しています。その後方からアンドロメダ級」

「これも簡単に協定を破棄してくるとは……」

ファウストも数機のモビルスーツがテタルトスの防衛圏内に入り込んだ事は確認している。

すぐにモビルスーツは撤退させ、テタルトス側には事故であると説明したのだが――

「こちらの言い分も聞かずに……初めから『狙っていた』と考えるべきか」
現状、数はこちらが有利。

しかし例え数で勝ろうとも、同盟とテタルトスを同時に相手にしては味方の被害は甚大なものになる。

「……私の機体を用意しろ。前線で指揮を執る」

「いいのか？」

いつの間にか傍らに立っていたイスラフィールの問いかけにファウストは視線だけを向ける。

「先程も言った筈だ。躊躇うつもりはないとな」

「……お前の幸運を祈ろう」

ファウストは自らの機体が待つ格納庫に向かう。

そこには新型機が出撃の時を待つように佇んでいた。

LFAX07b 『バウ・バジリスク』

バウをファウスト専用強化、改修を施した機体。

全身のスラスタを増設し、高機動バーニアユニットを装着した。

武装もエンジン出力向上させた事でさらなる火力を確保し、高水準の性能を持つ機体へ仕上がっている。

「こういう事態は避けたかったが……仕方ない」

パイロットスーツを身につけ、バウのコックピットへ乗り込む。

「ユリウス・ヴァリス……貴様相手に戦う事も想定済み。勝つのは私だ！ ファウス

ト・ヴェルンシュタイン、出るぞ！」

ファウストは新たな機体を駆り混迷する戦場は飛び出した。

◇

敵味方が激突する戦場で一際目立つ二機のモバイルスーツが居た。

似通った形状を持ち、似通った武装を使う紅き翼の機体と黒い翼を持つ機体。

翼からは光を発し、激突する剣檄はどれも必殺。

巻き込まれたなら命はないと知っているが故に誰も彼らには近づかず、遠目に見ているだけだ。

運命に選ばれた二人の戦いを。

リベラシオンデステイニーとデアアドコスの激突を。

「ハアア!!」

「オオオ!!」

光の尾を引きながら二機は周囲を回り、離脱と激突を繰り返す。

「アンタとは此処で決着をつけてやる！」

対艦刀を片手に突撃してくる黒いデステイニーをシンは鋭い視線で睨みつけた。正直な話、リベルト・ミエルの事をそう知っている訳ではない。

だが、こいつには借りがあつた。

ミュンヘンでの借り、そしてセリスに関する借り。

それを此処で返すのだ。

「相変わらず、接近戦一辺倒か？」

デステイニーの動きを阻害するように発射された散弾砲。

細かい弾が加速するデステイニーに炸裂しコックピットを激しく揺らす。

「ぐっ」

「ハハー…」

明らかに動きが鈍った瞬間を狙つたりベルトの斬撃。

対艦刀の強烈な一撃を受け止めたデステイニーを大きく吹き飛ばした。

「ぐ、くそ、こいつー！」

リベルトの猛攻を捌きながらシンは毒づいた。

ハッキリ言つてやりにくい。

それが偽らざるシンの本音だ。

ミュンヘンで戦った時と同じ。

シンの動きを研究し尽くし、対策を練った戦い方。鬱陶しい事この上ない。

「どうした、シン・アスカ？ その程度か!!」

「うるさいー！」

怒鳴り返しながら敵の射撃を躲し、負けじとビームライフルを撃ち込んだ。

しかしデアドコスがあつさりとビームを振り切ると反撃にビームキャノンを発射する。

「ハのー！」

シンは咄嗟に機体を退き、ビームを回避する。

「射撃も接近戦も隙がない！」

敵の砲撃を回避しながら、自分の間合いである接近戦に持ち込む為に斬艦刀を振りかぶる。

「ハァー！」

しかし上段から振り下ろされた一撃はデアドコスの構えた盾によって捌かれてしまふ。

上手い。

盾を使い機体への負荷を最小限で済ませた技量は並みじゃない。

「良いのか？ この距離、お前だけの間合いじゃないぞ！」

ディアドコスの右掌が光を発し、デステイニーに向けて突き出される。

掌に設置されたビーム砲『パルマ・フィオキーナ』だ。

「舐めるな！」

シンもまた左掌を突き出した。

シールドによる防御が間に合わないならば、正面から迎え撃つのみ。

二機の掌が激突し、発せられた光が交わる。

普通に考えるならば一瞬早くパルマ・フィオキーナを発動させたディアドコスの勝利

だ。

機体を操るリベルトでさえそう考えていた。

しかし予想に反し、デステイニーは無傷だった。

「何かの仕掛けか……ん？」

訝しむリベルトにデステイニーの光る掌が目に入る。

「あれは……そうか。掌にビームシールドを展開できるのか」

シンが使ったのはパルマ・スクードと呼ばれるパルマ・アルマの使用法の一つだ。

掌全体にビームフィールドの膜を張り、あらゆる攻撃を弾く事が出来るのだ。

ただしパルマ・スクードを使用している間、ビームシールドが使えないという欠点がある。

「易々とはいかないという事か」

「そう簡単にやられるかよ!」

デアアドコスのライフルから伸びるロングビームサーベルを潜り抜けたデステイニーは斬艦刀を袈裟懸けに振るう。

「デュランダルが選んだだけはある。だからこそ俺は貴様を、デステイニーを討たねばならない!」

腰から発射されたビーム砲が斬艦刀の軌道をずらし、同時に放ったパルマ・ファイオキーナが刀身を掴み砕いた。

「ぐっ、何なんだよ!」

リベルトの声色からシンは薄ら寒いものを感じ取っていた。明らかに普通ではない。

冷静な中にも狂気染みた執着心が伝わってくるのだ。

「前に言った筈だ。俺はお前と同じ立場の人間だと」

「意味が分かんないんだよ! そんなものに付き合ってられるか!」
折れた斬艦刀を投げ捨て、高エネルギー収束ライフルを発射する。

強力なビームの一射を前にリベルトは機体を横に逸らすとビームはダイアドコスを掠め、背後へ抜けていった。

「あの位置で避けた!？」

「この程度で！ それがデュランダルに選ばれた人間の力か!!」

「本当に！ 何を言ってるんだ、アンタは!!」

「選ばれた人間が居るならば、選ばれなかった人間も居るといふ事」

「え?」

熱の籠っていた口調から一転、凍えるような冷たさを持った言葉にシンの背中に寒気が走る。

殺意の乗った対艦刀をビームシールドで止めながら、ビームサーベルを抜き放つ。

「本来、デステイニーを与えられるのは私だったと言っている」

「何?」

ビームサーベルでダイアドコスを引き離すデステイニー。

しかしリベルトは再び距離を詰め、対艦刀を振り抜いてきた。

「私こそ『デステイニープラン』によってデュランダルに選ばれた最初の人間だと言っているんだ!」

「な!？」

対艦刀の斬撃を防いだ振動に呻きながらシンの頭は鈍器で殴られたような衝撃を受けた。

「シン・アスカ、お前が現れるまではな！」

立て続けにリベルトの真実は紡がれていく。

『デステイニープラン』

プラント前議長ギルバート・デュランダルが提唱した人類救済策。

ユニウス戦役終盤に発表されたこの計画は、誰も知らないずっと以前から水面下で進められていた。

例えば必要な施設の確保。

例えば各陣営への諜報員の拡散。

そして最も重要と言える——計画の中核を為す、人員の確保。

リベルト・ミエルスはデュランダルが自らが選んだパイロットであり、デステイニープランによって最初に選定された者だった。

最初に話を聞かされた時も面食らったものだ。

人類の救済。

現状の変革を謳われても、まだ幼かった小僧にはピンとこなかった。

それでも、聞かされた理想が崇高なものだという事は未熟な彼にも理解できた。

だからリベルトはデュランダルの手を取ったのだ。

やがて正式にザフトへ入隊し、裏ではデュランダルの協力しながら過ごす日々は忙しくはあったが、満たされていた。

ヤキン・ドゥーエ戦役が勃発してもそれは変わらない。

むしろ実戦を経て余計にデュランダルの考えに傾倒した。

この世界を変えねばならないと。

それからは目的を達成する為に——デュランダルの期待に応える為に努力を続け自らを高め続けた。

だが、彼の思う未来は訪れなかった。

リベルトは突然計画の中核から外され、当時プラントに存在していたブランドル派を探る諜報員に回されてしまったのだ。

何故？

自分はミスもしていないし、順調に功績も上げていた筈だ。

当然、納得できる筈もなくデュランダルの問い詰めた。

自分はデステイニープランの中核を担っていた筈であると。

だが返ってきた言葉は——

「済まないね、リベルト。君以上の適格者が見つかったのだよ」

適格者の名はシン・アスカ。

彼の予備として配置されたのはジェイル・オールデイス。

リベルトはもう必要ないとそう言われたも同然だった。

「だが落胆する事はない。ただ君よりも彼らが優れている、それだけの事だ。君は君に与えられた役割をこなすだけでいい」

デュランダルが言うならその通りなのだろう。

確かにデステイニープランとはそういうものだ。

でも、リベルトは納得など欠片もできなかった。

努力してきたのだ。

期待に応えようと脇目も振らず必死に駆け抜けてきた。

それはどうなる？

無駄だったと？

自分よりも選ばれた奴が優れているから諦めろと？

そんな一言で納得しろと？

出来る筈がなかった。

その時だろう。

リベルトの抱えてきた想い。

信頼が憎しみに変わったのは。

無条件にデュランダルを信じていた自分を恥じ、任務は最低限こなしながら、必ずステイニープランを阻止すると決めた。

反抗を企てた者にも密かに手を貸した。

そしてデュランダルは倒れ、ステイニープランは頓挫したのだ。

「あの時ほど爽快な気分になった事は無い。私も自分の選んだ人間によって倒されたならば本望だろうよ」

「……アンタは」

「だが、まだ残っている。お前達だ、シン・アスカ。お前とステイニー、そしてジェイル・オールデイス。それら奴の残した残滓すべてを消し去る事で私は奴の呪縛からようやく解放される！」

「ッ!？」

リベルトの怒気に応えるようにディアドコスの翼が解放される。

光の翼を放出しながら速度を上げた斬撃がステイニーに襲い掛かった。

「お前を倒す、シン・アスカ！」

リベルトの言いたい事は理解できた。

借り云々以前にリベルトはシンが倒さなくてはならない相手だと再認識する。

何故ならば彼はシンの影であり、デステイニープランの陰だったから。同情できる部分もある。

でも、だからと言ってやられる訳にはいかない。

「ふざけるな！ そんな勝手な理屈で殺されてたまるものか！」

上段からの一撃を躲し、レール砲を叩き込む。

「ぐっ、消えろ、デュランダルの亡霊め！」

「そんな事を言いながら、結局議長に一番こだわってるのはアンタだろ！」

至近距離で炸裂したレール砲の爆発が強制的に二機を引き離す。

それでも両者は退くことをせずに前に出る。

「何も知らぬまま選ばれただけの人形が！ 知った風な事を!!」

ディアドコスの斬撃がデステイニーを袈裟懸けに斬り裂いた。

「ッ!? ……こだわってないなら、アンタは何でその機体に乗っている！ 黒いデステイニーに！」

「……」

傷を負いながらシンも負けじとビームサーベルでディアドコスの肩を突き刺した。

「本当に議長を憎んでいたなら、そんな機体に乗りたい何て思う訳ないだろ!!」

サーベルを突き刺したまま機体中央まで切り裂こうとするが、ディアドコスのパルマファイオキーナが肩ごとデステイニーを吹き飛ばす。

「奴のすべてを消し去る為にこれ以上に相応しい機体はないと思っただけに過ぎん！」

「それがこだわってるんだよ！」

同時に放った最大火力。

ビームキャノンと高エネルギー収束ライフルが激突し、光が二人の視界を塞いだ。

そして二人は同時に勝負に出る。

次の攻防で決着をつける為に。

「シン・アスカ!!」

ディアドコスは光の翼を解放しながら今までとは比較にならない速度で突っ込んだ。

「リベルト・ミエルス!!」

デステイニーもまた最大加速で正面へと飛び出した。

「ウオオオオ!!!」

絶妙のタイミングで突き出された対艦刀。

しかし、この程度ならばシンの反応速度で十分に対応できるもの。

だからすでにリベルトは仕込みを行っていた。

「そっ!」

「ッ!?!」

いつの間にか投棄していたシールドをライフルで破壊、デステイニーの近くで爆破した。

明らかにデステイニーの動きが鈍る。

そこを狙って対艦刀の刃を突き放った。

「私の勝利だ！」

確かに対艦刀が目前に迫り、デステイニーに避ける術はない。

リベルトが勝利を手に掴もうとしたその時、シンの力強い声と共に発せられた光がそれを遮った。

「いや、勝つのは俺だアアアア!!」

シンのSEEDの発現。

それと共に発動するC・Sシステム。

瞬間的にシステムを解放したデステイニーから迫り出されたスラストターによって対艦刀をギリギリのタイミングで回避した。

「ハアア!!」

右手を横薙ぎに振るいの対艦刀の刀身を真つ二つに叩き折る。

その反動でディアドコスの体勢は大きく崩れた。

「ッ!? どうやって——いや、何であろうと!!」

それでもリベルトは攻勢の手を緩めない。

SEEDの発現は計算の内だ。

体勢を崩しながらもビーム砲を放ち、腰の装甲を破壊すると左手のパルマ・フィオキーナをデステイニーの腹部目掛けて突き放った。

「ぐっ、それも読んでたさー」

シンはあえてをC・S・システムを解除、同時にデステイニーも左手を突き出した。先ほどと同じ攻防。

だが、先ほどとは結果が違った。

捉えたと思われたディアドコスのパルマ・フィオキーナは発射される前にデステイニーのパルマ・ジャヴェロットによって左腕ごと吹き飛ばされた。

「何!？」

「そこだ!!」

予想外の事にリベルトの動きが一瞬だけ止まる。

シンはそこを見逃さない。

動けないディアドコスの腹部に向け、右手を突き出す。

掌に集まった光が短いながらも刃を形成した。

「不味い!？」

機体を捻り、回避運動を取るディアドコス。

だがそれはもう間に合わない。

「遅い!」

ディアドコスのビーム刃が深々とディアドコスの腹部に突き刺さり、大きく火花を散らした。

「ぐああああー!」

へしゃげたコックピットに押しつぶされたりベルトは激しい痛みを襲われながらもディアドコスを見やる。

「ま、ま、さか……!」

確かに見た。

右掌に一瞬だけビーム刃が発生していた。

対艦刀をへし折ったのも、ディアドコスに致命傷を与えたのも、掌から発生したビームサーベルだったのだ。

「掌に、ビーム、サーベル、だど?」

パルマ・ラーマ。

パルマ・アルマの使用法の一つで掌に高出力のビーム刃を形成し、接近戦で無類の威力を持つ刃を形成できる。

ただし短時間しかビーム刃を形成できず、隠し武器的な要素の強いものだ。

「そ、んな、隠し、玉を、もって、いたとはな」

「……アンタは侮れない。手札を見せれば確実に対処してくる。だからC・S・システムだつて一瞬しか使わなかったんだ。どうせ対処法を考えていたんだろ？」

リベルトは言っていた。

シンの戦い方すべてを研究したと。

それはC・S・システムに關してもという事だ。

故に真正面からSEEDを発動させて戦っていたとしても、対処されていただろう。だからこそ瞬間的に発動させた方が、虚を突けるとシンは判断したのである。

「結、局、奴の、言つて、いた通り、か。——く、そ」

「まだそんな事、言つてんのか！ アンタはただデュランダル議長に認めて欲しかつただけだろ！」

「わ、私、は」

「でも、もうとつくに終わったんだよ、議長の事もステイニープランも。……俺だつて忘れる事はできない。けど、それでも過去を受け入れて、決着をつけて、そして前に

進むと決めたから……だから『過去だけに拘っている』アンタには負けられないんだ」
シンの言葉にもう微かな意識しか残っていなかったリベルトは僅かに唇を歪めた。

「ハ、ハハ、ハ、もう、終わって、いた事。拘って、いたのは私だけ、なら、こう、なる、事も、必然か」

装甲から色を失ったディアドコスの腕が動き、デステイニーを突き放す。

「……け、じめ、くら、いはつけ、させてもらう」

リベルトは最後の力を振り絞り、自爆スイッチを入れた。

「お、前は、彼女と、未来に、生きる、がいい」

「ッ!?!」

咄嗟に距離を取るデステイニー。

瞬間、ディアドコスは爆発し、宇宙に巨大な光の花を生み出した。

「自爆……けじめって」

リベルトなりの決着という事だろうか？

乗っていた黒いデステイニーを自ら葬る事で、彼なりに過去にけじめをつけたという。

「……なんだよ、それ」

自分の勝手な想像を吹き飛ばす為、シンは頭を横に振る。

「感傷に浸るのは後だろ」

戦闘はまだ続いている。

こんな所でのんびりしている場合じゃない。

「戻ろう」

デステイニーは踵を返し、奮戦する味方の下へ飛び立った。

◇

翼を広げ宇宙を駆けるユニバース・フリーダム。

それを追うようにゼニスガンダムのビーム砲が襲いかかった。

「ッー！」

弾けるように舞い上がりビームを回避、ビーム砲を発射した。

「小賢しいー！」

ジェラルルは絶妙な機動でビームを避け、そのまま距離を詰めてきた。

かつての好敵手の名を名乗るだけあって、ゼニスは手強い相手だ。

しかし——

「だからこそー！」

対艦刀の一撃をナーゲルリングで弾き、腹部に蹴りを入れる。

そしてすれ違い様に振るったビームサーベルがゼニスのライフルを斬り捨てた。

「何!?!」

「君が何者なのかは知らない。だけど、もしも君が『シリル・アルフォード』であるならばその動きは嫌という程良く知ってるんだ!」

そう、良く知っているのだ。

彼に勝つ為にキラは訓練を積んできた、

何度も。

何度も。

アストと二人で己を鍛え、虚空の戦場を超えてきた。

立ちふさがる『彼』を退けて。

故に『シリル・アルフォード』の戦い方は良く知っている。

その動きを再現するだけならば、キラが遅れを取る理由はないのだ。

「貴様!」

「亡霊は去れ!」

連続で発射されるビーム砲。

その射線もすべて知るもの。

かわせない道理はない。

「このまま——ッ!？」

だがその時だ。

電気が走るような感覚がキラの全身を駆け抜けたのは。

「これは!？」

忘れる筈はない。

間違える事もない。

『彼』が近くまで来ているのだ。

「どこ」を見ている!」

発射されたミサイルがフリーダム動きを限定させる。

その隙に背中中のビーム砲『スヴァアローグⅢ』を構えて発射した。

「落ちろ!」

モビルスーツを呑み込む強烈な閃光。

しかしそれはいつの間にか展開されていたドラグーンのビームフィールドによって
阻まれた。

「なっ!？」

「もう君に構っている暇はなくなった」

「貴様アアア!!」

自分を無視するキラに激昂するジェラール。

怒りのまま対艦刀を構えて突撃する。

だが、それを邪魔するように別の機体が割り込んできた。

フリーダムの前に立ち、対艦刀をシールドで受け止める。

「お前は!」

「ご無事ですか、ヤマト一尉?」

フリーダムを守るように対艦刀の前に立ちふさがったのはニーナのリベルテ・ストライクガンダムだった。

「ニーナ」

「此処は私にお任せを。一尉はテタルトスの方へ」

どうやらニーナはキラがテタルトスを気にしていたのか分かっていったようだ。

「……此処は任せるよ、ニーナ」

「お任せを」

「逃がすとも!」

「貴方の相手は私です」

リベルテ・ストライクはゼニスの腕を掴み、スラスターを全開にして無理やり別の場

所へと押し込んで行った。

ニーナの気遣いに感謝しながら自分の戦うべき相手がいる場所へと向かっていく。

「彼が来る——ユリウス・ヴァリスが」

これから戦う相手は最強の男。

今までの敵とは格が違う。

「それでも僕は」

キラは今までに味わった事のないプレッシャーを感じながら、操縦桿を握り直した。

◇

アポロンの戦場から筈かに外れた場所に陣取ったテタルトス軍。

その中心に鎮座する旗艦アンドロメダ級戦艦アリストテレスの格納庫では今から出撃するモビルスーツ隊の出撃準備が行われていた。

モビルスーツハンガーに固定されていた機体が、準備を終えると次々と宇宙へ飛び出していく。

その光景を待機部屋から眺めながらヴィルフリートは自分の機体の準備が整うのを待っていた。

「ヴィルフリート、機体の調子はどうか？」

声を掛けてきたユリウスの方へ振り返るとヴィルフリートは思わず驚いてしまった。

「大佐、パイロットスーツを」

ユリウスは戦闘で滅多にパイロットスーツを着込む事が無い。

曰く昔の上官に倣っているという事らしい。

その所為で整備班が毎回冷や汗を掻いているというのは全員が知っている。

出撃したユリウスを見送った整備兵の青い顔は正直同情するレベルだ。

「今回戦う敵は私の宿敵だ。油断はできない」

「それほど相手ですか」

「ああ。今日は私も全力でいかせてもらう。それで機体はどうだ？」

「現在最終チェック中です。もうすぐ終わると聞いていますが……」

そこでピピピという呼び出し音が鳴った。

噂をすればという奴で丁度最終チェックが終わったという連絡だった。

「いけます、大佐」

「よし。ヴィルフリート、私達の目的は防衛圏内ギリギリの位置で戦闘を行う敵勢力の排除だ。私は敵のエースを叩く。お前は味方の援護を」

「……『アレ』についてはどうなさるつもりで？」

「月の防衛部隊とバルトフェルドに任せてある。上手くやるだろう」
格納庫へ出たユリウスはヘルメットを被り、愛機であるディザスターのコックピットへ座った。

「やつとパイロットスーツ着てくれましたね、大佐」

いつもの整備兵が安心したように声を掛けてきた。

「今回だけは特別だ」

「いや、日頃から着てくださいよ」

「離れないと吹き飛ばされるぞ」

小言を聞き流し、コックピットハッチを閉じる。

「本気で戦うのはヤキン・ドゥーエ以来か」

獲物を狙う獣のような獍猛さを宿した瞳で解放されたハッチの先を睨みつけた。

ユリウスの感覚が言っている。

倒すべき敵はこの先にいると。

「ほう、お前も私に分かるのか？ 不幸な宿縁だな」

かつて発したラウの言葉を口に乗せ、こちらに向かってくる宿敵の存在に僅かに口元が上り上がった。

「良い覚悟だ。今日こそお前の存在を消してやる、キラ」

高揚する気分を抑えながらユリウスはフットペダルを踏み込んだ。
「ユリウス・ヴァリス、ディザスター、出るぞ」

第41話 友へと捧ぐ

各勢力の入り乱れた戦場を三つの影が駆け抜ける。

背中のスラストターユニットと各所に設置された姿勢制御バーニアによって実現された高機動。

敵機からの攻撃をすべて避けながら、機械のように正確な連携を組む三機。

各々武器を構え戦場を駆けていたのはテタルトス軍最新鋭モビルスーツ『ジンⅢ』である。

「正面、フロレスダガー、数は5」

ジンⅢを操る男が冷静かつ正確な情報を他の二機に伝達する。

コックピットに座っていたのはテンベスターズ最後の一人、ヴィクトル・シアーズ。

ヴィクトルの情報を聞いた他の二機のパイロット、アルゼーネ・バルマとカーラ・アルマディオは素早く行動に移った。

「了解！」

「私から行きます」

カーラのジンⅢが前に出る。

中型対艦刀『ヴァハグン』を握り、単独でフローレスダガーへ攻撃を仕掛けた。

「援護を！」

「あの子なら必要ないよ！ それより私らも仕事するよ！」

「了解です！」

先行した一機を援護すべく、二機のジンⅢが敵部を左右から挟み込む。

「新型!？」

「パウ以外に新型が存在したのか!？」

元々テタルトス側だったフローレスダガーのパイロットはジンⅢの姿に驚愕する。

「戦場で動きを止めるなんて!！」

対艦刀の切っ先から発射されたビーム。

完全に虚を突かれたフローレスダガーは避ける間もなく破壊された。

「ッ、全機散開して」

「もう遅いんだよ」

左右から突撃するジンⅢ。

ヴィクトルのビームライフルが敵数機を撃破。

陣形を崩した所でアルネーゼが両手で握ったビームサーベルで斬り込んだ。

「ハアア！」

振るった刃フロレスダガーの土手っ腹に叩き込み、もう一方のサーベルで袈裟懸けに切り裂いた。

「ご機嫌だねえ、この機体はさ！」

ジンⅢの性能は確かなものだ。

それこそワンオフ機にも劣らない。

量産機とは思えない性能に満足そうにアルネーゼは笑みを浮かべる。

「ホントですね。最初はどうかと思いましたがね。少佐に感謝しないと」

声を弾ませるカーラにアルネーゼはニヤニヤしながら突っ込みをいれた。

「嬉しそうに言うねえ、カーラ」

「な、何ですか、それ！ 変な事言わないでくださいよ！」

「私は別に何も言っちゃいけないだけだねえ。ねえ、ヴィクトル？」

「返事に困る質問をしないでくださいよ、大尉。それより次がきますよ」

騒ぐ二人を諫めるヴィクトル。

その表情に嫌悪感は無く、むしろやる気で満ちていた。

「……またチームで戦えるなんてな思っていますでした」

ガンダムに敗れ、テンペスターズは完全に終わったと思った。自分も立ち上がる事はできないと。

そんな自分を無理やり立ち上げらせ、この二人に引き合わせたのはヴィルフリートだ。

彼女らも地球でガンダムに痛手を受け、仲間の一人を失ったらしい。

そんな同じ境遇故か、ヴィクトルとアルネーゼ達はあつと言う間に意気投合できた。

「そういう意味では感謝してもいいかもしれませぬ。ヴィルフリート・クアドラー
ドに」

あれだけ見下していた相手に感謝するとか、正直妙な気分ではある。

だが新生テンペスターズとしてチャンスを与えた事はありがたい。

「さて、行くよ、アンタ達！」

「了解」

快進撃を続ける三機のジンⅢ。

それに続き戦場へ介入したテタルトス機も統合、同盟、両軍を撃破してゆく。

「次は……アレだね」

順調に突き進んでいたアルネーゼ達の前に巨体を一機で屠る強敵が姿を現す。

アポロン要塞近辺でデストロイの迎撃を行っていたクスイフォス・ジャステイスガン

ダムである。

ジャステイスはデストロイから発射された幾重もの砲撃を加速しながら回避。

すれ違い様に斬艦刀で砲塔を切り落とすと背後へ回り込んだ。

デストロイはジャステイスの素早い動きに全く対応できない。

その隙に連結させたビームサーベルで巨体を背を斬り裂き、傷口に撃ち込んだビーム砲がデストロイを内側から暴発させた。

「幾ら改良された所で、単なる的にしかならないか」

「デストロイなんて砲撃戦以外、何の役にも立ちませんよ。懐に入られば終わりです」

アルネーゼの眩きにカーラは心底呆れたように肩を竦めた。

カーラの言は正しい。

幾ら小型化し、接近戦への備えをした所でデストロイの弱点は知られつくしている。

それを何とかしようと思っても結果はコレだ。

その証拠にジャステイスの周りには抵抗もできないまま破壊されたデストロイの残骸が無数に散らばっていた。

「全滅ですか。流石、同盟のエースですよ」

「だからこそ落とすがいがあるってもんだ！ 行くよ！」

「はい！」

分散し、ジャステイスを囲むように攻撃を仕掛ける。

「新手!？」

ジンⅢの接近に気が付いたラクスはサーベルを構え直し、敵の動きを観察する。

「見た事のない機体ですわね……テタルトスの新型。ジンⅡの面影があるという事は後継機？」

三方から発射されたビーム砲を上昇して回避したラクスは最も近い位置にいたアルネーゼのジンⅢに攻撃を仕掛けた。

ライフルで牽制しながらシールドからせり出したブーメランを投げつける。

「舐めてんのかい、ガンダム!!」

しかしブーメランは届くことなく破壊されてしまった。

「想定内です」

接近したジャステイスはビームサーベルを下段から切り上げた。

「速い! けどねえ！」

ジンⅢが掲げた腕から光の膜が展開され、サーベルが直撃する寸前で止めてみせた。

「ビームシールド!？」

「核動力機だけの専売特許って訳じゃないだろうが！」

ジンⅢはジャステイスのサーベルを押し返し、対艦刀を叩きつけた。

「くっ」

ラクスは咄嗟に機体を引く。

対艦刀の刃が浅くジャステイスの装甲に傷をつけた。

「よくかわした。流石同盟のエースだ！」

「この程度で！」

「相手は大尉だけじゃない！」

ジャステイスの背後に回ったカーラのジンⅢがビーム砲を発射してきた。

それも宙返りしてかわすジャステイス。

しかし――

「きゃあああ!!」

背後で起こった爆発にジャステイスに大きく体勢を崩されてしまう。

それはヴィクトルがあらかじめ配置していたグレネードランチャーだった。

「回避先くらいなら、予測できますよ！」

その隙に距離を詰めたヴィクトルの対艦刀がビームライフルを切り落とした。

「この連携、あの時の敵と同等！」

三機からの猛攻にラクスは堪らずシールドを展開して後退する。

高い機体性能。

ややぎこちなさは残るものの十分に機能した連携。

ラクスの脳裏にユニウス戦役で戦った三機のモビルスーツが思い起こされる。

確かザフトの実験機で、ドム・トルーパーと言っただろうか？

彼らもまた手強い相手だった。

「だからといって！」

好き勝手にされるつもりはない。

タイミングを見計って背中の方アトウムー02を切り離す。

「戦いようはありません！」

「攪乱のつもりかい！」

「行きなさい！」

ファトウムー02がビーム砲を発射しながら、ビームウイングを展開。

弾丸のように突き進む刃の鳥がジンⅢの陣形を掻き乱す。

「こいつ邪魔！」

「そっ！」

ビームサーベルを分割、二刀に構えた斬撃がカラーラの駆るジンⅢの装甲を捉えた。

「くう」

咄嗟の判断で対艦刀を盾にする事で難を逃れるも、ジンⅢの装甲に深々と傷が刻まれた。

「カーラ!？」

「大丈夫、戦闘には支障なし」

カーラの機転とジンⅢの性能のお陰か、損傷は大した事は無かった。しかしヴィクトルとアルネーゼは安堵すると同時に戦慄する。

「油断なんてしていいなかったにも関わらずコレとは」

「分かってたつもりだけどね」

コンビネーションの僅かな隙を狙い、攪乱。

その間に体勢を立て直し、奇襲。

一機でも撃墜できれば良し。

出来なくとも、流れを変える事が出来る。

「一瞬で流れを変えてくるとは。ハハ、ガンダムに乗っているだけあるじゃないか！」

「仕切り直しましょう」

ジャステイスは二刀を逆手に構え、三機のジンⅢと睨み合った。

流れはジャステイスにある。

それでも怯まず攻勢に出ようとする、テンペスターズ。

だがそこで思わぬ乱入者が現れた。

「アレは——」

速度を上げて急接近してくるモビルスーツ。

銀色の装甲。

光を放つ一つ目。

特徴的なその機体に全員が目を奪われた。

LFSAー03E 『ジンⅢ・レーヴエ』

ジンⅢを大幅に改修し、開発された機体。

背中にはウイングスラスターの出力を限界以上に引き上げ、さらに高出力化させた大型スラスターユニットを搭載、同盟のガンダムに勝るとも劣らない機動性を得ている。

「全員、無事だな？」

「クアドラード少佐！」

戦場に現れたジンⅢ・レーヴエの姿にカーラの声が弾む。

反面ラクスは新たに現れた敵に嫌な汗が流れていた。

「また新型ですか……」

「俺がどこまでやれるのか」

「どこまで血の滲む訓練を積んできた。」

戦闘データを解析、敵の動きを分析し、自分の欠点を見つめ、克服する。

そんな事を繰り返してきた。

愚かな自分を乗り越える為に。

そしてこれ以上、負けない為にだ。

ジンⅢ・レーヴェは腰から対艦刀を抜き放つ。

「試させてもらうぞ……ガンダム!!」

「ッ!?!」

迎え撃つジャスティスに向け、ジンⅢ・レーヴェが突撃した。

◇

戦艦の砲撃がオーデインの装甲に突き刺さり、爆煙が上がる。

「右舷カタパルト被弾!」

「三時方向から敵モビルスーツ、数3」

「オーデインに近づけるな! 主砲、撃てえ!!」

オーデインの主砲が火を噴き、数機の敵を撃ち落とした。

しかし敵の攻勢は緩む事無く続き、オーデインに降り注ぐ。

「ミサイル、来ます」

「ぐっ、迎撃！」

読み通りテタルトスの参戦により、状況は変わった。

統合軍は陣形を崩し、同盟に対する攻勢を緩めている。

しかし物量の差は未だ侮れず、不利な状況に変わりは無かった。

オーデインも戦場に突入し、アポロン要塞近辺で突入したモビルスーツ隊の支援を行っている程である。

「後は持久戦になるが……ディノ中尉からの連絡は？」

「未だに」

「くっ」

セレネ達が月本国に辿りつけばそれで同盟の作戦目的は達成である。

しかし未だに彼らが月に到着していないならば、撤退する訳にはいかない。

「艦長!! ジャステイスガンダム、シグナルロストです！」

「何だと!?!」

オペレーターからの報告にテレサのみならず、ブリッジにいた全員が息をのんだ。

ラクスは紛れも無い同盟のエースだ。

ヤキン・ドゥーエ戦役から共に戦い続けてきたテレサ達が一番それを知っている。

そのラクスが敗れるとは。

「ラクスは無事なのか？」

「……不明です」

「……近くにいる味方機にジャステイスの状態を確認させろ」

「了解」

爆発するミサイルの衝撃が艦を揺らす中、オーデインは徐々にアポロン要塞へと近づいていく。

テレサは陸戦になる可能性も考えながら、通信機に手を伸ばした。

◇

要塞傍を漂う岩片。

ぶつかれば確実に命を失う巨大な岩の間を二機のモビルスーツが高速で移動し続けている。

その内の一機。

アンフェールを駆るベアトリーゼは激し苛立ちに支配されていた。

「ちよっまかとー」

先行する敵機に狙いを定め、収束ビーム砲のトリガーを引いた。強烈な閃光が岩を砕き、逃げる敵機に迫っていく。

しかし射線を見切っているかのように旋回し岩陰に飛び込んだエクセリオンはビームを容易く回避する。

背中のウイングスラスターを左右に広げ、悠々とこちらの攻撃をかわしていくエクセリオンにさらなる苛立ちが募った。

「逃げるな!!」

再び収束ビーム砲が火を噴く。

周囲を巻き込む強烈な一撃。

それすらエクセリオンを掠める事すら出来ない。

「何故、何故だ! 何故、避けられる!!」

完璧に捉えた筈の砲撃。

それをエクセリオンはあり得ない反応で見事に回避していく。

「くそオ! 落ちろ!」

速度をさらにあげ、邪魔な岩を吹き飛ばした。

「迂闊だぞ!」

「何!?!」

破壊された断片の陰から飛び出してきたエクセリオンがビームライフルを発射する。

「ッ!? そんなものに!」

ビームライフルの一射をシールドで防ぎ、ビームサーベルを叩きつけた。

「やめろ、ベアトリーゼ!!」

押しつけられたサーベルの閃光がエクセリオンが掲げたビームシールドに阻まれ、激しい稲光が発生する。

それでもサーベルを押しつけるのをやめない。

さらに左腕に再び巨大なビームクロウを形成し、エクセリオンへ叩きつけた。

「やめろって言ってるだろ!!」

「黙れ! 馴れ馴れしい!!」

サーベルでクロウを弾くとエクセリオンはアンフェールは距離を取った。

「俺が分からないのか?」

鬱陶しい。

さつきから何を言っているのか。

「分かるさ。お前はアオイ・ミナト、我々の敵だ!」

最優先排除対象の1人であり、調和同盟に所属するエースパイロットを知らない筈がない。

「違う。俺とお前は仲間だ！　ベアトリーゼ、お前は統合軍に——」

「洗脳されているとでも？　世迷いごとを言うな！」

マシンキャノンの牽制をかわし、収束ビーム砲で狙いをつけた。

「今度こそ！」

「撃たせるか！」

発射直前に懐へ飛び込んだアオイは腕を掴み上げ、砲口を上へと逸らした。

「俺の話聞けよ！」

「敵に話す事などない!!」

何度も組みついてくるアオイにベアトリーゼは感じた事のない感情が膨れ上がる。

「何なんだ、お前は！」

エクセリオンに蹴りを入れて吹き飛ばすと今度こそとビーム砲を発射した。

「落ちろ！」

「そんな簡単に行くと思うなよ！」

発射された強烈なビーム。

アオイはフットペダルを踏み込み、一気に下方へ移動する。

ビーム砲の一撃をやり過ぎしこちらも収束ビーム砲を発射した。

「ぐっ」

シールドで防御するアンフェール。

凄まじいビームの圧力に見動きすら取れない。

「ベアトリーゼ!!」

アオイはウイングスラスターを吹かし、動きを止めたアンフェールへ突撃するとアポロン要塞の岩壁に叩きつけた。

「グハア!」

思い切り岩壁に叩きつけられたベアトリーゼは凄まじい衝撃に意識を失いかけてしまふ。

「き、貴様」

「まずはその機体を破壊する。話はその後だ」

さらにウイングスラスターを噴射させ、岩壁を滑るように移動しながら要塞内へと押し込んでいく。

「私を馬鹿にするのもいい加減にしろ!」

高速で移動しながら腕にマウントされていたヴァリアブルアームズを再び展開する。

今度形成するのは爪では巨大な剣のような刃。

「死ぬエエ!」

力任せにエクセリオンを振り払い、上段から叩きつける。

「ハアアアア!!」

「それはもう何度も見たんだよ!」

シールドでヴァリアブルアームズの刃を止め、ビームライフルを発射した。

「そんなものが!」

「言っただろう。何度も見たってな!」

ライフルの射撃がビームを発生させている基点に撃ち込まれ、刃を形成するビームファイールドを消し去った。

「要するにファイールドを形成させなきゃいいんだ」

巨大な刃を形成していたのは腕から射出されたパーツ。

ファイールドを展開される前に吹き飛ばせば、簡単に刃の形成を防ぐ事が出来る。

「おのれ!」

「俺の勝ちだぞ、ベアトリーゼ!」

隙を見せたアンフェールの腕をシールドで弾き、懐に向けて思いきり蹴りを入れた。

「ぐあああああ」

蹴りを受けきれなかったアンフェールは要塞の入り口付近へ叩きつけられてしまった。

衝撃がコックピット全体に伝わりベアトリーゼはコンソールに頭を打ち付けてしま

う。

「まず機体から引きずり出す。話はその後で——」

その時、アオイの耳に敵機接近の警戒音が鳴り響く。

アンフェールに近づこうとしたエクセリオンに背後から別の機体が迫ってきた。

「エクセリオン!?! アオイ・ミナトか!」

ファウストのバウ・バジリスクがエクセリオンへ突っ込んできた。

「バウ!?!」

途中、邪魔なスオウを切り捨て、ビーム砲を発射してくる。

「貴様を落とせば、同盟の戦力はさらに低下する!」

「その声——ファウスト・ヴェルンシュタインか!?!」

正確な射撃がエクセリオンの動きを鈍らせる。

避けるのは無理。

そう判断したアオイはサーベルを抜き、ファウストと激突する。

「統合軍指揮官がわざわざ戦場に出てきてくれるなんてな! 探す手間が省けたよ

!」

「私を探していたのか!」

「貴方を倒せば、統合軍は終わりだからな!」

「お前が私を倒すと？ 笑えない冗談だ！」

エクセリオンとバジリスクが弾け飛ぶ。

「私を倒したいならキラ・ヤマトでも連れてくる事だな！」

ファウストは距離を取ると同時に腹部に装備された複列位相砲『アドラメレクⅡ』を叩き込む。

「ッ！」

スキュラと同格の複列位相砲。

掠めただけでも致命傷になりかねない。

「当たるかアア！」

回避に全力をつぎ込む。

上昇するエクセリオンのすぐ傍をアドラメレクⅡが通過した。

どうにかアドラメレクⅡを回避したアオイに今度はミサイルが降り注ぐ。

「くつ、ファウスト・ヴェルンシュタイン！ 貴方の存在が戦乱を巻き起こす！」

「思い上がるな！ ただの一兵士が政治家気取りか！」

マシンキャノンでミサイルを撃破。

そしてビームサーベルを抜き、落とし切れず左右から飛んでくるミサイルをサーベルで斬り払った。

「サーベルで斬り払うとは!!」

「落とす!」

エクセリオンが爆煙から飛び出すと即座にビームライフルで狙い撃つ。

「甘いな!」

ビームライフルを物ともせず、エクセリオンの懐へ飛び込みサーベルを横薙ぎに叩きつけた。

斬撃がエクセリオンの脚部を捉え、装甲を斬り飛ばす。

「どうした? これで終わりか!」

「ッ、舐めるな!」

構えたビームライフルが同時に発射され、互いの肩部を撃ち抜いた。

「チッ」

「ぐっ、まだまだ!」

アオイはバジリスクを体当たりで突き飛ばし、一度後退する。

コンソールを操作し、損傷を確認しながら浮遊していた戦艦の残骸に身を潜めた。

「ハア、ファウスト・ヴェルンシュタイン……統合軍を率いているだけある」

指揮官としてだけではなく、パイロットとしても間違いなく一流だ。

「さてどう攻める?」

破損した部分は幸い問題ない。

すでにW・S・システムによる調整も行われている。

だがバジリスクの損傷もこちらと大差無いだろう。

「隙を見つければ……」

「それで隠れたつもりか！」

上方から発射された三連ビーム砲が戦艦の装甲を貫いた。

「目的は何なんだ!？」

「宣言した通りだ！」

「貴方がそんな殊勝なタマかよ！」

足元の爆風から逃れたエクセリオンは収束ビーム砲でバジリスクを狙い撃つ。

強力なビームがバジリスクのライフルを焼き尽くし、肩のビーム砲を消し飛ばした。

「野心が透けて見えるんだよ！」

「ぐう、私はこの世界を統合する！ 人類を新たなステージに押し上げる！」

「まだそんな事を!？」

「この世界は不完全に過ぎる！ あまりに愚かで無能な連中が多すぎる！ だからこ

そ変える！ だからこそ『SEED』が、人類の革新が必要！ 統一はその為の土台

だ！」

アオイはファウストの本音を聞き、齒噛みした。

この男は平和を望んでいる訳ではない。

自分よりも劣る者達を見下しているのだ。

だから自分が導いてやると本気で思っている。

「その傲慢！ やはり此処で貴方は倒れるべきだ！」

振り抜いたサーベルがバジリスクの脚部を斬り落とす。

「思い上がるなど言った！」

バジリスクが発射したグレネードランチャーが収束ビーム砲に直撃、機体諸共弾かれてしまう。

ファウストはこの機会を見逃さない。

「ハアアア!!」

ビームサーベルを構えエクセリオンへ突撃した。

「その体勢では避けられまい！」

だがファウストの予想を大きく外れた。

エクセリオンはスラスターを全開、戦艦の甲板を滑るように移動しバジリスクの斬撃をやり過ぎした。

「何だ、今の反応は!？」

「避けられた？」

またアオイが反応する前に機体の方が先に動いていた。

「W・S・システムか。助かるけど!」

機体の体勢を崩したままもう一つの収束ビーム砲を発射した。

「何度も当たると——ッ!？」

ファウストはビーム砲の一撃をシールドで受け止める。

そのまま攻勢に出ようとしたその時、エクセリオンとバジリスクの足元にある戦艦が爆発した。

「何だ!？」

見ればアポロンの中で倒れていたアンフェールが収束ビーム砲を構えていた。

「ベアトリーゼ!？」

「どういうつもりだ!？」

そして再びビーム砲が発射される。

狙いはエクセリオンではなく、バジリスクの方だ。

「おのれ!」

ビーム砲の直撃によって戦艦は完全に消滅する。

予期せぬ爆発にバウは大きく体勢を崩された。

反面あらかじめ体勢を正そうとしていたアオイはそのまま機体を立て直し、バジリスクに向けて突撃する。

「ウオオオオ!!」

「この程度で!」

バジリスクは体勢を崩したままでエクセリオンを迎え撃つ。

エクセリオンはビームサーベルを腰から抜き打ちで切り払い、バジリスクは上段から振り下ろす。

サーベルが交錯する一瞬。

バジリスクの一撃がエクセリオンの左ウイングスラストアスターを捉え――

エクセリオンのサーベルがバジリスクの胴体を切り裂いた。

◇

エクセリオンとバジリスクの決着がつく、少し前。

エクセリオンによって要塞内部に叩きつけられたベアトリーゼは頭部を強打した痛

みに呻いていた。

「ぐつうううう」

朦朧とする意識の中でベアトリーゼの脳裏に幾つかの情景が浮かび上がってくる。

血を吐き、床に倒れ伏す女性。

ピクリとも動かない所を見ると息絶えている事が分かる。

その女性に駆け寄る青年。

彼は顔を涙で濡らし、憤りに震えていた。

「良くやったわ、ベアトリーゼ。それでこそ私の娘よ」

頭を撫でながら、艶やかな声で呟く女。

気持ち悪い。

この女は自分を物以下としか見ていないのに、何を言う。

しかし声は出ない。

そんな自由は初めから奪われている。

自分はいくまでこの女の人形なのだから。

死ぬまで自由などあるまい。

だが意外にも母を名乗る女はあつけなく排除された。

「お前は何のために生きている？ もうお前を縛るものはない。今お前の母親も死ん

だ。にもかかわらず何も感じないのか？」

いつの間にか自分の前に立っていた青年が問いかける。

だが、答えなどある筈がない。

そんな感情も自我も、何も持たされなかったのだから。

「薬の影響か。哀れとは思おう。だが、それがお前の免罪符にはならん」

青年の冷たい指摘がジワジワと染みわたる。

間違いじゃない。

このまま彼に殺されるのだろう。

それが償いになるのなら——

そう思っていたのに、気がつけば軍服を纏って訓練を受けていた。

毎日同じ訓練を繰り返す。

何の為かは、あまり思い出せなかった。

だが戦場で無残に朽ちるのも悪くないと思っていた。

そこで出会ったのだ。

アオイ・ミナトに。

最初は同期の訓練兵の1人というだけで別段思うところは無かった

しかし何の因果か、訓練でも組む事が多くなり、嫌でもアオイの存在を刻みつける事

になった。

はつきり言っておいつは放っておけるような奴じゃなかったのだ。

危なかつしい上に自分に頓着が無い。

見ているだけでもハラハラする。

本当に何でこんな奴の面倒を見なくてはならないのかと、常に愚痴っていたくらいだ。

でも、そんな生活が嫌いじゃなかった。

自分でも驚くくらいに感情が表に出るようになっていた。

失っていた筈の自我を取り戻していた。

「ハ、ハハ、何だそれは。全く」

簡単な話。

要するに自分はアオイとのそんな生活が好きだったのだ。

こんな罪深い自分にそんな救いを得る資格はなかったというのに。

先ほどのアオイの言葉が蘇る。

『俺とお前は仲間だ!』

あの馬鹿は今でも本気で自分を信じているのだろう。

「本当に馬鹿だ。だが」

その信頼だけは裏切れない。

いや、裏切りたくなかった。

過去と現在の記憶で朦朧としながら、操縦桿を握り収束ビーム砲の銃口を向けた。

ターゲットは――

迷いなくトリガーを引くと、強烈なビームが発射され正確に目標へと直撃する。

ビーム砲によって撃ち抜かれたターゲットは火を噴き、爆散した。

大きな爆発はアンフェールのいた入口まで巻き込んでいく。

「助けてやれるのはこれで最後だ。さようなら、アオイ。お前に会えて、私は――

ベアトリーゼの視界が眩い閃光で埋め尽くされ、アンフェールは崩れ落ちた瓦礫に埋まっていた。

◇

戦場を進むユニバース・フリーダム。

キラはすれ違い様にリゲルを斬り伏せ、進路を阻む敵機を撃ち落としながら、近づいてくる殺意を感じ取っていた。

「こちらに気がついている。当然だな」

ユニバースフリーダムの進行方向。

その先で青紫の装甲を持つモビルスーツが姿を見せる。

あの色。

あの動き。

そして感じ取れるこの感覚。

「……ユリウス・ヴァリス！」

フリーダムを視認したディザスターが対艦刀クラレントを抜く。

そしてキラも斬艦刀ガラティーンを構えるとスラストターを吹かした。
初めから掛け値なしの全力で。

互いに倒すべき相手を打倒する為に。

宇宙を駆ける強者同士の刃が激突した。

第42話 激戦

アポロン要塞を抜けた先。

テタルトスの防衛圏内をバイアランが漂っていた。

機体の所々には無数の傷が刻まれ、無事とは言い難い有様。

背中に取り付けられたブースターユニットが無傷な事が幸いと言える。

そんなバイアランに一隻の戦艦がゆっくりと近づいていた。

「聞こえているかね、デイノ中尉。こちらエウクレイデス、バルトフェルドだ」

相変わらずの軽い口調にバイアランのコックピットに座っていたセレネは笑みを浮かべた。

「ええ、聞こえています。バルトフェルド艦長」

「そいつは結構。新作のコーヒーを、ご馳走しながら積もる話もあるんだが、それは全部終わってからにしよう。収容するぞ」

「了解です。細かい報告は後で上げますが、簡略に経緯を説明します」

ワイヤーで牽引されたバイアランがエウクレイデスの格納庫へ收容される中、セレネは今までの事を説明する。

「——という訳で、別ルートでシャトルが本国へ向かっています。それにはアルノルト議員を含めた停戦派の方々が同乗してます」

「なるほどね。そっちは連絡を入れとこう」

「ありがとうございます。それで戦局はどうなっているのですか？」

「アポロンの方には大佐が向かったよ。アルテミスの方はまだ戦闘が続いているようだ」

セレネの脳裏にアスランの顔が浮かび上がる。

彼の技量であれば大丈夫だとは思う。

しかし、同時に思い浮かぶ存在がそれを信じさせない。

アスト・サガミ。

アスランが誰よりも倒したいと願う宿敵。

彼がアルテミス攻撃部隊に加わっている以上、対決は回避だろう。

「アスランが心配かな？」

「それは……そうですね」

「そうか。申し訳ないが、エウクレイデスはまだ任務があつてね。セレネにも付き

合つてもらふことになる」

「構いません。それでどのような任務でしょうか？」

そこでモニターに映るバルトフェルドの顔にいつもの軽薄そうな笑みが浮かんだ。

「アルテミスの状況を確認し、統合軍側の情報を得ること。可能なら人質にされている面々の行方を探る事だよ」

「あ」

バルトフェルドの笑みの訳を察したセレネは呆気にとられつつ、すぐに微笑んだ。

「意地悪ですね。今度アイシヤさんに言っておきます」

「すまん、すまん。君の機体も用意させてあるから、後で確認しておいてくれ」

「了解」

バイアランのコックピットから降りたセレネは用意されていた自身の機体の下へと足を向ける。

LFSA—X005E 「エリシユオンガンダム・ディアナ」

ユニウス戦役時に開発されたテタルトスの最新型モビルスーツの改修機。

元々この機体はテタルトス軍の特殊装備の実証機として開発されたもので、タキオンアーマーを装備する事で本来の性能を発揮できるものだった。

そこに改修を受け、タキオンアーマーと一体化されたことで整備性や機体本体の脆弱

性も解決されている。

セレネはユニウス戦役で扱った機体を見上げると静かな決意を胸に抱く。

「……アスト・サガミは私が倒します」

彼自身が悪い人間でない事は理解している。

彼なりの戦う理由がある事も解っている。

それでもセレネはアスランを守りたいのだ。

だから――

「今から行きます、アスラン」

踵を返したエウクレイデスは進路をアルテミスへ向ける。

そこにある戦場を目指して。

◇

オーティンからの連絡を受けたシンはジャステイスのシグナルが消えたポイントへと急いでいた。

「まさかジャステイスがやられるなんて」

ラクスの力を知っているからこそ、どうにも信じがたい。

それとも彼女すら上回る強敵がいたのか。

「だとしたら油断できないよな」

警戒しながら進むデステイニー。

途中で邪魔する敵機を撃墜しながらアポロン要塞付近まで近づき、ようやくジャステイスをロストしたポイントが見えてきた。

「あれは……」

シンの目が捉えたのは破壊されたモビルスーツの残骸。

無残に破壊された腕や武装。

それは間違いなくジャステイスガンダムのものであった。

「くそー！ でも残骸が少ない？」

周辺に残骸は散らばっているが、それはあくまでも腕や武装だけだ。

ジャステイス本体は見当たらない。

「本体は無事なのか？ それを確かめないと」

周囲に目を凝らし、ジャステイスの姿を探すと戦域から離れていこうとしている敵機の姿が見える。

ワイヤーでモビルスーツの胴体のようなものを牽引していた。

「ジャステイス!! 敵に鹵獲された？ でも今ならまだ間に合う!!」

翼を広げ、最大加速でジャステイスを追撃する。

「行かせるかアア!!」

一気に距離を詰め、ビームライフルを連射、二本のスラッシュブーメランを投擲した。ビームライフルが敵機の動きを乱し、その隙にブーメランがジャスティスを牽引していたワイヤーを引きちぎった。

「ッ、あのガンダムは!？」

「ジブラルタルに現れた奴!」

ワイヤーを切られたアルネーゼ達は散開してデステイニーのビームライフルを回避した。

「せっかくガンダムを鹵獲したのに!」

「油断しないように! 奴は手強いよ!」

「了解!」

フォーメーションを組み、ジンⅢがデステイニーに襲い掛かる。

「大した連携だけど!」

三方向からの同時攻撃。

ライフルを躲し、さらに左右から挟むように接近戦を挑んできた二機の斬撃を上昇して回避する。

「今のを避けるか!」

「まだまだ!」

デステイニーの動きを妨害するように発射されるジンⅢのビームライフル。
「そんなもの！」

シンはすべての射線を見切り、接近戦に持ち込む。

腰からビームサーベルを抜き、ジンⅢに斬りかかった。

「計算済みですよ！」

攻撃を仕掛ける瞬間を狙ったかのようにアルネーゼが背後から攻撃を仕掛けてきた。

狙いは完全に無防備な背中。

「その翼ごと筆り取ってやる！ 落ちな！」

「チツ、こいつら、上手い！」

昔、戦ったカオス、ガイア、アビスの三機よりも手強いかもしれない。

倒立するように機体を逆さまにして斬撃を回避する。

「隙だらけですよ！」

逆さまのデステイニーに向けてヴィクトルはビーム砲を構える。

「舐めるなアアア!!」

無理矢理機体をひねったデステイニーはビーム砲を避け、ビームライフルでジンⅢの

腰部ビーム砲を吹き飛ばした。

「くつ、ジャステイスとの戦いで消耗していたとはいえ！」

「ならー！ カーラー！」

「了解」

「このおお！」

「デステイニーは振り返る事無く腕を背後に向け、パルマ・ジャベロツトを発射。斬りかかろうとしていたジンⅢの腕ごと吹き飛ばした。

「ぐううう！」

「大尉!？」

「迂闊だ！」

「シンは大破したアルネーゼ機に気を取られたカーラ機目掛けてビームサーベルを叩き込んだ。

「ッ!？」

「ジンⅢの頭部へサーベルが突き刺さり、稲光を発しながら動きを止めた。

「後はお前だけだ！」

「ガンダム！」

「ヴィクトルのジンⅢにビームサーベルを突きつける。

「だがそこでふとシンに疑問が湧いてきた。

「確かに彼らは強い。」

連携も上手く、パイロットの技量も高い。

だが、彼らではラクスを追い詰める事は出来ても、倒せるとは思えなかったのだ。では一体誰がラクスを倒したのか？

疑問を口に出そうとしたその時、コックピットに警報が鳴り響く。

突如下方から砲弾がデステイニーに迫ってきた。

「なッ!? 下から!!」

シンは機体を急上昇させ砲弾を迎撃しようと機関砲を発射した。

しかし、機関砲が砲弾を砕くより前に四方へ弾け、デステイニーに直撃する。

「ぐっ、散弾!」

この手の武器はデステイニーにとって厄介なものだった。

VPS装甲により実体弾のダメージは無い。

だが衝撃により肝心のスピードが殺されてしまう。

これではデステイニーの本領が発揮できない。

「まあ、その前に迎撃できればいいんだけど!」

パイロットの腕前次第ではそれも出来ない。

使い方によってはデステイニーにとっての天敵にもなり得る武器なのだ。

「くそ!」

体勢を立て直したシンの前に銀色の装甲を持つ機体が姿を見せた。

「銀色……それに獅子のパーソナルマーク。こいつか、ジャスティスを落としたのは」警戒しながらライフルを構える、デステイニー。

そんな敵機の姿を銀色の機体ジンⅢ・レーヴェを操るヴィルフリートもまた静かに闘志を燃やしていた。

「……デステイニーか。ヴィクトル、カーラ達を連れ、一旦下がれ。ガンダムの相手は俺がする」

「了解」

損傷した味方と供の下がるジンⅢ。

それを守るように立ちふさがるヴィルフリート。

聞き覚えのある声にシンは思わず呟いた。

「お前はアムステルダムで戦った……」

「此処で貴様と戦う事になるとはな」

ヴィルフリートにとってデステイニーは因縁のある相手だった。

アムステルダムでの戦い。

そこでヴィルフリートは完膚なきまでに敗北した。

昔の自分ならば怒りに任せて突撃していただろう。

だが今は違う。

恨みはない。

むしろ感謝すらしている。

愚かな自身の誤りに気付けたのだから。

「また性懲りもなくー！」

「貴様には感謝している。あの時の敗北のお陰で今の俺がいる。だからこそ全力で貴様を倒す。それこそが俺なりの礼だ！」

「何?！」

ヴィルフリートはウイングスラスターの出力を上げ、機体はさらに速度を増す。

そしてデステイニーに肉薄するとビームライフルを発射した。

「当たるかよー！」

連射された砲撃を器用に機体を左右に振って回避したシンは負けじとビームライフルを撃ち返す。

「俺は以前とは違うぞー！」

ヴィルフリートもまたデステイニーのビームライフルを速度を上げて振り切ると、接近戦を挑む。

両手に対艦刀を握り、デステイニーに振り下ろした。

「速いー！」

「うおおお!!」

ヴィルフリートはシールドで斬撃を止めたデステイニーごと力任せに吹き飛ばし、全火力を一斉に解放した。

ビーム砲、バズーカ砲、ミサイル。

それらが一斉にデステイニーに襲いかかった。

「落ちろ、ガンダムー！」

「いっつー！」

砲撃を防御し、迎撃しながらシンはジンⅢ・レーヴェの手強さに歯噛みする。

敵はただ火力をぶつけてきている訳じゃない。

こちらの動きを読みながら、的確に砲撃を撃ちこんできているのだ。

「強いー！」

焦りをにじませるシンとは対照的にヴィルフリートは確かな手応えと共に沸き上がる高揚感を押さえ込むので必死だった。

「やれる。やれるぞー！ ガンダム相手に戦えるー！」

逃れるデステイニーに食らいつくように、背中に設置された二丁のビームマシンガンを叩き込む。

無数に降り注ぐ閃光の雨。

デステイニーの装甲を僅かに掠め、傷を産み出した。

「こんなもので!!」

シンはここで勝負に出た。

SEEDを発動させ、C・S・システムを発動させたのだ。

「いつまでも付き合っていられるか! 行くぞ!!」

光の翼が解放され、一気にジンIII・レーヴェの懐へ飛び込んだ。

「ッ!? これが例のシステムか!」

先程とは比べ物にならないスピードにヴィルフリートは瞠目する。

マシンガンもビーム砲も掠りもしない。

機体だけでなく、パイロットの反応も上がっていた。

「落ちろ!」

「だが、無敵という訳ではあるまい! 戦いようはある!」

このために今まで訓練を積んできた。

当然、デステイニーの対策も考えてあった。

斬艦刀で斬りかかってきたデステイニーの一撃をライフルを囫にして防御する。

そして間合いに入らないよう、最大までスラスターを噴射。

出来る限り距離を稼ぐと、バズーカ砲を発射した。

「また散弾か！」

「そのスピードは逆に命取りだろう！」

「何度も同じ手が通用すると思うな！」

急制動をかけ動きを止めたデステイニーは高エネルギー収束ライフルで散弾を一斉に薙ぎ払った。

「くっ」

「もう一撃！」

発射された収束ライフルの砲撃をスラスタを噴射しギリギリで回避するジンIII・レーヴェ。

掠めただけで装甲が剥がれ、内部が露出する。

異常を示すアラームに顔を顰めながら、ヴィルフリートは素早く機体を立て直した。

「呆れた威力だ。直撃を受ければ、それだけで撃墜される。ならば!!」

機体をその場でターンさせ、砲撃を躲しマシンガンを連射した。

「そんなもの！」

圧倒的な機動性をもってマシンガンの砲弾を回避するデステイニー。

それを待っていたかのようにジンIII・レーヴェはミサイルポッドを解放する。

「当たるか!」

デステイニーの機関砲が火を噴き、ミサイルを一つ残らず叩き落とした。しかしヴィルフリートは彼の狙いはデステイニーではなかった。

彼の狙いは――

「このまま距離を詰めれば――」

距離を詰めようと前に出た瞬間、デステイニーの背後にあつたデブリがミサイルの直撃で爆発し、細かい破片が機体に激突する。

「何!?!」

「散弾砲の代わりだ! これでも喰らえ!!」

腹部から発射された複列位相砲『アドラメレクⅡ』が収束ライフルを掠め、吹き飛ばした。

「ぐっ!」

ライフルの爆発でさらに体勢を崩す、デステイニー。

そこを見逃さず、距離を詰めたジンⅢが対艦刀を振り下ろす。

「舐めんな!」

シンの絶叫と共に右手を突き出す。

対艦刀はデステイニーに届かず、右掌の盾パルマ・スクードによって掴まれ止められ

ていた。

「対艦刀を掴んで止めただど!？」

「わざわざこつちの間合いに入ってくれるなんてな!」

「しまっ——」

シンはすぐさま掌に刃を形成するパルマ・ラーマに切り替え、対艦刀を叩き折った。

「ぐう!?! だが!」

ジンIIIはビームシールドを刃状へ変化させ、デステイニーに突きを放つ。

しかし再びパルマ・スクードによって止められてしまった。

「この間合いは俺の距離だ!」

「ッ!?!」

ヴィルフリートは咄嗟に右足を蹴り上げ、振り下ろされた斬艦刀を受け止める。

だが斬艦刀の刃を止める事は出来ず、軽々とジンIII・レーヴェの足を斬り落とした。

「ッ、剣閃を逸らせただけでも十分だ!」

斬りおとされた脚部をマシンガンで撃ち抜く。

破壊された脚部の爆発で斬艦刀諸共デステイニーを突き放し、攻撃範囲から離脱す

る。

そして同時にバズーカ砲を撃ち込んだ。

「チツ」

シンはアンチビームシールドを掲げ砲弾を受け止める。

だが至近距離からの砲撃にシールドは耐えられず、そのまま破壊されてしまった。

「ぐうう、このー！」

シールドが破壊された余波で体勢を崩しながら、デステイニーがビームライフルを撃ち込む。

その一射がジンⅢ・レーヴェの腰部ビーム砲、そして片方のビームマシンガンを吹き飛ばした。

「ぐあああ!!　ぐつつ、今のは……」

ヴィルフリートはデステイニーから距離を取り、デブリの中に紛れながら、今までに得た情報を整理する。

強い。

射撃や反応速度は言わずもがな。

近接戦における力量は尋常ではない。

そこにパイロットの力を100%引き出すあの機体の性能が加われば、どんな相手だろうが敵ではないだろう。

でも、同時に見えてきたものもあつた。

「すべては俺次第か……落ち着け、ヴィルフリート・クアドラード。落ち着け」
深呼吸しながら、冷静に。

熱は内に秘め。

思考はクリアに。

まるで自身に暗示をかけるように、言い聞かせる。

するとヴィルフリートの感覚は味わった事がないと思うほどにクリアに、澄みわたる。

「……よし」

澄みわたる思考で戦略を決めたヴィルフリート。

その眼前にビームサーベルを振りかぶったデステイニーが迫っていた。

「もらったー！」

ヴィルフリートは自身でも驚くほど冷静に機体を上昇させる。

デステイニーのサーベルはジンIII・レーヴェを捉えられず背後のデブリに傷を刻んだ。

「何?！」

仕留めたと思った一撃をかわしたジンIII・レーヴェの動きにシンは驚愕する。

その上方からもう一丁のマシガンとミサイルの雨が降り注いだ。

「いい加減にしつこい！」

攻撃をビームシールドで防ぐもライフルが破損してしまった。

「また距離を取るつもりか」

離れているジンⅢ・レーヴエ。

その機影を追いながら破損した武装を投棄し、シンは残った武装を素早く確認する。

大半の武装は破壊され、機関砲は弾切れ。

残りはレール砲にビームサーベルが一本、そしてパルマ・アルマのみ。

「ハア、機体の損傷も考えるところが最後だな」

ディアドコスから受けた損傷は思った以上に酷い。

C・S・システムの解放してられるのも後僅かだけ。

ビームサーベルを構え、敵機の逃れた方向を見据える。

ラクスを倒したただけあって、ヴィルフリートは強い。

アムステルダムで戦った時とはまるで別人だ。

よほど訓練を積んできたのだろう。

「俺だつて負けられない。これで決着をつけてやる！」

デステイニーの翼が広がり、大量の光を生み出す。

光を機体に纏い、シンはジンⅢ・レーヴエの元へと向かった。

デブリを抜けた先。

巨大な岩に損傷したジンIII・レーヴエが倒れ込んでいる。

罨か。

それとも損傷で動けないのか。

どちらだろうとも関係ない。

シンは躊躇う事無く、敵機に向けて加速する。

「ハアアア!!」

そこでもうやくジンIII・レーヴエが動き出す。

構えたバズーカ砲から散弾が発射された。

「そんなもの!!」

背中のアラドヴァルレル砲を投棄、盾にして散弾をやり過ぎすと速度を落とさないまま接近戦の間合いに入り込んだ。

そのままビームサーベルを突き出そうとしたその時——敵機もまた右腕に装備されたビームシールドをサーベルへ形成した刃を突き出してくる。

カウンター狙い？

「だとしても!」

パルマ・スクードでビーム刃を防ぎ、そしてビームサーベルを突き出した。

「かかった!」

「ッ!?!」

ヴィルフリートは逆手に持った対艦刀にサーベルを突き刺し、そのまま弾く。

そして構えていたバズーカ砲の残弾を一斉に叩き込んだ。

発射された砲撃が容赦なくデステイニーの損傷部分に突き刺さり、装甲の色が消える。

「うああああ!!」

「やはり掌の盾を使った時はシールドを展開できないようだな」
先ほどの攻防。

脚部を斬り裂かれた時、距離を取る為バズーカ砲を発射した。

だがその時、至近距離だったにも関わらずデステイニーはビームシールドを展開しなかった。

その時に気が付いたのだ。

展開しなかったのではなく、展開できなかったのだと。

だからこうして自分の懐へ招き寄せ、隙ができる瞬間を狙っていたのだ。

「これで!」

残った最後の砲弾。

それがデステイニーの頭部に直撃し、撃ち砕いた。

頭部を破壊されたデステイニーは無防備に漂っていく。

「終わりだ、ガンダム!!」

ヴィルフリートが止めを刺そうとマシンガンを構えた瞬間、ゆらりとデステイニーの腕が動く。

「ッ!?!」

掌に集まる光。

それはデステイニーの最後の攻撃だった。

ヴィルフリートは直感的に危険を察知し、逃れようとするがもう遅い。

発射された閃光がジンIII・レーヴエを飲み込んだ。

パルマ・ジャベロット。

戦艦すら砕く一撃がマシンガンごとジンIII・レーヴエを食い破る。

岩ごと貫通した光は爆発となって二機を纏めて包み込んだ。

◇

ユニバース・フリーダムとデイズター・グリューエン。

キラ・ヤマトとユリウス・ヴァリス。

生まれた時からの因縁で結ばれた二人は掛け値なしの全力で相手にぶつかっていく。初撃から勝負を決めるべく一撃を繰り出す。

対艦刀と斬艦刀が激突し、二機は常人では見切れないほどの速度で高速移動しながら攻防を繰り返していた。

「流石！」

「お前こそ、昔とは比べ物にならない程に腕を上げたな。しかしその程度か！」

すれ違い様に蹴りを入れたデイズスターはフリーダムに追い打ちを掛けるように複列位相砲を撃ち込んでくる。

「くっ！」

キラは無理やり機体を寝そべらせ複列位相砲を回避する。

しかしすでにユリウスは次の手を打っていた。

体勢を立て直すフリーダムの背後からドラグーンが迫る。

「ッ、ドラグーンか！」

すでに馴染んだ感覚に従い回避運動を取る、フリーダム。

だがそれを見越していたユリウスは思い切り対艦刀を叩きつけてくる。

「どうした、この程度か？ アストなら余裕で捌いてみせたぞ！」

「まだまだー！」

対艦刀を防いだキラはアストからのアドバイスを思い出した。

《ユリウスと戦う時は攻めろ。防御に回ったら、即座に押し込まれるぞ》

「君のアドバイス通りだ。ならー！」

キラも意識を切り替え、デイザスターに対し攻勢に出た。

こちらもまたドラグーンを射出し、距離を詰める。

「ドラグーンの撃ち合いで戦う気か？」

「まさかー！」

キラは初めから接近戦をメインにして戦うつもりだった。

ユリウス相手に射撃戦は焼け石に水。

つまり活路は接近戦しかない。

アストからそう教えられていたキラはずっとその為の準備を進めていた。

ユニバース・フリーダムが近接戦を主眼に置いて設計されているのはコレが理由だ。

「ドラグーンは囷だ！」

「考える事は同じか！」

放出したドラグーンが進路を限定させ、二機は正面からすれ違う。

交錯する瞬間、二刀の刃が互いの装甲を傷つけた。

「浅い!？」

「やるな! アストに私の戦い方でも聞いてきたか! だがな、それも昔の話だ!」
デイザスターはさらに速度を上げ、フリーダム の背後に回り込む。
そしてビームサーベルを引く抜くと、そのまま投げつけてきた。

「なっ!？」

咄嗟にサーベルを避けるが、その隙に距離を詰めたデイザスターの蹴りがフリーダムの胴体に直撃する。

「ぐあああ! このオオ!」

大きく吹き飛ばされながらも、デイザスターにレール砲を炸裂させた。

「私に当てるとはな!」

「やっぱり強い!」

即座に体勢を立て直し、二丁のビームライフルでデイザスターを狙い撃つ。

だがデイザスターは不利な体勢のままスラストの角度を調整し、僅かな移動のみで攻撃を避けてみせた。

「ツ!? 射撃戦が不利なのは承知済み!」

フリーダムは砲撃を囫に回り込み、デイザスターに接近戦を仕掛ける。

「そっ!」

砲撃を避けた敵機目掛けて側面から斬艦刀を振り抜いた。

しかし流石はユリウス。

不利な状況にも関わらず、斬艦刀を捌き反撃してくる。

対艦刀の一太刀がフリーダムスの片翼数枚と一丁のビームライフルを挟り取った。

「甘いな！ 戦略を練り直してこい！」

「そちらこそ！」

腕部ナーゲルリングから放出したビームサーベルを下段から振り上げ、デザスターを逆袈裟に斬り裂いた。

そのまま立ち位置を入れ替えて距離を取り二機。

ユリウスは斬り裂かれた部分を見つめながら、高揚している自分を自覚する。

「損傷自体は大したことはないが……此処までやるとはな。それでこそ、キラ・ヤマトだ！ 私が倒すべき敵！」

「分かってはいたけど、想像よりも遥かに手強い」

アストは彼を相手によく相討ちに持っていったものだと感じてしまう。

「やはりお前は危険だ。お前という存在がユーレン・ヒビキの狂気を世界に示す事になる！」

「何を言っている！」

「分らんか？ 証明しているんだよ、お前の力と戦果が！ 奴の行い！ 研究！
その思想！ それらが『正しかった』というな!!」

最高のコーディネーター。

どんなに否定しようとしてそれがキラ・ヤマトが生み出された理由だ。

非人道的な手段で誕生させられたとしても、生み出された個体の能力は破格。

ならば、と同じような研究に手を出そうとする者は出てくる。

何故なら、キラ・ヤマトは此処で、この世界で、その力を示し続けているのだから。

「だからこそお前は此処で死ぬべきだ！ これ以上、狂気に触れる者が現れん内にな
！」

「勝手な事を！ 貴方だつて似たようなものだろう！」

キラはSEEDを発動、コックピット内のe. s. デバイスが起動する。

ビームライフルを発射しながら移動を開始したデイザスターはさらに速度を上げる。

デブリすら気に止めないその動きは狂気すら感じられる。

それに追隨するフリーダムもまた同様だ。

片翼を損傷しながらも、その動きに一切の乱れはない。

二機の速度は上がり続け、ビームライフルの撃ち合いも激しさを増していく。

「化け物染みた反応だな。だが、それだけか？」

デイザスターはデブリを蹴った反動を利用し、さらにスピードを上げた。

「デブリを蹴って加速!? どっちが化け物だよ!」

もはや神業としか言いようがない。

少しでもタイムリングがずれれば加速どころか、バランスを崩して動きを止めてしまう事になるというのに。

さらに厄介な事に蹴られたデブリがこちらを攪乱する役割を持っているという事。

お陰でキラはデイザスターを捉えきる事ができない。

ユニバース・フリーダムすら追い切れないスピードで動くデイザスターの一射が左肩の装甲を吹き飛ばす。

「ぐあああ!?! でも!」

事前配置しておいたドラグーンに反応したデイザスターを狙ったビームライフルが腰部を撃ち抜いた。

そしてバランスを崩した敵機に接近戦を仕掛ける、キラ。

先ほどまでとは比べ物にならない精度の斬撃が対艦刀をへし折り、デイザスターに再び傷を刻んだ。

「ッ、やってくれる!」

損傷しながらも引き抜いたビームサーベルがフリーダムのレール砲諸共右脚部を斬

り捨てる。

「ユリウス・ヴァリス！」

「キラ・ヤマト！」

デブリの中を駆け抜け、激突を繰り返した二機のモビルスーツはいつの間にかアポロン要塞近くまで接近していた。

「アレは……オーデイン!？」

ディザスターを弾き飛ばしたキラが見たのはアポロン要塞内部に不時着していたオーデインの姿だった。

近くいるイザナギと共に敵艦との砲撃戦を繰り返している。

「あのままじゃ」

「仲間を気にしている場合か?」

「ッ!？」

絶妙に配置されたディザスターのドラグーンがフリーダムを容赦なく狙い撃つてくる。

だがここでキラは神懸かり的な反応を見せる。

背後からの一撃をターンして躲し、側面に配置されたドラグーンをビームライフルで叩き落とした。

「精度はラウ・ル・クルーゼと同格か!」

「ラウならこの倍以上は簡単に操作してみせるさ。だが私には少数だけで十分!」

キラは数機を落としても撃ちかけられるドラグーンのビームを捌きながら、本体であるディザスターを狙う。

「コントロールを先に潰す!」

「潰せるのか!」

「こちらにだつてドラグーンはあるんだ!」

フリーダムに残っていたドラグーンをすべて放出。

ディザスターを囲むように配置する。

「ドラグーンで私は倒せんぞ!」

その言葉を証明するようにディザスターは配置されたドラグーンをビームライフルで落としていく。

しかしそれは百も承知。

キラはその間に残りの敵ドラグーンを撃墜して前に出る。

「近づけばドラグーンは使えないだろう、ユリウス!!」

ビームライフルが至近距離からディザスターの肩を吹き飛ばした。

「こんな戦いは無意味だ!!」

「意味ならある！ この先の未来にお前という人類の汚点を消し去る意味がな！」
同時に発射されたライフルがフリーダムの頭部の半分を消し去った。

「まだまだ！ メインカメラがやられたくらいで！」

キラはギリギリまで伏せていた一撃をデイズスターへ叩き込む。

それは最後に一つ残ったドラグーン。

伏せておいたその一つをデイズスターの下方から突撃させる。

「ッ!？」

ユリウスは接近戦を仕掛けるフリーダムが居る為、避けられない。

先端からビームサーベルを放出したドラグーンがデイズスターのスラスターを斬り裂いた。

「チツ、メインスラスターが！」

「これでも倒しきれないなんて」

キラは今ので勝負を決めるつもりだった。

ドラグーンをあえてデイズスターの周りに配置したのも、接近戦を挑んだのも、すべてはこの為の布石だった。

完璧な奇襲に近い攻撃になった筈。

しかしユリウスはあえて機体を前に出す事で致命傷を避けて見せたのだ。

メインスラスターを失いながらもアポロン要塞に不時着するデイザスター。

それを追うフリーダム。

敵の殺意を鋭敏に感じ取り、二機は最後の攻撃を繰り出した。

ビームライフルがデイザスターの頭部に突き刺さり、複列位相砲がフリーダムの腕ごと残った翼を消し飛ばした。

第43話 怨念を断つ

アルノルト達停戦派を乗せたシャトルはようやく月面都市コペルニクスを目視で確認できる位置までたどり着いていた。

しかし安心するのはまだ早かった。

操縦桿を握るレイの前には無数のモビルスーツが展開されている。

都市に向かう為には此処を突破する必要があった。

しかしシャトルには武装はついておらず、モビルスーツもない。

「迂闊に突っ込めば、すぐに落とされる」

どう切り抜けるべきか思案していたレイの肩をアルノルトがポンと軽く叩いた。

「……レイ、通信回線を開いてくれ。私が話をする」

「良いのですか?」

現在の議会がどういう方針で動いているのかは不明だ。

仮に統合軍についているなら、口封じとして撃墜される可能性もある。

「このままではどうにもならない。それにこれ以上時間をかければ、同盟軍が持たないだろう」

「了解しました」

通信回線を開きアルノルトがマイク片手にモビルスーツ隊に呼び掛けた。

「テタルトス月面防衛隊。私はアルノルト・ヴェルンシュタイン議員である。色々疑問はあるだろうが、急ぎ議会へ向かわねばならない。道を開けてもらいたい」

アルノルトの呼び掛けに戸惑ったように指揮官機のモビルスーツが動きに止めた。

《失礼だが、本当にアルノルト・ヴェルンシュタイン議員なのか確認したい。イクシオンまで同行してもらおう》

「そんな時間はない！ 急ぎ議会に向かわねばならないと言った筈だー！」

もしもイクシオンに同行すれば解放されるまでどれほど時間が掛かる事か。

《し、しかし》

尚も渋る指揮官。

焦りを抑えアルノルトがもう一度声をかけようとした。

そこで別の通信が入ってきたのか、指揮官は「少し待て」と視線をはずす。

《えっ？ わ、分かりました。……失礼しました、ヴェルンシュタイン議員。コペルニ

クスの発着場へ。車を用意しているそうです」

「助かる。だが、誰が許可を出した？」

《エドガー・ブランデル司令であります》

レイとアルノルトは思わず顔を見合わせる。

どうやらエドガーには話が通っているらしい。

「デイノ中尉か」

「多分。であれば彼女は無事な筈です。今の内に発着場に向かいます」

「頼む」

防衛隊の間を抜き、シャトルはコペルニクスに向けて舵を切った。



「邪魔だアアア!!」

咆哮と共に発射されるビーム砲。

ヴァニタス・ゼニスの複合火線兵装『スヴァログⅢ』の砲撃である。

スキュラ級の一撃ではあるが当たらないなら、何の問題もない。

容易く躲したニーナは砲塔を格納する一瞬を狙いレール砲を撃ち込んだ。

「ぐおおお!!」 な、何故だ! 何故、フリーダムでもない雑魚にこうも手こずる?」
レール砲の直撃を受け、吹き飛ばされたジェラールは怒りに任せて吐き捨てる。

「自己分析すらできなくなったら、終わりです。悪いですが、勝負を決めさせてもらいます、ジェラール・フィレオル」

「黙れ! 俺は! お、俺は……シリル・アルフォードで……ぐううう」

頭を押さえ痛みを耐えるジェラールにニーナは淡々と告げた。

「自分を見失ったものが戦いで勝てる訳ないでしょう!」

ジェラールは確かに強い。

その技量は地球軍最強と謳われるだけはある。

だが、それは通常の状態での話。

錯乱している今は隙だらけとしか言いようがない。

動きを読んだかのようなビームライフルの一撃がヴァニタス・ゼニスの腕に直撃する。

「な、何故?」

「まだ分かりませんか? まあ、答えを教えるほど私はお人好しではないので言いませんけど」

「貴様アア!!」

翼を広げるリベルテを狙い、再びビーム砲が発射される。しかしそれすらも掠める事すらできない。

「くっ!?!」

「無駄です」

ニーナは即座に接近してビームサーベルを振るい、残った腕を切り落とした。

「よ、避けられない」

「でしようね」

ニーナは戦闘からしばらくジエラルの異変に気が付いた。

最初はそれこそキラすら手こずる動きをしていたというのに、徐々に動きが乱れ始めた。

要はチグハグなのだ。

一人乗りのモビルスーツに二人のパイロットが座っているのと同じだ。

しかも意思統一されていない故に上手く機体が動かせていない。

あれなら新兵でも乗せておいた方がマシというもの。

どんな新型機も宝の持ち腐れである。

「おのれエエエ!!」

両腕を失ったヴァニタス・ゼニスの最後のあがき。

体勢を崩しながらも蹴りを繰り返す。

「読んでいると言ったでしょう！」

逆手に持ち替えたサーベルを斬り上げ、脚部を切断。

懐が大きく開いた所にブルートガングを突き込んだ。

ヴァニタス・ゼニスの腹部にブルートガングが深々と突き刺さり、装甲から色が抜け落ちた。

「お、俺は……だ、誰……お、れ、は」

かろうじて致命傷だけは避けていたジェラルルは出血と全身の痛みに気づかぬまま呻き続ける。

「……誰……」

呻いている間に指が当たったのかコンソールに置いていたプレイヤーから音楽が流れ出す。

聞いた事のある曲に不思議と安堵する。

これは内側から食われるような恐怖を忘れる為にジェラルルがいつも聞いていた曲だった。

「ああ……俺は……」

最後の最後。

ようやく取り戻した自分を離さぬように、ジェラルドはゆっくり目を閉じた。

「……さようなら、自分を忘れた哀れな人」

ニーナは素早くブルートガングを引き抜くと、味方の援護に向かう為、踵を返した。

◇

アポロン要塞内部に不時着する形で侵入したオーデイン。

容赦なく撃ち掛けられる敵モビルスーツからの攻撃により、エンジン部分は破損。砲塔も半数が破壊されている。

もはや撃沈寸前である事は誰の目にも明らかであった。

《アルミラ艦長、オーデインはすでに限界だ。退艦命令を》

イザナギからの通信にテレサは拳を握り込んだ。

長年愛着をもってきた戦艦の末路がコレとは。

自身の力不足が恨めしい。

だが――

「いえ、まだ早い。議員達が月に到着したという連絡は来ていません」

《しかしこのままでは》

セーフアスの危惧は理解している。

とはいえこのまま退艦してはイザナギの負担が大きくなってしまう。

せめて統合軍の動きを鈍らせる事さえ出来れば。

オーデインの現状と目的達成の為に必要なプロセス。

それらをすり合わせ、最適な答えを模索する。

「オーデインのエンジンは何基生きている?」

「え? えつと半分程度です」

「……陽電子砲の発射は可能か?」

「出力は半分も出ませんが撃つだけなら」

オペレーターの報告を元に考えをまとめていたテレサは覚悟を決めた。

「……陽電子砲発射準備。同時にエンジン臨界」

「艦長!?!」

《アルミラ艦長、それは》

「はい。アポロン要塞内部でオーデインを自爆させれば、かなりの打撃を与える事が出来る」

それで統合軍を混乱させられれば時間も稼げる上に、イザナギの負担も軽くなる。

「申し訳ありませんが、脱出したクルーたちの収容をお願いします」

《分かつている》

「総員退艦！ 陽電子砲発射を10分後にセット。我々はイザナギに向かう！ 直援のモビルスーツに護衛させろ！」

「ハッ！」

「これが最後だ！ ついでに全弾発射！ 撃ち尽くせ!!」

オーデインから発射された主砲が敵艦を薙ぎ払い、ミサイルがアポロン要塞に突き刺さる。

それを見届けたクルー達が急ぎブリッジから離脱していく。テレサもそれに続くように扉を潜ると、一瞬だけ振り返る。

「……今までご苦労だった」

色々な記憶が脳裏に蘇る。

しかし感傷に浸っている暇はない。

テレサはブリッジに敬礼すると素早く踵を返した。

◇

キラが目を覚ますと、何も映らないモニターが目に入る。

コックピット内に異常は見られないが、コンソールやモニターからは光が失われている。
た。

「どれほど意識を失っていたのだろうか？」

頭を振り、意識をはつきりさせるとキーボードを取り出した。

「戦闘はどうなった？ ユリウス・ヴァリスは？」

キーボードを素早く叩き、機体状態を確認しながら状況把握に努める。

「……機体はどうにもならないな。スラスターは幾つか生きてるけど、大破したも同
然か」

それでもデザスターは破壊し、ユリウス・ヴァリスはすでに動けない筈。

しかし友軍の戦闘は続いている。

せめて状況だけでも確認しなくてはならない。

「モニター……ついた！」

メインカメラが破壊されている所為か映像がずいぶん乱れている。

「外の様子を見るなら十分だけど」

結構流されてしまったようで、アポロンが少し離れていた。

オーデインは撃沈寸前。

イザナギがそれを守るように踏ん張っている姿が見えた。

「くそ！ この機体じゃ援護に行くことも！」

歯がゆい現状にコンソールを殴りつけるしかない。

だがそこでキラの願いを聞き届けたかのように、一つの陰が近づいてきた。

◇

オーデインの攻撃により振動が続くアポロン要塞。

今にも崩れ落ちそうな要塞内部をディザスターを乗り捨てたユリウスが淡々と進んでいた。

時折銃声のような音が聞こえてくる。

侵入した同盟軍と統合軍で撃ち合いを行っているのだろう。

しかしユリウスは全く興味の無い様子で積み上がった瓦礫を避け、天井ギリギリの位置を飛び越える。

泳ぐ魚のように器用な動きで進んでいくユリウスだが、その表情はお世辞にも良いものではなかった。

何かを懸念したような険しい顔。

拳を握りながらその視線は刃のように鋭い。

「……流石は最高のコーディネイターと称えるべきか。ディザスターを失う事になるとはな」

先ほどまでの戦闘を頭の中で反芻しながら通路を進んでいると広い空間に出た。

「ここも崩れているようだな」

ユリウスがたどり着いた場所はアポロン要塞の入り口の一つだった。

しかし何らかの爆発でも起こったのか入口は瓦礫で完全に埋まってしまっていた。

「格納庫は奥の方が……ん？」

通路から周辺を観察していたユリウスに気になるものが見えた。

入口から少し離れた場所。

そこにモバイルスーツと思われるものが崩落した瓦礫の下敷きになっているのだ。

「使えるな」

幸いな事にモバイルスーツに積み上がった瓦礫は大した量ではない。

手持ちの火器でコックピット周辺の瓦礫だけなら十分に排除できる。

爆弾を仕掛け、素早く物陰に飛び込んだ瞬間、大きな爆発が起きた。

「さて、上手くいったか？」

爆煙が晴れユリウスが顔を出すと計算通り、コックピットを塞いでいた障害物は排除

されていた。

しかし瓦礫の下から姿を見せたモビルスーツに思わず眉を蹙めてしまった。

「……ガンダムとはな」

複雑な心情を押し殺し、一応銃構えてコックピットハッチを解放する。

「パイロットは……生きている。女か？」

助けてやる義理はない。

だが――

「此処で放り出されれば命は無い……運が良かったな。貴様には付き合ってもらおう。情報が得られるかもしれないからな」

緊急用の簡易シートを取り付け、そこにパイロットを拘束する。

これで多少無茶な機動をしようとも、コックピットに叩きつけられる事はあるまい。シートに座ったユリウスはキーボードを取りだし、機体の把握を始めた。

「なるほど、この機体は言わばデュランダルの遺産の一つという訳だ。メインスラスターの消耗が激しい。戦闘の影響か……機体名は『アンフェール』」

操縦桿を握り、感触を確かめながら機体を起動させる。

「起動確認。VPS装甲、機体挙動、システム異常なし。まずは邪魔な瓦礫を排除する」

上半身を起こし、腕を上げると残っていた瓦礫が崩れ落ちる。

そして収束ビーム砲を発射。

ビームが入口を塞いでいた障害物を飲み込み、排除した。

「行くか」

アンフェールはスラストターを吹かし、宇宙へと飛び出した。

己の感覚に従いながら、目標を探す。

フリーダムは致命傷を受け、もはや戦えないのは確実。

しかしキラはまだ生きているし、戦意を失っていない筈だ。

「ならば来る」

ユリウスはそう確信していた。

戦場を抜け、待機していた母艦アリストテレスに連絡を入れる。

「私だ。アリストテレス、聞こえるか？」

《大佐、ご無事でしたか！》

「ああ。それより私のジンⅢを用意しろ。すぐに出る」

《は？》

オペレーターの返事を待たず、格納庫へ着艦する。

「大佐、この機体は……」

「統合軍の機体だ。中にパイロットもいるから捕縛しろ。丁重にな」

「ハッ！ 大佐、休まれないのですか？」

「ああ」

整備士の心配そうな声に大丈夫だと手を振ると、格納庫に立っているジンⅢに飛び移った。

これは通常のジンⅢとは違いVPS装甲を装備、スラスターの増設を行った強化型の機体である。

「ディザスターには遠く及ばんが、普通の機体よりはマシに動けるだろう」

装甲がパーソナルカラーである青紫に染まり、ユリウスは再び戦場へ出撃する。

「ユリウス・ヴァリス、出る」

母艦から飛び出したジンⅢはスラスターを最大出力まで上げて、加速する。

整備班が見れば卒倒しそうな、急加速。

それをユリウスは涼しい顔で乗りこなす。

進路上にあるデブリをビーム砲で消し飛ばし、アクロバットのような機動を取りながら状態を確かめると満足そうに頷いた。

「悪くないな。さて、状況は……」

テタルトス軍と統合軍が互角の戦いを繰り広げており、同盟軍はやや押され気味ではあるものの、粘り強く持ちこたえていた。

「流石に同盟は戦い慣れている」

同盟はヤキン・ドゥーエ戦役から不利な状況で戦う機会が多かった。

その経験が彼らを踏みとどまらせているのだ。

「キラ、どこだ？」

攻撃を仕掛けてきた敵機を瞬殺し、アポロン要塞へ近づいていく。

その時、一層巨大な爆発がアポロン要塞内部から起こり、炎が吹き上がる。

それに合わせたかのように一機のモビルスーツが近づいてきた。

「あれは……」

形状はズいぶん変わっているが、ユリウスにとつても因縁のモビルスーツに違いな

い。

操るパイロットも想像通りだ。

「最後の最後でその機体に乗ってくるとはな」

偶然か。

それとも運命なのか。

皮肉な気分になりながらユリウスは笑みを浮かべた。

そして相対するキラは青紫のジンIIIを警戒するように顔を強張らせる。

「ユリウス、新しい機体を用意して来たのか！」

キラはもう一度自分が搭乗している機体状態に目を向ける。

今、彼が乗り込んでいるのはフリーダムではなく、リベルテ・ストライクだった。

ジェラルドとの激しい戦闘を終え、駆けつけてきたニーナにフリーダムを任せリベルテ・ストライクを借り受けたのだ。

「ストライクは万全とは言えないけど、十分にやれる」

所々傷を負ってはいるが、戦闘には支障はない。

機体を扱う丁寧さは流石ニーナだ。

「行くぞー！」

二機が発射したビームライフルが装甲を掠め、同時に斬り込んだ大剣が火花を飛ばす。

「まさかストライクとは！　だがお前の最後の機体としてこれ以上相応しいものはないな！」

「お互い様だろう！」

素早く位置を入れ変えながら、激しく斬り結ぶ。

斬艦刀の一撃がジンⅢを斬り裂き、ビームライフルがストライクの装甲を吹き飛ばした。

「お前は此処で消えろ、キラ！」

「まだ拘るか！」

「当然だ！」

二機の性能はほぼ互角。

戦闘を重ねた分だけ、リベルテ・ストライクの方が不利だろうか。

背中に装備されたリベルテ・ストライカーはすでに全開。

アポロンの岩壁を高速移動するジンIIIをビームライフルで牽制しながらキラは食らいついていく。

「私が心変わりするだけでも思っているのか？ だとしたらふざけている！ 積み重ねてきた過去はお前が考えている以上に重い！」

それはもはや怨念と言っても差し支えない。

ユリウスから発せられる殺意にキラは改めて身震いした。

それだけの事があつたのだと理解している。

だが、それでも。

いや、だからこそ負ける訳にはいかなかった。

自分を大切に思ってくれる人達の為にも！

「うおおお!!」

爆炎の中を突っ切り、横薙ぎに振るうとライフルを斬り飛ばした。

「ッ!？」

「別に貴方を変えようなんて思っていない！　だが僕らの事情をこの先の未来に引きずる必要はない！」

「だからこそお前を消そうとしているのだ！」

二人の咆哮を表す発射されるビームの光が互いの機体に傷を負わせた。

高速ですれ違いながら、激しい撃ち合いを展開する。

「それこそ怨念だろう！　それで一体何を得た！」

「未来へ至る教訓と力だ！」

突き出された対艦刀の一撃がストライクの左腕を抉り、突き出した斬艦刀がジンⅢの脚部を斬り裂いた。

「その怨念は此処で断つ！」

爆炎を避けるように回り込んだキラはビーム砲でジンⅢの頭部を破壊し、斬艦刀片手に突撃する。

「やってみせろ！」

迎え撃つユリウスもまた対艦刀を構えて突き出した。

「ハアアアア!!」

「オオオオオ!!」

二機の激突。

爆炎に晒されながらも緩まぬ一撃が交錯する一瞬。

刃が互いの機体を貫いた。

そして次の瞬間。

二機のモビルスーツは刃を敵に突き刺したまま、アポロンの爆炎に飲み込まれ、姿を消した。

◇

アポロンの攻防が佳境に差し掛かった頃、アルテミス要塞では敵の進撃に備え、防衛戦力の展開が進められていた。

「大佐、八割方配置完了いたしました」

アルテミスの管制室で士官からの報告を受けたアスランは手渡された端末を拝見する。

「このまま進めてください。他に問題点は？」

「サリエル所属モビルスーツの配置が未だ」

「作戦を通知したなら放っておけばいい。彼らに関しては自由にやらせろとの命令だ

からな」

アスランは未だにサリエルを含めたファントムペイン組を味方と考えてはいなかった。

先の戦闘でも気になる動きを見せていた。

信頼して後ろから刺されたのでは目も当てられない。

「彼らの監視は続行するように命令を」

「ハッ！」

士官の一人が下がった所に所在無げに立っていたミレイアが近づいてくる。

「大佐」

「待たせて済まなかったな、ロスハイム准尉。先の戦闘では機体が損傷したと聞いているが、怪我はないか？」

アスランが安否を尋ねるとミレイアは暗い表情から一転、笑みを浮かべて頷いた。

「はい！」

「ならいい。次の戦闘も激しいものになるだろう。それまでしつかり体を休めておけ」

アスランは素早く端末を操作するとミレイアに差し出した。

「呼び出した理由はコレだ。君にはロールアウトした新型機に搭乗してもらう」

「私が新型に？」

端末に表示された機体にミレイアは目を輝かせる。

この機体は自分が搭乗していたアルタイルとはまるで別物だった。

「ああ。研究者達から君が最も適正が高いと報告があつた。後で整備班へ顔を見せておくといい」

「分かりました」

ミレイアはこれでアスランの力になる事が出来ると拳を握って気合いを入れる。

しかしすぐに悩むように俯いた。

「悩みごとか？ なら解消しておいた方が良い。でないとな死ぬ事になりかねない。俺で良ければ相談に乗るが？」

「えっと、大佐は——」

「お話し中、失礼します！」

アスランとミレイアの間にラデイスが割り込んできた。

「整備班からロスハイム准尉を連れてくるように言われました」

「そうか。ミレイア、相談事については」

「いえ……大丈夫ですから」

「何かあれば相談に乗る。出来る範囲で力になるから、何時でも言ってくるといい」

「はい！」

アスランに敬礼し管制室から退出するとミレイアがラデイスに嘯み付いた。

「どういうつもり、ラデイス？」

「そつちこそ、何を言うつもりだったんだよ。前にも言っただろ、大佐はお前が思っているような人間じゃない」

「またそれ」

「そんなことよりも見てたか、ミレイア。俺はあのフリーダムと互角に戦ったんだぜ
！」

苛立たしげにミレイアはラデイスを睨みつける。

「いい加減にしてよ！ アンタの事なんてどうでもいいし、私が何をしようがアンタには関係ないでしょ！」

「ミレイア、俺は！」

ミレイアはラデイスを振り払い、そのまま駆けだしていく。

「……くそ。もつと戦果が必要だ。もつと、もつと！」

走り去るミレイアの背中を見つめながら、ラデイスは血が滲む程強く拳を握った。

◇

戦闘準備を進めてたのはアルテミス側だけではない。

攻撃していた『グラオ・イーリス』も仕切り直しを迫られていた。

レクエイムの発射による艦隊の損耗。

部隊の再編成や作戦の練り直し。

指揮を任されているイザークにはすべてが頭の痛い話だった。

「全く、こんなカードを伏せていたとはな。アスランらしいと言えはらしいが」

モニターに映し出されていたのは艦上部に特殊な装備を設置してプレイアデス級戦艦だった。

円形の装置を起動させる事でゲシユマイデイヒパンツァーを展開、出力調整したレクエイムのビームを歪曲する。

レクエイムはフルパワー時の威力には及ばないだろうが、直撃すれば艦隊はひとまわりもない。

「コレの破壊は必須事項だな。敵艦の探索は？」

「フラガ一佐とホーク中尉の部隊が偵察を行っています」

「戻ってきたらすぐにブリーフィングを始める。それまでは各自休ませておけ。……最後の休息时间になる」

「了解」

イザークがブリッジで頭を悩ませていた頃、アストは自室のベッドに座りヴィクトリアから渡されたディスクの中身を確認していた。

入っていたのは『能力移植』に関する詳細。

そして幾つかの重要な事柄のデータがまとめられている。

「……お前は本気で抗うつもりだったんだな」

データは念密な調査の上で精査したものだろう。

そうでなくてはこれほどの情報を集める事は難しい筈だ。

ヴィクトリアがどれだけ本気だったのかが否応にも伝わってくる。

「そしてヴェクト・グロンルド……奴については予想通りか」

静かに怒気を発しながら記載されていたヴェクト・グロンルドの情報に目を通した。

予想通り奴は昔、メンデルで研究を行っていたらしい。

しかし研究者仲間からも異常であると判断された奴はメンデルから出奔。

研究者名簿からも除名されたらしい。

それからは月のコペルニクスで移り住み、研究を続け、ヤキン・ドゥーエ戦役後はテ

タルトス月面連邦国に所属。

強化兵や新型モビルスーツのOS開発などに関与。

一定の実績を残したものの、ユニウス戦役終盤、混乱に乗じ姿を消したらしい。

「アムステルダムでアスランが探していたのは奴か」

流石にテタルトス軍の機密事項に関しては明記されていなかったが、これまでの情報を合わせるとそういう結論になる。

「ヴェクト・グロンルンドは必ず始末する。その前に目の前の戦いに集中しないと」
一旦、情報の閲覧を止め、別の端末を取り出すと先程の戦闘データを呼び出した。

確認すべき事は山ほどある。

e. s. デバイスのデータ収集。

ドラグーンユニット『フリージア』の動作確認。

イノセントガンダムの機体調整。

休んでいる暇など欠片も――

「アストさん!」

自室の扉が開き、そこにはマユが立っていた。

「ツ!!? マユ。どうした?」

ジト目でこちらを睨みながら、近づいてくる。

どうやらかなりご立腹らしい。

「どうした、じゃありませんよ！ 艦長からも偵察隊が戻るまで休めと言われたでしょう！」

「分かっているさ。だが、これだけは済ませておかないとな」

マユは怒った顔から一転、不安そうな表情を浮かべるとアストの胸に飛び込んでくる。

勢い余った二人はそのままベッドへ倒れこんでしまう。

「どうした？ 最近やたら甘えん坊じゃないか」

「子供扱いしないでください。私だってもう大人なんですよ」

拗ねたような声を出しアストの胸元に顔をうずめてくる。

確かに感触的には十分に大人だ。

あえてどこがとは言わないが。

「私、心配なんです。アストさんがアスラン・ザラに引つ張られてるみたいで」

「引つ張られてる？」

「はい。あの人の拘りというか執着にアストさんも引きずられているような気がします」

「……そうか。俺は大丈夫だよ、そこまでアスランに固執しちやいなささ」

アストが固執しているとしたら、アスランよりもクルーゼの方がだ。

奴だけは必ず倒さなくてはならないのだから。

「絶対、無茶しないでください」

「ああ」

マユの気遣いに感謝しながら、優しく頭を撫でた。

手入れが行き届いているのか、サラサラで滑るように指の間を滑り落ちていく。

少し癖になりそうな、変な気分になりながらアストはマユを抱きしめていた。

◇

艦隊を立て直し、部隊を再編制したグラオ・イーリス。

帰還した偵察機からの情報を得たイザークは主要メンバーを集めてブリーフィングを行っていた。

主要メンバーと言ってもモビルスーツ隊を率いるムウや特務隊隊長のハイネなどは勿論副隊長クラスも招集され、ブリーフィングルームの人口密度はとんでもない事になっていった。

ハッキリ言って狭い。

「見てもらった通り、偵察機から得られた情報は以上だ。アルテミスを基点に三方向に敵艦が展開されている。まずはこれを叩く必要がある」

「でなきゃレクイエムで俺達を撃ちたい放題って訳か」

ユニウス戦役で使用されたゲシュマイディヒパンツァー搭載の廃棄コロニーよりも機動力は遙かに上。

配置も取りやすく、戦艦故に守りやすい。

「まずはこれらの艦隊をヴェステンフルス、ホーク、フラガの三名が率いる部隊で潰してもらいたい」

「正面はどうするんだ？ これらが囷に使われる可能性だってあるだろう？」

ムウの鋭い指摘。

確かに戦力を分散しすぎれば、正面から攻められた際に対応できない。

「フラガ一佐の指摘の通りだ。勿論、アルテミス側にも攻撃を仕掛けるつもりだ。いくら戦艦を潰してもレクイエムが健在では意味がないからな」

イザークから提示された作戦の概要はこうだ。

ミサイクルによる波状攻撃。

だがそれは囷でミサイクルに紛れモビルスーツ隊をアルテミスの懐に送り込みレクイエムを破壊するというものだ。

「当然だが、これに気が付かれない為に正面にもモビルスーツを配置する。仮にこれが失敗しても艦を叩いた別動隊を回り込ませる」

「それも失敗した場合は？」

「アルテミスに直接乗り込み、コントローラーを奪うかエネルギープラントを破壊するしかない」

告げられた作戦概要。

それは全員に決死の覚悟を抱かせるのは十分なものだった。

「おそらくこれがこの戦争最後の戦いになるだろう。その分、激しさも増す。ここに居る全員が命を捨ててようやく目標達成出来るか、否かだ」

イザークの言葉に改めてこの作戦の危険さが伝わってきた。

「……生きて戻れなどと無責任な事は命令を下す立場の俺が口にする資格はない。言えるとしたら一つだけだ」

傍で控えていたアストには見えた。

イザークが小刻みに拳を振るわせているのが。

それは恐怖ではない。

指揮官として彼らを見送る事しかできない無力さに憤っているのだ。

決して忘れはしないと、胸に刻みつけるように全員の顔を一通り見渡す。

「勝つぞー！」

実にシンプルな言葉だった。

それ故に胸に響いてくる。

皆が顔を見合わせ、笑みさえ浮かべて立ち上がる。

「了解!!」

全員がイザークに向かって敬礼した。

この場に帰ってこれる者が何人いるだろう？

パイロット達の大半が死を覚悟している筈だ。

それでも。

自分が倒れても他の誰かに託すことが出来る。

彼らもまた散っていった誰かから受け継いできたからこそ、それを知っている。

だからアストもそれに倣って敬礼する。

此処に戻れなくとも、誰かが自分の意思を受け継いでくれると信じているから。

第44話 蘇った宿敵

戦闘準備を整えたアルテミスは進軍してくる同盟を警戒し臨戦態勢に入っている。

アスランもまたパイロットスーツを着込み、前線で指揮を執る為に出撃しようとしていた。

「そうだ、周辺に機雷を散布し、策敵を怠るな。同盟の機体がいつ懐に現れるかわからないぞ。それからサリエルの方も頼む。……ん、アレが」

指示を出しながら格納庫に足を踏み入れたアスランの前に一際目立つ巨体が目に入った。

肩から伸びる二対のバインダー。

各所に設けられたビーム砲。

どう見ても普通のモビルスーツとはかけ離れている。

ZGMF-X95SE 『ティアマト』

ユニウス戦役で破壊されたレヴィアタンをテタルトスが回収、データを収集して再設

計した機体。

レヴィアタンよりも小型化され武装も減らされているがその分機動性は向上し、安定した性能を発揮できるようになっている。

「適正があるとはいえミレイアに使いこなせるのか？」

やや不安を感じないでもないが、他に候補がないのだから仕方がない。

「研究者たちはミレイアにさらなる強化を施すと息巻いていたが……」

そこに丁度乗機に向かっていたラデイスの姿を見つけた。

「ラデイス」

「た、大佐。何か？」

あからさまに不満げな表情で視線を逸らす、ラデイス。

何時もの反抗かとも思ったが少し違うように感じる。

ラデイスの視線に籠っているものは、強烈なまでの敵意。

だが、アスランはそれにはあえて触れず、いつも通りに声をかけた。

「ミレイアは新型だ。お前がフォローしてやれ」

「分かっていますよ……ですけど生憎、慣れてないので……どうやったら大佐みたいに女性を上手く扱えるようになるんでしょうかね？ 教えていただきたいですよ」

「何？」

明らかに挑戦的な物言いに流石のアスランも刺々しい声になってしまふ。

「いえ、色々噂を聞きましたので。ラクス・クラインとか、レティシア・ルティエンスとか。是非ご教授いただきたいものです。そうすればミレイアの事も——ツ!?」

ラデイスの言葉は続かず、凍り付いたように口が動かない。

「どうした続けるよ」

「っ!」

アスランの目は何時もとは比べ物にならない程、冷たい怒気に満ちていた。

「……お前がどんな噂を聞いたのかは知らない。質問に答える気もない。だが、上官に対しての口の利き方くらい覚えておけ」

「くっ、俺はミレイアを」

「振り向かせたいというならそうすればいい。お前の力でな」

こちらには目もくれずそのまま立ち去るアスランにラデイスは激しい屈辱を味わっていた。

「ちくしょう……俺が、気圧されるなんて」

一瞬でもアスランの怒気に飲まれかけた自分が情けない。

「ラデイス、出撃だぞ!」

「……分かってるよ」

整備兵から急かされ、ラデイスは自身の機体に取り込んだ。

アルタイルにはタキオンアーマーが装着され、防御力と機動性の向上が図られている。

「よし、この機体なら前以上に動ける筈だ」

《進路クリア、ティアマト、発進しろ》

「了解。ティアマト、発進します！」

出撃するミレイアの声を聴きながら、ラデイスは操縦桿を握りしめる。

「……アンタに言われるまでもないさ。ミレイアは俺が守る！ 邪魔する敵はすべて消してやる！」

《アルタイル、出ろ》

「了解、ラデイス・グエラ出るぞ！」

ティアマトの後に続くようにアルタイルも出撃する。

ラデイスの滾る思いを現すように殺意が機体から滲み出していた。

◇

作戦時間が間近に迫るフォルセティの格納庫。

モビルスーツハンガーに設置された機体が解放され、次々と宇宙へ出撃していく。

そんな中、アストもまた出撃の為、イノセントの最終調整を行っていた。

「各パラメータ調整終了、e. s. デバイス正常稼働、ドラグーンユニット『フリージア』設置完了、すべて異常無し」

「アレ、まだ調整してたんですか？」

顔を上げるとヘルメットを脇に抱えたルナマリアがイノセントのコックピットに上半身を乗り込ませていた。

「今、終わった所だ。それでどうしたんだ？ もうすぐ出撃だろう？」

「出撃前にアレンの顔を見に来たんです」

そのままコックピット内に踏み込んで来ると、顔を近づけてくる。

「で、何があったんです？ あの回収してきた機体に乗ってた人は知り合いなんですか？」

「どうやらユングヴィを回収してきた時の様子からそれとなく事情を察しているらしい。」

「目ざといな」

「パートナーですから」

得意そうな顔で笑みを浮かべるルナマリアにアストも苦笑する。

どうも隠し事をしてても彼女には通用しないようだ。

「詳しい事は後で話すが例の件で少し進展があった」

それだけで察したようでルナマリアの表情も真剣なものに変わる。

「……なるほど。まあ隠そうとしなかつただけいいです。ちゃんと後で説明してもらいますからね」

「分かつてるさ」

本心から言えばルナマリアを巻き込みたくない。

だが言っても聞かないだろう。

「それさえ聞ければ十分です。戦闘では無茶しないでくださいよ。戦艦を叩いたらすぐに援護に行きます」

「頼りにしている」

これは本音だ。

これほど長い時間一緒に戦ってきたのはキラを除けばルナマリアだけ。安心して背中を預けられる相手も必然的に彼女になる。

「今日はなんだか素直ですね」

「俺は何時も素直だ」

「ええ？」

やたら失礼なりアクションをされた気がする。

「お前な」

「冗談ですよ、冗談！ でも本当一人で突出しないように！」

ルナマリアはそのままアストに顔を近づけ、頬に軽くキスをする。

「では後で」

ウインクし自機へと向かうルナマリアの背を呆然と見つめていたアストは我に返ると無自覚に頬を摩っていた。

「アイツ……」

彼女なりにアストの緊張を解してくれたのだろう。

いつの間にか肩の力が抜け、気分が軽くなっていたのを自覚する。

「肩肘張っても駄目だな。マユにも釘を刺されたばかりだし」

次々と出撃していく友軍機を見守り、イノセントもカタパルトへ運ばれていく。

《ヴェステンフルス隊、フラガ隊、ホーク隊は目標ポイントへ向かった。お前も頼む

ぞ、アスト。注意を引く為、派手に暴れてやれ》

「了解」

《アストさん、気を付けてください》

「マユも。セリスも無茶はするなよ」

《アレンにだけは言われたくないですけど。でも了解です！》
マユ、そしてセリスは艦隊のミサイル攻撃に合わせアルテミスに接近する役目を担っていた。

ハツキリ言って、正面から対峙するアストなどより遥かにリスクの高い役割だ。

それでも二人の実力ならきつと大丈夫な筈。

そう信じるしかない。

《進路クリア、発進どうぞ！》

カタパルトが点灯し、オペレーターからの合図を聞くとアストはフットペダルを踏み込んだ。

「アスト・サガミ、ガンダム、行きますー！」

イノセントが宇宙に飛び出す。

そして用意してあった移動用ブースターを装着し、アルテミスの方へ加速した。

《ミサイル発射！ 各モビルスーツ隊は手筈通りに行動せよ！》

フォルセティから発射されたミサイル群が一斉にアルテミスへ殺到する。

アレは囷だ。

あと何回かミサイルによる攻撃を行い、その中に紛れマユ達が進撃する事になっている。

「マユやセリス達が動きやすくなるようにしないとな！」
アストは先行したモビルスーツ隊を追いながら、アルテミスから出撃してきた敵機の方へ意識を集中し始める。

「派手にやれとの事だし、遠慮なく行かせてもらおうぞ！」

スラスターを噴射させたイノセントはビームライフルを構え戦場へ突入する。

「そー！」

引き金を引き、ライフルから発射された光線がH・アガスティアの胴体を貫通した。

「イノセントか！」

「この先には行かせん！」

ジンIIのバーストコンバットから発射されたミサイルを機関砲で排除。

ビーム砲とライフルを撃ち出し、二機を撃墜する。

さらに編隊を組んだリゲルが四方から襲いかかってきた。

「流石、統合軍だな。連携も上手い！」

隙のない射撃を避け、前方へ加速する。

三機とすれ違い様にビームサーベルで素早く同時に斬り捨てた。

しかしすぐに別の三機編隊が近づいてくるのが見えた。

「……単機では向かって来ず、必ず三機以上の編隊を組んでくる。アスランの指示か」
敵機の攻撃を回避しつつ、ビームライフルで射撃。

編隊を崩しつつ、サーベルで対処する。

「何!?!」

素早く腕や足を切られ、敵モビルスーツがバランスを崩した。

「そっ!」

敵の編隊が乱れ、浮足立った敵をビームライフルで撃墜する。

しかし撃墜されたモビルスーツの残光から新たな敵影が迫ってきた。

「次から次に」

本命はこの先にいるのだ。

こんな場所で消耗しては行られない。

「しかしこれでは味方の部隊も援護が必要だな。ルナマリア達が敵母艦を叩けば状況も変化するかもしれないが」

ナーゲルリングでリゲルを裂き、グレネードランチャーが味方機に攻撃していたジンIIを吹き飛ばした。

「良し、このまま——ッ!?!」

攻撃に気づいたアストは咄嗟に機体を上昇させる。

そのすぐ後に強烈なビーム砲が今までいた空間を薙ぎ払った。

さらに展開された敵ドラグーンにより味方機が次々と撃墜されてしまう。

「これは……」

肌突き刺さるように感じられるもの。

これは殺意だ。

だが熟練のパイロットにしてはあまりに素直すぎる。

「アスランでも、クルーゼでもない。誰だ？」

イノセントの前に現れたのはミレイアの駆る新型機『ティアマト』だった。

「通常のモビルスーツサイズを上回る大きさ。あの火力は侮れない」

直ぐ傍にはラディスのアルタイルの姿もある。

「傍にいる機体は強化兵用のモビルスーツか」

「気をつけろ、ミレイア！ 奴だ！ ガンダムだ！」

「言われなくたって！」

ミレイアも当然分かっている。

目の前にいるイノセントガンダムこそが、アスランを脅かす元凶である事を。

「大佐の所へ行くつもりでしょう。そうはさせない!!」

肩から伸びるバインダーに搭載されたビーム砲がイノセント目掛けて発射される。

従来のものとは出力が違う。

アンチビームシールドでは防ぎきれない。

アストはすぐさま回避運動を取り、ライフルで牽制する。

「逃がさないよ、アレン！」

「その声は……ミレイア・ロスハイム!？」

ティアマトから聞こえてきた意外な人物の声にアストは息を飲んだ。

「君が何故、統合軍のパイロットに？」

「貴方には関係ない！ 私が大佐を守る！」

ビームを躲したイノセントに今度がドラグーンを差し向けてきた。

「ミレイア、やめろ！ ケイは君を」

「うるさい！」

ドラグーンの砲撃を避けるイノセントに想像以上の速度で追いついたティアマトは引き出したロングビームサーベルを叩きつけた。

「私に弟なんていない！」

「聞く耳持たずか」

ナーゲルリングでサーベルを弾き、ビームライフルのトリガーを引いた。

至近距離からの一撃がティアマトの装甲を浅く傷つけ、同時にドラグーンを撃ち落と

す。

「くう、ドラグーンをこうも簡単に!？」

「……付き合つてられない」

アストの目は冷たくティアマトのコックピットに狙いを絞った。

ケイには悪いが、此処は戦場。

戦いの場で手加減できるほど器用ではない。

躊躇いなくティアマト本体を狙つて銃口を向ける。

しかしそれをさせまいと回り込んだアルマイルが攻撃を仕掛けてきた。

「貴様さえ倒せば！ 大佐だろうが、黙らせられる！」

シールド内臓の三連ビーム砲が火を噴く。

「この感覚は……あの時の男か！」

飛びのいてビームを回避したアストはライフルで反撃した。

「当たるか！」

以前よりも攻撃を回避したアルマイルの動きは良くなっている。

「ずいぶん場慣れしてきたな」

それだけパイロットが腕を上げたという事だろう。

「そっだ！」

腹部から発射された複列位相砲。

それを機体を寝そべらせ回避したアストはそのままバズーカ砲を発射した。

「ッ!?!」

咄嗟にシールドを囮に砲弾を防いだラデイスは屈辱のあまりコンソールを殴りつける。

今の攻防で仕留めるつもりだった。

それが逆に撃墜されかかるとは。

「クソオオオ!!」

ティアマトの攻撃から逃れるイノセントを睨むその視線には怒りを越え、憎悪が籠っていた。

「落としてやるぞ、ガンダム!」

「ラデイス、一人で突っ込みすぎ!」

ティアマトの発射した対艦ミサイルがイノセントの進路を塞ぐように降り注ぐ。さらにリゲルの編隊まで襲い掛かってきた。

「チツ」

機関砲でミサイルとリゲルを追い散らす。

「逃がすと思うか!」

アルタイルのドラグーンがイノセントに襲い掛かった。

リゲルの編隊から繰り出されるミサイルの雨に周囲を飛び回る無数の砲台。ただ躲すだけでは追い詰められてしまう。

「仕方ない」

アストは温存しなかった装備の使用を決断する。

イノセントは背中から専用のドラグーンユニット『フリージア』を射出した。フリージアで敵のドラグーンを撃破。

リゲルの連携を崩し、包囲に穴を空ける。

「どけー」

そのまま加速。

敵とすれ違う瞬間、体勢を乱したりゲルの腹をナーゲルリングで斬り払う。

編隊は完全に崩れた。

アストは作り出したスペースに機体を突入させ敵の追撃を逃れた。

「大佐の下へは行かせない、アレン！」

一時は引き離れたティアマトが追いつがってきた。

「追ってきたか。子供の遊びに付き合うつもりは無い」

シールドを背後に向けてビーム砲を発射し、ミサイルを迎撃する。

「貴様は俺が倒す！ そうすれば!!」
アルタイルのドラグーンが再びイノセントを囲み、進路上へミサイルが撃ち込まれた。

「くっ、しっしっ」

イノセントも再びドラグーンを射出。

守るようにフィールドを展開し、ビームライフルを発射していく。

飛び交うミサイルとドラグーン。

群がる無数の敵モビルスーツを相手取りイノセントは激闘を繰り広げていった。

◇

フォルセティから発射されたミサイルは一直線にアルテミスへと向かっていく。

「懲りもせずにミサイルでの攻撃か」

並み居るミサイルの嵐の矢面に立ったのはアスランのユースティアガンダムだった。

迎撃の為の部隊はすでに配置済み。

アスランは自分の担当範囲だけ守っていれば良い。

「行け」

背中のリフターからドラグーンユニットを切り離し、ミサイルの迎撃に向かわせた。複数の目標を同時に捕捉。

「落ちろ」

捕捉したミサイルを一齐にビーム砲で風ぎ払った。

撃ち抜かれたミサイルは大きな光の華となって宇宙に散る。

その光に照らされながら、アスランは眉を潜めた。

「これで終わりか？ いや、そんな筈はない」

あまりに呆気ない攻勢ではあったが、何かしら目的があるとみるべき。

アスランの懸念が的中したかのように、再び新たなミサイル群がアルテミスに向かって迫ってきた。

「何度やろうが、無駄だ。アルテミスには届かない」

再びドラグーンで迎撃する。

しかし今度は先程とは結果が違った。

ミサイルを撃ち落とした瞬間、視界を塞ぐスモークが周辺を包み込んだ。

「スモーク!?!」

そして立て続けに次のミサイル群が迫ってくる。

おそらく先のミサイル群よりも僅かな時間差をつけ、発射してきたのだろう。「この戦いは……」

ミサイルを迎撃しながら敵指揮官の作戦に妙な既視感のようなものを感じた。指揮の執り方の癖のようなものが、頭に引つ掛かるのだ。

心当たりを思い起こしていると脳裏にふと昔の光景が浮かんできた。

「まさか……イザークなのか？」

この戦場で相見えるとは思っていなかった。

道を違えたかつての仲間。

もう二度と道は交わらず、次に出会えば命のやり取りを行う敵同士。

なのにアスランの口元には笑みが浮かんでいた。

昔からイザークは何かとアスランに突っかかってきた為、戦略シミュレーションや

チェスなど色々な事で勝負してきた。

不謹慎ではあるがその事を思い出し、懐かしくなってしまった。

「……各艦、各モビルスーツ、ミサイル迎撃！ 時間差で来るぞ！ シールド装備の機

体はレクイエムとエネルギープラントを守れ！」

エネルギープラントとレクイエムを守るように数機のバウが立ちふさがる。

腕に装備されている盾は通常のものとは明らかに違う。

それはかつてシグーデイバイドと呼ばれた機体に装備されていた『オハン』と呼ばれた武装だった。

掲げたオハンから発生した巨大なシールドがレクイエム、エネルギープラントを守るように展開される。

「あのシールドはミサイルでは突破できないぞ」

ドラグーンによる砲撃で迫るミサイル、すべて叩き落とす。

迎撃体勢は整い、万が一の場合に備えた防衛も展開済み。

もはやスモークが展開されようが、時間差でミサイルを撃ち込まれようが問題にならない。

だが予想外にも同盟艦隊からは再びミサイルが発射されてくる。

「第四波!? 通用しないと分かっているながら……」

些か腑に落ちない。

しかし黙っている訳にもいかず、ドラグーンで再びミサイルを撃ち落とした。

そこで異変に気がついた。

落とした数基には何の手応えもなく、大した爆発も起きなかったのだ。

「デコイか？」

敵の策に間違いない。

それを見破る為、思考を巡らせていると、防衛部隊からの緊急通信が入ってきた。

「大佐、熱源急速接近!」

「何!」

下方から発射されたミサイルがアルテミスへ直撃する。

見れば数機のモビルスーツが攻撃体勢に入っているのが見えた。

「この距離まで接近されながら気がつかなかった……ッ!?　そうか、初めからモビルスーツをアルテミスに接近させる事が目的だったか」

ミサイルによる攻撃はこちらの注意を逸らす為の罠。

アスラン達を引き付け、熱源で発見されないよう、機体を停止状態にしてモビルスーツを接近させたのだろう。

デコイと思われたミサイルは運搬用のブースターの役割を持ち、展開したスモークはモビルスーツの機影をギリギリまで捉え難くする為のものだったのだ。

「やってくれるな、イザーク!」

かつての仲間の手腕に惜しみ無い称賛を送ると、接近してきた同盟機の迎撃する。

「フリーダム……マユ・アスカ。そしてアイテルの改良型、セリス・ブラッスールか」
同盟を代表するエース達。

彼女達の接近をこれ以上許せば、構築した戦線がズタズタにされてしまう。

「アルテミスには接近させない！」

ビームサーベルを両手で構えると、二機のガンダムを相手取り戦闘を開始した。

◇

激戦の続くアルテミス攻防戦。

誰しもが戦闘に集中する中、アルテミス内部にある港で未だ出撃する気配の無い戦艦が接舷されていた。

元フアントムペインの旗艦サリエルである。

彼らとて遊んでいる訳ではない。

ただ準備が整うのを待っていたのだ。

「カース様」

格納庫にて準備が整うのを待っていたカースにNo. Iが声を掛けてきた。

「どうした？」

「現在準備を進めようとしているのですがザラ大佐の監視が厳しく……」

「ふむ」

カースは顎に手を当て、どこか楽しげに呟いた。

「……昔はもう少し感情的だったかな。大人になったという事かな、アスラン。モビルスーツの方はどうか？」

「はい。そちらは概ね準備が完了しております。しかし——」

No.1が珍しく言い淀む。

「どうした？」

「……エリニスをまだ使われるのですか？」

「不満か？」

「不安定過ぎます。暴走の危険も大きい。結局、ヴィクトリア・ランゲルトについても

——そんな彼女に『アレ』を任せるなど」

No.1の視線の先にあるモニターに映り込んでいるのは格納庫には収まりきらない機体だった。

強力な機体ではあれどその分、アレをエリニスに任せるとなればリスクが高まる。

しかしカースは涼しい顔で首を振った。

「ヴィクトリアの件を気にする必要は無い。博士には私の方から報告しておいた」

「しかしエリニスは」

「問題はないさ。処置は施してある。それよりも準備が整ったというなら、我々も出るぞ」

「……了解しました」

カースは珍しくパイロットスーツを着込むと格納庫に立つ、自身の機体の方へ足を向けた。

その機体は半円形のバックパックを背負い、幾つかの砲塔を装着している。

「カース様、今更機体の件は心配いらないとは思いますが無理だけは……」

「ああ。分かっている」

No.1に手を振り、コックピットに乗り込むとサリエルのブリッジへ通信を入れた。

「ニコラス、サリエルの今後の動きについては状況次第だ。判断は任せる」

《了解しました》

機体に接続されていた配線が外され、装甲に色が付いた。

「さて、決着をつけようか、ムウ。そしてアスト・サガミ」

ハッチが解放され宇宙までの道程が顔を出す。

外では戦闘の光が絶え間なく続いている。

それを見たカースは楽しげに笑みを浮かべると自らも戦闘に身を投じる為、フットペダルを踏み込んだ。

「カースだ。プロヴィデンス、出るぞー！」

かつて宇宙に名を馳せた天帝が再び戦場に姿を見せようとしていた。

第45話 蠢く戦場

アルテミスに進軍する『グラオ・イーリス』艦隊。

彼らにとつて目下最大の脅威と言えるのはレクイエムによる砲撃だった。

威力もさることながら、厄介なのがゲシユマイデイヒパンツァーを装備させた戦艦の存在。

アレを戦場の好きな位置に配置すれば、どこに敵がいようと狙撃できるからだ。

故にどれだけ早くそこを落とせるか。

それが今後の戦局を左右する事は誰の目にも明らかだった。

「目標確認。結構な数があるみたいだな」

ムウの駆るアカツキを中心とした部隊は特殊装備のプレイヤーアデス級を目視で捉えていた。

「奥にいる特殊装備の艦を守る為に三隻の戦艦が護衛とはな」

「それだけアレが重要って事でしょ」

「ルナマリアの言う通りだな。少なくともアレを落とせば狙い撃ちされる事だけは無くなる訳だ」

追隨していたハイネとルナマリアがムウの独白に口を挟んできた。

ハイネの口調はお世辞にも明るいとは言えない。

気持ちは良く分かる。

正直、護衛部隊は予想を上回る数だったからだ。

「二人共！ 氣後れしても仕方ないでしょ!! さっさと終わらせてアレンの援護に行かないといけないんですから！」

発破を掛けるルナマリアにハイネもムウも若干引き気味に頬を引きつらせた。

「相変わらず勇ましいな、お前は」

「可愛い顔してるのにねえ。それじゃ男が寄って来ないでしょ」

「余計なお世話！ 私はアレンの補佐で手いっぱいです！ そんなくだらない事言っている暇には敵の一機でも落としてください！」

「はいはい。ま、おふざけはこの辺にして集中しますか。全機、予定通り目標は敵特殊艦だ！」

「了解!!」

ムウの号令に合わせ各隊長が率いる部隊が目標へ向かっていく。

「まずは周りの邪魔な連中から排除するぞ」

先行したアカツキの背中から誘導機動ビーム砲塔が分離される。

素早く敵モビルスーツの死角へ移動した砲塔は容赦なく攻撃を開始した。

「数だけ居たってな！」

砲塔の動きについていけない敵機はあっけなくコックピットを貫通される。

「ドラグーンか!？」

「全機、対ドラグーン陣形!!」

飛び回る砲塔に合わせ距離を取りつつ、バーストコンバットを装備したフローレスダガーが迎撃を図る。

「おいおい、迂闊だろー！」

ムウはビームライフルでフローレスダガーを撃ち抜いた。

陣形を崩され動揺する、敵モビルスーツにビームライフルを連射。

困むドラグーンの砲撃が残った敵をすべて薙ぎ払った。

「ドラグーンに気を取られすぎでしょ」

ドラグーンの対策は昨今でも行われている。

しかしそれでも普通のパイロットにドラグーンの対応は難しい。

動き回る砲台へ意識を集中しすぎれば、他への注意が疎かになるのは当然なのだか

ら。

「くそー！」

「本体を狙えー！」

ドラグーンに対するもう一つの対策。

それがコントロールを行っている本体の撃墜だ。

コントロールを落としてしまえばドラグーンもただのスクラップに過ぎなくなるのだから。

数機のリゲルが陣形を組み、アカツキに対して攻撃を開始する。

しかしアカツキに向けて発射されたビームはすべて装甲に反射されてしまう。

「何!?!」

虚を突かれ反射されたビームに貫かれたリゲルが撃墜された。

「ツ!?! あの金色にビーム兵器は通じない!?!」

「ならば全機、実体弾で攻撃しろ!」

ビームを弾くアカツキの特性に気が付いた隊長機は実弾での攻撃を指示する。

だがそれはムウにとって脅威ではない。

この機体の弱点など搭乗しているムウ自身が誰よりも把握しているのだから。

「おっとー！」

撃ち込まれたミサイルをすべてドラグーンで撃墜。

その隙に飛び込んだインパルスが腰から抜いた斬艦刀で斬りつける。刃を受けたリゲルは真つ二つに裂かれ、他の機体は明らかに浮足立った。

「戦場で動きを止める奴があるか！」

浮足立った敵機をビームライフルで狙撃し、敵の防衛網に穴を空けた。

「よし、各機、俺について来い！」

「了解!!」

対艦刀を握るハイネのリガル・ギアが先陣を切り、続くようにイフリート・アルジェントが敵陣へと突入した。

「邪魔だ！」

立ちふさがる敵モビルスーツを斬り伏せ、目標であるプレイアデス級へ狙いを定める。

「ガナーギア部隊、攻撃開始！」

「了解！」

ガナーウィザードを装備したギアが一行に並び、主武装である高エネルギー長射程ビーム砲『オルトロス』を発射した。

しかしオルトロスの砲撃は別のプレイアデス級が盾になり、阻止されてしまった。

「自ら盾になる!!」　たく、そんなにあの戦艦を落とされたら困るって事かよ!」
「なら、接近してやるだけですよ!」

翼を広げたシークエル・インパルスが突入する。

「敵を艦に近づけるな!」

「落とせ!」

弾丸のように加速するインパルスに戦艦からの砲撃が襲いかかる。

しかしルナマリアは一切意を返さず、光線の雨の中を突っ切っていく。

「ハアアアア!!」

立ち塞がる敵を斬り伏せ、艦底部に回り込むと光を発する掌を突き出した。

パルマ・フィオキーナの一撃がプレイアデス級の装甲を突き破り、大きく爆発する。

「これで!」

沈んでいく護衛艦を置き去りに上昇したインパルスは高エネルギー収束ライフルの銃口を特殊艦へと向けた。

「行け!」

収束ライフルから迸る閃光がプレイアデス級のブリッジに直撃した。

「……あつけなさすぎる。守る気がないのか」

戦艦が落とされ特殊艦の数も減った。

しかし敵は残りの戦艦を守ろうとする素振りすらない。

「やっぱり囮ですかね」

ムウとハイネの懸念を裏付けるようにアルテミスで動きがあった。

岩壁が解放され砲塔が光を発している。

「第二射か!?!」

「味方がいる筈だろ——ッ!?!」

見れば射線上に居た統合軍の機体が次々と離脱体勢に入っていた。

反面、プレイアデス級から脱出してくる者は誰もいない。

「戦艦は無人って事か。やっぱり囮かよ!」

「全機急速離脱!」

ムウの号令に全機が一齐にその場からの離脱を図る。

同時にアルテミスの砲塔から強烈な閃光が発射された。

閃光が戦場を突き進み、巻き込まれた機体は容赦なく消し去られていく。

「ぐううう!!」

砲撃の衝撃、そして離脱の際に掛かったG耐えながら、ムウたちはやつと影響範囲外

まで脱する。

「やっつてくれる、敵の指揮官は!」

「こうなると予測はしてたが、きついな！」

攻撃隊は壊滅こそ免れたものの、大きく分断されてしまった。

損傷し動けない機体も多数存在している。

事前に戦艦がこちらを狙う筈であると予測していなければ、甚大な被害が出ていただろう。

「だがこれも計算の内だ。全機、聞こえているな！ 作戦通りに行動しろ！ ヴェステンフルス、残りは頼む！」

「了解！ 片付けたら俺も行くからな！」

予定通りハイネは残りの戦艦の排除へ動き、ムウとルナマリアは反転。

それぞれが目的地の方向へ動き出す。

その時、ムウの全身にあの感覚が走り抜けた。

「ッ、これは……出て来たか。クルーゼ!!」

戦場に現れた宿敵を感じたムウはアカツキを敵の方へ向かって進ませる。邂逅はもうすぐそこまで迫っていた。



二機のガンダム。

トワイライトフリーダムガンダムとアイテルガンダム・ヴァルキューレ。

ユースティアガンダムの前に迫る二機のガンダムはアスランにとってある意味馴染み深い機体だった。

一機はかつての親友が駆り、数多の伝説を作り上げた。

そしてもう一機はアスランにとって忘れてたくとも忘れ難い女性が搭乗していた機体だ。

「……全く、これも因縁なのか」

迫る二機のモビルスーツに思わず独白するアスラン。

そんな感傷に浸る間もなくトップスピードで肉薄してきたフリーダムはビームサーベルを抜き放つ。

「貴方は私が此処で！」

「悪いが君に興味はない！」

ビームサーベルの強烈な斬撃をオートクレールで弾き返し、脚部のビームサーベルを放出する。

「ッ!?!」

サーベルを伴った蹴撃。

フリーダムが機体を翻し、コックピットを狙った光刃を回避する。

だが、それを見越していたアスランはすぐさまビーム砲を撃ち込んだ。

「強い！ でも！」

ビームシールドで防御しながらレール砲を撃ち込んでくるフリーダム。

「貴方をアストさんに会わせる訳にはいかない！」

「関係の無い部外者が！ 男同士の間に入るんじゃない!!」

機関砲で砲弾を排除。

接近戦の間合いに飛び込むとオートクレールを横薙ぎに振るつた。

切っ先から伸びたビーム刃がフリーダムへと襲いかかる。

「俺は奴を倒す！ そうでなくては！」

「なんでそこまでアストさんに拘るんです!？」

マユはオートクレールの刀身にビームサーベルを叩きつけ、斬撃を受け止めた。

「奴は俺から大切なものをすべて奪ってきた！ 何人も仲間が奴によつて殺された

!!

「勝手な事！ 貴方も同罪でしょう！」

「そうだ、否定はしない！ しかし俺は奴を倒さなければ前には進めない！」

衝撃と稲光が二機の間で弾け合う。

「マユちゃん!? やらせません、デイノ少佐!」

「違う、セリス・ブラツスール! 俺はアスラン・ザラだ!」

リフターからドラグーンを射出し、向かってきたアイテルへと差し向けた。

「この程度!」

セリスは攻撃を避けつつビームライフルで動き回る砲台を狙撃する。

「そっ!」

発射されたビームは正確にドラグーンの動きを捉えていた。

しかしビームが砲台を撃ち落とす事無く、直前で弾かれてしまった。

砲台側面に光の盾が展開されたからである。

「ドラグーンにビームシールド!」

予想外に装備に驚きつつも、再びビームライフルで狙撃を行う。

しかしすべて弾かれてしまい、逆にビームを撃ち掛けられてしまう。

「くっ」

アイテルは防御マントで攻撃を防ぎながら後退する。

「ドラグーンのシールドを使わされるとは。流石だ、セリス・ブラツスール。しかし君

の実力は月面紛争で承知済みだ!」

罅迫合うフリーダムを弾き飛ばし、複列位相砲をアイテル目掛けて発射する。

ドラグーンの動きを警戒していたセリスは撃ち出された砲撃を前に防御に回らざる得ない。

「ぐううう」

不利な体勢のままシールドで複列位相砲を防いだアイテルは吹き飛ばされ、体勢を崩されてしまった。

「セリスさん!?!」

「俺の敵は奴だ! 君達に後れを取るつもりは無い!」

「この!」

ユースティアに向かって斬りかかろうと前に出る。

その時、コックピットに敵接近の警報が鳴り響く。

接近してきたのは巨体を持つ兵器だった。

胸部から光を発し、フリーダムとユースティアの間を焼き尽くす強力な攻撃が放たれた。

「なっ」

フリーダムはアンチビームシールドを掲げ、その場から飛び退く。

しかし強力なビーム砲故にシールドが耐えきれずに溶けてしまった。

「シールドを溶かすほどの高出力なんて!」

使えなくなったシールドを捨て距離を取るフリーダム。

警戒しながら攻撃してきた巨体に方へ眼を向ける。

「何？」

「……アレが報告にあつた『デモリッション』か」

G F A S — X 2 『デモリッション』

デストロイガンダムの後継機に属する機体。

数多の武装と防御手段を持った外郭とコアとなるモビルスーツを搭載。

モビルスーツサイズを超える大きさではあるものの、今までのデストロイ級に比べて大幅に小型化されている。

脚部が排除され高出力大型スラスタを装備。

問題だった機動性も確保されている。

反面モビルアーマー形態はオミットされている。

「あの機体の中央に搭載されているのは……ベルゼビュート？」

デモリッションの中核に搭載された機体はベルゼビュートであつた。

まるで鎧を纏うように、中央に鎮座している。

「……目標確認。データ照合、『フリーダム』、『アイテル』と特定」

デモリッションのコックピットに座るエリニス感情も込めず淡々と呟く。

以前のような苛烈さは鳴りを潜め、まるで機械のように虚ろな瞳でフリーダムとアイテルを見定めていた。

「排除開始」

デモリツションの腕が掲げられ、指先からビーム砲が発射される。

「数は多いけどー！」

マユはすぐ様その場から飛び退き、攻撃をやり過ぎず。

翼をはためかせ、速度を上げて砲撃を回避したフリーダムはビームライフルを撃ち出した。

しかしデモリツションは見た目に反する機動性を見せる。

「な、避けた!?!」

デモリツションは驚くほど機敏に攻撃を避け、逆に攻撃を加えてきた。

「ぐつ、あの機体に、このパイロットは!」

「中央にいるあの機体は、教官を倒した……デストロイ系の機体なら、懐に飛び込めば!」

ユースティアのドラグーンを振り切ったアイテルは大剣を構えて突撃。

大剣の刀身から発生させた無数のビーム刃をデモリツションへと叩きつけた。

だが予想外の物が斬撃を阻む。

「これは!？」

シールド兼用の大型ビームクロウが大剣を受け止めていた。

格納されていたベルゼビュートの上半身が解放され、そこからビームクロウを射出したのだ

「だけど『ヴァルフアズルⅡ』相手に!」

『ヴァルフアズルⅡ』の出力は通常の斬艦刀を遥かに上回る。

アンチビームシールドでは防ぎきれぬものではない。

力任せに押し込もうとしたセリスだったが、背後に回り込んだ別のビームクロウがビームキャノンを撃ち込んでくる。

「くっ」

咄嗟の反応で機体を後退させるが、待っていたのはさらに激しいビーム砲の嵐だった。

構えたアンチビームシールドは溶け、防御マントも一部が蒸発する。

「何て出力!？」

「セリスさん!?! アイギス!!」

トワイライトフリーダムから射出されたアイギスドラグーン。

ドラグーンがアイテルを守るように防御フィールドを張り、ビーム砲をすべて防ぎ

切った。

「マユちゃん、ありがとう」

「いえ、注意してください。この機体、今までのデストロイ系の機体とは違うみたいです」

マユはアイギスドラグーンで砲撃を防ぎつつ、全砲門を解放。

デモリツションへフルバーストを叩き込む。

そしてフリーダムとタイミングに合わせ、セリスもアサルトブラスターキャノンを発射した。

「いけ！」

二機の最大火力。

だがデモリツションは正面に陽電子リフレクターを展開。

砲撃の全てが直前で防がれてしまった。

「防御力は健在か」

「やっぱり接近戦しかない！」

マユとセリスは連携を組み、デモリツションの砲撃の中を突っ切っていく。

すでにそこから離れていたアスランはアルテミスから入ってきた連絡に耳を傾けていた。

《大佐、緊急連絡です！》

「どうした？」

《それがアルテミス後部のエンジンが始動！ このままではエンジンが点火してしま
います》

元々アルテミスは今存在するポイントとは別の場所に存在した。

それがユニウス戦役後にユーラシアの意向により今の場所へと運ばれた経緯があつた。

後部に存在するエンジンはその為に設置されたもの。

しかし、現在には使用しないという事で放置されていた。

「何だと!? 何故……いや、止められないのか？」

《現在、アクセスを試みていますが、こちらの操作を受け付けません》
偶然のトラブルか。

敵による工作か。

それとも——

「……サリエルはどうした？」

《出撃中です。アルテミスの防衛任務についています》

「そうか」

何にせよ一度戻って状況を把握する必要がある。

「二度戻る。作業を継続しろ」

《了解しました》

アスランは横目で戦闘を一瞥すると、アルテミスの方へ機体を向かわせた。

◇

アルテミスで起きた異変は艦隊の指揮を執っていたイザークも察知していた。「アルテミスが移動しようとしているのだと?」

「はい。先行した部隊からの報告では後部のエンジンが動いていると」この状況でアルテミスはどこに動かそうというのか?」

今、グラオ・イーリスの状況はどうか五分と言ったところ。

ハイネ達の活躍で特殊装備をもった戦艦の何隻かを潰す事には成功している。だが、レクイエムは未だに健在。

戦力も統合軍側が上回っている事には変わりは無かった。

にも関わらずアスランがこの状況を崩そうとするとはとても思えない。

「……トラブルか?」

真つ先にそれが思いつく。

だが、先のレクイエムの一撃のように敵の策である可能性も捨てきれない。思考していたイザークは結論を下す。

「……砲撃継続。狙いは変わらずレクイエムだ。ただしアルテミスの動きは常に把握しておけ」

「了解」

「前線に部隊にも通達しろ。状況はどうなっているか？」

「乱戦状態です。ただアンセム・イノセントガンダムだけ突出しています！」
オペレーターの報告に表情を曇らせる。

「敵の新型が相手か……いや、アイツなら大丈夫だ」

混戦模様の前線で戦う友人の身を案じながら、イザークは拳を握りしめた。

◇

『グラオ・イーリス』と統合軍が激闘を繰り広げる最前線。

敵と味方。

それぞれが入り乱れる大混戦に陥っていた。

「同盟軍を進ませるな!!」

「レクイエムへ向かえ!!」

H・アガスティアのビームサーベルがブリュンヒルデに突き刺さり、飛行形態のスクウの射撃が敵モビルスーツを撃ち穿つ。

一進一退の戦場。

その中で一層激しい戦闘を行っている者達がいた。

アンセム・イノセントガンダムと強化型アルタイル、そしてティアマトの三機である。

「しつこいんだよ!!」

ドラグーンとビームライフル。

それらを組み合わせ、イノセントガンダムを追い込もうと攻撃を加えるラデイス。

しかしイノセントは驚くべき反応と動きですべてをかわし、逆に反撃を加えてくる。

「そー!」

撃ち返されたイノセントのビームライフルがアルタイルの肩装甲を吹き飛ばした。

「なっ」

損傷自体は大した事はない。

しかし付けられた傷はラデイスが冷や汗を掻くには十分なものだった。

「くそが!」

優雅さすら感じさせる白いモビルスーツを睨みつけ、ラデイスの焦りは加速する。

狙いを定めている筈なのに、一向にイノセントを捉えられない気配がない。

「ラデイス、何やってんの!」

「分かってる! 何なんだ奴は!」

イノセントを狙うティアマトの砲撃をフリージアの張ったビームフィールドが防いでいく。

「ドラグーンのコントロールまで奴の方が上だっていうのか! 強化兵の俺よりも!」

「お前の動きが単調すぎるだけだ」

ラウやユリウスといった規格外のパイロットと戦った経験のあるアストからすれば、ラデイスやミレイアの攻勢はぬるいと言わざる得ない。

さらにアストはスラスターを使い加速をつけたまま体勢を変える。

「甘い」

ビームライフルの一撃がティアマトの肩に直撃させ大きく傷を負わせた。

「きゃあああ!!」

あり得ない複雑な軌道を取りながら、攻撃を加えてくる。

速度と姿勢を保ったまま射撃を当てるだけでも脅威だが、体勢を崩す事無く正常な機

動を維持する。

これであり得ないと言わず何と言う。

「ミレイア！」

「この程度問題ない！」

ティアマトは複列位相砲で牽制を行いながら、同時にドラグーンを四方へ展開する。並みのパイロットを上回る精度とアルタイルを超えるドラグーンの数がいノセントへ襲いかかる。

「大佐は私が守るんだから！ アレンは下がってよ！」

「ミレイア、俺は君の感傷に付き合っている暇はない」

アストはすでに他の敵を見据えていた。

ムウが彼を感知したように、アストもまた倒すべき敵が戦場へ出て来た事に気がついていた。

そして先程フォルセテイから届いた敵側の異変。

一刻も早くアルテミスへ向かう必要がある。

こんな所で足止めされている暇はないのだ。

「馬鹿にして！ 私だって強化されたんだから!!」

ティアマトの火力を一斉に解放。

ミサイルの雨とビームの網がイノセントを囲い込む。

「これで!!」

しかし攻撃は届かない。

イノセントを守るように張られたフリージアのフィールドがそれを許さないからだ。

「突破できない!!? ラデイス!」

「分かってるんだよ!」

ラデイスの援護を受けながら、ロングビームサーベルを両手で引き抜く。

さらに隠し腕も展開してイノセントへ向けて斬りかかる。

「砲撃が通用しないなら!」

「接近戦か? 思考が透けて見えるぞ」

無数の腕から繰り出される縦横無尽の斬撃。

だがアストは焦らず、盾を上手く使って流す。

「この手の武装で俺を倒したいなら、アスラン以上の技量を持つてから来い!」

「馬鹿にして!」

「事実を言ったただけだ」

隠し腕のサーベルをライフルで吹き飛ばし、腹部に向けて蹴りを入れた。

「くうう!!」

蹴りの衝撃がミレイアに伝わり、ティアマトは大きく反応が遅れた。

その間に背後へ回り込んだアストはビームライフルをティアマトに突きつける。

「落ちろ」

気づいたミレイアは思わず凍りつく。

かわせない。

死ぬ。

死を意識したミレイアだったが、そこにラデイスが割り込んできた。

「やらせるかよ、ガンダム!!」

アルタイルの複列位相砲がイノセントガンダムを狙い撃つ。

完璧なタイミング。

攻撃を仕掛けようとしていた奴に回避する術はない。

その証拠に複列位相砲はイノセントに直撃した。

「やったか!？」

しかし複列位相砲は砕いたのは白いガンダムでは無く、彼の機体の持つシールドで

あつた。

「シールドだけ!？」

投棄された盾にラデイスの注意が奪われた一瞬。

イノセントのビームライフルがアルタイルのライフルを破壊。

そのまま肉薄すると背中中のビームソード『ワイバーン』をアルタイル目掛けて放出した。

「えっ?」

ラデイスの眼前が眩い光に包まれていく。

ビームソードはコックピットを斬り裂き、アルタイルは大きく爆散した。

まさに一瞬。

ラデイスは自分が死んだ事すら気が付かなかったに違いない。

「嘘? ラデイスを……こうも簡単に?」

ラデイスの腕前を知っているミレイアはあつさり彼を倒したアストに対して戦慄する。

「うわああああ!!」

恐慌を起こしたように叫ぶミレイアはイノセントに向けて砲撃を繰り返す。

だがそれが当たる事は無い。

ビームの射線を見切ったかのような軌道を取るイノセント。

攻撃は敵機を捉える事もできず、ガンダムはティアマトを牽制しながらアルテミスの方へ駆けていった。

「待て！ 待てエエエ!!」
内に芽生えた恐怖を振り払うようにミレイアの絶叫が木霊した。



邪魔な敵を排除しながらアストは感覚に任せてアルテミスに向かって歩を進める。

「……来た」

全身に走る感覚がああ、あの男が近くにいる事を教えてくれる。

「待っていたよ、アスト・サガミ君」

彼は——カースはそこにいた。

アルテミスを背にイノセントへ向けてライフルの銃口を向けている。

カースはかつての彼が乗っていた愛機を彷彿される機体に搭乗していた。

半円形のバックパックを背負い、砲台と思われる突起が幾つも見えている。

「……プロヴィデンス」

「さあ、この戦争もそろそろファイナルだ。存分に戦禍を撒き散らすと良い、『カウ
ンターコーデイネーター』！」

カースの高らかな声と共にアルテミスのエンジンに火が点った。

第46話 因縁に導かれ

戦闘を避けながらアルテミスへ向かったユースティアガンダムは後部にあるエンジン部分へとたどり着いていた。

「……報告通りか。エンジンが稼働している」

設置されたエンジンは所々で光を発し、今にも点火しそうな状態だった。アスランは機体をアルテミスへ着地させ、コックピットから飛び降りる。

「状況はどうか？」

「大佐、それが……」

作業していた兵士の表情は暗い。

差し出された端末に目を落とせば、その状況がすぐに把握できる。

「アクセスできない。完全にロックされている」

「はい。これでは現状、物理的な排除くらいしか方法がありません。しかしそうなる
とレクイエムにも影響が出る事になります」

レクイエム発射における姿勢制御などを司っているシステムは後部エンジンのシステムと直結されている。

これを物理的に排除すれば、アルテミスに多大な影響が出る事は間違いない。

「このままエンジンが始動したとして、どういう事になる？」

「起動しているのは左エンジンですので方向転換する事になるかと……方角はアポロン要塞方面ですね」

「アポロン……」

今はレクイエムの砲首を『グラオ・イリス』艦隊の方へ向けている。

それが牽制となり彼らの進軍速度を遅らせていた。

しかし方向転換するとなれば、柔らかい横腹を自ら晒す事になる。

つまり隙ができるのだ。

だが逆にレクイエムでアポロン方面の敵を一掃出来れば、同盟の敗北は決まったようなもの。

隙を突くグラオ・イリスの進撃が早いか。

レクイエムで同盟の戦力を一掃するのが早いか。

一種の賭けである。

「ずいぶん悪辣な事をしてくれる」

一体誰が仕掛けたものなのか。

いや、誰であろうが最悪な仕掛けである事には変わりはない。

何故ならこれによって双方共に被害が大きくなる事は間違いないからだ。

「誰の仕掛けだろうと、これ以上後手に回る前に——」

アスランの言葉は突然起きた振動によって掻き消された。

「大佐、エンジンの起動を確認しました！ 同時にレクイエムのチャージも！」

「チツ、エンジンを止めようとしたり、破壊しようとするると自動的に作動するように

セツトされていたか……」

アルテミスエンジンは今にも点火するように光を発している。

「くそ、そのまま作業を継続！ コントロールを取り戻せ！ 防衛部隊にレクイエム

を守るように伝えろ！」

「了解！」

地面を蹴り、ユースティアのコックピットに飛び乗った。

「乗るしかないようだな、この賭けに」

忸怩たる思いを噛み殺し、アスランはレクイエム防衛の為に再び戦場へ飛び出した。

◇

ギアから放たれたオルトロスの砲撃が宇宙を駆ける。

砲口から迸る一射は容赦なくプレイアデス級のエンジンを砕き、貫いた。

「良しー」

指揮を執っていたハイネは沈む戦艦を見つめながら、内心安堵する。

潰した特殊艦は6隻。

これで簡単に砲撃を曲げ、艦隊に向ける事は出来なくなつた。

少なくとも特殊管を再配置するまでの時間は稼げた筈。

「とはいえ、アルテミスがあれじゃな」

アルテミスはエンジンを動かし、その矛先を別方向へ向けようとしていた。

狙いは艦隊ではあるまい。

つまり――

「一杯食わされたつてか。たく、やってくれるよ、敵の指揮官はさ」

敵の手腕を称賛しながら、頭を掻いた。

とにかく徒労に終わったのは仕方がない。

こちらが困であつた以上は此処に留まる理由はもうなかつた。

「各機、俺達もアルテミスに向かうぞ！」

事前の打ち合わせ通りにアルテミスへ向かおうと踵を返す。

その時、敵機接近を知らせる警告音が鳴り響いた。

「チツ、行かせないってか。どこまで見透かしてるんだよ」

近づいてきた敵機に向けて銃口を構える。

視界に捉えたもの。

それは――

「何だ……あれは？ モビルアーマーか？」

通常の機体よりも少し大きめ。

形状は『異形』そのもの。

それはユニウス戦役に投入されたとある機体を基に開発されたものだった。

Y M A G | X I 5 D 『スカージ・リユカオン』

地球軍が開発した大型モビルアーマー『スカージ』の発展型。

基本的な武装は変更されていないが、その加速力と機動力はさらに向上し、ドラグーンも高威力の中型と機動性重視の小型とに分かれ、使い勝手も良くなっている。

「……艦隊は潰された。情けないとは言わない」

統合軍として特殊装備の艦を捨て駒などに使う気など無かった。

守備部隊にはそれなりの錬度を持った連中が配備されていたのだ。

それを排除したというなら、それだけ敵が強かったという事になる。スカージのコックピットに座るNo.1は、プレイアデス級を排除したハイネ達を高く評価する。

「油断はできない。私も全力で潰させてもらおう！」

スラストアーを吹かし、最大戦速。

速度を上げたスカージがハイネ達へと突撃する。

「速い！」

横つ跳びで突撃してきた異形をかわし、ビームライフルを発射した。

しかしスカージはそれを物ともしない。

単純な速度だけで振り切っていく。

「何て速度だよ！。パイロットに掛かる負担だつてかなりもの筈！」

高出力スラストアーによる急加速のみならず、急制動に方向変換。

パイロットには殺人級のGが降りかかっている筈だ。

それを苦も無くやってのけるとは。

「散れ！」

射出された大量のドラグーン。

部隊を囲むように展開され、一斉に砲撃を開始する。

「何て数だよ!?!」

ハイネはシールドを構えつつ、ドラグーンの包囲から逃れようと試みる。

一切後先考えない。

スラスター全開で上昇する。

でなければハチの巢にされて終わりだからだ。

「ぐう」

装甲に掠めたビームの衝撃と体を襲うGに耐えつつ、難を逃れる。

だが、共に戦っていた部隊の大半が先の砲撃の餌食となった。

さらに追撃として対艦ミサイルの嵐が襲い掛かる。

「くそー」

ミサイルを叩き落とし、距離を取ったりガル・ギアをNo. Iはギロリと睨みつけた。

「逃れるか。お前が隊長機だな」

No. Iは矛先をリガル・ギアへと向ける。

背中の砲塔、高エネルギー砲『アフプラール・ドライツェーン』が火を噴いた。

過剰とも言える火力をどうにか回避する、ハイネ。

しかし掠めた右のシールドはドロリと餌のように溶け落ち、その用途を果たせなくな

る。

その過剰な砲撃の被害は仲間たちにも降りかかり、約半数近くがこの短時間に撃墜されてしまった。

「ぐつ、計器の一部がイカレやがった。この火力、まともな撃ち合いじゃ勝負にならない。お前らは少し離れて体勢を立て直せ！」

盾を捨て生き残った仲間たちに指示を飛ばしたハイネはスカージを引き付けるように牽制する。

「逃がすと思うか」

射出された新たなドラグーン。

リガル・ギアの進路を塞ぐように立ちはだかる。

「邪魔だ！」

複雑な機動で砲台の動きを翻弄しつつ、腰のハンドグレネードを炸裂させた。

閃光と爆発が一瞬だけ砲台の動きを鈍らせる。

「そっこだ！」

その隙に放ったビームライフルがドラグーンを破壊。

ハイネは見事、包囲網からの脱出に成功した。

「なるほど。隊長を任されるだけはある。しかし——」

再び加速するスカージ。

リガル・ギアを軽く上回るその推力をもつて即座に追隨してきた。

「ッ!?!」

「逃がさないと言つた筈だ」

ハイネに追いついたスカージは側面から『ウエポンシザーズ』を伸ばしてくる。

その武器はまさにハサミ。

嫌な予感を覚えたハイネは胸を掴まれまいと咄嗟に足を振り上げる。

ウエポンシザーズはリガル・ギアの脚部を掴み、そのまま押しつぶすようにして切断した。

「ぐあああ!!」

やはり、掴まれれば一巻の終わり。

ハサミの間に見えた光はビームのものであるならば、VPS装甲ですら役に立たないだろう。

「この野郎!」

引き抜いた対艦刀をウエポンシザーズに叩きつける。

しかしビームコーティングが施されているのか、対艦刀の刃は通らない。

「そんなものは通用しない」

「だが隙は出来たろ！」

対艦刀を弾き、スカージの懐は大きく開いた。

その隙にハイネはビームサーベルを突きつける。

「これで！」

「甘い」

ビームサーベルがスカージに直撃しようとしたその瞬間、リガル・ギアは突如出現した腕に殴り飛ばされてしまった。

「なっ!？」

混乱するハイネの眼前には姿を変えたスカージが佇んでいた。

その姿はすでにモビルアーマーではなく――

「モビルスーツだど!？」

装甲が解放され表に出てきたのはモビルスーツ。

光るモノアイ。

禍々しさを表すような装甲。

伸びるウエポンシザーズ。

それがよりこの機体の異常さを示していた。

「これがスカージ・リユカオンの本当の姿だ！」

背後のバックパックから伸びたハサミの間からリガル・ギアを狙い撃たんと砲口が姿を見せた。

「やばい！」

水平に姿勢を保ちながら下降したりガル・ギアの装甲を閃光が容赦なく剥ぎ取っていった。

「しぶとこ」

「化け物め！ デストロイなんかとは別物だな！」

高出力スラスターを用いた加速力。

常識から外れた規格外の砲撃力。

ドラグーンや対艦ミサイルを用いた制圧力。

そして変形機構による汎用力。

デストロイとの共通点は見られるが、スカージのそれは明らかに上位版と言える。

しかもパイロットまで一流以上となれば手が付けられない。

「となると真つ向勝負は——」

ハイネは脳裏で勝つ為の情報を整理する。

その時、何故か昔に対峙した敵の事を思い出した。

ユニウス戦役最後の戦い。

相手にしたのは漆黒の装甲を持ったガンダム。

機体性能はこつちが圧倒的に上だった。

にも関わらず敵はその性能差を覆し、相討ちにまでもっていったのである。

「皮肉なもんだな」

今の状況はまさに逆。

あの時の敵の気分をハイネは味わっていた。

「ま、だからって諦める気なんてないけどな」

仲間達が命懸けで戦っているのに、自分だけ負けてはいられない。

差し向けられたドラグーンと砲撃に背を向け、ハイネは出来うる限りの速度を持って

離脱を図る。

「逃がさんと言った」

それをNo.1が見逃す筈もない。

再びモビルアーマー形態へと変形したスカージはりガル・ギアを追って加速する。

損傷したりガル・ギアとスカージでは推力に差があり過ぎた。

距離は徐々に詰まり、ウエボンシザーズの脅威がりガル・ギアへと迫る。

しかしその前に——スカージを複数の砲撃が狙い撃った。

「何!?!」

巨体に似合わない機動性で砲撃をどうにか回避。

攻撃してきたものを視界に捉えた。

「アレは——」

視線の先にいたのはオルトロスを装備したギア部隊。

数機が隊列を組んで獲物が網の掛かるのを待ち構えていた。

No.1はそこに来てハイネの目的を看破する。

「逃げ回っていたのは砲撃部隊の体勢を整える為の時間稼ぎか!」

「今だ!!」

ハイネはすぐ様反転、スカージに向けて突撃する。

「うおおお!!」

「ッ!?!」

二本の対艦刀を突き刺し、スラスターを全開。

スカージの進路を無理やり変えて、岩片へと叩きつけた。

「ぐあああ!」

「悪いな!」

コンソールを素早く叩き、コックピットハッチを解放したハイネは外へと飛び出す。

「自爆する気か!?!」

「気づいても、もう遅いって!」

ウエポンシザーズで組み付いたりガル・ギアを引き離そうとするも、時既に遅し。ハイネを回収した味方機が距離を取った所でリガル・ギアは爆散。

スカージ・リユカオンを巻き込んで、大きな火球を生み出した。

「全機、撃てエエ!!」

さらにオルトロスによる追撃。

無数のビーム砲が火球の中に吸い込まれ、さらに炎を燃え上がらせる。

「これであの化け物も」

「ま、仮に撃墜は出来てなくても、結構な痛手は与えた筈だ」

回収してくれたパイロットと共に希望的な観測を口にしながら、ハイネは未だ消えない火球の方に視線を向ける。

あれだけの砲撃を受ければいくらあの化け物モビルアーマーと言っても——
そう考えはするものの、やはり不安は拭えない。

「……一度フォルセティに戻るぞ。体勢を立て直す」

「了解しました」

どの道一度は戻られば戦う事はできない。

湧き上がる焦燥感を押し殺しハイネ達はフォルセティへの進路を取った。



プロヴィデンス。

ヤキン・ドゥーエ戦役にて投入されたモビルスーツである。

その性能とパイロットの技量も相まって当時最強の一機にかぞえられていた。

アストもヤキン・ドゥーエ戦役で最強と相對した事がある。

あの時は痛み分けだったが、今日はそうはいかない。

故にアストは初めから全力で。

躊躇う事無くSEEDを発現させる。

e. s. デバイスの稼働。

いつも以上に鋭くなった感覚に身を委ねトリガーを引いた。

「クルーゼー！」

一気に速度を上げ接近しながらビームライフルでプロヴィデンスにビームライフルを叩き込む。

あの機体相手に遠距離戦は絶對的に不利。

ドラグーンによる攻撃に晒される前に接近戦に持ち込む。

「そう来ると思っていたよ」

だがアストーの動きを読んでいたカースはすでに射出していたドラグーンをイノセントへけし掛けた。

素早く、そして確実に砲台がこちらへ狙いをつけてくる。

「ッ!？」

走る直感に任せ、素早く操縦桿を動かす。

アストの反応に応えたイノセントは完璧に追従し、走る光線を見事に回避して見せた。

「ほう、素晴らしい反応だな」

感心するカースとは裏腹にアストは冷や汗を流していた。

分かつてはいたが、今までに戦ってきた敵とは比較にならない精度。

僅かでも気を抜けば、その時点で機体を無数の光線が貫く事になるだろう。

「チツ、鬱陶しい程の数と精度だな！」

ドラグーンの動きを感じすると同時に素早く反応。

スラストアーを全開にし、ビームの嵐を振り切っていく。

「こればかりはユリウスよりも秀でていると自負しているよ！」

その動きを読んでいたカースはイノセントに大口径ビームライフルを叩き込んだ。

「くっ」

強烈な攻撃をシールドで防御する。

だが動きを鈍らせたイノセントをカースは見逃しはしない。

砲台をコントロールしながら横薙ぎに払うプロヴィデンスの斬撃が炸裂した。

ドラグーンのビームが機体に浅い傷を刻みつけ、斬撃を受け止めたナーゲルリングからは衝撃が伝わってくる。

「ッ!？」

「今のを止めるとは流石は『カウンターコーディネイター』だな！」

「……この機体は」

立ちほだかる機体は明らかにプロヴィデンスの後継と言える力を有している。

しかしどこか違和感のようなものを感じていた。

e. s. デバイスにより、通常以上に研ぎ澄まされた感覚が、その違和感を見逃さない。

「まさかサタナエルか!？」

ZGMF-X97 『プロヴィデンス・ルキフェル』

ヤキン・ドゥーエ戦役で投入されたプロヴィデンスのデータを基に開発された強化パーツをサタナエルに装着した機体。

パーツ全体に配置された小型スラスタ類とバーニアユニットによって非常に高い機動性を維持したまま、防御力強化に成功している。

さらにドラグーンユニットも高出力化と同時にビームフィールドの発生が可能になっており、隙の無い機体へと仕上がっている。

「この機体は以前のものとはまた別物だと思ってもらおう！」

さらに速度を上げたドラグーンの動きに合わせ、プロヴィデンスもまた加速しながらビームライフルを発射してきた。

言葉の通り、前とは別物。

サタナエルの機動性に、プロヴィデンスの火力が加わった別個の機体である。

「舐めるなよー！」

より速く。

より正確に。

機体の操作を行いながら、アストは反応速度を上げていく。

二機の戦いはもはや常人の立ち入る事ができない魔の空間と化していた。

「ハアアア!!」

ビームライフルを片手に、引き抜いたサーベルで砲台を斬り飛ばした。

「恐ろしいものだな、君の力は！——いや、君達の力はどうべきかな」

「何だと！」

「誰しも君らを羨むだろう、それ程の力を持つていたならば！」

カースの怒声に合わせ発射されるビームライフル。

急所を狙う一撃を捌き、アストもまたライフルを撃ち返した。

「相変わらずのご高説だな！ もう聞き飽きたんだよ！」

「何度でも言うさ！ それが真実なのだからね！」

上下に配置されたドラグーンによる同時攻撃。

アストは機体を捻りつつ、ワイバーンを放出。

回転する機体と共に伸びた光刃がドラグーンを叩き落とす。

「人はあさましくも妬み、憎み、奪い合う！ 君とて何度も見た筈だ！」

「例えそれが真実でも人は変わる！ これからだつていくらでも！」

「では変わったのか？ ヤキン・ドゥーエから此処まで！ 変わりはしない、何一つ！」

激突する剣撃。

サーベルとビームソードがシールドに弾かれ、二機は激しく鏖り合う。

「性急に答えを得ようとするから！」

「ただ現実から目を反らしているだけだろう！」

アストはプロヴィデンスの一太刀を機体を仰け反らせて回避する。しかしカースの攻勢は止まらない。

仰け反ったままのイノセントに向けてビームライフルの銃口を突きつけてきた。

「ッ、行け！」

アストは悪手と分かっているながらフリージアを射出する。

展開されたフィールドがプロヴィデンスの攻撃を防御した。

「ドラグーンか。しかし、私にそれは通じんよ！」

カースの正確な射撃が基点となるフリージアを捉え、いとも容易くフィールドを無効化してみせる。

「やっぱりか」

アストは今まであえてプロヴィデンスに対し、フリージアを使用しなかった。

それは武装の消耗を出来るだけ避けたいという思惑があったからだ。

カースの特殊な空間認識力に加え、ドラグーンを操る技能は脅威的。

使ったとしても囿にすらならない。

今のフリージアとして使う気は無かった。

『使わされてしまった』のである。

「ドラグーンなんて焼け石に水。無駄に装備を失うだけだ」

奴を仕留めるとしたら接近戦しかない。

そう決めたアストはプロヴィデンスに肉薄する。

「ハアア!!」

作られた光の網の目を抜け、斬艦刀を振り下ろした。

容赦なく振り抜かれた一撃はプロヴィデンスの装甲を抉り、返す刀で放った一太刀は装着されていた数機のドラグーンを切り捨てる。

それでも流石はカース。

見事な機体動作で刃を避け、イノセントの背後に回り込み装着されたビームソードを突き出してきた。

「オオオオオー」

研ぎ澄まされた感覚を総動員して、操縦桿を操作する。

背中を扶るだろうビームソードを前にアストは防御ではなく反撃を選んだ。ワイバーンを展開し、プロヴィデンスの視界を塞ぎ、スラスタを逆噴射。刃が届く直前に背中から体当たりを食らわせた。

「ぐっ」

「そー」

「舐めないでもらおうー」

腰に装着されたビーム砲がイノセントに装甲に傷をつけ、振り向きざまの一撃がプロヴィデンスのビームソード発生装置を斬り潰した。

「仕留め損ねた!？」

カースの技量に舌を巻きつつ、次の攻撃を仕掛けようとする、アスト。

しかしそこでアルテミスの変更に気がついた。

「何？ アルテミスが方向を変える、この状況で？」

アレでは自ら攻めてくれと言っているに等しい。

訝しむアストだが、ある事が脳裏を過る。

「……レクイエムの矛先はどこに向かって——」

「アポロンだよ」

アスランがこんな無謀な賭けに出てくるとは思えない。

なら可能性は一つ。

「レクイエムが発射されれば、アポロンに集結していた部隊は軒並み大打撃を受ける事になるだろう。それこそ陣営問わずにね」

「貴様!」

「君は此処で見ていると良い。新たに刻まれた戦禍が世界を蝕んでいく瞬間を!」

「ふざけるな!」

プロヴィデンスをかわし、アルテミスに向かおうとするが展開されたドラグーンがそれを許さない。

イノセントの進路を塞ぐようにビームの檻が作り出される。

「君の相手は私だよ！」

カースの涼やかとすら言える声色に激しい苛立ちを感じながら、声を上げようとした。

その時——

「いや、貴様の相手は俺だ！ ラウ・ル・クルーゼ!!」

「ツッ!」

アストとカースは同時に声の主を感知する。

誰も入れない魔窟ともいえる空間に飛び込んできたのは黄金のモビルスーツ。

ムウ・ラ・フラガの操るアカツキだった。

「来たか、ムウ！」

「ムウさん!?!」

「待たせたな」

アカツキはビームライフルを構えてイノセントとプロヴィデンスの間に割り込んできた。

「アスト、こいつの相手は俺に任せてお前はレクイエムを止めに行け！」

「でも、幾らムウさんでもクルーゼの相手は！」

「おいおい、こいつは元々俺の相手だつての！ いいから行け、命令だ！」

「……分かりました。これを」

斬艦刀『バルムンク』をアカツキへ譲渡。

この場を任せたアストはアルテミスへと向かう。

離れていくイノセントを視線で追いながら、立ちほだかるアカツキの姿にカースは失笑を漏らした。

「アスト・サガミを行かせるとは。足止めのつもりか？ 愚かだな」

「何言ってる。足止めのつもりなんてないさ。貴様は此処で俺が倒すんだからな！」

「思いつがるなよ、ムウ！」

アカツキとプロヴィデンスは同時に動き出す。

宇宙を舞う砲台と共に続く因縁の決着を着ける戦いが始まろうとしていた。



方向を変えるアルテミス。

その動きに危機感を覚える『グラオ・イリス』だが、防衛部隊の奮戦によりに上手く攻勢に出られずにいた。

そんな中、グラオ・イリス所属の機体で最もアルテミスに近い位置にいたのはアイテルとフリーダムである。

しかし彼女達もまた立ちふさがる『デモリツション』に足止めを余儀なくされていた。「こんな所で足止めされてる訳にはいかないのに！」

マユとセリスもレクイエムの砲塔が別方向へ向く事へ危機感を覚えていた。

しかしデモリツションを突破しなくては、アルテミスへは近づけない。

砲撃は止む気配すらなく、思う存分空間を蹂躪していく。

「ッ!？」

ビームシールドで防いでいるにも関わらず、二機のガンダムはその圧力と火力によって未だデモリツションの懐に入れないでいた。

「マユちゃん、聞いて。こいつは私がやる。貴方はアルテミスに向かって！」

「セリスさん!?! でも！」

「時間が無い、目的をはき違えないで！ 私達の目標はレクイエムの破壊！ それにアレンだつてアルテミスに向かった筈。守りたいんでしょ！」

「ッ……了解！」

アイテルはビームシールドを最大出力で展開する。

巨大な光盾が二機の姿を覆い、砲撃の脅威から身を守る。

「行くよ！」

「はい！」

セリスは撃ちこまれた砲撃を防ぎつつ、デモリツションの注意を引きつける為に前に出た。

「貴方の相手は私よ！」

飛び回るビームクローを弾き飛ばし、至近距離からアサルトブラスターキャノンを引き込む。

発射された砲撃はデストロイ級程の威力は無いが、アイテルの攻撃は強力なものだった。

敵に防御態勢を取らせるには十分。

マユはその間にアルテミスへと離脱した。

「……………逃げる？」

蒼い翼を翻し去っていくフリーダム。

その後ろ姿にエリニス自身、何か良く分からないものが少しづつ蓄積していく。それは何かドロドロとした感情だった。

しかし今のエリニスにはそれが良く理解できない。

浮かび上がるは自分の記憶。

最初に見えたのはベットに寝かされた自分の姿だった。

怪我をしているようで全身血で濡れ、特に顔面は原形が分からない程に潰れ、包帯でグルグル巻きにされている。

元々軍人だったのか。

戦闘に巻き込まれたのか。

そこまでは覚えていないが、このまま放っておけば確実に死ぬだろう。

今にも死神に運ばれて行きそうな自分の傍に佇んでいたのはパイロットスーツを着た黒髪の男と研究者風の女性。

《彼女を使われるので?》

《このままでは死ぬわ。どうせ死体になるのなら有効に使わせてもらいましょう》

そう穏やかな声色で言った女には狂気と決意が見て取れた。

次に見えたのは戦場。

先ほどまでの怪我は癒え、顔も綺麗すぎる程に治療されている。

その顔は『今』と全く同じ顔だ。

何の疑問も抱かず自分はモビルスーツに乗り、とある戦場へと向かっていた。

作戦名『オペレーション・フューリー』

目標はオーブ。

シグーデイバイドと呼ばれた悪魔の機体の操縦桿を握り、そこを蹂躪する為に。

だが、それは叶わない。

何故ならばそこに光を纏った天使が現れたから。

蒼き翼を翻し、圧倒的な力でもってすべてを蹂躪する熾天使が。

ある者は斬り裂かれ、ある者は撃ち落とされる。

圧倒的だった。

アレには敵わない。

自分も例外ではなく、あっさりと熾天使によって撃ち落とされてしまった。

運よく生き延びたが、それでも結末は変わらない。

ユニウス戦役最終決戦。

そこでもまた形状の違うが蒼い翼のモビルスーツによって蹂躪されてしまった。

結果的に生き延びても自分の末路は死んでいくだけ。

漂う宇宙のゴミになる。

そんな時だ。

彼が自分を回収したのは。

仮面を纏う男カーズ。

彼によつて救われた。

だから恩義に報いる為に力が必要だった。

その為ならば精神が壊れようが、他者の意識に乗っ取られようが関係ない事。

リースという負け犬だつて受け入れよう。

そもそも初めから『その為に用意された個体』なのだから躊躇う理由もない。

すべては自身を救つてくれたカーズの為に。

「……熾天使……いや、邪魔者は誰であろうとも」

脳裏にへばり付く妄執を振り払い、斬りかかってくるアイテルへ砲口を向ける。

「貴様らを排除する！」

「私だつて教官の仇討ちをさせてもらおう！」

「寝ぼけた事を言うな！」

デモリッションすべての火力を解放。

艦隊すら相手にできる砲撃を一機のモバイルスーツへ集中させた。

「ぐううう!!」

砲撃と光盾が激突。

強烈な稲光がセリスの視界を埋め尽くしていく。

「馬鹿みたいな火力を！」

「しぶとく」

砲撃の圧力に必死に抗いながら、改めてセリスはデモリツションの攻略方法を頭の中でシミュレートする。

その中でやはり現実的なのは接近戦。

デストロイ級との戦闘では基本となっているが、このデモリツション相手も同じ方策で問題ない。

しかし課題が二つ。

艦隊すら相手取る強烈な砲撃。

核となるベルゼビュートがドラグーンでコントロールしている飛び回る盾と言っても過言ではないビームクローウ。

これらを攻略しなくてはデモリツションの懐へ入る事さえ難しい。

「ハのー」

砲撃の合間にこちらの最大武装を叩き込む。

しかし当然だがアイテルの最大武装『アサルトブラスターキャノン』は通用しない。

すべて陽電子リフレクターによって防がれてしまう。

「効くものか」

「焼け石に水。嫌になるなあ、牽制にすらならないなんて。ハア、覚悟を決めますか」

セリスは深呼吸すると意識を集中、SEEDを発現させた。

鋭く広がる感覚。

指先にまで行き渡る力を確かめ、操縦桿を握り直す。

「機動性で勝負！」

下した結論がそれだ。

砲撃を防ぐ事は出来るが、隙はない。

合間を縫って攻撃しても隙は生まれず、牽制にもならない。

ならば持ちうる機動性をフルに使い懐に飛び込むだけの事。

後はセリスの腕次第。

アイテルを飲み込むほどに野太い一撃であるスキュラを最低限、ギリギリの位置で回避する。

そのままデモリッションへの突撃を敢行する。

「どんなに強力だろうと当たらなければ！」

撃ちかけられるビームの弾丸。

それらを正確な機体操作ですべて躲す。

上へ下へ。

右へ左へ。

複雑な機動を取りつつ、確実に前へと近づぐアイトル。

それでも強力な火力の影響は確実に機体を蝕んでいく。

紙一重で躲す度に機体が炙られるように熱せられ、時に装甲を抉る。

「こんなものー！」

当たれば即死亡という綱渡り。

そんなものを続け明らかに異常の出る機体を叱咤するように叫ぶ。

纏ったマントの半分が燃やされ、装甲に無数の傷が刻まれる。

だが、セリスはそれでも止まらない。

前に。

前に。

前に進む。

進み続け、敵を倒す為に。

だがそこで案の定立ちふさがるビームクロウ。砲火へ加わり、こちらを食い破らんと牙を剥く。

「邪魔アアア!!」

シールドの役割を持つそれらに射出されたロケットアンカーが突き刺さった。アンカーの突き刺さった二つを引っ張り、激突させてコントロールを鈍らせる。

そして発射された砲撃の中へと叩きつけて破壊した。

その隙に一気にアイテルが距離を詰める。

「ハアアアア!!」

大剣を構えデモリツシヨンの核であるベルゼビュートへ斬り込んだ。

「この距離ならー」

振り下ろされる大剣。

しかしそれを前に敵も動き出した。

中央装甲の一部が解放、ベルゼビュートを守るように砲口が姿を見せたのである。

「ッ!?!」

セリスは咄嗟に機体を捻るも、無常にも発射された砲撃がアイテルの肩と足を吹き飛ばした。

「ぐう!?!」

そのまま後ろへ流されそうになるも、直前でアンカーを発射。

デモリツションの装甲へ突き刺し、離れないように機体を固定する。

「この距離ならー！」

アサルトブラスターキャノンの一撃が至近距離から火を噴いた。

砲火がデモリツションの装甲を破壊し、左腕の動きが格段に鈍る。

「……損傷拡大。左腕部に深刻なダメージ」

「この機会は逃さない！」

素早く抜いた二本のビームサーベルをデモリツションの胸部へ突き刺す。

「くっ、おのれ」

突く刺さったサーベルの衝撃に呻きつつ、エリニスも至近距離からアイテルへ砲撃を

発射した。

「落ちろ、ガンダム」

「このー！」

セリスは咄嗟にビームシールドを展開、砲撃を防御する。

しかし至近距離故に凄まじい負荷と圧力がアイテルへ襲いかかる。

「つうううー！」

鳴り続ける警告音。

異常を知らせる表示画像。

限界なのは重々承知。

しかしこの機は逃せない。

だが損傷した肩の影響の為か、腕が限界を迎え火を噴き、爆発する。

「ッ!?!」

「私の勝ちだ!」

装着された装甲を排除。

上半身が自由になったベルゼビウトが動けないアイテルヘビームソードを降り下ろした。

「いいえ、勝つのは私!」

セリスがワイヤーを切り離し、腕の爆発を利用し斬撃を回避。

さらにボロボロになった防御マントをベルゼビウトへ投げつけた。

「何っ!?!」

マントがエリニスの視界を遮る。

時が止まったかのように一瞬だけ、デモリツションの動きが止まった。

「落ちろ!」

それを見逃さず、セリスは大剣を投げつけた。

宙に漂うマント諸共ベルゼビユートに大剣が突き刺さる。

そして刀身から発生したビーム刃が内部からベルゼビユートを食い破り、串刺しにした。

エリニスは意識する間もなく押し潰され、肉片も残らず焼きつくされる。

ベルゼビユートの爆発に巻き込まれ、残った装甲も連鎖的に宇宙の藻屑へ変わっていく。

地獄から甦った悪魔は、戦女神に代わる戦乙女によって討ち倒された。

「ハア、ハア……やりましたよ、教官」

とはいえアイテルも限界だ。

装甲はボロボロ。

スラストも破損し、武装も大半が使用不可。

セリス自身もはや戦える状態ではない。

極度の疲労と衝撃による全身打撲。

意識を保つことすら厳しい。

「酷いなあ、これ。しょうがない……後は皆に任せるかな」

爆散するデモリッションを見届けながら、セリスも意識を失った。

第47話 鷹と天帝

アルテミスの方向転換と共にレクイエムのチャージ開始。

これらの意図に気がついたイザークは自分の迂闊さに歯噛みしていた。

「これが狙いか、アスラン」

特殊艦を囿に、レクイエムの砲口をアポロンへ。

そして発射すれば、確かに統合軍の勝ち揺るがないだろう。

だが、だからこそ腑に落ちない。

確かに勝てるが、同時にリスクも高い。

実直な性格のアスランがこんな作戦を取るとは思えなかった。

「いや、それも昔の話だからな。奴も勝つ為にはこんな手を打つようになったのかもしれん」

何にしろこれが危機的状況である事に変わりはない。

こうなつては打つ手は一つ。

迅速にアルテミスへ向かい、レクイエムを破壊する事だけだ。

「これよりフォルセティは最大戦速でアルテミスへ向かう。狙いは変わらずレクイエムだ。最悪の場合、陸戦もあり得る。総員、準備せよ！」

「了解」

イザークの号令にフォルセティを含めた艦隊がアルテミスへの道を駆け始める。

《艦長、使えるモビルスーツはないのか?》

「ハイネか。もう少し休んでいたらどうだ?」

《そうはいかないだろ。皆、戦ってるんだ。俺だけ休んでられないよ》

「俺の機体でもいいが調整に時間が掛かる。……ならフラガのスオウを使え。あれならすぐに乗れる」

《了解!》

作戦自体は変更なし。

ミサイルと砲撃で攻撃しながら、敵を攪乱。

無理やりこじ開けた穴からアルテミスへ突撃する。

元々は陸戦も想定内だ。

「このまま直進するー！」

エンジン音を吹かすフオルセティ。

スオウで出撃したハイネ率いるモビルスーツ隊と敵防衛隊との戦闘が激しさを増す。

そんな戦場を駆けるルナマリアは別方向からアルテミスへ向かっていた。

背中の翼から光を放出し、いつも以上の速度のまま敵陣を突っ切っていく。

「あれは?」

その先でやたらと味方の被害が大きな地点を発見する。

隊列を組んだ味方の部隊が次々と撃ち落とされ、レーダーから反応が消え失せた。

「敵の大部隊でもいるのかしら?」

何にせよ放ってはおけない。

火の中に飛び込む危険は承知の上でインパルスは蹂躪が行われている現場へと足を

踏み入れた。

その場では暴れていたのはティアマト。

所々に傷を負いながらも、まだまだやれるとばかりに砲撃を撒き散らす。

「逃がさない、逃がさない、アレン!!」

コックピット内でミレイアは錯乱したかのように頭を振り乱し、凄惨な表情を浮かべていた。

傍には使用済みの注射器。

コンソールには『I・S・システム』起動済みであると表示されている。

「私は……大佐を！」

イノセントガンダムの圧倒的な力によって植え付けられた恐怖。

それを抑え込む為、彼女は最後の手段に打って出していた。

その一つがI・S・システムだ。

これを用いれば余計な恐怖は消え、戦闘能力を向上させることができる。

ただ強化兵には効きが薄いのが問題らしいが、戦えるのであればミレイアには十分な代物だ。

そしてもう一つが研究者から渡された即効性の強化剤。

詳しい説明は専門的すぎて分からなかったが、一時的に自身の能力を強化できるものであるらしい。

当然、それなりのリスクが伴うようだが、これも関係ない。

そんな事は些事だ。

「——邪魔アアアア!!」

目的は逃げた白いガンダムのみ。

邪魔する羽虫はすべて消す。

そんなミレイアの思いに答えるようにティアマトの砲口が光を集め、同盟軍のモビルスーツを蹂躪する。

「は、はは、アハハハ!!」

駆け巡る力。

潰されていく敵。

満ちる万能感にミレイアは笑いを堪える事ができない。

初めからこうしておけば良かったのだ。

こうすれば例え相手が誰であろうと。

「勝てる! アレンにだって! 大佐の邪魔はさせないよ!」

先ほどまでとは比較にならない操作精度でドラグーンをコントロール。

邪魔な連中を排除しながら、目標であるイノセントガンダムの後を追う。

しかしそれをさせまいと割り込んできたのはルナマリアだ。

「好き勝手にさせないわよ!」

ビームライフルで狙撃で見事なまでにこちらの進行を阻害してくる。

「また邪魔な奴が!」

苛立ちながらミレイアは突っ込んでくるインパルスにドラグーンを差し向けた。

先ほどまでの連中と同じだ。

ドラグーンで囲い、四方からの攻撃とティアマト本体の砲撃で嵌め殺す。

「落ちろ！」

しかしインパルスは先ほどまでの敵とは違った。

明らかに普通ではない速度を持ってドラグーンを引き離すと、背中のレール砲を発射した。

発射された砲弾は途中で弾け飛び、砲台を巻き込み爆発を引き起こす。

「そー！」

動きを鈍らせた所に狙いをつけ、高エネルギー収束ライフルが火を噴いた。

発射されたビームの奔流が砲台を纏めて消し飛ばしていく。

「あいつもドラグーンを落とすなんて!？」

「凄い数、囲まれたら終りね」

相対するパイロットは二人共、理由こそかみ合わないものの全く同じ感情を共有していた。

それは敵に対する警戒感。

互いに冷や汗を掻きながら、相手の姿を注視する。

「こいつを放っておく訳にはいかないか」

とはいうものの、ルナマリアにとって不味い状況である事に違いはなかった。

最初に断っておきたいが、ルナマリアにドラグーンを撃ち落とす、もしくは回避するなどという化け物染みた事はできない。

先ほどドラグーンを落とす事ができたのは、全軍に行き渡っているドラグーン対策に則った行動を取っただけ。

2、3基程度であるなら十分対応可能だ。

だがそれが10、20と増えれば話は別となる。

しかも精度が並みではないとなれば、尚の事だった。

「私はアレン達みたいにはやれないから、よく考えないと」

基本方針は変わらない。

ドラグーンに囲まれないように距離を取りつつ、隙を見て攻撃を加える。

口にするのは簡単だが、そう上手くいけば苦労は無い。

「それでもやるしかないけどね」

差し向けられた砲台を振り切るように加速するインパルス。

それを苛立たしげに睨むミレイアは、砲撃を繰り返す。

「消えろ、私の邪魔をするなアア!!」

「ミレイア!?!」

ビーム砲をシールドで防御しながら、聞き覚えのある声に驚愕する。

「アンタ、何やってんのよ！」

「ルナマリアに答える必要なんてないでしょ！ 私は貴方達の敵！ それだけよ！」
複列位相砲の一撃をインパルスへ発射。

同時にビーム砲を叩き込む。

「弟を置いてテタルトスに走った結果がコレなの？」

ルナマリアは素早く砲撃をかわし、ビームライフルで反撃する。

その間も動きを止めず、ドラグーンへの対処も忘れない。

「チョロチョロ動くな！ 私に弟なんていない！」

「何を言ってる……ケイはアンタの弟でしょうが！」

「そんなのは父親がどこぞの女と勝手に作って連れてきただけ！ 私には関係ない

！」

そう、ミレイアにはもう関係ない事。

すでに過去は振り払った。

ケイの事だってそうだ。

彼女は幼かろうが両親の汚点であるケイという存在を心底憎んでいるのだから。

「私はあるな家族と本当に決別した！」

ビームシールドに弾かれるビーム砲。

しかし圧力に押されインパルスは動きを鈍らせる。

そこにドラグーンを叩き込んだ。

「貴方達も同じ！ 過去なんてもうどうだっていい！ 私は変革し、本当に自由になるの！」

動く砲台の速度が増し、インパルスを捉えると猛攻を仕掛けた。

両手から展開したビームシールドを使い、防御していくものの、インパルスに無視できない大きなダメージを与えていく。

「大佐は私を導いてくれる！ 先にある変革が世界を変える！ そうすればもう二度と家族に苦しめられるような事もない。その邪魔をする奴はすべて消してやる!!」

その為に自分は戦っている。

ああ、そうだ。

その先にこそ――

自分の主張ごとありつたけの攻撃を相手に叩きつけ、止めを刺すべくビームサーベルを振り下ろした。

しかし、斬撃はインパルスの眼前でブルートガングによって受け止められていた。

そしてミレイアの主張を真つ向から否定すべく、ルナマリアの声上がる。

「ふざけてんじゃないー！」

力一杯サーベルを押し返し、斬艦刀で斬りつけた。

「アンタの言っているのはあまりに勝手！ ケイはまだ何も知らない子供なのよ！」

「だからそれが——」

「自分には関係ないって何も知らないあの子を突き放すだけなら、好き勝手な事ばかりしてたつていうアンタが嫌う両親と何が違うの？」

「ッ!？」

狼狽えながら懐に入り込んできたインパルスを突き放し、再びティアマトが得意とする砲撃戦へと誘いこむ。

「私が、あいつらと一緒？」

「当たり前でしょ！」

ルナマリアとしてはミレイアの言葉は話半分に聞いていた。

此処までの会話からも分かるように、ミレイアは自分の事しか考えていない。

思い込みも激しく、人の話も碌に聞いていない始末。

両親の件も何処までが本当のことやら怪しいものだ。

「違う、私は！」

「違わない！ アンタは結局、変革なんてどうでもいいんですよ！ 煩わしい全てが

無くなれば！」

「……ッ」

沸き上がる憤りとは裏腹にミレイアの声は出ない。

ルナマリアの指摘はミレイアの凶星を突いていたからだ。

「うるさい、うるさい!! 何も知らない癖に偉そうに! 私に関わるな!」

「そう、じゃあもう遠慮しないから!」

「貴方ごとき、今の私に勝てるっても!!」

ビーム砲で動き回るインパルス牽制しながら、ドラグーンで囲い込む。

ミレイアにもすでにルナマリアの弱点が分かっていた。

彼女にドラグーンを捌く技量はない。

先程まで防御一辺倒なのがその証拠。

「なら先程までの戦法で十分!」

仮に逃れたとしてもルナマリアにこちらを倒す術はない。

「接近したさっきの瞬間こそ、最後のチャンスだったのにな!」

インパルスは変わらず、逃げの一手。

囲まれないように、必死に速度を上げて砲台を引きはなそうとしている。

「無駄よ、ルナマリア。逃がさないから!」

インパルスの進路を予測。

近くを漂う残骸に逃れようとする前に複列位相砲を発射した。捉えた一撃は寸分の狂いも無い。

インパルスの背中を突き刺さそうと直進する。

だが次の瞬間、ルナマリアは装備していた斬艦刀を切り離し、盾にして砲撃を防いだ。
「なっ!?!」

「ミレイア、アンタの敗因を教えてあげるわ。戦い方がド素人丸出しな事よ!」
残骸の陰に飛び込んだインパルスをミレイアは鼻で笑う。

「それで隠れたつもりなの? そんなものティアマトの火力の前じゃ盾にすらならぬ
いー!」

複列位相砲で残骸ごと吹き飛ばそうとする、ミレイア。

しかし、それが甘いと言わんばかりにルナマリアの一撃が炸裂する。

「ハアアア!」

残骸目掛けて突きだした右掌。

パルマ・フィオキーナが残骸を砕き、周辺に爆風と破片をばらまいた。

放射状に散らばった破片が衝撃波と共にドラグーンに激突。

ミレイアからコントロールを奪い去った。

「嘘!?!」

「今！」

好機とばかりに翼を広げたインパルスがティアマトへ突撃する。

「ま、まだまだ！」

「いえ、アンタの負けよ！」

虚をつかれた動揺と光学残像に翻弄され、砲撃の狙いが甘い。

掠めて傷を負う程度は問題ないと、インパルスはティアマトに肉薄する。

「な、速い!?!」

「アンタが遅いのよ！」

ティアマトが苦し紛れに放った一撃が装甲を抉っていくが、止まるには至らない。

腰から抜いた二振りの斬艦刀。

それをティアマトの腹部に突き刺した。

「キャアアア！」

複列位相砲の発射口に突き立つ刃。

その衝撃と機体へのダメージがコックピットに座るミレイアに思わぬ激痛をもたらした。

「あ、ああああ、痛い、痛い!! 頭が！」

故に眼前へと迫るインパルスに対処できない。

「アンタはいい加減、正気に戻りなさい！」

用意していた左掌のパルマ・フィオキーナを頭部に突きつけ、粉碎した。

「ああ、やああああああああ！」

襲う痛みが限界を越え、ミレイアの絶叫が木霊する。

「わた、わた、私……は」

手を伸ばすミレイアの手を掴む者は誰もおらず。

そのまま闇に引きずられるように、そして大切なものを碎かれるような感触と共に意識を失う。

破壊されたティアマトは爆発を起こしながらアルテミスとは逆方向へ流されていった。

「味方に救助してもらいなさい。……それにしても結構派手にやられたわね。ミレイアが素人で助かった」

ルナマリアがミレイア相手に勝利を収められた理由。

それは単純な戦闘経験の差であった。

ミレイアの操縦技術自体は強化されていた事もあって、エース級にも劣らないものだった。

しかし、それを使う為の経験があまりにも不足していたのだ。

「さて、私もアルテミスへ！」

漂うティアマトの残骸を一瞥するとルナマリアはアルテミス方面へと機体を向かわせた。

◇

カース——いや、ラウ・ル・クルーゼとムウ・ラ・フラガ。

切っても切れない深い因縁で結ばれた二人の戦い。

飛ぶ砲台とビームライフルの光線が入り混じる膠着状態となっていた。

「思ったよりもやるじゃないか、ムウ！」

「俺だって今まで遊んでいた訳じゃないんでね！」

プロヴィデンスより発射されるビームライフル。

撃ちかけられたドラグーンと同時に射線を見切ったムウは鮮やかに回避運動を取る。

その動きに淀みはない。

なるほど。

確かにヤキン・ドゥーエ戦役の頃よりも明らかに技量が上がっている。

感じる手応えにムウはさらにプロヴィデンスに攻勢を仕掛けた。

「やれるー！」

ヤキン・ドゥーエ戦役時のムウはやはり経験不足であった事は否めなかった。

訓練を怠ったつもりはない。

だがモビルアーマーを操ってきたムウより、長い間モビルスーツに搭乗していたラウとの差は歴然。

それがヤキン・ドゥーエでの戦闘に如実に表れ、ムウは結果敗北してしまった。

故に此処までより訓練を、実戦経験を積み上げきた。

その錬度はかつての比ではない。

ムウの実力を理解したラウの口元が楽しげにつり上がっていく。

撃ち合うビームライフル。

飛び交う砲台。

二機の間で激しい火花が散っていく。

「しかしそれでもまだまだ！ 私には及ばんよ！」

「ッ!？」

駆け巡る直感に合わせ、プロヴィデンスの斬撃を躲す、ムウ。

そこにドラグーンの砲火が襲い掛かる。

だが慌てる必要はなかった。

ドラグーンの砲撃はすべてアカツキの装甲に反射され、ダメージを受けない。

「報告通りその機体にはビーム兵器が通用しないようだな」

アカツキの装甲『ヤタノカガミ』はビーム兵器を反射させ、跳ね返す事も可能なもの。故にアカツキはビーム兵器を主体としている機体にとっては最悪の相手となる。

それはプロヴィデンスにとっても同じ事。

現にドラグーンによる攻撃は全て反射されていた。

「なるほど。それならそれで戦いようもある」

ラウはライフルをビームから実体弾へと切り替える。

「これは防げるか！」

「ッ、実体弾?!」

ムウはプロヴィデンスが撃ち込んできた実体弾をシールドを掲げて防御する。

予想通りの反応にラウはさらに笑みを深くする。

「その機体はビーム兵器に対する優位性はあるが、実体弾に対してはさほどではないようだな」

その通り。

アカツキの装甲はビーム兵器には強い反面実体弾には通常装甲程度の防御力しか有していない。

直撃を受ければ『ヤタノカガミ』諸共砕かれてしまう。

「チツ、まあ当然気づくよな」

アカツキのデータは向こうも解析しているだろう。

ラウなら気がつかない訳がない。

「それにコレも防げまい！」

シールドから放出されるロングビームサーベル。

「舐めるなよ！」

ムウもまたアストより譲り受けた斬艦刀を引き抜き、プロヴィデンスの斬撃に合わせるように刃を振るう。

交錯する一撃。

すれ違った瞬間、斬撃がアカツキの装甲を僅かに掠めていく。

「ハッ、その程度か？」

「くそー！」

やはり強い。

ほぼ同時に繰り出した一撃にも関わらず、完全にムウが打ち負けていた。つまりは反応速度においてはラウの方が格段に上という事になる。

「けどな、そんな事は承知の上！」

「まだ足掻くか！ アスト・サガミと同じように！ そんな事をしても結末は変わらんよ！」

「貴様の理屈に付き合う気はないんでね！」

「前にも言った筈だ、私は結果だと！ 仮に貴様らが勝利しても再び新たな戦いは起きる！ そして最後に人は滅び去る！」

「相変わらず貴様という奴は！」

ムウはドラグーンの砲撃は無視しながら、プロヴィデンスのライフルにだけ注目する。

あれだけがアカツキの装甲を破壊できるからだ。

しかしそんなムウの思考を見透かしたように、ラウの嘲る声が聞こえてきた。

「成長を認めよう、ムウ。確かに強くなった。だが、それでもお前は出来損ないだ」

ライフルの一撃を確にかかわしたアカツキに背後からビームスパイクを展開したドラグーンが迫る。

「ッ!？」

ギリギリ機体を捻り、回避運動を取る。

持ち前の直感でスパイクをかわず事に成功するが、その隙に距離を詰めたプロヴィデンスの一撃がアカツキの肩部を斬り飛ばした。

「ぐっ」

「ライフルを警戒しているのが見え見えだ！」

「まだまだ！」

体勢を立て直し、これ以上は近づけないとビームライフルを連射。

それを前にプロヴィデンスは再びドラグーンを射出、展開したフィールドで弾き飛ばした。

「防御フィールドが展開できるのか!？」

「さあ。今度はどうする？」

さらに射出した砲台をアカツキへと差し向ける。

ラウの狙いはアカツキの装甲が破壊された箇所。

そこはヤタノカガミの恩恵を受けられない。

当たれば反射もできずに破壊されてしまうだろう。

「何もそつちだけの専売特許って訳じゃない！」

ムウもまたアカツキを覆うようにフィールドを展開。

ドラグーンの砲撃を防いで見せた。

「なるほど。だが！」

ラウは再び実体弾でドラグーンを狙撃し、フィールドを発生させていた基点を破壊。

しかもほぼ同時にプロヴィデンスを狙撃しようとしていた砲台まで吹き飛ばした。まさに神業としか言いようがない。

「これで終わりか？ エンデュミオンの鷹の名が泣くな！」

「うるせえよ！」

強い口調とは裏腹にムウはジリジリと焼かれるような焦燥感に襲われていた。

ラウの技量は無論知っていたし、それなりの機体で来るだろう事も予測していた。だがそんな予測も意味がないとばかりに駆けるプロヴィデンスの力は圧倒的。

ラウの技量もまた予想を軽く上回っている。

「……分かつちやいたがな。覚悟を決めるしかないか」

自身の力不足を痛感するも、それも分かっていた事。

故にできれば使いたくない方法を自然と選択せざる得なくなった。

「このままじゃジリ貧だからな！」

実弾とビームを巧みに使い分けるラウの攻撃を捌き、距離を詰める。

そしてタイミングを見計らって誘導機動ビーム砲塔を射出した。

「何かするつもりか」

当然、ラウもムウが何かしら仕掛けてくる事を察し迎え撃つ。

慎重に動くという選択もある。

しかしムウを相手に退く事などラウのプライドが許さない。

「すべて叩き伏せるのみ！」

だがそれはムウにとつても予想済み。

「そのプライドの高さが命取りなんだよ！」

僅かだけ誘導機動ビーム砲塔を残しすべてをプロヴィデンスへ差し向ける。

ドラグーン同士の撃ち合い。

拮抗していた状況を動かしたのはプロヴィデンスだった。

飛び交う砲台を撃ち落とし、ロングビームサーベルを構えて距離を詰める。

「そろそろ勝負を決めさせてもらおう！ 終わりだ、ムウ!!」

振り上げられるサーベル。

ライフルによつて巧みに体勢を崩されたアカツキにかわす術はない。

しかし今にも振り下ろされんと迫る光刃を目前にムウは口元に笑みを浮かべた。

「これ待ってたんだよ！」

損傷を承知で腕で無理やり斬撃を止め、同時に蹴りを入れる。

そして次の瞬間、最後の誘導機動ビーム砲塔を射出した。

「そんなもの今更——ッ!?!」

ラウもすぐにソレが普通の誘導機動ビーム砲塔で無い事に気づく。

「ケーブル!? ガンバレルか!？」

射出されたワイヤー付きの誘導機動ビーム砲塔は二機を巻き込むように何周か周り、アカツキとプロヴィデンスを結びつけた。

ムウは生き残った誘導機動ビーム砲塔をワイヤーで動けない二機へと向ける。

「これで自由に動けまい!」

損傷しているとはいえアカツキの装甲は健在。

反射されたビームを自由に動けないプロヴィデンスは防ぐ事が出来ない。

「貴様!？」

「こうでもしないと貴様を倒せないんでね!」

「初めからこれを狙って!」

ラウとの実力差を一番痛感していたのはムウ自身。

これまでの戦闘経験がそれを示している。

だが逆を言えばラウの動きや癖を誰よりも知っていたのはムウだ。

だからドラグーンを射出すればどう動くのかも、より高度な予測出来ていたのである。

「終わりだ!」

誘導機動ビーム砲塔からアカツキへ向かってビームが発射された。

その瞬間、急速に接近してくる機体があった。

「カース様!!」

「No. I!?!」

姿を見せたのはボロボロになったスカージ・リュカオン。

ウエポンシザーズの片方が失われ、装甲の所々が焼け落ち、無残に突き刺さった対艦刀が損傷の大きさを物語っている。

しかしそのスピードは全く落ちておらず、異常な速度でアカツキへと距離を詰めてきた。

「貴様にカース様はやらせん!」

伸ばすウエポンシザーズがアカツキの胴体を掴む。

「この後に及んで!」

軋みを上げ今にも切断されそうなアカツキに出来る事は一つだけ。

カウンター狙い。

ムウは動く腕で握った斬艦刀で斬り払った。

瞬間、到達したビームがアカツキの装甲へ反射され、スカージとプロヴィデンスに突き刺さる。

その爆発は三機のモビルスーツを巻き込み、眩い閃光が辺り一帯を支配した。

◇

アルテミスの防衛しているモビルスーツを撃墜し、進み続ける白いガンダム。邪魔な敵を排除し、ようやくアルテミスへ近づいたアストは近づいてくる因縁の機体に表情を険しくする。

紅い装甲を持った機体ユースティアガンダム。

「来たか、アスラン！」

挨拶代わりにビームライフルを叩き込み反応を見る。

「これ以上は接近させん、アスト！」

ビームライフルを回避したアスランはイノセントに向け、複列位相砲を発射した。

浮かぶ岩片すら容易に砕く一撃を横っ跳びで避けたアストに今度はドラグーンの洗礼が襲いかかった。

「チッ！」

ビームシールドを展開した砲台を機関砲で牽制しつつ、ビームサーベルを抜く。

「レクイエムは破壊させてもらおう！」

「やらせはしない！」

ユースティアもまた実体剣オートクレールを構え、イノセントへ叩きつけた。

激突した刃が火花を散らす。

開始された白と紅のガンダムの戦い。

結末がどうあれ、二人の決着はここで着く。

しかしそれを阻まんと特徴的な機体が接近していた。

ミーティアを装着したエリユシオンガンダム・ディアナであった。

「もう始まつてる!?!」

モニターに映し出されるセレネにとっての最悪な光景に思わず歯噛みする。

いや、まだ間に合う筈だ。

——ここで彼さえ倒せば。

「……最低の行いだと分かっている。でも、それでも！」

アスランと戦うビームサーベルを掲げる白い機体をロックし、砲撃を開始しようとするリガーに指を掛けた。

「やらせない!!」

ミーティアの射線上へ割り込むように現れたのは蒼い翼を持つ熾天使トワイライトフリーダム。

「貴方は何をしています、ディノ中尉!!」

「マユ・アスカ」

機体越しに睨み合う二人の少女。

愛する者を守る為、彼女達の戦いも此処に始まろうとしていた。

第48話 女の戦い

最終局面に突入したアルテミス攻防戦。

ギリギリの戦いが繰り広げられる戦場の中、銃口を向け睨み合う二機のガンダムが居た。

トワイライトフリーダムとエリユシオン・ディアナ。

コックピットに座るマユとセレネは互いに警戒を崩さず、目の前の機体を注視する。

嵐の前の静けさとも言うべき沈黙の中、先に口を開いたのはフリーダムを操るマユだった。

「……どういふつもりなのですか、デイノ中尉？ 私達を騙していたのですか？」

咎めるようなマユの声。

だが、刺々しいのも当然だった。

アストを狙撃しようとしたからというだけではない。

この場にいる事こそが問題なのである。

セレネ達の役目は今回の作戦における同盟側にとつての要。

それがすべて茶番であつたなら、アポロンに向かつた兄やラクス達は——

そんなマユの懸念をセレネは何の迷いもなく否定する。

「それは勘違いです、アスカ中尉。私の役割は果たし終えました」

「え、では？」

「はい。作戦は成功、もうすぐテタルトス議会の方から戦闘一時停止の命令が下る筈です。そうすれば統合軍も退かざる得なくなる」

「ならば何故、アストさんを狙っていたんです？」

「分つているんでしょう？ 彼を放置しておけば私の大切な人を傷つける。だからその前に」

「ふざけないで！」

その言いはマユにとつて到底受け入れる事などできないもの。

それはセレネにも分かつていた。

接した期間こそ短いものの、マユがアスト・サガミを慕っている——いや、愛している事は。

だからセレネがやろうとしている事を彼女が受け入れられる筈はないのだ。

「アスカ中尉、貴方がそう言う事も分かっている。それでも！」

そう、それならば、セレネもまたアスランを愛している。

だから彼を討たねばならない。

例え目の前にいる自分と同じ気持ちを抱えている女性を殺したとしても。

「私はアスト・サガミを討つ！ 大切な人を守る為に！」

「そんな事させない！」

二人は互いに譲れない。

故にこうして銃を向けるのだ。

「貴方が邪魔をするなら……此処で倒す！」

「私も同じです、セレネ・デイン!!」

マユはビームライフルを連射しながら前が出る。

狙いは一つ。

ミーティアだ。

アレを装着したエリユシオンの砲撃能力は圧倒的。

遠距離からの砲撃戦に持ち込まれば、勝ち目はない。

だからアドバンテージのある機動性をもって即座にミーティアを潰しにかかったのである。

「ハアア!!」

マユの想定通り、ミーティア装備のエリュシオンはフリーダム機の機動性には対応出来ていない。

ライフルで相手を牽制しながら、ビームサーベルを抜き放った。

「このまま斬り潰す!」

「それはすでに想定済み!」

フリーダムの斬撃を前にセレネはミーティアを装着したまま実体剣でサーベルを弾いて見せた。

予想外の器用な動きにマユは驚愕を隠せない。

「なっ!?!」

同時に発射される全火力。

マユは咄嗟に速度を上げ、繰り出される砲撃を回避する。

だがミーティアの砲撃は苛烈さを増し、高速移動するフリーダムに振り注いでいく。

「くっ、こんなもので!」

砲撃を潜り抜け、ライフルやレール砲で牽制しながらフリーダムは再び接近戦を仕掛ける。

方針に変更なし。

ミーティアを最優先で潰すのみ。

しかしセレネは慌てる事無く、またも斬撃を鮮やかに捌いて見せた。

「貴方の考えてる事はお見通し！」

何故ならミーティアの弱点を一番熟知しているのはセレネ自身。

だからこそミーティアを使った戦い方の訓練には力を入れていたのだ。

故に接近戦を挑まれる事も予想範囲内。

そのまま攻撃にもスムーズに移行する。

「行け！」

弾き飛ばされ体勢を崩すフリーダムにミサイルを一斉に発射。

さらに避ける暇を与えず、ビーム砲を叩き込む。

出し惜しみは無し。

相手は『オーブの熾天使』なのだから。

ミサイルと共に砲撃が突き刺さり、フリーダムを爆炎が包む込む。

「……手応えはあったけど」

倒したか？

いや、そう簡単に倒せる筈はない。

警戒を崩さないセレネ。

その予測は当たり、爆炎の中からビーム砲が発射されてきた。視界を遮られているとは思えない程、正確な一撃がエリシユオンに襲い掛かる。

「くっ」

操縦桿を巧みに操り、ビーム砲の射撃を避けるエリユシオン。

砲撃がミーティアの本体を掠めていくが、損傷自体は軽微。

戦闘継続にも問題はない。

「今ので大体の位置は分かりました！」

収集したデータを解析し、フリーダムの子測位置を割り出すとそこに向けて火力を解放する。

戦艦ですら撃滅できる火力が降り注ぎ、敵機の居場所を蹂躪した。

「この火力に晒されればフリーダムといえども——」

だがその時、爆炎の中から飛び出してきたものがあつた。

それは投げつけられた斬艦刀だ。

回転しながらミーティア目掛けて飛んでくる。

「ッ!？」

迎撃は間に合わないかと判断し、咄嗟に後退する。

しかし回避しきれず斬艦刀はミーティアの右アームユニットを捉え、斬り飛ばした。

すかさず別方向から飛び出してくるフリーダム。

装甲の所々を損傷しているが、戦闘に支障はないようでその動きに衰えはない。むしろ先ほど以上のスピードでエリュシオンへ肉薄してくる。

「さらに速い!？」

避ける間もなく振るわれた一撃がミーティア側面部を斬り裂いた。

裂かれた部分の爆発を歯を食いしばって耐えながら、セレネは翼を翻すフリーダムに視線を向ける。

「……速すぎる」

想定以上。

フリーダムの速度はもはや小手先の技術ではどうにもならないレベルに達している。

セレネは残った左アームユニットを握りミーティアをパージ。

弾丸のように突っ込んでくるフリーダムを迎え撃った。

「これ以上は!!」

「ハアアア!!」

同時に振り抜かれた斬撃が交錯。

激しい衝撃と閃光が弾け飛ぶ。

「私はアスト・サガミを倒す! 彼こそアスランを苦しめる最大の原因だから!」

「アストさんは私が守る！ これ以上、あの人を悲しませない為にも！」
刃と刃が交差し苛烈な斬り合いを繰り返す。二機のガンダム。

マユはその速度と高い技量を持ってエリユシオンを翻弄。

反面セレネは培われた高い分析力と対応力でフリーダムと拮抗していた。

「強い。流石に『オーブの熾天使』」

実体剣でビームサーベルの斬撃を捌きながらセレネは敵の技量に舌を巻く。

反応速度、射撃精度、近接戦能力。

それらすべてが高水準。

テタルトスや統合軍にもこれほどの技量を持つパイロットはいない。

戦えるとするればそれこそトップエース達だけだろう。

だからと言ってセレネは微塵も怯まない。

彼女もまたテタルトスに名を連ねるトップエースの一人なのだから。

「このまま押し込む！」

見事な機体制御。

淀みなく斬り返して刃を振るってくるフリーダム。

袈裟懸けの一太刀がエリユシオンの装甲を容赦なく斬り飛ばし、決り取っていく。

傍から見れば劣勢に見えるこの状況。

しかしセレネは冷静さを失う事なく、氷のような冷たい目でフリーダム動きを観察していた。

「……確かに強い。でも、大分動きも見えてきました」

一合。

二合。

剣を打ち合う度に劣勢だったセレネの状況が互角へと変わっていく。

「こちらの動きを読んでいる!？」

「こういった分析は昔から得意分野なんですよー」

上段から振り下ろされた一撃を実体剣で受け止め、弾き飛ばす。

そしてビーム刃を放出させたアームユニットを投げつけた。

伸びた刃は真つすぐにフリーダムの目掛けて突き進む。

「ッ!？」

咄嗟に発動させたSEEDによる爆発的な反応。

それによりマユは致命傷を避ける事に成功する。

しかしそれは無傷という意味ではない。

アームユニットのビームソードはフリーダムの脇を削り、レール砲を破壊していったのだから。

「ぐっ」

「今の避けるとは。やっぱり凄い。でも、私も負けられない！」

セレネは一切の容赦もせず、フリーダムを仕留めに掛かった。

発現するセレネのSEED。

両手に握った実体剣『イシユタルⅡ』の先端から伸びるビーム刃がフリーダムに襲い掛かる。

「落ちろ!!」

二刀の斬撃から逃れようとたまたまらず後退する、マユ。

だがセレネはそれをさせるほど甘くは無かった。

「逃がしはしない！」

フリーダムの逃れる方へあらかじめ散布しておいた誘導ミサイルが背後から直撃した。

「ぐううう!! いつの間に!?!」

「さっきミーティアをパージした時です！」

実体剣がフリーダムの肩ごと左腕を破壊。

さらなる追撃が腹部に大きな傷を生み出した。

「うううう!?!」

「止め!!」

「まだアア!!」

スラストアーを噴射し、一回転。

突きつけられた切っ先諸共敵機を蹴り飛ばすと同時に発射したビームライフルがエリュシオンの装甲を撃ち砕いた。

「っ! まだ足掻く」

「当然です! 私には負けられない!」

さらにマユは残ったレール砲を展開。

エリュシオンの至近距離で炸裂させると、反動を利用して距離を取った。

「ハア、ハア!」

乱れた呼吸を整えながら両手に剣を構える敵の姿を見据える。

強い。

今まで戦ってきた敵とはタイプが違うがその実力は本物。

爆発力こそ他に及ばないが、敵に対する分析力とそれに伴う対応力は群を抜いている。

技量においてはマユが上。

しかし型に嵌ればセレネの力がそれを上回る。

「何とかするしかないけど」

だが反撃に移ろうにもフリーダムの状態はお世辞にも良いとは言えない。左腕は欠損。

一部装甲も抉られ、武装も破損している。

切り札であるC・S・システムが起動できるかも怪しいものだ。

無理やり発動させれば、機体を持たずに自滅する危険すらある。

仮に発動させたとしても、それすらセレネは計算に入れているだろう。

「それでもやるべき事は変わらない」

幸い敵も無傷ではない。

先ほどのビーム砲が装甲を吹き飛ばし、腕部に影響が出ている筈。

ならば、これまでのように器用な捌き方はできまい。

覚悟を決めライフルを腰にマウントしてサーベルを抜く。

「これで決着をつける！」

マユが選んだのは速度を生かした近接戦。

色々考えはしたがこれしかない。

武装の損傷を考えれば、砲撃戦は明らかに不利。

ならば残るアドバンテージを生かす方がまだ勝機がある。

しかしそれはセレネからすれば無謀な特攻と何も変わらない。

「勝負に出ますか。なら私も応じましょう!」

翼を広げ移動を開始したフリーダムに向けて砲撃を開始する、エリユシオン。

ビーム砲、レール砲、ビームライフルなど持ちうる火力をもつてフリーダムを追い詰める。

だがマユは速度を緩めない。

砲撃によるダメージを受けながらも、エリユシオンへと突っ込んでいく。

「本当に特攻するつもりですか!？」

「貴方に勝つにはそれくらい必要でしょう!」

「馬鹿な事を!」

セレネは突撃してきた敵機を斬り裂かんと実体剣を構えた。

しかしフリーダムは予想外に背中のビーム砲を発射してきた。

狙いは――

「ミーティア!？」

正確には斬り裂かれたミーティアの残骸である。

ミサイルポッドが含まれた残骸をビーム砲が貫通。

爆発したミサイルが周囲を爆煙に包みこんだ。

「くっ、視界を塞いだ程度で！」

フリーダムが向かってくる予測進路へビーム砲を叩き込む。爆煙の中を突き進む閃光の先。

そこからセレネの予想通り、フリーダムが飛び出してきた。

「アイギス!!」

放出されたドラグーンユニットがビーム砲を防ぎ、さらに発動させたC・S・システムがフリーダムをさらに加速させる。

「システムを作動させた!?! 自滅覚悟か!!」

翼が光の膜が攻撃を弾く。

そして爆煙を切り裂き。

光を纏い。

先程までとは比較にならない速度でエリクシオンの間合いに飛び込んでいく。

その姿はまさに熾天使。

「だとしても!!」

セレネの予想範囲内である事に変わりはない。

フリーダムの攻撃に合わせ実体剣を振り抜こうとした――

「なっ!?!」

しかしエリュシオンの腕は動かない。

否、正確には振り抜こうとした直前で、剣が光の膜によって阻まれていたのだ。そこでセレネはマユの本当の狙いに気が付く。

「ミーティアを狙撃した本当の理由はドラグーンの配置を把握しにくくする為!？」
「ハアアアアア!!」

エリュシオンの動きが止った瞬間、フリーダム of 斬撃が下腹部へと突き刺さる。
「ぐううう」

咄嗟の反応でコックピットへの直撃を避けたものの、その衝撃は凄まじい。
セレネは意識を奪われそうになりながらも、動くもう片方の腕を振り上げた。

実体剣がフリーダムの腹部へ突き刺さった。

「ギッツ!？」

腹部から火花が散り、フリーダムの動きが明らかに鈍る。

此処こそ勝機!

「コレで止め!!」

振りかぶったもう片方の実体剣を振り下ろす。

「まだアアアアアア!!」

マユの絶叫に応えるように機体を纏う光が一層輝きを増した。

瞬間、フリーダムを一瞬セレネは見失う。

故に振り下ろされた実体剣はフリーダムの姿を捉える事ができずに空を切った。

「残像!?!」

光学残像。

実体剣が貫いたのは光で生みだされた虚像だった。

フリーダムはエリュシオンの背後へ回り込み、ビームライフルを構えていた。

「セレネ・デイン!!」

「マユ・アスカ!!」

振り向きざまのビーム砲がフリーダムに直撃するも、発射されていたビームライフルがエリュシオンを背後を撃ち砕いた。

爆発と共に吹き飛ばされるエリュシオン。

フリーダムも装甲から色を失い、完全にシステムがダウンしてしまう。

「ハア、ハア、ハア、ア、アスト、さん、助けに」

どうにか立て直そうとする。マユ。

しかし彼女に戦う力はもう残っていなかった。

無理をし過ぎた代償。

それを支払うようにフリーダムは力を失い、マユもまた意識を失った。



損傷すら気に留めず突き進むグラオ・イーリス艦隊。

護衛のモビルスーツ隊と共にアルテミスの間近にまで迫っていた。

「主砲、発射！ モビルスーツを近づけるな！ 空いた穴にミサイルを叩き込め！」
敵の連携を崩し、空いた防衛網の穴。

そこからアルテミスへ向けてミサイルを発射する。

しかし何度目かの一撃もシールドを張る機体と陽電子リフレクターによりすべて防がれてしまった。

「くっ、やはりアレを排除しないとどうにもならないか！」

レクイエムを守る陽電子リフレクターも厄介ではある。

だがそれ以上に面倒なのは特殊シールド『オハン』を装備したバウであろう。

その機動性を生かした守備範囲の広さに加えオハンの堅牢さは厄介極まりない。
現に艦隊の攻撃は大半バウによって阻止されている。

「まずはアレをどうにかする方が先か」

「それは俺らの仕事だ！」

ギア部隊を率い、先行するのはハイネの駆るスオウ。

慣れない筈の可変型をハイネはすでに手足のように扱いながら、敵機を翻弄。持ち前の機動性を持ってバウ部隊へと攻撃を仕掛ける。

さらにそこへルナマリアのシークエル・インパルスも駆けつけてきた。

「ルナマリアか!?!」

「遅くなりました、援護します!」

所々損傷しながら動きを鈍らせないインパルスに頼もしさを感じ、ハイネはニヤリと笑みを浮かべた。

「頼むぜ!」

「了解!」

バウに肉薄したインパルスの一撃が胴体を貫く。

そのまま腕ごと引きちぎるとオハンを奪い取った。

「使わせてもらおうわ!」

オハンを使ってフォルセティを守りながら攻勢に出るインパルス。

それに合わせフォルセティはさらに速度を上げていく。

「バウはハイネやルナマリア達に任せておけばいい。残る問題は——」

砲口を守る陽電子リフレクターだ。

ユニウス戦役時には同じ性質を持つビームシールド装備の機体が陽電子リフレクターを突破した記録が残っている。

しかし今、それに該当する機体はすべて出払っていた。

となれば方法は一つ。

「……やはり直接乗り込むしかないか」

アルテミス要塞に潜入し、陽電子リフレクターの制御装置を破壊する。

運が良ければレクイエムの制御室も発見でき、発射も止められる可能性がある。

「総員、陸戦用意！」

「了解」

敵の砲火を物ともせず、フォルセティは直進する。

その先にはアルテミスへの入り口が待ち構えていた。

◇

アルテミスの外壁を滑るように移動する白と紅のモビルスーツ。

高速で移動しながら敵の攻撃を避け、さらには反撃するその様はまさに絶技。

決着をつけるべく始まったアンセム・イノセントガンダムとユースティアガンダムは

一進一退の攻防を繰り返していた。

「アスト！」

二本の実体剣『オートクレールⅡ』の一撃。

さらに背中のリフターから放出されたビームウイングがイノセントへ襲いかかる。

「お前との決着は後だ！」

ビームウイングをかわしユースティアの砲撃をバレルロールで回避したアストはビームライフルで反撃する。

アストはユースティアを無視し、常にレクイエムの方へ向いていた。

それにアスランも当然気が付いている。

戦略的に当然の選択ではあるが、それがより一層苛立ちを募らせていく。

速度を上げてビームを振り切ったアスランは怒声を発しながら実体剣の射撃でイノセントを狙撃した。

「逃しはしない!!」

ビームがアルテミスの外壁を抉る度に、岩片が舞い上がる。

アストは散った岩片を隠れ蓑に武装を持ち替えるとユースティアを狙って発射した。

「バズーカ砲？ そんなもの——」

VPS装甲を持つ機体には通用しない。

しかし同時に感じ取る嫌な予感。

それは数多の戦場で培ってきた第六感だ。

アスランは躊躇う事なく、その直感に従った。

「ッ！」

咄嗟に差し出すシールド。

バズーカ砲の直撃を受けた盾は容易く打ち砕かれ、その衝撃はユースティアの一部装甲にも影響を与えた。

「今の砲弾は……まさかVPS装甲を無効化する？」

僅かに破壊された装甲を見て砲弾の正体を看破したアスランは思わず冷や汗を掻く。

「避けた!？」

アストは対PS装甲弾を避けてみせたアスランの判断に舌打ちしながら、距離を取りつつ弾数を確認する。

「残りは二発か」

対PS装甲弾は特別製の弾頭。

試作段階故にコストも高く、一度の戦闘で装填できる数も限られている。

「だが、威力は十分に分かっただろう」

この武装はアスランにとっても脅威となる。

実体弾だから大丈夫という油断を突く奇襲はもう通用しない。

だが、警戒感を煽るといふ意味では十分すぎる威力を示してくれた。

通常弾頭と併用して使えば十分な効果が得られるだろう。

アストは足元の外壁を機関砲で崩し、さらに岩片を撒き散らすと離脱を図る。

「逃げる!?! いや、狙いはエネルギープラントの方か!?!」

アスランの妨害もあつて現状レクイエムの破壊は難しい。

ならばとレクイエムにエネルギー供給を行っているプラントさえ破壊してしまえば、

発射する事が出来なくなる。

「例えリフレクターで防衛していたとしても!」

ユースティアを振り切り、アストが目指したのはエネルギープラントから伸びる

チューブだった。

エネルギープラントを直接破壊しなくても、アレさえ切つてしまえばレクイエムの発

射に影響が出る。

岩盤に守られるように配置されたチューブをビームサーベルで断ち切った。

しかし一本切った程度ではエネルギー供給が止まる気配がない。

「二本では駄目か。なら全部——ッ!?!」

追いついてきたユースティアの射撃を飛び上がって回避。

上段から振り下ろされた実体剣をサーベルを横薙ぎに振るって受け止める。

「これ以上はやらせない！」

サーベルを弾き、両足のビームサーベルを展開。

両手に握ったオートクレールと共に猛攻を開始する。

「ハアアアア!!」

アストもまたナーゲルリングを引き出し、ユースティアの斬撃を捌きながらサーベルで斬りつける。

「前のように簡単に行くと思うな！」

「いい加減に鬱陶しいんだよ！ 俺はお前に構っている暇などない!!」

「貴様には無くとも、俺にはある！」

縦横無尽の斬撃にライフルで牽制しながら回避する、アスト。

しかしすでに射出されていたドラグーンユニットが背後から襲い掛かった。

「アスラン！」

イノセントも残った『フリージア』すべてを射出。

ドラグーン同士の撃ち合いを開始する。

「いちいち情けない！ そんなだから！」

「貴様が言えた義理か！ その力と才能を生かさず、ただ無駄に犠牲を振りまくだけ

！」

「なんだと！」

ビームが飛び交う中を激突した二機のガンダムが斬り結ぶ。

「自分を愛してくれた女一人守り切れなかった者の言う事がそれか!!」

「お前こそ、いつまでも!!」

激しい剣撃を潜り抜け、懐に入ったイノセントの一撃が脚部のビームサーベルを破壊。

同時に繰り出したユースティアの実体剣がビームライフルを斬り潰した。

「これで！」

止めを刺すべく複列位相砲発射体勢に入る。

「舐めるな！」

至近距離からの複列位相砲を避ける為、機体を寝そべらせバルカン砲を叩き込む。

砲撃はリフターへ直撃、ビームウイングを吹き飛ばす。

「ぐっ、貴様！」

「落ちろ！」

さらに追撃。

下降しながら発射された対P S装甲弾がリフターを完全に破壊した。

「ぐっ、おのれ！」

アスランは咄嗟にリフターを切り離し、爆発を避けつつビームサーベルを投げつける。

「くっ、切り離して致命傷を避けたか！」

サーベルが肩部を掠め、傷を負うもののユースティアがバランスを崩した隙を狙い離脱を図るイノセント。

「リフターは失ったが……機体自体に問題はない！」

状態を確認したアスランはスラストを吹かし、敵機を追撃する。

距離も離れておらず、すぐに追い付いたユースティアはイノセントに斬りかかる。

鏢迫合い高速で移動する二機。

「オオオオ!!」

「本当にお前は!!……アレはフォルセティか?」

稲光によって照らされる中、アストの視界にアルテミスへ上陸しようとしているフォルセティが見えた。

イザークは予定通りに陸戦を挑むつもりなのだろう。

「上陸を許した? やるな、イザーク！」

「行かせないぞ！」

立場は逆となり、今度はアストがユースティアを行かさない為にビームサーベルを振るっていく。

そのままイノセントとユースティアもアルテミスの中へと突入する。

決戦は最終局面へと移行しようとしていた。

第49話 天使に抱かれて

展開されたバウの特殊シールド『オハン』

ドラグーンシステムの応用でシールドから射出されたフィールド発生装置によって巨大かつ強力な防御シールドを展開できる特殊兵装。

まさに鉄壁の防御を誇るこの兵装を前にハイネ達攻撃部隊は手こずらされていた。

「チツ、面倒な装備だな、アレは!!」

飛行形態のスオウを操りながら、ハイネは思わず毒づいた。

その気持ちは攻撃隊の誰もが思う所だった。

ビームやミサイル。

遠距離からの攻撃はすべて防ぐ上、接近戦を仕掛けようにもバウがそれをさせないよう動く。

さらに接近に成功したとしても、流石は最新鋭の機体。

パイロットも精銳ぞろいらしく、すべて上手く捌かれてしまう。

「攻撃だけじゃなく防衛にも手を抜かないってか。指揮官の性格が出てるぜ」
味方ならば頼もしいのだろうが、敵に回せばすこぶる厄介だ。

「それでもやるしかないんだけどな！」

敵部隊に向けビームライフルで牽制しつつ、バルカン砲を発射する。

しかし隊列を崩す事もできずオハンのビームシールドによって全弾防がれてしまった。

「けどそれは織り込み済みだ！」

スオウの後方から連携を組んだグロム・ヴィヒターが突っ込んでくる。

弾幕を張り、敵シールドギリギリの位置まで接近すると四方へ散開した。

同時に発射されるミサイル。

バウはそれを防ぐ為、それぞれ防御体勢に入った。

「そっ!!」

その隙に別方向から突撃するシークエル・インパルス。

当然、バウもその接近には気が付くもすでに遅い。

翼から放出される光を纏いグロム・ヴィヒターを上回る速度で間合いを詰めると斬艦
刀を突き出した。

「落ちなさい！」

シールドでカバーしきれない死角を突いた一撃はバウの装甲を軽々と貫通。腹部に深々と突き刺さりパイロットを斬り潰した。

「これでようやく三機目！」

さらに追撃して、数を減らそうとするが敵はすぐさま体勢を立て直しインパルスを引き離しにかかる。

「くっ」

「流石に手強いな。フォルセティは？」

振り返った先には速度を上げアルテミスに向かう戦艦の姿が見える。

あのまま外壁に取りつき、内部に侵入するつもりなのだろう。

「ルナマリア、こっちは俺達でどうにかする。お前はフォルセティの援護に向かってくれ！」

「分かりました！」

反転したインパルスを見送り、再び攻勢に入るハイネ。

その少し離れた地点に砲撃を繰り返しながらフォルセティがアルテミスの外壁へ取りつこうとしていた。

狙われた砲撃を避けつつ、船体が窪んだ岩陰に身を顰める。

それを確認したイザークは待機していた格納庫で陸戦隊を叱咤するつもりで声を張

り上げた。

「行くぞ、くれぐれも油断するな。目的はコントロールルームの確保だ！」

「了解!!」

パイロットスーツに身を包み武器を構えたイザークが先陣を切るように床を蹴った。

「艦長、どうされました？」

陸戦隊の一人が表情の優れないイザークを気遣うように声を掛けてくる。

「いや、少しな」

こういった作戦になるとどうしてもあの件を思い出すのだ。

今は無きヘリオポリスの事を。

あの時こそ、自分の行く末の分岐になっていた。

そう思うと何とも複雑な気分である。

しかし――

「あの時とは違う」

思い浮かぶ家族の顔。

自分には絶対に守らねばならない存在が出来たのだ。

故に退くという選択はない。

改めて気を引き締めアルテミス内部へと足を踏み入れる。

敵はすでに侵入を察していたのか、格納庫に入った瞬間に銃弾が飛んできた。

「チツ、簡単にはいかないか」

全員が格納庫に置いてあったコンテナの陰に身を潜め、銃弾を避けながら隙を窺う。

「敵も必死だな。しかしこんな所で足止めされている暇はない！」

敵からの銃撃に攻めあぐね、無理やりにも突破口を作り出そうと考えていた時、轟音と共にインパルスが突入してきた。

「ルナマリアか!?!」

「下がって！」

ルナマリアの警告にイザーク達は迷わず床に伏せる。

同時に開始された激しい機関砲の銃撃音が格納庫に響き渡る。

インパルスの機関砲によって積みあげられたコンテナごと敵兵はすべて排除された。

「助かったぞ、ルナマリア！ お前はフォルセティの護衛を！」

「了解！ 艦長も気をつけて下さい」

外へ飛び出すインパルスを尻目にイザーク達は内部へと突入していく。

同じ頃。

別の突入口ではイノセントガンダムとユースティアガンダムが激しく鏖迫り合いを行っていた。

「行かせはしない！」

「アスト・サガミイイイ!!」

フォルセティを叩こうとするユースティア。

行かせまいとするイノセント。

オートクレールとビームサーベルが何度も交差し、光が弾け飛んでいく。

「ぐっとうう!!」

噴射されるスラストー。

高速で移動しながら壁や床に擦れる装甲。

苛烈な剣撃とバルカン砲の応酬で床は抉れ、壁は無惨に破壊されてしまう。

それでも二人は止まらない。

激しい剣の応酬を繰り返していく。

「どうやら此処ではその剣を上手く振れないようだな！」

「貴様！」

確かに狭い要塞内部ではオートクレールを上手く使えなかった。

しかも過剰な火器も使用できない。

立場は逆だが第二次ヤキン・ドゥーエ攻防の焼き直しのような展開だ。

それがアスランの闘志にさらに火を灯す。

「前と同じだと思っなよー！」

片方のオートクレールを収納し、代わりにビームサーベルを構える。

「実体剣を盾に使う気か！」

アストもまたナーゲルリングを引き出し、上段から繰り出されるユースティアの斬撃を受け止めた。

「ぐっ、このー！」

押し込まれる刃を弾き飛ばし、バルカン砲を撃ち込んだ。

狙うは破損し崩れかけになっている壁。

砲弾が撃ち込まれた壁は崩れ落ち、イノセントとユースティアの間に瓦礫が積み上がった。

「そんなものでー！」

この程度の瓦礫などモビルスーツの火力なら簡単に排除できる。

機関砲で邪魔な物を排除しようとトリガーに指を掛けた。

しかしそこでアスランの手が止まる。

「まさか」

すぐにモニターを拡大する。

イノセントから降りていくアストの姿が映っていた。

「モビルスーツを乗り捨てた？ 生身でレクイエムを止める気か！」
それはアスラン個人としての意思以上に統合軍として阻止せねばならない事だった。
もしもレクイエムが落ちれば、その時点でアルテミスも同じく落ちる。
物量で勝っていても、要塞が陥落すればその時点で勝負が決まってしまうだろう。

「させるものか！」

手持ちの銃を構え、アスランもまた外へと飛び出す。

そのまま銃撃の音が響く方向へと走り出した。



イザーク達がアルテミス内部へ向かったのを見届けたルナマリアはフォルセティを
守る為に戦線へと復帰していた。

ハイン達もバウとの攻防から、すでにこちらの防衛に加わっている。

「しかし数が多いわね」

統合軍の攻勢は衰える事を知らない。

数で圧倒しながらこちらを沈めようと迫ってきている。

「……アレンは」

先行した筈のアストの姿は何処にも見えない。
通信にも応答なしだ。

彼に限ってやられたという事はないだろう。

だが、位置が分からないのは流石に心配であつた。

「アレンなら心配ないさ」

インパルスの横に並ぶハイネのスオウ。

ライフルで敵を牽制しながらルナマリアの心情を見透かすよう軽く言つた。

「アイツが簡単にやられる筈がないからな」

「それはそれですけどね」

それでも気になるものは気になるのだ。

「何にせよ、此処を守り切らなきゃ、アレンの所にはいけないぞ！」

「分つてます！」

敵の砲撃を奪い取つた『オハン』のシールド防ぎ、反撃とばかりに高エネルギー収束ライフルを発射。

強力なビーム砲の一撃が敵の陣形を崩した。

「よし、あそこから一気に——ッ!？」

前に出ようとした同盟を阻止するように砲撃とミサイルを撃ち込んでくるのは黒い

アークエンジェル級サリエル。

まるでこのタイミングを狙っていたかのような嫌らしい攻撃で部隊の陣形を乱してくる。

「こつちが攻勢にしようとしたタイミングで！」

「上手いですね、あの艦の艦長は」

さらには追い詰めた筈のバウも体勢を立て直し、サリエルと連携を始める始末。おかげでこちらは完全に出鼻を挫かれてしまった。

「チツ、くそ。あの艦のお陰でやりづらい！」

モビルスーツとの連携も巧みさ。

こちらの動きを見透かし、絶妙なタイミングで妨害を行ってくる戦術眼。

さぞ名の通った艦長が艦の指揮を執っているのだろう。

「たく、まずはあの艦を叩くぞ！」

サリエルの砲火を潜りつつ、攻撃を指揮しようとしたハイネは目の前に現れた機体に瞠目する。

「なんだとー！」

スカージ・リユカオン。

変形する事も出来ないのか、モビルスーツ形態のままだ。

見ただけでも分かるが全身ボロボロでも戦える状態ではない。

それでも機体越しに発せられる殺気はまるで衰えていなかった。

「知ってるんですか、あのカニモドキ」

「ああ。痛い目にあわされた挙句、機体も捨てなきゃならんほど追い詰められた」
あの時も倒した気配が無かったから気にはなっていたが、まさか本当に無事だったとは。

さらにあんな状態にも関わらず、戦闘区域から離脱しなかった事も驚きだった。

「なるほど。手強い相手って事ですね。……後、見覚えのあるもの持ってます」

片方しかないウエポンシザーズは破損したモビルスーツの腕が挿んでいる。

その特徴的な金色の装甲は十分に見覚えのあるものだった。

「アカツキのか」

「ではフラガー佐は」

「いや。断定するにはまだ早いぜ。腕しか持っていないからな。それよりも油断するな、あんな状態でも奴は手強いぞ」

「了解」

正直、ハイネ達の攻勢を受けた後でアカツキを倒したというのは信じがたいが、何にせよ油断できる相手でない事だけは確かだった。

武器を構えるインパルスとスオウ。

相対するスカージのコックピットに座るNo. Iは限界に近い状態でありながら、戦意を漲らせている。

「サリエルは、やらせない」

No. Iがチラリと視線を向けるとサリエルは敵を牽制しながら、ゆっくりと後退していく。

「それでいい。お前達の相手は私だ！」

「しつこいんだよー！」

変形したスオウの射撃をあつさり回避する、スカージ。

まるでダンスを踊るかのような鮮やかさに攻撃を仕掛けた筈のハイネの方が動揺する。

「損傷していながらなんて動きを！」

「……お前はあのパイロットか」

動揺するハイネの反面No. Iは冷静にスオウのパイロットを看破する。

「借りを返させてもらう」

ウエポンシザーズから発射された一撃は旋回するスオウの進路上へ正確に突き刺さる。

「くっ」

ハイネは急制動を掛けて進路を無理やり変更。

ビーム砲をギリギリやり過ぎす。

「あの損傷でこの射撃。化け物かよ！」

「ハイネー！」

スオウに砲撃を仕掛けるスカージへ距離を詰めたインパルスのビームサーベルが振るわれる。

しかし不意を突いたに近い一撃であつたにも関わらず、無造作に振り払ったウエポンシザーズによつて防がれてしまった。

「甘い」

爪と劍の鏢迫り合い。

損傷している分、スカージの方がやや押され気味。

しかしNo.1は巧みな操作でわざとシザーズを引いた。

するとインパルスはバランスを崩してしまふ。

「落ちろ」

斬り上げられたビームサーベルがインパルスの眼前へ迫る。

「ハのー」

ルナマリアは機体を逸らし、同時に背中に装備された迎撃用のビーム砲でスカージを狙撃。

斬撃が装甲を滑るように掠め、放ったビーム砲がスカージの装甲に穴を穿つ。

だがNo. Iはそれすら意を返さない。

すぐ様、繰り出した蹴りがインパルスの腹へ直撃、吹き飛ばされてしまった。

「ぐっとうー！」

「ルナマリア、連携！」

「了解」

体勢を立て直したインパルスとスカージが挟撃する。

突っ込んできたスオウの斬撃を捌き、インパルスの一撃を斬り潰す。

「な、何なんだこいつは！」

「全く寄せ付けない!？」

「邪魔はさせない」

No. Iはそのまま二機を無視し、フォルセティを防衛しているイズモ級へと突撃していく。

「狙いはフォルセティか！」

「やらせない！」

全力でスカージを追撃する。

しかし追い付けない。

敵はスラストターを全開にし戦艦の砲撃すら構わず、突撃していく。

それは死すら恐れない特攻だった。

「死ぬ気かよー！」

「誰が死ぬものか」

ウエポンシザーズのビーム砲がイズモ級の砲台を吹き飛ばす。

そして艦底部まで入り込むとビームサーベルを突き刺した。

「まだ動け、スカージ」

力任せにサーベルを振り抜き、艦の底へ穴を空けると、ビーム砲を発射。

そのまま撃沈させる。

「くそー！ あのままじゃ全部落とされる!!」

「させるものですか！」

インパルスの翼が開き、動きを止めたスカージとの距離を一気に詰めた。

「そこまでよー！」

「また邪魔する」

スカージの迎撃の一太刀。

それをルナマリアはギリギリブルートガングで受け止める。

しかし敵の反応の速さ故に完璧な防御とはいかず、肩に光刃が沈み込んだ。

「くっ」

揉み合いのような状態。

ルナマリアはスラストを吹かしスカージを艦隊から引き離そうとするが、推力の違いかもう一隻のイズモ級の方へ流されてしまう。

「この状態でなんてパワー!？」

「このまま斬り裂く」

「それは遠慮するわ!」

裂かれながら逃げられないようにスカージの腕を掴んだインパルスはパルマ・フィオキーナを発射。

至近距離からの一撃が光刃諸共腕部を消し去った。

「ぐっ」

「今度こそ!」

「まだまだ」

体勢を崩しながらもスカージの後部から残っていたドラグーンを射出された。

「ドラグーン!？」

「いけ」

動く砲台がインパルスを引き離し排除。

そのまま方向を変えたスカージは最後に残ったウエポンシザーズのビーム砲を発射した。

狙いはイズモ級のブリッジ。

「やめろ！」

ドラグーンの網を突つ切り、阻止しようとするハイネ。

しかしもう遅い。

成す術無く閃光に焼かれたブリッジは跡かたも無く消え去り、イズモ級は爆発を起した。

「このー！」

接近したスオウのビームサーベルがスカージの残った腕を断ち斬った。

これでスカージは両手を失った。

残る武装はウエポンシザーズのみ。

「ハイネー！」

畳みかけるように聞こえたルナマリアの声に反応したハイネは咄嗟に飛び退く。

ドラグーンごと射線上へと捉えたインパルスの高エネルギー収束ライフルが火を噴

いた。

「いけー！」

強烈なビーム砲がドラグーンを消し去り、スカージの半身を消し去っていく。

「……私の勝ちだ」

爆発する機体。

スカージはこれで落ちた。

もはや復活もできまい。

しかしそれでもNo.1は勝ちを宣言する。

それはハイネやルナマリアも認めざるえなかった。

落ちたのはスカージだけではない。

こちらの戦艦であるイズモ級もだ。

船体はそのままアルテミスへと落ちていく。

落下すると同時に発生した爆発は確実にアルテミス内部へと影響を与えた。

それが突入した陸戦隊にも影響を与える事は確実。

炎が燃え広がる要塞をハイネ達は悔しさを噛みしめながら見つめていた。

◇

振動が続く要塞内をアストは銃を構えて走っていた。

「侵入者だ！」

「殺せ！」

目ざとくこちらを見つけた兵士の銃撃を飛んで躲し、壁を蹴って懐へ入り込む。

無重力だからこそできるアクロバットに驚く兵士達。

アストはその隙に敵の顔面に銃口を突きつけた。

「迂闊だぞ」

淡々と引き金を引き、二人の兵士を殺害する。

穴の開いたバイザーから血が漏れ出し、兵士達は力が抜けたように宙へと浮かんだ。

兵士の死体から武器と端末を奪い、情報を取得しながら目的地向かっていく。

「いつの間にかこの手の潜入工作にも慣れたな」

ヘリオポリスに居た頃には考えらなかつたと自嘲する。

感傷にも似た複雑な感情を押し殺し、目標の近くまでたどり着いた瞬間、銃声が鳴り響いた。

「ッ!？」

咄嗟に身を翻し、空いた部屋へ飛び込んで銃撃を躲す。

「いつの間にかこんな所まで入り込むとは油断のできない奴だ」

「アスラン」

振り返ると銃を構えパイロットスーツに身を包んだアスランが立っていた。

「わざわざ追ってくるとは、苦勞な事だ!!」

銃を撃ち返し、部屋から飛び出す。

アスランの技量は良く分かっている。

一か所に留まり続けるのは危険。

奪い取ったマシンガンでアスランを一か所に抑え込みながら、目的の部屋まで走り抜ける。

しかしアスランの技量はアストの考えている以上のものだった。

「そんなもので!」

銃撃の合間を狙って飛び出したアスランは床や壁、天井を蹴ってこちらとの距離を一気に詰めてくる。

さっきのアストのアクロバットとは比較にならない動き。

「くそ」

アストはマシンガンの銃身を盾に銃撃を防御。

だが次の瞬間に飛んできた蹴りがアストの腹に直撃する。

「ぐっ」

咄嗟に背後に飛んでダメージを軽減するものの、その衝撃は思った以上に大きなものだ。

「アムステルダムで殴り合った時から思っていたが、生身の方も多少マシになっているじゃないか」

「それはどうも」

「だが、その程度か？」

相変わらず死神のようなアスランの視線に冷や汗が流れる。

「俺だって遊んでいた訳じゃないんだよー」

マシンガンを投げつけると同時に前に飛び出す。

銃を躲したアスランを狙って顔面に拳を叩き込んだ。

「ぐっ」

ヘルメット越し故にダメージは少ないだろうが怯ませる事ぐらいの効果はあった。

そのまま銃を掴み床へ捨てると、アスランを壁へと叩きつけた。

「グハア！ 貴様！」

「いい加減にしろ。何時までこんな事を続けるつもりだ！」

「貴様と決着をつけるまでだ！ それもこの戦いで終わる！」
アスランは振り上げた肘をアストの背中に叩きつけ、拘束から解放されると床に落ちた銃を拾いに走る。

「させるか！」

逃がすものかとアスランに掴みかかるアスト。

二人は揉み合いながら殴り合う。

「お前は未来を求めていたんじゃないのか！」

「求めているさ！ ヤキン・ドゥーエ戦役のような悲劇が繰り返されない未来をな！」

「その結果がこれかよ！」

「人を変える為には時に劇薬も必要という事だ！」

「お前が悲劇を繰り返してどうする！」

「貴様に言われるまでもない！ だが綺麗事だけで世界をどうにかできる訳もない
!!」

怒声と殴打の音が鳴り響く。

「やらなければならぬんだよ！ 手を血で汚そうと人を変える為に！ 世界を変革する為に！」

「思い上がるな！ 一個人の思惑だけで世界をどうにかしようなんて！」

「何もしない貴様よりはマシだ！ それだけの力を持ちながら何もしようとしないう様よりはな！」

馬乗りになるアスランの殴打がアストの腹部にめり込んだ。

アストの意識が飛びかけるが、そのままアスランを殴り、蹴り上げて引き離す。

「アスト！」

「アスラン！」

お互い床に転がる銃を拾い構えた瞬間、突如今までとは比較にならない振動が要塞内部を襲った。

「な!？」

「爆発!？」

とても立っていられない。

崩落してきた瓦礫を避け、再び銃を向け合う二人。

そこに第三者の声が聞こえてきた。

「アスト！」

「イザーク!？」

陸戦隊と共にイザークが走り寄ってくる姿を見たアスランは銃で牽制しながら後ろに飛んだ。

「アスラン！」

「やっぱりさっきの艦隊の指揮を執っていたのはイザークだったか。やってくれたな」

かつてのライバルからの称賛にイザークの胸中に感傷的な気持ち湧き上がってきた。た。

それを押し殺し、銃撃を開始しようとした時、再びの爆発が起きる。

それによって崩れてきた瓦礫が通路を塞いでしまった。

「チッ」

もうアスランの姿は見えない。

しかし死んではないだろう。

「助かった、イザーク」

「アスランと生身で接近戦など自殺行為だぞ」

差し出されたイザークの手を掴んで立ち上がったアストはすぐに状況を確認する。

「それでどうなんだ、レクイエムは？」

「制御室から発射中止を試みているが、システムにアクセスできない。レクイエムの陽電子リフレクターの解除は可能。しかしエネルギープラントの方はかなり念入りにプロテクトがされていて時間内には無理だ」

「そうか。やっぱり直接レクイエムを破壊するしかないな。俺が行く」

「アスト、しかし」

「リフレクターが解除されてから破壊に動いていたら間に合わない。解除と同時に破壊する」

それはレクイエムの射線上、しかも敵のど真ん中に向かう事を意味する。

最も重要で危険な役目だった。

しかし任せられるのは現状アストしかない。

「……頼む」

「了解。そんな顔するなよ、勝つんだろ？」

アストから差し出された拳に拳をぶつけ合う。

「ここも危険だ。早く脱出しろよ、イザーク」

「ああ」

イザークは任せる事しかできない悔しさと無力感に苛まれながら、去っていく友人の背中を見送った。

◇

急いで駆け戻ったアストはイノセントのコックピットへ乗り込む。

「急がないとな」

即座に機体を立ち上げると、要塞から脱出を試みる。

しかし宇宙ではユースティアガンダムが待ち構えていた。

「ッ、アスラン!?!」

「ここに待っていれば来ると思ったぞー！」

出口から飛び出すイノセントを狙いユースティアは複列位相砲を発射した。

すでにSEEDを発現させているアスランの射撃は完璧。

避ける事は困難であると察したアストもまたSEEDを発動。

ビームシールドで複列位相砲を防御する。

しかしその隙に踏み込んだユースティアの斬撃が迫ってきた。

「チッ」

「限定空間の時みたいにはいかないぞー！」

実体剣の一撃をサーベルで弾き、反撃として袈裟懸けに一太刀を入れる。

斬り合いの最中、上段からの一撃を止めたアストは逆手に抜いたビームサーベルを抜

き打ちで斬り払う。

払われたサーベルの一撃が実体剣を真っ二つに叩き折った。

今までの攻防の中で蓄積されたダメージによつて限界を越えたのだろう。

「くっ、まだまだ!」

折れた刀身をイノセントへ投げつけ、残った実体剣を叩きつけた。

上段から振り下ろされた一撃がイノセントの装甲を縦に斬り裂く。

「この程度!」

二刀を振るい猛然と立ち向かう。

「落ちろ!」

「ふざけるな!」

ユースティアはすべての刃を解放し、イノセントへと猛威を振るう。

片手に実体剣『オートクレールⅡ』

さらに片手、片足のビームサーベル。

三本の刃が軌跡を描く。

対するイノセントはサーベルを逆手に実体剣を盾代わりに構えていた。

左腕の実体剣ナーゲルリングで光刃を弾き、ビームサーベルで攻撃を加える。

それはまさにオーブ沖で起こった決戦の、いやヤキン・ドゥーエ戦役の再現だった。

「アスト・サガミイイイ!!」

「アスラン・ザラアアア!!」

SEEDの発現とシステムの発動。

加えて過去の再現がより二人の精神を高揚させ、咆哮と共に剣撃を繰り出していく。その攻防は両者の実力も相まって見事なまでの拮抗状態になっていた。しかしそれも長くは続かない。

二機の戦いは決着に向かって動き始める。

「ウオオオオ!!」

装甲に付く裂傷を物ともせず光刃の嵐を潜り抜けたイノセント。

振るった一撃がユースティアの左腕を斬り飛ばした。

「ッ、こんなもので!」

蹴り上げた一撃が実体剣ナーゲルリングを叩き折り、左腕の関節に損傷を与えた。

「これで攻防一体とはいかないだろう!」

「舐めるなアア!!」

イノセントの蹴りがユースティアの蹴撃を止め、繰り出したサーベルが袈裟懸けに胴体を斬り裂いた。

「ぐううう!! 機体性能はこちらの方が上の筈だ!」

「忘れたか! 俺は何時だって不利な状況で戦ってきたんだよ!!」

イレイズ然り。

イノセント然り。

その経験は訓練では決して身に付かない力をアストに与えている。それこそがアスランとの間にある越えられない壁なのだ。

「クソオオオ!!」

「遅い!」

さらなる一撃がユースティアの腹を抉った。

コックピットに走る稲光に照らされながら、アスランは白いガンダムを睨みつける。強い。

アスト・サガミの力はやはりアスランを上回っている。

このまま負けるのか?

否。

断じて否だ!

「負けるかアアア!!」

負けるものかと咆哮を上げ、振り上げた実体剣の切っ先。

「ッ!」

「逃がさん!」

機関砲による牽制で回避しようとしたイノセントのバランスを崩す。

そして発射された閃光が肩部を撃ち抜いた。

「ぐああああ!!」

イノセントは爆発が巻き起こるアルテミスの方へと落ちていく。

アスランは止めを刺すべく巻き上がる爆発の炎の中を突っ切り、落下していく白いガ
ンダムへと斬りかかった。

「今度こそ俺の勝ちだ!!」

爆炎が視界を塞ぐも敵の姿を見失ったりはしない。

「これで止めだアアア!!」

炎を斬り裂き、未だバランスを崩したままのイノセントに向けて突きを放つ。

確信した勝利。

アスランはこの戦い完璧に動いた。

油断もせず、機体性能を100%引き出し、機会も逃さなかった。

あえて欠点を挙げるなら、些かの冷静さを保て無かった事だろう。

しかしそれは戦場に出る兵士なら誰しも味わう高揚感だ。

相対していたアストでさえも、それは同じ。

しかしだから気づかなかったのだ。

イノセントの落下軌道が常に一定に保たれていた事に。

「いや、お前には負けない、アスラン!!」

ユースティアの刃が届く前。

タイミングを見計らっていたアストはフットペダルを踏み込んだ。

その瞬間、寝そべるイノセントはスラスターを噴射させ僅かに上昇。

必然的にイノセントの背中がユースティアの眼前に現れる。

そこには冷たい砲口が待っていた。

「ッ!？」

それはアスランが警戒していたイノセントの武装である対PS装甲弾を備えたバズーカ砲。

発射された砲撃は無慈悲にユースティアに直撃した。

最後の一撃。

それは間違いなくユースティアに致命傷を与えた。

頭部は吹き飛び、腕を失い、装甲は剥がれ、フレームも剥き出しになっている。

もはや戦闘不能。

勝敗は決した。

それでもまだアスランはイノセントへ攻撃を仕掛けようともがいていた。

「お、俺は」

アスランは全身の痛みには耐えながら残された腹部の複列位相砲を発射しようとしてトリガーに指を掛ける。

だが、アストは止まらない。

彼にもまた守るものがあるからだ。

「終わりだ、アスラン!!」

最後の情け。

満足に発射できるかもわからない砲撃で自爆するよりはこの手で。

アストは機体を翻し、爆煙の中に背部ビームソード『ワイバーン』を放出した。

強烈な一撃がユースティアの半身を斬り裂いていく。

「……さよなら、アスラン・ザラ。もしも別の出会い方があったなら俺達は——」

裂かれたユースティアの半身は爆炎が巻き起こるアルテミスの中へと落ちていった。弾切れを起こしたバズーカを切り離し、最後に残った武器を握る。

「……行こう。レクイエムへ」

スラストを吹かし、目的の発射口へと向かっていく。

途中邪魔をする敵は残ったワイバーンで撃退。

爆発を避けながら、砲口へとたどり着いた。

「ハア、ハア」

未だリフレクターは張られたままだが、問題はない。

残った武装高エネルギー収束ライフル『アガートラム』を構える。

「腕が動かないか」

アスランの攻撃の為にイノセントの腕が垂直まで上がらない。

これでは『アガートラム』の発射にも影響が出る。

「正確な狙いはつけられないが、仕方ない」

そこで丁度時間が来たのかレクイエムに光が集まっていく。

「イザークは間に合わなかったか」

こうなれば内部に突入して直接レクイエムを破壊するしかないだろう。

突入する際のビームシールドの展開くらいなら今の腕でもいけるはず。

無論、アストの命は助からないだろうが。

「こちらは間に合ったし問題ない。後はキラに任せよう」

親友である彼なら上手くやってくれるだろう。

覚悟はすでに決めている。

そのままリフレクター内へ突撃しようとしたその時、紅い翼の機体が近づいてきた。

「アレン!!」

「ルナマリア!? 何やってる、早く離脱しろ!!」

「そっちこそ! 碌に腕も動かない癖に何言ってるんですか!」

インパルスがイノセントの背中に組み付くと、動かない腕を持ち上げる。

「リフレクターの解除も出来てない! 『アガートラム』が撃てたとしても!」

「大丈夫ですよ、仲間を信じてください」

その言葉通り、フォルセティから解除成功のメールが届く。

残り時間僅かな所で間に合ったのだ。

「ルナマリア、お前は離れろ! このタイミングじゃ離脱もできない!」

「言ったでしょ。私は貴方のパートナーだって。貴方が地獄に行くなら私もお供します」

「何でそこまで」

モニターに映るルナマリアが笑みを浮かべ、爆音に紛れながらも紡いだ言葉がアストの耳に届く。

「……物好きな奴だな」

「その物好きは結構いますけど」

「たく」

ルナマリアの軽口に肩の力が抜けたアストは息を吐き出す。
その眼下。

光を集める砲口は今にもそれを解放しようといくを開ける。

アストもまた銃口を向けるとリフレクターが解除された。

「アレンー！」

「了解！ いけええええ！！」

発射された『アガートラム』

強烈な一撃が砲口に突き刺さり、僅かに遅れてレクイエムも光を吐き出す。

発射された光に包まれた二機のガンダムは見えなくなり——消えてしまった。

それでも刻んだ確かな傷はレクイエム内部で爆発を起こし、発射されたビームの光は宇宙を裂く事無く消えていく。

爆発はレクイエム全体に及び結果、発射は不可能となった。

それは戦いが終わりを迎えた事を意味していた。

この約五分後。

仲介に入ったテタルトス月面連邦国からの申し入れにより地球圏統合軍と調和同盟軍の間に停戦の知らせが入る。

後に『第一次統合戦争』の名で呼ばれる事になる戦いは終わりを告げた。

最終話

そうして次なる種は世界に芽吹く

後の歴史に『第一次統合戦争』と呼ばれるようになる戦いはテタルトス月面連邦国の仲介により、終戦を迎える事になった。

『ヤキン・ドゥーエ戦役』や『ユニウス戦役』

過去におこった大戦に比べ、大量破壊兵器がほぼ使用されなかった為に大規模な被害こそ目につかない。

しかしその犠牲者は過去の大戦に劣らない程の数に上った。

その理由。

後の歴史学者によればかつてない程の広域に渡る戦火拡大。

さらにそれに伴う各勢力圏の混乱こそが原因であるとの説が有力となっている。

そんな戦争が終結したとはいえ、世界の状態は未だに混乱の中にあった。

◇

宇宙を駆ける一隻の艦。

それは撃沈寸前にまで追い込まれながらも見事に蘇った独立部隊『グラオ・イーリス』戦艦ミネルバであった。

「ブリッジ遮蔽、対モビルスーツ戦闘用意！」

艦長席で指揮を執るのは勿論タリア・グラデイス艦長。

他のメンバー達も一つの変化を除き、前と変わらず戦闘に備えて淀みなく動いていた。

「アビー、モビルスーツ隊の出撃を」

「は、はい！」

管制席に座る新人アビー・ウィンザーはたどたどしくも、モビルスーツ隊へ連絡を入れる。

何というか動きが固い。

「もつと肩の力を抜きなさい。訓練通りにやればいいわ」

「はい！」

声を掛けたは良いが全然効果が無いようにも思える。

それは新人である以上は仕方ない事だ。

じき慣れるだろう。

「今回の相手は海賊とはいえ油断しないように！」

「了解」

ミネルバに下された任務。

それは航路上に出没する海賊行為する武装勢力の排除だった。

特に今は重要な会談が行われている最中。

帰還の際の事を考えれば、掃除は早めに済ます必要がある。

「モ、モビルスーツ隊、出撃してください」

アビーの指示を受け、解放されたミネルバのハッチから次々とモビルスーツが飛び出す。

先陣を切るのは三機のギアだ。

それぞれが装甲を違う色で染めガナー、スラッシュ、ブレイズと違うウィザードを着している。

「二人共準備はいいですか？」

「おう」

「問題なく」

二人からのいつも通りの返答に声を掛けた青年は笑みを浮かべる。

ディアッカ・エルスマン。

ニコル・アルマフイ。

そしてエリアス・ビュラー。

彼らは『ザフトの三英雄』と呼ばれたザフト屈指のエースパイロット達である。

『第一次統合戦争』において三人はプラント防衛の為に戦線へ出る事はできなかった。しかし戦力が不足している現状、彼らも戦線へ復帰する事が許されていた。

「やっぱ書類仕事なんかよりも、モビルスーツに乗ってる方が性に合うな。エリアスだつてそうだろう？」

「そうですね。やっぱりパイロットですからね、俺らは」

「そうですか？ 僕は別に苦じゃないですけど」

軽口を叩きながらも、機体を操作する動きに淀みはない。

鮮やかさすら感じさせるその操縦は流石英雄というべきだろう。

「無駄話は此処までですよ二人共、敵です」

ニコルのギアがビームアックスを抜き放つと同時に敵の機影も見えてきた。

「ジンにM1、それにダガーか。かつて主力機勢ぞろいですよ、先輩」

「ま。海賊だしな」

機体の統一性の無さは海賊というだけあってバラバラだ。

「さっさと片付けるぞ、ニコル、エリアス！」

「了解つす」

「油断禁物ですよ、二人共」

三機が仕掛けてきた海賊と接敵すると他の機体もそれに続く。

危うげなく進む戦闘をブリッジで鑑賞していたタリアは密かにため息をついた。

「どうしました、艦長？」

それを感じていたのか副長のアーサーが声を掛けてきた。

「いえ、こういつた戦闘が増えてきたと思つてね」

「そうですね。やっぱり戦争の影響ですかね？」

「でしょうね。各勢力の力は戦争の影響で低下している。それが治安の悪化に繋がつ

ているのも事実だわ」

だからこそ今行われている会談が無事に済めばいいと思うのだが。

相手が相手だけに気が抜けないのも仕方がないだろう

「あつちは彼女に任せましよう。こちらはこちらの仕事に全力を尽くすのみよ」

「了解です」

二人の会話が終わる頃には海賊の掃討も無事に終わりつつあった。



「戦争は確かに終結した。しかしだから物事が解決したという訳ではない。根本的な事は何一つ変わってはいないのだから」

地球圏統合政府代表クレメンス・イスラフィールは静かな威圧感を発しながら淡々と告げる。

「だから戦争再開も辞さないと?」

「俺の考えは伝えてあるだろう、カガリ・ユラ・アスハ代表?」

テーブルの対面に座るカガリは憤った表情を隠しもせず、イスラフィールを睨み付ける。

「私は此処に会談に来た筈。宣戦布告を聞きにきた訳ではないのだが」

「邪推はやめてもらいたいものだ。少なくとも同盟とこれ以上揉めるつもりはない」

『今は』が抜けてるだろうと内心突っ込みながら、口に出すのをどうにか堪えた。

昔なら感情的に突っ掛かっていただろうが、すでに彼女も政治家。

そんな迂闊な事はしない。

「テタルトスの外宇宙進出が本格化し始めた今、それを放置はできない」

開戦と終結の一翼を担ったテタルトス月面連邦国。

彼らは統合軍から返還されたバルカナバート基地を除き、地球上の揉め事から手を引

いて外宇宙へ目を向けていた。

つまり火星圏及び木星圏まで勢力を伸ばそうという意図である。

しかしそれは統一を目指す地球統合政府にとっては見過ごせないもの。

彼らの目が届かない場所での勢力拡大を許す訳にはいかないのだから。

「つまり統合も外宇宙を目指すത്？」

「無論。人類がさらに先へ行くのは歓迎すべきことだ。しかしそれも秩序あつてこそ」

やはり統合はそう動く。

懸念した通りだ。

テタルトスが宇宙の先を目指す事は自由だ。

しかし彼らもまた世界を支える一大勢力。

世界が疲弊している今、彼らの行動によって勢力バランスが崩れれば再び戦火が燃え広がる可能性も否定できない。

今度の戦場は外宇宙進出を主軸としたものになるかもしれないのだ。

当然、同盟もまた無関係ではいられない。

「資金不足により解散しかけた『D. S. S. D』の支援を行っている同盟としてこの件、無視はできまい。故に争いは必ず起きる」

火星軌道以遠領域の探查、開発を目的に設立された『D・S・S・D』各勢力が出資し設立されたこの機関は現在同盟の支援の下で活動を行っている。

それはつまり同盟もまた外宇宙への進出は避けられないと考えている証拠だった。

「私達は争うつもりはない」

「その気があるうと無かろうと関係がない。何故ならば『外宇宙に秩序はない』からだ。我々の定めた法や条約はあくまでも地球の枠内での事。そこから外へ出てしまえば、極端な話、『何をしても良い』のだ」

「なるほど。今回の会談、趣旨はそれか」

戦争終結から間もない。

互いにやるべき事は山ほどある。

にも関わらずこうして極秘の会談を設け、呼び出したイスラフィールの意図をようやくカガリは理解した。

「つまりテタルトスに『鎖』を付けたいと?」

「そうだ。何らかの要因で誰かが暴走でもした場合、止めねばなるまい。しかし我々にはいざという時の力が不足しているし、動く際の協定もない。ならば——」

「秩序がないなら作ればいいか」

戦争によって生み出された傷は統合、同盟共に深い。

戦いが終結に向かった理由も、これ以上の戦争継続は今後に深刻な影響を与えるという懸念もあつたからだ。

「だからこそ『鎖』が必要なのだ」

イスラファイルの提案。

それは外宇宙進出についての新たな条約を締結するというものだ。

「分かった。私の一存だけでは決められないが、この案件は確かに重要。本国へ持ち替えらせてもらう」

「十分だ」

手渡された資料を受け取るとカガリは後ろに控えていた護衛役と共に部屋から出ようと立ち上がる。

しかしそれを遮るようにイスラファイルは声を掛けた。

「君達がそっちに付くのが残念だ。ロアノーク大佐、カル・バヤン中尉」

カガリの護衛として背後に控えていた仮面の人物ネオ・ロアノークとスウエン・カル・バヤンはイスラファイルの方を見る。

向けられた視線は鋭く、何よりも力強い。

並みの者なら竦み上がるだろう。

それを物ともせず、ネオは口を開いた。

「私達のような一兵卒を知っていただけたとは光栄です」

「君の采配とカル・バヤン中尉の前線で奮闘。不利だった地球軍改革派はそのおかげで我々と拮抗していた。知らない筈がないだろう？　だからこそ残念だ、君達のような逸材にこそ統合に居てもらいたかったが」

「買いかぶりです。それに貴方には誰がどこに居ようと、どうでも良い事なのでは？　結局、やるべき事は変わらないと邪魔なものすべてを排除して進み続けるのだから」それはイスラフイルの本質を突く言葉だ。

彼は本心からネオやスウエンの事を残念だと思っているかもしれない。

しかしだからと拘る事はないし、手も緩めず、邪魔なら誰だろうが排除するだけ。

仮に昨日までの友人が敵になったとしても、一切手を抜く事無くイスラフイルは始末する。

「そんな者の下に付きたいとは思わないのですよ」

「なるほど。確かにそうだ。くだらない事を言ったな」

「いえ」

「では失礼する、イスラフイル代表」

カガリはそのままネオとスウエンを連れ、会議室を後にした。

「よろしいのですか、あれで？」

イスラフィールの傍に控えていた側近の一人が、眉を顰めたまま進言してきた。

「戦争を行っている余裕がないのは事実だ。昨今の治安悪化、経済の立て直し、軍の再編制。すべてが急務」

「なるほど」

「それに商人共も動いている」

イスラフィールは立ち上がると窓の外に広がる光景を眺める。

立ち並ぶビル群。

整備された道路。

戦艦を何隻でも収容できる港。

これだけのものを作り上げる連中の力を侮る事はできない。

「条約で制定された戦闘禁止区域。世界経済としても無視できない場所だがそれにかこつけて色々やっている。外宇宙進出の話にも連中が一枚噛んでいるだろう」

「まずはそれを抑えなければならぬ」

「そうだ」

あくまでも統合軍のコントロール下においてこそ意味がある戦闘禁止区域なのだ。

それを無視し、勝手な事をされてはたまらない。

「まずは同盟よりも重要なのは足場だ」

イスラフィールもまた部屋の外へと歩き出す。彼もまた変わる事無く、突き進んでいくだろう。例えそこが地獄に繋がっていても。

◇

「ハア、相変わらずだな、彼は」

会議室を出たカガリは開口一番ため息をついた。

「苦手なのですか？」

「彼を相手に得意という人間はそういないだろう」

「確かに」

相対してこそ分かることもある。

イスラフィールは紛れもない傑物だ。

かつて地球軍を牛耳っていたムルタ・アズラエルやロード・ジブリールのようなタイプとは真逆の存在。

あれとの腹の探り合いなど、精神が削られるような気分になる。

「二人共、話は後で。今は此処を早く離れましょう。一応戦闘禁止区域とはいえ何が

あるか分かりません。車を呼びます」

「ああ」

先導するスウエンの後について建物を出る。

今までカガリ達が居た場所は新造コロニーの一面に建てられたビルの中。

ここはアムステルダム同様、戦闘禁止区域に指定されたコロニー群だった。

ビルの前に来る車を待つ為歩き出す。

その時、カガリ達の前を横切るもの人物がいた。

「ッ!？」

「スウエンー」

「了解」

咄嗟にネオとスウエンがカガリを守ろうと前に出る。

三人の前に居たのは一人の女だった。

カガリを守ろうと動いた二人に過敏に反応したのか、尻もちをついている。

「お、おい」

「待ってください。畏かもしれない。代表は近づかないように離れて」

ネオと共にカガリを後ろに追いやり、スウエンがゆっくりと女に近づく。

女は見る限り、普通ではない。

服は薄汚れ、髪は変色し白い毛が混じっている。

「お、」

「え」

顔を上げた女は驚いた事にかなり若い。

まだ10代だろう。

しかも目が不自由なのか、杖を持っていた。

おそらく戦災孤児か、被災者と言ったところか。

「立てるか？」

「あ、ありがとうございます」

少女の手を握り立ち上がらせたスウエンはすぐ様、視線を上下に滑らせる。

怪しい物は持つておらず、その気配もない。

どうやら杞憂だったようだ、二人に知らせるとゆつくりと近づいてくる。

「……戦争の被害者か」

カガリも少女の様子を見てすぐにその可能性に思い至った。

「怪我とかは無かったか？」

「はい。ありがとうございます。あの、この辺りに避難民受け入れ施設があると聞いて

きたのですが？」

「ああ。その施設ならもう少し先にある。もうすぐ車も来るから案内しよう」

「いえ。大丈夫です、人も待っていますから」

少女はそう言うのと手渡した杖を掴み、器用に道を歩き出した。

まるで目が見えているかのように淀みがない。

どうやら余計なお世話だったようだ。

「アレなら大丈夫か」

「代表、車が来ました」

走ってきた車がゆっくりと止まりカガリ達の傍に横付けされる。

そして運転席からアオイが心配そうな表情で降りてきた。

「お疲れさまです。どうやら無事に終わったみたいですね」

「ああ。ありがとう、少尉」

ホッと胸を撫でおろしたアオイは杖を片手に去っていく少女の後ろ姿に気が付いた。

「ん、あれは……」

「知っているのか？」

「……いえ」

アオイの脳裏に浮かんだのは、短い間一緒に行動した少女の後ろ姿。

「……ミレイア？ いや、まさかな」

似てはいるが――

「少尉？」

「あ、すぐに車を出します」

運転席に乗り込む前にもう一度だけ振り返る。

しかしそこにはすでに少女の姿は無かった。

「気のせいか」

そう結論付けたアオイは車に乗り込み、港方面へ車を走らせた。

「少尉、体の調子はどうだ？」

「俺はもう大丈夫ですよ。他の重傷だった人達に比べれば軽傷でしたからね」

ファウスト・ヴェルンシュタインとの死闘を制したアオイは無事に生還を果たしていた。

乗機であるエクセリオンの損傷も大した事はなく、怪我も軽傷で済んでいた。

「ラクスさん達は未だに入院しているんでしょう？」

「ああ。それでも無事で良かった。……帰ってこなかった奴もいるからな」

トーンを落として呟くカガリに全員が口を閉ざす。

今回の戦争では多くの犠牲者が出てしまった。

レティシア・ルティエンス。

ニーナ・カリエール。

ルナマリア・ホーク。

キラ・ヤマト。

アスト・サガミ。

同盟を支え、戦ってくれた彼らは戦場から帰還せず、MIAと認定された。

カガリ個人としても付き合いがあつた彼らの無事を信じたい。

しかし捜索隊からの連絡が未だにないと——

この件でルナマリアの妹であるメイリン・ホークもシヨックを受けたのか、戦争終結と同時に除隊した。

「だが私達に感傷に浸っている暇はない。命を懸けた彼らの戦いを無駄にしない為に」

「もちろんです、代表」

車は何事もなく港までたどり着く。

そこでは一隻の戦艦がカガリ達を待っていた。

アークエンジェル。

不沈艦と呼ばれ先の戦争で撃沈寸前にまで追い込まれていた戦艦は此所に見事な復活を成し遂げていた。

「待たせたな、ラミアス艦長、そしてフラガー一佐」
マリューと共にカガリを待っていたのはムウだった。

顔に幾つか消えない傷跡が刻まれているものの、怪我の癒えた本人は至って元気だった。

「では戻りましょうか」

「航路の掃除はミネルバが済ませてくれたらしいですよ」

「そうか。グラデイス艦長にも礼を言っておかないとな」

港で到着を待っていたマリュー達と共にカガリはアークエンジェルへと乗り込んでいく。

「……皆の奮戦、無駄にするものか」

誰にも聞こえないように呟いた彼女の目には確かな決意が宿っていた。



カガリ達を乗せた車が去った後。

目の不自由な少女はゆつくりと、確実に目的地に向かって歩みを進めていた。

手元にある杖は殆ど使わず、人を避けながら進んでいく姿は本当に目が不自由なのか

疑いたくなる光景だろう。

しかし現実彼女は目が殆ど見えていなかった。

僅かな光を感じ取れるだけで、何も見えてはいない。

にも関わらず歩みを進めていられる理由。

それは彼女の鋭敏な感覚によるものだった。

目は見えないが、何となくそこにあるものを感じとる事ができるのである。

このおかげで彼女は今の状態でもさほど苦勞する事はなかった。

「君、もしかしてレアさんかい？」

「え」

名前を呼ばれた少女レアは立ち止まると近づいてくる人の気配を感じ取った。

「あの？」

「君を待つていた施設の者です。連絡は受けているよ。目が不自由なのに大変だった

ね」

声色からして若い男性だろうか。

氣遣う気配から敵意を感じることは無い。

レアと呼ばれた少女はゆっくり頭を下げる。

「遅れてしまい。申しわけありません」

「気にしなくていいさ。本当は迎えにいくつもりだったんだからね」
男性はレアの手を取り建物の中へと案内する。

そこでは賑やかながらも、穏やかな空気が施設内を包んでいた。

「まずは手続きを終わらせて——あ、ロスハイムさん」

「はい」

若い男性に声を掛けられたロスハイムという人物が近寄ってくる。

声からしてそれなりの年を重ねているようだ。

それにしてもロスハイムという名前には何か感じ入るものがあった。

「彼女が話していた人です。後はお願ひできますか?」

「分かりました。ではこちらへ」

近くの個室に案内されたレアは椅子に座り、これまでの経緯を話す事になった。

カリカリと書く音も聞こえてきているので、手続きというものなのかもしれない。

「ではレアさんは何も覚えていらっしやらないのですか?」

「はい。記憶も無く、目もぼんやり光を捉える事しか出来ません。このレアという名

前も拾ってくださったジャンク屋の方が名付けてくれたものです」

「そうですか……ッ!」

悔し気に頭を抱える仕草を取ったロスハイムにレアはふと疑問が湧き上がってきた。

「あの、どうしてそこまで？ 私のような境遇など今の時代決して珍しいものではないでしょう？」

レアはこのロスハイムという人物が他の誰よりも自分の境遇に憤りを感じている事を雰囲気から察していた。

そんなレアの疑問にロスハイムは苦笑する。

「済まない、変に気を使わせてしまったね。……私にも君と同じ年頃の娘と幼い息子が居てね、この戦争中に行方知れずになってしまったのだよ」

「そうでしたか」

「何度も探したんだがね。結局見つからないままだ。私は娘と話し合いたい事があつたというのにね」

気を静めるように息を吐いたロスハイムは「お茶を入れよう」とカップをテーブルに並べた。

「私と妻は昔からこういつた仕事をしていてね、碌に娘に構つてやる事ができなかつた。妻との仲は良好だが、仕事の方針などでは良くぶつかり合ったもので、そこを見られて気まずい思いをさせてしまった事もある」

入れられた紅茶の良い香りが漂う。

それはレアがどこかで嗅いだ事のある匂いのような気がした。

「さらに私の親友の息子を相談せずに養子した事も娘は反発していてね。浮気して作った子だと話も聞かずになじられてしまったよ。その後、戦闘が激しくなったヨーロッパからアムステルダムへ移住させようとしたのだが……」

「行方不明になってしまった？」

「ああ。君のような年代の少女を見るとどうしても娘を思い出してしまったね。いや、済まない」

話を聞いていたレアだったが、何故かどうしても聞きたい事ができてしまった。

どうしても聞かれても困るが、気になって仕方がなかったのだ。

「……貴方は娘さんを愛していましたか？」

「勿論だよ！ 仕事の事で色々誤解させてしまったが、もしまた会えたら誤解を解いて今度こそそ家族で暮らそうと言うつもりだよ。妻もそれを望んでくれている——ツ!?」

熱く語ったロスハイムは息を飲んだ。

何故かレアの目から涙がこぼれていたからだ。

「どうした、レアさん!？」

「分りません。でも何でか涙が出てきてしまつて」

涙を流すレアにロスハイムは自分の迂闊さを恥じた。

記憶も無く、すべてを失っている彼女に話す事ではなかった。

「大丈夫、今日から君も私達の家族だ。何があっても君を助ける」

ロスハイムの勇気づけるその声は何故かレアの涙腺を刺激し、さらに涙を流させる。

しかしそれは悲しみの涙ではない。

どこか暖かさすら覚えるもの。

それに気が付いたレアは涙を流しながらも、ロスハイムに笑みを浮かべる。

その笑みは会えなくなったロスハイムの娘のものによく似ていた気がした。

◇

幾多の戦争で地球は荒廃し、各地では住まう市民たちでさえ限界である。

そう思う程には追い詰められていた。

故に各勢力は宇宙に安住の地を求め、戦力の拡大と拠点の構築に趣を置いていた。

その中で、最も素早く動く事ができたのは月に本拠地を置くテタルトス月面連邦国だった。

統合軍の誕生と戦力吸収。

さらに技術の流出と被害こそ甚大であつたものの、軍総司令に復帰したエドガー・ブ

ランデル等高官たちの差配を持って立て直しが図られた。

睨みあう敵が地上に掛かり切りだった事も幸いし、最も早く動き出す事ができていた。

その一つが現在軍事ステーション『イクシオン』に横付けされた移動軍事ステーション『ヴァルナII』である。

この『ヴァルナII』は外宇宙に向かう為に作られた『ヴァルナ』の問題点を洗い出し、さらに洗練されたものになっている。

そして現在『イクシオン』にて『ヴァルナII』の就航式が開かれていた。

式場では多くの軍人と政治家が集まり、アルノルト・ヴェルンシュタイン議員の演説に耳を傾けていた。

「——今日という日は我がテタルトス、いや人類にとっての新たな一歩となります。地球は多くの戦乱により傷つき、すでに限界を迎えようとしている。だからこそ新たな希望が必要なのです！」

アルノルトの演説に耳を傾けつつ、警備任務に就いているレイの下へバルトフェルド、そしてセレネが歩み寄ってきた。

「お疲れさまです」

「ああ。お前さんもな」

「中佐、職務中ですよ」

「悪い、悪い。だが、そろそろ交代だろ？」

悪びれない様子バルトフェルドにセレネとレイは苦笑する。

「それにしても君は『ヴァルナII』に移乗しなかったんだな？」

「『彼』がいるなら私が乗る必要はないでしょう」

「ま、そうだな」

警備を引き継ぎ、バルトフェルドと雑談を交わすレイを尻目にセレネは「私は行きま
す」と一声かけてその場を離れた。

会場の外に出て車で向かった先はイクシオン内にある医療セクションだった。

此処は普通の病院とは違い軍関係者や特別な事情を持つものが運び込まれる特別な
場所だった。

花束を持ち、目的の場所へ向かっていると見覚えのある人物とすれ違った。

「セレネ・デイノ中尉か」

「お疲れ様です、クアドラード少佐！」

今回の戦闘で多大な戦果を上げ『銀獅子』の異名を名乗るヴィルフリート・クアドラ
ード少佐だ。

ジャスティスガンダムを倒し、デステイニーガンダムと相打った。

それまでに打ち立てた戦果と共に称えられ、『第一次統合戦争』の英雄と言われている。

「今日は？」

「ああ。カーラ達の検査結果が出たので、それを聞きに来た」

新生テンペスターズの三人も無事に生還を果たしていた。

だがジャステイスガンダムとの戦闘で軽傷を負い、念のために検査していたのだ。

「後は捕虜……いや統合軍から保護したパイロットの様子だな」

「彼女は？」

「ああ。治療にはしばらく掛かるらしい」

統合軍から鹵獲した機体に乗っていたパイロットベアトリーゼ・フォルケンマイヤー。

彼女は統合軍で受けた処置の影響を抜けさせる為、治療を受けている最中だ。

しかし経過は良くなく、未だに予断を許さない状況だった。

「時間が掛かるだろうが仕方がないな。君は？」

「あ、はい。彼と彼女の様子を見に来ました」

「そうか。俺も早い回復を祈っている」

「ありがとうございます」

ヴィルフリートと敬礼をかわし、セレネは目的の部屋へと辿りつく。

「失礼します」

入った部屋には腰まである長い金髪を持つ美しい女性がベットに座っていた。

「調子はいかがですか、『ヴィクトリア・ランゲルト』さん」

「……ああ、セレネさん。ええ、私は大丈夫です」

セレネは部屋に入ると持ってきた花束を花瓶に生ける。

彼女『ヴィクトリア・ランゲルト』はセレネが保護した女性だった。

『ヴァルター・ランゲルト』からのメールを受け取っていたセレネはそれを基に調査を行った。

そこには彼女が眠っていた医療ポッドが安置されており、保護したのである。

データによれば彼女はヴァルターの姉らしく、事故に遭って眠っていたとの事。

存在を伏せていた理由も書かれ、某人物から狙われていたと記載されていた。

ただ幾つか気になる事がある。

それは彼女が事故の所為で記憶を失くしている事。

これでは彼女が誰が狙っているのか、そして狙われた理由も分からない。

さらにもう一つ——それが妊娠していた事だ。

「お腹も大きくなってきましたね。……あの大丈夫ですか？」

「平気です。むしろお腹が大きくなると嬉しい。子供が何時生まれるのか楽しみで
す」

「そうですか。何かあればすぐに言ってくださいね。ではまた来ます」

「はい」

笑顔のヴィクトリアに手を振り部屋を後にする、セレネ。

そしてもう一箇所行くところがある。

というかこつちが本命だった。

扉を軽くノックし、部屋に入るとベッドに横たわる人物がこちらに視線を向けてく
る。

「お加減はいかがですか——アスラン」

ベッドに横たわっていたのはアスラン・ザラだった。

体には包帯が何重にも巻きつけられ、シーツを掛けられている片腕と片足にはふくら
みが無い。

そう、彼は片腕と片足を失ってしまったのだ。

手足は義手や義足で補う事は可能らしいが、体に蓄積されたダメージは深刻でまとも
に生活するだけでも長い療養が必要になるそうだ。

戦闘など以外の外。

つまり彼は二度とパイロットとして戦う事はできないと宣告されてしまったのである。

「……セレネか。今日はどうした？」

「様子を見に来たんですよ。今日は『ヴァルナⅡ』の就航日でしたしね。貴方と一緒に見たくて」

部屋に設置されているモニターをつけると特集番組が流れていた。

「セレネ」

「なんです？」

「……俺は、負けた。奴に、完膚なきまでに負けた」

ポツポツと語るアスランの頬をセレネは優しく撫でる。

「俺は……奴に勝ちたかった」

「そうですか」

セレネは何も言わない。

ただ彼女の思う事はただ一つだけだ。

「……生きて戻ってくれただけで十分」

これからもアスランの胸中には無念が残り続けるのかもしれない。

それでもセレネはこのままアスランの傍に寄り添い続けよう。

二人で生きていこう。
それが彼女の願いだった。



暗礁宙域の岩に囲まれた中に佇む施設『アケロン』

世界の誰も知らないこの施設で一人の男がテーブルを挟んだ相手と対話を行っていた。
た。

「今回の件はこれで十分だろう。種は撒かれた。カースが上手くやってくれたよ」

「すべて貴方の筋書き通りという訳ですか……ゲオルク・ヴェルンシュタイン」

椅子に座り笑みを浮かべていたのは死亡したゲオルク・ヴェルンシュタインその人だった。

ベルリンで死んだのは初めから用意していた影武者。

あそこで姿を隠し、裏ですべてを見ていたのである。

統合軍設立の為にファウストの支援を行っていたのもゲオルクだった。

「そうでもない。ファウストがやられ、ヴィルフリートが生き延びたのは計算外だった」

能力的に生き延びるのはファウストだと思っていた。

しかし現実には能力で劣る筈のヴィルフリートが化けた形となった。

「まあ、それならそれで構わないさ」

「貴方の目的に沿うという事で？」

「目的という程大したものではない。私の目的はあくまでも人類の革新だからな」

「フ、革新ですか。その為なら戦争も利用するとう？」

言われるまでも無いとゲオルクは笑みを浮かべた。

語った事に偽りは無い。

紛れも無く本心だ。

彼には昔、許嫁がいた。

家同士が勝手に決めたもので自分の意思が通った縁談とは言い難いもの。

しかしゲオルクは彼女に惹かれた。

彼女は常に未来を見ている女性だった。

「人には先がある。今よりもずっと先が！」

笑顔でそんな事を語る彼女の話は新鮮なものでコーディネイター批判などを聞き飽きていたゲオルクはそれに強く惹かれたのだ。

自分もまた彼女のように――

そう感じた矢先。

彼女は人類の先を信じ続け、そして人類の狂気によって散っていった。

ゲオルクがそれを知ったのはすべてが終わった後。

後悔と憤怒が自身を支配した。

しかし終わった訳ではないのだ。

「生きているとも。その理想、死なせはしない」

そこでコツコツと靴音を鳴らしながら近づいてくる女性がいた。

「No.1か」

「はい。例の博士ですが、放置しておいてよろしいのですか？」

「ヴェクト・グロンルドか。監視だけしておけばいい。こちらとしても利用価値は

ある」

マッドサイエンティストで人道的配慮など皆無ではあるが、その頭脳は本物だ。

今回の『能力移植』も問題はあったものの、それなりに成果は上げられた。

「では？」

「ああ。しばらくは様子見だよ。君に倣ってな、傍観者君」

ゲオルクの笑みに応えるように対面に座る男も笑みを浮かべた。



オーブの孤児院近くにある教会。

いつも静寂に包まれているこの場所はいつもとは違う喧噪に包まれていた。

「皆、準備はできましたか？」

「「はい！」」

子供達の声にドレスを着こんだラクス・K・ルテイエンスは優しげな笑みを浮かべる。

「ラクスさん、まだ体調が良くないんでしょ。子供達の相手は私がします」

「私は大丈夫です、マユ。それに今日はおめでたい日ですから」

皆の手を取るとそのままラクスは歩き出した。

気丈に振舞ってはいるものの、無理をしているのが見て取れる。

MIIAとなった二人の安否を今でも気にしているのだ。

気持ちは分かる。

まるで『ヤキン・ドゥーエ戦役』の後で二人が行方不明になった頃のように。

それでもマユの心中は自分で驚くほど冷静だった。

一瞬壊れてしまったのかと勘違いしたが、良く考えれば簡単な理由だった。

マユは二人が死んだなど信じてはいない。

ただそれだけの事。

誰が何と言おうとも、二人の帰還を信じて待つだけだ。

「マユ、俺これでいいかな？」

そこでスーツに身を包んだ兄シンが声を掛けてきた。

「ええ。大丈夫です。今日は兄さんが主役なんですからしっかりしてくださいね」

「分かってるよ」

今日はシンがセリスと結婚する日なのだ。

鏡を見ながら身支度を整えたシンが心配そうにマユに声を掛けてくる。

「マユは、その、大丈夫なのか？ アレンの事。立てられた墓とか行ってないんだろ」

「必要ありません。だって——」

マユはどこかで確信していた。

彼は必ず——

だからそれは必要ない事だ。

「私の事よりも兄さんもしっかりしてくださいね。セリスさんを幸せにするんです

よ」

「……ああ。もちろんだ」

頼もしい笑顔で頷くシンをマユは笑顔で送り出す。

皆に囲まれ結婚した二人は幸せそうに笑っていた。

「おめでとう！」

「幸せにな!!」

それは紛れも無く、希望に満ちた光景だった。

「それ！」

セリスの投げたブーケが宙を舞う。

花弁が周囲を舞い、そして――

こうして人は繋がっていく。

これからも絶望はあるだろう。

どうしようもなくなってしまう時が来るかもしれない。

それでもこうして人が繋がっていくのなら。

希望が繋がりに続けるなら。

命を掛けて戦った意味もあるだろうと、マユは希望の光を見つめていた。

機動戦士ガンダムSEED
eventual
END

世界は絶望に満ちている。

それをかつて世界を周り、歌を歌い続けた女性は良く知っていた。

ティア・クライン。

希望の歌姫と呼ばれ、皆に勇気を与え続けた歌姫だ。

しかし彼女はもう歌う事を止め、プラントの片隅で一人で質素な生活していた。理由はいくつもある。

その一つがプラントの人々が自分という存在に依存しないようにする為だ。

自分はいくまで勇気を与えるだけであり、皆の指針になるべきものではない。

かつてデュランダルがラクス・クラインの存在を利用したように、今後自分を政治利用しようとする者も現れる可能性もある。

もうプラントの人々はラクス・クラインから——ティア・クラインから卒業すべきだと思ったのだ。

そして何よりも大きな理由。

それが彼女自身歌う意味を見いだせなくなってしまったから。

大切な人は二度と自分の下へ戻ってきたくれないから。

「さあ。今日はどうしましょう」

今日の献立を考えながら、台所へ立つ。

最初は戸惑った家事も数カ月もすれば嫌でも慣れる。

手際良く調理を進めすべての食器の並べ終えた所で、玄関の呼び鈴が鳴った。

「こんな時間に？」

ティアに客人など滅多に來ない。

プラントの人々には居場所は伏せているし、知っているのはプラント上層部のごく一部だけ。

若干警戒しながら、扉を開ける。

「え」

そこには――

ティアの瞳に涙が浮かぶ。

そのまま家を後に、彼女は二度とこの場所へは戻らなかつた。

世界は絶望に満ちている。

世界は悲哀に包まれている。

それでも――

希望はあつた。

諦めない限り。

人が繋がり続ける限り。
希望もまた紡がれていくのだ。

C. E. 93

世界は幾度もの大戦を経験しながら、その在り様もまた変化していた。

活動範囲も火星圏まで広がり、人類は確実に宇宙へと広がり始めている。

しかしそれでも火種は消えず、未だに争いは続いていた。

「アユム、起きなさい！ アユム!!」

「うえ、い、今何時？」

いつも通り母の怒声。

それを聞いて飛び起きた少年は時計の時間を見て飛び上がった。

「嘘！ もうこんな時間かよ！」

バタバタと部屋を駆け回り、上着と鞆を引っ掴むと慌てて階段を駆け降りた。

「何で起こしてくれなかったのさ！」

「私は何度も起こしたわよ。アンタが夜更かししてるからでしょ」

「しようがないだろ。シンおじさんがくれたディスクが面白かったんだからさ」

「全く！ 兄さんにも困ったものね」

リビングで先に食事をしていた母親に文句をつけながら、テーブルに用意してあった

パンを無理やり口にねじ込み、ミネラルウォーターで流し込んだ。

「ちゃんと座って食べて。それにミルクも飲みなさい。じゃないとお父さんみたいに身長で悩む事になるわよ」

「背なんて気にしてたんだ、父さんって。パイロットだったんだろ？」

「ええ、聞きたいの？」

「あ、やば」

余計な事を言ったと内心後悔する。

母の父に対する惚気は聞いていて胸やけするのだ。

「父さんの話はまた今度ね。じゃ、俺行くから」

「アユム、車に気をつけなさい」

「分かっている。行つてきます、マユ母さん」

「いつてらっしやい」

家を駆けだしていくアユムを見送るマユ。

「遅いわよ、馬鹿アユム」

「また寝坊か」

「うるせ！」

友人と合流したアユムは歩いていく。

紡いだ希望は芽吹いた。

次なる時代の希望という名の種を撒くのは——

だがそれでも。

希望もまたあるのだと。

彼らがそれに気が付くことを信じて。
次なる希望はすでに歩み出していた。

あとがき

機動戦士ガンダムSEED eventualをお読みいただきありがとうございます
ました！

相変わらず進歩の無い私の作品を読んでいただいて感謝いたします。

いやあ、今までで一番苦労しました。

何度止めようと思ったか、分かりません。

それだけ大変でしたが、まさかeventよりも長く掛かるとは思いませんでしたよ。

まあ今回も語るべき事はそう多くはありませんが一応あとがきを書かせていただきました。

1) ストーリー

これが一番難題でしたね。

オリジナルでストーリーを組み立てる難しさを嫌と言うほど理解しました。

本当にすべての小説家やシナリオライターを尊敬します。

さてeventualのテーマはアストとアスランの決着です。

アオイの事も絡ませて考えていたのですが、横道にそれてしまうのでカットしました。

色々あつたんですけどね、マケドニア要塞攻略とか、パナマ基地防衛とかね。

それやるとダラダラと長くなってしまいますので。

アオイの活躍を期待してくださった人、本当に申し訳ありません。

後はmoon light traceから考えていたキャラクターの設定を出しつつ、物語を作りました。

副題で『逆襲のアスラン』とか付けても良かったんですけど、ボツにしました（シナリオ的に逆襲という訳ではないので）

2) ヒロイン

色々あるとは思いますが、この作品におけるヒロインはルナマリアです。

いや、レティシアとかマユとかいるのは分かっています。

ハーレムにしようとか考えていた訳でもありません。

ただ彼女達は各作品でそれぞれヒロインやってるし、二人だと似た展開にしかならな

いかなと思って。

ていうかルナマリアが好きだったので活躍させたかったというのもありますけど。

そしてレティシア。

彼女をああいいう形にしたのは初期から残っていた設定を使いたかったというか。

causeのエンディング候補の一つがこんな感じでしたので、そのまま使ったというか。

ですので単純なハッピーエンドを期待されていた方には申し訳ないです。

ただ彼女やマユの子供達がそれぞれの陣営で戦うというのがcauseから考えていたエンディングだったのです。

3) モビルスーツ

これもしんどかった。各機体の名前が思いつかないんですもん。

読んでいただけたなら分かると思いますが私はモビルスーツの名前を各陣営に合わせて決めています。

同盟の機体名は和名や北欧神話から。

テタルトスは天体に関する名称から。

SEED対応機を含めた一部の機体は悪魔の名前から。

そして主人公達は各々の立ち位置などから名前を考えています。

しかしある問題が起こりました。

それが『機動戦士ガンダム 鉄血のオルフェンズ』です。

この作品では機体名にソロモンの悪魔や天使の名前が使われている為に今までみだりに適当に決められなくなってしまうた。

正直被らないかビクビクしてました。ブリュンヒルデとかね。

4) エンディングについて

さて感想でも言っておられた方が居たのですが、作品のエンディングについて。

ハッキリ言うとうち最初からこういうエンディングを目指して書いてました。(私は最初にエンディングを考えてから書くようにしていますので)

『機動戦士ガンダム 逆襲のシャア』みたいな感じで。

まず未消化と言われた部分(各キャラクターのその後など)ですがこれも予定通りです。さつきも書きましたがこの作品の主軸はアストとアスランの決着。

その結果は最終話で書かれた通り。

アストはアスランとの戦いに勝利したけど帰還は出来ずにM I A。

アスランは勝利は出来なかったが、戦場からの帰還は果たせた。

ただ代償に二度と戦えない身体となって再起不能。

これで二人の戦いの決着はついた。

アスランは試合に勝って勝負に負けたって所でしようか。

あえてぼかしました部分もありますが書かれていない各キャラクターがどうなったのかは推測できると思います（多分だけど）。

そして黒幕というか、まだ暗躍している奴がいる訳ですがこれも予定通り。

作品中にアストがアスランに言っていますが一個人の力だけで世界をどうにか出来るはずがない。

特にヴェクトなどは戦場には出てこない慎重な相手は簡単には倒せない。

作品中キラの言っていた通り長期戦になる訳です。

そして仮にイスラフィールやヴェクトを倒そうと必ず次が出てくる訳です。

最後にマユの子供を出したのも、アスト達が居ようと居まいと、例え今いる敵を倒そうとも世界は続き、戦いも続いていくというのを示したかったのです。

5) 最後に

次回作についてですが、全く考えていません。

エンディングを考えた時にこの先の事もほんやりとは考えていましたが、それを形にするには時間もかかるし、続きが読みたいなんて人も居ないでしょう。

私自身もSEEDばかり書いているとマンネリになつてきますしね。

後はオリジナルの作品書いてみたいなんて考えて、アイディアを適当にメモったりしたのでそつちを書くかなあとか考えています（ハーメルンで投稿する気はないですが）

ともかく私の作品を読んでいたいただいた皆様、そして感想をくださった方、全員に感謝します。

ありがとうございます！

では最後にせっかく考えたのでeventualの先を少しだけ書いてみました。

ダイジェストみたいな感じで凄く短いので、期待せずにどうぞ。

C.
E.
94

地球と火星を結ぶ中継コロニー『ヘルメス』

地球圏の経済の中心であるアムステルダム商工連合が開発したこのコロニーには各陣営の戦力が集まり、互いに目を光らせていた。

此処こそが地球と火星を繋ぐ門であると同時にキナ臭い空気を生み出す中心。

各陣営の注目が集まるのも無理からぬことだった。

そんな中、カレツジの実習で『ヘルメス』を訪れたアム・アスカは同年代の少年と出会う。

「済まない、前を見て無かった——」

「いや、俺も——」

街中でぶつかった二人は初めて会った筈なのに、何故か相手に不思議な親近感を覚えた。

「俺はルーク・セイファート」

「アム・アスカだ。よろしく」

僅かな間に親しくなる二人。

しかし、突如起こった襲撃。

コロニー内を飛び回る所属不明のモビルスーツ。

逃げ惑うアムは迷い込んだ工場の一画で一機のモビルスーツに出会う。

「……ガンダム？」

乗り込んだコックピットの画面に表示されるOS名を繋げて読み呟く。

そしてモビルスーツに与えられた名は『イレイズ』

「実習で習ったから動かし方くらいわかるけどさ」

操縦桿を握り、フットペダルを踏み込むとゆっくりと機体は身体を起こし、その装甲が色づいた。

爆炎に包まれる工廠の中、立ち上がる機体。

かつて世界にその名を轟かせたモビルスーツが蘇る。

そしてルークもまた別の機体を発見する。

運び出そうとしたのかトレーラーに寝そべるモビルスーツ。

ハッチを開き、乗り込むと同じく『ガンダム』の名を呼ぶ。

そして、機体の名前が画面に浮かび上がった。

「……機体名は『エクリプス』」

もう一機の機体もまた世界に名を残す者。

乗り込んだルークは躊躇いなく機体を起動させる。

それぞれが敵と交戦し脱出を図る二機のガンダム。

だが、そこに立ち塞がるのは同じくガンダムだった。

「ここは通さない。私、レティス・ランゲルトが相手になる」

「女の子?」

相対するガンダムから聞こえてきた声。

しかしそれ以上に相手から伝わってくる感覚に戸惑ってしまう。

そしてルークもまた出会う。

「貴様は此処で倒す。この俺、アステア・ザラがな!」

「邪魔だ、そこをどけ!」

知らぬ間に運命は加速する。

『ヘルメス』は世界を繋ぐ門。しかし此処こそ地獄の始まり。その炎は止まる事は無く世界を焼き尽くす。故に『一切の希望を捨てよ』。救いは無いのだ」

炎に焼かれ、戦火に包まれる門を見つめる仮面の男。

乾いた怒りと憎悪に身を浸すその男は世界が焼かれる姿を確信しながら、始まりの光景を眺めていた。

外伝

〈 I F 〉 レテイシア・ルテイエンス

第一次統合戦争と呼ばれる事になる戦いは終盤へと差し掛かっていた。

主戦場は地上から宇宙へと変わり、最終決戦への口火が何時切られてもおかしくない程に切迫している。

戦闘に備え各員がそれぞれ決戦に向けて調整を行っている中、アスト・サガミは同盟所属の軍事ステーション『ヴァルハラ』にある士官宿舎の一室へと呼び出されていた。ビクビクしながらアストは上目使いで呼び出した張本人を見つめる。

「あの……どういったご用件でしょうか？」

「何ですか？ その妙にへりくだった態度は」

アストの低姿勢が気に入らなかつたのか、レテイシア・ルテイエンスが冷たい視線を投げかけてくる。

しかしアストからすればそれは無理からぬ事だつた。

「いや、こうして呼び出される時は碌な目にあつた試しがないし。キラだつてご愁傷さまつて顔して手を合わせてたし」

苦い記憶が呼び起こされる。

あの時やその前も酷い目に遭わされた。

今回もそういう事だと思つても不思議はないと思う。

だがレティシアとしてはそれが気に入らなかつたのか、ますます機嫌が悪くなる。

「それは貴方達にやましい事があるからでしょう」

「え？」

「何か？」

人を殺せるのではと思える程に冷たい視線にアストは即座に降伏する。

しなきや殺されてしまう。

「いえ、何でもないです」

正直、言いがかり以外の何物でもない。

自分は無実。

しかしそう反論してはまた大変な目に遭うのも御免だ。

アストは余計な事を言うまいと口を閉じた。

そんな彼をジト目で見つめつつ、レティシアはため息をついた。

「今日呼び出した他でもありません。アスト君に至急伝えておかねばならない事ができました」

緊張感の伴うレティシアの雰囲気のアストもまた息を飲む。

「正直、とても驚くと思います。私もまだ信じられないくらいですので」

「あの、何があつたんですか？」

「……最近、私の体調が優れなかった事は知っていると申します、その原因が判明しました」

レティシアはこのところ原因不明の体調不良に襲われていた。

他のメンバーも心配し散々精密検査を受けるように勧めていたのだが、現状の切迫した情勢を見て後回しにしていたのである。

だがここに来てラクスやマユ、セリスと言った面々からの説得にようやく重い腰を上げたらしい。

「なるほど。それで検査結果は？」

言いがかりめいた説教では無かったと安堵しながら、レティシアの言葉を待つ。

しかし紡ぎ出された言葉はアストの予想を超えたものだった。

「——妊娠です」

予想斜め上の回答にアストは思わず固まってしまった。

「は？」

「ですから原因は妊娠したからですよ」

いや、いや。

妊娠って。

言葉の意味は知っているけれども。

まあコーデイネイターであるレティシアがそう重い病にかかるとは思っていないかったが、妊娠とか予想外にも程がある。

その言葉と意味を理解するまで数秒を要し、混乱しながら思わず聞き返してしまっ
た。

「あの、妊娠ですか？」

「はい」

「えっと、おめでとうございます」

「何を他人事のように言っているのです。貴方も親になるのですよ、しっかりしてください」

またも投げつけられた爆弾にアストは再び固まってしまふ。

親になる？

つまりレティシアのお腹にいる子供は――

いや、何となくわかっていたし。

でも、俺のような人間が父親になるなんて。

整理しかけた頭が再び混乱していて考えが纏まらない。

少し落ち着かねば。

「フウ」

深呼吸し気持ちを落ち着けると改めてレティシアと向き合った。

「まあ何というか、重大な病気とかでなくて安心しました」

コーディネイター故に危険な病気の可能性は低いとは思っていたが、原因が分かって

安堵したのも事実。

「……それにしても俺に子供が」

正直、実感がわかない。

家族というものには縁がなく、あってもまあ碌な思い出ではない。

親になるなんて想像すらしたことが無かった。

そんなアストの遠くを見るような目にレティシアは強烈な不安に襲われた。

背筋が凍るような冷たい目。

空虚ささえ感じさせる。

そのままどこか手の届かない場所まで行ってしまいそうな――

「アストくん！」

咄嗟にアストを抱きしめるレティシア。

力一杯抱きしめる彼女の体は震えていた。

それに気が付いたアストは優しくレティシアの背中を撫でていく。

「どうしたんです？」

「何処へ行く気なんですか？」

「何処って……何処にも行きませんよ」

「……嘘つき」

レティシアには分かっていた。

アストは壊れかけている。

いや、もうとつくに壊れているのかもしれない。

故に心配でたまらないのだ。

いつか何処かへ消えてしまう気がしてならない。

だからこそ半ば強引にアストと肉体関係を結んだ。

彼を繋ぎ止める為に。

「私は此処にいます。貴方の赤ちゃんも此処です。貴方は一人じゃありません。だから」

「そうだな……ありがとう。まさか俺が父親になる日が来るなんて思ってもみなかった。資格もないと思つていたし」

「資格なんて必要ありません。仮に必要ななら私があげます」

はつきりと断言するレテイシアにアストは思わず苦笑してしまった。

「男らしいな」

「殴りたいんですかね？」

「す、すいません」

「全く。とにかくアスト君はお父さんになるんですから、しっかりとしてくださいね」
優しく微笑むレテイシアにアストはチクリと胸が痛むのを感じた。

それは過去の痛みだ。

自分にこの人と歩む資格はあるのだろうか？

数多の死と悲劇を生み出してきたというのに。

そんな迷いを見透かしているかのように、レテイシアはアストの両手を取った。

「大丈夫です。何があっても私が居ます。二人で乗り越えれば良い」

「レテイシアさん」

微笑む彼女の言葉にアストの胸中にあつた空虚さが少し和らいだ気がした。

「だから一緒に居てくださいね」

その言葉を聞いた瞬間、アストの目から一筋だけ涙が零れた。

「え、涙？」

何故、急に涙が溢れたのか？

理解できないまま、涙を拭き取る。

「なんで涙なんて出るんだ？」

「アスト君」

レティシアは悲しそうにアストの頬を優しく撫でる。

「多分、目に髪の毛でも入っただけでしょう。何か感じていた訳じゃありませんし、大丈夫です」

「……それが悲しいんじゃないですか」

「は？」

「いえ、何でもありません。そういった貴方の性根を叩き直す事も私の役目という事を再認識しただけですのぞ」

「あの、そんな不穏な事を目の前で言わないでくれませんか？」
顔を引きつらせつつ、仕切り直す為息を吐いた。

何であれアストからレティシアに言わなくてはならない事がある。

「レティシアさん」

「はい？」

「俺は……正直誰かを幸せにできるような人間じゃない。この先も戦場に身を置き、確実に人に戦禍を撒き散らす。貴方もそれに巻き込まれるかもしれない。それでも――」

「一緒に居ます」

愚問とばかりに即答する、レティシア。

やっぱり男前だなと思いつつ、苦笑するとアストも覚悟を決めた。

「では……その、俺と、け、結婚してくれますか？」

やや詰まり気味に発したプロポーズの言葉にレティシアはクスリと笑う。

「ふふ、はい、もちろん」

アストは恥ずかし気に笑みを浮かべるとそのまま二人は互いの体に手を回す。
今更だけど温かい。

それは冷え切った心に僅かでも温もりを感じさせた。

未だ心に巢食う底冷える暗いものは消える気配はない。

それでも、こうして受け入れてくれる人の為にも、生きて行こう。

アストはそう決意するとより強くレティシアを抱きしめた。

◇

朝の光りがカーテンの隙間から目元に差し込む。

「う、うう」

微睡つつ飛び込んできたまぶしさから逃れる為にアストはシーツを頭まで被る。

再び夢の中へ旅立とうとするとそれを遮る声が聞こえてきた。

「朝ですよー!!」

「起きて」

ドアが派手に開かれるとドタドタと音を立てながら、声の主が部屋に入ってきた。音からして二人。

けたたましい声に耐え兼ね、よりシーツの中へ潜り込む。

「ねえ、起きて、起きて!」

「起きないと駄目」

「もう少しだけ寝かせて」

体を揺する二つの手。

それでも抵抗して起きないでいると突然、二人の声が聞こえなくなる。諦めたのだろうか？

それなら助かったとばかりに再び惰眠を貪ろうとする。

しかし、すぐさま何かがベットのの上に乗がってくる気配に気が付いた。

「ま、まさか、ちよ、二人共、待って！」

急いで飛び起きようとしたが時既に遅し。

次の瞬間、腹の上に衝撃が襲い掛かってきた。

「寝坊助さんにはお仕置きだ！ どーん!!」

「お仕置き」

「ぐええええ」

二人分の重みが加わり、悲鳴を上げながらシーツが勢いよくはぐられた。

「うっ」

光の眩しさに耐えながら、ゆっくり目を開いていく。

そこでは二人の笑顔が待っていた。

「おはよーお父さん！」

「おはよう」

「おはよう、セティア、セシリア」

セティアとセシリア。

この二人はアストとレティシアの間に生まれた双子の姉妹だ。

二人の愛娘の頭を優しく撫でながら、体を起こす。

「えへへ」

「ううう」

セティアは嬉しそうに笑い、セシリアは恥ずかしそうに俯いた。

不思議なもので二人は双子の姉妹であるにも関わらず、その性格はまるで正反対。

セティアは明るく快活な性格。

外で遊んだりするのが大好きで良く友達と一緒に外を飛び回っている。

反面セシリアは大人しく優しい性格をしており、外で遊ぶよりも部屋で本を読んだりする方が好きである。

性格が全く違う二人だが姉妹仲も良く、喧嘩も殆どしない。

正反対故に仲が良いという典型なのかもしれない。

「ねえねえ、お父さん良いの？」

「何がだい？」

無邪気な笑顔を浮かべたセティアは朝からとんでもない爆弾を投げつけてきた。

「えつとね、お母さんがお料理してるの」

「なっ」

アストは凍り付いたように動きを止め、部屋の外の方へ視線を向ける。

「二人共、ごめんな！」

上着を掴み急いで部屋を飛び出すとキッチンへ一直線に走り出した。

廊下にすでに何かしらの臭いが漂っている。

不味い。

流石に不味い。

少しの寝坊のツケがこんな所で回ってくるなんて誰も思わないだろう？

アストは飛び込むように扉を開け放つ。

そこには予想通りの光景が広がっていた。

「あら、おはよう、アスト。貴方が寝坊なんて珍しいですね。でももう少し休んでいても良いですよ。もうすぐ朝食が出来ますから」

アストの眼前には妻であるレティシアが白衣を纏い、調理という名の科学実験を行っていた。

テーブルにはフラスコやら試験管など機材が所狭しと並べられている。

これのどこをどう見たら調理をしていると思えるだろうか？

「レティシア、料理は何時も俺が作ると言っておいた筈だけど？」

「昨日も軍の仕事が遅くまであったようですし、休ませてあげようと思ひまして。それにいつもアストに作ってもらつてばかりでは妻の名折れ。娘たちにもたまには手料理を振舞いたいですし」

「……気持ちは凄く嬉しいんだけど」

やはりこれは看過できまい。

アストが無言で機材を片づけ出すとレティシアが抗議の声を上げる。

「あー！ 何をしてるんですか！ 料理の途中ですよ！」

「こんなものは料理とは言わない。ただの『実験』だから。それに今何を作ろうとしてたんだ？」

「ただのスープですか？」

「ただのスープ」

散乱している材料を見てアストは思わず顔を顰める。

単純な野菜スープを作ろうとしたようだが、何故傍に変な調味料が無数に置かれてい
るのだろうか？

普通に作れば良いものを、何で変なアレンジを加えようとするのか。

「とにかくレティシアはキッチンに入るのは禁止だ」

「横暴ですよ！」

「ダメダメ。朝食は俺が作り直しますので」

レティシアの抗議を無視しながら、慣れた手つきで調理を開始する。

結婚してから料理はすっかりアストの役割となっていた。

レティシアにやる気はあるのだが、問題がありすぎて料理をさせられないと判断したのだ。

それからはアネットの下で料理を習い、こうして家族に振舞うのが日課となっていた。

素早く調理を行い、簡単な軽食を作ると家族四人がテーブルに着き、手を合わせた。

「いただきます」

セティアとセシリアがスクランブルエッグを一口食べると顔を綻ばせた。

「おいしー!」

「うん。お父さんの料理好き」

「ありがとうな。二人共」

だが一人面白くなさそうにしているのはレティシアだ。

「今日こそ私の本当の実力を見せようと思ったのに」

「お母さんの料理よりお父さんの方が良い」

「な!？」

「うん、時々変な味がするし」

「そ、そんな……そんな事はありません！ セティア、セシリア、お母さんが本気を出せばお父さんなど敵ではないのです！」

「……そんな本気は出さなくて良い」

聞こえないように小声でつぶやく。

今日はアストもレティシアも休日だ。

戦争も終結し、最近では大規模な武力衝突も行われていない。

世界中で平和とまではいかないものの、開戦前と比べれば遥かに安定した情勢と言えるだろう。

だからこそこうしてオーブに居を構える事もできたのだ。

アストはそんな取り留めのない事を考えながら、今日の予定をどうしようかと朝から騒がしい家族を見つめる。

「どうしました？」

「いや、今日はいい天気だから、お弁当作ってどこか行こうか？」

「お弁当!!」

「みんなでお出かけ？」

「ああ」

「やったー！」

「ほらほら、先にご飯を食べてしましましょう」

「はいー！」

はしやぐ子供たちと窘めるレティシアを見ながらアストは優しく微笑んだ。

朝食を終え、レティシアの料理（？）を片づけると、手早くお弁当を作っていく。

毎日やっていればこの程度慣れたもの。

恨めしそうな視線を送ってくるレティシアをあえて無視し、準備を整えると全員で家を出た。

「今日もいい天気」

「ああ」

家族と一緒に歩きながら雲一つない青空を見上げる。

出向いてきた公園は家族連れで賑わい、誰もが笑顔を浮かべていた。

本当に平和だ。

しかし未だにふと思う事がある。

——自分は此処に居ても良いのだろうか。

「お父さん、こっち！」

「一緒に行こう」

そんな事を考えていたアストの手をセティアとセシリアが楽しそうに掴む。

「二人共、今日は一段と楽しそうだな」

「うん！」

「楽しい。だって——」

「お父さんとお母さんと一緒だから!!」

その言葉を聞いた瞬間、何故かアストの眼から涙が流れた。

明るくて、眩しい。

こんな温かい場所に自分がある事にやっぱり現実感が感じられない。

駄目だと分かっているけど、やはり思ってしまうのだ。

此処に居てはいけないと。

お前に似合いの場所は血なまぐさい戦場だと。

でも——

「どうしたの、お父さん？」

「どこか痛いのか？」

「何でもない。何でもないんだ。痛いんじゃないよ、お父さんも嬉しいんだよ。みんなが一緒に」

未だ胸中を燻る暗いものが消える気配はない。

ふとした瞬間にそれを思い出す。

その所為で苦しむ事も多い。

きつと死ぬまでこの思いが消える事はないのだ。

でも。

それでも。

アストは此処に居て良かったと素直に思えた。

「アスト」

レティシアがアストに手を差し伸べる。

前ならきつと迷っていた。

しかし今は迷わず手を取る事が出来る。

「いきましよう、皆で一緒に」

「えへへ、私も」

「じゃあ私はこつち」

セティアとセシリアがアストとレティシアの手を取る。

大切な人の手を握りながら、アストは溢れてくる思いを堪えながら微笑んだ。

「ああ、行こう」

アストは大切な家族と共に歩き出す。

その先にある温かな未来へ向けて。

かつての輝き

それはいつも通りの午後だった。

雲はあれど天気は良い。

気温も熱くも無ければ、寒くもない。

季節的に言えば冬に近いものの、今日は丁度良い気温である。

モビルスーツが上空を飛び回っている事はまあ、無粋と言えなくも無いが昼寝する分には何の問題もない。

最近は何の問題もなく平和だ。

仮初の平和だとは分かっているけど、それでもこのまま平穏が続くのを願うばかりである。

「ああ、今日もいい天気だ」

「おい、アオイ！ アオイ・ミナト少尉！ そんな所で何寝てんだよ！」

「ん」

無粋とも言える怒鳴り声に気持ちよく微睡んでいたアオイが目を開けると馴染の整備班の青年の顔が飛び込んできた。

彼は同い年の同僚であり、訓練兵だった頃からの付き合いだ。

ややお調子者のきらいはあるが、明るく話しやすい人柄を持っている。

故に気兼ねがないという事でアオイとも良く話をする仲だった。

「こんな所でよく寝てられるな、お前」

呆れた顔の整備班の青年が寝転がるアオイに手を差し伸べてきた。

分かってないなと笑いながらその手を掴む。

「相棒の上なんだから最高の場所だよ、此処はさ」

アオイが寝ていたのは長年共に戦ってきたイレイズガンダムMk-IIの腹の上だった。

移動用トレーラーに横たわる愛機の上こそアオイ最近のお気に入りだ。

緊急の場合は即座にコックピットへ飛び込めるし、今くらいの気温なら昼寝に丁度良いのだ。

「物好きめ。それより整備の邪魔だから動かすってさ。だから昼寝は此処までだ」

「分ったよ」

名残惜しいとばかりにイレイズから降りると、これからの予定を考える。今日は完全なオフだ。

緊急事態でも起きない限りは、休みとなる。

シミュレーターに行くか、もしくはは約束の時間より早くなってしまうが病院に向かうか。

どうしようか迷っていると整備班の青年が声を掛けてきた。

「アオイ、お前今日の予定は？」

「え、ああ、えっと、何で？」

「いや、暇ならちよつとつきあえよ。……いいもの先輩から借りてるからさ。これから整備班の連中の部屋で見ようと思つてな。お前も来いよ」

最後の部分を小声で言つた所で大体予想がついた。

アオイも年頃の男だ。

そういうった類のものに興味がないと言つたら嘘になるが、生憎今日は外せない用事があつた。

「俺は休暇だけどお前らは違うだろ。仕事はどうするんだよ？」

「少しくらいなら大丈夫だつて。それよりどうだ？」

「悪いけど、この後病院に行かなきゃならないんだ」

「病院？ お前、どこか調子でも……あ、あの子か。エクステンデットだった、ステラ・ルーシエだった」

「そうだよ。今日は久しぶりに外出の許可が下りたから、街に連れて行こうと思つてさ」

ステラ・ルーシエはアオイ達と共に戦つた仲間であり、エクステンデットと呼ばれる強化人間だった少女の事だ。

戦う駒として利用され続け、どうにか助ける事には成功したものの、大きな犠牲と彼女自身に消えない後遺症を残す事になった。

その為ずっと病院での生活が続いていたのだが最近、ようやく体調が安定してきた為、期限付きとはいえ外出の許可が下りたのである。

「そうか。じゃ、お前はその後デートかよ」

暗くなりかけた空気を察したのか、整備班の青年は詳しい事には触れず、代わりに不機嫌そうな鋭い視線を向けてくる。

アオイもそれに乗つかる事にして首を横に振つた。

「違つて。ステラは妹みたいなもので——」

「やかましい！ あんな可愛い子と出かけられるだけでも有難いと思つての!!」

こつちは毎日、毎日むさ苦しい男達と一緒に冷たいモビルスーツの装甲と睨めっこだつ

てのに！」

嫉妬に満ちた表情で睨みつけてくる青年。

その視線だけで人が殺せそうな雰囲気である。

正直、怖い。

整備班は女日照り何て事を良く聞くのだが、彼も例外ではなかったらしい。

「そ、そんなに睨むなよ。作ればいいじゃないか、彼女」

「言つて出来るなら苦労はないつての、全く！」

何気なく発したつもりのアオイの言葉だったが、それが余計に彼の勘に触ったらしく先ほど以上に鋭い視線を向けてきた。

「これだからモテ野郎は！」

その言い分には反論しなかったが、これ以上揉めるとめんどくさいのであえて口を噤む。

はつきり言つてアオイは自分がモテる類の人間ではないと思つている。

容姿は普通だし、気の利いた事が言える訳でもない。

最近再会した同期には何故かいつも睨みつけられている始末なのだ。

そんなアオイの不满には気が付かずに青年は一通りの不满を吐き出したお陰か、少し冷静になったように息を吐き出す。

「ハア、世の中理不尽だよ。まあ、お前はあの子だけみたいだしまだマシな方だけだな」

「は？」

「世の中にはいるんだよ、最悪の悪魔みたいな男がさ！」

落ち着いていたのに、思い出したように再び興奮し始める。

傍から見ていたらただの不審人物にしか見えない。

「悪魔？」

「そうだよ、あんな美人を何人も！ うらや——いやいや、許せん！」

「……いいからとりあえず落ち着け」

そんな挙動不審ぶりが理由でモテないのでという本音をギリギリ押し殺し、無難な言葉を口にした。

「俺は落ち着いてる！ それより聞けよ！」

聞いてもないのにわざわざ説明してくれた所によれば、同盟に美人ばかりを自分に侍らせる女たらしがいるらしい。

その男はパイロットらしく、整備班の間ではかなり有名な人物だとか。

まあ嫉妬に満ちたあの表情と整備班にしか伝わっていない噂である事を考えると眉唾もの話だろう。

嫉妬の対象になって、いる男に少しだけ同情したくなった。

というかそんな碌でもない噂なんか流しているからモテないんだと思う。

「まあせいとも度々制裁を受けてるらしいけどな。とにかくお前もそんな奴みたいにはなるなって事だ。でないと俺や先輩達が黙ってないぞ。まあお前は大丈夫だと思うんだけどさ——」

「いや、うん、まあ大丈夫じゃないか」

「けどお前最近妙な噂もあるしな」

「噂？」

「見た事のない物凄い金髪美人と一緒に歩いてたっていう話」

「な、ないない」

「金髪美人とは多分『あの人』の事だろう。」

「だが知られる訳にはいかない。」

疑い出す青年に適当に相槌を打ちながら時計を見ると、いつの間にか約束の時間までそう余裕は無くなっていた。

「悪いけど俺行くからな」

「おい、何かやましい事でもあるんじゃないだろうな！」

付き合っていない。

顔も見たことがないパイロットへの愚痴や自分への疑惑を語り続ける青年を置き去りにアオイは病院へと歩き始めた。

◇

昔から病院という奴はどうにも好きになれなかった。もちろん怪我をすれば此処に運ばれ治療を受ける。

傷や病気を治す場所こそ病院。

そんな事は子供でも知っている常識だ。

分かっているが長く戦場にいるアオイにとって誰かが死ぬ場所であるという印象の方が強く、どこか忌避感のようなものを感じていた。

「ハア、勝手な話だよな。分かっただけだよ」

ため息をつきながら歩いている場所は軍の管轄下に置かれた特殊な病院である。

一般の病人やけが人はおらず、軍人やその家族、特殊な背景を持つ者のみが入院している場所だ。

アオイは自動ドアを潜り、勝手知ったるとばかりに迷いなく歩き出した。

それもそのはず、この病院にはすでに数えるのも馬鹿らしい程に通い詰めている。

眼を瞑つてもとまでは言わないが、病院の構造くらいは頭の中に入っていた。

通路ですれ違う顔馴染になった看護師さん達に笑顔で会釈しながら、目的の部屋までたどり着くとコンコンと軽く叩いた。

「アオイだけど」

アオイがノックした途端「アオイ!？」という声が聞こえてきた。

だが同時に「ちよ、まだ駄目よ!？」という制止の声も聞こえてきたが当の本人は気にしていないらしくバタバタと走ってくる音が聞こえる。

「アオイ!!」

扉を開けて出てきたのは金髪の髪を持つ無邪気な笑顔を浮かべた少女——ステラ・ルーシエが半裸で飛び出してきたのである。

「ハア!？」

当然、アオイは自分の胸に飛び込んできた半裸の少女に対して何もできない。

無邪気な笑顔を向けてくるステラに対しギリギリの引きつらない愛想笑いを浮かべるのが関の山だ。

いい匂いがするとか、何処とは言わないが柔らかい部分が当たっていると断じて考えてはいない。

「ス、ステラ!？」 今、着替えてる途中でしよう!!」

慌てて飛び出してきたのはステラと同じ金髪の髪を靡かせ女性物のスーツに身を包んだ女性だった。

一目見ても美人である事は間違いない。

街を歩けば誰しも目を引く容姿である。

それを自分自身知っているのか目立たないように極力、露出の少ない服を着込んでいた。

しかしそれでも生来持ち合わせた色気を消せないようで、アオイも一瞬見とれてしまった。

「た、大——いえ、えつとル、ルシアさんが何で此処に？」

変装の為か眼鏡を掛け、長い髪を束ねるようにしているのはルシア・フラガ。

普段はネオ・ロアノークとして活動している地球連合改革派の中心人物である。

保守派との闘いや同盟、プラントとの協議でも忙しいはずの彼女が何故？

そんなアオイの疑問に答える前にルシアは迫力のある笑顔を浮かべると、半裸のステラを部屋へと引っ張り込んだ。

「少尉、今は取り込み中なのでもう少し外で待っていてください」

「は、はい！」

ようやく状況を思い出し、慌てて背を向けると「着替えてる途中で部屋を出たら駄目

でしょう」という声が聞こえてきた。

「怖！　大佐……目がマジだったよ」

背筋が凍るとはまさにこの事だ。

間違つても覗きなどと勘違いされないようにアオイは素早く部屋の前から離れると廊下に設置されているソファアーに腰を下ろした。

「ハア、何か出かける前から疲れた。でも外はいい天気だな」

窓から差し込む太陽の光。

気持ちの良い陽気にこちらの気分も自然と穏やかなものになる。

「今日は晴れて良かった。やつとステラの外出許可が出たんだし、雨じゃ味気ないもんな」

しばらくのんびり外を眺めていると部屋のドアが開く音が耳に届いた。

振り返れば綺麗に着飾ったステラが笑顔を向けていた。

「アオイ、やつと着替えが終わった！」

「ステラ、凄く似合ってる」

「本当？」

「ああ」

「そうですね。選ぶのに苦労したんだから」

満足そうに頷くルシア自身もステラに負けず劣らず良い服を着込んでいた。そういえばルシアはこういった服とかアクセサリーに人一倍こだわりを持っていると耳にした事がある。

普段から男装を強いられている反動なのだろうか。

「あ、そうだ。大佐は今日はどうしたんです?」

「私はステラのお目付け役です。体調には問題ないと報告を受けてはいますが、万が一という場合もありますからね。二人にはお邪魔かもしれませんが」

「フフ、では少尉、行きましょうか」

「行こう、アオイ!」

今日の外出をよほど楽しみにしていたのだろう。

ステラがアオイの手を握り立ち上がらせると、グイグイと引つ張ってくる。まるで子供のようににはしゃぐステラの姿に自然と笑みが浮かんでいた。



女性と出かけるというのは男にとって一大イベントだとアオイは思っている。

だから緊張だつてするし、着ていく服一つに頭を悩ませる時もあるだろう。そんな一大イベントを前にアオイには見逃せない問題があった。

もちろんステラやルシアとは気心も知れているし、緊張する事はない。

だがそんな彼女達とどこに行けば良いのか皆目見当がつかなくつたのである。

何せずつと戦場で命のやり取りばかりしてきたのだ。

遊んだ事なんてほとんどない。

辛うじてステイング達と何度か出かけた事がある程度である。

そんなアオイが二人の女性を楽しませる為にエスコートしようなんてのがもはや無謀としか言いようがない。

だから――

「考えても仕方ないな。うん、見栄を張つてもしょうがない。二人に直接聞こう」
余計な事は考えないようにした。

情けない言い訳染みてはいると自覚しているが他に方法など思いつかないのだ。そう結論を出してアオイは取り合えず市街に車を走らせた。

「気持ちいい!!」

「ステラ、窓から顔を出すと危ない」

「平気、平気！」

「二人はどこか行きたい場所はあるかな？」

「海!!」

ステラの海好きは相変わらずのようだ。

病室でも良く海に関する本や映像ディスクを見ている事が良くある。

ある意味想定内の行先だったので、続いてルシアの方へ話を振る。

「大佐はどうです？」

「私はステラの付き添いですし……まあ強いて言うなら少し買い物がいくらいですね」

「買い物。近くにあるショッピングモールでも大丈夫ですか？」

「ええ。十分です」

行き先はあっさり決まった事に内心安堵しながらアオイはアクセルを踏み込んだ。

◇

アオイはここにきて自分の甘さを痛感していた。

「……もう2時間か」

戦闘後のような疲労感。

シヨッピングモールに設置されたベンチの背もたれに体を預けておく事すら億劫になつてきた。

片手に握つたジュースの缶もとつくの昔に空になつている。

「……までは、甘かつた」

もはやため息しかでない。

目の前に広がっているのは何件目かのブティック。

アオイはファッションショーとばかりに次から次に服を着替える二人の女性の観客になつていた。

「これはどうです、少尉？」

「……トテモヨクニアツテイルトオモイマス」

新たな服を片手に笑顔を浮かべるルシアとは対照的にアオイは引きつった笑顔を浮かべるのが精いっぱいだ。

しかしそれにも気づかずルシアは楽しそうに次の服を物色し始めている。

「そうですか！ うん、ではこれも買いましようか。あ、これも良いですね！」

実に楽しそうだ。

まあ普段が普段だけにこう言つた機会は少ないのだろう。

今日がルシアにとつての息抜きになるのなら、この程度の事いくらでも付き合おうと

も。

「ねえ、まだ見るの？」

反対にステラはファッションにはあまり興味がないのか、すでに飽き飽きしているようだ。

「ステラ、貴方も女の子なんですからもっと身なりには気を使わないと。少尉にも嫌われてしまいますよ」

「それはやだ」

「ならきちんとしないとね」

見る限りウキウキしながら新たな服を手取る、ルシア。

「どうやらまだまだ続くらしい。」

アオイが諦めと共に何度目かのため息をつこうとした時、予想外の人物から声がかかった。

「ミナト少尉？」

「へ？」

立っていたのは最近赴任してきたばかりの同僚であり、同じパイロットであるベアトリゼ・フォルケンマイヤー少尉だった。

一目見て可憐。

全身から隠しきれない上品さを漂わせ、着込んだ服も育ちの良さを感じさせるには十分なものだ。

容姿を含め何で軍人をしているのか疑問に感じる程である。

手に持った荷物から察するに生活用品を購入していたようだ。

「何を嫌らしい視線でジロジロ見ている？」

「別に見てないって。誤解を招くような事を言うなよ。ただ以外な場所で会ったから驚いていただけだ」

「そうだと良いが。それでこんな場所で何をしている？ 此処はお前から最も縁遠い場所だと思うのだが」

「余計なお世話だよ！」

確かにこんな高級ブティックなどアオイからは縁遠い場所に違いない。

しかしそんな言い方をされれば、流石に少しムツとしてしまうというもの。

「相変わらず口が悪い奴だな」

「生まれつきだ」

「嘘つけ」

これで中身さえ良かったなら、男から引く手数多だろうに。

「まあ冗談はさておき、此処で何をしている？」

「単純に人を待っているだけだよ。俺はただの付き添い」

「付き添い？ ……アイツらのか？」

「は？」

ベアトリーゼが指さした先。

そこには先ほど別れた整備班の青年が同僚を連れて歩いてきているのが見えた。

「何でこんな所に」

驚いたのは向こうも同じだったらしく、手に持った荷物が地面へ落ちたにも関わらず気にした素振りはありません。

まるでコメディでも見ているみたいに理想的な表情と反応でアオイに詰め寄ってきた。

「仕事はサボったのだろう。」

「な、アオイ!? お、お、お前、もう新しく来た子とデート!?!」

「誤解を招くような事をでかい声で言うな!!」

「やかましい!」

目は血走り、表情は嫉妬に満ちている。

それは周りの同僚も同じらしく、全員が親の仇でも見るかのような目で睨みつけてい

た。

怖ッ！

こいつら全員こつちの話なんて聞いちゃいない。

「お前の……お前の事だけは、信じていたのに」

涙混じりに嗚咽を漏らす青年の姿に流石のアオイも即座に言い返す。

「嘘つけ！ 思いつきり疑ってたじゃないか！」

「そんな事はどうでもいいんだよ、このモテ男が！」

何かもう話し合うとかいう次元ではないようだ。

どうしたものかと頭を悩ませていると、悪いタイミングという奴は重なるもので――

「アオイ、どうしたの？」

買い物を終えたステラとルシアがブティックから出てきた。

ステラは不思議そうに首を傾げていたが、ルシアはすぐに状況を察したのか額に手を当てて天を仰いだ。

その姿に整備班の面々はさらにヒートアップした。

「お前、さらに別の美人と!?!」

「許せん！」

「一人譲れ！」

面倒くさ。

もうどうでも良くなってきた。

呆れつつため息をつく。

どうしたものかと考えていると、そこで――

「……なるほど。屑め」

「ちよつと待て！ 聞き捨てならない。お前誤解してるだろ！」

「何の話だ。私に近づくな」

「おい！」

まるでゴミを見るかのようなベアトリーゼの視線にアオイも黙っていられない。ていうか心外だ。

「振られたからって熱くなるなよ」

「……お前ら」

一転して嬉しそうに肩を叩いてくる青年にキレそうになる。

どいつもこいつも嬉しそうに頷いてるんじゃない。

大きくなっていく騒動。

一般の人にも迷惑になる程に混沌とした中、どうやって騒ぎを収めようか頭を抱えて

いると予想外の助け船が割り込んできた。

「こんな場所で何の騒ぎだ？ 一般人に迷惑をかけるな」

「へ？」

「あ、貴方は!?!」

「ロアノーク大佐!?!」

いつの間にか仮面を被ったルシア——ネオが立っていた。

どうやら見かねて助けに入ってくれたらしい。

服まで男物に着替えている所を見るとこういった早着替えに慣れてるようだ。

突然現れた上官に全員が敬礼する。

何というかこんな場所で全員が敬礼しながら直立不動で立っている。

酷く滑稽な気がしてきた。

「あ、あの、質問よろしいでしょうか？」

「何だ？」

「た、大佐が何でこんな場所に？」

「ただの視察だが？」

「し、視察ですか……」

「……あの仮面付けたままショッピングモールに？」

「……何とか場違い極まりないよな」

「……正直、恥ずかしい」

ボソボソと小声で言い合う整備班メンバー。

ていうか聞こえてくるから。

「ツ、少尉、君はステラを連れて先に戻れ。私は彼らと話がある」

「……はい」

アオイはネオから目を逸らすと荷物を持ってステラと一緒にそそくさとその場を後にする。

「アオイ、いいの？」

「ああ、いいんだよ。触らぬ神に祟りなしさ」

ネオはいつも通りの声色で落ち着いた様子に見えた。

だが付き合いの長いアオイには分かる。

今、ネオがとてつもなく不機嫌であると。

せつかくの休暇を台無しにされた事もあるのだろう。

しかし本当の理由はさっきの影口だ。

「口は災いの元だよ」

アオイは残された整備班の面々に同情——

「いや、全然同情しないけど」
そう割り切るとさっさとシヨッピングモールの出口へと向かった。

この後、整備班がどうなったのかアオイは知らない。

しかし彼ら全員（ちやつかり離脱していたベアトリーゼを除く）がこの後死んだ目で働いていたとか。

その様子見たアオイもネオを怒らせないようにしようと思ひに誓う事となったのは此処だけの話だ。



シヨッピングモールを離れたアオイが向かったのは病院ではなく、ステラが行きかけた場所である海だった。

季節が夏であつたなら、海に入る事も出来たかもしれないが、流石にもう無理だ。

「ステラ、海には入らないようにね」

「うん！」

はしやぎながら浜辺を駆けるステラにアオイも思わず笑みを浮かべる。

「アオイ！」

浜辺に座って物思いに耽っていたアオイにステラが飛び込んできた。

ステラの腕が腰に巻き付きギュツと抱きしめられ、倒れ込むような格好になる。

アオイは驚きつつも優しくステラの金髪を梳くように撫でていく。

「えへへ」

「ステラ、どうしたの？」

「楽しくて、嬉しいから！」

「そっか」

楽しそうで良かった。

仕方ないとはいえ普段は病院に押し込まれ、行動も制限されていればストレスも溜まるだろう。

そういう意味で今日が彼女にとって良い気分転換になれば良い。

「ねえ、アオイ」

「なんだい？」

「ずっと一緒に居てね？」

微笑むステラにアオイは一瞬言葉を詰まらせる。

自分は戦場で何時死ぬかもわからない存在だ。

勿論、死ぬ気などさらさらなく帰ってくる気ではある。

しかし戦場は無慈悲な場所だ。

何時死神の鎌が自分の命を刈り取りに来るかはわからない。

でも、もしも仮に自分が死ねばステラはどうなる？

考えただけでもゾツとする。

改めて思うのだ。

自分は死ぬわけにはいかないのだと。

「……大丈夫だ、ステラ。一緒にいるよ」

「うん」

ステラは嬉しそうに笑いながらアオイの腕の中でゆっくりと目を閉じる。

まるで幸せな夢を見るかのように。

そしてアオイは空を見上げる。

雲一つない晴天。

まるでこの平穏を表すかのように美しく澄んでいる。

そしてアオイもまた目を閉じた。

同じく夢の続きを見るかのように。



「少尉、起きなさい」

呼ばれる声に導かれるようにアオイは自分の意識がゆつくりと浮上していくのが分かった。

それに逆らう事無くゆつくりと目を開ける。

「う、うう」

瞼を開けば見惚れるような美しい女性の顔が視界一杯に広がっていた。まるで日の光のようにキラキラと輝く金色の髪にアオイの目が奪われる。

「……大佐？」

条件反射的に見覚えのある顔の主の名を呼ぶ。

「目は覚めた？」

「はい」

何故かルシアに膝枕された状態であったアオイはゆっくりと体を起こす。頭を打ったのか現状もはつきり分らない。

少しでも早く思い出そうと周りの光景に目をやった。

どうやら此処はどこかの浜辺らしい。

そのまま周囲に目を滑らせると、一機のモビルスーツが頭から砂浜に突っ込むようにして転倒しており、さらにその機体の背中に組み付く形でもう一機が倒れている姿が見えた。

「あ」

記憶がフラッシュバックし、すぐさま状況を思い出した。

アオイは新型のウイングスラスターのテストに立ち会っていたのだった。

しかし調整不足か、暴走か。

途中で制御できなくなった機体を止める為に組み付いたまでは良かったのだが、勢い余って浜辺に激突してしまったのだ。

「大佐、俺はどのくらい気を失っていましたか!? テストパイロットは無事ですか!?」
「落ち着いて。気を失っていたのはほんの一、二分。テストパイロットは重傷ではあるけど、命に別状はないわ」

見れば近くには応急手当を受けたと思われるテストパイロットが横たわっている。出血等は見られないが、添え木がある所を見ると骨折しているのだろう。

「ハア、良かった。でもあのスラスタはあぶないですよ」

「まだ開発段階だから今後は調整されるのでしようけど、パイロットは選ぶでしょう」
「……前からとはいえ相変わらず新型機開発も熱が入ってますよね。統合戦争が終わって、もう結構経つのに」

「今は外宇宙進出に目が向けられているとはいえ、世界情勢は相変わらず安定してないもの。仕方がない」

確かにその通り。

最近の情勢を見ていると分かる。

近い将来また戦いが始まるだろうと。

アオイは倒れ込むモビルスーツを見て、嘆息する。
もうしばらく休む事はできないだろう。

「……ハア。だからあんな夢を見たのかな」

そして空を見上げた。

世界には未だ戦火が燻っている。

あの日、見た青空とは程遠く、覆われた曇天は今の世界を示すように。

後に『第二次統合戦争』と呼ばれる戦いが、再びアオイを死地に誘おうとしていた。

機体紹介（ネタバレ注意）

「調和同盟軍」

形式番号 GAT-X141A

名称 イレイズガンダムMK-II・タイプA

パイロット アオイ・ミナト

武装

イーゲルシュテルン×2

ビームライフル×1

ビームサーベル×2

腕部実剣『ブルートガング』×2

アンチビームシールド×1

ビームシールド×2

ビームライフルショーティール×2

各タクティカル装備

機体説明

イレイズガンダムMk-IIはヤキン・ドゥーエ戦役で投入されたゼニスガンダム開発データ収集を目的に開発された機体であり、ユニウス戦役序盤から第一次統合戦争まで戦線に投入されてきた傑作機。

しかし度重なる激戦の負荷が限界に達し、戦闘での使用は不可能と判断、引退を宣告されウリエル格納庫に死蔵された状態となった。

だが変化する状況の中、自身が存分に戦える機体を求めたアオイ・ミナトの要請で大幅な大改修が施される。

武装面や外見に大きな変化はないが、中身は最新鋭機であるAAAのパーツを使用、腕部にビームシールドが追加され現在の機体群とも互角以上に戦える性能を得た。

その分、機体調整や整備性などは劣悪化しており、破壊されれば修復不可能とも言われている。



「装備」

特殊機動用装備『ウイングス』

武装

量産型高エネルギー収束ライフル『グランシーザ』×1

近接防御用背面ビームガン×2

『装備説明』

アオイ・ミナト用の新型機に搭載される予定のウイングスラスタアの試作版。タクティカルシステムを応用し、着脱可能なものになっている。

翼のような大型スラスタアが2基が搭載され、圧倒的な機動性を誇る反面操作性を著しくダウンさせる。

翼の部分はシールドとしても使用可能であり、装備としての防衛性能も高い。



形式番号 MBF-M5α

名称 アドヴァンスアストレイ・アデプト

武装

イーゲルシュテルン×2

高出力ビームライフル×1

高出力ビームサーベル×2

腕部ブルートガング改×2さ

散弾搭載バズーカ砲×2

アンチビームシールド×1

各タクティカル及びストライカー装備

『機体説明』

テタルトスの『ジンIII』、統合軍の『パウ』と言った破格の最新鋭量産機の登場に危機感を強めた同盟が開発した『アドヴァンスアストレイ』の正式後継機。

設計を一から見直し、プラント、連合改革派の技術協力も得た事で高かった機動性にさらに磨きがかかっており、アドヴァンスアーマーも標準装備となっており、

タクティカルシステムやストライカーパックも対応可能になっており、高い汎用性も兼ね備えた強力な機体に仕上がっている。

現在は量産化を進める為のデータ収集が進められ一部の部隊のみに配置されている。軍では略称でAAA（スリーエー）と呼ばれている。

「スウェン機」

斬艦刀『リジル』×2

ワイヤーアンカー×4

ビームライフルショーティー×2

〔アオイ機〕

ビームマシンガン×1

量産型高エネルギー収束ライフル『グランシーザ』×1

〔機体説明〕

アドヴァンスアストレイ・アデプトをアオイとスウエンの特性に合わせてカスタマイズした機体。

アオイ機は白とスウエン機は黒に塗装され、それぞれが希望した武装と改修が施され通常の機体よりも性能が高い分、調整がデリケートになっている。

量産型高エネルギー収束ライフル『グランシーザ』はコスト削減の為にバッテリー節約の為にカートリッジ方式を採用しており、一カートリッジにつき弾数は五発。



〔装備〕

宇宙戦用高機動装備『ジラント』

武装

機関砲×2

近接防御ビームガン×2

ビームサーベル×2
ビームライフル×2

〔装備説明〕

宇宙用無重力戦量産型高機動装備。ヨルムンガンド以上にスラスターを高出力化し、より機動性を高める事を重視した装備。

◇

形式番号 M V F ー M 1 7 A

名称 オウカ

武装

近接防御火器×4

高エネルギービームライフル×1

高エネルギーロングビームサーベル×2

腕部『ブルートガング』改×2

シールド内蔵ビームガトリング×1

アンチビームシールド×1

各タクティカル

〔機体説明〕

オーブで開発された同盟の可変型最新鋭主力量産機。

『ユニウス戦役』にて開発された高性能試作機『オウカ』をベースに『第一次統合戦争』にて実戦投入された『スオウ』『ヴィヒター』のデータを戦闘データを反映させた事により、高い性能を持たせながらも量産化に成功。

現場のエース級や指揮官などの要求に応えうる機体に仕上がっている。

◇

〔装備〕

宇宙戦用特殊装備『グライフ』

武装

レールガン×2

バズーカ砲×1

ビームフィールド発生装置内蔵誘導小型ビーム砲塔×6

〔装備説明〕

レールガンと無線式のビーム砲塔を設置した特殊装備。

装備内部に小型の予備バッテリーを複数搭載、今までの特殊装備のデータと改良によつて稼働時間を格段に増やし、小型のビーム砲塔も誰でも扱えるようになっていた。

ただネオ機の装備はより反応高める為、ネオの空間認識力を最大に生かせる調整が加

えられている。

◇

「戦艦」

名称 ウリエル

艦長 ヨハン・レフティ

武装

イーゲルシュテルン×多数

リニアキャノン×2

高エネルギー収束火線砲『ゴットフリート』×4

陽電子砲『ローエングリン』×3

ミサイル発射管×多数

「戦艦説明」

『第一次統合戦争』にてファントムペインの戦艦『サリエル』との戦いによつて撃沈されたガーティ・ルーの代わりに同盟軍が投入した新型戦艦。

アークエンジェル級の特徴を受け継ぎながらも、次世代の戦艦として構想された新造戦艦であり、その性能はアークエンジェルやミネルバすらも上回る。

◇ 独立部隊『グラオ・イーリス』の第三隊の旗艦として試験運用されている。

◇ 名称 ヴィンゴルヴ

武装

機関砲×多数

ビーム砲×多数

ミサイル発射管掛×多数

〔戦艦説明〕

戦場で傷ついた戦艦の修復、補給を行う為に開発された巨大ドック艦。

ザフトのゴンドアナ級を参考に開発されており、彼の戦艦よりも小型化され収容艦も五隻の戦艦までと縮小されているがその分機動力は向上している。

しかしゴンドアナ同様に中継基地、補給基地としての意味合いが強く、その為に戦闘能力は低い。

◇

〔マクベイン・エクスキューター〕

形式番号 不明

名称 リグ・シグルド

武装

ビームライフル×1

ビームサーベル×2

腕部搭載ビームカッター×2

アンチビームシールド内蔵ビームクロウ×1

腹部複列位相エネルギー砲『ヒュドラII』×1

〔機体説明〕

ヤキン・ドゥーエ戦役で開発されたモビルスーツである『シグルド』のデータを基に開発された新型機。

所属不明の工房が作り上げたものであり、形式番号は存在しないが、その性能は量産機でありながらも非常に高性能。

ビームシールドを標準装備し、腕には伸縮自在のビームカッターを搭載している。

〔ルドラ・サルワ機〕

武装

ドラグーンシステム×8

〔機体説明〕

リグ・シグルドをルドラ・サルワ用に改修した機体。

シングル・グラーフ開発の際に制作されたプロトタイプであり、スラスターの増設やドラグーンシステムの追加などで総合性能をさらに高めている。

◇

形式番号 不明

名称 シングル・グラーフ

武装

ビームライフル×1

ビームサーベル×2

ビームシールド×1

腹部複列位相エネルギー砲『ヒュドラII』×1

背部高出力ビーム砲×4

小型ゲシュマイティヒパンツァー形成ユニット×8

背部ドラグーンユニットビーム砲台×8

〔機体説明〕

リグ・シングルをベースに開発された強化兵及びSEED専用モビルスーツ。

破格の高性能機であるリグ・シングルをより強化し、常人を上回る力量を持つパイロットであろうとも100%の力を発揮できるように調整されている。

が
可能。
ゲシユマイデイヒパンツアーを形成できる小型ユニットを搭載し、トリツキーな攻撃

それ故に通常のパイロットではその力を振るう事は難しいとされている。

機体紹介2 (14話以降ネタバレ注意)

「調和同盟軍」

形式番号 GAT-X003A

名称 エクセリオンガンダム・アイオーン

パイロット アオイ・ミナト

武装

マシンキャノン×2

高エネルギービームライフル×1

高エネルギービームサーベル×2

腕部ビーム発生装置内蔵実体剣『ナーゲルリングⅢ』×2

腕部ビームシールド×2

高エネルギー収束ライフル『アンヘルⅢ』×2

グレネード・ランチャー×2

対PS装甲弾頭搭載バズーカ砲×1

ビームシールド内蔵アンチビームシールド×1

「機体説明」

第一次統合戦争にて実戦投入されたユニオンエクセリオンガンダムの正式後継機。

背中にはフリーダムと特殊機動装備『ウイングス』のデータ基に開発された2基の大型スラスターと2基の小型スラスター、『ウイングス』の倍である合計4基を装着。

『ウイングス』の戦闘データで調整を加えられており、宇宙のみならず地上や外宇宙の重力空間での戦闘も視野にいったフリーダムすら超える圧倒的な機動性能を実現している。

『ウイングス』同様翼の部分はシールドとしても使用可能であり、放出されるミラージュコロイドを応用した機体を守る防御膜を展開、それによって高度な防御性能と幻惑機能も所有している。

戦闘データとe・s・デバイスを組み込んだW・S・システムを搭載し、パイロットの能力を最大限引き出せるようになっていいる。



形式番号 ADT-X02

名称 ストライクノワール・クリュメノス

パイロット スウエン・カル・バヤン

武装

- トードスシュレットン×2
- バヨネット装備高エネルギービームライフルショーテイー×2
- 高エネルギービームライフル×1
- 高エネルギービームサーベル×2
- 腰部ビームガン×2
- ビームアンカーランチャー×4
- ビームシールド内臓小型アンチビームシールド×1
- 「フワールストライカーⅢ」

武装

- レール砲『タスラムⅢ』×2
- 斬艦刀グラムⅢ×2
- 近接防御小型ビームガン×2
- アンカーランチャー×2

機体説明

同盟の新型機開発計画の一環で開発された機体。ストライクを冠しているものの、中は完全に別物の新型機。

基本的な武装などはかつてのストライクノワールを踏襲しており、パイロットであるスウエン・カル・バヤン大尉の特性と希望に合わせて調整が行われており、ほぼ彼専用の機体となっている。

◇

形式番号 ADT-X03

名称 エレンシアガンダム・ソファイア

パイロット ルシア・フラガ

武装

頭部イーゲルシュテルン×2

高エネルギービームライフル×1

高エネルギービームサーベル×2

高エネルギー収束ライフル『グランシーザII』×1

ビームシールド内蔵アンチビームシールド×1

ビーム発生装置搭載型ワイヤーアンカー×2

ビームフィールド発生装置搭載ドラグリーンユニット×10

対艦ミサイルポッド×2

小型機雷×2

〔機体説明〕

同盟の新型機開発計画の一環で開発された機体。

エレンシアの名を冠しているものの、中身は完全に別物の新型機。

エレンシアをベースに可変機構を搭載し、ターニングやスオウ、ヴィヒターで得られた可変型機のデータを集約、洗練、それによって向上した性能は可変型モビルスーツの一つの到達点とも言われる程。

さらにパイロットであるルシア・フラガの空間認識力を最大限に発揮できるようにドラグーンシステムを搭載。

コックピットにも空間認識力を高める専用デバイスを設置、機体や武装を完璧にコントロールできる新型OSを装備している。



高機動兵装 『スレイプニル・グラニ』

武装

ロングレンジ高エネルギービーム砲×1

大口径ビームキャノン×2

高エネルギービーム砲×2

散弾砲搭載バズーカ砲×2

対艦ミサイル発射管×多数

ビーム発生器搭載型近接攻撃用ロングブレード×2

全周囲ビームフィールド発生装置

〔装備説明〕

同盟の高機動兵装『スレイプニル』の発展型装備。

モビルスーツの強化に重点を置きながら、さらに火力と推進力を強化。

ミーティアを上回る圧倒的な火力と機動力を得た。

さらにアカツキやヴァナデイスが使用したドラグーンの防衛フィールドを応用し、機体全体を守るフィールド発生装置を搭載した事で防御力もアップしている。

だが欠点として操作性の複雑さを招いており、パイロットの負担が増大、コーディネイターパイロットですら手に余る。

それを考慮して搭載された制御AIによる補助が行われてようやく操縦可能になった。

◇

高機動兵装『スレイプニルII型』

武装

大口径ビームキャノン×2

高エネルギービーム砲×2

対艦ミサイル発射管×多数

ビーム発生器搭載型近接攻撃用ロングブレード×2

全周囲ビームフィールド発生装置

〔機体説明〕

『スレイプニル・グラニ』の先行試作量産型。

量産化を目的としたデータ収集機としての意味合いが強く、コストを抑える為『スレイプニル・グラニ』よりも火力は劣る。

しかし火力、機動力の向上が図られ、全体的な性能は『スレイプニル』よりも上。

さらに試験的なビームフィールド発生装置を搭載しているが、その出力は『スレイプニル・グラニ』より抑えられている。

操作性の複雑さも改良されつつあるが、それでもパイロットの負荷が大きいのに変わらない為量産化への課題として残されている。

◇

〔マクベイン・エクスキューター〕

形式番号 不明

名称 アヴァターラ

パイロット ルドラ・アシユラ

武装

近接防御機関砲×4

巨大多連装高出力ビーム発生器『プラズマドライバー』×1

巨大ビームクロウ×2

ビームチャクラム×2

ドラグーンシステム×多数

ドラグーンシステム対応ビームアンカー×2

腹部複列位相エネルギー砲『ヒュドラII』×1

ビームシールド×2

隠し腕×2

〔機体説明〕

所属不明の工房で作り上げた新型機。

悪魔を彷彿させる禍々しい外見と各部に取り付けられた高出力スラスターにもよつて外見に似合わない高機動性を持つ。

ドラグーンシステムをふんだんに盛り込み、近接武器も充実させる事で遠近隙のない

機体に仕上がっている。

さらにパイロットである高度なSEED能力を持つルドラ・アシユラの能力を最大に引き出すe・s・システムを搭載している。

◇

形式番号 不明

名称 ブラフマー

パイロット サルワ・アシユラ

武装

近接防御機関砲×4

高エネルギービームライフル×2

高出力ビームカッター×2

ビーム発生器搭載有線誘導式アームユニット×4

腹部複列位相エネルギー砲『ヒュドラII』×1

多連装ビーム砲×2

高エネルギービームランチャー×2

ドラグーンシステム×多数

〔機体説明〕

所属不明の工房が作り上げた新型機。

モビルスーツというよりはモビルアーマーに分類される機体。

通常の機体よりも巨体であるが各所に設置されたスラスターと高出力のメインスラスターにより、見た目以上の機動性と火力を誇る。

パイロットであるサルワ用に調整が加えられており、どちらかと言えば砲撃戦よりの武装になっている。

コックピットにはアヴァターラに搭載された e. s. システムを参考に開発された強化兵用の特殊 OS が搭載されよりパイロットの能力を引き出す事が可能になっている。

◇

形式番号 不明

名称 ヴィカララ

パイロット シルヴィア・ヒビキ

武装

機関砲×2

高エネルギービームライフル×1

高出力ビームカッター×2

ビームシールド×2

腹部複列位相エネルギー砲『ヒュドラII』×1

高エネルギーロングレンジビームキャノン×1

誘導式多連装ミサイルランチャー×2

〔専用装備〕

ドラグーンシステム×多数

ゲシュマイデイツヒパンツァー内蔵型ドラグーン×多数

〔機体説明〕

所属不明の工房が作り上げた新型機。

シルヴィア・ヒビキの特性に合わせた機体となっており、遠距離からの狙撃戦を得意とする。

コックピットに特殊システムを搭載、シルヴィアの空間認識力をさらに高め、高い空間認識力を持つ者や『SEED』をより感知しやすくなっている。

その為、高度な特殊能力を持つ者に対しても素早い対処が可能となっている。

◇

形式番号

不明

名称

カルキ

パイロット

クロム・マイル

武装

高出力ビームライフル×1

腕部高出力ビームソード×2

大型対艦刀×2

腹部複列位相エネルギー砲『ヒュドラII』×1

肩部ビーム発生器内蔵大型ビームクロウ×2

背部高出力ビームキャノン×2

ビームシールド×2

ドラグーンシステム×多数

ビームチャクラム×2

〔機体説明〕

月面紛争時にて破壊されたシグリードのデータを基に開発された機体。

背中と肩の大型スラスタと各部に搭載されたバーニアユニットによって非常に高

い機動性、そして搭載された高火力な武装によって機動力、火力を併せ持つ凶悪な機体に仕上がっている。

『マクベイン・エクスキューター』のエースパイロットでありSEED保有者であるクロム専用のe. s. システムを搭載。

さらにSEED発動時には同盟で導入されたC. S. システムと同様に各装甲内に格納されていたスラスタが全開放され、圧倒的な機動性と放出されるミラージュコロイドによる幻影と防御が可能になる。



形式番号 不明

名称 ベテルギウス・ヴァイパー

パイロット アルド・レランダー

武装

近接防御機関砲×2

高出力ビームライフル×1

高出力ビームソード×2

腕部装着中型多連装ビーム砲×2 (内蔵ビームカッター)

高出力ビームランチャー×1

無線誘導式ビーム発生装置内蔵伸縮式マニピレータユニット×8

ビームシールド×2

〔機体説明〕

月面紛争時にて実戦投入されたベテルギウスのデータを基に改修、建造された機体。

正体不明の工房で作り上げたものであり、形式番号は存在しないが、その性能は各陣営の最新鋭機にも劣らない。

さらに強化兵専用[◇]に改修されたOSを搭載、破格の追随性と機動性を持っている。

形式番号 LFA-X07b12

名称 バウ・バシリコック

パイロット ウォーレン・マクベイン

武装

近接防衛機関砲×2

高出力ビームライフル×1

高出力ビームサーベル×2

腹部複列位相砲『アドラメレクⅡ』×1

肩部ビームキャノン×2

グレネード・ランチャー×2

スラストアーユニット兼用ミサイルポッド×2

ビームシールド発生装置内蔵アンチビームシールド（内蔵三連ビーム砲×1）×1

〔機体説明〕

ウオーレン・マクベイン専用バウを『第一次統合戦争』に投入されたバウ・バジリスクのパーツ、そして仮面の男カースから提供された技術を用いて改修を施した機体。

武装等の変更はないものの、元々高性能だったバウを現在の技術、そしてバジリスクのパーツをもって改修しただけあって、ワンオフ機とも同等以上の性能を誇る。



形式番号 不明

名称 強化型リグ・シグルド

武装

ビームライフル×1

ビームサーベル×2

ビームシールド×2

腕部搭載ビームカッター×2

腹部複列位相エネルギー砲『ヒュドラII』×1

高出力ビーム砲内蔵型無線誘導ビームクロウ×2

ドラグーンシステム×6

〔機体説明〕

シグルド・グラーフヤルドラ、サルワ機のデータを基にリグ・シグルドの性能を強化した強化兵仕様。

さらに性能が高まった反面並みのパイロットでは動かす事すら難しい仕様になっている。

◇

名称 フォーリングスター

武装

対艦ミサイル×多数

高出力ビームカッター×4

高出力ビームソード×2

プリステイスビームリーマー×6

大口径高出力ビーム砲×2

多連装ビームキャノン×4

試作型全周囲ビームフィールド発生器

〔装備説明〕

かつてザフトが開発した巨大補助兵装ミーティアを改修した追加兵装。

対モビルスーツ戦闘のみならず、高速で動く機動力も確保され、ミラージュコロイドによる隠密行動も可能になった。

高速移動及び隠密行動時はモビルスーツを収納する為に中央に格納スペースが展開され、防御面でも優れた能力を持つ。

ミーティア自体にNジャマーキャンセラーを搭載、核動力で稼働している為、エネルギー切れはない。

核のエネルギーを用いた試作型の全周囲ビームフィールド発生器を装備しており、ビーム兵器に対する高度な防御性能を誇る。

第1話 世界の影

第一次統合戦争。

古き力は潰え、新たな力が生まれた戦い。

数多の犠牲を生み出し、世界の縮図を一変させたこの大戦からすでに三年の時が流れていた。

世界を取り巻く情勢や各陣営の勢力図は大きく変化し、かつての面影はすでにない。それでも尚、戦いの炎は消える事なく燻り続けていた。



暗く音も聞こえない静かな部屋。

そこは所謂牢獄と言われるもの。

パツと見ても物こそ殆どないが、清潔感はなく酷く薄汚れている。

そんな清掃すら行われていない部屋に一人の男が座り込んでいた。髪は毛は伸び、口元の髭は伸び放題。

着ている服もみすぼらしくボロボロになった囚人服。

一見ただの浮浪者だと言われても不思議はない。

しかし一点だけ男は普通の浮浪者とは違っていた。

目だ。

飢えた狼のようにギラギラした鋭い目付き。

部屋に入った者は全員噛み殺すとばかりのその目付きと殺意はこの場所に収監された当初から変わっていないかった。

所構わずふりまく殺気に、管理を任されている者でさえ気圧されてしまい近づく者は居ない。

しかし当の本人にはそんな気はなく、ただただ今自分に襲い掛かっている『退屈』という名の敵との格闘に終始していた。

「……暇すぎない？」

なんせ此処には娯楽がない。

まあ牢獄故に当然と言えば当然なのだが、やることが何も無いというのは本当に辛い。

退屈で死にそうなんて事を言っていた奴が昔にいたが気持ちが良い分かる。体でも動かせれば別なのかもしれないが牢獄もそこまで広くはない。

できる事といえば精々筋トレくらいのものであった。

「筋トレとか飽きたし……というかもうやったし」

ここに入れられて以降は大体筋トレが時間を潰す為の手段の一つとなっていたが、そればかり続けていても飽きるのである。

こんな事ならば研究者共のいけ好かない実験にでも付き合っていた方がまだ楽しいというもの。

「ああ、今度はイライラしてきた、くそー！」

怒りのボルテージが急激に上昇し、自分でも抑えられない衝動へ変わっていく。

「くそ、くそ、くそ!!」

入口の扉を思い切り蹴りつける。

もちろんそんな事で鋼鉄で出来た扉を破壊できる訳も無く、しかしそれでも怒りの衝動は彼に蹴りを放つのを止めさせない。

「あああ!! くそ!!」

抑えきれない苛立ちに支配され、さらに蹴りを繰り返すしそうとしたその時、普段は決して聞こえない音が聞こえてきた。

コツコツと響く音。

それは廊下を歩く誰かの足音に相違なく、男の衝動を掻き消してしまう程の異常事態だった。

何せ此処には基本的に誰も来ない。

男の事を恐れているからだ。

故に人が来るなど精々食事を運んでくるくらいであり、もちろん今はその時間ではない。

それ以外の来客などどこしばらく無かった事だ。

「……一体誰だ？ いや、この退屈を紛らわしてくれるなら誰でもいいか」

男は久しぶりに感じる高揚感に身を浸しながら、足音に聞き入っていく。

まずはどうするか？

大人しく話を聞くだけでもいいのだが、それでは面白くない。

思い切り喧嘩を売って殴り合うか。

不意打ちを食らわせてボコボコにするか。

女であれば存分にその体を堪能してもよい。

予想外に訪れた娯楽に男は口元をつり上げていく。

そんな事を考えている間にも足音は男の居る牢獄の前にたどり着いていた。

「……まずはどんな奴か顔を押んでからだな」

牢獄の扉が開く。

同時に男の顔が驚愕に染まった。

「お前は……」

解放されていく扉の前に立っていたのは——

「久しぶりと言えばいいのかな？」

聞こえにくい、くぐもつた声で男に語り掛けてきたのは黒いコートに身を包んだ人物。

男が本能に任せて手を出さなかったのはその人物を見知っていたからに他ならない。

「ハ、確かにその面を見るのは久しぶりだ。けどよ、『中身』も俺の知っている奴とは限らないだろうが」

見知っているのは事実。

しかし目の前に立っていた人物は不気味な仮面を身につけ素顔は見えない。

その素顔まで知っているとは限らないのだから警戒するのは当たり前だ。

仮面の人物もそれを見越していたのか、特に反論する事無く頷いた。

「確かに。しかし君にとってそれはどうでも良い事なのではないか？」

「何？」

「私が誰であろうとも君にとって有益であるのなら、問題にはなるまい」
男の心理を正確に突いた言葉に自然と笑みが零れる。

「なるほど。で、何の用なんだ？」

仮面の人物は口元に薄く笑みを浮かべると、要件を口にする。

それは酷く退屈で刺激の無い生活を送っていた男にとって、歓喜すべきもの。

ようやく得られた最高の娯楽を前に獣は喜んで仮面の人物の招きに応じた。

無論、それがただの勧誘などでない事は分かっている。

例えそれが悪魔の誘いだったとしても、男は何一つ後悔はしない。

ここから逃れられるならば、悪魔にだって魂を売るだろう。

何故ならこの場所こそが——『退屈』という最悪の地獄だったのだから。



C. E. 79

世界にとって大きな変化が生じる分岐の時だったと言っても過言ではない。

幾重にも行われた大戦の傷跡は薄れ、荒廃した街の復興の道筋もようやく立ってきて

いる。

そして時が満ちたとばかりに各勢力は新たな道を模索し始めていた。

地球圏統合政府、調和条約同盟、テタルトス月面連邦国。

世界に席卷するこれらの勢力は未知のフロンティアである外宇宙進出に目を向け、着々とその準備を推し進めている。

元々荒廃した地球から離れ、安住の地を宇宙に定めていた故に、どの勢力にも後れを取らぬとばかりに競つてである。

かつてのように表立つた敵対行動はないものの、一応は表立つた武力衝突は鳴りを潜めていた。

だが全てが順調に進んでいた訳ではない。

その一つが『アムステルダム商工連合』の誕生だった。

条約により非戦闘区域に指定されたアムステルダムに存在する企業群が中心となり誕生した組織である。

結成目的は円滑な経済運営を行う為、連携強化を図る為のもの。

最初はそれこそ極小規模な組織であったのだが、徐々に巨大になり今や世界経済にとつても無視できない存在になりつつあった。

さらに自警団と称し『防衛隊』と呼ばれる武装組織まで存在しているという噂すらある程である。

もちろん各勢力も何もしていなかった訳ではない。

かつての『ロゴス』にならぬようこれらの存在を危惧し、勢力拡大を食い止めようと動きはした。

しかし大戦で疲弊した世界にとって特別な経済区域でもあるアムステルダムダムの存在は欠かせず、またそれを知る彼らも自分達の存在を売り込むように各勢力圏へと根を伸ばしていった。

結果として彼らは国際的な国家という訳ではないものの、各勢力圏に多大な影響力を持つに至ったのである。

さらに外宇宙進出に反対するように地球圏ではテロが頻発するようになる。

曰く外宇宙進出の前に地球の復興が先だ。

曰く人類が外宇宙に出るのは早すぎる。

曰く外宇宙を人類の足跡で汚すべからず。

言いつ分は様々あれど要するに今のやり方は気に入らないという事らしい。

戦いの火は未だ消えず。

世界は新たな戦いの時代を迎えていた。



暗闇の中でも映える特徴的ともいえる白亜の艦。

『ヤキン・ドゥーエ戦役』からずっと戦場に伝わる伝説——不沈艦と称された戦艦
アークエンジェル。

それらを彷彿させる一隻の戦艦が宇宙を駆けていた。
名を『ウリエル』

『第一次統合戦争』にてファントムペインの戦艦『サリエル』との戦いによつて撃沈さ
れたガーティ・ルーの代わりに同盟軍が投入した新型戦艦である。

アークエンジェル級の特徴を受け継ぎながらも、次世代の戦艦として構想された新造
戦艦であり、その性能はアークエンジェルやミネルバすらも上回る。

現在は独立部隊『グラオ・イリス』の第三部隊の主力艦として試験運用されており、
今日も任務を兼ねたデータ収集が行われていた。

その艦長席に座っているのは今は無き名艦オーディンの副長を務めた事もあるヨハ
ン・レフティ大佐だった。

「各セクション、状況を報告せよ」

「各部署、火器管制、エンジン、すべて正常、異常の報告はありません」

「データ収集は？」

「継続中」

「そうか。これが最終報告のデータ収集になりますので、最後まで気を引き締めるように伝達を」

「了解」

オペレーターの報告を纏めつつ、ヨハンは内心安堵のため息をついた。

「……これでデータが揃えば任務完了ですね」

思えばここまででも気苦労が絶えなかった。

本来であればこの『ウリエル』は独立部隊グラオ・イリスの旗艦としても運用予定がなされていた。

しかし例のごとく反グラオ・イリスともいえる者たちにより、それが遅延。

さらには第一次統合戦争にて戦果をあげた『フォルセティ』こそ旗艦に相応しいなどと言い出す始末。

そもそもそのフォルセティとて彼らの妨害により、就航が大幅に遅れたというのに。

そんな上のゴタゴタに人事の方まで影響が出た。

ヨハンはまさにその直撃を受けてしまったのである。

予定されていた別艦の艦長は延期させられ、他の部署をたらい回しにされた挙句、試験運用艦の艦長代行をせよときたものだ。

「本来であればオーデン大将閣下が艦長を務める筈だったというのに」
だが、それも此処まで。

データが揃い本格的な運用が開始されれば、正式な艦長が任命されるだろう。

予定ではかつての上官であるアルミラ少将がその役割に就くという。

そうなればヨハンの肩の荷も下りるといふものだ。

そんな訪れるかどうかも分からない未来予想図に思いを馳せていると、背後にあるブリッジの扉が開いた。

入ってきたのは仮面を被り、素顔を隠した人物ネオ・ロアノーク大佐だった。

「艦長、艦の進捗状況はどうか？」

「今の所、問題なしかな」

最初こそ仮面姿に面食らったものの、ネオ自身が見た目ほど取っ付きにくい人物でなかった事なども手伝って、すぐに違和感なく接するようになった。

さらに改革派を率いていたその手腕も本物で、気苦労が絶えないヨハンとしても大助かりだった。

「これでようやく僕の役割も終わりかな」

「このままレフティ大佐が艦長を務められるとばかり思っていましたか」

「勘弁して欲しい。これ以上、上の連中の相手をしていたら胃に穴が空いてしまうよ」
冗談めかして言っただけだが、ヨハンとしては本気も本気だ。

正直、除隊を考えたくらいには、ここしばらくの心労は堪えるものだった。

現在の同盟上層部は昔とは違い、一枚岩という訳ではない。

それは調和条約同盟が設立された際の弊害とでもいうべきものだ。

当時は統合軍の誕生により、かつての中立同盟やプラントは明らかに追い詰められた状態だった。

それを脱する為、やや強引に条約を結んだ弊害がここに来て影響をもたらしていた。

「こちらとしては貴方のような優秀な人が艦長の方が助かるんですがね」

「正式な艦長として優秀だとも。あのアルミラ艦長らしいからね」

「それはあくまで噂では？ 同盟軍の部隊指揮を行っているアルミラ少将を上層部がグラオ・イーリスに移動させるとは思えませんが」

「嫌な事言わないでくれよ」

「失礼。では任務の方は？」

ネオは苦笑しながら、本題を切り出した。

「今回は最近目撃されている不審船の調査です。所属、目的、すべて不明。捕捉したテタルトスの部隊も途中で見失ったらしい」

「この辺を根城にした海賊か、何処かの勢力の密輸船。それとも噂に聞く商工連合の防衛隊の船か」

「その詳細を調べに行くのさ。まあ『防衛隊』とは思いたくないね。彼らの存在はあくまでも噂だし」

「公然の秘密という奴でしょう。商工連合が密かに武装組織を所有している事は誰もが知っている事だ」

「それが公になるとまた面倒な事になってしまうのさ。特に彼らはこちらの懐事情にも詳しいからね。周辺の宙域図を出してくれ」

モニターに映された宙域図。

とはいえこの辺には何も特徴的な物は存在しなかった。

数年前に建設された非戦闘区域所属のコロニー群からも離れた位置にあり、同時に各勢力圏内にある軍事施設やコロニーからもある程度距離がある。

そういう意味ではここは死角であり、確かに海賊が活動するにはうつつつけともいえる。

しかし身を隠すという意味ではここはさほど向いているとはいえなかった。

岩場や宇宙ゴミは少なく、隠れる場所がないのだ。

「そう考えると海賊の線は薄いかな」

「ええ。しかし以前に不審船を発見したテタルトスの正規軍が見失ったというのが気にかかる」

海賊やテロリストは大体が一代から二世代前の装備を使用する事が多い。

単純に調達が難しいというのが、その理由である。

特に昨今では条約によって規制された為、表立ってジャンク屋などからのモビルスーツや戦艦といった兵器調達が難しいのが現状なのだ。

そんな連中が最新鋭の兵器を有したテタルトスの部隊から無事に逃げおおせるというのは、些か腑に落ちないというのがネオの見解であった。

「確かに。ただテタルトス側も本気で追撃しようとした訳ではないみたいだからね。発見した部隊も補給に急いでいたという話だし」

「どちらにせよ、ある程度の警戒は必要という事でしょう?」
「それは勿論」

今の所、怪しい艦船の陰は見えない。

それともウリエルの姿に不審船も警戒しているのか。

「ふむ、一度ウリエルの機関を停止させて様子を見るか。ダミー射出、船体を覆い隠

せ。ただし目立ちすぎないように数は絞るように。それからモビルスーツ隊に出撃準備を」

「私も格納庫で待機する」

「いや、大佐は此処で補佐を頼む。モビルスーツ隊はカル・バヤン大尉に任せておけば良い」

「了解した」

隕石を偽装する為のダミーがウリエル全体を覆い隠すように数個放出される。

これでエンジンを停止させれば遠目にも発見しづらくなる。

後は今までの目撃情報から推測される出現ポイントに張り込めばよい。

「さてこれで上手く釣れるか」

「釣りの基本は焦らず待つ事だよ、大佐」

ウリエルは静かに獲物が姿を見せるのを待つ。

そしてブリッジクルーが焦れ始めるくらいには時間が経った頃、ようやく獲物が姿を見せた。

「レーダーに反応。例の不信船のようです！」

「よし、目標がこちらの射程に入り次第、エンジン始動！ 停船勧告を出せ！」

不審船はウリエルの存在に気が付いていなかったのか、突如姿を見せた白亜の戦艦に

驚いたように方向を変えた。

「こちらの勧告は無視か」

「予想していた事だが……足を止める。砲撃開始、ただし当てるな」
ウリエルからの砲撃が不審艦の足を止めるように発射される。

それを振り切るべく速度を上げる、不審艦。

しかしそのまま逃がすはずもない。

ウリエルは最新型の戦艦であると同時に高速艦でもある。

並みの艦に速度で負けることは無い。

現に速度を上げた筈の不審艦とウリエルの距離はみるみる内に縮まっていく。

このままでは捕縛されるのも時間の問題であると悟ったのだろう。

不審艦は側面に設置されたハッチを解放。

数機のモビルスーツが飛び出してきた。

それはかつて地球連合が主力としていた機体ウインダムである。

「モビルスーツか」

「旧型のウインダムとはいえこれだけの数を」

「モビルスーツ隊に出撃命令！」

「了解！」

こうなる事は事前に想定済み。

故に何ら遅れもなくウリエルも予定通りに動き出す。

前面部分に設置されたハッチが解放され、モビルスーツ隊が出撃する。

『スオウ』などの既存の機体と共に先頭に立つのは現在同盟の主戦力の一翼を担う機体だった。

MBF-M5α 『アドヴァンスアストレイ・アデプト』

テタルトスの『ジンIII』、統合軍の『パウ』と言った破格の最新鋭量産機の登場に危機感を強めた同盟が開発した『アドヴァンスアストレイ』の正式後継機。

設計を一から見直し、プラント、連合改革派の技術協力も得た事で高かった機動性にさらに磨きがかかっており、アドヴァンスアーマーも標準装備となっている。

標準とは違い黒く塗装された機体を操るのはモビルスーツ隊の指揮を任されているスウエン・カル・バヤン大尉だった。

「全機、敵を迎撃しろ。船の足を止める事も忘れるな」

「了解」

スウエンは背中に装備された宇宙戦用高機動装備『ジラント』のスラスターを吹かし、向かってくる敵との距離を一気に詰める。

無論敵も応戦してくる訳だが、正直に言えば脅威足り得ない。

その証明に撃ちかけられたビームライフルの一撃はすべてスウェン機を掠める事無く、後方へと消えていった。

そのまま射程圏内まで飛び込むと腰に装備したビームライフルショーティーを抜き、一撃の元に撃墜した。

「ウインダムではもはや相手にならない」

背後から斬りかかれたビームサーベルを素早く躲し、逆にサーベルで斬り返す。

ウインダム自体は決して悪い機体ではない。

登場当時は地球連合の主力機であった実績は確かなものであり、安定しており癖も少なく扱いやすい。

しかしそれはもはや昔の話だ。

現在配備されている各勢力の主力機とでは性能があまりにも違いすぎる。

現に不審船から出撃した敵モビルスーツをウリエルの部隊が危うげなく撃退していた。

このまま駆逐するのも時間の問題だろう。

スウェンは残り機体の対処を味方に任せ、船の足を止めようとビームライフルショーティーを構えた。

だがそこに予想外の邪魔が入った。

船外に飛び出してきた新たな機体がスウエンの射撃を阻むように立ちふさがったのである。

「何だ、あの機体は……」

見たこともない機体。

モノアイの頭部に形状からしても明らかに既存の機体とは一線を画するものだと分かる。

「新型？ 一体どこの機体——ッ!？」

発射された強力な砲撃が機体を僅かに掠め、繰り出された斬撃がスウエンの眼前に迫る。

それをギリギリのタイミングで捌く事に成功したスウエンは一旦距離を取った。

しかし正体不明機は予想外のスピードですぐさま距離を詰めてくる。

「こちらの動きについてくるか」

スウエンの乗るアドヴァンスアストレイ・アデプトは紛れもない新型機だ。

それにこうも追隨してくるとは。

敵はビームライフルシューターによる牽制も物ともせず、腕から発生させたビームカッターで斬りかかってくる。

「出来れば鹵獲したい所だが」

それをさせてくれるほど甘くはない。

そこでさらにもう一機、新型機が不審船から飛び出してくるのが見えた。スウエンを隊長機と認識しているのか二機同時に襲い掛かってくる。

「まだいたのか」

追い詰められた訳ではないが、厄介な事には変わりはない。

しかしスウエンは余裕を崩す事はない。

「もう一機は頼む、ミナト中尉」

「了解！」

乱入してきたのはスウエンの機体とは正反対に白く塗装されたアドヴァンスアストレイ・アダプト。

搭乗していたのはユニウス戦役から名を馳せたエースパイロットであるアオイ・ミナト中尉だった。

小気味よく操縦桿を操りながら敵の攻撃を回避すると、腰から抜いたビームサーベルを構える。

「投降しろ！ でないと撃墜する！」

通信機越しに叫ぶアオイの声に敵からの反応はない。

「なうー！」

斬撃をシールドで捌きつつ、蹴りを入れて突き放すと背中 of 装備『ジラント』に装着された予備のビームライフルを切り離れた。

それを狙撃して敵機の眼前で爆破。

動きを止めた一瞬の隙。

そこを見逃さず懐に飛び込むと、敵機の腹にビームサーベルを突き刺した。

さらにスウェンもまたビームライフルショーテーターで両手、両足を吹き飛ばし戦闘不能に追い込んでいた。

「流石、大尉！ このまま爆破させずに！」

「中尉、離れろ！」

「ッ!？」

スウェンの声に咄嗟に飛びのくと、別方向から発射された無数のビーム攻撃が周辺に降り注いだ。

「ぐっ」

シールドを掲げながらスラスタ全開で距離を取る。

しかし動けなかった敵機は撃破されてしまう。

「味方ごと……まだパイロットは生きていたんだぞ！」

「あれは」

砲撃が行われた場所。

そこにはまた別の機体が佇んでいた。

機体の形状は先ほどの新型機と類似点があるが、背中の装備が明らかに違う。

あれも新型機という事か。

「不味い。あの艦も落とすつもりだ」

「させない！」

砲撃が開始される直前にアオイはシールドを掲げ射線上に割り込み、撃たせないというイフルを構えた。

しかしそんなアオイを嘲笑うように、敵からの攻撃が開始される。

「なっ!？」

背中から発射された無数の砲撃は途中で折れ曲がり、アオイの背後に居た不審船へと直撃する。

「まさか!？」

「ゲシュマイデイヒパンツァー!？」

砲撃が突き刺さり、火を噴いた不審船は成す術なく爆発した。

「ぐッ!？」

爆発の衝撃から逃れるアオイとスウエン。

その僅かな間に砲撃を行った敵機は反転し、姿を消していた。

「くそ！」

「これはまた。厄介な事になりそうだな」

「そうですね」

木っ端微塵に破壊された見たこともない機体の残骸を見つめながら、漂う新たな戦乱の気配にアオイは拳を強く握りしめた。

これが『第二次統合戦争』と呼ばれる戦いの幕開けになるとは知る由もないまま。

第2話

影は動き出す

戦闘を終えウリエルに帰還した黒と白のアドヴァンスアストレイ・アデプト。

ハンガーに設置され、固定された二機に整備班が取りつくときとコックピットハッチが開いた。

「フウ」

「お疲れ、アオイ」

「ありがとう」

整備兵から差し出された飲み物を受け取ったアオイは躊躇わずに口に含む。

旨い。

戦闘自体はそれほど大規模ではなかったものの、やっぱり掻いた汗や緊張で水分は失われる。

故に一度の戦闘でも喉がカラカラになる。

「それでどうだったAAA（スリーエー）は？」

AAA（スリーエー）とはアドヴァンスアストレイ・アデプトの略称だ。

アドヴァンスアストレイのAA（ダブルエー）と呼ばれている事の名残らしい。

人によっては単純にアデプトと呼ぶらしいがAAAが基本的な呼ばれ方のようだ。

「良い機体だよ。反応も良いし、力もある。けどそれでもやっぱり俺はイレイズの方が好きだけだよ」

「しようがないだろ。Mk-IIはもう限界だったんだからさ」

アオイの長年の愛機イレイズガンダムMk-IIはとうとう引退という事になった。

ミュンヘン事変で大破して以降も改修と修復を繰り返し、最近まで奮戦を続けていたのだが突如として動けなくなった。

限界が訪れたのである。

原因はずっと蓄積されていたダメージが表面化したのだろうとの事。

整備班長曰く「これで今まで良く戦ってこれたもんだよ」と呆れながらもどこか誇らしげだったが、とにかくイレイズはもう戦えない。

そこでこの機会に最新型の機体へ乗り換えを諷した。

性能は満足だし不満はない。

しかしどこかしっくりこないのだから贅沢な話である。

「とにかく異常があつたら報告しろよ。カル・バヤン大尉とお前の機体は専用にカス

タマイズされてんだからさ」

「分かってるよ」

ボトルのストローからドリンクを口に含みカラカラだった喉を潤す。

この瞬間は何度味わつても、ホツとする。

整備の邪魔にならないように雑談を切り上げてコックピットから降りると、丁度、飲み物を受け取ったスウエンと鉢合わせになった。

「お疲れさまです、大尉」

「そちらもな」

「にしても手強かったですね、あの新型」

「ああ」

パワー、スピード、火力。

どれも最新型の機体と比べて遜色ない。

単なるカスタムではあそこまでの性能は引き出せないだろう。

「どこの機体ですかね？」

「分らない。だが相応の技術力が無ければ新型機の開発などできない。……とにかく艦長に報告する」

「了解です。レフティ艦長の心労がまた増えるかもしれませんけどね」

「そうだな」

戦闘中に集めたデータを持ってブリッジに上がると、二人の予想通り頭を抱えたヨハンが出迎えてくれた。

「二人共、お疲れ様。早速で申し訳ないけど報告の方を頼むよ」

「了解です」

データの入ったディスクを渡し、モニターに映し出されたのは撃破された不審船と二種類の新型機だ。

不審船の方はどこにでもいる普通の輸送船だが、やはり新型機はどここの陣営にも該当する機体は存在しない。

「どこでこんな機体を」

「ジャンク屋や普通のテロリストに出来る事とは思えない。……あの不審船はこういった輸送を担当していたって事かな」

「どこに運ばれる予定だったんですかね」

「それも不明だね。船の残骸も調査させているけど、有益な情報は望み薄だろう。後は予測を立てるくらいしかない」

ヨハンが手元のキーを操作し、宙域図に今までの目撃情報を提示する。

輸送船の航路上などが主ではあるが、一部軍の防衛圏内でも目撃されているようだ。

「反対側に位置する月周辺や地球近辺には目撃されたという話はない。となると——」

点と点を繋ぐように不審船が向かおうとしていたポイントを絞り込む。

「近辺にあるものといえば商工連合所属のコロニー群。後は建設中の資源衛星くらいなものだけだ」

「となればやはり例の『防衛隊』ですか？」

「そうとはしたくないんだけどね」

アムステルダム商工連合は世界に多大な影響力を持つている。

正直な話、今の世界情勢で揉めたいと思う者はそうはいない。

しかしどれだけ影響力を持つとも商工連合はあくまでも民間組織だ。

テロを警戒し民間での兵器所有が禁じられつつある現状、商工連合が過剰な武力を持つようとしているなら見過ごせない。

「性能はどうだった？」

「こちらの最新鋭機にも劣らないものだったかと」

「放置は出来ないか。とはいえ我々の独断で動く訳にはいかない。ウリエルの進路を『ヴァインゴルヴ』に向けてくれ」

「了解」

ウリエルが向かったのは『ヴェインゴルヴ』

同盟が戦場で傷ついた戦艦の修復、補給を行う為に開発された巨大ドック艦の事である。

ザフトのゴンドアナ級を参考に開発されており、彼の戦艦よりも小型化され収容艦も五隻の戦艦までと縮小されているがその分機動力は向上している。

しかしゴンドアナ同様に中継基地、補給基地としての意味合いが強く、その為に戦闘能力は低いのが特徴となっている。

「しかし今回の件、上は良い顔しないんだろうな」

揉め事の種を歓迎する者など居る筈はない。

しかし対処しなくては取り返しつかない事態へと発展しかねないのも事実なのだ。だからこそヨハンは憂鬱な気分にならざる得ない。

何故ならば厄介ごとなど他者に押し付けてしまおうと考えるのが世の常なのだから。それが嫌われ者なら尚の事。

予想が外れれば良いと願いながらも、無理だろうなと理解しているヨハンは深々とため息をつくくらいしかできなかつた。

◇

ざわめく格納庫。

予定外の出来事に大慌てで行きかう兵士達を一人の屈強な男が見つめていた。

統合宇宙軍特殊作戦部隊ウオーレン・マクベイン大尉。

月と地球の中間点に存在する統合軍拠点の副司令官である。

「こちらでしたか、大尉！」

「これは何の騒ぎだ？」

「それが偵察隊がテタルトスの巡回部隊と遭遇戦に突入したらしく」

「司令官殿には報告したのか？」

「もちろんです。しかし、その」

歯切れ悪く言葉に詰まる若い兵士の様子にどうという指示が出されたのかウオーレンはすぐに察する。

「またこちらに丸投げか」

「はい」

この拠点の司令官は元々が地球連合に所属していた人物であり、テタルトス出身のウオーレンとは折り合いが悪い。

まあ無能ではないというのが救いではあるものの、根本的な部分で相性が良くなかつ

た。

ウオーレンは元々今は亡きファウスト・ヴェルンシュタインの理想に共感し、統合軍に参加した。

現状を鑑み、統合による世界統一こそ人類の革新に必要な事だと思つたからだ。しかし司令官はそういった理想的なものは一切持ち合わせていなかった。

所謂野心家という奴だ。

さらに悪い事に上昇志向は強く手柄には固執しながらも、こういった不測の事態についてはこちらに丸投げしてくるのだから始末に負えない。

「……イスラフィール代表も何を考えているのか」

このような俗物を未だに登用しているとは。

ファウストが健在だったならありえない事だ。

しかし彼とて万能ではあるまい。

外宇宙進出に目を向けて、足元がおろそかになっているのかもしれない。

「大尉、テタルトス側はジンⅢが数機確認されています」

「急がなければ不味いな」

ジンⅢは『第一次統合戦争』最終決戦であるアポロン攻防戦に投入されたテタルトス軍の機体である。

その性能は通常の量産機という枠を超えており、すでに登場してから二年が経つ現在においても『最強の量産機』という名を欲しいままにしている。

さらに厄介なのは現状も改修が続いておりジンⅢの性能は向上しているという事だ。無論、他陣営もまた最新鋭機開発を進めているものの、ジンⅢを上回る量産機は登場していないのが現状である。

「俺はバウで出る！ 他の部隊の出撃も急がせろ！」

「了解！」

パイロットスーツを着ている暇はない。

ウォーレンは軍服のまま長年の愛機であるバウに乗り込むと慣れた手つきでコントロールを操作する。

しかしその思考はこれから始まる戦闘の事ではなく、全く別の事を考えていた。

「……このままではいつまでも先には進まん。ファウスト司令、俺は——」

最近ずっと悩んでいた事がようやく形となって明確になってくる。

自身の理想は未だ変わらず。

そして世界も同様に。

ならば——

《大尉、出撃準備が整いました》

「……分かった。ハッチ、開け！ ウォーレン・マクベイン出るぞー！」

解放されたハッチから飛び出した藍色のバウが戦場に向けて駆け抜ける。

バウ・アルゴルもまた『第一次統合戦争』において投入された機体の一つである。

その性能はジンⅢにこそ劣るものの、紛れもない高性能機。

操作性も火力も申し分ない。

故にウォーレンは新型の試作機がすでに実戦投入されている現在においてもバウを愛機とし続けていた。

何よりも尊敬するファウスト・ヴェルンシュタインもまたバウを最後の機体としていた事も理由となっている。

まあウォーレンの機体は何度も改修を繰り返し、ファウストの使用していたバウ・バジリスクの予備パーツを使用している。

だから性能だけでなく外見も本来のバウとは似ても似つかない別の機体になっているのだが。

強化されたスラスターを噴射させ、一早く現場に駆け付けたウォーレンは敵に対して一喝する。

「ジンⅢが優れた機体である事は認めよう。しかし、その性能に胡坐をかいている者になどー！」

味方機に攻撃を仕掛けてしるジンⅢとの間合いをその推力を持って一気に詰めると
ビームサーベルを抜き放つ。

「遅れはとらん!!」

すれ違い様の一撃はジンⅢの腕を捉え、大きく体勢を崩しそこにビーム砲を叩き込む。
む。

防御する間もないまま爆散するジンⅢ。

味方の撃墜が予想外だったのか、テタルトスの部隊は明らかに動揺し動きを鈍らせる。
る。

その隙を見逃さず、ウォーレンは畳みかけるように攻勢に出た。

「統合軍の兵士としての矜持を見せろ! 亡きファウスト・ヴェルンシュタイン司令
の顔に泥を塗るな!!」

「おおお!!」

ウォーレンの檄に刺激された兵士達の士気は上がり、戦況は一気に統合軍側へと傾いていく。

それを見たテタルトス側は不利と悟ったのかあつさりと後退していった。

彼らにしてもこれは遭遇戦に過ぎず、無理する必要はないと判断したのだろう。

「引き際は見事。被害状況はどうか?」

「何機か中破している機体はありますが、パイロットたちは無事です」

「損害は軽微か。『銀獅子』が居なかった事が幸いしたか」

「これまで辛酸を舐めさせられた因縁の相手を思い起こす。

もしも此処にテタルトスのエースである『銀獅子』が来ていたなら被害はこんなものでは済まなかっただろう。

「よし、全機速やかに帰還せよ。警戒も怠るな」

「了解」

戦闘を終えたモビルスーツ隊は基地へと帰還を急ぐ。

殿を務める形で撤退する味方を見つめていたウォーレンは再び考え込むように視線を虚空に向ける。

あるのは幾ばくかの迷い。

しかしそれもすぐに振り切るように決意を固める。

「……このままという訳にはいかん」

ウォーレンは迷いを絶つように息を吐き出すと、フットペダルを思い切り踏み込んだ。
だ。

その表情にもはや迷いはなく、覚悟を決めた瞳が真っすぐ進むべき道を見つけていた。



ウリエルの試験データを集め、敵との遭遇もなく無事にヴィンゴルヴに到着したヨハンは上官への報告を行う為、艦長室へと足を運んでいた。

「ウリエルの運用試験ご苦労だった、ヨハン・レフティ大佐」

何の感情も込められず賛辞を送られても、微妙な気分にしかならないのだが上官からの言葉に反応しない訳にもいかない。

「恐縮です。試験項目はすべてクリア、気になった点もすべて報告書にまとめて提出してありますのでご確認ください」

「うむ」

さっさと切り上げたいとばかりにヴィンゴルヴの艦長は事務的に返答してくる。

まあ嫌味を言われるよりはずっと楽ではある。

この艦長も『グラオ・イリス』の事を良く思っていないのだろうが、表に出さなただけはまだマシな部類だ。

これを表に出してくるような連中になるとこちらのストレスも相当なものになる。

だからこのまま報告だけ済ませて終えたい所なのだが、この件は言わなくてはならな

い。

「艦長、こちらに来る前に報告していた件ですが」

「……例の所属不明の新型モビルスーツの事か」

「はい。早急に調査の必要があると思います。その為にも調査部隊の編制を——」

「その必要はない。この件は独立部隊『グラオ・イーリス』第三部隊所属ウリエルに
任する事になった」

「は？」

寝耳に水とはこの事だ。

そんな話が一体何時決まったというのか。

そもそもウリエルは試験運用が終わったばかりだというに。

正式な配属先すら未定な筈。

「お待ちください。所属不明モビルスーツの調査をウリエルだけで行えとい
うのですか？」

「そうだ。調査だけならそう数は必要あるまい。同盟軍主力は来月に行われ
る資源衛星『メークリウス』での式典に備えなくてはならない」

「しかし！ ……ウリエルの正式な配属も艦長もまだ決定しておりません」

「それもすでに決定しているさ。ウリエルは継続してグラオ・イーリスで運用される。

そしてヨハン・レフティ大佐、君が今日付けで正式な艦長に任命された。これが辞令だ」差し出された辞令には確かにウリエルの所属とヨハンの正式な艦長任命が記載されていた。

半ば予想だけはしていたが、こうして目の前に突き付けられるとため息の一つもつきたくなる。

突き返す事など出来ようはずもなく、ヨハンは「受領いたします」と敬礼することしか出来なかった。



ヴァインゴルヴはドック艦であり、同時に移動型の中継基地としての役割も担っている。

当然の事ながら内部は通常の戦艦よりもかなり広く、娯楽設備もかなり充実していた。

ウリエル所属のクルー達も一時的な休暇を与えられ、それぞれが体を休めている。

そんな中、アオイは一人ヴァインゴルヴに設けられた工房に足を運んでいた。

活気のある工房に圧倒されつつ、中へ進んでいくとそこらに開発中のモビルスーツや

武装が鎮座してゐる。

「相変わらず此処が戦艦の中とは思えないな」

『ヴァルハラ』などに作られた工房に比べれば小規模ではあるものの、その辺の基地にあるものとは設備の充実度が違う。

連合に所属していた頃でも此処までの設備は中々見たことが無かった。

それだけ同盟はこの戦艦を重要な拠点として捉えているのだろう。

「お、アオイの坊主じゃねーか！」

恰幅の良い髭を生やした中年男性が近づいてきた。

「おやつさん、坊主は勘弁してよ。もうそんな年じゃないし」

「俺にとつちやお前さんは何時まで経っても坊主だよ！ 悔しかったら早く嫁でも見つけろー！」

「敵わないなあ、おやつさんにはさ」

彼は皆から『おやつさん』との愛称で呼ばれる連合時代からアオイ達ファントムペインの機体を整備し続けてくれた昔馴染だ。

豪快な点もあるが職人気質でもあり戦闘で無茶する度に怒鳴り散らされていた。

アオイにとってはもう一人の父親のような人物である。

「おやつさん、『あの機体』を見に来ただけど……」

「あれか。まだフレーム剥き出しの状態だぞ」

「良いよ、どの程度進んでいるのか気になっただけだし」

「ハハ、自分が乗る機体はやっぱり気になるってか。こっちだ」

先導された先。

工房のさらに奥に進んでいくと開発中らしき一機のモバイルスーツがハンガーに設置されていた。

装甲の一部が取り付けられてはいるがフレームは剥き出し、背中には特徴的なスラスターユニットが搭載されている。

「どうやら順調みたいだね」

「おう、後は組み上げて機体やコックピットの調整を行うだけだ。ま、ここからが大変なんだがな」

「頼むよ、もしかしたらすぐにでも必要になるかもしれないし」

AAAは良い機体だ。

それは確かではあるが、量産機である事も事実。

仮にあの新型以上の性能を持つ機体が今後現れた場合、対処できるかと言われれば疑問だ。

「何かあったのか？」

「まあね。まだはつきりした訳じゃないけど……だからこいつを出来るだけ早く仕上げた。欲しい」

「分かった。こっちは任せておけ」

「ありがとう、おやつさん」

話を終えコックピットの様子などを確認したアオイはそのままウリエルに踵を返した。

やるべき事はまだまだある。

AAAの調整。

正体不明機のデータ検証。

それに合わせた訓練。

休んでいる暇はない。

工房を離れ足早に通路を歩いていると、見知った顔が正面から歩いてくる姿が見えた。

「あれ、アスカ大尉？」

「ミナト少尉。いえ失礼しました、今は中尉ですね」

アオイの前に立ち止まったのは『オーブの熾天使』と呼ばれる同盟のエースパイロットマユ・アスカ大尉だった。

その容姿は一目見ても美人であり、今も多くの男性から言い寄られているようだ。とはいえある理由もあつて本人にその気は全くないようであるが。

「お久しぶりです。しかしアスカ大尉、今は後方勤務だと聞いていたのですが」
マユは事情があつて現在は前線から身を引いていた。

理由は育児の為だ。

アオイも聞いた時は驚いたのだが、彼女はとある男性との間に子供を作っていたらしい。

その所為で現場に立つ事は出来ないと言前線から身を引き地球での後方勤務に異動と聞いた。

「今回は特別です。例の式典に向けて各勢力を訪問する要人の護衛としてきただけです。それももう終わりましたから艦の補給が終わり次第、地球に帰る予定です」

「そうだったんですか。そういえばお子さんはお元気ですか?」

「元氣過ぎて困っています。男の子ですからある程度は仕方ないのかもしれませんが。やんちゃの所とか『あの人』そっくりなんですよ」

あの人というのは子供の父親の事だろう。

父親の事はアオイももちろん知っていた。

アスト・サガミ。

同盟で知らない者はいないエースパイロット。

しかし彼は『第一次統合戦争』の最終決戦にて消息不明——つまりM I Aとなつて
いる。

「あの、アスカ大尉はまだ彼が生きていると思つていますか？」

「勿論です。あの人は生きています、絶対に」

大半の人間が彼は死亡したものであると思つているが、マユを含めた少数はそんな事
思つてもいないようだ。

気持ちはわかる。

アオイとて何度そういった別れを経験してきているからだ。

だが最近、妙な噂を聞くようになった。

アスト・サガミの姿をとある都市で見たというのだ。

ただそれはあくまでこれは噂話。

証拠も何もない。

死んだ人間が実は生きていたなんていう兵士達から始まった陳腐な噂話に過ぎない
と誰もが思っている。

しかし搭乗していたガンダムは未だに発見されず、さらに目撃された証言が複数があ
る事も事実。

彼の生存を信じる者たちからすれば、それは一縷の希望のようなものであり、わざわざそれを否定する趣味はアオイにはなかった。

「そうですね。彼がそう簡単に死ぬはずはない。俺も一緒に戦った事があるから分かります」

「ええ。そういうえばミナト中尉は任務ですか？」

「はい。……また厄介事が起きそうです」

アオイの言葉にマユの表情が変わった。

事情を話すべきか。

いや、此処でアオイが勝手に詳細を語る訳にはいかない。

「詳細は今レフティ艦長が報告を上げてますから。ジュール司令からまたお話があると思います」

「分かりました。教えてくれてありがとうございます、中尉。大した事が無ければ良いのですが」

「本当に。では失礼します」

お互いに敬礼しながらすれ違う。

『大したことが無ければ良い』

そんな二人の願いも空しく、世界に巣食う暗い影がもうすぐそこまで迫っていた。

第3話 悪意は密かに牙を研ぐ

非戦闘区域コロニー群。

通称『商工連合コロニー群』と呼ばれ、テタルトスが建国前にL4区域にあった老朽化や荒廃したコロニーを撤去し空白が出来た場所へ商工連合主導で建造されたコロニー群である。

建設目的は宇宙における強固な経済圏の確立。

地球の経済要所がアムステルダムだとしたら、宇宙の経済要所はこの商工連合コロニー群だ。

アムステルダム同様各勢力が駐屯しある種火薬庫のような状態であるが、現在は別の意味で危険な場所となっていた。

その理由の一つが『防衛隊』の存在だ。

民間組織である商工連合が力を持つ。

いや、それだけでなく世界中にネットワークを持つ彼らがその力を量産し、裏で流通

させ始めたら――

それがもしも公になれば彼らがどれだけの影響力を持っているにせよどの勢力も看過出来ない。

つまり新たな火種になりかねないという事だ。

そんな高まる緊張の中、ヴィンゴルヴでの補給を終えたウリエルは商工連合コロニー群にたどり着いていた。

正体不明の新型モビルスーツの出所を掴む為に。

◇

「艦長、接舷完了しました」

ヴィンゴルヴから発進したウリエルは特にトラブルに遭遇する事なくコロニーの港へ無事入港できた。

しかし本番は此処から。

ある意味で戦闘よりも疲れる会談が待っている。

裏で何を考えているか分からない、そんな連中との腹の探り合い。

かなり憂鬱だ。

「ハア、嘆いていても仕方ないね。大佐、一緒に来てくれ。護衛にはミナト中尉を。艦の防衛にはカル・バヤン大尉に任せる」

「了解した」

ネオを伴い、格納庫に降りるとあらかじめ用意させていた車に乗り込む。

運転席にはすでに命令を受けたアオイが待っていた。

「済まない、中尉。待たせてしまったね」

「いえ、では行きましょうか」

慣れた手つきでナビを起動させ、道順を確認したアオイはゆっくり車を発進させた。

「あ、そういうえば艦長就任おめでとうございます、レフティ艦長」

「ありがとう。正直、遠慮しなかったんだけどね。唯一の救いは君達がそのままクルーとして配属されている事くらいだよ」

よほど不本意だったのかヨハンはあからさまにため息をついた。

そういうえばここ最近でずいぶんやつれたようにも見える。

このままでは胃痛で倒れるか、勤め上げても将来頭の髪も薄くなってしまうのではと心配になってしまう。

「あはは、別の艦長が来るって噂はどうだったんです？」

「さあ。噂は所詮噂って事だよ」

ハツキリ言つて今回の件はかなりの厄介事だ。

誰だつて何かあるとわかっているものの責任など取りたくはない。

不審船の件を含めれば以前から報告が上がっていたし、おそらく上官たちは初めから『グラオ・イーリス』にこの件を押し付けるつもりだったのだろう。

そして白羽の矢が立ったのが運用試験を行つていたウリエル。

何かあつても未確認情報の調査に最新鋭の戦艦を調査に投入したという事でちゃんと対処したと言ひ訳も出来る。

さらに余計な人事異動も行ふ事無く、試験運用を行つていた艦長を含めたクルー達を続投させれば手間も省ける訳だ。

つまりヨハンは貧乏くじを引かされたという事。

これではため息の一つもつきたくなる。

「せめて援軍でも来てくれればね。ま、嘆いていても状況は変わらない。今は任務に集中するさ」

「それでこれから会うのはどういう人物で？」

「商工連合の役員の人だよ。昔は同盟の企業に所属していたそうだけど、今はアムステルダム为企业に移つたらしい。それでも元々同盟企業の人間だった事もあつて話

し易いだろうってさ。上の有難い配慮だよ」

「こちらの要件については？」

「多分、知ってるだろうけどね。まあどういふ反応をしてくるか見せてもらおう」
後は出たとこ勝負。

相手の様子を見ながら決める以外にないと結論付けるとアオイ達は面会の予定されている高層ビルへと車を走らせた。

◇

「うわ、高いビルだなあ」

モビルスーツを超える高さを持つ高層ビルを見上げてアオイは思わず声に出してしまった。

「フフ、中尉、口が開いている」

「あ、す、すいません、大佐」

確かに傍から見ていると口を大きく開けているその様はどこの田舎者かと思われても仕方ない。

「大佐、その、体調の方はいかがですか？」

「うん？ ああ、私は大丈夫。地球で改革派を率いていた頃よりはずいぶん楽だ。……それにあの頃と違って貴方が一緒に居てくれるからね」

垣間見た素顔にアオイは照れくささを誤魔化すように頭を掻くとネオは楽し気に笑みを浮かべていた。

例の件もあつて最近はずいぶん忙しくて碌に休暇も取れていない。

しかもネオは自分から誰かに頼るといふ事をしないという悪癖があつた。

故にアオイは常日頃からネオの体調を気にしていたのだが、杞憂だつたようだ。

「大佐、一段落したらまたお茶でも飲みましょう」

「楽しみにしておく」

「楽しそうで結構だね、君らは本当に仲が良い」

先にビルの中に入っていたヨハンが渋い表情で出てきた。

どうやらまた彼にストレスを与える出来事があつたらしい。

「相手方に急な要件が入つたらしい」

「まさかキャンセルですか？」

「いや、だが1時間くらい遅れ込むそうだ」

「嫌がらせですか……じゃあ、俺達は？」

「待つしかないだろう。この場を離れる訳にはいかない。それで勝手に帰つたとキャ

ンセルされても困る。向こうの急用が早く終わる可能性だつてあるからね」

ヨハンは希望的観測口にしなながら、ビルの中へ入っていく。

「俺達も行きますか」

「そうだな」

外で突つ立っている訳にも行かず二人もヨハンと共にロビーでたすら待つ事にした。

まあ休む時間ができたと考えれば、悪くはないのかもしれないが、いかんせん退屈だった。

すでに周囲の調査は行っているしヨハンとネオは今回の面会について再確認を行っている。

他にやることがない。

仕方ないので何気なく窓の外に視線を向ける。

「凄い風景だな」

並び立つビルの群れ。

これだけのものを作り出すとはやっぱり商工連合の力は侮れない。

それだけに考えるとあの正体不明のモビルスーツを作り上げたのが、彼らであると言われても何ら不思議はない。

益体の無い事を考えつつ周辺の様子を伺っていると、何とか予想外の光景が飛び

込んできた。

「は……仮面？」

そう、仮面だ。

ビルとは反対側の通りに仮面をつけた人物が立っているのが見えたのだ。

「ッ!？」

背筋に凍るような冷たいものが走る。

強烈な悪寒と同時に射貫かれるような視線を感じた。

まさかアオイの視線に気が付いたというのか？

ここまで離れているのに？

しかも仮面の人物から発せられていたものは冷たい殺意とドス黒い憎悪だ。

この距離でなお、あの人物から発せられる殺気のようなものが感じ取れるなんて。

「……なんだよ、アイツ」

仮面の人物はすぐに視線を逸らすと迎えに来た車に乗り込みそのまま去っていった。

だがアオイの悪寒は消え去らない。

直感がいつている。

アイツは危険だ。

「見たか？」

「大佐？」

いつの間にか隣に立っていたネオも警戒したように拳を握りしめている。何か気が付いたのだろうか。

「……多分、アレだ」

「え？」

「今の世界を覆う黒い影は」

「私の直感だが」と呟くとネオはそれきり口を開かず、窓の外を睨みつけている。

アオイもまた嫌な予感が消えず、車が走り去った方向から視線を外す事が外せなかった。

◇

コロニーの港へ向けて走る一台の車。

暗殺や襲撃に備えて特殊な細工を施された車の車内に一人の黒髪の人物が座っていた。隙のない佇まいに服装は軍服を思わせるデザインだが、どの陣営のものとも違う制服

を身に纏っている。

そして一番特徴的なのが目元を覆う仮面。

しかもその仮面を知っている人間にとつて忘れ難いもの。

それはかつてザフトに所属していた男の物と全く同じデザインだったからだ。

仮面をつけている為、表情は見えず何を考えているのか分からない。

しかし運転席に座っている女性は仮面の人物の感情を読み取れるのか、不機嫌なのが手に取るように分かった。

まあ長年の付き合いなのだから、当たり前と言えば当たり前なのだが。

「何故そう不機嫌なの、ルドラ？」

「不機嫌にもなる。あのような俗物どもが世界のトップに立っているとは、世も末だ。

それに——」

「それに？」

「お前も気が付いただろう、シルヴィア。いやお前だからこそ気が付いた筈。こちらを見ている奴がいた。それに正面のビルにはあの女もな」

それで仮面の人物——ルドラ・アシユラが不機嫌な理由を察した。

「なるほど。そういえばあの男から連絡が来たわ。『彼』がこちらに合流するそうよ。それからデータも送信されてきた」

「そうか。流石だな、諜報活動にも遅れなしとは」

手にした端末に送られてきたデータを満足そうに眺めながら素早く精査していく。

「ルドラ、あの男にあまり気を許し過ぎないで」

「当然だ。同じ轍は踏まんさ。利用しているだけだ。まあ奴も承知済みだろうがな」
ルドラは昔の記憶を懐かしむように仮面を弄る。

そう、今度はこちらが利用してやるだけ。

同じ手は通用しないと教えてやるとも。

「それよりも情報通りグラオ・イーリスが動いているようだな」

「ええ。新造戦艦の入港も確認済み。彼女があのだビルに居た事も輸送艦の件でしょうから。それでどうするの？」

「ふん、アレらが見つかるとも元々時間の問題だった。それも想定済みだ」

「では」

「予定通りだ。すべての準備は整いつつある。後は時が来れば——」

ルドラは口元に笑みを浮かべるとシートに身を任せて目を閉じる。

来るべき時を待つように。

そしてその時はもうすぐそこまで迫っていた。



ウリエルのブリッジは実に重苦しい空気に包まれていた。

オペレーターを含めたクルーたちは息を潜め、誰一人声を発しない。

その重い空気を発している中心にはたつた今面会から戻ってきたヨハン達の姿があった。

ヨハンも、ネオも、アオイでさえ厳しい表情を崩さない。

後ろに控えたスウエンは元々口数が多い方ではないし、この沈黙は外側にいる人間にはつらい。

もしかして上手くいかなかったのかという疑問がクルー達の胸中に湧き上がってくる。

そんな状況を打開する為、ブリッジクルーたちも行動に出た。

「……ジャンケンで決めよう」

「マジか」

「私、苦手」

「ガタガタ言うな。いくぞ、ジャンケン」

「「ポン」」

生贄は決まった。

勝ったものはガッツポーズを決め、負けた者は絶望にうちひしがれる。

「えええ、私い？」

「よし、いけ」

哀れにもジャンケンに負けた女性オペレーターが涙目で恐る恐る沈黙するヨハン達に問いかけた。

「あの、艦長、面会の方は、そのどうだったか、聞いても大丈夫でしょうか？」
一斉に向けられた四人からの視線にますます涙目になってしまふ。

それに気が付いたアオイは慌ててフォローに回る。

「あ、えっと、皆にも今日の件を話しませんか？」

「む、そうだね。こうして黙り込んでいても仕方がないか」

「ええ。此処で一度情報整理を整理してみましよう」

重い空気は霧散し、いつもの雰囲気に戻ってきた。

あからさまにホツとした様子のおペレーターの女性がアオイの傍に寄ってくる。

「ありがと、アオイ君。それで上手いかなかったの？」

「いや、その逆。上手くいきすぎたっていうかさ」

そう、上手くいきすぎた。

結局、きつかり一時間待たされた後で面会は無事に果たすことが出来た。

流石に正体不明のモビルスーツに関しては、何も知らないと否定されたが不審艦については情報が得られたのである。

「これがそのデータだ」

映し出された宙域図にあるのはL4の端の端にあるゴミ捨て場。

掃除されたL4における昔の名残とでもいうべき場所で、破壊された戦艦や完全に修復不可能なコロニーの残骸などが放置されている。

さらにはコロニー開発で出たゴミも投棄されているとか。

確かにテロリストや海賊などが身を隠すには絶好の場所であるが、あからさますぎる。

「情報を提供も抵抗なくあっさりとしすぎた」

「ええ。まるで此処に誘導したがっているみたいに。もしかすると『防衛隊』の事を誤魔化したという意図があったのかもしれない。もちろんこちらの考えすぎという可能性も十分にある訳だが」

「でも他に手がかりはないですよ」

「そうだね。どちらにしろ放っておく事は出来ないか」

虎穴に入らずんば虎子を得ず。

何かの手がかりがあるかもしれない以上、この場所に行つてみる他ない。

無論、畏である事も承知の上で。

「ウリエル、発進準備を。モビルスーツ隊も出撃準備を頼む」

「了解」

ヨハンの命令と共に艦内が慌ただしく動き出す。

この先に待っているかもしれない未知の敵にアオイも自然と力が籠っていく。

「中尉、いつも通りでいくぞ」

「はい。行きましょう」

スウエンの何気ない気遣いに感謝しながら、アオイは格納庫に繋がるエレベーターに乗り込んだ。

◇

宇宙に散乱するゴミ。

大抵が戦闘で破壊されたものであったり、事故で遭難した船であったりする訳だがそれらが減る気配はない。

必要になれば作られ、不要になれば捨てられる。

さらに散発的な戦闘により、破壊されたモビルスーツも増え続けていた。

勿論、各陣営ごとに不要なゴミの撤去作業は行われているものの、いかんせん数が多すぎた。

特にデブリベルトには撤去しきれない数のゴミが増え続け、未だに漂っているのだ。

此処、L4の端にあるゴミ捨て場もそんな人類の負債とも言うべき場所の一つである。

元々存在していた物に加え商工連合コロニー群開発のゴミが集積され、撤去される事無く放置されていた。

「周辺警戒を怠るな。レーダーは？」

「駄目です、ゴミが多すぎますよ」

周辺には戦艦やモビルスーツのみならず、コロニー建設の際に投棄された金属片などが残留している。

これではレーダーは当てにできない。

「モビルスーツ隊に周囲を探るように伝えてくれ。ただしくれぐれも慎重に頼む」

「了解」

奇襲を警戒しモビルスーツ隊はすでに出撃している。

しかし正体不明の機体についての手がかりは発見できないままであった。

「ゴミが多いな。これもコロニー建設の名残ですかね？」

「そうだろうな。ヤキン・ドゥーエ戦役が行われた頃に比べればコロニーの数もかなり増えた。こういったゴミ捨て場は宇宙の各所に存在している。デブリベルトのゴミも増大していると報告もあった」

「ハア、何にしろこの視界の悪さは——不味いですよ」

「ああ」

警戒しつつも、嫌な予感が止まらない。

そしてこういった予感というものは当たってしまうものである。

「大尉、あれを」

「コロニーか」

アオイとスウェンの目の前に現れたのは半壊したコロニーだった。円筒の胴体が半ばから折れ、中身が剥き出しの状態になっている。身を隠すには絶好ともいえる。

「大尉、俺が先行します」

「いや、その必要はないようだぞ」

「ッ!？」

コロニー内部から数機のモビルスーツが飛び出してくる。

フローレスダガーだ。

ウイングコンバットを背負った機体が迷いなくこちらに突っ込んでくる。

「今度はフローレスダガーかよ！」

ビームライフルを回避しながら、アオイとスウエンは左右に別れる。

「そちらは任せた」

「了解」

コロニー外壁を沿うように移動し出来るだけ敵を引き付けると、反撃とばかりに発射したビームライフルの一撃は容易くフローレスダガーを撃破した。

しかし次の瞬間、別方向からの強力なビームがアオイに襲い掛かる。

「ッ、狙撃!?!」

機体を急加速させ砲撃を回避するも、次々とビームが押し寄せてくる。

どうやら三機以上が狙撃を行っているらしい。

「くっ、このゴミだらけの中じゃー!」

機動が制限されている所為で動き難い。

デブリの陰に隠れ砲撃をやり過ぎすと、ビームライフルよりも射程の長い武装を持ち替えた。

量産型高エネルギー収束ライフル『グランシーザ』である。

第一次統合戦争でのデータを基に量産化された武装であり、威力と射程を維持したままコスト削減に成功している。

その為にカートリッジ方式を採用しており、一カートリッジにつき弾数は五発となっている。

「量産型とはいえ収束ライフル、並みのビームライフルよりは射程は長い。後は」
敵の位置を掴むだけ。

アオイは先ほどの砲撃点と周辺の地図を重ね合わせて位置の予測を開始する。

「ゴミが邪魔だけど、おおよその位置はこの辺りか。でも連中だつて止まってる訳じゃないだろう。……出たとこ勝負か」

時間を掛けてはいられないと判断したアオイは思いつきりペダルを踏み、勢いよくデブリの陰から飛び出す。

それを待ち構えていたとばかりに発射されるビーム砲。

「それは読んでた!」

操縦桿を押し込み、機体をさらに加速させてビームの一撃をやり過ぎた。
だが矢継ぎ早に次の砲撃が撃ち込まれてくる。

「のー」

デブリを足場に無理やり、移動方向を変え砲撃の射線から逃れていく。

当然、そんな無茶な機動を続けていけば機体にもパイロットにも負担がかかる。それでもアオイは動きを止めない。

捕捉されないよう、複雑な機動を取り続ける。

その結果、機体が悲鳴を上げるように警告音がコックピットに響き始めた。

「ピーピーとやかましい！ イレイズだったらこのくらい何てことなかったぞ！
しつかり動け！」

整備班が聞けば思い切り怒号が飛び交いそうな事を叫びながら加速し、同時に進行方向とは反対側へシールドを切り離す。

作った囷に敵の狙撃手は引っかかり、シールドを撃ち抜いた。

その隙に反対方向へ逃れたアオイは収束ライフルを構える。

ただ闇雲に逃げ回っていた訳ではない。

こちらも敵の位置を把握する為にデータを集めていたのだ。

「ズン！」

トリガーを引くと同時に発射される砲撃。

強力な収束ライフルの一撃は散乱するデブリ諸共敵モビルスーツを消し飛ばした。

「位置は全部掴んだぞ」

残りは二機。

一機減った事で敵の砲撃による圧力は弱まった。

「この隙に前に出る！」

ビーム砲を紙一重で躲しながら、一気に距離を詰め、再び収束ライフルのトリガーを引く。

スナイパーを仕留めるべく、発射された一撃。

敵機もただ棒立ちという訳ではなく飛び上がり強烈な砲撃を回避して見せた。

だが遅い。

その間にアオイは距離を詰めている。

「ハアアアア！」

腰から抜いたサーベルがフローレスダガーの腕ごとビーム砲の砲身を叩き切り、追り出したブルートガングの刃が深々と腹部に突き刺さる。

「お前には話を聞かせてもらおうぞ」

あえて爆発させなかった機体をデブリの陰に押し込むと、最後の一機を仕留めに向かう。

「後はお前だけ！」

正面から向かってくるビームをブルートガンで無理やり斬り払う。当然、そんな無茶な代価は機体にそのまま帰ってくる。

ブルートガンは半ばから破壊され、腕の装甲もボロボロになってしまった。それでもアオイはこの機を逃さずとばかりに、収束ライフルを発射する。だがデブリに邪魔され直撃には至らない。

「これで狙いはつけにくくなっただろう！」

スラスターを全開、背後に回り込みビームサーベルを突き刺す。

避ける間もなく背中から斬り裂かれたフローレスダガーは爆散した。

「これで全部か。機体状態が悪い……結構、無茶させたな」

アデプトは全身から異常の反応が出ている。

脚部、スラスター、左腕。

特にこれらの部分が酷い状態だ。

これはまた整備班からどやされてしまう。

「ハア、それより何か手がかりは」

慎重にココロニー内部へ機体を降下させていく。

だが手がかりのようなものは発見できない。

「やっぱり圏か何かだったのか——ッ!？」

仕方なく破壊したフローレスダガーを回収しようとした時、上方から無数の光が降り注いでくる。

「この攻撃は?!」

フローレスダガーのシールドを奪い、ビーム砲を防御しながら後退するとアオイの目の前にあの機体が姿があつた。

「ようやくお出ましか」

そこにはあの時遭遇した背中に特殊な装備を背負う機体がアオイを睥睨するように見つめていた。

第4話 壊れたコロニーの中で

同盟における宇宙の拠点は幾つか存在する。

軌道上に存在する『アメノミハシラ』

かつての地球連合の拠点だった宇宙要塞『エンリル』

数々の激戦の舞台ともなった最も世界に名の知れた宇宙ステーション『ヴァルハラ』

これらはそれぞれに防衛拠点としても高い能力と戦力を持っており、それが同盟の精強さを示している。

それは同盟内における不和が大きくなっている現状においても、変化はなかった。

理由は幾つかあるものの大きなものとして同盟がどれほど精強であろうとも、統合軍には量が、テタルトスにおいては質が劣っていると誰もが自覚している事だった。

昨今では大規模な武力衝突こそないものの、緊張感は未だに維持されており、士気はどの勢力よりも高いのである。

そんなヴァルハラの一室。

軍事関係者が使う執務室の一つで長めのプラチナブロンドの髪を持つ男が頭を抱えていた。

イザーク・ジュール。

『第一次統合戦争』ではグラオ・イーリス旗艦であるフォルセティの艦長を務め、アルテミス攻略戦における指揮官を任せられた人物である。

その際の功績が高く評価され現在ではグラオ・イーリスの司令官を命じられ、内情複雑化している軍内部を奔走する日々を送っていた。

「ふざけるな！ 何故、こちらの人事を勝手に口出しした挙句に報告も事後承諾なんだ！」

「落ち着いてください、司令」

「俺は十分に落ち着いている！」

ヴィンゴルヴから送られてきたデータを見た瞬間に怒り心頭のイザークを副官がどうにか必死に宥めていた。

とはいえイザークの抑え役である副官からしても今回の件は怒るのも無理ないとは思う。

今回の件——ウリエルの配属と任務及び正式な艦長の任命。

本来であればグラオ・イーリスの司令官であるイザークが任務や配属先の決定権を持つている。

人事に関しては上と協議の上に決定されるものではあるが、今回のように事前に何の協議も無く勝手に決められるというのは流石に看過できない。

「レフティ大佐には外宇宙用の任務が用意されていたというのに、勝手な事を。しかも今回の調査任務をウリエル単独で行わせるなど」

「上としてはそれで十分だと思っっているのでは？」

「それが甘いと言っんだ」

イザークが素早くキーボードを叩くと報告が上がっていた正体不明機のデータが呼び出される。

「こんな物を作る奴らが何もしない筈がない。……急いで消さねばこの火種、取り返しつかない事になるかもしれんぞ」

「それは分かりますが、上は例の式典の方に目を向けていますからね。それにカガリ様やアイラ様は同盟締結時の負債消しで精一杯のようですから。今のプラントは……その、あまり当てになりませんし」

「今の評議会議長は日和見だからな。カーライル前議長はアイラ様と婚約されてからは一切政治には干渉しないとされている。せめて後進が育つくらいまでは現場に居て貰

いたかったが」

プラント前議長であるレヴァン・カーライルはアイラ・アルムフェルトと婚約し、すでに政治の世界から身を引いていた。

二人の結婚は同盟とプラントとの関係を強固にする為の政略結婚の意味合いも強かったが、それによって今までの遺恨による諍いはほぼ無くなっている。

それ自体が悪い事ではなかったのだが、問題は次の議長だった。

とにかく動きが遅いのだ。

事なかれ主義とでもいえばよいのか、積極的に動く事をせず、問題を避けたがる。

しかも他の議員達もかつてのメンバーからほぼ総入れ替えとなり、議長の方針に反論もしていないという。

これは『第一次統合戦争』においてやや強引にプラント、連合改革派と条約を結んだ影響だ。

かといってカガリやアイラに頼ろうとも二人はそう言った政治的、軍事的な緩みを正す為に奔走し、連絡が取れるような状況ではない。

つまりグラオ・イーリスの後ろ盾になってくれるような人物は非常に少ないのである。

そう言ったツケがこうして現場に回ってきているのだ。

「しかし現状をぼやいていても仕方ないかと」

「分かっている！　とにかく現場が少しでも動き易くするのが俺達の仕事だ。まずはヴァインゴルヴの艦長を呼び出せ！」

「了解しました」

慌てて部屋を飛び出した副官の背中を見ながらイザークは深いため息をつく。

「全く、こうもままならないとはな。……さっさと戻って来い、そうでなくては手が足らんぞ……キラ、アスト」

机の上にある皆で映った写真を見ながら希望を込めて呟くと、席を立つ。

自分がやるべき仕事をする為に。



頭上から容赦なく降り注ぐ無数のビーム。

絶え間ない砲撃を前にアオイは崩壊したコロニー内部を地面を這うようにして逃げ回っていた。

「くそ、絨毯爆撃かよー！」

見境のない砲撃の嵐。

機体を掠め、装甲を奪われる度に冷や汗を掻く。

それを誤魔化すように毒つき吐き捨てると思鳴を上げるスラストをさらに酷使し、建物を盾にして砲撃をやり過ぎす。

「何とか接近しないと、今のままじゃ勝負にならない」

正直、戦況は不利だ。

先ほどまでのスナイパー達との戦闘でアオイの乗るAAAは限界に近い状態にまで追い込まれている。

さらに不味いのが強力な火器を持つ敵を前に頭上を取られている事だ。

相手にこちらの動きは丸見えな上に、あの背中からの砲撃で狙いたい放題。

明らかに分が悪い。

「チツ、ならばー」

砲撃のタイミングに合わせ機関砲とイーゲルシュテルンで建物を破壊。

その破片に紛れて、建物の陰に隠れると素早く仕込みを済ませる。

「これでー」

破片を蹴り上げ、敵の注意を引きながら収束ライフルの引き金を引くと銃口から発射されたビームが正体不明の機体へ向かっていく。

もちろん前回の戦闘で敵がゲシュマイティツヒパンツァーを使用した事は分かって

いる。

だが通用しなくとも動きは止められる筈だと、隙に見逃さないように前に出た。攻撃が当たると思われた時、正体不明機の背中から小型の砲塔が射出され、フィールドのようなものを作り出すと収束ライフルの攻撃が別方向へ曲がってしまった。

「ッ、あの時ゲシユマイディツヒパンツアーを展開したのはあの機体自体からではなくドラグーンユニットの方か！」

ゲシユマイディツヒパンツアーがある以上、今の武装では遠距離からの攻撃は無意味。

影響を受けない実体弾の武装はグレネード・ランチャーと機関砲のみ。

しかし射程が足りない。

ビームライフルで撃ち落とそうとしても、今の機体状態では難しい。

ならば――

「活路が接近戦しかない事は承知済みだ！」

スラスター全開で加速しながら、背中の装備に設置された予備のビームライフルと共に再び収束ライフルを発射する。

当然、ゲシユマイディツヒパンツアーによって曲げられてしまうが、それは想定済み。

狙いは曲げられた先。

歪曲されたビームの光は周囲に撒かれた残骸へと吸い込まれ、同時に凄まじい爆発を発生させた。

これが先ほどの仕込みだ。

蹴り上げた残骸にグレネード・ランチャーの弾頭を仕込んで敵機の周りに浮かべていたのだ。

流石に正体不明の機体も虚を突かれたとばかりに体勢を崩す。

アオイはさらに機関砲でグレネードランチャーを撃ち抜き、生じた爆発に紛れてビームサーベルを振り抜いた。

「ハアアアア!!!」

光刃が避ける間もなかった敵機の胸部を抉り、さらなる一撃で肩の装甲も斬り飛ばす。

「このまま戦闘不能にして——ッ!?!」

狙うはスラストー。

それを破壊すれば敵は動けなくなる。

だが敵を戦闘不能にすべく動いた筈のアオイは次の瞬間、瞠目する。

続けざまにサーベルを振るうと同時にAAAの手首の先から前が無くなっていたのだ。

「なっ!?!」

いつの間にかサーベルを構えた敵機がAAAの手首を切り落としたのである。

突如として跳ね上がった敵機の反応に危機感を抱いたアオイは咄嗟に機体を下げさせる。

しかし敵はそれより早くAAAの腹部に蹴りを入れてきた。

「この動き!?!」

蹴り落とされた衝撃に呻きながらシールドを掲げ、突撃してきた敵機からの斬撃を受け止める。

だが、それすらも取るに足らないとばかりに斬り上げられた一撃がAAAの装甲を抉った。

「ぐっ、速い! やっぱりこれは!?!」

戦闘中に跳ね上がる反応。

別人のような動き。

これらにはアオイも覚えがある。

『SEED』に間違いない。

「だとしても!」

コックピットへと突き出された一撃が躲す為、スラスターを逆噴射させ機体を沈みこ

ませる。

その反応が功を奏し斬撃は外れ、頭部を抉るに止められた。

しかし追い込まれている事に変わりはない。

もはやアオイのAAAは死に体だ。

コックピットには警告音が鳴り続けてりるし、計器を見ても機体全身から異常ありと示している。

さらに先の斬撃の影響でメインカメラも破損、映像の乱れが酷い。

続けざまに振るわれる攻撃をこれでは防ぐ事が出来なくなるのも時間の問題だ。

「このままじゃ、不味い」

斬撃を受け流しコロニーの破壊された地面すれすれを逃げ続けるAAAを敵は砲撃を繰り返しながら追撃してくる。

アオイは素早く周囲を見渡し、戦略を決めると覚悟を決めるように息を吐いた。

「賭けだな。あまり好きじゃないんだけど」

移動しながら収束ライフルの使用済みカートリッジを交換する。

そして残りのグレネードランチャーと機関砲を全弾撃ち込みながら、宇宙港らしき場所へと逃げ込んだ。

港の中には民間用のシャトルなどが散乱し酷い状態ではある。

しかしそれはアオイにとって好都合。

「ハア、ハア、残った武装はビームライフル二、収束ライフル一、サーベル一か」
ご丁寧に敵機はこちらを追って宇宙港の中に突入してくる。

どうしても自分の手でアオイを仕留めたいらしい。

だが、それこそがこちらの狙い。

「行け！」

サーベルを掲げこちらに向かってくる敵に収束ライフルを発射する。

しかしその攻撃は敵が展開したビームシールドによって防御されてしまった。

だが――

「賭けは俺の勝ちだ！」

スラストー全開で突撃してきた敵の突きをシールドで受け止める。

だが勢いのついた一撃を容易く止める事も出来ず、シールドは融解、貫通してA A Aの肩を突き破った。

「ぐっ、この!!」

その瞬間を狙いアオイは敵機の腕を掴み取り、力任せに懐へ引つ張り込んだ。

「これで動けまい！」

しかし敵もさるもの。

間合いを詰めた事を好機と捉えたのか空いた左腕でサーベルを抜き、振り下ろそうとしてくる。

「まだまだ!!」

手が無くなったとはいえ腕は動く。

アオイは斬り裂かれた右腕を敵の腕に激突させ、斬撃を押し止めた。力任せに押し込み合う二機は完全に膠着状態となり動けない。

損傷している分、アオイの方が不利、長くこの状態は続けられない。しかしアオイもそれは分かっている。

何時までも睨みあうつもりは毛頭なかった。

「言っただろ、賭けは俺の勝ちだってな!」

背中の装備『ジラント』に装着されているビームライフルの銃口を正体不明機に向けた。

「この狭い空間で接近戦を挑んできた時点でお前の負けだったんだ!」

どうにか逃れようとする敵機に銃口を向け、発射。

放出されたビームが正体不明機を捉え、破壊された腕部が爆発する。

二機のモビルスーツは閃光に包まれ、宇宙港は崩れ落ちた。



ここまでの戦況はグラオ・イーリス側が優勢で状況が事が運んでいた。

しかしモニターを見るヨハンの表情は固い。

何か腑に落ちないという顔だ。

「どうしました、艦長？」

「おかしいと思わないか、大佐？ 確かに敵は此処にいた。だが新型も一機だけで他は型落ちの既存機ばかり。目ぼしい施設や戦艦らしいものもない」

「確かに。敵の数もさほど大きくはない。これはやはり誘いだつたと考えるべきでしょうね」

「ああ。だが目的が見えない。単純にこちらを奇襲したかっただけか、それとも他に――」

その時、ウリエルの前方で爆発が起き、宇宙港が崩れ落ちていく。

あそこら辺ではアオイが新型機と交戦していた筈。

ヨハンが味方機にアオイ機の支援を要請する為、オペレーターに声を掛けようとする
とネオがすでにシートから飛び出していた。

「私が出ます」

「……頼む」

確かにネオが向かった方が確実。

こちらの思考を読むような行動の素早さに頼もしさを感じながら、ヨハンは少しでも情報を集める為、モニターを注視し始めた。

◇

「クハア、何とかなつたか」

崩れ落ちた宇宙港からにどうにか逃れ出たアオイはどうか上手くいった事に安堵していた。

あの狭い限定された場所ではドラグーンユニットは展開できない。

つまりゲシユマイディツヒパンツァーは使えないという事。

アオイは敵の防御を封じると同時に自身の間合いに誘い込んだのである。

しかしこれは賭け的な要素があつた。

敵が誘いに乗らず冷静に遠距離からの砲撃戦を選んでくる可能性もあつたからだ。しかし同時に敵が誘いに乗ってくるだろうとも思っていた。

根拠は『SEED』

アオイも限定的とはいえ『SEED』を使えるからこそ分かる事。

アレを解放すると慣れない内は感情的になり、冷静な判断力に欠けるといふ弱点があった。

それにあのパイロットはまだ戦闘に慣れていない気がする。

頭上の優位を捨て安易に近接戦を挑んできた所などに、戦闘経験の不足が如実に現れていた。

「とにかく一度ウリエルに——ッ!？」

ウリエルに連絡を入れようとした瞬間、眼前の瓦礫がビームにより吹き飛ばされる。

理由は考えるまでもない。

煙が晴れた後に姿を見せたのはあの正体不明機。

ビームライフルによって撃ち抜かれた右腕は完全に破壊され、爆発によって所々装甲も剥けている。

しかしアオイのAAAに比べれば、その損傷も可愛いもの。

未だ戦闘継続可能な状態なのは、明らかだった。

「くそ、あれで動きを止められたと思ったけど甘かったか。こっちの機体は——」
鹵獲する為、戦闘不能に止めようとしたのが仇になった。

満身創痕とはまさにこの事。

スラストターの半分は死んでいるし、武装も大半が破損。

この状況で攻撃を数回避けられれば御の字といったところだろう。

「向こうはやる気満々って感じだな。舐めてた相手に此処までやられて怒り心頭ってところか」

パイロットの怒りを示すようにモノアイが爛々と輝く。

敵機は残った腕でサーベルを構えると殺意を漲らせてAAAに突撃してきた。

残ったビームライフルで牽制するが物ともしない。

いつの間にか射出した砲塔によって形成されたフィールドでビームを歪曲されてしまった。

そして間合いに入られ、光刃が振り下ろされる。

「俺はまだ死ねないんだよ！」

アオイは切り札を切った。

『SEED』の発動である。

感覚の拡張。

反応速度の向上。

すべてが通常とは異なる景色をアオイに見せる。

「オオオオオ!!」

生きているスラスターを全投入。

無理やり姿勢を変え、斬撃をギリギリのタイミングで回避する。

同時に敵機の背後から体当たりすると敵機をデブリへ叩きつけた。

「これでサーベルも砲撃も使えないだろうー!」

もはや鹵獲するなんて事は言っていられない。

ここで撃墜する。

ビームライフルを敵の背後に突きつけトリガーに指を掛けた瞬間、悪寒のようなものが全身を駆け巡った。

これが何なのか正確には分からない。

しかし『SEED』によって感覚が研ぎ澄まされていたアオイにはそれが何かを知らせるようなものであると本能的に理解できた。

咄嗟に動こうとするが、機体は満足に動かない。

それでも、もがくように敵から僅かに離れると四方から発せられたビームがAAAの腕と足、そして背中のスラスターをもぎ取っていった。

「ドラグーン!?!」

何という迂闊。

あの砲塔はゲシユマイドイツヒパンツァーを展開するだけでなく、攻撃にも転用できるものだったのだ。

ゲシユマイドイツヒパンツァーを展開できるという特性に気を取られすぎて、そこを失念していた。

もはや打つ手なし。

機体は碌に動かず、アオイに待つのは死と言う結果だけ。

「ッ!?!」

銃口を睨みつけ、訪れる結末を前に操縦桿に力が籠る。

しかしそこへ一機のモビルスーツが介入してきた。

飛行形態からモビルスーツへ変形するとAAAと敵機の間割って入る。

MVF17A 『オウカ』

オーブで開発された同盟の可変型最新鋭主力量産機。

『ユニウス戦役』にて開発された高性能機『オウカ』をベースに『第一次統合戦争』にて実戦投入された『スオウ』『ヴィヒター』などのデータを戦闘データを反映させた事により、高い性能を持たせながらも量産化に成功。

現場のE級や指揮官などの要求に応えうる機体に仕上がっている。

「間に合ったようだな」

「大佐!」

「中尉は下がっている、こいつは私がやる」

新たに姿を見せた機体に敵も警戒しすぐにライフルを向け、ネオもそれに応えるようにビームライフルを発射した。

そしてビームが交錯すると同時に二機が動く。

敵は片腕を失つていようとも怯む事無く、果敢に攻めに打って出た。

ドラグーンを射出、さらに腹部、背部のビーム砲を発射する。

オウカを中心に空間を覆うようなビームの檻だ。

しかもSEEDを発動させているからか、精度も針の穴を通すように正確で神懸っていた。

逃げ場はなく敵は勝利を確信したに違いない。

しかしネオはすべての射線を見切るように最小限の動きだけで容易く回避、同時に動き回る砲塔をビームライフルで狙撃して、撃ち落とした。

流星に驚いたのか敵機は動きを止め、隙を見せた。

そこを見逃すネオではない。

敵の砲撃を回避しながら、間合いを詰めるとビームサーベルを一閃。

鮮やかな一撃は敵機の両足を切り捨て、逆手に持ち替えたサーベルの刃が頭部を串刺

しにする。

ああなつてはもうどうにもならないだろう。

両足切断と共にスラスタは損傷しており、メインカメラが潰された事でドラグーン
のコントロールにも深刻な影響が出ている筈。

戦闘不能と判断して良いだろう。

「流石、大佐。助かりました」

「いや、中尉こそ慣れない機体で良く持たせてくれた。怪我はないか?」

「はい。機体はポロポロなんで整備班から怒鳴られそうですけどね」

「それは仕方がない。覚悟しておくんだな。それよりもこの機体を回収する。それで
情報も得られる筈だ」

アンカーを射出し、正体不明の機体を回収しようとする手を伸ばす。

これで今動いている世界の影を掴む手がかりを得る事が出来る。

だがそれをさせまいと再び乱入者が現れる。

「大佐、上です!」

「ツ!?!」

突如として現れ高速で近づいてきたのはモビルスーツよりも明らかに大きな物体。

「モビルアーマー!?!」

その形状は連合で開発されてきたものとは明らかに違う。

モビルアーマーらしきものに装備された砲門が一斉に解放され、アオイとネオに狙いを付けた。

「くっ」

「中尉?!」

砲撃からアオイを守るようにシールドを掲げたネオが射線上に割って入る。

「いけー!」

オウカの背中に装着された小型の砲塔が展開され、二機を包み込むようにフィールドが展開。

それと同時に開始された周辺を薙ぎ払う凄まじい砲撃にオウカはAAAを守る為に身動き一つ出来ないまま耐えるしかない。

その間にモビルアーマーは損傷した敵機を回収し、戦線を離脱した。

「逃がすものか!」

オウカが飛行形態に変形するとモビルアーマーに劣らない速度で追撃を開始。

しかし追撃するオウカの進路を阻むように、突如小さな爆発が機体全体に巻き起る。

「ぐう、機雷だ?!」

敵が離脱する時に展開したのか進路上には無数の機雷が散布されていた。

「チツ」

無理に突き進めば、機体を痛めてしまう。

そうなれば追撃どころではない。

ネオは速度を落としモビルスーツ形態へと変形、機雷源から脱出を図る。

「大佐！」

「私は大丈夫だが」

すでに敵は空域から離脱しておりもう影すら見えなくなっていた。

「してやられた。あんなものを伏せていたとは」

「あいつらは一体？」

「さあ。だが今回私達は奴らの掌で良いように遊ばれただけなのは確かだ。腹立たし

いが」

アオイも悔しきで操縦桿を力任せに殴りつけた。

油断していた訳じゃない。

ただ相手がこちらの一枚上をいつていた。

こちらの完全な敗北である。

「……今回生き延びられたのは運が良かったからだ」

慣れない機体だったなんてただの言い訳だ。

「でも次はこうはいかないぞ」

雪辱を誓いアオイはネオと共にウリエルへの途につく。

そしてある意味予想通りウリエルへ帰還したアオイに待っていたのは整備班からの悲鳴にも似た怒号の嵐だった。

第5話 轟く声

テタルトス月面連邦国。

『第一次統合戦争』においてある意味最も被害を受けた国家である。

地球降下させた部隊の大半の離脱。

人員、技術の流出。

それによる戦力低下。

上げていけばキリがない。

だがそれもはや過去の話。

ここ最近はそれも盛り返し、地球における駐留部隊も再編が完了している。

仮に戦争が起きたとしても、万全の態勢で迎え撃つ事が出来るだろう。

とはいえ現在のテタルトスの目が向いているのはあくまでも外——外宇宙だ。

各国家も復興しているとはいえ、今までの戦争によりもはや地球の荒廃は極まってい

る。

もはや地球に希望はない。

テタルトス上層部はそう考え、新天地を外へと求めているのだ。

その為に移動軍事ステーション『ヴァルナII』などを開発し、外側に自らの勢力を伸ばそうとしている。

だから地球圏内での争いには消極的な対応となっていた。

しかしそれはあくまで上層部の話だ。

現場にいる軍人たちは今もその練度を落とす事無く、日々の訓練を続けている。

それを証明するかのようにテタルトス防衛の要、軍事ステーション『イクシオン』では今日も訓練中のモビルスーツが飛び交っていた。

一際目立つのはやはりジンIIIだろう。

最強の量産機と呼ばれるこの機体はすでにテタルトスの象徴とも言える。

編隊を組み、一通りの訓練を終えたモビルスーツ隊がイクシオンの格納庫へと帰還すると、機体を降りたパイロット達が一糸乱れなく一列に並ぶ。

そして先頭で指揮を執っていた銀色のジンIIIに向けて敬礼した。

降りてきたパイロットこそ彼らの上官である『銀獅子』の異名を持つエース、ヴィルフリート・クアドラード中佐だった。

「全員、大分動きは良くなってきたが連携はまだまだ拙い。後で今日の反省点を端末に送っておくので各自おくように」

「ありがとうございます！」

今日の訓練はこれで終了であり、各々が表情明るく格納庫から退出していく。しかし部隊長であるヴィルフリートの仕事はまだまだ終わらない。

反省点の纏めに訓練メニューの見直し、機体の調整に上官への報告。

やる事は多い。

だがそれを怠る気はなかった。

油断すれば死が持つのは戦場の常。

部下を無駄死にさせない為にも、まずはヴィルフリート自身が気を引き締めなければならぬのは当たり前前の事だ。

まずは先ほどの訓練データを纏める為、手元の端末を操作していると声が掛かった。

「お疲れさまです、クアドラード中佐」

「ん、デイノ大尉か。久しぶりだな」

声を掛けてきたのはセレネ・デイノ大尉。

言わずと知れたテタルトスのエースの一人だが、現在は結婚し前線からは離れている。

「イクシオンに来るとは、何かあったのか？」

「いえ、式典関係で同盟の使者の方の護衛についていたんです。丁度中佐の姿が見えたものであいさつを」

「なるほど。君ならば護衛としても最適だし、納得の人選だな」

セレネ・デイノは先の大戦で一時同盟と協力して動いていた。

だから上層部は同盟との繋ぎ役として、そして護衛役として抜擢する事が多々あるのだ。

「それでもないですよ、私、グラオ・イーリスとか蛇蝎の如く嫌われていますからね。それも仕方がありませんけど」

「そうか。アスランは元氣か？」

「ええ。最近は体の調子も良くて子供の面倒をよく見てくれます」

「前線に戻る気はないのか？ 彼はもうモビルスーツには乗れないとはいえ、指揮官としては非常に優秀だ」

アスランの実力は本物だ。

ヤキン・ドゥーエ戦役から戦い抜いて来た豊富な戦闘経験。

統合戦争のアルテミス攻防戦における防衛指揮。

その実績は誰もが認める所だ。

しかしセレネは首を横に振る。

「もう戦う気はないみたいです。アスト・サガミも消息不明ですからね」

「そうか。本人にその気がないのなら無理を言っても仕方ないな」

「でもどうしてそんな事を？」

「……最近、また不穏な空気が流れていてな。近々また戦いが起きるかもしれない」

「各地で確認されてる例の所属不明の不審船ですか？」

「ああ。同盟が接敵し、正体不明の新型機も確認されている。何かが起きるのは確かだろう」

セレネの表情があからさまに曇った。

彼女も結婚し、子供もいる。

戦いなど起こって欲しくはあるまい。

「そしてもう一つ、気になる事がある」

「何でしょうか？」

「君はシルベスター工廠近くに、囚人を収監する施設があつた事を知っていたか？」

「いえ」

テタルトスにおける重要な場所の一つであるシルベスター工廠。

特殊なモビルスーツやパイロット強化に関する実験を行っている施設だが、その近く

に囚人の収監施設があるとは聞いた事がない。

「どうやら囚人たちを使って強化兵に関する人体実験を行っていたという報告が上がつてきていてな」

「人体実験？」

「ああ。今は実験は中止、施設もすでに破棄されたようなのだが……最近までとある人物がそこに収監されていたらしい」

手渡された端末に表示されたデータを見てセレネは驚いたように目を見開いた。

「彼は処刑されたと聞いていましたが」

「生かされていたという事だ。詳細を確かめる為に当時の研究者などを尋問している途中だが、どうやら強化処理も受けていたようだ。そんな人物が数週間前に突然姿を消したらしい。見張りを皆殺しにして」

思わず息を飲む。

データを見る限り、単独での脱走は不可能だ。

誰かが手引きしない限りは。

つまり外部から彼を脱走させる為に手を貸した人物がいるという事。

収監されていた人物の事はセレネも知っている。

彼を連れ出した奴の企みなど碌なものでない事は想像に難くなかった。

「月にはもう居ないだろうが、今も搜索中だ。デイノ大尉も一応気にかけておいてくれ」

「分かりました、もしも何かあった時は遠慮なく声を掛けてください。では私は奥さんとヴィクトリアさんと三人でお茶して帰りますので」

「了解した」

セレネはそのまま格納庫を出ると待ち合わせていた長い金髪の女性ヴィクトリアとヴィルフリートとの妻と三人で談笑しながら歩いていく。

ヴィルフリートは金髪の女性の後ろ姿を見つめながら、少し感慨深い気分になる。彼女も保護された時に比べて随分元気になったようだ。

今は軍の事務関係の仕事を手伝いながら、子供を育てていると聞いた。

最近では娘である双子の姉妹と仲良く歩いている姿をよく見かける。

セレネや自分の妻とも交流があり、今回のようにたまたま三人で一緒に出掛けているらしい。

「元気になったのは良い事だな」

それを見届けたヴィルフリートは自身の愛機であるジンIIIを見上げる。

「戦いは起きる、必ず。その時は俺は俺の全力を尽くすのみだ」

以前とは環境も変わった。

守る者もできた。

戦う意思も以前のまま。

ならば誰が相手でも戦う事に迷いはない。

己が内の覚悟を改めて確認したヴィルフリートは、再び作業に没頭し始めた。

◇

廃棄コロニーでの戦闘を終え、無事ウリエルに帰還できたアオイは格納庫で顔を引きつけていた。

目の前には仁王立ちした整備班の面々が腕を組み青筋を立てている。

その理由は格納庫に横倒しにされたアオイのAAAに違いない。

「お前って奴は、よくもまあこんな状態にしてくれやがって」

AAAはもはや見る影もなく、完全に大破した状態だ。

四肢はもがれ、全身のスラスタはほぼ破損、装甲は剥がれ、武装は全壊。

ネオが支援に来てくれたとはいえこんな状態でよくも帰還できたものだ。我が事ながら感心する。

「す、すいません。いや、でも、相手が強敵で」

「んな事は聞いてるつつーの！ だがなデータを見る限り、お前さんの無茶苦茶な機動も原因の一つのようだが？」

「う」

言い訳できない。

デブリ帯でスナイパー相手に戦った時は確かに機体の負荷を無視した機動を取ってしまった。

「ハア、まあ、お前が無事に戻ってきたのが不幸中の幸いだけだよ。アレはもう直せないぞ」

「そうだよな」

アオイでも横たわるボロボロの機体が修復不可能である事は良く分かる。

アレを直すくらいなら別の機体を用意した方が早い。

「どうしたものかな」

乗っていたAAAはスクラップ。

こうなると他の機体に乗るしかない訳だが余っている機体は他にはない。

しかしアオイが扱える新たな機体を回してもらえるかといえば、それも難しいだろう。

仮に別の機体を申請してこちらに届くのに数か月は掛かりそうだ。

かといってヴィンゴルヴで開発を進めている新型機はまだ未完成。八方塞がりだ。

アオイが頭を抱えていると同じく考え込んでいた整備班長が諦めたようにため息をついた。

「仕方ねえか」

「班長？」

「ま、最終手段だがな。アイツを使うか」

班長が視線を向けた先にあつたのはアオイのかつての愛機であるイレイズガンダム Mk-II だった。

「Mk-II が使えるんですか!？」

「馬鹿、言つたらうが。アイツはもう限界だつてよ」

「じゃあどういふ事なんです？」

「お前のAAAのパーツをMk-IIに組み込む。まあ細かい部品から何から大部分が総取り換えになるだろうけどよ」

いつの間に用意したのかすでに設計図は出来上がっていたらしく、アオイに差し出してくる。

こんなものを用意していたのなら初めから出してくれれば良いとも思う。

しかしアオイの思っている程、簡単な話ではないらしい。

「そもそも改修を施しているとはいえMk-II自体が古い機体なんだよ。もうパーツも殆ど残っちゃいない」

「開発されたのは9年も前だものなあ」

「ああ。当然、最新鋭の機体であるAAAとの互換性もない。そんなものを使つての改修となれば修理や整備、調整にも手間がかかる上に戦闘中でどんな不具合が起きるかわからないぞ。それでもいいんだな？」

「お願いします。このままじゃ戦えない」

「そういうと思つて準備だけは前々から進めてたんだよ」

「本当ですか!？」

「ああ。ま、次の戦闘くらいまでには何とか間に合わせてみせるつて」

班長がアオイの肩をポンと叩くと大声で整備班を招集する。

「よし、集まれ!! 今からレイズMk-IIの大改修を行う!! 時間もあまりねえからよく聞けよ!!」

「おお!!」

「よっしゃ!!」

Mk-IIの改修作業は整備班に任せる他はない。

「お前は休んでろ」という半ば強制的な班長の言葉に従うように格納庫を後にする。とは言っても休んでいる暇はない。

特にあの新型のパイロットのデータ検証はすぐにでもやるべきだ。

「格納庫じゃつまみ出されるだけだし、自室でやるか」

格納庫を出てエレベーターに乗り込もうとすると途中の階からネオが乗り込んできた。

「あ、大佐」

「休憩か？」

「いえ、自室で正体不明機の検証をしようかと」

「根を詰め過ぎないように。あ、時間があるのなら少し付き合わないか？」

「分かりました」

二人が向かった場所はネオの私室だ。

アオイは部屋に入ると手早くコーヒーを入れる準備をする。

これももう何度もしているからすっかり慣れてしまった。

「すっかり手慣れたわね、中尉」

振り返ればネオが仮面を外し、長い金髪を纏めながら穏やかな笑顔でこちらを見ていた。

ルシア・フラガ。

それがネオの本名だ。

ユニウス戦役から訳あつて仮面を被り、正体を隠して活動している。

とはいえもうあまり素顔を隠す必要もなくなったのだが、本人曰く仕事中は顔を隠した方が落ち着くらしい。

「本当なら紅茶を用意したいんですが、時間がないですし今日はコーヒーで我慢してくださいね」

「私、コーヒーも好きよ。紅茶程ではないけどね」
ルシアの紅茶好きは本物だ。

お茶の葉っぱから、道具までこだわり抜いている。

以前碌に知りもしないまま道具に触ろうとしたら、本気で怒られた事がある。

アレは恐ろしかった。

アオイもルシアを怒らせないよう紅茶を淹れる為、ある程度勉強した程。

だが流石に戦艦にまで紅茶セットを持ち込む気はないらしく、普段は食堂の紅茶で我慢しているようだ。

誰かが部屋に入られた時に勘ぐられないようにというルシアなりの対策らしい。

上手く入れられた事に内心安堵しつつコーヒーをルシアに手渡すと香りを楽しむよ

うにカップに口を付けた。

「おいしい」

「ありがとうございます」

ルシアの感想に満足しながら、アオイも席につく。

しばらくコーヒーを飲みながらのんびりとした時間を過ごす。

「あ、そういうえばMk-IIの件なんです」

「報告は聞いたわ。仕方がないけど、できればスウエンのように上手く扱ってもらいたかったわね」

「う、すいません」

スウエンの機体は今回の戦闘でも被害なし。

先ほど班長達が青筋立てて怒っていた要因はそれもあった。

要するにもっと丁寧に上手く戦えという事だ。

「まあ相手が強敵だった事は確かだけどね。しかしそれにしても貴方らしくない程追い込まれていたわね。機体に不具合でもあったの？」

「デブリ内でのスナイパー相手っていうのはありましたけど、それ以上にあの新型のパイロットですよ。奴は『SEED』持ちですね」

「……そう、敵に『SEED』が。対SEED戦術を改めて各パイロットに徹底させて

おく必要がある」

『SEED』の名を聞いたルシアの顔が強張るのがわかる。

すでに『SEED』の存在は世界中に認知され、その研究も進んでいた。

それは戦術面でも同じ。

SEEDの脅威は言わずもがな。

味方であれば頼もしいが、敵ならばその被害も甚大となる。

故に対抗策としての対SEED戦術の構築も各軍隊で必須のものとなっていた。

「しかし結局、連中の手がかりは掴めず仕舞いですか」

「そうですね。だけど彼らは必ず動くでしょう。そして狙ってくるのであれば『メークリウ

ス』ね」

「例の式典ですか」

「ええ。各勢力が集まる式典、テロを起こすにはこれ以上の機会はないわ。その前に叩きたい所だけど、手がかりが無い以上は難しいでしょうね。後は上次第」

「上?」

「式典では厳重な警備体制が敷かれる。しかしそこにグラオ・イリスが配置されるかといえれば疑問よ。精々周辺哨戒任務に回されるのが関の山。まあ、その辺はジュール司令に任せるしかない」

聞けば聞くほど不安材料しかない。

憂鬱な気分になりながら、出来れば大げさになる前に連中を止められれば良いと思う。

しかしそんな希望的観測はこの数日後に裏切られる事になる。

◇

宇宙に浮かぶ岩場の陰に隠れるように一つの物体が静かに移動していた。

輸送船や旅客機などが通る各コロニーや月へ行く為の航路からは大きく外れており、明らかに普通の艦船ではない。

否。

見ればそれは艦船などではなかった。

突き出された砲門。

大型の高出力ブースターユニット。

中央にあるモビルスーツを搭載可能な、接続スペース。

ソレは戦場に闊歩する兵器の類だ。

所謂モビルアーマーと呼ばれるものに近いかもしれない。

障害物を避けながら進んでいたモバイルアーチャーらしきものは目的地に到着すると速度を落とし、完全に停止する。

すると突然何もなかった所から入口が出現、迎え入れるように左右のゲートが解放された。

入口から内部に侵入すると、ゲートは再び姿を消す。

内部は格納庫のような場所であり、ウリエルが遭遇した正体不明の新型機が所狭しと並んでいる。

ゆつくりと格納庫に着陸したモバイルアーチャーらしきものが中央の装甲を解放すると、戦闘でボロボロになったモバイルスーツが格納されていた。

アオイのAAAと交戦した新型機である。

「くそー」

コックピットから降りてきた青年クロム・マイルは苛立ちを隠す事無く、ヘルメットを床へと叩きつけた。

「あんな、あんな奴らに!!」

怒りを押し殺す事もできず、歯噛みしながら拳を強く握りしめる。

彼には自分がエースパイロットであるという自負があった。

実戦経験こそ少ないものの、その技量は誰しも認めるものであり、此処まで追いつめ

られるなど思つてもいなかつた。

だが結果は御覽の通り、無様な姿。

これを屈辱と言わずに何と言う。

「荒れているな、クロム」

近づいてきたのは仮面の男ルドラ・アシユラ、その後ろには副官であるシルヴィアも付き従っている。

「派手にやられたようだな」

「次はこうはいかない。あのパイロット達にも遅れはとらない！」

「そう願いたいものだ。次も負けましたでは話にならない」

嫌味の籠つたその言葉に頭に血が上りそうになるが、事實は事實だ。

この汚名を払拭するには結果を示すしかないのだ。

「そういう時は勞うものだよ、ルドラ」

「サルワか」

振り返ればルドラと同じく仮面で目元を隠した人物サルワ・アシユラが立っていた。

同じ仮面で素顔を隠している二人だが、その雰囲気はまるで違う。

常に厳しく刺々しい雰囲気のリドラと穏やかで柔らかな空気を発しているサルワ。

正反対の性格を持つ二人こそ、この場所をまとめる指揮官と副長であった。

「クロムが頑張ってくれたおかげで前回と今回の戦闘でデータは十分に取れたんじゃないか。無事に帰還した事を労うべきじゃないかな」

「それも勿論、分かってている。だが叱責は必要だ。クロムは我らの中核を担うべき存在。ここで甘えて貰っては困る」

「厳しいな。でも今回はかなりの難敵だったみたいだね」

「相手はグラオ・イーリスだからな。実戦データを取るにはそれなりの相手でなければ意味がない。そういう意味では彼らは役立ってくれたよ」

L4のゴミ捨て場で起きた戦闘はすべてルドラが仕組んだもの。

新型機の戦闘データを取る為に起こしたものだ。

L4だけではない。

地球や宇宙で散発的な戦闘を利用し、新型機のデータ収集を行っていた。

各地で確認されていた不審艦はこれらの部隊を運搬する役目を担っていたという訳だ。

「ルドラ、『彼』がこちらに到着したと連絡が入りました」

「そうか。シルヴィア、ミラージュ・コロイド解除、隔壁を解放しろ」

「了解」

格納庫の隔壁が解放され、一隻の輸送船が入り込んできた。

「クロム、アレもお前と同じパイロットだ。精々歓迎してやるがいい。そして各々気を引き締めろ、いよいよだ」

ルドラの鼓舞と共に全員が入ってきた輸送船から降りてくる人物に注目する。

ハッチが開き、数人の人間と共に野獣のような笑みを浮かべた男が降りてきた。

「……駒はそろった。我々が動き出す時が来た」

ルドラもまた笑みを浮かべる。

そこには紛れもない歓喜と憎悪が籠められていた。



統合軍における複数ある宇宙の拠点。

その一つ。

名は『エレボス』という。

月と地球の中間に位置する拠点であり、統合軍がテタルトス月面連邦国を監視、もしくは侵攻する際の足掛かりとなるべき場所である。

本来その役目を担う筈だったアポロン要塞は『第一次統合紛争』により壊滅的な打撃を受け、現在は放棄されている。

その代わりとなるべく別の宇宙要塞の建造が進められているのだが、エレボスはその間の繋ぎとして機能している。

繋ぎとはいえ役割は重要。

当然、任された司令官もこれが出世の足掛かりだと思い、喜んで引き受けた。

幸いな事に彼は部下にも恵まれた。

副司令官であるウォーレン・マクベインは特殊作戦を任せられる逸材であり、他の部下も従順で反抗的な者はだれも居なかった。

後は宇宙要塞完成まで問題が無ければ、上に行ける事は确实。

だからこそ今、彼に突きつけられた現実についていけなかった。

「これは……どういう事だ？ マクベイン大尉？」

彼の前には副司令官であるウォーレン・マクベインが銃を掲げた兵士達と共に立っていた。

もちろんその銃口を司令官である自分に向けてだ。

「今なら冗談で許してやる」

「冗談でこのような事はしない」

それは司令官にも分かつていた。

このような状況でも誰一人騒がないし、助けがくる気配もない。

つまり拠点内はすべてマクベインによって掌握されている事を意味する。

「クーデターなど……何が目的だ、マクベイン!! 古巣のテタルトスに此処を売り渡すつもりか!!」

「話した所で無意味だ。貴様のような俗物には一生理解できないだろうよ」

マクベインは躊躇いなく銃の引き金を引くと寸分違わず司令の眉間を撃ち抜いた。

予め準備していた兵士たちが射殺された司令官の死体を手早く片づけるのを見届けた後、マクベインは改めて背後に立つ部下達の姿を見渡す。

「本当にいいのだな? 引き返すなら今が最後の機会だぞ」

「今更何を!」

「我々全員がすでに覚悟を決めております!」

これから自分達が行うのは紛れもないテロ行為だ。

それを正当化する気はないし、分かってもらうつもりもない。

しかしそれでもやらねばならないのだ。

先に逝った者たちの意思を無駄にしない為にも。

世界を変える為にも。

「行くぞー！」

「ハ!!」

全員が覚悟を決めた表情で敬礼する。

それに応えるようにマクベインもまた雄々しき態度で歩き出した。

◇

その日、世界を生きる人々は知った。

突如としてモニターに映し出された屈強の軍人達の姿を見て。

新たな戦いが始まったのだと。

《世界を生きる人々よ！ 我々の言葉を聞くがいい！ 私の名はウオーレン・マクベイン！ 今は亡きファウスト・ヴェルンシュタインの意思を継ぐ者である!!》

第6話

執行者

資源衛星『メークリウス』

最近、各勢力の間で話題に上るこの資源衛星は外宇宙用の窓口となるべく開発されたものである。

元々は同盟が火星軌道以遠領域の探査、開発を目的に設立された機関『D. S. S. D』と共に開発を行っていた。

しかし統合戦争の影響で途中で放棄に近い形で開発が中断。

戦争終結後に開発再開の話が持ち上がるものの、戦争による財政悪化の影響で目途が経たないまま計画中止が決定された。

それを惜しいとして待ったを掛けたのがテタルトスだった。

外宇宙を目指すテタルトスとしては足掛かりが必要。

独自で開発を進めていても、コストを考えれば安いに越したことは無い。

そこで同盟にメークリウスの開発にテタルトスも参加、完成後には共同使用させて欲

しいと交渉を持ちかけてきたのである。

勿論、それを地球圏統合政府も黙っている筈はなく、商工連合に仲介される形で半ば強引に計画に参加。

結果、資源衛星『メークリウス』は各勢力共同の外宇宙進出の窓口となったのである。ただすべてが上手く解決した訳ではない。

管理の問題、使用優先権の問題など未だに解決していない揉め事は山ほどある。

だが問題は後々解決していけば良いし、何よりも頻発するテロに屈しないという意味を示す為今回、完成式典を催す事になったのだ。

それ故に各勢力の議員や政治家達は万全の態勢で挑もうと頻繁に会議や会談を行っていた。

しかし順調だった筈の式典開催は此処に来て重大な問題に直面していた。

《世界を生きる人々よ！ 我々の言葉を聞くがいい！ 私の名はウォーレン・マクベイン！ 今は亡きファウスト・ヴェルンシュタインの意思を継ぐ者である!!》

モニターの中で演説を行っているマクベインの姿に誰もが目を奪われる。

《生前ファウスト司令は常に世界の在り様と人類の行く末を案じておられた。かつての宣言を覚えてゐる者も多いだろう。しかし現実はどうか？》

《各勢力は言わずもがな。人類を導く役目を担った筈の統合政府は未だ旧連合と変わらず、勢力争いを続けている。今生きる者たちすべてを無視してだ。そして今度はそれを外宇宙にまで持ち出そうとしている始末！》

《何一つ変わっていない！この歪んだ世界で生きる者ならわかる筈だ！ 故に我らが立ち上がる！ この欺瞞に満ちた現状を撃ち碎く為に！》

《我々は『マクベイン・エクスキューター』、人類を新たなステージへ導く為の執行者である！》

突如流れたこの放送は当然の如く、大きな波紋となつて世界中を駆け巡つた。

溜まつた鬱憤を晴らすかのような外宇宙進出を反対する抗議活動。

頻発していたテロの拡大。

この影響を受けた経済の打撃。

一連の騒動によつてこの先開催が予定されている『メークリウス』完成式典にも多大な影響をもたらす事は容易に想像できた。

その対応策を話し合う為、各勢力の重鎮たちは極秘に集まり連日会議を開いていた。

「敵——『マクベイン・エクスキューター』と名乗るテロリスト達は統合軍の拠点である『エレボス』を占拠。配備されていたモビルスーツ、戦艦ともに奪取されたと思われます」

「全くこの時期にこのような連中が姿を見せるとは。これはそちらの怠慢ではないのかな、イスラフィール代表」

会議場でウオーレン・マクベインの演説の映像を見ながら、テタルトスの重役が正面に座る男、統合政府の実質的トップであるクレメンス・イスラフィールに嫌味を込めて投げかける。

「否定はできん。こういった自体にならぬように目は光らせていたのだがな」

しかしイスラフィールは特に動じた様子もなく、淡々と告げる。

それが不気味と言えば不気味だった。

そもそも今回の件で最も面目を潰されたのは統合政府だ。

自軍からの離反者を出し、挙句クーデターを阻止しきれなかった。

これは誰の目から見ても統合の失態である。

にも関わらず焦った様子もないのは胆力があるからなのか、それとも即座に終息させる余裕でもあるのか。

「こうなった以上は迅速に動かねば取り返しをつかない事になる。現に今までテロを

起こしていた連中も呼応している」

「分っている。統合軍は全力を持って奴らを排除するつもりだ」

「そう簡単にはいかないでしょう。各国の治安維持で統合は部隊を派遣しているので
は？ それに肝心な『メークリウス』の防衛を蔑ろにされても困る」

『メークリウス』の防衛に関してはアムステルダムと同じ形がとられている。

すなわち各勢力の戦力が集まり、合同で防衛を行うというものだ。

だがここでテタルトスが『マクベイン・エクスキューター』排除の為に部隊を動かせば『メークリウス』防衛に障害が出る恐れがあった。

いや、むしろ敵はそれを狙っているのかもしれない。

それを見越していたのかイスラフィールの隣に座る小柄の男が提案があると切り出した。

「此処は少数精鋭で敵の本拠地を叩くというのはどうでしょう？」

「規模も、戦力も不明な相手に少数を派遣しろと!? 派遣した者達に犬死しろというのか！」

「犬死ではありません。成功すればよい。仮に失敗しても敵の目的を図る材料には出来ましょう」

イスラフィールと共に出席している小柄の男、統合政府の高官の物言いに怒りを隠せ

ないのは同盟の代表として出席していたカガリだ。

「何も同盟に出撃せよなどとは言っておりません。元々マクベインは我々統合の所属。誰に言われるまでもなく我らの手で処理いたしますとも」

「ツ、待つていただきたい。もはや統合のみの問題ではありません。テタルトスとしても今回の問題は無視できないもの。それに敵の本拠地とされている「エレボス」にも近いのは私達だ。安全保障の問題からしても我々が出ます」

「では合同と形でいかがです？」

話を聞いていたカガリは心の中で齒噛みする。

この流れは上手くない。

統合、テタルトス、二国が自ら出撃しようという中で同盟のみが何もしないというのは今後の立場を考えると不味い。

カガリとしてはこれ以上軍内部が混乱する前に刷新を行つてから、次の行動に移りたかつた。

だがこの流れでは同盟も部隊派兵を行わざる得ない。

この流れを作り出した統合の高官はかなり食えない奴のようだ。

そして代表の筈のイスラフィールは事の成り行きを見届けているだけで、何も話そうとはしない。

また何か考えているのか。

それとも今回の件も含め、すべて計算づくなのか。どちらにせよ動くしかない。

イザークからはまた苦情が上がるかもしれないが、この機を逃せば世界の信用を失い羽目になる。

それだけは避けなければならない。

「分かった。では我が方はグラオ・イーリスに出撃を命じよう。彼らは精鋭中の精鋭だ。それで問題はあまるまい」

「おお、あのグラオ・イーリスを！ 同盟も本気という事で、それは朗報ですな。是非お願いいたしますよ」

「……狸め」

やや大げさな演技をする高官を小声で毒づきながら、カガリは今後の詰めの話に耳を傾けた。

◇

「よろしかったのですか、これで？」

会議を終え部屋を後にしたイスラフィールに高官が問いかけた。

今回の会議の結果、各勢力で選りすぐった精鋭でエレボスに奇襲を仕掛け、一気に叩くという作戦が決定した。

それもすべてイスラフィールの指示で行ったもの。

本音でいえば統合のみで『マクベイン・エクスキューター』を討ち取った方が良いのではと思っていた。

力を見せつけければ今後の政策、外交も上手くいきやすくなる。

「構わない。むしろ都合が良い展開になった。……お前の言いたい事は分かる。だが今は治安維持が最優先。テロリストの殲滅はテタルトスや同盟に任せておけばいい」

「では部隊の派遣を行わないのですか？」

「部隊は派兵するさ。しかし戦力は温存させてもらう。囹の可能性も十分にある。今後を考えればここで無駄に戦力を失う訳にはいかない」

「つまり派兵はするが、本気で敵の本拠地を攻める事はしないと。それを同盟とテタルトスが納得するでしょうか？」

「それを悟らせるつもりはない。それに奴らはエレボスを叩かざる得ないさ。テタルトスは地球圏の争いには消極的だが、本国に近い「エレボス」は絶対に放置できない。同盟も此処で動かなければ国際的な信用を失う上に軍内部の混乱の噂、それが本当なのだ

と勘ぐられかねない。真偽はどうあれそれだけは避けたい筈」

「なるほど」

会議の始まる前に此処まで考えていたイスラフィールに感服する。

やはりこの男は何処までも恐ろしい。

今回のマクベインの反乱についても何処まで把握しているのか。

「ウラノス要塞に駐留している部隊に出撃命令を出せ。ただし開発中の新型は伏せろ」

「ハッ！」

改めてイスラフィールに心酔しながら、高官は頭を垂れた。



『マクベイン・エクスキューター』と呼ばれるテロリストの決起。

これに一番危機感を抱いたのはテタルトスであっただろう。

イスラフィールの推測通り、『マクベインエクスキューター』の本拠地と目された場所は月本国に近い位置にある。

これでは地球と月を行き来する交易船や旅客機、輸送船などが使用する航路の安全が

保証できない。

さらにこんな近い位置にいるテロリストを放置しているなど、国家の威信に関わる事。

故に早急に排除しようと考えるのは当然の結果であった。

「ほら、出撃準備急げ！」

「パイロットは機体のチェックを忘れるな！」

出撃前の格納庫というのはメカニックやパイロットたちで溢れかえる。

そこはもう一つの戦場といっても過言ではないだろう。

怒声が溢れかえる慌ただしさ中、一人の女性が護衛艦に乗り込もうとしていた。

「セレネ・デイノ大尉、君が何故ここに居る？」

女性——セレネ・デイノを呼び止めたのはパイロットスーツに身を包んだヴィルフリートだ。

困惑した表情を隠しめせず、問いかける。

「クアドラード中佐。実は今回、ヴィクトリアさんと護衛艦のオペレーターとして乗船する事になったんです」

「なっ、ランゲルトさんも!? 君も彼女も後方勤務だった筈だ」

「ええ。実は『メークリウス』の方にも人員を割いている所為か、人手が足りないそう

なんです」

「しかし慣れている君はともかく碌な訓練も受けていないランゲルトさんをいきなり戦場に向かわせるのは」

ヴィルフリートの懸念は最もなのだが、セレネ的にはそれが面白くなかったらしい。笑顔のまま顔を引きつらせて、ヴィルフリートに詰め寄った。

「クアドラード中佐、私はともかくって何か含みを感じますけど」

「い、いや他意はないんだ。別に君が屈強な戦士だなんて全く思っていないとも」

「それ、言ってるのも同然なんですけど。あんまり変な事言ってる奥さんに言いつけますよ」

「勘弁してくれ」

降参だと両手を上げるヴィルフリートにセレネは楽しそうに笑みを浮かべる。

「冗談ですよ。それにヴィクトリアさん一応訓練も受けてるんですよ。しかもかなり優秀です」

「そうなのか」

「はい。戦場に出る事になったと伝えても落ち着いていましたし」

そこでヴィルフリートに初めて疑問が生じる。

いくら何でも初めて戦場に向かう者が落ち着いているという事があるだろうか？

配置を見ても戦場の後方に配置される戦艦ではあるし、まだ実感がないという事かもしれない。

ヴィクトリアの素性はすでに調べが付いているという事ではあるが、記憶がなく怪我をする前はどこに居たのかも、生まれた双子の娘の父親も不明。

妊婦だった事を考えると流石にスパイというのはあるまいが。

「どうしたんです?」

「いや、何でもない。デイノ大尉、後方支援は重要な役目だ。よろしく頼む」

「了解です」

ヴィルフリートは余計な疑問を棚上げすると、自身の隊へと足を向ける。

余計な事を考えている余裕はない。

何故ならば、これから向かうエレボスにはヴィルフリートにとっても因縁深い相手が続っているのだから。



その命令を受けたヨハンはあまりに予想通りの展開に頭を抱えなくなる衝動を抑えきれなかった。

「我々グラオ・イリスだけで敵の本拠地を攻め落とせとおっしゃる訳ですか、ジュール司令」

《気持ちには分かる。命令を受けた時は俺も同じ気分だった。しかし今回は各勢力との合同作戦でもある。拒否はできません》

「拒否権なんて初めからないでしょうに。上層部は我々に功を競って討ち死にしろと？ 本来そんな曲解をしたくはありませんが、そうとしか受け取れませんよ」
送られてきた作戦概要に思わずそう吐き捨ててしまった。

襲撃前に統合、テタルトス、同盟の戦艦から同時に陽電子砲で砲撃を行い、敵が混乱した所に少数精鋭で三方向から襲撃する。

だが、問題は数だ。

グラオ・イリスから出撃するのはウリエルを含めた二隻の戦艦のみ。

しかもその艦はあくまで補佐を主任務としている為、実質的な戦闘はウリエル単艦で行う事になる。

あり得ない。

《今、動けるのがウリエルしかないんだ、仕方ないだろう。勿論すぐにも他の部隊を回すつもりではあるがな、上から押し付けられた任務や例の所属不明機の調査の所為ですぐに動ける部隊は少ない。他は『メークリウス』の件で動かせん》

「普段嫌ってるくせにいざという時は色々押し付けてきますからね。ハア、それを見越して動いているのなら、ウォーレン・マクベインは大したものですよ。一発殴りたくなる」

《ああ、存分に殴ってやれ。ついでに俺の分も一発頼む。とにかく出来るだけ早く増援の手配はする。開発中の新型も完成次第ウリエルに配備されるように念押ししておいたから安心しろ。今回の作戦は他の連中もいるから上手く立ち回れば被害も少なくて済む筈だ。レフティ艦長、負担が大きくて済まんが頼む》

「了解しました」

イザークからの通信が切れると同時にヨハンは抑えきれないため息を漏らした。

「とはいえそう上手くいくかな」

砲撃による拠点破壊と少数精鋭による奇襲攻撃。

作戦自体は悪いものではない。

しかしこれをウォーレン・マクベインが予測していないとはとても思えないのだ。

『マクベイン・エクスキューター』の規模がどの程度かはまだ判明していない。

だがあんな放送を行えば当然、各勢力を敵に回す事は誰にでもわかる筈。

真正面から戦えば勝ち目がないのが分からない程、ウォーレン・マクベインという男が節穴には見えない。

「もう一つ気になるのが、あの所属不明の新型との関連だな」

他のグラオ・イーリスの部隊も調査を行っているとは言っていたが、ヨハンの勤はこれらの機体と『マクベイン・エクスキューター』は関係があると告げている。

いや、此処までの経緯を考えても無関係な筈はない。

「という事はこの作戦中にも必ず出てくる筈だ。モビルスーツ隊にも注意を促しておかないとな」

同じ轍は踏めない。

不安要素はまだあるが、それでもやらねばならないのだから。

◇

アオイはいつの間にか船の甲板の上に立っていた。

広がる海。

透き通る青空。

どこかで見覚えがある。

此処は地球連合軍の航空母艦J・P・ジョーンズの甲板の上だ。

「何やってんだよ、アオイ」

「え？」

振り向いた先にいたのは懐かしい人物。
大事な仲間達。

「アウル……ステイング」

バスケットボールを片手にこちらを見ていた。

「どうした、そんな抜けた顔して？」

「アオイは何時だつて抜けた顔だろ」

「だな」

二人がこちらを見て楽しそうに笑っていた。

これは夢だ。

分かっている。

それでも、泣き出しそうになるのを堪える事が出来ない。

「アオイ、後は頼むぜ」

パスされたボールを咄嗟に受け取る。

「……ああ。分かってるよ」

彼らから託されたものがある。

だから――

「アウル、ステイング！」

どんなに手を伸ばしても、それが届くことは無い。

そのまま二人は笑ってアオイの元から去っていく。

「待ってくれ、俺は!!」

二人の背中に手を伸ばした所で飛び起きるように目を覚ました。

「ハア、ハア」

目の前にはデータが表示された所で止まっている机の上の端末の画面がある。

どうやら開発中の新型機の概要説明を見ていてそのまま眠ってしまったらしい。

「ハア、何で今頃あんな夢を」

二人が死んだ直後は確かにあんな夢を見る事は度々あった。

しかし最近はず夢自体見る事がめつきり減っていたのだが。

何かの予兆なのか。

そんな風に考えた自分を一笑に付すとさつきと片付けを始める。

「最近、色々あったし疲れてるのかな……あ、そろそろ大尉と打ち合わせの時間だし、

行くか」

机に飾られている皆で映った写真。

一瞬だけそれに目を向けるとアオイはもう一度、その誓いを口にする。

「大丈夫だ、アウル、ステイング。俺が守るからさ」

死後の世界なんてものがあるかは知らないが、もしかしたら気を抜くなと二人が警告してくれたのかもしれない。

だとしたらこつちもこれ以上情けない姿は見せられない。

「よしー」

気合いを入れ、先に逝った仲間達に笑みを浮かべるとアオイは足早に格納庫に向かった。

格納庫ではいつも以上の怒声と喧噪が待ち構えていた。

エレボス攻略準備の為に整備班はいつも以上に忙しいようだ。

Mk-IIの状態を確認したかったが、後回しにしてスウエンと合流する。

「お待たせしました」

「いや、時間通りだ。では早速は始めるか」

「了解です」

端末の画面に映るモバイルスーツ。

所属不明の新型機であり、アオイを追い詰めたパイロットの搭乗する機体。

格納庫でその性能を検証していたアオイとスウエンは改めてこの機体の厄介さに舌を巻いていた。

「厄介だな」

「ええ。従来の機体とは火力が違いますよ。しかもゲシユマイティツヒパンツアーやドラグーン装備まであるときてる」

アオイがボロボロの機体でありながら、あそこまで奮戦できたのはパイロットの経験不足もあるが、それ以上にドラグーンの性能をフルに生かしきれないデブリの中だったからだ。

恐らくあの機体の本領はまだまだあんなものではない。

その火力を生かした砲撃戦に徹すればフリーダムとも遜色ない。

並みのモビルスーツは近寄る事も難しいだろう。

「かと言って接近戦が弱い訳じゃない」

「だろうな。中尉の話では敵のパイロットはSEED持ちなのだろう?」

「ええ。しかもこの戦闘で痛い目に遭いましたからね。次はこう甘くない筈です」
ネオとの戦闘で辛酸を舐めさせられたあのパイロットは確実に強くなっている。

出来ればこれ以上の強敵となる前に仕留めたい所だ。

「まあそんなに甘くないだろうけど」

「アオイ、ちよつと来いよ!」

「班長?」

整備班長に呼ばれ、ついて行くとそこには生まれ変わった愛機の姿があった。

『イレイズガンダムMk-II』

アオイと共に戦場を駆けた機体が新たな姿で立っている。

生まれ変わったといっても細かい部分に変化はあるが外見はそのままだ。

「直ったんですか？」

「苦労したけどな。外見はまんまだけど中身はほぼAAAのパーツと交換したよ。後はお前に合わせて調整するだけだ」

どうやらエレボス攻略に間に合わせる為、かなり急ピッチで進めてくれたようだ。感謝しなければならぬだろう。

間に合わなければアオイは出撃すらできず、ウリエルで待機になっていたのだろうか。

早速、コックピットに飛び乗りOSを立ち上げる。

「これってW・S・システム？」

「おう、新型搭載予定のシステムをこっちにも載せておいた。これで新型に乗り換えでも違和感はない筈だぜ」

「ありがとうございます」

コックピットを覗き込む班長に礼を言いながら操縦桿を握り、感触を確かめる。

この駆動音。

この手に馴染む感触。

「やっぱりいいね」

「わかんねえなあ。AAAと殆ど同じだろうによ。これがメカニックとパイロットの違いなのかね」

「どうでしょう」

「お前、開発中の新型に乗ってもこいつが良かったとか言い出すなよ」

「それはないですよ。向こうの新型にだって思い入れはありますし。それでもこいつは特別かもしれないですけど」

懐かしい相棒の感覚を思い出しながら、昔との変化を確かめつつ調整していく。

「先に言つとくがこいつは急場しのぎの機体だ。新型が完成するまでのな。だから今度壊れたらどうにもなんねえぞ」

「分つてます。大切に使いますよ」

もう戦闘は間近に迫っている。

機体のVPS装甲を展開、白く染まったガンダムを見上げながらアオイは決戦に向けて準備を進めていった。

第7話 エレボス攻防戦

とあるホテルの一室で一人の青年が険しい表情でテレビのニュースに見ていた。

内容は今、誰もが注目しているテロリスト『マクベイン・エクスキューター』に関するものだ。

中身はあつてないようなもので青年も本気で見ている訳ではない。

しかし彼ら『マクベイン・エクスキューター』に関する情報は些細なものでも集めておきたかった。

「待たせたな」

部屋に入ってきたのは同年代の青年。

警戒しつつ部屋の外を確かめると、静かにドアを閉めて中に入ってきた。

「どうやら同盟、統合、テタルトスで合同作戦を行うらしい」

「それは予測の範疇だね」

「ああ。だが気になるのは『マクベイン・エクスキューター』側に大きな動きが確認できない所だ」

「という事は『エレボス』は囷かな」

「かもな。何か仕込みがあるのは確かだろう」

青年は自身の上着を羽織り、もう一度外へ向かおうとドアノブに手を掛けた。

「それを確かめてくる」

「一緒に行くよ」

テレビを消し、二人は連れ立って外へと歩き出す。

その部屋には荷物もなく、人が泊まっていた気配すらも感じられない程、冷たい空気だけが漂っていた。



作戦開始時間より少し前。

『マクベイン・エクスキューター』が決起した拠点エレボス近辺にウリエルが護衛艦と共に姿を見せていた。

エレボスは隕石を利用した基地で岩片から突き出るように建設された人工物が見え

ている。

周囲には大きな障害物もなく待ち伏せの心配はないようだが、反面こちら側も近寄って奇襲するというには難しい。

故に今回の作戦という事だ。

レーダー範囲外から砲撃を加え、敵が混乱した所を一気に叩く。

そこで重要になってくるのが機動力という訳なのだが、

「アレが新装備？」

格納庫で出撃準備を整えていたアオイはイレイズの為に用意された高機動用装備を前に思わずそう呟いてしまった。

「ああ。新装備の『ウイングス』だよ。お前の新型機に搭載される予定のウイングスラスタアの試作版さ」

「まるで天使の翼みたいだな」

手渡された資料に目を通す。

『ウイングス』は翼のような大型スラスターが2基搭載。

他の追従を許さない圧倒的な機動性を誇る反面操作性を著しくダウンさせるという欠点もある。

さらに翼の部分はシールドとしても使用可能であり、装備としての防御性能も高いよ

うだ。

「なるほど。昔に使ってたスカッドストライカーみたいなものか」

アレも加速性には優れていたが、操作性は滅茶苦茶悪かった。

正直パイロットの負担を無視したようなあの装備については言いたいことが山ほどあったが、それでも使いこなすのがパイロットの仕事だと何度もスウェンに言われたものだ。

『ウイングス』の細かい動きの補正自体はW・S・システムの方でやってくれるはずだ。最初は面食らうかもしれないがすぐ慣れるだろう。問題は機体の方だ。もしも何か違和感を感じたらすぐに戻って来い。いいな?」

「了解です」・

コックピットに乗り込み、機体を起動させるとモニターの端にネオの姿が映った。

今回は出し惜しみはしない方針のようで最低限の護衛を残し、ネオも最初から出撃するつもりのようなのだ。

《3分後に各艦からの一斉砲撃を行う。砲撃がエレボスに打撃を与えたと同時にモビルスーツ隊が出撃する。例の新型機が出てくる可能性もある、全機油断するな》

「了解」

ウリエルの正面にある陽電子砲の砲門が解放され、発射シークエンスが開始される。その時アオイはエレボスで何か光ったように見えた。

画像を最大拡大して見ると何か機械の枝のような棒がエレボスの周囲から伸びているのが分かる。

「何だ？」

アレが何かは分からない。

だが『マクベイン・エクスキューター』が用意していたものであるのは間違いない。嫌な予感が膨らんでくる。

それを伝える間もなく、三方向から陽電子砲が発射された。

エレボスへと一直線に進む陽電子砲。

しかしそれが目標に直撃することは無かった。

突如エレボスを覆うように展開された光の膜によつて防がれてしまったのだ。

「まさか、アルテミスの!？」

見た瞬間にそのカラクリを見破ったネオの声でアオイにもようやく正体がつかめた。

あれはかつて宇宙要塞アルテミスで使用されていた『光波防御帯』と呼ばれる防御装置だ。

非常に堅牢な防御能力を持ち、アレを突破するには同種のビームシールドで干渉するか、発生機器を破壊するしかない。

《何か仕掛けを用意しているとは思っていたが……艦長、出撃許可を！　アレを排除しない限り砲撃は通用しない！》

《モビルスーツ隊出撃！　エレボスの光波防御帯の発生装置を破壊しろ！》
ハッチが解放され、カタパルトへ運ばれた機体が次々と発進していく。

《中尉、光波防御帯を突破するにはビームシールドが必要になる。今、ウリエルでそれに該当する機体はイレイズと大佐のオウカだけだ。雑魚の相手は俺がする、中尉はエレボスに向かえ》

「了解しました」

イレイズがカタパルトに運ばれ、オペレーターの合図を待つ。

《アオイ君、気をつけてね。進路クリア、発進どうぞ！》

「ありがとう、アオイ・ミナト、イレイズガンダム行きます！」

フットペダルを思い切り踏み込み、カタパルトから射出されると体に掛かるGに耐える為、歯を食いしばった。

同時に背中の翼が開き、一気に速度を上げる。

「なんだよ、この加速は！」

その加速は今までの装備の比ではない。

圧倒的な速度で移動するイレイズにアオイは驚愕しつつも、しっかりと操縦桿を握ってコントロールする。

グイグイと後続の機体を引き離し、エレボスまでの距離を詰めていく。

「反応は良い。けど装備の速度に機体がついていけないか。まあそれはシステムの方で補正してくれるおかげで影響は最小限に抑えられている。あとはこっちで合わせて行くしかない」

方向変換や急制動など機体の挙動を確認、調整をしながら前進するイレイズの姿を捉えたのか、敵のモビルスーツが迎撃に現れた。

「フローレスダガーにリゲル……あの新型はいないな」

ならばこんな所で足止めされている訳にはいかない。

ビームサーベルを抜き、敵の陣形の中へ突撃する。

撃ちかけられた敵のビームを速度で振り切り、懐に入って胴を薙ぐ。

ビームサーベルによって斬り裂かれたフローレスダガーは爆散し、発生した爆煙に紛れるようにビームライフルを連射する。

完全に虚を突かれた敵陣は隊列を乱し、防衛網に穴を空けた。

「よし」

空いた穴を見逃さずに飛び込むと目標であるエレボスへの路を駆け抜ける。

逃がさないとリゲルが飛行形態で追いかけてくるが、加速したイレイズには追いつけない。

「落ちろー!」

宙返りし背後に向けて高エネルギー収束ライフルを発射、追ってきたリゲルを一網打尽に吹き飛ばした。

そのまま敵の防御を潜り抜け、光波防帯の間近まで到達する。

「何だ、敵の防御が甘い。いくら新装備が速いからってこれは——」
誘われている?

今の状況に強い違和感を持ち始めながらも、進み続けるイレイズ。

だがそれを遮るように強烈なビーム砲が撃ち込まれた。

「ッ!?!」

咄嗟にシールドを構え、ビームを受け止めるとイレイズを待ち受けていたとばかりにモビルスーツが一機待ち構えていた。

それはコロニーの残骸で戦った奴とは違う。

不審船と遭遇した際に現れた機体だ。

あの時に戦った奴は白い装甲を持っていたが、こいつは紅い————ワインレッドの装

甲を持っていた。

「紅いモビルスーツ？」

アオイの脳裏にかつて対峙した機体が浮かび上がる。

だがアイツではない。

奴の色は血のような紅だったし、機体から滲み出る殺気の質が違う。

「やつぱりあの機体群はマクベイン・エクスキューターのものだった訳かよー」

紅い装甲の機体に取り込んでいた人物、ルドラ・アシユラもまた相對する敵の姿に眉を顰めた。

「イレイズガンダムか。……アスト・サガミ、いやアオイ・ミナトか」

思わぬ相手。

いや、乗っている機体自体はルドラにとって因縁のある機体ともいえる。

どちらにせよ、都合が良い。

実際に扱ってこそ、データだけでは分からないものも見えてくるというもの。

「出来ればコーディネイターパイロットの方が良かったが、まあこの機体『リグ・シグルド』の性能を見せてもらうには丁度良い敵だ」

『リグ・シグルド』

ヤキン・ドゥーエ戦役で開発されたモビルスーツである『シグルド』のデータを基に

開発された新型機。

その性能は量産機でありながらも非常に高性能。

「行くぞ」

動き出したリグ・シグルドは挨拶代わりとばかりに腹部複列位相砲を撃ち込んだ。た。

「当たるか！」

強烈な一撃を紙一重の所で回避し、サーベルの間合いまで距離を詰めようと前に出る。

しかしリグ・シグルドからの意外な攻撃がアオイの前進を阻んだ。

腕部に装備されているビームカッターである。

伸びた光刃がイレイズの急所を狙って一直線に突き進んできたのだ。

「なっ！」

虚を突かれたアオイは咄嗟に機体を捻る事で致命傷を避けた。

しかしビームカッターの斬撃はイレイズの肩装甲を掠め、アオイはバランスを崩してしまふ。

それはルドラにとっては絶好の隙。

「貫った！」

両手からビームカッターを出現させ、イレイズに向けて斬りかかる。

「舐めるな！」

アオイは素早く操縦桿を動かし、スラスターユニットを前面に移動させるとビームカッターの一撃を翼の部分で防御した。

「スラスターユニットで防御しただど!? シールドとしても使用できるという訳か」

「離れろ！」

一瞬硬直したリグ・シグルドに体当たりで引き離し、サーベルを上段から振り下ろす。それをビームシールドで受け止めたルドラは油断のない目付きでイレイズを睨みつける。

「なるほど、アオイ・ミナト。その忌まわしい機体を与えられているだけはある」

「こいつ、強い！」

お互い一撃を受け止めた膠着状態。

何度も離れ、そして剣戟を繰り返していく。

幾重もの斬撃の鋭さが互いの力量を如実に示している。

紛れもない強敵相手に二人の戦闘は激しさを増していった。

◇

先行したイレイズがリグ・シグルドで接敵した同時刻。

三勢力から発進したモビルスーツ隊は『マクベイン・エクスキューター』の部隊と激突。

エレボスを巡る攻防は一気に乱戦へと雪崩れ込んだ。

そんな中でエレボスに向かっていったスウエンのAAAとネオのオウカは再びあの機体と相対していた。

「あの機体は……」

「大佐と中尉で戦った敵ですね」

進路を妨げるように立ちふさがったのは特殊装備を持つエース機。

クロム・マイルの駆る新型機だった。

「今度は負けん！ この『シグルド・グラーフ』の真の力をみせてやる！」

『シグルド・グラーフ』

リグ・シグルドをベースに開発された強化兵及びSEED専用モビルスーツ。

破格の高性能機であるリグ・シグルドをより強化し、常人を上回る力量を持つパイロットであろうとも100%の力を発揮できるように調整されている。

「いけー！」

背中のドラグーンを射出し、スウエンとネオを囲い込むように配置された砲塔から一斉のビームが発射された。

「スウエン！」

「ッ！」

咄嗟に飛びのく二機。

しかしそれをさせまいとシグルド・グラーフは背中の砲塔での攻撃を開始する。

ドラグーンとビーム砲の連撃。

降り注ぐビームは二機が逃れる隙間すら奪う、まさに暴風雨そのもの。

しかも的確。

完全に二機の退路を見切った上でそこに砲撃を繰り返してくる。

逃がさないとばかりに作られた砲撃による檻だ。

この状況ではあくまで防御に徹する他ない。

「中尉の言っていた通りになった。このパイロット、前よりも手強い！」

「貴様には借りがあったな！ 此処で借りは返させてもらおう！ その後であの白い奴

だ！」

オウカへと砲撃を集中、さらにビームライフルでスウエンの動きを阻害。

攻撃の手を緩める事無く、二機を追い込んでいく。

「チツ」

「貴様の空間認識力の高さはもう分かっている。無駄にドラグリーンを使う愚は犯さん！」

「舐めないでもらおうか！」

ネオとてただ追い込まれている訳ではない。

最初こそ防戦に徹していたが、徐々に反撃も加えていく。

絶妙な動きで機体を操り、クロムの砲撃を紙一重で回避しつつ、反撃も忘れない。

さらにスウエンとの連携が圧倒的な火力を持つシングルド・グラーフを抑え込んだ。た。

まるで綱渡りのような攻防。

そんな膠着状態に先に焦れたのは経験の浅いクロムの方だった。

「チヨロチヨロと！ 逃げるなアアア!!」

砲撃でオウカを釘付けにし、ビームサーベルで斬りかかる。

オウカは避ける素振りすらない。

確実に仕留めたと確信した瞬間、上方からの一撃がシングルド・グラーフに襲いかかった。

「グアアアア!? ぐう、何!？」

いつの間にかシグルド・グラーフの死角に回り込んだスウエンがグレネードランチャーを叩き込んできたのだ。

「貴様らー！」

「まだまだ甘い。しかしお前は危険だ。此処で仕留めさせてもらおう」

二丁のビームライフルシューターに持ち替え、同時にワイヤーアンカーを射出。

シグルド・グラーフの腕に巻きつけると力任せに、引っ張り上げた。

「なっ!?!」

ワイヤーによって無理やり体勢を崩された所を狙いビームライフルシューターの射撃がシグルド・グラーフに襲い掛かる。

絶え間ない連撃が肩装甲を撃ち砕き、脚部に大きな傷を刻む。

一瞬の判断ミスから形勢は逆転し、一転してクロムが追い込まれてしまった。

迂闊な自分自身に対する怒りで、砕けそうなほどに歯噛みする。

「俺は……」

過去の情景が脳裏を刺激し、怒りをさらに増幅させる。

「俺はアアア、もう二度と!!」

咆哮と共に弾けたのはクロムのSEED。

感覚が今までとは比較にならないほど研ぎ澄まされ、すべてを同時に知覚する。

「ウオオオオ!!」

崩れた機体を無理やり立て直し、完璧なタイミングでドラグーンを操作。砲撃によってスウエンの攻撃のタイミングを狂わせた所にビームサーベルを一閃する。

「ッ!?!」

ギリギリのタイミングで反応したスウエンだったが、腹の部分を浅く切り裂かれてしまった。

さらにクロムは止まらない。

続けて蹴りを入れ、上段からの一撃。

次から次に繰り返される斬撃がスウエンのAAAの装甲を削っていく。

「これはSEEDか!?!」

先ほどまでとは動きも攻撃の精度もまるで別人だった。

懐に入られたスウエンは盾を構えて下がるしかない。

だが獵犬のように食い下がるシグルド・グラーフを引き離す事が出来ず、無数の斬撃によって見る見る内にシールドが傷だらけになってしまう。

「スウエン、下がれ!」

ドラグーンの包囲がスウエンに向けた隙にネオはガトリング砲でAAAから引き離

すとバズーカ砲を撃ち出した。

発射した砲撃は途中で弾け、細かい弾となってシグルド・グラーフに襲い掛かる。

「チツ」

いくら感覚が研ぎ澄まされていたとしても、細かい散弾を避ける事は難しい。

その為、クロムは舌打ちしつつも下がる以外の選択肢を取る事が出来なかった。

「助かりました、大佐」

「対SEED戦術、頭に叩き込んでいたつもりでも直接相対していると簡単にはいかないか」

SEEDの存在が戦場で確認されてもうすぐ10年近く。

味方であれば頼もしい存在だが、敵に回せば恐ろしいのがSEEDである。

そこで一般の兵士達でもSEEDに対抗できるようにと考え出されたのが対SEED戦術と呼ばれる。

内容としては大まかに二つ。

戦う時は極力一対一は避け、絶対に接近戦は挑まない。

距離を取り、散弾で動きを止めて削っていくというものだ。

SEEDの反応速度は異常である。

接近されれば反応出来るのは同じくSEEDか強化兵くらいだ。

故に距離を取りつつ、反応出来ても避けきれない散弾砲を使い足を止めて援軍が来るのを待つか。相手が動けなくなるのを狙うというもの。

消極策にも聞こえるがそれだけSEEDの力が脅威という事。

それはヤキン・ドゥーエ戦役で叩きだされた戦果が物語っている。

これらの基礎を作ったのはテタルトス月面連邦国のエースパイロットリベルト・ミエルスという男だ。

彼の対SEED戦術がいつの間にか各陣営にも注目され始め、今では根無し草の傭兵ですらこれを取り入れているという。

「おのれ!!」

撃ち込まれる散弾を防御しながら、ドラグーンを操るクロム。

しかし砲撃から逃れ自由になったネオを相手にSEEDを発動しているとはいえドラグーンで戦うにはクロムはまだ経験不足すぎた。

「そー!」

ビームライフルの射撃が正確に砲塔を捉え、叩き落としていく。

それはシグルド・グラーフが作り出した砲撃の檻に穴が空くも同然。

「今度こそ仕留める!」

そこに飛び込むAAA。

ビームライフルショーティーの銃口をコックピットへ向けながらトリガーに指を掛けた。

勿論、クロムもそれは知覚している。

先ほどから回避運動を取ろうとスラストターを噴射させていた。

しかし撃ちかけられる散弾がそれを許さない。

「グッ、回避が間に合わない!？」

銃口から発射された光がコックピットに迫り、クロムはある程度の損傷を覚悟する。

だが、その前に割り込んできたモビルスーツがいた。

「アハハハハハハハハハハ!!!」

狂ったように響き渡る哄笑。

掛かる負担などお構いなしの急加速で戦場に飛び込んできた機体はAAAに蹴りを入れ、さらにビームサーベルで斬りつけてきた。

「新手!？」

斬撃を飛び退いて回避したスウエンは姿を見せた機体に瞠目する。

「……ガンダム」

特徴的な頭部は間違いなくガンダムのもの。

そして同時にその機体はどこか見覚えのあるものだった。

「……データだけ見たことがある」

「ええ。確か月面紛争の際に使用された——」

二機と相対するガンダムのコックピットに座る男は興奮のあまり笑みを止める事が出来ない。

何故ならば久しぶりの戦場。

男が暴れる事が出来る最高の舞台。

「やつと、やつと来たぜ、この時がアアア！ ああ、焦がれる程に待ちわびた。この俺が、アルド・レランダーが再び戦場に立つこの時をなアアア!!!」

狂獣。

かつてそんな忌み名で呼ばれた男は混乱と破滅を戦場にもたらす為、再び戦場へと姿を現した。

◇

予想外のエレボスの守り。

これにより三勢力は想定外の攻勢を強いられる破目に陥った。

そもそもが奇襲を想定して組まれた部隊。

精鋭とはいえ数は十分とはいえず、思うような進撃を行う事が出来ずにいた。

それは『マクベイン・エクスキューター』の首魁ウォーレン・マクベインの手腕もあつたのだろう。

だがそんな中、イレイズを除き最もエレボスに近づいていたのはテタルトスの部隊。先頭に立つのはヴィルフリート・クアドラードの駆る銀色のジンⅢ・レーヴェだ。

「マクベインめ。あんな仕掛けを」

リゲルを切り捨てながら、エレボスを睨みつける。

元々テタルトスに属していたウォーレン・マクベインとヴィルフリートは面識がある。

兄であるファウストに心酔していたウォーレンは何かにつけてヴィルフリートに絡んできたのだ。

今でこそ気にならないが当時はそれが鬱陶しくて仕方がなく、昔から口論が絶えなかった。

特にヴィルフリートが統合からテタルトスへ帰還した際は、親の仇のごとく激高したと噂に聞いている。

「だがその因縁も此処まで。決着はつけてやる」

無数に浴びせかかる敵の砲撃を掻い潜り、エレボスへと接近したヴィルフリートは激しい戦闘を繰り広げる二機のモビルスーツを目撃する。

「アレはイレイズガンダム——アオイ・ミナトか。もう一機が報告に合った新型機だな」

二機のモビルスーツは高速で動き回りながら、砲撃と剣戟を繰り返している。

「アオイ・ミナトは当然だが、あの機体のパイロットは何者だ？」

攻防を見ているだけでも明らかに普通のパイロットとは一線を画しているのが分かる。

『マクベイン・エクスキューター』のエースだろうか。

「任務はエレボス攻略だ。悪いが行かせてもらう。なによりお前も俺になど助けてもらいたくはあるまい」

その場はアオイに任せられたヴィルフリートはビームシールドを展開し、エレボスの光波防御帯を突破しにかかる。

ビームシールドと干渉し圧力と稲光が発生するがスラスターを噴射し、無理やり機体

を押し込む形で突破した。

後は剥き出しになった発生機器を破壊すれば光波防御帯を維持出来なくなる。

「これでエレボスは丸裸だ！」

ビームライフルによる攻撃が発生機器を捉え、次々と吹き飛ばしてゆく。

それによつて光波防御帯は消失。

これでエレボスを守るものはない。

「しかし此処までの乱戦になつた以上、予定通りの遠距離砲撃は出来ない。そうなれば要塞内を制圧するしかないか」

「行かせる訳にはいきませんか」

当然の如く立ちふさがる敵。

ヴィルフリートの前にはイレイズと戦っているものと同じ『リグ・シグルド』が姿を現していた。

「新型か」

「あの名高い『銀獅子』と戦えるとは光荣というもの」

「誰だ、貴様？」

「失礼。私の名前はサルワ・アシユラ、『マクベイン・エクスキューター』の末席を汚す者です。以後お見知りおきを」

丁重な言葉使いだが、油断出来ない。

その所作からも目の前にいるものが強敵である事は明白だった。

「貴様も厄介そうだな。ウォーレンは出てこないのか？」

「答える義務などありませんね」

手の甲から伸びたビームカッターによる攻撃を躲したジンⅢ・レーヴェもまたビーム砲で牽制しつつサーベルを抜く。

両者は互いの獲物を構えてスラストスターを吹かせると正面から激突した。



戦場は拮抗状態となり、各地で激しい戦闘が繰り広げられる。

そんな中を一隻の高速シャトルが突入してきた。

「高速シャトルだと？」

「まさか民間機か!？」

通り過ぎるシャトルの姿を目撃した者たちは一様に目を疑う。

それはそうだ。

こんな戦場のど真ん中を護衛も付けないシャトルが飛ぶなど自殺行為だ。にも拘わらずシャトルは悠々と戦場を駆けていく。

「おい、そのシャトル！ 見ての通り此処は戦場だぞ、さつさとこの空域から逃げろ！」

気をつかった統合のパイロットが呼びかけるが、シャトルからの返答はそんな彼にして正気を疑うものだった。

《気遣い感謝する。だがその必要はない。何故ならこちらの目的地はエレボスだからだ》

「は？！」

《それにこちらを気遣う前に目の前の敵に集中した方が良い。以上通信終わり》

それきりシャトルからの通信は途絶え、シャトルは戦場を突っ切っていく。

統合のパイロットは二の句も告げずただ呆然と飛び去るシャトルを見送った。

明らかに無謀と言わざるを得ない。

それでもシャトルは足を止める事無く、無数の閃光が飛び交う中に飛び込んでいった。

第8話 いくつかの閃光

それは誰の目から見ても、明らかに異常な行動だった。

何の武装も持たないただのシャトルが戦場の中心目掛けて突っ込んでいくのだから、自殺志願者と勘違いされても文句は言えない。

それでも速度を一切落とさず、進む姿はある意味で大したものだ。

だがそんなものを見逃すほど『マクベイン・エクスキューター』の面々は甘くなかった。

異常な行動故に敵の作戦ではないかと勘ぐるのは無理のない事だろう。

数機のモバイルスーツがライフルの銃口を向けながら、シャトルを撃墜しようと近づいてくる。

「くるぞ。数は2」

「了解」

シャトルは後部に設置していたブースターを切り離すと曲芸染みた機動でモバイル

スーツからの攻撃を躲しながら前進し始める。

一撃、二撃とすり抜けていく様はモビルスーツのパイロット達からすれば信じがたい光景だろう。

ただのシャトルがモビルスーツの攻撃を躲して、突き進んでいくのだから。だが当然機体を操るパイロットや搭乗員にも負担は掛かる。

「くっ、結構きついな」

「モビルスーツに乗って戦うよりは楽でしょ」

「いや、こっちのがきつい。戦ってた方がマシだよ」

シートに体を固定しているだけというのは精神的にもキツイものがあるらしい。

隣に座る搭乗員の言葉に操縦していたパイロットが笑みを浮かべるとさらに速度を上げるべく、操縦桿を押し込んだ。

「じゃ、もう少し速度を上げるからしっかり捕まってる」

「ああ、任せる」

アクロバットな機動でモビルスーツからの攻撃をすべて避けたシャトルは包囲網を突破し、そのままエレボスの格納庫に突撃。

船体を地面で擦りながらも無事に内部へと侵入を成功させた。

「流石だな、俺は内部を調べる」

「こっちはモビルスーツを奪っておくよ」

「奪うならリゲルにしとけ。アレは機動力も高くて離脱しやすい」

「了解」

搭乗員の青年はシャトルのコックピットから飛び出すと慣れた動きでエレボス内へ足を踏み入れた。

◇

アルド・レランダー。

かつて月で起こった月面紛争と呼ばれた戦いで当時テタルトスの新型機『ベテルギウス』を奪取した『狂獣』の異名を取ったエースパイロットである。

そして搭乗している機体の名は『ベテルギウス』

テタルトスで開発されているエース用モビルスーツ群『LFSAX』シリーズのプロトタイプに当たる機体だ。

昔とは違いその背中にはスラスタ以外以外の装備はなく、武装もライフルやサーベルといった基本装備のみ。

それでもベテルギウスから発せられる気配は決して油断できない凄みがある。

当時任務で月面付近にいたネオやスウェンもアルドや搭乗していた機体の名前は勿

論知っていた。

その後の顛末も。

「処刑されたと聞いていたがな」

「まあ色々あつてよお、最近まで牢獄の中で軟禁状態だったんだよ。だからさあ！」
「狂気すら感じ取れる笑みを浮かべながら、アルドは近くにいたスウエンに向かって
ビームサーベルを振りかざした。

「ストレス溜まりまくってんだよオオ!!」

アルドの強襲に後退して逃れたスウエンはビームライフルショーテイーを叩き込む。
至近距離からの攻撃。

仕留める事は出来ずとも動きを鈍らせる効果はあつた筈。

だがそんなスウエンの目論見はアルドの想像以上の動きによって覆された。

「当たるかよ!!」

「避けた、あの位置で!？」

ベテルギウスは最小限の動きだけでビームを回避し、再びスウエンに攻撃を繰り返して
てくる。

これらの動きは機体性能だけのものではない。

パイロットの異常な反応だ。

「SEED、いや」

SEEDにしては爆発的な反応の差異がない。

スウエンにはこれまでの経験でSEEDなのか、そうではないのかが理解できる。だから簡単に正解にたどり着いた。

「という事は強化兵か」

「ほう、大した洞察力だな！」

「貴様が分かりやす過ぎるだけだ」

軽口を叩くものの、内心焦りが募る。

ビームライフルシューティーを連射するが、掠りもしない。

化け物染みた反応速度で機体を操り、ビームの射線から逃れているのだ。

さらに振るわれるサーベルは流石に鋭く、的確にこちらの急所を狙ってくる。

機体性能も向こうが上。

そしてネオもシグルド・グラフの相手でこちらを掩護する余裕はないとなると――

「どうした？ 逃げてばかりかよ！」

「ッ！」

スウエンはベテルギウスを近づけないよう牽制しながら、反撃の糸口を探ろうとす

る。

だがそれすらも見透かしたとばかりにアルドは懐に入った瞬間、AAAを蹴り飛ばした。

「グッ」

「アハハハハ、どうした、どうした！ こんなものか！」

「舐めるな」

体勢を崩しつつワイヤーアンカーを近くの敵機に飛ばし、こちら側に引き寄せると足場として踏みつける。

続けて漂うデブリにアンカーを飛ばすと引き寄せた反動を利用し、ベテルギウスを翻弄しながらライフルを連射した。

「曲芸かよ！ いいねえ、お前は俺を飽きさせない。楽しいなあー！」

「遊んでいるのか、この男は」

アルドの楽しそうな哄笑に言い知れぬ嫌悪感を抱く。

スウエンとて今の今まで銃を取って戦ってきた。

敵の命を奪い、仲間を奪われてきた。

だから戦いそのものを否定する権利はないのかもしれない。

それでも奪う事を、戦いを楽しんでいると思つた事は一度たりとも無いのだ。

「貴様を生かしておいた事はテタルトスのミスだな」

「ほう、ではどうするんだ？」

「決まっている、俺が此処で落とすだけだ」

「そうかよ、お前の名前は？」

「スウエン・カル・バヤン」

「俺を落とすというならやってみろ！ 出来るものならな、スウエン!!」

闘志を漲らせたアルドとスウエン。

刃を構えた両者は何度となく激突を繰り返していった。



エレボスで起きた攻防戦は徐々に『マクベイン・エクスキューター』側が優勢になりつつあった。

初期こそ思惑通りにいかなかったとはいえ、総合的な数自体三勢力側の方が上。

しかも送り込まれたのは精鋭部隊であり、いかに高い士気を維持していた『マクベイン・エクスキューター』と言えども容易く撃退する事は出来なかった。

にも関わらずアオイの目の前にいる紅い機体のパイロットは焦る事無く、冷静にこち

らの攻撃を捌いてくる。

「やっぱり何かおかしい」

「どうした、攻撃の手が緩んでいるぞ?」

あからさまな挑発は聞き流す。

そもそもこいつの戦い方からして気に入らない。

何度も攻防を繰り返せば敵の好む戦法くらいは分かってくる。

こいつは根っから近接戦を好むインファイターだ。

なのにこいつの攻めはどこか手を抜いている。

「お前の方こそ何を考えてる? 手を抜いてる事くらいバレバレだぞ!」

「ふん、なるほどな。ナチュラルとは思えん実力と経験からくる洞察力。侮れないな」

ルドラはどこか感嘆した声を出しつつ、周囲を見渡すと統合、テタルトス、同盟と各

勢力がエレボス内部へと侵入しようとしている姿が見える。

「今少しだな」

「戦闘中に余所見か!」

横薙ぎに払った一撃をシールドで弾いたルドラはお返しに上段からビームカッター

を叩きつけた。

「お前達は何をしようとしている? 『マクベイン・エクスキューター』の目的は何な

んだ!!」

「我らが首魁殿が宣言した通りだとも。間違った今の世界を正すのさ、力を持つてな」

「力を持つて正す? 結局ただのテロって事だろうが!」

「何を言う、元々あつた本来の姿に戻すだけだ。まあ貴様ののような劣等種には理解できるとは思っていない」

「そんな勝手な理屈が理解できるものか!」

何処までも見下した物言いにカチンとくるが、これ以上は何を言っても無駄なのだろう。

振り切られたビームカッターをシールドで力任せに弾き飛ばすとサーベルを下段から斬り上げた。

光刃がリグ・シグルドの装甲を抉り、撃ち込んだイーゲルシュテルンがライフルを破壊する。

「舐めるな、ナチュラル風情が!」

体勢を崩しながらもイレイズの腹に蹴りを入れて吹き飛ばすと、シールドのビームクローを叩きつけてきた。

アオイは咄嗟に機体を寝そべらせると、光爪が装甲になぞるような傷がつく。

「ッ、この程度」

「ゴキブリのようにしぶとい奴だ！」

「なるほど、結構熱くなりやすい性格みたいだな。それにナチュラルが嫌いな典型的なコーディネイターか」

「貴様風情が俺を見透かすつもりか。恥を知れよ、俗物が!!」

リグ・シグルドの腰部から放出された物体にアオイは自分の分析が間違っていた事を知る。

こいつは単純なインファイターではない。

インファイトを好むがどのレンジにも対応できるオールラウンダーだ。

「いけー」

数基の砲台が腰部から切り離され、イレイズに向かって押し寄せてくる。

「ドラグーンまで使えるのかよ」

「貴様のようなナチュラルと一緒にしないでもらおうか！」

「動き、この精度は!?!」

「舐めるな。第二世代以降しか操れん情弱な連中とは違う！」

ドラグーンシステムは非常に強力な武装ではあるが扱いには個人差というものが顕著に表れる。

その理由がインターフェイスの改良だ。

これによって空間認識力に関係なく使用可能になったが、一般のパイロットが使うには機械的な動きになり、読みやすくなる。

反面ドラグーンを操る事を得意とするパイロットが使用すると持ち前の空間認識力によってより複雑かつ精密な動きになるのだ。

ルドラが操るドラグーンは後者。

高い空間認識力を有している事を示す、高度な精度を見せていた。

「ッ!？」

アオイは機体を巧みに動かし、ドラグーンの射線から逃れようと機体を動かす。

幾つかの砲撃が機体を掠めるもかまわず二基の大型スラスターを最大出力に引き上げ、その場から離脱に成功する。

だがそれこそルドラの狙い。

離脱方向を予測し、腹部の複列位相砲を叩き込んだ。

「これで終わりだ、ナチュラル!」

アオイは咄嗟にシールドを切り離し、複列位相砲の前に投げつけた。

砲撃はシールドによって弾かれ、難を逃れたアオイはそのまま加速。

リグ・シグルドの懐目掛けて突撃する。

「オオオオオ!!」

「ッ!？」

サーベルを一閃。

虚を突いた一撃がリグ・シグルドを捉え、左腕を斬り飛ばした。

「チツ、仕留めきれなかった!」

「な、に」

予想外の損傷がルドラの思考を一瞬だけ氷つかせた。

そして次の瞬間、湧き上がってきたもの。

それは怒り。

機体を傷を付けられた事以上にあんな奇襲まがいの一撃に引つかかった自分の無様

さが許せなかった。

抑えきれない怒りと憎悪がルドラの中に満ちていく。

「貴様アア!!」

殺す!

必ず殺してやる!

溢れ出る殺意を纏い、イレイズに向かって報復を開始しよう構えた。

だが、それを中断させる通信が入ってきた。

《ルドラ、頃合いです》

「シルヴィア！」

思わず言い返しそうになるが、ルドラはそこでグツと堪える。

見れば敵がエレボスへ突入し始めたのが見えた。

ならば目的はすでに達した事になる。

此処で感情に流される程、愚かではない。

「……退くぞ。クロムとアルドにも連絡しておけ」

《了解》

「逃げるのか！」

「次は必ず殺してやる。次があればだがな」

リグ・シグルドはそのまま反転、即座に戦域から離脱していく。

それは他の戦場でも同じであった。

マクベイン・エクスキューターの機体が少しづつ戦域から離れようとしていた。

「離脱している？ 何で？」

やはり何かがおかしい。

本拠地がここエレボスであるならばマクベイン・エクスキューターは死にもの狂いで

守ろうとするのが普通だ。

しかし戦闘開始当初から連中から本気を感じなかったのだ。

「やはり誘われている」

アオイの考えは的中していた。

ずっと感じていた違和感の正体に辿りつき掛けた時、それを証明する通信がこの戦域に集まった全軍に流れた。

《エレボスを攻めるすべての勢力に伝える。今すぐに離脱しろ、これは罠だ》

通信機から聞こえてきたのは男の声だ。

機械不良の所為か掠れている為に声の主を特定する事はできそうにないが、男である事は間違いない。

《エレボス内部には複数の核爆弾が後、数分で自爆するようにセットされている。今すぐに逃げろ》

当然、正体も告げずいきなり通信してきた者の言葉を鵜呑みにする事はできない。

それはどの勢力も同じ事。

特にエレボスの脅威を何としても排除せねばならないテタルトスにとっては簡単に信じる訳にはいかない話だった。

しかしサルワと戦っていたヴィルフリートは即座に判断を下す。

「この通信は恐らく本当だ。新型が突然退いた理由も敵の当たりが弱いのも納得がい

く。艦長、すぐに撤退しろ」

核爆弾が爆発すればエレボス諸共吹き飛ばすことになる。

今回の敵の狙いはそれだ。

初めからエレボス自体が囷であり、こちら側の戦力を削る事が目的だったのだ。

《すでに撤退命令を下しております》

「判断が速いな」

《いえ、実は臨時で同行していたランゲルト准尉がこの通信は正しいから撤退すべきだと進言してきて》

「ランゲルト准尉が？ その根拠は？」

《本人もよく分からないそうなのですが、この声の主は信頼できると感じるらしく

……後はこれまでの敵軍から感じた違和感についてもこれで説明可能になると》

「……その判断は正しい。エレボス内部に侵入した部隊にも急いで撤退命令を出せ」
《了解》

通信が切れると同時にデータが一齐に送信されてきた。

エレボス内部の詳細データだ。

中央に核爆弾が仕掛けられており、それを解除する時間はないようだ。

「ご丁寧な事だ。それにしてもベルリン条約は無視か。マクベインめ」

すでにエレボス内部にはかなりの数の戦力が入り込んでいる。その中にはヴィルフリートが鍛えてきた部下も含まれていた。今から脱出が間に合うか。

しかも一度侵入した奴を逃がさないように『マクベイン・エクスキューター』の機体が脱出を阻んでいた。

「さっせんで」

脱出してきた味方機を襲撃する敵モビルスーツをライフルで撃墜、さらにこちらに群がってきた部隊をビーム砲を撃ち込んだ。

だがそれでも敵は怯まない。

むしろ撃墜覚悟で突撃してくる。

「命が惜しくないのか！ このままだと貴様らも死ぬんだぞ!!」

「それがどうした!」

「すべてはこの世界を正す為!!」

何を言っても無駄。

彼らに話は通じない。

「くそー!」

すべての味方が脱出するまでは、残りたい所だがあまり長居をしてはヴィルフ

リートが巻き込まれる。

その時、別方向から発射された強烈な一撃が敵部隊を丸ごと吹き飛ばした。

「何？」

高エネルギー収束ライフルの銃口を向けていたのはヴィルフリートにとってある種因縁の相手であるイレイズガンダムだった。

続けざまに撃ち込んだ収束ライフルの砲撃。

数機のモビルスーツを薙ぎ払い、脱出してきた味方の離脱を掩護する。

「アオイ・ミナト」

『銀獅子』ヴィルフリート・クアドラード」

かつては殺し合った相手。

言いたいこともあるのは当然の事だった。

しかしアオイはそれを詮無い事だと割り切る。

相手からすれば殺したいくらい憎い相手なのだろうが、それは戦い続ける以上は覚悟して当たり前的事。

それを理解した上で今するべき事をやるだけだ。

「撤退を援護する！」

「どういふつもりだ？ 同盟の部隊はまだ内部に突入していなかった筈だ。何故こち

らを助ける?」

「こんな事で死ぬことはないって思ったただけだよ! そんな事より手を動かせよ、もう時間がないんだ」

「ハア、お人好しな奴め」

「最後まで残って味方を助けようとする貴方ほどじゃないさ」

「部下が命を懸けているんだ。俺が残るのは当然の事だ」

二機のモビルスーツが背中合わせとなり、敵の機体を迎撃していく。

しかし時間は無常過ぎていき、限界まで後僅か。

二人の顔にも焦りが滲み出る。

「自分達も死ぬっていうのに、邪魔をするな!」

「テロリストに何を言っても無駄だ。結局自分達の事しか考えていない!」

「もう時間がない」

「くっ」

まだエレボス内に残っている部隊がいる。

しかし彼らも敵に足止めされ動けない。

それに離脱したからと言って爆発するエレボスの余波から逃れる時間も必要。

しかも敵機も死にもの狂い。

逃がさないとばかりに向かってくる。

逡巡するヴィルフリート。

そこにエレボス内に突入していた部隊かた通信が入る。

《クアドラード中佐、エレボスから離れてください。このままでは中佐も巻き込まれます》

「馬鹿を言うな！ 俺がここを離れるのはお前達が脱出してからだ！ まだ間に合う急げ！」

《いえ、もう間に合いませんよ。早く離脱を、中佐まで巻き込む訳にはいきません》
笑顔で敬礼する部下達の姿にヴィルフリートは血が滲む程に唇を噛みしめる。

《後の事、よろしくお願いします》

「任せておけ……アオイ・ミナト、限界時間だ！」

「ッ、了解！」

イレイズとジンⅢは反転、スラスターを全開にして加速する。

「ちくしょう！」

「この借りは必ず返すぞ、マクベイン」

少しでも遠くまで離れようと力一杯、出力を上げていく。

そして次の瞬間、エレボスが閃光に包まれた。

それはかつてユニウスセブンを――

ボアズを――

ジエネシスを包み込んだ終末の光だ。

爆発により周囲の岩が飛び散り、戦艦やモビルスーツを巻き込んでいく。

「ぐっ!」

「くそ!」

距離を稼ぐ事が出来なかった為に爆発の余波の影響を受けた二機は大きく吹き飛ばされてしまう。

それは支援を行っていたウリエルや他の戦艦も例外ではない。

幸い通信が入り、後退し始めていた為に爆発による直接的な被害はなかった。

しかし四方へ飛び散った破片により、撃沈する艦も少なくない。

「被害状況知らせ!」

「艦側面部に岩片による損傷あり！」

「エンジン出力15%低下！」

「モビルスーツ部隊に帰還命令。動けない機体がいたら救助するように通達」

「了解」

オペレーターに指示を飛ばしつつ、ヨハンは次の一手を考え始めていた。

エレボスが自爆した今、作戦継続の意味は失われた。

救助活動が一段落したら作戦終了の通達が下るだろう。

だが作戦が成功したかと言えばNoだ。

エレボスの核爆発によって各勢力の精鋭はボロボロだ。

立て直しにも相当の時間が掛かるだろう。

さらに首魁であるウオーレン・マクベインの所在は確認できず、ここエレボスが本拠

地なのかも不明。

兵力もどの程度の規模なのか未だ判然としないこの状況。

終始こちらが手玉に取られた印象がぬぐえない。

「拠点の自爆。それによる敵戦力への打撃。このやり方は……」

覚えのあるやり方にヨハンは思考を巡らせていく。

何にせよ離脱した『マクベイン・エクスキューター』の追撃は必要だろうが、この状

況ではその余力も残っていない。

「唯一の収穫は敵の拠点を一つ潰せた事くらいか……：……：そういえばあの通信は」
核が仕掛けられている事を教えてくれたあの男は何者なのか。

『マクベイン・エクスキューター』の裏切り者？

それとも全く別の勢力？

「敵ではないと思いたいね」

ヨハンは大きなため息をつく。

大きな代償を払ったにも関わらず、手にした収穫の少なさに目眩がしそうだった。



何らかの機材や医療器具などが散乱する荒れた部屋に白衣を纏う男が楽し気に端末を眺めていた。

男の名はヴェクト・グロンランド。

世界の裏側において知る人ぞ知る研究者である。

それも本人にとっては些末な事であり、誰に知られようとも関係ない。

重要なのは自分の興味のある研究のみだ。

故に世界情勢などに目も向けず、今日も今日とて相変わらずの研究漬けの日々を送っている。

その研究がどれだけの悲劇を生んでいるか、理解もせず。いや、理解した所でどうでも良いと切つて捨てるだろう。

彼はそういう人間なのだから。

「楽しそうですね、博士」

「ん？ おお、お前か」

いつの間にかベクトルの傍には黒いコートと仮面を身につけた男が立っていた。

「何か用か？」

「いえ、研究の方はいかがかと思ひまして」

「ふん、興味もない癖に。まあ、いいさ。機嫌が良かったのはコレさ」

画面に映し出されていたのは子供の成育過程のようなもの。

そこには二人の子供が映し出されていた。

「実験体 α と β 。確か『彼ら』によつて奪還されたと聞いていましたが」

「奪還じゃなくて奪取だよ。 α も β も私の物だから。まああの時は流石に腹が立っただけでデータは取つてあつたからねえ。また取り返せばいいさ」

「なるほど」

「それにコレもあるしね」

画面が変わり別の子供とその母体が映し出された。
髪の高い軍服を纏った女性とその子供だ。

「まさか彼女も？」

「うん、一回弄る機会があつてさ。まさか子供を作っていたなんてねえ。しかも相手はさあ——」

「では彼女とその子供を実験に？」

「そうしたいんだけど、ガードが固くてね。流石同盟だよ。まあそれは後回しで良い。今、興味があるのはこつちさ」

次に画面に映った女性にコートの男も反応する。

「今更彼女に興味が？」

「ああ。ただし能力じゃなくて母体としてだけどね。丁度いい、こちらに来るように仕向けてくれないか？ 一回会ってみたいんだ」

「私も今はあまり派手に動けないのですが……」

「嘘つけ。今回のアレだってお前の差し金だろう？」

「何のことでしよう？ とにかく依頼については了解しました。ただ油断はしないよ、（う、）注意を」

コートの男は一礼すると音も立てずに部屋を後にする。

残ったヴェクトは歪んだ笑みを浮かべながら、モニターに映る実験結果を眺めていた。

第9話 仇敵との出会い

ミラー・ジュコロイドを展開し、移動している戦艦の中。

その一室でモニターに映る光に包まれていく拠点の姿をウォーレン・マクベインは険しい表情で見つめていた。

さほど長い間ではないが、あの場所を守る為に命懸けで戦ってきた。

それがあかも無残な姿に成り果てるとは、帰るべき家を失ったような喪失感がある。しかも条約違反の核を用いてだ。

「これからどうなさるので？」

背後に控えた副官の問いにウォーレンは振り返る事無く告げる。

「お前は世界を一つにするにはどうすれば良いと思う？」

「分かりかねます」

「簡単だ。共通の敵を作ればいい」

「共通の敵？」

「敵でなくとも良い。すべての国家が例外なく危機に晒され団結しなくてはならない状況になれば否応なく世界は一つになるだろう。最も解りやすい例を挙げるなら、ユニウス戦役か」

そう言われて副官も納得したように頷いた。

例えば『ブレイク・ザ・ワールド』

ユニウスセブンが地球に落下した事で多くの国家が被災、大きなダメージを受けた。

しかしそれでも連合が半ば強引な開戦する前まではあの困難を乗り越えようと確かに世界は一つになってはいたのだ。

例えば『ロゴス打倒』

ユニウス戦役はそもそも地球連合によるザフトの新型モビルスーツの奪取と『ブレイク・ザ・ワールド』と呼ばれる事件をきっかけに始まったもの。

開戦時こそ連合は打倒プラントを掲げ世界全土に協調を促したが、正直足並みがそろっていたとは言い難かった。

しかし当時の議長ギルバート・デュランダルがロゴスの存在を暴露、打倒を掲げた瞬間、一部の例外はあれど世界の勢力図は打倒ロゴスへと傾いていた。

例えば『デステイニープラン』

ギルバート・デュランダルが掲げた人類救済策。

これをデュランダルはやや強引にでも世界に普及させようとしたが、対立したすべての勢力が一丸となりデステイニープラン導入を阻止した。

確かにこれらは見方を変えるなら、ある種の脅威に対して世界が一丸となって戦った例ではある。

「まあ、あそこまで極端に立場の入れ替わりが激しかったのはジブリーの愚鈍さとデュランダルの手腕があればこそではあったのだろうがな」

「つまり『マクベイン・エクスキューター』もギルバート・デュランダルと同じ事をやろうと?」

「私はあそこまで回りくどい手を取るつもりはない」

「どんな手法であれ、人類史に残る悪行である事は間違ひありません。それでも?」

「愚問だ。覚悟はすでに問うた筈だぞ」

「失礼しました」

そう、どんな悪行だろうが構わない。

少なくともウォーレンが付き従ったかつての上官ならば迷うまい。

ならば自分もそれに恥じぬように動くだけだ。

「戦力はどうなっているか?」

「はい。行き場の無い傭兵やジャンク屋、大西洋連邦、ユーラシアの残党などこちらに

合流しています。その総数は統合軍の2割ほどに達し、さらに増える予定です」

「途中から合流した連中にはくれぐれも先走らないように釘を刺しておけ。そしてあの男にも勝手はするなと伝えろ」

「了解しています」

今の所、計画通りに進んでいるが懸念事項がない訳ではない。

「商工連合、そして——」

いや、すべては作戦が完了した後の事。

今は膨れ上がった組織の再編成と作戦を成功させる事に力を注ぐべきだ。

副官が一礼して部屋から退出したのを見届けたウォーレンは映像を消して目を閉じた。



エレボス攻略作戦。

概要は『マクベイン・エクスキューター』の拠点であるエレボスに奇襲を仕掛け、少数精鋭で陥落させる電撃作戦だった。

しかし目論見は外れ、逆に精鋭部隊に打撃を受けるといふ被害を被った。

端的に述べてしまえば作戦失敗という訳だ。

これにより三勢力の部隊は立て直しを余儀なくされてしまった。

そして同盟の中で唯一作戦に参加していたウリエルもまた決して小さくない被害を受けていた。

仮にこのまま敵から襲撃を受けた場合、さらに被害が拡大する恐れがある。

偶然にも損傷し動けなくなっていた輸送船を保護し、その行先が同じだった事もあって、ウリエルは最も近い商工連合コロニー群の一つに入港し、本格的な修復を行う事にした。

「また商工連合のコロニーに来る事になるとはね。それにこの損傷、上から嫌味を言われるよ」

作戦が成功していたのなら、どれだけ傷つこうが言い訳は立つ。

しかし作戦は失敗で成果も上げられずでは、確実に上層部から文句が出るだろう。

その矢面に立たされるヨハンは堪ったものではない。

ウリエルクルーには短い間ではあるが修復の間、個別に休息を取るように命じてある。

コロニーの中へ入る事も認めているし、負担を掛けたパイロットの面々にはしつかり休んでもらいたいものだ。

「艦長も良い機会なのですから、休んでください」

「分ってるよ」

オペレーターの気遣いに感謝しながら、ひと眠りしようとして席を立った。

◇

何事にも息抜きというのは必要な事だ。

それは勿論分かっている事なのだが、羽目を外し過ぎるといっのはいかなものだろう。

「乾杯!!」

カウンター席に座るアオイの後ろではパイロットやメカニックマン達が酒を片手に盛り上がっていた。

気持ちはわかる。

戦場から無事に帰還し、はしゃぎたいのだろう。

特にエレボスから帰還したパイロット組は核の爆発に巻き込まれかけ、九死に一生を得たのだ。

テンションが上がるのも無理はない。

アオイもここで止めるような無粋な真似はしたくないのだが、緊急事態が起きる場合もある訳で。

というか男性陣は服とか脱がないで欲しい。

こつちにもとばつちりがきそう怖いし。

「まあいいか。俺は飲まなきゃいいだけだし。それにしても大佐、遅いな」

一応、この会にはネオも出席する予定になっていたのだが、未だに姿を見せない。何かあつたかと心配になったアオイは店の外に出ると、丁度ネオが立っていた。

「大佐、店の中に……大佐？」

ネオはアオイの声に反応する事無く、全く別の方向に目を向けていた。

「これは……この感覚は」

驚愕したように立ち尽くすネオはそのままどこかへ走り出してしまった。

「大佐、どこへ行くんです!？」

あの様子はただ事じゃない。

アオイは念のために艦内で待機しているスウェンにメールを送り、ネオの後を追いかけた。

流石に鍛えているだけあってネオの足は速い。

見失わない様に背中を追い続け、人気の少ない路地裏でネオはようやく足を止めた。

「ハア、ハア、大佐、いきなり走り始めてどうしたんですか？」
「……あれは」

視線の先には黒いコートと不気味な仮面を身につけた人物が立っていた。

その気配にはアオイにも覚えがある。

滲み出る悪意と殺意。

間違いない。

「お前は『統合戦争』で戦った……」

「アオイ・ミナト君か」

「カース」

ミュンヘンで戦った赤いシグルドのパイロット、カースに間違いない。

「君まで現れるとは思っていなかったが、まあいい。私があるのはそのルシア・

フラガだけだ」

「大佐の素性を」

「当然だよ。そこに居る女性と私は血の繋がったいわば兄妹のようなものだからね」

そこまで言われてアオイもようやく察しがついた。

カースはネオの——

「それで私に何の用がある？」

「その前に仮面を外したらどうか、ルシア。もう君の素顔を隠す必要はあるまい」
ネオ——ルシアは一瞬だけ躊躇いを見せたが、すぐに仮面を外し素顔をさらした。
ルシアの素顔に何か思うところでもあるのか仮面の男はジツと見つめている。

「私の素顔に何か？ 貴方にとつては珍しくもないでしょう？」

「フ、いや、ただ我々の母にそっくりだと思っただけだよ」

母と聞いてルシアの表情が曇る。

彼女の過去を考えれば出来るだけ触れられたくない事だろう。

「要件はなんなんだよ？」

「是非ルシアに会いたいという人物がいてね、こうして迎えに来たのさ」

ルシアはあからさまに警戒したようにカースを睨んだ。

当然の反応だ。

カースの素性は何となく察したが、こいつの現在の所属は曖昧なまま。

仮に『マクベイン・エクスキューター』に参加しているのなら、罠の可能性が高くな

る。

「安心すると良い。私は『マクベイン・エクスキューター』に所属する人間ではないよ」

「信用できないな」

「見返りも用意しよう」

「見返り？」

『『マクベイン・エクスキューター』の情報という事でどうか』

確かにそれは喉から手が出るほど欲しい情報だ。

しかしカースを信用しても良いものか。

そんなアオイの疑心も承知の上だとカースは懐からディスクを取り出す。

「これに必要な情報が入っている。ルシアがこちらの要望に伝えてくれるなら渡そう」

「……会わせたい人物というのは？」

カースは悪意に満ちた笑みを浮かべながら、口を開いた。

「ヴェクト・グロンランドという研究者だよ」

◇

アオイとルシアはカースに連れられ、コロニーの外れにあるビルに到着していた。

最近建造されたものなのか外見自体は真新しく、内部には人の気配もない。

結局、二人は情報と引き換えにカースの誘いに乗る事にした。

『マクベイン・エクスキューター』の情報はそれだけ重要だと判断したのだ。

スウエンには予め連絡してあるし、もしもの場合も何とかなるだろう。

それとなく周りを観察するが、敵が包囲しているという事もないようだ。

「そう警戒しなくてもいい。言っただろう、あくまでもルシアに会わせたい人物がいるだけだね」

「大佐を守る為に必要な事だ」

「なるほど」

どこか楽しそうなカースの先導に従い、ビルの内部に入っていく。

やはり外から感じた通り人が誰もいない。

しかしそこらに未開封の段ボールや何らかの実験に使うような道具が放置されている。

中には赤く薄汚れた良く分からないものが付着した機材まで。

「何なんだ此処は」

「色々散乱していて済まないね。ここの主はズボラな性格で、己が研究以外には何も興味を示さない人間なのだよ。まあ気にしないでくれ」

カースの後ろを歩きながら、アオイは気になっていた事を聞くことにした。

「で、どんな奴なんだよ、そのヴェクト・グロンルドって」

正直、ヴェクト・グロンルドと聞いてもピンと来ない。

同じ研究者の間では詳しいのかもしれないが、少なくともアオイは知らない。

「陳腐な言い方をしてしまえばマッドサイエンティストと言えばわかりやすいだろうね」

「……そんな奴が大佐に何の用なんだ？」

「本人から聞いてくれたまえ。私は彼の研究に興味はない。ただそうだね……君は彼が最も嫌うタイプの人間だ。そして君にとつても彼は許さざる存在だろう」
すべてを見透かしたようなカースの言葉がアオイに染み込んでくる。

「故に決して相容れない。だから良く見ておくといい。君の『敵』の姿を」
「どういう意味だ」と問い返そうとするがその前にカースの足が止まった。

「……だ」

扉を開け、飛び込んできたものにアオイは目を疑った。

良く分からない液体が詰められた瓶。

机の上に置きっぱなしになった書籍の山。

壁に貼り付けられたレポート用紙。

そして胎児と思われるものが入れられた巨大な水槽。

吐き気がする。

まさに混沌と呼ぶにふさわしい。

そしてその中央には白衣を着た男が嬉々として端末を弄っていた。

「博士、ルシア・フラガをお連れしました」

「ん、おお。流石に仕事が早い。初めましてかなあ、ルシア・フラガ。私の名前はヴェクト・グロンルンド、よろしく」

飄々とした態度とだらしがない服装。

どう見てもうだつの上がらない研究者にしか見えない。

しかし目は違う。

冷たく無感情にこちらを同じ人間とは見ていない。

まるで物を品定めしているかのような視線に嫌悪感が募っていく。

アオイがルシアを守るように立ちふさがると、ヴェクトはあからさまに不機嫌な様子に変わった。

「おい、何だ、アレは」

「アオイ・ミナト。一度くらい資料を読まれた事があるのでは？」

「ん、覚えてないなあ。という事は役に立たない愚図な凡人だろ、何で連れてきた？」

「たまには目的以外の人間と話をするものよろしいかと」

「時間の無駄だと思いがなあ」

今の会話だけでもこのヴェクトという男が自分と相容れないというのは分かった。

ルシアも不機嫌さ全開といった様子を隠していない。
よほどヴェクトが気に入らなかつたらしい。

「それで私に何の用があるのです、ヴェクト・グロンルンド？」

「私の名前も聞いているなら自己紹介も必要ないかな。では本題に入ろう、簡単に言えば私の研究に協力して欲しい。君には『母体』になつてもらいたいんだ」

母体？

単語を聞いただけでも碌でもない事だというのは何となく察せられた。

「母体ってどういう事だ？　　とかお前は何の研究をしてるんだよ」

「チツ」

「……この野郎」

あまりの態度の違いにアオイもイライラが募ってくる。

それを楽しそうに眺めているのがカースだ。

こいつもいちいちアオイの神経を逆なでしてくる。

「愚図にも分かるように言つてやる。私は人を研究しているんだよ」

「人？」

「ああ。どうすれば『完璧な人間』を生み出せるのかという研究だよ」

それはある意味この世界の研究者たちにとって目指すべき到達点だったともいえる。

遺伝子操作で生み出されたコーデイネイターがその最たる例だろう。

しかしそれは昔の話だ。

ロゴスの暗躍があつたとはいえコーデイネイターの出現は世界に混乱をもたらした。

故に今の研究者たちはそういった研究を禁忌としているのは周知の事実だ。

「完璧なコーデイネイターでも作ろうって事か」

「ハッ、これだから凡人は。いいか、奴らは遺伝子細工されただけの出来損ないの肉人形だよ。受精卵の段階で能力を設定したにも関わらずその通りに生まれてくる個体はほぼゼロ。能力値が想定より下回るなんて事はしよっちゅうだ。しかも繁殖能力に異常まで抱えた欠陥品、それがコーデイネイターだ」

コーデイネイターを新人類などと信奉する者はもはやごく僅か。

プラントでさえ出生率の低下に歯止めがかからず、ナチュラルの受け入れが始まっている。

それでも中には未だに自分達こそが新たな人類であると語るコーデイネイターを居るのだ。

故にこういった物言いは一種のタブーになっているのだが、ヴェクトはそんな事は気にしないとはかりにしゃべり続けている。

「遺伝子操作を否定する気はないがな。私が求めているのは強靱な生命力、高度な能

力、聡明な頭脳、美しい容姿、すべてを兼ね備えた『完璧な人間』だ」

「そんなものが生み出せる筈がない」

「馬鹿が、生み出す為に研究してるんだ。何の為に今まで強化人間、強化兵、能力移植、試作ナノマシン投与実験。色々やってきたと思ってるんだよ」

「強化……人間だと？ 何でお前が」

「ハア、連合関係者の依頼で弄った事があるんだよ。No呼びされてた個体と後はエリニスとかいう検体の調整とかだったかな。結構な数を弄ったけど、どれも役に立たない下らんゴミだった」

アオイの脳裏に仲間達の笑顔がよぎる。

アウル、ステイング、ラナ、そしてステラ。

皆、アオイにとって大事な人達だ。

誰もが強化人間にされて、兵器にされて、人生を狂わされた。

そして無念の中で死んでいった者もいる。

そんな人達をこいつは生み出した拳句、役に立たないゴミなどと――

知らず拳を握りヴェクトを睨みつけるが、向こうはアオイの事などどうでも良いとばかりに話続けている。

「だが最近ようやく成果が出てきてね。生まれた個体である『 α と β 』も優れた能力を

持っているみたいだし、予想外の個体も生まれていた。まあこれらは親が優秀だったというのも関係しているのかもしれないけど」

「つまり貴方は私に実験の為に子供を産めど？」

「ああ、相手はこっち側で用意するから君はただ従ってくればいい。勿論、他にもやってもらうことはあるんだけど」

ヘラヘラと笑いながら、嬉しそうに語るヴェクト。

もういいだろう。

これ以上は聞くに堪えない。

「何がそんなに可笑しい？」

「ハア、愚図は黙って——」

アオイが目の前に立っている事に驚いたのか、ヴェクトが黙る。

その間抜けな顔面に思い切り、拳を叩きつけてやった。

「ぐべえ」

手加減抜きで振り抜いた拳はヴェクトの頬にクリーンヒット。

そのまま近くのテーブルを巻き込んで、派手に倒れ込んだ。

積んでいた書類や実験器具も一緒に散乱したが、知ったこっちゃやない。

「そんなに楽しいか！ 誰かの命を弄ぶ事がそんなに楽しいか!!」

アオイの怒声に反応したのかヴェクトが口から血を流しながら、ゆつくりと起き上がる。

「ぐつ、この屑がアアアア!!!」

「屑はお前だろうが!」

「黙れ!! お前みたいなのは何もわかっていない無能が世界に蔓延つて……才ある者の足を引つ張る事しかない癖に!」

ヴェクトの形相は怒りに染まり、その眼にはアオイに対する軽蔑と憎悪に満ちていた。

「私はお前のような才能の欠片もない屑が何より嫌いだ! 利用価値すらない!」

「好かれなくて結構だ! お前なんかは大佐を好きにさせるものか!!」

「この上邪魔までするか……」

お互いが殺意をぶつけ合う一触即発の空気の中、それを破つたのはバタバタと聞こえてくる無数の足音だった。

「博士、今日は此処まででよろしいでしょう。捕まると面倒ですよ」

「チツ」

カースは銃を構えてアオイ達を牽制。

倒れたヴェクトを引つ張り起こすと、そのまま肩を貸して部屋の反対側にある出口へ

と歩いていく。

「……おい、屑。必ずお前は排除してやる」

「何？」

睨みあう二人を見つめカースは楽しそうに笑みを浮かべる。

「では今日は此処までだ、ルシア。これが約束の物だ」

地面を滑らせるようにディスクを投げてくる。

「そしてアオイ君、実に楽しい時間だったよ」

カースが扉を潜った瞬間、手元のスイッチを押すと天井の一部が崩れ通路を塞いだ。

これでは追う事は出来ない。

「大丈夫ですか、大佐？」

「ええ、私は大丈夫」

「アイツ、何の為に俺達を此処に連れてきたんだ？」

あんな実験にまともな神経を持ち合わせた人間なら首を縦に振る筈はない。

それなら情報と引き換えに実験に協力しろと言った方がまだ可能性があった筈だ。

アオイがヴェクトを殴った時も特に邪魔をしなかったし、カースが何を考えているのかさっぱり分からない。

それとも——アオイをヴェクトに会わせただけとか？

まさかそんな筈はないだろうが。

駆け込んできたスウエン達の姿に安堵しながら渡されたディスクを手を取った。

◇

アオイ達との話の後。

コロニーにあるもう一つの研究所にたどり着いたヴェクトは怒りと屈辱に震えながら怨嗟の声を吐き出した。

「くそー！」

許せない。

あんな屑に殴られた事もそうだが、邪魔をされた事も腹立たしい。

「どうでした、博士？ たまには目的の人物以外と話をするのも刺激的でしょう」

「確かに収穫だったよ！ やはり世界は腐っている、あんなゴミがそこら中に蔓延っているんだからな！ それにしても何故手を出さなかった？」

「楽しそうでしたから、邪魔をするのも無粋かと」

「不愉快だったただけだ！」

「落ち着いてください。博士はまだカードすら切っていないのですから、ルシアを抱き込む機会はまだある」

「分っているさ。あつちの研究所も破棄する予定だったから、問題はない。しかし、あの屑だけは始末しないと」

「やはり有意義な時間だったようですね、博士。貴方が排除すべき敵の姿を見定める事ができたのだから」

忌々し気にカースを睨むと徐々に抱く怒りと憎しみの感情にヴェクトは抗う事無く身をゆだねる。

アオイにも言ったがヴェクトは才ある者こそ価値があると思っている。

逆を言えば才能もない人間には価値はなく、認める事もない。

その上天才の足を引っ張るだけの屑など論外だ。

だからこそアオイの存在はヴェクトにとって許せない。

これ以上、邪魔をされる前に排除すべきだ。

「それで博士、どうされるのです？」

「……ルドラを呼べ」

「分りました」

ヴェクトの要請に内心笑みを浮かべる。

まさに思惑通りの展開。

カースは怒りに震えるヴェクトの姿を楽しし気に眺めながら、思案を巡らせ始めた。

第10話 星を穿つ一撃

資源衛星『メークリウス』の完成記念式典。

世界に席卷する各勢力にとって無視できない重要な式典であり、各重役が顔を連ねていた。

完成した資源衛星内部に用意された会場は綺麗に飾られ、テーブルには一般人が一生お目に掛かれないような豪華な食事が並んでいる。

その周りには招待された重役たちは笑顔を浮かべワインを傾けながら、雑談に興じていた。

「いやいや、見事なものだ」

「ええ。予算を割いたかいてもあつたというものですよ」

「人類の新たな門出に立ち会えるとは光栄の至りです」

「次の選挙もこれで安泰ですな」

「ええ」

誰もが笑顔で和やかな雰囲気。

そんな彼らの姿をヴィルフリートは冷めた様子で眺めていた。

「俗物共が」

正直、嫌悪感が止まらない。

この中で何人の人間が危機感を抱いているだろうか。

『マクベイン・エクスキューター』の殲滅は未だ成ってはおらず、次の標的が自分達かもしれないというのに。

「結局は自分達の利益の事しか頭にならないのだろうか」

こんな連中の為に部下が命を掛けねばならないとは。

しかし同時に彼らを単純に悪であると断じる事も出来ない。

此処で行われているのは政治的な駆け引きでもあるからだ。

とはいえうんざりしても仕方がない。

任務は任務だ。

「それにしても統合や同盟の有名どころが顔を出していないな」

これについては意外だった。

今日顔を見せないという事は政治的な弱みにもなりかねない。

にも関わらずカガリ・ユラ・アスハやアイラ・アルムフェルト、統合のトップである

クレメンズ・イスラフィールと言った面々が顔を出していなかった。

あくまでヴィルフリートを知る人物がいなくてであり、各勢力ともに重鎮が派遣されてる事は間違いないのだが。

まあ同盟は内部の混乱の噂が事実であるからかもしれない。

しかしイスラフィールについては何らかの思惑があるのではと勘ぐってしまう。

「クアドラード中佐、交代の時間です」

「ご苦労、外はどうだ？」

「静かなものですよ」

「油断するなよ、敵は必ず来る」

「ハッ！」

会場警備を交代したヴィルフリートは会場を一瞥すると今度は外の警備に回る為、格納庫の方へ歩いて行った。

◇

各勢力の部隊が『メークリウス』襲撃を警戒している今日、『マクベイン・エクスキューター』が動き出そうとしていた。

すでに各ポイントには部隊が密かに配置され、いつでも動けるように待機している。そんな中、この作戦の指揮を任されたルドラは戦艦の一室にて端末に映る自身の機体のデータを眺めながら、笑みを浮かべた。

「まさかグロンルンドが協力を申し出るとはな」

ヴェクト・グロンルンド。

ルドラから見ても唾棄すべき、マッドサイエンティスト。

己の研究にしか興味がないあの男がまさか自ら協力を申し出るとは思わなかった。

正直、手を借りるなどまっぴらではあったが、あの男の頭脳は本物。

利用できるならするべきである。

まあ色々条件を出されたが、それも許容範囲内だ。

「ルドラ、正直ヴェクト・グロンルンドと懇意にするのは感心しないわ。彼の傍にはあの男も居る。今回の件を持ちかけてきたのもあの男でしょう？」

対面のソファアに座るシルヴィアがサルワを膝枕しながら、不満そうにルドラを睨んでいる。

シルヴィアからすればヴェクトは自分の体をグチャグチャに弄り回した男。

いつも「今度顔を見たら殺してやる」と息巻いているくらいには憎んでいる。

そんなヴェクトの協力など到底受け入れられないというのが彼女の心情だろう。

ましてやあの男——カースと繋がっているのならば尚の事。

「気持ちには分かるがああ男の頭脳は使える。現に機体の強化も完了し、遅れていた専用機の開発も進んだ」

「それは分かっていますが」

「心配する事はないよ、シルヴィア。私達が君に手出しはさせない。ねえ、ルドラ」

「無論だ。奴はいずれ始末する」

厳しい表情を浮かべていたルドラはそこで珍しくからかうように笑みを浮かべる。

「だが、弟の見せ場を奪うのもな。恋人の前なんだ、格好つけたいものだろう？」

「ルドラ！」

「ふふふ」

普段の彼らしか知らぬ者が見れば目を疑う光景である。

常にピリピリとした雰囲気醸し出しているルドラが、穏やかな笑みを浮かべ冗談を言ったのだから。

それはサルワやシルヴィアとて同じ。

しかしこれが彼らの本当の顔であり、長い間共に過ごした者同士だからこそ出せる素顔だった。

「そういえば奴が珍しく憤慨していた」

「いつも周りを小馬鹿にしているあの男が？」

「ああ。どうやらアオイ・ミナトと派手に揉めたようだ」

「アオイ・ミナト、同盟のパイロットね」

「ああ。ルシア・フラガを実験体に使おうとして阻止されたらしい」

ルシア・フラガの名にシルヴィアが顔を曇らせた。

彼女からしたらルシア、いやフラガ家はヴェクト・グロンルンド以上の因縁がある。

平静ではいられないのも無理はない。

「ルドラはアオイ・ミナトと戦ったんだよね、どうだった？」

「手強いな。ナチュラルとはいえ歴戦の勇士だけはある、実力は間違いなく本物、大し

た腕前だった」

この発言にサルワは少なからず驚いた。

ルドラは冷静に敵の分析する事はあっても、基本的に敵を褒めはしない。

味方に弱気と取られかねないからだ。

にも関わらず敵へを認める発言をすることはアオイ・ミナトはそれほどの相手だったと

いう事だ。

「次は本気で落とすにいく。グロンルンドからのオーダーにもそれが含まれているか

らな。もしも奴に遭遇する事があつたらお前達も注意しろ」

「一番危険な役目の貴方に言われたくはないですけど」

「危険なのは皆、同じだ。今回の作戦が『マクベイン・エクスキューター』の存在を世界に刻みつける機会となるだろう」

穏やかな雰囲気から一転、ルドラはどこまでも残酷で冷酷な笑みを浮かべる。

後の歴史において『メークリウス事件』と呼ばれる惨劇の幕が上がろうとしていた。



カースから『マクベイン・エクスキューター』の情報を入手したウリエル。

デイスクの内容はあの正体不明機の詳細、そして今後の動きに関するものだった。

『メークリウス』完成記念式典に対する襲撃が彼らの次の目標。

情報源の不安はある故に鵜呑みにする事は出来なかつたが、予想通りの行動である。

ウリエルはこの襲撃に備え、メークリウス周辺の防衛という新たな命令が下されていた。

アオイもこの後に始まる哨戒任務に備えMk-IIのコックピットで調整作業に追わ

れている。

特に問題となつてゐるのは背中の特殊装備であるウイングスの機動性能とMk—II本体との間で反応にズレが生じてゐる事。

元々ウイングスは最新鋭機に搭載されるスラストユニットのプロトタイプに由来する装備だ。

Mk—IIを無理やり改良したとはいえ旧型機との間に齟齬が生じるのはある意味で仕方ない。

幸いW・S・システムの補正で誤魔化せる程度のもの。
だからこそ入念なチェックが必要だった。

そんな中、アオイはある別の問題に頭を抱えていた。

「中尉、火器管制のチェックは終了したわ」

「……ありがとうございます、大佐」

アオイのすぐ横には仮面を外したネオ——つまりルシアが座つていた。
問題というのはこのルシアの事だ。

先の一件で駆け付けてきた護衛役のウリエルのクルーにネオの素顔と性別がバレてしまつたのである。

勿論スウエンを始めとした元改革派の面々で知つてゐる者は何人かいた。

しかし大半のクルー達はそれを知らずにいた訳で。

つまり大騒ぎになってしまった。

その鎮静化の為にウリエル艦内では仮面を被る事を止め、素顔で過ごす事になったのだ。

「やっぱり視線を感じるわね」

「仕方ないですよ、知らない人間が大半だったんですから」

メカニックマンたちの視線が痛い。

そりゃこんな狭いコックピット内で若い男女が一緒になっていれば睨まれもする。

「まあ、それも今だけですって。皆、すぐに慣れます。それよりブリッジに居なくていいんですか？」

「ブリッジも落ち着かないの。早速口説いてきた奴もいたし」

「……そんな勇者がいたんですか」

誰とはあえて聞かない。

というか幾らなんでも早すぎるだろう。

アオイは呆れ半分、関心半分に聞いているとルシアは真面目な表情で顔を近づけてきた。

「た、大佐？」

「中尉、あの男、ヴェクト・グロンルドには気を付けて。あの男、貴方を殺す為に何か仕掛けてくるわ」

最後に見たヴェクトの表情はアオイに——いや、才能の無い者に対する憎悪に満ちていた。

ハッキリ言つて傍迷惑という言葉以外何も出てこないのだが、確かに何かを仕掛けてくるのは間違いない。

警戒するに越したことは無いが、それはルシアにも言える事だ。

「気を付けるのは大佐だつて同じですよ。奴の狙いは貴方なんですから」

「そうね」

「それに気を付ける必要があるのはヴェクトだけじゃなくカースもですよ。奴が何を目的にしているかは不明ですから」

カースの名にルシアはあからさまに思い悩むような表情を浮かべた。

敵とはいえ彼女にとつてカースは数少ない血のつながりをもつ肉親である。複雑な気持ちになるのも仕方がないが、油断する訳にはいかない。

「大佐、今後カースが接触してきた場合、単独で動く事は絶対にしないでください。奴は危険です」

「ええ、分かっているわ。私だつてあんな男の研究の実験台になんてなるつもりはな

い。ましてや実験の為に子供を産めだなんて」

「……子供か」

そういえば奴がその事について洩らしていた。

考えたくない話だが、おそらく前に実験体にされた女性がいたのだろう。

奴の言動から考えても多くの人が実験台にされた事は間違いない。

報告はすでに済ませているが『マクベイン・エクスキューター』の件が一段落したら、そちらも調査についても上申した方が良いかもしれない。

「さて調整は終わり。そちらはどうですか？」

「……うちも終了よ」

ルシアが手伝ってくれたおかげで、早めに終わった。

この後すぐに照会任務が待っている。

アオイがコックピットを出ようとシートから腰を浮かせた瞬間、ルシアに手を掴まれた。

「大佐？」

「中尉、その、変な事を聞くけど……もしも、仮に私がグロンルンドに捕まったら助けてくれる？」

「当たり前です。それに大佐は俺がきちんと守ってみせます」

少し頬を赤くしてホツとしたような様子のルシアにアオイはちよつとムツとしてしまった。

そんなに薄情な人間だと思われているのだろうか。
だとしたらショックだ。

「大佐、さっきの話を聞いてましたか？ 捕まるかもしれない迂闊な行動はしないでくださいよ」

「分つてる、分かつてる」

本当に分かつているのだろうか。

後でスウエンにも言っておいた方が良いかもしれない。

ただ嬉しそうに笑うルシアを見ていたら、そんな苦勞も悪くないと思つてしまった。



『メークリウス』完成記念式典当日。

『マクベイン・エクスキューター』による襲撃計画の情報はすでに各勢力に通達され、周囲には厳重な防衛網が敷かれている。

その警備に配置されたウリエルは『メークリウス』の周辺で警戒活動を続けていた。

「警戒と言われても、こんな離れた位置じゃ」

「贅沢言わないの。警備に参加出来ただけでも御の字だったんだから」
オペレーター達の愚痴を危機ながらヨハンは思わず苦笑してしまった。
ウリエルの立場は未だに何も変わっていない。

いや、以前より上の目は厳しくなったと言っても過言ではない。

前回の作戦でも碌に成果も出せず、さらに修復の為に寄った商工連合コロニー内での揉め事まで起こした。

上層部はそんなウリエルを完全に厄介者として見始めているようで、今回も直接的な防衛からは外され、周囲の哨戒任務に就くのが精々。

警備に参加できたのも司令であるイザークも粘ってくれたお陰だった。

「無駄話はその辺にして。それよりモビルスーツ隊の方は？」

「ミナト機、敵と思われる機体と遭遇！ 迎撃態勢に入りました!!」

「ふむ、これで3度目……陽動か」

哨戒に出ているモビルスーツ隊はこれまで散発的に敵と遭遇している。
しかし、いまいち目的が見えてこない。

防衛網を突破しようとする割に数も少なく、勢いもない。

「戦力を分散させるのが目的なんじゃ」

「それならもつと派手に攻める必要がある。これじゃ逆効果だよ」

敵の攻撃によりメーカーリウスの防衛戦力は集結し、より強固なものとなっている。

この状況では奇襲する事すらままならないだろう。

「それに戦力の分散は式典に参加するお偉方が許さないさ」

「確かに。じゃあ敵の目的は何なんでしょうか？」

「さて。もしかすると、とんでもない隠し玉があるのかもしれない」

険しい表情のヨハンが見つめる先。

ウリエルの前方では哨戒に当たっているアオイ達が敵部隊と交戦していた。

「中尉、下から来るぞ」

「ッー！」

スウエンの言葉に即座に反応したアオイはスラスターを使って機体を敵正面に向ける。
る。

その間に距離を詰めてきたウィンダムはビームサーベルを振りかぶってきた。

「ハのー！」

敵の斬撃を紙一重で躲し、腰から引き抜いたサーベルで胴を薙ぐ。

腹を裂かれた敵モビルスーツは成す術なく爆散。

さらに迫ってきた敵をルシアがビームライフルで追い散らした。

「次から次へと」

「だが敵の新型は一向に現れん。しかも散発的に攻撃を仕掛けてくる割に敵からの圧力が無い」

「明らかに陽動ね。敵の本命がある筈だけど」

「ツ、また来ます!」

三機が散開し、攻撃を回避すると連携しながら敵機を迎撃する。

「こいつら上手い!」

「旧型の機体をカスタムしてるんでしょうけど、動きも良い」

「ただの傭兵と侮れないな」

三人が相対しているのは型落ちであるウインダムだ。

しかしルシアの指摘通り改良を加えているのか、イリアスにも劣らない動きを見せている。

さらに搭乗しているパイロットの腕も悪くない。

「邪魔だ!」

ルシアのドラグーンによる援護を受けながら、敵の懐に飛び込んだアオイは至近距離からビームライフルを叩き込む。

避けきれず被弾したウインダムをスウェンのビームライフルショーテーターが撃ち抜

いた。

敵の攻撃を捌きながらアオイは視線を巡らせ、周囲を見渡すがあの紅いリグ・シングルは姿を見せない。

今回の件に限って出てこないなんて事はあるまい。

「どこだ、どこに居る?」

順調に敵を迎撃している筈なのに、敵の目的が見えず焦りが募っていく。

「今度は上からだ!」

「また来る!?!」

再び襲ってくる敵モビルスーツ。

その中に他を無視し一直線にスウエン機へと向かってくる機体があった。

「アハハハハ!! 見つけたぜえ、スウエン!!」

「アルド・レランダー!」

ベテルギウスに体当たりされたAAAは部隊から大きく離されてしまう。

「大尉!?!」

「構うな、こいつは俺が仕留める」

蹴りを入れてベテルギウスを引き離し、両手にビームライフルショーティーを構える。

「そうこなくっちゃな！ エレボスの時は消化不良だったからなあ！ 今度はとことんやり合おうぜ!!」

「戦闘狂め」

「中尉、アレはスウエンに任せて！ 来るわよ！」

スウエンとアルドが激しい戦闘を開始したと同時にリグ・シグルドが攻撃を仕掛けてきた。

「こいつらが居るって事はやっぱりメーカーリウスが本命か！」

次々に襲い掛かるビームカッターの一撃。

急所を狙って放たれる攻撃をアオイは巧みにスラストを操り、紙一重のタイミングで躲していく。

しかしそんなイレイズを狙ってビーム砲が発射された。

「ッ、複列位相砲!?!」

アオイは機体を半回転させ、ウイングスの翼で弾くように複列位相砲を受け止めた。

「アレは……SEED持ちの!?!」

「貴様らを今日こそ倒す！」

攻撃を仕掛けてきたのはクロムの駆るシグルド・グラーフである。

すでにSEEDを発動させているのか、非常に高い精度で砲撃を撃ち込んできた。

「大佐は他の敵をお願いします！」

雑魚はルシアに任せ、向かってくるシグルド・グラーフの方へ突撃する。

「うおおおお!!」

「ハアアアア!!」

シールド同士が激突し、同時に繰り出された斬撃が互いの機体に傷をつける。

「目障りな翼を斬り裂いてやるよ！」

背中から放出されたドラグーンがゲシユマイディツヒパンツァーを展開しつつ、砲撃を開始。

クロムはビームを反射するかの如く巧妙に歪曲させ、動き回るイレイズの逃げ場を奪っていく。

「鬱陶しい！」

イレイズの回避先に向け歪曲されてくる為、避けるべく、さらに普通に網の目のように張り巡らせたビームを織り交ぜてくるのが厄介極まりない。

それでもアオイが五体満足でいられたのはウイングスの機動性のお陰である。

高機動が可能なウイングスで無ければとつくに機体はボロボロにされていただろう。

「いつまでも逃げ回れると思うなよ！」

「逃げ回るつもりはない！」

アオイはイーゲルシュテルンをドラグーンに向けて発射する。

当然、ドラグーン自体にもPS装甲が使われている為に実体弾による攻撃は通用しない。

しかし破壊する事は出来ずとも、その動きを阻害する事は十分にできる。

それによつて攻撃を回避するスペースを作り出す事に成功した。

「そんな事で逃げ切つたつもりか！」

「そう来ると思つてた!!」

空いたスペースに飛び込んだアオイは狙い通りに動くドラグーン目掛けて高エネルギー収束ライフルのトリガーを引く。

発射された砲撃が数機のドラグーンを巻き込み、シングル・グラーフの装甲を剥ぎ取つていく。

「貴様！」

「今のタイミングで避ける!? 流石としか言いようがないな！」

完璧に捉えた筈にも関わらず、クロムは圧倒的な反応速度で機体を逸らし、致命傷を避けたのである。

「天使モドキが！」

クロムは怒りに身を燃やしながら、さらに意識を集中させ感覚の深度を増していく。

油断はせず。

慢心もせず。

敵の動きを注視する。

そうだが、この時の為に自分は力を蓄えてきた筈だ。

敗北した日から今日まで積み重ねてきた訓練を思い出し、SEEDによって広がった
感覚をさらに鋭くする。

そして――

「そこだアア！」

「ッ!?!」

シグルド・グラーフの一撃がイレイズの肩部を掠め、さらに撃ち込んだライフルが腰
の装甲を破壊する。

「グッ、さらに精度を増してきた!?!」

「見える、見えるぞ！ 貴様の動きが見える!!」

急激に増した射撃精度がイレイズの動きを捉え始める。

「いっつー！」

「さっさと落ちろ！」

「簡単に落ちるものかよ！」

スラストターの出力を限界まで上げ、さらに速度を上げるイレイズ。それを追うシグルド・グラーフとの間で起こる凄まじい斬り合い。

「オオオオオオ!!」

容赦の無い斬撃が装甲に傷を刻んでいく。

そして決着の時は来る。

「今だ!」

アオイは敵のサーベルをわざとシールドに食い込ませ動きを封じ、同時に収束ライフルのカートリッジを投げつけた。

「ッ!」

SEEDを発現させたクロムは即座に反応し、カートリッジを破壊する。

それこそがアオイの狙いだった。

「その反応の速さが命取りなんだよ!」

破壊されたカートリッジは炸裂し、シグルド・グラーフのメインカメラを一時的に動作不良にした。

「しまっ——」

SEEDによる鋭敏な感覚。

その反応が条件反射的にカートリッジを撃ち抜いた事でメインカメラを焼いてしまったのだ。

アオイはその隙を見逃さず、距離を詰めて二刀のサーベルを振り抜く。

「ぐああああ!!」

舞うような光刃の軌跡。

シグルド・グラーフは手足を破壊され胴体を真っ二つに斬り裂かれた。

だがあの土壇場で機体を動かし致命傷だけは避けている。

「あんな状態で致命傷を避けるなんて。だが此処で見逃す訳にはいかない!」

アオイがクロムの止めを刺そうとしたその時だった。

ついに事態は最悪の方向へと動き出す。

それが確認されたのはウリエルの後方——つまり『メークリウス』方面からだった。

宇宙を照らす強烈な閃光。

それを一度見た者は誰であろうと忘れられないだろう。

「ま、まさか……」

「アレは……核か!？」

「メークリウスが狙われたのか？ ウリエル!!」

当然その光を観測していたウリエルのブリッジも大騒ぎになっていた。

「落ち着け！ 状況報告!」

「この熱量は核に間違いありません!」

「狙われたのは？ メークリウスはどうなった?」

「メークリウスは健在! ただ防衛部隊からの応答なし! 混乱している模様!」

「メークリウスも防衛部隊も健在?」

思わず舌打ちしながらヨハンはこの状況に違和感を持った。

何故、核を直接メークリウスに撃ち込まないのか?

もしもの場合に備えて配置されていたニュートロンスタンピーダーを警戒したのか

もしれないが。

それに防衛部隊も混乱はしていても無傷というのも気にかかる。

「一体、何が狙いなんだ?」

もう一度敵の狙いを見抜こうと宙域図を凝視する。

そこで妙な事に気が付く。

「防衛部隊とメークリウスが一直線に並んでいる？」

核が撃ち込まれたのはメークリウスの前方であり防衛部隊からも少し離れた位置だ。

防衛部隊はもう一度狙われないようバラバラに離脱し、今は再編成の為にメークリウス付近に集結している。

そこで唐突に嫌な考えが浮かんできた。

もしもこれこそが敵の狙いであつたとしたら——

「急いで防衛部隊に通信を——」

だが時、既に遅し。

次の瞬間、宇宙を貫く閃光が走る。

それはメークリウスに直撃し、外宇宙へ至る希望の門は無残にも撃ち砕かれた。

第11話 星、流れ行く

戦場から離れた月にある都市コペルニクス。

そこに慣れない戦艦のブリッジから帰還を果たした二人の女性が見慣れた街並みに安堵の吐息を漏らす。

「やっと戻ってきましたね、ヴィクトリアさん」

そのうちの一人、セレネ・デイノは隣に立つヴィクトリア・ランゲルトに労いの言葉を掛けた。

「お疲れさまでした」

「いえ、セレネさんこそ。気遣っていただきありがとうございます」

ヴィクトリアの笑顔に同じ女性でありながら、セレネは思わず見とれてしまった。女神のように美しい容姿から零れる笑み。

大抵の男性はこれだけコロリといってしまう事間違いなしだろう。

「それにしてもヴィクトリアさんは凄いですね。初めての戦場なのに全然緊張もしていませんし」

「そんな事はないですよ。私だつて心臓がドキドキしてました。セレネさんが一緒になければ、もつと取り乱していたと思います」

「でも例の放送が流れた時もすぐに撤退を進言したりして、艦長からも高評価でしたよ」

実際、ヴィクトリアは大したものだった。

歴戦の戦士であるセレネからしても肝が据わつていたし、状況判断も的確で感心させられてしまった。

「……あの放送を流したのはどんな人なんでしょうか？」

「さあ。でも色々推測は流れていましたよね。『マクベイン・エクスキューター』の裏切り者とか、エレボスに残留していた統合軍の兵士だとか」

どちらにしろ脱出できたとも思えないから、エレボスと運命を共にしたのだろう。そんな雑談を交えながら家の方へ歩いていると、公園で子供たちが遊んでいる姿が見えた。

「あゝお母さんだあ!!」

「本当だ!」

駆け寄ってくる子供たちにヴィクトリアとセレネは自然と笑みが浮かんでくる。

そして後ろからゆっくり歩いてきたのはセレネの夫であるアスラン・ザラだ。

その自然な歩みから義手、義足とはとても思えない。しかしこれも血の滲むりハビリのお陰によるものだ。

それに日常生活に支障はないが、未だに体の不調は抜けておらず療養の日々が続いているのだ。

「お帰り、セレネ。……ランゲルトさんも」

「はい、只今戻りました」

アスランがヴィクトリアとぎこちない挨拶を交わす。

彼は彼女に対して思うところがあるらしく、数年の付き合いになるにも関わらず未だに態度がよそよそしい。

訳を聞いたただしただのだが、今は亡き彼女の弟であるヴァルター・ランゲルトを——
『統合戦争』最終決戦を思い出すからとの事。

部下であった彼を守り切れなかった事を未だに悔いているらしい。

それだけではないような気もするのだが、セレネはあえて聞かなかった。

アスランの辛そうな表情をそれ以上、見たくはなかつたから。

「怪我とかはなかつたか？」

「ええ。私もヴィクトリアさんも大丈夫でした。それよりも子供たちの面倒を見て貰つてありがとうございます」

「俺は本当に見ていたただけだ。大体がヘルパーさん任せだったしな」
「それでもですよ。さあ、とりあえず家に帰りましょう」

子供たちと手を繋いで、家までの道のりを歩き出す。

何処までも平和な光景であり、戦火の影など微塵もない。

しかしこの後、この光景は崩れ去る。

何故ならば地球と宇宙に住まうすべての場所が非常事態に陥る事になるのだから。



突如として宇宙に轟いた衝撃。

眩い閃光によって『メークリウス』は無残にも砕け散る。

弾けた衛星は細かい破片となって、宇宙に舞う欠片として撒き散らされた。

飛び散る岩は凶器だ。

当たれば戦艦だろうが、モビルスーツだろうが、簡単に破壊されてしまう。

その脅威は『メークリウス』から離れた位置にいたウリエルにも襲い掛かっていた。

「回避！ 当たるなよ、沈むぞ！」

「大型の破片が接近！」

「陽電子砲発射準備！ 目標、大型破片！ てえ——！！」

ウリエルの陽電子砲が発射され迫っていた大きな岩の破片を撃ち砕いた。

細かい破片が散らばるが、十分迎撃可能な範囲に収まっている。

「各砲座、接近してくる岩はすべて叩き落とせ！ 味方の状況は？」

「破片が多すぎて判別不能！ 『メークリウス』防衛部隊の反応なし……おそらくあの光に巻き込まれたものと思われませう」

「通信で呼びかけ続けろ！ 無事な者もいるかもしれない」

「了解！」

ウリエルが飛び散る破片の対処に追われていた頃、哨戒任務についていたモビルスーツ隊も当然、その影響を受けていた。

陣形は乱れ、それぞれ分断された形で敵の相手と破片の対応を強いられていた。

その中で特に追い詰められていたのはスウェンだった。

「スラスターの一部が破損。レフトアームの動きも悪い」

スウェンの機体は破片による直撃こそ避けたものの、掠めたスラスターと左腕が異常を示す状態となっていた。

特に深刻なのは左腕。

これではまともにも狙いを付ける事も難しい。

「逃げてばかりじゃ勝てないぜ!!」

「くっ」

破片の隙間を縫うように動きながら、右手のビームライフルショーテイーを撃ち込む。

だがベテルギウスはまるで泳ぐ魚のように一切の淀みのない動きでビームと破片を避けていく。

まるでこの空間にあるすべての破片を把握しているかのように。

「強化兵としての力か」

ルシアやクロム程ではないにしろ、アルドはかなり高い空間認識力を持っているようだ。

今の状態でベテルギウスを倒すには相応の覚悟と戦術が必要だろう。

「よしー」

脳裏に描いた戦術を実行する為、スウエンは即座に行動に移った。

「へえ、何かしようって感じだな。いいぜえ、存分にやれよ。それが楽しい足掻きなら大歓迎だ」

アルドの軽口を聞き流し、漂う破片にワイヤーを飛ばすと、巻き上げる反動を利用し、高速移動を開始する。

スラストターが破損している所為か姿勢制御が難しいがそれを補うだけの技量は持っている。

「お得意のワイヤーか！ でもよ、何回も相手に見せるもんじやないぜ！」

アルドはスウエンの動きを先読みするように破片をライフルで破壊し、AAAの動きを阻害し始めた。

死角が多いとはいえこれでは迂闊に動けない。

だがそれも構わず損傷覚悟でスウエンは破片の間を動き続ける。

「逃げ場はないぜ！」

ビームライフルが岩を砕き、AAAの装甲を吹き飛ばした。

「ぐつ、今のでバンランサーがイカれたか」

「おらおら!!」

いたぶるように発射されたビームが次々とAAAを削り、傷つけていく。

所々の装甲は剥がれ、フレームや機体内部が剥き出しの状態。

これでは戦闘続行はほぼ不可能。

もはやこの戦闘における結末は決定している。

それでもスウエンの目は光を失わず、真つすぐに敵の姿だけを捉えていた。

「そー！」

「ッ!？」

残ったスラスターを絶妙なタイミングで操作、機体を傾ける事でコックピットへの直撃を回避する。

しかし完全に避けきる事は出来ず、AAAの頭部は破壊されてしまった。

「メインカメラが潰されたらどうにもならんだろうが！」

「まだだー！」

腕と背中からワイヤーを射出。

片方でライフルを弾き、もう片方で背後から引き寄せた岩をベテルギウスに叩きつけた。

「それがお前の策って訳か！」

虚を突いた攻撃だったが驚異的な反応速度で反応したアラドは岩片を機関砲で破壊、AAAに向けて突進するとサーベルによる突きを放った。

光刃がコックピットに迫る中、スウエンは動かさずタイミングを計る。

目を逸らさず、敵の動きのみに神経を集中させ、そして待ちわびた瞬間に左腕を突き出した。

「何ッ!？」

左腕は扱られながらも刃の向きを変え、致命傷を避けた。

そしてベテルギウスの腕を掴むと同時にワイヤーを展開。

逃げられないようにAAAの腕ごと固定するとビームライフルショーテーターを至近距離から突き付ける。

「この距離ならば逃げられまい！」

「甘いぜー！」

アルドは機体を僅かに逸らし、至近距離からのビームを避けて見せるとお返しとばかりに蹴りを入れた。

胴体に蹴りの一撃を食らった事で残ったセンサー類が破壊され、AAAはさらに追い込まれてしまう。

「終わりだなあ、スウエン!!」

「まだだ!!」

スラストターを噴射。

組み付いた状態で無理やり機体を振り回す。

そして一瞬の隙を突き斬艦刀を叩きつけ、ベテルギウスの右腕を斬り落とした。

しかしスウエンの反撃もそこまで。

右腕を失つてもベテルギウスの戦闘能力は健在であり、構えたサーベルを避ける余力も残っていない。

スウエンは動く部分を総動員し、無理やり機体の背を晒すと、背中の装備『ジラント』を切り離した。

サーベルが突き刺さった『ジラント』に残った武装を撃ち込み破壊、爆発が二機を包み込んだ。

「ぐううう、やってくれやがった」

煙が晴れた頃にはスウエンのAAAの姿は無く、バラバラに破壊された残骸だけが周りに漂っていた。

「逃げたか。まあいい、あの損傷では奴もただでは済まなかった筈。今回の勝負は俺の勝ちだな、スウエン。次も楽しみにしてるぜ」

アルドは残骸を見つめながら次なる戦いを夢想しつつ、満足気な笑みを浮かべていた。



クロムとの戦いを切り抜けたアオイは新たな敵と遭遇していた。

破壊されたシグルド・グラーフを庇うように立つのは紅と蒼のリグ・シグルド。

駆るのは仮面の男ルドラ・アシユラ、そしてサルワ・アシユラ。

互いに一步も引かないとばかりにサーベルを構えて睨み合う。

「クロムを倒すとはな。流石と言っておくれ、アオイ・ミナト」

「あの時の男！ それにもう一機」

「サルワ、お前はクロムを回収して下がれ。こいつは私の獲物だ」

「了解、すぐに戻る」

「その前に仕留めてやるさ」

サルワの機体は大破したシグルド・グラーフを掴むとそのまま下がっていく。

それをアオイは黙って見守る。

本音を言えばここで仕留めたかった。

クロムはそれだけの強敵なのだ。

しかしそれをすればルドラが隙をついて攻撃を仕掛けてきただろう。

「バッテリーにはまだ余裕があるけど……」

「余裕じゃないか。てつきりクロムを仕留める為に動くと思っていたんだがな」

「目の前に敵がいるのに、目移りしたら失礼だろう？」

「なるほど、では先の決着をつけさせてもらおう！ 今度は全力で貴様を倒す!!」

ライフルを発射しながら突撃してくるリグ・シグルドをアオイもまたライフルを構えて迎撃。

だがアオイの予想に反し、ルドラは容易く射線から逃れると伸ばしたビームカッターを振り抜いてくる。

「ッ、この反応!?!」

上方へ飛び、カッターを避けると再びライフルを撃ち込んだ。

だがそれすらも掠める事無く、空を切る。

これらの反応はエレボスの戦闘とは段違いだった。

「やっぱり、これは!?!」

「どうした動きが鈍いぞ!」

素早く回り込んだリグ・シグルドはビームクロウでイレイズの片足を奪い、立て続ける。一太刀が片翼を貫通する。

「ぐっ、この!」

シールドで突き飛ばし、ビームライフルを連射するが、それもすり抜けるように回避してゆく。

間違いない。

この動きは——

「SEED!? 奴だけでなくお前まで!!」

「言った筈だ、今回は全力だとな!」

「チツ!」

イーゲルシュテルンで牽制しながら、バックステップ。

無理やり距離を取りつつ、体勢を整える。

「驚きはしたが、だからといって!」

SEEDによる反応速度の向上は予想外ではあったが対処できない訳ではない。

それに現状ドラグーンが使用できない事も不幸中の幸いだった。

おそらく周囲に散らばった岩片の影響でドラグーンを展開する事ができないのだから。

ならばそこを突く。

「これ以上好き勝手にさせるものか!」

自身の中にあるルドラの動きを修正、ビームライフルを叩き込む。

だがそれも意を返さないとばかりにシールドによって防がれてしまった。

「遅い!!」

「オオオオ!!!」

振るわれたビームサーベルをブルートガングで止め、同時に叩きつけられたビームク

口ウをシールドで受け流す。

「満足かよ、こんな惨劇を引き起こして！ 何が世界を正すだ!!」

湧き上がる怒りに任せ、叩きつけるようにビームサーベルを上段から叩きつけた。

「何を主張しようが、お前らは史上最悪のテロリスト以外の何者でもない!!」

「ただの一兵卒過ぎない分際で偉そうに吠えるな！ 変革に痛みは必要不可欠!」

光刃がイレイズの頭部を掠め、イーゲルシュテルンの発射口が潰されてしまった。

それでもアオイは怯む事無く、リグ・シグルドとの距離を詰める。

「血を流す事を恐れる者に何かを成す事など不可能だ!」

「なら自分の血だけを流してろ!」

虫唾が走る。

アオイの脳裏に浮かぶのは幼い自分の姿。

上の連中の都合で起きた戦争で亡くなつていく大切な人達。

いつもいつも翻弄され傷ついていくのは力のない子供だ。

そしていつも戦端を開くのも、こういった勝手な理想を押し付けてくるタチの悪い連

中なのだ。

自分が胸を張って正しい事をしてきたなんて口が裂けても言えないが、それでもこんな奴らよりはマシな生き方をしてきたつもりだ。

「俺はお前らみたいな奴らが一番許せない！ 勝手な理想を押し付けてくるな！」
「その発想こそが一兵士の限界だと知れ！」

「ただの兵士で結構！ お前らみたいな理想に酔ったテロリストよりはマシだ！」
叫びながらも冷静にリグ・シグルドの動きを観察する。

SEEDを使っているだけあって動きは前とは別人だ。

接近戦の強さに磨きがかかり、さらに射撃の精度も上がっている。

「なら俺の戦いやすいやり方でいくだけだ！」

アオイは機体の速度を上げ、リグ・シグルドに接近戦を挑む。

高速ですれ違い様にウイングをぶつけて敵の体勢を崩した所にサーベルを振り抜く。

それを見抜いていたのかりグ・シグルドもまたカッターをぶつけた。

幾度となく繰り返される激突でイレイズの装甲はボロボロになっていく。

それでなくともシグルド・グラーフとの闘いでダメージも残っているのだ。

長期戦は不利になる。

「ダラダラ戦う気はない。一気に決着を！」

アオイはスラスターの出力を限界まで引き上げ、さらに速度を上げながら敵の懐へと飛び込んだ。

コックピットに警戒音が鳴り響くが構ってられない。

「これ以上関係ない誰かを巻き込むな！」

「世界を正すと言った！ 関係ない者など一人たりとも居はしない！」

「だから貴様らに傷つける権利があるとでも？ 思い上がるな！」

「世界を食い物にしてる連中を放置している貴様らが言う事か！」

距離を詰めウイングを盾にリグ・シグルドの一撃を受け止めたアオイは敵の右腕を斬り裂いた。

「ぐっ、やる！ だが！」

ビームクロウの一撃がイレイズの装甲を抉り、振るつたサーベルがリグ・シグルドの脚部を傷つけた。

「ツツまだだ」

「ここままでやるとはな。腐ってもSEED持ちという事が、アオイ・ミナト」

通信機から聞こえてくる称賛にアオイは思わず歯噛みする。

状況は互角に見えるが、アオイの方が圧倒的に不利。

クロムとの闘いで消耗があつたにしても、ルドラの力は想像を上回っていた。

リグ・シグルドは装甲に傷はあるものの、腕以外に戦闘に支障が出る程派手な損傷はなかつた。

それだけルドラの技量が卓越している事を意味している。

「貴様のようなただの兵士とはそもそも価値観が違う。ただの歯車としてしか生きられぬ者に分かる筈もあるまいな」

「分かりたくもない、そんな事！」

互いに弾け飛び、サーベルを構えて真正面から睨みあう。

この攻防で終わりにすると判断した瞬間、二機は動いた。

「ハアアアア!!!」

「オオオオオ!!!」

ビームクロウとサーベルが激突、激しい稲光と共に火花が飛ぶ。

一見、片腕のないリグ・シグルドが不利に見える。

しかしイレイズのパワーは危険域に近づき、数々の損傷と無理な機動によつて全身にガタが来ている。

さらに不味いのが背中 of 装備ウイングスだ。

機体と装備の僅かな誤差が此処に来て大きな影響をもたらし始めていた。

少しでも気を抜き操作を誤れば、機体はすぐにバランスを崩してしまふだろう。

「限界だな!!」

力任せに押し込まれたビームクロウがイレイズのサーベルを押しつけ、装甲に食い込んだ。

「ぐううう!! そうは、いくか!!」

背中のウイングを展開、爆発覚悟で出力を上げる。

そしてリグ・シグルドと斬り結びながら移動し始めた。

「無駄な足掻きを!」

「そんな軽口言ってる暇があるなら、歯でも食いしばってろ、仮面野郎!!」

もうウイングスの出力に機体がついていけない。

だがアオイはお構いなしに速度を上げ続けていく。

「ぐうううう!!」

「ま、だ、まだアア!!」

二人は速度に耐えるように歯を食いしばり、機体は岩片にぶつかる度に傷を増やす。

そしてとうとう限界が訪れた。

ウイングスの出力に機体がついてゆけずアタッチメントと翼を支えていたアームが

破損。

さらに限界を超えた出力を解放した反動でオーバーロードを引き起こし、爆発した。

「何?」

反動でイレイズの背中から飛び出すように壊れたウイングスがリグ・シグルドと激

突、大きく吹き飛ばす。

アオイは残ったスラストを吹かし、リグ・シグルドと距離を詰め、ブルートガングを突き刺した。

腹部に刃が貫通し、リグ・シグルドに重大なダメージを負わせる。

畳みかけるようにサーベルを逆さに持つと頭部へと押し込んだ。

「落ちろー！」

リグ・シグルドの頭部は無残に押しつぶされ、機体も弛緩するように動かなくなる。

これで戦闘不能になった。

そう判断したアオイが敵から離れようとした瞬間、その表情が凍り付く。

リグ・シグルドは——いやルドラ・アシユラは未だに戦意を失ってはいなかったのだ。

「舐めるなアアアアア!!」

ビームクローを捨てビームカッターを放出、イレイズの胸部に突きを放つ。

視界を失っていた為かコックピットは逸れたものの、間違いなく止めの一撃となりイ

レイズの装甲から色が抜け、完全に機能を停止させた。

それは戦場に姿を見せて約10年間戦い続けた名機の最後の瞬間だった。

「俺の勝ちだ、アオイ・ミナト」

ルドラの声には此処まで見事に戦い抜いた敵への称賛が込められていた。

正直な話、ここまで自分のリグ・シグルドが追い込まれるとは思っていなかった。
「……いつの間にか慢心していたか。『昔』の二の舞を踏むところだった、貴様と戦えた事に感謝しよう」

『昔』も結局その慢心と驕りによって追い込まれ、最終的に敗北してしまったのだ。
ナチュラルルに対する嫌悪は消えずとも、その力は本物。
認めよう。

確かにアオイ・ミナトは自分と競うにふさわしい相手だった。
その時、ルドラに電流のようなものが全身に走るのを感じた。

「ふん、ルシア・フラガか」

駆け付けてきたのはルシアの駆る飛行形態のオウカだ。

いかにルドラであろうと今の状態でルシアと戦うのは分が悪い。
しかし彼は全く焦る事無く、動かなくなったイレイズを掴む。

「中尉!! 貴様、中尉を離せ!!」

「お前に構っている暇はない。後は任せたま、サルワ」

ルドラがその名を口にした瞬間、ルシアに電気が走る。

オウカの動きを見切った正確な射撃が上方から放たれ、その進路を阻む。

「ッ!?!」

ルシアは逆噴射でブレーキを掛けつつ、モビルスーツ形態へと変形。

攻撃を仕掛けた相手にビームライフルを撃ち込んだ。

しかしそれを速度で振り切るようにして躲した蒼のリグ・シグルドがオウカに襲い掛かる。

強い。

射撃も近接戦も隙が全く無い。

「邪魔をするな！」

ロングサーベルでリグ・シグルドを振り払おうとするが、相手は斬撃の軌跡を見抜き、舞うような動きで躲してくる。

「そういう訳にはいきませんね。女性相手となると気が咎めない訳ではありませんが、相手が貴方という事なら遠慮はいらない」

「どういう意味？」

「私が語るべきことではない。『彼女』から聞くと良い。答えてくれればですが」

サルワの攻撃をシールドで捌きつつ、イレイズを連れて去っていくルドラに焦りが募る。

だが、そんな感情をすべて消し去ってしまう程の悪寒が全身を駆け抜けた。

「これは……」

殺意であり憎悪の感情がこの空間を満たしているような感覚。
止まらない悪寒の源。

ルシアを見ている視線の持ち主の方へ意識を向けると、そこにはシグルド・グラーフが佇んでいた。

「あの機体……いや、それよりもこのパイロットから感じるものは——」
殺意とかは別のこの強烈なまでの違和感。

そして同時に覚えもある。

以前に立ち寄ったコロニーのビルの中で見ていた車から感じたものと同じだ。

「出てこなくても良かったのに、シルヴィア。ルシア・フラガは私が倒すよ」

「近くにいるとあつては流石に任せきりという訳にはいかないわ、サルワ」

立ち塞がる二機の強敵。

その内の一機には因縁もあるようだ。

ルシアは募る焦りを消化しきれないまま、二機の敵を相手に交戦を余儀なくされてしまった。



『メーカーリウス』から遠く離れた場所に一つの建造物が静かに光を発していた。その傍には地球や月、コロニー群から離脱してきた、所謂はみだし者が集まっている。全員が居場所を見出すことができず、決起した『マクベイン・エクスキューター』に参加した面々だ。

そんな彼らを統率し一つの軍として機能させたウォーレン・マクベインは届いた吉報に笑みを深くする。

『閣下、作戦は成功しました！ 『門は砕かれた』との事！』

『報告ご苦労。だが閣下はやめろ。私はただの代表にすぎない』

『そういう訳にはまいりません。閣下は我々を導く身の上であるご自覚ください』

『そうだな。作戦完了次第、ルドラ達を帰還させろ、敵に感づかれないうようにな』

『了解しました』

通信が切れるとウォーレンは戦艦の窓から見える物体にもう一度目を向けた。

「さてここからが正念場。世界に生きる者達、知るが良い。この『エスカトロジー』が古き時代を砕くのだ」

第12話 対面

資源衛星『メーカーリウス』の破壊は全世界に大きな衝撃と甚大な被害を与える事となった。

宇宙にバラ撒かれた無数の岩片は各コロニー、月、そして地球にまで及び、その規模は各勢力の軍隊は数日間、岩片の処理で不眠不休の活動を余儀なくされた程。

ただ地球に到達した隕石の大半が大気圏で燃え尽きる程度の大きさだったが、その内の幾つかは甚大な被害をもたらす事が確定的な大きさを保ったまま地球への落下コースを辿っている。

その為、大気圏付近では軍が部隊を展開し、岩片の迎撃に当たっていた。

「二つたりとも通すなよ！　すべて地球に落ちる前に撃ち落とすんだ!!」

「了解!!」

気合いを入れるように叫ぶ同盟の部隊員の声には疲労の色が見え隠れしていた。

連日の出撃によって休む間もなく除去作業に従事しているのだ。

それも無理はない。

しかしここで地球降下を許せば、『ブレイク・ザ・ワールド』の二の舞になってしまう。家族も、友人も、恋人も。

あの青い星に居るのだ。

それだけは許す訳にはいかないと、迎撃の為に出撃した部隊全員が氣力を振り絞って
いた。

「くそ、どんだけあるんだよ」

「ボヤくな！ 迎撃する暇があっただけまだマシだ！」

『メークリウス』は外宇宙の門。

それ故地球からもコロニーからも離れた位置にあった。

今回はそれが功を奏し、同盟にて設立された諜報部や現場に居たウリエルからの迅速な伝達を相まって迎撃する時間の猶予を得る事が出来ていた。

さらにユニウスセブンの時のような巨大な岩は艦隊砲撃により、多くが砕かれていた事も幸いだった。

「前方に火力を集中しろ！」

量産された高エネルギー収束ライフルを掲げ、発射された閃光が地球に迫る岩片を次々と破碎していく。

そしてその背後から凄まじい威力の無数の砲撃が一番大きな岩片を撃ち砕いた。

「あれは!？」

「フリーダム！ 来てくれたか!!」

地球の方から上がってきたのは蒼い翼を広げた同盟象徴のモビルスーツ『フリーダムガンダム』だった。

そのコックピットに座るのは地球の危機に戦場へ復帰したマユ・アスカ。修復された初代フリーダムを駆り、破砕作業へと駆け付けてきたのだ。

「全機、大きな破片は私が砕きます。細かいものの排除をお願いします」
「了解した」

用意してきたスレイプニルを装着し、ターゲットをロックすると対艦ミサイルとビーム砲を発射し巨大な岩を一齐に破壊する。

「いけー」

フリーダムの火力は現在に至っても上位に位置するものであり、その特性からもういった複数のターゲットを狙うのは得意中の得意である。

ましてやマユにとっては愛機にも等しい機体。

真つすぐ向かってくるだけの岩を撃ち抜くくらいなんて事はない。

絶え間なく続いた攻撃により、目ぼしい岩はすべて砕かれた。

中心となって砲撃を行っていたマユは安堵のため息をついた。

「ふう、まだしばらく気は抜けないけど、これで地上に被害は無くなったでしょう」とはいえ根本的な脅威が去ったとは言えないのが頭の痛いところだ。

「地上も大丈夫だと良いですが」

青い星を心配そうに見つめる、マユ。

彼女の懸念は現実のものとなっていた。

地上には何故か隕石が無数に落ちてくるという噂が絶え間なく流れていた。

その混乱はかつてない規模となり、各国家では暴動に近い騒ぎとなる。

地球に住まう多くの者達が『ブレイク・ザ・ワールド』の恐怖を忘れていなかったのである。

この結果、『マクベイン・エクスキューター』の脅威から身を守ろうと統合政府への参加を表明する国家が多数出現。

中には今まで統合と距離を置いていた国家も存在しており、同盟やテタルトスは密かに疑念を強くする事になる。

各勢力の緊張感が影で高まっていく中、メークリウス防衛隊の救助活動を行っていた

ウリエルのブリッジでは陰鬱な空気が流れていた。

多くの被害が出た現場における救出作業だ。

陰鬱な気分になるのも無理はない。

しかし彼らが暗い空気になっているのは別の理由からだった。

「大佐、ミナト中尉が敵に捕まったというのは本当なんだな？」

「ええ。……私がついていながら」

ルシアは血が滲むほど強く拳を握りしめる。

しかしあの時、立ち塞がった敵は腕前も本物だったが——シグルド・グラーフに搭乗していたパイロットはルシアに格別な敵意を持っていた。

あの二機さえ邪魔しなければ。

「艦長、私に中尉を救出に行かせてください！」

「落ち着け、いつも冷静な君らしくもない」

ルシアは目に見えて焦っている。

それだけ彼女の中でアオイ・ミナトは大きなウェイトを占めているという事だろう。

しかし気持ちは分かるが、今は緊急時である。

冷静になつてもらわねば。

「大尉は負傷で動けず、艦の防衛力も低下している。救出活動で助けた者を病院に運

ぶ必要だつてある。そもそも中尉を捕らえた連中の居場所も分からないんだ、探しようがない」

「それは！ いえ……すいません」

「気持ちは分かる。だが手がかりもない状況ではな」

これでは搜索する事すらままならない。

完全に八方塞がりという奴だ。

さらに空気が重くなつたブリッジの沈黙を破るように通信音が鳴り響いた。

「艦長、通信が入っているのですが……」

「誰からだ？」

「いえ、それが匿名で……アオイ・ミナトの居場所を知っていると」

ヨハンとルシアは顔を見合わせる。

あからさまに怪しい通信だが、それを無視するには今のウリエルには情報が足りなさすぎる。

ヨハンは畏である事を覚悟して、通信を繋ぐように指示を出した。

《聞こえるか、ウリエル》

聞こえてきた声はどこか掠れたような声で、人物を特定できるような特徴はない。

しかしこの声はエレボスに核が仕掛けられていると伝えてきたものと同じものだ

た。

「君は誰だ？ 何故、ミナト中尉の事を知っている？ それにエレボスに核が仕掛けられている事を伝えてきたのも君だな？」

《答えられないが敵ではない。時間がないので手短かに伝えるが、アオイ・ミナトを捕縛した『マクベイン・エクスキューター』の戦艦はミラージュ・コロイドで姿を隠しながら移動している。流星に正確な位置までは特定できないがある程度の予想範囲は絞り込めた》

同時にウリエルへとデータが転送されてきた。

映し出された宙域図には敵戦艦の移動経路と思われるものがマッピングされている。

《救出するなら急いだ方が良い。アオイ・ミナトは『マクベイン・エクスキューター』から恨みを買っている。時間を掛ければ処刑される可能性も高くなる》

「どういう事だ？」

《首魁のウォーレン・マクベインはファウスト・ヴェルンシュタインの信奉者だ。そして統合戦争で奴を仕留めたのはアオイ・ミナトだろう？ 確実に憎まれている筈だ。捕虜の扱いについても核すら平気で使用するテロリストが条約を守る筈もない》

「なるほど」

《これらの情報を信じるも信じないもそちら次第だ。それからロシア・フラガ、ヴェク

ト・グロンルンドには近づくな、奴の玩具にされたくなければな」

「それは——」

ヨハンが問い返す間もなく通信は切れた。

出来ればもう少し話を聞きたかったが、アオイの情報を得られただけでも状況は進展したとは言える。

「艦長、救出した部隊を送り届けた後で構いません。私を行かせてください」

「単独での作戦行動は許可できない、危険すぎる。罨である可能性も否定できない」

「ならば俺と一緒に行きよう」

ブリッジに入ってきたのはヴィルフリートだった。

『メーカーリウス』防衛の為に攻撃していた事が幸いし、難を逃れた彼を含めた数名がウリエルに救助されていた。

「詳細は聞こえなかったが、アオイ・ミナトを救出にいくのだろうか？」

「勝手にブリッジに上がらないで欲しいな」

「ならば我々に状況報告くらいは寄こしてほしいものだ」

「う」

確かにその通りだ。

あまりの忙しさに保護したヴィルフリート達に状況報告などが後回しになっていた。

「何にしろ、奴らの足取りを追うならば、我々も協力する。本国もN.Oとは言わない筈だ」

「クアドラード中佐、しかし」

「同盟が動けないというなら、こちらだけ動く。今ある情報を提供してほしい」

「何故、貴方がそこまで？」

「アオイ・ミナトにはエレボスでの借りがある。それに罫であったとしても、奴らの尻尾を掴む機会である。『メーカーリウス』を砕いた閃光——おそらく巨大ビーム砲だろうが、その所在も掴みたい」

「確かに」

収集したデータを解析すればある程度の位置は把握できる。

しかしそれは敵も承知の上の筈。

すでにメーカーリウスを破壊した兵器は別の位置へと移動しているだろう。

「ならば中佐、私も同行させて欲しい」

「大佐に参加していただけるのであれば心強い。今、動ける者は少ないからな」

「ハア、君達だけで話を進めないように」

だが、ヴィルフリートの意見は正論だ。

敵本隊の所在は未だに掴めておらず、『メーカーリウス』を破壊した兵器の詳細も分から

ない。

『マクベイン・エクスキューター』の存在が明るみに出てしばらく経つが、目的も含め現在でも不明瞭な点が多すぎる。

それが常に後手に回っている理由になっていた。

「リスクは承知で動くべきか……独断では動けない。司令の判断を仰ごう」

イザークならば手がかりを得る為にも作戦の許可を下す筈。

テタルトスの協力も得られるなら、尚の事だ。

「艦長、ヴィンゴルヴから連絡が入りました」

「分かった。負傷者をヴィンゴルヴに運ぶ準備を。後、ジュール司令へ連絡を入れて

くれ」

「了解」

ヴィンゴルヴに連絡を入れたヨハンはブリッジに集まった面々と共にアオイ救出作戦の内容を詰める為に話し合いを始めた。

アオイを必ず助ける。

そんな決意を漲らせ、ロシアは拳を握りしめた。

◇

アオイが初めに感じたものは冷たさだった。

床に直接寝転んでいるらしく、体の節々が痛い。

いや、節々だけではなく体全体から痛みを感じる。

痛みを堪えつつゆっくり目を開けると薄暗い天井が視界に入った。

そのまま視線を左右に向けると、すぐに状況を思い出した。

「捕まったか」

腕には手錠が嵌められ、独房らしき狭い部屋に拘束されていた。

床に耳を当てると機械音が聞こえてくる。

此処はおそらく『マクベイン・エクスキューター』の戦艦なのだろうが――

しばらく今までの状況を整理していると独房が開く音がした。

明かりの眩しさに目を細め、徐々に慣れてくると一人の男が立っていた。

銀色の仮面を付けた黒髪の男が口元を歪めて、床に倒れているアオイを睥睨している。

間違いない。

コロニーで見た仮面の男。

そして、死闘を繰り広げたリグ・シグルドのパイロットに相違ない。

「随分とくつろいでいるじゃないか」

「ああ。実に快適だったよ、お前が来る前まではな」

「減らず口はその辺にしておけ。此処はお前にとつて敵地なのだからな」

睨みつけるアオイを楽しそうに見ていた男は腕を掴み無理やり起こす。

「お前と話がしたいという奴がいる。来い、アオイ・ミナト」

「自分の名も名乗らずに馴れ馴れしく俺の名前を呼ぶな」

「それは失礼。私の名前はルドラ・アシユラだ。短い付き合いだろうが、好きに呼ぶがいい」

いちいち嫌味つたらしく聞こえるのは捕虜の身だからだろうか。

ルドラと独房を出たアオイは手錠を付けたまま別の場所へと連れられていく。

道中統合軍の軍服を着た『マクベイン・エクスキューター』所属の連中ともすれ違つたが、アオイを見る目は厳しい。

いや、厳しいどころか怒りと憎悪に満ちていた。

確かに敵だったから恨まれる事はあるだろうが、ここまで一斉に敵意を向けられると流石に堪える。

「此処の連中は彼のファウスト・ヴェルンシユタインの熱心な信奉者ばかりだ。ハッキリ言つて貴様を殺したくてウズウズしているような連中しかない。私の後ろから

離れたら命の保証はないぞ」

「なるほど。で、そんな信奉者さん達がたくさんいるこの戦艦で俺に会いたい物好きな人物は誰なんだ？」

「ある意味、貴様が最も会いたい人物だよ」

ルドラの言い回しに何となく察しをついたアオイは黙って後ろをついていく。

しばらく歩きたどり着いたのは大きなモニターのある部屋だった。

部屋の中には制服に身を包んだ士官達、そしてルドラと同じ仮面をつけた男と茶髪の女性が待っていた。

仮面の男はルドラよりもやや伸ばされた黒髪が特徴的で、雰囲気も柔らかめな印象を受ける。

隣に立つ女性は肩まで伸びる茶髪と鉄面皮のような無表情が印象に残る。

「向こうは？」

「待ちかねているみたいよ」

茶髪の女性が近くの端末を操作すると、モニターに映像が映し出された。

モニターに映ったその人物。

確かにルドラの言った事に間違いはなく、ある意味アオイが会いたかった男だった。

「……ウオーレン・マクベイン」

『マクベイン・エクスキューター』の首魁であり、この一連の紛争を引き起こした張本人。

アオイが睨みつけると同様に向こうもまた鋭い視線を向けてきた。

《初めましてというべきだろうな、アオイ・ミナト》

「俺を知っているのか？」

《もちろんだ。ファウスト・ヴェルンシュタイン司令の命を奪い、その尊い理想を撃ち砕いた大罪人の名を知らぬ筈があるまい。お前とヴィルフリート・クアドラードは決して許されぬ存在として記憶しているさ》

なるほど。

ウォーレン・マクベインからすればアオイは心酔していた上官を殺した仇。

そしてヴィルフリートは理想の為に戦う兄を見捨て、テタルトスに鞍替えした裏切り者といった所か。

「それで、その大罪人に一体何の用があるんだ？」

《お前は確かに罪を犯した。しかしなり損ないとはいえ人類の革新に触れた者でもある。だから機会を与えても良いかと思つてな》

「機会だと？」

《ああ、古き世界が砕かれる瞬間を見届ける機会をな。そして新たな時代の幕開けと

共に古い時代の象徴として死んでもらう》

アオイは思わずため息をついた。

共感も、理解もできない。

自分達の事しか考えていない。

こいつらは何処までも狂信的な理想に取りつかれたテロリストなのだ。

「……革新とか、古い世界だとか、お前は結局何がしたいんだよ」

《人類の革新の為、次のステージへ上げる。その為の土台を作る為に今の世界を破壊するのだ。その結果、人は新たな世界を手に入れるだろう》

アオイの脳裏に同じ事を言っていた奴の言葉が蘇ってきた。

『統合戦争』の最終決戦。

アポロン要塞でアオイが戦った最後の敵。

彼らが信奉する男が放った言葉だ。

「この世界は不完全に過ぎる！　あまりに愚かで無能な連中が多すぎる！　だからこそ変える！　だからこそ『SEED』が、人類の革新が必要！　統一はその為の土台だ！」

何度思い出しても、勝手な理屈に聞こえるのはアオイが彼らの言うなり損ないだからだろうか。

それでも――

彼らの言う革新が人類にとつて有益なのかもしれない。――

「……俺はやつぱりお前のやろうとする事を認められない。お前が生み出しているのは新しい時代なんかじゃない。ただの破壊と混乱だけだ！」

《その果てにこそ人類の革新と新たな秩序はある》

「勝手な理想を押し付けて！ お前の勝手な理想の為に今を必死に生きている人達が犠牲になるなんて間違っている！」

《正しさなど後世の歴史家にも勝手に語らせておけばいい。必要なのは信念を貫く覚悟と実現する為の行動だけだ！》

平行線。

決して交わらない主張が部屋に空しく響く。

そんな二人の睨みあいを止めたのはルドラだった。

「もう十分だろう？ この凡人に貴様の言う言葉が通じるとも思えん。それでコレはどうするんだ？」

《先ほど伝えた通りだ。アオイ・ミナトには見届けてもらおう、古き世界の終焉をな》

「何をする気なんだ？」

《見ただろう、『メーカーリウス』が砕けた瞬間を。アレと同じ事をするだけだ》

「どうやって……」

アオイの質問に答えるように画面に表示されたのは大型の砲口。

徐々に縮小、全貌が明らかになるにつれ、驚きを隠せなくなる。

その姿に見覚えがあったからだ。

「……アポカリプス？」

『アポカリプス』とはかつてテタルトスの軍事的象徴として建設された巨大戦艦の事だ。

今現在においてもあれほどの戦艦が建造された例はない程の巨大さと過剰な火力を持つている。

ただユニウス戦役で主砲を含めた艦全体に致命的なダメージを受けた後は徐々に解体するとテタルトスは発表していた。

あの戦艦の存在意義はテタルトスを守る為の畏怖的な象徴としての意味合いが強い。

主砲が破壊された事による戦闘力の低下、さらにはテタルトスの軍事力向上や世界情勢の変化を考えても無理やり存続させる意義は少ないと判断したのだろう。

その戦艦と酷似したものが画面に映っていた。

画面ごし故に正確な所は不明だが、規模はやや縮小されている反面主砲の砲口はかな

り大型化されている印象を受けた。

さらにその周辺には多くの戦艦とモビルスーツが展開している。

その数はエレボスに展開していた部隊とは比較にならない。

どうやらあれが『マクベイン・エクスキューター』の本隊らしい。

「あれだけの戦力を……それにアレは」

《『エスカトロジ』、古き世界を終焉に導く為の絶対的な力だ》

「あれでメークリウスを破壊したのか」

《その通りだ。そして新たな秩序と世界を切り開く象徴でもある。テタルトスがかつてそうしたようにな》

前から知っていたが彼らは本気だ。

『メークリウス』破壊の混乱で地球やコロニー、月は大混乱となっている筈。

この機を逃さずあの『エスカトロジ』と全戦力をもちいれば彼らが勝つ事はないにしろ、その被害は甚大なものになる。

かつて起こった大戦を上回る被害が出るだろう。

何としても阻止しなければ。

「迂闊な事はしない方が身の為だ。お前に出来る事はない大人しくしておけ」

「何———グハア」

ルドラの膝が腹部にめり込み、そのまま床へと蹴り倒されてしまう。

《約束の日まで精々自分の無力さを嘆くがいい。それがお前に下された罰だ》

「ち、くしよう」

遠くなっていく意識の中、アオイは笑みを浮かべるウォーレンを睨みつける事しか出来なかった。

◇

「おらあー！」

「この屑がー！」

ウォーレンの宣誓とも取れる話を聞いたアオイに待っていたのは独房の中での一方的な暴力だった。

幾度も殴られ、蹴られ、もはや全身がボロボロだ。

殴られた顔面や腕足は痛々しく腫れ上がっているだろう。

それでも兵士の暴力は止まらない。

「何人もの仲間を殺した悪魔が！ いい気味だぜ！」

「何とか言ったらどうだ！」

もはやそんな余裕はないと思つての挑発。

しかしアオイは不敵な笑みを浮かべると、逆に挑発してやった。

「は、はは、条約、すら、平気で、無視する、奴らに、何を言つても無駄、だろ」

「何が条約だ！ それこそ我々が打ち壊したい古き世界の象徴！」

「元々俺達はジャンク屋だった。でもあんな条約が出来た所為で商売は出来なくなり、家族共々露頭に迷つた、それを救つてくれたのがファウスト様だ！」

「俺達を救つてくれた恩人だつたんだ！ それをお前のような屑野郎が！」

「ガハア」

再び拳が腹に入り、アオイは激痛に呻く。

それでもアオイは笑みを浮かべるのを止めない。

「だから俺達が——」

「この期に、及んで、ソレか。じゃ、お前らの、やった事でどれ、だけの家族が、路頭に迷つた、んだよ？ それは、許され、るのか？」

「貴様風情が偉そうに!!」

「知つた風な事を言つてんじゃねえ！ 碌な苦勞もした事がない、エリートが!!」

「今にそんな口も叩けなくしてやる！」

「殺さなきゃいいんだからな！」

襟元を掴まれ、振り上げられた拳が目に入る。

また襲い来る痛みを覚悟したその時、横から伸びた腕が拳を捕らえた。

「その辺にしておきなさい」

「あ、貴方は」

拳を止めたのはあの部屋にいた茶髪の女性だった。

「このような暴行は許可されていなかった筈ですが？」

「し、しかし」

「今日は見なかつた事にしましょう。早く持ち場に戻りなさい」

男達は気まずそうにしながらも、アオイを睨みつけると独房を後にした。

アオイは痛みに呻きながら、近寄ってきた茶髪の女性を見上げる。

こんな状況だというのにその表情は何も読み取れない無表情。

そして女性が口にした言葉にアオイはさらに混乱してしまう。

「少し待っていなさい。手当をします」

「Yes」

正直何を言われたのか理解できなかつた。

恨み言の一つでも言われると思つたからだ。

そんなアオイの困惑を無視するように女性は医療ボックスを持ってくると、素早く手

当を始める。

「な、んで？」

「話さない方がいい。傷に障る」

「少し染みるわ」と一声掛けると手早く消毒液を吹きかけてきた。

「痛ッ！」

「染みると言つたでしょう。男でしょ、これぐらいで騒がない」

何か子供扱いされているようで癩だったが、確かにいい歳して騒ぐのもみつともない。

そっぽを向いて染みるのを我慢していると、初めて女性の表情が和らいだ。

「子供みたいね、貴方」

「俺は、大人だ」

「そう、ならこれぐらい平気でしょ」

軽くパチンと叩かれ、体全体に電気が走つたように痛みが伝たわつた。

悶絶するアオイを楽しそうに見つめた女性は「食事を持ってくる」と背を向ける。

「何でこんな事を？」

「そうね、一言で言うならお礼かしら」

「礼？ 何の？」

恨まれる事はあつても礼を言われる筋合いはない。

「あの男を殴つてくれた事よ、アオイ・ミナト」

最近殴つた相手と言えば奴しかいない。

思いだしたくもない相手だが、もしかしてこの人は奴を知っているのだろうか。

「奴と貴方は——」

そういえば名前も知らなかつた。

そんなこちらの戸惑いを感じ取つたのか女性は振り返り、薄い笑みを浮かべた。

「シルヴィア——シルヴィア・ヒビキよ。よろしくアオイ・ミナト君」

第13話 奇妙な共闘

宇宙に浮かぶ巨大な戦艦。

名を『エスカトロジ』

人類の革新を謳う『マクベイン・エクスキューター』の真の本拠地であり、切り札である。

そんな彼らは現在敵に補足されない為、移動しながら調整作業に追われていた。

エスカトロジの初陣ともいえる『メーカーリウス』破壊。

これは『マクベイン・エクスキューター』の勝利と言っても問題ない。

目標は撃破した上で、護衛に付いていた戦力を壊滅させた。

これにより敵の戦力の低下、さらに撒き散らかせた岩石により各勢力の混乱と部隊の分散化に成功した。

だが、此処で問題も発生する。

主砲を発射した『エスカトロジ』の回路がショート、機能不全に陥ってしまったの

だ。

このままでは作戦に支障が出かねないと『エスカトロロジー』では急ピッチで修復作業が進行している。

そんな作業風景をモニターで見っていたウォーレンは厳しい表情を崩さず部下の報告に耳を傾けていた。

「以上が現在判明している点であります。主砲の修復作業を続けていますが、まだしばらく時間がかかるかと」

「修復を急がせろ。敵がいつ攻めてきてもおかしくない」

ウォーレンは決して各勢力の戦力を甘く見てはいなかった。

どの勢力よりも高度な技術を持つテタルトス月面連邦。

世界最大の物量と規模を誇る地球圏統合政府。

そして豊富な経験と優秀な人材にて多くの苦境を乗り越えてきた調和同盟。

それぞれが侮れない力を持つ強敵である。

これを正面から打ち倒す事は『マクベイン・エクスキューター』の戦力では不可能だろう。

だからこそその『エスカトロロジー』であり『メークリウス』崩壊の混乱に乗じた今こそが最大の好機なのだ。

「修復を急げ」

「了解しました！」

走り去る兵士と入れ替わりに、白衣を纏った冴えない研究者が入ってきた。

「随分、慌ててるみたいじゃないか」

「ヴェクト・グロンルンドか」

頬に湿布を張り嫌らしい笑みを浮かべているヴェクトにウォーレンは鋭い視線を向ける。

最近になって『マクベイン・エクスキューター』に合流した技術者だが、ウォーレンはこの男を全く信用していなかった。

「頼まれていた新型機の調整は終わったぞ」

「ご苦労だった。いつも一緒に仮面男はどうした？」

「奴は仲介屋のようなもので仲間でも何でもない。ああ、それからお節介だとは思ってたが数名ほど強化処置を施させてもらったよ。強化型リグ・シグルドを万全に操れるようにな」

「なんだと!? 貴様、何を勝手に！」

「そういきり立つなよ。処置を施したのはあくまでも外から入ってきた傭兵とかだけ。お前の兵士には指一本触れちゃいないさ。ま、私からすればどいつもこいつも凡人

だったがね」

やはりだ。

この男はまさに猛毒そのもの。

その技術は認めよう。

人を強化する術のみならず、モビルスーツの知識や技術まで持つその手腕は本物である。

天才とはヴェクトのような者の事を言うのだろう。

しかしその人間性は完全に破綻している。

扱い方を間違えればウォーレン達すら破滅させてしまう事は明らかだった。

「お前に負けてもらうのは困る。私はこう見えてお前の考えには肯定的なんだ。エスカトロジーで邪魔なゴミが一掃されれば世界は快適になる。残るのは優秀な人材、研究もさぞ捗るだろうさ」

「貴様の考えなど知らん。だがこれ以上の勝手は許さない」

「ハア、分かった、分かった。だがそつちも条件を忘れるなよ」

「ああ。アオイ・ミナトの始末とルシア・フラガの捕縛だろう。承知している」

「ならいいさ。あの屑は精々苦しめながら殺せ。生まれてきた事を後悔する程絶望させてな」

去っていくヴェクトを見送ったウォーレンは部下に監視を命じると椅子の背もたれに身を任せた。

「ファウスト司令であれば、もっと奴を上手く扱えたかもしれないが」
目を閉じファウストと出会った頃を思い出す。

ウォーレン・マクベインは地球生まれのハーフコーディネイターである。

ウォーレンが生まれた頃はすでにナチュラル、コーディネイターの対立は激化の一途を辿り、小競り合いなどしょっちゅう起こっていた。

そんな中で生まれたハーフがどんな目に遭ってきたかは、想像に難くない。

ナチュラル、コーディネイター双方から忌み嫌われ、居場所もなく、自分の生まれを隠しての息を擧めた生活がずっと続けていた。

父はブルーコスモスのテロで亡くなり、母は病弱で間もなく死別。

もはや絶望しかない日々の中でウォーレンは常に考えていた。

何故、こんなにも自分は憎まれ迫害されるのか。

何故、こうも周りで生きる人間たちは醜いのか。

人の醜さを目の当たりにしてきたウォーレンにとってはナチュラルもコーディネイターも大差ないものだった。

そして綱渡りのように細々とした日々を過ごす中、ようやく自分にとっての安住の地

を見つける。

それがテタルトス月面連邦国。

ヤキン・ドゥーエ戦役終盤にプラント、地球連合から抜けた人々が作り出した新たな価値観を持った新生国家。

ナチュラル、コーディネイターといった生まれは関係なく、あまつさえハーフすらも受け入れてくれる、まさに天国のような場所だ。

そしてそこに入った軍学校でついに運命ともいえる出会いをする。
ファウスト・クアドラード。

ウオーレンの生きるべき道を定めてくれた恩人であり、指導者だ。

彼とテタルトスで普及していた『SEED思想』はウオーレンの生き方を間違いなく変えた。

「ウオーレン、私について来い。今の世界は間違っている、いつか我々の手で変えるんだ。そして人類に変革をもたらす」

「私にそんな事ができるでしょうか？」

「人類の醜さを誰より知るお前のような者こそが変える資格を持っている。お前がハーフとして生まれてきたのは、ナチュラルでもコーディネイターでもない新たな人類の可能性を示す為だ」

そんな風に言われた事は一度もなかった。

ハーフであるという理由だけで迫害されてきた彼にとってファウストの言葉はまさに神の救いと言つても過言ではない。

救われたのだ。

道が開けたのだ。

ならば進むしかあるまい。

テロリストと揶揄されようとも、屍の山を築こうとも、悪魔と罵られても。

「なによりもこんな世界に未練は欠片もない」

もはやファウストはおらず、残るは醜く争う人類のみ。

ウォーレン・マクベインに迷いなど欠片も残つていなかった。



『メークリウス』崩壊による混乱の只中にある地球圏から人知れず離れようとしていく戦艦があつた。

ルドラ・アシユラが率いる特殊作戦部隊である。

目的を達成した彼らは途中で合流した補給艦と共に『エスカトロジー』へと向かつて

いる。

しかしその速度はゆっくりとしたもの。

これは出来る限り敵に発見されない為の処置である。

作戦の肝は隠密行動。

『エスカトロジー』の場所をいかに悟られないかが、今後の作戦の成否を握っているのだ。

そんな息を殺し離脱を試みる戦艦内の一室で静かに怒気を募らせるサルワ・アシユラが窓の外を眺めていた。

「何時までそんな不機嫌でいるつもりだ、サルワ？」

ルドラは読んでいる本のページを捲りながらからかうと流石にムツとした様子でサルワが反論してくる。

「私はいつも通りのつもりだよ、ルドラ」

「そんなセリフは怒気を隠してから言ったらどうだ」
「ここ数日、サルワは不機嫌さを隠していない。」

普段の柔和な雰囲気を出す彼とはまるで別人である。

ルドラには勿論その理由に見当がついていた。

「男の嫉妬は見苦しいぞ。シルヴィアがアオイ・ミナトの世話を焼いているからと

言つてイラつくな」

サルワが不機嫌な理由はシルヴィアがアオイの怪我の手当てから食事まで逐一世話をしてゐる事が原因だった。

無論、彼女に他意はないだろう。

文句を言いつつアレは他人の世話が好きであり、傷ついた者を見捨てる事ができない慈悲深い性格なのだ。

しかしそれとサルワの感情は別。

サルワのシルヴィアに対する想いは強すぎる。

その独占欲は時にルドラが諫める程だ。

「お前は昔から感情的に過ぎる。シルヴィアの事では特にな」

「ッー」

何か反論しようとするが、自分でもそれが分かつているのかサルワは何も言わずに部屋を出て行つた。

「アオイ・ミナトに手を出さなければいいがな」

仮にそうなったとしても問題はない。

アオイ・ミナトを生かしているのはあくまでウォーレンの個人的な感情によるもの。

奴が死んだところで作戦そのものには支障はない。

「シルヴィアはそれなりに執着していたようだが」

アオイ・ミナトの世話を焼いているのも、単純に世話好きというだけではあるまい。奴の境遇やあり方がよほどシルヴィアの琴線に触れたか。

「まあだからと言ってアオイ・ミナトに情けをかける事はないんだがな」
いかに慈悲深いとはいえ、敵味方の区別はつく。

変な所で情を優先させるような馬鹿な女ではない。

むしろ一度覚悟を決めれば最も容赦がないのもシルヴィアなのだ。

殺せと言われれば表情を変える事無く引き金を引くだろう。

「あれほど恐ろしい女は他にいない。精々、今を楽しんでおけ、アオイ・ミナト——
ん？」

その時、微かにルドラは何かを感じ取った。

「これは——」

これから始まる事を察したルドラは部屋を後にすると格納庫の方へ歩き出す。
その顔には笑みが浮かんでいた。



苛立ちを押し殺し部屋を後にしたサルワが向かった場所はアオイが入れられた独房だ。

分かつているとも。

これが醜い嫉妬である事くらいは。

しかし、サルワにとってシルヴィアは何にも代えがたい存在だった。

あの日、いつ終わるとも知れない地獄の中でサルワにもたらされた光。

それを汚す事は誰だろうと許されない。

「なのに敵の虜囚の世話をさせるなんて」

許しがたい罪だ。

八つ当たり染みた嫉妬だと自覚しながらも抑えきれないサルワはアオイへの殺意を募らせていく。

そして独房へとたどり着いたサルワが見たのは、穏やかにアオイと語らうシルヴィアの姿。

普段は感情を殺し、人へ表情を見せないシルヴィアが笑みを浮かべていた。

それが抑えていた殺意の枷を外していく。

「殺す」

もはや余計な事はどうでも良い。

ウォーレンの命令も知った事じゃない。

独房から離れた位置で身を隠し、殺意も出来るだけ抑え込むと懐の銃を取り出す。シルヴィアの感覚は鋭い。

殺気を放つて近づけばすぐに気づかれてしまう。

彼女の知らない間にすべてを片づけてしまわねばならないのだ。

「フウ」

息を吐き、呼吸を整え、機会を待つ。

シルヴィアが立ち去るのを確認すると、独房へ足に向けた。

「見張りがいないな」

シルヴィアが手配したのか。

忌々しい話だが、今は都合が良い。

独房の扉を開けるとアオイは手錠を嵌められながらも怪我した場所に包帯を巻きつつ、ベットに座り込んでいた。

「お前は、シルヴィアと一緒にいた……」

「サルワ・アシユラだよ、アオイ・ミナト」

アオイはサルワから発せられる冷たい殺気を感じながら息を飲んだ。

本気だ。

こいつは本気でアオイを殺そうとしている。

その殺気は他の兵士達など比べ物にならない。

「無駄な抵抗はしない方が良い。その方が苦しまずに済む。そもそもその怪我で何処まで動ける?」

「チツ、お前もファウストの信奉者って訳か?」

「そんな訳がない。私が君を殺すのはこれ以上、シルヴィアに近づけたくないからだよ」

「シルヴィア?」

「君と話す事はない。此処で死んでもらう」

突きつけられた銃口。

この怪我では一か八かで引き金を引く前に銃を奪うのも無理だ。

「死ぬ。シルヴィアには君が自殺したと伝えておくよ」

「ッ!?!」

簡単に死んで堪るものか。

無駄だろうが、何だろうが最後まで足掻く。

サルワが引き金に指を掛け、アオイが痛む足に力を籠める。

二人が動こうとしたその時——

「そこまでにしてもらおうかな」

背後から聞こえた声に反応したサルワが振り返った瞬間、蹴りが飛ぶ。

「何?」

腕を捉えた蹴りが銃を飛ばし、さらに続けて拳が頬を掠った。

サルワの前に立っていたのは帽子を目深く被った整備士の恰好をした男だった。

素顔は見えないが、帽子の下から金髪が覗いている。

「くっ、お前は!」

男は答えずナイフを投擲、そこで隙を伺っていたアオイもタイミングを見計らって飛び掛かった。

単純な体当たりだが狭い独房の中では避けきる事も出来ずにバランスを崩し、そこに投げたナイフがサルワの顔面に直撃する。

それは丁度銀色の仮面を捉え、大きく弾き飛ばした。

サルワが外に押し出され、その隙に銃を構えた男は立ち位置を入れ替えるように独房の中に足を踏み入れた。

「お、のれ」

「ツ、え？」

倒れ込んだアオイは下から覗き込むような形で立ち上がるサルワの素顔を目撃した。ルドラよりもやや長めの黒髪の隙間から見えた整った顔立ち。

その素顔には見覚えがあつた。

「……アスラン・ザラ？」

「見たな、私の顔を!!」

サルワは顔を手で覆い、今まで以上の怒気を発しながら徐々に距離を取り始める。

「殺す、殺してやる! 貴様らだけは絶対に殺す!!」

指の間から覗く瞳には先ほどまでとは比べ物にならない憎悪の光が宿っていた。

「君では無理だと思うがね」

「黙れ、必ず殺してやるぞ、カース!!」

銃口から逃れるように通路へ移動したサルワはそのままこの場から姿を消した。

「大丈夫だったかな、アオイ君」

「何で此処に? というか俺を助けてどういうつもりだ?」

「言つただろう? 私は『マクベイン・エクスキューター』に属する人間ではないとね。

むしろ敵だと言つてもいい。だから以前にも君達に助力しただろうか?」

確かにカースは以前に『マクベイン・エクスキューター』に関する情報を提供してきた。

防げはしなかったが『メークリウス』襲撃は本当だったし、提供された新型モビルスーツのデータも本物だった。

だからこそ解せない。

カースが何を企んでいるのはアオイには全く理解できなかった。

もつと彼を知る人物であれば何か察する事ぐらいは出来るかもしれないが。

訝しむアオイを無視し、カースは取り出した鍵で手錠を外す。

「脱出するなら急いだ方が良い。もうすぐ君の迎えもくるだろうからね。これに着替えたまえ」

バックの中身はカースと同じ整備士が着る服と帽子だった。

「迎え？」

「ああ。此処に来る前に色々と情報を流しておいた。『彼ら』がそれを掴み、同盟へ渡しているならそろそろ迎えがくる頃だ」

色々聞きたい事があるのだが、それは後回しにした方がよさそうだ。

船の構造も知らない以上、とりあずカースの後について行くしかない。

毒を食らわば皿まで。

行けるところまで行つてやる。

「脱出を手助けしてくれるのか？」

「ああ、君が味方と合流するくらいまではエスコートしよう」

アオイはこれ以上は何も聞かず、服を着替えると体の状態を確かめる。

暴行を受けた場所が痛むが動けない程ではない。

帽子を深く被り素顔を隠すと数日ぶりに独房の外へ出た。

「で、この船の構造は？」

「把握している。格納庫に向かい、モビルスーツで脱出する」

モビルスーツで思い出した。

大破したがイレイズMk-IIは敵に鹵獲されていた。

「イレイズは——」

「大破した状態で格納庫で放置されていたよ。まあ今更得られるものもないだろうがね」

AAAのパーツを使用してはいるものの、イレイズは旧型のモビルスーツである。

目新しい技術が使われていた訳でもなく、背中の装備であるウイングスも完全に大破していたなら支障はない。

だがどうしても回収しなければならぬものがあつた。

「W・S・システムの戦闘データだけは回収しないと」

「それも格納庫か。彼らが急いで解析を進める程、あの機体に執着していないだろう」
それ以上の無駄話はせず、カースの後に続く。

だが妙な事に見張りやすれ違う兵士の数が少ないように感じる。

「何かしたのか？」

「邪魔な連中には退場してもらっただけさ。それも長くは続かないだろうが」

出来るだけ目立たないようエレベーターに乗り込むとカースから銃を手渡された。

「この先、見つからずに進むのは難しい。一応持っておきたまえ、後は今説明した通りに」

「ああ」

銃を受け取りセーフティを外すと格納庫に到着した。

そこに待っていたのは銃を構えた兵士達を率いるルドラだった。

「そこまでだ」

「ルドラ・アシユラ……サルワ・アシユラから連絡をもらったか」

「そんな必要はない。そいつが乗り込んできた時点で感知していただけた。しかしまさかお前が乗り込んでくるとは思わなかったぞ、カース。いや、クルーゼ隊長」

「君の口からそう言った物言いを見ると少々感じ入るものがあるな、ルドラ」

笑みを浮かべてはいるがルドラから伝わってくる感情はお世辞にも良いものではなかつた。

明確な殺意が伝わってくる。

「貴様是我々を利用していたつもりなんだろうが、生憎だったな。利用していたのはこちらも同じだ」

「それはどうかな?」

カースは持っていたスイッチを押す。

するとビーという耳障りな騒音と共にコンテナから大量のスモークがあふれ出した。

その隙にアオイとカースは走り出す。

「逃げられると思うか! 貴様の居場所は分かっている!」

スモークの中で正確にカースの位置を掴むルドラは進路を妨害するように銃弾を撃ち込んでいく。

それを尻目にアオイはイレイズMk-IIの方へ向かっていた。

格納庫の隅にほったらかしにされていた愛機のコックピットに飛び込むとコンソールを操作する。

「やっぱりほぼ大破してるな」

イレイズが動かない事を確認するとコンソールの下からデータチップを素早く抜くとすべてのデータを消去する。

「すまない」

長年寄り添った相棒に別れを告げ、コックピットから出ると今度は近くに立つイリアスに走る。

「貴様、止まれ！」

「嫌だよ！」

視界の悪さの所為でライフルの弾は走り抜けたアオイを足元を穿つ。

迂闊に止まる方が当たるかもしれない。

脇目も振らず走り抜けると何とかイリアスのコックピットへ入り込めた。

「基本的にイレイズやウインダムと変わらない。これなら動かせる」

機体を起動させ、モニターを点灯させるとスモークで視界がまるで見えなかった。

「アイツ、どんな量を使ったんだよ」

アオイはイリアスのトードスシユレツケンを格納庫全体に撃ち込み、銃撃を繰り広げる敵兵を攪乱する。

その間にカースも機体を確保したのか、通信が入ってきた。

《機体までたどり着いた。此処からは各々の判断で脱出する》

「了解、一応礼を言っておくよ」

《その必要はないさ。こちらの都合でもあったからね。それに少し気が早いだろう、ここからが本番だよ》

「確かに」

このまま何の妨害もなく逃げ切れるとも思えない。

アオイは覚悟を決めるとビームライフルを戦艦のハッチへむけ、引き金を引く。発射されたビームがハッチを破壊、宇宙へ飛び出した。

「背中に装備がないのが痛いけど、贅沢は言ってられない」

スラスターを吹かし出来るだけ距離を取ろうと速度を上げる。

しかし予想通り敵がこのまま逃がしてくるはずもなく、次々と追手のモビルスーツが出撃してきた。

しかも追撃してきたのは機動力の高いリゲル・リローデットだ。

リゲルはテタルトスで開発されユニウス戦役に実戦投入されて以降、改良を繰り返した未だに実戦投入されている傑作機の一つ。

モビルアーマー形態での加速性と機動力は非常に高く、装備無しのイリアスでは逃げきれない。

「くそー」

毒づきながら速度を上げるも、リゲルを引き離す事が出来ない。

徐々に距離を詰められ、射程距離に入ると同時にビームライフルの攻撃がイリアスに襲い掛かる。

「グツ、操作方法は問題ないけど武装が！」

操作方法は地球軍系のモビルスーツだけあって戸惑うことは無い。

しかし背中の武装がない分、火力や機動力といった部分はリゲルと比べて劣ると言わざる得なかつた。

その時、後方で爆発の閃光を確認した。

「アレは——カースだな」

奴も派手に暴れているらしい。

「ならあの敵の追撃さえ振り切れば！」

追手に向けてビームライフルで牽制する。

速度のあるリゲルを撃墜する事は難しいだろうが進路を妨害する事は出来る。

それでも多勢に無勢は変わりなく追いついてきたリゲルがモビルスーツ形態で上方から斬りかかってきた。

「ッ!?!」

間一髪機体を引く事で斬撃を回避したイリアスだが、そこにメガビームランチャーの

砲撃が襲い掛かる。

機体をジグザグに動かし砲撃を避け続ける、アオイ。

だがそれも長くは続かない。

ビームが装甲を掠め、バランスを崩した所に襲ってくる斬撃。

「ッのー」

盾でリゲルのサーベルを止め、至近距離からライフルでコックピットを撃ち抜いた。その爆発を目くらましに、死角に回り込んだアオイは動きを鈍らせた敵機を狙撃する。

「そっのー」

ライフルごと腕を奪い、ランチャーを破壊し、同時にスラストも撃ち抜く。

カースが暴れ、さらに傷ついた味方を回収する為、敵もこちらへは向かってくる数が少しは減るだろう。

アオイの思惑通り追撃部隊の動きは鈍り、こちらへ来る敵の数は目に見えて少なくなつた。

「この数なら何とか——ッ!？」

その時、覚えのある殺気が近づいてくるのを感じ取つた。

リゲルなど比較にならないその速度。

追いついてきたのは蒼いリグ・シグルド。

「サルワ・アシユラか！」

「アオイ・ミナト!!!」

咆哮と共に発射された複列位相砲がイリアスの装甲を吹き飛ばした。

「ぐっ！」

「私の素顔を見たお前を生かして帰す訳にはいかない！」

「顔を見られたぐらいで！」

「黙れ！」

攻撃をシールドで防ぎ、接近してきたリグ・シグルドのビームクロウにサーベルを振り抜く。

激突した斬撃が火花を散らす。

だが、根本的なパワーの違うのかあつきりと力負けし、イリアスの装甲を深々と抉つた。

さらに振るわれた一撃が脚部を砕き、サーベルの斬撃が腰部を吹き飛ばす。

「ぐあああ!!」

「これで終わりだ、アオイ・ミナ——何ッ?！」

動きを止めたイリアスに止めを刺そうとしサルワは危険を感じ距離を取る。

視線の先には何もない宇宙の暗闇。

だが確実に近づいてくるものがある。

「モビルアーマー?」

明らかにリゲルを上回る速度で突っ込んできたのは戦闘機のような姿をしたモビルアーマーだった。

データにはない未登録の機体。

しかもそのパイロットは——

「貴様!」

旋回し再び突っ込んできた戦闘機に複列位相砲を発射する。

それを持ち前の機動性で回避した戦闘機はその真の姿を解放した。

変形し人型となってイリアスを背に立つその機体はアオイにとって見覚えのあるものだった。

「エレンシアガンダム?」

かつての上官が乗った愛機。

それに搭乗していたのは勿論、

「中尉、大丈夫ですか?」

「大佐!」

アオイを助ける為に駆け付けたルシア・フラガだった。

「新型」

突然現れた新型機を警戒しつつ、サルワは操縦桿を強く握る。

「ルシア・フラガ！」

「あの時の蒼い機体。それにもう一機、近づいてくる」

白と蒼の機体は油断なく銃口を向け合い、同時にルシアは近づいてくる気配に再戦の時が来た事を感じていた。

第14話 宇宙を羽ばたく

捕虜であったアオイ・ミナトの脱走。

それによる少くない損傷を負った『マクベイン・エクスキューター』の戦艦は一時の行動不能な状態へと陥っていた。

復旧作業で混乱する艦内から逃れたカースの姿を追ってルドラは修復したリグ・シグルドで出撃する。

外では次々と出撃しモビルスーツが逃げたアオイ・ミナトを追撃に向かい、その中には蒼いリグ・シグルドの姿もあつた。

それを見送つたルドラは隣に立つシグルド・グラーフに手を伸ばし接触すると通信回線を開いた。

「シルヴィアはアオイ・ミナトを追え」

「ルドラ、私もカースを」

「いや、サルワを頼む。それに妙な感じもする」

「それは……」

「お前の方が感づいているだろう？ あの女が来るぞ」

「ッ！ ……分かった、あちらには私が行く。それでアオイ・ミナトは？」

「好きにしろ。殺したければ殺して良いし、捕縛したければそうしろ。お前の裁量に任せる」

「……了解」

飛び去ったシグルド・グラーフの後ろ姿を見つめながら、ルドラは意味深な笑みを浮かべる。

「お前が奴に入れ込んでいるのは知っているが、さてどうなる？」

事と次第によってはサルワの方が爆発してしまうかもしれないが——

「それも試練だと思えば悪くはないだろう、サルワ。精々気張るが良い。さて……」

モニターと己の感覚を頼りにカースを追って視線を動かす。

そう遠くへは行けない筈。

付近を探索しながら、岩場が散乱する場所に差し掛かると強い違和感を感じ取った。

「ソニー」

複列位相砲を発射し岩を砕き同時にビームライフルを連射。

破壊された岩片と何かが爆発したような煙が巻き上がる。

手応えはあった。

だが違和感は消えていない。

油断なくモニターを注視していたルドラの視界に破壊された機体の残骸が見えた。

カースが乗って逃げた機体だろう。

だが気配は未だ消えず、奴はまだ生きている。

「ビーン——ツ!？」

その時、赤いモビルスーツの姿を目の端で捉えた。

背中のスラスターを吹かし岩陰から飛び出してくる。

「サタナエルか！ 近くにモビルスーツを隠していたとは、抜け目のない奴」

ライフルで進路を塞ぐように攻撃を加えるが直後、リグ・シグルドのコックピットを狙った一撃が撃ち込まれた。

「そんなもので！」

持ち前の反応で機体を逸らし、ビームを回避したルドラはお返しとばかりに敵モビルスーツに複列位相砲を撃ち込む。

だが、すでに敵はそこには居ない。

背中にある二基のスラスターユニットを噴射させ、圧倒的な機動性でルドラの視認を許さない。

「速いな！　しかしいかにその機体が優れていようと、もはや旧型機。遅れはとらない!!」

カースの動きは昔からよく知っている。

動きを予測し移動先へ攻撃を仕掛ける為、ドラグーンを展開した。

「いけー」

射出された砲塔が敵機に向けて加速、四方から砲撃を開始する。

「まさかドラグーンで攻撃を仕掛けてくるとはね」

カースは速度を全く落とさずに軽く攻撃を避けて見せると、ビームライフルで砲塔を撃ち落とした。

あまりにあっさり落としていくので簡単そうにも見えるだろう。

だがパイロットである者が見ればどれだけ桁外れの事をしているか戦慄するに違いない。

四方からのビームを避けつつ、スピードを落とさないまま小さい砲塔を正確に落とすなど神業としか言えまい。

しかしルドラにとっては織り込み済み。

カースの技量の高さは良く知っているし、空間認識力の異常な高さは言わずもがな。

ドラグーンが通用するとは初めから思っていない。

「落ちろー！」

距離を詰めていたルドラは一切の躊躇いもなく放出した光爪を振り抜いた。急所を狙った下段からの一撃。

それをサタナエルは迎え撃つべく構えたサーベルと激突する。

「今のを止めるとは流石は元ザフトのエースパイロットだ！」

「そう簡単にやられるつもりはないさ」

高速ですれ違い、さらにライフルを撃ち合いながら激突と離脱を繰り返す。

一見互角に見える戦いだが、徐々にルドラは苛立ちを覚えるようになっていた。

「本気で戦えクルーゼー！」

カースの技量を良く知るルドラには奴は本気ではない事が分かっていた。

明らかに手を抜かれていると。

本気であるなら背中ドラグーンを使ってくるだろうし、攻撃においても殺気を込めてくるだろう。

「時間稼ぎのつもりか？」

「だとしたら？」

「ふざけるな！」

シールドで体当たりしてサタナエルを吹き飛ばすと上段からサーベルを振り下ろす。

しかしカースはあくまで余裕の笑みを浮かべながら、機体を寝そべらせ斬撃を回避した。

「ルドラ、君では私には勝てないよ」

「舐めるなよ。私は貴様を倒す為にこれまで血の滲む訓練を積み、自分自身を研ぎ澄ましてきたんだ」

ルドラは決してカースを甘く見てはいない。

『ヤキン・ドゥーエ戦役』からの奴の戦果を鑑みればその実力は疑うべくもない。それに負けない為に今まで研鑽を積んできた。

過去を乗り越える為、そしてカースがかつて身につけた仮面を纏い、得た物を教訓として刻むために。

なのに相手に本気を出されないなど屈辱以外の何物でもない。

しかし聞こえてきたのはカースは涼しい声。

ルドラの激情など気にも留めず、あっさりと言い放った。

「君に興味はない。ハッキリ言っただうでも良いのだよ。私も過去に囚われた亡霊ではあるが、君は『ただの残滓』に過ぎない」

「私が『残滓』だと？」

「そうだ。君だけじゃない、サルワ・アシユラも同様だよ。君らは惨めな『ただの残

滓』、そこには自らの意思すら無い。故に何かを成す事もできんだろうよ」

「何?」

「哀れだね、同情する。しかし私は結末の決まった者に付き合うほど暇ではない。そのまま地獄へ行くが良い」

リグ・シグルドの腹に蹴りを入れて体勢を崩すと、ビームライフルで牽制しながら距離を取る。

サタナエルの射撃は今までよりも遥かに精度が高く、削るようにモビルスーツの装甲を剥がしていく。

「ッ!」

「さようならだ、ルドラ。己も知らぬ絶望を抱えて朽ちていけ」

リグ・シグルドが体勢を立て直し反撃に転じようとした時、サタナエルの姿は岩陰に消え、その気配も遠ざかっていった。

「離脱するつもりか? そうはいくものか——ッ!」

その時、ルドラは別の気配が近づいてくる事に気が付いた。

「チツ、クルーゼめ。匣を使って逃げる気か」

すでにルドラの意識は逃げたカースよりも彼が匣として誘き寄せた敵の方へ向かっていた。

胸を焦がす憤りは消えていない。

しかし感情に任せて迫る脅威を見逃す程、ルドラは愚かではなかった。

「テタルトス軍……率いてきたのは『銀獅子』か。相手にとって不足はない」

高速で近づいてきたのは銀色のモビルスーツ、ヴィルフリートの駆る『ジンⅢ・レーヴェ』である。

敵艦を視認したヴィルフリートは事前の打ち合わせ通り、遼機であるモビルスーツに指示を飛ばす。

「敵は私が引き付ける。その間に敵艦の方を頼むぞ、だがくれぐれも落とすなよ！」
「了解!!」

あえて目立つように先行したジンⅢ・レーヴェは武装を解放し、一斉に発射した。
ビーム砲と共に発射された誘導ミサイルが展開された敵モビルスーツ隊へと降り注ぐ。

フリーダムにも劣らないその火力がその空間にいた敵を薙ぎ払い、どうにか離脱した機体にも損傷を与える。

その間に距離を詰めたヴィルフリートが逃れた機体を対艦刀で斬り払った。

「さて派手に暴れさせてもらおうぞー！」

此処まで苦渋を舐めさせられてきた。

その借りを返す為の大事な一手であり、失敗する訳にはいかない。

「簡単にやらせる訳にはいかん」

ジンⅢ・レーヴェの砲撃を阻止すべくルドラのリグ・シグルドが攻撃を仕掛けに動く。その機体を見たヴィルフリートは眉を顰めた。

「あの機体……確かリグ・シグルドだったな。あの機体が居るといふ事は情報は正しかった訳か」

情報を提供してきた人物に改めて疑問が生じる。

エレボス内部からの放送を行った者と同一人物らしいのだが――

「そんな考察は後回しだ。今は――」

振り上げられたビームクロウを迎撃すべく、対艦刀を振り下ろす。

「こんな場所までご苦労な事だな、ヴィルフリート・クアドラード。ウォーレン・マクベインがお前にも会いたがっていたぞ」

「ならば奴に言っておけ。散って逝った部下の分まで必ず借りは返すとな！」

対艦刀で弾き飛ばしビームマシンガンでリグ・シグルドを牽制、至近距離でバズーカを叩き込んだ。

「チッ！」

ルドラは咄嗟にシールドを切り離し、バズーカを避けると複列位相砲を発射する。

同時にヴィルフリートもビーム砲を発射し、激突した閃光が周囲に満ちた。

◇

損傷し動けないアオイの搭乗するイリアスを守るように一機のモビルスーツが立ち
はだかる。

A D T - X 0 3 『エレンシアガンダム・ソフィア』

同盟の新型機開発計画の一環で開発された機体でエレンシアの名を冠しているもの、
中身は完全に別物の新型機。

エレンシアをベースに可変機構を搭載し、ターニングやスオウ、ヴィヒターで得られ
た可変型機のデータを集約、洗練、それによって向上した性能は可変型モビルスーツの
一つの到達点とも言われる程。

さらにパイロットの空間認識力を最大限に発揮できるようにドラグーンシステムを
搭載、コックピットにも空間認識力を高める専用デバイスを設置、機体や武装を完璧に
コントロールできる新型 O S を装備している。

「大佐!?! どうして此処に?」

「中尉、無事で本当に良かった。……詳しい話は後で、少し下がっていて。まずはこの

状況を切り抜ける！」

安堵し、感極まった様子のルシアだったが、すぐに思考を切り替えるように正面を注視する。

そこには苛立った様子のサルワが邪魔な乱入者を睨みつけていた。

「お前が此処に来るとはな、ルシア・フラガ！」

「また貴方ですか！」

突如現れた新型機にも臆せずサルワは攻撃を仕掛ける。

あくまでも小手調べとして、しかし油断せずにビームライフルを乱射しながらビームクローウを抜いた。

すでにシルヴィアは気が付いているだろう。

出来れば彼女が来るまでに決着を付けたい。

「お前は私が殺す！ アオイ・ミナト共々な！」

エレンシアは動かず、イリアスを守るようにシールドでビームを防ぎながらサーベルで応戦する。

「ハアア!!」

上段から振り下ろした一撃。

だが光爪は光剣に阻まれ、ピクリとも動かない。

「リグ・シグルドよりパワーが上だというのか!!」

「そこを退きなさい!」

力任せに弾かれたリグ・シグルドは大きく仰け反り、大きな隙が出来た。そこを狙いルシアがビームサーベルを一閃する。

「ッ!」

眼前に迫る死の光。

それを常人とはかけ離れた反射神経で反応したサルワは足を振り上げ、光刃を脚部で防ぐ。

だがそんなものは一時凌ぎに過ぎない事は分かっている。

脚部を斬られる前にエレンシアを引き離し、武器を構え直した。

「損傷は軽微か。しかし新型は思った以上に厄介なようだ」

内心舌打ちする。

視線の先にはアオイ・ミナトが居る。

出来れば奴を仕留めたいが、この機体状態と新型を相手に何処まですべきか。

サルワの脳裏に目的とそれに伴うリスクがせめぎ合う。

それは相対していたルシアも同じだった。

後ろには損傷した機体に乗るアオイが居る。

動く事は可能なようだが、攻撃されれば避ける余裕はない。

どうすればアオイを無事に逃がせるかを考えていたルシアだがその背に冷たい電気が走る。

「きた」

ルシアは攻撃の矛先を変える。

近づいてくる機体の方へ収束ライフルの砲口を向け、躊躇わずトリガーを引いた。

ビームが近づく機体に向かって発射された。

通常のモバイルスーツであれば二、三機あっさり撃墜できるレベルの威力。

しかしそれは敵を撃ち抜く事無く、展開されたゲシュマイティツヒパンツァーによって歪曲されてしまった。

「ッ、来たのはやっぱりあの機体のパイロットか」

ルシアが見せたのはあの時のシグルド・グラーフ。

機体から感じ取れる殺意を鑑みてもあのパイロットで間違いなかった。

「ルシア・フラガー！」

「貴方は誰？ 何故そこまでの殺意を私に——」

「それ知らぬこと自体がお前の罪だ！ 私は貴様らを絶対に許さない、絶対に!!」
シルヴィアの殺意に応えるように発射されたドラグーンがエレンシアに向けて襲い

掛かってきた。

「くっ」

全身に走る感覚に逆らわず、操縦桿を操り、機体を動かす。すると今までエレンシアが居た場所をビームの閃光が薙ぎ払っていった。

「動ける、今まで以上に！」

これまで搭乗してきた機体とは機動性も追隨性も桁違いだ。

ルシアの本気の操縦についてくるエレンシアの感触に普段冷静な彼女にも笑みが浮かぶ。

「そー！」

ドラグーンをライフルで撃ち落とし、さらにミサイルで攪乱すると接近戦を挑む為、シグルド・グラーフへ突撃する。

「これで！」

振り抜いた一撃がシグルド・グラーフの装甲を斬り裂き、同時にシールドで頭部を殴打した。

「グッ!？」

「シルヴィア!? 貴様アアア!!」

背後からの不意打ちでありルシアの死角を突いた攻撃。

彼女が避けられる道理はない。

しかしルシアは後ろに目がついているかのように、背後からの攻撃を回避して見せるとビームライフルで反撃してきた。

「のー」

サルワはもはや所構わずとばかりに残ったドラグーンを展開し、ありつただけの火力を一斉解放した。

無数のビームがエレンシアごと周囲を薙ぎ払わんと猛威を振るう。

「この位置では」

避けるにしてもアオイが巻き込まれてしまう。

ルシアは躊躇いなくシールドを展開して防御の姿勢を取る。

だがそこでルシアを敵視していたシグルド・グラーフが予想外の行動を取った。

アオイの方へ砲撃が行かないようにゲシュマイディツヒ・パンツァーを展開したのである。

「な、シルヴィア、何を!?!」

「……彼を捕縛する。手は出さないで」

「馬鹿な! もうウォーレン・マクベインへの義理は果たしている! 奴を生かしておく理由はないんだ!」

「……それでもお願い、サルワ」

「ツツツ!!」

激しい憤りと嫉妬を堪え、サルワはアオイのイリアスを睨みつける。

そしてルシアもまた今の状況に歯噛みしていた。

アレとリグ・シグルド。

二機とこれ以上激しい戦闘を継続するととなるとアオイを守る余裕はないかもしれない。
い。

特にあの蒼いリグ・シグルドは積極的にアオイを落としにきている。

不幸中の幸いかあのシグルド・グラーフとは意見が対立しているようで、連携が上手く取れていない。

出来ればその隙に撤退したいのだが、ヴィルフリートと事前に打ち合わせた作戦時間はまだ経過していなかった。

ならば今少し時間を稼ぐ必要がある。

そうなると『保険』を使う以外にないようだ。

「……中尉、そのイリアスは動ける?」

「何とか動かすだけなら」

「それなら三時方向へ最大加速で向かって。そこにウリエルが来るわ!」

「……了解！」

ルシアの指示を聞いたアオイはボロボロの機体を必死に操作する。

「チツ、サルワの奴、派手にやってくれたもんだ。スラスターの半分近くが死んでる。メインスラスターが無事で良かったけど」

どうにかイリアスのスラスターを動かし、フットペダルを踏み込んで移動させた。

「逃げる気か！」

「サルワ！」

「行かせない！」

リグ・シグルドを行かせないよう割り込むエレンシア。

ルシアが二機を引き付けている内に距離を稼ぐべく、出力を上げていく。

「くっ、これ以上出力を上げるとオーバーヒートする！ だけど……」

後ろからはエレンシアを抜いたリグ・シグルドが追いかけて来ていた。

それだけではない。

どうやら後続の追撃部隊も追いついてきたようで複数の機体が追隨していた。

「戦闘力はほぼ無い以上、追いつかれたらやられる。なら！」

アオイは警告を無視して、イリアスのスピードを上げた。

そして指定されたポイントまでたどり着くと懐かしさを感じる母艦の姿が見えてき

た。

「ウリエル——ッ!？」

そこで背中中のメインスラスタが爆発し、機体のバランスと進行方向が狂ってしまった。

「この！ ウリエル、ハッチを開いてくれ！」

それでも生き残った上半身のスラスタで無理やり方向を変え、ハッチの開いたウリエルに突っ込んだ。

「ぐつつううう」

床を滑るように格納庫の中に不時着すると整備班が消火剤を一気に燃えるイリアスに吹きかける。

「無事かよ、アオイ」

「何とか。色々、酷い目にあっただけよ。それより使える機体はないか？」

アオイを出迎えた整備士の青年がニヤリと笑う。

「あるぞ、お前専用の機体がさ」

パイロットスーツを手渡され、案内されたのはすでにカタパルトに運ばれている新型機だった。

GAT-X003A 『エクセリオンガンダム・アイオーン』

第一次統合戦争にて実戦投入されたユニオンエクセリオンガンダムの正式後継機。

背中にはフリーダムと特珠機動装備『ウイングス』のデータ基に開発された2基の大型スラスターと2基の小型スラスター、『ウイングス』の倍である合計4基を装着。

『ウイングス』の戦闘データで調整を加えられており、宇宙のみならず地上や外宇宙の高重力空間での戦闘も視野にいったフリーダムすら超える圧倒的な機動性能を実現している。

そして翼の部分はシールドとしても使用可能であり、放出されるミラージュコロイドを応用した機体を守る防御膜を展開、それによって高度な防御性能と幻惑機能も所有している。

「完成したんだ」

「けっこう急ピッチだったけどな。大佐に感謝しとけよ、ヴィンゴルヴ側にも結構無理言つたみたいだしな。後はお前が回収してきたイレイズからの戦闘データを移植すればいい」

「了解！」

コックピットに乗り込み、回収してきたデータチップを差し込んだ。

「これでOKだ」

《中尉、帰還したばかりで申し訳ないが現在、敵モビルスーツを迎撃中だ。出て貰える

か?》

「了解です、レフティ艦長」

素早く機体を立ち上げVPS装甲を展開、操縦桿を握りしめる。

「アオイ・ミナト、エクセリオンガンダム、行きます!!」

カタパルトから押し出されたエクセリオン。

モビルスーツが出撃してくるのを察知していたサルワはそこを狙ってビームライフルを撃ち込んだ。

「新型だろうが出撃直後は無防備だろう!」

だがそんなサルワの考えを否定するかのようにエクセリオンは背中の翼でビームを受け止め、あっさりと弾き飛ばした。

「何?!」

あまりにも簡単に攻撃を防がれた事で呆然とするサルワ。

その隙を突き暗闇の宇宙にそぐわない光を放出しながら、エクセリオンが飛び立った。

まさに天使を彷彿とさせ、動き出した機体はサルワの予想を遥かに上回る速度で動き出す。

「ッ、速い!」

撃ち込むビームライフルは掠める事すら出来ない。

圧倒的ともいえる速度、そして曲芸のような機動をもって次々とビームを回避し続けた。

「運動性も厄介だが、邪魔な光だ！」

エクセリオンの機動性は確かに脅威だ。

しかしそれと同様に翼から放出されている光が攪乱しており、動きが捉えられない。

「おのれ、天使でも気取るつもりか！」

サルワは届かない攻撃に苛立ち、残ったドラグーンと複列位相砲を用いた波状攻撃を開始する。

「こんなものでたじろぐと思うか、アオイ・ミナト！」

幻惑されるというならば、そのすべてに砲撃を撃ち込めば良い。

ターゲットをロック、火力を全開放。

エクセリオンへ叩き込んだ。

「そつちこそ舐めるなよ！」

アオイは思い切り機体を動かし、攻撃をすべて避けていく。

エクセリオンの機動と幻惑に対応出来ない機体からの攻撃を躲しつつ、マインキャノンとビームライフルで隊列を崩す。

そしてリグ・シグルドまでの道を開くと懐へ飛び込んだ。

「斬るぞ、サルワ・アシユラ！」

ビームサーベルを引き抜き、袈裟懸けに振り抜く。

サーベルを躲そうと下がるリグ・シグルド。

だがエクセリオンの予想以上の速さに反応しきれず、右腕ごとビームライフルが斬り裂かれた。

「チツ、この程度で！」

腕を斬られた動揺をすぐに立て直したサルワはビームクロウで斬りかかる。

「甘いー！」

アオイはサーベルを振り上げビームクロウを破壊すると無防備になったリグ・シグルドに蹴りを入れた。

「ぐああああ!!」

「落とさせてもらおう！」

完全に体勢を崩したリグ・シグルドに向けて高エネルギー収束ライフル『アンヘルⅢ』を発射する。

アンヘルの威力は量産型の『グランシーザ』とは比較にならない。

強力なビームを防ごうとサルワは盾を構えるも、ビームクロウを破壊された時にシー

ルドも破損していた。

破損したシールドなど焼け石に水であり、ビームに吞まればそれで終わりだ。

「くそオオオ!!」

サルワの叫びが閃光に吞まれようとしたその瞬間、ビームの奔流は僅かにリグ・シグルドから逸れ、左半身を吹き飛ばした。

「曲がった、これはシルヴィアか!？」

見ればシグルド・グラーフとエレンシアが近くまで追いついてきていた。

だが僅かに曲がったおかげで直撃は免れたものの、リグ・シグルドは最早スクラップ同然の状態になっている。

コックピット部分は無事のようなのだが、あの様子ではただでは済んでいないだろう。

しばらくエクセリオンと向き合っていたシグルド・グラーフだったが半壊したリグ・シグルドを掴むと残存部隊と共に撤退していった。

「シルヴィア……」

恩もある彼女とは出来れば戦いたくないし、『マクベイン・エクスキューター』から抜けて欲しい。

だが彼女の生い立ちを考えるとそれも難しいだろう。

そんな事を考えているとエレンシアがエクセリオンに組み付き、ルシアがコックピッ

ト内に乗れ込んだ。

「大佐、どうしたんです!？」

無言のままルシアはアオイを抱きしめると、体を震わせながら呟いた。

「……良かった。無事で、本当に良かった」

僅かに涙声になりながら抱き着いてくるルシアをアオイも抱きしめ返す。

「大佐、アオイ・ミナト、無事に帰還いたしました」

ウリエルから連絡が入るしばらくの間、相手の体温を感じるように抱き合っていた。

第15話 決着の時へ

宇宙を動く巨大戦艦『エスカトロジー』に集まる『マクベイン・エクスキューター』全軍。

その数は世界最大規模を持つ統合軍でさえ、簡単には駆逐できない規模に達しており、それだけ今の現状に不満を持つ者が多かった事を示していた。

最終作戦の準備は整いつつある。

後は何の妨害もなく、作戦開始位置まで『エスカトロジー』がたどり着けばこちらの勝ちとなる。

圧巻の光景を母艦の部屋から眺めながら、ルドラは昔の戦術書に目を通していた。

机には分解された機械や積み上げられた書物が散乱している。

部屋に入ってきたシルヴィアはやや呆れた視線を向けながら、ため息をついた。

「ルドラ、少しは片付けたら？ 作戦とかには几帳面な癖に自分の事にはズボラなんだから」

これらはすべてルドラの趣味だ。

暇な時は機械を弄りながら、本を読むという器用な事をいつもしている。

「放っておけ。これぐらいで丁度良いんだ」

シルヴィアは苦笑しながら散乱している機械を片づけ始める。

「機械いじりはしないの？」

「時間がないからな。それにこれ以上アスラン・ザラを意識した事をやるのもどうか
と思つてな」

「そう。サルワは？」

「重傷だ。だが本人はアオイ・ミナトを殺すと意気揚々と叫んでいるらしい」

アオイに撃墜されたサルワは一命は取り留めたものの、重傷であり今後戦闘に出られるの
もかなり先になると医師から診断を受けていた。

「気に病む必要はない。サルワがあなつたのは奴の実力不足だ。まあお前が予想以
上に奴に入れ込んでいたのは驚いたがな。それで何故そこまでアオイ・ミナトに入れ込
む？」

「それは……似てるのよ、弟にね。何となく雰囲気か」

「なるほど」

だからシルヴィアはその面影をみたアオイ・ミナトの世話を焼いていたらしい。

「そういえば弟が居たんだったな。確か俺達と会う前に——」

「直接見た訳じゃないけど、生きてはいないでしょう」

シルヴィアの脳裏に忌まわしい過去が蘇る。

◇

シルヴィア・ヒビキ。

研究者にとつて知らぬ者は居ない姓を持つ者の家系に生まれた彼女は普通のナチュラルの女の子として人生を生きていた。

世間はコーデイネイター、ナチュラルと日々騒がしかったが、シルヴィアにとつては縁遠いもの。

一応親戚の人が研究者でコーデイネイターに関する研究をしていると聞いた事はあつたが、当時のシルヴィアにとつては関係のないと思つていたので。

キナ臭さが日に日に増していく世界情勢など気にならないくらいには無邪気な幼年期を過ごし、そんな生活がずっと続くと錯覚し始めた事、それは一変する。

丁度弟が歩けるようになった頃に突然シルヴィアの住まう家に壮年の男が部下と思われる者達を連れて現れたのだ。

血走つた目に手に持った拳銃。

アレこそ狂気に犯された人間。

その名前をアル・ダ・フラガという。

シルヴィアの人生を狂わせた何より憎い男だった。

幼かったシルヴィアにはアルが何を言っていたのか、正確に理解できなかつた。

ただ父と母が誰かを匿っていると疑っていた。

そして激しい言い争いと諍いの末、数発の銃声と共に父と母は帰らぬ人となった。

その光景をシルヴィアは一生忘れる事はないだろう。

ただただ呆然と両親の死を見つめていたシルヴィアと弟はアル達に連行され、彼の下で厳しい尋問を受けさせられた。

両親が何かを隠していないか。

誰かを匿っていないかつたかと。

当然そんな事知る筈も無く、恐怖に震える毎日。

それでも弟の為に耐えていたある日、アルも求める答えを得られないと判断したのか、あつさりとは置きされた。

家族を奪った罪悪感か、それともただの気まぐれだったのか。

今、思えば屋敷で働いていた使用人が哀れに思ったからだろう。

食事が与えられ、屋敷に住む事も許された。

憎む男との先行きの見えない生活ではあったが、弟も居たし自身も幼かったシルヴィアに他に行く場もなかった。

それでもあの頃がシルヴィアにとって最後の穏やかな日々だった事は間違いない。

それを壊したのは当時世界を席卷していたテロリスト『ブルークスモス』だった。

後に分かった事だったが屋敷をブルークスモスが襲撃したのはアルの探していたクローンが彼らに密告した事が切っ掛けだったらしい。

曰くアル・ダ・フラガは危険な遺伝子研究に出資していると。

そして最悪な事にそれは事実だった。

アルの屋敷は焼き討ちにあい、優しくしてくれた使用人も殺され、さらに弟すらもその騒ぎで行方不明。

シルヴィアも重傷を負ったものの、治安維持の為に駆け付けた地球連合に保護される事になった。

しかしそこで待っていたのは強化人間を作る為の実験体という過酷な運命だった。

当時の地球連合は能力の高いコーディネイターに対抗する為の研究が盛んに行われていた。

強化人間もその一つ。

実験体にされるのは大体犯罪者か身寄りのない子供だった。

後腐れの無い人間を使う方が面倒がないという事なのだろう。

兵士としての訓練に加え、日々の人体実験により体はボロボロ。

それはシルヴィアだけではない。

同じく孤児となった子供達がおもちやのように実験に使われ、時に死んでいく。

いや、人が死なない日の方が少なかつたくらいだ。

それを見て下種な笑みを浮かべる地球軍の高官たち。

奴らはまさに人の悪意が形になったかのような典型的な層共。

そんな連中の好き勝手にされ出来る事と言えば睨みつける事ぐらい。

絶望しかない中、シルヴィアが生きていられたのは自分をこんな目に遭わせる連合、

そしてフラガ家に対する激しい憎しみのおかげだった。

死んだ者の中には自分と同年代の女の子がいた。

こんな地獄でも出来た友人がいた。

必ず生きて此処から逃げようと誓った子もいた。

弟と同じ年齢の少年達もいた。

そんなシルヴィアにとっての大切な人から死んでいった。

「……必ず殺してやる」

誰かが死ぬ度に誓いを立て、その存在を忘れまいと心に刻む。

憎しみを糧に生き抜いたシルヴィアを拾ったのはメンデルを抜け、月に潜伏していたヴェクト・グロンルンド。

コペルニクスで活動を続けながらも、連合にも接触し強化人間の研究にも手を貸していた彼の手でそれこそ全身を弄繰り回された。

当然、奴の『完璧な人間』を生み出す実験にも利用され——

本当に自分には運がないと今更ながらに思い知る。

だが同時に忘れられない出会いもあった。

ルドラやサルワ達だ。

同じく人の醜さを嫌という程、知っていた彼らと意気投合した。

その時だ、連合に居るフラガ家の話を聞いたのは。

『エンデュミオンの鷹ムウ・ラ・フラガ』そして『仮面のエースネオ・ロアノーク』

忌まわしきあの家の血脈が戦場で武功を立て活躍していると。

許せない。

許せる筈がない。

自分の幸せを奪っておきながら、称賛されるなどあつてはならない。

だがそんな願いを聞き届ける救いの神は訪れず、そしてシルヴィアにとって最悪な出来事が起きる。

ヴェクトの研究の一つである『能力移植』によって、憎むべき男アル・ダ・フラガの力を移植されてしまったのだ。

この時の嫌悪と絶望は今までの比ではない。

最も憎むべき男と同じにされてしまったのである。

出来うる事ならば全身を引き裂いて、奴に汚された体を清めたいと本気で考えた程だ。

本当に最悪だった。

能力の定着具合を確認する為に仲間同士で戦わされた事もある。

それでも検体として生き続けた彼女はヴェクトが月を後にする際の騒ぎに乗じ、仲間と共に脱出。

今の世界を壊す為に『マクベイン・エクスキューター』に参加したのだ。

これまでの復讐の為に。

自分と同じ境遇の人間を増やさない為に。

◇

「まあ、連合の屑共の死にざまは愉快だったな」

「ええ。あれで少しは溜飲も下がった」

脱出してまず行つたのは自分をこんな目に遭わせた奴らへの復讐だった。

奴らは何も変わっていないなかつたどころか、さらに研究を推し進めラナシリーズという量産型エクステンデットなるものまで作り出していた。

だから全員殺した。

例外はない。

家族も友人も恋人も。

モビルスーツを使い奴らの目の前で塵も残さず消してやった。

その時の連中の顔を思い出すだけで、笑みが零れるというもの。

自分が受けた痛みに比べれば当然の報いである。

「ヴェクト・グロンルンドもこの中の艦に居る筈だ。殺すなら良い機会だぞ」

「今はやめておきましょう。用意周到なああの男の事だもの。自分の逃げ道くらい確保している筈よ。まずはそれを潰してからね」

「そうか。用意された新型機もチェックしておいた方が良い。アレも奴が手を加えたらしいからな。私も格納庫で機体を見てこよう」

「私もサルワの所に……」

「今はやめておけ。お前が顔を出せばそれだけで感情的になるだろう。ほとぼりが冷めるまでは距離をおいた方が良い、少なくとも作戦が終わるまではな」

有無を言わずシルヴィアを黙らせたルドラは部屋を出た。

「これ以上、暴走されても困る」

最終作戦まで時間がないがサルワは戦える状態ではない。

しかしシルヴィアと会えば必ず自分も出撃しようとするだろう。

シルヴィアをアオイ・ミナトと会わせないために。

暴走され作戦に余計な混乱を招く事は避けたかった。

ルドラがエレベーターに乗ろうとすると丁度、退院してきたクロムと鉢合わせた。

「怪我はもう良いようだな。最終作戦に間に合つて何よりだ」

「……嫌味ですか。俺は役目も果たせずアオイ・ミナトにやられて」

「自分でそう思うなら汚名返上でできるように努力する事だ。幸いその機会はある、機体も用意されているからな」

「奴らが来ると?」

「必ず来るさ」

グラオ・イーリスにとってこれが最後の機会。

今度『エスカトロジャー』の主砲が使われたらその時点で『マクベイン・エクスキューター』の勝利は確定する。

ならばその前に必ず攻めてくる筈だ。

「お前が『マクベイン・エクスキューター』のエースであるなら、その矜持を見せてみる」

「……言われるまでもない」

クロムの目に今までにない覚悟の光が宿る。

それを見届けたルドラは密かに笑みを浮かべた。

クロムにはエースに足る技量とSEEDの資質がある。

それが戦果を挙げられず、悉く退けられている要因は経験不足の他に彼自身の精神的な脆さが上げられるだろう。

彼の場合、エースとしての責任感の強さや敵に雪辱を誓う焦りもあったのだろう。

だがもはやそれもない。

クロムからは研ぎ澄まされた覚悟だけが伝わってきた。

これで良い。

決戦に並々ならぬ意気込みを持つのはルドラとて同様である。

先の戦闘でカースによって告げられた言葉。

《君らは惨めな『ただの残滓』、そこには自らの意思すら無い。故に何かを成す事もできんだろうよ》

《己も知らぬ絶望を抱えて朽ちていけ》

耳を離れぬカースの言葉を覆して見せる。

自分がどんな生まれであろうとも関係ない。

今の間違った世界を破壊し、正しき世界へ修正する。

その果てにカースを討つ。

それこそが『ただの残滓』などではない事の証明になる筈だ。

「楽しそうな話をしてるじゃないか」

「アルド・レランダー」

『『マクベイン・エクスキューター』のエース様もやつとやる気になつたらしいな。お

前とも戦いたくなつてきたぜ」

「この戦争狂いめ。そんなに戦いが好きか？」

「大好きだね」

アルドは心底楽しそうに笑みを浮かべる。

その笑みは『狂獣』と呼ばれるに相応しい狂気を秘めていた。

「言っておくが弱い奴に興味はないぜ。強い奴とのギリギリの駆け引き。相手との戦

略の読み合い。命を懸けたゾクゾクするあの感覚。他じや味わえない」

アルドに信念などはない。

あるのは己の快樂のみ。

彼はザフトに所属している頃からこうだったという。

きつと生まれた瞬間から壊れていたに違いない。

まさに獣。

だが縛られるものはなく、迷いもなく、あるがままに振舞えるというのもある意味幸福。

それは歪んではいても、間違いなく強さだろう。

ルドラはある種の羨望さえ抱いた。

「なるほど。テタルトスでの軟禁生活は貴様にとってよっぽど苦痛だったらしいな」

「苦痛だったさ。俺はやっぱり戦いの中でこそ生きていると実感できると思い知った」

「なら存分に暴れるがいい。この戦いはお前を存分に満足させてくれるだろう」

「それは楽しみだ」

存分に戦うと決意を新たにする二人のエースパイロット。

その気炎に当てられるようにルドラも自身で気づかない内に拳に握りしめていた。



消毒臭の漂う医務室。

忙しくドクター達が怪我を負った兵士達の治療を行う中、ベットの上ではサルワが殺意を剥き出しにしながら天井を睨んでいた。

脳裏に浮かぶのはあの天使のごときガンダムとアオイ・ミナトの事。

「殺してやる」

自分の隠していた素顔を見ただけではなく、シルヴィアを誑かした罪。そしてこうして自分に重傷を負わせた屈辱。

すべてが炎のように燃え盛り、憎悪となってサルワを突き動かす。

「ずいぶん荒れてるじゃないか」

まるで感情の籠っていない最も聞きたくない男の声。

いつの間にか傍らにヴェクト・グロンランドが立っていた。

「久しぶり、えっと、サルワだったかな、君の名前？」

「相変わらず不愉快な奴。よくも私の前に顔を出せたものだ」

「そう怒るなよ。それよりずいぶん派手にやられたみたいじゃないか。特に左手と左足は酷い。これじゃ治すより切断した方が早い」

ヴェクトのからかうような口調に激しい怒りが湧き上がってくる。

しかし憎悪すら籠った視線にもヴェクトは涼しい顔だ。

それどころか嫌らしい笑みすら浮かべて、サルワに嘔きかけてきた。

「戦いたいか?」

「何?」

「敵が攻めてくるんだろ。でもお前はその状態じゃ戦えない。だから戦えるうようにしてやろうかと聞いてるんだよ」

「誰が貴様の言う事など」

「だったら敵が来ても此処で寝てるか? せつかくお前用の新型機も格納庫で埃をか

ぶる事になるけど」

これは悪魔の嘔きだ。

これまでこの男がしてきた所業を考えれば、確実にサルワは破滅する。

だが現実問題としてサルワの体は重傷で動けず、動けたとしてもモビルスーツに乗るなど不可能だ。

「……本当に戦えるようになるのか? 敵が来るまでの短い時間で」

「ああ、約束しよう。お前を確実に戦えるようにしてやるとも。あの屑を殺せるようにしてみせるさ」

一瞬だけサルワの中で迷いが生じる。

しかし、このままではいられない。

あの天使のガンダムを駆ってアオイ・ミナトは此処へ来るだろう。

その時、誰がシルヴィアを守るといえるのか。

このままでは戦場に自分は立てない。

だが、この悪魔の手を取れば――

答えは出ている。

迷いが消えたサルワは自ら悪魔の懐へと飛び込んだ。

例えその先が破滅に繋がっていようとも、倒すべき男と相対する為に。

◇

同盟の宇宙ステーション『ヴァルハラ』に接舷されたウリエル。

弾薬、装備、モビルスーツなどが大量に運び込まれ、ウリエルの後部には長距離高速

移動用の大型ブースターユニットが接続されている。

そして同じ港に接舷している複数の戦艦も同じ装備が接続されていた。

これらはすべて『マクベイン・エクスキューター』の戦艦『エスカトロジー』を破壊する為の作戦に参加する為の準備が急ピッチで進められているのである。

「格納庫、物資搬入が少し遅れている！ 急がせろ！」

「気密、隔壁チェック！ 空気漏れなんて冗談じゃないだろ！」

ウリエルのブリッジでは準備を終えた各セクションからの報告が上がり、普段とは比べ物にならない喧噪に包まれていた。

「現在の進捗状況を報告してくれ」

「全体で約80%完了しています。それから艦長、ジュール司令から通信です」

「了解した」

手元の端末を操作し、通信を繋ぐと険しい顔のイザークが映し出された。

その表情から見ても良い報告ではないようだ。

「悪い知らせですか、ジュール司令」

《ああ。まず上はこれ以上の増員は認めないそうだ》

「この数で敵巨大戦艦を破壊しろと？ ミナト少尉の目撃情報やクアドラード中佐が持ち帰ったデータによれば総数は統合軍の三割を超えるものだったと」

《ふん、上の連中は『エスカトロジー』が囧だと思っているのさ》

「だから本国をがら空きには出来ないよ？ 『ヘルメス』が砕かれれば自分達はおろか地球は確実に終わるといふのに何を呑気な」

先の作戦でヴィルフリート・クアドラード中佐率いる部隊は敵艦へと接触し、データの入手に成功していた。

手に入った情報によれば、敵は『エスカトロジー』の砲撃による資源衛星『ヘルメス』の破壊を計画していた。

『ヘルメス』とは『メークリウス』同様に開発されている外宇宙用ステーションの事だ。だがその完成度はまだ半分程度に留まっており、地球周回軌道近くで開発が進められている。

もしも仮にここが砲撃されれば、地球のみならず付近のコロニー群にも致命的な被害が及ぶだろう。

そうなれば少なくとも地球は終わる。

だからこそ絶対に阻止しなくてはならないというのに。

《連中の懸念も理解出来なくはないがな。とにかく同盟としての戦力はヴァルハラで準備が出来ているもののみとなる》

「了解しました」

《それから統合側だが、戦力は送るが同じタイミングでの派兵は難しいらしい》

「どういう事です？ 我々やテタルトスとも足並みを揃えるという話ではなかったのですか？」

《何でも高速移動用ブースターの調整と新型機を各部隊に配備するのに時間が掛かるらしい。何処まで本当か知らないがな》

イザークが不審感を隠しめせず、気に入らないと腕を組む。

その気持ちは良く分かる。

何を考えているのか知らないが『ヘルメス』が砕かれ地球に落ちたら最も被害を受けるのは統合政府である。

だからこそこの派兵にも積極的だったのだが——

「イスラフィールは何を考えているのか」

《分からん。だが軍を広域に展開しているという情報も入っている。敵からの攻撃に備えてという事らしい》

「とにかくエスカトロジーへの攻撃は我々とテタルトス軍のみで行うと？」

《そのテタルトスもエレボスでの被害もあるから戦力をあまり多くは送れない。いつも苦勞をかけるが頼むぞ、レフティ艦長》

「了解しました」

通信が切れると同時に漏れそうになるため息をグツと堪える。

またも少数での強行軍。

敵の数に比べてあまりに少ない数で挑むというのはやはり心もとない。

だが作戦前だ。

部下の前で緊張感を切らす訳にはいかない。

仕方なく度重なるストレスに対抗する為、ヨハンは部下に悟られないよう常備していた胃薬をこっそりと口に含んだ。

◇

敵艦から脱出しどうにか帰還を果たしたアオイは医務室で検査を受けていた。

出撃前の最終確認という奴だ。

敵艦では何度も暴行されたから当然だと思う。

「殴打による打撲箇所が多いし、医者としては安静にしておいてもらいたいけど」

「今の状況ではそうも言ってられません」

「ハア、痛み止めを出しておくから、出撃前に飲んでおく事。少しでも異変を感じたらすぐに帰還する事、いいわね？」

「はこ」

曖昧な笑みを返すアオイに女医は呆れたようにため息をついた。彼女が多分理解している。

例え異常があろうともアオイは戦闘中に帰還などしないだろうと。

「大丈夫ですって。手当のお陰で痛みは殆ど無いし」

「そういえば的確に手当てしてあったわね、自分でしたの？」

「……いえ、その敵艦の医師が」

シルヴィアの事を話すのは気が引けたので、適当に誤魔化すと感心したように女医が頷いた。

「ふうん、テロリストにも腕の良い医師がいるのね。検査は終わりよ、さつきも言ったけど無理は厳禁」

「はい、ありがとうございます」

女医に礼を告げ、医務室から出るとルシアが待っていた。

「どうだった？」

「はい。問題なく」

「そう。ならいいわ、部屋でお茶しましょう」

隣を歩くルシアを横目で見るが、特に気落ちしたようには見えない。

ルシアにはすでにシルヴィアの過去については話してある。

あの独房で聞いた事をルシアは知る必要があると思つたからだ。

結構、シヨックを受けているか気になつていたのでが——

「大佐、その、シルヴィア・ヒビキの事ですけど」

「ええ、彼女の件は私が決着をつけなくてはならない。でも、まさかそこまでやつていたとはね、あの男は」

「アル・ダ・フラガ。大佐の父親に当たる人物でしたね」

「思い出したくもないけど。あの男が残すものは厄介ごとばかり、全く」

話を聞く限り——何というか、かなり厄介な人物だったようだ。

彼の為に多くの人間が人生を狂わされた事を考えると、不謹慎ながら故人で良かったと思つてしまう。

仮に生きていたならアオイは間違いなく、殴つてしまふだろうから。

だが——

「でも俺は……大佐達には不本意かもしれませんが、感謝している事もあるんです」

「え？」

「えつと、そのアルつて人が色々しなかつたら、大佐達には出会えませんでしたからね。俺は大佐達に出会えて嬉しかったですし」

ネオ、すなわちラルス・フラガ。

そしてもう一人のネオであるルシア・フラガ。

仮に二人が生まれていなかったら、アオイはユニウス戦役を生き延びる事は出来なかっただろう。

二人が居たからアオイやスウエンも生きていられたし、ステラも助かったのだ。

アル・ダ・フラガという人が許されない事をしたのだとしても二人を誕生させてくれた。

アオイはそれだけは感謝したいと思う。

「大佐？」

ルシアからの反応がない。

もしかすると配慮の欠けた事を言ってしまったかもしれないとルシアの方を見る。

すると能面のように表情が抜け落ちた顔でアオイを見つめていた。

やっぱりぶしつけだったか。

謝罪しようとしたアオイの言葉は突然重ねられた唇で塞がれてしまった。

どれだけの時間が経ったのか。

数秒か、あるいは数分か。

はつきり分かるのは暖かい唇の感触だけ。

呆然と受け入れていたアオイとルシアの唇が離れる。

「色々辛い事はあつたけど感謝しているのは、その、私も一緒だから
顔は赤面し恥ずかしそうにしては居るがルシアははつきりと告げた。

「貴方を愛してる、アオイ」

「た、大佐？」

「さ、先に部屋に戻ってお茶の準備をしておくわ」

アオイが話す前にルシアは走って行ってしまった。

追いかけて返事を——でもなんて答える？

勿論、アオイもルシアの事は好きだが、そういう風に考えた事はなく——

頭の中がごちゃごちゃして考えが纏まらない。

一回頭を冷やそうと近くの展望室へ入るとスウエンが外を見ていた。

「大尉？」

「中尉か。怪我の具合はどうだった？」

「問題ありません。戦闘には参加できません。それで大尉は何をしているんです？」

「……星を見ていた」

スウエンはどこか懐かしいものを見るように宇宙に浮かぶ光る星を眺めていた。

「子供の頃は星が好きで夜空をよく見ていた。それが今は宇宙で星を見ているんだか

ら不思議な気分だ」

「もう星を見ないんですか？」

「戦いばかりで忘れていたし、あまりに多くの血を流し過ぎた。子供の頃の夢を追う資格もないだろう」

「そんな事ないですよ！ 今からだって遅くありません。俺、星とかよく知らなくて、戦争が終わったたら教えてくれませんか？」

アオイからの提案が意外だったのか、僅かに驚いたような顔をしていたスウエンが僅かに笑みをこぼす。

「俺も忘れているからな。その時までには勉強しておこう……夢の続きを追うのも悪くないかもな」

「はいー！」

「そういえば中尉は戦争が終わったらどうするんだ？」

「え、そりゃ軍に残るでしょうけど……」

さっきのルシアの件や地球で入院しているステラの事、そして育った孤児院もあるから多分死ぬまで軍人で居続けるとは思う。

でも、それとは別に何か新しい事を始めてみるのも良いかもしれない。

「奪ってばかりだったものな」

あの屑野郎ヴェクト・グロンルンドのように、自分が奪って当たり前なんていう風にはなりたくなかった。

償いという訳ではないけれど。

「それもこの戦いが終わってからですよね」

「そうだな。俺の機体の準備も終わった。奴らとの決着をつけるぞ」

「了解です」

視線を宇宙に戻すとキラキラと無数の星が輝いていた。

その中に倒すべき敵と戦艦が居る。

これまでの戦いと同じ、いや、それ以上の激戦となるだろう。

アオイは拳を握り、来るべき戦いへ決意を固めていく。

『第二次統合戦争』という名で歴史に刻まれる戦いは最終局面を迎えようとしていた。

第16話 黒と獣

地球や月、コロニー圏からも遠く離れた位置に無数の光が集まっていた。

それは宇宙を照らす星の光ではなく無数の集まったモビルスーツの発する光だった。背後に控える『エスカトロジ』を守るべく、出撃した艦を中心に防衛隊形が取られ、モビルスーツもそれに合わせて展開されていた。

『エスカトロジ』に近寄せせない為に敷かれた幾重もの防衛線。

さらに『エスカトロジ』付近には幾つかのミサイル砲台が設置されていた。搭載されているのは全弾核ミサイルである。

これは万が一、エスカトロジの砲撃が失敗に終わった場合に備えた予防策だった。最悪これを地球に撃ち込めば、地球を混乱させる事ができる訳だ。

これだけの数と兵器を前に正面から抜こうとするのは無謀極まりない。しかし敵は必ず来る。

何故ならばこれから始まる攻撃こそ彼らの目的を達する為の最後の一手。

これを阻止しなければ現状勢力の敗北は決まってしまうからだ。

故に誰もが油断せず、『エスカトロジー』が予定ポイントまで到着するのを待っていた。

「予定ポイント到着時刻まで何分だ？」

「残り6時間って所だな」

話しているのは元ジャンク屋でアオイに対する暴行を行った兵士達。

長年の愛機である改良型リゲルを駆りながら、青い地球を見つめていた。

美しい。

モビルスーツのカメラで撮った拡大映像ではあるが、その姿は宝石のような輝きを放っている。

その美しい星に寄生虫のように住まう者達こそ、自分達を苦難に追いやった元凶だ。

『ベルリン条約』なんてものが出来てから彼らの生活は一変した。

ジャンク屋としての活動は著しく制限され、傭兵として生きるにしても有名どころの傭兵団でもない身分の不確かな者を雇ってくれる所など殆どなかった。

さらに街の人々からはテロリスト扱いで子供が学校にすらいけない状態。

その日の食事にすら困り、家族は露頭に迷った。

もしも統合軍を立ち上げる時、ファウストが拾ってくれなければ、自分達は家族共々

飢え死にしていただろう。

だがそんな自分達を救ってくれた恩人すらも、権力者の犬によって殺されてしまった。

「逃げられるなら殺しとけば良かったんだよ、あんな奴はさ」

逃げ出したアオイ・ミナトの事を考えると腸が煮えくり返りそうになる。

「しようがないだろ、外部からの手引きがあつたらしいからな」

「ふん、どうせアイツも此処へ来るさ。その時に引導を渡してやれば良い」

「ああ。とりあえずあんな屑の事はほつとけて。それよりもすぐあの腐った世界は終わり、新しい時代が始まるんだぜ！」

「「おお!!」」

確かにその通り。

後、6時間。

それだけ我慢するだけで世界は一変する。

彼らの口元には楽し気な、そして誇りに満ちた笑みが浮かんでいた。

だが、その中の一人が目の端で何かを捉えた。

「ん、光？」

キラッと一瞬、何かが光った。

無論、それは星の光でもなく、コロニーの光でもない。良くない予感がして映像を拡大。

目を凝らして、光った方向を観察する。

「どうした？」

「今、何かが光って——」

その時、彼らの立ち位置とは反対側から発射されたビーム砲が防衛隊形を取るモバイルスーツ隊に直撃した。

呆然と突然の出来事に見入ってしまう。

直撃を食らった機体は見る影も無く破壊され、形勢されていた陣形は大きく乱れた。

「何!？」

「敵か!？」

一斉に武器を構え、敵の姿を視認しようとモニターを注視する。

宇宙の暗闇を抜け、彼らの前に姿を見せたものは予想外のものだった。

伸びる砲身と無数の砲口。

中央に鎮座するモバイルスーツを覆うような外殻。

その姿を見た彼らの背筋に寒気が走る。

ジャンク屋として数々の兵器を目にしてきた彼らには直感としてソレが何であるか

を悟っていた。

「全機、散開しろオオオオオ!!!」

「ッ!!」

「くそがアア!!」

力の限り声を上げ、スラスターを全開にその場からの離脱を試みる。

だが、時既に遅し。

一斉に解放された砲撃は第一防衛ラインを形成していた部隊に突き刺さった。

圧倒的な火力に晒された部隊は成す術なく、撃破され防衛ラインに致命的な穴が空いた。

敵はそこを狙って突っ込むつもりだ。

「行かせるものか! おい!」

「分ってる!」

「今度こそ、殺してやる!」

激高し、敵への攻撃を決意する。

彼らを駆り立てるものは同じ志を持つ仲間が無残に倒された事による怒りだけではない。

見たのだ。

敵の纏う外殻の中央にいた機体。

アレはアオイ・ミナトの駆る新型ガンダム、エクセリオンに相違ない。

何度もデータで確認したから見間違えはあり得なかった。

「うおおお!!」

砲撃の死角。

サーベル片手に真上から攻撃を仕掛ける。

「どれだけ火力があろうが!!」

「砲撃出来ない死角から攻められればどうにもできまい!!」

「落ちろ、糞野郎!!」

積年の恨みを込めて怨敵を討ち果たす!

しかし次の瞬間、予想外の動きを見せた敵機に全員が驚愕する。

装備していた一際長い砲塔が頭上へ向き、きつちりとリゲルを捉えていた。

「へ?」

「まず——」

「逃げろ!」

その言葉の意味を砲口を突きつけられたパイロットが理解した時にはすべてが遅すぎた。

発射されたビームはリゲルを呑み込み、コックピットに座るパイロットを一瞬の内に蒸発させた。

「嘘だろ」

「あ、ああ」

此処まで苦楽を共にしてきた仲間があつさりと殺されてしまった。

しかも殺したのは――

「アオイ・ミナトオオオ!!」

「貴様アアア!!」

砲塔は未だ上方を向き、外殻の砲口も彼らを捉えてはいない。

仲間が作ってくれた絶好の機会。

砲撃から難を逃れた二機のリゲルが両側面から同時に襲い掛かる。

しかしそこで彼らの意識は途絶え、乗機もまた同時に消えた。

エクセリオンが両手に握るブレードによって両断されてしまったからだ。

あつという間の出来事にやられてしまったリゲルの姿に僅かの間、立ち竦む防衛部隊。

その隙に再び発射された砲撃が防衛部隊を薙ぎ払った。



「ハア、ハア、やつぱり、扱いが難しいな」

エクセリオンのコックピットでアオイはバイザーを上げ、汗を拭いた。通常行う戦闘以上の疲労度。

それだけエクセリオンの纏う外殻が特殊な武装である事を示していた。

外殻の名は高機動兵装『スレイブニル・グラニ』

同盟の高機動兵装『スレイブニル』の発展型装備である。

モビルスーツの強化に重点を置きながら、さらに火力と推進力を強化、ミーティアを上回る圧倒的な火力と機動力を得た。

さらにアカツキやヴァナデイスが使用したドラグーンの防御フィールドを応用し、機体全体を守るフィールド発生装置を搭載した事で防御力もアップしている。

だが欠点として操作性の複雑さを招いており、パイロットの負担が増大、コーディネイターパイロットですら手に余る程である。

それを考慮して搭載された制御A IとエクセリオンのW・S・システムによる補助が行われてようやく操縦可能になっている。

「ハア、くそ、装備が良くても使いこなせなきゃ意味ないだろ」

飲料を口に含み、再び戦場に視線を向ける。

見渡す限り、敵、敵、敵だ。

この新装備の『スレイプニル・グラニ』でさえ突破できるかどうか。

「それでもやらなきや、地球が終わる」

連中の狙いは絶対に阻止する。

ステラを守る為にも。

それに作戦遂行の為にルシアやスウエンも動いている筈だ。

自分だけ足を止めている訳にはいかない。

「いぐぞー」

躊躇わずフットペダルを踏み込む。

『スレイプニル・グラニ』のスラストユニットが火を噴き、圧倒的な加速と共に強烈なGがアオイの体に押し掛かった。

「グッ」

敵もまた『スレイプニル・グラニ』の外殻を纏ったエクセリオンの巨体に向けて攻撃を撃ち込んでくる。

それでも構わず速度を上げ敵部隊の中へ突撃、ビーム砲とミサイルを一斉発射した。

砲撃の直撃を受け爆散する敵モビルスーツの光の中を突っ切りながら、アオイは『エスカトロジャー』に向かって突き進んでいく。

そこでアオイは機体の足を止めた。

研ぎ澄まされた感覚に引つかかるものがあつたからだ。

最近だがアオイは自分の感覚が以前よりも格段に鋭くなっているのを感じていた。

殺気を放ちドラグーンを使用してくるような連中ばかりを相手にしていた為かもしれない。

流石に特定の人物が分かるルシアや伝説のパイロットであるキラ・ヤマト、アスト・サガミのような直感力はない。

それでも敵の殺意くらいは感じ取れるくらいには勘が鋭くなっている。

「敵がいる……どこだ？」

視線を滑らせ、感じる殺意の場所を特定しようとして集中する。

そして、朽ち果てた残骸に目を向けた瞬間、一斉にビーム砲が襲い掛かった。

「ッ!?!」

機体を退き、高速移動しながら撃ち込まれたビームを躲していく。

敵の攻撃を回避しながら目の端で捉えたのは見た事のない機体だった。

『アヴァターラ』

所属不明の工房で作り上げた新型機。

悪魔を彷彿させる禍々しい外見と各部に取り付けられた高出力スラスタにもよって外見に似合わない高機動性を持つ。

ドラグーンシステムをふんだんに盛り込み、近接武器も充実させる事で遠近隙のない機体に仕上がっている。

さらにパイロットのSEED能力を最大に引き出すe. s. システムを搭載している。

「この動き、そしてこの殺意は……ルドラ・アシユラか！」

「最早貴様に言うべき事はない。此処で仕留める！」

ルドラは機体に装着した武装を一斉に解放する。

その火力は通常の兵器では考えられないレベルのものだ。

『アヴァターラ』もまたエクセリオンと同じく外殻のようなものを纏っていた。見覚えがある。

アレは——

「あの兵器……廃棄コロニーに現れた奴か！」

かつて廃棄コロニーでクロムと戦った時に姿を見せた機動兵器に間違いはない。

『フォーリングスター』

かつてザフトが開発した巨大補助兵装ミーティアを改修した追加兵装。対モビルスーツ戦闘のみならず、高速で動く機動力も確保され、ミラージュコロイドによる隠密行動も可能になった。

高速移動及び隠密行動時はモビルスーツを収納する為に中央に格納スペースが展開され、輸送面でも優れた能力を持つ。

ミーティア自体にNジャマーキャンセラーを搭載、核動力で稼働している為、エネルギー切れはない。

核のエネルギーを用いた試作型の全周囲ビームフィールド発生器を装備しており、ビーム兵器に対する高度な防御性能を誇る。

「巨体の割に良く動く!」

「ルドラ!」

ビームの嵐を掻い潜り、こちらもビーム砲を叩き込む。

だが、直撃した筈の一撃はアヴァターラの眼前で弾け飛んだ。

「ビームフィールド!?!」

そして同時に発射されたアヴァターラのビームもまたエクセリオンに届く前に光の壁に受け止められた。

「奴も同じ装備を!?! チィ!!」

お互いにビーム砲を撃ち込むが、すべて展開された防御フィールドによって弾かれてしまう。

攻撃は通用せず、砲撃の応酬では決着がつけられない。

「ならば！」

『フォーリングスター』から射出されたプリステイスビームリーマーが『スレイプニル・グラニ』を狙って這いよってきた。

狙いはビームフィールド発生装置だ。

『スレイプニル・グラニ』の各所に設置された発生装置を破壊すれば、フィールドは展開できなくなる。

そうして丸裸になれば外殻によって巨大になった機体は良い的という訳だ。

「舐めるな！」

ビームブレードでプリステイスビームリーマーで斬り払い、バズーカ砲に持ち替えてトリガーを引いた。

「実弾なら貫通できるとでも思ったか！」

ルドラの言葉通り発射された砲弾はフィールドに阻まれてしまう。

だが、それはアオイも承知の上。

覆う爆煙に紛れて接近、ビームブレードを叩きつけた。

流石にブレードを防ぐ程の防御力はないようで、アヴァターラもビームソードで応戦。

激突したブレードとビームソードが火花を散らした。

「小回りが利かないその機体では貴様の本領は発揮できまい！」

ブレードを力任せに弾き、巨体に似合わない器用な動きで回り込んできた。

直感で危険を感じたアオイは即座に距離を取るが、敵機からの砲撃が襲い掛かる。

「邪魔するな、俺はエスカトロジーへ——ッ!？」

エスカトロジーに向かおうとしたアオイの下方から別の攻撃が迫ってきた。

伸びてきたのはモビルスーツのアーム。

有線で操られたそれは正確にエクセリオンのコックピットを狙って攻撃を仕掛けてくる。

「くっ、どけー！」

ブレードからビームライフルに持ち替え、アームを操る有線を撃ちに抜いた。

有線を破壊されたアームはコントロールを失い、機関砲によって撃破された。

「どいから……！」

アオイの肌が粟立つ。

強烈なまでの殺気がエクセリオンに向けて放たれている。

「これって」

エスカトロジーへ行かせまいと立ち塞がったのは、通常のモビルスーツの倍近くはあ
る巨体だった。

脚部がなく左右に両腕、背中にも突き出された砲塔とアームユニットが見える。

各所には砲口らしきものが設置されており、明らかに砲撃戦を意識した機体だと分か
る。

『ブラフマー』

所属不明の工房が作り上げた新型機でモビルスーツというよりはモビルアーマーに
分類される機体である。

通常の機体よりも巨体であるが各所に設置されたスラストと高出力のメインスラ
スターにより、見た目以上の機動性と火力を誇る。

パイロットであるサルワ用に調整が加えられており、アオイの予想通りに砲撃戦より
の武装になっている。

「アオイイイイ!!!」

「サルワ・アシユラ!」

ブラフマーから発射された強烈な砲撃。

ただのアンチビームシールドであればあっさり融解しそうな一撃だが、エクセリオン

が展開しているフィールドには通用しない。

だが、砲撃によって動きが鈍った所に背後から迫ってきたルドラが接近戦を仕掛けてくる。

「行かせはしない!」

「ッ、こんな状態でインファイトかよ!」

巨体を振り回し、繰り出す剣戟がエクセリオンを掠めていく。

アオイは機体を無理やり振り回し、ルドラの間合いから飛び去り再びバズーカ砲を発射した。

しかし今度はサルワが構えたライフルが砲弾を撃ち落とす。

「サルワ、あの怪我でどうやって動いているかは知らんが下がれ。奴は私が倒す」

重傷だったサルワがモビルスーツに乗っている以上、相当の無理をしているのは明白だった。

それこそ命を削る程の。

だがそんなルドラの気遣いをサルワは跳ね除ける。

彼にも決して譲れないものがある故に。

「ハア、ハア、そういう訳には、行かないよ、ルドラ。奴は私の獲物だ!」

展開された守備隊をミサイルで蹴散らしながら進む、敵に対してありったけの憎しみを

を込めてビームを放つ。

だがアオイは隙間を抜けるように加速、砲撃を置き去りにロングレンジ高エネルギービーム砲で守備隊を砲撃した。

「狙うはあくまでエスカトロジャーという訳か！」

「私達を同時に相手にしながら！ 舐めるなよ!!」

「お前達に構っている時間はないんだ!!」

三つの巨体は激しい砲撃戦を繰り広げながら、展開された防衛線の中を高速で移動していった。

◇

アオイが戦闘に突入した頃、別の方角から近づく機影があった。

スウエンの駆る新たな機体である。

A D T - X O 2 『ストライクノワール・クリュメノス』

同盟の新型機開発計画の一環で開発された機体でストライクの名を冠しているものの、中身は完全に別物の新型機。

基本的な武装などはかつてのストライクノワールを踏襲しており、パイロットである

スウエン・カル・バヤン大尉の特性と希望に合わせて調整が行われており、彼専用の機体となっている。

そしてこの機体もまたエクセリオン同様外殻を纏っていた。

高機動兵装『スレイプニルII型』

『スレイプニル・グラニ』の先行試作量産型。

量産化を目的としたデータ収集機としての意味合いが強く、コストを抑える為『スレイプニル・グラニ』よりも火力は劣る。

しかし火力、機動力の向上が図られ、全体的な性能は『スレイプニル』よりも上。

さらに試験的なビームフィールド発生装置を搭載しているが、その出力は『スレイプニル・グラニ』より抑えられている。

操作性の複雑さも改良されつつあるが、それでもパイロットの負荷が大きいのに変わりに為量産化への課題として残されている。

「中尉は予定通りのようだな」

アオイは現在敵の第一防衛ラインを超える為に敵陣の中で奮戦中。

おかげで敵の注意は正面に向いている。

これで側面からの奇襲がしやすくなった。

後は反対側から攻めるルシアの攻撃と合わせれば良い。

「味方の本隊が到着するまでに敵の砲台くらいはどうかしたいが」
スウエン達の目的は三方向からの奇襲による敵戦力の分散と攪乱。

そして本隊到着まで時間稼ぎ、可能であればエスカトロジエ近辺に設置してある核ミサイルを破壊する事である。

出来ればエスカトロジエを落としてしまいたい所だが、流星にそれは無茶というものの。

いかにスレイプニルを用いるとはいえ、あの数に対して単機で突破するのは不可能だ。

「時間がないから念密な作戦は立てられないとはいえ……」

目の前の敵数を見れば誰だって辟易する。

それでも一切怯む事がないのはスウエン・カル・バヤンが歴戦の勇士だからか。

「行かせてもらう」

こちらの射程に入ると同時にミサイルを一斉発射、砲台へと一直線に駆け抜ける。

スウエンの発射したミサイルによる奇襲に敵は完全に浮足立っていた。

そこにビーム砲を叩き込み、さらなる打撃を与える。

散漫な攻撃もスレイプニルの圧倒的な推力とビームフィールドによる防御で通用しない。

「この装備、思った以上の性能のようだ」
今の内に砲台まで駆け抜けようとしたスウェンだが、そこに見覚えのあるモビルスーツが現れた。

「よお、スウェン!!」

「アルド・レランダー」

立ちはだかるはアルドのベテルギウス。

しかしその姿は依然とは別物になっていた。

『ベテルギウス・ヴァイパー』

月面紛争時にて実戦投入されたベテルギウスのデータを基に改修、建造された機体。

正体不明の工房で作り上げたものであり、形式番号は存在しないが、その性能は各陣営の最新鋭機にも劣らない。

強化兵専用に変更されたOSを搭載、破格の追従性と機動性を持っている。

「新型か」

「前の戦いはお互いに消化不良だっただろ。機体も万全じゃなかったしな。でも今日は違う。思いっきり殺し合おうぜ!!」

「……貴様は何の為に戦っている?」

「何だそりゃ、もう知ってるだろ。俺が戦うのは楽しいからだ! 戦闘以上に楽しい

娯楽などないんだよ！」

アルドにあるものはただの闘争。

それで得られる快楽とスリルのみ。

「分かってはいたが、救えない。貴様は俺が引導を渡してやる」

「いいねえ、そうこなくつちやな!!」

アルドの歓喜に反応するように背中のマニユピレーターが翼の如く展開された。

「いくぜええ!!」

スウエンは動き出すベテルギウスに向けて砲撃を開始する。

当然のように出鱈目な動きで回避したアルドは歓喜の声を上げながら、ビームライフ

ルを乱射してきた。

「おらおらー」

もちろんそんな射撃が通用せず、フィールドによって攻撃は弾かれる。

しかしそれはアルドも予想していたようですぐさま近接戦に切り替えてきた。

「厄介な装備じゃないか。まずはそれを攻略させてもらおうか！」

「相変わらず遊び気分か」

ブレードでベテルギウスを弾き、再び砲撃の間合いまで距離を置こうとする。

だが逃さないと伸びたマニユピレーターがフィールドを突き破り、スレイプニルの装

甲を抉り捨てた。

「そんな鈍重な装備で近接戦が出来るかとも思っているのかよ！」

幾ら対モビルスーツ戦を想定し、近接戦用装備を意識してもスレイプニルを装着したままでは細かい動きには対応できない。

特にアルドのようなエース級であるなら、尚の事だ。

「……だとしても」

ブレードでマニピレーターへの攻撃を防御しながら、抜き出したもう一本のブレードを叩きつける。

「ウザったいんだよー」

ベテルギウスは両腕に装着している中型多連装ビーム砲を至近距離から連続発射。

盾代わりに掲げられたブレードは限界を超え、半ばから砕け散った。

さらに繰り出されたマニピレーターによる攻撃でスレイプニルの砲口の一つが潰されてしまう。

「……限界か。砲台を破壊する前にスレイプニルをやられては意味がない」

スウエンはスモークを発射し、ベテルギウスの視界を塞ぐ。

そしてスレイプニルを切り離すと斬艦刀を構えて接近戦を挑む。

「鈍重な装備を切り離したかよ。これでやっとまともに戦えるぜ！」

上段から振り下ろされた斬艦刀を軽く捌いたアルドはマニユピレーターを繰り出し、同時にビームソードを構えて斬り結ぶ。

ベテルギウスの背中から伸びるマニユピレーターは全部で8本。

さらに両手のソードを合わせると合計で10本の刃がストライク・ノワールに襲い掛かる。

「ッ!？」

まるで蜘蛛だ。

四方八方から繰り出される一撃は文字通りの縦横無尽。

捌き切る事すら難しい無数の斬撃を前にスウエンは防御する他ない。

ビームシールドを展開し、斬撃を受け続ける。

しかし10本の斬撃は確実にストライクの装甲に傷を刻んでいく。

「どうした、防いでばかりじゃ俺は倒せないぜ!」

シールドの上から渾身の一撃が叩き込まれ、ストライクは仰け反るように吹き飛ばされる。

その隙を突き、さらに前に出たベテルギウスだが此処で予想外の反撃を食らってしまつた。

無理やり展開したレール砲を至近距離で炸裂させベテルギウスを無理やり引き離し

たのだ。

さらに射出したアンカーに牽引されていた斬艦刀がマニユピレーターに激突し、動きを阻害されてしまう。

「何!?!」

「熱くなり過ぎだ!」

目論見通りの結果だ。

斬艦刀を回収したスウエンはビームライフルシューターに持ち替え、動きを止めたマニユピレーターを狙撃する。

動きが鈍った複数のマニユピレーターを破壊、再び斬艦刀で斬り結んだ。

「やるじゃないか! けどまだまだぜ!!」

突如背中から切り離されたマニユピレーターの先端部分が四方からストライクへと襲い掛かってきた。

「ドラグーンか」

四方からの攻撃をストライクの機動性を生かし捌いていくスウエン。

しかし躲した瞬間を狙い、振るわれたビームソードが斬艦刀を叩き折る。

さらにマニユピレーターの一撃がストライクを逆袈裟に傷つけた。

「チッ」

ライフルで牽制しながらシールドを構えて後退する。

厄介な。

切り離されたドラグーンの突撃攻撃に加え、背中のマニピレーターによる多重斬撃。

アルドの能力ではドラグーンをルシアのように操る事は出来ないようだが、その欠点を補う為に常に接近してくる。

ベテルギウスの斬撃から距離を取ろうとすればドラグーンの攻撃に晒されるという訳だ。

唯一の救いはベテルギウスに搭載されたドラグーンはどうやらビームカッターによる近距離攻撃しか出来ないという事くらいだろう。

スウエンは持ち替えたビームライフルショーティーの連撃で距離を置こうとするが、それをさせるアルドではない。

逃がさないとばかりに繰り返される斬撃がストライクを削り、動きを鈍らせていく。

「今回も俺の勝ちみたいだなアア!!」

「どうかね」

速度を上げたストライクは一転してベテルギウスに向かって突撃する。

激突するか否かというギリギリのタイミングですれ違い、その瞬間にビームライフル

シヨーティーの一射がベテルギウスの肩を撃ち抜いた。

「ツ、やってくれるな！ 最高だぜ！ お前もそう思うだろ？ この瞬間こそが楽しいってよ!!」

どこまでも楽しそうに、どこまでも嬉しそうに笑うアルド。

その声にスウエンははつきりとした拒絶の言葉を口にする。

「貴様と一緒にしないでもらう……遊びで戦っている男に負ける気はない」

「そうかよー」

加速するストライクの動きを止めようと両腕の多連装ビーム砲が火を噴いた。

まるで誘導されているかのようにストライクを追尾してくるビーム。

蛇のように纏わりつく閃光が背中の装備や装甲を削ってゆく。

「ぐっ、この程度」

さらに速度を上げて残りのビームを振り切ると再びベテルギウスに突撃する。

「破れかぶれの突撃か？」

「獣には獣相手の戦い方がある」

「は、見せてもらおうじゃないか！」

多連装ビーム砲の攻撃もシールドで庇い、速度も落とさない。

その動きを見切っていたアルドは絶妙のタイミングでストライクの突撃を回避する

と再び多連装ビーム砲を構える。

だが、突然の衝撃につんのめってしまふ。

「何!？」

先ほど叩き折った斬艦刀の残骸が投擲されたのだ。

「く、奴は?」

アルドが立ち直る一瞬間の間。

その間の距離を詰めたストライクはベテルギウスへ突撃する。

「ぐああああ!」

「グッツツ!!」

二機のモビルスーツはもつれ合い、スウエンとアルドはその衝撃に呻く。

常人なら気を失ってもおかしくない衝撃だ。

それでも二人が意識を保っていられたのは、訓練の賜物だろう。

頭を振り、正気に戻ったアルドはスウエンよりも速く動く。

強化されているが故に衝撃にも強い。

それがスウエンよりも速く動けた理由。

ベテルギウスによってストライクは蹴り飛ばされ、体勢を大きく崩してしまふ。

「楽しかったぜ、スウエン!!」

ビームライフルをストライクのコックピットへ突きつける。勝利を確信したアルド。

しかしその耳にスウエンに冷静な声が届いた。

「……お前は戦いを楽しみすぎる。だから大切な事を見失ってしまうんだよ」

「何ッ?!」

ストライクの背中から伸びたワイヤーが繋がっているのは――

「あの外殻!」

アルドの視線の先にはスレイプニル。

その砲口は丁度、ベテルギウスを捉えていた。

「しま――」

「遅い!」

スウエンがトリガーを引いた瞬間、スレイプニルから大量の砲撃がベテルギウスに襲いかかる。

すべてはスウエンの罠だった。

あの突撃も、折れた斬艦刀の投擲も、今までのすべての攻撃がベテルギウスをスレイプニルの攻撃範囲におびき寄せる事が目的だったのだ。

「クソがアアアアア!!」

叫ぼうがもう遅い。

避ける暇はなく、防御も遅い。

「戦う事しか考えない獣には相応しい末路だ」

砲撃と同時にベテルギウスに発射したビームライフルシヨーテイーが突き刺さった。

無数のビームとミサイル、そしてライフルの一撃はベテルギウスに直撃し、そのまま

爆発を引き起こす。

「手応えはあった」

強敵ではあった。

しかし何の感慨も浮かばない。

それはアルド・レランダーという男に何の共感も得られなかったからだろう。

スウエンはスレイプニルを再び装着し、核ミサイルの搭載された砲台へと急ぐ。

エスカトロジーでの戦闘は激化の一途を辿っていた。

第17話 因縁の激突

エクセリオンガンダムとストライク・ノワールクリュメノスによる奇襲攻撃。

これらと同時刻。

スウエンが攻撃を行った場所から丁度反対方向からルシアのエレンシアガンダムが接近していた。

「あれが『エスカトロジ』、アレだけの大きさのものが建造されていたのに気が付かなかったなんて」

間近でエスカトロジを確認して改めて思うのは、その異常さだ。

これだけの大きさを持つ戦艦を誰にも気づかせずどうやって建造したというのか。

建造すること自体はミラージュ・コロイドで隠ぺい可能ではあるだろう。

しかし建造する為の人員は？

資金源は？

そもそも彼らの所持している核ミサイルとNジャーマーキャンセラーは何処から手に入れたのか？

幾らウオーレン・マクベインが統合軍に属しながら密かに準備していたとはいえ、これだけの物を単独で準備できる訳がない。

「……気にかかる事は多いけれど！」

先に奇襲を仕掛けた二機同様エレンシアに装備された『スレイプニルⅡ型』の砲口を展開している敵部隊へ向けた。

トリガーを引き、ビームとミサイルが敵部隊を薙ぎ払った。

敵に『スレイプニルⅡ型』の火力に対応できる機体は今の所存在しない。

なら今が砲台に近づくと好機。

混乱を煽る為にスモークを展開して敵の視界を塞ぎ、そこに誘導ミサイルを容赦なく叩き込んだ。

派手な爆発と広がる爆煙に敵は完全に浮足立った。

浴びせられる攻撃も『スレイプニルⅡ型』の展開するフィールドによつて防がれ、傷一つつかない。

この装備なら多少の強行軍にも十分に耐えられる。

「敵の抵抗が思った以上に少ない。二人が上手くやっているようね」

ルシアは『エスカトロジ』近くにある砲台の一つに狙いを絞ると、収束ライフルを構えた。

「そっ！」

発射されたビームが砲台を貫通。

眩い核の爆発が『エスカトロジ』に大きく揺らした。

「この調子でもう一撃——ッ!？」

その時、予想通りの感覚がルシアを駆け巡った。

「来た」

この感覚は間違いない。

ルシアが相手をすべき敵がこの先で待っている。

感じ取れる殺意と憎悪の導く先に一機のモビルスーツが佇んでいた。

『ヴィカラーラ』

所属不明の工房が作り上げた新型機。

シルヴィア・ヒビキの特性に合わせた機体となっており、空間認識力を生かす武装が多く搭載されている。

ユニウス戦役最終決戦で投入されたザフト機『レヴィアタン』を参考に開発され、両肩部にある四枚の羽根のような装甲に設置されたスラスターによって高い機動性と防

御力を誇る。

コックピットに特殊システムを搭載、シルヴィアの空間認識力をさらに高め、高い空間認識力を持つ者や『SEED』をより感知しやすくなっている。

「待っていた、ルシア・フラガ」

「シルヴィア・ヒビキ」

「私の事はアオイから聞いたようね。ならば問答無用、貴様らフラガ家の人間は全員殺す！」

シルヴィアの殺気が一層濃くなり、ヴィカララも臨戦態勢に入る。

同時にシルヴィアの背後に控えていたモビルスーツも動き出した。

『強化型リグ・シグルド』

シグルド・グラーフやルドラ、サルワ機のデータを基にリグ・シグルドの性能を強化した強化兵仕様の機体。

さらに性能が高まった反面並みのパイロットでは動かす事すら難しい仕様になっている。

「リグ・シグルドの改修機、しかもパイロットは皆、強化兵か」

「どうやらシルヴィアは想像以上に強かな女らしい。」

自身の手による復讐に拘らず、ルシアを殺す為ならどんな手でも使う。

あの強化型リグ・シグルドもその為の手駒という事だ。

「感情的でありながら、冷徹な部分も捨てていない。厄介な」

シルヴィアの手強さを認識したルシアは『スレイプニルⅡ型』を切り離した。核を搭載した砲台も展開された防衛部隊もまだ健在。

今切り札である『スレイプニルⅡ型』を失う訳にはいかないのだ。

「それにあの新型相手に鈍重な外殻を纏ったまま、勝てるとも思えないしね」

一斉に襲い掛かってくるリグ・シグルドを迎え撃つべくルシアも武器を構えた。

リグ・シグルドは一糸乱れもなく横一列に並ぶとビームカッターを伸ばしてきた。

「ッ!?!」

ビームカッターによる波状攻撃をエレンシアはシールドを構えビームライフルの射撃しながら後退する。

ルシアはこの伸縮自在の攻撃はリグ・シグルドと相対する上で厄介な点だと思つていた。

武器の持ち替え無しで近接戦と中距離戦の切り替えが可能。

しかもほぼタイムラグも無しでだ。

これにドラグーンを組み合わせた戦術を用いれば——

「場数を踏んだパイロットでも対応は難しいでしょうね」

エレンシアの翼を広げ、カッターの斬撃を躲したルシアは反撃に打って出た。

飛行形態に変形、その機動性を持ってビームの刃を掻い潜り、リグ・シグルドとの距離を詰める。

まるで空を飛ぶ鳥のような動きにリグ・シグルドはエレンシアを捉える事が出来ない。

「もらったー！」

瞬時にモビルスーツ形態となり、ビームサーベルを逆袈裟から振り上げた。

だが、必殺として放った一撃は致命傷には至らず、敵機の腕を斬り裂くだけに留まつてしまう。

「反応が速いー！」

「忌々しい話だけど通常の強化兵よりも能力が強化されているのよー！」

動きが止まった一瞬を狙ったビームキャノンの一射がエレンシアに迫る。

フラガ家特有の感覚による鋭い狙撃。

動きを完璧に読んだ一射はエレンシアを確実に捉えていた。

「ッ!? 舐めるなー！」

ルシアは咄嗟にリグ・シグルドに蹴りを入れ、その反動を利用しビームキャノンの一撃を避けて見せた。

だが狙撃は止まず、次々と急所を狙った一撃がエレンシアに襲い掛かった。

「流石、『父』の力を受け継いでいるだけはある！ けど！」
キャノンの一撃をシールドで流し、高エネルギー収束ライフルで反撃した。
高出力のビーム同士の激しい撃ち合い。
他者を寄せ付けない凄まじい砲撃戦が、開始された。

◇

三方向からガンダムによる奇襲を受けた『エスカトロジー』
それぞれ戦闘が開始され、一進一退の攻防が繰り返られていた。

形成された三つの戦場の中で最も激しい戦闘が行われていたのはアオイが攻撃を仕
掛けた『エスカトロジー』正面であろう。

絶え間なく続く砲撃。

無数に存在するモビルスーツ。

激闘を繰り返る三人のエース達による攻防。

それがより一層戦闘を激化させていた。

「アオイ・ミナト!!」

「落ちろ！」

「邪魔するなー！」

立つ塞がる敵機を無視し『エスカトロジー』に向かうエクセリオンにアヴァターラとブラフマーの猛攻は続く。

幸い防御フィールドのおかげで致命傷には至っていない。

しかし撃破しても群がる敵機の厚い防衛網を突破できず、足踏みを強いられていた。

「どけよー！」

敵陣に向けて発射したロングレンジ高エネルギービーム砲が敵戦艦を薙ぎ払い、無理やり開けた穴から前方へと突撃する。

それを阻止すべくブラフマーの放ったアームユニットが回り込む。

「ッ!？」

放たれるビーム自体は脅威ではない。

問題はフィールドを突破し、『スレイプニル・グラニ』にダメージを与えられるアームユニットのような近接武装だ。

フィールドを剥がされたらエクセリオンは丸裸にされてしまう。

アオイは咄嗟に機体の進路を変えアームユニットを回避、取り出したバズーカ砲で撃ち落とした。

「動きを止めたなー！」

アヴァターラのプリステイスビームリーマーの一撃がフィールドを突破し、バズーカ砲諸共ビーム砲の一つが潰されてしまう。

「ぐううう！」

「いかに貴様が戦闘に長けていようとこの数を単機で突破など出来るものか！」

「このオオオ!!」

進路を阻むアヴァターラへ機体ごと激突し、一瞬の隙にブレードをフォーリングスターへ突き刺した。

「くっ、貴様!!」

「動き止めたのはお互い様だ！」

フォーリングスターのフィールドこそ消せなかったものの、かなりの痛手だったのかあからさまに動きが鈍った。

照準を合わせてビーム砲を撃ち込もうとすると、今度はブラフマーが突っ込んできた。

「させるものか！」

「サルワ・アシュラ!!」

体当たりでフォーリングスターから引き離されたエクセリオンにブラフマーの砲撃が襲い掛かる。

両肩に装備されたビームライフル。

さらに複列位相砲、多連装ビーム砲。

そしてミサイルと射出されたドラグーン。

無数のビームの雨と弾幕がエクセリオンの動きを鈍らせ、視界を塞いだ。

「そこだー！」

爆煙に紛れブラフマーから伸ばされたアームユニットがフィールドを貫通。

『スレイプニル・グラニ』のミサイルポッドを食い破った。

「ぐあああ!!」

ミサイルポッドの爆発で大きくバランスを崩し、さらにエクセリオンを守っていたフィールドが一時的に消失した。

「ッ、爆発の衝撃で、すぐに再展開を」

「させるものか!」

この好機を逃がすほどサルワは呑気ではない。

一気に距離を詰め、エクセリオンを仕留める為に接近戦を挑む。

「うおおおお!!」

「くっ」

もはや『スレイプニル・グラニ』による強行軍は無理と判断しエクセリオンから切り

離そうとした瞬間、意外な援軍が割って入ってきた。

『スレイプニルⅡ型』を装着したストライクノワール・クリュメノスがブラフマーを突き飛ばし、ミサイルを撃ち込んで吹っ飛ばしたのだ。

「無事か、中尉！」

「大尉!! 核ミサイルは？」

「そちらは破壊した。こいつは俺がやる。中尉は先へ行け！」

「ッ、了解！」

優先すべきは『エスカトロジー』と核ミサイルを搭載した砲台の破壊。

此処で足止めされている時間はない。

フィールドをどうにか復旧させ、この場をスウエンに任せたアオイは『エスカトロジー』への進撃を再開する。

「逃がすものか！」

「行かせはしない！」

追撃しようとしたブラフマーに体当たりで進路を阻み、アヴァターラヘビーム砲を発射した。

「雑魚が邪魔をする！」

「サルワ、相手を侮るな」

「分っているー！」

ブラフマーは執拗にエクセリオンの追撃に向かおうとするが、それを悉くストライクノワールによって阻まれていた。

サルワは明らかに普段の冷静さを失っている。

怪我を押して出撃した影響か。

しかしその割にブラフマーの動きに違和感はなく、むしろ普段よりも攻撃や機動は鋭い。

「……何をした、サルワ?」

そもそもあの重傷でどうやって動けるようになったのか?

サルワの怪我。

特に左腕と左足は全く動かない程の重傷だった筈。

それを無理やり動かせるように出来る人間——

「ヴェクト・グロンルンドか」

大方、アオイへの敵愾心を利用してサルワを上手く丸め込んだのだろう。

「サルワに冷静さを取り戻させる為には、アオイ・ミナトの始末を優先すべきだな。どの道、『エスカトロロジー』を潰させる訳にはいかん」

立ち塞がるスウエンに閃光弾を発射し、視界を奪うとアオイ追撃に体勢に入る。

「サルワ、来い！」

「行かせん」

伸びたワイヤーがブラフマーを掴み、撃ち込まれたミサイルがアヴァターラとの距離を離した。

「くつ、ルドラは先へ！ 私はこの雑魚を始末してからすぐに後を追う！」

「油断はするなよ」

「了解！」

エクセリオンを追うアヴァターラ。

それを阻止すべく動こうとしたスウエンの前にブラフマーが立ちふさがった。

「アオイ・ミナトの前にまずはお前から始末する」

「出来るものなら」

スウエンは敵の機体を観察すべく、砲撃を防ぎながら素早く視線を走らせる。

これまでの攻撃や装備からみて砲撃戦仕様のモビルアーマーだろう。

こちらと同様にビームフィールドを展開しているらしく、ビームやミサイルの攻撃は軒並み弾かれてしまう。

さらに通常のモビルスーツならあっさり消し炭に出来る威力のビームを次々と発射してくる。

『スレイプニルⅡ型』のフィールドが無ければ、大ダメージは必至。

仮にアンチビームシールドで防御したとしてもあつと言う間に融解してしまうだろう。

「呆れる程の高火力。距離を取っての攻防では決着はつかないな」

となれば取るべき戦法はセオリー通りの近接戦。

問題があるとすれば、

「あの火力を潜り抜けられるかどうかだな」

砲撃から逃げまわり、隙を伺っているとブラフマーからアームユニットが射出された。

有線で操られた腕が牙を剥き出した蛇のように這いよってくる。

「あれでフィールドを食い破るつもりか。それにあの動き、強化兵か？」

「強化兵、忌々しい。あんなものと同種に見られるとは。しかし——」

それも致し方ないのかもしれない。

自分の左腕と右足を見る。

サルワの片腕と片足は義手、義足となっていた。

それをコックピットに設置された器具にダイレクトに接続する事で通常の操縦よりも格段に反応速度を増した動きが可能になっている。

さらに術後の身体の安定を図る為の特殊なナノマシンや薬物も使用されていた。今も全身が痛むものの、それでも戦闘可能なのは強化処置を受けたから。

つまりサルワは強化兵とほぼ同じ状態になっているのだ。

「屈辱だとも。あんな男の実験台にされるなど。それでも優先すべきは私の矜持などではない。アオイ・ミナトの確実な死、そののみ！」

アームユニットを操りながら巨体に似合わない速度で動いたブラフマーはストライクノワールの先に回り込む。

そしてもう一つのアームユニットを射出し、『スレイプニルⅡ型』の砲口を斬り潰した。

「ッ、この程度ならば！」

ビームライフルでアームユニットの有線を切り落とす。

しかしさらに射出されたアームユニットが『スレイプニルⅡ型』を四方から食い破った。

それにより動きが止まったストライクノワールに向けてビームカッターを叩きつける。

「これでその目障りな装備は使えまい！」

「初めから当てにしているじゃない！」

むしろそつちから距離を詰めてくれて感謝しているくらいだ。

スウエンは『スレイプニルⅡ型』を切り離しビームカッターをシールドで止める。

そしてビームライフルシューティーの先端に装着されたバヨネットを敵機の腹部に突き刺した。

「迂闊に接近したのが命取りだ」

ビームライフルシューティーが突き刺さったままトリガーを引くとブラフマーの装甲を吹き飛ばした。

「ぐうう、調子に乗るなアア!!」

「ッ!?!」

残ったアームユニットが上部より襲撃し、左腕ごとビームライフルシューティーを破壊。

さらに多連装ビーム砲の攻撃をストライクノワールに浴びせかけた。

悪手であると分かっているにも、強力な砲撃を前にスウエンは後退を選択する。

それを待っていたように事前に展開されていたドラグーンが待ち受けていた。

「これだけの数を捌き切れるか!」

数は十を超え、ストライクノワールの四方からビームを放ってきた。

その精度は強化されたからか、もしくは元からの才能だったのか。

以前よりも遥かに高度な精度をもってストライクノワールを追い詰めていく。

「この精度、大佐並みか!？」

避けきれないと判断し急所を守りながら後退。

さらに速度を上げてビームの網を振り切ると散弾に切り替えたレール砲を発射する。

対ドラグーンにおける戦術としての基本。

それは囲まれないよう動きを止めずに距離を取り、そして多弾頭ミサイルや散弾砲を使用した面制圧である。

一部のエース達が砲撃を躲しながら砲塔を一つ一つ落とすなんてのは神業だ。

一般のパイロットに出来る芸当ではない。

だから面制圧ならば複数の砲台を同時に落とす事も可能であり、さほど精度を気にする必要もない訳だ。

発射された細かい散弾がドラグーンに直撃し、砲台の破壊に成功する。

しかしすべての排除には至らず、肩にビームが掠め損傷を負ってしまう。

「動きが鈍った!」

吐き出すように発射されたブラフマーの複列位相砲がストライクノワールの脚部を呑み込んだ。

「ぐっ」

片足が吹き飛ばされ、さらに多連装ビーム砲による砲撃が矢継ぎ早に襲い掛かってくる。

スレイプニルを切り離し、此処まで僅か数分。

たったそれだけの時間でストライクノワールの装甲は無残なまでの傷だらけの状態に変えられてしまった。

そもその火力が違うのだから当然ともいえる結末。

例えるなら艦隊相手にモビルスーツ単騎で砲撃戦を挑もうとするに等しい。

「手こずらせてくれた。いや、此処まで持った事にむしろ称賛すべきか」

ポロポロの状態でお足掻くストライクノワールに初めて称賛を口にするのと全砲口を敵へと向けた。

「これで終わりだー！」

ストライクノワールの全身をあつさり呑み込む程、強力なブラフマーの全砲撃が迫る。

直撃すれば間違いなくモビルスーツなど跡形もなく消し去られてしまうだろう。

しかしスウェンの目には悲壮感はない。

むしろこの瞬間こそを待っていたのだと言わんばかりに、ビームシールドを展開して機体を前進させた。

光の中に飛び込んだ敵の姿に流石のサルワも目を見開く。

「自棄にでもなったか——ッ!?!」

次なる砲撃を加えようとした次の瞬間、ブラフマーの背後から強烈な爆発が巻き起る。

「ぐあああ!!」

その爆発はいかにブラフマーであっても耐えきれぬ規模ではなかった。

衝撃と爆発によって背中のスラストと装甲に大きな障害が出てしまう。

「な、何が」

ブラフマーの背後で爆発したのはスウェンが切り離れた『スレイプニルⅡ型』

自爆によって残っていたミサイルも誘爆し、凄まじい爆発となってブラフマーに損傷を与えたのだ。

「今までの戦いは時間稼ぎと私を外殻付近に誘導する事が目的だったのか。小賢しい!」

背後に気を取られた僅かの間。

正面から伸ばされたワイヤーが機体に巻き付き、身動きができなくなってしまう。

そしてさらにブラフマーに向けて何かが突っ込んでくる。

「なっ」

それはストライクの背中に装備されていたノワールストライカーだった。

ワイヤーによって身動きが出来ずスラストターも損傷しているブラフマーにノワールストライカーを避ける余力はない。

正面から激突したノワールストライカーの爆発によりサルワの視界が完全に潰されてしまった。

「ぐつううう、や、奴は？」

そして爆発の煙が晴れ、視界が戻ると同時にサルワは瞠目する。

いつの間にか懐へと飛び込んでいたストライクが斬艦刀を振り上げ、正面から斬り込んでいたのだ。

勿論、ブラフマーに避ける術はない。

自分がこんな所で――

走馬燈のように過去の情景が駆け巡る。

自分達の生まれた理由。

父親の冷たい視線。

絶望した日々。

生まれてから今までずっと一緒に過ごしてきたかけがえない唯一の家族ルドラ・アシユラ。

出会ってから救いをもたらしてくれた女性シルヴィア・ヒビキ。

自分達を家畜のように扱った仇ヴェクト・グロンルンド。

そして憎き敵アオイ・ミナト。

すべては此処からだった筈。

サルワは眼前に迫る刃を引きつった顔で見つめながら、呆然とする他ない。

「ッ、ッ、ッ、馬鹿な」

目の前の現実を受け入れる事が出来ないまま、サルワ・アシユラはストライクの斬艦刀によって跡形も無く斬り潰された。

斬艦刀によってコックピットを潰されたブラフマーは力を失い、破損した部分から火を噴き、大きな光の華となって爆散した。



仕掛けられた奇襲攻撃による動揺からマクベイン・エクスキューターも徐々に立ち直り、部隊の統制も普通に戻っていた。

これほどに早く混乱から立ち直れたのは『エスカトロジ』のブリッジから指揮を執っていたウォーレン・マクベインの優れた統率力によるもので間違いない。

「とはいえ幾つか核ミサイルを潰されてしまったのは痛かった。この動きに速さは流石は同盟というべきだろうな」

感心するように呟くウォーレンに副官が咎めるような視線を送る。

「感心している場合ではないでしょう。彼らが来たという事は敵本隊も近くまで来ている筈です」

「だろうな」

そんな二人の予想通りにオペレーターからの報告が飛んできた。

「地球の方から数隻の戦艦とモビルスーツ。同盟軍とテタルトス軍だと思われます」

「来たか」

「さらに別方向から統合軍」

報告を聞いたウォーレンは立ち上がると扉の方へ向かう。

「どちらへ？」

「せっかく来てくれた客だ。盛大にもてなさないとな。特にヴィルフリート・クアドラードとアオイ・ミナトの二人には。此処は任せるぞ」

何も言わずに見送った副官は一人静かにモニターを眺める。

「……自覚が足りない。貴方は『マクベイン・エクスキューター』の首魁であるともつと自覚を持つべきでした、ウォーレン・マクベイン」

副官の見つめるモニターには近づいてくる敵の姿が映し出されていた。

第18話 牙を剥く

敵から発せられる無数の砲撃を受けながら、エクセリオンはようやく敵の防衛ラインの突破しようとしていた。

しかしアオイの疲労は想像以上に蓄積された状態であり、操縦桿を握る手を包むグローブの下は汗でぐっしりと濡れていた。

操縦の複雑さに加え、ビームやミサイルを弾く度に起きる機体への衝撃。何機撃墜しても減らない敵モビルスーツへの対応。

そしてしつこく追撃してくるアヴァターラの存在がアオイの体力と気力を削っていた。

「ハア、ハア、落としても落としても、数が減らない！」

両手で構えた収束ライフルを発射し、敵防衛部隊を薙ぎ払う。

しかしすぐに後続部隊が前面に展開され、エクセリオンの進路を阻んだ。

「オオオオオ!!」

躊躇いなく敵陣に突っ込んだアオイは残った武装をすべて解放、群がる敵を撃墜し、戦艦をブレードで真っ二つに両断する。

「核ミサイルは……アレか!」

モニターに映ったのは核ミサイルを収容している砲台だ。

多数の敵を薙ぎ払い、アオイもようやく目標の一つにたどり着けた。

此処に来るまでにすでに二つの閃光を確認した。

スウエン、ルシアは核ミサイルの破壊に成功している。

「ならアレさえ破壊できれば!」

地球に核ミサイルが降り注ぐことは無い。

しかし流星、最後に残った砲台。

敵も死力を尽くしてアオイを阻止せんと、攻撃を加えてきた。

「そこを通せ!!」

立ちふさがる戦艦の砲撃も物ともせず、ビームキャノンで戦艦を薙ぎ払い、近づいてきた敵はブレードで両断する。

砲台が射程距離に入り、ロングレンジ高エネルギービーム砲を構えて狙いを付ける。

しかしそれを阻むように側面からアヴァターラが突進してきた。

「行かせん!!!」

「退けエエ!!」

組み付いて来たアヴァターラをブレードで弾き飛ばすが、至近距離から発射されたミサイルがエクセリオンの間近で炸裂する。

激しく繰り返すドックファイト。

お互いが敵の纏う外殻に喰いつき、攻撃を受けてボロボロの状態になっていた。

防御フィールドが展開出来ている事がもはや奇跡的だ。

「ぐうう!!」

「しつこい!!」

ブレードとビームソードが激突。

一瞬だけ鏝迫り合い、高速ですれ違う。

衝突と離脱を繰り返し、激闘を繰り返しながらアオイは目の端で目標の姿を捉えた。

「見えた!」

「チツ、防衛部隊は何を!」

アヴァターラがビーム砲を撃たせないよう、射線に割って入る。

「そう簡単に——な、に」

再びドックファイトが始まろうとしたその時、ルドラは驚愕のあまり動きを止めてし

まった。

サルワの搭乗していたブラフマーの反応が消えたのである。

「ま、まさか、サルワがやられた?」

倒したのはあの黒いガンダムか?

それ程の相手だったのか、それともサルワが油断したのか。

どちらにしろサルワはもう――

想像以上の精神的な衝撃はアヴァターラにも顕著に現れた。

そこをアオイは見逃さない。

「おおおー!」

スラスターを噴射させ、バク転のように無理やり宙返りさせる。

回転したエクセリオンのスラスター部分がアヴァターラに激突し、大きく弾き飛ばし

た。

「ぐっ」

「今だ!」

一瞬の隙を突き、前方に加速したエクセリオンは離脱の事も無視して砲台に接近する。

おそらくこれが接近できる最後の機会だ。

外す訳にはいかない。

「ッ、管制室！ 核ミサイルを発射しろ！」

《しかし目標地点は？》

「目標は地球だ！ 地上にへばり付いたゴミ諸共消し去ってやれ!!」

《了解！》

ルドラの咆哮に応えるように動き出す砲台。

地球圏に向けて核ミサイルの発射体勢に入った。

「くそ!!」

「貴様に邪魔をさせるものか！」

背後から迫るアヴァターラの砲撃が機体を掠め、幾つも損傷を負う。

それでもアオイは速度を上げ、射程に入った砲台にビームを連射した。

死を恐れぬ猛攻。

確実に核に巻き込まれる位置だ。

それでもアオイは止まらない。

「落ちろ！」

「撃たせない!!」

ボロボロになった『スレイプニル・グラニ』の砲撃。

無数のビームに貫かれた砲台と発射されたミサイルは穿たれ、すべてを無に帰す光が周囲を覆い尽くすべく広がり始めた。

アオイは即座に『スレイプニル・グラニ』の方向を転換し、離脱を図る。

だが、発せられた閃光は周りのすべてを包み、逃れようとするエクセリオンを呑み込んでいった。

◇

ウォーレン・マクベインは自身の乗機に乗り込み、激戦の続く戦場へ飛び出していた。

「素晴らしい。これほどの機体を操れるとは」

LFAX07b2 『バウ・バシリコック』

ウォーレン・マクベイン専用バウを『第一次統合戦争』に投入されたバウ・バジリスクのパーツ、そして正体不明の工房技術を用いて改修を施した機体。

武装等の変更はないものの元々高性能だったバウを現在の技術、そしてバジリスクのパーツをもって改修しただけあって、ワンオフ機とも同等以上の性能を誇る。

「久しぶりだ、この感覚は」

ウォーレンは小気味よく機体を操り感触を確かめていく。

まるで新しいおもちゃを手に入れた子供のように楽し気に笑っていた。

最近は性に合わない組織の首魁としての役割が多く、正直ストレスも溜まっていた。それに何だかんだ言った所で彼は所詮パイロット。

モビルスーツに乗り戦っている時こそ、最も充実しているのだ。

「リグ・シグルド部隊、敵はテタルトスだ。油断するな！」

「了解!!」

バウの背後からついてくる部隊。

リグ・シグルドで構成された彼らは統合軍時代からの部下だ。

所謂ウォーレン直属の精鋭部隊だった。

その技量はウォーレンが直々に鍛えてきただけあって、そこらの連中に遅れは取らない。
い。

スラスターを器用に操作し、バウの機動についてくる部下たちを頼もしく思いながら戦場を突き進んでいく。

すると真つすぐにこちらに向かってくる機体の反応があった。

「来たか、ヴィルフリート・クアドラード!!」

銀色の装甲を持つジンⅢ。

紛れもなくヴィルフリートのジンⅢ・レーヴェだ。

その後ろからは彼に付き従う形でジンIIIで編成された部隊が追隨している。

「相手にとつて不足なし。他のジンIIIはお前達に任せるぞ!」

意気揚々とサーベルを抜いたパウは真つすぐに銀色のジンIII・レーヴェエへ向かつて突撃する。

「ヴィルフリート!」

「首魁自ら出撃とはな! 三機のガンダムの攻撃で追い詰められたか!」
対艦刀とサーベルが同時に振り抜かれ、すれ違い様に火花を散らす。

「追い詰められているのは貴様たちだろう! エスカトロギーが所定の位置に付けばその時点でこちらの勝ちだ!」

高速移動を行いながら二機のモビルスーツが激突する。

同時に発射されたビームもお互いの機体を掠めるだけで致命傷には至らない。

いや、損傷度合を比べればパウの方が若干傷が深い。

それはヴィルフリートの実力がウオーレンを上回っている事を意味していた。
「チツ、未だに信じがたいものがあるな」

かつてテタルトスに所属していた二人は何度か手合わせした事がある。

対戦成績はウオーレンの全勝。

それだけ技量に差があった。

それが今は逆転しているのだからウォーレンが信じがたい気分になるのも当然といえる。

「兄の影に怯えていた卑屈な男とは思えん動きだ」

昔のヴィルフリートはそれこそ自分の事で精一杯で周りがまるで見えていなかった。それはモビルスーツの操縦や部隊指揮にも表れ、人望も全く無かったのだ。

「今では部隊員からの信頼も厚く、特務まで任されるエースになるとは驚きだよ」

「人の事をどうこう言ってる暇があるなら、自分の事をどうにかしたらどうだ」

ジンⅢ・レーヴェは高速移動を続けながら背中のマシンガンで敵の動きを阻害しつつ、対艦刀を袈裟懸けに振う。

斬撃は空を切るも、マシンガンの銃撃がバウの装甲を削っていく。

無論、ウォーレンとて黙って見ている訳ではない。

徐々にヴィルフリアートの動きに対応してくる。

マシンガンの射線を読み、機体を翻すと銃弾を完璧に回避してみせた。

「確かに貴様は腕を上げた。しかしいつまでも遅れはとらない！」

グレネードランチャーの弾をジンⅢ・レーヴェの眼前に投擲、機関砲で撃ち抜いてヴィルフリアートの視界を奪った。

「ッ!？」

「そー！」

動きの鈍った際に生まれた隙。

そこを狙いバウのライフルがジンⅢ・レーヴェエのビーム砲を吹き飛ばし、同時にマシンガンも破壊した。

「チィ、流石にやる！」

「甘く見て貰つては困るな！」

「甘く見てなごいない」

ヴィルフリートは高速移動しているバウに向け散弾砲を発射。

直撃を食らいバランスを崩した敵機に複列位相砲の強烈な一撃を撃ち込んだ。

一直線に進むビームの一撃が敵の左脚部を消滅させる。

さらにバラまいた散弾も爆発し、バウは炎に包まれた。

「ぐう」

ビームシールドで機体を守りながら炎の中から飛び出したウォーレンにミサイルの雨が降り注いだ。

撃ち込まれるミサイルとビームの弾幕にバウは防御の体勢で下がる以外の選択肢がない。

「やってくれる、だが!!」

ウオーレンは背中のスラスタユニットを切り離し、弾幕の盾とする。

それはスラスタユニット兼用ミサイルポッド。

破壊されたソレはバウの姿を覆い隠す程の火球を引き起こし、ジンⅢ・レーヴェの砲撃を遮った。

その隙に体勢を立て直し、ウオーレンはジンⅢ・レーヴェに対し接近戦を挑んだ。

ジンⅢ・レーヴェとバウ・バシリコックでは火力に差がある。

正面からの撃ち合いではジリ貧。

バウ・バシリコックがジンⅢ・レーヴェに勝っている点は機動性。

その有利な点を最大限に生かせる接近戦ならば、今の流れを変える事が出来ると判断したのだ。

「ハアー!」

サーベルによる袈裟懸けの一撃がジンⅢ・レーヴェのバズーカ砲を破壊し、返す刀の一太刀が肩の装甲に深々と食い込んだ。

間一髪、腕を落とされる前にバウの斬撃を食い止めたヴィルフリートは対艦刀を横薙ぎに振るう。

しかしそれもバウに掠める程度の損害を与えただけに留まった。

「流石『マクベイン・エクスキューター』の首魁といった所か」
ヴィルフリートは賛辞にウォーレンは何も返さない。

ただ目の前にある銀色の機体を睨みつけるだけ。

「何故だ、何故それだけの力を持ちながら……」

ウォーレンの胸中には激しい感情が渦巻いていた。

ヴィルフリートは強い。

昔とは技量もその志も違う。

なのに――

「何故、貴様はファウスト司令の意志を継ごうとしない！ 本来であれば弟である貴様が継がなくてはならぬというのに!!」

「またそれか」

ウォーレンはヴィルフリートと戦う度に訴えてくる。

「今こそこの世界を変革する！ 人類の変革を邪魔する腐った連中を一掃し、ファウスト司令の目指した新しい世界を作り上げる時だ！」

普段であれば無視する所なのだが、ウォーレンと戦うのはこれが最後となる。

だからヴィルフリートはあえて口を開いた。

「くだらない。俺は貴様らの夢想到付き合う程暇ではない」

「夢想だど!!」

「お前がああ男の事をどう捉えているのかは知らん。だがな、奴はお前が思っているような世界の行く末を憂いた人格者などではない」

ヴィルフリートは兄弟だからこそファウスト・ヴェルンシュタインがどういう人間だったのかをよく知っている。

彼は歪んでいた。

利用できるものは利用し、自分よりも劣る者達、利用価値のないものは残酷なまでに切り捨てる。

そんな男だ。

世界の変革などはただの建前。

要するに奴が望んでいたのは――

「奴は単に利用する価値のない人間達を一掃したかっただけさ。しかも人類の未来の為などではなく、自分自身の為にな」

「貴様アアア!!」

「問答無用。決着をつけてやる!」

「いいだろう。司令への侮辱、地獄で詫びて来い」

二機は刃を抜き再び激突する。

「オオオオオオ!!」

「ハアアアア!!」

バウ・バシリコックとジンⅢ・レーヴェが交錯した瞬間、対艦刀の刃がサーベルによって叩き折られていた。

機動性に優れたバウ・バシリコックが一瞬だけ早くジンⅢ・レーヴェの懐へと飛び込んでいたのだ。

同時に放った蹴りがジンⅢ・レーヴェの体勢を崩し、守りに隙が出来た。

「消えろ、ヴィルフリート!」

サーベルを逆手に持ち替え、上段からコックピット目がけて振り下ろす。

体勢を崩したジンⅢ・レーヴェに防御はおろか避ける事も出来ない。

だが、サーベルがジンⅢのコックピットに届く前に背中 of ビームマシンガンが迫り出され、バウの腕を弾き飛ばした。

「何!?!」

「甘い。同盟のデステイニーガンダムはもつと速かったんだよ!」

いつの間にかジンⅢ・レーヴェの手の甲にビームの刃が形成されていた。

「まさか、誘われた!?!」

ヴィルフリートは初めからサーベルと対艦刀の激突で競り勝つ気はなかった。

あえて隙を見せる事でウオーレンをおびき寄せ、カウンターで仕留めるつもりだったのだ。

ジンIIIの右のビーム刃が容赦なくパウの腕を撃ち砕き、さらに左手で形成した刃を敵腹部へと叩きつけた。

咄嗟の判断で残った右足を振り上げるも、足ごと腰部を抉られてしまった。

「ぐうううー！」

「先程、地獄で詫びて来いと言っていたがそっくりそのままお前に返そう。お前達のエゴの所為で死んでいった者達に詫びて来い！」

発射される複列位相砲。

「ま、ただー！」

パウは強力なビームの一撃を残ったシールドを掲げて、防御姿勢に入る。

しかしあまりに距離が近すぎた。

至近距離からの砲撃は盾ごとパウの機体を呑み込んで、爆発を引き起こす。

ヴィルフリートはすぐさま離脱すると、爆煙に包まれた敵機を確認しようと目を凝らした。

破壊された盾やバラバラになった機体の残骸は確認できるが――

「仕留めた？ いや、手応えがない。逃げたか……」

だがバウ・バシリコックは大破した状態だ。

しかもパイロットであるウォーレン・マクベインもただでは済んでいない。

少なからず負傷している筈。

アレでは遠くに逃げる事もできないだろう。

「逃がす訳にはいかない。確実に仕留める」

ヴィルフリートはリグ・シグルドと交戦する味方の状態を確認し、逃げたウォーレンを追う為に追撃態勢に入った。

◇

エスカトロジーの側面部の一画。

そこでは常人が足を踏み入れる事が出来ない光の檻が形成される異常地帯と化していた。

飛び交うのは小型の砲台ドラグーン。

操っているのは奇しくも同じ力を身に宿した二人の女性。

ルシア・フラガとシルヴィア・ヒビキは激しい攻防を繰り返していた。

「落ちろー!」

無数の砲台が一瞬でエレンシアガンダムを囲い、一斉にビームを浴びせかける。常人では見切れないビームの雨。

それらをルシアは一つたりとも当たる事なく、躲してみせた。

同時こちらもドラグーンを展開し、ヴィカラーラへ攻撃を仕掛ける。

それを感じ取ったシルヴィアもまたルシアの攻撃を完璧に捌いてゆく。

二人の攻防は完全に互角の状態であった。

だが徐々に形勢はルシアの方へ傾いていく。

飛行形態へと変形したエレンシアがドラグーンの包囲から抜け、収束ライフルでまとめて消滅させられる。

さらにヴィカラーラの動きをミサイルで牽制し、援護していたリグ・シグルドを撃墜した。

「攻撃を見切っているとでも!」

「貴方の殺気は素直すぎる。どれだけ速かろうと、来ることが分かっていたら当たるとは」

「その程度で舐めているの!!」

ミサイルでエレンシアを誘導しつつ高エネルギーロングレンジビームキャノンで薙ぎ払おうとトリガーを引く。

しかし発射された一撃はエレンシアに当たる事無く、ビームシールドによって防がれてしまった。

さらにドラグーンによる攻撃も効果がない。

撃墜されたリグ・シグルドの残骸を撃ち抜いていくだけだ。

「貴方の感覚が鋭敏すぎるのよー」

シルヴィアの放つ強烈な殺気はルシアにとつてレーダーのようなもの。

フラガ家特有の感覚が位置も攻撃のタイミングも彼女の方からルシアに教えてくれているのだ。

さらにシルヴィアが冷静さを無くしている事も要因に上げられる。

何故か途中からヴィカラーラの動きが鋭敏さに欠けているのだ。

「そーー」

ビームライフルの一射がヴィカラーラの腰部に直撃し、装甲を撃ち壊した。

「クツ……落ち着け。感情的になっては勝てるものも勝てなくなる」

エレンシアの攻撃を受けた事が逆にシルヴィアを冷静にさせてくれた。

自分はこんな所で死ぬ訳にはいかない。

まだフラガの血筋は残っているのだから。

深呼吸を繰り返し、冷静にエレンシアの姿を視界に捉える。

「サルワの件もあって感情が抑えきれなくなっていた」

シルヴィアもサルワが撃墜された事に気が付いていた。

それがより彼女から冷静さを奪い、僚機であったリグ・シグルドも半数が撃墜されてしまった。

「……流石はフラガ家の力を色濃く受け継ぐ呪われた女。私のような移植された紛い物とは違う訳ね」

「シルヴィア・ヒビキ、私は——」

「しかしだからこそお前という女は生かしておけない！ あの男の血筋はすべて絶つ——」

シルヴィアはあえて機体を加速、エレンシアとの距離を詰める。

それをさせまいと収束ライフルで迎撃する、ルシア。

だが発射された一撃は展開されたドラグリーンによって歪曲されてしまう。

「ゲシユマイディツヒパンツァー!?!」

さらにあらかじめ配置していたドラグリーンを背後から突撃させ、エレンシアに激突させた。

「ッ!?!」

「逃がしはしない!」

エレンシアが体勢を崩した所にヴィカラーラが体当たりで組み付くと、エスカトロジーの方へ押し込んでいく。

「何をー！」

「言っただでしょう！ ルシア・フラガ、呪われた女！ 本物の力を持つ貴方と力比べをする気はないっただけよ！」

エレンシアとヴィカラーラはエスカトロジーの格納庫らしき場所へ突っ込み、二機は壁に激突する。

「くうう!!」

「ツツツ!!」

床に倒れ込んだと同時に体勢を立て直したヴィカラーラはエレンシアに複列位相砲を撃ち込んだ。

複列位相砲はエレンシアのライフルごと肩装甲を吹き飛ばし、さらにビームカッターを上段から振り下ろす。

「ッのー！」

ギリギリのタイミングでカッターを受け止めたルシアはヴィカラーラを突き飛ばし、ビームサーベルを抜いた。

「この場所ならば得意のドラグーンは使えない。遠距離武装は意味をなさない！」

シルヴィアは限定空間にルシアを押し込む事で空間認識力の差を無くしたのだ。

だがそれは砲戦仕様であるヴィカララの利点を殺す事でもある。

それでもルシアを仕留めるにはこれが確実であると判断したのだ。

ヴィカララはライフルやロングレンジビームキャノンを投棄、両手でビームカッターを構える。

「私も負ける訳にはいかない。……中尉から答えを聞かないとね」
ルシアはスラストターを吹かし、突っ込んでくるヴィカララにサーベルを振り抜いた。

◇

ジンIII・レーヴェとの激突に敗れたパウ・バシリコック。

両手、両足を失い、モニターも半分以上が映らず、レーダーも死んでいる。

武装もほぼ全損。

生き残っているスラストターは僅か。

戦闘を避けてはいるが、もし敵と遭遇すれば確実に死ぬ。

そんな状況でウォーレンは完全に大破した機体を何とか操り、エスカトロジーへ帰還

しようと歩を進めていた。

「……お、のれ」

コックピットの中で重傷を負ったウォーレンは痛みを堪え、屈辱に耐えていた。認めたくはないが、完全な敗北である。

しかし個人の敗北は認めても、『マクベイン・エクスキューター』としての敗北だけは許されない。

ウォーレン・マクベインにはファウストに代わり人類の未来を切り開く使命があるのだから。

だが無常にも追撃を仕掛けてきたジンⅢに追いつかれてしまう。

「まだだ、私は、やるべきことがある」

何とか足掻こうと覚悟を決めた時、別方向からの砲撃がジンⅢを纏めて薙ぎ払った。

「な、に？」

ひび割れたモニターに映ったのは、損傷した外殻を纏ったアヴァターラだった。

「ルドラか！」

予期せぬ味方の出現にウォーレンは思わず笑みを浮かべた。

「……生きているのか」

「こんな時でも、相変わらずの物言いだなルドラ。しかし助かったぞ」

だがそこでウオーレンの表情が凍り付いた。

何故かアヴァターラの砲口がバウを捉えていたからだ。

「どういう、つもりだ、ルドラ！」

「無様な負け犬に用はない。それに元々こうするつもりだった。そもそも『マクベイン・エクスキューター』は初めから私の為に用意されたものなんだよ」

「ッ!？」

「死ね」

仮面の下で笑みを浮かべ、容赦なくトリガーを引く。

砲口から発射された一撃は寸分違わずバウ・バシリコックに直撃する。

「ルドラアアアアアア!!」

ウオーレンは事態を理解出来ないまま光の中に呑み込まれ、跡形も残さず消えていく。

「安心しろ、貴様の望み通り今の世界は破壊してやる。だがその先に人類の革新などは訪れない。元々あった本来の姿に戻す。『コーデイナーの世界』にな」

爆発したバウの閃光を確認したアヴァターラは反転しエスカトロジーへ向かっていく。

その光が完全に消えていくまで、ルドラは笑みを浮かべていた。

第19話 災禍の目覚め

巨大戦艦『エスカトロジー』を巡る戦いは今までにない程の混戦状態に陥っていた。一見すると圧倒的に数で勝る『マクベイン・エクスキューター』が有利に思える。

しかし、未だに敵戦力を撃退出来ない理由二つあった。

一つは練度の差。

元々『マクベイン・エクスキューター』に参加しているのは現在の世界情勢に不満を持つ傭兵やジャンク屋といった者達が大半を占めている。

中にはユーラシアや大西洋連邦に所属していた軍人崩れや現行勢力から離脱してきた部隊も含まれているがごく僅か。

本格的な訓練を積み、数多の戦いを潜り抜けてきた者達に及ばないのは当然の事だった。

そしてもう一つ。

それがモビルスーツの性能の差だ。

『マクベイン・エクスキューター』のリグ・シグルドやシグルド・グラーフは確かに高性能。

しかしそれが全軍に渡る訳もなく、他はウインダムやザクといったすでに現場から退いている旧型の改修機が大半である。

ハッキリ言ってこれら旧型機と現行勢力の扱う機体ではすでに別次元ともいえる性能差が生じていた。

いかに数で勝ろうとも此れを覆すのは至難。

そんな中、さらに彼らを苦境に追い込む知らせが飛び込んできた。

彼らを率い、此処まで連れてきた首魁ウォーレン・マクベインの戦死の知らせである。

無論、それを知るのは『エスカトロジー』の管制室と各部隊を率いる指揮官のみだ。

だがそれでも彼らの様子からウォーレンの身に何かあった事は明白。

それに気づいた者達からさらに別の者へ。

病原菌のように感染していく土気の低下は全軍に蔓延し動きを鈍らせてしまった。

「どうすれば」

『エスカトロジー』の管制室のオペレーターがポツリと呟く。

艦長席で指揮を執るウォーレンの副官は前線の維持で手一杯であり、他の部隊長も同様だろう。

いや、少なくとも首魁であるウォーレンの代わりが務まるカリスマ性を持った人物など何処にもいない。

もはや落ちるに落ちた士気を立て直せる者は誰も存在していなかった。しかしそれを覆すべく一つの通信が入ってきた。

《狼狽えるな！ 聞け、『マクベイン・エクスキューター』の同士諸君！》

モニターに映し出されたのは、仮面で目を覆う人物ルドラ・アシユラだった。

その声には何時にも増して力が籠っており、皆を鼓舞しようという気概が伝わってくる。

《すでに伝わっているだろう。ウォーレン・マクベイン閣下は卑劣なテタルトスの手によって討たれた！》

《しかし案ずる必要はない。我々が首魁ウォーレン・マクベインの理想と理念は我らの手の中にあるのだから！ 思い出せ、我々が何故この場に居るのかを！》

ルドラの声が脳に染み渡ると共に覇気を失っていた兵士達の顔が変わっていく。

《今の世界のままで良しとしない。それを誓ってこの場を集めたのではなかったか？ 卑劣で愚劣な今まで奪う事かしない世界を是とするのか？》

断じて違うと兵士の心に再び火が灯る。

《我々はそれを抗う為に此処にいる筈だ！ ウォーレン・マクベインの死を無駄にす

るな！ 奪うしか能がない屑共に見せてやれ！ この場にいる全員の覚悟と信念を！」
そうだ。

その通りだと。

『マクベイン・エクスキューター』全員が咆哮を上げる。

『最後の言葉を諸君に伝える！』『すぐそこに我らが望む未来がある、だからこそ戦え』と！』

そしてルドラは自らの仮面を外した。

ようやく晒された素顔に誰もが息を飲む。

統合軍からの離脱者も多く、その素顔を知らぬ者は殆ど居なかった。

何故なら彼は『統合戦争』における英雄と同じ顔だったのだから。

『私の名はルドラ・ザラ！ アスラン・ザラの実兄である！』

その名乗りは思った以上の効果を上げた。

誰しもが認めるエースとしての技量。

演説による味方の高揚。

そして大戦で活躍した実績を持つ英雄の名声。

それらが合わさりマクベイン・エクスキューターの面々はかつてない程の高揚感に包まれていく。

《道は私が切り開く、弔い合戦だ！ 全軍、奮起せよ!!》

「オオオオオオオオ!!!」

何時しか全軍を包んでいた絶望感は消え失せ、先ほど以上の気迫を持って各部隊の動きが精彩さを取り戻していった。

『エスカトロジー』の近くから戦場を見渡していたルドラは通信機のスイッチを入れた。

「クロム、そちらの準備はどうなっているか？」

《もうじき調整が完了する》

「調整が完了次第、出撃。邪魔な連中を排除しろ」

《了解》

クロムの声から伝わる力強い覇気。

これならば今まで以上の力を発揮する事が出来るだろう。

用意された機体と共に猛威を振るうに違いない。

満足そうに笑みを浮かべたルドラは次に別の場所へ通信を繋いだ。

「ずいぶん派手にやられたようだな、アルド」

モニターに映ったのはスウェンによって撃墜された筈のアルドだった。

今彼は予備の管制室で状況の推移を見守っていた。

《おやおや、もう仮面を付けたのか？ 素顔のままでもいいだろ》

「ふん、元々好きな顔ではない。貴様にとつてもそうだろう、かつて月面紛争で辛酸を舐めさせられた男と同じ顔だ」

《別に。アスランとの戦いも楽しかったしな。嫌悪感はないさ、再戦できるならしたいつてぐらいだよ。アイツに関する感情なんてな》

「そうか。それで貴様の方はどうなんだ？」

《スウエンの奴に嵌められてさ。機体は結構なダメージを受けちまったよ。今は応急修理中だ》

スウエンの策によって直撃を受けた筈のアルドが何故生きているのか？

それは砲撃が直撃する寸前に背中 of 装備を切り離し、機体本体を守る為の盾としたのだ。

スウエンが以前にアルドの攻撃から逃れたやり方を真似させてもらったという訳である。

それでもベテルギウスの損傷は激しく、突貫で応急修理をさせている途中だった。

「スウエン・カル・バヤンか」

はつきり言ってしまうばルドラはスウエンについて特に注目していた訳ではなかった。

確かに数多の戦場を超えた歴戦の勇士であるのは知っている。

それでもS E E Dを持つ自分や特殊な空間認識力を持つシルヴィアなどには及ばない
とルドラは判断していた。

しかし結果は予想外。

アルドを打倒し、サルワを撃破する戦果を叩き出したのだ。

「未だどこかで悔っていた部分があったという事か」

サルワの事は忸怩たるものがある。

だが、今はそんな感傷など後回しだ。

ルドラはアヴァアターラとフォーリングスターの状態を素早く確認する。

フォーリングスターもまた戦闘継続が困難な程に消耗していた。

武装の大半が使い物にならず、挙動も怪しい部分がある。

アヴァアターラ自体が無傷なのがせめてもの救いだらう。

「アルド、主砲を発射させろ。そこからでも発射出来る筈だ。管制室には私から連絡を入れる。向こうには戦闘指揮にだけ集中してもらおう」

《発射は可能だが、この位置じゃ『ヘルメス』は狙えないぜ》

「目標は『ヘルメス』ではない。狙うのは地球だ」

《その意味は分かっているらうな?》

「勿論だ」

そもそも『マクベイン・エクスキューター』が資源衛星『ヘルメス』を狙っていたのは地球圏を混乱に陥れる為だ。

『メークリウス』に続き『ヘルメス』までも砕かれれば外宇宙進出に待ったをかける事が出来、さらにそれを阻止出来なかった各勢力の権威は失墜。

その隙に重要箇所を制圧すれば、『マクベイン・エクスキューター』の勝利となる。

しかしエスカトロロジーの主砲による地球の直接攻撃を行えば、被害はより甚大なものになるだろう。

下手をすれば地球の国家の一つや二つは消えてなくなる。

《それは悪魔の所業だぜ。覚悟はあるのか？》

「当たり前だ」

ルドラにもはや油断はない。

完全に慢心を捨て去った。

いや、以前からアオイの事は認めていたしナチュラルだからと軽視したつもりもなかった。

しかし同じナチュラルであるスウェンによって弟であるサルワは殺されてしまった。サルワならば負ける事は無いと無根拠に信じ込んでいた。

それは何処かでもまだナチュラルである事を理由に侮っていたからだ。

だがそんな愚かな思い込みはもう終わりだ。

誰であろうとも全力で排除するのみ。

地球を先に潰すと決めたのもそれが理由だ。

余力を残せばどんな反撃に合うかもわからない。

だから潰せる時に全力で潰しておくのだ。

《了解、主砲の発射シークエンスを開始する》

「その間、砲口へは誰も近づけさせん」

アヴァターラのモニターにはエスカトロジーに取りつこうとしているエクセリオンの姿が見えていた。

核爆発からギリギリ逃れる事は出来たらしいが、纏っている外殻はボロボロの状態。

砲口の大半が焼け爛れ、ミサイル発射管も大半が潰されていた。

「あんな状態で尚、エスカトロジーの主砲を破壊するつもりとは。ご苦労な事だ！」

何の迷いも無くエクセリオンへと突撃したアヴァターラは唯一無事だった武装であるビームソードで斬りかかった。

「待ち伏せしてたのか！」

「貴様がアレで死ぬとは思っていない！」

上方からの奇襲。

傷ついたスレイプニルは動きが鈍く躲しきれない。

「ッ!？」

容赦の無い斬撃がスレイプニルの外殻を破壊し、続けざまに振るわれる一撃が砲塔を切り捨てた。

「それで避けたつもりか！」

「うおおお!!」

アオイは防御を捨て、攻勢に出た。

今の機体状態では敵の攻撃を捌き切れないと判断したからだ。

残ったブレードをフォーリングスターの推進部を斬りつけ、機関砲を連続で叩き込んだ。

裂かれた部分に撃ち込まれた弾丸によって爆発を起こしたフォーリングスター。

同時に機能不全に陥るスレイプニル。

二人の判断は同時だった。

二機は纏った外殻を捨て、敵に向かって射出する。

激突した外殻同士が激突、引き起こされた爆炎を突っ切るように二機のモバイルスーツは剣を抜いて激突した。

アヴァターラの構えた剣は明らかに異質なものだった。

これは巨大多連装高出力ビーム発生器『プラズマドライバー』

かつて同盟がアイテルガンダムに搭載した大型多連装高出力ビーム発生器『ヴァルファズル』と同様の武装である。

刀身に仕込んだ無数のビーム発生器により、通常の対艦刀などより強力な刃を形成でききる。

その威力はアンチビームシールドですら紙切れのように斬り裂くほどだ。

アレの斬撃を受けるのだけは避けねばならない。

アオイはエクセリオンの翼を羽ばたかせ、『プラズマドライバー』の間合いから離れようとする。

しかしルドラはそれを見逃さない。

後退するエクセリオンに容赦なく斬撃を浴びせていく。

「くっ、お前を倒せば！」

「私を倒すよりも先に世界が終わるさ。見てみる！」

ルドラに促され視線を向けた先ではエスカトロロジーの巨大な砲口に光が集まっていたのが見えた。

主砲を発射する気だ。

「まだ予定ポイントに到達していないのに！」

「わざわざそこまで行かずとも地球は撃てる！」

「本気で滅ぼすつもりなのか！」

「私が本気かどうかは貴様が一番良く知っているだろう！」

高速移動しながら攻防を繰り返す。

閃光が走ると同時にアヴァターラの肩を斬り裂き、振り上げた一撃がエクセリオンの横腹を抉った。

「この程度で！」

「落ちろ、ガンダム！」

お互いに致命傷を負う前に盾で光刃を防ぎ、さらなる攻撃もすべて空を斬る。

アオイとルドラはこの一連の戦いが始まって以降ずっと鎧を削ってきた。

幾度も刃を交え、激突した。

その経験故に二人は互いの動きを先読みし、攻撃を繰り返しながらも決定打に至らない。

二機の斬撃が機体を掠め、仕切り直しの為に距離を取ったその時、悪夢は現実となる。

「もう間に合わん！」

「やめろオオオオオオオオ!!!」

エスカトロジの主砲。

砲口が集まった光が宇宙を照らす光が青い星に向けて発射された。

それこそ地球を射貫く光の矢だ。

その一撃を阻むものはない。

邪魔な岩片やデブリは障害にすらならず消滅していく。

戦場にいる誰もが死の光を呆然と、遠くの地球に突き刺さる瞬間をただ見つめるしかない。

この時、敵味方問わず誰もが地球に対する大打撃を確信していただろう。

戦場から遠く離れた場所で戦艦の艦橋から全てを見ていたこの男——クレメンス・イスラフィール以外は。

『スヴェル』を展開しろ」

「了解！」

イスラフィールの命令と同時に宇宙各所に展開されていた部隊が動き出す。

彼らの中央にはアンテナのような特殊機器が接続された戦艦がいた。

設置されたアンテナは目標となる方角を向き、そこに向けて一条の光が放射される。

光が集められた場所には菱形の物体が鎮座していた。

そこに光が集まると同時に地球やコロニーを守るように大きな光の盾が形勢された。地球に迫る光の矢。

それを阻むように展開された巨大な盾。

二つが激突し、激しい稲光と共に閃光が弾け合う。

矢と盾の衝突による拮抗。

僅か数秒が何時間にも思える時間間隔が狂ったような錯覚を覚える。

結果——矢は盾に防がれ、青い星に及ぶ事無く掻き消えた。

その結末に最も衝撃を受けたのはルドラであつただらう。

「くそ!!」

ルドラは予想外の出来事による動揺と屈辱に思わずコンソールを殴りつけた。

エスカトロジーの主砲をあんな方法で防いでくるとは誰が思うだろうか。

しかしこれで終わりではない。

「アルド、主砲の再チャージを急げ!」

確かに主砲を防がれたのには驚いた。

だがあれほどの出力の砲撃を防げる盾を何度も展開できるとは思えない。

「次こそ仕留める！」

「させるか！」

突撃してきたエクセリオンの体当たりにはアヴァターラは吹き飛ばされてしまう。

そこにすかさずサーベルを叩きつける。

袈裟懸けの一太刀はアヴァターラの片腕を奪い、さらに腰の装甲を斬って捨てた。

「貴様、調子にのるな！」

前スカートアーマーから伸びた腕が持つサーベルの一撃がエクセリオンの肩部を抉

る。

さらにビームチャクラムが射出され体勢を崩したエクセリオンに撃ち込まれた。

「グッ！」

アオイは咄嗟にウイングを前面に出し、防御する。

しかし同時に放たれたビームクロウの一点集中した攻撃が翼の防御を突破し、貫通し

た。

「ハッ！」

だがアオイも決して引きはしない。

あえてビームクローを逃がすまいと捕まえると肩のマシンキャノンを浴びせかけた。そしてアヴァターラが僅かに怯んだ隙にビームサーベルを振り上げる。

光刃が捉えたビームクローは両断され、爆発によって強制的に引き離された二機のモビルスーツは攻防を繰り返しながらエスカトロジー内部へと突入していった。

「……目障りだ。目障りなんだよ」

ルドラは目の前の敵に対し今までは比較にならない怒りと鬱陶しさを感じていた。目の前で主砲を防がれた苛立ちもあるのだろう。

しかし何度仕掛けてもしつこく食らい付いてくる敵の姿に激しい憤りが湧き上がってきた。

「貴様に、貴様などに！ 私の邪魔をさせるものかアアア!!」
ルドラの怒りに応えるようにSEEDの力が発現する。

そして解放されるe・s・システム。
普段とは別次元ともいえる力の解放。

研ぎ澄まされた感覚と膨れ上がる殺意に身を任せ、アヴァターラの巨体が動く。

「アオイ・ミナトオオオオオオ!!」

プラズマドライバーによる上段からの攻撃。

通常の対艦刀とは比較にならない斬撃をエクセリオンはビームシールドで受け止め

る。

だが続け様に放たれた隠し腕の一撃が左胸部を抉り飛ばした。

「速い！ 動きが変わった!？」

相手がSEEDを発動させた事を悟ったアオイもまた力を発現させる。

アオイの力には時間制限がある故にリスクが高い。

だがそれでもこれ以上時間を掛けては行られない。

次に主砲を発射されても先と同じように防げる保証は何処にもないのだから。

「ルドラ・アシユラアアアア!!！」

斬撃の嵐を潜り抜け、一閃したサーベルが隠し腕の一つを叩き斬った。

「オオオオオ!!!」

「ハアアアア!!!」

要塞内を駆けながら行われる激しい斬り合い。

それはかつてオーブ沖で起きた決戦。

イレイズガンダムとイージスガンダムの戦いを彷彿とさせる。

無数の斬撃をもってエクセリオンを打倒しようとするアヴァターラ。

対して持ち前の機動性でアヴァターラに打撃を与えていくエクセリオン。

激突する二機は互いに傷はつけられても致命傷を与える事が出来ない。

そんな僅か一分にも満たない攻防もあつけなく決着の時が訪れた。

アオイのSEEDの限界時間。

研ぎ澄まされた感覚は消え去り、その際に生まれた落差が一瞬の隙を生み出した。そこを見逃す程にルドラは甘くない。

振り上げた一撃が盾として構えた翼に傷をつけ、地面へとつき落としした。

「ぐあああ!!」

「それが貴様の限界だ！ 所詮はなりそこない、真なるSEEDを持つ私に敵う道理はない!!」

それは事実。

地面に倒れ込んだアオイにはアヴァターラの斬撃に対して咄嗟に反応しきれない。突き出された『プラズマドライバー』がアオイの眼前に迫る。

「大佐……ステラ」

アオイの脳裏にルシアとステラの顔が思い浮かぶ。

死ぬ。

此処で終わる。

いや、此処では終われない。

託された筈だ。

ステイングやアウルから。

その時、アオイの意思を取り込んだようにエクセリオンに変化が訪れた。

プラズマドライバーが届く直前に飛び上がり、攻撃を回避してみせたのだ。

「何?!」

「また勝手に動いた!?!」

それは攻撃を仕掛けたルドラにとっても、避けられないと思っていたアオイにとっても完全に予想外。

そして予想外はもう一つ起こった。

アオイに何かが流れ込むような感覚を覚えた後、再びSEED発現と同じ力が体に宿った。

「何、が?」

これこそエクセリオンガンダム・アイオンの新型W・S・システムの真の力だった。

今までのSEEDを使用した膨大な戦闘経験と学習機能によってアオイの力を再現。

e. s. デバイスによる増幅効果とコックピット内に仕込まれた干渉器によってSEEDの力がアオイ自身に直接フィードバックされたのである。

「これが本当のSEEDの力」

今までアオイが感じていたものとは違う。

これまでは揺れる天秤を必死に動かないようにコントロールしていたような不安定さがあつた。

しかし今はそれが無い。

視界はクリアで感覚は今まで以上に鋭い。

「これならやれる!」

「チツ、しづとい奴め!」

振るわれる『プラズマドライバー』にシールドで防ぎ、サーベルで刀身を叩き折った。

「こんなもので!」

折れた刀身ごとエクセリオンのシールドに叩きつけ、ビームを放出。

シールドを完全に破壊するとマニユピレーターで殴りつけてきた。

「このオオオ!!」

アオイもまたアヴァターラに胴体に蹴りを入れ、頭部を拳を叩き込む。

「何処までも邪魔をするかアア!!」

「当たり前だ! お前は此処で俺が倒す!!」

アヴァターラのマニユピレーターにサーベルを突き刺し、エクセリオンの腹部に拳がめり込む。

「グハア！」

「痛ツ！」

機体を襲う衝撃により二人は硬直し、僅かに動きを鈍らせる。

そこを狙ってルドラは複列位相砲のトリガーを引いた。

「至近距離で!?!」

「こちらもただでは済まんだろうが、貴様を生かしておくよりは安全だろう！」

アオイは発射された砲撃をギリギリ翼で受け止める。

ビームは弾かれ、火花が壁や地面に飛び散り高温によって溶かされる。

それはエクセリオンも例外ではない。

至近距離から浴びせかけられたビームによって装甲は剥がれ、翼も徐々に耐えきれな

くなっている。

このままでは翼は耐えきれずに撃破されてしまうだろう。

そこでアオイも賭けに出た。

背中に装備されていた対P S装甲弾頭搭載バズーカ砲を地面に向けて発射したのだ。

バズーカの一撃で地面は穿たれ、爆発が二機のモバイルスーツを吹き飛ばす。

「ぐあああ!!」

爆発により発生した衝撃と煙は僅かの間、二機の視界を奪い去った。

その瞬間、アオイは動いた。

両腕の刃ナーゲルリングを引き出し、アヴァターラへ向けて突撃する。

「ウオオオオオオオオオオオオ!!!」

遠慮は無し。

翼を広げた最大出力。

「しまっ——」

一瞬、相手の機体を見失ってしまったが故の反応の遅れ。

SEEDを発動させた者同士の戦いだからこそ、それは致命的なものとなった。

「アオイイイイイイイ!!」

「ルドラアアアアア!!」

ナーゲルリングの刃はアヴァターラの腹部に突き刺さり、エクセリオンに押され壁に激突。

最大出力故にエクセリオンは止まる事も出来ず、アヴァターラはエスカトロジの壁を突き破り、さらに奥へと押し込まれた。

◇

アオイとルドラの戦いに決着がつく少し前。

エスカトロジーにおける戦局は終盤に向けて動き始めていた。

一時はルドラの演説により高揚していた『マクベイン・エクスキューター』の部隊だったが、主砲が防がれた事により戦意に陰りが見え始めていた。

それは至極当然の反応だ。

『エスカトロジー』は真正正銘の切り札。

これが通用しないとすれば、『マクベイン・エクスキューター』側に勝利はない。

そこを突き攻撃を仕掛けていた三勢力は徐々に防衛部隊を押し込み始めていた。

「主砲を防いだ事で戦場の流れが変わったな」

「ああ。それにしても統合軍があんなものを用意していたとは。流星はクレメンズ・イスラフィールといった所か」

乗機が傷つきながらも戦場で踏みとどまっていたスウエンは味方の援護をしながら、ヴィルフリート部の部隊と合流を果たしていた。

これにより正面側の戦局は同盟とテタルトスの有利な状況へと傾いている。

後、もう少し押し込めれば決着までの道筋も見えてくるだろう。

ヴィルフリートがそれを見越して部下たちを叱咤しようとしたその時、敵から強烈なビーム砲が撃ち込まれてきた。

「ッ、全機散開！」

砲撃を回避し撃ち込んだ敵に向けてライフルを構えるストライクノワールとジンⅢ・レーヴェ。

そんな二人の前に姿を見せたのは黒い装甲に覆われた機体だった。

「同盟のガンダムとテタルトスのジンⅢか」

黒い機体のコックピットに座るのはクロム・マイル。

クロムは油断なく敵を見据え、両手に大型対艦刀を抜くと淡々と告げた。

「この俺、クロム・マイルが居る限り此処から先へ進めると思うな」

「何だと？」

それは挑発した訳でもなければ、増長したものでもない。

純然たる事実を告げたのだ。

「貴様らは此処で終わりだ」

クロムがそう告げた僅か数分後。

ストライクノワールとジンⅢ・レーヴェは無残な姿となって宇宙に漂っていた。

第20話 復讐の代価

最終局面へと差し掛かったエスカトロジーでの攻防。

すでに三勢力の攻勢により『マクベイン・エクスキューター』は劣勢に立たされていた。

しかしそんな中、一か所だけ戦況が急変している場所があった。

三勢力のモビルスーツがバラバラに斬り裂かれ、撃沈された戦艦には大きな穴が穿たれていた。

此処でまともに戦える者は一人しかいない。

残骸の傍で佇む黒いモビルスーツのパイロット、クロム・マイルだけ。

そのモビルスーツの名は『カルキ』

月面紛争時にて破壊されたシグリードのデータを基に開発された機体である。

背中のウイングスラスタと肩の大型スラスタ、各部に搭載されたバーニアユニット

トによって非常に高い機動性を確保。

搭載された高火力な武装によって機動力、火力を併せ持つ凶悪な機体に仕上がっている。

『マクベイン・エクスキューター』のエースパイロットでありSEED保有者であるクロム専用のe. s. システムを搭載。

さらにSEED発動時には同盟で導入されたC. S. システムと同様に各装甲内に格納されていたスラスタールが全開放され、圧倒的な機動性と放出されるミラージュコロイドによる幻影と防御が可能になる。

「ハア、ハア、やれる」

クロムは確かな手応えを感じて拳を握った。

同盟やテタルトスのエースと戦っても引けを取らない。

今まで血の滲む訓練と強敵との戦闘経験、そして完膚なきまでの敗北。

それがクロムの力量をさらに上へと押し上げていた。

「これなら天使のガンダムにも勝てる！」

クロムは獯猛な獣のような鋭い眼で周囲を見渡す。

そこには彼が排除すべき障害がまだまだ存在していた。

傷つきながらもこちらにライフルを向けるストライクノワールとジンIII・レーヴェ

だ。

「強い」

「くっ、こいつは」

「しぶとい。流星は同盟のエースと『銀獅子』だ」

「二機はすでにボロボロ。」

武装は破壊され、装甲はビームクロウによる斬撃で傷だらけになっている。

「貴様、一体？」

「クロム・マイルと言えば分かるか、『銀獅子』？」

「な、に？」

彼の名前をヴィルフリートは知っていた。

いや、軍に居る人間であれば誰でも知っているだろう。

何故ならば彼が——彼こそが強化兵のモデルになった人物なのだから。

「強化兵のモデルパイロットか」

「強化兵のモデルだと？」

「ああ」

強化兵。

言わずと知れたテタルトスのパイロット能力向上プランの一環で誕生した兵士の事

だ。

薬物と実験型のナノマシンを投与する事で、パイロット能力を格段に向上させる事ができる。

強化の精密な方法はトップシークレットであり、統合軍を設立したファウスト・ヴェルンシュタインでさえ一切情報を持ち出せなかったという。

研究は未だに継続されており、今では相当数の強化兵が前線へと送り出されていた。そのモデルとなったのがクロムだ。

正確に言うのなら彼の能力値を目安に強化兵が考案されたというのが正しい。

「俺を覚えていたとはな。当時は飼い殺しにされていたというのに」

「当たり前だろう。貴様の存在こそが今のテタルトスの戦力を強化したと言っても過言じゃない」

「思い出したくもない。モルモットにされた記憶など消し去ってしまいたいくらいだ」

強化兵が考案された当時のテタルトスの最大の懸念が戦力の総数だった。

地球連合、プラント、中立同盟。

質はともかくとして、どの勢力と比べても戦力の総数は明らかに劣っていたのだ。

しかし総数をいきなり増やす事は出来ない。

兵士の訓練期間やモビルスーツの開発にも時間が掛かる。そこでテタルトス上層部はまず兵士の質を高めようと考えた。

彼らが信奉する『SEED』保有者程ではないにしろ、一機で数機の敵を圧倒できる。そんな兵士を生み出そうと考えたのだ。

しかし問題があつた。

能力強化の指針とすべきモデルが居なかつたのである。

限界を考えず闇雲に強化した所で地球軍の強化人間『ブーステッドマン』や『エクステンデッド』と同じ轍を踏む事になる。

そもそも参考にするべき『SEED』の存在自体が稀有であり、潜在的な保有者の特定も難航していた。

覚醒が確認されていたアスランは参考にするにはあまりに隔絶しすぎていた。

同じくSEED保有者であるセレネの能力は参考にするには経験不足な点多く、さらに前線に立ち続けている関係で実験で使う事は難しい。

そんな中、白羽の矢が立ったのが当時訓練兵であつたクロムだった。

実機訓練のデータを確認した際にクロムが『SEED』を無自覚に発現させた事に研究者達が気が付いたので。

訓練兵ならば前線にも影響はなく、思う存分研究に使う事が出来る。

そこから彼の役割は兵士から試験体に変更された。

毎日繰り返し返される過酷な実験。

人間扱いしない冷たい研究者達の視線。

モルモットとしての酷い待遇。

精神は日々削られていき、実験が始まって数か月で指一本動かせない程に追い込まれてしまった。

行われていたのは終わりの見えない拷問のようなものだ。

ある時、実機を使った実験が行われた。

だが予期せぬアクシデントにより実機は消息不明となり、パイロットだったクロムは生死不明となった。

クロムは死亡と判断されたが研究は続けられその後、数年に渡り実験が繰り返し返された結果、強化兵は完成したのだ。

「まさか生きていたとはな」

「あの実験機の事故は俺を処分する為に研究員共が仕組んだものさ。強化兵の研究に必要なデータは確保していたらしいからな」

要するに非人道的な実験を行っていた証拠の隠滅だ。

それを察知したクロムはどうか生き延びる為、実験機の事故が起きる前に脱出。

身を隠していたがルドラ達に拾われ、『マクベイン・エクスキューター』に参加したという訳だ。

「身勝手な都合で人体実験を行っておきながら、不要になったら処分する。そんな勝手な理由で殺されてたまるものか！」

「なるほど。復讐という訳か？」

「それもあるさ、こんな腐った世界は一度焼き払われた方が良く！ だがそれ以上に俺のような目に合う人間を一人でも減らす為に人類を変革させる、それが目的だ!!」

ウイングスラスターを展開し、持ち前の高機動で動けない二機に肉薄する。

ミサイルやビーム砲による攻撃をすべて躲し、すれ違った瞬間に一撃。

対艦刀の一太刀がジンⅢの腕を破壊する。

「ッ！」

「下がれ！」

前に出たストライクノワールがビームライフルシヨーティーを撃ち込むがシールドによつて弾かれてしまった。

「雑魚の足搔きと侮りはしない！ 全力で潰す！」

振るう対艦刀がストライクの足を奪い、放ったチャクラムが胴体を袈裟懸けに斬り裂く。

ブラフマーとの戦闘で傷ついていたストライクノワールに抗う力は殆ど残されていなかった。

「やるな！　だがその機体ではどうにもなるまい！」

「ぐっ」

「だが手は抜かない！　ましてやブラフマーを落とす手練れにはな!!」

縦横無尽に浴びせられるチャクラムにスウエンはビームシールドを張って防ぐしか手がない。

防御を緩めたただけであつと言う間にバラバラにされてしまうだろう。

「やらせはしない！」

対艦刀が突き立てられたストライクとの間にジンⅢが割り込んでくるも、障害にすらなり得ない。

ヴィルフリートもまたバウ・バシリコックとの戦いで消耗しているのだ。

その証拠に牽制目的で放ったビーム砲も避けられず、肩装甲が撃ち砕かれた。

「ぐう」

「そこをどけ！」

立て続けに振るわれる斬艦刀も避ける術はなく、ジンⅢの腹を深々と斬り裂いた。

真つ二つに両断されなかったのはヴィルフリオートの技量だ。

しかし致命傷には違いない。

少なくとも戦闘継続は不可能だった。

「終わりだ、『銀獅子』!!」

「どうかない！」

ヴィルフリートは残ったミサイルを投棄。

カルキの前で起爆すると目も眩む閃光と爆発が二機の間迸った。

「ッ！」

この隙に攻撃を受けるかもしれないという危機感がクロムを咄嗟に後退させる。

しかし攻撃は来ず、晴れた視界には無数の残骸だけが残されていた。

「逃げたか。だがあれほどの損傷では奴らの戦線復帰はもうないだろう」

カルキの損傷はない。

先の爆発の影響で装甲が剥げた部分はあるものの、機体に異常は見られなかった。

一瞬、追撃が脳裏を過る。

あの損傷であれば遠くには逃げられまい。

「奴らは放っておけばいい」

優先すべきは戦えない敵ではなく、未だ進軍を続ける敵をいかに押し止めるかである。

視線を向けた先では次々とエスカトロジ―へ向けて敵が進軍している。

正面の防衛隊は見る影もない。

連係も取れずガタガタ。

あれでは敵の進撃を押しとどめる事も難しいだろう。

よほどエスカトロジ―の主砲が防がれた事がショックだったらしい。

「所詮は烏合の衆。初めから期待などしていかない」

次の目標を定めたクロムはウイングスラスターを噴射し、敵軍を追撃する。

伝説のモビルスーツ『フリーダムガンダム』すらも上回る速度で統合軍へ追いついた

クロムは複列位相砲を撃ち込んだ。

先頭を走っていた機体は消し飛び、続けざまにビームチャクラムを発射。

予想外の奇襲に浮足立つ統合軍の部隊をバラバラに斬り裂いた。

「うわあああー！」

「撃て、撃てエエ!! ああの黒い機体を叩き落とせ!!」

恐慌に駆られた敵艦は闇雲に砲撃を繰り返すもカルキには傷一つ付けられない。

余裕すら感じさせる動きで砲撃を回避したクロムはドラグーンを射出。

砲台をすべて撃ち落とし、ブリッジをチャクラムで斬り潰した。

残るは数機のモビルスーツのみ。

「化け物！」

サーベルで近接戦を仕掛けてきたパウの腕を掴み、力任せに引き千切る。

右手を失い懐を大きく開けた敵のコックピットに腕にマウントしたビームクロウを突き刺した。

コックピットから血のようにオイルが流れ出し、カルキを濡らす。

ビームクロウを引き抜き、残骸を残りの敵に向けて投げつけると複列位相砲で爆破した。

爆発の閃光でメインカメラが焼かれ動きが鈍る敵をドラグリーンで叩き落とす。

高速移動を行いながらの斬撃。

ドラグリーンを併用した複列位相砲による砲撃。

進軍していた統合軍に成す術はなくあっさり宇宙の藻屑へと変えられてしまう。

「天使のガンダムはどこだ？」

敵を容赦なく屠りながら突き進むカルキの前に激闘を繰り広げる二機のモビルスーツが見えた。

間違いない。

エクセリオンとアヴァターラだ。

攻防を繰り返しながらエスカトロジャー内部に侵入していく。

「居たかガンダム!!」

探し求めた宿敵がそこにいる。

滾る戦意をさらに高揚させながらクロムは未だ蔓延る敵の排除に向かった。

誰にも邪魔されずに宿敵との決着をつける為に。

◇

エスカトロジー内部に存在するモビルスーツ用の通路。

本来はメンテナンスの為に存在するその場所で二機のモビルスーツが激しい斬り合いを行っていた。

サーベルを片手に盾を掲げるエレンシアガンダム・ソフィアと両手にビームカッターを構えたヴィカラーだ。

三つの軌跡が空間を斬り、互いの機体が器用に間合いを取りながら絶妙の攻防が繰り広げられている。

「流石に上手い!」

ルシアは限定空間であるにも関わらず、一切障害物に阻害される事無く刃を振るうシルヴィアの腕前に舌を巻く。

「限定空間ならば、ドラグーンは使えない！ 此処で決着をつける!!」
横薙ぎに払う二刀の斬撃。

ルシアは剣閃ギリギリの位置で攻撃を回避、サーベルを下段から斬り上げる。
しかしそれも空を斬り、続け様の一撃もヴィカラーラを捉えることは無い。

ある種の拮抗状態。

奇しくも二人の特性は似通っているが故に決定打を与えられないでいた。

この状況を崩すにはどちらかが先に動くしかない。

だがそれは敵に隙を突かれ、カウンターをもらうリスクが高くなる事を意味する。

先手を取るか。

機を窺うか。

一瞬の間の後で先手を取る事を選択したのはシルヴィアだった。

自分の性格的に待つのは性に合わない。

さらにはサルワを失った事に加え、聞こえてきたルドラの演説。

アレにはルドラの焦り、いや、自暴自棄とも思える性急さを感じた。

彼は元々慎重に策を練るタイプの人間。

予想外の出来事が起きれば、再び機が熟すまで機会を伺う。

そんな慎重な人物だ。

にも関わらず先ほどの演説。

あまりにルドラらしからぬ行動である。

一刻も早くルドラの下へ行かねばならない。

「だから!!」

スラストアの噴射と合わせ、数発のミサイルを発射する。

いかに誘導が可能とはいえこの狭い限定空間におけるミサイル発射はあまりに無謀だった。

案の定、壁に突き刺さったミサイルの衝撃と爆発が二機のバランスを大きく崩す。

「ハアアアア!!」

「ッ、小細工をー」

ルシアは振るわれた右腕の刃を紙一重で回避しようとする。

しかし直前でカッター伸び、エレンシアの装甲に逆袈裟の一撃が走った。

そしてもう一刀。

右とは長さの違う左腕のビームカッターが左足を奪い去った。

「本当の狙いは刃の長さを誤認させる事!？」

直前に撃ち込んだミサイルはエレンシアの体勢を崩す為のものではなく、視界を悪くし伸縮自在のビームカッターの目測を誤らせる事が目的だったのだ。

「止め！」

「負けない!!」

コックピットに突き出されるビームカッター。

体勢を崩しながらも突き出したシールドで受け流すが強力な刃を防ぎきれずに貫通。肩をビームカッターが貫いた。

ルシアはすぐに腕が動くか確認する。

「まだ、動く。ならー！」

ビームカッターを貫通したままシールドを手放し、お返しとばかりにサーベルを盾の裏から突き刺した。

虚を突いた一撃がヴィカラーラの腕を斬り飛ばす。

「ツツ、呪われた女が!!」

「何よりも拘っている貴方こそ呪いそのもの！」

勢いに任せて前に出たエレンシアとヴィカラーラが正面から激突する。

「貴方のその呪いは新たな痛みと憎しみを生む！」

「フラガ家の女が言う事か！」

エレンシアの一太刀がヴィカラーラを袈裟懸けに斬り裂く。

そしてヴィカラーラの一撃がエレンシアの胸部を抉り斬った。

「貴方もフラガの力に身を浸しているでしょう！」

「望んだものではない！」

すれ違い様に一撃を入れ、立ち位置を入れ替えた二機は決着をつけるべく最後の攻勢に出た。

「忌々しいフラガ家の血筋は私が消し去る！」

「私も負ける訳にはいかない!!」

距離を詰めたエレンシアとヴィカラーラは互いに持った一刀を相手に向けて叩きつける。

「私が勝つ!!」

「そんな事!!」

光刃が煌めき、互いの機体に吸い込まれる。

ヴィカラーラの上段からの一撃がエレンシアの腕を奪い、そしてエレンシアの横薙ぎの一太刀がヴィカラーラの腹を斬り裂いた。

腕を斬られたエレンシアはバランスを失い、地面に倒れ込む。

「くううう、き、機体は……」

エレンシアは深いダメージを受けているものの、戦闘不能という訳ではないようだ。

何とかまだ戦う事は出来る。

残った腕で収束ライフルをヴィカラーラに向けた。

「ん、あれは」

モニターに映ったのは機体から出て行くパイロットスーツ。

「機体を捨てた？」

見ればヴィカラーラは下半身と胴体が別れていた。

コックピットを外れているだけ運が良かったとも言えるが、あの損傷ではシルヴィア自身も無傷では済まなかった筈だ。

「一体どこへ」

ルシアは少しだけ迷った後、拳銃を持って外へ出た。



「ハア、ハア」

シルヴィアは傷ついた体を引きずりながら、怒りに身を浸していた。相手に対する憤り。

自分自身の不甲斐なさ。

流石はフラガ家の力を最も強く引き継いだ女だ。

ああまで不利な条件の中であるにも関わらず、真つ向勝負でヴィカラーを完全に大破させるとは。

やはり格が違うという事だろう。

口惜しいが負けを認める以外にない。

この体も何時までもつか。

致命傷ではないし、応急処置も済んでいる。

体に極力負担を掛けずに進むことが出来る無重力であつたのは幸運だつたと言える。

これならばあの男を殺し、脱出するくらいの体力は残るだろう。

「あの男だけは殺しておくなければ」

ルシアに向けるものとはまた別の憎悪を滾らせ、進んでいく先にはヴェクト・グロン
ルンドの為に割り当てられた研究室があつた。

シルヴィアは銃を構え躊躇いなく研究室に踏み込むと部屋の中央で笑みを浮かべた
ヴェクトが待つていた。

「ようこそ、シルヴィア。でもこんな所に来ている暇はあるのかなあ？ 外では戦闘
が未だに続いているみたいだけど？」

「黙れ。貴様には何の関係もない事だ」

「そうかな？ 戦況を見る限り『マクベイン・エクスキューター』の負けじやないかい？ 本当に勝つ気があるなら今後の事など考えず初めから地球を撃つべきだったんだよ」

『マクベイン・エクスキューター』の目的はあくまでも世界の変革であり、破壊ではない。

だからウオーレン・マクベインは地球を直接狙う事はせず、現勢力の権力失墜と混乱を狙っていた。

しかし単純に勝つという事であるならば、問答無用で主砲を地球に撃ち込んでおけば良かったのだ。

被害は間違いなく甚大となり混乱も今まで以上のものとなる。

その上で『メーカーリウス』や『ヘルメス』を碎けば地球は間違いなく終わっていただろう。

少なくとも現行勢力と世界経済は立ち行かなくなっていた筈だ。

それをしなかったのはウオーレンが今後の事を考えていたからに他ならなかった。

「勝たなきや意味ないつてのに、全く。サルワにしても強化してやったというのに情けない」

「サルワに何を？ 強化した？」

「ああ、強化したんだ。でもそれだけじゃつまらないだろ。だから動かない腕と足を切り落として機体と直接接続できる義手と義足に変えたのさ。これにもまだ課題が残るけど、良いデータは取れたよ」

罪悪感すら持った様子もないヴェクトにシルヴィアの殺意はさらに高まっていく。

「おいおい、睨まれても困る。まるで私が悪いみたいな感じじゃないか」

「サルワは元々重傷だった。それにも関わらず戦場へ引つ張り出しておいて」

「それは違うな。私は彼の熱意に応えただけだよ。君を守りたいという熱意にね、シルヴィア」

怒りで銃を持つ手が震える。

最早問答無用。

シルヴィアが銃の引き金を引こうとした瞬間、明らかに動揺した表情が変わる。

ヴェクトは心底楽しそうに笑みを浮かべた。

その顔が見たかったと言わんばかりに。

「シルヴィア、君にも紹介しておくよ。『ギメル』だ」

ヴェクトの後ろから現れたのは少年。

15、6と言った所だろうか。

だがシルヴィアにとっての問題はその顔だ。

「あ、貴方は」

『ギメル』と呼ばれた少年は何も答ええない。

無表情のままヴェクトの前に立ちシルヴィアを見つめている。

「どうした、嬉しくないのか？ 『弟』との再会だろうか？」

「お、弟はもう死んで」

「ああ、確かに。お前が自分で殺したもんなあ」

「え？」

動揺したシルヴィアにヴェクトは立て続けに真実を告げる。

「前に復讐の為に連合の関係者を皆殺しにしたよなあ。実はあの関係者の中にお前の弟と婚約者がいたんだよ。お前と生き別れた弟はずっと連合のお偉いさんに保護されていたのさ」

「う、嘘だ」

「嘘じゃない。お前が殺していたんだよ、たった一人の家族を」

「あ、あ、ああ」

「そしてこの『ギメル』はお前の弟のクローンさ」

予想外の事にシルヴィアは混乱し、握った銃も狙いが定まっていない。

瞬間、一発の銃声が鳴り響いた。

ギメルが素早く抜いた銃でシルヴィアの脇腹を撃つたのだ。

「死ねよ、弟に殺されるなら本望だろ。何時までも付きまるとって目障りな」
シルヴィアが倒れ込んだと同時にルシアが部屋に駆け込んできた。

「おやおや。これは良いタイミングで来てくれたよ、ルシア・フラガ。今、長年邪魔だったゴミをようやく片付けた所だったんだ」

「ヴェクト・グロンルンド!？」

「君とゆつくり話があったんだ。前はあの屑に邪魔されたからね」
ルシアはヴェクトの言葉を聞き流し、周囲の様子を確認する。

何があったのか詳細は不明だがシルヴィアを撃つたのはヴェクトを守るように立つあの少年だろう。

他にも敵がいるかもしれない。

警戒するルシアにヴェクトは不敵な笑みを浮かべたまま話を続けていた。

「では前の続きだ。研究に協力してもらいたい。実に有意義だと思うよ、人を超越したものを創り出す研究なんだからね」

「お断りです。私は好きな人の赤ちやんを産みます」

「それ、まさかあの屑の事じゃないよなあ？ せっかくの貴重な母体をあんな屑の為に消費するなんてあり得ないぞ。君は聡明な人物だ、もう一度聞く。私と来い」

答えとして銃を突きつけた。

それを見たヴェクトから笑みが消え、表情が変わった。

何処までも誰かを見下す呆れた表情に。

「チツ、所詮はお前も凡人か。優秀な人間なら自発的にこっちに来ると思ってたけど。しょうがない、『カード』を切るか。こういうやり方は嫌いなんだけど」

「何を言ってる」

「確かあの強化人間——ステラだったか？ アレを治療してやる。だから代わりに実験に参加しろ」

「な!?!」

「あの強化人間は元々の強化に加え、ザフトでの調整、度重なる戦闘によって心身共にポロポロ。アレはもう限界だ。万に一つ生きられたとしても、生涯治療を続けていかねばならないだろう。生命維持の為に最低限の自由すらも保証できない」

的確に言い当てられたステラの病状にルシアの銃が震える。

「だが私なら治せる。強化人間なんて嫌という程弄り回してきたからな。治療する事など造作もないさ」

ヴェクトの人格を考えれば信用できる筈がない。

しかし同時に彼らならば治せる可能性も皆無とは思えなかった。

心の揺れ動きを的確に感じ取ったヴェクトは再び嫌らしい笑みを浮かべ手を伸ばす。

「さあ」

銃口を突き付けたまま手を伸ばすか迷う、ルシア。

心の天秤が傾こうとした直前、立ってられない程凄まじい振動と共に何か近づいてきた。

「何だ？」

次の瞬間、研究室の壁を吹き飛ばし二機のモビルスーツが倒れ込んできた。

アヴァターラとエクセリオンである。

ルシアはその場に伏せ、ヴェクトもまたギメルに庇われるように倒れ込む。

宿敵との再びの邂逅。

エスカトロジーを巡る攻防は最後の戦いに移行しようとしていた。

第21話 結末

アヴァターラに突撃したエクセリオンの刃は確かに彼の機体を貫いていた。幾つもの壁を破壊し、倒れたアヴァターラは完全に大破している。

動かす事は出来ても、戦線復帰は不可能だ。

反対にエクセリオンはまだ戦闘可能。

細かい損傷はあるが、戦闘に支障はないレベルだ。

「痛っ、派手にやり過ぎたか。だけど艦深部に入れたのは運が良かった」

このままエスカトロロジーのエンジンや主砲を破壊できれば戦闘は終わる。

そこでセンサーに反応がある事に気が付いた。

「人が居る？ 大佐に……ヴェクト・グロンルンド!？」

奴が此処にいる理由などどうでもいい。

どうせ碌な事ではあるまい。

だが奴の実験にルシアを巻き込む事だけは絶対に容認できない。

アオイはコックピットハッチを開き、外に飛び出す。

二機のモビルスーツが突っ込んできた事で破壊された壁には補うように非常用の隔壁が降りていた。

そのお陰か酸素はまだあつた。

慎重に周囲を警戒しながら部屋に入り、ルシアに駆け寄っていく。

だがアオイの存在に気が付いたギメルがヴェクトを庇いながら発砲してきた。

「ッ、ヴェクトの護衛役か？」

「チッ、まさかお前まで来るとはな。二度とその顔見たくなかつたよ」

「お互い様だよ。俺だつて見たくなかつたさ」

銃口を向けヴェクトを睨み付ける。

「大佐、無事ですか？」

「……中尉」

どこかルシアの様子がおかしい。

「大佐に何をした！」

「ハッ、お前に話しても意味はない。ルドラめ、相変わらず役に立たない。せつかくの
アヴァターラが台無しだ。失敗作が」

半壊したアヴァターラを見上げ吐き捨てるヴェクトの物言いに強烈な嫌悪感が募つてくる。

相変わらず、反吐が出そうだ。

「失敗作だと！ 貴様、人を何だと思ってる！」

「人を何だと思ってるかだと？ 使える有能か役に立たない無能か、それだけだろうが！ 奴は無能、所詮『カウンター』の為にパトリック・ザラが創つた番いに過ぎん」

「面白い？」

「そうだ、奴はプラントの創つた『カウンター』の面白い。効率よく子供を生み出す為の繁殖装置さ」

『希望の歌姫』ティア・クライン。

プラントの出生率低下を食い止める為に生み出されたカウンターコーディネーターの一人。

彼女を誕生させる事は当時のプラントにとってまさに希望と成りえると研究者達は信じていた。

しかし同時に懐疑的な見方も強かった。

何故なら出生率の低下は当時から懸念され、現実となり始めた矢先。

いかに彼女自身が母体として優れているようにも、男性側の遺伝子が適合しなければ

意味がない。

そこで考えられたのがティアに適合出来る個体を先に生み出す事だった。

ついででカウンターを生み出す為のデータ収集も出来る訳だから一石二鳥。

当時このプロジェクトを推進していたパトリックにも了承を得て生み出されたのがルドラ・アシユラでありサルワ・アシユラである。

カウンターコーディネイターを誕生させる為に生み出された失敗作。

そして新たな世代のコーディネイターを生み出す為に作られたティアの番だった。

「結局はシーゲル・クラインにバレて研究は頓挫。誕生した子供も月で隠匿され、事実上の破棄だ。ま、それじゃ勿体ないから私が再利用してやったんだが」

「再利用だと?」

「ああ。私の研究の実験体になってもらったのさ。破棄された失敗作には光栄な名誉だろ」

この男は何処までもアオイの神経を逆なでするらしい。

もう声すら聴きたくないくらいだ。

アオイはこれ以上、口を開くなど銃を突きつける。

だが背後から制止の声が掛かった。

「待って、中尉。その男は……」

ルシアは何か迷っているように苦しげな表情を浮かべていた。

「大佐？ 何を言われたのかはわかりませんが聞く耳を持つてはいけません。こいつは此処で始末します」

「おいおい、いいのか？ 屑に話しても意味はないと思っただけど、確かお前にも関係あつたよな。ステラとかいう強化人間の事」

「ステラ!？」

アオイの反応に気を良くしたのかヴェクトは嫌らしい笑みを浮かべる。

「ああ。交渉してたんだよ、今。ルシア・フラガが実験に協力するなら、引き換えに強化人間を治療してやるとな」

それで合点がいった。

ルシアは悩んでいたのだ。

もしかしたらステラを治せるかもしれないと。

「屑。お前にとつても悪い話じゃないだろう？ さつさとルシアを引き渡せ。その後、私達に関わらないと土下座するならあの強化人間との子供を作つてやつてもいいぞ。ま、あんな廃棄品の何が良いのか私には分からんがね」

嬉々とした語るヴェクト。

何がそんなに嬉しいのか。

そもそも交渉にすらなっていないという事に気が付いていない。

アオイはヴェクトの言葉を無視し、俯くルシアに声を掛けた。

「大佐、アイツの言う事に耳を貸さないでください」

「ッ、でも！」

ルシアも知っている。

ステラが苦しんでいる事を。

このままでは余命幾ばくもない事を。

だから助けたいと願っている。

兄であるラルスが、そして散って逝った仲間達が託してくれたものだから。

それはアオイだって同じ。

エレボス攻略戦の前夜、ステイングやアウルの夢を見たのはきつとこの事を告げてくれているのではないだろうか。

きちんと守り抜けど。

大切なものを手放すなど。

人が聞けばただの夢だと鼻で笑うかもしれない。

だがアオイはそう思いたいのだ。

「大佐が犠牲になったら意味がない。俺だつて皆から託されたんです。その中には大佐の事だつて入っているんですよ」

「中尉……」

「仮に大佐が協力したつて奴が素直にステラを治療してくれる筈ないです。ステラの事なら大丈夫、俺が助けて見せますから」

アオイはルシアを安心させる為に笑顔を作る。

ルシアもそれで吹っ切れたのか、涙を浮かべて頷いた。

その光景をイラつきながら見ていたヴェクトはアオイを睨みつけた。

「あくくならない三文芝居を見せつけてくれてさあ。つまりお前らはせつかくこつちが交渉して、さらには譲歩してるのを無下にするつもりつて事か？」

「何が交渉だ、何が譲歩だ！ 初めから治療する気もない癖に良く言う！」

それで我慢の限界を超えたのかヴェクトは怒りに満ちた表情で頭を掻き毟り始めた。

「何時も、何時も、何時もオオオ!! もう少し、もう少しだったのに！ 何度私の邪魔をすれば気が済むんだ、この屑がアアア!!」

ヴェクトは狂乱したかのように取り乱しながらアオイの方を睨みつけてくる。

「何度でも邪魔してやるさ！ お前のくだらない研究なんてな！」

「殺せ……殺せ、殺せエエエ、ギメル！ あの屑を今すぐ私の視界から消せ!!」

ギメルは全く感情が感じられない瞳でアオイの方を見ると銃を乱射してきた。

咄嗟に飛び込んだ瓦礫に銃弾は弾かれる。

何も考えていないのか無茶苦茶な乱射だ。

迂闊に飛び出す事も出来ない。

「重要なのはタイミングか」

あれだけ銃を乱射していれば弾切れを起こす筈。

アオイの予想通り、すぐに弾切れを起こしたギメルは弾倉を交換する。

その隙に瓦礫の陰から飛び出した。

「馬鹿が！ 屑の行動などお見通しだ！」

アオイの行動を予測していたのだろう。

ギメルは隠し持っていたもう一丁の拳銃を構えていた。

「死ね、屑！」

「……お見通しなのはこっちなんだよ！」

アオイはあらかじめ拾っておいた金属片を投擲した。

寸分変わらず銃に破片が激突。

手元から弾き飛ばすとアオイの蹴りがギメルの腕に直撃。

同時に銃を持った手を振り抜くとヴェクトの顎を粉碎した。

「グギャアア!!」

異音と共に妙な叫びを上げたヴェクトの腹に蹴りを入れ、瓦礫に叩きつけた。

そして止めを刺そうと銃口を向けた瞬間、倒れた筈のギメルが瓦礫の一部を投げつけてくる。

「ッ!?!」

横つ飛びで瓦礫を躲し、即座に銃を向けた。

受けて立つとばかりに銃を構える、ギメル。

そこでアオイはニヤリと笑ってやった。

「お前、実戦経験が足りないよ。敵は俺だけじゃないだろう?」

その言葉に反応し、立ち上がったギメルは背後に銃を向ける。

しかしすでに遅い。

背後に回っていたルシアの銃撃がギメルの肩を撃ち抜いた。

「ッ!?!」

手に持っていた銃をアオイが拾い上げ、倒れ込んだヴェクトに銃を突きつける。

顔面から夥しい血が流れ、絶え間ない激痛に言葉にならない声を上げていた。

「終わりだ、お前の所為で苦しんだ人達に地獄で詫びて来い」

トリガーを引こうとしたその瞬間、再び振動が起き天井から瓦礫が崩れ落ちてきた。

ギリギリのタイミングで瓦礫を躲すと爆発音のようなものが聞こえてきた。

おそらく塞がった入口を破壊してエスカトロギー内部へ侵入しようとしているのだ。

「中尉、モビルスーツに戻りましょう！」

此処は危険だと判断したルシアに従い走り出す。

一度だけヴェクト達の方を振り返るが瓦礫に塞がれ姿は見えなくなっていた。

◇

コックピットに座り機体を起動させたアオイはルシアと合流する為、通路に出た。

そこで待っていたのは黒い装甲を持つモビルスーツ『カルキ』だった。

「見つけたぞ、天使のガンダム!!」

「お前は！」

カルキは引き千切ったモビルスーツの腕を投げ捨てるとエクセリオンに一直線に向かってきた。

「速い！」

後退しながらマシンキャノンで牽制するが、カルキは全く速度を落とさない。

「そんなものが通用するか！」

想像以上の速度。

此処が戦艦の中である事を無視したスピードで迫ってくる。

「ならー！」

L字通路の曲がり角まで誘導し、ギリギリまで引き付けて飛び退いた。

あの速度であれば曲がり切る事は出来ず、壁に激突する筈。

激突した瞬間を狙ってビームライフルを構える。

だが、アオイの予想は外れた。

「舐めるなアアアア!!」

壁に激突するかと思われたカルキは直前にスラストを逆噴射させ、僅かに速度を緩める。

そして神懸かり的な機体制御で体勢を立て直し、壁を蹴って方向を変えてみせたのだ。

「嘘だろ!？」

アオイは目を疑った。

あの速度で突っ込んできたにも関わらず、L字を曲がり切るとは。

僅かでも機体制御を誤っただけで、ただでは済まなかつた筈。

それは命懸けの綱渡り。

カルキのパイロットはそれを何の躊躇もなくやってのけたのだ。

「ウオオオオ!!」

ビームライフルやマシンキャノンの攻撃を物ともせず、エクセリオンに肉薄し光爪を振りかぶった。

ビームクローウによる斬撃を翼で受け、押し込もうとするが踏ん張りがきかない。

「スラストアーの一部が損傷しているからか!」

どうやらアヴァターラとの戦いで無理をしすぎた反動が出ているらしい。

カルキに押され、吹き飛ばされたエクセリオンに容赦なくビームチャクラムが襲い掛かる。

「中尉!」

そこにエレンシアが割り込んできた。

収束ライフルでチャクラムを薙ぎ払い、同時にカルキを狙う。

狭い通路の中だ。

避ける術はなく、発射されたビームの一撃がカルキを射貫かんと迫っていく。

「邪魔をするなアア!!」

クロムは肩のビームクローウを射出し、ビームにぶつけて攻撃を防いでみせた。

「アイツは……」

動きでエレンシアのパイロットをすぐに看破した。

二対一。

廃棄コロニーで戦った時と全く同じ状況だった。

しかしクロムは一切怯まない。

むしろこの機会こそ待っていた。

「俺は今度こそ貴様らに勝って見せる!!」

SEEDが発動し、同時にコックピットに仕込まれたe.s.システムが解放される。

各装甲内に格納されていたスラスターが全開放され、ミラーージュコロイドと思われる光が放出され始めた。

禍々しさすら感じる紫色の光。

そしてパイロットであるクロムにも今までに感じた事の無い強力な力が漲っているのを感じていた。

「ハ、ハハハ！ 凄い、コレがSEEDの本当の力か！」

増幅され、より強力になったSEEDの力を身に纏う災禍の獣が動き出す。

「いぐぞー！」

対艦刀をエレンシアに投げつけ、カルキは圧倒的な速度で距離を詰める。

「なっ!?!」

咄嗟に横つ飛びで回避したエレンシアだったが、カルキの振るった一撃によって左腕を食い破られてしまった。

同時に振るわれるビームソード。

避ける間もない一太刀が右胸部を深々と抉った。

「大佐!?! この!!」

倒れたエレンシアからカルキを引き離そうとするが、ライフルの射撃は掠りもしない。

逆に一足飛びに間合いを詰めたカルキの対艦刀がエクセリオンの左肩に突き立ってられてしまう。

「どうした、こんなものじゃないだろう? 全力で来い!」

エクセリオンの頭部を握りつぶそうと力任せに掴んでくる。

「くっ、この!!」

有無を言わせない気迫と神懸かり的な操縦技術。

そして化け物染みた反応速度。

すべてが常軌を逸している。

強い。

この強さは今までアオイが戦ってきた中でもトップクラス。
先ほどのルドラ以上かもしれない。

「躊躇なんてしてられない！」

先ほどの力は初めての事。

不安要素が多くて出来るだけ使うのは避けたかったが、負ける訳にはいかない。

アオイもSEEDを使う覚悟を決めた。

ルドラと戦った時と同じくW・S・システムからのフィードバックにより、いつも以上の力が全身に駆け巡る。

「いくぞー！」

組み付いたカルキを突き飛ばし、逆手でサーベルを一閃する。

カルキの胸部に斜めの傷が刻まれ、さらに横薙ぎに振るった一撃が腰部の装甲を斬り飛ばした。

「グツ、先ほどまでとは比べ物にならない鋭い一撃。それでこそだ！ それでこそ倒しがいがある！ 俺は貴様を今日こそ超える！」

クロムの覚悟を示すように複列位相砲が発射された。

エクセリオンに掠めながら紙一重で回避する。

しかし砲撃が通路の壁に直撃し、穿たれた穴からエレンシアを含め全機が外へと吐き

出されてしまう。

「アレは?！」

外へ出たアオイが見たのは主砲が再び稼働している光景だった。

「また撃つ気なのか?」

「どこを見てる!」

咄嗟に後退し袈裟懸けに振るわれたビームソードを間一髪で躲す。

しかし同時に切り上げられたビームクロウがエクセリオンの胸部を斬り飛ばした。

「ぐっ、まだアアア!!」

ビームサーベルの反撃がカルキの肩部を斬り裂いた。

二人の攻防は互角。

いや、ドラグーンがある分だけクロムの方が有利だろうか。

飛び回る砲台をアオイも撃ち落としてはいるが、すべてに対処出来る訳ではない。

現にエクセリオンにはドラグーンによって傷つけられた損傷がいくつも存在していた。

それでも五体満足でいられたのはSEEDの力と翼から放出された粒子による高度な防衛性能のお陰だった。

これにより遠距離からの攻撃が致命傷になっていないのだ。

「どけ！ このままじゃ地球が撃たれる！」

「撃たればいい！ 今まで地球の連中がどれだけ勝手な事を行ってきた？」

エクセリオンを囲んで飛び回る砲台からの攻撃を防ぎながら、両手で構えたアンヘルの一撃で消し去った。

その隙に距離を詰めたカルキの斬撃がエクセリオンの胸部をさらに深く削り、アオイもまたサーベルを斬り返す。

「連合しかり、同盟、統合も同じくだ！ 口先だけの平和を謳いながら、弱い者を食い物にして邪魔する者を駆逐していく！ そんな秩序は歪んでいる、だから破壊するんだ！」

「そんな勝手な理屈！」

「貴様などに分かるものか！ 国の都合で玩具にされ、尊厳を踏みにじられた者の苦しみなど!!」

互いに刃を打ち合いながら致命傷だけは避けていく。

「お前だけが不幸な目にあつて来た訳じゃない！」

「だからなんだ？ 全員が全員、同じように前を向いて生きていけるとでも思っているのか？ 思いつがるな！ 結局、立てない者もいる、動けない者もいる、俺のように恨みでしか前に進めないものだっている！」

クロムの憎悪を形としたような強力な光爪がカルキの右腕に形成された。

「そう言った者達の嘆きや痛みを貴様らは踏みつけにしているんだよ。力を持った者のそう言った思考が、物言いが、行動が、ただ蹂躪されるしかない弱い者を追い詰めていくと何故気が付かない!!」

「ッ!?!」

アオイは咄嗟にサーベルを捨て、振り下ろされた光爪を両腕のナーゲルリングを交差させて受け止めた。

しかし力任せの一撃は確実にエクセリオンに押し込まれ、ナーゲルリングの半ばまで食い込んでいく。

「確かに一理あるかもな」

アオイもどちらかと言えば蹂躪された事がある人間だ。

戦争で両親は奪われ、ようやく手に入れた穏やかな暮らしの中で得た義父は無残に殺された。

施設で暮らした家族。

共に戦った仲間達。

皆戦火に巻き込まれ、時に死んでいった。

その時に感じた不条理、憤怒、絶望は決して忘れられるものではない。

そう言った意味でクロムの言っている事も分からなくはなかった。
しかし――

「……それでも俺はお前達のやってる事を止める」

「所詮、貴様も奪う側。分かる筈もない！」

「ああ、否定は出来ない。俺だって戦ってきたんだからな。でも！　それでも！」
アオイは力一杯操縦桿を押し込み、光爪を弾き飛ばす。

「地球には大切な人達が居るんだ!!」

同時に振るったエクセリオンの斬撃がカルキの爪を斬り飛ばし、同時に腹を裂いた。
しかし右腕のナーゲルリングは今の一撃でが折れてしまった。

それでもアオイは止まらずカルキに殴りかかる。

「俺はこれ以上、大切な人達を失いたくないんだ！」

右のマニピレーターが頭部を撃ち抜き、左の蹴りが腰部に入った。

「ぐう、調子に乗るなアア!!」

クロムも負けじと拳を振るい、左のマシンキャノンを潰し、エクセリオンの肩装甲を
引きちぎる。

高速で移動しながら、殴り合いを繰り返す。

しかしこれで損傷は与えても、致命傷には成りえない。

だから二人は殴り合いを続けながら、来るべき時を待っていた。

カルキの左腕は先ほどのナーゲルリングでビームクローゴと潰され、展開不可能。さらにドラグーンをコントロールする余裕もない。

エクセリオンの残り一本のサーベルは腰部に格納された状態。

つまりエクセリオンの左手のナーゲルリングかカルキの右腕のビームソード。

どちらが先に斬り込むかで勝敗が決まるだろう。

相手の隙を伺いエスカトロジの外壁を沿うように駆ける。

そんな攻防の中、偶然にもモビルスーツの残骸が二機の間を遮った。

一瞬だけ消える敵機の姿。

此処こそが好機であるとかロムは勝負に出た。

「オオオオオ！」

ビームソードを展開し浮遊する残骸ごとエクセリオンを斬り伏せる。

確かな手応えと共にエクセリオンの破片が宙を舞った。

しかし――

「な!?!」

「ハアアアアアア!!!」

舞っていたのはエクセリオンの左腕のみ。

同時にアオイが繰り出してきたのは左肩に突き刺さっていたカルキの対艦刀。突進したエクセリオンの斬撃を躲す暇もなく、カルキの胴は対艦刀によつて真つ二つに斬り裂かれていた。

「化かし合いは俺の勝ちだ」

アオイは攻防の中、クロムが左腕のナーゲルリングにのみ警戒していた事に気づいていた。

だから初めからナーゲルリングによる決着は狙いは捨て、左腕を囮にクロムの虚を突く別の一撃を繰り出そうと決めていたのだ。

「何で、勝てない」

「強いて言うなら経験の差だ」

クロムは強い。

それは紛れもない事実だ。

才能もアオイとは比べ物にならないだろう。

それでも勝ちを拾えたのはこれまで積み上げてきた訓練と培ってきた経験以外に理由はない。

「ちく、しょう」

爆発するカルキ。

それを見届けたアオイは最後に残った仕事を終わらせるべく、エスカトロロジーの主砲へと向かっていった。

◇

「ヒウ、フウ、ヒウ」

声にもならない呼吸をする白衣の男。

しぶとくも瓦礫に潰される事無く生きていたヴェクトは必死に生き延びようと床を這っていた。

顎が砕けた顔の下半分は血に塗れ、瓦礫によつて片足を負傷。

ヴェクトはまさに息絶え絶えといった状態。

それでも彼は自分の生存を全く諦めていなかった。

何故ならばまだやるべき研究が残っているのだから。

こんな場所で死ぬなどあり得ない。

何よりも彼の心に沁みついていたのはアオイ・ミナトへの限りない憎悪だった。

自分の崇高な研究を何度も邪魔した拳句、こんな目に合わせた元凶ともいえる愚物。

アオイへの復讐もまた生きる為の原動力になっていた。

「フウ、フウ」

笑みを浮かべようとしても痛みで動かない事にイラつきながら、少しでも気を紛らすべく妄想に浸る。

アオイの目の前でルシアを実験体として扱ったらどんな顔をするだろうか。

泣き叫ぶか。

それとも怒りで吠えるか。

どちらにしろ溜飲は下がるに違いない。

あの強化人間——ステラとかいう女を使ってもいい。

奴の前でバラバラにしてやればさぞかし悔しがらうだろう。

暗い妄執を原動力に床を這い続けるヴェクトの前によく部屋の出口が見えてきた。

部屋を出た後、誰かを捕まえ脱出する。

そこからは傷を癒してアオイへの復讐を——

そんな風に考えた時、ヴェクトの背後から轟音が響いてきた。

戦闘による爆発かとゆっくり振り返ると巨大な手がヴェクトを掴み上げていた。

思わず悲鳴を上げるが声にならない。

ヴェクトを掴んでいたのは大破し、壁にめり込んでいたアヴァターラだった。

「無様な姿だな、ヴェクト・グロンルンド」

ハッチの開いたコックピットから頭から血を流したルドラが笑みを浮かべてヴェクトを見ていた。

まるでゴミを見るかのように。

「ひゅ、ど、りあ」

ヴェクトが固定された体を動かし何かを必死に訴えようとしている。

大方早く助けろだの、脱出させるだの言っているのだろう。

だがルドラにそれを聞く気などさらさらなかった。

操縦桿を僅かに押し込み、アヴァターラの手を力をもめた。

するとヴェクトは悲痛な表情を浮かべながら、暴れ回っている。

「先ほどは好き放題言ってくれたじゃないか。間違っていない所が腹立たしいがな」

先ほどヴェクトがアオイに告げた事は真実だ。

プラントの未来を照らす希望ティア・クラインの添え物こそがルドラであり、サルワである。

パトリック・ザラとレノア・ザラの息子。

自分の生まれた意味を知った時、それは誇らしかったものだ。

研究棟から見えたプラント。

そこに住まうすべての者の未来が自分達に掛かっているのだから。

しかしそんな幼い希望は簡単に打ち砕かれた。

研究は中止され、自分達の存在は汚点として月へと放逐されたのである。

月で研究の支援者たちによって育てられる中、まだルドラやサルワは信じていた。

自分達の存在こそがプラントを救うのだと。

それもアスランの存在を知り絶望へと変わる。

パトリックは二人の事など気にも留めず、アスランにのみ愛情を注いでいった。

要するに二人の存在などどうでも良かったのだ。

それでもまだルドラ達には心の拠り所があった。

母であるレノアの存在。

彼女だけはルドラ、サルワを愛してくれていた。

アスランと同じく愛情を持って接してくれていたのだ。

だがそれも血のバレンタインで消え失せ、利用価値がないと悟った支援者は掌を返して月を去り、残されたルドラ達に待っていたのは過酷な実験体としての日々。

どうやらルドラ達の処分に困った支援者達がヴェクトに売り放つたのだと実験中に何度も聞かされた。

その間に出来た掛け替えのない仲間達すら遊び半分に殺されてしまった。

心に痛みが沈殿し、ヴェクトを道連れにすべて壊したやりたいと思ったのも一度や二度ではない。

しかし数年してテタルトス月面連邦国が出来てからは状況も変わった。

ヴェクトの出走の際に起きた混乱に乗じて脱出。

ゲオルク・ヴェルンシュタインに拾われ、彼の影として動いてきた。

ウォーレンは誤解していたようだが『マクベイン・エクスキューター』も彼が陰で動いていた時に指揮していた特殊部隊が大元になっている。

『統合紛争』を生き延び、決起に至るまで入念に準備してきた。

その結果がコレだ。

「滑稽すぎて笑えてくるな」

助けてくれとでも訴えるようにヴェクトが首を振る。

それに構わずさらに力を籠める。

「痛いかな？ 苦しいかな？ だろいな、今ので骨の何本かは折れただろうからな」

ルドラは横目で部屋を見た。

そこには倒れ伏すシルヴィアの姿。

冷たい殺気がさらに度合いを増し、込められる力が強くなる。

「ッ——！！」

「貴様がしてきた実験ではもつと苦しんだ者も多くいる。楽に死ぬると思うなよ！」
ルドラはすべてを失った。

『マクベイン・エクスキューター』が駆逐されるのも時間の問題だろう。

だがそれでも――

「貴様だけは生かしておくものか！」

無限に続くかのような苦痛と恐怖の中、叫び声も上げられず徐々に潰されていくヴェエクト。

そしてアヴァターラが思い切り手を握り込んだ瞬間、グチャリという音と共に人だったモノの頭が地面に転がり落ちた。



エクセリオンの向かった先は主砲へエネルギーを供給するジェネレーターだ。

外からでもアンヘルなら装甲を貫通し、ジェネレーターを破壊するだけの威力がある。

主砲の発射体勢は整いつつあった。

だが今から砲口を潰そうとしても間に合わない。

ならばジエネレーターさえ潰してしまえば主砲は発射できない筈だ。

「間に合つてくれ！」

片腕で収束ライフル『アンヘルII』を構えジエネレーターに向けて狙いを付ける。

だがそこでビーム砲による攻撃がエクセリオンに襲い掛かった。

奇襲によりアンヘルが吹き飛ばされてしまう。

「な、アレは」

視線の先に居たのは応急修理されたアルドのベテルギウスだった。

「邪魔はさせねえよ！」

「貴様！」

止むを得ずベテルギウスを排除しようとしたアオイの目に動き出す主砲の姿が映し出されていた。

「残念だな！ もう発射は止められない！」

撃ち込まれる砲撃と光を集め始める主砲。

「アハハハハハハハハハ!! 最高の火花を見せてもらおうぜ!! 弾けるのは地球だがなアアア!!」

楽し気なアルドの声に焦りと苛立ちが募る。

残ったもう一つのアンヘルを構えようにもベテルギウスが邪魔。

他の武器ではエスカトロジーの装甲を貫通してジェネレーターを破壊できない。かといって主砲の方に行くには距離があり過ぎた。

残る手段は――

「ウオオオオオ!!」

残ったビームサーベルを抜き、ベテルギウスへ突撃する。

「自爆でもしようって魂胆か？ させないけどな！」

正確な射撃でエクセリオンを射貫いていく。

だがアオイは一切スピードを落とさず、ベテルギウスに向かっていった。

死を恐れない特攻に流石のアルドも眉を顰めた。

「チツ、死にたがりかよ！ 付き合ってられないぜ！」

ベテルギウスの最大火力であるビームランチャーによる砲撃。

ボロボロのエクセリオンであれば翼で防御しようとも耐えられない。

「さっさと死ね！」

しかしアオイは笑みを浮かべてハッキリ告げた。

「嫌だね、俺は生きる!!」

ビームランチャーの攻撃を前にエクセリオンの背中から切り離されたバスターカ砲。

アルドは強化兵として能力が向上していた。

その反応の良さ故に一瞬、それに気を取られてしまった。

「ッ!？」

気が付いた時にはもう遅い。

エクセリオンはベテルギウスの懐に入り、サーベルを突き差していた。

コックピット付近に光刃が刺さり、アルドも機材に押しつぶされる。

「ぐ、糞が。ス、スウエンと同じような手を使いやがって」

「光栄だね。俺に戦い方を仕込んでくれたのは大尉だ」

「ハ、ハハハ、結局、スウエンの、勝ちかよ。だが、もう、発射は止めら、れないぜ」

絶命したアルドに返事する間も無くアオイはベテルギウスをジェネレーター付近に投げつけた。

そして主砲が発射される残り数秒。

アオイは最後のアンヘルでベテルギウスを撃ち抜いた。

破壊されたベテルギウスは核爆発を起こし、ジェネレーターごとエスカトロジューの一面を閃光で呑み込んでいった。

主砲の発射は阻止され、エスカトロジューは核爆発により半分に分れてしまった。

残った『マクベイン・エクスキューター』の面々は降伏を余儀なくされる。後の歴史において『第二次統合戦争』と呼ばれる戦いはこうして終結した。

最終話 繋げていくこと

『第二次統合戦争』及び『マクベインの反乱』と名付けられた戦い。

しかし何故『第二次統合戦争』と名付けられたのか？

それは結局の所、この戦いにおいて最も勢力を拡大させたのが地球圏統合政府だったからだろう。

後の歴史家は『この一連の戦いはすべて統合によって仕組まれていたのではないか？』と考える者すらいるくらいである。

そしてそれは概ね間違っていないかった。

「イスラファイル代表、コレが今回の紛争の総括になります」

執務室にて自らの腹心から手渡された資料に目を通す。

ほぼイスラファイルが事前に予測した通りの結果が出ている。

「今回の件で今まで統合に対し敵対、もしくは険悪な関係だった国家との関係改善が

進んでおります。中には統合参加を表明した国々も居ます」

「ああ、これで問題ない」

『マクベイン・エクスキューター』の決起によつて危機感を抱いた国家からの参加を表明していた。

その規模はかつての比ではない。

そして同盟、テタルトスの戦力を削る事にも成功。

彼らの新型に関する戦闘データも入手できた。

十分過ぎる戦果と言える。

「しかし此処まで考えておられたとは、慧眼恐れ入ります」

「そうでもないさ。彼らがいてこそだ。任務、ご苦労だったな」

腹心の背後に控えた部下に労いの言葉を掛ける。

そこに居たのはウォーレンの傍に控えていた副官だった。

実はイスラファイルは諜報員からの報告により『マクベイン・エクスキューター』の決起を知っていた。

規模も、目的も、そして切り札の存在までも、すべてだ。

これを知ったイスラファイルは統一に利用しようと考えた。

世界に蔓延る不穏分子をあぶり出し、一掃。

危機感を持った国々を併合し、敵対勢力である同盟やテタルトスの戦力を削る。

さらにはテロリストを素早く排除できなかった故の『メークリウス』破壊による権威の失墜。

そしてエスカトロジの主砲を巨大防衛装置『スヴェル』で防ぎ、地球の危機を救った事による統合の名声の獲得。

すべてが上手くいった。

外宇宙進出も『ヘルメス』が無事であるならば何の支障もない。

「問題があるとすれば」

「商人共ですな」

モニターに映し出されているのは商工連合が所有するコロニーで行われている演説だった。

軍人のような屈強な男が軍服と思われる制服を身に纏い、力一杯声張り上げていた。

『『マクベイン・エクスキューター』などというテロリストを放置し、防備をおろそかにするどの陣営ももはや信用する事は出来ない！』

『《連合の時代を振り返ってみるがいい！ 利益だけを求めるロゴスなどという連中に踊らされ、国としての本質を見失った愚か者達！ 彼らが力無き我々を守ってくれたか？》』

《答えは否である！ 奴らは我々こそを食い物にして利益を貪っていたのだから！ 故に我々に必要なのは自衛する為の力！》

《今日、此処に結成した『商工連合防衛軍』は平和を守り、維持していくための刃である！！》

「防衛隊ではなく防衛軍か」

これも予測されていた事だ。

商工連合が各勢力の影響が弱まったこの機会を見逃すはずがない。

「国家でもない彼らが独自の軍隊を持つなど」

「しかも彼らはこちらに勝るとも劣らぬ技術力や生産能力を持つている」

そもそも『マクベイン・エクスキューター』の背後にいたのは彼らだ。

彼らが使用していたリグ・シグルドやシグルド・グラーフ。

さらには各エース機に加えて、巨大戦艦『エスカトロジ』

あれだけの物を開発する資金力と技術力、そして人員。

そこらの企業が集まったとしても、易々と作り出せない。

アレを他の勢力に全く気づかせずに開発出来た経緯も考慮すれば、確実に商工連合が黒幕で間違いない。

彼らならばコロニー開発という名目で物資や人材の運搬も可能。

その上で開発中のコロニー内に秘密裏に工廠を建設すれば、モビルスーツも建造できる。

彼らにはさらに裏もあるとの事だが、それは今はどうしようもない。

「すでに彼らが展開した戦力コロニーに駐留させていた軍との間で睨みあいが発生しています」

「放っておけば再び開戦となりかねん。それは得策ではない。私が商工連合の代表と話をする。その間、決して手を出すな」

「ハッ」

イスラフィールは優秀でありながらも堅実な男だった。

広い視野を持ち、無理すべき時とそうでない時を見定める能力を有している。

故に決して無理はしない。

そして今は無理をすべき時ではなかった。

併合した国々を纏め、統合の強化を図る。

動くのはその後だ。

「とはいえ商工連合の軍隊を解体する事は出来まいがな」

それだけの力を商工連合は持っている。

ましてやこうして各陣営の影響力が衰えているなら尚の事。

今回の件で力を増した統合でさえ、経済的な理由から彼らに対して強硬に出られないのが現状なのだから。

「いつそ商工連合事、こちら側に取り込んでしまえば良いのでは？」

「焦りは禁物だ。油断によって足元が掬われては意味がない」

イスラフィールは淡々と告げ、思案に暮れた。

進むべき道は茨の道。

それでも彼は進み続ける。

例えその先に夥しい屍が積み上がるのだとしても。

◇

『メークリウス』を失った事で各陣営の外宇宙進出は遅延を余儀なくされてしまった。だがテタルトス月面連邦国だけは別である。

どの勢力よりも早く外宇宙への進出に道筋を立てていたテタルトスは独自に動いていた。

だが『第二次統合戦争』の影響が皆無という訳ではない。

一連の戦いの結果、想定した以上に保有していた戦力を損耗してしまった。

特に主力であるジンIIIを多く失ってしまったのは痛い。

そこで現在はさらなる新型機の開発と同盟軍との軍事的協力を前提とした条約を結ぼうと動いている。

これは力を増した統合への牽制も含まれているが、一番の理由は商工連合を警戒しての事。

独自に動き出した彼らの動向は決して無視できるものではないからだ。

とはいえ『第一次統合戦争』では戦争状態にまで陥っている。

それだけに交渉は慎重に行われていた。

「——以上だ。次の会談予定は一週間後だ。護衛の方はクアドラード中佐、頼むぞ」

「了解しました」

長い会議を終えたヴィルフリートは会議室を後にすると筋肉を解す為に背筋を伸ばす。

どうも会議の場というのは性に合わない。

元々が現場で動いていた人間故に仕方がないのかもしれないが。

「さて合流するか」

会議が終われば久しぶりの休暇だ。

『第二次統合戦争』の後処理や同盟との交渉で全く休む暇も無かった。

車に乗り込み、家族と待ち合わせた公園に向かう。

戦争は終結し、ようやくコペルニクスにも活気が戻ってきたように感じる。

そのお陰か街全体の雰囲気も明るくなっていった。

反面観光客の出足自体は芳しくない。

未だ戦争の傷跡が癒えていないというのもあるが、商工連合における観光事業の展開が影響している。

先の戦争においても被害はほぼ皆無だった商工連合の方が安心できるという事かもしれないが。

渋滞を避けすいている道を抜けて公園の傍に車を止めると子供達の楽しそうな歓声が聞こえてきた。

「お疲れさまです、クアドラード中佐」

入口では私服のセレネとヴィクトリアが待っていた。

「待たせてしまったか？」

「いえ、私達も今到着した所です。アスラン達は先に到着して居る筈ですよ」

「そうか。ランゲルトさん、体調の方は？」

「問題もなく。記憶の方は相変わらずですが」

「デリケートな部分に関する事だ。焦らずにな」

「はー」

三人で連れ添い公園の中に入ると子供と戯れるアスランとベンチに座るヴィルフリートと妻であるカーラの姿が見えた。

セレネとヴィクトリアの二人が近づくとそれに気が付いた子供達が一斉に飛び掛かっていく。

「わーい！」

「お母さん！」

「皆、お待たせ」

母親に抱かれる子供の姿に穏やかな気分になりつつヴィルフリートは座り込んだアスランに近づいて行った。

「義手と義足の調子はどうだ？」

「日常生活に支障がない程度には。過度な運動などは医者から厳禁だと言われたが」
笑みを浮かべるアスランだが、どこか元気がないように見えた。

何というか空虚さのようなもの感じられる。

「……アスラン、軍に戻るつもりは？」

「ない。俺はもう戦えない体だし、現場に出ても足手まといになるだけだ。後方で指揮というのも性に合わない」

「戦争の影響で未だ軍内部は混乱状態だ。お前が戻ってくれば助かるんだが」「それも大佐やレイが火星圏から戻れば大丈夫だろう。そういえば昇進の話があったんだって?」

今回の戦争で一番矢面に立って戦っていたのはヴィルフリートである。

エレボス、エスカトロジー進軍の指揮や敵の首魁を倒したという事も評価され、大佐への昇進話が持ち上がった。

「それも身に余る話さ。私はまだまだ未熟な身。部下も大勢死なせてしまった……お前が軍に戻らないのもそれが理由か?」

アスランは答えずただ俯いたままだ。

『第一次統合戦』の事を思い出しているのかもしれない。

「すまん、余計な事を言った。忘れてくれ」

「……もう戦う理由が見つからないんだ。目指した未来には確実に進んでいる」「世界は未だに戦いが続いているとはいえ、今回の戦争以降は情勢も少しは安定するだろう。」

最も懸念していたコーディネイターとナチュラルの確執は消えつつあり、プラントの改革も進んでいる。

『ヤキン・ドゥーエ戦役』の頃に比べれば、十分に変わったと言えるレベルだ。

そして何よりも――

「奴は、アスト・サガミはもういない」

結局一度たりとも勝つ事が出来なかった宿敵は閃光に消え、二度と姿を現さない。

もう奪われる事はない。

壁を超える事は出来なかった。

それでも区切りがついた以上、無理に銃を取る理由はない。

「そうか。だがお前に一つ言っておく。勝ったのはお前だ、アスラン」

「え？」

「誰が何と言おうが死んだら負けだよ。戦場から生きて帰った奴が勝者だ。そして奴

は死にお前が生きている、それが結果だ」

ヴィルフリートと言葉にアスランは不思議と肩の力が抜けるのを感じていた。

まだ自身の何処かで納得していなかった部分があったのかもしれない。

それが今の言葉で軽くなった気がした。

「……そうだな。俺はまだ生きているんだ」

アスランは立ち上がりヴィクトリアの方を一瞥すると、気が付かれないように軽く頭

を下げた。

まるで別れを告げる挨拶のように。

大切な者を奪ってしまった贖罪であるかのように。

「……貴方には関係ない事かもしれないが」

アスランは家族の下へ歩き出す。

その歩みはまだ遅い。

だが彼も歩き始めた。

ゆつくりと確実に。

◇

アスランとヴィルフリートの話。

その声は子供達の相手をしていたヴィクトリアの耳に届いていた。

とはいえ微かに聞こえただけに過ぎない。

詳しい内容までは聞き取れなかったが、一つだけ気になる事があった。

アスランが口にした名前だ。

「……アスト・サガミ」

その名前を口にした途端、胸の奥が温かくなった。

そして見覚えのない光景が少しだけ浮かんできた。

しかしそれはすぐに霧の中へと消えてしまいよく思い出せない。

「……もしかして知っているのかしら」

掴みかけた記憶が思うように浮かんでこないもどかしさにため息が出そうになる。

「お母さん？」

「何でもないですよ」

慌てても仕方がない。

少しずつ思い出せば良い筈だ。

「さあ、行きましょう。セティア、セシリア」

子供達の手を握り、ヴィクトリアもまた歩き出した。

◇

ソレの存在を知る人間は世界にごく僅かしかいない。

『アケロン』と呼ばれる施設内を仮面の男カースが歩いていた。

その後ろにはNo. I と呼ばれる女性が随伴している。

「カース様、お体の方は？」

「問題ない」

「そうですか。しかしムウ・ラ・フラガとの戦闘による傷が癒えたばかりです。ご自愛ください」

「分っているさ」

自らを氣遣う女性に笑みを浮かべ、問題ないと手を振った。

彼女は間違いなく優秀なのだが、やや過保護的な面が目立つ。

『マクベイン・エクスキューター』の戦艦に潜入した時もついて行くと譲らなかった。

結局は機体回収の為に外で待機してもらったが。

「カーズ様、今回の件はアレで良かったのですか？」

「十分だ。下地は出来た」

二度の統合戦争により世界は再び二極化の勢力図に移行しつつある。

勢力拡大を図る統合に対する反発はこの先苛烈になっていくだろう。

そしてそれに対抗する勢力もまた軍事力の増強に舵を切る。

新たなフロンティアである外宇宙への進出もあるのだから対立はより深刻化する。

「そこに商工連合が加われば」

「情勢はさらに混乱の一途を辿るといふ事ですね」

「そうだ」

カースは奥にある部屋に入ると二人の男がテーブルを挟んで対面に座っていた。

一人は屈強な軍人風の男でもう一人は黒髪の優男だった。

まるで正反対にも見える彼らの前にはチェス盤が置かれている。

「どうやらまたチェスをしていたらしい。」

「カースか。概ね上手くいったようだな」

屈強な男ゲオルク・ヴェルンシュタインが盤上の駒を動かしながら話しかけてくる。

「ああ、予定通りだ。商工連合も力を得、ヴェクト・グロンランドも始末出来た。顧客も戦死であるなら納得せざる得ないだろう」

「奴は優秀ではあるが、やり過ぎた。これ以上はマイナスしか生まん」

そこで黙って話を聞いていた黒髪の男が初めて口を開いた。

「顧客の要望で行われていた研究の概要は？」

「くだらんものさ。確か不老不死の研究だったな。何時の時代も権力者たちはそんな夢を追い求めるか」

「ああ、試作型のナノマシンを使って外見のみならある程度若さを保つ事が可能らしい。個人差はあるようだがな」

「ほう、詳しいじゃないか」

「私やNo. Iもその研究の試験体として使われたからな。ともかく奴の研究データはす

べて引き上げ、すでに引き継ぎも済ませている」

「そうか」

黒髪の男が笑顔を浮かべ、駒を進める。

「となると後は『彼ら』の件と統合……クレメンズ・イスラフィール」

『彼ら』には何も出来んよ。なら今は泳がせておけばいい。だがイスラフィールの件は簡単にはいくまい。奴は油断も慢心もないのだから」

統合は彼らにとつても重要な駒。

だからこそ駒として動かさなければ意味がないのだ。

しかしイスラフィールはそれを良しとほしないだろう。

「それも焦る必要はないさ、精々統合を大きくしてもらおう。そして役割が終わった後に消えて貰えば良い」

アズラエルは焦り過ぎた故に。

ジブリールは愚劣過ぎた故に。

そしてイスラフィールは有能過ぎたが故に消える事になるのである。

黒髪の男は笑みを浮かべて駒を進める。

「チエッククメイト」

「お見事」

盤上のゲームを推し進めたように彼らは陰で蠢き続けていくだろう。

◇

世界の在り様の変化。

地球圏統合政府との併合を望む国家の増加。

アムステルダム商工連合の防衛軍結成。

外宇宙進出の為の準備。

脅威に備えた軍備拡張。

調和条約同盟内部の問題も片付いていないのに、その道行は明るいとはお世辞にも言い難い。

それでも今回の『第二次統合戦争』における被害は最小限度に止められた事は幸いだった。

さらにはテタルトス月面連邦国との関係改善も進み、ゆつくりとだが安定への道筋も見え始めている。

「今回の件はご苦労だったな、レフティ大佐、良くやってくれた」

グラオ・イーリス司令官であるイザークに呼び出されていたヨハンは賛辞の言葉に頭

を掻いた。

「いえ、私は何もしていませんよ。エスカトロジー攻略に成功したのはモビルスーツの奮戦とテタルトスの協力があればこそです」

実際ウリエルがやっていたのはモビルスーツの補給と回収と負傷者の収容くらいだ。奇襲を行った三機のガンダムのパイロット達こそ本当の功労者だろう。

「相手の大半が正規軍でなく、素人揃いだった事も幸いしたがな。だからこそ疑問も残る訳だが」

「エスカトロジー及びモビルスーツの開発、製造をどこで行っていたのか、ですね」

「そうだ。これからも調査は継続する。だが当面大きな武力衝突はないだろう。これからは政治的な駆け引きが増えていくだろうからな」

「それは助かります。此処の所碌に休暇も取れませんでしたからね」

「ああ、ゆっくり休め。ただしそれが終わればまた働いてもらうがな」

イザークの言葉に笑みを浮かべたヨハンは敬礼して部屋を退出する。それを見届けたイザークは手元の端末を操作した。

「このデータ」

端末に表示されていたのは商工連合のコロニーで回収したものだ。

欠損していた部分もあったが中身は確認できた。

正直、見たくもない身の毛もよだつ人体実験の記録や検証結果などが記載されている。

その中にある名前を見つけたのだ。

『sagami』『hawk』『clyne』

『yamato』『carrier』

記載されたこれらの名は皆、イザークの知己のもの。

だが彼らは『第一次統合戦争』にてMIAとなつている。

その内の一人は戦闘に参加した訳ではないが戦争終結後にプラントから姿を消し行方不明だ。

「……生きて連中に捕まっていた？」

それならば未だに連絡がない事もある程度は納得できる。

しかしもしそうだとするならば彼らは今何処にいるのだろうか？

ヴェクト・グロンルンドの研究施設の探索は行われているが、世界各地に点在しているらしく多くは発見には至っていないのが現状である。

その内のどれかに捕まっているのか、あるいはもう――

「いや、まだ断定するには早すぎる」

これはあくまでも予測に過ぎない。

現に此処には入力されたデータは無く、あくまでも名前が記載されているだけ。名前の記載は予定を記したものに過ぎず、戦争終結後に彼らを捕らえるつもりだったのかもしれない。

「後は『 α と β 』……それに幾つかの研究体。実験で生み出された子供達か」

イザークにも子供は居る。

だからこそこの実験自体に虫唾が走るし、生み出された子供達の事が不憫でならない。

しかしその子供達の行方すら不明。

それにヴェクト・グロンルンドの研究が持ち出された形跡もあるという。

「誰が持ち出したのか。しばらくは油断できんな」

戦争とは違う別の戦いが始まる事をイザークは予感しながら、端末を操作していった。



『第二次統合戦争』終結からしばらくの時が流れた。

水面下においては各勢力の緊張は続き、小さな諍いは絶えない。

だが政治的な衝突と交渉を繰り返しながら、それでも世界は緩やかに閑静な時代を迎えつつあった。

「よし、これでいいな」

着替えを済ませたアオイは時間を気にしながら足早に部屋を出る。

時間にはまだまだ余裕があるが、今日は用事がある。

出来るだけ余裕を持って動きたい。

「おはよう」

リビングの扉を開けると、テーブルで食事を取るルシアとステラの姿があった。

「おはよう、アオイ」

「もう出るのかしら」

「うん、待ち合わせしてるから、余裕を持って行きたい」

アオイは今、二人とオーブで暮らしている。

ステラの体は完全にはいかなないものの、ようやく普通の生活が送れるようになっていた。

もちろん病院に通う必要はあるが、以前に比べても格段に状態が改善されている。

これはテタルトスの技術協力によるものだった。

元々彼らは高い医療技術を持ち、昔とはいえヴェクトの研究にも関与。そして現在運用している強化兵のデータを持っている。

故に同盟よりは高いレベルでステラの治療が可能であると前々から言われていたのだ。

『第一次統合戦争』からの軋轢がある為に現実的なものではないと思われていたが、今回の戦争である程度関係が改善された。

今ならば可能かもしれないとステラの治療依頼をカガリが掛け合ってくれたのだ。

「じゃあ行つてきます」

「アオイ」

ステラが無邪気に抱き着いてくる。

「行つてらっしゃい」

「うん」

柔らかいものが当たっていて色々不味い。

それに笑顔を浮かべていた筈のルシアの視線が険しいものに変わっている。

機嫌が急速に悪くなっているのが手に取るように分かった。

「……ヤバイ」

「ゴホン！ ステラ、アオイから離れましょうね」

「ええ〜」

一見穏やかに見えるところが一層怖い。

不満そうな声を上げるステラを宥めて引き離すと急いで玄関に向かう。

「車に気を付けて」

顔を寄せ素早くアオイの頬にキスをしたルシアは笑顔で手を振った。

それを見ていたステラと揉めていたようだが、聞こえないふりをして家から飛び出した。

「時間はまだ大丈夫だよな」

しかし待ち合わせの相手は時間より早く来ているだろう。

必要以上に待たせる訳にはいかない。

待ち合わせ場所に急いで走っていると案の定、相手がすでに来てるのが見えた。

「お持たせしました、大尉」

待っていたのはスウエンだった。

私服に身を包み、大きな旅行鞆を手にしている。

「いや。中尉こそ早かったな」

「大尉が待っているだろうと思っていましたからね」

「そうか。大佐やステラには見送りは良いとっていたんだが」

「そういう訳にはいきませんよ、大尉がせっかく夢の一步に踏み出すっていうのに」
「夢の一步と言つても、軍から出向するだけだな」

スウェンは上からの命令で『D. S. S. D』へと出向する事になっていた。
外宇宙用の機体のテストパイロットを務めるらしい。

「そういえば中尉もやりたい事があると聞いたが、確か教師だったか」

「そんな大層なものじゃありませんよ、軍はやめられませんか。ただ自分に出来る事は何かないか調べて考えて。やれる事があるとすれば自分の体験を伝えていく事ぐらいかなって」

ずっと考えてきた。

奪つてばかりだった自分でも出来る事はないかと。

だから出来るのは伝える事。

この先の時代を歩む者に繋いでいく事だ。

痛みも、苦しみも。

この時代に起こった出来事を後の子供達に伝えていきたい。

そうすればこの先に起こるかもしれない悲劇を少しでも食い止める事が出来るかもしれない。

悲劇が起こったとしても、どうすればいいのか考える切っ掛けになるかもしれない。

そうなれば自分の歩んできた道も決して無駄ではなかったのだと胸を張れると思うのだ。

「そうか。上手く言えないのだが、きつとそれは大切な事だと思う」

そこに時間通りにバスが走ってきた。

「時間のようだ。中尉、今まで世話になった」

「大げさですよ、世話になったのは俺の方です。何かあれば連絡ください。すぐに駆けつけますから」

「そうだな。その時は頼む」

「はい！」

差し出された手を握り、バスに乗り込んだスウエンを見送った。

スウエンはこれから自分で選んだ道を歩んでいく。

そしてアオイも同じだ。

今日も子供達が待っている。

彼らは戦争で親を亡くした子供達だ。

中には敵を恨み、憎んでいる子もいるだろう。

かつてアオイがシンを憎んだように。

でも、それではあまりにも救われない。

「救いたいなんて思っていないけどな」
それは傲慢というものだ。

アオイがステラの言葉で踏みとどまれたように、自分の言葉で変わる切っ掛けになつてくれるならそれで十分。

「さして行くこうか」

時間はまだまだある。

焦らず行こう。

明るい日差しが照らす道をアオイはゆっくり歩き始めた。

e p i s o d e E x e l i o n C . E . 7 9 E N D

暗い宇宙の闇の中を一隻の船が航行していた。

操縦席に座るのはエレボス内部に突入した二人の男性だった。

二人は手に入れたデータを読み取りながら、険しい表情で唸っていた。

「エスカトロジー攻防戦でヴェクト・グロンルンドは死亡したらしい」

「でも、彼は研究を引き継がれているだろう」

「ああ、それに奴の事だ。もしもの場合の保険は用意していただろうしな」

二人はヴェクト・グロンルンドの用意周到さをよく知っていた。

流石にエスカトロジーに乗船したと知った時は驚いたが、奴なりに問題ないと判断していたのだろう。

もしくは危険だと察知できない程に冷静さを失っていたか。

どちらにせよ本人が死亡したとはいえ、事態はまだまだ終息しないだろう。

「奴の遺産はすべて破壊しなければならぬが……『連中』の本拠地もまだ判明していないしな」

「うん。繋がっているのは間違いなく商工連合だろうけどね」

「そこから風潰しにしていくしかないか。勿論、今まで以上に慎重にな」

二人が結論を出したその時、操縦席に女性陣が入ってきた。

「お疲れさまです」

「食事持ってきたよ」

ピンクの髪的女性と赤い髪的女性が食事を手渡してくる。

「ありがとう」

「次の目的地は？」

「二度コロニーに戻る。しばらくは情報収集を優先だ。子供達をいつまでもシャトルに置いておくのは気が引けるしな」

「そうですか」

「子供達も喜びます」

笑顔を浮かべた女性陣が皆に知らせに戻っていく。

「……出来れば安全な場所で静かに暮らさせてあげたいけど」

「今は無理だ」

「うん」

彼らの戦いは続く。

それは最初の大戦を乗り越えた時から二人共覚悟していた事だった。

「今が踏ん張り時だぞ、覚悟は出来てるだろう？」

「勿論だよ」

二人の表情に迷いはない。

昔も、今も、これからも戦う理由は同じだ。

「俺達も行くか、キラ」

「ああ、行こう、アスト」

次に向かって歩き出す。

進む先は昔と変わらず暗闇だ。

それでも決意は変わらない。

大切なものを胸に抱き、二人は前に向かって歩いていく。

これからもずっと。